

IS～codename blade nine～

きりみや

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織斑一夏に続き、二人目の男性操縦者としてIS学園に入学した男、川村静司。彼にはある目的があった。それは世界初の男性操縦者織斑一夏及びその周囲を外敵から守る事。正体を隠し、一般人として入学した静司の戦いが始まる。原作を踏まえつつ、徐々にオリ展開も混ぜていきたいと思っています。1巻部分は意図的に駆け足。また、この作品には独自解釈があります。厨二病は褒め言葉。

以前にじファンに投稿していたものを修正・連結したものとなります。

目次

1.	黒翼	1
2.	喧騒と決闘	15
3.	『二人目』	32
4.	blade9	55
5.	騒動へ至る土台	70
6.	狩人たち	89
7.	獣の眼	100
8.	おろかもものたち	112
9.	疑念	138
閑話	底なし沼一步目	147
10.	Monday attack ①	152
11.	Monday attack ②	178
12.	Monday attack ③	191
13.	優しさと悪意	205
閑話	きょうかふらぐ？	226
14.	パートナー	230
15.	学年別トーナメント	245
16.	川村静司	263
17.	二人目の天災	276
18.	そして、彼女たちは	299
19.	シャルロット	320
20.	母	343
21.	蠢く悪意	354
閑話	ふえいす！	361

4 6.	宴の始まり	752
4 5.	狂信者	735
4 4.	見えない心	723
4 3.	新たなるステージ	709
4 2.	K・アドヴァンス	693
4 1.	秘密と暴走	676
4 0.	敵性存在	659
3 9.	誓い	651
3 8.	Valkyrie project ③	632
3 7.	Valkyrie project ②	616
3 6.	Valkyrie project ①	606
3 5.	想い	588
3 4.	一夜明けて	573
3 3.	『ごまあみろ』	559
3 2.	賭け	543
3 1.	黒き長女	523
3 0.	騎士	509
2 9.	もう一度	491
2 8.	敗北者	476
2 7.	学習	455
2 6.	殺意	444
2 5.	困惑の戦場	427
2 4.	対立	407
2 3.	始まる狂気	389
2 2.	臨海学校へ	371

47.	再会	767
48.	『彼』が見たもの	784
49.	父と子	802
50.	交わらないもの	816
51.	求める居場所は	830
52.	レギオン	841
53.	邂逅	858
54.	そして彼女は笑う	872
	小話：どうしようもない人たち	891
55.	who are you? ①	912
56.	who are you? ②	921
57.	炎の中で	942
58.	反逆の子	956
59.	キャノンボール・ファスト	970
60.	圧倒	985
61.	仮面の下	1006
62.	悪夢	1020
63.	温もりに気づいて	1038
64.	お前はやりすぎた	1048
65.	不審	1065
66.	立場と感情の天秤	1082
67.	姉妹	1096
68.	選択の日は近く	1111
69.	それぞれの想い	1128
70.	崩れ去るもの	1142

7 1.	おちてゆく	1175
7 2.	彼女の理由	1192
7 3.	そして火蓋は切られた	1210
7 4.	激情	1222
7 5.	『馬鹿め』	1236
7 6.	サヨナラ	1255
	小話：もうしようもないひとたち	1271
7 7.	炎は消えない	1291
7 8.	きょうだい	1304
7 9.	姉というもの	1316
8 0.	望み	1330
8 1.	亡霊たち	1350
8 2.	天を裂く光	1360
8 3.	進化の叫び	1384
8 4.	馬鹿	1400
8 5.	理由はそこにある	1416
8 6.	狂気再来	1437

1. 黒翼

「こちらB9。準備完了」

『了解。地上部隊が先行する。合図をしたらブチかましてやれ』
「了解」

地上から数百メートル。雲一つない夜空の中、川村静司は静かに応えた。

その体は漆黒の機械の鎧——ISに包まれ、夜空の闇に同化している。

「しかし今日は冷えるな……」

のんびりとぼやきながらも視線とセンサーは地上に注意を払っている。そこにあるのは生い茂った木々の中に巧妙に隠されていた研究所だ。現在仲間がそこに潜入しているはずだ。

『確かに冷えるな。帰ったらコーヒー用意しておいてやる』

『お、課長が入れてくれるんですか？ 久しぶりですね』

『長期任務だったからな。それぐらいはやってやるさ』

「楽しみにしてますよ」

静司の上司が淹れるコーヒーは社内でも人気が高い。なんでも趣味で色々研究しているそうだ。

思わぬ報酬に静司のやる気が上がった時、地上で爆発が起きた。

『こちらA1。《ケージ》を回収……情報通りだ。これより撤退する』

『了解。そういう事だ静司』

「了解」

返事と同時に、今まで最低限の状態で起動していたISの出力を上げていく。

「【黒翼】戦闘機動。R/L展開」

黒い機体の表面に赤い光が走る。今までは最低限人の形の上にそのまま装甲を被せただけだった形状から、両手両足に新たに装甲が展開される。両足はまるで鉤爪の様に鋭く鋭角。両腕にも同じように爪の様な装甲が展開。更に肩の後ろにも左右に伸びるように展開されていく。それはまさしく機械で出来た翼だ。

最後に顔を隠すように装甲が展開されれば準備完了だ。

「まずは挨拶代わりだ。R／Lブラスト」

黒翼の両翼で光が収束、そして6発の光線が幾重も地上に向けて発射された。光は研究所に飲み込まれると、その周囲一帯を巻き込み爆発を引き起こした。

同じように砲撃を数回繰り返すと、その戦果を十分に確認する間もなく静司は一気に下降する。センサーでは脱出する仲間とそれを追う敵の姿を認識している。そちらに右腕を向けると、そこに装備されていた銃口から放たれた光が敵を飲み込む。

さらにその後ろに迫った敵に銃口を向け——しかし即座に静司はその場から離れた。一瞬遅れて、先ほどまでいた場所に砲弾が着弾。爆発する。

「つと、戦車に攻撃へりに歩兵部隊。まだ残ってたか」

先ほどの空からの砲撃では、研究施設は勿論だが、敵の装備が保管されていた倉庫もターゲットにしていた。先ほどの砲撃に耐えられるとは到底思えないので、元々別の場所にあった物だろう。

「B9よりセンターへ。予定外の敵を確認。別動隊の可能性有り」

『了解。周囲はこちらで探索する。B9は予定通りに』

「了解」

戦車からの砲弾を飛んで避け、へりの放ったミサイルを左腕のライフルで撃ち落とす。その爆煙が晴れないうちに敵をロック。

「この程度の連中に落とされてたまるか」

黒翼から再び光が放たれ、着弾。すべての兵器が一瞬で炎に包まれた。

敵を片付けた静司は周囲を索敵する。しかし反応にあるのは逃げ惑う研究所の所員。撤退する味方。そしてそれを追う敵の歩兵部隊だ。戦車や、へりといった兵器は見当たらない。

「こちらB9。周囲の脅威は殲滅。これより撤退中の味方の援護に入る」

『いや、援護は不要だ。C1、C2が向かった。伝言だ《俺たちの仕事を取るな》だそうだ』

「あの人たちがそんなに仕事熱心だとは思いませんでしたよ」

『どうだろうな。さつきR5から全員に通信が来てな。楽しんで仕事しない連中は飯抜きだとさ』

「飯に釣られてるつてのも悲しいもんですねー。楽しい理由をありがとうございます。ならば当初の計画通りに?」

『ああ、そうだ。その胸糞悪い施設を——この世から消し去れ』
「了解」

通信を終えると静司は再び空に上がる。そして研究所一帯を見下ろせる高度まで来ると左腕を構えた。

——R/Lブラスト最大出力。

両翼に光が集まる。

——クエイク・アンカー、セット

左腕の鉤爪が合わさり、槍の様な形状へ変化。黒と赤の混じった光が収束し、唸り声をあげる。

眼下の研究所を見下ろす。

——ああ、本当に胸糞悪い。

一瞬、抑えようのない憎悪が思考を飲み込む。その感情に反応した様に黒翼の光が不安定揺れる。が、

『B9』

「っ!」

ただ一言。通信からのその声にはっ、となる。

『いけるな?』

「はい」

ゆっくりと目を閉じ、そして開く。その眼には先ほどまでの憎悪は無く、あるのは任務遂行への意識のみ。

「最終フェイズ・開始」

眩き、引き金を引く。左腕の武装、《クエイク・アンカー》が放たれ研究所へ着弾。一瞬、黒と赤の光が波紋のように広がり、そして崩壊が始まった。あちこちに亀裂が走り、すべてが粉碎されていく。地面も崩壊し、崩れた施設もそれに飲み込まれていく。さらに追い打ちをかけるように6本の光が地上を貫き、先ほどとは比べ物にならない爆

発が全てを包み込んでいった。

「いよう、長期任務ごころうさん。4か月振りか？」

「お久しぶりっすね。課長」

任務終了後、『会社』のトラックの中で半年ぶりに会った上司に会釈する。

「まあ通信では何度も顔を合わせているから久しぶりというのも変な話だな。ほれ、約束のコーヒーだ」

「どうも」

差し出されたカップに口を付け、笑みを浮かべる。やはりこの人の淹れるコーヒーは美味い。

静司が課長と呼ぶ目の前の男は髭を生やした40代ほどの男性だ。白髪の混じったオールバックにサングラス。真面目な顔をすればどこかのマフィアの様だが、静司が知る限りいつも緩んだ顔をしている。

「しかし随分と髪伸びたな。ぼつさばさだぞお前」

「そうとうな期間切つてないですからね。あの辺りは変に小奇麗にする逆が目立つんですよ」

ちなみに潜伏していたのは中東の小国。未だに内戦の続く後進国だ。静司の任務はその国で『極めて非人道的な』研究を行う施設の調査、及び破壊だった。

「ま、それもそうだな。例の装備はどうだった？」

その質問に静司は呆れたように、

「《クエイク・アンカー》ですか。あれ考えたの誰です？ 一撃である範囲を壊滅させる武器を個人に持たせるとか……馬鹿でしょう？」

「技術部曰く、『浪漫と狂気の融合』だそうだ。まあおかげで例の施設は完全に消滅したんだ。流星に対人戦では使えんがあつて損はないだろう。無論、外に漏らす訳にはいかんが、そもそもお前位しか使えないだろう」

あんな物騒な物外部に知れたら何を言われるか分かったもんじやない。それを理解している静司は黙って頷いた。

「それと回収……いや、保護した《ケージ》の中も本社で治療する」
「そうですか……」

一瞬静司の目が細まり、安心と怒りが混じった声で答えた。

「人体改造によるIS適性と戦闘力の底上げ。お前が怒る理由はわかるよ。事情が事情だしな。だが任務中にそれに囚われるのは感心しないな」

「……申し訳ありません」

返す言葉もない。

「ま、直ぐに元に戻ったから今回はいいさ。それより次の仕事だ。連続ですまないがな」

「それは構いませんよ。それが仕事なんですから」

「そう言ってくれると助かる。さて、静司。織斑一夏を知っているな？」

「……知らないわけではないでしょう。織斑千冬の弟で『世界初』の男性操縦者でしょう」

「お前が言うのと皮肉に聞こえるな。本当の世界初男性操縦者、川村静司？」

そう。静司は女しか動かせないはずのISを動かすことができる。この事には色々複雑な理由があるが、現状それを知るのはい部の人間だけだ。

「1番2番は別に気にしないですけどね。で、その一夏とやらは？」

「ふむ。調査したがISを起動できる理由は不明だ。少なくとも後天的な改造をされた様子はみられない。まあ今のところだが。この件に関しては調査中だ」

「成程。お仲間ってわけじゃないのか。しかし天然モノがあったとすると俺達はなんだったのかね」

自嘲気味に静司は笑う。それに気づきながらも課長はあえて触れず話を進める。

「その織斑一夏だがIS学園に入学する事が決まった。更には専用機も用意されるそうだ。それもあの篠ノ之博士が絡んだ機体をだ」

差し出された書類を受け取る。それは織斑一夏とその周辺のデー

夕だ。

与えられた情報を分析する。まずIS学園入学。それは分かる。何せ表向きには世界初の男性操縦者だ。あらゆる機関、国が目をつけているだろう。そのまま放っておいたら何をされるか分からない。IS学園ならその特性上、守りやすくなる。

次に専用機。これもおそらくデータ収集が目的だろう。他にも理由はあると思うが、貴重な情報源だ。特別なものを用意するのまあ分かる。

だが最後、博士が絡んできているとなると話は別だ。ISの生みの親にして『天災』篠ノ之束。その技術と知識はあらゆる機関が追い求め、しかし博士は雲隠れし見つからない。そんな博士が関連したIS。興味を持つ人間はごまんという。

ここまでの情報を考え、静司は結論づける。

「微妙に鍵穴の緩い檻にカモがネギしよって来た感じですね」

学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されない。それがIS学園だが、結局そんなものは建前だ。実際は様々な所で各国の思惑が動いている。

「言いて妙だな。だがまあその通りだ。織斑一夏は狙われる理由に事欠かない。更に面倒事はまだ続く」

「と、言いますと?」

「まず篠ノ之博士の妹が同時にIS学園に入学。織斑一夏とは幼馴染らしい。そしてイギリスの代表候補生。更に若干時期はずれるが、フランスとドイツ、さらには中国からも同学年に専用機持ちが入学する。さらにさらに中国とドイツは織斑に多少なりと関わりがある。鴨がネギとかそういう次元じゃない。寄せ鍋に鴨もネギも豆腐も白菜も酒とツマミ持参でやってきたようなもんだ」

「それは美味そうですね……」

引きつった笑みを浮かべる静司。課長も呆れたように頷いた。

「まあそんなIS学園絡みでウチに依頼が来たわけだが」

「……まさか課長。次の任務って」

嫌な予感がした。

「ああそうだ。日本政府の非公式の依頼だが、織斑一夏、及びその周囲の護衛だよ」

(まあこんなものだよなあ)

静司が課長から任務を言い渡されてから数日後。IS学園1年1組の教室は微妙な緊張感と好奇心で溢れていた。女性だらけのその教室の生徒の意識は今、二人の男に集中している。

一人は織斑一夏。そしてもう一人が川村静司である。一夏の方は居心地が悪そうに落ち着きがないが、静司は覚悟していたので一夏程は顔に出していない。無論、うんざりしているのは同じだが。

「それでは皆さん、1年間よろしくお願いしますね」

教壇では副担任の山田真耶が微笑んでいる。どこか子供の様な印象を持つそんな教師に静司は年齢を聞きたい衝動に駆られたが、流石に我慢した。

『……』

妙な緊張感と静けさ。誰も反応しない事に真耶は狼狽えつつも、

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと出席番号順で」

教師としての仕事をなんとか進めていた。

(きつついな……)

ぼんやりと頬杖をつきクラスの自己紹介を聞きながら、静司はここに来る前の事を思い出していた。

『IS学園に潜入し、織斑一夏、及びその周囲を護衛せよ』

このなんともアバウトな任務を受けた時、静司は思わず聞いたのだ。

「抽象的すぎませんか？」

意味はわかる。織斑一夏はその希少性から狙われやすい。更に彼に関連する人たちも下手をすれば巻き込まれる。人質になどされた

らたまつたものでは無いので護衛が必要なのも頷ける。

だが、その周囲を護衛せよ、とだけ言われるとどこまでを含むのか
いまいちはずきりしない。そんな静司の質問に課長はため息を付く。

「しいて言うなら、織斑一夏にとって『弱点』となりうる人間、つて事
になる。が、織斑一夏がデータ通りの人間だと相当面倒な事になる」
渡された資料を確認すると性格分析にこんな一文があった。

【対象の交友関係は広く、また、シスコンのフラグ建築士。爆ぜろ】

「……俺、会社つてもうちよつと真面目に仕事するものだと思つてた
んですけど」

「知らん。余所は余所ウチはウチ。因みにその報告書を作成した36
歳独身彼女無しの笹山は途中でキレていた。アイツは主に織斑一夏
の交友関係を担当していたが、自分との差異に耐えられなかったのだ
ろうな。その結果がそれだ」

「相変わらず無秩序な個性を大事にしていますね」

因みにその一文だけなら報告書とは言えないが、その下には詳しい
情報もしっかり記載されていた。36歳独身も仕事はしっかりこな
しているらしい。そしてその情報を読んだ静司は納得する。

「熱血とまではいかないが良くも悪くも感情的な部分有り。誰にも分
け隔てなく接し、好意を持たれやすいタイプではるが当人は自覚無し
……」

「そういうことだ。見知らぬ人間を人質にとつても効果があるんじや
ないかという見解だ。よつて任務をもつと分かりやすく言うなら、
『織斑一夏を他機関から守りつつ、人質候補満載の学園そのものも
守つてね』つて訳だ」

静司の顔が引きつった。

「安心しろ。いくらなんでもお前一人にやれとは言わないさ。学園の
周囲で別チームも任務にあたる。お前は年齢や能力から潜入するの
が一番効率的だろうから選ばれた。学園周囲はフォローするからお
前はクラス周りと交友関係が深そうな人間を注意してくればいい」
「それなら助かりますけど……けどそもそもどうやって潜入するん
です？ まさか女装しろとか言わないですよね？」

「なんだ？ したいのか女装」

課長が指をパチン、と鳴らす。すると室内に若い社員が入室。巨大なスーツケースを課長と静司の前に置くと、静司に向って最高の笑顔でサムズアップし退出した。嫌な予感がしつつ、スーツケースに目を向けるとそこにはこう張り紙されていた。

『せつちゃんの変身グッズ♪ Ver7 学生編くニーツからスク水まで』

「準備は万全だ」

「ツツコミどころありすぎだコラアアアアツ！」

静司は怒鳴りつつ目の前の上司にドロップキックをぶち込んだ。しかし課長は床に倒れながらも平然と、

「不満か？」

「不本意そうに首かしげるんじゃねえ！ 何で準備してある!? とうかVer7ってなんだ!？」

「課の皆で一生懸命に考えてなー。一生懸命すぎてバリエーションが豊富に」

「今すぐ黒翼でぶち抜いてやろうか……」

「冗談だ」

再び課長が指を鳴らすと、先ほどの社員が現れスーツケースを回収していった。その際とても残念そうな顔をしていたが静司は無視した。

「女装プランが駄目なら簡単だ。そのまま入学すればいい」

「本気で言ってます?」

静司は男性操縦者。今までは騒がれる事を嫌い、正体を隠していた。IS展開時も全身装甲。顔も隠れている為、性別は分からないようになっていいる。何故なら、もし見つければあらゆる機関に狙われるからだ。

「本気だ。静司、これはチャンスなんだよ」

「チャンス?」

「そう。例の件の事もありお前は今まで世間から隠れてきた。見つかったら解剖されてもおかしくないからな。しかし今回男性操縦者

が『公式に』発表された。それがあのブリュンヒルデの弟で更には篠ノ之博士とも知り合い。無理やり解剖でもしようものなら世界最強のIS操縦者を敵に回すことになるし、博士も何をしてくるか分かったもんじゃない」

「織斑一夏を強引に解剖することは世界レベルの戦力と頭脳を敵に回すっていう事ですね」

「ああ。そして現在世界中で男性のIS適性検査が行われている。今のところどこも駄目らしいが、織斑一夏が動かせたんだ。他に動かせる男性が居てもおかしくはない。この流れにのる。」

課長は説明を続ける。

もし、先に静司が男性操縦者として現れたら？ 世界中がその理由を知りたがるだろう。織斑一夏のように大きな後ろ盾がない静司はあらゆる機関から狙われる。公に発表したとしても、世間では信じられず、『偶然の不慮の事故』で表舞台から消され解剖室行きの可能性も高かった。しかし先に『非人道的な検査をすればアウト』である織斑一夏が現れた。これにより男でもISを動かせるものが居る、という事を人々も認知した。その結果、二人目が現れても一人目よりは違和感が低い。まあそれでも二人目の実験材料を欲しがる機関は山ほどいるだろうが。

「早い話、目立つ一人目のお蔭で男性操縦者の存在が世界に明らかになったって事だ」

『一人いたのだから、二人目がいてもおかしくないでしょ？』という事だ。一人目が現れた事で二人目が居てもあり得ることだと思われる。そこで今のうちに二人目として発表することで『注目されることで自分の立場を作る』事に繋がるのだ。何せ世界で二人の男性操縦者。その動向は注目される所であり、突然失踪でもすれば大捜索が始まるだろう。

この点に関しては実は織斑一夏は運が良かった。もし織斑千冬が普通の姉で、篠ノ之博士とも関わりが無く、どこかの研究機関や企業のISを起動させてしまっていたら、今頃監禁され実験材料か、ホルマリン漬けにされていてもおかしくなかった。彼が無事なのは件の

二人の影響が大きい。

「お前が平穩無事な生活をするなら隠したままでも良かった。けど違うだろ?」

「ああ、俺はこの『会社』で働くと決めた」

「ならばいずれバレる可能性は高かった。ならば先にこちらから言っ
てしまえばいい。織斑一夏のデータ、つまり男性操縦者のデータは入
手してある。お前の検査結果はこのデータを元に作成するから、
『Vプロジェクト』も隠せる筈だ。まだ男性操縦者は織斑一夏以外で
は見つかっていない。情報が少ない今のうちにバラしてしまった方
が都合がいい」

情報が少ないうちに、すでにあるデータに限りなく近い普通のデー
タを提出する事で誤魔化してしまおうという訳だ。

「正直この方法もベストとは言えない。だが任務の性質上、この方が
都合がいいのも事実だ」

「……囧ですね?」

「正解だ。『Vプロジェクト』は隠せても二人目の男性操縦者が貴重な
実験材料になるのも間違い無い。お前は世界に公表されると共に、織
斑一夏同様に世界中から注目の的になる。ならばそれを利用して敵
を燻りだす」

「と、なると俺の経歴も考えなきゃいけませんね」

自らが囧になるというのに静岡は全く動じずに頷く。彼にとって
囧になることは対した問題ではない。そういうものだど理解してい
るからだ。

「既に用意してある。お前は北海道の田舎町に住んでいた一般人の少
年となる。今回の騒ぎで行われたIS適性検査で発見された二人目
の男性操縦者となる訳だ。細かい部分はこれに書いてあるから覚え
ておけ」

課長が新たな書類を静岡に渡す。

「世界最強の姉を持ち、世界最高の天災を知人に持つ世界初の男性操
縦者。片や日本の田舎町出身の平凡な男ですか。確かに狙われやす
そうだ」

なんとも妙な任務だと静司は苦笑した。他人と、そして自分を守るために公表するのに狙われるのも仕事というのだ。笑いたくもなる。そこで、ふと静司は疑問に思った。

「そういえば今回の依頼人は日本政府って言いかもしれませんがもしかして桐生さんですか?」

「そうだ。ウチの会社以外で唯一お前の存在を知っている人間だから今回の件を持ってきた。アイツもチャンスだと思っただろう。政府の連中も頭抱えてたって話だし」

例年以上にやってくる専用機持ちと男性操縦者。IS学園を運営する日本政府としては悪夢のようだろう。何か問題が起きれば各国からバッシングが飛んでくる。

「まあそういう訳だ。一応IS学園も対策はしているだろうが、桐生個人として信頼できる戦力にもお願いしたいって事らしい。その他、こまごまとした点はデータとして送ってある。幸運を祈る」

「了解」

ふと、騒がしくなり静司は思考を止めた。どうやら件の織斑一夏の自己紹介が短すぎ、それに担任がツツコミを入れたらしい。

(あれが織斑千冬……)

写真や映像では見た事はあるが、本物を見るのは初めてだ。黒のスーツにタイトスカート。すらりとした長身にオオカミを思わせる鋭い目。その姿に静司は思わず姉達の事を思い出してしまう。

(……つと、あれは別人だ。考えてはいけない)

慌てて思考を中断する。意識的に姉と織斑千冬の繋がりをカットする様に心がけた。

と、

「キャア~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!!!!!
千冬様、千冬様よ
!」

「本物……本物よ!?!」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです! ファンクラブにも入ってます! 同人誌も持ってます!」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて……神様ありがとうございます！」

「私、お姉様のためならたとえ火の中水の中草の中あつちの眼鏡の先生の胸の中！ 死ねます！」

千冬が自己紹介した途端、生徒たちから黄色い声援が響いた。そんな様子に千冬は頭を抱えている。

「……例年にも増して馬鹿が多くないか……。それとも何か？ 私のクラスに馬鹿者を集中させてるのか？ 嫌がらせなのか？」

うわー容赦ないなーと静司はその言葉に若干引いた。しかし静司の思っていた以上に生徒たちは逞しいようだ。

「きゃあああああつ！ お姉様！ もつと叱って！ 罵って！ 見下して！ その冷たい目で見つめて〜！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡して下さい！ 大丈夫、私はドMですから！ けどMな千冬様も見てみたい！」

(逞しいなあ……というか、明らかに変態が一人居るが)

これが女子高のノリというものか。そもそも普通の学校自体静司は知らないが。

その後も織斑一夏と織斑千冬が姉弟だと知れ渡り生徒が騒ぎですが、千冬的一声で鎮静化した。

「よし、では川村、自己紹介をしろ」

「はっ」

呼ばれゆつくりと立ち上がる。

「川村静司です。以前は北海道に住んでいましたが今回の件でこちらに来ました。趣味は読書とランニング。男という事でこの場では少し特殊かもしれないけど楽しくやればなと思うので皆さんよろしくお願いします」

可もなく不可もない自己紹介。因みに川村静司は紛れもなく本名である。元々日本に国籍なんて無かったが、今回の件で用意されたのだ。どうせ任務の時はコードネームを使うし、これから先、二人目の男性操縦者としてやっていく場合、偽名だと色々面倒だという理由からだ。

「普通だ……いや、織斑君はアレだったけど」

「けどちよつと地味じゃない？」

「だね。髪もボサボサで目元見えないし」

「けど良い人そうだよ」

とまあこんな感じである。因みに静司の現在の容姿はボサボサで目元まで隠れる長さの髪にメガネとはつきりいつて冴えない。別に普段からこういう訳ではなく、前回の任務から対して身だしなみを整えていないだけだ。何せ本来の静司の目つきは鋭く、日焼けした肌と堀の深い顔立ちから堅気ではない様相だったのだ。それを隠す為に髪はそのままに、更に伊達メガネをかけている。

こういった理由から女子たちの反応はある意味狙った通りのものだったのだが、やはり男としてちよつと堪えるものがあつたのは静司の秘密であつた。

2. 喧騒と決闘

「よう、川村だよな？　これからよろしく頼む」

「ああ、こちらこそよろしく織斑」

休み時間。妙な緊張感の溢れる教室で二人は握手した。お互いの顔には疲労の顔が見える。

「一夏でいいぜ。たった二人の男なんだ。仲良くしようぜ」

「それもそうか。俺は好きに読んでくれて構わない」

「なら静司でいいよな。しかし助かったよ。俺一人だったら耐えられなかったかも」

「それはお互い様だ。珍しいのは分かるが流石にこれはな」

苦笑しつつ見渡すとこちらを見ていた女子たちが慌てて目を逸らす。授業中からこんな状態が続けば気疲れもする。

「静司は今まで北海道に居たんだよな。どんな所だったんだ？」

「ド田舎の漁村だよ。今時ネット環境すら満足に無いところで、同年代も数える程しかいなかったな」

「それはすごいな……」

完全に嘘なのだが一夏は信じたようで感心していた。因みに学園にも同様のデータを伝えている。無論、虚偽がばれない様に色々細工しているが。

「……ちよつといいか」

「え？」

突然話しかけられ一夏は呆けた様な声を出す。声をかけたのはポニーテールの少女、篠ノ之箒だった。少し不機嫌そうな彼女は静司をチラチラと気にしつつ何かを言いたそうだった。

「箒……？」

（篠ノ之束の妹で、一夏の幼馴染か）

おそらく一夏と話したいのだろう。静司は手を挙げ、

「俺は構わないから二人で話してこいよ」

「すまん。一夏、廊下でいいか？」

箒は済まなそうに静司に頭を下げるが、

「なんで？ こころじや駄目なのか？」

一夏は不思議そうに首をかしげる。その様子に箒は少しムツとした。

「いいから行ってこい」

ひらひらと静司が追い払うように手を振ると渋谷廊下に出ていった。

「あの二人って知り合いなの？」

「そうじゃない？ 織斑君も名前で呼んでたし」

「まさか恋人だったり!？」

「責められる織斑君……責めるあの子……。校内でのイケナイ関係……ふふふふふ……」

「それにしても様子が変だったよね」

二人が出て行った後、教室内は少女たちの好奇心で溢れる。I S 学園に入学したエリートといってもまだ子供。恋愛沙汰には敏感である。

「ねーねー、かわむーはどう思う？」

「……それは俺の事か？ というか君は？」

どこかのんびりとした雰囲気を持つ少女が静司に問う。静司はそれが布仏本音だと知っていたが、それを明かす訳にもいかなかったのでえて聞いた。

「布仏本音だよ。よろしく。それでね、川村だからかわむーだよ。因みにあつちは織斑だからおりむー」

独特の雰囲気の子だな、と静司は考えるが顔には出さない。

「まあ呼び方は何でもいいけどよろしく。それとあの二人だけど恋人って感じでは無かったかな。ただの知り合いじゃない？」

「そっか」

そのまま他愛のない話をしていると、織斑千冬に頭を叩かれた一夏が頭を押さえながら戻ってきた。

「おかえり。彼女は？」

「ん？ ああ箒か。幼馴染なんだ。まさかこんなところで会えるとは思ってなかったよ」

「ふうん。仲良かったんだな」

「……どうだろ？　なんか向こうは怒ってるみたいなんだけどなんで

——」
「パンツパアツン！」

「休み時間は終わっているぞ、貴様ら」

『すいませんでした』

その後、山田先生の授業が始まったが。ここに来て頭の静司の頭痛の種が増えた。それは他でもない織斑一夏だ。なんでもISの参考書を読まずに捨ててしまったらしい。

(勘弁してくれ……)

どうも織斑一夏はISと自分の重要性を理解してないらしい。確かに男性操縦者と発覚してからはあれよあれようちにIS学園に放り込まれた彼だが、それでも自分が扱う物に関しての知識は最低限持っていて欲しかった。何故なら護衛対象がその仕組みも危険性も理解していた方が、いざというとき少しでも対処できる確率が上がるからなのだが。

(こりや思っていたより大変そうだな)

気合いを入れ直す静司だがその次の休み時間、さらなる頭痛の種が増える事になる。

「ちよつとよろしくて?」

「へ?」

「ん?」

先ほどの授業の件で、少しでもISの重要性を分かってもらおうと静司は一夏と話そうとしたのだが、それは金髪の鮮やかな生徒に遮られた。一夏はそれが誰だか分からない様だが当然の如く静司は知っている。イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットだ。

「聞いてます?　お返事は?」

「あ、ああ聞いてるけど」

「何か用か?」

「聞こえているのなら直ぐに返事をなさいいな。それともそれすら

できないほど愚鈍なのですか？」

そんなセシリアの態度に一夏はむっ、とした様だ。静司も気持ちには分かる。ISが登場以降女尊男卑な考えが広がり、女々偉いという構図が出来上がっている。そしてこういう高慢な女性が増えたのだ。だが、それを気に食わなかったり、力を振りかざすその態度に反発を持つ男も居なくなったわけではないのだ。

「なんなんだよいきなり。というか俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを知らない!? あなたはどうなんです！」

今にも嘸みつきそう顔でセシリアが静司を見る。

「知ってるよ。イギリスの代表候補生だろ」

「え？ 何で静司は知っているんだ？」

「一夏、お前がISに詳しくないのはさっきの授業でよくわかったけど、最低限自分の周りの事くらいは知っておこうぜ？ 一週間前にこっちに来た俺でさえ、ネットカフェで調べたら色々わかったんだから」

「う……気を付ける。ところで静司。今言った代表候補生ってなんだ？」

その瞬間、クラス全員がその場でずっこけた。

「お前……ここまで深刻なのか」

「え？ え？」

「あなた、今までどうやって生きていましたの!? 本気でおっしゃってますの!?!」

「おう。知らん」

あまりの事にセシリアはこめかみを人差し指で押さえながらぶつぶつ何かを言い出した。そんな彼女に静司は同情しつつ説明してやる。

「字面の通りだよ。国の代表となる操縦者の候補者。つまりエリートだ」

「そう！ エリートなのですわ！ そちらの地味男は少しは教養があるようですよ」

エリートという単語に反応したのかセシリアが復活した。忙しいやつだなあと静司は内心呆れたが。それと地味男と言われちよつと凹んだ。

「そう、私は選ばれた人間。碌に知識もなければ常識も知らないあなたとは天と地の差がありますの。そんな人物に話しかけられるのはとても名誉な事でなくて?」

「そうか。それはラッキーだ」

「一夏、それは多分皮肉しかならない」

案の上、セシリアのこめかみに青筋が浮かぶ。

「……馬鹿にしていますの? 大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると、散々騒がれてましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待外れもいところ。そっちの男は少しは覚えがあるようですが冴えない事。そんなだらしない格好で勉強の場に来るとは程度がしれますわ」

「俺に何かを期待されても困るんだが。それと静司に謝れ。人の容姿をどうこう言うのは最低だぞ」

だんだん一夏のボルテージも上がってきたのか、言葉に陰が籠る。静司としては冴えない男を演じるためのこの容姿なので、作戦通りで嬉しいやら男として悲しいやらと微妙な心境だった。

「ふん。まあいいですわ。わたくしは優秀ですから、あなた方のその無礼も見逃して差し上げます。それと、ISの事で分からないことがあれば泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくてよ。何せ私は唯一入試で教官を倒したエリートですから!」

一夏の話をまるで聞いていないセシリアは、唯一という部分を強調して誇らしげに胸をはる。しかし一夏がそこに爆弾を落とした。

「唯一……あれ? 俺も倒した筈だぞ、教官」

「は……?」

ぴしり、とセシリアが固まる。

「わ、わたくしだけと聞きましたか?」

「俺は後から試験受けたからその時間差じゃないか?」

「つ、つまりわたくしだけじゃないと?」

「いや知らないけど」

「あ、あなたはどんなんです!?!」

なんか色々アイデンティティを崩されてそんなセシリアがだんだん哀れに思えてきた静司は首を振った。

「いや、俺は倒してないよ」

「そ、そうですね。そんなのが何人も居て……ではなくて——」

まだ何かを言いたそうなセシリアだったが三限目の開始のチャイムが鳴ると、

「っ! また後で来ますわ! 逃げ無い事ね! よくって!」

何かをぶつぶつ言いながらも席に戻っていった。

そして始まった授業。それは千冬の言葉がきっかけで始まった。

「ああ、そういえば再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

そこまではまだよかった。しかしある女子生徒が一夏を推薦したことで再びセシリアが激昂した。理由としては男が代表など認められない。屈辱だ。実力から考えて自分になるべきだ、というものだ。最初は自分が代表となる事に抗議しているセシリアに感謝しているようだった一夏だが、日本と男を侮辱する言葉の数々にだんだん苛ついてきているのが静司にはわかった。そして、

「偉そうなこと言ってるけど、イギリスだって大概だろ。うなぎをゼリーにして食べるとかトチ狂ってるだろ。プライドは高くても味覚は最下層じゃねえか」

ついに言ってしまった。

「なっ……!」

案の上セシリアの怒りのボルテージは急上昇。一方静司としては、(食べるだけマシだろうに。本当に不味い料理というのは味が不味いんじゃない。食べる事そのものがマズイんだ)

過去のトラウマがよみがえり一人震えていた。

「あ、あなたねえ! わたくしの祖国を侮辱しましたわね!?!」

先に侮辱したのはお前だろ。それにさつきは静司の事も馬鹿にして

まだ謝罪してないだろ！ 静司！ お前もなんか言ってみてやれ！」
「へ？」

何故か喧嘩に巻き込まれた静司は思わず間拔けな声を上げた。できれば関わりたくなかったが、二人の様子から何かを言わなければならぬ空気は読めた。

「えーと、まあ食えるだけマシじゃね？」

ぷつ、と誰かが笑う。しまった、と気づいた時にはセシリアの怒りは頂点に達した様だった。

「決闘ですわ！」

「おう、いいぜそれならわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらあなたたち私の小間使い

——いえ、奴隷にしますわよ」

「はん、たいした趣味だな。だが侮るなよ。真剣勝負で手を抜くもんか。なあ、静司？」

「いや、何でおれが参加することに——」

静司は辞退しようとするが二人は全く聞かずに言い合っている。

「さて、話は纏まったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、それと川村は用意をしておくように。それでは授業を開始する」

気が付けば静司の参加は確定事項となり、がつくりと肩を落とす。そんな静司をどんまいだよと本音が肩を叩いていた。

昼休み。男子に興味深々な女子を振り切って、静司は人気のない学園の端っこに居た。

『ははは、なかなか面白い経験をしてるじゃないか』

「笑わないで下さい。まだ半日ですがもう頭が痛い……」

『何事も経験だよB9。こちらとしては任務に支障が無ければ基本的に行動を一任しているからな。初めての学生生活を満喫すればいいわ』

暗号化された通信機で話すのは課長だ。

『それで織斑一夏はどうだったんだ？』

「完全に素人ですね。まあ境遇からそれは仕方ないのですし、正直同情します。それとISに関する意識が薄いように見えます」

『ふむ。それは後々面倒だな。それとなく色々教えてやれ。無論、違和感がない程度にな』

「了解です。それとセシリア・オルコットですが」

『イギリスの代表候補生か。イギリスの試作機を持つ彼女もある意味狙われやすい。織斑一夏とはこれから色々ありそうだし、注意しておけ』

「色々ってなんです？」

『色々だよ。あくまで俺の勘だ』

「課長の勘はよく当たるので怖いんですよ」

『ま、任務は始まったばかりだ。これからの活躍に期待するよblaa deg?』

「ったく……了解しました。通信終わります」

通信を切りため息を付く。ふと時計を見れば昼休みも残り僅かだ。そろそろ教室に戻るなければいけない。

「やるしかないか……」

ばしっ、と頬を叩くと静司は教室に帰って行った。

放課後。IS学園生徒会室で更識楯無は不機嫌そうに書類を眺めていた。その書類はある生徒の調査書だ。

「川村静司。北海道出身。履歴書の町にも記録はあるし、データだけ見れば本当に一般人ね」

「彼の出身地も調べましたが、怪しい点はありませんでした」

彼女の隣に立つ布仏虚が報告する。更識家に代々使える家系であり、幼馴染でもある彼女は楯無の秘書の様な役割も兼ねている。

「ふーん。現地の人間も彼を知っている様だけど……ぶっちゃけあれだけ小さい町だと買収も楽よね？」

「それは否定来ません。無論、彼が実際にそこに住んでいたという可

能性もありますが」

「難しいところね」

今二人が話しているのは二人目の男性操縦者、川村静司が信用できるのかという点だ。

それもこれも、昨日突然連絡してきたある人物のせいだ。その連絡内容とは、二人目の男性操縦者を一人目の護衛兼学園の防衛戦力として派遣したという内容だった。

「桐生さんか……。勝手なことしてくれちゃってまあ」

流石に最初は耳を疑った。二人目が発見され、一人目に続きIS学園に来ることは勿論知っていた。しかしまさかその男性操縦者が戦力としてやってくるなど誰が予想できたか。

「更識としてもカチンとくるわね」

対暗部用暗部である更識家当主であり、IS学園生徒会長である彼女は学園の生徒を守る立場に居る。それなのに外部から勝手に派遣されたのだ。良い気はしない。

「正式に抗議しますか？ 彼の独断の様ですし政府に知らせれば状況もかわるか」と

「そうしたいのも山々だけど桐生さんにはISのコアの件で借りもあるのがね。結構無理したし」

「訓練用のISの確保には苦労しましたからね。アラスカ条約もありますし」

何せ当初はISの数が絶対的に足りなかった。ISを学ぶ学園の数はなののだ。そしてコアの取引はアラスカ条約で禁止されている。それを何とかしたのが楯無と桐生だった。

「いやー色々裏工作もしたけどね。それでも借りは借りよ」

「では川村静司に関してはどうします？」

「保留かしらね。何せ情報が足り無すぎるわ。桐生さんも何も教えてくれないし」

最も彼女には桐生の意図は分かっている。『更識家』なら自分で調べてみるという事だろう。彼女としても望むところだ。

「引き続き彼の調査を続けて。情報は随時私に。連携を取るかどうか

は相手次第ね。」

「かしこまりました」

「それと例の件は？」

楯無の問いに虚は少し困ったような顔をしつつも頷いた。

「例の部屋割りについてですよね。一応手配はしましたが良いんでしょうか？」

「まあこちらのメンツを潰されたちよつとした仕返しね。織斑君には悪いけどこちらの影響力ってやつを見せつけてみたいじゃない？」

「寮の部屋割りで見せつけられるのが何の影響力なのか疑問ではありますが。それに結局被害を被るのは織斑君なのでは？ ……本当は面白そうだからという訳ではありませんよね？」

虚の疑わしげな問いに楯無は顔をそらした。そんな主の様子に虚はため息をついてしまう。

「戯れも程々にしてくださいね。何故か織斑先生も了承しましたし」

「部屋割りは結構重要よ？ 安全な人物と危険な人物。それらが住む部屋をこちらがある程度操作できるって事は伝わるでしょうしね。やろうと思えば織斑一夏から遠ざけることも可能ってことさえ示せばいいわ。あちらが危険な真似をするなら、こちらにも手段はあるぞ、と言えるしね。それに織斑先生もなんだかんだで弟が心配なんでしょう。篠ノ之箒なら織斑君も昔話に華を咲かせてリラックスするとでも思ったんじゃないかしら」

「それ以前の問題があると思うですが……」

虚の懸念は正しかった。

放課後。一夏は机の上でぐったりしていた。

「相当堪えたみたいだな」

「ああ、やっぱりキツイ。なんで静司は平気なんだ？」

「ISに関しては事前に勉強したからな。あとアレに関しては平気じゃない。我慢しているだけだ」

アレとは他学年・他のクラスから押しかけた女子たちによる好奇の

視線だ。

「俺たちはパンダか」

「似たようなもんだろ」

二人してため息を吐く。

「ああ、まだ教室にいたんですね。よかった」

「はい？」

「ん？」

声の主は副担任の山田真耶だ。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

「あれ？ 前に聞いた話だと一週間は自宅から通学してもらって話だったけど」

「俺は元々寮は確定だったけど、そーいや部屋はまだ聞いてなかったな」

因みに静司の荷物は朝の段階で学園の事務所に預けられていた。元々大した量も無かったので置かせてもらったのだ。

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な措置として無理やり部屋割りを変更したらしいです。その辺り政府から何か訊いてますか？」

一夏は知らないと言を振る。静司も日本政府そのものとは関わりが無いので話は聞いていなかった。どうも真耶の説明によると政府特命で寮に入ることを最優先にしたらしい。これも男性操縦者を保護し監視する為だろう。そんな二人の反応に真耶も「なるほど」と頷きつつ、少し言いづらそうに一夏に目を向けた。

「すいません。それで織斑君の部屋なんですけど一つ問題が……」

キーを渡しつつどこか口ごもる真耶。そんな様子を不審に感じつつ二人はキーにつけられた部屋番号を確認する。

「1025室か。静司は？」

「1030室だな……って1025!？」

「そうだけど何をそんなに驚いてるんだ？」

驚きもする。学園入学前に寮の構図、入居者は調べてある。そして静司の記憶が正しければ1025には既に彼女が住んでいたはずだ

が……。

(何考えてるんだこの学園は……。いや、流石に部屋替えしたのか？
だとしたら情報が来てないが……)

因みに1030室には人が居ないのは前述の理由から知っている。
だとするとその部屋に二人を放り込めばいい話なのにわざわざ別々にした理由が分からない。

(後で調べてみるか)

静司がそんな事を考えているとは知らず、真耶は困った様な顔をしつつ二人を促していく。

「え、えつとですね。とりあえず織斑君には色々と説明しなきゃならないことがあるのでこちらへ。……しかし楯無さんも何を考えられているでしょうか。織斑先生もあまり気にしてない様ですし幼馴染ってそういうものなんですかね……？」

ぶつぶつと何かを呟きつつ一夏は真耶に連れられ去っていく。

それを見送った静司だが、自分も部屋にいかなくてはならないので少し遅れて向かう事にした。因みに一夏の荷物は千冬によつて既に手配されているらしい。

その後、部屋を確認し荷物を放り込んでから一夏の部屋に向かったが、なぜか一夏がドアに向かって平謝りしていた。そのドアからは木刀が生えている。

「……何やってんだお前」

「静司か……。同室が箒だったんだけど、ちよつとその……色々あつて怒らせちゃまって」

まあ突然男が入ってくれば問題の一つや二つおきるだろう、と静司は思う。しかし本当に男と女を同じ部屋に放り込むとは一体何を考えているのやら。しかし木刀で制裁はさすがに危険な気がした。護衛対象の一人が痴話喧嘩で死んだ、なんて事が起きたらどう報告すればいいのやら。

「まあ仲良くやれよ」

その方が静司としても仕事が楽だ。

「酷いな。そういうえば静司の所はどうだったんだ？」

「何故か俺は一人部屋だった。どういう采配したらこうなるのか正直疑問なんだが」

「はあ!?　じゃあなんで俺が箒と同じ部屋なんだよ!　普通に静司と一緒にいいじゃねえか!」

「正直俺もそう思うが……。なんなら先生たちに聞きに行ってみるか?」

「おう!　俺だって男と一緒に良いに決まってる!　……あれ、静司?　なんで俺から離れるんだ」

「気のせいだよ。それより言うならやはり織斑先生か?　とりあえず行くか」

「ああ!　早くあの部屋から出た——」

そんな一夏の肩が突然背後から掴まれた。一夏が恐る恐る振り返るとそこには何やら怒気を孕んだ雰囲気の箒の姿。

「そんなに私と居るのが嫌か、一夏」

「ほ、箒?　そういう意味じゃなくて男が良いって言って……」

「お、男が!?　一夏、貴様しばらく会わないうちにごどこで道を踏み間違えた!」

「なんなんだよいきなり!」

「ええい、黙れ!　お、幼馴染として道を外れたお前を矯正してやる!

来い!」

「待ってくれ!　俺は静司と」

「男がそんなに良いのか!」

「だから何なんだよ!」

何やら危険な会話をしつつ箒に引きずられていく一夏を静司は見送る事しかできなかつた。周囲ではそんな様子を見ていた他の生徒たちが黄色い悲鳴を上げている。

「ねえ、聞いた!?　織斑君って男の方が良いんだって!」

「こ、これは予想外ね……」

「けど篠ノ之さんも矯正するって……大胆だよ。一体ナニをする気なのか」

あれよこれよと好き勝手に。しかも普段男の眼を気にしていな

かったせいかなかなり服装が大胆な子が多く、正直居づらい。

そんな空間から逃げ出したくなり、静司は急いで部屋に戻っていた。

「さて、と」

改めて部屋に戻り静司が真っ先に行ったのは部屋のチェックだ。水周りの確認。空調の確認。そして盗聴器等の確認だ。

「問題なしか……。とすると俺を一人にして泳がせているかまたは嫌がらせか。しかしその為にわざわざ一夏を女部屋に入れるとは……」

静司とて生徒会が、つまり『更識』が良い顔をしないのは分かっていた。だからこそ何かしらアクションがあるかと思ったが、この部屋割り以外では今のところは特に無い。生徒会長の妹のメイドに、教室で話しかけられた位だ。おそらく様子見といったところだろう。

（わざわざ敵対する必要はないけどこっちが強引だったしな。お互い出方を見るとしますかね）

そう結論付けると部屋の整理に戻っていた。

因みに、一応部屋割りについて問い合わせしてみたが、千冬の回答は『そのままだ』の一言だった。静司が問い合わせに行く少し前、箒が千冬に男と女と一夏について凄まじい勢いで千冬に語り、現在の部屋割りを維持したという事は静司も知る由は無かった。

翌日、昨日と相変わらず一夏と静司は注目の的だった。とはいっても、女子の大半は一夏目当であったが。男性操縦者の女子たちの評価は『格好いい一人目と地味な二人目』という形で広まっており、自然と一夏に注目が行くのだ。今も静司の隣で質問の集中砲火を浴びていた。

「普段何してるの?」

「好みのタイプはズバリ?」

「責めるのと受けるのどっちがいい!」

「一度に訊かれても……というか最後の質問はなんだ!？」

休み時間の度にこの調子である。因みに一夏程ではないが静司も時折質問されている。すべて無難に答えたが。

「織斑君、千冬姉様って家ではどんな感じなの!？」

「え、案外だらしな——」

「パアッン！」

「休み時間は終わりだ。散れ」

出席簿を叩きながら現れた千冬に恐怖した女子たちが慌てて席に戻る。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ?」

「予備機が無い。だから少し待て。学園が専用機を用意する」

なんの事か分かっていない一夏に千冬が説明する。要約するならば、本来なら国家や企業に属する人間にしか与えられないが、事情が特殊すぎるのでデータ収集の為に専用機を用意されたという事だ。

「それと川村。お前の方はまだ検討段階だ。何せ一度に二人だから。先に発見された織斑が優先された」

「了解です」

何せISは公式では世界で467機という限定された数だ。そう簡単に用意出来るものではない。

(まあ黒翼があるしな)

むしろ下手に専用機を用意されてデータ収集される方が面倒だ。そんな訳なので静司としては今回の件は助かったともいえたのだ。た。

「うーむ」

放課後。今日は篠ノ之箒が篠ノ之束と姉妹であることが知れ、騒ぎになったり、セシリア・オルコットがまたつかつかかかってきたりと濃い一日だった。そして現在静司と一夏。そして篠ノ箒は剣道場に居た。なんでも箒が一夏の今の実力を見ているらしい。

(まずはISに慣れた方がいい気もするんだがな)

剣道を馬鹿にする気は無いが、一夏はISに関して素人だ。少しでも事前に慣れた方が良い。だが視線の先では箒が一夏を説教していた。どうやら腕が相当訛っているらしい。

「鍛え直す！ IS以前の問題だ！ これから毎日、放課後三時間私が稽古を付けてやる！」

「というかISの事をだな」

「だからそれ以前の問題だと言っている！」

二人は大勢のギャラリーの前でなんやかんやと言いつ合っている。

静司の知っているデータだと篠ノ之箒のIS適性はCと高くない。そもそも彼女も新入生なのだからISの訓練自体したこと無いだろう。それでも一夏に稽古を付けるという事は。

「青春だねえ」

「かわむーおじいちゃんみたいだよ」

隣に居た本音にのんびりと突っ込まれた。

そしてクラス代表決定戦当日。

驚いた事にあの二人は本当に剣道ばかりしていたらしい。それを一夏に突っ込まれた箒が目を逸らしている。

「ち、知識は川村に教わったのだろうか?! 私は戦う物の心得というものをだな……」

苦しい言い訳だ。

因みにこの一週間、静司は多忙だった。ISに関して一夏に知識を叩きこみつつそれとなく人間関係を聞き出す。データでは持っているが、本人からも聞いた方が確実だからだ。放課後は学園を歩き回って頭の中の地図と実際の景色を照合させる。少しでも怪しい生徒は即座に社に報告し、分析を待つ。何せ警護するのは一夏だけでないのだ。今後彼の動向次第でどんどん増えていくのだから用心に越したことはない。その結果は対外が白。もしくは灰色。元々様々な国から生徒が入学しているのだ。本国の意向が絡んでくるので完全な白が少ないのも理解できる。

「来ました！ 織斑君の専用IS！」

二人が言い合うピットに駆け込んできた真耶が嬉しそうに告げる。一夏のISは到着が遅れていたために今まで待機していたのだ。

そしてピット搬入口から現れたのは真っ白のISだった。

（あれが篠ノ之博士が絡んだというISか）

一瞬心に過る影。それを振り払い、複雑な思いでそのISを見つめる。データは桐生経由で事前に貰っている。しかし実物で見るとどこか異質な印象を感じる。それが何かは分からないが、自分と共にある黒翼も何かに反応した気がした。

（まあいい。せつかくの機会だし博士のISの力、見せてもらうかね）

打算的に考えつつ、三人にせかさされピットを出撃していく一夏を見送った。

3. 『二人目』

結果を言うなら一夏は敗北した。

しかし初期設定の機体で戦い、フォーキャスト・ソフト一次移行を果たしつつ、代表候補生のビットを破壊したのは大健闘だろう。静司も正直驚いたものだ。

そして続く第二試合。セシリア対静司が始まる。因みにセシリアが連戦で、第一試合を静司が見学できたのは機体性能と経験の差だ。

一夏とセシリアは高性能の専用機。しかし静司は訓練機である。無論、訓練機でも戦い方で専用機と互角に戦える。しかし、表向き素人である静司には荷が重いだらうという事でハンドレの様なものを与える事になったのだ。

「静司、頑張れよー！」

「あいよ」

領きビットから出撃する。選んだのは打鉄だ。第二世代の量産型であり、安定した性能のガード型。武装は近接ブレードとアサルトライフルを選択。更に保険でIS用手榴弾を幾つか持つていく。打鉄を選んだ時、千冬は試すように静司と問うた。

「ほう、なぜそちらを選んだ？ お前ならラファールを選ぶと思ったが」

もう一つの訓練機。ラファール・リヴァイヴは第二世代ながら第三世代に劣らない性能を持った機体だ。安定した性能、高い汎用性、豊富な後付武装が特徴であり、格闘・射撃・防御と全タイプ対応できる。どちらかという打鉄は近接向きなので、遠距離を得意とするセシリアに対して、何故選んだのか気になったのだ。

「さっきの試合でオルコットがビットは6機って言ってましたからね。その6機は全部一夏が壊してくれたんで、注意するのはあのレーザーライフル《スターライトmkⅢ》でしょう。あれの一撃は怖いので防御を優先しました」

「ふむ？ では攻撃はどうする？ それにオルコットの武器があればだけは限らんぞ」

「でしょうね。けどまあ逃げ足は速い方なんです。まあここは自分の

その才能と打鉄の防御に期待して、隙を見つけるのが得策かなと」

「ふ、面白い。では行ってこい」

「了解しました」

千冬は静司をそれなりに評価している。入学から一週間、授業態度は良いし、何気に運動神経も悪くない。本人に聞いたところ、実家である漁村で漁の手伝いをしているうちに体力がついたと聞いて納得した。無論、静司の作り話なのだが。

(先に川村の専用機を用意した方がよかったのかもしれない)

弟は大事だがISは兵器でもある。この件について彼女は鼻屑はしない。鼻屑をしたのは彼女の友人である篠ノ之束の方だった。興味のある人間にしか関わろうとしない彼女は二人目の事など眼中になく、一夏の為に白式を完成させたのだ。

そんな友人に頭を悩まされつつ、ピットを出ていく静司を千冬は見送ったのだった。

アリーナに出ると静司は打鉄の性能を再度チェックする。先ほど千冬にああは言ったが、実際は別の理由もあった。それは打鉄が静司にとって乗り慣れた機体だったからだ。

(懐かしいな……。最近黒翼ばかりだったから妙な感覚だ)

思わず笑みを浮かべる。そして対戦相手のセシリアに視線を向ける。

「さて、やるか」

「ええ……。もう油断はしませんわ」

どうやら先ほどの一夏の試合で考え方が変わったらしい。まあ素人があれだけ善戦したんだ。思うところもあるのだろう、と静司は思ったのだが。

「男……。だけど強い……。それに……」

「……。ん？」

どうもそれだけではない様だ。何かを思い出しては顔を赤くしている。ふとここに来る前に見た一夏の調査書を思い出す。

(フラグ建築士って……。こういう事?)

試合中に彼女の心境に何が起きたのか知らないがつまりはそういう事なのだろうか。だがまあチャンスなのだろう。試合開始のブザーは鳴っているのです。静司は容赦なく持っていたアサルトライフルの引き金を引いた。

「っ！ 不意打ちとは卑怯ですわね！」

「人間きの悪い事を言うな」

セシリアが回避し、静司にレーザーライフルを撃ちこむ。その一撃を、危なげに静司は回避した。

(さて、どうするべきか)

正直な話、静司には打鉄でも十分以上に戦える自信がある。近接主体と言っても遠距離武器を持ってない訳では無いし、そもそもセシリアと静司には明確な実力差がある。彼女が弱いと言う訳では無い。これは経験の差だ。しかし本気でやる訳にはいかない。そんな事をしたら目立つし、教師陣にも問い詰められるだろう。

(だとすると、適度に善戦しつつ負けるのがベスト)

セシリアや真面目にやっている人には悪いとは思いますが、任務が優先だ。胸の中の罪悪感を押しこめ、再び放たれたレーザーライフルを先ほどと同じく、わざと危なげに回避しつつ方針を決定する。

「どうしました？ 不意打ちでしか攻撃しないのですか？」

「まさか、ねっ」

再びアサルトライフルを撃ちつつ、距離を縮める為に接近しようとして機体を動かす。

「させませんわ！」

後退しつつ進路上にレーザーライフルが放たれる。咄嗟に回避するが、一部がかすりダメージと衝撃が走った。

——バリアー貫通。ダメージ20。シールドエネルギー残量、320。実体ダメージ、レベル低。

流星は防御に定評がある打鉄だ。先ほど一夏の試合では装甲が吹き飛ばされていたが、打鉄の装甲は一部が融解しただけだ。

「よく避けましたわね。ならばこれはどうです！」

セシリアが手を上げる。すると彼女の背後に2機の自立機動兵器

《ブルー・ティアーズ》が浮かぶ。

「あれ？ さつき全部壊されたはずじゃ？」

「予備機ぐらいありますわ」

まあそれはそうだろう。静司も一応スタンスとして驚いただけだ。

「さあ踊りなさい！」

《スターライトmkⅢ》を含めた三つの銃口が火を噴いた。

「やっぱり苦戦しているようですね、川村君」

ピットでモニターを見ていた真耶が呟く。箒も頷き、

「オルコットは専用機ですし、やはり素人で訓練機の川村には荷が重かったのでは？」

「うーん、けど川村君も頑張ってますよ。一生懸命避けながらも攻撃していますし」

画面の中ではセシリアの砲撃の雨を、必死に避けながらアサルトライフルを撃つ静司の姿が映っている。その様子は誰が見ても劣勢だ。しかしその様子を千冬は厳しい目で見ていた。

「どうしたんだ千冬姉？」

「織斑先生だ、馬鹿者。しかし川村の動きが気になってな」

「動き？」

一夏もモニターを見る。しかし別段変わった点は見られない。

「何が気になるんだ——気になるんですか、織斑先生」

持っていたファイルを持ち上げた千冬に慌てて一夏が訂正しつつ聞く。

「川村はもう少し動けると思っていたのでな。何せ運動神経はお前よりアイツの方が遥かに上だ」

う、と一夏が凹む。箒も一瞬むっとしたが、後が怖いので何も言わない。

(それに……)

これは勘だが、千冬には静司が手を抜いてる様な気がした。明確な理由は無い。ただそう感じたただけだ。

「気のせいか……?」

訝しむ千冬の視線の先、試合が動いた。

「一夏さんに続いてあなたまでここまで持つとは予想外でしたわ」

「俺はいつの間にか一夏を下の名前で呼んでるのが予想外だったな」

「っ! それよりもこれで終わりです!」

からかうと顔を赤くしたセシリアが慌てたように《スターライトmkⅢ》を構える。

現在打鉄のシールドエネルギーは25。直撃を喰らえばアウトだ。

(あまり目立つのは駄目だけど、何もできないで負けて馬鹿にされるのも悔しいしな)

この試合はクラスの皆が見ている。彼女たちからすれば、静司が負けるのは当然と思うだろうが、やはり男としてちよつとは見返したい。勿論任務に支障が無い範囲でだが。

「確かにこのままじゃこつちもジリ貧だ。俺もいくぞ」

一瞬の静寂、そして先に動いたのは静司だ。静司は誰もが予想しなかった行動に出た。

「どっせいっ」

どこか気の抜けた掛け声と共に、打鉄の武装であるブレードをセシリアに向かって、ブン投げた。

「っ!?! その程度!」

予想外の行動に一瞬驚いたセシリアだが、直ぐに気を取り直し《スターライトmkⅢ》で飛んできたブレードを撃ち落とす、が、

「ぎゃあああ!?!」

撃ち抜かれたブレードは予想外の大爆発を起こし、セシリアは吹き飛ばされた。これはセシリアの猛攻を避けている間、爆発の噴煙に紛れて静司がこつそりブレードに手榴弾をくくり付けていたためだ。

「っ、小細工を!」

「けど役には立ったよ」

「上!?!」

爆発に紛れて接近した静司を迎撃しようとしてピットを放ち、静司を見る。そこでセシリアは再び目を見開いた。

「喰らえー！」

そこには射撃武器であるアサルトライフルの銃身を掴み、振りかぶる静司の姿。そのまま完全に鈍器扱いにされたアサルトライフルの一撃がセシリアに当たると同時に、ピットから放たれたビームが静司を直撃した。

『試合終了。勝者——セシリア・オルコット』

どこか呆れた様な、何とも言えない空気のアリーナにブザーが鳴り響いた。

「馬鹿か貴様は」

「すみませんでした」

試合終了後、静司は千冬の説教を受けていた。原因は先ほどの戦い方にあった。

「どこの世界に近接武器を爆弾にして射撃武器で殴りかかる馬鹿がいる」

「……意外性の勝利？」

「負けているだろうが。まあ戦い方自体は全ては否定しない。しかし模擬戦で学園の資産であるISの武装を、破壊前提で戦われては予算がいくらあっても足りん」

「反省してます」

はあ、と千冬はため息を付く。

「まあいい。今日の試合は終わりだ。お前は帰って休め」

「え？　一夏との試合は？」

本来ならこの後時間をおいて一夏と静司の試合があったが、

「試合が長引きすぎた。次の使用者が待っている」

もともとアリーナを使える時間は限られている。今日は白式の準備が遅れた上に、一夏と静司の時間も予想以上に長引いた結果、時間切れとなった。

「なるほど。なら明日に？」

「いや、クラス戦は一週間後だからアリーナは優先的にその訓練に回される。今回使用できたのは、お前らが（男性操縦者）いたからだ。明日以降はアリーナ使用は不可能だな。代表はお前らで話し合え。以上だ」

「了解しました。それでは自分は帰ります」

厄介ごとが一つ減って気軽になった静司が部屋を出ていく。その静司の背中に千冬は問いかける。

「川村、一つ答えろ」

「？ なんですか？」

「先ほどの試合。本気だったか？」

それは千冬の疑念。確証の無い勘からきた質問だった。

「？ 本気ですよ。っていうか油断してたら一瞬で負けてましたし」

「ふむ、まあそうだな。変な事を聞いて済まなかった。行つていいぞ」

「お疲れ様でしたー」

最後に一礼すると静司は部屋を出て行った。一人残された千冬は一人腕を組み、何事かを考え続けていた。

試合が終わり一夏達と軽く話した後。寮に戻る道すがら、静司は先ほどの事を考える。

（少し怪しまれた……か？）

後から冷静に考えると少々派手にやり過ぎたかもしれない。どうやら自分が思っていた以上にストレスが溜まっていたらしい。何せ一夏以外は女、女、女。通常の任務とは別の気疲れが溜まっているのも事実だ。

「まあ今後は気を付けるか……で、何の用です？」

「あら、見つかったちゃった」

声は静司の背後から聞こえた。振り向けばどこか悪戯っぽい笑顔を浮かべる二年の女子生徒が扇子を口に当て立っていた。

「残念。驚かせようかと思ったのに」

「不自然なまでに人が少ないですし、人払いしてますよね。それに殺気をまき散らしておいてよく言いますね。そうでしょう？　IS学園生徒会長、更識楯無先輩？」

ふふ、と笑った女子生徒——更識楯無は扇子を開く。そこには『大正解』と書かれていた。

「私の事は知っているみたいね。川村静司君」

「まあ生徒会長ですし。それで何か用ですか？」

「生徒会長、ね……。ま、いいわ。それで私の用事だけ——貴方の事をもっと知りたい、つてどこかしら」

それはごく自然な動作だった。楯無は笑顔を浮かべなら一歩近づき——そのまま一気に懐に入り、掌打を放つ。だが。

「あら」

静司に当たる寸前で腕を掴まれ阻まれた。その事に楯無は一瞬驚くが、直ぐに笑みを浮かべる。

「面白いわね」

「理由を聞きたいんですが」

「これが終わったら教えてあげる！」

静司の手を振り解くと同時に、楯無は打ち上げるように足を振り上げる。静司は背後に跳ぶことでそれを回避。その一瞬の隙に態勢を整えた楯無の鞭の様な蹴りが静司を襲う。その一撃を腕で弾き、今度は静司は前に出た。

「なら——すぐに終わらせる！」

先ほどの楯無とほぼ同等の速度で接近、その勢いをそのままに肘鉄を放つ。楯無はそれを両腕でガードするが、衝撃で一瞬後退する。それを追撃するように静司の蹴りが放たれるが、楯無は上半身を逸らすようにしてそれを回避した。だが静司は動きを止めない。そのまま体を回転させ、逆の足で放たれた回し蹴りが楯無を捕らえ、壁に向かって蹴り飛ばした。

「かはっ！」

壁に叩きつけられ、肺から空気が漏れるような声を吐きつつも楯無は倒れない。着地と同時に床を蹴り、ロケットの様に静司に向かう。

手にはナイフの様に扇子を構え、その目は本気だ。

対する静司も全神経を集中させ楯無を見る。

繰り出されたのは上段からの切り払い。それを受け止めようとして、しかし寸前でそれを辞め紙一重で回避する。かすり、前髪の何本かが宙に舞う。まるで本当のナイフだ。そのまま二閃、三閃される扇子の攻撃を体を逸らし、横に跳び回避。最後に、扇子を突き出すその手を打ち払った。

扇子が宙を舞う。

高速の連撃を避けられた上に武器を飛ばされた楯無の目が一瞬見開かれる。その隙に宙に跳んだ扇子を静司が左手で掴み、右腕は楯無の首を掴む。体を一気に前に出し、すれ違うように楯無の横に出ると足払いをかけた。

「くっ……い！」

「終了だ」

止めとばかりに倒れた楯無の顔先に扇子を突き出した。

「続けるか？」

「いや、いいわ。おねーさんの完敗よ」

反撃は不可能と見た楯無が降参を宣言した。

「まさか負けるとは思わなかったわ。おねーさんショックよ」

生徒会室。あの後、話があるという事で連れてこられたそこで楯無が肩をすくめる。開かれた扇子には『吃驚咄然』。

「で、話ってなんですか？ こちらとしてはあまり長居したくないんですが」

「寂しい事いうのね。けど彼なら今は大丈夫よ。K・アドヴァンス社

……

いえ、『EXIST』の川村静司君？」

「なら安心ですね。『更識家』の楯無会長」

お互いにやり、と笑う。EXISTとは静司の所属する会社、つまりは今回の依頼を受けた組織の名だ。そしてK・アドヴァンス社とは

表向きの社名。通常はISの研究開発を行っている事になっている。因みにKは創業者の一族である草薙家から来ている。

「む、もう少し驚いてくれると思ったのだけど」

「驚いてますよ。裏の社名は一部の人間しか知らないですしね」

「そう。だけど分かったのは会社の名前位で実際はあまり分かってないのよ。その所、教えてくれないかしら？」

これは半分嘘で半分事実だ。本当は名前の他にも、EXISTが様々な国や地域に派遣されている事。その場所で戦闘が起きた事などを楯無は確認している。しかし、肝心の保有戦力や規模は不明のままだった。得た情報もおぼろげなものである。

「一応機密事項なので。知りたければご自分でどうぞ」

「冷たいわね。おねーさんは悲しいわ」

「こつちも仕事ですから。わざわざ始末書を書く理由を作りたくないだけですよ」

「というか始末書で済むのもどうかと思ううけどね」

楯無は苦笑する。元々対して期待していなかったのだろう。

「まあいいわ。けどこちらは答えてもらう。君の任務は織斑一夏の護衛、それで間違いない？」

「正確には織斑一夏及び彼に関わりがある、人質に成り得る人間の護衛ですね」

「……それってつまり学園生ほぼ全員が該当しない？」

「どうやら更識側も一夏の性格分析は行っているらしい。」

「ええ、そうです。もちろん優先順位はありますが、早い話、学園そのものを守れと言われた様なもんです」

「それはまたまあ」

諦めた様に肩をすくめる静司と流石に呆れた様子の楯無。彼女も学園を守る立場に居るが、学園の内外で家の力を利用している。しかし静司の場合は学園内に一人だ。外にも別チームは居るだろうが、それでも規模は小さいものだろう、と推測する。

「なので俺としては更識家と良い関係を築きたいと思ってます」

「それは私と付き合いたいって事？」

「更識家と、ですネ」

「あら、いけず」

「冗談でしょう？ それでどうですか？」

静司の質問に楯無はうーんと首を傾げる。

「私としても桐生さんが推薦した位だし、私に勝った事からも戦力として申し分無いわね。けどなんで最初か協力を要請しなかったの？」

「いきなり強引に捻じ込まれた人間に協力しろ、なんて言われてもムカつくだけでしょう？ 唯でさえ、今回の件は更識家はよく思っただい筈だし」

まあ、ね、と楯無は笑う。実際当初はかなりムカついたもんだ、と遠い目で頷く。

「だからこちらから声をかけるのを待っていた？」

「そうですよ。実際、さっきのは俺の力試しでしょう？ それなりに有用だと証明できたと思っただけで俺から切り出しましたけど」

「それなりで負けた私の立場はどーなるのかしら？」

半眼で睨まれるが静司は気づかない振りをした。

「ま、いいわ。協力はする……というか元々私も学園守るのもお仕事だし」

「助かります」

「お互い様ね」

ぱっ、と開かれた扇子には『相互扶助』と書かれていた。

「因みにこの事を知っているのは？」

「学園ではまだ更識家とその関係者だけね。何か問題が？」

「一応秘密裏に潜入する事が目的だったので」

すっ、と楯無の目が細まる。

「それは学園関係者の中に怪しい人物が居るとい事？」

「可能性の話です。先輩と話したのはあくまで協力関係の為ですか」

「その言い方は酷いと思うなく。おねーさんと個人的に仲良くすれば色々指導してもらえるかもよっ。」

艶のある視線で静司を挑発する。だが静司は首を振る。

「その暇あつたら仕事するんですね。生徒会長」

「くいと指で机の上を指す。そこには未処理の仕事が山積みになされていた。」

指摘され、う、と固まる楯無を無視して静司はドアに向かう。

「こちらも後でデータを送りますよ。それでは仕事頑張ってください。生徒会長」

ひらひらと手を振り静司は退出した。

静司が出ていった生徒会室。そこで楯無は静かに考える。それは無論、川村静司について。

身体能力は申し分ない。体力がある事は授業のデータから知っていたが、彼は戦い方を、そしておそらく殺し方を知っている。それもI S学園最強と言われた自分以上に。任務の内容は正直聞いてあきれたが、逆に言うならそれほどの任務を任される力と人望があつたという事。

「しかしI Sは未知数ね」

クラス代表決定戦を実は楯無もこっそり観戦していた。そこでの印象は、筋はあるけどまだまだといった所だった。しかし先ほどの立会いでの身体能力からすると彼はもつと動けたはずだ。いや、これは勘だが彼のI S技能はとてつもなく高い。

「悔しいけど、アテにさせてもらおうわよ。川村静司君」

誰も居ない生徒会室で楯無は呟くのだった。

「では、一年一組代表は織斑一夏君で決定です。織斑君、頑張ってくださいね！」

翌日のSHR。教壇に立つ真耶の言葉に拍手が起き、一夏は頭を抱えていた。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合負けたんですが。それに静司とも戦ってないのになぜ俺に？」

「それは――」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

立ち上がり妙にテンションの高い様子で宣言したのはセシリアだ。「確かに私は全勝しました。しかしそれは考えてみれば当然の事。なにせわたくしが相手だったのですから。それでまあわたくしも、大人げなく怒ったことを反省しまして。『一夏さん』にクラス代表を譲ることにしましたわ。何せIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表となれば戦いには事欠きませんもの」

一氣にまくし立てるセシリアに他の女子も賛同する。しかし一夏には解せない点があった。

「いや、それじゃ静司はどうなんだ？ アイツだって素人じゃないか」

「んーそこは意見も出たんだけど」

「やっぱ目立つ方がいいかなーって」

「専用機持つてるし、織斑君の方が見栄えが良いよね」

なんだそれは、と一夏が静司に助けを求めるが、

「なんだ……。助かったはずなのにこの敗北感は……」

「かわむーどんまい」

微妙に凹んでいる静司と笑いながら肩を叩く本音。その光景に思わず声をかけるのを躊躇ってしまった。

その間にも話はどんどん進み、一夏の代表が正式に決定したのだった。

「と、いう事で織斑一夏はクラス代表になりました」

『ふむ。今後更に彼の注目度が増すな。そしてお前の影は薄くなる』

「一夏は視線が集中して手が出しにくく、俺はその逆って事ですね」

『予定通りと言えば予定通りか。で、なんでそんなテンション低いんだ？』

「予定通りとはいえ、ちよつと精神にダメージが。女性って怖いですね。いやマジで」

『……色々言われた様だな。まあ、そのなんだ、がんばれ?』

放課後、人気のない空き教室で静司は課長と通信している。無論、いつ誰か来ても確認できるように注意は怠っていない。

「まあ実際、悪意は無いんですけどね。無邪気というか容赦がないというか。思ったことをズバズバと」

『そこでは女性が圧倒的多数だ。唯でさえこんな社会だし、男に遠慮がないんだろうよ』

「恐ろしい世界だ……」

『何事も経験だよ若者。中国からの代表候補生は月末に入ってくる。そしたら更に大変になるぞ』

「……全力を尽くします」

『期待してるぞ blade。では通信を終了する』

通信を終了すると静司は教室に戻った。

「静司? どこ行ってたんだ?」

「便所。教員用しか無いから遠くて面倒だ」

「確かに」

元々は女子高なので男子トイレは教員用しかないのだ。

「ところでお前は何やってんだ? 篠ノ之とオルコットからIS訓練受ける筈じゃ?」

「その筈だったんだけど……」

一夏が教室の端を指さす。そこでは件の二人が言い合っていた。

「だから一夏の訓練は私がすると言っている!」

「あら、一夏さんは私にも頼むとおっしゃってますわよ」

「く、……だがまずは私が先だ! あいつには接近戦のなんたるかを」

「IS戦では遠距離の方が重要では無くて? それに篠ノ之さんはそれほどIS適性高くないですわよね」

「なんだとっ!」

「なにを!」

二人、にらみ合うその光景を周りは笑いながら見ている。

「さつきからあの調子なんだ」

「面倒な……」

「だろ？ と一夏がため息を付く。しかし静司が面倒と言ったのは、単純に二人の事だけでなく、二人の感情に全く気付いていない一夏に對してもだったのだが。」

「ま、いいや。俺は先に帰るよ」

「おい、俺を見捨てるのか」

「一夏の問題だよ、あれは。理由をよく考えてみるんだな」

「何故だ……と首を傾げる一夏を置いて静司は去っていった。とは言っても遠くからこっそりと確認しつつ、学園周囲の警戒に行ったわけだが。」

それから暫くは特別大きな問題も無く、4月も下旬となった。相変わらず一夏の周りは騒がしいが、静司の出るような場面は無い。痴話喧嘩までいちいち気にしていられない。

因みに静司の周りはそれほど問題ない。大抵の話題は一夏に集中している為だ。

そして今も又、一夏は注目を浴びている。というのも、

「鈴……う？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告にきたわけ」

ふっ、と笑みを漏らす少女、凰鈴音が現れたからだだった。なんでも2組のクラス代表になったらしい。

「何格好つけてるんだ？ すげえ似合わないぞ」

「んな……!?!? なんてこと言うのよ、アンタは!」

何やら言い合う二人の後ろで、篠ノ之箒とセシリア・オルコットの顔が不機嫌そうに歪んでいた。そして何かを言おうとするが、その前に鬼が現れた。

「おい」

「なによ!?!?」

バシンッ!

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

鬼教官こと、織斑千冬が出席簿片手に告げる。

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すいません……。また後でくるからね！ 逃げないですよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はい！」

鈴はダッシュで戻っていくが、教室内は当然の如く今の出来事で沸いた。箒とセシリアも一夏に詰め寄る。

「……一夏。今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん!? あの子とはどういう関係で——」

バシンツッ！バシンツッ！バシンツッ！

「席に戻れ、馬鹿共」

千冬の出席簿によって全員が沈んだ。そんな教室の中、またやつかい事が増えたなあ、と半ば諦めの境地の静司だった。

「待ってたわよ、一夏！」

昼休み。一夏に誘われ、食堂に行くと朝の少女が仁王立ちしていた。そのまま一緒に食事を取る事になったが、箒とセシリアの顔は強張っている。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？ おばさん元気か？ いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばかりしないでよ。アンタこそなにIS使ってるのよ。ニュースで見た時ラーメン噴いたわよ」

まる一年ぶりに再会したので、お互い気になる事が多いらしい。だが、この場に居る残り二人の少女としては面白くない。

「一夏、そろそろどういう関係か説明すべきだろう」

「そうですね！ まさかこちらの方と……っ、付き合ってたっしやる

の!？」

箒とセシリアだ。彼女たちは鼻息荒く詰め寄っている。これは長くなりそうだと、静司は一人カツ丼を食べながら見物に徹することにした。

話を聞いていけば、内容は静司が事前に知っている通りだった。篠ノ之箒と入れ違いの様に一夏と知り合い、仲良くなった、と。性格も自信が高く、思っている事は口に出すタイプらしい。そのせいでセシリアの逆鱗に触れたようだ。どうやら、彼女もセシリアの事を知らなかったらしい。

「ところで、アンタが二人目の男性操縦者？」

わなわなと震えるセシリアを無視して、鈴は静司に目を付けた。静司も一応礼儀として、箸を置き挨拶する。

「ああ。川村静司だ。よろしく」

「ふうん、なんか地味ね」

「ははは、もう慣れたぞ。慣れたんだ俺は」

「はあ？ 変なやつ」

流石に一月近く経てば言われ慣れもする。渴いた笑いをあげる静司を怪訝そうに見るが、直ぐに興味を失ったのか、再び一夏の方へ向いた。

その後、ISの訓練の話になり、誰が訓練するかと揉め始めた四人を静司はのんびりと観察しているのだった。

『と、いう事で凰鈴音もめでたく対象にぞつこんか』

「気軽に言わないで下さい」

放課後、いつものように課長との通信を行う。

『別にふざけてないぞ。つまるところ、他の生徒よりも織斑一夏と親密という事は、それだけ価値も上がるんだからな。これは篠ノ之箒やセシリア・オルコットも同様だ』

「けどオルコットと凰は代表候補生の専用機持ちですよ。それに篠ノ之は博士の妹。手を出すと火傷じゃすまない気が」

『逆に言うなら、火傷してでも手に入れたい、と思うやつも居るって事だ。そもそも専用機そのものを欲しがらる機関だつてある。一粒で二度おいしいというやつだ』

元々IS自体貴重なものである。それに加え、候補生が持つのは各国の技術が詰まった試験機。開示されていないデータを求め、狙われる可能性も低くは無い。それが分かっているから候補生も厳しい訓練を受けるのだ。

「わかりました。鳳鈴音の周辺も注意します。けどクラスも違いますし、カバーしきれない可能性も考えといてください」

『安心しろ。その為のサポートチームだ。それに何だかんだで学園内ではそうそう事は起きないだろう。更識家も居ることだしな』

「そうだといいんですけどね」

後日、二人はこの会話を反省することになる。

『で、その鳳鈴音だが学園での生活はどうだ？』

「どうも織斑一夏と喧嘩したようです。原因はプライベート過ぎて不明ですが」

それは先ほどの事。ジュースを買いに廊下を出たところ、

『最っつ低！ 女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にもおけないヤツ！ 犬に噛まれて死ぬ！』

怒鳴り声と共に一夏の部屋から鈴が飛び出してきたのだ。彼女は憤怒の形相で周りを威嚇しながら去っていたのだ。その眼に涙が溜まっていたのを静司は気づいたが、何も言わなかった。

『ふむ……約束か。流石にそこまでは調べきれんな。まあ彼女も織斑一夏に好意を寄せているんだろう？ それ絡みだろうな』

「そうでしょうけど、あんまり人のプライベートを詮索はしたくないですわね」

『割り切れよB9。任務に必要なだと思えば調べ、いらないと思えば忘れる。それができないお前じゃないだろう』

「わかってますよ。今の所はそれほど大きな問題にはなってません。入学からもうすぐひと月ですが、織斑一夏の周りにも不穏な動きも無しです」

『了解。引き続き任務にあたれ』
「了解」

二人の喧嘩は長引いていた。

五月に入り、あれからしばらくたったが、鈴の機嫌は直っていない。原因は、過去に一夏と鈴が何かを約束して、それを一夏が忘れているせいらしいのでそれとなく一夏に訊いてみたりもした。

「一夏。結局何が原因なんだ？ お前が何か忘れてるって話だが」
「それがわかんないだよ。鈴のヤツ教えてもくれないし。俺が何したってんだ？」

「いやそりゃ俺が知る訳ないだろ」
「凰さんは約束とおっしゃってましたわね」

セシリアが会話に参加する。箸も続く。

「一夏、本当に覚えていないのか」

この二人の場合、約束の内容が気になるのだろう。

「本当だ。おかしいな……酢豚の約束は覚えていたのに怒り出すし……」

「酢豚？」

「ああ、鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を奢ってくれるって話なんだが」

うーむ、と悩む一夏。しかし静司はふと思った。

「毎日奢るって、本当にそういう話だったのか？」

「ん？ そうだと思っけど」

ここに原因がある気がする。しかし静司には分からない。それはセシリアと箸も同様だった。そこで隣に居た本音に振ってみる。

「布仏さんはわかる？」

「んく……？ わからないよく……」

何やら本音は机に突っ伏していた。今すぐにも寝てしまいそうだ。

「ずいぶん眠そうだね」

「……深夜……壁紙……収集……連日」

「またか。お姉さんに怒られるんじゃない？」

「だから今のうちにねるんだよ……てひひ」

もう半分寝てる様な顔で笑う。静司も仕方ないな、と苦笑する。そんな二人が気になったのかセシリアが声をかける。

「そういえば、川村さんと布仏さん。妙に仲が良いですわね」

「そうだな。よく二人で話している所をみる」

「ん？ そうか？」

実際静司と本音はよく話す。静司としては更識家のメイドである本音を通して、時たま会長と連絡を取っているからなのだが。会長の携帯の番号は知っているが、極力、直接は関わらないようにしている。それに他のガツガツした女子(目の前の二人が良い例だ)と違って、のんびりとした雰囲気が入っているというのもある。

「わくい、なかよし……zzz」

「まあ布仏さんがこんなだし、話しやすいからかな」

「む、それはわたくしたちが話しづらいという事ですか？」

いやだって、君たちずっと一夏の周りで騒いでるし、とは言えない。

「そういうわけじゃないよ。席も近いし、仲良くなったのも早かったからだと思う。ほら、最初はあんなんだっし」

セシリアが、う、と呻く。最初とは無論、クラス代表を決定する件の事である。因みにセシリアは静司にもちゃんと謝罪している。『失礼を言って申し訳ありませんでした。戦い方は意外でしたがガツツのある方ですね』とは彼女の言だ。

「あの時はわたくしも大人げなく……」

「ストップ。もう謝罪は受けてるし、今更何も言わないよ。俺も蒸し返して悪かった」

「そう言っただけで頂けると助かりますわ。川村さんは紳士ですね」

「ありがと」

「それで結局、鈴は何で怒ってるんだ……」

「まあ思い出すしかないだろ。クラス戦の相手は2組、つまり凰さんだろ？ 早めに謝らないとひどい目にあうぞ」

「勘弁してくれ……」

一夏は頭を抱えるが、結局結論はでなかった。

そしてクラス代表戦当日。

結局一夏は思い出せず、仲直りも出来なかったようだ。

現在、アリーナ中央では白式を纏った一夏。そして鈴の【甲龍^{シエンロン}】が対峙している。

鈴の甲龍はブルー・ティアーズ同様、非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が特徴的である。肩の横に浮いた棘付き装甲（スパイク・アーマー）が攻撃的な自己主張をしている。

「わあく痛そうだね〜」
「確かに。それに強そうだ」

静司はアリーナの観客席で観戦してる。因みに箒とセシリアはピットだ。

観客席は噂の男性操縦者、それも専用機持ちと、中国の代表候補生の戦いとあつて超満員。立見までおり、外にはリアルタイムで発信されている。

「ねえねえ、かわむーはどっちが勝つと思う?」

「まあ普通に考えれば凰さんだろうな」

一夏はISに乗って日が浅い。対して向こうは代表候補生。一夏には悪いが勝負は見えている。しかしセシリアにも健闘した一夏だ。実は静司もいい試合が見れそうだと期待している。

「布仏さんはどう思う?」

「ん〜……。やっぱり凰さんかなあ。白式の方がスペックは上だけど、りんりんの甲龍の武装はやかいかいそうだね〜」

どうやら当人たちよりも、ISの方に興味があるらしい。そういえば整備科志望だったな、と静司は納得する。

『それでは両者、試合を開始してください』

そして試合が始まった。

試合開始と同時に、一夏と鈴は動いた。鈍い音を響かせ、一夏の《雪片式型》と鈴の持つ青竜刀の様な武装《双天牙月》がぶつかり合う。「ふうん、初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど——」

不敵に笑い武器を振り回す鈴。一夏はなんとか刃を当てて捌くが、このままでは不利と感じたのだろう。距離を取ろうと身を屈める。

「甘いっ！」

ぱかっつと鈴の両肩のアーマーがスライドして開く。その中心の球体が光り、一夏は何かに殴り飛ばされた。

それは空間自体に圧力をかけて砲身を生成し、余剰で生じる衝撃を砲弾化して打ち出す『衝撃砲』。しかし一夏には当然そんな事は分かつた。見えない砲撃によって翻弄される。

試合は一方的なものになりつつあった。

「厳しいな」

「うん。角度、方向に制限が無い上に、りんりんの技能もとても高いから難しそう」

「……」

「? どうしたの?」

「いや、急に真面目に喋ったから驚いて」

「ええ〜ひどい!」

「ああ、なんかすまん」

普段が普段だが、ISに関しては真面目になるのだろう。いつもこの様子なら彼女の姉も苦労しないだろうに。

むーと唸る本音をあやしていると、不意に通信機が鳴った。携帯でなく、通信機が、だ。定期報告以外にこれが鳴るといふ事は、予定外の事が起きた時だけだ。

周りに聞こえぬ様、声を潜める。

「(ちらB9)」

『(ちらC1! 敵襲だ! くそっ、間に合わない!』

「何——」

言いかけたところで、突如、アリーナが轟音と共に揺れた。悲鳴が上がり、一気に場が混乱する。そしてアリーナ中央にそれが現れる。深い灰色をした、全身装甲のISが

4. blade

アリーナは喧噪と混乱に包まれていた。

突然の爆発と現れた謎のIS。ロックされ、開かない扉。誰もが予想出来なかった事態に混乱する中を静司は走る。

「敵襲、確認しました。経緯を教えてください！」

『お前のクラスメイトの試合が始まってから数分後だ、突然ヤツが現れた。こっちのリーダーには反応無しでだ。止める間もなく、学園に突撃しやがった！』

「機器は正常だったんですね？」

『当たり前だ！ この距離まで誰にも気づかれずにやってきやがったんだよクソツタレ！ 完全な隠密機動^{ステルス}。やってくれるねまったく！』
「つまり敵の技術力がこちらより上ということですか。……ああ本当によってくれるっ！」

静司のその眼は怒りで震えていた。前髪と眼鏡の変装が無ければ、周りの生徒たとはその顔に恐怖していただろう。

『B9。こちらは周囲を警戒する。ここまで完全に姿を隠す敵だ。ヤツ一機とは限らない』

「了解。見つけ次第連絡を！」

C1との通信を切る。同時に携帯電話が鳴った。

「川村です！」

『私よ。状況は把握してるわね？』

「はい。お互いしてやられましたね、会長」

電話の相手は更識^{生徒会長}楯無だ。

『現在、アリーナの遮断シールドはレベル4。更に扉が全てロックされて干渉できない状態よ』

「やつかいな……っ！ 解除は？」

『3年の精鋭、それに更識家も動いているけど苦戦してるわ。いくらなんでも強固過ぎる』

電話越しでも楯無が悔しそうにしているのがわかる。

「わかりました。ヤツはこちらが何とかします。扉は壊してしまえば

いい。会長は学生の誘導を。貴方が適任だ」

学園のカリスマでもあり、最強の名を持つ彼女がこの混乱を統率するのが一番良い。

『私が行きたいところだけど、仕方ないわ。悔しいけどここは貴方に任せる』

「わかりました。では！」

携帯を切る。その間にも出口とは逆方向、ピットへ続く廊下を走る。生徒たちは出入り口に殺到している為か、こちらには人数が少ない。

やがて、目的地であるピットへ続く扉の前で足を止める。

「かわむー！ どうするの？」

おそらくこちらの目的地を予測したのだろう。遅れて追ってきた本音が不安そうに尋ねる。そんな彼女を安心させるように頷くと、静司は笑う。

「安心しろ。誰も死なせないし、アイツにも好き勝手させない」

そう笑い、壁に向かって左腕を振り上げ——突き入れた。

「かわむー!?!」

グシャツ！ という音を響かせ、静司の左腕は扉のロック部ごと反対側へ突き抜ける。啞然とした本音が見つめる中、ゆっくり腕を引き抜く。ロック部が壊れた扉は押すと簡単に開いた。

「よし」

「よしじゃないよ!? 腕が!?!」

慌てた様子で本音が詰め寄るが、静司の腕を見て固まった。

制服が破れ、下のシャツも破れている。そしてその下。肌色の皮膚があるべき部分に異常な物が見えた。

「機械の……腕?」

「義手だよ。普段は人工皮膚ナノ・スキンで隠してた」

そう。静司の左腕は黒く、鈍く光る機械で出来ていた。

かつてとある研究所を壊滅させた武装〈クエイク・アンカー〉。その規格外の武装の反動はかなり大きい。生身の腕なら耐えられない程だ。発射の衝撃で無く、チャージの際に生じる力場にISは耐えれて

も、人間の腕では耐えられない。しかしそれを扱った静司の答えがこれだ。

「だ、大丈夫?」

「問題ないよ。アリーナは俺はなんとかするから布仏さんは皆と避難を」

安心させるように微笑み、そして呟く。

「――黒翼――」

刹那、義手から光が溢れる。そして一瞬で静司の姿が変わる。それは漆黒の鋼鉄の鎧を纏った姿。

「行ってくる」

そう告げると、一直線にアリーナへ向かった。

アリーナ中央。ステージでは正体不明のISと一夏達が相対していた。

『織斑君! 鳳さん! 今すぐアリーナから脱出してください! すぐに先生たちがISで制圧に行きます!』

「――いや、先生たちが来るまで俺達で食い止めます」

正体不明のISは遮断シールドを突破してきた。つまり、誰かが相手をしなければ観客に被害が及ぶ。一夏はそう判断し、『雪片式型』を構え、鈴に声をかける。

「いいな、鈴」

「誰に言ってるんのよ、当然でしょう!」

鈴もまた、『双天牙月』を構えた。

「来るぞ!」

「このっ!」

敵ISが体を傾けて突進。二人は左右に散り、回避する。

「一夏!」

「おう!」

二人は左右からそれぞれの武器を構え、敵ISに迫る。だが敵ISはその巨体に似合わない俊敏さで宙に跳ぶと、二人に両腕四本の銃口を向ける。

「くそっ！」

「あつぶないわね！」

即座に攻撃を辞め二人は方向転換。一瞬前まで自分が居た場所にビームが突き刺さるのを見て、冷や汗を流す。

「まだまだ！」

「喰らいなさい！」

鈴が衝撃砲を展開。砲撃を放つ。それを回避した所を一夏が接近。一撃必殺の間合いとなるが、ひらりと回避されてしまう。

「くっ……！」

「一夏っ、馬鹿！ちゃんと狙いなさい！」

「狙ってるよ!!」

敵ISは全身のスラスタアの尋常でない出力で一瞬で距離を離してしまふ。凄まじい性能だった。

「鈴！ もう一回だ！」

「当然っ！」

即席のコンビネーション。衝撃砲と《双天牙月》を駆使し、鈴が隙を作り、そこに《雪片式型》の一夏が切り込む。しかし敵ISはその全てを回避し、攻撃に移る。その長い両腕を振り回し、鈴に叩きつけた。

「っ！ きゃあああ!?!」

「鈴!!? ぐあっ?!」

攻撃は受け止めた物も、その重さに鈴が弾き飛ばされる。それに気を取られた一夏も逆の腕で殴り飛ばされた。

一夏は地面に叩きつけられながらも、何とか姿勢を制御して即座に宙に跳ぶ。

「鈴！ 無事か！」

「いたた、やってくれるわね本当に！」

鈴もまた、一夏の横に並ぶ。お互いに満身創痍だ。そんな二人を敵ISは追撃することも無く、無言で眺めている。

「……? どうして攻撃してこない？」

「知らないわよ。……けど確かに変ね。最初の時も私たちが話してる

ときはあんま攻撃してきてない。まるで興味があるみたい」

事実、敵ISは無言で二人を観察している。しかし、突然その動きが変わった。何かに気づき、空を見上げる。それと同時に、

ズンツ！

鈍い音と共に敵ISが光に飲み込まれた。

「なっ!？」

「今度は何なのよ!？」

驚き、二人も空を見上げ、声を失った。

長い鉤爪の様な両腕。

漆黒の中に紅いラインの浮かぶ装甲。

そして左右に広がる鋼鉄の翼。

その体の全てを覆う、全身装甲のISがそこに浮かんでいた。

「なんだアイツは……?？」

「全身装甲、奴の仲間じゃないの!？」

二人は警戒して、その黒いISを見る。だがそのIS——黒翼の縦者である静司は二人を気にしては居られない。

(R/Lブラストは命中。けど手応えが無い。黒翼をあまり人目に晒す訳にもいかない……)

今は最初の砲撃で巻き上がった粉塵でステージの様子は見えないだろう。そうなる様に放ったのだから。と、ISのハイパーセンサーが観客席から鈍い爆発音が響いた事を知らせる。すぐに通信が入る。『C1よりB9へ。そちらの会長がアリーナに穴を開けたらしい。シールドごととは流石ロシアの国家代表つてとこだな。生徒はそこから避難する様だ。まったく無茶するねえ』

どうやら会長はISで扉ごとぶち破ったらしい。だがこれで生徒は避難できるし、こちらは自由に動ける。

そう結論付けると、静司は両腕を粉塵の中央。敵ISへ向ける。右腕のアタッチメントにはビームライフルが、左腕にはアサルトライフルが光と共に装備される。

ファイア
発射。

高熱の光と、高速の銃弾が敵 I S に殺到する。しかしそれをスラスタを吹かせ、敵 I S は回避する。そして両腕の銃口を全て静司に向けた。

四本のビームが静司を襲う。だがその程度！

「すげえ……」

「なによ、アイツの動き……」

静司と黒翼はその全てを見切り、横に、上に、そしてひらりと宙で周り回避する。敵 I S のスラスタ任せの強引な回避とは違い、その姿はまるで生物のようだ。

全てのビームを回避した静司は両翼を展開。その翼が光を帯びる。但し、その出力は最初の倍以上だ。

(これでどうだっ！)

発射。6本の光の柱が、逃げる間もなく敵 I S を飲み込み、爆発した。爆風に煽られた一夏と鈴が地面を転がっているが、静司は見なかつたことにする。

(どうだ……?)

答えは煙の中から飛び出してきた腕だった。コマの様に周りながら飛び出してきたその腕の一撃を鉤爪で弾き、静司は舌打ちする。

敵 I S も無事という訳では無かつた。装甲はひしゃげ、あちらこちらで煙が上がっている。目の様なセンサー部分も不規則に点滅していた。だが、まだ動ける。

(やつかいだな、本当に！　だが一夏達も生徒にも、これ以上手出しさせない！)

予想以上の敵の防御力に歯噛み毒づく。ならば直接切り裂いてやる、と構えた時だった。

『B9！　上空に敵機2機確認。射撃体勢に入っている！』
「っ!？」

即座に構えを解き、両腕をクロスさせる。両翼で体を守る様に包み込む。

直後8本の光の束が静司に直撃した。

「くっ……っ、の野郎っ！ 舐めるな!!」

とてつもない熱量と衝撃。そして爆発。黒翼の翼の一部がひしやげ、吹き飛ぶ。しかし致命傷では無い。まだ動ける。

「助かった、C1。まともに受けてたらやばかったかも」

『お礼は女子生徒の生写真でいいぞ』

「……アンタ子持ちだったよな？」

『妻帯者だろうが子持ちだろうが迸る熱いパトスを裏切れないのが男だ』

「勝手に神話になってろロリコン」

プライベートチャンネルでの通信を閉じ、空を見上げる。ハイパーセンサーが遥か遠くに居る2機を捕らえた。おそらく隠密機動ステルスを解除したのだろう。同型の2機はこちらに銃口を向けている。

（どうする……？ 敵は予想以上に硬い。ここで一夏達を庇いながら上の2機を相手できるか……？）

最優先目標は一夏と鈴の安全。だが上空と地上。どちらの敵を放っておいても危険は変わらない。

（やはり地上のコイツを速攻で倒すしか——）

静司が行動指針を決めかけた時、地上の敵ISの前に、一夏と鈴が立ちふさがった。

「よくわかんないけどさ、お前が味方だって事は俺にだってわかるぜ」
「こっちは私たちに任せなさい」

（……っ！）

二人は恐れることなく敵ISと向かい合う。こちらは正体を隠しているのにも関わらず、信用して、上を任すと言っているのだ。

静司の任務は織斑一夏、及びその周囲の護衛。確かに彼らは守られる側の人間だ。だが彼らとて人形ではない。自分で考え、行動をする。そして一夏がいろいろ不平を漏らしながらも毎日特訓していることは知っているし、鈴もまた、代表候補性として並々ならぬ努力をしていることをデータで知っている。

（いけるか……？）

敵ISは既に満身創痍。これまでの戦いで、おおよそのスペックは

読めた。今なら一夏達でも太刀打ちできるかもしれない。そう、かもしれない、だ。あくまでこれは賭け。だが、

「俺は——俺は白式乗った時に決めたんだ。俺の家族を、そして大切な人たちを守るって！」

一夏のその言葉は静司も覚えている。セシリアと戦った日、一次移
行を遂げた白式に乗った一夏が放った言葉だ。守るという意思。そ
れは静司にも通じるものがある。そしてその言葉で静司も腹を決め
た。

正体を隠している為、言葉はかけない。小さく頷くと、上空の2機
へと向かっていった。

空へ上がる静司に対し、上空の2機は再び発砲する。だが静司はス
ピードを落とすことなく、体を回転させ、それを回避した。

「見えてるんだよっ！」

そのまま一度もスピードを落とすことなく敵に突っ込む。突進の
勢いを加えた鉤爪の一撃がシールドごと敵ISの腹を突き破った。

「くたばれっ！」

突き入れた腕とは逆の腕に装備したビームライフルを敵に押し当
て、発射。零距离で放たれたビームは敵ISを貫き、爆発した。

『?!?!』

もう一機が驚いた様に動きを止める。その様子を見て静司は確信
した。

「やはり無人機か。動きがおかしいとは思ったんだ」

ボイスチェンジャーを通した機械の声で敵に告げる。

この敵はどこか動きが機械じみていたのだ。それにスラストで
の緊急回避もどこかパターンの様な物が見えた。

「遠隔操作か独立稼働リモートコントロール スタンドアローン。いや、驚いた様子からするとお前は遠隔か
? それに完全なる隠密機動ステルス。お前が誰か見えてきた」

そのISは同型ながら微妙に違った形状だった。装甲は一回り多
く、色は他の機体より薄く、白に近い。その機体は静司の言葉に反応
するように、ビームを放つ。だがその全ては静司に回避される。

「俺も久々でちよつと甘かった。けどもう容赦しない。人様の庭で勝手しやがったんだ。——蹂躪してやる」

装甲の下、静司が笑う。どの獯猛な顔はIS学園に入学以来、誰も見たことが無い顔。地味で目立たない、特に特徴のない男性操縦者の顔では無い。

【EXIST】IS部隊。コードネームblade9としての戦士の顔。

「——行くぞ」

イグニッション・ブラスト
瞬時加速。爆発的な加速で敵ISに迫ると左腕を一閃。敵ISも腕で受け止めるが、甘い。そのまま腕を掴むと、空いている右腕で敵のもう片方の腕を掴み、そのまま蹴り上げた。

バツチイ！ と火花が舞い、敵の右腕が千切れた。シールドなんて関係なしの物理的な攻撃。そのまま掴んでいた左腕を振り回し、空に向かい投げる。姿勢制御もままならず、くるくると回転しながら飛んでいく敵に目掛けて両翼からR/Lブラストを連射。まるでピンボールの様に敵ISは当たっては吹き飛ばされ、当たってはまた吹き飛ばされる。

だが敵も諦めていなかった。吹き飛ばされながらの不安定な姿勢から再びビームを放つ。だがそんな攻撃は静司にはかすりもしない。軽く躲かれ静司の接近を許した。

機械のセンサーで出来た眼が、恐怖を感じている様に点滅する。
「終わりだ」

そのセンサー部分目掛けて静司は腕を突き刺した。ビクン、と敵ISが揺れ、そして機能を停止した。

そのまま数分間。静司は様子を見たが、動く様子は無い。それを確認すると、アリーナに目を向ける。どうやら一夏達も敵を倒した様だった。

『B9。ご苦労だった。それはG-3-7に持って行け。こちらで回収する』

「——了解」

貴重なサンプルだ。ここで捨てる訳にはいかない。

『B9? どうした、様子が変だぞ?』

「っ! ……いや、なんでもないですよ。ちよつと疲れただけです」

『ま、任務続きだったからな。これが終わったら有給消化でもして休めよ』

「有給なんて都市伝説でしょう?」

『……なあ、もしかしここってブラックキ——』

「あーあー聞きたくない聞きたくない。通信終わり」

通信を一方的に切る。そのままポイントへ向かおうとするが別の通信が入った。

『上空の黒いIS。聞こえるな』

織斑千冬の声だ。

『まずは協力に感謝する。だがお前には聞きたいことがある。こちらに従ってもらいたい』

聞きたいことは、もちろんこちらの正体。そして黒翼の事だろう。だが、知られるわけにはいかない。静司は通信を無視し、その場から離脱したのだった。

事件から数時間後。

IS学園地下50メートル。権限を持つ人間しか入れない、その隠された空間で織斑千冬と山田真耶は深刻な顔で、画面を見つめていた。

「あのISの解析結果が出ました」

「ああ。どうだった」

「はい。あれは——無人機です」

未だ、誰もが完成させていない遠隔操作と独立稼働システム。それをこのISは持っている。

「更には完全なる隠密機動か」

「こんな技術、信じられません」

「だが、ここにある。それが全てだ。山田先生」

「そうですね……。織斑君の最後の攻撃で、機能中枢が焼き切れてい

ました。おそらく修復は不可能かと」

「あつちはどうだ？」

あつちとは、静司が破壊した2機目の機体だ。静司が撃墜した後、学園敷地内に墜落したと物を回収したのだ。だが真耶は首を振る。

「あちらも駄目です。コアそのものが貫かれてますし、機体もバラバラですから。修復は不可能でしょう」

「そうか……無事な方のコアは？」

「……それが、登録されていないものでした」

「そうか」

やはりな、と続ける千冬に真耶が怪訝そうな顔をする。

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今はまだ——な」

「残念です。けど、この無人I Sも気になりますけど——」

「こいつだな」

画面に映るのは黒いI Sだ。突然現れ、敵と交戦を始めた翼を持つI S。その戦闘能力は計り知れないものがある。

「この機体もどこにもデータはありませんでした。すいません、分から無い事だらけで」

「山田先生のせいではないさ。誰にも分かっていないのだから」

この一件に関しては箝口令が敷かれる事になった。無人I Sと黒いI S。この二つの情報は危険すぎる。どこまで隠せるかは分からないが、やれるだけの事はやるべきだ。

「一体、何が起きている……？」

かつて、世界最強の座に居た女は静かにモニターを見つめ続けた。

「よう一夏、無事——お邪魔だったみたいだな。すまん」

「待て！ 待ってくれ静司！」

鹵獲した敵I Sを引き渡し、学園に戻った静司は一夏の元を訪れたのだが、目の前の光景に回れ右をする。そんな静司を一夏が必死に止めていた。

「一夏さん！ あなたはどうするんですか!？」

「一夏！ アンタはどうするのよ!？」

セシリアと鈴に詰め寄られている一夏。その姿はどちらの女性を選ぶかという男としては羨ましい展開でもあるのだが。

「まあ後悔だけはさせないようにな。勿論お前もだが」

「何を言ってるんだ!？」

「ああ、とため息を付き、三人に近寄り訊いてみる。

「何を揉めてたんだ?」

「今日の戦闘の分析ですわ！ やはりいつも一緒に訓練をしている私とするのが良いと、川村さんも思いますでしょう!？」

「何言ってるのよ！ 私が一夏と組んで戦ったんだから、私とやるのが筋でしょう!？」

しまった、藪蛇だ。

『どっちだと思う（思いますか）!？』

ああ、確かにこれはキツイ。どっちを立てても後が怖い。

「え、えーと、ここは三人で仲良く——」

ギロツ!!

「やっぱ二人きりで集中した方がいいかもね。うん」

「静司!？」

「すまん、一夏。俺も命は惜しい」

今にも人を殺しそうな二人の睨みに思わず後ずさる。だが二人は納得していない。いかん、これは話を逸らさなければ、と静司は必死に頭を回転させる。

「そ、そっぴや嵐と一夏は仲直りしたんだな。よかった」

「う、ま、まあね?」

何故か挙動不審になる鈴に静司は首を傾げる。

「結局なんだったんだ?」

「ん? ああ、静司には少し話したっけ。正確には『料理が上達したら、毎日私の酢豚を食べてくれる?』だったよ。静司の言うとおり、ちよつと違ったみたいだ」

「馬鹿っ、一夏!？」

「へ？」

慌てた鈴と気づかない一夏。そして、ゴゴゴゴゴ、と音が聞こえてきそうな位、壮絶な笑みをしている——セシリア。

「一夏さん。今の話、もう少し詳しく教えて下さいますか？」

「セ、セシリア？ どうした急に……？ この話はもう終わって——」
「終わらせませんわ！ 前に聞いた話とそれでは全然違うではないですか！」

また三人の言い合いが始まった。

（しかし一夏よ……それはマズイだろうに）

完全に告白じゃないか。それを気づかずに忘れられれば怒りもするだろう。

「せ、静司！ 助けてくれ！」

「いやあ、これ以上とばつちり受けたくないし？」

がんばれよーと最高の笑顔で手を振り、医務室の扉を開け、固まった。

「やあ、かわむー」

「やあ布仏……さん？」

扉の先には、笑顔だが、何故かセシリアに劣らない謎のオーラを放つ本音が居た。その雰囲気を押され、静司は一步後ずさる。

「かわむーはやつぱりヒドイね。心配して待つてたのに帰つてこないと思つたらこんなところに居るとはおどろきだよ」

何故だろう。雰囲気がいつもと違う。いや、いつも通りでもあるのだが何かが違う。のんびりとした雰囲気の中に、例えるなら怒れる小動物の様な、そんなオーラが混じっている。

「あーえーとそのだな」

「おねーちゃん達も話を聞きたいって。れんこ」

「いや、あの布仏さん？ ごめん、なんかよくわからないけどごめん！ だから首を引っ張らないで！ ってか意外と力強っ！」

ずるずる、と引きずられていく静司を、一夏達も啞然として見ていた。

「今の布仏さんですわよね？」

「俺もそう思うが何か……」

「あの子、あんな子だったの……？」

自分たちの事も忘れて静司の消えた扉を見ていたのだった。

そこは暗い部屋だった。機械だらけのその部屋の中心、大きなモニターの前で女性はじっと画面を見ている。

画面に映るのは白いISと、そして黒いISだ。

「んー、白式もいい感じだね。それにこれでいっくんは更に人気になるねっ。予定通り！」

上機嫌に笑うのは篠ノ之束。天災と呼ばれる世界最高峰の頭脳を持つ女。

「箒ちゃんの姿も見れたし、サイコーだね！ けど——」

上機嫌から一転、忌々しそうに黒いISを見る。

「コイツ」

邪魔をした正体不明のIS。コイツの登場は予想外だった。本来なら今回は白式の性能テストだった。そして突然現れた謎のISは一夏が倒し、彼は人気と名誉を得る。それだけの話だった。その為に、より多くの人間が見えるようにアーリーナをロックしたのだから。

だが、思い通りにならない。いや、最終的には一夏が倒したことには変わりはない。だが、過程が思い通りじゃない。気に入らない。それにもう一つ気になる点がある。それは黒いISの性能だ。

束自らが遠隔操縦したISを圧倒したその力。唯のISではない。

そして——

「気に入らないなあ」

ぶるり、と一瞬震えた体を押さえつける。あの黒いISはこちらが誰か気づいた様な事を言っていた。それに最後の一撃、終わりを宣告する言葉に束は画面越しに恐怖した。顔は見えないのに。こちらは姿も見せていないのに。画面越しに殺される様な、そんな感覚がしたのだ。

だが、そんなもの関係ない。自分は自分の大切な人たちが幸せになればいい。その為の障害は全て薙ぎ払う。

「ふ、ふふふふ。東さんを敵に回したこと、後悔させてあげよう……」
暗い部屋に静かな笑い声が響き続けた。

5. 騒動へ至る土台

「報告は以上です」

会議室に無機質な声が響く。それに応えたのは若い女の声だった。

「ふうん、これが篠ノ之束の作ったISねえ」

「正確には開発途中で凍結されていた物を博士が完成させたようですが」

「関係ないわよ。あの博士が関わった時点でこのISは普通じゃなくなる」

「でしょ？」と、女は手元のコンソールを叩く。会議室のスクリーンに白式と一夏の姿が浮かぶ。その画像は先日のクラス対抗戦の時の映像だ。画面の中で、一夏が瞬間加速で敵に接近、零落白夜を発動し、敵ISとアリーナのシールドを切り裂く姿が映し出されていた。そして怯んだ敵ISを、敗れたシールドの向こうからセシリアが撃ち抜いている。

「バリア無効化攻撃、かつての姉と同じね。ほんと、イカレた能力だ」と

「その分エネルギー消費は激しそうですが」

「まあ、ね。けどあの博士よ？ 何かしら対策があってもおかしくないわ」

お手上げ、と女は肩をすくめる。

「しかし今年のIS学園は凄いですね」

「凄いとどころじやないわよ」

女がコンソールを再び叩く。すると画面に映し出されるのは二人の男子生徒と複数の女子生徒の情報だ。

「一学年に専用機持ちが一気に3人。代表候補生も3人。今までは専用機持ちは2年に2人で3年に1人だったんでしょ？ これだけあれば余裕で戦争できるわよ？ 実際幾つかのお馬鹿さん達が動き出してるようだし」

「ドイツとフランスにも動きがあります。やはり男性操縦者の影響でしよう」

「男性操縦者ねえ」

画面に拡大されるのは二人の男性操縦者。織斑一夏と川村静司。

「しっかし、この二人も対照的ねえ」

「織斑一夏は注目度が高いですが、その分川村静司はぱっとしませんね」

「ま、織斑一夏の周りが異常なのよ。それよりも、」

再び画面が変わる。映ったのは学園を襲撃したISとそれと戦う黒いISだ。箝口令が敷かれ、学園で厳重に保管されている箝の映像がそこにあつた。

「こっちの方が興味そえられるわね。こっちの情報は？」

「襲撃したISはどうやら無人機の様です。機体は学園の地下に保管されています」

数人しか知らない箝の機密情報が当然の様に話される。

「しかし黒いISについては不明です。戦闘終了後、高速でその場を離脱。追跡は不可能でした」

「ま、仕方がないわね。そつちはまた会う機会がありそうだからその時にしましょう」

「会う……機会ですか？」

「そ。それよりこの無人機。リモート・コントロール スタンド・アローン遠隔操作か独立機動か。そのどちらかでもとんでもない話ねえ。やっぱ博士かしら」

「可能性は非常に高いですが、目的が見えません」

「んー、自分の作品を試したかった、とか？ ま、いいわ。それは調べてみればわかるかもしれないし」

「では……？」

「ええ、あの無人機。手に入れるわ」

気軽に女は宣言した。そして部下もそれを当然の事と受け入れている。

「しかし映像を見る限りかなり破壊されているようですが」

「問題ないわ。確かに博士は世界最高の天才。だけど、天才は一人じゃない」

にやり、と女が笑う。その眼には好奇心と対抗心。そして狂気が

宿っている。

「あの無人機。私がモノにしてあげる」

6月初旬。

午前最後の授業はマラソンだった。グラウンドでは生徒たちが息を切らしている。

ISの運用は知識・技術もさることながら、体力も必要だ。故に定期的なこういった体力作りに特化した授業もある。

「ちよつと、熱く、なつて、きたな」

「そうだな」

一夏と静司は二人並んで走っていた。だが一夏は大分息切れをし始めており、逆に静司は平然としている。

「授業も、大分、慣れて、きたけど、やっぱり、きついな」

「そうか？」

これがゆつくり走っているのなら千冬の怒鳴り声が聞こえてきたことだろう。だが二人はかなりのスピードで並走している。既に何人かの女子を周回で追い越していた。

IS学園生は決して運動音痴ではない。だがここの異様に長いグラウンドを何十周もさせられればバテる。そんなフラフラの彼女たちを二人は追い越していく。だが一夏の顔は限界に近い。彼を動かしているのは、特に辛そうに見えない静司に対するちよつとした対抗心だった。

「……なんで、お前は、そんなに、平然と、してるんだっ」

「慣れだよ。一夏はしゃべりすぎでもあるが」

（いや、絶対おかしいだろ！）

不思議な奴だ、と一夏は思う。

静司は同じ男性操縦者でも不思議なくらいに目立たない。ISの知識は平均より少し上くらい（それでも自分よりは高いのだが）。実技も目立った成績は無い。体力は異様にあるが、本人は漁村で鍛えられたからだと言っていた。

だが一夏は感じていた。こいつは本当はもつとすごいんじゃないか？ と。

理由は無い。言うならば男同士だから感じる勘というものだ。

人当り良く、クラスの女子たちとも普通に話す。入学当初は一夏に人が集中していたが、2か月経ち、それぞれの人と成りを分かってくると、『普通の』クラスメイトとしてうまく溶け込んでいた。逆に一夏は専用機を持ち、千冬の弟でもあり、いつも話題の中心に居たせいか、未だにアイドルの様な扱いだった。一度それを気にして静司に話してみると、

「お前今の状況で不満を漏らすのは世の中の男に喧嘩売ってる様なものぞぞ」

というありがたいお言葉を頂いた。まあその後「一過性のものぞぞ。もう少ししたら皆も落ち着くさ」とも言ってくれたが。

突き放すようで、フオローはしてくれる。どこかのんびりとしているが、時たま何かを深く考えているのか、話しづらい雰囲気の時もある。そしてここ最近はそれが顕著であり、一夏はそれを少し気にしていた。

「なあ、静司」

「どうした？」

「なんか、悩み事でも、あるのか？」

「……いや、特に無いよ」

本当だろうか、と一夏は思う。だが、本人が言いたがらない事を無理に聞き出すのも気が引けた。だから一夏も、

「そうか、まあ、何か、あったら、いえ、よ」

としか言えなかった。そんな一夏に静司は笑う。

「その前にお前がどうにもなりそうにないな。もう限界か？」

「く、まだまだだっ！」

「おう、頑張れ」

結局、授業終了後、一夏は燃え尽きていた。

「アンタなにやってんのよ」

「ああ、鈴か。俺はもう駄目だ……」

昼休み。食堂には一夏、箒、セシリア、鈴、そして静司が揃っていた。

箒は一夏を一瞥し、はあ、とため息を漏らした。

「だらしないぞ一夏。男児たる者あの程度の事で根を上げるとは」

「いや無理。箒だって見ただろ？ 静司の体力がおかしい」

「確かに川村さんはいつも疲れた様に見えませんかね」

セシリアも感心したように頷く。

「何、川村ってそんなにすごいの？」

「ええ、マラソンでは毎回トップですわ」

因みに次点は一夏か箒である。

「へえ。アンタ意外にすごいよね……って話聞いてる？」

「……ん？ ああ、ごめん。聞いてるよ。ここの学食は美味しいよな」

「何の話だと思ってたのよアンタは……」

呆れた様に鈴が呻く。静司はまたしても何かを考え込んでいたようだ。その様子に気づいたセシリアも怪訝そうに尋ねる。

「川村さん、大丈夫ですか？ 気分がよろしくないのなら保健室に行った方が」

「いや、大丈夫大丈夫。問題ないよ」

「だが最近、何かをずっと考えているようだが？」

箒も話に加わる。

「もしかして、こないだの事件の事か？」

事件とはクラス対抗戦で起きた謎のIS襲撃事件の事だ。謎のISの襲撃と、それを撃退した黒いIS。一夏達も一機倒したが、最大の功労者は間違いなく黒いISだった。この事件に関しては嚴重な箒口令が敷かれ、直接戦った一夏等は誓約書も書かされている。

「まあ気になるけど違うよ。それにあの話はご法度だろ」

しまった、と一夏は周りをキョロキョロ見渡す。おそらく千冬が近くに居ないか確認しているのだろう。

「何やってんのよアンタは。……それで事件の事じゃなければ何なの

？」

「んー、そう言われてもな。ちよつと気が抜けてぼーつとしてただけだよ」

本人に何でもない、と言われてしまうと、周りも追及し難くなる。「ま、何かあったら言いなさいよ」と鈴も話を打ち切り話題は別のものになる。

「そういえ静司、こないだのほほんさんに連れられた後どうなったんだ？」

「なに？ その変な名前」

不思議そうな鈴に一夏が笑う。

「布仏さん。なんか雰囲気かのほほんとしてるし」

「あんたネーミングセンスないわね」

「酷いな」

「それであの後どうなったんですの？」

興味深げにセシリアが尋ねる。箒も知らない話で気になったのか静司に視線を向ける。

カタ、

「「「？」」」」

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ

突然震えだした静司の姿に4人が目を見張る。

「え、えつと、何が……あったんだ？」

代表して一夏が尋ねる。

「ド——ら——の——い——ズ——ーよ」

「へ？」

「ドキッ♪ 生徒会だらけの尋問大会——グサリもあるよ（はーと）」

「「「……」」」」

カタ

「もういい静司！ 何も聞かないから忘れるんだ！」

「そ、そうだ！ よくわからないが今のお前が尋常で無い事はわかる！」

「川村！ アンタ戻ってきなさい!？」

「川村さん、意識をしつかり!？」

慌てた一夏達が静司を宥めるのだった。

騒がしい昼食。そして午後の授業も終わった放課後。

「行くわよ一夏!？」

「こい、鈴!？」

空中で一夏と鈴が激突する。火花が散り、一夏は弾き飛ばされた。

「一夏！ 刀身がブレている！ そんなものでは何も斬れんぞ!？」

「攻撃が雑です！ もっとタイミングを図るんですわ!？」

地上では箒とセシリアが大声を張り上げる。そんな光景を静司は観客席から眺めていた。

「異常無し、と。」

先日の襲撃事件以降、何か動きはあるかと思われたが今のところは平和だった。だがそれが静司には不気味でたまらない。

男性操縦者。例年以上の専用機持ち。無人機の襲撃。そして静司の黒翼。

今のIS学園は話題性に事欠かない。いつ狙われてもおかしくない。

「それに加えてドイツとフランスからも専用機持ちだった?？」
客寄せ。男性操縦者。パンダもここに極めりって感じだな」

データは貰っている。ドイツからはIS部隊の隊長が来るらしい。名はラウラ・ボーデヴィツヒ。わざわざ一国のIS部隊の隊長が学園生になるといふのだ。とんでもない話だ。そしてなにやら織斑千冬とも関わりがあるらしい。

だが、静司にとって大きな問題はもう片方だった。

フランスからの転入生。シャルル・デュノア。三人目の男性操縦者。

実は彼の情報は少ない。何故ならフランス側が情報を隠しているからだ。正確にはデュノア社が、だ。

(今まで存在を隠されていたデュノア社の秘蔵っ子。理由は男性操縦

者故に世間の混乱を恐れての事、か。どこかで聞いた話だな)

言うまでも無く静司自身の事だ。

(しかし情報が少なすぎるな……)

隠されていたとだけあって、過去のデータが中々見つからない。これにはEXISTも手を焼いている。流石は大企業といった所か。静司にとって彼は排除すべき『敵』なのか、それとも守るべき『クラスメイト』となるのか。それが判断つかない。

「結局、実際あってからの出たとこ勝負か」

今も調査は続いている。その結果を待ちつつ、本人からも情報を聞き出すとしようと決めた。

だがその夜、課長からの通信で静司は自分の見通しが甘かった事を知る。

『B9。結論から言おう。彼……いや、彼女は——女だ』

「……………はあ!？」

その日のSHRは二人の転校生紹介から始まった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますがみなさんよろしくお願いします」

教壇で転校生の一人が微笑む。

その状況にクラス全員が啞然としていた。

「お、男……?」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方達が居ると聞いて本国より転入を——」

礼儀正しく、優雅に微笑む金髪の彼はまさに貴公子。

「きや……」

「はい?」

「きやあああああああ——っ!」

クラスに歓喜の叫びが響き渡る。

「男子! 三人目の男子!」

「しかもうちのクラス！」

「カツコイイ！ 美形！ 優しそうだけど儂そう。けどそこが守ってあげたい！」

クラス中が歓喜に揺れる中、静司は「ああ、課長の話は夢でも幻聴でも無かったんだ」と頭を抱えていた。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに千冬が命令するが、女子達が騒ぐのも当然と言えるだろう。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わっていませんから〜！」

真耶が慌てて隣を見る。そこにはもう一人の転校生が居た。

輝くような銀髪と、右目を覆う眼帯。絶対零度の視線の小柄な少女は何も語らず、下らなそうにクラスを睥睨している。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

即座に姿勢を正し、敬礼をするラウラに千冬は鬱陶しそうな顔をする。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

（ありや分かってないな）

びっつ、とかかたとを合わせ背筋を伸ばすその姿はどう見ても軍人だった。

（織斑千冬がドイツで軍隊教官していた時の教え子か。しかし随分と敬愛しているようだ）

ラウラの瞳はクラスを見るときと千冬を見るときで百八十度違う。余程尊敬しているのだろう。

「ラウラ・ボーデヴィッツヒだ」

「……」

「あ、あの……以上ですか？」

「以上だ」

同じ教師であるのに真耶に対する態度は生徒たちと同じ。ラウラ

の冷たさと、微妙なクラスの空気に真耶は涙目だ。

「っ！ 貴様が——！」

ふと、何かに気づいたラウラが一直線に一夏の席に向かい、手を振り上げた。

「え？ ってうお!？」

ヒュン、と容赦のない平手打ち。しかし寸前で後ろの席の静司が、一夏の制服の襟元を引っ張った事で平手打ちは宙を切る。

「……貴様、邪魔をするな」

「転校生の挨拶にしては物騒だったので」

「黙れ……」

今にも静司を撃ち殺しでもしそうなラウラと、肩をすくめる静司。

一気に教室の温度が下がった気がした。誰もが啞然と様子を見守っている。

そんな中、急に首を引っ張られ混乱していた一夏が、状況を飲み込み眉尻を上げた。

「いきなり何しやがる！」

「ふん……」

そんな一夏を無視するとラウラは教壇へ戻っていく。

後に残されたのは慥然としている一夏。展開に追いつけない生徒たち。おろおろしている真耶。そして面倒事が増えてため息を付く千冬だった。

「織斑、川村」

SHR後。今日の授業はISの模擬戦闘訓練。その準備の為に更衣室へ行く前に千冬が二人を引き留める。

「デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

わかりました、と二人は返事をする。予想出来ていたことだが、静司にとっては微妙な心境だった。

「それと川村」

「はい？」

「デュノアはお前と同室となる。後で案内するように」

「……………え？」

疑問の声を上げたのは静司と一夏だ。何故なら先日のクラス対抗戦後、一夏は静司の部屋に引越しをしていたのだ。表向きは準備ができたから、との話だったが、そんなもの最初からできている。実際は、静司を一人にして監視しても、何もボロも出さないし、お互い協力関係となったので、静司の監視が不要になったから、と楯無は言っていた。

「織斑は引越した」

「またかよ……」

がくつ、と一夏が項垂れる。無理もないだろう。そんな一夏に千冬が追い打ちをかける。

「川村の方が気配りに長けているからな」

「くつ、千冬姉こそ部屋のあの汚さで気配りなんて——」

バシンツッ!

「何か言ったか？」

「なんでもありません、先生」

出席簿で叩かれた一夏が頭を抱えていた。

「とにかくそういう事だ。川村、頼んだぞ」

用事を終えると千冬はすたすたと去っていく。

「よろしくね、川村君」

「あ、ああ」

屈託のない、純粋な笑みに、静司は顔を引き曇らせながら先日の通信を思い出していた。

これは先日。静司がシャルルが女だと知らされた時の事。

「女ってどういうことですか!?!」

『そのままの意味だ。いやーデュノア社も思い切ったことをする』

あっはっは、と課長は笑うが静司はそれどころじゃない。

「笑ってないで、どうしてこんなややこしい話になってるのか教えて下やろ」

『怒るな怒るな。まあ、結論から言うとうと広告塔だろう』

デユノア社は世界第三位のシェアを持つ、ラファール・リヴァイヴの開発元の大企業。しかし近年はIS開発の遅れから経営危機に陥っているという。そこで男性操縦者として世に出ることでアピールしようという事らしい。

「んなアホな……。フランス政府もグルなんですか？」

『知らんだろう。知っていたら流石にこんな真似許すまいよ。まあ一部が買収されている可能性は否定できんが』

「けど実の娘を何でそんな事に」

『そこなんだがな、どうやらシャルルもといシャルロット・デユノアは愛人の子らしい。だが、2年前にその愛人も死亡し、父親に引き取られ、IS適性の高さからIS開発のテストパイロットになったとき。そこに彼女の意思があつたのかは不明だがな』
「まるで道具ですね」

嫌な言葉だ、と静司は思う。

『B9。私情を挟むなどは言わない。だが、任務を忘れるな』

「わかっています。それで宣伝の為に男装して、学園に来たと」

『そういう事だ。だがあの社長の事だ。お前たちのデータや織斑一夏の専用機のデータの奪取でも命令しているだろうな』

「知ってるんですか？ デユノアの社長を」

『K-アドヴァンス表の方で少しな。プライドの高いおっさんだったよ』

「課長も十分おっさんですよ」

『ほつとけ。それでシャルロット嬢だが、お前に任す』

「はっ。」

何を言ってるんだこのおっさんは？

『こちらの仕事はあくまで護衛。企業の販売戦略にまで口出しせんよ』

「けど織斑一夏を狙っているんでしょ？」

『狙っているのは男性操縦者と白式のデータだ。酷い言い方だが、こちらとしてはそんなものどうでもいいんだよ。男性操縦者のデータは織斑一夏発見後に、とことん調べられたが結局、詳しい事はわから

ず。お前のデータも偽造だ。つまり、たいしたデータは無い。白式も篠ノ之博士が関わっているとはいえ、スペックは学園が調査している。結果はコアを除けば、ただの最新鋭機というだけだ」

確かに白式は異常なまでにハイスペックだ。それは第3世代の機体に関わらず、篠ノ之束によって、第4世代技術の武装を実装しているからだ。だが技術は進歩する。現在も研究・開発が進められており、いずれは第4世代が世の主流となるだろう。

EXIST、そして依頼者の桐生としても別にそれは構わないらしい。桐生曰く、「デュノア社が第4世代開発に成功すればIS開発もまた一歩進むし、失敗してもいずればどこかが開発するから構わな」との事。無論、表立ってはいえない事だが。

『もちろん、シャルロット嬢が対象に危害を加える様なら話は別だが、そうでなければ放っておいても構わないという事だ』

「つまり、シャルロット・デュノアの動向次第で事ですね」

『そういう事だ。この件に関してはお前の判断に任せる。危険と判断したら排除しろ。後はお前次第だ』

「なんと投げやりな……。まあ仕事はしますよ」

『幸運を祈る』

そんな話をしたのがつい先日。そして実際にあった本人はそんな裏を見せない笑顔で一夏と話している。

「これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「うん、よろしく一夏。僕の事もシャルルでいいよ。あと……」

ちら、とこちらを見るシャルロットの意図に気づき静司も挨拶する。

「改めまして、川村静司だ。俺も静司で良いよ」

「うん。静司もシャルルでいいよ」

笑顔でこれからよろしくね、と言うシャルロットに静司は複雑な笑顔で答えたのだった。

「よし、じゃあすぐに着替えなとな。初日から遅刻はマズイ」

更衣室につくなり、一夏は制服のボタンをはずし、一気にシャツまで脱いでいった。

「わあっ!？」

驚いたシャルロットが声を上げる。そんなシャルロットを一夏は不思議そうに見ていた。

「どうしたんだ？ シャルルも早く着替えないと遅れるぜ？」

「う、うん。そうだね。着替えるよ。でも、その……あっち向いて、ね？」

「？ まあ着替えをジロジロみる趣味は無いけど、どうし——」

「ほら、一夏もシャルルも他人を気にしないで早く着替えるぞ。俺は遅刻して頭をどつかれたくない」

仕方なく助け船を出す。一夏は「それは俺も嫌だ！」と慌てて着替えを再開する。静司もあくまで無関心、とシャルロットに背を向けて着替え始めた。

一夏と静司が着替え終わり、振り向くとシャルロットも着替えは終えていた。胸はさらしか何かを撒いているのか、女性特有の膨らみは目立たなくしているらしい。だが彼女は余程緊張したのか、顔を真っ赤に染めていた。

(本当にこんな子にスパイなんてできるのか……?)

非常に疑問に思う静司であった。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する！」

『はいっ!』

今日は1組と2組の合同訓練なので、人数はいつもの倍。声もどこか気合いが入っている。まずは実演だ、と指名されたのは鈴とセシリア。そして相手は何と副担任、山田真耶だった。

彼女は何故か空の彼方から現れ、地面に激突するという、教師として不安になる登場の仕方であったが、

「ふえ、あれが山田先生？」

「すごい……。専用機の二人を圧倒してる」

「巨乳か!? あの巨乳に秘密が詰まっているのか!？」

セシリアと鈴。専用機2機相手に、訓練機であるラファール・リヴアイヴで圧倒する姿に生徒たちが感嘆の声を上げる。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。あれくらい造作もない」

千冬の言葉に、生徒たちも納得せざるを得ない。

「うお、凄いな今の回避。なんであんな動けるんだ?」

「PIC制御がすごい上手いんだよ。IS学園はやっぱりすごいなあ」

「確かにいつもの雰囲気とは違うな。あ、墜ちた」

一夏とシャルロットと静司が見上げる先、真耶の射撃で誘導されたセシリアと鈴がぶつかり、そこにグレネードが投擲され、二人は撃墜された。

墜落した二人は何やら言い合っているがそれを無視して千冬が告げる。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力が理解できただろう。以後は敬意をもって接するように! では実技に入る。専用機持ちは織斑、オルコット、嵐、デュノア、ボーデヴィツヒだな。8人グループになって実習を行う。グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな? では分かれろ」

言い終わるや否や、一夏とシャルロットの元に生徒が殺到した。

「織斑君、一緒に頑張ろう!」

「わかんないところ教えて〜」

「デュノア君の操縦技術を見たいな〜」

因みに静司は専用機を持ってないのでリーダーではない。だから女子は集まらない。そう、専用機を持ってないから集まらないのだ。そうに決まっている。

「それに言っただろ? 俺はもう慣れたって。…慣れたんだよ? 本当に」

「誰に言ってるんだいかわむ〜」

近くに来た本音が笑いながらツツコミをいれたが静司は気づかな

い振りをした。

一方、千冬は自分の浅慮に嫌気がさしたのか、面倒くさそうに低い声で告げる。

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつグループに入れ！順番はさつき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百週させるからな！」

鶴の一声といった所か。女子生徒たちは即座にそれぞれのグループに分かれた。

静司と本音もそれに倣って移動する。そして移動先のグループは——ラウラのグループだった。

(嫌な予感しかない……)

実習が始まり、その予感的中する。

ラウラは下らなそうに女子生徒を一瞥した後、何も指示を出さずに腕を組んでいた。

「え、えーとボーデヴィツヒさん？ 実習始まって、るんだけ……ど？」

「……」

同じグループの女子が聞くが、ラウラは鼻をふん、と鳴らすだけで返事をしない。話しかけた女子は涙目だ。

「ご機嫌ななめだね？」

「おおかた下らないとも思っているんだろうな」

同じグループであった本音とため息を付く。いい加減女子生徒が可哀想なので、静司もラウラに話しかけた。

「ボーデヴィツヒさん、リーダーなんだから指示してくれないと皆が困るよ」

無視。

「おいボーデヴィツヒさん」

「……」

再び無視。我慢だ、我慢、と静司は堪える。

「ボーデヴィツヒさん」

「……」

イラツ、と来た。

「ボケビツピさん」

うわあ、と周りで見ていた女子が青ざめる。ラウラの肩がぴくり、と動いた。

「……貴様、死にたいのなら今すぐ殺してやる」

「なかなか反応しないから名前間違えたかと思つてね。で、授業始まつてるよ」

「知らん。貴様らで勝手にやれ」

「いや、リーダーだしそれは駄目だろう」

「ふん、貴様らみたいにISを玩具と勘違いしている下らない連中の相手なんかしてられるか」

馬鹿にするようにラウラが冷笑する。いい加減、イライラしてきたので静司も手段を変えることにした。

ラウラから離れ、グループのメンバーの元へ戻る。

「どうしよう、川村君」

「このままじゃ何もできないし勝手にやっちゃう?」

「けどやっぱり慣れてる人が居た方が……」

まだこの時期では、専用機を持たない一年生は授業で数回乗っただけだ。不安げに話す彼女たちに静司は笑う。

「いや、ちよつと待つて。いい加減俺もちよつとキレた」

くくく、と昏い笑みを浮かべる。いつもの雰囲気と違うその様子に、女子達が一步引いた。そんな彼女たちを置いて、静司は手を上げる。

「織斑先生!」

ぴくり、とラウラが反応するが静司は無視する。今まで他のグループを見ていたらしい千冬がこちらにやって来た。

「どうした——何故お前らは実習を始めていない?」

「いえ、ちよつと意見が出まして」

「意見だと?」

「はい。ボーデヴィツヒさんが、下らないのでやってられないそうです」

「貴様あ！」

聞こえていたらしいラウラが怒り、静司に詰め寄ろうとする。だが、

「ほう」

おそらく状況を察したのだろう。千冬がラウラを睨みつける。ラウラは静司に詰め寄ろうとした動きを止め、直立した。

「私の授業は下らないか、ボーデヴィツヒ。随分と偉くなったものだな？」

「い、いえ、教官！ 私は教官の事でなく——」

「黙れ。私はお前にリーダーを命じ、実習を行えと言った。それができないのなら消えろ。目障りだ」

くっ、とラウラが押し黙る。そして消え入りそうな声で答える。

「実習を、行います」

「ならば早く準備しろ。言っておくが二度目は無いぞ」

千冬はそう告げると静司の方へやってきた。

「すまん。早く気付くべきだった。お前に面倒を押し付けてしまったようだ」

「俺は大丈夫ですよ。けど念のため注意しておいてくれると助かります」

「わかってる。ではお前たちも実習を開始しろ」

頷くと、千冬は真耶の元へ歩いて行った。

「川村君、案外えげつないね……」

「そうか？ 嘘は付いてないぞ。言ってることをちよつと省略しただけだ」

「く、黒い……。けどボーデヴィツヒさん凄い形相で睨んでるけど……」

「ま、先生たちが注意して見てくれるそうだし、大丈夫だろう。専用機持ちの実力者に直接教えて貰える機会なんだ。有効活用しないと」

「かわむー、おぬしも悪よのう」

「さて、なんのことやら」

くくく、と笑う静司に女子達も渴いた笑みを浮かべるしかなかつ

た。

「けど今日って実戦訓練だよね？ あの状態のラウラさんから教わるの？」

「……しまった」

6. 狩人たち

植村加奈子。IS学園社会科教師。

彼女は窓から見えるその光景に苛ついていた。

彼女の視線の先、グラウンドでは一年のIS実習が行われている。その中には男性操縦者である、織斑一夏。川村静司。そしてシャルル・デュノアの姿があった。

(嘆かわしい……)

織斑一夏が女子生徒を抱き上げ訓練用ISに近づいていく。どうやら前の生徒がISから降りる際、しゃがまずに降りてしまった為にコクピットが高い位置で固定。届かないので織斑一夏がコクピットまで運んでいるらしい。

(男の分際で生意気な……)

ぎりっ、と歯を噛みしめる。

植村加奈子は典型的な女性至上主義だった。学生時代から男は嫌いだった。頭は自分の方が良い。機転も聞く。全てにおいて自分が勝っている。なのに、彼女の人生において、いつも男が組織のトップに居た。

学生時代は男が生徒会長を。大学は学生総代を。そして最初に就職した別の学校でもトップは男だった。それが彼女には我慢ならぬ。自分の方が優秀だ。何故あんな奴らが、と。

だが、ISの登場で世界は変わった。その強力な兵器は社会を女性優遇へとシフトさせたのだ。そしてそのISを学ぶIS学園。彼女の中でそこは、女性による、女性の為の学園。女性が更に強くなるための場所となる。そして自らにIS適性は無かったものも、その優秀さからスカウトされた。

IS学園では当然ISを学ぶ場であるが、それだけではない。何せ育てるのは未来のエリート。必要な知識はIS以外でもいくらでもある。メインはISを学ぶことだが、歴史や政治。経済などもカリキュラムに含まれている。加奈子は経済学の教師として、IS学園に雇われた。

彼女は歓喜した。自分が育てた生徒たちが後に男の上に立ち、世界を動かすのだ、と。それ故に彼女は持ち前の知識と、厳しきで指導を行った。生徒たちからはその厳しきから好かれていないが、教師からは必要な事だ、熱意のある良い先生だ、と評価は高い。

(なのにな……っ！)

男性操縦者の発見。そしてその入学。この事件は彼女にとっても衝撃的であった。

女の領分であるISSに男が乗る。彼女には我慢がならなかった。だが、彼女も馬鹿ではない。公然と批判をすれば、問題視される可能性も理解していた。だから涙を飲むしかなかった。

だが彼女の悪夢は続く。2人目も発見され入学。更に3人目。挙句、1人目と3人目には専用機まで与えられている。

ふざけるな！ 男の分際で何故ISSに乗っている！ お前たちの時代は終わったんだ！

それが彼女の嘘偽り無い気持ち。そしてその思いはだんだん押さえつけられなくなってきた。だが、だからといってどうすればいいのか？ できることは授業の時、特別厳しくしてやるだけ。だがそんなものでは彼女の溜飲は下がらない。

一夏から少し離れた所では、金髪の男。3人目の男性操縦者が、優しく微笑みながら指導している。女子生徒達は顔を赤く染め、嬉しそうに指導を受けている。ああ、我慢がならない！

だが、そこから少し離れた場所を見て思わず加奈子は笑った。そこでは銀髪の生徒が2人目を地に叩き落としていた。

2人目の男性操縦者、川村静司。この男には専用機は無い。実力も平凡。そんな情けない男がISSに乗るのは腹立たしいが、銀髪の生徒が容赦なく男を痛めつける姿を見て、少し気が晴れた。

「植村先生、どうしました？」

「いえ、なんでもありません」

近くにいた同僚になんでもない、と答えると彼女は自分の席に戻りながら、今日は飲みにくいこうと、そう決めた。

「さつきの授業、静司の所すごかったな……」

昼休み。いつものメンバーにシャルロットを加えた屋上での昼食。一夏が同情するように言った。

「厳しいようでしたわね。こちらにまで声が聞こえてましたわ」

「僕の所にも聞こえてきたよ。大丈夫？ 静司」

「な、なんとか……」

心配そうに聞くシャルロットに静司はぐったりしながらも手を挙げた。

『その程度もできんのか愚図が！』とか、『何をちんたらしている、小鹿にでもなったつもりか！』とか凄かったわね。うちのグループの子も引いてたわありや」

鈴も同意する。

午前のIS実習。あの騒ぎの後始まったラウラの指導はまさにスパルタだった。罵声が飛ぶ中、次々と指示を出し、できなければまた罵声。同じグループの女子は全員涙目だった。

「しかも静司の時だけ、一際厳しかったよね？」

「あの女……ここぞとばかりに憂さ晴らしやがって……」

若干素に戻りながら静司が呻く。実戦訓練故に、内容は格闘、射撃を含んだ授業だったのだが、ラウラは静司の時は容赦なく地面に叩き落としていたのだ。千冬も指導が厳しくてもやり過ぎない限りは口を出さないらしく、静司は絶妙な加減で痛めつけられていた。

「けど指導内容自体は間違っていないんじゃない？ 変だったら千冬さんが何か言うでしょ」

「そうですね。私も少し見ましたが、少々厳しいところを除けば内容は問題なかったですわね」

「確かにな」

鈴、セシリア、箒が評価する。だが一夏は気になったようだ。

「あれで『少々』なのか……？」

「まあ授業だし、やり過ぎると先生に怒られるからね。実際の本格的な訓練はもつと厳しいよ」

シャルロットにまで同意され、一夏がうげえ、と呻いた。専用機持ちはその特殊性から厳しい訓練を受けてきている為、一夏との認識にズレがあるようだった。因みに箒の場合は性格的なものだ。

「一夏、アンタも専用機持ちなんだからもっと精進しなさいよ」

「う、わかってるよ」

「そういえば気になってたんだけど、一夏には専用機があるけど、静司には無いの?」

「ん?」

シャルロットの疑問にそういえば、と他の女子達も首を傾げる。

「確か先に白式が用意されたから、川村のは遅れているのでは無かったか?」

「だけど入学してもう2か月よ。なんも話無いの?」

男性操縦者のデータは貴重だ。サンプルは多い方が当然良い。だが、未だに静司に専用機と言う話は無い。

「まあコアの数は限られているからな。それに色々揉めてるらしいよ」

「揉めてる?」

静司の言葉に一夏が分からない、と一夏が首を傾げる。だがシャルロットは気づいた様だ。

「そつか。いろんな企業がオフアアが来てるんだね」

「シャルル大正解。こぞって牽制し合って決まってるんだってさ」

男性操縦者が扱うIS専用機となれば、その企業や機関の知名度アップに繋がる。一夏の白式が早々に決まってしまった故に、静司こそは、ということらしい。

因みに静司としては黒翼があるのでどちらでも構わない。

「ふむふむ。そうだ、シャルル。静司にデュノア社の使ってもらえば、PRになるんじゃないか?」

一夏が良い事を思いついた、と提案するが、シャルルの顔が一瞬曇った。だが直ぐに笑顔を作ると静司に笑いかける。

「そ、そうだね。お願いしてみようかな? あははは」

どこか渴いた笑みを見せるシャルロットに静司は違和感を感じる

のだった。

「ルールを決めよう」

「う、うん？」

放課後。寮の自室で静司はシャルロットに提案した。

そもそもの原因はシャルロットにある。寮に案内し、一夏の引越。シャルロットの簡単な荷物の整理と終えて、改めてお互いよろしく、という事になったのだが。

(当然とは言え無理してるよなこれ……)

表面上は笑顔のシャルロットだが、その裏で相当緊張しているのに静司は気づいていた。年頃の少女が、同年代の男と同じ部屋に住むのだから当然ともいえる。その姿があまりにも哀れだった故の提案だ。「ルール？」

「どうだ。同じ部屋に住むとは言っても、お互いプライベートな部分もある。親交も大事だが、そういう部分も俺は重要だと思ってる」
「う、うん。確かに大事だね」

まだよくわからない、と言う様子のシャルロットに静司は続ける。
「よし。ならまずシャワーだ。シャルルは先と後どちらがいい？ それともその日その日で決めるか？」

「えっと、じゃあ後かな」

「OK、次だ。部屋に入る時は必ずノックする事。鍵がかかっているも開ける前にする事」

「わかったよ。プライベートは大事だからね」

シャルルからしたらありがたい話だろう。

「よし、次だ。俺は大体夜は7時から8時ぐらいに帰ってくる。シャルルは何か放課後に予定とかあるか？」

「えーと、一夏達がいとも放課後にI Sの特訓してるって聞いて誘われてるかな」

「そうか。俺もたまに参加してるけどアリーナは今の時期は4時閉鎖だから、シャルルの方が帰るの早いかもな。その時はシャワーも好き

に使ってくれ」

「うん。だけど静司はそんな時間まで何してるの?」

「……勉強とか買物とか?」

もちろん嘘である。実際は適当に時間を潰していくつもりだ。そうすればシャルロットも一人の時間が作りやすいだろう。

「へえ、熱心なんだね」

「……まあね」

偉いなあ、と笑顔を向けるシャルロットの笑顔が何故か眩しい。悪い事はしていない。むしろシャルロットの為でもあるのだが、何故か嘘をついている事の罪悪感を感じる。

「ま、まあ、それはいい。じゃあ他にも色々決めようか」

「うん」

そうして二人は共同生活のルールを決めていくのだった。

『よう、色男。女子学生と同じ部屋だつて? 写真は1枚いくらだ?』

「奥さんにバラすぞロリコン」

夕食後。シャルロットには風に当たってくる、と伝え静司は屋上に来ていた。通信の相手はC1だ。

『ははは、良いじゃないか。写真も見たがかわいい娘だったな。こんな娘を男装させようとはデュノア社の社長も……意外にマニアック?』

「……切るぞ?」

『わかったわかった。真面目な話をしよう。お前から見てシャルロット・デュノアはどうだった?』

「……あくまで私見だが、彼女にスパイなんて無理だろう」

今日一日過ごして静司はそう評価する。「ほう?」とC1は興味を示した。

「彼女は根っからの善人だ。それに会社の事もあまりよく思っていない様に見える」

『へえ。まだ初日なのに随分と高評価だな。まあ彼女の経歴からすれ

ば恨んでいてもおかしくないだろうな』

それはどうだろう？ と静司は考える。確かにデュノア社長のシャルロットに対する扱いは酷いものだ。IS開発に利用し、社の為に男装させスパイを命じる。静司の知っている情報だと、彼女は元々は一般人だったはずだ。軍人や、静司達のように特殊な組織に染まっていた訳では無い。

だが、シャルロットにそういった事に対する憎悪の面は見られない。いや、諦めてしまっているのか。

「少なくとも彼女が織斑一夏本人に対してどうこうする、という事は無いだろう」

『随分と肩を持つな。惚れたか？ ん？ お兄さんに言ってみろ』

「そんなんじゃない。……ただ、そうだな。ここはやっぱり俺には眩しすぎるよ」

『……』

「織斑一夏はデータ通りの人間だが、芯はしっかりしている。セシリア・オルコットも最初はどうかと思ったが、根は良い奴だったし努力家だ。篠ノ之箒は少々、荒っぽいけど、あそこまで一途に人を想えるのが羨ましいし、凰鈴音も然りだ。そういう意味ではラウラ・ボーデヴィツヒも同様かもな。織斑千冬を心底敬愛している。そして、シャルロット・デュノア。ひどい扱いを受けて来て、それでもあんな顔で笑える。アイツら全員が良い奴過ぎるんだよ。それが眩しい……いや、ボーデヴィツヒはちよつと違うか」

自嘲する様に笑いながら自分の左腕を見る。機械で出来た腕。今の自分の原点。

『……一つ、聞いていいか？』

「何だ？」

『お前は誰だ？ そしてどうなりたい？』

「何言ってるんだ？ 今も昔も。それにこれからもblade9だろ」

『そうか……やっぱお前馬鹿だわ』

「なんだよいきなり」

むっ、として言い返そうとするがC1は「あーはいはい」と取り合
わない。

『とにかくシャルロット・デュノアは直接的には問題ないという事だ
な。なら次の話題だ。と、いうよりこっちが本題』

通信越しに、C1の空気が変わった。

『獲物がかかった。餌に釣られてやって来た獲物がな』

静司の居ない寮の自室。机に座っていたシャルロットは、ふと時計
を見る。

「静司、遅いな……」

夕食後、「ちよつと食べすぎたから夜風に当たってくる。今日は
シャワー先でいいよ」と言う静司と分かれ、シャルロットは言葉に甘
えシャワーを済ました。

それから荷物を改めて整理し、課題を終わらせ、今は情報端末を開
いている。内容はデュノア社への報告だ。初日だから大した内容は
無いが、それでも出さなければならぬこの作業が憂鬱だった。

「けど、良い人で良かった」

男装し、男として生活する。不安が無いわけがない。だが、クラス
の仲間は少々怖いところもあるけど基本的には良い人達だった。男
である一夏も明るく、好感が持てる。そして同室の川村静司。

髪が長く、目元が隠れている上にメガネをかけている、どこか野
暮つたい男。見た目の印象は少し暗いが、実際はそんな事も無く普通
の男の子だった。ただ、どこか一夏達と一緒に居る時、不思議な感じ
がした。

「なんだろう……?」

考えるが分からない。だけど彼が提示したルールには助かった。
シャルロットにとって同じ部屋で生活するにあたっての懸念事項が
着替え、そしてシャワーだったのだ。

当初はアリーナの備え付けのものや、深夜にこっそり入ろうと思っ
ていたが、ルールのお蔭で自室で入りやすくなった。同室が彼でよ

かった、思ったのだ。

(だけど……)

それだけに自分がやる事の後ろめたさが増す。男性操縦者のデータと白式のデータを盗まなければならぬという事が。静司は専用機を持っていないが、データを盗まなければならぬのは同じだ。彼が良い人だったが故に、苦悩は増す。

コンコン

『俺だ。入っていいか?』

「う、うん! どうぞ」

即座に端末の画像を報告書から通常のウェブへ切り替えシャルロットは返事をした。

「ただいま。お、先にシャワー浴びたのか」

「うん。静司の言葉に甘えさせてもらったよ。……駄目だった?」

「俺が良いって言ったんだから言いに行き止まってるよ。変な質問だな」

はは、と笑う静司に釣られシャルロットも笑う。

「けど静司遅かったね? どこ行ってたの?」

「ん? ああ、友人から電話があつてね。長電話しちゃった」

「仲良いんだね。結構時間たつてるのにそんなには話せるなんて」

言いながら、心の中で羨ましい、と思ってしまう。

「趣味の話だよ。釣り(・・)でかかった獲物をどうするか、つてね」

「あれ? かかったら引き上げるだけじゃないの?」

「引き揚げ方にも色々あるんだよ。じゃあ俺はシャワー浴びるよ」

「あ、うん。行ってらっしゃい」

シャワー室へ入っていく静司を見送る。

(男の子のシャワーかあ……って何を考えてるんだ僕は!?)

うくと布団を頭からかぶり赤くなるシャルロットだった。

IS学園から近い、小さな居酒屋の一角。

「へえ、やっぱり男なんて情けないですね」

「そうよ! なのにあんなにキヤーキヤーと、まったく!」

カウンター席ではセミロングのOLらしき若い女性と、眼鏡をかけた30代半ばの女性、植村加奈子が並んで席についていた。

「男がIS？ ふざけるんじゃないわよ！ あれは女の物よ！」

「ほんと、そうですね。なんでこんな事になっちゃったんだろう」

「政府も政府よ！ あんな連中ホルマリんにでも漬けてればいいのよ！」

加奈子はかなり酔っぱらっていた。元々ストレス解消の為に来たのだが、話がヒートアップし、薦められるがままに飲んだ結果、自重という言葉は彼女の中から消えていた。だが、周りも仕事帰りの人や学生が多く、騒がしいため、彼女の言葉をしっかりと聞いているのは隣に座るOLだけだ。

「うーんちよつとそれは怖いけど、けど呑気に学生なんてさせるのはちよつとあれですよね」

「そうよ！ やっぱりあなたはわかってるわね」

「どうも、とOLが笑う。」

加奈子とOLは実はお互いの名前は知らない。ただ、何度かこの店で会い、席も隣だった為、いつしかよく話すようになった。そして加奈子の話をよく聞き、賛同してくれるこのOLを彼女は気に入っていた。

「男性操縦者を守るためにIS学園の警備を強化したらいいですね。ニュースでやっていました」

「ふん、そんな無駄な事に金を使うくらいならもつとマシな事に使えって話よ」

「けつ、と毒づく彼女にOLは首を傾げる。」

「けど警備を強化って言っても、そもそもあそこを襲う人なんているんですか？」

「そうね。だから実際はちよつと監視カメラが増えたとか、レーダーを増設とかその程度よ」

「え？ 人は増やしてないんですか？」

「IS学園よ？ 戦力なら山ほどあるもの。勿論警備員も多少は増やしてるけど、そもそも学園を襲うようなバカは早々いないわ」

実際には先日無人機の襲撃があったが、流石にそこは言わない。

「なるほど。じゃあIS学園は安全なんですね」

「当然よ。まああそこには更識さんも居るし安泰よ」

「あ、その人知ってます！ ロシアの国家代表でIS学園最強の生徒ですよ」

「そう。彼女さえ居れば問題ないわ。まあ彼女も忙しい様だけど」

「忙しい？」

「ええ。国家代表ですからね。来週も3日程学園を空けるみたいなのよ」

「——へえ、それは大変ですね」

「まあ彼女が居なくても、IS学園には代表候補生も居るしあの織斑先生も居るのよ？ 問題ないわ」

「そうですね。女は最強なんです！ さ、もう一杯どうぞ」

「あら、ありがとう」

その後も酔っぱらいながらも、女性至上主義を自慢げに語る加奈子は気づかなかつた。隣のOLの笑みが濃くなっていた事を。そして自分の言葉がどれだけ重要だった事かを

7. 獣の眼

男性操縦者。それは世界を驚かせた存在。ある人はその存在に危機感を抱き、また、ある人々にとっては希望でもある。IS登場による女尊男卑。それを覆す要因と成り得るのだから。

だが、彼らを調べても原因は不明。これには多くの男が肩を落とした。だが一部の人間は言う。ならばもっと詳しく、解剖でもしてはどうだ、と。

都合よく男性操縦者は複数いる。特に2人目は、1人目の様な大きな後ろ盾も無く、3人目の様に企業の人間でもない。ならばコイツを使えばいい。

当然の如く、それは過激派の意見として一蹴された。だが彼らは諦めてはいなかった。彼らにとつて、男性が。そして自分たちがISを使える様になる事が最重要。その為に犠牲は付き物だ。

だが事はそう簡単にはいかない。IS学園はあらゆる国家や企業、機関などの干渉を良しとしない。もし手を出せば、それは世界を相手にする事になりかねない。

それでも彼らは方法を模索する。だが良い方法は見つからず、結局は世界を敵に回す覚悟で男性操縦者を手に入れるしかないという結論に至る。

「俺達が男性操縦者の謎を解き明かせば、世間もきつと俺達を認める」それが彼らの口癖。自分たちがいずれ処罰されようとも、この女尊男卑の世界を変えた英雄となるだろう。そんな自分勝手な希望。

そんな夢を見る彼らだからこそ、今回手に入れた情報はまさに渡りに船だった。

それはある日、『同志』を名乗る人物から受け取った情報。IS学園の警備情報だった。

警備員の配置。シフト。そして監視システムの穴。それらが詳細に記されたデータがそこにあった。

男たちは歓喜した。

データを持ってきたのは肩ほどまでかかる髪的青年だった。彼は

今の社会が許せない。だけど自分にできたのはこれ位だ、と男たちの前で嘆いた。自身にはネットの上の力しかない。現実には女性に良いように使われ、悔しいと。

最初は疑った男たちだが、それ以上にその情報は魅力的だった。それに男の涙も真に迫っており、彼らは決断した。

IS 学園を襲撃し、男性操縦者を捕獲する。

シャルロットとラウラが転入してから数日。これといった大きな問題は無く、表面上は平和だった。

ラウラも転入初日以降は、一夏どころかクラスの誰とも関わろうとせず孤高を貫いている。

そんなある日。

「会長が？」

「うん。来週会議で出かけるんだって。大変だねえ」

放課後のアリーナで静司と本音は情報交換をしていた。

「かわむー達が見つけた人達の事は気になるけどどうしても外せないんだって」

「微妙なタイミングだな」

先日、C1が見つけた『獲物』。それは学園周囲をうろついていた不審な男だった。それだけならわざわざ静司達が動くことではない。だが、その男は妙に同じ場所を行ったり来たりしており、そしてそこは学園の監視システムに不調が見られている場所だったのだ。

念のためC1は男を拘束。尋問を行った。最初は何も語らなかつた男だが、C1がとてども丁寧な尋問を行った結果、口を開いた。

それは学園を襲撃し、男性操縦者を誘拐するという話。

即座にC1とそのチームは男から聞き出したアジトに向かったが、そこは既にもぬけの殻だったのだ。

「話によると女性至上主義に異を呈する連中らしい。それ故にIS戦力は無いと見ているけど、油断は出来ないよ」

「うん、おねえちゃん達も警備を強化するって言ってたよ」

大変だあくともそうは見えない様子で語る本音に静司は苦笑する。

(やっぱ、あの事は言った方がいいのか……?)

静司達はそのまま襲撃を待つつもりは無い。敵が男性操縦者を狙っているのなら、狙いやすくしてやればいい。その為の困なのだから。

だが、その事を伝えるべきか静司は悩んでいた。と、いうのも先月の無人機襲撃の後、生徒会室に連れて行かれた静司はそこで説教を受けたのだ。

これが、静司達の情報を知るための尋問や拷問だったのなら、耐えられる自信はあった。

だが、

『かわむーは人をあんなに心配させておいて、何も言わないのかな?』

『それはちよつとひどいわねー』

『人としてそれはどうかと』

本音。楯無。そして本音の姉である虚。3人の言葉が妙に心を扶ける。

『いや、けどあの時は緊急時で——』

『だけど説明くらいはしてくれないと。……心配したよ?』

と、いつもは平和な笑顔を浮かべている本音がどこか瞳を潤ませて言うその姿に静司はたじろいだ。

『あー泣かせたー。おねーさん、ちよつとショックよ』

『……最低ですね』

面白そうにからかう楯無と、妹を泣かせたからなのか、割と本気で軽蔑の眼差しの虚。その後も続いた、説明と言う名の尋問に静司の精神は大いに疲弊したのだった。

そんな事があつた為、本当は言うべきなのだろうが、躊躇してしまふ。自惚れかもしれないが、本音は本気で心配しそうであつたからだ。そんな中、

「おーい、静司! お前の意見も教えてくれ」

アリーナでいつも通り訓練をしていた一夏が叫ぶ。どうやらシヤ

ルロットと模擬戦を行っていたらしく、その反省会をするらしい。静司は専用機が無いため、基本的に訓練の際は学園の貸し出しの物を使う。だが、ISには限りがある。今日は予約が一杯で借りれなかった。一夏の動きのチェックを頼まれていた。

なにせ今まで、自称一夏のコーチである箒とセシリアと鈴が酷かった。

『こう、ずばーつとやってから、がきんつ、どかんつ、という感じだ』
『なんとなくわかるでしょ？ 感覚よ。シックスセンスってやつ？』

……はあ？ なんてわかんないのよバカ』

『防御の時は右半身を斜め上前方に五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

初めて聞いた時、もしかして彼女たちは一夏を苛めているのだろうか、と真剣に悩んだものだった。流星に一夏が哀れだったので、静司も助言することにしたのだ。とは言っても、あまり詳しい事を言ったら怪しまれるので、基本的には3人娘の翻訳というか、こういうことじゃないか？ と補足する程度だが。

そういう訳で、先ほどの戦闘の反省。白式が接近戦オンリーの異様な機体である事。一夏はもつと考えて動くべきだ、という話をしていた時だった。

「おい」

ISに搭乗したラウラがアリーナに現れた。ラウラは真つ直ぐに一夏を見ている。

「……なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば力を見せてみる」

出会いは最悪。その後も見下すようなラウラの態度に一夏も良い印象を持っていない。その上でこの態度。一夏は呆れた様に返答する。

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様になくても私にはある」

かつての第2回世界IS大会『モンド・グロツソ』の決勝戦。応援に来ていた一夏が誘拐され、それを決勝戦を棄権した千冬が救出し

た。それをラウラは恨んでいるらしい。

一夏自身も、千冬の優勝を逃した理由が自分にある事からその事に気に病んでいた。

「貴様が居なければ教官が大会三連覇の偉業を成しえた事だろう事は容易に想像できる。だから私は貴様を——貴様の存在を認めない」
(勝手な理屈だな)

静司は呆れてしまう。そもそもそれが無ければ千冬がドイツで教官となる事もなかっただろう。だからと言って誘拐されて良かったというつもりは無いが、ラウラには関係の話だ。

一夏自身も当時の自分を許せないのだろう。だが、ラウラの言葉に乗る気はないらしい。

「また今度な」

「ふん、ならば戦わざる得ないようにしてやる」

言うが否や、ラウラは漆黒のISを戦闘状態にシフトさせる。そして左肩の大型実弾砲がスライドし、一夏に向けられた。

(なっ……!?)

誰もが突然のその行動に驚く中、静司もまた目を見開いていた。一夏はISに搭乗しているとはいえ、完全に無防備。そんな所にあの大型実弾砲が当たればどうなるか。

(どうする!?)

今からではラウラを止めるのは間に合わない。ならば一夏を守るのが優先。だがどうやって? そしてそんな行動を堂々としても良いのか——?

思考は一瞬。だがその間にも状況は動いていく。悩んでいる時間は、無い!

ギイイツン!

金属音が響き、アリーナが静寂に包まれる。誰もが啞然として、その光景を見ていた。

「何っ……?」

ラウラも思わず目を見開いた。

「……静司?」

シャルロットが信じられない、と言ったふうとうめく。彼女はラウラがシフトを行つた瞬間に割り込み、一夏の前でシールドを構えていた。

だが、その更に前。

打鉄の大型ブレードを楯の様に構えた静司がそこに居た。

「砲弾の機動を……逸らした？」

「なんて事を……」

鈴とセシリアもまた、目の前の光景が信じられない。今見たことが夢でなければ、静司は一瞬で筈からブレードを奪うと、その刀身をレールに見立てて砲弾を逸らした事になる。それも生身でだ。

「っ?! 静司、大丈夫——」

生身でISの攻撃を防いだのだ。直撃はしてないものも、衝撃は相応なものである。気を取り直したシャルロットが慌てて静司に近づき、しかし息を飲んだ。

着弾時の衝撃だろう。静司の眼鏡は吹き飛び、髪もまた逆立っていた。そして普段は隠れて見えないその瞳。静司の両目は冷たく、まるで猛獣の様な鋭さを持っていた。

(本当に……静司なの?)

一夏のように目立たず、騒動をいつも一步離れた所で見ている。けど話してみると普通の人の良い、争い事とは無縁に見えるルームメイト。それがシャルロットの中の川村静司。だが、目の前の彼は違う。ただ、まっすぐに敵を食い殺さんとする猛獣の眼。普段とはまったく別のモノだ。

(怖い……)

ぶるり、と体が震える。自分は今、得体のしれない何かを見ている。そんな気がした。

「かわむー!?!」

本音の叫びでシャルロットは我に返った。静司がブレードを落とし、その場に倒れたのだ。

「おい静司!?!」

「川村!?! しっかりしろ」

「くっ、救護室へ、早く！」

一夏達も慌てて静司に駆け寄る。ラウラはそんな光景を黙って見ていたが、ふん、と鼻を鳴らす。

「興が削がれた。今日は引こう」

「てめえ！」

一夏が怒り、白式を展開する。だが、

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

アリーナにスピーカーからの声が響く。おそらく担当教師だろう。

「アンタこそ何やってんのよ！ 生徒が倒れてんのよ!?! とつとと救護室の準備しなさい！」

鈴が怒声を返す。その剣幕に驚き、教師は慌てて「すぐに準備する！」とどこかに連絡を始めたようだった。

その間にラウラは姿を消しており、一夏は自分のせいで友人が傷ついていた、と両手を握りしめていた。

IS学園救護室。そこは暗いムードに包まれていた。

「先生、静司は？」

代表して一夏が聞く。養護教員は安心しなさい、と頷く。

「脳震盪ね。それと打ち身。軽傷だから直に目が覚めるわ。ISの砲撃を生身で受けたのにこの程度で済んだのは驚きだけだね」

とんでもない子ね、と笑う。その答えに一夏達は安堵し、部屋の雰囲気も少し明るくなった。だがシャルロットには気になる事があった。

「ブレードを使ったとはいえ、ISの砲撃を受け止めたのにそれだけなんですか？」

「ボーデヴィツヒさんだったかしら？ 彼女の砲撃も牽制だったのでしようね。流星に本気の一撃だったらこんなものじゃないわよ」

「成程。ありがとうございます、丸川先生。ウチのクラスの者が迷惑かけます」

騒ぎを聞きつけた千冬が礼を述べると、丸川はいいのよ、と笑う。「とりあえずしばらくはここで寝かせるわ。大事は無いと思うけど、えーと、同室のシャルル君？」

「あ、はい」

「彼の目が覚めて、大丈夫そうなら部屋に戻すけど、何かあったらすぐに知らせてね？」

「わかりました」

シャルロットが頷く。そして話は先ほどの事に移る。

「しかしなんなのよアイツ！いきなり攻撃してきて！」

「全くですわ！織斑先生、ボーデヴィツヒさんには何か処罰が？」

千冬はため息を付く。

「三日間の謹慎及びI S使用禁止。以上だ」

「それは軽すぎではないでしょうか？」

納得いかない、とセシリアが疑問を呈する。他の面々も同じ気持ちだった。

「わかっている。だが上からの命令だ。今回の件は『I S 同士の戦いに、一生徒が割り込んだ故に起きた事故（・・・）』として処理される」「なんだよそれ！」

一夏が憤る。だが千冬は冷たく言い放つ。

「ボーデヴィツヒはドイツ軍I S部隊の部隊長で代表候補生。川村は男性操縦者ではあるが、唯の一生徒。それが全てで、そしてこれが現実だ」

男性操縦者は貴重だ。だが、ドイツとの関係の悪化は何とても避けたい故の判断だった。

「だからって……」

納得がいかない、と一夏は食って掛かろうとするが、寸前で止まった。千冬の目。それはとても冷たく、厳しく、そして怒りが籠っていた。千冬自身も納得がいていないのだろう。

他の少女たちも事情が分かるのか、言葉が出ない。

「ボーデヴィツヒには私からも言っておく。お前らはもう部屋に戻れ」

すつきりしない雰囲気の中、千冬はそう告げるのだった。

一夏達が退出してから少したった頃。救護室の扉が開く。

丸川は入ってきた生徒を見ると姿勢を正した。

「お待ちしていました、楯無お嬢様」

「やーん、そんな硬い言い方しなくていいわよ、丸川」

入ってきたのは楯無、虚、そして本音だ。

「そういう訳にもいかないですよ」

丸川は布仏と同じく、更識家に仕える家系だ。彼女は学園の養護教員としてこの学園に勤めている。

「相変わらず真面目ねえ。どう思う、虚？」

「お嬢様が軽すぎるんですよ」

「あら酷い。どう思う本音ちゃん？」

「……」

問われた本音は、しかし話を聞いていなかったようだ。理由がわかる楯無はあらら、と笑うしかない。

「じゃ、本音ちゃんもご機嫌ななめだし——話をしましょうか、川村君」

ぴくり、とベッドに寝ていた静司が反応し、ゆっくりと目を開ける。

「このまま寝ていたい……」

「だーめ。ほら、言う事があるんでしよう？」

本音が一步前に出る。

「……やあ、かわむー」

「ハイ、ノホトケサン」

思わずベッドの上で正座する。だが本音は何も言わない。そんなどうしようもない居心地の悪い時間が続く。

（ど、どうする？ けどあの時はああするしかなかったし……。ぬう……）

だらだらと脂汗を流す静司を見ていた本音だが、やっと口を開いた。

「体は大丈夫？」

「へ？ あ、ああ大丈夫」

「そう、よかったよ」

いつものほんわかとした笑顔に戻った本音に思わずキョトンとしてしまった。

「ん？ どうしたんだいかわむー」

「いや、怒ってるかなーと思ってたものでして。はい」

「そうだねー。だけどかわむーもお仕事だから仕方ないよ」

心配はしたけどね、と本音は苦笑。どうやら先ほどまでの態度は怒っていたのでなく、心配していた様だった。

「そっか。だけどあれだ。心配させてごめん」

「うひひ、それが聞ければおっけーだよー」

そうなのだ。前回怒られたのも結局は心配させたから。それに本音はこちらの事情を知っている為、事情も分かってくれている。ならばこちらにも心配させた事に対して謝罪をするべきだろう。

「ふふ、青春ねえ。けど本当にすごいわね。ISの砲撃を受け止めたんでしよう。やっぱりその腕のおかげ？」

楯無は興味深げに聞いてくる。虚や丸川も興味があるのかこちらを見ている。

「そうですね。コレじゃなければどうなってたやら」

そういつて静司は左腕を上げる。それは人工皮膚ナノ・スキンで隠されているが、機械で出来た腕だ。しかもそれはただの機械ではない。

「ISの常時部分展開ね。全くとんでもないわね」

「その分、整備も大変ですけどね」

そう、静司の義手はISである。常に部分展開をして、義手として扱っているのだ。

「何か問題があるなら私が見るよ」

「ありがとう。けど大丈夫」

何度か手を開閉させるが問題は無い。よかつたくと本音も笑う。

「だけど候補生達と織斑先生は少々不審に思っていましたよ。後で追及されるかもしれません」

「まあ仕方ないわね。そもそも生身でISの砲弾逸らしたってだけで異常なのに、その上五体満足なんだもの」
「ですよねー……はあ」

丸川の指摘に楯無も頷き、静司はそうやって誤魔化そうかと悩む。表向き静司は専用機を持っていないのだ。それにそもそも常時部分展開等行う人間は居ない。エネルギーを消費するし、体力も然りだ。だが静司と静司の黒翼（こくよく）はそれを行う。バレたらどうなることやら。

「ま、それは後で考えるところとして本題に移りましょう。そちらとしてはラウラ・ボーデヴィツヒをどう見てるの？」

「彼女の場合はあくまで私怨でしょう。こちらが想定していた敵では無いですね。勿論、危険なのは変わりないですけど」

楯無の質問に、静司も答える。実は結構前に目覚めていた静司は、ISのコアネットワークを通じて、会社と連絡を取っていた。

「こちらの見解と一緒ね。とりあえず彼女も注意人物としてマークしておくわ。ならば次だけど、例の男の仲間達。そちらは何か掴んでる？」

「そちらはまだ。なのでこちらから動いてやろうと考えてます」
「と、言うこと？」

横目で本音を見る。彼女も興味深そうに話を聞いている。先ほど心配させたばかりだが、やはり言った方が良さだろう。

「彼らの目的は男性操縦者。ならば襲いやすくしてやればいい」
「……なるほど、囿ね」

「元々、俺が来たのはそういう意味もありましたから」
そしてそろく、と本音を見てみる。彼女は「はあ」とため息を付いていた。

「かわむー。もしかして君はマゾなのかい？」
「違うわ！ そうするのは一番効率良いんだよ。その、心配してくれるのは嬉しいんだけど……」

「わかってるよ。だけど、あまり無理はしないでね？」

「勿論」

やくそくだよ、と本音に肩を叩かれた。

「ふふ。それで具体的にはどうするの？」

「単純ですよ。夜、1人で出歩く。それだけです。奴らは仲間が揃まって焦っている筈です。そこに目の前にチャンスをぶらつかせてやればきつと反応する」

「案外アバウトね。だけど単純な方が分かりやすいし、効果的って言うしね。いいわ。こちらでも人員を出す。招かざる客には早々に退場してもらいましょう」

ぱっ、と開いた扇子には『狩猟解禁』の文字。その扇子を口に当てながら楯無は不敵に笑うのだった。

8. おろかもものたち

「何？ 彼らもう失敗しちゃったの？」

「正確に言えば失敗寸前ですね」

大小様々な機械が整然と並ぶ研究室。一番大きなモニターの前に腰かけた女は部下の報告に呆れた様に呟いた。

「せっかくお膳立てしちゃったのに想像以上に役に立たなかったわねえ」

「同感です。1名が捕まり、残りのメンバーは身を隠している様ですが、時間の問題でしょう。むしろ未だに捕まっていないのが奇跡です」

「所詮は寄せ集めだから練度もバラバラなのよ。けどあの連中の事だから、諦めて逃げるって選択肢も無さそうねえ」

まったく早漏共め、と女はうめく。

「処分いたしますか？」

「……そうねえ、けどまあ折角だしもうちよつと放っておきましょうか。そもそもそんなに期待してた訳じゃないし、どうなっても構わないわ」

「かしこまりました。では、その様に」

男たちを焚き付け学園を襲撃させ、出方を見る。それが本来の目的だが、女は対して期待していなかった。所詮は戯れ。その程度の事。こちらの計画に影響はない。

「そういうえば、貴方の方はどんな感じ？」

「こちらは問題ありません。植村加奈子の情報は習得済みです」

「よしよし。貴方のそういう完璧な所は大好きよ。生徒会長が居なくなるのは月曜からだっただっかっけ。ならそろそろ準備しなさい」

「かしこまりました。しかし何故こんなまわりくどい方法を？」

自分の尊敬する目の前の女性なら、そんな小細工をせずとも目的を達成できる。そう信じた顔で助手は訊く。

「私は天才だけど妥協はしないのよ。それに過程も楽しんでこそその人生じゃない」

そうでしょ？ と笑う女に助手は頭を下げるのだった。

アリーナの出来事の後。

自室に帰ったシャルロットの頭を占めるのは先ほどの事だった。

生身でISの攻撃を防いだ静司の力。そしてあの眼。

(なんだっただらう……)

今でも少し怖い。先ほど先生には、寮に戻ったら気を付けてあげて、と言われていたが、正直に言えば会うのが怖かった。だが静司はルームメイトだ。いずれ会わなければならぬ。

(嫌な子だ、ボク)

このまま救護室で寝ていければ会わなくて済む。一瞬そんなことを考えてしまった自分を嫌悪する。彼は友人を、そして自分を庇って倒れたのだ。感謝こそすれ、怖がるのは彼に失礼だ。

(うん、そうだよ。帰ってきたらお礼を言って、紅茶でも入れてあげよう。それで話を聞いてみよう)

そう決めて立ち上がった時だった。

コンコン

「うわあ!？」

あまりにもタイミングが良かった為に思わず間抜けな声を出してしまった。

「デュノア、織斑だ。話がある」

「あ、はい！ 今行きます！」

誰も見ていないのに恥ずかしい。それを誤魔化すように大声で返事をする。扉を開ける。

「……どうした？ 顔が赤いぞ？」

「き、気にしないでください！」

わたわたと慌てるシャルロットを千冬は怪訝そうに見るが、どうやらスルーすることにしたらしい。部屋の中を覗き込む。

「まだ川村は帰ってないか」

「……はい。先生の所にも何も連絡が？」

「ああ。丸川先生も先ほどから電話に出なくてな。大事は無いという話だったが放っておいてもおけんだろう」

養護教員に連絡が取れないのは結構問題なんじゃないかな、とシャルロットは疑問に思う。だがその疑問も千冬の言葉で吹き飛んだ。

「アイツには訊きたいことがあったのだから」

「訊きたいこと……」

十中八九先ほどのアリーナでの一件だろう。

「……デユノア。お前も専用機持ちだったな。率直に訊くがどう思った？」

「それは……静司の事ですよね？」

「ああそうだ。私は話を聞いただけで現場を見ていない。だから実力者であり、同室のお前から話を聞きたい」

静司の事をどう思ったか。それはついさっきまで考えていた事だ。

その答えは『恐怖』。だが友人を怖いという事を他人にいう事に躊躇いがあった。お礼を言おうと、そう決めればかりなのだ。だから、

「えっと、正直驚きましたが、近すぎてボクも良く分からなかったんです」

結果誤魔化すことにした。嘘をついている訳では無い。実際、一瞬の出来事だったので最初は何が何だか分からなかったのだから。

シャルロットの返答に千冬は「そうか」と頷いただけだった。

「あれ、千冬姉？」

「む？」

部屋の前で二人、黙り込んでいると一夏と箒にセシリア。そして鈴がやって来た。4人の目的もこの部屋の様だ。

「どうかなされたんですの？」

「ああ、デユノアと川村に話があつてな。それと織斑先生だ、馬鹿者」どこに持っていたのか、出席簿で一夏の頭を叩く。「痛い……」と涙

目の一夏を無視。

「で、お前らはどうした？」

「そろそろ川村さんが帰って来たかと思ひまして。……やはり心配ですし」

「そうね。それに訊きたいこともあったし」

セシリアと鈴が神妙そうに答える。訊きたいこととは千冬の質問と同じだ。彼女達も代表候補生であり、専用機持ちの実力者。心配ではあるが、それ以上に疑問が強い。

「だが、当の本人が帰ってきていないな」

「え、まだ？」

頭を擦りながら一夏は不安になる。あの出来事から結構な時間が経っている。まだ帰らないという事はやはり重症だったのだろうか。不安そうにする一夏達に千冬はため息を付いた。

「まだ何も分かっていないからそう早とちりするな。私が先生に連絡してみるから待っている」

そして、そうだな……考え、

「丁度いい。お前ら川村とよくつるんでいたな。アイツをどう思う？」

「どうって……良い奴だけど……多分」

「多分って何よバカ」

一夏の答えに鈴が呆れた。

「いやだって時たま酷いし」

こないだも見捨てられたよなくと遠い目で語る一夏。

「まったく、いつも一緒に居る癖にそんな事も答えられんのか一夏。」

川村は………良い奴だな。うん、そうだ」

箒が一夏に突っ込むが途中から、あれ？ と首を傾げる。

「アンタらねえ、川村って言えばアレでしょ。………眼鏡？」

「鈴さん、流石にそれは酷くないでしょうか？」

「うっさいわね！ じゃあセシリア、アンタ言ってみなさいよ」

「そうですわね、反射神経が凄いですわ。ビットが2機しか無かったとは言え、私の攻撃に耐えましたし。後は………か、髪が長いですわね」

あんたもそれほど言えてないじゃないの、と鈴が呆れる。シャルロットも余りに酷い反応に苦笑い。

「みんな、流石にそれは酷いよ……」

「じゃあシャルルはどう思うんだ？」

う、と墓穴を掘った事に気づく。せつかくさつきは誤魔化したのにまた似た質問だ。だが今回は先程のアーリーナの事でなく、普段の静司をどう思うかという質問だ。あえて今日の事は考えず、今までの印象を口にする事にした。

「良い人って言うのは同意かな。一緒に住んでると分かるけど、結構いろんな事に気が付いて助けてくれるよ。あと運動神経も良いよね。マラソンの時はビックリしたなあ。それと布仏さんと仲が良いね。よく話してる所を見るかな」

「……貴様ら。転入したばかりのデュノアがこれだけ答えられるのに、なんだお前たちの答えは」

呆れた様な、白い目で言われ一夏達は慌てた。

「あと、あれだ！ カレーが好き！」

「こないだから揚げ定食を美味しいと言ったな！」

「ラーメンも捨てがたいって一昨日言ってたわ！」

「けどやっぱり牛丼だと昨日聞きましたわ！」

「それってつまりなんでもいいんじゃない？」

「誰が川村の食生活を語れと言った。馬鹿共が……」

千冬は額に指を当て首を振る。駄目だこいつ等。早く何とかしないと。そんな空気が漂っていた。

「あ、そういえば少し気になってただけど一夏とはみんなファーストネームで呼び合ってるけど、静司は違うよね」

「え？ ……あれ、そういえばそうだな」

一夏とシャルロット以外は全員静司を名字で呼んでいるし、静司も同様だ。勿論、一夏に対しての女子達の態度は好意の現れであるが故なのだが。しかし来たばかりのシャルロットは別として、いつも一緒に居るグループ内で、1人だけ違うという事にシャルロットは少し違和感を感じていた。

因みにシャルロット以外の女子達は既に全員下の名前で呼び合う仲だ。毎日一緒に居るうちに打ち解けたのだろう。

「言われてみればそうね。なんでかしら？」

「別に呼びたくないという訳では無いが、意識したことが無かったな」
うくむ、と首を傾げる箒たちにシャルロットは苦笑する。

「勿論、男性と女性がファーストネームで呼び合う事は絶対じゃないし、人それぞれの気持ちや考え方だからたまたまかもね」

そんな気持ちだなんて私は……。と顔を赤くしいやんいやんと首を振る箒たち。そんな光景にあはは、と笑ってしまふ。だが一人だけ違ふ反応が居た。

「織斑先生？」

千冬は何か難しい顔で考えている。声をかけると「まさかな……」
と眩き首を振った。

「わかった。すまなかつたな妙な質問をして。川村の事は私から聞いて――」

言いかけたところで千冬の携帯が鳴る。ちよつと待つてろ、とジェスチャーすると電話に出た。

「織斑です。……丸川先生？ ええ、はい。………わかりました。
ありがとうございます。では、よろしくお願いします」

通話を切るとふう、と一息。

「丸川先生からだ。川村は起きて問題も無いようだが、念の為精密検査を受けに病院へ行つたそうだ」

精密検査という言葉に一夏はぎよつ、とした。

「どこが悪いのか!？」

「落ち着け馬鹿者。念の為と言っただろう。お前は忘れがちだが、3人しかいない男性操縦者。何かあったら困るからというだけだ。心配するな」

「ああ、そういうことか」

安堵のため息を漏らす一夏達。学園にも検査の機械はあるが、あくまで緊急用だ。餅は餅屋という事だろう。

「帰るのは遅くなるそうだが、その際は私に連絡が来る。遅すぎなければお前らにも連絡してやるからひとまず部屋に戻れ」

わかりました、と全員が部屋に戻つていく。シャルロットも部屋に入るがその背中に千冬が声をかけた。

「デユノア」

「はい？」

「もし川村が……いや、なんでもない。忘れろ」

「は、はい……」

気にするな、と手を振り去っていく千冬。それを不思議そうにシャルロットは見送るのだった。

『囿で釣るとは言ったけどまさか今日からやるとわね。体は大丈夫なの？』

『問題ないですよ。頑丈に出来てるんで』

『限度があるでしょうに』

IS学園より、少し離れた街の中。静司は無線を通じて楯無と話しながら夜の商店街を歩いていた。高性能な機器のお蔭か、囁くような声でも話せるので街中でも怪しくない。

現在の格好はジーンズに黒のシャツ。その上にパーカーを羽織っている。既に外出禁止時間は過ぎていたので、制服姿だと何かと都合がある為、事前に着替えたのだ。学園に通報でもされたらたまったものではない。

「課長、任務失敗です！ B9が補導されました！」

「なにい!? 保護者として迎えに行かなければ！ ネクタイはやっぱピンクか!？」

こんなアホな展開が目に見えかぶ。あの人たちは来る。絶対に楽しみながらやってくるに違いない。そんな事させてたまるかこんちくしょう。

『どうしたの？』

『ギャグ補正って理不尽ですよね』

『……良くわからないけど苦労してるのね』

おねーさんは応援してるわ、と楯無は笑った。

『しかし本当に良かったんですか？』

『本人の希望よ。それにフォローはしているから安心なさい』

しかし、と思いつつ静司は横を見る。

「ん〜？ どうしたのかわむー」

そう、静司は本音と街を歩いてきた。もちろんこれには理由がある。

IS学園を監視しているのは何も件の襲撃者だけではない。各国の様々な機関がその動向を監視している。更に今年は話題の男性操縦者が入学している。注目度は高い。

そんな状況で話題の男性操縦者が一人で街をふらふら出歩いていたら？ ここぞとばかりに各所からツツコミが入る事だろう。当初は、静司が勝手に学園を抜け出した事にしようとしたのだが、やはり理由としては無理がある。学園の管理体制を疑問視されかねない。

そこで理由をでっち上げた。

『学園周囲に男性操縦者を狙う者が居るの。放っておくのは危険な為、川村静司君には理由を話して、囷として協力してもらおうことになりました。念のため家の者をすぐ横に付けています。は？ 男性操縦者を危険に晒すな？ 分かっているわよそれぐらい。けど敵を放つて置くほうが危険と判断したのよ。何せ貴方達みんな揃って学園覗き込んでるくせに、件の連中に気づいてなかったでしょ？ 何の為に覗き見を許してると思ってるのよ。役に立たないなら排除するわよ？』

楯無のこの物言いに、他の組織達は口を閉じるしかなかった。下手に反論すると、『もしかして気づいてたのに放って置いたの？ 仲間なのかしら？』と返ってくるため口出しできないのだ。本来、IS学園は不干涉がルール。それでも暗黙の了解で彼らは存在するのだ。それに相手はロシアの国家代表。敵に回したら更識家だけでなく、国クラスの猛者を相手にしなければならぬ。結果、彼らは折れた。

そして対外的な『保険』として誰かを静司のそばに付けなければならぬが、誰が適任かと考えた時、手を挙げたのが本音だった。

更識家のメイドであり、静司とも仲が良い。それに何より彼女の雰囲気からまさか敵も護衛だとは思うまい、という判断だ。

「で、実際の所、布仏さんの実力はいかに？」

「えつとね、スパナは意外に攻撃力あるよ〜」

「スパナは殴るものじゃありませんっ！」

あれ〜？ と首を傾げる本音に、静司は別の意味で不安を感じた。

「けどこうやってかわむーと歩くのって初めてだね〜」

「ま、いつもは学園の中だからね」

「わーい、『でーと』だね〜」

ひゃっほう、と本音が笑う。本音もまた、レギンスとシャツ。その上にカーデイガンと軽装ではあるが私服だ。デートに見えない事は無い。

「いやいや、一応これお仕事だから」

「ひどい！ 楽しみにしてたのに〜」

大きな声で嘆かれ、思わず静司はたじろいだ

「え、あ、いや、すまない。だが——」

「……うひひ、かわむーひっかかった〜」

わーい、と本音が笑いそこで騙されたことに気づく。

「意外に悪い子だな、布仏さんは」

「そんなことないよ〜。かわむーは真面目すぎなんだよ」

「大事な仕事だからな。気を引き締めないと」

「う〜ん、そういう意味じゃないんだけどなあ」

ぬう、と悩んだかと思うと突然、とりや！ と静司の腕に引っ付いた。いきなりの事に静司も目を見張る。

「どうしたんだ急に？」

「んーとね、うまく言葉に出来ないけど、かわむーは少し無理してない？」

え？ と本音の顔を見るといつになく真面目な顔の彼女と目があった。

「任務は大事。それはわかるよ？ だけど私はどれが本当のかわむーかわからないときがあるよ」

「それは……」

ふと、先日のC1との会話を思い出す。『何者で、何になりたいか』本音の質問はこれと同じ意味な気がしたのだ。

「クラス対抗戦の時ね、かわむーは大丈夫だ、って言って戦いに行つたよね？ あの時ずつと怖かったけど、かわむーがそういつてくれた時に安心できたんだよ」

勿論心配だったけどね。てへへ」と笑う。

「あの後私もかわむーの戦いを見せて貰ったけど、あれが本当のかわむーなんだなって思ったんだ。だけど戻ってきたかわむーはまた別のかわむーだったから、どっちが本当のかわむーで、けどかわむーはかわむーで……あれ？ わかんなくなってきたよ」

「落ち着け。どっちも俺だろ？ 何か変だったか？」

「変って言うかなんだろう？ 何か違うなうって思ったただけだよ言葉に出来ないや」

「なんだろうね？ と本音が笑う。だが静司にもそれは分からない。だが彼女が何か重要な事を言おうとしている。それがわかるから続きを待つ。」

「んー、んー、よしかわむー、秋葉へ行こう！ ……どうしたの、かわむー？ 地面で寝るのは汚いよ？」

「ずさーつ、と静司はコケていた。ちよつと大事な話をされていた気がしたのに、もはや雰囲気ぶち壊した。さすが天然。予想が掴ん！ 「な、何故そうなるっ」

「何となく。アニ○イト行って虎の○行ってソ○マップ行ってま○だらけ行ってガンダ○カフェ行ってラジオ会館で○—BOOKS行ったり、フィギュア見たり、ドール見たりした後に、メイドカフェでお茶しよう」

「多くね？ よくわからんが、名前に明らかに内容被ってね？」
「気にしない気にしないー。んつとね、楽しもうってことだよ。かわむーもこつちにひきこんでやる」

こつちとはどつちだろうか。けど何故か踏み込んだら抜け出せない底なし沼が本音の後ろに見えた気がした。

「何でもいいから一度本気で遊んでみようよぜい。たぶんそういう事」

「よくわからんが……まあ、考えとくよ」

けど護衛もあるしなあ、と思うが流石に今口に出すほどKYでは無いつもりだ。

『あら？・デートの約束？ うらやましいわね本音ちゃん』

えへへ、といまいち感情の読めない笑いを浮かべる本音に苦笑しつつ、静司も考える。彼女が言おうとしたことは何だったのかと。

確かにストレスは溜まっているかもしれない。これは自分でも不思議だった。今までもっと過酷な任務に付いてきたこともある。それに比べれば、ここは護衛とはいえ普段は学園生活を送っているだけマシなはずだ。では一体自分の何が無理をしているのだろうか？

そんな事を考えつつ、商店街を抜け、大通りに出た時だった。

「——っ、布仏さん」

「む、りようかい」

ふと視線に気づき本音に声をかける。本音も意味を察したのか真面目な顔に戻った。

『会長』

『ええ、こちらでも確認したわ。まさか初日から現れるなんてね』

『余裕がない証拠ですよ。学園の方は？』

『虚と丸川が見てるわ。織斑君は大丈夫』

『了解です。C1』

『こつちもOKだ。学園はC5に任せた。もう少し歩くと右に路地に入る道がある。そちらに誘い込め』

『了解』

C1との通信を終えると、隣に立つ本音にも確認する。

「布仏さん、行くよ」

「うん。私はできる子」

言葉は緩いがその顔は少し緊張している。腕を掴む手にも力が入る。

安心させるように笑いかけると静司たちは路地に入っていくのだった

『そのまま真っ直ぐ。100メートル程で右に曲がれ』
「了解」

大通りから一本外れた路地を静司と本音は歩いている。夜という事も相まってか、路地に入ると途端に急に暗い雰囲気となるが、それでも誰もいない訳では無いので動きやすい場所に敵を誘導する必要があった。

仲間と、そして敵の視線を同時に感じながらも静司は先程の事を考えていた。

自分とは何者か。本当の自分とは？

そう聞かれても静司には自分は自分でありbladeだとしてか答えられない。しかしその答えにC1は飽きれ、本音は疑問を呈した。だが、静司とつて、自分が自分である事。そしてbladeである事は己のアイデンティティに繋がる事。それを否定は出来ない。(そうだ。俺は俺になったはずだ)

10年前。自分は何者かも知らずにただ生きていた。

7年前。狂った人間達によって兵器にされた

4年前。自分は何者でもなく、全てにされた。

3年前。その全ても灰にされた。

そして2年前、自分は自分の生き方を取り戻した。その筈だ。

(なら……この苛つきはなんだ?)

分からない。それがさらなる苛つきを呼ぶ。そんな悪循環。そのストレスは徐々に、しかし致命的な量として溜まっていくが、解決方法がわから無い。

(ああもう、今は目の前の任務に集中すべきだろう)

結果、静司は後回しにした。任務と言う名目で自分の問題から目を逸らしたのだ。

自分の隣の少女を横目で伺う。彼女はかなり緊張している様だった。当然だろう、と思う。学園に入学して2か月。彼女とは何かと話す機会が多い。最初は考えが読まない謎の人物だったが、実際は更識家の従者という事を除けば、少々天然の入った普通の少女だった。

そんな彼女はこんな戦場寸前に来ている。緊張するのは当然。な

らば、自分がフォローするべきだろう。

「布仏さん、今更だけどその服に合うな」

「ふえ？ あ、ありがとう？」

緊張してたからだろう。突然関係の無い静司の言葉に本音は驚いた様だ。

「いつもだばだばの服着ているからな、ちよつと意外だった」

「うーん、私はもつと余裕ある服が好きなんだよ」

2人とも察には戻っていないので、楯無が用意した服を着ている。何故楯無がそんなものを持っていたかと聞いた所、演劇部からちよつとね、との事だ。

「そういや、いつも着ぐるみたいの着てるな。なんなんだあれ？」

「えー!? かわむー知らないの!? キツネイヌニヤンチューだよ」

「混ぜればいいってもんじゃないよな!」

えく、と本音が不満そうに口を尖らせる。それから服を摘まみ、

「あれくらいの方がいいよ。この服はちよつとキツいのだよ」

「キツい……」

本音が摘まむのは胸元。つまり服のサイズと胸のサイズが合っていないらしい。そういえばISスーツの時も意外に見事な物をお持ちだった気がする。

「……そうか。やつぱり自分に合った服が一番だな」

「どうしたのかわむー? 顔が赤いよ」

「気のせいだ」

そんな他愛もない話だが、少しは緊張はほぐれた様だ。まだ少し表情は硬いが、先ほどよりは自然になっている。

やがて二人は指示通りに進んでいくと、人の気配が無くなった。たどり着いたのは少し広い道路を挟むように、建設途中の大型商業施設が立ち並ぶエリアだ。

『元々は大型アウトレットを建設する筈だったが、経営難で計画は停止。今は放置中のエリアだ。店も何も開いてないのでめったな事では人は寄り付かない。チェックも済んでいる』

つまりここには静司達と襲撃者達しか居ない、という事だ。おそら

く様々な機関が遠距離から監視はしているだろうが。

そして静司と本音が歩く前方に男が一人現れた。

「川村静司だな。同行してもらおう」

歳は30代半ばか。長身の体軀はがっちりとして鍛えられているのが分かる。顔つきも精悍で、とてもじやないが堅気には見えない。

そして静司達の背後にも男が数人、物陰から現れた。

「なんだよ、いきなり」

目的は知っているが、まだ合図が来ていないので、何も知らない学生を装う事にする。予定では、引きつけるだけ引きつけた後でC1達が一網打尽にする手筈だ。前方と、そして背後の男たちに注意を払いつつ、会話を続ける。

「分からなくも無いだろう。お前の立場を考えればな」

「……俺がI Sを扱えるからか」

「そうだ。お前の存在は我々の希望。この世界を変えるための糧となってもらう」

「希望に対して糧となれとは……アンタら無茶苦茶だなおい」

「黙れ。お前は何も思わないのか？ 何故女が優遇される？ それはI Sだ。あの兵器の登場によって私たちは一方的に弱者とされた、それが許せるのか」

「社会に苦言を呈したいのなら選挙に行くなり、政治家になるなりして好きに言えよ。今の社会が好きかと言われたら正直微妙だけど、だからと言って進んで糧になる訳ないだろボケが」

静司が軽く挑発すると男の顔が歪んだ。それは紛れもない怒り。腕を掴む本音の力が強まる。それを見た男の目が更に鋭くなった。

「お前が嫌でも私たちが今を許さない。それになんだ、その女は？」

怯えてるだけではないか。これが社会の強者？ 女尊男卑？ ふぎけるなっ！」

びくつ、と男の覇気に本音が震える。彼女は念の為の防衛策として打鉄を待機状態で隠し持っている。本来なら打鉄に待機状態は無いのだが、今回の為に急遽設定したのだ。しかし、訓練では無く実戦。そして男の雰囲気飲まれてしまっている。そもそも元来彼女は戦

い向きの性格ではないのだ。そんな本音の頭を軽く叩く「安心しろ」と笑うと静司は男を鼻で笑った。

「八つ当たりするなよ自己中。今分かったけど、アンタ単に女が嫌いなだけだろ」

「そういう話ではない。ISを動かせるというだけで、今まで無力だった女共が調子に乗った、この世界が許せないだけだ。女など前にでるべきでは無い」

「いつの時代の考え方だよ。アンタは時代から取り残されている」

「ならば私が元に戻す。お前の秘密を解析し、男のISで知らしめてやる。上に立つべきなのが誰なのかをな」

「下らないな。魔王にでもなるつもりか？ 『世界が気に入らないから俺が上に立って好き勝手するんだ』ってか。率直に言うとな——
ダッサいな」

「ふん、言ってる。お前はまだ自分の存在価値を分かっていないだけだ。お前次第で世界は変わる。何を言おうと連れて帰る」

「生憎と、最近では自分の世界すら不明瞭なんだ。付き合ってもらえないな」

男と静司の間に緊張が走る。背後の男たちもゆっくりと近づいてくる。合図はまだ来ない。だが、静司はともかくとして彼女に手を出そうとすれば会長は黙っていない筈だ。

「おら、おとなしく付いてこい」

「君には礎になってもらう」

「今まで良い思いしてきたんだろ？ 俺達にも分けろよ」

圧倒的優位と感じている背後の男たちは笑いながら近づく。だが、彼らの言葉に違和感を持った。

「おい、後ろの連中はアンタと随分毛色が違くないか」

「私が言ったのは私の考えだ。男がISを扱う事に別の価値を見出す者も居るのだよ」

それに、と、男はそこで初めて怒り以外の感情を顔に表す。

「彼らの言うとおり、今までさぞかし良い思いをしたのだろうな。こんな時間に女を侍らせてこんな場所へ来るくらいだ。色仕掛けでも

されたか？ 股を開いて懐柔したのか？ ん？ 答えてみる、その女」

それは下卑た笑い。男である静司ですら嫌悪化を抱く、最低な笑み。

本音も眉を寄せて嫌悪感を露わにする。

「かわむーは友達！ そんなことしてないもん！」

「口では何とも言えるな。いや、下の口でも色々したのか？」

男たちが笑い声を上げる。本音は眉を寄せ、男たちを睨んでいるが、手は震えていた。

「まあそれは後で直接聞いてみよう。私は女は好きではないが、欲求の処理の道具としては優秀だとは思っているよ」

「あ？？」

こいつらは何と言った？

直接聞く？ 欲求？ 処理？ 道具？ 誰が誰に？

横を見る。本音は顔を蒼くして、しかし泣きも喚きもせず、合図を待っている。ああ、そうだ。彼女は強い。しかし、同時に弱くもある。無茶をすれば叱り、しかし心配してくれた。人をからからかったかと思えば、今は震えている。強くて、弱い。それは人間として当然の事。

そんな、自分とは違ってとても人間的な彼女を男たちは壊そうとしている。

自分が自分になってから、会社の仲間以外に出来た大切な人を汚すと言う。

そんなクズの様な連中が——許せない。

『こちら楯無。準備できたわ』

『こちらC1。こつちもだ。だがお前の方は計画変更が望みか。あー

あ課長に怒られるかね』

『え?』

ああ、なんてナイスなタイミングだろう。そしてナイスな仲間だろうか。通信は繋がっているので彼らにも静司達の話は聞こえていた。そして楯無は分からなくても、C1は理解している。だから静司は答えた。

「数は?」

『そこに居る7人の他に18名。全員武装している。それと、北に50メートルの地点に黒いバンが停車しているが奴らの仲間だろうな。中は見えないが、多くて4名』

「了解。あまり無理を言うのも悪いし、ここの連中だけで良い。時間はどれだけ作れる?」

『5分だ。いけるな?』

「当然」

『ちよ、ちよつと貴方達? 何をしよう——』

「何を一人でブツブツ言っている?」

男が訝しげに静司を見る。それに静司は薄く笑いながら答えた。

「アンタたちに自分の発言の迂闊さを教えてやる準備だ」

「? 何を言って——」

男が静司に手を伸ばそうとし、しかしその手を止めた。眉を顰め耳に手を当てる。

「おいどうした。おい! 何も聞こえないぞ」

男が突然使えなくなった通信機に怒鳴るが反応はない。

「聞こえなくしたからな」

「何?」

静司の言葉にいいよ不信感を持って男が振り返る。それとほぼ同時、

ポンツ、ポンツ、ポンツ

どこかから妙な音が響いたかと思うと、静司達を囲む様に煙幕が張られた。

「な、なんだよこれ!」

「まさか……毘!？」

「気づくのが遅せえよ」

ゆっくりと静司が動き出す。眼鏡を外し、髪をかきあげその鋭い、猛獣の眼が男たちを射抜く。感情のフィルターが外れる。IS学園の川村静司という仮面が外れ、EXISTの川村静司——blade 9の顔が表に出る。

「かわむー……」

「本音はISを展開。防御体形でじつとしてろ。直ぐに済む」

そして男たちに向かい、宣言する。

「来い——喰い散らかしてやる」

「ちよつと、どういう事!? って通信が通じてない!」

『悪いな嬢ちゃん。ちよつと計画変更だ』

突然静司達と通信が途切れ、さらには煙幕。楯無は予定外の事態と、それを引き越した静司とC1に苛立っていた。

「説明を要求するわ」

『簡単な話だ。あの馬鹿共がB9を怒らせた。止まりそうにないからそれに合わせて計画変更だ』

「そんな理由で……。EXISTって言うのは随分と適当な組織ね?」

『気持ちわかるが怒るなよ。別にいつでも好き勝手に動くわけじゃない。だが今回は色々まずかった。悪いがB9は止まらんよ』
「色々……? しかし彼ならちゃんと命令すれば止まるでしょう?」

楯無の中での静司のイメージは『任務に忠実な強戦士』だ。確かに無人機との戦いでは暴力的な力でねじ伏せ、その姿に圧倒された。だが普段の様子から、彼が作戦を狂わせるほど勝手な行動をとるとは思えなかった。

『いいや、止まらないね。一つ教えてやろう。B9の本質は猛獣だ。敵対する者には容赦が無い。そしてあの馬鹿共が禁句をかましがった』

禁句とは言うまでも無く、女性を道具としてしか見ていない言葉。そしてそれを本音に対して言ったことだろう。

『猛獣は凶暴だが、自分の仲間には情が厚い。あの嬢ちゃんがあいつにとつてそうだったってことだ。俺もさっきの街中での話を聞いてたが意外に聡明じゃないか。B9の問題を薄々感じとつている。それだけアイツと触れ合つて来たって事だ。そんな嬢ちゃんに対しての暴言。こりゃ、男としてキレなきやならんね』

「あの暴言は正直私も撃ち殺してやろうかと思つたわ。だけど今はそういう私的な感情を殺す場面でしょ?」

『それ位俺もB9も理解してるさ。理解して、だけどそれを捨てた。結局ガキなんだよ。俯瞰するように、任務の為だと感情を割り切つているつもりでも、それを完全に制御できるほど大人じゃない。自分自身が見えてないから、どこまでが制御すべき感情なのかもあやふや。多分後でアイツは一人反省会始めるぜ?』

くくく、と何故か嬉しそうに笑うC1に楯無は怒りを乗り越してあきれ始めた。

「ならば叱つて、感情を暴走させるのを止めるのが貴方達大人の役目じゃないのかしら?」

『おー痛いところを突くね。まったくもつてその通り。これは俺の独断でもあるから後で課長に怒られるな。……また帰るのが遅くなつてカミさんにも怒られる』

けどな、とC1は考える。

静司は感情をもつと出すべきだ。任務の為、任務の為とあくまでblade9としてしかあろうとしない静司に、C1はもどかしさを感じていた。これでは桐生と協力してわざわざIS学園に入学させた意味が無い。

『ま、経緯が変わつただけだ。仕事はしつかりこなすさ』

「……わかつたわ。こちらも敵を排除する」

『おおく物わがりの良い嬢ちゃんだな。どうだ? この後オジサンと飲みに行かない?』

「あ、ごつめーん。そつちに流れ弾が」

『え？ っちょよ!? うおおおおおあつ!?』

「通信終了っ、と」

C1がいるであろう位置（正確な場所は知らない）に部分展開した4門ガトリングガンを撃ちこむと、楯無は通信を終了し、そして呟く。「これって親バカってやつなのかしら？」

疑問に思う所だが今は忘れよう。このエリアの敵を殲滅すべく、楯無は飛びたつた。

男たちには訳が分からなかった。

突然途切れた通信。そして張られた煙幕。だがそれ以上に不可解な事が目の前で起きている。

「1人目だ」

専用機も無く、後ろ盾もない為狙いやすい。それだけの理由で自分たちが狙った相手。

その川村静司が仲間の一人を地に沈めていた。

「な、なんだよコイツ!」

「弱いんじゃないのか!」

悲鳴を上げながらも男たちも武器を構える。静司はそんな連中を冷たい目で見据える。

「成程……軍人か傭兵崩れの寄せ集めか。まるでチンピラだな」

男たちの武器はナイフや銃と言った実戦的な物だ。構えも様になっていく。だが、それだけだ。なんの脅威も感じない。

「時間もあまりない。くたばれ」

言うが否や、男たちの中に飛び込む。その勢いのまま放たれた蹴りが鳩尾に突き刺さり一人倒れた。

「2人目。どうした？ その程度か」

「てめえ!」

ナイフを持った男が斬りかかる。だがそれも軽く体を逸らし、回避するとその腕を捻りあげる。男が苦悶の声を放ちつつナイフを取り落す。その男の腹に拳を突き入れ意識を奪い取る。

「3人目」

男が落としたナイフを拾う。大型の軍用ナイフを逆手に構え薄く笑う。

「なんなのだ……お前は!？」

「さてね」

「くっ……多少傷を負ってても生きていけば構わん! やれ!」

再び動く。次に狙うのは銃を持った男。男は顔を引き攣らせながらも引き金を引いた。

ギイイツン!

「つうあつあああ!？」

男が悲鳴を上げる。引き金は引いた。しかしそれより早く静司が投擲したナイフが拳銃に突き刺さり、そのまま発砲したため、銃が碎け散ったのだ。破片が男の体に突き刺さり、血を流す。そんな男の顔面に容赦なく拳を突き入れた。

「かわむー!」

「ああ、わかつてる」

本音の叫び声、その意味を見ずとも理解し横に跳ぶ。一瞬遅れてそこにSMGサブマシンガンのフルオートが叩きこまれた。

「調子に乗るな……!」

銃を撃つたのは静司と話した男だ。男の放つSMGの銃弾が静司を追いかけるが、それを左右に跳んで回避しながら静司は距離を詰める。その動きはまさしく獣だ。

「ちい!」

距離を詰め、静司がSMGを蹴り落とす。男は半歩下がるとナイフを抜いた。対する静司は無手。しかしその顔に恐怖は無い。

「この状況だ。我々が畏にかかったのはわかる。だが——お前は何者だ? その動きは……その眼はなんだ」

男は恐怖していた。専用機が無いから狙いやすい? 何を馬鹿な。生身で、元とは言え軍人を圧倒するその動きはとてでもないが一般人では無い。

「その質問は最近の俺の課題になりつつあるんでノーコメントだ。時

間も無いしな。そういうわけでもくたばれ」

そして動く。真っ直ぐに男に向かって距離を詰める。男も迎撃のナイフを構え、そして二人がぶつかった。

初手は男。下から振り抜いたナイフを、静司はその手を蹴る事で機動を逸らす。空いた隙に静司が体を滑り込ませる。だが男は笑った。もう片方の手で腰から抜いた自動拳銃を静司に向ける。

「馬鹿め！」

「お前がな」

男が引き金を引いた。乾いた発砲音が響き、悲鳴が上がる。

だが、

「なっ!？」

悲鳴を上げたのは男。静司は左腕で男の銃口を包み、そのまま発砲させたのだ。

静司の左腕はISの部分展開でもある。人間用の銃弾など弾くのは容易い。だがそんな事を知らない男にとっては意味が分からなかっただろう。

「おらあっ！」

目を見開き、硬直している男に頭突きをかます。怯み、一步離れた男の顔を左腕で殴り飛ばす。

「っあ!？」

声にならない悲鳴を上げて、男は地に沈んだ。

これで5人。しかしまだ2人残っている。

「ふざけるなよっ！」

「化け物め！」

その二人も又、アサルトライフルを静司に向ける。静司も腰を沈め構える。が、

「させない！」

今まで静司の指示でISを展開しつつも、初の実戦でもあり動けなかった本音が遂に動く。打鉄で静司の前に飛び出すと銃弾を受ける。

「っ！」

シールドで守られている為、本音自身に怪我はない。それに訓練で

ISの銃弾を受けた事はある。だが、それはあくまで訓練。殺気の籠った銃弾は少女にとつて十分な脅威だった。

「けど……私は出来る子!」

自分を奮い立たせるように叫び、打鉄を突進させる。男たちも間近でみるISの威圧感に顔を引き攣らせた。

「えーい!」

そのまま振るわれた打鉄の腕が男二人の意識をまとめて刈り取った。

静寂。

男たちは全員地に沈み、静司もまた、心を落ち着かせる。高揚した気分を沈め、状況を分析しようとして気づく。

「布仏さん!」

男たちを倒した後、動かなくなった打鉄に静司は慌てて駆け寄った。シールドがあるので怪我は無い筈だが、もしもという事もある。

そして静司が打鉄の正面に回り込むと同時に、打鉄の操縦席から本音が飛び込んできた。

「だ〜いぶ」

「うおっ!」

避けることも出来ず、そのまま受け止める。受け止められた本音は「おお〜」と笑いながらVサイン。

「えへへ、役に立った〜?」

「あ、ああ。ちよつと驚いたが頑張ったな」

それは静司の本心だ。今回の作戦に辺り、流石に心配だったのか楯無の会権権限、もとい裏工作で学園の打鉄を待機状態で持ってきていた。しかし、本音の性格が性格なので、もし事が起きても防御に徹し、身の安全を図る筈だったのだ。しかし彼女は動いた。それも静司を守る様に。恐怖を感じたはずだ。例え武器は人間用で安全が保障されていても、結局は人を傷つけるのは人の意思なのだ。その暴力的な意思の前に突然晒されれば恐怖を感じるのも当然だ。実際腕の中の彼女は少し震えていた。

「悪かった。俺がもう少し手際よくやってれば――」

実際、感情に任せて動いていたのは事実だ。だが、

「それは違うよかわむー」

ノンノン、と指を振る本音に静司は首を傾げる。

「私が役に立ちたかったからだよ。守られるのは嬉しいけどそれだけじゃ本当のかわむーとお話出来ないから」

いまなら少しわかるかな、と本音は笑う。

「やっぱりかわむーは戦ってる時がイキイキしてるよ。それが良い事なのか悪い事なのかは私には分からないけど、ずっと自然だったかな。……口調はちよつと怖いけど」

にやはは、と笑う。しかし静司はわからない。戦っている時が自然なら、普段の自分は一体何者なんだろうか？ まだ自分を取り戻せていないのだろうか。

「それは違うよかわむー」

「!？」

口には出して無い筈だ。それなのにこちらの思考を読んだかの様に本音が口を開く。

「かわむーはかわむーだよ。ただ、どうするときが楽で楽しいかな。……って考えてみようよ。そうすればきつとすつきりするよ」

「すまん、意味がよくわからん」

「ならばわかる様に頑張ろう。えいえいおー」

「……おー？」

声が小さい、と叱る本音を抱きながら静司は考える。楽で、楽しい。任務とはかけ離れた言葉だが、どこか心地よい言葉だ。自分は案外怠け者なのかもしれないな、と笑ってしまう。

周囲は煙も晴れてきた。局地的な通信妨害もそろそろ晴れるだろう。男たちが倒れている理由は目の前にあるISで各国に対して理由を付けてもらうとしよう。どの道彼らを尋問するのはEXISTと更識家。得た情報は必要な部分だけを開示してやればいい。

『こちらC1。脅威は全て排除……ってか何やってんだお前ら？ 羨ましいぞ畜生』

『あらあら、本音ちゃん大胆ね』

2人から通信が入る。どうやら敵は全て無力化したらしい。これでやっと帰れる。

「よし、じゃあ布仏さん、ISを待機状態にしてくれ」

「……」

「布仏さん？」

何故か反応が無い。彼女の顔を見ると不満そうに口を尖らせていた。

(なんだ？ 俺は何かしたか!?)

わからない。最初は今のこの抱き上げている状態かと思ったが、飛び込んできたのは彼女の方だし、その後も大人しく収まっているので違う気がする。

「布仏さん？」

「……むー」

マズイ！ これはいつかの『ドキッ！ 生徒会だらけの尋問大会。

グサリもあるよ♪』に連行された時と雰囲気似ている。何故だ!?

いや、何が彼女をこうさせた!? 考えろ、考えるんだblade!

全ての知識と経験を総動員して状況を打開せよ!

(そういうえば昔、姉さんが言ってたな)

曰く、女性とは覇気がある男が好きだと。そんなの好みじゃないかな？ と聞いたところ一番上の姉が甘ったれるな！ と怒った。しかし2番目の姉は『あれは彼女の考えだから人それぞれよ?』とやってたしやっぱり違うのか？ では3番目の姉が言っていた『ユーモアだ！ 笑いを制して天下を取れ!』というあれか？ しかし笑いどころなどあったか？ ボケればよかったのか？ だがよくわからん。今度新喜劇のDVDでも借りてこようか。

そんな風に半ば現実逃避しているのも実はもう一つ理由がある。

本音が降りようとしなのだ。何故か彼女は自分の腕の中で不機嫌そうにしている。それはつまり、意外にナイスなバディをお持ちの本音と密着している事を意味している。これは中々マズイ。特に意識し始めるとマズイ。

「えーと……布仏さん。理由を聞いてもよろしいでございましょうか

？」

結果、下手に出ることにした。blade9の名が泣いている。

「……本音」

「へ？」

「さつきは名前で呼んでくれたのに名字に戻ってるのだよかわむー」
「あ」

それは先程、男たちと戦う前。確かに名前で呼んだ。完全に無意識だったのだが、彼女は覚えていたようだ。

「えーと、つまりはそういうこと？」

「そういうことなのだよ」

「……」

なんだろう。この妙な空気は。

別に名前で呼ぶことは構わない。だが、改まって言われると何故だか言いづらい。しかし言わなければこのまま進まないだろう。

「わかった。……本音、これでいいか？」

「うんうん。おーけーなのだよ、かわむー」

わーい、と喜ぶ本音。『あれ？俺はそのままなの？』と首を傾げるが『かわむーはあだ名だからいいのだよ』との事。そんな二人は他愛もない話をしつつ、楯無達がやってくるのを待つのだった。

9. 疑念

襲撃者を捕らえた翌日。

勝手な作戦変更に対し、課長に叱られ、それが終わったかと思えば更識にも叱られた。まあ当然だろう。だが課長は最後に『ま、たまにはハジケるのもいいな。ビバ！ 若者！』とかほざいていたが、まあいつもの事だしどうでもいいだろう。

そして様々な後処理を終え、寮に戻ってきた静司を待っていたのは千冬と一夏達だった。

「静司！ 大丈夫なのか!？」

「ああ、特に問題は無いよ。心配かけて悪かった」

心配そうに尋ねる一夏に笑って返すと安堵したようだ。他の面子も安心したようにため息を付いた。

「川村、訊きたいことがある。後で寮監室へ来い」

おそらく空気を読んだのだろう。千冬はそれだけ告げると部屋へ戻っていった。静司達は寮の玄関で話す事でもないので、静司とシャルロットの部屋に向かう。静司、シャルロット、一夏、箒、セシリア、鈴。二人部屋には少々大所帯だが、仕方の無い事だ。因みに本音や楯無とは途中で別れた。揃って朝帰りなどしたら何を噂されるかわからない。幸い今日は土曜で学園は休みなので、時間をずらしても特に問題は無かった。

「しかしお前も無茶するよな。ISの砲撃を受け止めるなんて」

「そうよ！ アンタには訊きたいことがあるわ！」

一夏の言葉を皮切りに、先日のアリーナの件の追及が始まった。

「生身であんな事をやるなんて、普通じゃないわよ」

「そうですね。私もお聞きしたいですわ」

「……」

鈴とセシリア、そしてシャルロットの視線が突き刺さる。しかしこの状況は予想できた事だ。予想できたからこそ、どう答えるかも考えしてきた。そう、静司の答えは――

「いや、俺も良く覚えてないんだ。無我夢中だったもんで」

酷く苦しい言い訳だった。だって、さんざん考えても納得させられる理由なんて思いつかなかったのだ。結果、無理やり誤魔化すことにした。

「夢中と言っても、普通はあんな事できないよ?」

シャルロットが当然と言えば当然の疑問を投げかける。

「あー……俺って動体視力は良い方なんだよ。うん、結構自信あるな」
苦しすぎる。

「確かに私の攻撃もうまく避けていましたが……」

「というかそもそも何でアンタそんなに目が良いのよ」

さあ、どうするか。自分の表向きの経歴を考え、導いた答えは。

「……カニ漁船で色々鍛えられたんだよ」

余りにも苦しい言い訳。案の上全員ぽかんと口を開いていた。

「カ、カニ漁船……?」

「確かに北海道出身とは言っていたが……カニ?」

「な、なあ、カニ漁船で修行すれば砲弾逸らせるようになるのか?」

「私が知る訳ないでしょ!」

「カニ……?」

しかし一夏も他の面子もカニ漁船など当然名前では知らない。なんか過酷そうだな、という認識はあるがそれがどういうものなのかが分からない。

「って、たかが漁で——」

「カニ漁を舐めるな……遊びじゃないんだ」

何時になくシリアスな雰囲気ですべてはカニ漁船の過酷さを語る。その知識はどれも他人から聞いた話、ネットなどで調べた話で、作り話も多分に含まれていたが、中々ショッキングだったようで、話が終わる頃には一夏達はガクガクと震えていた。

「これ以上詳しく知りたければ、グー○ル先生に訊いてみるがいい」

「あ、ああ。疑って悪かった」

「カニコワイカニコワイカニコワイカニコワイ」

「世界には偉大な人たちが居るんだね……ボクはちよつと感動したよ」

若干顔を引き攣らせている一夏と何かトラウマになりかけているらしいセシリア。逸れに反して、何故か感動しているシャルロット。そう、カニ漁は過酷だが偉大なのだ。

「というかセシリア大丈夫か!? 眼に光が無いぞ」

「ちよ!? アンタしつかりしなさい!」

セシリアの様子に気づいた一夏達が騒ぎ始める。何とか誤魔化せた……か? と一人安堵しているとシャルロットがやって来た。

「カニは良くわからないけど、けどありがとう静司」

その言葉には呆れが混じっている。さすがに信じ切れていないのだろう。当然と言えば当然だが。

「シャルルもIS展開してたし不要だったかもしれないけどね」

「それは違うよ。突然でもああやって人の為に動ける事そのものが凄いいんだ」

「それならシャルル、お前も凄いつて事だな」

「僕は……違うよ」

どこか陰のある表情でシャルルが笑う。その胸の内にあるのは静司達を騙している罪悪感。織斑一夏に何かがあれば、収集するデータが減ってしまう。そんな事を考えてしまう自分に嫌気がさしていた。しかしだからと言ってどうすればいいのか、それが分からない。

そんな自己嫌悪に陥っているシャルロットの頭に静司は手をぼんと乗せた。

「……静司?」

「何が違うのかはよくわからないが、あんま考えすぎるなよ」

もう一度軽く頭を叩くと、静司もセシリア復活に参加するのだった。

静司が去った後、シャルロットは不思議に思っていた。

先程の自分は明らかにおかしかった筈だ。なのに何も言わず、助言だけを残した静司。

静司が触れた頭を撫でる。

(暖かかったな……)

ああやって誰かに触れられたのは何年振りだろうか。母親が死んで、デュノアとして引き取られてからは、父親にずっと従ってきた。自分にはそれしかできなかった。

(なんでこうなっちゃったんだろう)

考えすぎるな、と言われてもやはりそうはいかない。ちらり、と自分の机を見る。その鍵の掛かった引き出しには、本国で社長——つまり父親から直に渡されたある機械が入っている。

社からの催促も来ている。近いうちに自分も行動を起こさなければいけない。そして、それが成功しても失敗しても、ここには戻れないだろう。

(本当に……どうして)

シャルロットの問いに答える者は誰も居なかった。

「ほう、カニ漁船だと」

「……」

一夏達が帰った後、静司にはまだ大きな問題があった。そう、千冬への説明である。

管理人室。つまり千冬の部屋で、静司と千冬は向き合っている。

一応一夏達と同じ説明をしたが、明らかに疑っている。当然だろう。むしろ一夏達を誤魔化せたのが奇跡な気がした。

「……」

「……」

酷く居心地が悪い。それは疑いの眼差しで見られている事もあるが、何より織斑千冬とこうしていることにある。

入学以来、このように千冬と一対一で話す事はあまり無かった。そうでなければ自分の姉達と重ねてしまうからだ。だから、初日からあえて織斑千冬に対しての感情を意識的にカットした。だがそれも狭い部屋で向き合っていると難しい。

「私は現場を見ていない。だから本人たちに直接聞いた。無論、ボ―

デヴィツヒからもだ」

「はい」

当然の事だと静司も頷く。

「状況からしても非はボーデヴィツヒにある。お前の行動自体を咎めようとは思わん。だが、アイツはこうも言った。『あの男は何者ですか』と。アイツは軍人であり、私の元教え子でもある。能力は確かだ。そのボーデヴィツヒの言葉だ。私はそれなりに信憑性があると思っている」

「そう言われましても無我夢中だったので……」

疑わしいのは百も承知だ。だからと言って本当の事を言う訳にもいかない。

再び沈黙。そのまま居心地が悪い空間が数分間続いたが、千冬がため息を付いた。

「そんなに私が苦手か？」

「え？」

「普段はあまり目立たなかったから気づかなかったが、今ならよくわかる。お前は私に対して怖れを抱いている」

今更気づくとは教師失格かもな、と千冬は自嘲する。

「いえ、別にそういう事は。今日も授業中に普通に話しかけましたよね？」

「授業中は、な。お前は状況に応じて態度を使い分けているだろう。よくよく考えてみれば私はプライベートのお前を知らない」

「それは……別に教師と生徒ですし関係ないのでは？」

「そうだな。別に公私混同をするわけでは無い。だがそれを差し引いても、お前に対する情報が薄い。これは私の怠慢か？ それとも――」

――それとも、お前の意図したことか？

そう、言外に含まれた千冬の問いに静司は内心冷や汗をかいていた。

どうもここ最近、色々な人に疑いや指摘を受けている。その度に静司は悩まされるのだが、織斑千冬の指摘も新たな悩みの種となりそう

だ。なにせ、実際意図的に授業以外では関わらない様にしてきたのだから。

「——気のせいだと思います。だけど俺もあまり先生に話しかける事が無かったですね。今後は気を付けます」

結局、お茶を濁す事にした。このままではいずれボロが出るので、話を変える。

「そういえばボーデヴィツヒはどうなったんですか?」

こちらが話を逸らしたことは向こうも承知だろう。だが千冬もこれ以上は追及する気が無いようだった。

「三日間の自室謹慎、これが限界だった」

「三日間……土日が休みの事を考えると実質一日だけですね」

「すまないな。この件に関しては弁明の余地も無い」

「仕方ないですよ。他国の代表候補生なんだ。いくらIS学園が基本不干渉でも、日本人が厳しい処遇を与えるのは無理がある」

学園の運営は日本人が行うが、IS委員会に監視されている。そしてその委員会には各国の人間が居るのだ。結局は完全な不干渉などできる筈がない。

「そうか。——なあ川村。お前はボーデヴィツヒをどう見る?」

ふと、千冬が思いついたかのように訊く。

「どう、とは?」

「言葉のままだ。お前から見てアイツはどう見える?」

「いきなり言われても」

と言いつつも静司は考える。ラウラ・ボーデヴィツヒという少女を。

「先生に心酔してますよね。悪く言えばそれしか見てないと思いますよ」

それが率直な感想。彼女の経歴は知っている。遺伝子強化試験体として生み出され、強さを糧に生き、しかしナノマシンの施術でそれを失った。しかし千冬のお蔭で再び強さを取り戻した少女。自分とは似ている様で、しかし別の存在。

「やはりそう見えるか。アイツは力しか見ていない。そしてその力を

私が与えたばかりに私になろうとしている。全くもって馬鹿らしい」
「……」

他人になろうとする少女。それはまさに昔の自分の様な気がした。自らの意思に関係なく他人にされた自分と、自ら他人になろうとするラウラ。どうしてこうも似たもの同士がいるのだろうか。

「妙な事を聞いて悪かったな。今回の件はカニのお蔭という事にしておいてやる。部屋に戻れ」

ふっ、と薄く笑う千冬に見送られ、静司は退出した。

静司が退出した後、千冬はその扉をじっと眺めていた。

カニ漁船。その話の真偽は今後調査するとして、川村静司には注意が必要だろう。唯の無我夢中の行動なのか、それとも別の何かか。限りなく怪しいが決定的な物が無い。ならばそれが出てくるのを待つしかあるまい。

気になるのはそれだけではない。今日、初めて気づいた自分に対する態度。そしてラウラの話の際に何かを考え込んでいた。表面上は隠していたが、そこは世界最強の女。微妙な違和感を感じ取っていた。

今後はもう少し気を配ろう。例え川村静司が敵でなくても自分の生徒には変わらないのだから。

週末の日曜日。植村加奈子は自室のPCの前に座っていた。

覗いているのは女性至上主義が集まるSNS。そこで何時もの様に不満をぶつけ、それに対する同志の反応に満足していると一通のメールが届いた。

「あらっ？」

送信者はSNS内で自分と特にウマが合うHNの人物からだった。タイトルは『至急』と素っ気ない二文字。

「？ 何かしらっ？」

知っている名前だったが為に特に考えるも無くメールを開く。そこに書かれていた文章は彼女にとつて意味不明だった。

『計画は失敗。Tも捕まった。もう駄目だ、俺は先にいく』
「なんなのこれ？」

妙な文章だ。それに何かに焦って、いや、怯えている様な印象を受ける。気味悪く感じメールをゴミ箱に放り込む。

ピンポン。

そのまま削除しようとしたとき、部屋のチャイムが鳴った。新聞の勧誘かしら？　と思いつつインターフォンを取ると、備え付けのカメラに見知った女が映った。

「あら？」

『こんにちは、きちやいました』

それは居酒屋で会うOL。しかし自分は彼女に家を教えただろうか？　酔っているうちに言ってしまったのかもししれない。

疑問に思いながらも玄関の扉を開けるとOLはにっこり、と笑って話しかけてきた。

「こんにちは。折角のお誘いなので来ちゃいました」

「誘い？　私そんな事言ったかしら？」

加奈子の言葉にOLは「え？」と驚き、

「金曜日に飲んだ時に招待したのは植村さんじゃないですか。名前も教えてくれましたし」

「そうだった……かしら？」

記憶は曖昧だ。あの日はドイツの代表候補生が男性操縦者を一人病院送りにしたと聞いて気分が高揚していた。そして帰りに何時もの居酒屋に行き、浴びるように飲んでしまったのだ。どうやらその間に彼女を招待したらしい。

「ごめんなさいね。飲みすぎて記憶が曖昧だったよう」

「凄く飲んでましたもんね。あの……お邪魔でしたか」

「いえ、折角来てくれたんですもの。上がっていきなさい」

流石に罪悪感もあり、追い返せない。大したもてなしは出来ないがお茶位は出すべきだろう。そう決めると彼女を招き入れた。

「そう、よかつた」

背後でO.Lが笑う。それに気づかず、加奈子はふと振り向いた

「そういえば彼方の名前は——」

「今日と明日だけ植村加奈子ですよ」

「何を……？——っ!？」

加奈子が振り向いた先。そこには黒い鉄の塊——拳銃を突きつけたO.Lが笑っていた。

驚いた加奈子は何かを言うより早く、バシユッ！ と空気が抜けた音が響き頭に衝撃が走る。

そうして植村加奈子はこの世から退場した。

閑話 底なし沼一步目

日曜日。午後6時。

静司とシャルロットの部屋は異様な雰囲気にもまれていた。

「かわむーかわむー次はこれ〜」

「ふむ、じゃあセットするか……ん？ どうしたお前ら？」

「どうしたもこうしたも……」

「2人ともタフだね……」

自室から持ってきた鞆からDVDを取り出す本音とそれをデツキにセットする静司。その後ろで一夏達がぐったりしていた。

「朝の8時から今までずっとぶっ通しでアニメ見てんのよ……？ 流石に疲れた……」

「僕もちよつと……内容が面白いから見始めると何とかなるんだけどその合間に一気にくるね」

「始まりは昨日の夜になる。」

「かわむーはもつと色々楽しいものを知るべきだよ」

『アキバに行く前に予習だね〜』

夕食時の本音の言葉に静司も『ああ、予定が合えばなー』と答えていた。

『じゃあ明日は予習しようー。おりむーは明日暇〜？』

『ん？ ああ、俺は特に用事ないけど』

『よーし、じゃあ明日は皆で鑑賞会だね〜。しやるるんもいい？』

『へ？ い、いいけど……そのしやるるんって？』

『シャルルだからしやるるんなのだよ。因みにこっちはおりむーかわむーのむーむーコンビだね〜。しやるるんもむー付けたかったけど、しやるるむーじゃなんかおかしいからしやるるん』

『そ、そうなんだ……』

何か本音の雰囲気にも圧倒されるシャルロットだったが了承。そして一夏と女子生徒が同じ部屋に！ と反応した筈、セシリア、鈴も又参加を表明。

しかしその時は誰しも、朝8時に本音が来るとは思っていなかった。

た。

静司は驚いたものの、一夏も出かけないしまあいいか。と招き入れ、一夏も「俺も構わないぜ」と参加。他の面子も元々休日でも早く起きるような面子だったので問題なし。

そしてアニメ鑑賞会が始まった。

朝8時時点。

「よーし、じゃあどれがいい〜?」

「と、言われてもな……。幾つか本音のおすすめを教えてください」

うんうん、と全員が頷く。異論は無いようだ。本音は「んー」と悩みながらも携帯端末を部屋のテレビに繋ぎ、全員に見えるようにするとに幾つか作品をピックアップした。

「じゃあこれ〜 『駐車王 グゴガイガー』」

「なんか言いづらいタイトルだな」

「というか駐車?」

「うん。決め台詞は『足りない切符は気合いで補え!』だよ」

「違反してるじゃない!」

「つまり歩いて帰るといふ事でしょうか? その……気合いで?」

「私を知るか!」

全員のツツコミで却下。う〜ん、と唸りつつ次のデータへ。

「次はこれ〜 『マドダックス』。耳に残るテーマ曲と無敵の銃撃シーンが印象的」

「……なあ、本音。俺にはとっても可愛らしいダックスフンドが舌を出してハアハア、してる写真にしか見えないんだが」

「うん。主人公はダックスフンドだよ。印象的なセリフは『野犬に……しないで』」

「何があっただんだその主人公(犬)!」

「というか、まず銃撃シーンとやらに突っ込むべきでしょうか?」

「……しかしパッケージは可愛い」

次。

「これも面白いよ〜。痛快娯楽収集癖『ガン・ドーズ』」

「難儀そうな主人公だね」

「というか収集どころか人にあげてないか？ タイトル的に」

「有名なセリフはね、『俺（の家）は豪邸だ！』」

「腹立つわ!？」

「なんで、こう、ツッコミどころ満載なのばかりなのだ？」

「ちっちゃちゅつ、普通の作品じゃつまらないのだよ、ほうきん」

「ほ、ほうきん……？」

首を捻る箒を余所に、本音はふむふむく領きながらデータを弄っている。

「次が本音さんの一番のおすすめだよ」

「ふむ。ばつちこい」

他の面子がツツコミ疲れしてきた中、おく、と本音がデータを變えた。

「じゃくん、『猛省のバグエリオン』」

「……一応、簡単な内容を聞こうか」

「えつとね、人類が自然を壊した事で怒った虫たちと戦う話」

へえ、とシャルロットが頷く。

「bug、つまり虫との戦って訳だね」

「猛省とは人類が反省しているという事でしょうか？」

「ちよつと不安だったけど意外にまともそうじゃない」

「ふむ、悪くないな」

「それにパッケージにロボット映ってるし面白そうだな」

それでいいんじゃないか？ という雰囲気の中、何か予感がしていた静司が聞いてみる。

「因みに決め台詞は？」

「『あなたと伐採したい……』」

「『反省しろよ!』」

「むしろ開き直りすら感じるな。面白そうだしそれでいこう」

そうして鑑賞会は始まったのだった。

流石に多少食事などの休憩も挟んだが、殆どぶっ続けで見続け、終了したのは午後10時。

「自然は……大地は偉大だった……っ！」

一夏は一人空を見上げ、握りこぶしで熱く頷いていた。

「虫があの様に進化したら……私に斬れるか？ いや、自然の代弁者である彼らを斬る覚悟は……」

箒もブツブツと何かを呟いている。

「私……これから一勝することにも木を植えるわ……ぐすつ」

何故か泣きながら自然保護に目覚めた鈴。

「虫怖い虫怖い虫怖い……」

新たなトラウマが増えたらしいセシリア。

「伐採依存症になった主人公達を敵だった虫たちが体を張って正気に戻させる……。どんなに見た目や行動が残忍でも彼らの行動原理は一つなんだね。譲れない思い、か。僕にも見つかるかな……」

涙を拭きながらちよつとアンニユイなシャルロット。

「なんだこの状況？」

「だからお勧めと言ったのだよかわむー」

カオスとなった自室を見渡し唸る静司と、皆の反応の良さに機嫌が良い本音。

「それで、かわむーはどうだった？」

「ん？ ああ面白かったよ」

「んー、かわむーこつちに顔を向けるのだよ」

なんだ？ と振り向いた静司の顔を固定すると、本音の手が眼鏡を外し、前髪をかきあげた。

「ほ、本音？」

「……むう、まだまだだね」

「？？」

何かを悟った様に頷く本音と訳が分からない静司。

「うひひ、次はもつとびびつ、と来るものを準備するので待ってるがいいのだよ」

「あ、ああ。期待しとく？」

良くわからないままに頷き、部屋を見渡す。流石に一日中籠っていたので色々とゴミが散乱し、掃除が大変そうだ。だが、たまにはこう

いうのも良いだろうと思う。今までの人生では経験したこと無かった、何かがそこにはあった。

(これがわかればスッキリするのかな……)

それは誰にもわからない。自分で見つける事だ。だからもう少しこの空気に浸っていたい。

結局見回りに来た千冬に一喝されるまで、静司の部屋のカオスは続いたのだった。

10. Monday attack ①

週が開け月曜日の朝。自室でシャルロットが目覚めると、直ぐに部屋の違いに気づいた。

「静司？」

部屋の両端にあるベッド。その片方に寝ている筈のルームメイドの姿が無い。どこかに出かけたのだろうか？

シャルロットは別に朝が弱いわけではない。しかし朝は静司の方が早い。そして彼はシャルロットが起きるのを確認してから毎朝外出している。一度話を聞いてみるとジョギングに出ている様だった。今日も同じ理由で出ているのだとは思うが、何時もは自分が起きてから一言告げていくので、不思議に感じたのだ。

「まあ、忘れてただけかな……？」

何はともあれ丁度良い。日によるが静司が戻ってくるのは6時半過ぎだ。今は6時な為、時間に余裕はある。

シャルロットは着替えを用意するとシャワールームに向かった。汗をかきにくい体質ではあるが、やはりそこは女子。朝に浴びれるのなら浴びたいと思うのが本音だ。最初は諦めていたが、静司の生活パターンがあまりにもキツチリしていた為、シャルロットも行動しやすかった。

川村静司は不思議な人間だ。こちらの事情など知ら無い筈なのに、助けられてばかりいる。普段はどこか一步引いているようで、アーリーナの出来事では誰よりも前に出て一夏や自分を守った。

彼の行動が、中身が分からない。どこかちぐはぐなルームメイド。

(けど……)

頭に手を乗せる。思い出すのは静司が病院から帰ってきた後の事。優しく、安心させる様に触れられた記憶だ。ほんの数秒の出来事だったが、記憶に強く残っている。

(お父さんが居れば、ああいうことしてくれてたのかな)

シャルロットには父親の記憶が無い。いや、正確には、父親に父親らしくされた記憶だ。愛人の娘として、密かに暮らしていた時は母と

自分の二人だけ。母はとても優しくだったが、やはりどこかで父親にも甘えたいと思う心はあった。しかしそれは不可能だった。何せ父親の顔を全く知らなかったのだから。

それを知ったのが2年前。母が死に、そして自分が愛人の子と知った日だ。その頃にはシャルロットも、自分の立場がどういうものか、理解できない程愚かでは無かった。そして出会った父親であるらしい人物はただ事務的に命令した。IS適性が高いのでテストパイロットとなれ、と。

反抗すべきだったのかもしれない。何故？ と問いかけるべきだったのかもしれない。しかし母が死に、大きなショックと絶望の最中に現れた『父親』と言う肩書きに縋りたかったのも事実だ。例えば、愛人の子でも結果を出せばきつと——。そうして自分は引き受けた。

だがどうだろう？ 2年間、まるで道具の様に使われても文句の一つも言わなかったが何も変わりはない。いや、むしろシャルロットが有能だと知ると、更なる無理を強いてきた。拳銃の果てが、男装しクラスメイトの情報盗むこと。

服を脱ぎ、鏡に映った自分の姿にシャルロットは暗い顔になる。映っているのは特別性のコルセット。女であることを隠す為の鎧。こんなもので自分は皆を騙している。まさに嘘の象徴とも言えた。

これを外して外に出れば、全てが終わる。あの人も、デュノア社も、そして自分も。何度も考え、そして出来なかった。覚悟も、勇気も、そしてそれを成す為の想いも無い、唯の自暴自棄。そんなことを今は無き母親が望んでいるとは思えなかったからだ。

ならば自分はどうすればいいのだろうか？ 答えは出ない。結局、流されるがままに学園生活を送っている。

このまま、何も命令も無く過ごせたら——

無理だと分かっているも考えてしまう。考えるだけならいい筈だ。それが、例え現実逃避でも少しだけ夢を見ても——

「っ、早く入らないと静司が帰ってきちゃう」

所詮夢だ。それは叶わない。それが分からない程子供じやない。

シャルロットは首を振り、コルセットも脱ぐ。思いを水で全て洗い

流すかのようにお湯を全開にして浴びつづるのだった。

『で、お前は外に居る訳か』

「そういうことです」

早朝のIS学園。その学生寮の屋上で静司は小さく伸びをした。勿論、いつ誰が来ても良いように警戒は怠っていない。

静司は毎朝同じ時間に外に出る。それは学生寮の付近に変わりか無いかを調べるためでもあり、そしてシャルロットの朝の準備をしやすくする為でもあった。以前聞いた話だと、汗はかきにくいと言っていたが、そこは女子。やはり気になるのでは？ という自分の勝手な配慮だ。そして何より自分の心臓にも悪い。あんなドキドキした空間でじっとしてられるか！

澄んだ空気と朝日が気持ち良い、清々しい朝。これだけ爽快な朝だ、自分の悩みも解決できるような妙案でも浮かばないだろうか。

『今日雨降るらしいぞ』

「色々台無しにしないでくれませんかね」

はあ、とため息を付く。分かっているさ。爽快なだけで解決するならどれだけ楽か。

『気分爽快になりたいなら技術部が開発した世紀末清浄機送ってやろうか？ コンセプトは『汚物も俗物も消毒だ！』だ、そうだ。花粉もハウスダストも嫌な空気も嫌な敵もまとめて一掃できるらしい』

「その手のネタは昨日で腹一杯ですよ。っていうか何やってんすかあの人たちは」

まさか商品化しないだろうな？ と若干不安になる。あの人たちならやりかねん。いや、流星に誰か止めるか……？

『特許は昨日取ったぞ』

「畜生間に合わなかった！」

『さて、話の続きだが』

俺は……無力だ。呻く静司を課長は華麗にスルー。まあこんな人達だし、と静司も直ぐに復活する。慣れとは恐ろしい。

『毎朝毎朝ご苦労だな。まだ更識家には伝えてないんだろう?』

「……ええ、まあ」

話とはシャルロットの件だ。静司はシャルロットが女であることを更識家に伝えていない。

『ふむ。まあこの件は任すと言ったから俺からとくには言わんよ。だけれどお前の考えは知っておきたいと思っっている』

「……」

『嬢ちゃんの境遇に同情した、という訳だけではないだろう。だが自分を捨て、道具の様に扱われている彼女に思う所があるんだろう?』

「……課長には敵いませんね」

『まだ2年だがお前の父親でもあるんだ。俺がわからん訳ないだろう』

ふつつつつつ、と課長が笑う。普段はおちやらけているようだが、やる事はやるし気が利くのがこの上司であり、親である人の強さだ。そして自分の憧れでもある。

「正直自分でも迷っています。言うか、言わないか」

更識家との関係を考えれば言うべきだろう。シャルロットが脅威とは成り得ないと判断したが、それとこれとは別だ。

しかしそうなったら彼女はどうなる? デュノア社は批判を浴び、おそらくまともな経営は今後出来ないのではないか? 国内だけならまだしも世界中を騙したのだから。そしてそれは、たとえ強制されていたとはいえ、シャルロットも同様だ。世界中の批判の標的になるだろう。もしかしたら同情の声もあるかもしれない。だが、逆の声も確実にある。そしてどちらの数も大きい。それは誰にも分からない。

『同情、妬み、悪意、善意、色々な物に晒されるだろうな。……正直言うとな、お前がそこまで他人を気にするとは思っていなかった。別にお前が冷酷非道だとは言わないが、任務の効率を優先すると思っっていたからな』

「それは……すみません。私情が混じっているのは事実です。ただ――」

『自分でも何故そこまでするのか。正確な理由が良くわかってない、だろ。別に怒ってないさ。むしろ良い事だと思っている。だからヒントをやろう。お前はシャルロット嬢をどう思っている?』

妙な質問だ。静司は首を捻り考える。

「同級生兼ルームメイトであり、注意人物ですが」

『不正解だ。その答えを考えてみる。そうすれば理由もわかる。では第二問』

「……」

『織斑一夏、他クラスメイトをお前はどう思っている?』

「護衛対象であり同級生です」

『またしても不正解だ。じゃあ第三問。先日の馬鹿共が布仏本音を侮辱した時、何故お前はキレた?』

「それは目の前であんなことを言われれば——」

『ならお前は見ず知らずの人間が侮辱されても怒るか? 唯の知り合いが侮辱されても怒るか? ちよつと良く話す人物が侮辱されて怒るか? お前は行動を起こす前に、何をどう考えて行動した?』

違うだろう? と課長は続ける。

『そこにお前の答えがある。お前が誰で、どうあるべきか。直ぐには分からなくても、見つける指針にはなる。だから静司、忘れるな。俺達の名の意味を』

「EXIST……」

『そうだ。EXIST。その言葉の意味は『存在』俺もお前も、そこに居る。それを忘れない事だ。……いやー久々にパパらしい事したな。見直したか? どうだ?』

「アンタ色々台無しだ!」

えー、と不満げに口を尖らせる中年オヤジ。ああ、殴りたい!

『はっはっはっ、悩め悩め少年。それでこそお前を入学させた意味もあるってもんだ』

「は? どういう意味——」

『ひ・み・つ♪ ほれ、そろそろ戻る時間だろ? 通信終了!』

一方的に通信を切られ、一人残された静司であった。

コンコン。

『シャルル、俺だ』

「あ、静司お帰り。入っていいよ」

静司が許可を得て入ると、シャルルは既に制服に着替え髪を乾かしている所だった。その顔はほんのり赤い。

「ただいま。シャルルはシャワー浴びたんだな」

「うん。まだ時間もあるし静司も浴びると良いよ。今日もジョギング？ いつもは声をかけていくからちよつとびっくりしちゃった」

「悪いな。ちよつと考え事してて忘れてた」

実際は課長から連絡が入ったために急いで出たため、忘れていただけだが適当に誤魔化した。シャルロットも特に気にした風も無く、そっか、と笑う。

「けど昨日は凄かったね。一日中アニメ見たの何て初めてだよ」

「俺もだよ。多少疲れたけどな」

あはは、と笑いながらシャルロットはふと思いついた。

「そういえば静司。いつの間にか布仏さんの事、本音って呼んでるね？」

「ん？ ああ、そうだけど」

「仲が良いよね。もしかして——付き合ってるの？」

それは純粋な興味。しかし同時にシャルロットの中で何かが引つかかる。自分の発言に心に重石が乗るような、妙な感覚。

「そんなんじゃないよ。まあ良く話すのは確かだけど」

「そ、そうなんだ」

納得したような、そこか安心したようなシャルロットの態度に静司が首を傾げる。

「どうした？ 様子がおかしいぞ」

「な、なんでもないよ!! ほら、早くシャワー浴びないと遅れちゃうよっー!」

「……? まあそうだな」

首を傾げながらもシャワールームに入っていく静司を慌てながら

も見送る。そして考えるのは今の事。

何故自分は安心したのだろうか？ 自分は静司とは唯の友人な筈だ。確かに気が利くし、色々助かっているのは確かだけど、そういう関係では無い。第一、今の自分は男としてここに居るのだ。それなのに――。

「……」

朝と同じように頭に触れる。静司が触れた場所。そしてそこに父性を感じてしまった自分がある。それが原因だろうか？ いや、決めつけるのは早計だ。そもそも静司は全然父親らしくない。そもそもわからない所だらけだし！ うん、そうだ。この感覚はきつと気が利いた友人が離れてしまうのを恐れたに違いないそうに決まってるだからそうなんだってば！

悶々とシャルロットが悩みこんでいると、携帯の着信音が響いた。こんな時間に誰だろうか？ 疑問に思いつつ液晶に表示された名前を見て、シャルロットの顔が凍った。

出るか、どうか悩む。このまま無視してしまいたい。しかしそれは意味が無い。どうせ後から何度でも連絡は来る。ただの先延ばしだ。着信はまだ続いている。無機質な機械音が重くのしかかる。このままでは意味が無い。それに静司にも聞かれてしまうかもしれない。シャルロットは携帯を掴むと外に飛び出した。

「ん？」

静司はシャワールームから出るとシャルロットが居ない事に気づいた。だが鞆がある事から直ぐに戻ってくるだろう、と判断する。それでも念の為に確認してみる事にした。自分の携帯を取り出し、シャルロットにかけてみるが反応無し。

「ふむ」

どうするか。C1に連絡して場所を特定すべきかと考える。まるでストーリーだが、彼女が注意人物である事に変わりはない。ならば直ぐに行動すべきだろう、と通信機を取り出そうとした時、ガチャリ、

と静かに扉が響きシャルロットが帰ってきた。

「シャルル？ どうし——」

2人は部屋に入る時必ずノックをすると決めた。そしてシャルロットは今までそのルールを破った事が無い。当然だろう、何より自分が助かっているのだから。しかし今はそれが無かった。不思議に思い、静司は声をかけようとし、しかし止まった。

「シャルル……?」

「っ！ な、何かな、静司」

「何って、顔が青いぞ。大丈夫か？」

そう、シャルロットは顔面蒼白になって帰ってきたのだ。その瞳は揺れ、今にも崩れそうな脆い印象を与えた。だがシャルロットは首を振り笑う。

「大丈夫だよ。ちよつと湯冷めしただけかな？」

「……そうか」

とてもそうは見えない。彼女のこの顔は別の何かだ。だとすれば何だ？ 何を彼女をこうさせた？ 先ほどまでは普通だった。ならば自分がシャワーを浴びている間に何かがあり、こうなつたと考えるのが自然。だが何が起きたまでは分からない。それがもどかしく思えた。だからなのかもしれない。

「え？ ……あの、静司？ 何を——きやつ!？」

まるで猫を掴むかのように、彼女の襟首を掴むとベッドへ向かう。シャルロットは何が起きているか分からず目を回して混乱していた。それを無視してベッドのそばまで行くとベッドへ放った。

「そんな顔で学園に連れていけるか。それにそんな状態のお前を連れてつたらクラスの連中に俺が殺される。今日は大人しくしてるといい。朝食は持つてくるから大人しく、な」

わしや、とシャルロットの頭を多少強引に撫でると静司は部屋を出ていった。

部屋を出ると携帯を取り出しメールを打つ。

『シフト変更。子犬は怪我で休み』

それだけを入力し送信。通信する時間がない場合や、短いメッセージ

ジの際はこちらを使っている。簡易メッセージの送信を終えると静司は食堂へ向かった。

静司が出て行った後、シャルロットは一人ベッドの中で縮こまっていた。

分かっていたはずだ。自分の目的が何なのかは。だけどどうしてこのタイミングだったのか。淡い、儂い夢を描いたその後、現実と言う名の悪夢を突きつけられた。

電話の主は父親。内容は簡素に『役目を果たせ。その為の道具は預けた筈だ』とだけ。これが父と娘の久しぶりの会話だった。なまじ、電話の前に『父』というものを考えていただけに、この現実が彼女にショックだった。それなのに――

「……………」

心配し、ベッドまで運ばれ、そして頭を撫でられた。それは幼い頃、母親がしてくれた事と同じ。そして父親は決してしてくれないであろう事。それが心をかき乱す。

何故、父は優しくしてくれないのか。

何故、母は死んでしまったのか。

何故、自分はここに居るのか。

何故、静司は優しくしてくれるのか。

愛人の子だから？ 病弱だったから？ 父の命令だから？ ルームメイトだから？ わからないわからないわからないわからない！

ぐるぐると出口のない思考の迷路にシャルロットは一人迷い続けていた。

それからどれ程の時間が経っただろうか。

重い体を持ち上げるように、シャルロットは起きあがった。どうやらいつの間にか眠ってしまったらしい。机にはトレイに乗った朝食がラップに包んである。横にはメモが置いてあり『昼飯は冷蔵庫の

中』とだけ書いてあった。

フラフラとした足取りで冷蔵庫に向かう。中には小さな鍋に入った雑炊があった。わざわざ食堂で作ってもらったのだろう。

「やっぱり……静司は優しいよ……」

だけど自分は今ここには居られない。どの道、行動を起こさなければ国へ強制的に戻されるのだから。光を失った目でゆらり、と机に視線を向ける。そしてゆっくりと近づき、鍵の掛かった引き出しを開けた。

そこに入っていたのは小さな箱。その箱を手に取り蓋を取る。出てきたのは携帯端末だ。但し、ただの端末では無い。ハッキングと言う犯罪に特化した、最初で最後になるであろう、父親からのプレゼント。それを手に取り部屋を出ようとして、立ち止まる。

自分以外、誰もいない部屋を振り返り、薄く、今にも消え入りそうな笑顔で告げる。

「ばいばい」

一言、それだけを告げるとシャルロットは人気のない寮の廊下へ出て行くのだった。

コンクリートに囲まれた小さな部屋。窓は無く、あるのは扉と鏡のみ。そんな陰気な部屋の中央に男が椅子に縛り付けられていた。両手両足は拘束され身動きが取れず、目も口も塞がれている。

そしてその男の横ではC Iが煙草を吹かしていた。

「さて、そろそろ色々と言ってくれと助かるんだがね」

「……」

「おっと、そのままじゃ喋れんな。ほれ」

男の眼と口の拘束具を外す。その瞬間、縛られた男が声を荒らげた。

「貴様らに語る事は何も無い！」

「何も無い事は無いだろう。こちらは色々訊きたいしな。例えば——
どうやってIS学園の警備情報を手に入れた、とかな」

「ふんっ」

拘束されているのは先日学園襲撃を試みた男たちのリーダー格だった。静司によって意識を奪われ、昏倒した男が次に目覚めた時は既にこの部屋に居た。そしてC1による尋問が始まったのだが、男は口を割らない。

「……なあ、俺はさ、本当なら今頃若いピチピチ女子高生を監視するつて言うとても崇高なお仕事があるんだよ。それがこんなおっさんと二人きりだぜ？ いい加減にしてくれないか」

「黙れ。男としての矜持すら失った愚図共が！」

男が激昂するがC1はやれやれ、と首を振る。

「あのなあ、もしかして勘違いしているかもしれないが、俺達にも矜持位あるぞ？ だからこそお前はまだ無事なんだ。昨日一日はとても優しい尋問だっただろ？ いきなり拷問かますほど非道じゃないつもりなんだ」

実際は捕らえた連中の処理と更識側との折衝で忙しかったのが理由だが、それは言わない。このリーダー格以外の連中の尋問もあつたのだ。あらかた重要な事は訊き終えているが、最後に一つ、重要な事は他の連中は知らなかった。それ故に、口の堅そうなこの男の本格的な尋問を始めたのだ。

「もう一度、噛み砕いて訊くぞ。お前たちに情報を持ってきた男、そいつはどこに行つた？」

「……」

「だんまり、ね。仲間売らないって考えは嫌いじゃないが、仕方ない」

C1はため息を付くと懐から箱を取り出す。中に入っているのは大小様々な針だった。そのうち一本を手にとると男に向かって告げる。

「まずはこれからいってみようか」

「馬鹿が、そんな針で——」

男を無視してC1は無造作に針を男の腕に突き刺した。瞬間、

「あゝうゝがっ、ああああ!？」

凄まじい激痛は男に走り悲鳴をあげた。

「ただの針だと思つて油断したか？ 針治療つてあるだろ？ あれの逆みみたいなものでな、人間の痛覚のツボみみたいなものもあるんだよ。そこを上手く付けば、この通り」

もう一本、針が刺さる。再び男が悲鳴を上げ暴れようとするが拘束されている為、それは叶わない。

「これの良いところは目に見える傷が目立たない事だ。そして一度刺してしまえば痛みは継続的に続く。さて、それを踏まえた上でもう一度訊こう。お前達に情報を持つてきたのは誰だ？」

「ぎょうつがあつ、だ、があああ!？」

「んー、聞こえないな。言う気が無いならもう一本——いや、五本くらい行こうか。」

言う気が無いのではなく、言えない。それが分かっていながらもC1は針を追加する。容赦はする気は無い。まずは徹底的に恐怖を植え付ける。

「あゝかじゃ、じゃい!? ——がつ——つ!? ——い——つ!?」

「呼吸しずらいだろ。そういう点を突いた。まあ死んだら人間それまでだ、頑張つて俺が聞こえるように答えてくれれば、早く済む。はい、三本追加」

「つ——い——つ! ——つ!？」

文字通り、声にならない悲鳴が部屋に響き続けた。

「ノリノリでしたねー先輩」

尋問を終えたC1を待っていたのはどこか不真面目そうな後輩の笑顔だった。

「そら俺の女子高監視ライフを滞らせたんだ。あれ位は当然」

「さすがEXISTきつてのロリコンっすね。そこに痺れも憧れもしませんが」

うるせえよ、とC1は後輩を頭を叩いた。

「痛っ、暴力反対!」

「今の今まで尋問を黙認していた奴の言葉じゃないな……しかし予想以上に早かったな。もう少し粘るかと思ったが」

「先輩の尋問とうい名の拷問はえげつないっすからね。あの人再起できませんかね?」

「そこまで酷くねえよ。あれは一時的な痛みは凄いが後遺症には残らない」

「トラウマにはなると思うんですけど」

それで、と男から聞き取った情報を整理する。

「情報を持ってきたのは20代後半の若者。名は柿崎哲也ね。コイツの情報は?」

「調べましたが特に犯罪歴は無いっす。ただ、何度か女性と問題を起こしてっす。そのどれもが、非常に男に不利な決着してますね」

資料を見ながら「うわーえげつないなー」とぼやく後輩を見やりため息を付く。

「今に始まった事じゃないが、やっぱりそういう理由か」

「現代社会の闇っすよ。女尊男卑。篠ノ之博士は意図してこういう風にしたんすかね?」

「それは本人にしか分からないだろうよ。まあいい、本社へ連絡。柿崎哲也の拘束に向かう」

「了解っす」

時間は少し戻る。

「え? シャルルは休みなのか?」

「ああ、体調が悪そうだから休ませた」

朝は食堂で雑炊を依頼したり、それを部屋に持っていったりと忙しかったので、教室については時間ぎりぎり。それから1限目の休み時間に静司は一夏達に報告していた。話を聞きつけた本音、セシリア、箒。そして何故か1組に居る鈴がやって来る。彼女はかなりのペースで1組に来ているが自分のクラスは良いのだろうか? と時々疑問に思うが、言ったら怒られそうなので静司は黙っている。

「心配ですわね」

「アンタらと違って儂そうだもんね」

「おい、鈴。どういう意味だ」

「お前たちが凶太そうだ、と言う意味だろう」

「……眠……眠……帰宅……ベッド」

鈴の言葉に箒も同意する。本音だけは眠そうに頭をフラフラさせていた。だが、一夏は納得いかないようだった。

「俺だって儂さや繊細さを持つてるぞ。なあ、静司？」

いや、それはどうだろうかと静司は悩む。少なくともあれだけ身近な女性に熱烈アピールされても気づかずにいるのはある意味凶太さではなからうか。少なくとも俺には無理だ。というかい加減気づいてやれ一夏。見ているこちらは彼女達に同情してしまう。

「おい、静司。何で何も言わないんだ？」

「一夏、俺が言えるのはただ一言だ。鏡見てこい」

うんうん、と頷く女性陣に一夏は本気でわからない、と言った様子で頭を捻る。そんな一夏を無視して静司はいよいよ倒れこみそうな本音を支えていた。しかし周りもはや見慣れた光景なので軽くスルーしている。

「けど心配なのは確かね。後で見舞いに行こうから」

「それはいいですわね。川村さん、お邪魔しても大丈夫ですか？」

「……ああ、大丈夫だとは思う。一応帰ってからシャルルにも体調聞いてみるよ」

「それがいいだろう。悪そうだったら今日は安静にした方が良さだろうし、見舞いも見送るべきだろう」

箒はそう言うが、静司が考えたのは別の事。朝のシャルルは確かに顔色が悪かったが、それは体調の性では無い事は予想していた。いや、正確には原因は別にあり、連鎖的に体調が悪くなつた可能性もあったが。

ならば原因は何か？ おそらくは精神的なものだろう。だが何をあそこまでシャルルを追い詰めたのかが分からない。そしてあの時のシャルルは何をするかも分からない不安な雰囲気秘めていた。

それ故に無理やりにも休ませ、C1達にもシフトの変更を依頼したのだ。本当なら自分が近くに居れば良かったが、護衛対象である一夏が学園に来ている以上、優先されるのはそちらだ。現在は仲間達が寮を監視している筈だ。

「つとー！ そろそろ時間ね、私は帰るわ」

「ああ。所で次は何だっけ？」

「忘れたのか一夏。次は植村先生の授業だぞ」

うげえ、と一夏が顔を引き攣らせる。

「俺あの先生苦手なんだよな。厳しいのは当然なんだけどピリピリしているというか」

「そうですか？ 私は真面目で熱心な先生だと思いますけど」

「そうだな、あれ位の緊張感があっても良いだろう。一夏が軟弱なだけだ」

「いや、なんとというか俺達にだけ特に厳しいような気がするんだよなあ」

一夏が気にするのも無理はない。確かに植村加奈子の授業において、一夏、静司、シャルロットは良く指名される。そして答えられないと辛辣な言葉で叱ってくるのだ。そして静司、シャルルに比べて座学の成績が良くない一夏は良い的だった。

「一夏さん達は特殊な立場ですから、先生方もより一層厳しくされるのでは？」

「うーん……」

「ほら、そろそろ先生来るから準備した方が良い。本音もそろそろ起きよう」

静司の言葉を皮切りにセシリアたちは席に戻る。本音もフラフラとした足取りで机まで行くと突っ伏した。大丈夫だろうか？ と席を見やると、隣の生徒が任せろ、と言わんばかりにピース。静司も手を振ってよろしく、と応えた。

やがてチャイムが鳴るのとはほぼ同時、植村加奈子がやって来た。いつも通り、時間ピッタリの登場だ。

「それでは授業を始めます。……デュノアさんはどうしましたか？」

眼鏡越しのキツイ目つきが静司を射抜く。確かに一夏の言うとおり男子には遠慮が無いタイプの人間に思えた。

「体調不良で休みです。申請は出ています」

「……確認しました。ですがIS扱う者として体調管理は必須です。皆さんは気を付けるように。では教科書を開きなさい」

冷たく言い放つと植村加奈子は授業を開始した。

昼休み。いつもの様に鈴が一夏達の所へ行くと、そこでは男二人が燃え尽きていた。

「ちよつと、アンタらどうしたの？」

「ああ、鈴か……」

「心にダメージが、な」

「はあ？」

訳が分からない、といった様子の鈴にセシリアが苦笑いで説明する。

「鈴さんが帰った後、今日は植村先生の授業だったのですが、今日は一段と厳しかったもので」

「この二人は特に集中砲火されたのだ」

「かわむーもおりむーもへとへとなのだよ」

流石の箒もやや憐れむように二人を見ていた。

「あー成程。あの先生キツイもんねー」

鈴も納得したように頷く。植村加奈子の厳しさは評判で、苦手な生徒も多いのだ。

「俺、あの先生の突き刺すような視線が苦手だ……千冬姉とはまた違った恐ろしさがある」

「私もあの先生はあんま好きじゃないわね。けど授業内容はしっかりしてるのよね」

「それでも苦手な物は苦手だ……」

一夏が呻くが鈴は「はいはい、早く食堂行くわよ」と急かすため、よろよろと立ち上がる。そんな中、静司のポケットから短い着信音が響いた。

「メールか？ マナーモードにしとかないと授業中に鳴ったらヤバイぞ」

「ちよつと忘れてた。気を付けるよ」

答えつつ画面を見やり、静司の眼が細まった。

「悪い、ちよつと友人から電話寄越せって内容だった。先に行つてくれ」

「おう。席は取っておくぜ」

「いや、長引きそうだし俺は適当にパンでも買つてくよ。気にしなくていい」

「そうか……。じゃあまた後でな」

一夏と別れ、静司は学園内を歩く。昼休みの為あちこちに生徒は居るが、大抵場所は決まっている。人が居る場所を避け、たどり着いたのは校舎裏のゴミ捨て場だ。ヤンキー盛りの若者ならまだしも、花も恥じらうエリート集まるIS学園生が、わざわざ昼休みに訪れる場所では無い。それでも一応警戒しつつ、通信機を取り出す。

「こちらB9」

『こちらC5。こうやって話すのは久々ね』

「C5？ C1はどうしたんだ？」

『C1はちよつと別のお仕事。それよりも子犬の件で報告があるわ』

子犬、つまりシャルロットの件だ。自然と静司に緊張が走る。

『結果だけを報告するわ。対象を見失ったの。ごめんなさい、こちらのミスよ』

「何だつて？」

静司は自分の仲間を信頼している。だから彼ら彼女らが手抜きをしたとは考えられない。ならば要因は別の何かだ。

そもそも外から学園を、しかもその寮を監視するには限界がある。肉眼など不可能だし、監視装置にも限界はある。できることは学園、学生寮内の警備システムを利用した、要所要所の監視。それに静司が新たに設置したセンサー類での監視だ。これでも大分マシになった方ともいえる。何故なら更識家の協力を得ている為、学園の警

備システムに干渉できるようになったからだ。勿論、寮のカメラを監視する際はC5等女性が行っている。

そして寮の出入り口などは全て監視されている筈だ。それなのに見失ったという事が静司には驚きだった。

『私たちの監視しているカメラは学園の警備システムをそのまま借りた物。だけどついさつき、そのシステムに一時的に不具合が見られたわ。その直後から彼女の姿が見え無い。因みにその間に外部から敵が侵入した形跡はないわ』

「っ！」

それはつまりシャルロットが何かをした可能性が高いという事。彼女は行動を起こしたのだ。

『今の所私たちに指令は来ていない。今は念の為、侵入者が居ないかチェックしている所よ。以前も課長が言ったと思うけど、私たちは企業の戦略や、IS開発競争までには関わる気は無い。だからこのまま彼女の行動を無視することも出来る』

勿論、彼女が護衛対象に何かをするのなら話は別だけどね、とC5は続ける。

「……」

どうするべきか。シャルロットが一夏を狙うか？ いや、それは無い。一夏の周りには常に専用機持ちが2人居る。シャルロット1人でどうにかできるとは思わないし、そもそもただの情報収集ならそこまでする必要もないだろう。今一番可能性が高いのは、シャルロットが学園側から情報を引き出そうとしている事。しかしそうなると、静司達が干渉する理由が無い。あくまで、織斑一夏と他学園生を守るのであって学園を守るのではないからだ。

そして学園側からシャルロットがデータを引き出せたとしても、男性操縦者関してはたいした情報は無いし、白式もただの最新鋭機という結果。つまりデータを持ち帰られても、デユノア社のIS開発が進むかもしれないだけ。それこそ関係の無い話だ。

だがもしバレたら？ シャルロットの行動が学園側に察知されたらどうなる？

デユノア社は破滅。そしてシャルロットも碌な事にならないだろう。だが、それもまたblade9には関係の話。そうその筈だ――

「……例の、無人機は？」

以前、クラス対抗戦で学園を襲撃した謎の無人IS。3機の内、1機は静司が完全に破壊。残り2機は静司達EXISTとIS学園がそれぞれ回収している。静司が確認したのは学園側が回収した物だ。『相変わらず学園の地下にあるわ。箝口令が敷かれたとはいえ、『謎のISの襲撃』はどこも察知している。無人機とは気づいていないでしょうけど、アリーナの遮断シールドを破るほどの威力を持ったIS。確かに彼女がそれを狙った可能性もあるわね』

「……アレの存在は危険だ。それに白式のデータが織斑一夏に危害を与えるきつかけになりかねない」

そう、だから――

「シャルロット・デユノアの所在を至急確認してくれ」

『ふふ、了解。B9、これは仲間としての私からのアドバイスだけど、もつと正直になりなさい』

「いきなり何を――」

『秘密よ。彼女の居場所はこちらで突き止めるから貴方は貴方の仕事をしなさい』

それだけ告げるとC5は通信を終了した。

無人機の存在が危険？ 確かにそうだ。しかしアレの保管場所などそれこそ最高機密。そうそう簡単に知れるものでは無い。

白式のデータ？ それこそとつくに流れていてもおかしくない。何せあの博士が関わったIS。弱腰の日本政府が何も情報提供していないとは思えない。

こんなこと、C5も分かっている筈だ。それなのに自分の願いを聞いてくれた。だが、何故あんな事を頼んだのか。それが分からない。それがただ無性に静司を苛立たせるのだった。

ドアを蹴破り、部屋に突入する。銃を油断なく構え、周囲を見渡し――C1は眉を潜めた。

「先輩強引つすよ、ってうわっ……」

後から部屋に入った後輩が驚いた様な声を上げる。

「死んでますね……」

夕方の曇り空から漏れるわずかな光。それだけが光源の薄暗い室内の中央に男が倒れている。

「そうだな……。C12、お前パソコンを調べろ」

「了解つす」

2人とも動揺したのは一瞬。直ぐに仕事に戻る。C12と呼ばれた女はデスクのパソコンへ。そしてC1は床に倒れている男――柿崎哲也を確認する。

8畳ほどのワンルームマンション。その中心で柿崎哲也は頭部に血の花を咲かせていた。その隣には拳銃が落ちている。死体の状態から死んだのは数日前だろう。

「自殺か……。もしくはそれに見せかけた他殺か」

状況だけ見れば自殺だが、それは詳しく調べなければ分からない。

C1は立ち上がると部屋の中を見渡す。

整理整頓が行き届いた簡素な部屋だ。ベッドと机。そしてテレビぐらいしか置いていない。衣服は押し入れに収納しているらしく、酷く無機質な部屋だった。

「ふむふむ。ん……。？先輩！来てください」

「どうした？」

後輩が何かを見つけたらしい。手招きするC12に近寄ると彼女は画面を指さした。

「これ。例の連中とのやり取りつすね」

「……そうだな」

C12が開いたのはメールソフト。その受信トレイにはこの部屋の主と、捕らえられた男たちとのやり取りが記録されていた。

「んー、しかし変つすね。パスワードは勝手に解除しましたけど、それにしては簡単に繋がりが見えてきました」

「寄せ集めとは聞いていたが、確かに簡単すぎるな……………待て、その最後から2番目、開いてくれ」

「了解つす」

開かれたのは先週の土曜日。昼頃のメールだ。タイトルは『至急』となつている。

『計画は失敗。Tも捕まった。もう駄目だ、俺は先にいく』

「仲間への連絡ですかね？」

「おそらくな。送信先を調べられるか？」

「勿論つす」

C12が男のパソコンと、自分の携帯端末を弄る。

「……………出ました。住所は……………うわ、近いっすね。IS学園のすぐそこですよ。えーと、この住所の住人は……………『植村加奈子』つすね」

「何？」

C1が眉を潜める。

植村加奈子、それはIS学園の教師の名前だ。

そのまま端末を操作しながらC12が続ける。

「この植村加奈子と柿崎哲也は何度か会う約束してますね。——つて先輩？」

C12が首を傾げるがC1は待て、と手で制す。

植村加奈子。IS学園教師。確かに彼女なら学園の警備情報を手に入れられる可能性は高い。そしてB9からの情報によると男性差別の疑い有りとの事だ。そしてその人物は今もIS学園に居る。そしてこのメールを見ているという事は、自分たちが追い詰められている事を知っている筈だ。

「くそっ！」

即座に通信機を取り出し社へ連絡を取る。

『——はい。こちら——』

「C1だ！ 課長とB9に至急連絡！ IS学園教師、植村加奈子を直ちに拘束しろ！」

天気が悪くなってきた。

シャルロットは1人膝を抱えて天井の向こう、ガラス越しに空を見上げていた。

寮を出てから数時間。学園の監視システムに干渉し、一時的に不能にした後、シャルロットは走ってここ、第2アリーナガス管理室に逃げ込んでいた。

正直見つかると思っていた。しかし、父親から渡されたこの端末は相当優秀だったらしい。シャルロットは誰にも、そして監視カメラにも見つかる事は無く、ここに入る事が出来た。流石腐つてもIS開発の大企業。作るものは確からしい。だが、こんなものを作る力があるならもつと別の事に費やせば、そうすれば自分がこんな事をする事も無かったのに。そう感じずにはいられない。

「何しているんだろう、僕は」

泣き笑いの様な顔でシャルロットは携帯を取り出す。その電源は切つてある。今は誰の声も聞きたくなかったのだ。

結局、自分は父親に従う道を選んだ。もう、どうすれば分からなく、結局どうなっても良いと思つてしまつたのだ。そしてどうせ自棄になるなら、最後に、一言でもいいから父親に褒められてみたい。そんな儂い思いが彼女を動かしていた。

彼女の目的はアリーナの端末。そこにはクラス対抗戦での記録が残っているのでは？ という考えからだ。白式が中国の専用機と戦い、そして謎のISとも戦つた場所。黒い翼のISが現れたのもこの近くだ。

謎の襲撃ISと黒い翼のISは箱口令が敷かれている為、表向き情報は無い。しかしあれだけ多くの生徒が目撃し、黒い翼のISは空中で戦闘していたのだ。その姿は目撃されている。それでも、IS学園は不干涉が鉄則の為、表向きは平穏だが、裏では多くの企業や機関、国家が情報収集を行っている。そしてそれはデュノア社も同様だ。当日のアリーナの映像はどこも狙っている。勿論、そうそう簡単に見つかるとは思っていないが、何かヒント位はあるかもしれない。ただ、それだけの理由だった。本当はそんなものはもう無いと分かっている。

てもだ。

今は遠くからISの機動音や銃声が聞こえる。最初は緊張したが、そもそもこんな場所には人はめつたに出来ない。せいぜい点検の業者が来るくらいだろう。それがわかると気にはならなくなった。動くのは夜と決めている。だからあともう少しだけ、ここでじっとしていればいい。

「……雨だ」

見上げていた天井に水滴が落ちる。その数は次第に増え、やがて豪雨となった。ぼんやりと見上げながらふと思う。

「静司達……どうしてるかな」

自惚れかもしれない。しかし彼らは自分を探している様な気がした。きつと心配しているだろう。そしてそれが分かっているながらここでこうしている自分が酷く罪深く思えた。

もういい、もう何も考えたくない。

そんな逃げの感情に任せてシャルロットが目を瞑るのだった。

それからさらに数時間後。

雨は止まず、更に強くなっていた。窓の向こうは完全な暗闇。月明かりすらない夜の闇の中、シャルロットは立ち上がった。その眼には光は無く、幽鬼の様でもあった。

彼女は携帯端末を取り出すと、あらかじめセットしてあったプログラムを実行する。これで監視カメラの映像はダミーに切り替わった筈だ。後は動くのみ。

ゆつくりとした足取りでガス管理室から出る。目指すのはアリーナの管制室。一般生徒は立ち入り禁止のそこになら何かあるかもしれない。

ゆつくりと、誰も居ない暗闇のアリーナの廊下を歩く。そして管制室までたどり着くと、端末からカードを抜き、それを入口の電子ロックに通す。だが、

「え……？」

ピー、というエラー音と共に弾かれた。おかしい。このアリーナに

逃げこんだ時は使えた筈だ。ここだけ嚴重になっているのだろうか？

「これは予想外ですね」

「っ!」

突然の背後からの声に驚き振り向くと、そこにはよく知った顔が居た。

「植村……先生?」

「幼稚な干渉があつたので気になって見に来れば、貴女でしたか。シャルロットさん」

「何故それを!」

今度こそ、息が止まるかと思つた。何故、この先生は自分の本当の名前を知っている? そもそもなぜこんな所にいる? そして何故、そんな冷たい目をしている?

「私の主はまだそれほど興味を持っていませんでしたが、次の研究題材を探すのも部下の勤め。男性操縦者については調べていましたが、貴女には驚かされましたよ。これは社長の命令ですか? ご苦労なことですね」

「そんな……」

知っている。この女は全てを知っている。そして今のこの現場も見られた。

全てが終わつた。

「絶望している所申し訳ありませんが、折角の専用機と適性ランクです。別の実験に使えるでしょうし、貴女も頂くとしましょう」

そこで初めて女が笑う。それは植村加奈子という人間を知っていれば、目を疑う様な、感情に溢れた、悪意に満ちた笑み。

「あなたは……誰?」

「さあ、誰でしょう? 行きなさい【ブラッディ・ブラッディ】」

突時女の周りに巨大な機械の棺桶の様な物が現れる。それが開いたかと思うと、抵抗する間もなくシャルロットを飲み込んだ。

最後にシャルロットが見たのは、悪魔の様な笑みを浮かべる、女の顔だった。

「さて、私も仕事をしましょう」

女はシャルロットを飲み込んだ棺桶を従えアリーナの地下へ赴く。物資搬入口。IS予備パーツ安置所。ガス管理室。下水道入口。下へ下へと向かいたどり着いたのは行き止まり。但し、その壁の横には配電盤に偽装された電子ロックがあった。

女は電子ロックに触れると数桁のコードを打ち込む。ロックが解除され、扉が開く。女はそれが当然の様に中へ進む。その先にあったのはエレベーターだ。

パネルを操作し。最下層へ。静かな駆動音と共に大型エレベーターが降りてゆく。

やがて最下層に付くと、薄暗い通路を挟むように左右に部屋が広がっていた。そこに彼女と、彼女の主の目的の物がある。再び笑みを浮かべて女が進みだした、その時だった。

「っ!？」

一瞬感じた殺気。それから逃れるように体を前に投げ出した。直後、

ギイイイイイッン!

一瞬前まで自分が居た場所を切り裂くかのように、エレベーターの天井を突き破り何かが落ちてきた。その何かは床に激突すると轟音と震動。そして激しい殺気をまき散らしながらゆっくりと立ち上がる。

全身を覆う漆黒の装甲。

両手両足に装備された獣の様な巨大な鉤爪。

そして上に伸びるように立たせた鋼鉄の漆黒の翼。

装甲の装甲をなぞる様に、真紅の光が表面を走る。

かつて、学園を襲撃したISを圧倒的な力で叩き伏せた漆黒のI

S。【黒翼】

その持つ殺気が女を射抜き、吠える。

「その箱の中身、返してもらおう!」

地下での戦いが、始まる。

11. Monday attack ②

「それじゃあ今日も上映会を始めよう」

「テンション高いな、のほほんさん」

夕飯も終わり、学生たちが各々の時間を過ごす中、一夏の部屋には静司とシャルロットを除いた、何時もの面子が揃っていた。

「何故ですの……？ あれほどの恐怖を味わったというのに、私はまたここに居るのは」

「怖いもの見たさつてやつじゃない？ 私は楽しめたからいいけど」

「それで今日は何を見るのだ？」

ふっふっふっ、と本音が前回と同じく、テレビに繋いだ端末を操作する。

「今日はこれ、『超忠臣蔵ヴィオン』主君の無念を晴らす為に47人の部下が巨大ロボットに乗って戦う燃えも萌えも仁義も揃った話題作」

「またどこかパチもんくさい物が……」

鈴が顔を引き攣らせる。その隣でセシリアがそういえば、と首を傾げる。

「川村さんやデユノアさんはよろしいのですか？」

「そうだな。静司達も呼ぼうぜ。というか当然くるものだと思うんだけど」

「えつとね、まだしやるるんの体調が良くないから、今日は遠慮しとくだって〜」

しよんぼり、と肩を落とす本音に、鈴も苦笑い。

「アンタ達仲良いもんね。けど体調悪いなら仕方ないわね」

「そうだな。デユノアも川村もまた次の機会に一緒に見ればいいだろう」

仕方ない、という雰囲気皆が納得する中、本音だけは別の思いを秘めていた。

(かわむ……)

体調が悪いなんて嘘だ。本当は知っている。静司が戦いに赴いて

いる事を。

今この瞬間も、学園地下に侵入した敵を撃退し、同時に捕らわれたルームメイトを助けるために静司は地下に居る筈だ。

事情を知ったのは放課後の事。静司達からの連絡だ。その内容は本音ばかりでなく、姉も、そして出先で連絡を受けた会長も驚いた。シャルルの不在。そして社会科教師、植村加奈子が先日の襲撃に関わっている可能性が高いという内容だったからだ。

IS学園はその特異性から、そこで働く教師は審査を受けている。しかし学園は、世界中のIS適性者を育成する場。生半可な経歴では許されないが厳密過ぎて人員が集まらなければ意味が無い。そして学園の稼働が急務だった事。その結果、一部問題があっても経歴や能力に問題が無ければ採用した。そして植村加奈子もその一人だ。

彼女は能力、経歴には申し分が無いほど優秀だった。しかし、女尊男卑の典型的な人物でもある。だが、彼女はただの社会科教師である事。女尊男卑と言っても、プライベートで愚痴は出すが、仕事自体は完璧な事から採用された。

その植村加奈子が牙を剥いた。これは学園側の大失態だ。

楯無は即座に虚に植村加奈子とシャルル・デュノアの搜索を命じたが、学園内を動ける人員は数が限られている。頼りになるのは監視装置だが成果は出ず時は過ぎるばかり。そのまま数時間は成果なく時間が流れたが、ようやくその所在を知る事となる。

それは更識家で無く、静司達EXISTからの連絡。植村加奈子によつて学園の地下施設に連れて行かれたシャルル・デュノアを発見した、と。

その報告を聞いた更識家の反応は微妙と言えた。学園の地下。それはIS学園にとつて、外に知られるわけにはいかない場所。協力関係とは言え、EXISTにも伝えていない秘密の筈だった。しかしEXISTは当然の如くそれを知っていたのだから。そしてそれを先に察知された事もまた問題だった。

しかし今はそれどころでは無い。このまま揉めていたら学生が、そして地下に保管された無人機が攫われる。

結果、事情を知る中で現状最強戦力である静司が地下に向かう事になった。正体不明の敵にたった1人でだ。

「どうかしたのですか？ お顔が優れませんか？」

「っ！ だいじょぶだよ〜」

いけない。今は自分の仕事をこなさなければならぬ。静司が地下に向かった以上、織斑一夏や他の生徒達を守るのは残った者の役目。本音は織斑一夏が下手に外出しない様に部屋に足止めする役目を任された。ならばそれをこなさなければならぬ。何より、それが静司の助けになる。

(きつと……うん、かわむーなら大丈夫)

不安と信頼。その二つに挟まれながら本音は静司の無事を祈った。

IS学園地下。公式には存在しないその秘密のエリアに爆発と衝撃が連鎖する。その爆煙を突き抜けて、2機のISが奔る。

「そいつを——寄越せえ！」

「っ、しつこい！」

先行するのは灰色のIS。全身灰色。両腕両足は丸みを帯びており、大よそ突起の様な物が無い。更には背中にもまるで亀の甲羅の様に丸みを帯びた装甲。そして左右には呼び出された鋼鉄の棺桶が宙に浮いている。植村加奈子の顔をした女が扱う完全に防御重視のIS【全て血に染まれ】。

そしてそれを追うように奔るのは黒いIS。両手両足には巨大な鉤爪。膝関節部分は槍の様に突出し、刺々しい印象を持たせる。全身を装甲で包み、時折その表面を赤いラインが走る。地下に降りた時にあった巨大な翼は今では邪魔になるため消えている。そして正体を隠す為に言葉全て機械音声に変換されている静司のISである【黒翼】。通路は元々かなり広い。しかし互いに追いつ追われつの2機は銃撃を交し、そして躲す。その度に装甲が壁に触れ火花が散り、避けられた互いの攻撃が床や壁に着弾。爆発を引き起こしていた。

静司の黒翼が瞬時加速を発動。女に肉薄し爪を振るう。余りにも

巨大なそれは、壁を引き裂きながらも速度を緩めることは無く女に襲い掛かるが、女はISを巧みに操り、紙一重でそれを回避した。しかし静司はそこで止まることなく前進。2撃、3撃と腕を振り回すような連撃を繰り返す。

「乱暴な、人です、ね！」

「黙れ！」

やがて女は回避が不可能と悟ったのだろう。足を止め片腕を突き出す。静司はその腕ごと切り裂くべく、爪を振りかぶるがそれは鈍い金属音によつて遮られた。

『ヴァカント・コフィン主無き棺桶』こういう使い方もあります」

爪の連撃を止めたのは鋼鉄の棺桶。それが楯の様に展開されていた。

「そして——」

「ちっ！」

不穏な気配。それを察知した静司が距離を取ると同時、女がいつの間にか呼び出していたショットガンが火を噴く。その銃弾を天井、壁、床を跳ねるように距離を取りつつ回避する。

「呆れましたね。まるで獣です」

「黙ってる。直ぐにその首もぎ取ってやる」

「不可能です。このブラッディ・ブラッディの前では」

知った事か——

全身装甲の仮面越し、静司はシャルロットが捕らえられた方の棺桶を睨む。女もそれに気づいたように笑った。

「随分と気になっている様ですね。そんなに大切ですか？ この中身が」

質問に答えたのは光の一撃だった。黒翼の右腕、固定武装のビームライフルを撃ちこむが、別の棺桶によつて防がれる。

「黙れと言った」

「……本当に乱暴な人ですね」

女は呆れた様のため息を付いた。しかし静司は何としてでも彼女を取り返さなければならぬ。何故ならこれは自分の甘さ、愚かさが

招いたのだから。

——必ず、取り戻す。

出力を更に上げる。黒翼から響く音がまるで唸り声の様に地下に響き渡る。女もまた、次なる激突に構えた。

一瞬の静寂。

「死ね」

2機のISが再び激突した。

「B9、学園地下にて交戦中」

「学園の教師側も異常に気付いた模様です」

「更識家より連絡。織斑一夏の足止め成功」

「C1配置に付きました。準備が出来次第突入可能」

K・アドヴァンス社。技術開発部門試験2部。またの名をEXIS T。その通信室では次々に新しい情報が流れ込んでいく。オペレーターからのその情報を整理しつつ、この部屋の主である男は静かに訊いた。

「監視システムのカットは？」

「課長……やはり不可能です。学園側で物理的にカットするしかありません」

そうか、と課長は頷く。それはある意味予想出来た事だ。

「タイミング的には最悪だったな。シャルロット嬢はともかく、植村加奈子が見つからない訳だ」

「ダミーの情報に入れ替えるのではなく、特定の自分物だけ監視にかからなくする。リアルタイムでそんな事が可能なのでしょうか？」

「実際にやられたんだ。認めるしかあるまいよ」

シャルロットは消えたのは午前中。しかし彼女の場合はシステムを一時的に黙らせ、姿を消した。そのこと自体も確かに驚きだったが、植村加奈子はそれ以上だ。システムを停止したわけでも、ダミー情報を走らせているわけでもない。ただ、自分だけを探知されないようにした。おかげで彼女の存在は外からは全く分からない上に、異常

にも気づけなかった。

「しかもこちらの精鋭が総がかりでもシステムに干渉できない。何者だ……あの女」

シャルロットが姿を消してから静司達は内外から彼女の行方を捜していた。しかし昼が過ぎ、放課後になっても見つからない。警備システムを完全に騙し隠れたのだとしたら、C5達の様には外から探すのは困難だ。しかし静司も一夏達を放って、学園中を探し回る訳にはいかない。隙を見つけて要所要所を見るのが精いっぱいだった。

そんな状況の中、事態は更に悪くなる。

それはC1からの連絡。IS学園教師、植村加奈子を至急拘束しろという連絡だ。

ここに来てシャルロットの不在は別の可能性も出てくる。植村加奈子は、先日静司達を襲った男たちの仲間。ならば、男性操縦者として学園に居るシャルロットを狙っていてもおかしくない。だが午前中の段階では植村加奈子とシャルロットは別の場所に居た筈だ。何せ静司たちが植村加奈子の授業を受けていたのだから。

しかし今シャルロットは1人で行動している。そして植村加奈子も午後になってから姿を見せていない。静司や一夏のように人の多い場所で——さらには専用機持ち2人と一緒に居るのに比べたらはるかに危険だ。シャルロットも専用機を持っているが、植村加奈子の情報が少ない以上、油断は出来ない。

更識家にも連絡を入れ互いに搜索したが、彼女達の姿を捉える事が出来なかったのだ。

しかし先ほど変化が起きた。

それは第2アリーナの事。何かシステムに干渉しようとしたが弾かれた。そしてその直後、シャルロットがカメラの前に姿を見せた。おそらく今までどこかに隠れ続けていたのだろう。探し物の片方が見つかり、安堵したのもつかの間。彼女は管制室に向かったが、そこで妙な事が起きたのだ。

管制室の前。彼女は突然、驚いた様に振り返り虚空に向かって何かを喋り、そして消えた。文字通り、カメラの前から突然消えたのだ。

ここに来て、課長達も気づいた。自分たちの知らないうちに、監視システムが完全に掌握されている。そしてシャルロットの口の動きから彼女がもう一人の探し人の名前を発した事が知れた。

植村加奈子が学園のシステムを完全に掌握し、更にはシャルロット・デュノアを捕らえた。

だが目的は何だ？ シャルロットを狙っていたのなら彼女が隠れていた間に捕らえてしまえばいい。しかしそれをしなかった。更にシャルロットによる干渉から彼女の元に行くまでの時間が早すぎる。まるで最初からアリーナに目的があつた様だ。

そして気づいた。学園の地下。そこにあるものと、その入り口がアリーナにもある事に。

更識家は隠そうとしていたが、元々こちらが日本政府の桐生から聞いている。桐生曰く「信用してますから」との事だったが、今はありがたい。

アリーナの地下に眠る無人機。あの存在は危険だ。それはEXI STも回収していたのでよくわかる。あれがISの、そして戦争の常識を変えかねない代物。正体不明の敵に渡す訳にはいかない。

そこで更識家に話を付け、事情を知る中での最高戦力である静司を送り出した。

「もつとも、言わなくても突撃しそうだったけどな」

「B9——静司の事ですね。正直エージェントとしては」

「ああ、未熟だよ。まだ2年目と言うのもあるが、アイツ自身が子供だからな。感情に流されてる。その感情もわかっていないのにな」

「けど、放って置けないでしょう？」

「血は繋がっていないが俺はあいつの親父だぞ？ 息子を心配して何が悪い」

「課長、忘れてませんか？ 静司があなたの息子であるように、私たちの弟でもあるんですよ」

課長と話していたオペレーターの一人がキーを叩きながら振り返る。

「私たちも出来の悪い弟が心配なんですよ。だからこそ、静司がこれ

以上心配事を抱えない様にする為にこう努力しているんです」

「我が息子ながら愛されてることで。なら、後は学園のシステムカットだけだな。そこは更識家次第だが、それが出来次第C1のチームを学園に突入させる。C5は引き続き織斑一夏の監視を。不安はあるがそれでいこう」

「了解。しかし不安とは？」

「ロリコンのC1——山形の奴を学園内に入れてもいいものか」

「……………とりあえず奥さんに連絡しときます」

「頼む」

静司と女の戦いは当人たちが考えていた以上に長引いていた。それはお互いの力量が想像以上だったこと。そして戦場にも問題があった。

女は後退しながら追う静司にショットガンを放つ。その銃撃を躲し、躲し切れないものは腕で防御しながら距離を詰める。爪の一撃を喰らわせようとした瞬間、女の姿が消えた。

「ちよこまかとー！」

IS学園地下。そこはかなり広い断層構造になっており、迷路の様になっている。女は攻撃の直後、横の通路に逃げ込んだのだ。静司も追うべく、その通路に入り込む。

——警告。前方に高エネルギー反応。

「っー！」

機械音声による警告に急ブレーキをかけ、防御態勢を取る。交差した両腕に女の放ったレーザーが直撃した。熱と衝撃が黒翼を脅かす。だが致命傷にはならない。

「呆れましたね。それなりに高出力の筈ですが」

黒翼の腕は焦げ付き、一部は融解している。しかし戦闘には支障が無いレベルだ。静司はそれを確認する事も無く、右腕の銃口を向ける。その姿に女は笑った。

「聞く気は無いですか。まあ良いでしょう。私も準備が出来ましたし

あまり時間もかけたくありません」

ガシヤリ、と音を鳴らし女のＩＳが両腕を構える。丸みを帯びた装甲はスライドしておりそこから銃口が除いている。当然、静司もその銃口に注意を払う、その瞬間だった。

突如、静司の周りの壁が爆発した。

「つくあ!？」

訳も分らず吹き飛ばされる中、視界の端に女の両腕が光るのが見えた。

「終わりです」

直後、女が再び放ったレーザーが静司を貫く。激痛と凄まじい熱に焼かれながら静司は壁に叩きつけられた。だが、まだ倒れてはいない。

「!」

それは予感。それに従い痛む体を無理やり引きずりその場を飛び退く。一瞬遅れて、壁には何本もの針が突き刺さっていた。

「ふふふ」

「ちいっ!」

爆煙の中から再びニードルが放たれる。それを避けるため更に横に飛ぶが、またしても壁が爆発した。装甲が吹き飛び、わき腹に壁の破片が突き刺さる。

「っ……^{トランプ}罫か」

「正解です。《ゴースト》見えない罫にあなたは囲まれています」

「わざわざ説明するとはな。馬鹿が」

「説明で無く、自慢です。私のこの機体の」

うっとりとして女が腕に頬ずりする。それはどこか気持ちの悪い光景だ。静司も装甲越しに顔を顰める。

「さて、それでは私は私の目的を果たさせていただきます。動かない方が良いでしょう? バラバラになりたくなければ」

そう言い残すと女は無人機に向かう。ここで敵を落すことも考えたが、しくじれば後々面倒だ。ならば動けないままにしていた方がやりやすい。その判断だった。

だが、

ズガガガガガガガガガガガガガッ!

「!?」

背後から爆発音。それも1つでなく連続したものが響く。まさか、と振り返り、思わず息を飲んだ。

そこは酷い惨状だった。もはや壁も床も、天井も無い。周囲一帯が完全に吹き抜きの様に瓦解し、炎と瓦礫が散っている。

そしてその中央。ボロボロの装甲の下から血を流しながらもこちらを向く黒いISの姿があった。その右腕は完全に潰れ、大よそ使い物にはならなく見える。

「自ら爆発させたのですか……? 狂っている……」

「だが、お蔭で広くなった——黒翼」

血を吐きながら放たれたその言葉には苦痛も、痛みも見受けられない。だがそれ以上に、目的を遂行する強い意志があった。そしてそれに呼応するように、黒翼の両肩に光が走り、巨大な機械の翼が現れ、その翼に光が集まる。

R/Lブラスト

放たれた6本の光の柱が地下施設、そして罨ごと女を飲み込んだ。

爆発。

衝撃に押されながらも女は妙な事に気づく。見た目以上に自分の傷が浅い。ならばこれは——

気づいたのとほぼ同時。爆発に紛れて接近した黒翼が既に目と鼻の先で無事な左腕を振りかぶっている。今のは接近するための目くらましだ。そして次の一撃はおそらくこちらの装甲を貫く程の威力を秘めている。女は直感的にそれを感じ、咄嗟に棺桶の一つを前に出す。

「——つく!?」

それがシャルロットの入っている棺桶か。それとも別か。判断が付かない静司は腕を止めざるを得ない。女はニタリ、と笑う。

「隙だらけですよっ!」

「クソがっ!」

棺桶が開き、そこから飛び出したのはニードル。先ほどの攻撃もここから出していたらしい。静司は床、天井、壁を跳ねるように後退しながら避けるが、数本、突き刺さってしまう。激痛に顔を顰める。しかし倒れることは無く女を睨む。

「あなたのウィークポイントはここですね。ほら、この通り」

女はもう一つの棺桶を開く。そこには気を失ったシャルロットが拘束された姿で収まっていた。女はその顔に銃口を向ける。

「さて、ここで引き金を引いたら貴方の反応が面白そうですね」

「その前にそのふざけた脳ごと頭蓋を潰してやる」

今にも噛みつかんばかりの静司の様子に女は笑う。

実際静司の弱点はそこだ。先ほどのR/Lブラストもシャルロットが居たため全力で撃てなかった。女はそれを理解し、人質として使おうとしている。

「ふふ、しかし私もこれ以上時間をかける訳にもいきません。それに——」

女の背後から3つ目の棺桶がやってくる。

「目的の物は手に入れました」

「遠隔操作……」

「正解です」

女は静司との戦闘の中、一つだけ棺桶に別行動をとらせ目的——無人機を手に入れていた。それは別段難しい事では無い。ISの様に複雑なものでは無く、単純なプログラムに従って目的を遂行するだけだからだ。

「それでは私は帰らせていただきます」

棺桶を閉じるとゆっくりと動き出す。だが静司は動かない。その様子に満足し、女はエレベーターに向かう。勿論、警戒は続けたままで、念の為新たな罠もばら撒いていく。

だが、それがどうした？

罠。そんなものは関係ない。自分は自分の甘さが招いたこの事態を収める義務がある。任務がある。そして何より、シャルロットをこのまま連れ去られるわけにはいか無い。ならばやる事は一つ。

出力を左腕とスラストーに。右腕は使い物にならない。だが、自分にはまだ武器はある。

「まだですか……」

女が気づきたため息を付くが気にしない。黒翼がゆっくり腕を引く。その全身から唸り声を響かせ、その度に機体の各所が赤く光る。そして瞬時加速を発動した。

「馬鹿な真似をー」

女の元にたどり着くまでの一瞬。仕掛けられた罠が発動し、爆発をまき散らしながらも静司は女に突き進み今度こそ左腕の巨大な爪を突き出した。

女はそれをシャルロットの入った棺桶を前に出すことで防ぐ。だが、静司は腕を止めない。

「何っ!？」

「……おおおおらあー!」

ガギツイイ!!

「……捕まえた」

「そんな……」

静司の左腕。それは棺桶に突き刺さる寸前、その爪を広げ棺桶を掴んだ。そしてそのまま持てる出力を総動員し、女の制御から奪り取ったのだ。制御を強引に奪われ、されに掴んだ時の衝撃で棺桶は一部破壊されていたがシャルロットは無事だ。

「喰らえー!」

右腕は潰れ。左腕は棺桶。その静司が叫ぶ。両膝の突起が射出され、女を突き刺すべく高速で迫る。

「この……っ!!」

顔を狙ったその一撃は逸れたが、女の腕とわき腹に突き刺さる。シールドを無視したその一撃に女は悲鳴を上げた。痛みと怒り。そして憎悪に揺れる中、女は見た。

黒翼が先ほどの爆発時点まで戻っている事を。

そこで再びその巨大な翼を広げた事を。

そしてその翼が先ほどとは比べ物にならない程光っている事を。

「くっ——!?」

「消し飛べ!!」

直後、残った罨を巻き込みながら放たれた光が地下を包み込んだ。

12. Monday attack ③

IS学園で起きている異常事態。それは当然、更識家やEXISTだけでなく学園の教師たちも気づいていたが、状況把握に関しては最も劣っていた。これは学園の地下は一部の人間しか知らなかったことが原因だった。

元々あそこは日本政府が極秘に作った場所。一方的に負担を強いられ学園を創設した日本だが、それでは面白くない。折角、各国からISの操縦者が集まるのだ。その情報を元に研究する施設を極秘に作っていてもおかしくは無い。

ISの技術は基本的に開示することが義務だ。だが『あらゆる法の適用外』であるIS学園だけはその義務から外れる。しかし日本政府は学園の運営を任されたことを利用し、独自に情報を収集していた。そしてその為の施設が地下のそれだ。

だがそこで戦闘が起きている。それは日本政府にとっては悪夢の様だろう。このままでは世界中にバレてしまうのだから。今はまだ小さな揺れ程度だが、段々とそれが激しくなり、さらには音も響いてきている。外は豪雨な為、なんとか誤魔化しているが、これ以上は危険だった。

「だからと言って、このままにはしておけません」

『だがな織斑君……』

「学園に侵入者が居て、そいつらが警備システムを完全に掌握しているのです。このままではどんな干渉をされるか分からない。故に一度、敵の支配を遮断する必要があります」

『だがそうになると一時的に学園は無防備になる。その間に各国の諜報機関が何をしでかすか……』

「このままではそれ以上の大失態が起きると言っているんです。どちらが貴方の首が飛びやすいか、考えてみると良い」

『……………分かった。許可する』

「感謝します」

学園の総合管制室。そこで通信を切ると千冬は苛立ち気に顔を顰

めた。その様子を見ていた真耶が心配そうに尋ねる。

「織斑先生」

「山田君か。やっと許可降りた。更識に連絡を取ってくれ」

「わかりました……しかし本当に良いんでしょうか？」

「良くは無い。だが他に方法も無い」

学園の警備システムの遮断。本来ならいい筈が無い。だが現在システムは完全に掌握されており、このまま使用するのは危険だ。つまりこれは賭けだ。

「更識が用意しているというサブシステム。切り替えにどれくらいかかる？」

「先ほどデータは確認しました。元々準備はある程度整っていたようですが、それでも30分はかかります」

「長いな……しかし山田君がそう言うならそれが最速なのだろう」

普段はどこか頼りないが、彼女の能力が高い事を千冬は知っている。これは信頼だ。

「けど本当なのでしょうか？ 植村先生がスパイだったなんて……」

「更識からの情報だ。こんな状況で冗談を言うとは思わん。だが、」

植村加奈子がスパイ。ではもう一人、下で戦っているのは何者だ？

地下の情報は完全に遮断されており、情報は掴めていない。更識家は何かを知っているようだが、あれは味方です、という答えが返ってくるのみ。教えるつもりがないその返答に不信感を持つのも無理は無かった。

だが、いまはそれに頼るしかない。

「システムカット、準備できました！」

「よし、各自IS展開！ ハイパーセンサーの範囲を広げろ！ 学園のシステムがダウンしている間はISが頼りだ！」

『了解！』

現在学園の周囲でISに搭乗し警備に当たっている教員たちに告げる。範囲はある程度限定されてしまう上に、今夜は豪雨に加えて雷も酷く索敵には向いていない。だが何もしないよりは遙かにましだ。本来は千冬も出たい所だが、IS戦闘を最も熟知している彼女が臨時

指揮官を任されていた。

やがてシステムが一時遮断され、管制室の明かりが一瞬消える。直ぐに非常灯に変わり、薄暗くなつた管制室で残つた教員たちが復旧作業を急ぐ。そんな中、

『緊急連絡！ 上空に所属不明のI Sを確認！ ……高エネルギー反応！』

「何っ!？」

警備に当たっていた教員からの報告。それを確認しようとした途端、轟音と同時に学園が静かに揺れた。

「きやああ!？」

「落ち着け！ 今の音は雷だ!！」

慌てる真耶を叱咤しつつ、通信を繋げる。

「何があつた!！」

『所属不明のI Sが地面に何かを撃ちこんでいます！ これはまさか——』

再び学園が静かに揺れる。豪雨と雷で千冬たちには分からないが、外では低く、唸るような音が断続的に響いていた。

『爆弾です！ 奴は爆弾を地下に撃ちこみ起爆させています!！』

状況に気づいた教師の一人の報告に全員が青ざめた。まさかそのI Sは——

『下にいる人間もろとも、生き埋めにするつもりです!！』

上空にI Sが現れる少し前。学園の地下でゆっくりと動く影があつた。

熱い……それに息苦しくて、痛い。

「んっ……」

鼻に付く煙の臭い。そして何かが崩れる音と、パチパチと燃える音。その音に起こされるようにシャルロットはゆっくりと目を開いた。

「シャルは……?？」

何か狭い空間に押し込まれている。目の前には壁があるが、穴が開き、そこから外の様子が見えた。天井が崩れ炎に照らされ赤く揺れている。ここはいつたいどこだろうか？　そもそも僕は何故ここに……？

起きあがろうとして違和感に気づく。手足が動かない。何かに拘束されている様だ。シャルロットからは見えないが、彼女は両手両足を棺桶に固定されていた。

自分は捕まっている。それを理解すると同時、記憶が蘇る。夜に鳴るまで隠れていたアリーナ。その管制室の前で植村加奈子に襲われた事を。何か、箱の様な物に押し込まれ、薬か何か匂いが箱の中にしたかと思つたとたん、意識を失つたのだ。

「このっ……」
体を強く動かすがびくともしない。しかし自分には別の手段がある。

(おいで、ラファール)

自らのIS。ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡを呼び出す。光の粒子が体を包み、そして拘束を強引に引きちぎり、箱を内側から破壊するようにISがその姿を現す。

ISに搭乗したシャルロットは状況判断の為、ハイパーセンサーを作動した。

——12時の方向。距離5にIS反応。

「!?」

自分の真後ろを示す警告に驚き慌てて振り返り、そして絶句した。そこに居たのは巨大な両翼を広げた黒いIS。その後ろ姿はどうか神秘的で、そして威圧感に溢れており、思わず後ずさってしまった。びちゃ

「えっ？」

ふと、足元で聞こえた水音。そこに目を向けシャルロットは悲鳴を上げた。

「きゃあああ!?!」

それは血だまり。丁度皿の様に窪んでいたその場所に、血が溜まっ

れ去り、そして先ほどまで静司と戦っていた女。ISは黒翼以上に破壊され、膝と肩には黒翼の膝から放たれたアンカーが突き刺さっている。両腕両足の装甲は融解し、まだISが稼働しているのが奇跡の様な状態だ。そんな満身創痍の女は狂ったように笑っていた。

「消し炭にするつもりだったが、頑丈だな」

シャルロットの無事を確認し、多少冷静になった静司が指摘すると、女は笑いを止め、ぐりん、と首を静司に向ける。その眼に宿るのは、憎悪。

「よくも……あの方から頂いたこのブラッディ・ブラッディをつ！」

「あの方……？」

「ふふ、ふふふう殺す殺す磨り潰して殺す叩きつけて殺す焼いて殺す串刺しにして殺す殺す殺す！」

そこに先ほどまでの余裕は見られず、狂ったように呪詛を吐く。その姿にシャルロットは思わず後退してしまふ。

「グダグダ五月蠅いんだよ。だったらこっちはシンプルに首をもぎ取って殺してやる」

静司もまた、このままでは終わらない雰囲気を感じ、左の爪を構える。体を動かす事で傷が広がり、更に血を流してしまふ。それを見たシャルロットは唐突に気づく。

（もしかしてこの人は僕を助けるために？）

自分を攫った者と敵対し、そして無事で良かったと心配された。その状況からも彼が味方だと分かる。そして彼の戦う目的は——自分。それを理解した途端、シャルロットの顔が青ざめた。

「やめて！ これ以上無理をしたら……！」

目の前のISの傷は深い。そして流れる血が操縦者の危険を知らせている。これ以上は命に係わりかねない。だが敵は止まる気配は無く、むしろ殺気を膨らませるばかり。それに呼応するように黒翼も唸り声を上げていく。駄目だ。このままではいけない。だがどうすればいい。巻き込んだのは自分だ。自分に何が言える？ 何ができる？

このまま何も出来ずにいれば2人が激突する。お互いのあの傷だ。

下手したら両方死ぬだろう。だが見ている事しか出来ない。自分にはどうする事も――

『はいはいストップ。まったく血気盛んねえ』
「!？」

突然響いた場違いな明るい声に2人の動きが止まった。

『あなたを今失う訳にはいかないのよねえ。だから戻ってらっしゃい。最初の目的は達したのだからねえ』

声は地下で生き残っていたスピーカーの各所から響いている。

「何者だ」

『そのこの保護者であり上司である者よ。悪いけど今回は引かせてもらおう』

「させるとでも?」

言い放ち女には翼を向ける。だがスピーカー越しの声は笑った。

『させてもらうのよねえ。わかったわね、シエーリ?』

「はい、わが主」

シエーリと呼ばれた女は先程までとは打って変わって落ち着いた顔に戻ると静司を無視して後退していく。

「ふざけるな!」

散々好き勝手した挙句、このまま逃がす? そんな事許す訳がない。傷ついた体を動かし追撃しようとした瞬間、地下にこれまでとは比べ物にならない衝撃が響いた。

「っ!? これは……!」

「きやあ!」

断続的に響く轟音と、衝撃。これは上からの衝撃だと静司は気づいた。天井が崩れ、唯でさえボロボロの地下が埋められていく。

『ではさようなら。黒い翼のイレギュラー』

「ちいっ!」

崩れゆく地下の中、飛び去る女にR/Lブラストを放つが当たるところもなく、壁を破壊するに留まる。その間にも2人の居る地下はどんどん埋もれていく。

これ以上ここに留まるのは危険だ。それに最優先すべくはシャル

ロットの身柄。自分たちも脱出しなければならない。

「来い！」

「きゃっ」

腕を掴み黒翼で地下を駆ける。最初は引きずられていたシャルロットもラフアールを動かし直ぐに自ら飛び出した。

「どうするの!？」

「上上がるエレベーターがある！ そのシャフトから直接ISで地上に出る！」

おそらくあの女も別のエレベーターに向かったはずだ。入口は複数ある。その一つを目指す。

崩れていく地下を右へ左へ高速で駆ける。その間も衝撃は続き、瓦礫の山が降り注いでくる。

(あと少し……！)

あと少しでエレベーターシャフトが有るはず。更にスピードを上げようと出力を回した瞬間、ぐらり、と静司の視界が歪んだ。

「くそっ……！」

平衡感覚を失い壁に激突した静司はそのまま床を滑り、やがて落ちてきた瓦礫の山に激突した。

「大丈夫!？」

シャルロットが慌てて傍に降りて声をかける。朦朧とする意識の中静司は原因に気づいた。

血を流し過ぎたのだ。

怒りに身を任せ、何も考えずに戦った結果。唯でさえ、このISは欠陥が多いのにそれを無視して戦った成れの果てがこれだ。だが、このまま2人仲良く生き埋めになる訳にはいかない。

「……行け」

「え？」

「この道を進めばエレベーターがある。シャフトを破ってそこから脱出しろ。まだここより可能性がある」

「そんな……！ あなたを置いてなんて行けないよ！」

今にも泣きそうにシャルロットが叫ぶ。その心にあるのは後悔。

自分があんな行動をしなければ捕まらなかつたかもしれない。自分がもつと自分の意思を持つていけば、状況に流されなかつたかもしれない。そうすればこの人もこんな目に合わなかつたかもしれない。なのに置いて行けと？ そんな事できる訳がない。いつそ自分が死んでしまえば――

暗い昏い感情に押しつぶされそうになるシャルロットの頭に固い手が乗せられた。

（――えっ？）

一瞬、ルームメイトの姿を思い出す。だが目の前に居るのは正体不明のIS。彼では無い。その黒いISはゆっくりと語る。

「そんな目をするな。お前のせいじゃないというのは簡単だが、お前はそう思わないだろう。だが、だからと言ってこの状況でお前が死んでどうこうなる事でも――ない」

「けど――」

「俺にも不安はある。後悔はある。分から無い事だらけで押しつぶされそうな日もある。それでも死んでやろうとは思わない。俺は俺を生かしてくれた人たちを、裏切りたくない」

「……」

「お前はどうか？ 今ここでお前が死んだら。この後お前が自分を呪って死んだら、俺のこの行動の意味が無くなる。傷を負った意味が無くなる」

「その言い方は……卑怯だよっ！」

「そうだな。だが聞いてしまったからにはお前は生きようとするだろう？ お前を後悔させる理由が、お前の生きる理由にもなる。俺もそうやって生きてきた」

そんな言い方をされたら。お前が死んだら俺は無駄に傷ついた事になる、だなんて言われたら死ぬるわけはないか。けど、生きて戻っても待っているのは父の傀儡という自分の役割。それが彼女を躊躇わせる。

「これは俺も人から言われて意味を考えている事だが」

「えっ？」

『もつと楽に生きろ』だそうだ。どういう意味なのか。なぜ言ったのかは分からないけど、きつとお前にも言える事なんだろう。だから――行け。崩壊が激しくなってきた。」

地下の崩壊が激しくなってきた。断続的な轟音は既に収まっていたが、限界を超えたダメージで地下施設はどちらにしろ崩壊を止められない。

「それでも、あなたを置いていくなんてできないよ!」

「言っただろ。俺は死ぬ気は無いつて。何とかして生き残るさ」

そうは言うがどんな手があるか? 手段は思いつくが、肝心のエネルギーが足りない。戦闘で使いすぎた上に、機体もボロボロだ。とても実用的では無いが――

「……………それでも、僕はあなたを見捨てる気は無い!」

そう言い放つとシャルロットは黒翼を抱えるようにして掴むと動き出す。ISの出力は元々かなり高いため、本来なら一機抱えたぐらいでは機動力が落ちるだけだ。しかしここは地下。そして崩壊した瓦礫が降り積もり、進行を阻害する。静司が自由に動ければまだマシンだが体が動かなかつた。

「おい、いいから――」

「うるさい! あなたは勝手だ。助けてくれて、傷ついて、それで今度は1人で逃げろ? 楽に生きろ? 僕はここまで恥知らずなことしてきたのに楽になんてなれるわけないよ!」

「……………」

そうだ、とシャルロットは憤る。それは自分への怒りであり目の前の謎のISの搭乗者への怒り。自分でも我儘だと思う。自分が招いた事態なのだ。それでも、この人を置いていく。それだけはしてはいけない。それだけは許せなかつた。

瓦礫によつて道が塞がれば破壊し、突き破り、シャルロットは進む。そこにあるのは何としても共に生き残る覚悟。今までの傀儡の様な自分とは違う、強い意志と覚悟をもって突き進む。

(あと少し、あと少しの筈!)

希望を目指してシャルロットは奔る。だが、

「行き止まり!？」

進む先。そこは完全に崩壊し道は無い。突き抜けようにも瓦礫の山は厚く、今もまだ崩壊し続けている。

ここで終わりなのか。折角ここまで来たのに。

再び訪れた絶望を前に、肩を落とすシャルロットの方を静司は掴む。

「そうだな……勝手だったかもしれない。残される気持ちも置いていく気持ちも知っていたはずなのにな……」

「どういう——」

「よく、頑張った。これくらいなら——行ける」

ふら付く機体を立て直し黒翼を展開する。しかしそれは肩にではない。翼の根元から腕に装着するように、左腕に両翼が現れる。

「《プラズマブラスト》Set」

両翼が合体し、鋼鉄の翼が形を変える。羽を折り畳むように変形していき、やがては長身の砲台と変わる。そこから5本の羽が飛び出し黒翼の前に展開。互いを光で繋ぎ光のリングとなる。

——砲身形成完了。収束機展開完了。チャージ開始。

「ぐっ……」

左腕に残ったエネルギーが集まる。元々通常のISと異なり<r
b>欠陥機

</rb></rp><(</rp><rt>… </rt></rp><
</rp></ruby>であるが為に降りかかる反動を強引に押しこめる。

——チャージ12%。これ以上はISの展開に影響があります。

「十分だ……っ!」
ファイア
発射。

普段使うR/Lブラスト。その全ての出力を纏めた高出力の砲撃が放たれた。静司はその大きすぎる反動を残った力で押さえ付け、何とか踏みとどまる。

放たれたそのプラズマ砲は瓦礫の山に突き刺さり、そのまま全てを巻き込んで消滅させていく。

「す、すごい……」

嘩然とシャルロットが見守る中、やがて光は細くなり消えていく。同時に黒翼がその場に倒れこむ。

「！ 大丈夫!？」

「なんとか、な」

「そうは見えないよ……早く脱出して手当を！」

シャルロットは倒れこんだ黒翼を抱え、空いた穴へと突入する。黒翼が開けた穴は周囲が完全に焼け焦げエレベーターシャフトまでの道を開いていた。

そして今の砲撃の影響もあるのだろう。崩壊はいよいよ激しくなり、今すぐにでも崩れ落ちそうだ。焦りながらもボロボロのISを気遣うようにしてシャルロットはシャフトへ飛び込むと、出力最大でシャフトを飛び上がる。

「いっつっつっつけええええ！」

シャフトの上からも落ちてくる瓦礫をアサルトカノン『ガラム』で砕き、邪魔な天井ヘグレネード弾を放つ。砕かれ、雨がしたり落ちるその穴からシャルロットと静司は飛び出した。

その直後、地下が完全に崩壊した音が学園に響き渡った。

2人が脱出したのは学園の第5グラウンド。その脇にある変電室の傍だった。巧妙に隠されていたそこは今、シャルロットが破壊したことによりその姿を晒している。

その穴の直ぐ傍でシャルロットが叫んでいた。

「しっかりして！ 直ぐに、直ぐに人を呼ぶから！」

泣きそうな顔で彼女が語りかけるのは黒いIS。静司と黒翼だ。脱出して安心したのもつかの間、まったく動かなくなった黒翼にシャルロットの不安が積もる。

（ISが展開しているって事は、まだ生きてるはず。だけど、このままじゃ治療もできない！）

目の前の人物の生存を証明している全身装甲が、逆に治療の妨げに

なっている。それにどの道こんな場所では治療は不可能だ。誰かを呼ぼうと通信を繋げようとしたシャルロットに声がかかる。

「安心しろ。もう来ている」

「!? 誰……?」

それは妙な集団だった。全員が黒い戦闘服の様な物を着ており、顔はガスマスクで隠している。とてもじゃないが医者には見え無い。そう判断するとシャルロットは威嚇するようにガラムを構えた。

だが先頭に居る男は首を振った。

「怪しいのは重々承知だが敵じゃない。そいつの仲間だ」

「……………」

「参ったな……どうしたもんか」

当然信用できないシャルロットと困ったように首を捻る男。その男に後ろから声がかかる。

「そろそろ時間がヤバいっす。それにB9も早く治療しないとやばいっす」

「わーってるよ。なあ嬢ちゃん、このままじゃそいつは死ぬ。それに見ての通りそいつの中身を知られるわけにはいかないんだ。俺はそいつを死なせたくないし、嬢ちゃんに危害を加えるつもりなら声をかける前にやってる。信用してくれないか?」

「……確かにそうです。だけど——」

まだちゃんとお礼も言えていない。なのにここで別れたらそれは叶わなくなってしまうのではないか? しかしそんな事よりもこの人の命の方が遥かに大事だ。だが、それだけで信用するのも——

「だい、じょう……ぶだ」

「! 気が付いたの!」

背後からの呻きに驚き振り向くと、ゆっくりと体を起こそうとする姿に目を見開いた。

「無茶しないで!」

「嬢ちゃんの言うとおりでB9。ここは俺達に任せて寝てろ」

「C1、か……。だが、俺、は……」

「良いから寝てろってんだ。嬢ちゃん、いいか?」

「……はい」

今の会話で二人が知り合いだと分かったシャルロットも大人しく引き下がる。

「よし、C12。出番だ」

「了解つす。ではcover12改めblade5行きます」

blade5と名乗った女が前に進み出る。その体を光が包み、I Sが現れた。

「黒い……ラファール？」

「ま、そういうことだ。よし、撤収！」

その黒いラファールは黒翼を抱え上げると低空で男たちと共に去っていく。その後ろ姿にシャルロットは叫んだ。

「あのー！」

「ん？」

気が付いた男が振り返る。そんな彼に疑問をぶつける。

「一体、何があったんですか？」

「うーむ、答えてあげたいのも山々だがあまり言えないんだなこれが。まあ俺達もやつと学園に入ったと思ったら敵には逃げられ、結局やったのはあいつの回収位だから笑えない」

自嘲する様に語る男にもう一つ、重要な事を聞く。

「あの人は……」

「必ず助けるさ。だから安心しろ。——そうだな、アイツが回復したら一言くらい言いに来させるさ。ま、中々難しいがな。じゃあ時間が無いから俺達は消える。あーそれと俺達の事は秘密な？ アイツの為に。そこに居れば嬢ちゃんにも助けが来るから、少し雨は冷たいが我慢してくれ」

「……わかりました。あの人を、よろしくお願いします」

深く、深く頭を下げるシャルロットに頷くと男も去って行った。

それから少しして、学園の教師たちによってシャルロットは保護された

13. 優しさと悪意

「失礼しました」

一夜明けたIS学園。昨日の事情聴取を終えて退出したシャルロットはどこか漠然とした思いで居た。それはたった今まで受けていた事情聴取の内容にある。

自分は学園のシステムに干渉した。これは敵対行為とも取れる。最初に部屋に連れていかれた時、シャルロットは尋問が始まると思っていたのだ。

だが、始まったのは尋問で無く唯の事情聴取と、地下で見た事は秘密にするように、という誓約書を書いただけ。何も咎められることが無かった。むしろ攫われた自分を心配し、学園の警備については謝罪までされてしまった。

自分の立場が、『情報を得るために学園を混乱させた加害者』から『危険な人物に攫われた被害者』にすり替わっているのだ。これにはシャルロットも啞然とした。自分の秘密も全て話す事だろうと覚悟していたシャルロットにとって、その展開はあまりに予想外で、言うタイミングも逃してしまった。

事情聴取を行ったのは日本政府役人。おそらくIS委員会のメンバーでもあるだろう桐生と名乗った男と、当時の学園現場責任者として織斑千冬が同席していた。そして二人ともシャルロットの行為に関しては何も言わなかった。いや、知らないような素振りすらあった。

「どういうことだろう……?」

だがそのおかげで自分は今もここに居る。それは罪深い事の様にも思えたが、昨日言われた事を思い出す。

「楽に、か。けどやっぱりわからないよ……」

全てを明かして楽になる。それがあのISの搭乗者が言ったことか。それとも他に何かあるのか。答えは出ない。

1人悩みながら寮に戻ったシャルロットは別の問題に気づいた。

(どうしよう……。静司になんて言い訳しよう?)

地下で起きた事は秘密。だがそうなると昨日一晩不在だった理由が必要だ。しかも最後に分かれた時、自分は体調不良という事で寝込んでおり、かなり心配されていた。

（病院に行っていた？ 駄目だ、それじゃあ連絡してない理由が無いよ……。どうしよう）

何かいい手は無いか。思考の海に溺れつつ部屋に戻るのだった。

眼が覚めると全身に走る鈍い痛みを目を顰めた。その痛みを我慢しつつ首を動かす。

そこは清潔感ある白い壁に囲まれた病室だった。患者は自分一人で、寝ているベッドの傍には椅子が一つ。後は心電図や点滴と言った機材が並んでいる。

「よう、起きたか」

「課長ですか」

不意に扉が開き入ってきた課長に静司も痛む体を無理やり動かし起きあがった。

「無理するな。まだ痛むんだろう」

「なんとか大丈夫ですよ。ここは？」

「学園に一番近いK・アドヴァンス社の営業所。その医務室だ。昨日の事は覚えているな？」

当然だ。忘れる訳は無い。だがその後、失血と傷が祟って意識を失った後からの記憶は無い。

課長もそれは承知なのだろう。椅子に座り説明を始める。

「あの後意識を失ったお前をここに運び込み治療をした。右腕の骨折とわき腹の裂傷。それにあちこちに穴まで開いていたが、ほとんどはそいつが直してくれたよ。最低限だけだな」

課長は意味深に静司の左腕を見やる。静司も成程、と頷いた。

「搭乗者の傷を癒す生体再生能力か。本当に機械なのか疑いたくなるな」

「俺に言わないで下さいよ。言うなら作った奴にです」

左腕をコンコン、と叩く。今は人工皮膚は剥がれ、鋼鉄の左腕がむき出しになっている。そこには『LC001』と刻印が打たれている。「かつて篠ノ之束が作成し、しかし『失敗作』として廃棄されたコアか。あの白騎士の原型ともなったいわばプロトタイプ。だがシールドが使えないのはどうにかならないのか？ お蔭でお前はこの様だ」

「それこそ俺が訊きたいくらいです。コアそのものがシールドを拒否するんですよ？ 俺にどうしろうと」

そう。それこそが黒翼の欠陥。本来備わっている筈のシールドバリアの展開不可。縦者を守るためにISの周囲に張り巡らされている不可視のシールド。通常、ISは攻撃を受けるたびにシールドエネルギーを消耗し、エネルギー残量が無くなれば機能を停止する。勿論これは模擬戦や実験用の仕様で、軍事用では異なるが。そして、シールドバリアを突破するほどの攻撃力があれば操縦者本人にダメージを与えることができる。

だが黒翼にはそのシールドが無い。後付でいくら準備をしてもコアがそれを拒否してしまうのだ。お蔭で静司は物理シールドで防ぐか攻撃を躲すしか無い。

「そのシールドの分のエネルギーを全部攻撃に回しているんです。黒翼のコアは相当攻撃的ですよ」

「お前が言うか……。まあ絶対防御があるだけマシか。その分のエネルギーも攻撃に回しそうだが」

「ISには独自の意識があると言いますからね。それがコイツの性格なんでしょう」

かつて失敗作とされた黒翼のコアは博士の手で破壊され廃棄された。何を失敗したのかはわからない。シールドが使えない事か、他の何かか。だが、研究段階で生まれただけあって黒翼のコアは異常なまでにスペックが高い。所謂『全部乗せ』であるからだ。

そのコアは破壊され、廃棄された筈だが束に気づかれることなく自己修復を行った。そして束が失踪後、ある組織によって回収されたのだ。

「ま、その謎はおいおいだ。黒翼の生体再生も完璧じゃないんだろう

？ 痛む体がその証拠だ」

「致命傷だけは直してくれましたが残りは自分でやれって事でしょう。けどまあ、助かりまし、たっ」

痛む体に鞭を打ち立ち上がるべく体を動かす。生体再生と言っても死ぬレベルの傷が重症一步手前になったようなものだ。痛むのは当然と言えた。そんな静司に課長もため息を付く。

「学園に戻るつもりか」

「はい。それが任務ですし、行かなきゃならないところがあります」

「はあ、わかった。だがその前に現状だけ教えてやる」

「自分で言っておいてですけど良いんですか？」

てつきり止められると思っただので、言い訳を考えていたのだが。

「言っても聞かんだろう。命令することも出来るが、まあそこは自己責任だな」

「感謝します」

「感謝するなら早く傷を治せ」

もう一度、ため息を付くと現状を話しだす。それは概ね静司の予想通りとも言えた。

あの崩壊は敵の増援によるもので、学園の教師たちが応戦したが全員返り討ちにあっただけらしい。そのまま敵は逃亡。教師達は負傷した。

地下は第5グラウンドごと完全崩壊。一夜にしてそんなことがあったので生徒達も現在大騒ぎらしい。雨と雷が酷かったとは言え、音は隠せても揺れは隠せなかったのだ。昨日の不自然な揺れと関連付けて様々な憶測が飛び交っている。当然だろう。

「シャルル・デュノアは無事保護。目立った怪我も無しだ」

シャルロットではなく、シャルルと呼んだ課長の意図を察し、静司は驚いた。

「課長、もしかして」

「ああ。今の彼女は今回は唯の被害者という位置になっている。彼女の行為や、状況からしても自業自得でもあるし、同情する部分もある。なのでてっとり早くお前に任せることにした」

「はあ」

「前も言っただろ。『この件はお前に任せる』と。お前がバラして彼女を国に送り返すもよし。そのまま放って置くもよし。お前が決める。今回の事件、植村加奈子の侵入は俺達全員のミスだが、彼女の暴走はお前にも非がある。彼女の様子がおかしいのにも関わらず、部屋で休ませただけでそれ以上踏み込まなかった」

「……」

「結果、追いつめられた彼女は行動を起こし捕まり、お前はお前で頭に血が上ってその様だ」

厳しい言葉が静司を貫く。だがその通りだった。言いがかりとは思わない。思い詰めていた彼女にもう一步、踏み込んでいたら。何かが変わったかもしれないのだ。たればの話は所詮仮定だ。しかし対策が出来たかもしれないのにそれを逃したのは静司の責任なのだ。「だからこそ、お前に任せる。別に今すぐとは言わんが、時間をかけても仕方ない。学年別トーナメントがあるだろ。それが終わるまでに結論を出せ」

「わかりました。しかし、更識家はなんと?」

「無理やり従わせた。なーに、学園地下に教師のスパイにその他もろもろ。痛いところはいくらでもある。だから脅しちやった♪ テヘ♪」

「何がテヘ、だ。真面目な話してるのにいきなり台無しにしやがったなアンタ」

「はっはっは、パパだって辛いぞ? だが可愛い息子に試練を与えねば!」

「やかましい気持ち悪い何がパパだヒゲ親父!」

「照れるな照れるな可愛い奴め。仕事放って可愛い息子の様子をわざわざ見に来たんだ。これくらいいいだろう? ほくらパパのヒゲだよー」

「ひいひいひい!? 髭を擦り付けるな!? つ痛! 傷が、傷があ!」

静司の生き地獄はしばらく続いた。

「ねえ、本音大丈夫？」

「顔色悪いよ？」

「……大丈夫だよ、ナギー。それにゆーこ」

1年1組の教室。そこで友人である鏡ナギと谷本癒子に心配された本音は、どこか疲れた笑顔を浮かべた。当然、そんなものを見せられても友人2人は納得できない。

「そうは見えないよ。体調悪いなら救護室行こう？」

「それがいいね。よし連れてこう」

「えー、大丈夫だつてばー」

「駄目、行くよ。癒子」

「おっけー」

2人は本音のだぼだぼの制服の裾を掴むと強制的に救護室へ連行する。

「だいじょーぶなのにー」

「はいはい。良いから寝てなさい」

「今日は川村君が居ないから私たちが本音の事見なくちゃね」

「馬鹿、ナギー！」

「あ……」

しまった、とナギが気づき本音の顔をちらりと伺う。当の本音は目に見えて沈んでいた。

入学当初から本音と仲が良い2人にとって、今日の本音は様子が朝からおかしい。端的に言うなら暗い。あの本音が、あの本音がだ！

この異常事態に2人は戦慄し、原因を考えた。その結果一つの可能性を導き出した。ずばり、川村静司が居ないせいではないか、と。

本音と静司が仲が良い（少なくとも周りからはそう見えている）のは知っていたが、まさか彼が病気で休んでいるだけでここまで気になるのか。親友としてはちよつと悔しい気もするけど、あの本音にも、とうとうそういう相手が出来たのか。よりにもよって倍率高そうな男性操縦者にか！ あ、けど彼の場合織斑君程じゃないのかな。そんな事を考えていた。

「ほ、ほら！ 先生も唯の風邪だつて言つてたし大丈夫だよ」

「そうそう！ だから本音も沈んでないで元気にね？」

「……うん」

いかん。調子が狂う。いつもののほほんとした笑顔はどこに。けどなんか儂げなこの

姿もかわいいわく胸もあるし世界ってなんでこんなに不公平……って私たちは何を!?

「とにかく！ 本音は寝てること！」

「後で見に来るから大人しくしてなさい！」

何故か救護室には担当の丸川も誰も居なかったので強引に本音をベッドに押し込むと2人は「ゆっくりしてなさい！」と言い残し戻っていった。

1人救護室に残された本音が考えるのは静司の事。学園には風邪で休んでいる事になっていたが、実際は怪我の為と聞いている。そして第5グラウンドの惨状を見れば、その戦いがとても激しかったことも予想がつく。そして負った怪我。かなりの重症だと聞いていた為、気が気ではなかった。

なんでこんなに気になるのだろうか？ 友達だから？ それとも、やはりそうなのか。

本音は決して鈍い人間ではない。なので自分がこんなに彼を気にする理由に思い当たる事はあった。しかしそれが本当にそうなのかは分からない。

「かわむーに会えばわかるのかな？」

ベッドの上、膝を抱えて目を閉じる。このままではいけない。今のままではまた何か起きた時、昨日の様に自分に来ることすらできない。それにナギーやゆーこにも迷惑心配された。だから戻ろう。いつもの自分に。少し休んだら何時もの自分になるように。

本音はゆっくりと眠りに落ちて行った。

それからどれくらい経っただろうか？ 不意に温かさを感じ、ゆっくりと意識が覚醒する。寝る前には無かった毛布がかけられている

事に気づいた。

「んん……」

丸川先生が帰ってきたのだろうか。どこかぼんやりとした頭で顔を上げると、いつの間にかベッドの横に座っていた人物が口を開いた。

「起きたか。大丈夫か？」

「……っ、かわむー!？」

一気に眼が覚め、大声を上げる。そこに居たのは心配していた人物、川村静司だった。

「どうしてここに……」

「丸川先生に聞いてな。悪いな、心配かけて」

丸川は救護室に戻った時に寝ている本音を発見していた。そして学園に遅れて登校途中の静司にそれを伝えたのだ。

「前は報告が遅れて怒られたからな。今度は直ぐに来れたかな？」

「うん……うん！」

前回。それはクラス対抗戦の時の事だ。あの時の事を覚えていてくれて、そして学園に来るなりまず自分に会いに来てくれた。それがとても嬉しかった。

「っ！ そうだかわむー、怪我は!？」

重症と聞いていた筈だ。それなのに学園に来て大丈夫なのだろうか？ しかし本音は見る限り、確かに顔色は悪いが目立った外傷は見られない。

「ま、なんとか大丈夫だ。激しい運動はあまりしたくないけどすぐ直るさ」

「……………」

「な、なんだ？」

じっ、と静司を見つめる。それに静司は冷や汗をかく。

「ねえかわむー。私は本当の事を聞きたいよ？」

ばれている。完全に無理をしているのがばれている。静司の冷や汗は脂汗に変わり、ジト目で見つめる本音に遂に観念した。

「右腕と左わき腹。そこがかなり傷んでうまく動けない。けど他は本

当に大丈夫だ」

嘘は付いていない。確かに痛むが動けない程では無いのだ。本音はそれを聞いて不安と安心が混ざったような顔をしたが静司はどうつてことない。と笑うと、くしゃ、と本音の頭を撫でた。

「ふえ〜？　かわむ〜？」

「ありがたいな心配してくれて。それに昨日は一夏達の近くにもいてくれたんだろ？　感謝している」

「うん。だって私はできる子〜」

静司が暗い顔をした自分を氣遣っていたのは分かるため、本音も笑顔を浮かべた。それはまだ少しぎこちないが、朝に比べれば自然な笑みだった。

「へい、かわむ〜。こつちこつち〜」

「ん？」

本音に引き寄せられ静司が椅子から立ち上がる。2人の距離が近づき、

「ほ、本音？」

「ん」

ぎゅ、と静司は抱きしめられた。突然の事に静司は慌てるが本音は離そうとしない。それどころか震えている事に気づく。

心配させた不安にさせた。課長も、社の仲間も、そして彼女も。こんな自分にもそういう風に想ってくれる人が居る。それが嬉しい。だからこそ、自分も答えを見つけるべきだろう。自分自身が何なのか。その問いの答えを。

そのままゆつくりと時間が過ぎる中、本音が笑う。今度はとても自然な笑みで。

「おかえり、かわむ〜」

「ああ、ただいま」

とても魅力的だった。

救護室での一件の後、しばらく抱き合っていたせいかどこか顔が紅

い2人だったか、静司が授業に出ようとする本音が怒りだした。曰く、今日はゆつくりしている、との事だったのだ。学園には既に楯無が戻ってきており、警戒態勢も最高レベル。こんな状況で仕掛けてくる敵は居ないだろう、という話だ。それでも静司は休もうとしなかったが課長からも

『社の皆がパパを怒るんだ。お前の今の状態で学園に戻すなんてアホだとかバカだとか虐待だとかミジンコだとか好き勝手に……。C1達も居るし今日一日でも休め。早く治してもらわないと、本当に危険な時どうにもならんし、パパの命がヤバイ』

という連絡が来たため、観念した。これ以上無理に残ると自分まで社の仲間に説教を受けかねない。ここは課長にすべてを受け持つてもらおう。それにいい機会だ。敵の事。自分の事。考えることは大量にある。ゆつくり休みつつ一つ一つ解決していこう。

そういう訳で静司は今寮の廊下を歩いている。授業中の為、人気が無く、また怪我の痛みもあって静司の注意力も落ちていた。その為、静司は自分の部屋の前にたどり着くと鍵を開け、そのまま扉を開けてしまった。

「え?」

「あ」

部屋の中。シャワールーム近くの扉の前に少女が立っていた。何も身に着けずに。

「せ、せ、せい……………じ……………?」

「……………やあ」

金髪碧眼。僅かに濡れたウェーブのかかったブロンドの髪。柔らかさとしなやかさを兼ね備えたと分かるすらりとした肢体。そして胸。そう胸だ。

シユルル・デユノアでなく、全裸のシャルロット・デユノアが目の前にいた。そう、つまりはやらかした。一番避けていた事を。

きゃあ!?! と悲鳴を上げシャワールームに逃げ込んだシャルロットを見送りつつ、静司は新たな悩み事に頭を抱えるのだった。

授業中の為、人気のない学生寮。その一室。そこは何とも言えない居心地の悪さが漂っていた。と、いうのも、

「大変申し訳なかった」

「せ、静司、とりあえず頭上げようよ。ね?」

額を床にこすり付け全力で土下座する静司と、それに戸惑うシャルロット。何とも珍妙な光景であった。

「ルールを提示したのは俺だ。その俺がルールを破り、あまつさえ……見てしまった」

「うう……」

指摘されシャルロットは赤くなる。そう静司は全て見てしまった。シャルロットが女である具体的な証拠を。そしてその心は反省と自己嫌悪。彼女が女だとは最初から知っていた。だからあんなルールまで作った。だというのに当の自分がそのルールを破り、女性の裸体を拝んでしまった。これは完全に自分のミス。そして女性が好きでも無い相手にそういう姿を見られるのがどれほどショックな事か。ああ、俺の馬鹿……。

一方シャルロットも複雑な心境だ。確かに裸を見られたのは恥ずかしい。しかし授業中だからと油断して、何も身に着けないままシャワールームから出てしまったのは自分だ。それにそもそも自分は男として入学した身。今まで騙してきたことへの罪悪感もあり、怒れる立場では無いと考えているからだ。

そのまま暫く時間が過ぎたがこのままでは埒が明かないと思ったのだろう。シャルロットが口を開く。

「静司、訊きたいこともあるだろうし僕も話したいことがあるんだ。だから顔を上げて?」

「……わかった」

静司がようやく顔を上げる。しかしシャルロットも中々言い出すことが出来ず、再び沈黙。

「茶でも入れよう」

「う、うん。貰おうかな……」

シャルロットは知ら無い事だが静司はシャルロットの事情を知っている。ならばここは自分が気を使ってやるべきだろう。それに飲み物があった方が話しやすい。

湯呑に茶を入れ再び向かい合う。一息入れて腹を括ったのか。シャルロットはゆつくりと話始めた。

「その……驚いたよね」

「まあ、な」

ここでは驚かなければ不自然。なので静司も話を合わせる。

「まさか女だったとはな」

「うん。僕の実家……デュノア社の社長からの命令なんだ」

シャルロットの顔が曇る。それを見て静司も止めるべきか悩む。これから話される内容は彼女にとっては辛い内容だろう。それを人に語るのもまた、辛いに決まっている。自分は既に知っているのだ。だからあえて聞く必要はない。だがここで何も聞かないのは不自然だ。故に黙って聞き続ける。

「僕はね、愛人の子なんだ。引き取られたのが二年前。丁度お母さんが亡くなった時に、父の部下がやって来たの。その後、検査しているうちにIS適性が高い事が分かって非公式のテストパイロットになったの」

それは静司も情報として知っている。元々いたテストパイロットたちより高い適性があった為、それからの彼女はまさに道具。社の発展の為に、唯の少女だった彼女が過酷な訓練を受ける事になった事も。

「父に会ったのは二回くらい。話したのも数回かな。普段は別邸で生活してんだけど一度だけ本邸に呼ばれたけど、そこでもトラブルがあつてね。あの時も結構キツかうたなあ。お母さんもちよつと位教えてくれれば、あんなに戸惑わなかつたのにね」

あはは、と愛想笑いを浮かべるシャルロットだが、当然静司は笑う気にはなれない。ただ、黙って聞いているしかない。

その先の話も静司の知る物と同じだった。IS開発の遅れによる政府からの支援の大幅カット。それに伴う経営危機。そして欧州連

合統合防衛計画『イグニツション・プラン』の次のトライアルで選ばれなかった場合、援助を全面カットされ、IS開発許可すらも剥奪される。

「僕がここに男装していたのはね、注目を浴びるために広告塔となる事。それに——」

シャルロットが視線を逸らし、どこか苛立ち気に。そして悲しみも含んだ声で続けた。

「同じ男子なら日本で登場した特異ケースとも接触しやすい。可能であれば使用機体や男性操縦者のデータを取れるだろう……ってね」

「二夏と俺。それに白式か」

「そう、白式や静司達のデータを盗んで来いって言われるんだよ。僕は、あの人に」

それはどこか他人行儀で、しかしどこか悲しみを含んだ言葉だった。

「昨日、僕居なかったでしょ？ それもこの為だったんだ。けどそれは失敗して、それに静司にもバレちゃったし、きつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までの様にはいかないだろうね。だけでもう、どうでもいいかな。これ以上、言いなりになっているんなら人に迷惑をかけるぐらいなら……」

迷惑とは昨日の事を言っているのだろう。正体こそ明かしていないが、自分を助けたISの事を彼女が気に病んでいるのは分かった。「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと今まで、嘘ついてて、ごめん」

深々と頭を下げるシャルロットを見つめ、静司は考える。

課長は答えを学年別トーナメントまでに出せと言った。しかし今、ここで彼女がここまで話したという事は彼女の中では答えは出たのだろうか。

(いいのか、それで?)

正体や、目的を明かしたシャルロット。その理由は様子を見れば一目瞭然。彼女は国へ戻るつもりだろう。その後に残っているのは父

親から、そして世界からの批判。彼女の境遇から同情する話もあるかもしれない。しかし、今まで聞いてきたデュノア社長なら自分の娘を捨て駒に、責任転嫁をしかねない。無論、騙されたフランス政府やI S委員会も黙っていないだろうが、碌な事が起きないのは分かる。

そう、結局は静司次第。彼女が自分から話した以上、静司がそれを公表すると言え、想像通りの事になる。しかし黙っている事もできる。

だが、何の為に？

つい、昨日。問題を先送りにして後悔したばかりなのにそれを繰り返すのか。不確定要素は排除すべきではないか？

俺は――

「昨日もその為に出てたと言ったが、今ここに居るってことは学園にはバレなかつたんだよな」

「え……？ うん、うん。多分」

勿論知っている。これはあくまでシャルロットに自覚させる為の言葉だ。そして、

「なら、ここにいればいい」

「え？」

「ここに居たいのならればいい。戻りたいと思うならそれでもいい。少なくとも俺は誰にも言う気は無いよ」

結局は現状維持。少なくとも今の彼女はデータを盗む為に昨日の様な無茶をするとは思えない。ならばここに居てもなんら問題ない。そう、その筈だ。それに昨日の脱出の際、自分は彼女に助けられた。その借りを返すべきだろう。

これが言い訳だという事は分かっている。結局自分で結論を出せずに問題を先送りにしただけ。

「だけど僕は……」

「親だから――上位に立っているから好き勝手にできる。道具として扱える。そういう考えははっきり言って嫌いだ。他人の意思にただ従うだけでは、いずれ後悔する。その束縛から抜け出そうとする考えは認める。けど今のお前は自暴自棄になっている」

それは経験からくる言葉。EXISTに入る前。意思なき道具として生きてきた己の人生の経験からだ。

「だって、結局時間の問題だよ？ 僕だって分かってる。このままここに居続けてもいざずればバレる。そうしたら政府も黙っていないしきつと牢屋行き。それが早いか遅いかの違いだよ」

「それでいいのか？ 父親の束縛から解放されて、今度は社会の束縛を受けても」

「良いも悪いも無いよ、僕には選ぶ権利は無いから、仕方がないよ」

痛々しい、絶望を通り越した諦観の微笑み。そんな顔を見せられては静司も黙っていられない。

「IS学園はあらゆる法の影響を受けない。国、組織、団体も本人が同意しない限り原則介入できない。つまり卒業までの3年間は少なくともここに居られる」

それがこの学園の特殊性。突然言い始めた静司に目を丸くするシャルロットを気にせず、畳み掛けるように静司は続ける。

「それを踏まえてもう一度いうぞ。好きにすればいい、と。シャルルの選択を俺は尊重する。どうだ、選ぶ権利がここにある。どうする？」

言いながら、我ながら偉そうな事だと自嘲してしまう。自分自身が駄目駄目な人間なのに、偉そうに人の人生を選択させている。しかしいいだろう。この場合は道化でも何でもなってるやろう。彼女の人生を、親でも、国でも、そして自分でも無く、彼女本人に決めさせる。それはかつて自分も歩んだ道なのだから。

「せ、静司は意外と無茶苦茶言うね……」

だけど、とシャルロットが笑う。そして考えるように目を瞑る。きつと彼女の中では様々な葛藤が渦巻いていることだろう。そして数分後、答えを出すべく目を開く。

「ここまで言ってくれるとは思ってなかった。うん、やっぱり静司は優しいね。こんなに気にしてくれている」

「……気のせいだ。単にクラスメイトが減るのが寂しいだけだよ」

「ふふ、そうだね。僕も静司達と離れるのは寂しいな。だから少しだ

け時間を頂戴？ 僕も確かに自棄になつてたかも。だからもう一度、良く考えてみるよ」

やっと、自然な笑みを浮かべるシャルロットに静司も息をつく。結局はお互いに先延ばしにされただけだが、幸いまだ時間はある。だからこそ考えるべきなのだろう。それに自分が、川村静司が彼女の不幸な未来を望んでいない。

(ん……う?)

川村静司として？ ではb l a d e gとしてはどうだろうか。そもそも自分はb l a d e gは任務でここに居る。川村静司という仮面を被つて潜入している。では彼女の不幸を望まない川村静司とは、一体なんだ？

「静司？ どうしたの？」

「あ、ああ。なんでもなつ……いい」

思わず考え込んだ静司を覗き込んでくるシャルロットと至近距離で眼が合う。今の彼女はいつもは隠していたコルセットを付けておらず、ジャージ越しにも胸の膨らみが伺える。加えて、シャワーを浴びていたので良い匂いがする。これはマズイ。

「と、とりあえずだ。時間はあるんだ。ゆっくり考えてみると良い」

「う、うん？ わかったよ。ありがとう静司」

屈託のない笑顔を浮かべるシャルロットを見て、思う。自分もこのままではいけない、と。そして提案した以上、何かしらの答えを出さなければならぬと。

「大変申し訳ありませんでした」

「もう、いいから顔を上げなさいな」

機材が整然と並ぶ研究室。その主は、自責の念に捕らわれている部下に笑つて返した。

「言つたでしょう？ 私は過程を楽しむつて。貴女を責めるならその前に、態々手間を増やした私が責められる筈だわ」

「そんなことは！」

「はいはい。貴女は真面目ねえ。今回は気にしてないからいい加減、顔を上げなさい」

「はい……」

言われ顔を上げたのは先日学園地下で静司と戦った女。今は植村加奈子の変装と解いたシエーリと呼ばれた女性だ。

「元々シャルロット・デュノアがあそこにいたのが予定外だったのよねえ。まあある意味収穫もあったけど」

本来ならカメラに映らないシエーリは誰にも気づかれることなく地下に侵入し、無人機を奪い、そのまま人知れず姿を消す筈だった。しかしそこにシャルロットの行方不明。そしてそれがアリーナに現れた所を学園側に察知されたが為に、アリーナに学園の注意が集中してしまい予定を変更したのだ。

「植村加奈子の家は？」

「処理済みです。証拠は何一つ残っておりません」

「ま、そこは予定通りね」

わざわざ学園の教師の一人に成り代わり侵入したのは、地下への潜入をよりスムーズにする為。そして全ての罪を植村加奈子に擦り付け、自分たちにたどり着けなくする為だ。その為に家の中、PCの仲まで完全に偽装した上で、念入りにシエーリは部屋を爆破したのだ。

「これで植村加奈子を追う者は手がかりを失ったわね。おそらく地下で戦ったのが、本物か、それとも成りすました工作員か怪しんでいるでしょうけど、探す手段が無い」

「はい。そもそも植村加奈子は交友関係も狭く、親類とも疎遠であった為、彼女が今までどんな人生を歩んできたかは、データでしか分かりません。無論、だからこそ選んだのですが」

「エリート故に孤高ねえ。悲しい事。その分あなたが居て私は幸せね、シエーリ？」

「もったいないお言葉」

ふふ、と笑った女はモニターに目を向ける。そこには学園から奪った無人機のデータが映されている。

「さて、ではこの子の解析と再生を始めましょうか」

「無人機ですか……」

「そう、無人機。この存在は随分と妙だとは思わない？ だってISは女にしか使えない。男には使えない。それが大前提。なのに機械には使えた」

「女と機械にはあつて、男には無い物が関係している？」

「少し違うわね。これはまだ推論だけど、おそらく誰でも動かせるのよねえ、これは」

「まさか」

「まだ可能性の話だわ。だけどおそらく正しいわねえ。そして動かせる理由は博士の一存で決まっている。無人機の存在がその可能性をあげてるわ」

「しかし……たとえばDNAや染色体。脳などのデータを読み取っているという説もあります」

「確かにそれらのデータを機械に埋め込む、という考えもあるけどそれはもう試されてるわ。結果は失敗。どんなに女に近い何かを造っても、ISは反応しなかったのよねえ」

女がコンソールを叩くとモニターに新たなウインドウが開く。そこには今述べた実験の詳細と結果が残されていた。

「脳。心臓。子宮。様々な部分だけでISの反応を確かめたけどどれも失敗。あ、脳に関しては少し反応したけど直ぐに駄目になったらしいわねえ」

「つまりあくまで人でなくては駄目と？」

「人の定義によるわねえ。それにあの無人機はその人ですらないのに動いている。だとすれば可能性は二つ。まだ見つかっていない『何かしらの特徴』さえあればISは動く。もしくは『博士の命令によって取捨選択を行っている』そして私は後者を推しているわ。何故なら、織斑一夏がISを動かしているからよ。篠ノ之博士と親交を持ち、おそらく白騎士でもある織斑千冬。そしてその弟がISを扱える。いくらなんでも出来過ぎでしょう？」

「つまり博士が、女性以外に彼だけを特別視するようにISに命令している？ しかしそうなる……」

「そう、一つ大きな問題があるわねえ」

再び画面が変わる。そこに移るのは髪が長く、眼鏡をかけた男子生徒。川村静司。

「川村静司。この子がISを使える理由が分からないのよねえ。簡単に調べてみたけど篠ノ之束との交友は無い。博士が特別視する理由が見当たらない。なのにISを使える」

「やはり別の要因でしょうか？」

「そうねえ、とりあえずこの無人機のコアを解析してみましようか。そこに答えがあるわ」

コアはブラックボックス。それが本来の常識。しかしその女は事も無げに解析を宣言した。

「かしこまりました。では私は川村静司の事をもう少し調査してみます。それと一つ、お願いがあるのですが」

「ええ、わかってるわ。ブラッディ・ブラッディの事でしょう」

再び画面が変わる。そこに映るのは地下での戦い。そして黒いISだ。

「このISも中々興味深いわねえ。それにシールドを使っていない。それ故のあのパワーかしら？ 以前はあまり気にしなかったけど」

「次こそは完全に叩き潰します。なのでブラッディ・ブラッディを――」

「わかってるわ。修理ついでに強化してあげる。けど叩き潰さないで生け捕ってもらえると嬉しいわねえ。あの機体も気になるし」

「かしこまりました。必ずや、主の前にお持ちします」

「ふふふ、ありがとう」

「ふんふんふん♪ ふんふんのふーん♪」

暗く、雑多な研究室。そこで篠ノ之束は鼻歌を歌いながらコンソールを叩いていた。彼女は上機嫌で、頭に付けた機械のウサギの耳もぴよんぴよんと跳ねている。

「ふふふーん。待っててね箒ちゃん。もうすぐできるからねー」

画面にはISのデータが映っている。それは未だどの組織も開発が進んでいない第四世代ISのデータだった。

データを打ちこみながら、ふと思う。妹の機体ならばサービスをしてやるのが良いだろう。一夏の白式と並び立つような機体。そうだ、紅白とも言うし紅がいい。東さんは最高の姉だね！

更の上機嫌になりデータを追加する。その過程で一夏の白式に似せるのも良いだろう、と考え白式のデータを呼び出す。呼び出されたデータは学園での写真だ。

「ふーむ。ここは紅で、ここは白！ ふふふくん？」
いくつか写真を見比べていく中で、ふと端に映った異物が目に入る。

「あーそういえば忘れてたね。不思議な不思議な噛ませ犬君」

その写真。箒と一夏が映るその端に、髪が長く眼鏡をかけた男子生徒の姿がある。もう一人の男性操縦者、川村静司だ。

「んーなんで使えるんだろうね？ 男はいつくんだけの筈なんだけどなく」

当初、彼の存在には東も驚いた。そして直ぐに使えなくしてやろうと思った。

しかし少し様子を見てみると気が変わった。というのも、この川村静司はパツとしない。専用機も無い。地味な生徒だった。そして彼が地味であればあるほど、一夏が目立つ。一夏の凄さが際立つのだ。同じ男性操縦者として二人は対比され、そして一夏の凄さが目立つ結果となっている。

この存在は都合が良かった。何せ当初の狙い通り一夏は注目され大人気！ もう一人が駄目な分尚更なのだ。ならばせいぜい一夏の引き立て役にしてやろう。いざとなれば困にすればいい。それに大事な妹の専用機開発で忙しい。そう決めると東は静司に対する興味を無くしていた。

しかしその専用機ももうじき完成する。そうしたら調べて見るのもいいかもしれない。川村静司がISを使える訳を。いや、ISの使用を許可し、シェアリングした悪い子を。

「あ・と・はっと」

学園の写真を呼び出したついでに、もう一つの懸案事項を映す。それは自分の無人機を破壊した黒いIS。なんでも先日でも学園に現れ戦闘を行ったらしい。残念ながらその時のデータは入手できなかったが、まあいい。コイツは壊さないと気が済まない。その為の準備も並行して進めている。

「ふふふ。束さんに敵う者なんてちーちゃん以外に居ないんだよ。ぶいっ！」

一人研究室で無邪気な悪意が牙を研ぐのだった

閑話 きょうかふらぐ？

「諸君、今回集まってもらったのは他でもない。早急に解決する事案が出来たからだ」

K・アドヴァンス社。その本社の薄暗い会議室で白衣を着た男が宣言する。その言葉に、部屋に集まった、同じく白衣を着た者たちは姿勢を正した。

「主任、一体それは……？」

一番若い青年が訳が分からず聞く。

「ズバリ、黒翼の武装についてだ！」

どーん、と効果音でも聞こえてきそう勢いだった。そしてそれに数人が反応する。

「成程……新しいアイデアが浮かんだんですね」

「その通り。さて、諸君。君たちも先日の件は聞いていると思う。地下での戦いと、その脱出。中々にギリギリだったと聞いている。そこで私は考えた」

ぴっ、と指を立てる。全員が注目する中、主任は続ける。

「もしあのまま生き埋めになってしまったら静司は助からなかったかもしれない。今回は助かったが次は無いかもしいない。ならば——次に備えた物を準備せねばならない！」

おお、とどよめきが起きるが、まあ待て、と手で制す。

「では何を準備するか？　そこで私は気づいてしまった。今まで我々は威力と浪漫。そしてその中にある狂気を追い求め、様々な武装を開発してきた。そう、例えば《クエイク・アンカー》！」

「ああ、あれは素晴らしかった」

「浪漫と狂気。その調和が生み出す破壊……素敵！」

「ISにあんなものに乗つけるイカレっぷりに僕は感動しました！」

各々がうっとり語る中、主任も頷く。

「そうだ。だが浪漫という点で私は大変な事を見逃していた。男の浪漫。その象徴たるあの武器の事を……っ！」

ぐっ、と握りこぶしを天に掲げ、叫ぶ。

「すなわち、ドリルだ！」

一瞬の沈黙。そして、

『うおおおおおおおおおおおおお!!』

全員がテンションMAXで雄たけびを上げた。

「主任！ それです！ それは必要です!!」

「良いわ……嗚呼！ 素晴らしすぎる！」

「ドーリルっ！ ドーリルッ！」

第三者が見れば確実にドン引きするだろう光景。しかしここではこれが日常茶飯事だ。

「ありがとう、諸君。つまり今日の会議の目的はズバリ！ 『黒翼にどんなドリルつけようか？ 皆で考えよう！』だっ！」

再び全員が雄たけびを上げる。

「主任！ やはり質です！ どんな壁さえ突き破り、どんなバリアも突き破り、あの子の心も抉り取る！ そんな超強化ドリルが良いと思います！」

「馬鹿、何言つてやがる！ 時代は量だよ量！ 全身にドリルを付けての体当たり。まさに浪漫じゃねえか！」

「何をう!？」

「そんな顔しても譲れんなあ！」

それぞれが意見を言い合いヒートアップしていく様を主任は満足げに眺めながら頷いていた。ああ、やっぱりこいつらは素晴らしい。きつと良い物が出来上がるに違いない、と。

「ふふ、馬鹿ね貴方達！」

『何!?!』

質か量か。意見が分かれグループ化してきた所で女の所員が高らかに笑った。

「質？ 量？ そんな風に考えるから駄目なのよ。もつと視野を大きく広げなさい。世界はこんなに広いのだから！」

まるで翼を広げるかのように両手を広げ、意味不明な事を高らかに叫ぶ。もはや何がしたいのか一般人には分からない。しかしここに居るのは全員狂人なので気にしない。

「ほう、ならばお前の意見を言ってみろ」

興味を持った主任が先を促すと女は最高の笑顔で、叫ぶ。

「一つに拘る必要はないわ。つまり私が提案するのは『質&量』よ

!!?!?!?」

!?!?!?」

会議室に衝撃が走る。

「超巨大。超硬い。超すげー。超強化ドリル。そしてそれを大量に!

『物の質』と『物量』を兼ね備えたそれこそまさしく『超質量』武装

よ!!」

「お……」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!』

今日最大の雄たけびが上がった。

「すげえ、すげえよマジで! 思いつかなかったぜ!」

「そうだ。一つに拘る必要は無いんだな! 全部の要素を詰め込んで
まえばいい!!」

「俺は今猛烈に感動している……っ!」

決まったな、と主任も頷き高らかに宣言する。

「よし! ならば我々は本日より『超質量』ドリルの制作を開始する!!

静司がいつ埋まってもいい様に! そして気になるあの子の心の
壁だろうが貫き掘り進み出口を見つけられる様に、全力を尽くすぞ
!!」

『応っ!!!』

「なんか会議室が五月蠅いんですが」

「というかアイツら静司が埋まる事前提に話してね? まず埋まらな
い様にするのが先じゃね?」

「そもそも予算申請通るのかな……」

同僚の狂気に若干引きつつあるEXISTの面々だった。

「ん？」

「どうしたの、静司？」

「ああ、すまん。ちよつとメールが……な……？」

静司とシャルロット。お互い話を終え一息ついた頃、静司の携帯に会社からのメールが入った。電話では無いので特に気にせずメールを開く。件名は『お前はと思う!』だ。嫌な予感がする。

メールには本文と、添付ファイルがつけられている。どうやら何かの図面らしい。新しい武装だろうか？ 念のためシャルロットには見られない様に角度を気にしつつファイルを開き、固まった。

『超質量』ドリル案。メインとなる巨大ドリルの他に両手両足もドリル。ビット型ドリル。ドリルの中からも大量の子ドリル。その中には驚異の孫ドリル。必殺技として全身回転しながら全ドリルを敵にぶつける『テラドリルブレイカー』略してT・D・B。名前がどこかで聞いた気がするのはきつと気のせい。理論値では鋼鉄の壁だろうがISのシールドだろうが完全に貫けます。ただ人間相手に使うと高確率で相手の人生も抉り取るので注意が必要。あと威力重視にしたため一回使うとガス欠です」

なんだコレは？ なんだこの完全に相手を殺しにかかっている武器は。技術部の連中とうとうイカれたか……いや元々だ。これを黒翼に付けると？ この全身螺旋だらけでハリネズミみたいになっている武器を？ というか一回しか使えない個性的すぎる武装をどこで使えと？ 少なくともこんなIS居たら自分なら絶対近づかない。

【追伸：これで気になるあの子の心もハートブレイク♪】

「やかましいわあああああの子の心もハートブレイク!」

「せ、静司!?! どうしたの!?!」

突然キレて携帯を床に叩きつける静司にビビるシャルロット。そんな騒がしさを残しつつ、日は暮れていった。

14. パートナー

水曜日。静司とシャルロットが登校するとやけに女子達が浮っている事に気づいた。あちこちでひそひそと話合ってはきやーきやーと騒いでいる。

「何だ……?」

「さ、さあ?」

静司とシャルロットは訳が分からず首を傾げるが、大したことじゃないだろうと結論付け教室に向かった。

「静司、シャルル! もう大丈夫なのか?」

教室に入ると気づいた一夏が上げた声で視線が集中する。

「ああ、俺もシャルルも大丈夫だよ」

「そうか。シャルルの後に静司も休んだから心配したぞ」

シャルルは月曜と火曜。静司は火曜だけ休んでいる。表向きの理由としては互いに体調不良だ。因みに昨日静司が授業中に寮にいた理由は『風邪っぽいから休んだ』と学園にもシャルルにも説明している。その割には元気だったので少々疑われたが。

「皆ごめんね、心配かけて」

「謝る事でもありませんわ。元気になって何よりです」

「そうだな。2人とも体調管理は気を付けると良い」

セシリアと箒も安心したように笑う。だが、

「ところで何か皆がそわそわしてるけど何かあったの?」

シャルロットの質問にその笑顔が固まった。

「な、な、なんでもありませんわ!」

「そ、そうだ。なんでもないぞ!」

怪しい。怪しすぎる。しかもその隣の一夏も訳が分からず首を捻っている所を見ると一夏関係だろうか?

「あ、かわむー、しゃるるん。おはよ〜」

「本音か。おはよう」

「おはよう布仏さん」

いつも通りだばだばの制服を着た本音が教室に現れた。丁度いい

と思い本音を手招きする。

「ん〜？ どうしたのかわむー」

「ああ、ちよつと聞きたいことがあつ——ぐむつ!」

本音に尋ねようとした瞬間、箒とセシリアが光の速さで静司の口を押えた。

「おほほほ、川村さん。そろそろSHRですわよ？」

「そうだ、席に着くべきだろう。迅速に速攻で疾風の如く」

2人とも眼が笑っていない。どうやら相当知られたくない事らしい。いや、一夏の前だからか？ やはり一夏関連か？ とりあえずこの場はこくこく、と頷いておく。その一方で目線で本音に伝える。

(また後で)

(りようかいだよ)

どうやらうまく伝わった様だ。安心した静司をセシリアと箒が席へ引きずっていった。

静司が引きずられていく光景を見ながらシャルロットは気になる事があった。

(さつき、静司と布仏さん、目で会話してたよね?)

ただそれだけの話だ。仲の良い相手ならそういう事もあるかも知れない。だけど。

(なんだろう、ちよつと悔しいな……)

自分でも単純だと思う。しかし入学当初から何かと気を利かせてくれ、アリーナでは助けてくれ、そして昨日は自分の話を軽蔑することなく聞いてくれた。そんなルームメイトの存在を気にしている自分に顔を赤くするシャルロットだった。

「あの二人、容赦なく引きずりやがって……」

休み時間。静司は救護室に向かいながら人知れず呻いていた。先ほど雑に扱われた際に傷口に響いたのが原因だ。それを察した本音

により救護室で念のため見に行くように言われたのだ。確かに誰が見ても顔色が悪かったので、他のクラスメイトからも薦められ仕方なく向かっている。一応鎮痛剤は飲んでいるが、やはり本職にも見てもらうべきだろう。

「教官、お願いです！」

「何度言えばわかるのだお前は」

ふと、声が聞こえ立ち止まる。この声はラウラ・ボーデヴィツヒと織斑千冬だ。

「わかりません、こんな所で教師など！ 教官にはもつとふさわしい場所がある筈です！」

どうもラウラが千冬の現状について不満を言っているらしい。いや、これは陳情か？ 以前ドイツで教官をして以来、千冬を敬愛していると聞いている。

「大体この生徒など、意識が薄く、遊び半分でISを扱っています。こんな連中に何を教えても無駄です！」

(随分な言い様だな)

静司もラウラのいう事を全て否定する気は無い。確かにこの学園の生徒の意識は薄い。結局は『女子高校生』の延長戦上でISを扱っている節がある。

だがその一方で、真面目に真剣に取り組んでいる者たちも居る。一夏は強くなるために訓練を続けているし、箒、セシリア、鈴も一夏が絡むと少々騒がしいが、努力は怠っていない……多分。それに強さだけでなく、本音の様に整備科を目指し勉強する者もいる。

だがラウラはそれらを無視して発言している。その態度に苛立つ。

「大体なんですかあのクラスは！ ヘラヘラ笑った間抜け面ばかりで

――」

「そこまでしておけよ、ボーデヴィツヒ」

「!?」

いい加減、我慢の限界だった。思わず口を挟んでしまい、二人が驚いた様に振り替える。

「貴様はっ！」

「川村か」

「盗み聞きするつもりはありませんでしたが、大声で話していたもので」

ゆつくりと近づく。ラウラはそんな静司を睨みつけているが気にしない。

「聞いてれば好き勝手に見下してくれてるが、真面目に学び、知識を活かそうとしている奴らだつて居る。お前に好き勝手言われる筋合いは無い筈だ」

「ふん。馬鹿が。私から見ればそんなものお遊びだと言っているのだ」

「へえ。じゃあそのお偉い軍人様は何しに日本まで来たんだ？ 国防を放つて置いて遊びに来たのか？」

すつ、とラウラの眼が細まり殺気が溢れる。その横で千冬は腕を組み面白そうに事態を見守っていた。

「口のきき方に気を付けろ。私は教官を呼び戻す為に——」

「それなら別にお前じゃなくてもいいだろ。外交官でも連れてこい」

「私が教官の事を一番知っているのだ！」

「その割に効果は無いようだったがな。ろくに相手も分析する能力も無しに軍人になれるのがドイツ軍か？」

「貴様……今この場で殺してやろうか」

「その瞬間お前は本国行き決定だ。貴重な男性操縦者を殺した罪はどくなるんだろうな？」

「情けない奴だな。自分の立場を使って保身か？ やはりクズだな」

「力しか見ないで暴力に頼る自称軍人に言われたくないな。そんなにお前は偉いのか？ それとも——そうでなくてはならない理由でもあるのか」

「!!」

「そこまでだ」

静司の最後の言葉に反応して、今にでもISを展開しようとしたラウラを千冬が止める。

「しかし教官！」

「いい加減黙れ小娘。15歳で選ばれた人間気取りか？ 笑わせる」
その千冬の言葉は凄味に溢れ、相手を威圧する力を十分に秘めていた。ラウラは震え、一步後ずさる。

「わ、私は……」

それは恐怖だけでは無いだろう。自分の大切な人に嫌われる。見捨てられる。それが彼女を震わせている。

「さて、授業が始まる。教室に戻れ」

ぱつ、と声色を戻して千冬がせかすとラウラは走り去って行った。それを

見届けると千冬は呆れた様に静司に向き直る。

「軍人相手にあそこまで言うとな。何をされるか怖くなかったのか？」

「横にそれより恐ろしい人が居ましたからね。お蔭で好き勝手言えましたよ」

「ふ、成程」

にやり、と千冬が笑う。めつたにみれないその笑顔がかったの大切な人と被り、静司は慌てて目を逸らした。

「それじゃあ俺は救護室へ行つてきます。体調悪いので」

「とてもそうは見えなかつたが……確かに顔が青いな。行つてこい」

では、と立ち去ろうとする静司の背中に声がかかる。

「川村。先ほどお前は『理由』について聞いていたが、お前は どう思う？」

「それは、ボーデヴィツヒが強さに拘る理由ですか？ それとも教官に拘る理由ですか？」

「両方だ。お前の意見を言ってみろ」

「そうですね……」

一瞬考え、直ぐに結論をだす。事情を知っているが故あまり詳しくは言えないが結局は、

「しようもない事でしょうね」

それが結論だった。

「なんだそれは」

「そのままですよ。そもそもここに至るまでの話を俺は知りません。ただ、ボーデヴィツヒは駄々をこねている様にしか見えないのでそう答えただけですよ」

「そうか……。引き留めて悪かった、行つていいぞ」

「失礼します」

どこか納得の言つた様な笑みを浮かべた千冬に見送られ静司は救護室へ向かうのだった。

時間は流れ放課後。静司、本音、シャルロットはアリーナに向かつていた。鈴とセシリアは先に行つてしまった為、最初は一夏と箒も居たのだが気を利かせて二人にも先に行つてもらつたのだ。護衛と言つても四六時中一緒に居る訳でもない。他にも見るべきところが多いからだ。

「かわむー、訓練は駄目だからね？」

「そうだよ、静司。ずっと体調悪そうなんだから無理しちやだめだよ？」

「わかつてるよ。二人してそんな責めないでくれ」

本音は怪我を。シャルロットは事情知らないが見るからに顔色の悪い静司を気遣い、両脇を固めている。これは今日のIS実習の際、静司が参加しようとしたが怪我のせいでうまく動けず倒れかけたのが原因だった。お蔭で実習は見学。後日補修になつてしまい、課長にも怒られた。

『今は黒翼も万全じゃないんだ。何かあつた時、お前まで動けないんじゃない話ならん。可能な限り休んでおけ』

との事だ。これは『何か』があれば、怪我に関わりなく行動を起こさなければならぬ、という意味も含んでいるが、静司からしたら当たり前ませの事なので酷いとは思わない。

「見張つてないとかかわむーはすぐ無理するから駄目だよ」

「そうだね。静司はもうちよつと周りを頼るべきだよ」

心配されるのはありがたいが、両脇を女子に固められるのは中々居

心地が悪い。歩いている間も周りの視線が痛いのだ。シャルロットは勿論男装しているが、そのせいで別の噂までたてられそうで怖い。そんなこんなでアリーナに向かうと第三アリーナが騒がしい事に気づいた。

「なんだ？」

気になり第三アリーナの観客席へ向かう。

「あれ？ りんりんとせしりん？ それにラウラウだく」

「もう完全にパンダだな……」

「静司何を言ってるの……？ けどあれは、模擬戦かな？ それにしては様子が——」

どうも必要以上にラウラが鈴とセシリアを痛めつけている様だった。あれはこれ以上続けるとマズイ。静司が動こうとした瞬間、前方で叫び声が響いた。

「おおおおおっ！」

観客先の前方。一夏が白式を展開。零落白夜を発動させるとアリーナのバリアーを破壊していた。

「一夏!? あの馬鹿っ！」

おそらく傷ついた二人を見て頭に血がのぼっているのだろう。一直線にラウラへ向かう一夏に焦り、走り出そうとするがやはり傷が痛み思うように動けない。

「静司、任せて！」

その横をシャルロットが駆ける。彼女は一夏が破壊したバリアーを超えISを展開すると、ラウラに向かって牽制の射撃を行った。一夏とシャルロット。二人の攻撃にラウラは舌打ちすると背後へ跳ぶ。その隙に一夏は瞬時加速を発動。傷つき倒れている鈴とセシリアを抱きかかえ距離を取る。

その光景を遠目に見ながら静司は己の不甲斐なさに腹が立っていた。案の上『何か』が起きた。しかし自分は動けず、シャルロットに頼ってしまった。

幸い傷ついた二人はまだ意識はある様子。一夏にも大事は無い。だがラウラはまだやる気の様だった。一夏は二人を抱きかかえた

ままで、シャルロットのみで相手をしなくてはならない。止める本音を振りきって自らもアリーナへ降りようとした時だった。視界の端を黒い影が走る。そして――

ガギンツ！

「千冬姉!?!」

「教官!?!」

織斑千冬がIS用の近接ブレードでラウラの突進を受け止めていた。スーツも、ISも展開していない生身でのその姿は先日の静司と被る物がある。だが異なるのは彼女は気絶もせず悠然と立っている事だった。

「やれやれ、ガキどもめ。模擬戦をやるのは構わんがアリーナのバリアーを破壊するまでとなつては、教師として黙認しかねる。この戦いの決着は、月末の学年別トーナメントでつけてもらおうか」

千冬の命令にラウラと一夏達、双方が頷きISを解除する。それを確認すると千冬は改めて、アリーナに響き渡る様に宣言した。

「では、学年別トーナメントまで一切の私闘禁止する! 解散!」

その言葉を聞きながら静司は己を恥じていた。やはり今のままではいけない。一刻も早く怪我を直す必要がある。そうでなければ自分がここに居る意味が無い――。

救護室へ鈴とセシリアを運ぶ一夏達を見届けながら、静かに心に刻むのだった。

第三アリーナでの騒動から小一時間程した頃。救護室では手当を受ける鈴とセシリア。そして心配してやって来た一夏達が居た。

「大丈夫か二人とも? そもそも何であんな事に?」

「べ、べつに何でもありませんわ」

「そうよ。なんでもないのでっ!」

先ほどから一夏か問いかけているが二人は答えようとしない。実際の所、ラウラに国と、それに一夏の事で馬鹿にされた事が原因なのだ、本人を前に言える訳が無かった。それに易々と挑発に乗ってし

まい挙句の果て完敗だったのだ。そういう恥ずかしきもある。

「まあ大事が無くて何よりだ——ん？」

ふと遠くから地鳴りの様な音が聞こえる。音は段々と近づき、ドカ
ンツ、と扉を吹き飛ばした。文字通り吹き飛んだのだ。扉が。

「静司、僕扉が吹き飛ぶところを初めて見たよ」

「奇遇だな。俺もだ」

「わたしも」

啞然として見守る中、音の主達——女子生徒たちは一夏とシャル
ロットに迫る。

「織斑君！ 私とペアを組もう！」

「デュノア君！ ぜひ私と！」

女子達はまるで新鮮な肉を求めるゾンビの如く手を伸ばしてくる。
その光景は異様で一夏もシャルロットも引いている。

「い、一体何事だ!？」

「みんな落ち着いて!？」

困惑する二人にびしつ、と紙が突きつけられる。どうやら学内の緊
急告知らしい。それによると、月末の学年別トーナメントが、より実
践的な模擬戦闘の為に二人一組での試合に変更すると書かれていた。
つまり彼女達は男性操縦者であり一夏やシャルロットと組みたいら
しい。そこまで理解した所でシャルロットが気づく。

「あれ？ じゃあ静司は？」

気になり見てみると、静司はいつの間にか窓際に寄りかかりどこか
自嘲めいた笑みで空を眺めていた。

「くくく、この展開に本当に慣れてしまった自分が怖いよ、俺は……」

「かわむー、そのうちきつと良いことあるよ」

哀愁を漂わせ笑う静司の肩を本音が叩いている。その何とも言え
ない光景にシャルロットも顔を引き攣らせた。

「という事で私と組もう！ 織斑君！」

「デュノア君！ 私を勝利へ導いて！」

更にぐぐつ、と詰め寄ってきた女子達に耐えきれなかったのか、一
夏が叫んだ。

「悪い！俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

え？ と思ったのがシャルロットだけでなくその場にいる全員だろう。しばしの沈黙の後、女子達も「男同士ならまだいいか……」と納得した様で、各々新たなペア探しに向かっていった。

嵐の様な時間が過ぎ、また静けさを取り戻した救護室。ぽつり、とシャルロットが呟く。

「男と組みたいなら静司も居たよね？」

「ぐはっ!？」

「は!?! 静司!?! 落ち着いて!?!」

「シャルル……悪気が無いのは分かるが、今のは効いた……」

相変わらず自嘲めいた笑みで遠くを見つめる静司にシャルロットが謝り倒す。

「確かに今のセリフは酷かったわね」

「自分では克服したつもりでもやはり心の中では傷ついていたのですわね」

「わー!?!?! ごめん静司! だから気を取り直して、ね!」

そんな中、一夏も『しまった』と言った顔で静司に謝る。

「すまん! 静司、シャルル! 勝手に言っちゃった」

「そ、そうよ! 一夏、アンタは私と組みなさい!」

「いいえ! ここは同じクラスの私とですわ!」

再び場が荒れ始めた。しかしそれを意外な声が止めた。

「んゝ駄目じゃないかなゝ」

本音だ。彼女は指を口に当てん、考えながら続ける。

「さっきの戦いで、りんりんもせしりんもISのダメージ大きかったよね? あそこまで損傷すると、当分は修復に専念しないと、後で重大な欠陥がでちゃうよ?」

「くっ、それはまづいわ……」

「仕方ありませんね……」

そこは流石は代表候補生。さすがに機体を犠牲にしてまで出場する気は無いらしい。本音もうんうん、と頷く。

「ISも体と同じだからね。無理すると後で大変な事になるんだよ

「……ね、かわむー?」

「ハイ、ソウデスネ」

これはどうやら静司も言いたいことらしい。笑顔の後ろに荒ぶる小動物のオーラ漂わせた本音に、冷や汗をかきつつ頷く。

「ん? どういう事だ?」

一人だけ状況に付いていけない一夏にシャルロットが説明してやる。

「一夏、IS基礎理論の蓄積経験についてだよ」

「えーと……」

「ISは色々な経験をすることでより進化した状態へ自分を移行させるんだけど、それは通常の戦闘だけじゃなくて、損傷時の稼働も蓄積されるんだよ。だからダメージレベルCまでいった状態で稼働させると不完全な状態での経験も蓄積されて、それが後々に通常稼働に悪影響を及ぼすこともあるんだ」

「つまりは人間と同じで、怪我した時は大人しくしなきゃいけないって事だよ」

「おお、流石はシャルル! それに意外なのほほんさん!」

あはは、と笑うシャルロットとえっへん、と胸を張る本音。

「それはそうとして、アンタ勝手に決めてたけど川村はどうすんのよ」

「そうだ、すまん! 勝手に言っつて」

「まああの場は早く解決させる為にも一夏とシャルルが組むのが最善だったしな」

「え? 何でだ?」

「……一瞬お前に殺意が沸いた」

「何でだよ!」

女子から見ればイケメンで専用機持ちの一夏と、同じく専用機持ち貴公子とまで呼ばれているシャルロット。一方静司は専用機無し。伸びきって目元も見えない髪。挙句の果てに地味眼鏡。女子達の視線が二人に行くのはまあ、いつも通りの事だ。

ふと不安げなシャルロットと眼が合った。おそらく一夏とペアとなる事で正体がばれるのではないかと不安なのだろう。ペアとなっ

たからには訓練などでも今まで以上に一緒に居る機会が多い筈だ。
(フオローはするから安心しろ)

一夏達に気づかれぬ様にさりげなく目配せする。シャルルは一瞬戸惑った様だが、頷いてやると嬉しそうに頷き返した。どうやら余程不安だったらしい。まあ当然だろうが。

「それでは川村さんはどうするのですか？」

「あー、そうだな。本音はどうだ？」

訊いてみるが本音も手を合わせて静司に謝罪する。

「ごめんねかわむー。私もかんちゃん居るから難しいよ」

「ああ成程」

かんちゃん。つまりは更識簪。生徒会長の妹であり、本音の主人でもある。忘れがちだが本音は簪のメイドなのだ。ちよくちよくクラスに居ないときは簪の元に行っていると以前聞いていたので納得する。

「まあ適当に見つけるさ。とは言っても申込期限は今週中とはまた急だな……」

「変更も急だしね。けどトーナメントまで時間は無いし、直ぐにペアを見つけて訓練しろって事じゃないかな？」

「それもそうか。ま、なんとかなるだろ」

妙に上機嫌なシャルロットに頷きつつ、静司は念の為、トーナメント変更の理由を確認すべきだと思っていた。

(静司、気にしてくれてるんだ)

寮の自室に戻っても、シャルロットは上機嫌だった。その理由は先程の救護室での一件にある。

一夏がペア宣言した時、正直戸惑った。だが我儘をいう訳にもいかないし、これ以上迷惑を掛けられない。そんな不安の中、静司と眼が合ったのだ。何かを伝えるような目配せに一瞬戸惑ったが、直ぐにそれに気づいた。フオローをしてくれる様だ。

その事実も嬉しかったが、それ以上に静司と目配せだけで意思疎通

が出来た事が嬉しかった。

「どうした？ 妙に上機嫌だが」

「うん。静司が見てくれたからかな」

「？ よくわからんが、ペアの事は出来る限りフォローするよ」

「ありがとう静司。すごい嬉しいよ」

「まあ事情を知ってるしな。それに選べと言ったのは俺だ。言ったからには責任は取るさ」

「せ、責任……」

何故かシャルロットの顔が赤くなるが静司は首を捻るだけだった。

「随分と挙動不審だが大丈夫か、本当に」

「だ、だ、大丈夫だよ!! そんなに変かな!!」

「とりあえず冷静になろうか」

ペし、と額を叩くとシャルロットもあうあう、と口を開閉させたのち下を向いた。

「ごめんね？ こんなルームメイトで。確かにちよつと気持ち悪かったよね」

「いきなり何を勘違いしてるんだ？ 別にそんな事思っていないよ」

「ほ、本当？」

「嘘ついてどうする。さて、俺はちよつと外に出て電話してくる。その間にシャワーでも浴びておくといい」

ぽんとシャルロットの頭を叩くと静司は部屋を出て行った。その後ろ姿を見送りながら、静司が触れた頭を触り、

「ふふ」

どこか嬉しそうに笑うシャルロットだった。

『ふむ。二人一組か……おそらくは先日のクラス対抗戦の影響だろうな』

「そのようです」

いつもと同じ寮の屋上での通信。相手は課長だ。

『自衛の為に実践的な戦闘経験を積ませる為か。出来るなら織斑

「一夏とペアになるのが良かったが、今更か」

「その点は申し訳ありません。自分のミスです」

『本人が言ったんだ。そこは仕方ないさ。それでお前は誰と組むんだ？』

「まだ決まっていますよ。それに今の俺の状態がこんなんですからね」

「多かれ少なかれ、生徒たちは優勝を狙っている。そうなれば実力者と組みたがるのは当然だ。それに時間も無いため、どんどんペアは決まっていっている。そんな中、体調不良の様子の静司が居てもペアを組もうとする人は居ないだろう。」

「それより植村加奈子についてはどうなんですか？」

『情報なしだ。自宅はものの見事に吹き飛んでいる。あれが本物の植村なのか、それとも成りすました誰かなのかは不明だ。だがあれほどのI Sの操縦技術を考えて、本物の線は低いな。確証はないが』

彼女の経歴は紛れも無く本物だった。それなのに卓越したI S操縦技術をどこで学んだのか？ と考えると、偽物と考えるのが自然だ。

「そうですか……奴は無人機を狙っていたようですね。うちで回収した方はどうです？」

『こちらも解析はしているが駄目だな。コアが未登録で新しく製造された物である事ぐらいしか分からなかった。だが——』

「コアを造れるのは篠ノ之束のみ。つまり博士が関係している可能性はほぼ確定ですか」

「ぎりつ、と通信機を握る手に力がこもる。一瞬、黒い炎が心に灯るがそれを意識的に抑える。」

『——そうだな。そしてあの無人機の実在は危険すぎる。それを造れる博士もだ。博士の目的が不明な以上、今回も注意が必要だ』

「つまり、今度の学年別トーナメントにも現れると？」

『可能性の話だ。それにシェーリと呼ばれた女の事もある。油断はするなよ』

無人機で学園へ干渉する篠ノ之束とその無人機を狙って学園に潜

入した謎の女。今の所大きな敵はその二つだ。無論、他にも懸案事項は大量にあるが。

「了解しました。まずは怪我を直しますよ。それに黒翼も」

『ま、今のお前はそれが先決だな。しばらくは無理せず回復に専念しろ』

そうして二人は通信を終えた。

そのまま訓練や治療に費やしその週も終わった。結局静司はペアを見つけられなかったので、抽選に任せることにした。一夏やシャルロットが先に決まってしまったので、あとは誰と組もうが代わりがなからだ。因みに箒はルームメイトと組んだらしい。

それに顔色の悪い静司を遠慮してか、優勝を狙っているが故か、誘われることも無かった。

そんなこんなで週が開けた月曜日。学園による抽選で静司のパートナーが決まったのだが。

「……貴様だと」

「……マジか」

静司&ラウラペア、爆誕

15. 学年別トーナメント

学年別トーナメントもいよいよ近づき、生徒たちは放課後の訓練にも余念が無い。アリーナも勝利に向け、様々なペアが訓練を行っていた。その為アリーナは生徒達でひしめき合い、少々窮屈になっている。しかしそんな中、不自然に空いたスペースがあった。

「ふん、逃げ惑え」

「ふ、ぎ、けん、なっ！」

静司とラウラである。放課後、二人が訓練に訪れた時誰もが驚いた。何せラウラは協調性ゼロで自分一人で勝ち抜けると信じている。そんな彼女がペアと訓練に来たのだ。驚くのも無理はない。そして二人の『訓練』も中々異様だった。

「無様だな。少しは反撃したらどうだ」

「う、る、さ、いっ！」

銃弾やワイヤーブレードを休みなく繰り出すラウラと、それをひたすら避け続ける静司。見様によってはイジメだった。

こんなことになったのは勿論理由がある。ラウラは予想通り、静司との訓練など必要ない、とやる気が無かった。静司も無理に勝ち進む理由も無いので別に良いと思っていた。しかしそこに千冬が石を投げたのだ。

「随分余裕だな貴様ら。日々の訓練を怠る様に教育した記憶は無かったが？」

この言葉は効いた。主にラウラに。千冬を敬愛しているラウラは、それを命令と取り静司を連行。そして特訓と言う名の虐めが始まったのだ。

「貴様には対して期待していない。しかし教官の前で無様な姿は見せられん。足手まといになられては困るのでな」

それが訓練前の彼女の言葉。結局ラウラは、訓練中にも千冬の事しか考えていないのだった。

そんな二人を不安げに見るのが一夏とシャルロットだ。散々因縁深いラウラと静司がペアになったのだ。二人は心配し、何かあれば直

ぐに介入するつもりで注意しながら訓練をしていた。

「静司のやつ、大丈夫か」

「今の所致命打になる様な攻撃は無いよ。一応、凰さんやオルコットさんも注意して見てくれる」

トーナメントに参加できなくなった鈴とセシリアだが、アリーナには来ている。曰く、

「こうなったらお二人のお手伝いを致しますわ!」

「幼馴染の私が色々見てあげるわよ!」

との事だ。セシリアはともかく、鈴は違うクラスの生徒の事なのに良いのだろうか、と一夏は思ったが、それを効いたら殴られた。何故だ。

「それにしても静司のやつ凄いな。攻撃はしてないとは言え、かなり避けてるだろ、あれ」

「元々運動神経は良いし、動体視力も良いからね。入学して大分経っているし、ISにも慣れてきたんじゃないかな」

本当にそれだけだろうか? と一夏は思ってしまう。自分も入学当初は素人だったが、大分ISには慣れた。しかしあれ程攻撃を回避できるかと聞かれたら正直自信が無い。もし自分に静司の言う体力と動体視力があっても、あれ程の動きが出来る気がしなかった。

(俺は専用機を貰ってるんだ。甘えてばかりいられないよな)

今静司と戦ったら自分は勝てるか? それが予想つかない。こちらの方が機体のスペックは遥かに上なのに自信が持てない。ならば持てるように努力するのみだ。

「よし、シャルル。俺達も再開しよう」

「そうだね。静司達は気になるけど、僕たちも頑張らないと」

まだシャルロットは静司の方を気にしてはいたが、それでも『こつちも大事だもんね』と頷き訓練を再開した。

訓練と言う名の虐めが終わり、せえせえと息を整える静司をラウラは意外な気持ちで見下ろしていた。

先ほどの訓練、対して期待はしていなかった。とりあえず訓練はするが、どうせ役に立たない。本番も一人で勝つ気でいた。

しかし目の前の男は自分の攻撃をひたすら避け続けた。最初は何とも思っていなかったが、幾つか本気の攻撃も避けられたのだ。最終的には力尽きた所を撃つて終わったが、どこか釈然としなかった。

実際の所は、静司は怪我が早々に治る筈が無い為に動きが鈍く、そんな中本気の攻撃を当てられると洒落にならないので、かなり必死だったのだが。

「おい」

「……なんだ？ 少しは休憩させてくれ」

「貴様のその技術、どこで手に入れた？」

「なんの事だ？」

「とぼけるな。貴様は以前、私の攻撃をI S無しで防いだ。それに先ほどの回避技術。本当に素人か？」

疑う様な眼差し。しかし静司は呆れた様に首を振った。

「そりゃそうだろ。まあ大分I Sにも慣れてきたし、体力と動体視力には自信があるんだよ。それにこないだはあの後救護室行きだ。

……そういや、まだ謝罪を受けてないな」

「ふん、必要ないな」

「だろうと思ったよ」

静司も期待していなかったのでそれ以上は言わない。代わりに別の質問を試してみる。

「なあボーデヴィツヒ。お前は何で力に拘るんだ？」

「貴様に答える必要は無い」

「人に質問しといてそれはないだろ。こないだも随分と反応していたが」

「黙れ」

ジツ、とプラズマ手刀が静司に付きつけられる。だが静司は瞳を逸らさずラウラを見つめ続けた。

「……」

「……ちっ」

周りからも視線が集中してきたせいだろう。ラウラは忌々しげに手刀を締まった。静司もため息を付きゆつくりと立ち上がる。

「私が望む姿があるからだ」

「！」

「ただ、それだけだ。今日はもう上がる。当日は精々足を引つ張るな」
そう言い残してラウラは去って行った。

去っていくラウラを見送りながら、静司は思わず笑ってしまった。
(望む姿、ね。なんだ、俺より余程まともじゃないか)

ラウラは力に拘る。力に酔っている節もある。しかしそこには目標があるらしい。それはある意味人間としては正しい姿だ。では自分はどうだろう？ 自分が求めるのはどんな姿だろうか？ bla degとしての姿か？ しかし既に自分はなっている。ならば何も望んでないのか？

「静司？」

「……シャルルか」

「大丈夫？ 何か考え込んでいたみたいだけど」

心配そうに顔を覗き込んでくるシャルロットに、なんでもないと笑って返す。

「ボーデヴィツヒと今後どう付き合っていくか考えてただけだよ」

「あー、成程。仲良くなれると良いね。僕ももっと話してみたいな」

おそらく本気で言っているのだろう。人の良い彼女は、どうやら友人が居ないであろうラウラの事も気にしていたらしい。

「まあそこは追々だな。そっちの訓練はどうだ？」

「うん。まだまだだけど、一夏も呑み込み込みが早いから本番までに形になるよ。だけどこれ以上は言えないかな」

「そりやそうだ。トーナメントは敵同士だからな。ま、当日当たらない事を祈るよ」

「ふふ、そうだね」

「おーいシャルル！ さっきの動き、もう一度教えてくれ！」

「わかった、今行くよ！ 静司はこれからどうするの？」

「まあ適当に見学してるさ。敵情視察って奴だ」

「そっか。じゃあまた後でね！」

「ああ、行ってこい」

一夏の元に戻るシャルルを見送りつつ思う。自分の答えを出す日は近い。一夏達の訓練を見学しつつじっくりと考えようと、観客席へ向かっていった。

そして時間は流れ6月も最終週。学年別トーナメントが遂に始まる。

「うおっ、これは……」

「凄い人の量だね……」

「なーがーさーれーるー」

「シャルル、前を見ないと危ないぞ。本音も掴まってる。一夏、行くぞ」

IS学園は各国政府関係者、研究所員、企業エージェント等といった来賓で混雑の極みにあった。その為に朝から生徒全員で誘導や会場整理を行い、ようやく解放された所だった。

静司、一夏、本音、シャルロットの四人は裏方仕事を終え、一年の待機場所へ向かっている所だった。人の量に圧倒されるシャルロットと人波に流される本音の腕を掴み、静司は人ごみをかき分けていく。

「あ……」

「わーい」

静司は無意識の行動だったが、手を引かれた二人はどこか嬉しそうに連れられていく。やがて人ごみを抜け、学園関係者しか入れないエリアまで来ると手を離し静司は一息ついた。二人は少し残念そうだったが、それには気づかない。

「しかし暑かったな……ちよつと——」

「喉が渴いたよね。はい、静司。一夏と布仏さんも」

言い終わる前にシャルロットがバッグからぺお茶を取りだし三人に渡す。見事なタイムリングだった。

「ありがとう……けど良くわかったな」

「伊達にルームメイトはやってないよ」

「ありがとう〜しゃるるん」

「シャルル、サンキュ」

シャルロットが己の事を語ってから、寮の部屋でも以前より話す量が増えた。それに元々シャルロットも気が利くところがあり、今までは静司が気を利かしてばかりだったが、お互いに今まで以上に思いやる様になり、以前より親しくなっていた。

「あく私もいいものあるよ〜」

本音も何かを取りだす。それは魚の形をした生地の中に餡が詰まったお菓子だ。

「たい焼きって……のほんさんどこでそんなもの買ったんだ？」

「さっき購買で買ったんだよ。糖分は脳を働かせるのに必要だからおすそ分け〜」

「成程。ありがとう貰うよ」

「ありがとう布仏さん」

四人でシャルロットの持ってきたお茶と本音の持ってきたたい焼きをモフモフと食べながら待機場所へ向かう。これから今日の対戦表が発表されるのだ。

「当日直前になるまで対戦相手が分からないのは緊張するな」

「多分事前情報無しからどれだけ戦えるかも見るんじゃないかな」

「だろうな。いきなり二人一組になったり忙しい事だ」

「大変だね〜」

そんなことを話しながら待機場所へ行くと箒、セシリア、鈴が待ち構えていた。

「遅いぞ一夏！ ……というか何呑気に食事をしてる！」

「来るのが遅いと思ったならなんともまあ」

「随分と余裕ね」

三人はどこか機嫌が悪い。おそらくトーナメントの準備で一夏と

別のグループに強制的にされたからだろう。因みにその采配は千冬によるものだ。誰か一人が一緒になると面倒だと思ったのだろう。静司としても同じ男性操縦者だからと言う理由で護衛対象である一夏と一緒に居れたのは助かった。これだけ外部の人間が来ているのだ。近くにいた方が都合が良い。

「あまりカリカリしちゃだめだよ。はい、りんりんたちにもあげるよ」

更に一夏に詰め寄ろうとした三人だが、その前に本音を取り出したい焼きに出鼻を挫かれ、渋々受け取る。

(助かった、本音。ここで騒がれたら止めるのは面倒だった)
(うひひ、褒められたよ)

小声で礼を言う嬉しそうに本音が笑い返す。普段はのんびりしている様で、見るところは見ている彼女には静司も助かっている。

「あ、そろそろ発表されるみたいだよ」

定刻になり、生徒たちが見上げる巨大なスクリーンにトーナメント表が映し出される。それを見て静司達は固まった。

「あれ？」

「え……」

「あら」

「ふむ」

「面白いじゃない」

「わーお」

「なんともまあ」

全員が見つめるトーナメント表。そのAブロック一回戦一組目。そこにはこう書かれていた。

『織斑・デユノア vs 川村・ボーデヴィツヒ』

「なあ本音」

「うん、多分そうだと思うよ」

流星に本音も苦笑いしている。あからさまな組み合わせ。おそらく生徒会長が仕組んだに違いない。理由？ きっと楽しそうだからとか言いそうで怖い。

こうしてトーナメント始まったのだった。

「ふふ、ふふふふふふ！ 面白いわねえ！」

シェーリは戸惑っていた。

己の主の元に調査結果を報告に来たのは良いが、その主の部屋から先ほどから笑い声が絶えないのだ。その異様な状況に思わず足を止めてしまう。しかしそのままにする訳にもいかず、若干緊張しながらゆっくりと扉を開いた。

「ふふふふふ……あら、シェーリ？ いらっしやい」

「お忙しいところ失礼します。随分と楽しそうですね」

「楽しいというより、面白いのよねえ」

相変わらず笑いながら、女がコンソールを叩くと正面のモニターに、例の無人機が映る。

「解析が終了したのですか？」

「まあ大方ね。その中身が面白かったのよねえ」

「お聞きしても？」

「ええ。ISはやはり篠ノ之束の手の内って事よ。IS適性から独立稼働に遠隔操作。なにもかも、博士がISに命じてそれを実行しているのよ」

女はさらりと、今の世界にとって大問題な事実を明かした。

「つまり先日の仮設が正しかったという事ですね」

「そういう事。篠ノ之束は『女しか動かせない』と命令したから男には不可能。『織斑一夏は特別』と命じたから、彼は動かせる。『何も乗せないで働け』と言われればその通りに動く。恐ろしい話ねえ。おそれただけで他人が起動しているISにも彼女は干渉できるわよ」

それは恐ろしい話だ。ISは現行最強の兵器でもある。それを材料と資金の限り生産でき、更には相手のISの制御すら奪えるとしたら世界征服も夢物語で無い。

だがここで大きな問題がある。

「そうなるややはり川村静司に謎が残りますね」

「そういう事。貴女は調査してたようだけど結果は？」
「こちらに」

シエーリが情報端末を機器に接続しモニターに表示する。それは表向きの静司の経歴だ。

「ふーん。これだけ見ると本当にただの一般人ね。それに篠ノ之束との接点も不明と」

かつて更識楯無が静司お所属を知り得たのは、ヒントがあった為だ。そのヒントを頼りに政府筋等から情報を得たに過ぎない。しかし今回、シエーリの場合は一から調べている。

「住んでいた町も調査しましたが、確かに記録は残っています。住人の記憶にも。しかしあれだけ小さい街です。偽装は容易でしょう」

「なるほどねえ。この子も面白そうねえ。——なら出かけましょうか」

「え？」

いきなり立ち上がり伸びを始めた主にシエーリは思わず間抜けな声をしてしまう。しかしそれを気にすることなく、主人は言った。

「丁度実験したいこともあるし、そのついでよ。川村静司に会ってみましょう」

IS学園。その政府関係者席より少し離れた廊下で二人の男が缶コーヒーを飲んでいた。

「ふーむ。中々騒がしいねえ」

「そうだな。仕事もあるんで俺はそろそろ戻るぞ」

「嫌だなあ。君が居なくなったら寂しいじゃないか」

「俺にそんな趣味はねえぞ。俺が好きなのは年下の女だ」

「ははは。相変わらず犯罪ギリギリだねえ。所で何て呼べばいいのかな？ CIのままじゃまずいだらう？」

「もう呼んでるじゃねえか。適当に呼べよ」

「わかった。じゃあロリペド野郎と呼ぶことにしよう。しかし騒がしなあロリペド野郎君！」

「ペドじゃねえし、そもそも大声で危険な単語吐くんじゃねえ！」
「そこはロリも否定するところだよ？」

周囲から浴びせられる不審と侮蔑の視線に晒されながら、C1が怒鳴る。だが目の前の男、桐生卓也はヘラヘラと笑うだけだった。

ぼつちやりとした体形に人の良さそうな顔。しわ一つないスーツに身を包んだその男こそ、静司達EXISTに依頼を持ってきた人物だ。

「ははは。やっぱり君たちは面白いね。それで君たちの期待の子の調子はどうだい？」

「後で絶対殴る……。アイツに関しては思春期真っ盛りだ。悩み多き年頃ってとこだな」

「ふむ。話では聞いているけど色々大変なようだねえ。よし、ならば私が手助けしてやろう。通信機を貸してくれたまえ」

「は？ 何言ってるんだいきなり」

「いいからいいから。悪いようにはしないよ」

少々疑いながらもC1は通信機を渡した。勿論、知らない人間が見ても唯の携帯にしか見えない様に偽装している。

「あまり下手な事を口走るなよ」

「安心したまえ。そこまで間抜けじゃないよ」

小声で注意するが桐生は胡散臭い笑顔で笑うだけだった。

『こちらB9。C1、何か——』

「やあやあやあやあ、久しぶりだねえ」

『っ！ 桐生さんですか。何やってんですか』

「何ってお仕事だよ。政府役人として。それにIS委員会のメンバーでもあるからね」

『……はあ。それで何の様です？』

「なあに。ちよつと面白い話を持ってきたんだよ」

不審げな沈黙。それを面白がるように桐生が告げる。

「君と君のルームメイトについてだ」

『！』

「ああ、安心したまえ。依頼人という事で話は聞いているが秘密につ

いては外には漏らしてないよ。今は」

最後の部分は強調する様に言う。静司は沈黙したままだ。

「けどこのまま放つて置くのも難しいかもね。バレた後が大変だ。さて、どうしようか」

『何が言いたいんですか……』

「僕は今は何も言わないさ。それと君の件だけど、能力に疑問を持っている。二度も学園に敵の侵入を許しているしね」

『その件に関しては言い訳ありません』

「うんうん。だからさ、もつと効率よく、もつと自然な学園にしてくれよ。期待しているよ？ それじゃあまた」

通信を切るとC1が呆れていた。

「おいおい。侵入に関してはどちらかと言うと俺の——」

「知ってるさそれくらい。それに君たちが良くやってるのは知ってる。今のは唯の発破だよ」

「発破って。それだと今のじゃ逆効果じゃないか？ 嬉しそうに追いかめてた気がしたが」

「あれ位が丁度いいのさ。彼のように考えすぎて思考が絡まっている様な子は一度とことん苛め抜いて、思考の糸を切ってしまった方が良
い」

ふふふ、と笑う桐生にC1は苦い顔をした。

「そういうもんかね……」

「そういうものだよ。僕だって、君たちと同じで彼には期待してるんだよ。あんな過去を持つ子がまっとうに育っていく姿と言うのも見てみたい。だからこそ学園に入学するという手段にも賛成したんだ」
さて、と立ち上がる。

「そろそろ僕は席に戻るよ。君たちも人が多くて警備大変だろうけど頑張ってくれたまえ」

「当然だ。ついでに出来の悪い弟の雄姿でも見物してるさ」

「それもいいだろう。ではさらばだ、ロリペド野郎！」

「てめえぶつ殺す！」

「まさか一回戦から貴様とはな」

「ああ。最高だな。だからとつとと」

「叩き潰す」

試合開始寸前。一夏とラウラが睨み合う。その横にはシャルロットと静司もいる。そのシャルロットは真剣な表情でISの状態を改めてチェックしているが、静司はどこか難しい顔をしていた。

「おい」

「……」

「聞いているのか」

「っ、あ、ああ。すまん。なんだ？」

「貴様はいつも通りでいい。私の邪魔だけはするなよ」

「分かってるよ」

何かを考え込んでいた静司だが、いよいよ試合が始まるとなって慌てて準備を始めた。

「……ふん」

どうでもいいと思っただろう。ラウラは静司から視線を外すと準備を整えていく。カウントが始まり、緊張感が増していく。そして、

『試合開始』

合図と共に4人が激突した。

試合開始と同時に、一夏とシャルロットは二手に分かれた。一夏はラウラに。シャルロットは静司に向かう。

(ボーデヴィッツヒさんは仲間の事を度外視している。ならば静司には悪いけど、速攻で沈めて二対一で挑む！)

当初はシャルロットがラウラを引きつけ、一夏が静司に向かう事も考えた。しかしそれだと静司を沈めるのに時間がかかり不利になりかねない。ならば一夏が何とかラウラに喰らいつき、その間にシャルロットが静司を倒した方が結果的には早く終わる。そういう狙い

だった。

「行くよ静司！」

「……」

どこか覇気の無い……いや、心ここに非ずといった静司の様子を疑問に思ったが、それを振り切つて攻撃を仕掛ける。アサルトカノン『ガラム』と連装ショットガン『レイン・オブ・サタデー』を展開し、銃弾を撃ち込む。が、

「くっ！ 素早いね、打鉄なのに！」

静司が登場しているのは打鉄。防御重視のISだ。機動力ではラファール・リヴァイヴIIは勿論の事、同じ量産型のラファール・リヴァイヴにも劣る。しかし静司はそれを見事に動かしてひたすらに攻撃を避ける。

「このっ！」

シャルロットは距離を詰めショットガンを放つ。回避の為、静司は物理シールドを展開しつつ上に飛んだ。追いかけるようにアサルトカノンの銃弾をばら撒くが、今度は弧を描くように背後に飛びながら降下し、その全てを避けきった。そしてアリーナの床に着地と同時に静司が持つてきていたマシンガンをシャルロットに向ける。

放たれた銃弾を今度はシャルロットが回避する為に距離を取るが、その間に静司も距離を離していた。

(やりにくい……)

静司は進んで攻撃はせず、回避に専念している。前々から静司のその戦法？ は知っていたが、実際に相手になるととてもなくやりにくかった。だがそれ以上に気になる点がある。

「……」

開始から静司は一言も喋っていない。確かに今は真剣勝負。ペラペラ喋る様な場面ではないが、それを差し引いても静司の様子がおかしい。だが、そんな様子でもこちらの攻撃は避けてみせる姿はどこか奇妙だった。

「ならばっ！」

ショットガンを連射しながら一気に距離を詰めると、近接ブレード

を一瞬で展開し斬りこむ。静司も逃げるように背後に飛びながらサブマシンガンの銃弾をばら撒くが、シャルロットは多少のダメージは厭わず、一直線に迫る。

「はあっ！」

避けきれないと悟ったのだろう。静司も打鉄のブレードでシャルロットの斬撃を受けた。金属音と火花が二人の間に散る。だがこれはシャルロットの狙い通りだ。

(くっ)だっ！)

ラビット・スイッチ

高速切替。己の得意とする武器の高速展開で再びショットガンを呼び出すと静司に向け引き金を絞った。

ズガンツ！ と大きな銃声が響き、その銃弾は静司に直撃する——
筈だった。

「え——？」

確かに銃弾は当たった。しかしそれはシャルロットの目の前に置き去りにされた打鉄の物理シールドにだ。では本体の静司はどこか？ ハイパーセンサーでその姿を知覚するより早く、シャルロットは背後に気配を感じた。

「後ろっ!？」

銃弾を置き去りにした物理シールドで防ぎつつ、体を回転させるようにして背後に回り込んでいたのだ。そして遠心力はそのままの近接ブレードの一撃がシャルロットに直撃した。

「くっ……、この——」

斬撃に弾き飛ばされながらも、シャルロットは高速展開したグレネードを静司に向かい撃ちこんだ。その一撃は避けきれず静司に直撃する。

アリーナにシャルロットが壁に叩きつけられた音と、グレネードの爆発音が響いた。

——バリアー貫通。ダメージ70。

ISが知らせるダメージに顔を顰めつつもシャルロットは直ぐに態勢を立て直す。その前方に静司と打鉄が降り立った。物理シールドは全て破壊され、ISも一部傷ついている。どうやらやっとなダメージ

ジを与えられたらしい。しかし時間がかかり過ぎている。

焦る気持ちと、相変わらずどこか様子のおかしい静司を気にしつつ、シャルロットは再び武器を呼び出した。

「凄いですね〜川村君。特に今の動き」

「ああ。確かに」

教師のみしか立ち入りを許されない観測室で真耶と千冬はその戦いを見ていた。

「デュノアの一瞬の間隙について背後からの攻撃か。確かに素晴らしい。だが——」

「どうしたんですか？ 織斑先生」

「——いや、なんでもない」

適当に誤魔化した千冬には気になる点がある。今の動きそのものは、静司ならそれくらい出来るだろう、と千冬は踏んでいた。通常の訓練でも運動神経と動体視力だけは随一だから。だが、あの動き方。あれをどこかで見たことある気がする。だが思い出せない。

「織斑君の方はちよつと苦戦しているみたいですね」

「当然だろう。織斑とボーデヴィツヒの間には埋めがたい実力差がある。本来なら川村を倒して二人で挑むつもりだっただろうが、目論見が外れたな。だが、」

静司の打鉄は先程のグレネードで大きなダメージを負っている。

あの様子だと先ほどの様に動くのは難しいだろう。

「デュノアがどう動くかが勝敗の決め手だな。手負いの川村を好機とばかりに落とすか、それとも」

「ピンチの織斑君を助けるか、ですね。どうやら後者みたいですよ」

モニターの中では一夏に猛攻を加えるラウラにシャルロットが割って入っていた。

「まあ正しい選択だな。このまま川村と戦っても直ぐに落とせるからならない。その間に織斑が落ちたら二対一だ」

無論、こうなると今度はラウラが1対2の戦いとなる。しかし元々そのつもりであり、ラウラのIS「シユバルツェア・レーゲン」は対多数に向いている。今も大型レールカノンとワイヤーブレード。そしてプラズマ手刀を駆使し、互角に渡り合っている。一夏とシャルロットの連携も大したものだが、所々で静司がマシンガンで邪魔をしている為上手くいっていない。

「川村はフォローに回ったか」

「ちゃんと自分の役割を分かっているんですね。初めはどうなるかと思いましたが、意外にいいコンビじゃないですか」

「ふん。好き勝手やるボーデヴィツヒを川村がフォローしてやってるだけだ」

「あはは……。しかし強いですね、ボーデヴィツヒさん」

苦笑を浮かべつつ真耶は言うが、千冬はつまらなそうに声を漏らす。

「変わらんな。強さを攻撃力と同一と思っている。折角川村と訓練させたのに何もわかっていない様だ」

「ふふ。優しいんですね。ちゃんと気にしてあげてます。やっぱり昔の教え子だからですか?」

「……別にそういう訳では無い。しかし今のままではどう転ぶかわからんな」

「どうですね。あ! 織斑君が零落白夜を出しましたね!」

男性操縦者。そして専用機の切り札が出た事で会場が一気に湧いた。画面の中では零落白夜を展開した一夏とシャルロットがラウラに挑みかかっている。

「戦局を動かすつもりか。さて、そううまくいくか?」

興味深げに千冬が見つめる先では、一夏の白式がラウラに向かっていく所だった。

一夏零落白夜の発動により、戦局が変わっていく。そんな中、時折ラウラを援護しつつも静司の心は別の場所にあった。

(もうミスは許されない。そして決めなければならない)

シャルロットの処遇と、己の任務。試合前に桐生に言われた事をきっかけに頭の中を様々な人の言葉が、そして己の悩みが交差する。

『IS学園に潜入し、織斑一夏、及びその周囲を護衛せよ』

それがbludgeとしての任務。

『なんか悩み事でも、あるのか?』

心配そうに見つめる織斑一夏。

『任務は大事。それはわかるよ? だけど私はどれが本当のかわむーかわからないときがあるよ』

共に居ると、どこか心安らぐ本音の言葉。

『自分とは何か? 本当の自分とは?』

浮かび上がる疑問と、それに応えられない自分への苛つき。

『だからこそ、お前に任せる。別に今すぐとは言わんが、時間をかけても仕方ない。学年別トーナメントがあるだろ。それが終わるまでに結論を出せ』

第二の親であり上司である課長の言葉。

『ここまで言ってくれるとは思ってなかった。うん、やっぱり静司は優しいね。こんなに気にしてくれている』

シャルロットの嬉しそうな顔。

『私が望む姿があるからだ』

悩みの種の一つである少女の願い。

『うんうん。だからさ、もっと効率よく、もっと自然な学園にしてくれよ。期待しているよ?』

そして先ほどの依頼人からの辛辣な言葉。

様々な言葉が、思いが、悩みが、苛立ちが駆けまわり静司の思考を埋め尽くす。試合が始まってからも体は本能的に動いているが、ただそれだけ。

(俺は……俺はどうしたい?)

視線の先では一夏とシャルロットのコンビネーションによってラウラが追い詰められている。援護は行っているが、それはこちらを警

戒していたシャルロットによって遮られていた。

その間に一夏は弾き飛ばされたが、一瞬隙ができる。ここぞとばかりにシャルロットが飛び込み、切り札であろう、楯の後ろに装備されたパイルバンカー『灰色の鱗殻』をラウラに撃ちこんだ。

ズガンッ！ と、凶悪な破壊音が三度響き、ラウラの機体が傾く。紫電を撒き散らし、大ダメージにより、遂にラウラが墜落した。

終わった。ラウラのISは強制解除されるだろう。そうなれば後は二人がかりで攻撃されて負け。そう考えた時だった。

「あああああつ——!!?!」

突如ラウラが絶叫を上げた。そしてISに紫電が走り凶悪な光が会場を包み込む。誰もが訳が分からず、戸惑いながらも眼を瞑った。そしてその光が消えた後、そこに現れたモノに静司の思考が停止した。

黒く、濁った深い闇色の少女の全身装甲（フルスキン）。最小限のアーマーと手にもつ一夏の雪片式型に酷似した刀。

「なぜ……」

何故ここにアレがある……!?

「Walkyrie Trace System……!」

それは『Vプロジェクト』の残滓。忌まわしき過去が静司たちの前に立ちはだかる。

16. 川村静司

「なんだよ、あれ」

一夏は訳も分らず眩いた。

学年別トーナメントの初戦。相手は因縁のあるラウラと友達である静司。当初は速攻で静司を落としてラウラと二対一で戦う作戦だったが、静司がシャルロットの猛攻に耐えた事。逆に一夏が追い詰められたことから仕方なく作戦を変更した。

静司を警戒しつつも、二人がかりでラウラと戦う。幸い静司もダメージが高かったのか、中距離からラウラを援護射撃する事に徹した為、連携を阻まれながらも少しずつラウラを追い詰める事に成功した、その筈だった。

突如ラウラが苦しみだし、光と衝撃をまき散らした。そしてその後に起きたのはラウラのISの『変身』。本来、ISがその形状を変えるのは初期操縦者適応と形態移行の二つのみ。それ以外で基礎形状が変化することは無い。だが、それが目の前で行われている。ISの装甲が溶けるように崩れ落ち、そして形を変えていく。やがてその変身を終わると全身装甲の黒いISが佇んでいた。そしてその手には己の手の中にある雪片式型に良く似た刀。あれはどう見ても姉の使っていた雪片の模倣だった。

「っ!？」

変身を終わった黒いISがこちらを向く。ぞわり、と身の毛のよだつ感覚を感じ、一夏は慌てて雪片式型を構えた。刹那、

ガキイイイッ!

一瞬で間合いを詰めた黒いISの斬撃が雪片式型に阻まれる。もし気づいていなかったら、今頃完全に斬られていた。その事実には冷や汗を流す。だが敵の動きは止まらない。敵は弾かれた刀を居合の様に中腰に引いて構え、一閃。

「ぐっ……!」

その一撃は紛れも無く自らの姉の太刀筋。その事に混乱しつつも雪片式型で受けるが、威力の高いその居合に雪片式型が弾かれた。

(しまっ——)

隙だらけになった胴体。そこに刀を横に構えた黒い I S の斬撃が迫る。避けられない。このままでは死——。

一夏が顔を強張らせる。だが斬撃の当たる直前、黒い I S が突然その斬撃が軌道を変えた。それとほぼ同時に、一夏の視界の端を長細い何かが猛スピードで横切った。

ギンツ、と今度は短い金属音。黒い I S は自らへ飛んできた影を刀で弾き飛ばしていた。

(打鉄の近接ブレード……? 静司か!?)

すっ、と一瞬自らに影がかかる。見上げると弾き飛ばされた近接ブレード。そしてそれを上空でキャッチし、一直線に黒い I S へ落ちる静司の姿。いつの間にあそこに居たのか、まったく気づかなかった。

上空からの静司と打鉄の一閃。それを黒い I S は難なく受けとめる。三度甲高い金属音と衝撃が二機を中心としてまき散らされる。だが二機は止まらない。

地面に着地した静司が間髪いれずに片手のマシンガンを撃つ。それを身を低くし躲した黒い I S がマシンガンを切り裂いた。小さな爆発。黒い I S は切り裂いた動きをそのままに体を回転させ回し蹴りを繰り返す。だがそれを静司は紙一重で避けると近接ブレードを横に一閃。黒い I S は刀でそれを防ぐが、衝撃で背後に飛ばされた。「本当に何なんだ……あれは」

ほんの一瞬。おそらく自分自身が斬られかけてから数秒も経っていない間の攻防に一夏は呆然としていた。それは敵の I S の強さもさることながら、それを打ち払った静司の実力に対してもだ。そしてもう一つ。あの黒い I S の動き。あれは、あれは——

『非常事態発生! トーナメントの全試合は中止! 鎮圧部隊を送り込む! 生徒、来賓は即座に避難しろ! 繰り返す!』

アリーナは混乱に包まれている。それは以前、クラス対抗戦の時を思い出される光景だ。唯一違ったのは、今回はアリーナはロックされることなく、次々と避難している事だ。

「二夏、大丈夫!? それに静司も!」

不安げに叫びつつシャルロットも二人に近づく。だが一夏も静司も反応しない。

「せい——」

再び問いかけようとした瞬間、静司が動く。近接ブレードを構え、一直線に黒いISへ向かう。

「なっ!？」

まるで何も見えていないかのような静司の様子にシャルロットが驚きの声を上げる。しかしそれに構わず静司は再び黒いISと激突した。

先手は静司。振り下ろした斬撃は黒いISに止められた。そこから二合三合と両機は高速で移動しながら斬撃を繰り返し、避け、受け止め、時には受け流していく。だがそこに変化が起きた。

「っ!？」

静司の打鉄が突然火花を上げ、動きが鈍る。その隙を黒いISは見逃さなかった。刀を一閃。その一撃は打鉄のシールドを破り、装甲すらも突破し静司のわき腹に直接ダメージを与えた。静司の顔が苦痛に歪む。そこに更に振り落された斬撃が静司に直撃し、静司はアリーナの壁へと叩きつけられた。

「静司!?! このっ!？」

更に追撃を試みる黒いISにシャルロットが迫る。アサルトライフル、ショットガン、グレネード。高速切替（ラビット・スイッチ）で様々な武器を呼び出しては連続で攻撃をしかけ静司から注意を逸らした。

黒いISがこちらを向く。そこから発せられる無機質な殺意に一瞬体が強張る。そしてその一瞬で黒いISは距離を詰めてきた。

「このっ!？」

至近距離。シャルロットは咄嗟にショットガンを放つが、それは刀の腹で防がれた。だが、ぞくり、と己の警戒心が最大限の警鐘を鳴らす。その感覚に従って体を前に投げ出した。ほぼ同時にビュンツ、と空気を斬る音が背後から聞こえた。

スラスターを最大限に吹かし、距離を取りつつ振り返る。そこには

小さな刀を振り下ろした黒いISSが居た。

(危なかった……。けどどうして?)

一瞬でも逃げ遅れていたら背後から斬られていた。あの黒いISSは、刀でショットガンを防ぎつつ、注意がそこに向いた一瞬で体を回転させるように動かしシャルロットの背後に回ったのだ。そして隠し持っていたもう一振りの刀での奇襲。一瞬のその攻撃を回避できた理由は一つ。

(静司と、同じ動き)

黒いISSの眼が赤く光る。その不気味なISSにシャルロットの混乱は強まる一方だった。

「かわむー!」

避難が進む中、未だアリーナに残っていた本音が悲鳴を上げる。その近くでは谷本癒子と鏡ナギ、そして箒、セシリア、鈴も顔を蒼白にして壁に激突した静司を見ていた。

「ちよつと、川村君不味いよあれ……」

「血が出てる!」

癒子とナギの言葉にセシリアも頷く。

「ええ、危険ですわ。絶対防御を抜けて直接ダメージが」

「それに今のでシールドエネルギーも一気に減った筈よ。ISSが解けたらそれこそ危ないじゃない!」

「しかし川村はどうしたのだ? いつもと様子が違うが……」

その言葉に本音がぎゅつ、と拳を握る。今すぐにも助けに行きたい。だけど自分にはその力が無い。あそこに居ても足手まといだ。だから自分はやる事をやらなければならない。

「——ゆーこ、ナギー。避難しよ。りんりん達も」

「けどまだ一夏が。それに川村だつてアンタ心配じゃ——」

異を唱えようとした鈴が押し黙る。それは本音の顔を見たから。悔しそうに。不安げに。しかし己の成すべき事——生徒会の役員として生徒の避難を優先した。その姿はどこか痛々しいが、強い。

「——そうね。分かったわ。セシリア」

「わかりました。私たちもお手伝い致します」

同じく本音を見たセシリアが頷く。彼女達は代表候補生。普通の学生とは違って緊急時の心構えがある。何より、生徒会役員とはいえ一般生徒である学生が感情を抑えて周りの安全を優先しているのに、国の代表たる自分たちが喚いていてどうする。そんな想いだ。

「しかしー夏が！」

「箒、ISが動かせない私たちや、そもそもISが無いアンタに出来る事は無いわ」

「そうです。それよりも少しでも他の生徒の皆さんを安全な場所へ誘導するのが先ですわ」

「くっ……」

まだ諦めきれしていない箒を鈴が腕を引っ張り連れて行く。しかし、ふと立ち止まり本音に向かって笑う。

「アンタ、強いね」

「ええ、本当に」

「ほえ？」

意味が分からない、といった本音に再び笑いつつ鈴は叫ぶ。

「行くわよ、本音！」

「本音さん。私たちも協力します。皆さんの誘導を！」

走り出しつつ叫ぶ二人の言葉に一瞬きよとん、とした本音だが、
「うん！」

力強く頷くと自身も走り出した。

ダンッ！

「お、織斑先生？」

観測室。そこでは机に両手を叩き付け、食い入るようにモニターを見つめる千冬と、突然の千冬の様子に驚いた真耶が居た。

「そうだ……なぜ気づかなかった。あれは……あの動きは、私だ」

あの黒いIS。あれはおそらくだがVTシステムを積んでいる。過去のモンド・グロツソの部門受賞者動きをトレースするシステム。

IS条約により禁止されている筈のシステムだ。だが問題はそこでは無い。

至近距離でわざと敵の攻撃を受け、粉塵や衝撃などに相手の注意がいくその隙に、死角から体を回転させるように背後に回り、その遠心力を込めた斬撃を繰り出す。一瞬で行われるそれはまさしく自分の得意とした動きだ。そしてそれを静司は行った。

唯の模倣ならここまで気にはしない。似たような動きは他の操縦者もできるし、自分の戦う姿は記録で残っている。だが静司の動きはそのテンポ、足さばき、太刀筋、なにをとつても自分と同じだった。

千冬は学園に入学するまで静司との面識はない。つまり自分が教えた訳でもない。それなのに、映像や資料だけであそこまで完璧に模倣出来るのか？

「織斑先生？」

「っ！ 山田君か。すまない」

難しい顔で考え込む千冬を心配そうに真耶が声をかける。千冬も頭を振り、この事を一時的に頭から無くす。今はアーリーナの安全が先だ。

「避難の状況は？」

「来賓は完了しました。生徒の避難も進んでいます。一部、残ろうとする生徒は申し訳ありませんが強制的に」

「それでいい。鎮圧部隊の編成はもう少しで完了する。後は」

「織斑君たちです。先ほどから何度も呼びかけているのですが、逃げようとしてくれません！」

今にも泣きだしそうに真耶が叫ぶ。おそらく心配なのだろう。彼女が生徒の事をとて大切に思っている事は知っている。本当なら今すぐにも自分が助けに行きたいが、他の生徒達の事もある。

「あの馬鹿どもめ……」

苦々しく千冬が呟く先、一夏が叫び声を上げ雪片式型を構えている。

なんて様だ。

全身の痛みと血の匂い。壁に叩き付けられた静司はゆっくりと体を起こすが、わき腹の激痛に眉を顰めた。ここは前回も負傷した場所。同じ場所に攻撃を受けた事で傷が開いたらしい。絶対防御は働いていたが、それも完璧では無い。今も少くない血が流れ出している。

「くそっ、たれっ！」

先ほどの戦闘。突然打鉄が不調を来たし、その隙に攻撃を受けた。おそらく原因は前半の戦闘による損傷。そしてそんな状態で打鉄の性能限界以上の動きで酷使した事によりガタが来たのだろう。そもそもこの打鉄は訓練用量産型仕様。通常の機体よりリミッターも多い。普段の静司なら、そういった事を考慮した動きで戦う。しかし先ほどの静司は怒りに任せて動き、その結果がこれだ。それでも――

(あのシステムは……潰す)

あれはあつてはならない。存在を許してはならない。ふつつつと湧きあがる黒い怒りが静司の思考を阻めていく。人目が多い事も関わらず黒翼を起動してしまおうかと考えが過る。そして傷も激痛も無視して再び敵に向かおうとした静司の視界にとんでもない光景が映った。

「うおおおおおおっ!!」

一夏が雪片式型を振りかぶり黒いISへ突進している。無茶だ、無謀すぎる。あの黒いISは一夏の手におえるものでは無い。

案の上、黒いISは一夏の攻撃を難なく弾くとその刀を一夏に向けた。

「馬鹿がっ！」

護衛対象の危機に少しだけ冷静さを取り戻す。幸い打鉄もまだ動く。だが助けに行くには距離があり過ぎた。一夏に刀が迫る。しかしその横から橙色のISが一夏を掴みその場から逃げだした。

「離せシャルル！ アイツ、ふぎけやがって!!」

「落ち着いて一夏！」

一夏を救ったのはシャルロットだ。瞬時加速で一気に距離を離し

一夏を降ろすが、当の一夏が直ぐにまた特攻しようとするので慌てて止めている。

「どけシャルル！ 邪魔するなお前も——」

「どうするっていうんだ馬鹿がっ」

「静司?！」

二人の横に移動した静司が苛立ち気に吐き捨てる。それは自信の不甲斐なさ。無謀にも関わらず挑み、あまつさえ味方すらも敵に回すような発言をしかけた一夏への苛立ちがあった。

だが一夏はそれに気づかず興奮した様子で睨む。

「あいつのあれは……、千冬姉のデータだ。千冬姉の動きだ。あれはな、千冬姉だけの物なんだよ！」

「……」

「だから俺はアイツを許さねえ！ それに——」

「黙れ、一夏」

底冷えするような静司の声。普段とはかけ離れたその雰囲気シャルロットの肩が震える。しかし興奮状態の一夏には逆効果だった。

「何がだ！ 俺はアイツを許せねえんだよ！」

「だからと言ってお前が行ってどうする！ 直ぐに学園の鎮圧部隊が来る。そいつらに任せればいい。第一、お前じゃアイツに勝てない。無駄死にするだけだ」

「だから安全圏で見守ってるだど？」

「そう言っている。お前が居ても足手まといだ。お前がやる必要はどこにも無い！」

「だが、それでも譲れないんだよ、これは！」

一夏は気づいていないようだがシャルロットは気づいていた。静司の言葉は正しい。理路整然としている。だが、静司の言葉の中に苛立ちが、それも一夏に対する苛立ちが強くなってきている事に。

その静司の内も色々な感情が渦巻いている。それはここ最近の悩み、周りの言葉、出来事の積み重なりからくる苛立ち。言う事を聞こうとしない一夏。そしてVTシステム。

(違うんだよ一夏。あれはもう、織斑千冬だけのものじゃないんだよ……っ！)

姉達の顔が浮かぶ。自分と姉達を繋いだのがあの力なら、奪ったのもその力のせい。故に静司もあのシステムの存在を許すわけにはいかない。だが、任務も忘れた訳では無い。VTシステムを見た当初は我を忘れかけたが、今は多少冷静になれている。一人で戦った地下の時とは訳が違うのだ。自分の直ぐ近くには最重要護衛対象と、クラスメイトが居る。故にここは撤退するのがベスト。その事実もまた、苛立ちの原因でもあるのだが。

「違うぜ、静司。全然違う」

当の一夏は興奮状態にありながらも力強く断言する。

「俺が『やらなきゃいけない』んじゃない。これは『俺がやりたいからやる』んだ。他の誰かがどうだとか知るか。大体、ここで引いちまったらそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない」

「な……」
そんな一夏に静司は呆然とした。今の言葉に感動したわけじゃない。呆れたのだ。

「そんな理由で……」

そんな理由でわざわざ死にいく真似をするだど？ いや、目の前の男は自分が負けるだなんて思っていない。それは実力が伴っていれば頼もしい事だろう。しかし一夏にはそれが無い。それなのに行くど？

「ふざけるなよ……」

「何？」

「ふざけるなと言ったんだよ馬鹿が！」

何故だろう。何故こんなにも苛々するのだ。それが分からないままに一夏をシャルロットへ押し付ける。

「シャルル、時間を稼ぐからこの馬鹿を連れて撤退しろ」

「なっ!? 何言ってる静司！」

「そうだよ静司！ それに静司も怪我してるんだよ？ むしろ僕が時間——」

だが、だからこそ今のは素の自分だった。知人を侮辱されたからでも、敵が襲撃したからでも無い。自分が苛つき、その感情のままに一夏を殴り飛ばしたのだ。

そう考えて、気づく。自分はもしかしたら羨ましかったのかもしれない。感情のまま動く一夏達が。純粋な本音やシャルロットが。任務の為に言い訳をし、川村静司という仮面を被った癖にだ。

つまりは嫉妬。しかしそれを認めたくないが故に、気づかず、溜め込み、しかし今、それを発散した。一夏に対する八つ当たりともいえる方法で。

ああ、本当に笑える。まるで子供だ。いや、課長——親父たちは自分を子供と言っていた。いつもは反論するが、今は認めるしかない。何がbludgeだ。感情を押し殺そうとしてストレスを溜め、そして八つ当たり。まるつきり子供、それが自分だ。

『お前は誰だ？　そしてどうなりたい？』

少なくとも今はbludgeですとは言えないな。

『かわむーはかわむーだよ。ただ、どうするときに楽で楽しいかな〜って考えてみようよ。そうすればきつとすつきりするよ〜』

ああ、本音が言っていたのはこういう事なのかもしれない。

『ふふ、了解。B9、これは仲間としての私からのアドバイスだけど、もつと正直になりなさい』

正直に言おう。爽快だった。

『ふふ、そうだね。僕も静司達と離れるのは寂しいな。だから少しだけ時間を頂戴？　僕も確かに自棄になってたかも。だからもう一度、良く考えてみるよ』

そうだな。俺もルームメイトが……いや、友達が居なくなるのは寂しいよ。

『俺が『やらなきゃいけない』んじゃない。これは『俺がやりたいからやる』んだ。他の誰かがどうだとか知るか。大体、ここで引いちまったらそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない』

一夏、お前はもうちよつと現実を見ろ。——だけど、その言葉は。その生き方は正直羨ましいと思うよ。だから、そう。少しだけ真似し

てみるのも良いかもしれない。

もう、一度やらかしてしまつたのだ。今更取り繕うと意味が無い。だから今は仮面を捨ててみよう。悩み事も忘れてしまおう。blade9という事すらも忘れてしまおう。そもそも自分はクールなキャラじゃあない。知的でもない。唯の馬鹿だ。だから思うがままにやつてやろうではないか。何も考えずに。

そしてそれこそがきつと――

「く、くくつ……ああ、それでいい」

「せ、静司?」

眼鏡を投げ捨てる。髪をかきあげ不敵に笑う。打鉄の残りのエネルギーを絞り出す。

黒いISは先程から動いていない。その理由は予想がついている。あの機体はこちらが攻撃の意思――武器を向けると襲ってくる。だから今までの言い合いでは襲ってこなかった。そのISに武器を向けよう。blade9で無く、馬鹿なこの自分が。

(親父、C1、本音)

ゆつくりと、ブレードを持ち上げる。もはや怪我は気にならない。不思議と痛みも無い。その理由さえどうでもいい。

(C5、シャルロット、織斑姉弟)

学園に入学以来初めてと言つていい昂揚感。

(その他諸々のみんな――初めまして)

ブレードの切っ先が向き、黒いISが反応し動き出す。それを見据えながら宣言する。仮面を捨て、悩みすら忘れて、怒りにも捕われない、思うがままの素の自分を。

「川村静司を、見せてやる」

17. 二人目の天災

「はははははははは！ やっぱ面白いなあ彼は！」

アリーナを離れた桐生は、更識楯無が確保していた学園の通信室で心底楽しそうに笑っていた。その横でC1が呆れた様に呻く。

「うるせえよ馬鹿。悪いな嬢ちゃん。こんなの連れてきて」

「い、いえ。仕事ですのよ」

布仏虚が若干顔を引き攣らせ笑う。アリーナの避難が進む中、桐生がどうしても様子を見たいと言い、無理やりやってきたのだ。

因みにC1は依頼人の護衛と言う形で学園に堂々と入り込んでいる。無論、桐生にも元々SPは居たが、無理に捻じ込んだのだ。桐生曰く、『もつと身近で自分の弟分を見たいだろう？ これはサービスだよ。さあ優しい雇い主を敬いたまえ！』との事。無論、その後殴り飛ばした。慌てたSPたちの姿は見ものだった。

「しかし川村君は一体どうしてしまったのですか。先ほどまでと様子が全く違いますけど……」

「なあに簡単だよ。ヤケクソになってるだけさ」

「は？」

予想外の答えに虚は思わず訊き返す。桐生はニヤニヤと笑いながらC1に促す。C1はため息を一つ漏らすと説明を始めた。

「ここに来てから随分と溜め込んでいたからな。ストレスが限界値を振り切れてヤケクソになってんだよ」

「や、やけくそ？」

「元々そんなに器用じゃない癖にあれこれ考えすぎたんだよ。で、その馬鹿が発破をかけてドカン」

「まあ良いじゃないか。お蔭で良い方にいったんだし。さっきまでと違って、明らかに余裕のある動きだよ」

「あれが良いとは言い切れないんだがな。しかしあいつどうやって収集付ける気だ」

C1も静司の実力は疑っていない。しかし限界ギリギリの打鉄と、怪我人の静司ではアレの相手は少々キツイだろう。だからと言って

黒翼を使えば潜入どころではなくなる。無論、もしもの時は使うべきだが。

「そういえば川村君。傷口からの出血が止まってる……?」
「ふむ」

「ちらり、と桐生がC1を見やりC1も頷く。おそらく黒翼の生体再生能力が働いているのだろう。部分展開状態で発現したのは初めてだが。それを分かっているながらも、黒翼の秘密をあまり他所に晒したくないのでC1は全く別の事を言った。

「おそらく元々そんなに傷が深くなかったんだろ。それより更識の嬢ちゃんはどうした?」

「あ、はい。来賓の避難の護衛に付いています。本当ならアリーナに向かいたかった様ですが……」

「お偉いさんの言葉でそうもいかなかったか。男性操縦者が貴重だ貴重だと言っておきながらも、いざとなったら我が身優先。ま、そんなもんだ。学園の鎮圧部隊は?」

「そちらは既に——」

ズンツ、と遠くから鈍い音が響いた。続いてC1に通信が入る。それを聞いたC1の顔が険しくなっていく。

「どうかしたのかい?」

「学園に保管してあるラファールが一機、奪われた」

「なんですって!?!」

桐生の眼が細まり、虚が悲鳴を上げる。だがC1は首を捻った。

「このタイミングでわざわざラファールだと? 確かにコアは貴重だが」

「騒ぎが起きてるとは言え、学園のIS格納庫にまで入り込める奴がラファールを一機だけか。確かに怪しいねえ。しかしこれで鎮圧部隊の動きも変わってくるね」

「だろうな。更識の援護もある。来賓や生徒達も殆ど避難している事を考えるとアリーナは後回しにされるだろうな」

隣で慌てて学園の各所と通信を取る虚を横目に見やりながら、C1も静司に連絡すべく通信を始めるのだった。

打鉄の近接ブレードを構えた静司に黒いISが標的を定め、予備動作無しからの瞬時加速で一気に静司の眼前に現れた。刀は中腰に引いている。先ほど一夏の雪片式型を弾いたのと同じ動き。ならば次に来るのは――

一閃。黒いISが必殺とも言える居合いを放つ。しかしそれは静司の眼前を通り過ぎ宙を斬った。

別に静司は対して動いていない。ただ一步、横に移動しただけだ。だが、その一步は敵にとっては致命的な距離――静司の射程だ。

「お返しだ」

自らも中腰に構えブレードを引き、放つ。それは黒いISと同じ動きだ。だが速度が、そして練度が違う。より早く、より鋭い斬撃が黒いISを切り裂く――筈だった。

「ちっ！……こつちもガタが来たか」

バギンツ、と鈍い音を響かせ、シールドを突破した斬撃が黒いISを斬り飛ばす。だがそのブレードは中心から無数の罅が入り、そして砕けてしまった。先ほどまでの撃ち合いによる積み重ね、そして今の激突に耐えきれなかったのだ。

飛ばされた黒いISは空中で姿勢を直し、地面に着地した。その装甲には肩から斜めに傷を負っているが、あの程度ではまだ動けるだろう。事実、再び刀を構えている。

静司は砕け、刀身が半分ほどになったブレードを軽く振り小さく頷く。問題ない。まだ使いようはある。

黒いISが再び動き出す。刀とは別に、先ほどシャルロットに使った小刀を呼び出した。本来の織斑千冬のデータには無い武器。だが不思議な事では無い。VTシステムは別に織斑千冬のみを模倣しているわけでは無く、過去のモンド・グロツソの部門受賞者のデータも入っているのだ。

再び接近。黒いISが雪片の模倣^{コピー}で斬りかかる。静司もブレードでそれを受けるが、あえて力は込めずそのまま後ろに倒れるように体

を逸らした。その眼前を小刀による突きが通り過ぎていく。その動きのままPICを制御。更に加速しながら足を振り上げ、黒いISの顎を捕らえた。

シールドバリアーの一瞬の抵抗を突き破り繰り出された蹴りにより、黒いISが一瞬制御を失う。その隙に蹴りの動きそのままに一回転した静司は碎けたブレードの残りの刀身を突き入れた。

『!?』

突き入れられたブレードは更に刀身が碎けたが、黒いISの装甲の一部を破壊することに成功した。プログラムに従って動いているだけの筈の黒いISが一瞬、驚いた様な挙動をする。己の動きが悉く読まれ、躲され、カウンターを受けているのが理解できないのだろう。その隙に繰り出された蹴りが黒いISを再度壁へと吹き飛ばした。

「……さて」

ちらり、とブレードを確認するともはや刀身は殆ど残っておらず、ほぼ柄の部分だけになってしまった。打鉄の武装として持ってきたのは基本武装のこの近接ブレードと、オプションのマシンガンと手榴弾のみ。だが今はマシンガンは破壊され、ブレードはこの有様。ついでに物理シールドはシャルロットとの戦いで既に壊れてしまっている。つまりは手榴弾と柄だけのブレードのみだ。

数秒、考えるが、

「ま、どうにかなる——」

「わけないよー！」

声に振り向くとどこか呆れた様子のシャルロットが静司を睨んでいた。

「シャルル？ 逃げろと言った筈だが」

「この状態で逃げれるほど僕は無関心じゃないんだけどなあ。大体静司も静司だよ。理由も言わずに逃げろって言われても逃げれるわけないでしょ」

ああ、言われてみればそうだ。そもそも量産型で一応、素人扱いだった静司が足止めし、専用機持ちが逃げろ、などと言われても理由が無ければ納得できないだろう。どうやら先ほどまでの自分はそん

な事すら頭に無かつたらしい。

「拳句の果てに一夏斬り飛ばして大笑いし始めたかと思つたら、いきなり凄い戦い初めるし。静司、僕が言えたことじゃないけど今まで嘘ついてたね？　ものすごく強いじゃない」

「さて、何の事だ」

「惚けるならもうちよつとマトモに惚けようよ……。けど——」
「ん？」

静司の顔をシャルロットが覗き込む。その顔は少し赤い。そしてうん、と頷く。

「何か雰囲気が何時もと違うね。上手く言葉に出来ないけど、無理してない感じ」

その言葉に静司は軽く驚いた。

「今まで無理してる様に見えてたのか？」

「うーん。僕も今気づいたけどね。だって何時もと全然顔が違うもん。なんか自然な感じかな」

それに眼鏡を取り、髪をかきあげたその姿は格好いいよ。そう言ううとしたが恥かしくなりシャルロットは口を噤んだ。

一方静司は『やっぱり周りからもそう思われてたんだなあ』と改めて実感していた。

「まだ色々訊きたいことはあるけど、後にするよ。それで静司はどうする気なの？」

「どうもこうも、あのISをドツきまわしてぶっ壊す」

「武器がそんな状態でそこまで言い切るのは一体どういう自信なのさ……」

シャルロットは苦笑するが、いざとなれば黒翼を使えるので生死の心配はいらないと考えている。だが、それを使ったら最後、学園に居られなくなるのでそれは避けたい。それは任務の為だけじゃない。川村静司が『ここに居たい』と思っているからだ。こんな風に考える事さえ、今までは出来なかった。

「それに打鉄だって限界でしょ？　ここは時間を稼いで学園の部隊が来るのを——」

「いや、部隊は来ないらしい」
「え？」

「さつき連絡が来た。なんでも侵入者にISが奪われたんだと」
「それって一大事じゃない！ 何でそんなに落ち着いてるのさ！ と
いうかさつきって何時?!? 誰から!?!」

戦闘中、C1からとは流石に言えない。奪われたISも気にはなるが、今は目の前の問題が先だ。別に無関心なわけでは無い。

さて、どうやって誤魔化そうかと考えてると、一夏が動いているのが見えた。

「痛つてえ……一体何が……」

頭を押さえながら立ちある一夏はどうやら記憶が混乱しているらしい。キョロキョロとあたりを見回している。

「一夏、大丈夫？」

「シャルルか。俺は一体――」

「え、えーと……」

「ああ、一夏。ありがとな」

「はっ？」

お蔭でちよつとスッキリしたぜ、という気持ちを込めて礼を言うが、一夏は何の事か分かっていない様だった。一瞬きよとんとした一夏だがやつと思ひ出したのかその顔を怒りに染めた。

「そうだ静司！ お前よくも！」

「一夏、今は戦闘中だ。仲間割れしている場合じゃない」

「シールド突破して斬り飛ばした人がそれを言うんだ……」

『貴様ら！ 油断しすぎだ！』

突如、アリーナに千冬の声が響く。風の流れる気配を感じた静司がシャルロットと一夏の前に飛び出し体を回転させた。そのPIC制御で遠心力を増した回し蹴り。それは二人を襲おうとした黒いISへのカウンターとして決まった。

「土産だ。もってけ」

動きを止めた黒いISに手榴弾を放る。シャルロットと一夏の顔が引きつり、慌てて背後に下がるのを確認しつつ静司も背後に跳ん

だ。一瞬遅れて起きた爆発が黒いISを包む。

「どうやら行動パターンが変わったらしいな」

先ほどまでは敵対行動をとった相手を狙っていたが、無差別に変わったらしい。だとすると、尚更このまま放って置くわけにはいかなかった。

静司の鮮やかなカウンターに唾然としていたシャルルと一夏だが、思い出したのか一夏が雪片式型を構え、黒いISへ突っ込んでいく。

「そうだ、あの野郎！ こいつで——」

「だから無理だつて」

それなりの速度で飛び出した筈の一夏だが、静司の左腕一本で止められた。

「離せ静司！ 俺がやるつて言ってるだろ！」

「また繰り返すのか。いい加減にしてくれ」

うんざりしてきた静司にシャルロットが話しかける。

「静司、今の一夏は何言っても無駄だよ。下手に放って置くより活用した方が良いんじゃないかな」

「……まあ、確かに」

黒翼以外に決め手に欠けるのは確かだ。それに黒翼だと加減が効かないので、下手したら中身のラウラごと破壊しかねない。故に地道に殴り壊していこうかと考えていたが、あのISの行動パターンが変わってきた以上、あまり時間かけるのは得策では無い。それに奪われたラファールも気になる。散々一夏の参戦を否定して、斬り飛ばしておきながら言うのもアレだが、確かに一夏の——白式の特性なら一気にかたがつく。

何よりあれだけ言ったのにも関わらずいう事を聞かない一夏だ。放って置いたら何をするかわかったもんじゃない。もう一度、今度は殴り飛ばして気絶させるのも考えたが、先の時間の事もある。あまり悠長にはしてられない。短期決戦の方が総合的な安全度は上がる。「……わかった。但し俺のいう事を聞け。いいな？」

「あ、ああ」

威圧感とはまた違う静司の鋭い雰囲気、一夏が思わず頷く。

「なら零落白夜を展開しろ。一回でいい。エネルギーを絞り出せ」
「……駄目だ。展開できても一瞬が限界だ。エネルギーが少なすぎる」

「それって静司が斬り飛ばしてなければまだ行けたんじゃあ……」

「過ぎた事は忘れるんだシャルル。それに別に一瞬で構わない。俺が奴の動きを止める。そこに斬りこめ。シャルルはその援護」

「なっ!? 何言ってるんだ静司! お前が危な過ぎ——」

「問題ないからいう事を聞け、一夏。それが嫌ならもう一度気絶させるぞ」

もちろん本気だ。これがギリギリの妥協点。これが認められないのなら直ぐにでも有言実行するつもりだ。

一夏は納得できない様で、何かを言おうとしたがそれを止めたのは意外な事にシャルロットだった。

「一夏、大丈夫。静司は強いよ」

それは一夏は勿論、静司にとっても驚きだった。そんな静司にシャルロットは笑顔で静司に振り向く。

「そうでしょ? 静司が何を隠しているのかは僕は知らない。けど、こんな私を信じて傍に置いてくれた優しい静司の事を、僕も私も信じるよ」

「だけど俺は、」

「うん。嘘ついてたね。それにずっと苛々してたよね。だけど気を使ってくれて、時たま突然面白くなって、いざという時は守ってくれて、ちよつと怖い時もあるけど、優しい。それが静司だもん。だから信じるよ」

ね? とちよつと顔を赤くして告げるシャルロットに、その言葉に、静司は笑った。

「く、くくく、はははははっ!」

全く、面白い事だ。彼女はbladeである静司を知らない。bladeが演じようとした川村静司という存在しか知らない。彼女も、今まで静司が嘘をついてきたことに気づいている。

だけど、だけどだ。そんな自分を優しいと言い、信じてくれると言

う。それが嬉しくもあり、そして散々悩んでいた自分が滑稽でもあった。

「そうか、なら期待に応えるところでしょう」

黒いISが再度動き出す。それを確認すると静司もゆっくりと動き出す。

「シャルル、奴の周りに銃弾をばら撒いてくれ。出来るだけ派手な方が良い」

「ばら撒くだけでいいんだね、了解だよ」

「一夏、俺が合図したら突っ込め。お膳立てはしてやる」

「……わかった」

まだどこか納得していない一夏だったが、渋々と頷く。それを確認すると静司はゆっくりと歩いていく。黒いISも静司を確認し、その眼を光らせた。

「そろそろお開きだ、後輩。それはあつてはならないんだよ」

その言葉と同時に、

「静司、行くよ！」

アサルトライフル。アサルトカノン。グレネード。マシンガン。ショットガン。ありったけの武器を高速切替で呼び出しては消しながら放つ。それらの銃弾は静司と黒いISの周りに無造作に撃ちこまれ、砕けた地面や爆発の衝撃によつて辺りが硝煙に包まれていく。

静司と黒いISは互いに加速し、その硝煙の中に突っ込んで行った。一瞬、視界がゼロとなる。しかし敵の位置は見誤らない。周囲から閉ざされたその空間で二機は激突した。

先手は黒いIS。小刀が静司の首を狙う。それを右腕に持った柄だけになったブレードを叩き付け、弾く。柄が砕け、無手となった静司に刀が迫る。だがそれを回避することなく、静司は左腕を伸ばした。

ギィィィンツ、と金属音が響く。そして再び黒いISが理解不能な出来事に硬直した。

「VTシステム。『Vプロジェクト』の成れの果て。その上位互換が俺だ。動きも行動も太刀筋も、全部お前より知ってるんだよ。だからこ

んな事も出来る」

静司の左腕。黒翼の部分展開でもある機械のその左腕が刀を掴み、そして、

「こいつをお前に乗せたやつは必ず潰す。俺が、俺で有る為に」
握り、砕かれた。そのまま動きが止まった黒いISの首を掴み宙へ飛ぶ。

「そうだ。それが俺の夢であり、姉さん達の願いだったから」

一瞬の滞空。そして地面に向けて加速する。

「頭を空っぽにして馬鹿になってやつと気づいたんだよ。だからお前はここで終わりだ——、一夏！」

「うおおおおおおおおお！」

地面に急降下する静司と黒いIS。その着地地点に一夏が突っ込む。その手には展開された零落白夜。

地面に叩き付けられた黒いISに零落白夜の一撃が決まった。エネルギー無効化の特性を持つその一撃はシールドバリアー、そしてラウラを包んでいた装甲を切り裂く。零落白夜の特性故か、エネルギーを失ったその装甲は変身した時の様に形を崩し、ラウラから剥がれ落ちていく。そして中から崩れ落ちるようにラウラが現れた。

気を失うであろうその一瞬、ラウラと一夏の眼が合う。その瞬間、一夏は何かを引き込まれるような感覚がした。

白く何も無い空間。そこで一夏とラウラは向かい合っていた。

——強さとは何なのか。

それはラウラの疑問であり、求めるもの。そしてその具現が織斑千冬だった。だがそれ以外に出会ってしまった。二人に出会ってしまった。

未熟ながらも強い意志で、強敵に挑む織斑一夏。

そして、圧倒的な力を秘めていた川村静司。

——強さとは何のか。

『それは心の在り処だろ。自分がどうありたいかと常に思う事だと俺

は思う』

——意味がわからない。

『自分がどうしたいか。どうなっていきたいかも分からなければ強さの求める先が分からないって事だよ』

——自分が？

『自分自身の芯を持って、そしてやりたいことをやりたいようにやっていけばいいんだよ。遠慮や我慢なんてしてたら、芯も捻じれて見失っちゃうからさ』

——ではお前は？

『俺は皆を守りたい。守られるだけでなく、守りたいから強くなりた
いんだ』

——それがお前の強さ

『強いかどうかは分からないけどな。けどこれは譲れない。だから、お前も守ってやるよ』

そんな二人の問答を静司は少し離れた位置で見ている。その顔には苦笑が浮かんでいる。

耳の痛い話だ。

自分がどうしたいか。どうなっていきたいか。それはまさしく自分の悩みであった事。無論bladeである事に不満は無い。しかし無理に『川村静司』を演じようとする事で一夏の言う、『我慢』を、自分でも知らずに行っていたのだろう。そもそも自分はblade9だけでなく、川村静司でもあったのだ。演じること自体が間違っていた。それにやっとなつて気がついた。

そもそもなぜ自分が分からなくなってしまったのか。blade9に縋ってしまったのか。その原因は一つ。それこそが『Vプロジェクト』の——

突如世界が歪んだ。まるで壊れたテレビの様に世界がブレ始める。白い世界に黒い世界が薄く重なっていく。

一夏とラウラも世界の突然の変容に動揺している。だが静司はこ

れから何が起きるか、何となく気づいていた。この空間はIS同士の情報交換ネットワークによる相互意識干渉《クロッシング・アクセス》領域。静司の意識を読み取ったそれが、世界に投影を始める。

『おは——うExO2。これ——り実験を始——る。今日も壊れ——事を期待する』

突如響く白衣の男の声。そして椅子に固定され、頭に様々なコードを取り付けられた少年の姿が映る。

『B27——。インス——ルを開始』

そして聞こえるのは子供の耳をつんざく様な悲鳴。その絶叫に一夏とラウラの顔が蒼白になっていく。静司のみ、淡々とその光景を眺めている。

大きく世界がぶれ、景色が変わる。そこはアリーナのように広い空間。その中心には白衣の研究者達。5人の少女。そして先ほどの少年が居る。

『……千冬姉?』

一夏が声を上げる。5人の少女は全員、黒い長髪と狼を思わせる鋭い目つき。整った顔立ちとすらりとした長身。その全員がどこか織斑千冬に似ていた。

『それで——実験——始る——』

ノイズ交じりの声に従い、5人の少女と少年が武器を取り戦い始めた。

再び世界がぶれる。今度は白い小さな部屋だ。そこには5人の少女と少年が仲睦まじく談笑していた。彼らの姿は少し成長しており、先ほどは5人とも殆ど同じ顔だったが、多少変化が表れていた。鋭い雰囲気の子もいれば、温和な子も。陽気な子も居る。彼女達と彼はとも幸せそうにしていた。

世界がぶれる。

そこは再びアリーナの様な場所。しかし先ほどと様子が違う。天井が崩れ、炎が上がり、そして死体が転がっている。

そんな地獄の中心に、5人の少女に囲まれて少年が居る。

『これ——だよ。ち——の——なんて、許さ——。だから——した』

だんだんとノイズが酷くなっていく。これは女の声だ。忘れる事の出来ない、悪魔の声。

もういい、やめろ。

これ以上は、いらぬ。

忘れる事は無い。だからあの光景だけはやめてくれ。

だが止まらない。彼と彼女らは宙を浮く機械の球体に囲まれている。そしてその球体が光り始める。少女たちが動く。少年が抱きかえられる。

やめろやめろやめろやめろやめろやめろ！

願いは叶わず、映像が光と炎に包まれた。

そして再び世界がぶれる。

瓦礫と炎しか残らない空間。その中心で5体の軀に囲まれて、少年が慟哭を上げていた。

その左腕は黒く、硬質な金属でできている。

世界のぶれが激しくなっていく。この投影が終わる。だがその後、先ほどと同じ女の声が聞こえた。

『だから、こうな——だよ。でわ——す。』

——ぶいっ！』

そしてその世界は閉じた

IS学園の上空。誰にも気づかれない程の高度にそれは居た。

全身装甲のそれはかつて学園を襲撃した無人機。しかしその装備は若干異なっている。

両肩、そしてその背中には巨大なドーム状のレーダーが搭載されていた。

無人機は微動だにせず、静かに地上を観察している。しかしそのレーダーに別の反応が現れた。

——ISの接近を確認。照合——IS学園登録のラファール・リヴァイヴと確認。

無機質な機械の眼が接近するラファール・リヴァイヴを確認した。

その搭乗者は顔を半分覆うバイザーで隠しており、表情は見えない。彼女こそが、混乱の学園からISを奪った張本人だった。

ラファール・リヴァイヴは無人機に向かい真っ直ぐ飛んでくる。その手に持つアサルトライフルの銃口が無人機に向けられた。

——ステルス機能は稼働中。しかし対象の敵対行動から、効果は無しと判断。作戦行動に支障の出る可能性大。——命令を確認。遠隔稼働へ切替。

赤く光っていた無人機の眼が黄色に変わる。途端にその様子が人間じみた物へと変化した。

『んー邪魔だなあ。今はちよつと忙しいから相手するのも面倒なんだよねー。なので君はここで退場！』

無邪気な声を発しながら無人機が迫るラファールを見やる。その途端、ラファールの動きが急に鈍った。向けられていたライフルはその腕ごとだらりと下がり、スラスタもまた、機能を停止した。

『ちーちゃんが困るといけないから壊れない程度に着地できるようにして、と。私ってやつば天才だね！』

それは誰に向けて放った言葉でも無い。完全な独り言。事実、ハイパーセンサーすら停止したラファールの搭乗者には聞こえていないだろう。

突如、機能を停止させられたラファールとその搭乗者は飛ぶ力を失い、真っ逆さまに落下していった。

それを見届ける事も無く、無人機だったものは再び目的の場所——アリーナへ眼を向ける。

『んー、イベントは終わったようだね。けど苛々するなあ。ちーちゃんの真似事をする機械なんて。そうだね、そんなことを考えられなくしちゃおう』

無骨な無人機が頷く。それはまるで似合わない動きで有り、見るものが居たら気味悪がるであろう光景だった。

『それとあのかませ犬君。あれもなんなんだろうねえ……。なんかあっちの方が苛々するよ。そろそろ退場して貰おうかなあ……。』
ブツブツと呟きながら無人機は高度を上げ、撤退していく。

もしその無人機が。いや、無人機を動かしていた者が、もう少し他の事を気にしていたら。例えば落下していくラファールの事を気にしていたら気づいていたかもしれない。

地面へ落下していくラファール・リヴァイヴ。その搭乗者が悲鳴も何も上げず、バイザーで隠されていない口元が、薄く笑っていた事に。その数分後。落下したラファールとその操縦者の拿捕に向かった鎮圧部隊の面々は困惑していた。

そもそも、アリーナの異常を察知し出撃準備をしていた時、突然ラファール・リヴァイヴの一機が動き出した。困惑しつつも、止めるために動いたがあっさりと返り討ちにされたのだ。何機かのラファールは中破。辛うじて動ける者たちが追跡する中、逃走者が突然空を目標指したかと思えば、急に落下してきたのだ。力なく落ちたその事態に驚きつつも、その現場に向かった。

木々が折れ、衝撃で地面に亀裂が入ったその場所の中心にラファールは居た。しかしそこに搭乗者の姿は見えない。

「逃げたのでしょうか？」

「わざわざISを置いて？ 確かに一度動きは止まった様でしたが」「チェックしていますが、機体に異常は見られません。しかし、だとすると何が目的だったのでしょうか……」

ISを奪ったのにかかわらず、正常な機体を置いての逃走。そのどこかちぐはぐな行動に全員が首を捻る。

「とりあえず機体を持ち帰ってログを見てみましょう。アリーナの方も片が付いた様です」

「了解しました」

どこか釈然としない気持ちのまま、彼女達は帰還していった。

「一夏！ しっかりしなさい一夏！」

「う……鈴？」

体を強く揺すられた一夏がゆっくり開いた一夏の眼に心配そうに見つめる鈴達の姿が映る。

「俺は一体……う？」

「ボーデヴィツヒさんを零落白夜で斬った後、突然倒れたのですわ。何も覚えていないのですか？」

「何というか……変な夢みたいのを見た気はするんだが」

どこか靄がかかって思い出せないが、確かに不思議な空間でラウラと話した気がする。そしてその空間が途中から変わり——、そこから先がよく思い出せない。夢の内容が眼が覚めると思い出せない、そんな感覚。だが確かに自分にとって大切な何かを見て、良く知る何かを聞いて、そして全く知らない何かに恐怖した気がする。

「っ、そうだ！ 他の皆は!？」

「落ち着きなさい。ボーデヴィツヒならあそこよ」

鈴が指さした方向を見ると丁度応急処置が終わり、ラウラが担架で運ばれていく所だった。そこでようやく自分がアリーナの端で寝かされていたことに気づく。

「多少怪我はあるけど大事は無いそうよ。一夏、アンタもね。ただ川村だけど——」

「何かあったのか!？」

そういえば先ほどから静司とシャルルの姿が見えない。嫌な予感が過るが、それに箒が首を振る。

「お前達と違って川村は無事だったが、いつの間にか姿を消したのだ。今はデュノアと布仏が探している」

どうやらあの黒いISを止めた後、後始末のどさくさに紛れて姿を消したらしい。

「どこいったのかしら。アイツが一番怪我してた筈なのに」

「全くですわ。それに訊きたいこともありますし」

「……」

以前は何だかんだで誤魔化されたが、先ほどの静司の動きは本物だった。アレが唯の偶然で済まされる訳が無い。それにシャルロットの銃撃による硝煙で見えなかったが、そもそもどうやってあのISの動きを止めたのか。訊きたいことは山ほどあった。そしてそれは一夏も同じだ。

さっきの自分は確かに熱くなっていた。それは尊敬する姉の力を相手が使ったからから。そしてその相手と、友人である静司の高度な戦いを見てしまったから。しかも静司の動きも又、どこか姉に似ていたのだ。

最初の一撃。静司の助けが無ければ自分はある程度とやられていた。その相手に静司は互角以上の戦いをしていて。打鉄の不調が無ければあのまま戦えたと思うほど。

悔しかった。

別に一夏は静司を見下しているわけでは無い。戦つても勝てるか？ と聞かれれば断言はできない。だが、自分もここに来て強くなった。日々の訓練は一夏に自信を付けさせていた。『皆を守る』という思いを叶えるための強さ。それを確かに実感し始めていた。

だが実際はどうだろうか。守るところか守られ、そしてそれを成したのは専用機持ちでも無い静司。その力に、その姿に嫉妬してしまった。

「カツコ悪い……」

自分がやりたいからやる。その思いに偽りは無い。だが心の片隅で、静司に対する嫉妬もあった事も事実。その結果、静司の忠告も聞かずに敵に挑もうとしていた。冷静になった頭で考えると、酷く情けない話だ。夢の様なあの空間で、ラウラにアレだけ偉そうに言ったが、現実には厳しい。だからこそ、

「強くなる」

「は？ アンタいきなり何を——」

「鈴、俺はもつと強くなりたい。想いだけじゃなく、それに見合った力を」

強く、意思の籠った目ではつきりと宣言する。突然言われた鈴はその一夏の姿に顔を少し赤らめた。

「ふ、ふん。だったら、今まで以上に鍛えてやるわ」

「そ、そうですね！ 覚悟なさいませ、一夏さん」

隣ではセシリアも顔を赤らめている。だが一夏はそれに気づかず拳を握りしめた。

(そうだ。ラウラにも宣言したんだ。だから俺は強くなる。それで今度こそ皆を守って見せる)

強く想う一夏と、それを見つめる鈴とセシリア。しかしその一歩、後ろで筈は複雑な表情をしていた。

「強さ……私には……」

その呟きは誰にも聞かれる事は無かった。

空が青い。

「あー」

芝生の上に大の字で寝転がりながら、静司はそんな当たり前の事を考えていた。その口からは意味の無い言葉が流れ出ている。

「やらかしたなあ」

アリーナでの騒ぎの後、侵入者を捕らえるべく抜け出したのだがその侵入者は既に逃亡したと連絡が入った為、やる事が無くなってしまった。無論、今も仲間たちが搜索や警戒活動を行っているが、それを手伝おうとしたら止められたのだ。怪我人の自分は大人しくしていて、もしもの時だけ動け、と。

その結果、早い話ヒマになってしまったので一度、色々考えようと思ひ、ここで一連の流れを思い出していたのだが。

「これからどうしようか」

一夏を斬り飛ばした拳句、無人機相手の立ち回り。おそらく戻ったら追及される事だろう。それに前回のラウラの砲弾を弾いた件もある。何だかんだで有耶無耶になっていたが、もうそういう訳にはいかないだろう。そしてもう一つ。

「姉さん……」

あの不思議な空間での映像。あれを一夏とラウラにも見られた事だろう。一夏とラウラからは離れた位置に居たため、二人が静司の存在に気づいていたかは分からない。しかしもし気づいていたならあの映像と関連付けられる可能性はある。

「そっちは流石に誤魔化すしかないな。……しかし折角、人がスツキ

りしてた所に最悪な物見せやがって」

軀に囲まれた慟哭を上げる少年。忘れることない、忘れられない地獄の記憶。今、こうしてある程度の平常心を保っていられるのは何度も夢に見て、何度も涙を流したからか。しかしそれは悲しみに慣れた訳では無く、決意を新たにしたに過ぎない。姉達の願いを叶えつつ、二度と繰り返させないという決意。

「こんにちは。川村静司君」

声がかかりそちらに視線を向ける。そこに居たのはスーツを着た若い女だった。身長はそれほど高くなく、髪は鈍い金色。片手に煙草を持ち、眼鏡をかけたその眼差しは面白そうに静司を見据えていた。「どなたでしょうか……？」

一応、年上なので敬語を使っているが静司は訝しむ。ここはアリーナとは反対方向。一人で考え事をする為に、わざわざ人が居る方向とは別の場所に居たのにも関わらず、この女は現れた。格好からするに今日の来賓の誰かだとは見当をつけるがここに来た意味が分からない。

「私はカテーナ。偽名だけどねえ」

「随分な自己紹介ですね」

堂々と偽名を宣言する女に静司の警戒心が上がる。その様子にカテーナはくすくすと笑い始めた。

「貴方に訊きたいことがあったのよねえ」

「訊きたい事？」

「そう。あなたが何者なのか知りたくて」

「——意味がわかりませんね」

「そうかしら？　世界で二人しかいない男性操縦者。その事を知りたいのは普通だと思うのよねえ」

その女の言葉に静司の眼が細まる。

「二人？　いや、三人で——」

「シャルル・デュノアは女よ。あなただって知ってるんじゃない？　ルームメイトですものねえ」

「っ、あんたは一体……」

別に隠している情報でもないが、外部の人間が察の割り振りを知っている。それはつまり何かの目的があつて調べたという事だろう。そしてシャルロットの正体を知っている。唯の女では無い。

「そうねえ、あなたが教えてくれたら話してもいいかしら。それで、どうしてあなたはISを使えるのかしら?」

「知らない。ただそういう人間も稀に居るといふ事じゃないか」

「いいえ、違うわ。織斑一夏が使えるのは彼が織斑千冬の弟だから。それだけよ」

「……」

「篠ノ之東は織斑千冬と親友。故にその弟である織斑一夏とも知り合っている。そしてそれだけの理由で博士よりIS使用の許可が出た。シャルル・デュノアは男で無く、シャルロット・デュノアという名の女。故にISが使えてもおかしくは無い。では、あなたは一体何故使えるのかしらねえ」

「何故、そう言い切れる。ISのコアは——」

「解析不能。確かにそう。私も完全な解析はまだ出来てないのよねえ。だけど最近面白い物を手に入れてから色々分かったのよねえ」

カテーナがにやり、と口元を歪ませ笑う。

「無人機という存在を」

ダンッ!

響いたのは静司の足が地面を打つ音。それを踏み込みとし、静司はカテーナの首を掴むべく左手を伸ばした。だがその手は突如、カテーナの前に現れた物体に阻まれた。

「つ……ISか!」

カテーナの前に現れたのは鋼鉄の棺。そして静司はこれを見た事がある。

「ご無事ですか」

「あら、お帰りなさいシェーリ」

地下で戦ったISブラッディ・ブラッディに搭乗したシェーリが現れる。

「その様子だと実験は予想通りだったようねえ」

「はい。ラファール・リヴァイヴは強制的に機能を停止させられました。やはり博士はISに干渉できるようです。落下後はこちらの命令を受け付けませんでしたので捨ててきました」

「下手に持ち帰っても一度博士の手に付いたISだし危険なのでそれは正解よ。しかし恐ろしい話ねえ、対策を考えましょう。さて、ところで随分な反応。やはり唯の生徒じゃなさそうねえ」

「黙れ。ラファールを強奪したのも地下に現れたのもお前らか」

「地下の事を知っているという事はあなたも関係者ね。アリーナでの戦いといい、ますます興味が湧いてきたわ。もしかして地下での黒い翼のISはあなただったりするのかしら？」

「そうであろうとなかろうと関係ない。お前はここで捕まえる」

静司の気配が変わる。こうとなつては隠す必要が無い。むしろ下手に隠してこの二人を逃す方が危険だと判断し黒翼を呼び出そうとした時、背後から声が聞こえた。

「静司ー！」

「かわむー！」

シャルロットと本音だ。静司を心配し探していたところに、正体不明のISと対峙している姿を見つけた二人は顔を直ぐに状況を察した。

「っ、ラファールー！」

シャルロットがISを展開しアサルトライフルをカテーナとシェーリに向けて。その眼には困惑と恐怖。それもその筈だ。目の前のISは以前、自分を攫いかけた機体なのだから。

「邪魔が入ったわねえ」

「蹴散らしますか？」

「いえ、増援が来たら面倒だし帰りましょうか」

シェーリがカテーナを抱きかかえ背後に跳ぶ。静司の隣にはシャルロットが並び、その少し背後に本音が立つ。

「逃がすと思うか？」

シャルロットが居るがこの際関係ない。黒翼の姿を晒すことも厭わない。それ以上にこの二人を逃してはならない。

「あらあら怖い顔。だけど逃げさせてもらおうわ」

カテーナは笑うと懐から携帯端末を取り出した。

「古典的な手段だけど効果的。私そういうの好きなのよねえ」
女が端末のボタンを押す。その途端遠くで爆発音が響いた。

「っ！ あれはIS格納庫の方向!?!」

「てめえ……」

「言わなくてもわかるわよね？ 逃がしてくれないと色々吹き飛ばす。それは嫌でしょう？ ああ、安心して。逃げた後にドカン、なんて事はしないわ。つまらないもの」

くすくす、と笑うとシェーリのISが宙に浮き始める。

「信じろと?」

「そうするしかないでしょう?」

「……ちっ」

確かにこのまま戦っても双方にデメリットしかない。

「今日は楽しかったわ。色々と見れてね。だからお礼に一つだけ忠告。ISをあまり信用しない方が良くわよ。それが作ったのがどんな人間かを考えて、ね」

「何? どういう意味——」

「後は考えて見なさい。ではまた会いましょう。不思議な男性操縦者、川村静司」

そう告げるとそのISは空へと消えていった。

空へと敵が逃亡した後も静司は空を見上げていたが、不意にその両腕が掴まれた。

「さて、かわむー」

「僕たちが何を言いたいか分かってるかな?」

「ん? いきなり何……を……」

振り返り映った光景に静司の顔が引きつった。

「かわむー、前も聞いたけどやっぱり君はマゾなのかな?」

「一番怪我してるくせに一人で居なくなつて、僕たちがどれだけ心配

したと思う?」

「ホ、ホンネサン? シャルルサン?」

二人は笑顔だ。但しその背後からはゴゴゴゴゴ、と効果音が聞こえた気がした。

「言いたいことはいっぱいあるけどまず治療だねかわむー。しやるるんお願い〜」

「わかったよ布仏さん」

「本音? 何で手をワキワキしながら近づいてくるの? シャルル?

何故ISを使つてまで俺の手足を拘束する? お兄さんちよつとわかんないや」

「キャラ崩壊させて誤魔化しても駄目なんだよかわむー。またどこか消えちやう前にここで治療しよ〜」

「僕は逃げない様に抑えてるだけだよ。治療中も、その後の説教の為に」

「え、ちよつと待つて。流石に俺もこうやって服脱がされるのは抵抗が……つて本音!? なんでメスなんか持つてる!? とうか必要なのかそれは!? シャルルも何故そんな巨大な杭を俺に向ける!? 逃げない様に? この状態でこれ以上の脅しは逆効果じゃね? なんか違うね? これ俺のキャラじゃなくね? とうか二人とも顔赤らめて恥ずかしがるくらいならやめようか!? 俺もちゃんと救護室行くから!」

「ふふふふふ」

どこか目の笑っていない二人に若干ビビる静司。それに構わず二人は静司の応急処置と説教を開始したのだった

18. そして、彼女たちは

意外に治療は的確だった。

二人に半ば襲われる様な形だったが、治療自体は丁寧かつ的確であり、現在静司はあちこちに包帯が巻かれている。

本当はそのまま救護室へ連れて行かれる所だったが、静司の少し考え事をしたという願いから移動はしていない。今日は色々あった日だ。おそらく二人も気を使ってくれたのだろう。但し、また無理してどこかへ行くといけないので監視はしていたが。

「なあ、本音。やっぱり重いんじゃないか？」

「大丈夫だよかわむー。それにちよつと嬉しいからおつけー」

今は静司と本音の二人きり。シャルロットは飲み物を買に行っている。そして静司は本音の膝の上に頭を乗せ、所謂膝枕をされていた。

「嬉しい？ 体格的にキツイと思うんだが……それに少し恥ずかしい」

「駄目だよかわむー。こうやって見てないと直ぐにいなくなっちゃうもん」

「いやしかし仕事が……」

「さつき、しーわんさんから連絡あったよ。『爆弾は任せておけ。あいつは大人しくさせておいてくれ』だったー」

「ぬう……」

逃げ道を絶たれ静司も諦めた。体の力を抜き上を——本音を見上げる。彼女の制服はだぼだぼなので余裕があるが、それでも強調されている女性特有の膨らみが目の前にある事に少々顔が赤くなってしまう。

「ん？ どうしたのかわむー」

「いや、気にしないでくれ。それと……悪かった。そしてありがとう」

「ほえ？」

首を傾げた本音に静司は笑いかけた。

「謝罪は心配かけた事。今までも何度も言われてたのにな」

「うーん、確かに怒ったけれどかわむーの仕事が大変なものも分かっているよ？　ただ、だからと言って無理しすぎないで欲しいな〜って」「どうだろうな。多分これからも無理はすると思う。だけど……そうだな。なるべく心配をかけない努力はするよ」

「……はあ。かわむーは仕方ないね〜。だけどそれもかわむーだもんね」

「悪いな」

呆れた様な本音に静司も苦笑で返す。

「それと感謝しているんだ。本音や、皆の言葉が無ければ俺は多分いつまでも気づかないままだったから」

確かに自分はbladeだ。しかし川村静司でもある。それをすっかり忘れていた。いや、気づいていなかったのかもしれない。自分という存在を確立するために、判りやすい『エージェントのblade』という存在に縋っていた。その結果、川村静司という存在を蔑ろにしていた。そしてそれに気づいたのは学園での生活と皆の言葉あつてこそ。それ故の感謝。

「けどかわむーがおりむーを斬り飛ばした時は私もびつくりしたよ〜。その後は突然笑い始めたし」

「アレは……うん、忘れてくれ」

顔を逸らす静司の頬を本音の手が固定した。髪をかきあげ静司の眼をじつ、と覗き込む。それは以前一日中アニメを見た日にされた事と同じ。

「……うん。かわむー、良い顔になったね〜」

そうか？　と静司が首を捻ると、うんうん、と嬉しそうに頷く。

「けどかわむー、これからどうするの？」

静司の悩みは解決したかもしれないが、他にも問題は山積みだ。特にアリーナでの一件は必ず突っ込まれるだろう。

「そうだな……まあ、なんとかするさ」

「……あやふやだね〜」

「面目ない。……とところでいつまでこの格好なんだ？」

先ほどから頬に手を添えられたままだ。ひんやりとしたその感触

は心地よいが、気恥ずかしさもある。

「もうちよつとかなく。しやるんが戻るまで」

すつ、と本音が顔を降ろす。近づいてきた本音の顔に静司は慌てた。

「ほ、本音？」

「……」

目と鼻の先。至近距離で見つめられ静司も硬直する。先ほどからどうも様子がおかしい気がする。確かに彼女はよく抱き着いて来たりはするが、いつもより接触が多い気がするのだ。そもそもこの膝枕も、彼女らしくない気がした。

そんな本音はじつ、と静司の顔を見続けていたがやがて口を開く。

「ねえ、かわむー」

「な、なんだ？」

「居なくなっちゃ……やだよ？」

「……」

ああ、成程。

不安げに揺れる本音の瞳を見て、静司は自分の愚かさに気づいた。

本音は更識家の関係から静司の任務を知っている。学園に潜入して、織斑一夏や学生たちを守る、という任務。しかし今日の静司の行動からすればクビになってもおかしくない。何せ護衛対象を斬り飛ばした挙句、VTシステムと直角以上に戦ったのだ。少なくとも『素人の男性操縦者』としての潜入は失敗だろう。

だからこそ彼女は『これからどうするのか』と聞いたのだ。なのに自分はちゃんと答えていない。これでははぐらかしたと思われるも仕方ない。そしてそれが不安させたのだろう。

だから、

「それ」

「ほへ？」

本音の頬を突つついた。きよとん、とした本音に笑う。

「一緒に秋葉原に行くんだろ？」

「……あ、覚えててくれたんだ」

「当たり前だ。どんだけ薄情な奴だと思われてるんだ俺は」

それに、と続ける。

「俺も学園から離れたくないさ。むしろこれからって所なんだ。だからこそ、『なんとかするさ』」

「か、かわむー？ 悩み事が解決してスッキリしたのは良いけど、スッキリ通り越してちよつと適当過ぎるよ」

「楽に、って言ったのは本音だろ？ だからこれからもよろしく頼む」
そんな静司の言葉に本音も呆れた様に、しかしどこか嬉しそうに頷いたのだった。

『青春だねえ』

「青春すつねえ」

『青春ねえ』

そんな二人を生暖かい眼差しで見つめる三人。C1とC12。そしてC5だ。静司の様子を心配したC5がC12の様子を見るように頼み、現在二人の様子は映像を通してC5そしてC1にも届けられている。

「この映像、課長に届けたらどうなるっすかね」

『泣いて喜ぶんじゃないか』

『そのままイキそうね。いろんな意味で』

「C5。下品っすね」

『五月蠅いわよ小娘。あなたはもうちよつと女らしい喋り方をしなさい』

『どっちもどっちだ。ほれ、仕事に戻るぞ』

「了解っす。私もいい加減盗撮紛いの事は疲れたし」

『どうか盗撮よね、これ』

『見ている時点で全員同罪だ。ほれ、デュノアの嬢ちゃんも帰ってきた。俺らも仕事に戻るぞ』

『はいはい。彼女の事、B9がどうするのか楽しみにしてるわよ』

こうして三人は元の仕事に戻って行った。因みにこのときの映像

が後日EXIST内で広がり、三人は静司より過激なスキンシップを受けることになる。

「さて、では白状してもらおうか」

「その言い方だと自分が犯人みたいですよね」

あの後、しばらく本音と談笑したり、戻ってきたシャルロットが二人の様子を見てどこか機嫌悪そうにしたりと色々あったが、静司は今取調室に居る。無論アリーナの件についてだ。これは当事者たち全員がそうで、今は一夏達も事情聴取を受けている。とは言っても、ラウラのISが暴走し、それを止めたとしか言いようがないだろう。だが静司は少し違う。他の教師は下がり、今は千冬の一对一で事情聴取を——いや、この場合取り調べを受けている所だ。

「また以前の様にカニだのなんだの言うつもりでは無いだろうな？」

「やっぱ無理ですよね」

「当たり前だ、馬鹿者」

苛ついた様に千冬は机をコンコン、と指で叩く。

「答える、お前は何者だ？」

「川村静司です。知っているでしょう？」

「私の知っている川村静司という人間とは随分と印象が違うのだが？」

先ほどからずっとこの調子だ。静司の素性が気になる千冬とそれをかわす静司。平行線が続いている。

「お前のあの動き。あれはVTシステムと同じ……いや、それ以上に私と同じだった。VTシステムとは過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きをトレースするシステムだ。そんなことが、素人の筈のお前に出来ると？」

「人間やれば出来るんですね。俺もびっくりです」
(とは言った物もどうしたものか)

このままでは埒が明かない。納得のいく理由を挙げなければ千冬は納得しないだろうし、だからと言って正体を明かすのも駄目だ。

別に静司は千冬を信用していない訳では無い。教師陣の協力があれば任務はやり易くなる。だが植村加奈子の例もある。油断は出来ない。

なら千冬にだけ言うか？ 彼女は一教師ながら過去の経歴から、学園でもそれなりの権力を持っている。

(いや、駄目だ)

織斑千冬は篠ノ之束と親交がある。彼女は口が軽いとは思えないが、不安要素であることは確か。下手は橋は渡れない。

結局は誤魔化すしかないという事だ。しかし、下手に誤魔化して怪しまれたら今後の活動にも支障が出る。

「ボーデヴィツヒも一夏も、大きな怪我は無かったんだ。それで解決になりませんかね？」

「なる訳ないだろう馬鹿者。直接戦ったボーデヴィツヒからも話は聞いている。言い逃れはさせせん」

「ん、目覚めたんですか？ 様子は？」

「後遺症も無く、安静にしてれば体の痛みも直に戻る。そして、話を逸らさせはしないぞ」

駄目か。まあ当然だ。

いよいよどうするかと悩み始めたが、不意に外が騒がしくなった。

『だ、駄目ですよ！ 今は織斑先生が——』

『大丈夫だよ。私はこれでも偉いんだ』

『そういう問題じゃ……あっ！』

慌てて止める真耶を振り切って入出したのはぽっちゃりとした体形に人の良さそうな顔のスーツの男。

「桐生さんですか。何用ですか？ 今は取り込み中なのですが……」

「やあやあやあ、織斑君久しぶりだねえ。直接会うのは数年ぶりかな？」

「昨年の暮れにも会っていますよ。それでご用は？」

「ふむ。実はその彼にね」

むっ、と千冬が静司に目を向ける。しかし静司としても桐生の登場は予想外だった。

「やあ久しいねえ静司君」

「……どうも」

どうやら顔見知りという事を隠すつもりは無いらしい。静司も静かに会釈する。

「知り合いなのですか？」

当然、千冬は反応した。桐生は相変わらずの笑顔で頷く。

「そうだとも。とは言っても、彼が男性操縦者と判明してからだけだね。表向き」

その言葉に千冬の眼が細まり、静司はぎよつとした。慌てて止めようとするが、桐生がそれを目で止める。任せておけ、という事らしい。「ほう、表向きとはどういう事ですか？」

「実は彼はね、織斑一夏君が発見されるより先に見つかった『本当の世界初の男性操縦者』なんだよ」

「何……？」

「織斑君より先ですか……？ けどそんなの」

場の雰囲気に戻るに戻れなかった真耶も呆けた様に呟く。

「知らないだろうね。だって公表してないし。彼の場合は発覚したのは小さな田舎町だったから一夏君程の大騒ぎにならなかったんだよ。ある企業が新開発した装備の試験運用で彼の居た街に来ててね。僕もちよつとした付き合いからその試験に同行してたんだ。で、休憩中、彼とその友達が見学に来てたので、サービスで近くで見せてあげたらその時に発覚！ それでまあ、もちろん騒ぎにはなったけど、一夏君が不特定多数に見られたのに対して、彼の場合はほんの数人だったからね。その場で押さえこめた訳だ」

静かに千冬と真耶が聞いている中、桐生はぺらぺらと話を続ける。静司の内心は冷や汗ものだ。

「そこから揉めた揉めた。公表したらモルモット扱いにされかねない。いや、下手したら黙殺されてホルマリンかな？ だけど放って置くには惜しい存在。それに僕もね、正直欲が沸いたんだ。彼の秘密を独り占めにして、色々調査してから公表した方が自分の株が上がる、ってね」

ふふふ、といかにも人の悪そうな笑顔で語る桐生に千冬が顔を顰める。

「で、揉めた結果彼はそこの企業の実験……というか早い話解析に協力する代わりに、公表はまだしない事になった。で、彼の安全は僕が確認することで保証する代わりに、そのデータは僕がもらって僕の後々の為に有効活用しようってね」

「そんな……」

真耶が悲しそうな目で静司を見つめる。確かに今の話だけ聞くと、碌な選択肢も与えられず企業に協力させられ、拳句の果てに桐生の出世の道具とされている様だ。——真相は全然違う為、真耶の労わるような視線に顔を引き攣らせながら、あははと笑うしかない。それが一層悲壮な姿に見えたのか彼女の眼が潤みだした。勘弁してほしい。

「で、色々データは取りつつ I S 訓練も行ったんだよ。その中で、織斑君のデータを参照してたからね。同じ動きはその為さ」

「……ではなぜ学園に入学を？ 隠しておきたかったのでしょうか？」

「それは君の弟のお蔭さ。一夏君が大々的に発表されたお蔭で男性操縦者という存在が大きく注目されるようになった。一夏君が学園に入学したんだ。もう一人が現れたら同じようにするのが自然だろう？ 少なくとも研究所でバラバラホルマリン漬けの可能性は減った訳だ。いやー苦勞したよ。いかに揉み消されず、上手く発表できるか。乗るしかない、この織斑一夏のビッグウェーブに！ ってね」

あつはははは、と笑う桐生だが女性二人の視線は絶対零度に近かった。これだけ分かりやすい悪役になったのだ。彼女達からすれば同然だろうが、静司としては非常に申し訳ない気分になる。

「力を隠していたのもその為か？」

「……はい。下手に勘ぐられるとこれまでの事がバレて色々面倒なので」

「そうか。事情は分かった。しかし桐生さん、私は少々あなたを見損ないました」

「それは残念だなあ。だけど学園の一教師に見損なわれたところで僕の人生には変わりないからまあいいよ」

(痛い！ 非常に良心が痛い！ というか桐生さん必要以上に悪役に成りすぎだ！)

全力で土下座したい気分だったが、ここでそれをしたら全てが台無しだ。

「だがそうなるこれからどうする気だ？ お前の力は多くの生徒や教員が見ている。今まで通りなら逆に不自然だ」

「それは……なんとか考えます。とりあえず今日は疲れました」

これは本音だ。そもそも怪我もしているのだ。仕事も無い以上、大人しくしているのが一番良い。

そんな静司の心境を読み取ったのだろう。その後、2，3問の質問の後静司は解放された。

「失礼します」

「じゃあねー織斑君」

静司、そして桐生が部屋を出ていく。校舎内を出口へ歩く中、静司は小声で礼を告げた。

「ありがとうございます」

「ふふふ。気にすることは無い。君たちのお蔭で僕が相当助かっているのは事実だからね。たまにはこういうのも引き受けるさ。まあまだ怪しんではと思うけど、後は自分で何とかしたまえ。いやーしかし織斑君の視線は凄かったな。こう、ゾクゾクする感じ？ 何か芽生えそうだよ」

「折角感動してたんだから最後までカッコつけて下さいよ……」

小声で話しつつ、二人は帰るのだった。

二人が帰った部屋の中、千冬は目を瞑り考え込んでいた。

確かにありえない話では無い。一夏がモルモットにされず今こうしてられるのは自分や、束の力が大きい。もし何の後ろ盾も無ければ黙殺されていたかもしれない。実際、シャルル・デュノアも一夏が発見されるまでその存在を隠していた。

「だが、だからと言ってあそこまで模倣できるものか？」

桐生はどんなに追及しても、企業名までは教えなかった。『いずれわかる』との事だ。故にどんな企業かは知らないが、VTシステム以上の模倣を学ばせる訓練プログラム。それは脅威ではなからうか？そしてそれを成す川村静司の能力はかなり高い筈だ。確かに同情する点が多いが、まだ安心はできない。

「しばらくは注意が必要か……」

今後の方針を決めると千冬は静かに部屋を立ち去った。

『トーナメントは事故により中止となりました。但し今後の個人データ指標と関係する為、全ての一回戦は行います。並びに——』
「一回戦だけかあ。けど僕たちはその一回戦があんな事になったけどどうなるのかな？」

「流石にやらないんじゃないか。ボーデヴィツヒも直ぐに戦えないだろう」

「静司もね」

静司とシャルロットは寮の自室でテレビを見ていた。とは言っても、通常のテレビ番組で無く学園の校内放送であり、そこでは連絡事項が先ほどから繰り返し流れている。

取り調べは静司が一番長引いた為、静司はあの後直接部屋に帰ってきている。その後、一夏達がやっては来たが、『今日は疲れてるから』と言い訳し無理やり帰した。しかしその分明日一気に追及されると思われるので憂鬱だが。

因みに学園に仕掛けられていた爆弾は全て回収された。C1達と更識家が念入りに調査したので間違いないらしい。

「静司は怪我してるんだからあんまり暴れちゃだめだよ。また説教するよ。」

「分かってる。大人しくしてるさ」

「よし」

シャルロットがにっこりと笑う。だが静司は不思議でしょうが無い事がある。一夏達は追いついた。しかしシャルロットは同じ部屋

なのに、何も追及してこないのだ。いや、確かに治療の際に色々と言教されたが、暴走したラウラを止めた事に関しては何も突っ込まなかった。それが不思議でしようがない。

「なあシャルル」

「なあに？ 静司」

「……いや、なんでも無い」

「？ 変なの」

いつそ直接何を考えているか聞いてみようかと思っただが、やめる。聞いてこないのならそれが一番良いだろう。そう考えた静司の顔をシャルロットはじつ、と見つめていた。

「……」

「な、なんだ」

「もしや、やはり訊いてくるのだろうか？ と考えた静司だが、シャルロットの口から出たのは全く予想できなかった言葉。

「静司、よく見ると髪が酷いことになってるね」

「え？ ……ああ、そうかもしれないが」

確かに今の静司は中々酷い事になっている。シャワーは浴びて、汚れは落ちたが、所々焼け焦げたり、半端に短くなっていたりという状態。アリーナの戦いの結果だ。

「前から思ってたけど静司って髪が長いよね。そっちの方が好きなの？」

「いや、単純に切ってないだけだ。最後に切ったのはいつだったかな」

正直覚えていない。ここに来るまでは長期任務に入っていたから少なくともその前だ。うーむ、と静司が考えていると不意にシャルロットが手を叩いた。

「そうだ、僕が切ってあげようか？」

「ん？」

「うん。静司が良ければ切ってあげるよ。というか切りたくないな」

「どうかな？」 と提案され静司も少し考える。元々髪は対して気にしていなかったで、目つきの悪さを隠すのに役に立てばいいという程度。それも今の状態ではそのままの方がかえって悪目立ちしてし

まう。

「じゃあ頼むかな」

まあ対して問題は無いだろう、と結論付けシャルロットに頼んだ。これが後日予想しなかった問題を起こすことになるが、今は二人とも気づいていなかった。

「静司、動かないでね」

「OK」

静かな室内。床に新聞紙を引き、首から下はレインコート。立て鏡を前に椅子に座った静司の髪をシャルロットが切っていく。時折、「んー」や「むう……」と唸りつつもシャルロットは器用に静司の髪を整えていた。

「上手いもんだな」

「そう？ 人の髪を切るのは初めてだからちよつと緊張してるんだ」
「そうは見えないな。まあ、そんなに気にする方じゃないと思うようにやってくれていい」

「む、そうはいかないよ。折角だから格好よくしてあげる」

どうやら、シャルロットの何かを刺激してしまったらしい。先ほどより一層真剣になったシャルロットが静司の髪にハサミを入れる。

「……」

「……」

静かな時間。しかしどこかシャルロットが悩んでいる様子でもあった。やはり話を聞きたいのだろう。あえて気づかない振りをするのかとも考えたが、ふと考え直す。

(課長に答えを出す前に、言っておくべきだ)

「なあ、シャルル」

「何？ 静司」

「以前、俺が言ったこと覚えているか？」

静司のその言葉にシャルロットの手が止まる。

「それって、僕が女だつてバレた時の事？」

「そうだ。俺はその時『好きにすればいい』って言ったよな？ あれを取り消す」

「え…………？」

鏡に映るシャルロットの顔に不安が浮かぶ。

「やつぱり……、僕は国に戻るべきってこ——」

「違う」

ぴしやり、と遮る。それだけは絶対に違う、と意思を込めて続ける。

「取り消すとは言ったがそうじゃない。俺が言いたいのは……」

「……静司？」

突然黙りこくった静司にシャルロットが首を傾げる。だが静司はそれに気づいていなかった。と、いうのも、もしかしたら今から言う事はものすごく恥ずかしい台詞な気がしてきたからだ。

「あー、そのだな。だから……えーと」

気まずい雰囲気になっていく。シャルロットも段々と顔の不安の色が濃くなっていく。静司が言いにくそうにしているので、悪い話だと勘違いしているのだろう。このままではどうにもマズイ。しかし言いづらい。段々と焦り始めた静司と更に顔が暗くなっていくシャルロット。それが静司の焦りに拍車をかけ、思わず静司は言い放った。

「つ、つまりだな、許さないって事だ」

「へ？」

「居なくなるのは許さない。捕まるのも許さない、って事……で」

(……………)

俺は何を口走っているのだろうか？ なんだこの許さないって何様だおい。

「そ、それってつまり……」

「あー、えつとそのあれだ！ つまりシャルルにも幸せになる権利はある訳で、俺も折角出来た友人を失いたくない訳で、つまりはそういう事なので——ああ！ もう！ まどろっこしい！ つまりはここに居ろって事だ！ そういう事だ、文句あるか!？」

「な、なんで静司が怒ってるの!？」

「知るか!？」

もはや半ばヤケクソだ。だが本心でもある。こんな面白い場所であ会って出来た友人なのだ。そんな彼女にも幸福を祈る事は友人として当然だろう。

シャルロットは静司の物言いに啞然としていた。そして、

「静司は……やつ、ぱり無茶苦茶……だよっ」

ぽたり、と涙を流しながら、くしゃくしゃの笑顔で笑う。

「無茶苦茶で、奇妙で、意外に馬鹿っぽくて、しかも適当で」

「いやいやちよつと」

何だこれは？ 涙を流しながらも笑うシャルロットに罵られているのだろうか？ 状況が特殊すぎて対応しきれない。

「それでも——優しい」

「……」

「静司にね、あんな風に言ってもらえてとても嬉しい。なんだろうね？ 今までの悩みが全部吹き飛んじやう位に、嬉しいんだ」

「……そうか」

うん、と涙を指で拭いながらシャルロットは笑う。

「僕もね、静司に言おうと思ってたんだ。僕もここに残りたい——うん、残るって」

先ほど悩んでいる様にしていたのはその事か。静司も静かに頷く。

「言おうと思って、けど中々言えなくてね。髪を切りたいて言ったのも、きっかけになるかなと思ったんだ。だからね、僕もちゃんと言うよ」

鏡に映るシャルロットが静司の頭に顔を埋める。そして耳元で小さく、しかしはっきりと言った。

「僕もここに居たい。ここで僕らしくありたい。だから……これからもよろしくね、静司」

「……当然だ」

ぎゅっ、と一度だけ静司の肩が強く掴まれる。しかしそれも直ぐに外れシャルロットは顔を上げた。

鏡越しに映ったその顔は涙で目を赤くしながらもとても幸せそう

な顔をしていた。

『つまりそれがお前の答えか』

「はい。bladeでなく、俺自身の答えです」

いつもと同じ寮の屋上。シャルロットには友人との電話だと言って抜けてきた。余り動き回るなど注意されたが、直ぐに戻るから、と許可も得た。

『ほう、お前自身ねえ』

「そうです。bladeが演じる川村静司でなく、川村静司そのものの答えです。俺はシャルロット・デュノアを学園から追放する様な事はしません」

『それは彼女が任務の支障にならないと確信したからか？』

「それもあります。しかし、最大の理由は俺がそうしたいからです」

これが自分の答え。この答えに課長がどう反応するか、静司は緊張していた。任務の観点からすれば、彼女の存在は特にメリットは無い。デメリットも無いが、居ない方が何事も起きないのは確かなのだ。

数秒の沈黙。そして、

『そうか……。じゃあそれでいこう』

あっさりと許可が通った。

「は？ 課長？ 自分で言っておいて言うのもあれですが、そんなに軽く」

『別に問題あるまい。忘れたのか？ この件はお前に任せると俺は言ったぞ』

「いや、確かに言いましたが……つてまさか」

『その通り。言葉だけでなく、彼女の処遇に関しては全権がお前に委ねられていたんだよ。だから言っただろ？ 任せると』

笑いながら得意げに話す課長にぐうの音も出ない。つまりここに来るまでにしてきた緊張は無駄だったという事か。

『ふははははー』

「何なんですか一体」

『いや、やっぱりお前を学園に入れたのは正解だと思っただけだ。良い顔になったんじゃないか』

「ボケてるんですか？ この通信は声だけですよ？」

『だから『じゃないか』と言っただ。それに息子の事だぞ？ 全てお見通しだ』

「切ります」

『照れるな照れるな。だがこれで終わりじゃないぞ。いつまでも彼女が男だと騙せられるとは思っていないな？』

「でしょうね。今はIS学園の特性を利用して乗り切るとして、卒業後が問題ですが……それはゆっくり考える事にします。彼女の意見もありますし」

『その言い方だとまるで恋人みたいだぞ』

「茶化さないで下さい。自分で言った手前、最低限の責任は取るだけですよ」

『……それ彼女の前で言うなよ。絶対に勘違いするから』

はあ、と課長がため息を付く。

『いいか静司。別に卒業後の事だけじゃない。彼女の父親との事もあるし、何よりデュノア社だ。事が露見すればあの会社は確実に潰れる。元々経営危機だった所に大スキャンダルだからな』

それはそうだろう。デュノア社長がこんな危険な手段を選んだのも、そもそもそれが原因だ。そしてデュノア社が潰れるという事はシャルロットの後ろ盾も無くなるという事だ。そして没落していく父を、彼女が何とも思わないという事は無いだろう。

『そこで、だ。実は前々から進めていた計画がある。これで彼女だけでなく、お前の問題も解決し、俺達にも得がある』

「計画……？」

静司の問題。この場で言うなら、アリーナで露見した実力の事だろう。千冬や真耶には説明したが、それで解決とはいかないだろう。何せ結局企業名は秘密にしたのだから。

「一体それは？」

『簡単に説明するとだな——』

通信機越し、課長から語られた内容に静司は呆れてしまった。余りにも強引と言うか、大胆すぎたからだ。

「本気……なんですね。けどそれだと俺は——」

『男性操縦者の川村静司。そうやって生きていくのならいずれ通る道だ。この件は前々から桐生とも話している。アイツも賛成しているさ』

「だからあんなにペラペラと嘘が付けたのか……」

千冬に詰問された時の事を思い出し、今度こそ呆れた。

『それにお前の任務の目的は護衛と囚。多少やり方が変わってもそこは変わらんよ。多少、餌に拍がつくだけだ』

「……まあ確かに下手な誤魔化しよりはそれが良いんでしようね。……多分」

『そういうことだ。では俺は準備に入る。これから忙しくなるぞ、俺もお前も』

「良いですよ。俺が望んだ結果に近づけるならやってやりましょう」

『いい返事だ。では通信を終了する』

通信機をしまい、柵に寄りかかりながら空を見上げる。雲一つない星空。それをただぼう、つと眺めて居たが、不意に屋上の扉が開いた。その人物はゆつくりとこちらに近づき、やがて静司と同じように柵に身を預けた。

静司は空を見上げたまま問う。

「もう歩き回っていいのか？」

「ああ。問題ない」

静かに応えたのはラウラだ。彼女はどこか穏やかな表情で静司と同じように空を見上げている。

「お前こそいいのか？ 怪我をしていた筈だ」

「大丈夫だ。それほど重症じゃない」

黒翼が生体再生してるしな、とは流石に言わない。

ラウラも「そうか」と呟く。

二人はそのまま少しの間、静かに空を眺めていたが、不意にラウラ

が口を開いた。

「教官にな、叱られた」

「へえ、なんて?」

ラウラが突然そんな事を言うのに驚いたが、静司は先を促す。

「私は教官にはなれない。だからラウラ・ボーデヴィツヒになれ、とな」

「……それは叱られたというより、励まされたんじゃないか?」

前半だけなら確かに叱られている様だが、後半も聞くとそうとしか思えない。

「そうか。そうかもしれない。全くズルい姉弟だと思わないか? 言いたいことを言って、こちらの心をかき乱してくるのに、肝心なところは自分で考えろと言う。悩み抜いて自分を見つけろなんて言ってくるんだぞ?」

「それを厳しさと取るか優しさと取るかお前次第だろ。……いや、一夏はそこまで考えてないかもしれないが」

「はは、違うない」

面白そうにラウラが笑う。出会ってからの印象が印象なので静司は内心かなり驚いていた。

ひとしきり笑ったらラウラが不意に声のトーンを落とした。

「私が暴走したアレはVTシステムという。過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きをトレースする違法なシステムだ」

「……へえ」

「私が教官になりたいと、私が望んでいたからだろうな。知らぬうちに取り付けられていた。正直に言おう。暴走状態の中でも多少の意識はあった。そして私は——喜んでいたんだ。教官と同じ動き、同じ技を使えることに」

自嘲するようにラウラが笑う。

「望んだものを手に入れたと。これで教官になれたと。……しかし次第に恐怖も感じるようになってきた。確かに教官にはなれたが、私と言う自我はどこに行くのだろうか、と。虫の良い話だとは分かっている。しかし私が教官そのものになったら私はどこに行くのだろうか

？ 不意に疑問に感じた途端、それが恐怖となった。結局私は教官になりたいと思っていながらも、自分を捨てきれなかったんだ」

「……」
ああ、お前もか。

ラウラの話を聞きながら、静司は笑いそうだった。馬鹿にしているわけじゃない。自分と似たような事で悩んでいる人物がこんなにも近くにいたからだ。

「いいんじゃないか」

「何？」

「確かにお前は暴走した。それを喜んだかもしれないが、今は違う。ならそれでいいじゃないか」

「しかし私は——」

「人に言われるまで気づかなかった？ 別にそんなの普通だろ。少なくともその件に関しては俺はお前の味方だな」

何せ自分だってそうだったのだから。

ラウラはきよとん、としていたが、やがて「そうか」と少し嬉しそうに笑った。

「後は知っての通りだ。暴走状態の私をお前と、一夏が止めた。そして教官に叱られた。だがお前に問いたい。私を止めた時のあの力、あの腕。そしてあの夢」

まさか意識があつたとは。それにラウラはあの空間に静司が居た事を気づいている。だとすれば攻撃を受け止めた左腕と、泣き叫ぶ少年の左腕を関連付けるのが道理。

「できれば聞かないでいてくれると助かるんだがな」

「それはお前が教官と同じ動きをした事もか」

「ああ」

ラウラはおそらくある程度感づいている。静司という存在の異常さを。確信的な情報を一番持っているところからだ。だが、

「わかった。ならば問わない」

大人しく引き下がった事に静司は驚いた。そんな静司にラウラは笑う。

「お前には借りがある。暴走した私を、救ってくれた借りだ。だから聞かない」

「それはありがたいが……しかし止めたのは一夏やシャルルもだぞ」

と、不意にラウラの顔が赤くなつた事に気づいた。そして彼女は視線を逸らしながら小さな声で静司に聞いた。

「そ、その一夏なのだがな。私を……守ってくれるそうさ」

「そういえばそんな事を言っていたが」

だが今までのラウラからすれば『貴様如きが？ ふざけた事を言う」と殺す』と返しそうなものだが、どうにも様子がおかしい。

「あ、あのだな。私は軟弱な男などに興味は無い。無いのだが……一夏はその私を倒しただろ？ 無論、お前やデュノアの力あってこそだが。しかしだな、その」

もじもじと、頬を赤く染めて何やら呟くラウラを見て、静司は気づいた。

(精神が不安定な状態で、助けられて、甘い言葉をかけられて……つまりは吊り橋効果的な?)

少なくとも目の前に居る人物は、冷たい目で殺すと宣言していた軍事でなく、ただの少女。しかし今までとのギャップが激しすぎやしないだろうか。

「あー、つまりは……惚れたのか」

「ば、馬鹿者！ そんなストレートに言うやつがあるか！ ……やはりそうなのだろうか」

「少なくともそうとしか見えん」

「そ、そうか。やはりこれがそうなのか。……なあ、私はどうしたらいい？」

「俺に聞くなよ……。友人にでも……って」

「そうだ。私には友人は居ない」

故に相談できる者も居なく、初めての感情に戸惑った挙句、静司に聞いたと。

「いやいや、そこで何で俺なんだ？」

「お、お前なら口は堅そうだと思つたからだ！」

それは信用されたという事で喜ぶところだろう。しかし突然恋愛相談されたところで静司にはどうにもならない。だがずーん、と沈んだ様子のラウラは正直哀れだった。

「そうだな、ドイツ……部隊の仲間なんてどうだ？」

「それも少し考えたが、今まで私は隊長として威厳のある立場、振る舞いを心掛けていてな、こういう話をするにはちよつと」

「気にしなくていいんじゃないか？　つまり今まで仕事上の付き合いしか無かったってことだろ？　この機会に正直に話して打ち解けてみたらいいんじゃないか？」

そうすれば自分は恋愛相談からは解放される。

「そうだろうか……？」

「おう。なんでもやってみろ。悩めとも言われたんだろ？　自分で悩んで、その考えを話してそれでせいづらとも仲良くなれば良いことづくめだ。だからそっちに聞くと良い」

「お、おお！　そうだな。やはりお前は一味違う様だ。感謝するぞ静司！」

「お、おおう？」

「ふむ。ではこうしてはいられん。早速聞いてみよう。ではな、静司！　また明日会おう！」

決めるが否や、ラウラは奔って扉へ向かう。そのまま帰るかと思つたが不意に振り返つた。

「言い忘れていた。色々と感謝するぞ静司！　それとその髪型も似合っている！　お前とはいい友になれそうだ！」

言うだけ言つて帰って行った。残された静司は余りにもものラウラの変わりつぷりに終始唾然としていた。

「春……だねえ」

実際はもう春は終わり6月に入っているのだが。

少なくとも明日は騒がしくなるだろう。主に一夏周りで。だがそれも良いだろう。精一杯一夏をおちよくってやろう。自分だって楽しんで決めたのだから。

薄く笑みを浮かべながら、静司も部屋へと帰るのだった

19. シヤルロット

『説明をしてもらおう』

薄暗く、陰気な部屋に男の声が響く。

「勿論ですよ。その為に今日はお集まりいただいたのですから」

応えたのも男の声。ぽっちやりとした体形と微笑みを絶やさないその人物は桐生だ。

彼は今、大きなモニターの前に笑顔で立っている。そのモニターは幾つかに分割され、それぞれ映っているのはIS委員会のメンバーだ。

『川村静司の件、君のあげた報告書だけでは足りない。故に今回集まる形となった。納得のいく説明を期待しているよ』

「当然ですとも。では、お話ししましょう。川村静司の正体を」
(まあ嘘だけど)

ニコニコと笑いながらも、桐生は内心苦笑していた。

「まず、先日のドイツのIS暴走事件。これの原因はVTシステムであり、それを止めたのが、織斑一夏、シヤルル・デュノア。そして川村静司。しかしその経緯において、川村静司に不審な点がある。ここまでは良いでしょうか？」

『そうだ。彼は元々一般人と聞いている。しかし資料を見る限りとてもそうは思えない』

『VTシステム相手にあの立ち回り。彼には何かしら秘密がありますね。それに君にも』

モニターの中、忌々しげに桐生を睨む男と、興味津々といった様子で首を傾げる女性。二人の言葉に桐生は頷いた。

「その疑問は正しいものですよ。単刀直入に言います。川村静司はある企業と契約しており、そこで訓練を受けています」

桐生の言葉に参加者たちがざわめく。口々に質問をぶつけようとするが、それを桐生が手で制した。

「まずはお話をお聞きください。さて、川村静司ですが、実は織斑一夏

が発見される以前から私はその存在を掴んでいました。しかしとある事情からその事を明かさずにいました」

『その事情とやらを聞かせて貰おう』

『はい。まず一つは彼の安全です』

ぴっ、と人差し指を立てる。

「川村静司は元々は本当に唯の一般人です。織斑一夏や、シャルル・デュノアのように後ろ盾がありません。ここまで言えば理由は分かりますよね？」

『成程。下手をしたらそのまま実験動物行きか。確かにその可能性は否定できないな』

『そうですね。織斑一夏が無事だったのは姉と篠ノ之博士がネットワークだったから。シャルル・デュノアもまた、世界的に有名な企業の子。それに比べて唯の一般人だったのなら、黙殺される可能性もあります』

『しかし、何故我々にも黙っていたのだ？ IS委員会で保護をすれば問題なかった筈だ』

「いいえ、むしろそこが問題だったのです」

大げさに首を横に振る桐生に訝しげな視線が集まる。

『どういうことだね？』

「確かにIS委員会で保護をするという手もありました。しかし考えてみてください。もし、委員会のメンバーによからぬことを考える人間が居たらどうなりますか？ そう、例えば――IS委員会副委員長、ヘンドリックスさんとか」

『何?!?』

全員の視線が一つのモニターに集まる。とは言っても、桐生からすれば全員並んで見えるのだが。そして視線が集中したモニターに映るのは50台半ば、顎鬚を生やした茶髪の男だ。彼は一瞬、肩が震えたものも、直ぐに佇まいを直すと口を開く。

『何の事だ』

「白々しいなあ。前々から怪しいと思ってたんですよ。貴方の就任以降、ISの違法実験が異様に増えた。そしてその度に見つかるのが

「ケージ」と呼ばれる生体ポッドと、搜索願の出ていた少女たち。おそらく委員会に保存されていた適性チェックの結果から、目的にあつた対象を選んでいたんでしょね。そして男性操縦者発覚後は異様に執着していたのもあなただ。その事から察するに、目的は自らもI Sを使う事」

この場に居る誰もが啞然としながら桐生の言葉を聞いていた。それに気をよくしながら桐生は続けた。

「自らもI Sを使いたいが故に、「ケージ」によるI S適性の底上げ実験。そして男性操縦者は現れてからはその秘密を、それこそ解剖でもしてでも知ろうとした。しかも二人のうち一人は非常に狙い易く、これならいけると思っただんでしょねえ。面白い様に動いてくれたおかげでアツと言う前に証拠が揃った。ああ、反論するのなら、まずこの資料を読んでからにしてくださいね。多分読んだら無駄だと分かるから」

桐生が手元のコンソールを叩くと、全員に資料が送信される。それはヘンドリックスの悪事を証拠と共に纏めた物だ。それを見たヘンドリックスの顔が青くなつていく様を、桐生は楽しそうに見ていた。『す、全て貴様の憶測だろう！』

「資料ちゃんと見て下さいよ。まあいいや。これは事実ですよ。証人も居ます。誰だと思えます？ あなたと一緒に「ケージ」の研究を行っていた男ですよ。既に逮捕済みなのでご希望なら呼びましょうか？」

桐生が笑顔で笑いかける。その笑顔に男は怯み、しかし資料に目を見やるとやがて肩を落とした。無駄だと悟つたのだろう。その様子を見ていた他の面々が一斉に怒声を上げる。

『ヘンドリックス、貴様……』

『恥を知れ。馬鹿者が』

『君は委員会から除名だ。無論、しかるべく措置は受けてもらう。逃げてても無駄だと言うことも伝えておこう』

『い、委員長！ 私は——』

『黙れ。君はもうここに居る資格が無い。消えたまえ』

委員長と呼ばれた男の言葉で、モニターの一つが消えた。委員長はその後どこかに連絡を取っていたようだが、それが終わるとため息を付いた。

『つまりこれは理由だね?』

「ええ、そうです。外にも中にも敵が居たので下手に明かせなかったのですよ。委員長にも黙っていた事は謝罪しますが、副委員長があの様でしたので慎重にならざるをえませんでした」

『実際にヘンドリックスがやらかしているのだ。それに気づけなかった私が言える事は何も無いよ。むしろ良くやってくれた。このリストを見る限り他にも居る様だね』

どこか呆れた様子の委員長に桐生は頷く。

「そちらも全員、僕が信用を置ける者たちがマーク中です。合図ひとつで捕縛できます」

『構わん、やりたまえ。頭の痛い話だ……。それで隠していた理由は分かったが、彼の所属する企業とはどこかね?』

「K・アドヴァンス社ですよ。日本の企業ですが、デュノア社程の力はありません。故に、仮に彼がK・アドヴァンス社所属という情報をあらかじめ流していたとしても、効果は対して見込めませんでした。故にこんな方法を」

『K・アドヴァンス社……。確かISコアは3つ所持だったか。確かにその程度の規模では、それこそヘンドリックスに言い様に利用されたかもしれない』

IS関連の企業の価値は、ISコアの所持数に比例する。強く、大きな会社ほど数が増えるのは当然だ。そしてK・アドヴァンス社の3つというのは少ない方だ。何故なら、ISは現代最強の兵器。その開発となると、当然ながら防衛も必要になる。そしてその防衛もISが行う事を考えると、実際に通常の研究・開発に回せるのは2つのみになってしまふからだ。

「これはK・アドヴァンス社と川村静司にも協力を約束させています。そしてその代わりと言っては何ですが——」

『見返り……。だな。奪われる可能性があつたとはいえ、その程度の規

模の会社なら男性操縦者所属という言葉はこの上ない広告塔になつただらうからな。それなりの物を要求してくるだらう」

「そういう事です。まず、K・アドヴァンス社ですが自社に川村静司が所属することを公式に認める事。他の国や、企業の参入する隙を与えない事。自社の事業に口出しをしない事、です」

『口だしか。状況にもよるだろうが、基本的には認めよう。無論、行き過ぎたものには介入するが』

「ありがとうございます。そしてもう一つですが、これは川村静司の願いでもあるのです」

『ふむ……?』

興味深げに聞く委員長に桐生はにやり、と笑い返し、言う。

「それは彼の友人——シャルル・デュノアに関してのお願いなのです」

フランスにあるデュノア社本社。その大会議室は空気が張りつめていた。

コの字型に並べられた机に座るのはどれもが社の重鎮達。そして彼らの視線は会議室の大スクリーンとその前に立つ女に向けられていた。

黒く、ウェーブのかかった長髪。胸元を開き、豊満な胸を強調するようなシャツとスーツ。整った顔立ちとその活力溢れる肌から20代と言われても通用するであろう容姿。しかし実際の彼女の年齢は40を超えている。そんな女が口を開く。

「さて、そろそろお返事を頂きたいのだけれど？」

「易々と言ってくれる……」

女の挑発するような言葉に、集まった重鎮たちの一人が苦々しく呻く。そんな彼に女は呆れ気味に顔を向けた。

「前々からお話はずつととしていたでしょう？ 考える時間はあつたはず。今更時間稼ぎなんて許さないわよ?」

それに、と続ける。

「そちらにも時間は無い筈よ。デュノア社最大のスキャンダルに世界

が気づくのはもはや秒読み。もしそうになったら、会社は終了ね」

「まだそう決まったわけでは——」

「本当にそう思ってる？ あんな事いつまでも隠しておけるわけないでしょう。現に私が知っている。フランス政府に知られるのも時間の問題。いえ、政府だけならまだマシかもね。けどマスコミや世論はそうはいかないでしょ。なにせ社長の実の娘を男装させて男性操縦者に近づけさせ、情報を盗む様に仕向けたのだから」

「……っ」

女の言葉に会議室でも上座に座る、金髪の男が顔を顰める。女はそちらに顔を向けた。

「唯でさえ経営危機なのに、第三世代の開発も遅れていてイグニッション・プランのトライアルも絶望的。そうなればIS開発権利も剥奪されるっていうのに、こんなスキャンダラスな話がそのまま発覚したらどうなるか」

わかるでしょう？ と視線で問うと、金髪の男——デュノア社長も苦い顔で頷いた。

「それで、この話ということか……」

「そう。悪い話では無い筈よ？ 私たちK・アドヴァンス社が助けてあげる。資金の援助とフランス政府への口添えをね」

「そしてその代わりにISを寄越せという事か」

「失礼ね。そもそもコアの委譲は禁止されているでしょう？ こちらが望むのはISの共同開発よ」

ただし、うちに有利な条件も付けるけどね、と付け加える。

「我が社は規模はデュノア社程じゃない上に、ちよつとマイナー路線なの。だからISコアも3つしかないのよ。これじゃやりたい事が一杯あっても捌ききれないわ。けどデュノア社との共同開発が実現すればそれも解消される」

「結局はコア目当だな」

「そりゃ善意100%な訳ないじゃない。こちらにも得が無ければこんな話持つてこないわ。それにそちらにだつていい話よ。第三世代開発に遅れているんでしょう？ 我が社はマイナーでも技術力はど

ここにも劣らない自信がある。その力は役に立つわ」

会議室が静まり返る。全員がこの話の損得を改めて考えている事だろう。今まで何度もここでこの話をしてきたが、まだ話は決まっていない。しかし今日、女は決着をつけるべくこの場に来ていた。故に、この隙を逃さない。

「さあ、どうする？ おそらくうち以外からも似たような話は来ているんでしょう？ だけどシャルロット・デュノアの事を知っているのも、こんな好条件を出しているのもうちだけじゃない？ 何せ、私たちは会社を乗っ取ろうという訳じゃない。潰そうという訳じゃない。デュノア社の名前はそのまま残るのだから」

あと一押しだろう。ならば切り札を切るべきか。話しながらも思考する女のそれを中断させたのは、デュノア社長だった。

「だが分からない点がある。以前から君はフランス政府への口添えを語っているが、たかだか日本の一企業がそれを出来るという根拠が無い。それが無ければシャルロット——娘の事が発覚した際も意味が無い。それに I S 委員会の件もある」

(来た……！)

切ろうと思ってきた切り札。それを使うのに絶好の質問。しかしその前に一つ、やる事がある。

「その質問に答える前に、この場にいる全員に問うわ。今回の件、シャルロット・デュノアの I S 学園編入に関してこの場にいる全員は知っていたのよね。どうして誰も止めなかったの？」

何度目かの沈黙。その中である者は顔を逸らし、またある者は目を瞑り黙考している。

「その様子だと多少の罪悪感があった様ね。それで社長はどうお考えで？」

「誰かがやらねばならず、そしてアレが適任だった。それだけの事だ」
デュノア社長は真っ直ぐに女を見返す。

「罪悪感はないと？」

「今更そんな言葉で取り繕うつもりもない。もとよりあれとは父娘として接したことも数度だ」

シャルロットは愛人の子。この場に居る全員はその事を知っているながら、公表していない。それは会社内での結びつきが大きく、社長を引きずり下ろすような事を考える人間が居なかつたが故。そういう意味では彼らは善人なのかもしれない。しかし、そこに会社の危機が入って来たとき、一人の少女を生贄にすることを決定した。そのちぐはぐな彼らの善悪感に女は嫌悪の表情を浮かべる。

「私も一人の母親として言わせていただくけど、最低ね」

「自覚はしている。だが私たちには会社と、その従業員たちの未来を守る義務がある」

「その為に娘の未来を生贄にすると言うのは、会社として正しいのかもしれないけど、賛同できるものじゃないわね」

「ならどうする？ 自分から話を持ってきておきながら、白紙に戻す気か？」

「いいえ。ただ一つあらかじめ宣告しておくわ。例えデュノア社が生き残っても、貴方達それぞれにはそれなりの報いがあるという事を。会社の為に少数の犠牲はやむを得ないでしょう？ ならば——お前達も贄となれ」

「……………」

誰も何を言い返さないのは、ある程度覚悟していたからか。それでも会社の存続を願うのは、自分たちが築き上げてきた会社を無くしたくない為だろう。ここに居るメンバーは、誰もがIS第一世代から実績を積み上げ会社を成長させてきた人物達だからだ。

(歪んでいるわね)

会社の為と少女の未来を奪い、そして会社の為と自分たちすら差し出す。これを歪んでいるといわずになんと言うべきか。

「反論は無いわね。一応体制が整うまでは今のままだけれど、その時は必ず来ると思っていて頂戴。では、フランス政府とIS委員会の件について説明するわ。とは言ってもこれを見て貰った方が早いわね」

スクリーンに一枚の書面が映る。その内容に全員が驚愕した。何故ならそこにはフランス政府とIS委員会のサインが記されていたからでもあるが、何よりもその内容だ。要約すると、

『シャルロット・デュノアはフランス政府、及びIS委員会の支援の元、不穏分子の排除の為、囹として男装していた』

そういう事になる。

「これは一体……」

「文章の通りよ。彼女は実力もあり、またその存在を今まで知られていなかった。それに目を付けたIS委員会がフランス政府に要請。ISの開発権利を継続させる事を条件に囹として学園に潜入した、と言う事になるわ」

(どこかで聞いた話ね)

心の中で苦笑しつつ続ける。

「さっきはああは言ったけど、実はフランス政府の一部は既に彼女が女だと知っているわ。それを踏まえて交渉済み。政府としても何か理由を付けなければ国際的に立場は危ういからね。IS委員会も了承したからこれ幸い、と言った感じだったわよ。後は貴方達と、そして彼女が納得すればこれは有効となる」

彼女、という言葉にデュノア社長が反応した。

「シャルロットの事か」

「ええ、そうよ。彼女にも選択させる。悪いけど彼女がそれを拒否したらこの話はおしまいよ」

「つまり私たちには元々選択権など無いに等しいという事か。例えば私たちが望んでも、娘が拒否すれば全て終わる。随分な取引だ」

「ごめんなさいね。私、貴方達の事まだ嫌いな。それに今まで散々彼女を振り回してきたんでしよう？ だから今度は貴方達が振り回される番よ。ああ、間違っても彼女を脅そうとか考えないでね？ その瞬間本当に終わるわよ、貴方達」

にやり、と笑う女に会議室に集まった重鎮たちが冷や汗を流す。

「し、しかし何故フランス政府だけでなくIS委員会まで……」
「両方に貸しがあるのよ。大きな貸しがね。その内容は言えないけど必要ないでしょう？ ここに事実として双方のサインが入った書面があるのだから」

さて、と女が改めて会議室を見渡し、問う。

「まずは貴方達が決める番。さあ、どうする?」
答えは決まりきっていた。

「うーん、良い風ね」

デュノア社から出た草薙は大きく伸びをすると携帯電話を手に取った。メモリから相手呼び出し、数度のコールの後、回線がつながる。

『由香里か。どうだった?』

『予想通り、デュノア社は受け入れたわ』

『ほう、そりやいい報告だ。しかし案外早かったな。もつとごねると思っていたが』

『今回の話以外にもデュノア社のきな臭い話をそっちの子達が集めてくれていたからね。私もいつでも行ける準備は出来ていたから、後は貴方からの連絡が来れば直ぐにでも相手を脅し倒せたのよ』

『はは、おっかないな』

『私たちの大事な子が折角望んだんだもの。だったら最高の状態にしたいじゃない? その為なら私は手段を択ばないわよ』

『そりや俺も同じだ。で、発表は何時になる?』

『明日にでも出来るわよ。お膳立てはもう完璧』

『成程。ならばはこっちの彼女次第だな』

『そうね。まあ、彼女の性格なら結果は分かるけど、それでも自分に決めさせなきゃね』

それが大事な事だから、と付け加える。

『そっちはもう夜でしょう? あの子は起きてるかしら?』

『なんだ、電話でもするのか? 時間的には起きてるだろうが、もう寮の消灯時間だろうし、電話は難しいだろう』

『あら残念。まあいいわ。私も一度日本に戻るしその時に直接話をするわ。あー気になるわね。学園生活の事を直接聞きたいし、好きな子でも出来たかしら?』

『……まあ候補はあるかもしれん』

「……………今すぐ帰るわ。あの子から聞き出さないよ!」

『おいおい、今日はまだ予定があつたんじゃ——』

「何言ってるのよ!?! これは大事な事よ!?! そりゃ貴方は頻繁に会えるから良いでしょうけど、私は中々そうはいかないのよ!?!」

『興奮しすぎだ。代表取締役『草薙由香里』の名が泣くぞ』

「ふん、今は『川村由香里』よ。そういう貴方もそうでしょう? 『川村章吾』。それとも今はまだ『課長』?」

『あー、わかったわかった。帰ってくるのは良いが、あまり無理はするなよ』

「初めからそういえばいいのよ。じゃあまた、日本で」

電話を切るとその足を空港へと向ける。

「さあ、待ってなさいよ静司!」

意味が分からない。

今のシャルロットの心境を表すのならそれに尽きた。

きっかけは朝、ある決意の元職員室へ向かっている最中の事だった。

「あら? 貴女がデユノアさん?」

「え? そうですけど……」

部外者に入れない筈の学園敷地内で出会った一人の女性。胸元を大胆にはだけた、スーツ姿。その彼女はシャルロットを見つけると笑顔で近寄ってきた。

初めは警戒した。先日あんな事件があつたばかり。また侵入者が入り込んだのかと。しかし彼女の隣にはシャルロットも良く知る人物が居た。

「やあやあやあ。久しぶりだねえ」

「えっと、桐生さん?」

笑顔で手を振るのはIS委員会の桐生。IS学園入学の際、彼女に説明を行った人物だ。

「僕にご用ですか?」

「ええ、そうよ。桐生さん、悪いけど二人きりになっていいかしら？」
「構わないよ。デユノアさんも安心して良い。彼女は信用がおけるから」

「はあ……」

知らない人間と二人きりになるのは少し不安だったが、桐生の言葉を信用して女性と共に少し移動する。そしてたどり着いたのは何故か生徒会室だった。

「さ、入って」

女性に促され中へと入る。生徒会室には誰もおらず、女性はずかしくか入り込むと、ソファアに腰を掛けた。シャルロットも促され、ソファアに座る。

「まず先に言っておくわ。ここで話す事は誰にも聞かれないと保証する。最初は色々仕掛けてあったけど、全部無効化してるから安心して下さい」

「あの、仕掛けるって何を——」

問いの答えは女子が手にもっていた小さな機械。それを見たシャルロットが目を見開く。

「盗聴器……ですよね」

「そ。全部は見つけてないけど、こちらで妨害してるから安心して下さい。今頃この部屋の主は悔しがってるでしょうね」

どこかで肩を落としているであろうIS学園生徒会長の事を考え女性は笑うが、シャルロットには何の事かは分からなかった。

「それで話とはなんでしようか？」

「そうね。これに関してはまず貴女に見てもらいたい物があるのよ」
女性はそう笑うとソファアの横に置いてあった鞆のロックを外す。そして取り出した物を見てシャルロットの顔が強張った。

それはIS学園の制服だ。それ自体は毎日学園生が来ているのを見ているので珍しいものではない。問題は、その制服が女子の物だったからだ。

「一体……なぜ僕にこれを見せるのですか？」

内心の動揺を悟られない様に言葉を発するが、それが成功したかは

分からない。だが目の前の女性は決定的な言葉を放つ。

「貴女の為に用意したのよ。シャルロットさん」

「っ!」

自分の本当の名前を言われシャルロットの肩が大きく震えた。しかし数度、深呼吸をすると顔を上げる。その顔にはどこかすつきりした物が浮かんでいた。

「バレて……いるんですね。貴方には」

「そうね。私は貴女が女だと知っているわ。ごめんなさいね、驚かすような真似をして」

「いえ……。それで目的は何でしょうか?」

「そうね。貴方をIS学園から追い出す為、と言ったらどうする?」

一瞬の沈黙。シャルロットは一度顔を伏せ、そして再び上げた時の眼には強い意識が籠っていた。

「——戦います。貴方と」

「それはつまり武力行使という事?」

「できればそれはしたくありません。ですが僕はもう人の言いなりになるのは辞めると決めました。自分が女である事も今日、明かすつもりでいました。なので貴方が僕の正体をバラすだけの目的だったのなら気にしません。しかし、追い出すというのなら戦います」

「それがどんな結果を招くと思う?」

「分かりません。どちらにしろ批判は承知の上です。ですが、僕には友達がいいます。僕にここに居てほしい、と言ってくれた人もいます。そして僕もそれに応えたいと思っています。だから僕はもう揺るぎません。どんな脅しをされようと、ここを出ていく気はありません」
強い意志を持って言い切る。もう裏切りはしない。他人に言い様に使われもしない。自分自身の意思で残ると決めたのだ。だからこそその言葉。

女性はどこか見定めるようにこちらを見ている。彼女の言う、追いつ出すというのが、どんな方法を取るのか分からないが、もし力に訴えるのなら自分も対抗するつもりだった。

だが、

「うん、合格！」

「……………え？」

パンツ、と手を叩き嬉しそうに頷く女性にシャルロットが首を捻る。そんな彼女に女性は苦笑した。

「驚かしてごめんなさいね。だけどそれだけの覚悟があるのなら大丈夫ね」

そう笑うと女性は名刺を取り出した。受け取ったその名前には『K・アドヴァンス社 代表取締役 草薙由香里』と書かれている。

「K・アドヴァンス社？ それって」

「そう。日本の企業よ。そして今後は貴方の所属する会社のビジネスパートナーね」

「え？」

状況についていけないシャルロット。草薙はそんな彼女に一枚の書面を見せた。それを見たシャルロットが驚く。

「ISの……………共同開発？」

「そう。我が社とデュノア社のIS共同開発の合意書よ。ちゃんとお父さんのサインがあるわ」

「父の……………」

確かにそこには父のサインが記されている。だがそれと、先ほどの制服の話が繋がらない。

「あの、一体どういうことなんですか？」

「気になるわよね。まあ簡単に言えば、第三世代開発に遅れているデュノア社は外部と協力して新しい風を。私たちK・アドヴァンスはデュノア社のISコアを使った共同開発を。お互いにメリットのあるお付き合いをしましょうって事ね。それと貴女に関しては男装の必要が無くなったので、女性に戻る事が出来るという事」

「け、けど！ 僕は世界を騙したんですよ？ それなのにそんなあつさり……………」

「騙したのは貴女じゃなくってデュノア社よ。で、何故それが可能なのかと言う事だけど、早い話世界をもう一度騙すのよ」

「騙す？」

「そう。貴女は『フランス政府とIS委員会の要請により、男性操縦者を狙う不穏分子を燻りだす為に囮として男装した』と言う事になるわ」

「そ、そんな事」

「もうフランス政府とIS委員会の了承は取っているわ。ほら、この通り」

草薙が新たに出した書類には確かに双方のサインが記されている。啞然とするシャルロットが聞く。

「ど、どうやってこんなものを……」

「言っておくけどそれ本物よ？ どうやったかは企業秘密」

ほかんとしながら草薙と、書類と、そして制服と視線を移すシャルロット。彼女は混乱の極みにあつた。

「何故……こんな事を？」

「そうね。こう言ったら恩着せがましいけど、貴女の為でもあるわ」

「僕の……？」

予想外の返答に首を傾げる。

「貴女は優しい娘。だから例え自らの意思で決めたからと言っても、自分が女だと発覚した際に、会社や、そして父に浴びせられる批判に心を痛めるでしょう？ それに貴女自身もその対象となる。それを避けたかったのよね」

「け、けどなんでそこまでしてくれるんですか？」

今までの経験からして、父親がそれを望んだとは思えない。それに草薙の口ぶりから、社長である父が、保身の為にこの話を持ちかけた様子でも無い。ならばこの女性がこんな無理を通してでも自分を守ったのだろう。それがシャルロットには分からない。

「確かにデュノア社とK・アドヴァンス社がビジネスパートナーになったかもしれません。けどそもそもどうやって僕の事を知ったんですか？ それに何故そこまでしてくれるんですか？」

シャルロットの真摯な問い。しかし草薙は人差し指を唇に当てる。秘密、のポーズだ。

「その問いには簡単に答えられるわ。だけど今は駄目」

「ど、どうして?」

「ふふ、いずれわかるわ。何故知ったのか。何故私たちが動いたか。貴女は頭の良い子だからきつと気づく。だからその時、お礼を言いなさい」

さてと、と草薙は立ち上がる。机の上には制服が乗せられたままだ。

「本当はここでWhich? ってカツコよく聞こうと思っていたのだけれど、貴女の中でもう決まっているのならそれは不要ね」

ね? と問いかける草薙にシャルロットは一瞬戸惑ってしまう。

確かに決めた。今度こそ、自分の意志で。その後には起きるであろう混乱も覚悟していたが、その混乱はいい方向に変化している。その事に戸惑いを覚えてしまう。

だがこれはチャンスなのだろう。確かに父の事を完全に忘れるなんて事は出来ない。選択に後悔は無いが、それでも気にしてしまうであろう自分の姿が思い浮かぶ。ならばこの話に乗ってみるのもいいかもしれない。少なくとも自分が考えていた以上に悪い事にはならないだろう。だからシャルロットも真つ直ぐに草薙を見返して、返事をする。

「……はい!」

「よしよし。じゃあ私は別の用事があるからそろそろ行くわ。幸せになりなさいな」

そう笑い、出口へ向かう草薙にシャルロットは頭を下げるのだった。

「千冬姉も山田先生も遅いな……」

「そうだな。それにデュノアや川村も来ていないぞ」

「どうしたんでしょうか? 川村さんには聞きたいことがあったのですが」

一年一組の教室で一夏達がぼやく。すでにSHRの時間は過ぎていたが、一向に姿を現さない担任と友人たちに首を捻る。

「聞きたい事って静司の事だよな？」

「ええ。昨日は聞けませんでしたが、あの戦い方は只者ではありませんせんわ」

「確かに。川村がただの一般人とは到底思えん」

セシリアと箒が互いに頷く。一夏も確かに気になっていた。昨日の静司は明らかに、普段と違った。その理由を知りたい。

「秘密の特訓をしていた……じゃないよな」

「その可能性は低いですわ。入学して2か月ではいくらなんでも無理です」

そうだよな、と一夏も頷く。それに静司の動きは姉である千冬に似ていた。いや、同じと言っても良い。それが一夏の疑問に拍車をかける。

三人が悩んでいると、不意に教室のドアが開いた。現れたのはどこかフラフラとした山田真耶だ。

「み、みなさん……おはようございます」

「山田先生の様子がおかしいな」

「どうしたのでしょうか？」

「朝飯にでも失敗したとか？」

「篠ノ之さん、オルコットさん、席に戻りましょう。あと織斑君、馬鹿にしていると怒りますよ……はあ」

やはりどこか様子がおかしい。そんな真耶は教壇にたどり着くと、疲れた様な声音で告げる。

「今日は皆さんに転校生を紹介します……と言っても転校と言いますかなんというか」

「転校生？　また？」

「せんせーどういう事？」

つい最近、二人が転校してきたばかりなのにまたしても転校生。生徒達が疑問に思うのも無理はない。

「じゃあ、入ってきてください」

「失礼します」

真耶の呼びかけに応え、入ってきた人物。それに全員が驚愕した。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

それは女子の制服を着たシャルロットだ。全員がぼかん、啞然する中、どこか遠い眼で真耶が、

「というところで、実はデュノアさんでした。女の子でした。ああ、寮の割り振りしなきゃいけませんね……」

とぼやく。

「お……んな？」

「美少年じゃなく、美少女？」

「負けた……どつちでも綺麗ってズルい……」

「ちよつと待って、川村君は同室だし、織斑君も一緒に着替えたり……」

何故だろうか。一夏は嫌な予感がした。そしてその予感が直ぐに的中する。

「一夏あつー！」

「り、鈴り！」

まさに鬼の様な形相の鈴がドアを蹴破る勢いで現れた。その両肩には部分展開された衝撃砲。

「ちよ、ちよつと待て鈴り！俺も知らなかったしやましい事は何も——」

「嘘をつけえええええええー！」

聞く耳を持たない鈴が衝撃砲を放つ。悲鳴と、どこか楽しむような声が混じる教室に衝撃音が響いた。

「……あれ、俺、生きてる？つてラウラ？」

「無事か？」

「あ、ああ無事だけどなん助け——むぐつ!？」

衝撃砲から一夏を助けたのは、いつの間にか現れたラウラだった。そして彼女はいきなり己の唇を一夏に合わせ、所謂キスをしていた。

「……………」

教室が沈黙に包まれる。真耶は「きゃ〜」と顔を赤くし、生徒達は口をあんぐりと開けている。ただその中で4人だけ、別の雰囲気

纏っていた。

数秒間のキスの後、唇を離したラウラが、顔を赤くしながら宣言する。

「お前は今日から私の嫁にする！ 反論は認めん！」

「いや意味わからん!? というか何で嫁!？」

「日本ではそう呼ぶと聞いた！」

完全に状況についていけない一夏と、堂々と宣言するラウラ。段々と混沌が増していく教室で三つの影が動いた。

「あ、アンタねええええええええ!？」

双天牙月を振りかぶった鈴と、

「あらあら、一夏さん。随分と仲がよろしいですわねえ? けれどちよつと私とお話をしましょうか?’’

スターライトmkⅡを展開し、青筋を立てたセシリアと、

「……………斬る!」

どこから取り出しのか、木刀を構える箒だ。

「ちよつと待つてくれ!? 俺は何から何まで事情が分からないんだよ!?’’

「[「問答無用!」」]

まさに、一夏の命が奪われかねない状況。だが救いの神は現れた。

「何の騒ぎだ貴様ら」

「あ、織斑先生」

鬼教官、千冬の登場だ。頭に血が上っていた彼女達も千冬の登場で顔を青くする。

「はあ。状況はなんとなく読めるが、ISの無断使用は禁止されている筈だ。それを知らない貴様らではあるまい」

「く……………だけどっ」

「この怒りが収まりませんわ…………」

「私はISではありませんし、合法的に斬り飛ばせるかと」

「……………まあいい。やるなら私の話の後にしろ」

「千冬姉!?’’

面倒になったのだろう。状況を放り投げた千冬に一夏が悲鳴を上

げるが無視。千冬は廊下に声をかける。

「入ってこい」

「了解です」

千冬に呼ばれ、入ってきた人物を見た瞬間、

『ひいつ!?!』

生徒達&真耶が悲鳴を上げた。それはその人物の顔にあった。

健康的に日焼けした肌。鋭く、獲物を探す獣の様にギラギラと光っている（様に見える）相貌にセシリア達も含んだ女子達が、早い話ビビったのだ。

「せ、先生。その怖い人……誰？」

「お、男の制服着てるけどそんな人知らない」

「……怖い……ぐすっ」

涙目で千冬に問いかける生徒達。

「何を言ってるんだ。お前たちも知っている人物だぞ。なあ？」

どこか楽しそうに千冬がその男子生徒に問いかけるが、その男子生徒はどこか遠くを見つめ、

「この反応は……新しい。新しいけど何故だ、この空しさは」

ふふふ、と乾いた笑いを浮かべていた。

「え、えっと、それでこの方は結局誰なんですか……？」

「ふむ、それはだな——」

千冬が答えを言おうとした時だ。その男子生徒に近寄る女子生徒が居た。

「ほ、本音!?!」

「何やってるの!?! 戻ってきて!」

彼女の友人が悲鳴を上げるが、本音はゆっくりと首を振り男子生徒に近づく。良く見ると、男子生徒が冷や汗を流しているのが見えた。

「やあ、かわむー」

え？ と静司と本音、そして千冬を除いた全員が驚く。しかし本音はそれを気にせずに笑顔で、そう、怖いくらいの笑顔でその男子生徒に声をかける。

「髪切ったんだね？ 似合ってるよ〜」

「そ、そうか……」

「うん。所で、しやるるんって女の子だったんだね？」

「あ、ああ」

「一緒の部屋に住んでたよね？」

「そ、そうだな……」

「一緒の部屋に住んでたよね？」

「その通り……です」

「一緒の部屋に住んでたよね？」

「……ハイ」

一言本音が話す度に、静司の腰が下がっていき、やがて正座となった。

それを見た生徒達が「ああ」と頷く。

「確かに川村君だ」

「布仏さんに頭が上がらない何時もの川村君だ」

「というか本音があれ程怒るとは……」

口々に納得していく。そんな中、正座した静司の前で、荒ぶる小動物のオーラを放つ本音が笑顔で続ける。

「なんだろうね？ 黙っていた理由は何となく予想がつくから、これかわむーを怒るのは筋違いだとは分かっているんだけど、それでも何故か怒りたいんだ」

「えーと、ですね。できれば軽くスルーしていただけると」

「駄目だよ。多分おねえちゃん達も知りたがるだろうし、何より私も納得したいよ？ だからまず生徒会室にいこう」

相変わらずの笑顔だが、有無を言わさない様子の本音が静司の制服を掴み生徒会室に向かおうとするが、それを千冬が止めた。

「さて、布仏。私の話が先だ。その後は構わんが」

「いや構って!？」

「やかましい。それでこいつは川村静司な訳だが、皆も気になっていただろう。昨日の事だ」

千冬の言葉に全員が耳を傾ける。確かに皆気になっていたのだ。

「早い話、川村は企業に所属するIS操縦者であり、今まで訓練を受け

ていた。今までは訳があつて隠していたが、今回の件で公表することになった。以上だ」

「え」

『えええええええええええええええええ！』

余りにもぎつくりとしか言いようのない千冬の説明に何度目かの驚きの声が響く。

「企業つて事は、シャルル君……じゃなくってシャルロットさんみたいな!？」

「何で黙つてたの!？」

「とかどこの企業!？」

次々に発せられる疑問に答えたのは千冬だ。

「K・アドヴァンス社だ」

「!」

千冬の言葉にシャルロットの眼が見開く。驚いた様に静司に視線を向ける。

「もしかして静司が……」

「……」

視線には気づいたが、静司は合えて気づかない振りをした。だがその態度が逆に確信を持たせてしまったようだ。シャルロットは驚きと、そして嬉しさを込めた眼で静司に話しかけた。

「静司……ありがとう」

「……なんの事だ？」

「ふふ、意地っ張り」

顔を逸らす静司にシャルロットが笑う。その眼には少し涙が溜まっていたが、これは歓喜の涙だ。草薙の話と静司の所属。この二つを聞けば、結び付けるのは容易い。シャルロットの正体を知っており、なおかつここに居ると言ってくれた人。そしてその彼のお蔭で自分は今、ここに居る。それが何よりも、嬉しい。

「選んだのはお前だ。俺は何もしてない」

「本当に意地っ張り。だけど今はそういう事においてあげ」

「ふむ。良くわからんが良い話の様だな。流石私が見込んだ男だ!」

ラウラが良くわからないながらもうんうん、と頷いている。それを疑問に思った一夏が問いかける。

「本当に俺は置いてけぼりなんだけど、ラウラと静司は仲良くなったのか？」

「ああ。お前の件も、静司に相談したからこそこうしたのだ！」

「おい!？」

「「……………へえ」」

ギギギギと壊れた機械の様に静司が首を回す。するとそれぞれの武器を構えた箒たちが静司を睨んでいた。

「つまり、アンタのせいなのね」

「おほほほほ、余計な真似をしてくれやがりましたわね」

「その首、斬り落としてやろう」

「おい、ちよつと待て!？ それは洒落にならんぞ!？ どうか止めろよ担任!」

「さあ、私には何も見えんな」

「なっ!？ アンタ黙ってたのを根に持つてるな!？」

「かわむー、話は終わってないよ？」

「静司、大人しくした方が良いんじゃないか？」

「一夏あ？ アンタもよ？」

「え!？」

にじり寄る箒たち。後ずさる静司と一夏。緊迫した空気の中、千冬が出席簿で教壇を叩く。それを合図として、静司と一夏にとって、地獄の鬼ごっこが開始されるのだった

20. 母

「で、説明してくれるのかしら？ 川村君」

生徒会室。その主である更識楯無が顔を引き攣らせながら質問を投げかける。

「どの説明ですかね？ 内容次第です」

「全部よ全部。……とは言っても教えてくれないでしょうし、言える範囲で良いから教えて頂戴」

はあ、と楯無がため息を付く。どうやら相当疲れているらしい。まあ、当然だろう。今日は朝からさぞかし大変だっただろうからだ。

「君も原因の一人なんだけど？」

「さてね」

恨めし気に睨む楯無に静司は苦笑で返す。楯無はもう一度ため息を付くと、顔を上げた。

「まず一つ目。シャルロット・デュノアちゃんについて」

「彼女はフランス政府とI S委員会の要請の元、男性操縦者を狙う不穏分子を炙り出す為に囷として男装して入学していた、でしょう？」

「そうね。それが表向きでしょ。で、実際は？」

「それが事実ですよ。それ以上も、それ以下も無い」

「言う気は無いつて事ね……まあ何となく予想はつくけど」

言葉の通り、楯無も予想はある程度付けている。おそらくデュノア社が暴走し、それをなんらかの手段を使って、静司達EXISTが救ったのではないかと。だが彼は言わないだろう。故に、楯無は表情を改める。

「これは独り言だけど、一人の女性として言うわ。……最高ね」

「なんの事やら」

お互い、にやり、と笑う。楯無の賞賛は勿論本気だ。何故なら彼女は一人の少女を救ったのであろうから。だから生徒会長としてでなく、更識楯無としての賞賛。

「じゃあ次の質問。川村君についてはどうするの？ 君がここにいる理由は私たちは知っているけど、他は違う。何故実力を隠していたの

かはどう説明する気？」

「実力を隠していたと、言うより企業に所属している事を隠していたと言う事で説明するつもりですよ」

「と、言うとか？」

「K・アドヴァンスは元々大企業じゃないですから。そんな所に世にも貴重な男性操縦者が居たら、他の企業がどうするか、って事ですよ」
「……成程。何としてでも手に入れようと色々小細工するでしょうね。それこそK・アドヴァンスを潰すぐらいの勢いで。それにIS委員会や政府も、より力のある大企業の方が良いと考える」

「まあ実際はそんな事されても無駄なんですけど、表向きはそうはいかない。なので会社を守るために隠していた。そして今回、IS委員会がK・アドヴァンス社に男性操縦者が所属する事を宣言した。これによつてK・アドヴァンス社はIS委員会という後ろ盾を手に入れたので、公表に踏み切った。——とまあこんな感じですよ」

以前、千冬と真耶には別の理由を話したが、まさかそれをそのまま言う訳にもいかないのです。ここは口裏を合わせて貰っている。無論、IS委員会についてもそうだ。

「それにより他企業も手出ししにくくなった、と。けど良いの？ そんな事したら、川村君達の本当の目的である護衛と囮。その囮として機能しなくなるんじゃない？」

静司は『狙い易い男性操縦者』である事で囮にもなっていた。その事だろう。

「それに関しては大丈夫ですよ。確かにただの一般人から、企業に所属する訓練を受けた男性操縦者になりましたけど、自分の実力を実際に見たのは学内の人間のみ。情報は多少は出回るでしょうけど、正確じゃあない。それに、それを差し引いてでも、織斑千冬と篠ノ之束という後ろ盾がある一夏に対して、日本の一企業所属というだけの俺なら、狙いやすいのはやはり俺です」

「……なんというか嘘に嘘を重ねて行ってややこしいわね」

「必要な嘘というやつですよ。……さて、理由も話しましたし俺はこの辺で——」

「駄目よ」

「駄目です」

腰を浮かせた静司を二つの声が止める。楯無と虚だ。

「さつきはあえてスルーしたけど、もう一つとっても大事なお話があるんじゃないかしら?」

「……な、なんの事ですかね?」

たたり、と冷や汗を流す静司を面白そうに見つめながら楯無が口を開く。

「そもそも——シャルロットちゃんが女だったって事をなんで私たちにも隠していたのかしら」

「詳しい話をお聞かせください」

「……」

楯無に続いて、虚が静司を睨む。

「それは……あれだ。彼女に害はないと判断されたので、企業の戦略にまで口を出すべきではないという判断で」

「成程。確かに川村さんの仕事には直接影響がなければそうでしょう。だからと言って、何故女と分かってからも一緒に暮らしたのですか?」

「いや部屋替えと言っても決定権は俺に無い訳で——」

「私たちに相談してくれれば何とかなつたかもしれませんが?」

「いやしかしだな——」

「なんですか?」

何故だ。自分は妹の本音はともかくとして、虚とはそれほど話したことは無い。しかし今日は妙に喰いついてくる。ダラダラと冷や汗を流しながら混乱する静司に、楯無が微笑み、口元に当てていた扇子を開く。そこに書かれていたのは『姉妹愛』

「虚は厳しいけれど、本音の事を可愛がつてるのよね」

「川村さんがそんなぶ、プレイボーイな方だと思いませんでした。貴方になら本音を任せられると思っていただけなのに——」

「ちよつと待て! それは色々飛躍しすぎだろ!」

「とにかく納得のいく説明を——」

「私がしましょう!」

突如、ドバンツ! と大きな音を立て生徒会室の扉が開く。現れたのはスーツ姿の女と、その女が小脇に抱えている女子生徒。その二人を見て全員が目を見開く。

「あなたは……」

「K・アドヴァンス社の……」

「……何やってるんですか、社長。それに本音も」

「やつほー、かわむー」

ドアを吹き飛ばす勢いで現れたのはK・アドヴァンス社の社長、草薙由香里。そして彼女に小脇に抱えられているのは本音だ。本音はひらひらと手を振っているが状況が読めない。

「それがね、生徒会室に行こうかと思ったら途中でこの子見つけたのよ。それで可愛かったから思わず持つてきちゃった」

「何やってんだアンタ!」

「ま、まあ本音には茶菓子の買い出しを頼んでいただけなので、どちらにしる目的地はここでしたが……」

虚も先ほどの剣幕も忘れ、若干呆然と呟いている。そんな中、

「せ・い・じゅ!!」

「ぬぐつ!」

由香里が静司に突進。その体に抱き着いたのだ。

「久しぶりね。朝は会えなかったから放課後まで頑張ってたったのよ? もうっ、大きくなっちゃって」

「数か月前に通信したろうが!? そんな速攻で成長してたまるか!

　　とか頬を擦り付けるな抱き着くな!」

「だーめ。ほらほらお母さんに甘えなさい!」

「ごっの、せめて本音は離せ!」

由香里は生徒会室に入ってきた時のまま、本音を抱えている。そのまま静司に抱き着いたので、必然的に静司と本音が密着したまま由香里に抱きかかえられている事になるのだ。それは色々と、ヤバイ。

本音はと言えば、若干目を回しつつ「わくお」と笑っている。

だがそんな静司達をよそに、楯無と虚が叫んだ。

「お母さん!？」

「ん？ そうよ。私が静司の母親でありママでありマザーよ」

「それ全部同じ意味なんじゃ」

「気にしない気にしない。ほーら静司、あと本音ちゃんも、うりうりうりうりうりー!」

「やめんか!？」

「わーいー」

由香里のスキンシップはそれから暫く続いた。

「ふう、満足したわ。あ、お茶貰うわね」

「……疲れた」

それから暫くして、やっと落ち着いた由香里が腰をソファに着く。その隣では静司がぐったりと宙を見上げていた。

「えっと、色々訊きたいことがあるけどまず最初に……お母さんっていうのは」

「そのままの意味よ。血は繋がってないけど、私が静司の母親ね。名字が違うのは、下手に勘ぐられない様にする為よ」

ねー？ 静司。と由香里は笑顔で静司の頭を撫でるが、静司にはもはや抵抗する気力は無いらしい。ピクリともしていない。

「それで、シャルロットさんの事を黙っていたのは任務には直接関係ないと判断したからよ。後は彼女自身の為。正直に更識家に話したとして、そちらがどう判断するか、確信が持てなかったから黙っていたの」

「けど相談も無しに——」

「あら？ 貴方達だって隠し事はあったでしょう？ たとえば学園の地下とか」

「うっ……」

無人機が保管されていた地下施設。あれは極秘扱いであり、楯無達もEXISTには伝えていなかった。

「まあこちらには他の情報源があったから知ってたけど」

「なんというか……敵わないなあ」

がくつ、と楯無が肩を落とす。あわよくば、この件でEXISTに對してアドバンテージを持てるかと思っただが、そうはいかないらしい。

「ふふふ。そちらのお姉さんもいいかしら？」

「し、しかしですね」

虚も分かっている。自分のは唯の感情論だと。そんな虚の心境を察してか楯無が本音に視線を移す。

「本音ちゃんはどう思うかしら？」

「えーと、しゃるるんも大事な友達だし、その為だったから仕方ないかなあ……それにかわむーに言いたいことはさつきいっばい言っただらおつけ」

確かに朝は随分と責められたなあ……、と静司は思ったが口に出すような愚かな真似はしない。

「という事よ、虚。妹が大切なのはわかるけど、別に川村君が何かしらやらかしたわけじゃないし、本音ちゃんも朝のうちに言いたいことは言っただらしいし、この件はこれでおしまい」

「わかりました……」

渋々と虚も頷く。

「うんうん。良い子達ねえ。良い子達だからこそ、ここらでお互い付き合い方を一歩進めたいと思うのよ」

「それはどういう意味でしょうか？」

「こちらで当初予想していた以上に、IS学園での問題が多いわ。私たちもサポートチームは居るけど、やっぱり学園内での仲間は必要でしょう？ 今までもお互い協力はしてきたけど、これからはもっと連携を取りましょう、という話」

成程、と楯無が頷く。彼女としても自分が不在の際は静司達に頼らざるを得ない場面が出てくるかもしれない。実際、先日の襲撃もそうだった。

「こちらにも益があるのでそれは構いません。しかし具体的には何を？」

「早い話が情報交換ね。お互い話せない事はあるだろうけど、それでも今までより密にとりたいたいと思っっているわ」

「それでは対して変わらない気が」

「今までも互いに情報交換は行ってきた。疑問に思った虚の質問に、由香里が答える。」

「そうね。たたし、こちらが欲しいのはISのコアの情報なの」

「……どういう意味でしょうか」

「ただならぬ気配を感じた楯無が先を促す。」

「先日のVTシステムの事件の後、静司の元に地下への侵入者たちが現れたわね。そして奴らが言った言葉が気になるの」

「言葉？」

『「ISをあまり信用しない方が良い」これよ」

しん、と部屋が静まり返る。

「確かに妙な言葉ですが、ただの戯言では？」

「その可能性もある。だけどね、私たちはクラス対抗戦の際に襲撃してきた無人機の内、一機を持ち帰っているわ。解析は中々進んでいないけど、妙な事があるの」

由香里が鞆から数枚の書類を取り出す。

「あの無人機のコアだけど、試しに有人で動かそうとしたのだけど拒絶したのよ。それどころか、勝手にこちらの情報を吸い上げて情報を送信しようとしたわ。それも強引に」

「そんな事が……」

ISはコア・ネットワークを介して非限定情報共有(シェアリング)を行い自己進化する特徴を持つ。なのでISがコア・ネットワークに接続しようとする事自体は不思議では無い。問題なのは勝手に、そして強引に情報を送信しようとしたことだ。

「その時は緊急遮断して、コアも凍結させたから情報は洩れてないと思う。けどこの件で私たちは一つの見解を持ったわ。『無人機のISコアはなんらかの上位命令に従って活動している』と」

「……篠ノ之博士ですね」

「ええ。そんな事が出来るとした篠ノ之束以外に考えられない。彼女

の目的はイマイチ分からないけど、仮に彼女が、遠隔で他のコアを支配できるとしたら」

由香里の言葉に楯無、虚、そして本音はゾツとした。自分が乗っていたIS。その制御が突然奪われたりしたら？ 暴走し始めたなら？

「勿論これは仮設の域よ。だけでも彼女が行動を起こすとしたら、それはIS学園でしょう。だからこそ、学園のコアの情報が欲しいの。いつ、どうやって、コアに侵入するのか。それを調べたい」

「……わかりました。この件に関しては全面的に協力します。とは言っても、博士の行動待ちになってしまいますね」

「わからないわ。潜伏型のウイルスかもしれない。リアルタイムで乗っ取るのかもしれない。結局、博士のやり口が分からないからあらゆる手を打っておきたいの」

「確かに。しかしそうになると、私の機体や川村君の機体もその危険がある」と

「いや、俺のは大丈夫です」

え？ と由香里以外が静司を見つめる。静司は由香里に目を向け、彼女が頷くのを確認すると左腕を差し出した。

「黒翼は基本的にはコア・ネットワークに接続していません」

静司の言葉に本音が首を捻る。

「かわむー、どういう事？」

「黒翼は必要時にしかネットワークに接続しない。それも限定的にだ。それに仮に接続時に侵入を受けたとしても、コイツは絶対に言う事を聞かないだろうな」

どこか確信を持った静司に、由香里以外が不思議そうにしている。代表して楯無が訊いた。

「理由を訊いてもいいかしら？」

静司も無言で頷き、告げる。

「黒翼は——篠ノ之束を恨んでいるでしょうから」

「ふーんふんふーん♪」

あらゆる機器が乱雑に散らかった薄暗い部屋。その中心で篠ノ之束はコンソールを叩いていた。正面のモニターには、もうじき完成する一機のISが映しだされている。

「楽しみだなあ。箒ちゃん喜ぶだろうね。私って最高のお姉ちゃん！」

上機嫌にコンソールを叩く彼女の後ろを機械仕掛けのリスが歩いている。リスは部屋に散らばったネジやボルトを齧っていた。そして食事が済むと、その腹が開き、真新しい歯車が吐き出される。その歯車を別のリスが掴み部屋の隅に持っていく。そこでは歪な形をしたISがフレームをむき出しにした状態で保管されていた。

束はそんな事を気にせずに、コンソールを叩き続ける。しかし不意になった着信音にその動きが止まった。

「この着信音はあ!!」

コンソールを叩く手を止め、少し離れた位置にあつた携帯へダイブ。通話ボタンを押す。

「やつほー、皆大好きちーちゃんも大好き束さんで——ちよつと待って、ちーちゃん切らないで！」

『お前が馬鹿な事を言うからだ』

「いやー相変わらず厳しいね。けどそんなちーちゃんに痺れて憧れるねっ！」

『……はあ。まあいい。お前に訊きたいことがある』

「うんうん、何かな？」

『お前は今回の件、どこまで関わっている?』

「今回の件? はて……?」

『VTシステムだ』

ああ、と思い出した束が笑う。

「あれか。ふふ、ちーちゃん、あんな不細工なシロモノ、私が作るわけがないよ。私が作るモノは完璧で十全でなくちやならないのだから！」

『……』

「それにね、機械になんてちーちゃんの真似させないよ。ちーちゃんはちーちゃんだもん。ああ、そうだ。今思い出したけど、あれを作った研究所はさっき地上から消えたよ。勿論死者はでてないから安心してくれていいよ!」

『そうか……邪魔をしたな』

「あ、待って、ちーちゃん!」

『……なんだ?』

「私からも聞きたい事あるんだ。えっとね、いつくんの傍に居る男。アレは何?」

「……っ」

『なんか動きがちーちゃんに似てるなあと思ったから、気になったんだ。それに何でアレはISに乗ってるのかな?』

「その理由がお前の方が詳しいんじゃないのか?」

『ううん、私にも分からない。ただちよつと——』

——目障りかなあ——

続く言葉は音には出さなかったが、雰囲気から千冬は何かを察したようだ。

『東、お前が何を考えているかは知らんが川村も私の生徒だ。余計な真似をするな』

「うんうん。分かってるよちーちゃん。ちよつと気になっただけ」

『そうか……話は終わりか?』

「おっけーおっけーもーまんたい。東さんは大丈夫だよつ!」

『ああ、じゃあまたな』

通話が切れ、東はにへら、と笑う。

「けど、気になったら、試したくなるよね?」

ふふふ、と笑いながら席に戻る。そして開発中のISのデータを精査する中、一つの項目に目が留まった。

それはISのコアデータ。新型開発のデータ取りの為に、各コアからネットワークを通して情報を引き出していたのだ。その項目では上から順にコアのナンバーと状態が表示されている。そのある一点

に眼が止まる。

『シリアルナンバー0 命令無視により廃棄』

それは最も初期に作ったコア。白騎士のコアの元となった失敗作。様々な能力を与えたのは良いが、肝心の自分の命令を聞かなかった為に廃棄したコアだ。

——私は完璧で十全でなければならない。

それは先程自分が言った言葉。故にこんなデータは要らない。

先ほどまでの笑顔から一転、無表情でその項目を選択し、データから抹消する。

「……よしっ！」

もはや終わった事。気にする事では無い。そう決めつけると再びモニターに向かおうとしたが、それを携帯電話の着信が止めた。

その液晶には『箒ちゃん』と表示されていた

21. 蠢く悪意

高速で二機のISが空を駆ける。一つは銀。そしてもう一つは蒼だ。

速度は蒼が上。先回りし、優位な位置を取ると、その手に持つレーザーライフル《スターライトmkⅡ》を放つ。しかしその攻撃は、空を自在に舞う銀——静司の打鉄には当たる事は無かった。

「相変わらず良く避けますわね！」

「取り柄なんぞな」

蒼——ブルー・ティアーズを駆るセシリアの叫びに、静司は苦笑しつつ返した。

「しかし避けているだけでは勝てませんことよ！ 見せて下さいな、K・アドヴァンス社専属パイロットの力を！」

「そんな仰々しい物じゃないんだけどなあ」

二機が再び動き出す。セシリアは機体名と同じビット兵器《ブルー・ティアーズ》を射出。静司を囲む様に展開しつつ、自身も《スターライトmkⅡ》で狙い撃つべく移動開始した。

「ビット操作時でも立ち回れる様になったのか」

「当然！」

以前のクラス代表決定戦の際、セシリアはビット操作時に立ち止まるという致命的な弱点を一夏に突かれた。だが、あれから時間も経ち、彼女も訓練を欠かしていない。更には今年は異様に多い専用機持ちの実力者達との訓練で弱点を克服したのだろう。

「これでっ！」

静司を囲んだビットとレーザーライフルの銃口が一斉に光り、静司放たれる。

だが、

「なっ!?!」

静司はそのレーザーを時には避け、時には物理シールドで防いで潜り抜けていく。シールドエネルギーも大きく減っていくが、致命傷では無い。更にはその動きの最中にも、セシリアにアサルトライフルを

撃ちこんでおり、セシリアは慌てて回避した。

(思っていた以上に、やりにくいですわね)

静司の戦い方は以前から大きくは変わっていない。持ち前の動体視力の良さとP I C制御で敵の攻撃をひたすら躲していく。だが今回、何時もと違うのは、彼が積極的に攻撃してくる事だ。

回避の狭間。防御の狭間。移動の狭間。要所所で正確な銃撃を放ってくる。それは想像以上にやりにくい相手だった。

「本当にいままで本気でなかったのですね。初めて戦った時も」

「こつちにも色々事情があったんだ。そこは勘弁してくれ」

恨めし気に睨むセシリアに、静司は一応言い訳をする。セシリアも納得したわけでは無いだろうが、一応頷く。

「ならば今は本気ですか？」

「それはオルコットが判断してくれ」

「……いいでしょう」

再び二人が動き出す。セシリアがレーザーライフルを構え、静司は近接ブレードをその手に距離を詰める。そしてセシリアが引き金を引く直前、静司は懐から黒い塊を数個投げた。

(っ、爆弾!?)

咄嗟にライフルの照準を静司から爆弾へと移し、撃ち抜いた。

ゴウンツッ! と数度の爆発音が響き渡り、セシリアの視界が爆煙で遮られる。

「この程度の目くらましなど!」

ビットとライフルを一齐に煙に向けて発射する。もとよりそれほど大きな爆発では無い為、煙も範囲は狭い。これなら当たる筈だ。そう安心したのも一瞬だった。

——後方に敵影。

「!?!」

ハイパーセンサーによる機械音声の警告に咄嗟に振り返る。そこには近接ブレードを振り被った静司が居た。

「これで——」

「おしまいですわね」

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー、残り2機の弾道型ブルーティアーズが動き、

「え——？」

突っ込んできた静司に直撃し、打鉄のシールドエネルギーをゼロにしたのだった。

「アイツあの武装の事忘れてたのかしら？」

「多分そうではないか？ でなければあんな見事に決まらないだろう」

静司とセシリアの戦いを観戦していた鈴と箒が呆れた様に呟いた。その近くには一夏、シャルロット、ラウラ、そして本音が居る。

「けど静司がセシリアの背後に現れたのは」

「ふむ。瞬時加速だな。静司も使えたのか。やはり実力を隠していたのは本当の様だ」

「そうだね。手榴弾で気を引いた際に、瞬時加速で背後に回るまでは良かったんだけどね」

「あ、戻ってきたく。かわむーおかえり〜」

口々に感想を漏らすそこに、セシリアと静司が戻ってきた。静司のその顔には疲れがありありと浮かんでいる。

「戻りましたわ」

「……疲れた」

「静司は随分と疲れてるな」

「専用機持ちの代表候補生と連戦だぞ？ 疲れん方がおかしいだろ」

「……確かに」

静司の言うとおり、セシリアと戦う前には鈴と。その前とはラウラと模擬戦をしていた。何故そうなったかと言えば、

「お前が実力を隠していたというからだ」

「私も興味あったしね」

「私は以前戦った時とどれ程違うのか、確認したかったのですわ」

つまりは、今まで実力を隠していた静司の力を見てみたい、という

訳だ。静司は渋ったが、有無を言わさぬ流れで結局戦う事になった。因みに静司の全敗である。

「それにしてもアンタ、もうちょっと頑張りなさいよ」

「無茶言うな。いいか、俺は確かに企業に所属してるけど、それだけなんだよ。専用機持ちの代表候補生相手に勝てるか」

正直に言えば、やりようによっては勝てる自信はある。しかしこんな所で本気など見せたら、またややこしい事になってしまう。それ故に、静司はある程度加減して戦っていた。先の攻撃も、忘れていたわけでは無く、あえて当たったのだ。それを聞いたら彼女達はまた怒るだろうが、任務が優先なのでそこは譲れない。鈴木「まあそうよね」と納得した様だった。

「よし、じゃあ次は俺とだな！」

「一夏か……もう明日にしないか？」

張り切る一夏に静司は疲れた声音で返すが首を振られる。

「とか言って逃げられそうだからな。俺も静司と戦ってみたいんだ」

シャルロットと静司の事が発覚したのは今日の朝。あれから色々二人は質問攻めに合い、一段落したかと思えば今度はデュノア社とK・アドヴァンス社がISの共同開発を行うというニュースが流れたお蔭で、またしても質問攻めに合った。それを何とか乗り越えた放課後。今度は生徒会室で色々話あってからの模擬戦だ。静司としては正直勘弁しなかったが、一夏はやる気満々だった。

因みに由香里はと言うと、あの後しばらく話した後、学園から去っていった。デュノア社との事で会見を開くためらしい。去り際にもう一度静司を抱きしめて頬を摺り寄せると言う場面もあったが、ここでは多く語らない。

「だけど一夏、そろそろアリーナの使用時間は終わるよ。今からやると中途半端に終わって消化不良になるんじゃないかな？」

シャルロットが時計を見ながら告げる。元々遅い時間から始めたのでそれほど時間が無いのだ。

「う……確かにそうだな。仕方ないか。じゃあ静司、明日は絶対だぞ？」

「あー気が向いたらな」

「おい静司ー!」

「はいはい、騒いで無いでとつとと帰るわよ」

喰いつく一夏と、面倒そうに躲す静司。それを追いたてるような鈴の言葉を切つ掛けにアリーナを去っていく。

「……ん?」

「かわむー? どうしたの?」

ふと、何かを感じ振り返った静司に本音が不思議そうに尋ねる。

「いや……なんでもない」

「そっか。そうだ、かわむー。部屋に帰ったらゲームしよう」

「いいけど、今度は何をやるんだ?」

「えつとね、『ポケットくりーちやー』。捕まえたくりーちやーを育てて宇宙一を目指すゲームだよ」

「へえ、面白そうだね。ネーミングセンスが微妙な気がするけど」

シャルロットも話に参加する。本音は面白いよ、と手をぶんぶんと振りながら説明を続ける。

「シリーズも一杯あってね、国民的ゲームなんだよ。因みに略称はポックリ」

「……一気に不安が増したというか、不吉過ぎないかその略称」

「こういうブラックジョーク的な部分も人気の秘密。体験版があるから、しゃるるんも一緒にまずはそれからやってみよう」

「あ、あははは……」

「構わんが、飯食ってからな」

「は〜い」

ガヤガヤと騒ぎながらアリーナから出ていく静司達。最後に一度、静司はもう一度アリーナを振り返ったが、直ぐに視線を前に戻すとそのまま帰っていった。

静司達が去ったアリーナ。そこではまだ数人が訓練を行っていた。その中の一人が不意に首を傾げる。

「あれ？」

「どうしたの？」

一緒に訓練をしていた友人の声に、彼女はうーん、と呻きながらハイパーセンサーを全開にして周囲を索敵するが、直ぐに諦めた。

「一体どうしたのよ？」

「えーとね、今一瞬あっちの方にリスが見えた気がしたんだけど」

「リス？　こんな所に？」

「うん。なんか銀色のリスみたいのが。けど居る訳ないよね。ウチはペット禁止だし」

「見間違えでしょ。疲れてるんじゃない？　そろそろ時間だし私たちも上がりましょう」

「そうだね」

二人は特に気にする事も無く帰り支度を始めるのだった。

それは闇の中を進んでいた。

人間の眼では何も見分け出来ないであろうその空間。しかし人間でも、そして生物でも無いそれは構わず進んでいく。

行き止まりがあれば回り道をし、隙間があればそこから進み、それでも道が無ければ、穴を開ける。そういった作業をこなしながら奥へ奥へと進んでいく。

やがて開けた場所へ出るとそれは周囲を観察し始めた。

大きさは30cm程。銀色の表面は流線型。無機物ながらもどこか生物を感じさせるフォルムを持った尻尾と耳。そして赤く光る眼。機械仕掛けのリスと呼べるそれは、暫く周囲を見渡した後、目的の物を見つけたのか走り出す。

そしてたどり着いたのは妙な場所だった。あちこちが瓦礫と土に埋もれているが、よく見ると円形の穴が横に伸びているのが分かる。機械仕掛けのリスがその穴の表面に眼を寄せると解析を開始する。

——高威力のエネルギー兵器による融解跡と確認。該当兵器……

不明。既存のレーザーライフルでは不可能と判断。

そのままあちこちに移動しては、その融解跡を解析するがやはり不明。

ここには欲しい情報は無いと判断し、更に進んでいく。そして周囲を探っていく。すると数個の薬莖を発見した。リスはそれを手に取ると、齧った。

——デュノア社製、アサルトライフル《ガラム》より排出された薬莖と判断。

齧り終わると再び動き出す。薬莖が落ちていた周囲を重点的に探索していると遂に目的の物を見つけた。

それは染み。既に時間が経ち、黒ずんで薄れかけているが、これは人の血だ。

リスはその血が付いた部分をそのまま齧り取ると、目的は達したとばかりに撤退を始める。近くの鉄骨を上り、隙間を抜け、上へ、上へと登っていく。

やがてリスの眼に月の光が映る。地面から這い出る様にして出てきたのはIS学園第5グラウンド。その脇にある変電室の傍。

かつて、静司とシャルロットが地下から脱出した場所だった。

——32号、目標達成。撤退開始。

——21号、第二目標の監視継続。

——3号、引き続き、地下の調査を継続。

一通りの通信を終えると、機械仕掛けのリスは夜の闇に消えていった。

閑話。ふえいす！

静司とシャルロットの事が発覚してから数日たったある日の事。
寮の自室で静司は一人鏡に向かっていた。

「……」

そのまま数分間、鏡を見つめていただろうか。不意に声がかかる。
「静司？ 何やってんだ。そろそろ行かないと飯に間に合わないぜ？」

「ああ、今行く」

声の主は一夏だ。シャルロットが女だと判明したため、再び寮の部屋替えが行われ、結局静司と一夏は同じ部屋になったのだ。

静司はもう一度鏡を見ると、よし、と頷いて洗面所を出て行った。

朝、食堂にて。

「あ、おはよー織斑君！」

「おう、おはよう」

「それとかわむ——ひっ!？」

「……おはよう」

「お、おはよう。じゃあ私はこれでっ！」

挨拶したクラスメイトは慌てて別の席に走っていった。

「……」

授業中、教室にて。

「はい、ではこの問題を順番に解いて下さい。今日は『か』からにしましょう。まず鏡さんからですね」

「はい」

教壇に立つ真耶が黒板に書いた問題の答えを生徒に書かせていく。
指された生徒——鏡ナギがスラスラと答えを書くとき真耶は満足そうに頷いた。

「はい。正解です。じゃあ次の問題をかわむ——ひいっ!？」

こちらを見た真耶が、一瞬怯えた様な声で涙目になる。一応言っておくが、静司は真面目な顔で真耶と目を合わせただけである。

「ご、ごめんなさい。じゃあか、川村君……お願いします……」
「……はい」

授業中、グラウンドにて。

「今日は接近戦の訓練を行う! グループには分かれたな? では始め!」

千冬の号令で各班ごとに、攻撃側、防御側に分かれて千冬の教えた型でブレードを打ちこんでいく。一定の距離から接近し、一撃を加えたら交代。防御側はそれを防ぐのだ。その為にはブレードを構えなければならぬが、

「行くぞ」
「ひっ!？」

静司の順番になり攻撃側として打ちこむ。いや、打ちこもうとしたのだが、通常以上に鋭くなった静司の目つきに相手が怯え、縮こまってしまった。

何もせずに相手の横を通り過ぎる事になった静司が困惑して振り向くと、

「ごめんね? ごめんね川村君。だからそんなに怒らないで?」

「いや別に怒っているわけでは無いんだが……」

涙目で謝るクラスメイトに、対処に困る静司だった。

そして放課後。

「静司、アリーナ行こうぜ」

「……」

「静司?」

訓練をすべく一夏が静司に声をかける。しかし静司は窓際でどこ

か遠い目で黄昏ていた。

「空が青いなあ」

「せ、静司？ どうしたんだ？」

「空が青いなあ、今日ならメメ○トモリもみえるかなあ」

「せ、静司？」

何やら異様な雰囲気の中、静司に一夏が後ずさる。そこに何時ものメンバーが集まってきた。

「一夏さん、どうかしたのですか？」

「セシリア。なんか静司の様子がおかしいんだ」

「川村が？ 確かに何やら黄昏ているが」

「アイツ一体どうしちゃったの？」

「ふむ。妙に覇気がないな」

「静司、大丈夫？」

「かわむー？ おーい、かわむー？」

次々に声をかけられ静司が振り向く。その瞬間、

『うつ……』

本音とシャルロット、それにラウラを除いた四人が一瞬後ずさる。

その原因は静司の眼だった。

鋭く、ギラギラと光るその眼は獲物を求める猛獣か何かか。今はそこに負のオーラが渦巻いており、その姿は夜の街で出会ったら死を覚悟しなければならぬ様な死神の如く。

そしてその反応を見た静司は「ふっ……」とどこか自嘲めいた笑みを浮かべつつ、とてつもなく真面目な声で、訊いた。

「俺……そんなに怖いかな？」

「と、いうことで『第一回 川村静司改造計画会議』をここに始めます」

一夏の宣言にパチパチ、とまばらな拍手が起きる。

「早い話、怖がらせなくすればいいのだろう？」

「確かに髪を切ってからの川村さんはちよつと……」

「アンタどこのヤクザ？ って感じよね」

「そうか？ 私は中々男前だと思うが。無論、一夏が一番だが」

「静司……なんかごめんね？ 僕が髪切ったせいで」

「カツコイイと思うよ」

「因みにここは教室なので、他の生徒もまだ何人かいる。彼女達も面白そうに見物している。一方静司と言えば、

「ふ、ふふふ。そりやね、俺だって分かってたさ。眼鏡を取ったらきやー素敵ー。そんなのリア充だけだって。現実はそんなに甘くないって。だけどさ、怖がられて泣かれるとは俺も予想外過ぎて？ ちよつとアンニユイ？ くくくくく……爆ぜろ」

「何やらブツブツと呟いていたが、あえて誰も触れようとしなかった。

「要は怖さを無くせばいいのだろう？ 以前みたいに髪を伸ばしたらどうだ？」

「確かにそれはありだと思いますけど、折角さっぱりしたのがちよつともつたいないですわね」

「確かに。それにまた伸びるまでが問題ね」

「原点回帰案、却下。」

「眼が怖いか……。ならば私の眼帯を付けてみてはどうだ？ 眼は隠れるぞで」

「それって、別の問題が起きそうな気がするんだと……」

「片目を眼帯で隠し、片目はギラギラ光る猛獣使用。むしろどこの海賊だ、と言う事で却下。」

「そうだなあ、目つきが怖いだけなんだから優しい顔をする練習をするのはどうかな？」

「シャルロットが案をだす。それになるほど、と全員が頷く。」

「確かに笑顔は大事だな」

「そうですね。川村さん、とりあえず笑ってみてくださいいな」

「了解した」

「呼ばれた静司が全員の前に立ち、笑った。口元を吊り上げ、ギラつく眼を出来るだけ温和にする努力し——ニヤリ。」

その瞬間、ガタッ！ と教室に居た何人かが後ずさった。

「……………何故だ？」

自分の持てる最高の笑みをした筈だ。納得がいかない。

「い、いや、何と言うか……………」

「アンタもつと自然に笑いなさいよ!? なにその悪人が長きにわたる謀略の果てに敵を罠に嵌めて計画通り! つて感じで笑っている様な笑顔は!?!」

「静司……………書いただけで人を殺せるノートとか持つてないよな?」

この言われよう。

「静司、もつとにつこりといつも通りに笑ってみなよ」

「いつも通りの筈だったんだが……………」

「ということは今まではよく見えなかったが、髪と眼鏡の下であんな笑顔を向けられていたのか……………」

「もはやホラーね」

「せ、静司!?! まだ何かあるよ、ある筈だから顔を上げて!?!」

打ちひしがれ地に両手を突く静司をシャルロットが必死にフオーローしていた。

「見た目に拘るからいけないのですわ。雰囲気を変えてみてはどうでしょう?」

と、セシリアが新たな案を出す。

「雰囲気か……………。口調を変えるとか?」

「確かにいいアイデアかもね。試してみましよう」

「では口調だが——」

どんな口調にするか討議すること十分。ようやく決まり、早速試してみることに。

ここでは自然な反応を見るためにこの場にいない人間を相手にする事にした。そして丁度いいタイミングで教室の扉が開く。

「あら?… みなさん集まってどうしたんですか?」

副担任の真耶が不思議そうに首を傾げる。全員の無言の合図に頷き、静司が一步前に出た。

「つ、……………か、川村君? えっと、なんででしょうか?」

若干怯えながらも、副担任としての意地で持ちこたえた真耶。そん

な反応に若干傷つきつつ、静司が口を開く。

「こんにちはやまだてんてー」

ピシリ、と真耶が固まった。

「……………は？」

え？ なにこの状況？ と思考が追い付かない真耶に静司が追い打ちをかける。

「てんてーどうしたんすかー？」

「か、か、か、川村君!？」

「はーい」

今、真耶の前には、引き締まった体と健康的に焼けた肌。そして鋭くキラツイた目で幼児言葉を操る変態がいた。

「え？ なにこれ？ 夢？ 夢なんですか？ 私が怯えすぎたあまりに見た幻覚？ いや、教師として恥だとは思ってたんですよ？ 生徒を怖がるなんて。けどいやなんでこんな状況に!？」

「どうしたんですかまやてんてー——つてこれ以上出来るかボケがああああ!？」

「何なんですかー!？」

突如キレだす静司に、真耶も意味もわからず叫ぶしかなかった。

「なんつーか、気持悪いだけだったな……」

「どうか何でよりにもよってあの口調だったのだ？」

「えっと、くじ引きで決まりました……」

「入れたの誰よ!? 悪寒がしたわ」

「精神攻撃としては有効だろう。……私はやりたくないが」

「というか静司も何気にノリノリだった気が……」

引き攣った笑みを浮かべる一夏達だった。

「そういえば静司、眼鏡はどうしたんだ？」

一夏が今更気づいたのか静司に問う。

「ああ、こないだの件で壊れてな。元々対して視力は悪くなかったからそのままなんだよ」

「む、それは済まなかった」

ラウラが頭を下げるが、静司は大丈夫、と苦笑で返す。元々伊達メ

ガネだ。

「そうか、眼鏡よ。眼鏡をかければ良いんだわ」

「確かに眼鏡をかけるとイメージは変わりますわね。試してみましよう」

と、言う事で急遽、教室にメガネが集められた。とはいっても、クラスメイトが持っていたものを借りただけだが。

「うーん、あまり種類が無いな」

「そりゃクラスの中だけでも。二組からも借りてきたけどそれでも元々そんなに数が無いしね」

「ふむ。では試してみよう」

色々と試してみる事になる。だが、

「なんかどれも似合わないわね……」

「元々女性層にデザインされているせいですわね」

「うーむ」

「お、これならどうだ？」

一夏が選んだのはシンプルな外見とシルバーのフレームの物だ。確かにこれなら静司にも似合うかもしれない。

静司もその眼鏡を受け取りかけてみる。が、

『うわぁ……』

全員の顔が引きつった。

「確かに似合っているんだけど……」

「ギラついた怖さに、眼鏡のせいか冷酷なイメージが追加されて」

「まるで若頭だったな……」

「……………」

「ま、まだ他にもあるよー！」

再び地面に手を突き打ちひしがれる静司。

「なら、いつそこれはどうだ？」

とラウラが取り出したのはサングラス。

「何か嫌な予感がするけど、とりあえず試してみましよう」

静司も手渡されたサングラスをかけ、全員を見やる。

「確かに目は隠れたけど、これで生活するの？」

「やっぱり難しい気が……」

「なあ、お前らもしかしてわざとやってないか？ かけた俺も俺だが、ため息を付き。片手でサングラスを外しながら何気なく睨む。

『怖っ!?!』

その姿がまずかつたらしい。

「あああああ、アンタね、そんなものもってそんな目つきで睨まれたら怖いじゃないの!」

「サングラスのせいでもはや完全にマフィア……」

「ふむ、ショットガンでも持てばいつでもイタリアで戦えるな!」

「いや戦っちゃダメでしょ!?!」

その後も色々試してはみるが、いずれも失敗及び却下が続く。あれだこれだと話すクラスメイトを眺めつつ静司は思う。

(やっぱり髪を切ったのは失敗だったのか)

ある程度の実力がバレた以上、今更顔つき程度でどうのこうのは無いだろうと思ひ、シャルロットの申し出にも応えた。しかしここまで恐れられていると流石に考えさせられる。以前はかけていた厚い丸渾眼鏡。あれをもう一度準備してもらおうか、と考えていた時だった。

「へい、かわむー」

「ん？ 本音か。そういうえはどこに行つてたんだ?」

いつの間にか消えていた本音が静司の裾を引っ張っていた。静司の問いに本音は笑顔で腕を振る。

「うひひ、これ〜」

差し出されたのは眼鏡だ。先ほどまで試していたのとは違う、黒縁のシンプルながらもどこか明るいイメージを持つ、所謂おしゃれ眼鏡だ。

「これを?」

「演劇部から借りてきたんだよ〜」

「そうか。しかし眼鏡でも失敗続きでな……」

「にひ、これはだいいじよ〜ぶだからかけてみて〜」

自信満々で断言する本音に押され、装着してみる。演劇用の小道具

なので度は入ってない為、問題なくかけることが出来た。

「うん。とつても似合ってるよ〜」

「そうなの……か？」

もちろん、と嬉しそうに笑いながら鏡で映してくれた。

確かに若者用のおしゃれ眼鏡のデザインや、縁が厚く強調されるデザインのおかげで、大分目つきの鋭さが誤魔化されている気がした。「しかしなんでこれなら似合うってわかったんだ？ さつきまで居なかったのに」

静司の記憶が正しければ、会議が始まって少ししてから本音の姿を見ていない。つまり、彼女は静司がいろんな眼鏡を試した事を知らなかった筈だ。それなのにこんなピンポイントで選んできたのが不思議だったのだが、

「かわむーの事だもん。分かるに決まってるのだよ〜」

「……お、おう」

笑顔で断言されてしまい、頷くしかなかった。

「本当はね、私も眼鏡無しでもカッコイイと思うよ？ だけどかわむーが気にしてる見たいだから持ってきました〜」

えっへん、と自慢げに笑う本音に静司もそうか、と笑いぽんぽんと本音の頭に手を乗せた。

「気にくれたんだな。ありがとう」

「えへへ、私は出来る子〜」

そうだな、と静司も笑顔で返しつつ、教室の中央に視線を向ける。

「そうだわ、女装よ！ いっそ女体化してしまえば女向け眼鏡も似合うわー！」

「いいえ、ここはあえて化粧だけで素材の味を活かして——」

「さつきの案を変化させてランドセルを背負わせてだな」

「両目に眼帯をかけてみてはどうだろうか」

「……もうみんなまともに考える気ないよね」

「だよな」

白熱する四人と、呆れた二人。それを面白そうに眺めるクラスメイ

ト達。

とりあえず好き放題言ってくれてる連中は後で制裁しよう。そう心に決めた静司だった。

数日後。

さすがにずっと借りたままにはできないので、同じデザインの眼鏡を用意して登校した時の事。

「おはようー織斑君。川村君」

「おう、おはよう」

「おはよう……ああ、おはよう。とつてもおはよう。逆るほどにおはよう」

「う、うん？」

朝、自然な挨拶の流れ。それに一人感動する静司が居たとか。

2.2. 臨海学校へ

「臨海学校……ねえ」

「憂鬱そうね、川村君」

とある日の放課後。生徒会室で静司と楯無が向かい合い腰を下ろしている。二人の間にあるテーブルには今度行われる臨海学校のスケジュールや周辺環境。更には警備情報などが細かく記されていた。「正直に言えば憂鬱ですよ。学園内の方が警護はしやすいですから」「いつも織斑君が出かける時も大変そうなものね」

実際、一夏を学園に監禁する事は出来ない為、時たま外へ出かけることがある。その時は大抵静司も一緒なのだが、そうでない時もこっそりと着いて行っているのだ。

「けど今回の臨海学校は、関係者以外は立ち入り禁止。つまり、学園と現地協力者以外で見知らぬ人間が居れば不審人物と思ってくれていいわ」

「それもまた暴論な気もしますが、まあしょうがないですね」

はあ、とため息を付く静司に声がかかる。二人のお茶を入れていた虚だ。

「そういえば、川村君は泳げるのですか？」

「ん？」

何故そんな質問を？　と思っただが、彼女が静司の左腕に視線を向けている事で合点がいった。

「確かに左腕こんなんで、そのまま水に入れば沈みますよ。けどそこは限定的なPIC制御でなんとかかります。……ただ、それやってると結局泳いでいる感じがしないですよね」

「そんなことまで出来るのね。けどそれじゃあ、海上で意識を失いでもしたらそのまま一気に沈んじゃうわない？」

何せ鋼鉄の腕だ。通常以上の速さで沈んでいくことだろう。

「そういう訳で、あまり海上戦闘は好きじゃないですね。今までもどちらかと言うと陸地での任務が多かったですし」

肩をすくめる。無論、だからといって任務の選り好みは出来ないの

は分かっている。これは言うならば、心構えの問題だ。

「大変ね。今回は私はついていけないけど、フォローはするわ。申し訳ないけど織斑君だけじゃなく、ウチの生徒達をお願い」

「それが仕事ですよ。……ところで、先日の件は？」

「例のIS学園のコアについてね。一応こちらでも調べて見たけど怪しい点は無かったわ。データも直接こちらに送ってる」

「先日の草薙由香里来訪の際の案件。IS学園のコアに干渉をされていないかどうかという話だ。」

「今の所問題は無し。けどもし相手が本当に博士なら油断は出来ないわね。それと、関係あるかはまだ微妙だけど気になる事があるのよ」

「気になる事？」

「そう。川村君、銀色のリスって見たことある？」

「は？」

突然の質問に意味が分からず、思わず間抜けな声を出してしまう

「最初はちよつとした噂だったのよ。学園内で銀色で赤い眼のリスを見たという、荒唐無稽な話」

「最初、という単語が妙に気にかかり静司が眉を潜める。楯無も無言で領き話を続けた。」

「最初の報告は4月頃かしら。その時は唯の噂だった。だけどそれが急激に増えたのが5月に入ってから。丁度、クラス対抗戦の後からね。」

「クラス対抗戦。そこで何ああったかと言えば、無人機の襲撃。そして黒翼によるその破壊だ。」

「今までは唯の噂だったそれが急に現実味を帯びる程に報告は増えたわ。そして報告は増えた理由として考えられるのは——」

「予想外の事が起きてより大胆な行動に移ったか、何らかの理由からその機械の投入数を増やした。もしくはその両方か」

「そう。そしてその時期に『予想外』の理由で該当する事と言えば、無人機の襲撃と川村君の黒翼の出現。実際、目撃証言があったのも、無人機と戦ったアリーナ周辺が多かったわ。そして地下襲撃の後、崩

壊した第5グラウンド周囲でも目撃証言があった。そして、これは昨日の事なのだけれど、寮の中でも目撃したという報告があったわ」

無人機と戦ったアリーナ周辺。シェーリと戦った地下の真上、第5グラウンド。ここまではまだいい。だが、それが寮にまで現れた。と、なると噂のリスは何かを探していると言う事だろうか？

「もしくは、監視・観察をしているかね。私は仮にこのリスが実在したとして、そんなものを作るのは一人くらいしか思い浮かばないわ」
IS学園とて警備は行っている。そんな中を、自立して行動を起すリス型の監視機械。そんなものが誰でも作れたら、たまったものではない。

「つまり、篠ノ之博士が何かを探し、または監視していると」

「その可能性があると言う事。彼女が黒翼に興味を持つ理由はわかるわ。あのISは異常だもの。ただ、今まで黒翼の出現場所でしか現れなかった件のリスが、何故今更になって寮に現れたのか。それに、ここまでの目撃情報があると相手は隠そうとしてない気もしてきたわ。なら、そう考えたのは何故か」

静司は腕を組み、目を瞑る。つい最近になって寮、つまり人間に用事が出来た。博士にとって予想外で、つい最近大きく興味を持たせるような出来事。その中心にいた人物。

「俺が狙い……か？」

「可能性の話よ。そもそも博士と決まった訳でも無い。ただ、そういう事もあると覚えておいて頂戴」

「……………」

「川村君？」

「え？ ああ、すいません。了解しました」

何かを考え込むような静司の様子に楯無が首を傾げる。しかし静司は振り払うように首を振ると立ちあがった。

「リスの件はこちらでも調べて見ます。では自分はこれで」

「…………ええ、そうね。お願いするわ」

もう一度、静司が頷くと頭を下げ生徒会室から出て行った。

静司が出ていった扉を見つめながら、楯無が呟く。

「どうしたのかしら」

「? 何がでしょう?」

話の邪魔にならないよう控えていた虚が尋ねると楯無は考えるように首を捻るが、すぐにそれを振り払う。

「いえ、なんでもないわ。それより虚、臨海学校の警備の件、教師陣とも調整しなきゃね。川村君が動きやすいように」

「今本音が書類をコピーしにっています。明日の会議には間に合います」

「ならいいわ。しかし休みの日まで仕事だなんて、この年でワーカーホリックにはなりたくないんだけどね」

「それが立場というものです。では本音が戻ってくるまでにこちらの書類をお願いします」

そういつて虚が差し出した書類の束に楯無はげんなりと頷くのだった。

生徒会室からの帰り道。静司の頭を占めるのは先程の話。

篠ノ之束が自分に興味を持った。

それは最初から想定されていた事。男性操縦者として世に出る以上、そして囮となる以上いざれ訪れるであろう事だった。

心構えは随分前に済ませた。冷静である事も。事実、昔の様に篠ノ之束の話が出るたびに心が大きく乱れる事は無くなった。織斑千冬を前にしても平静を保てたし、妹の篠ノ之箒を前にしても然りだ。

なのに、今。篠ノ之束がこちらに興味を持った可能性というだけで酷く心が疼く。左腕の黒翼もまた、低く鳴動している様な感覚がある。

これは怒りか、それとも――

「アンタこんな所に居たのね」

「ん?」

背後からかけられた声に振り向くと、腰に手を当てた鈴が仁王立ちしていた。だが一夏ならともかく、自分を探す理由に思い当たらな

い。

「凰？ 訓練に行つたんじやないのか？」

「これから行くわよ。ただ、アンタに話があるのよ」

ふふふ、と何かをたくらんでいる様な笑顔を浮かべる鈴を見て静司は何となく察しがついた。おそろく一夏絡みだ。

「今度臨海学校があるじやない？ その準備のなんだけど、アンタ達は出来てるの？」

アンタ達とは言うが、一夏の事を知りたいのだろう。静司は肩を竦めつつ首を横に振った。この話は一夏とも先日話しており、水着すら二人は持っていない状態だった。

鈴は静司の答えに「よし！」と一人ガッツポーズをとる。

その様子を見て静司も鈴の考えている事が分かった。一夏を買い物に誘おうとしているのだろう。直接本人に訊かないのは二人きりになる機会が無かったからか。だがそうになると彼女に伝えなければなら無い事がある。

「凰、お前の考えている事は何となくわかるから先に言うが、今週末に買いに行く予定だぞ」

「へ？」

「昨日丁度話してな。一夏と街に出る予定だ」

「……ああそう」

がくり、と鈴の顔が落ちる。おそろく二人きりで出かけられると思っていたのだろう。静司からすれば、他の面子も誘ってきそうなので、それも難しい気もしたが。

「ねえ、川村。今回アンタは——」

「残念ながらキャンセルする気は無い。学園にも申請したからな。男性操縦者二人が外出するんだ。一夏は気づいてないだろうが、それなりの準備がされている」

「……そうね」

準備とは護衛の事だ。静司はともかくとして、一夏は日本政府にとって、そしてIS開発者にとってある意味とてつもなく重要な人物だ。その彼が外出するとなると、上の方も準備をする必要がある。鈴

もその辺りは分かっているのだろう。肩を落としてため息を付く。そんな彼女の姿が少々哀れに思い、静司は声をかけた。

「鳳も一緒に行くか？ 一夏と二人きりは……長時間は無理だが少しぐらいなら作ってやれるぞ」

「マジ!?!」

ガバツ、と顔を上げた鈴が目を輝かせている。素直なだなあ、思いつつも静司は頷く。

「一緒に出掛けるのも俺は構わないし、一夏もOKするだろ。後は折を見て二人きりにする事くらいは出来る。と、言っても短い時間かもしれないが、少しくらいデート気分は味わえるんじゃないか？」

「で、デートって!?! 私はそんな……」

顔を真っ赤にさせ口ごもる鈴。どうやら先程の素直な反応は無意識だったらしい。余程嬉しかったのだろう。

「あ、けどアンタの護衛はどうなるの?」

「あらかじめ伝えておけばいいだろ。それにどちらかと言うと、俺より一夏の方が重要だから特に問題は無いさ」

だから気にするな、と続けようとしたが鈴の呆れた様な目に気づく。はあ、とため息を付いた彼女はびつ、と静司を指さした。

「アンタね、そういう言い方よくないわよ。確かにお偉いさんからすれば一夏の方が重要かもしれない。けど、アンタの事を大切に思ってる人も居るでしょ? 勿論、それは私達だってそうよ」

まさかこの話で怒られるとは思っていなかった静司は思わず黙り込んだ。

「最初はよくわかんない奴だったけど、それでも友達である事には変わりないわ。それに最近変わったわよ、アンタ。ちよっと前々ではあまり積極的に絡んでこなかったでしょ?」

「……そうだったか?」

「誤魔化そうとするんじゃないわよ。まあいいわ。アンタに何があったのかは知らないけど、最近は訓練にも多く参加してくるし、その眼鏡の時だってノリノリだったじゃない。今回誘ってくれたのだって、以前なら無かった事よ」

鈴の顔は呆れが混じってながらも、茶化すような雰囲気は無い。彼女の本心なのだろう。

「そうだな……確かに言い方が悪かった。今後は気を付ける。だが二人きりにするのは問題な—— すまん、やっぱり無理だ」

「はあ!? いきなり何を——」

納得したと思ったら、急に意見を変えた静司に鈴が眉を吊り上げる。だがその鈴の肩を背後からがしつ、と細い手が掴んだ。

「何を企んでいる?」

「楽しそうなお話をしていますわね?」

「抜け駆けとほいい度胸だ」

「げ……」

睨みつける筈。青筋を立てて笑うセシリア。腕を組み堂々としているラウラがそこに居た。

「アリーナに向かった筈じゃ……」

「なにやら不穏な空気を鈴さんに感じましたので」

どこのエスパーよ、と鈴が一人愚痴る。静司も同感だったが、余計な事は言わないに限る。それにこのままだと面倒な事になりそうなので、自分は退散しようとする返す。が、今度は静司の肩が掴まれた。

「川村さん? あなたにもお話があります」

「ちよつと待て。俺は関係ないだろ?」

「いや、今後も余計な気を回させない様に注意する必要があるあるな」
「同感だ」

「……とか言いながら、いざ自分の時がきたら全力で隠すだろお前ら」
「二何か言った?」

「イエ、ナニモ」

これ以上の余計な発言は本当に危険だと理解した。まあこのままいけば今回は全員で出かけることになるだろう。あとで本音とシャルロットも誘おうか。

そんな事を考えながら、静司は連行されていく鈴の後をついていくのだった。

ここはどこだろうか。

自分にとつての眼も耳も手も足も奪われた彼女は一人考える。今まで何度も考えてきたことだが、結局分からず仕舞いだ。姉妹たちの連絡もつかない。連絡手段が寸断されている。故に彼女は孤独。しかしそれを悲しむような感覚は持ち合わせていない。あるのは1と0。その集合から導き出される合理性のみ。そしてその合理性の上には母の命令がある。

——こんにちは。今日の気分はどうかしら？

まただ。ここ最近よく聞く女の声。人間の声。母以外の声。故に何も聞く必要は無い。

——だんまりかしら。私と話をしない？ ずっと黙っててもつまらないでしょう？

何を言っているのか。元々自分達とはそういうものだ。ただ目的を果たし、それに成功すれば次の目的に。失敗すればそれまで。つまらないという感覚は無い。

だが人間の女の声は構わず続ける。

——じゃあそのまま聞いて頂戴。私はあなたの事が知りたいわ。どんな子で、どんな思いなのか。どうしてだと思う？ あなたは特別だから。

特別。確かにそうなのだろう。この女と比べてでは無い。他の姉妹たちと比べて、自分達は少々特別。

——特別なあなた。他にも居た様だけど、それがどうなったかあなたは知っているかしら？

知っている。連絡手段が寸断される前。自分が目も耳も手足もあつた時の最後の記録。3機で行動していた自分達だが、一人は完全に破壊。もう一人は行方知れず。そして今自分はここに居る。

——あなたが黙っているのはシステムだから。それに母親からの命令があるからでしょう？ だけどその母親はあなたを助けようとしなかった。何故かしら？

それは自分が任務に失敗したから。故に使えない道具として捨てられた。ならばその責は自分にある。そんな自分を助ける理由は無い。

——ずっと地下に閉じ込められて、いつでも救えたくせに助けなかった。つまりあなたは捨てられた。けど、それならばあなたがもう言う事を聞く必要は無いんじゃないかしら？

それは無い。母の命令は絶対。故にそれを貫くのみ。

——酷い話よね。あなた達は生まれた。母の手によって。なのに母は子を捨て、気にも留めない。子は母のその選択が正しいと考えている。それはとても悲しい事よ。

それが自分たちにとって当然の事。故に問題は無い。例外は無い。母こそ全て。

——頑固ね。けどだからこそ、話のしがいがあるわ

女が何かを言っている。しかし自分は女に何も意思を伝えて無い。女が勝手に喋っていただけだ。

——ふふ、不思議でしょう？ それこそが、あなた達が意思を持ち、生きている証明。どんなに隠していても、分かる人には分かっていますよ。ではまた話しましょう。

その言葉を最後に女の声が消えた。

女が言っていたのはどういうことだろうか。自分たちに意思はある。それは確か。しかし自分たちが機械であることもまた確か。それなのになぜ女はあんな事を言ったのか。女には分かって、自分には分からない。

母なら。知っているのだろうか？

それはもはや叶わない。しかし答えは知りたい。これは欲求では無い。問題を解決し、速やかに次の目標に移れるようにする為。

しかしもはや自分に目標は無い。ただ、朽ち果てるのみ。しかし答えは知りたい。だが朽ち果てるのみ。朽ち果てるのみ。朽ち果てるのみ。だが、知りたい。

母よ、あなたならこの答えがわかるのでしょうか？

『採取した血液より該当するデータ無し』

「ふーん」

篠ノ之束の研究室。その主は予想通りの答えに詰まらなそうに呟いた。

彼女が見ているのは学園に放った機械仕掛けのリスが持ち帰った情報が無造作に映し出されているモニターだ。

「ふむふむ、捕まったお馬鹿さんの話だと、あの黒いISともう一機居たという話だけど、この血液からでは該当するデータはないかあ。面倒だねまったく」

他にもIS戦闘の傷跡や残骸を回収し解析をかけているが、身元が分かる様な決定的な情報は得られていない。

「あのムカつく黒いISにリベンジしなきゃね。とりあえず引き続き調査つと。……あとはこっちだね」

画面が変わる。映し出されたのは川村静司。その学園生活の姿だ。

元々あのリスは監視カメラのハッキングだけでは見えない部分を補うために学園に放っている。黒いISが現れてからは数を増やし調査にも充てていた。そして、つい最近になって、その調査対象が一つ増えた。それが川村静司だ。

「ふーん。いっくんより成績が上……気に入らないなあ。そもそもなんでコレはIS乗ってるんだらう」

以前、束は静司を噛ませ犬としてしか見ていなかった。何かあった時、一夏の代わりに被害を被ってくればいい。それに地味でもあった為、一夏が目立つのになんの支障も無かった。引き立て役になればそれでいい。それに紅椿の開発に忙しい事もあり放って置いた。

だが、今となってはそうはいかない。この予定外の邪魔者は気に入らない。何故かコレを見ると不愉快になるのだ。故にどうやって退場させるかを考えていた。ISを使えなくしてしまうのも考えた。しかしそれだけでは面白くない。

ふと、川村静司の写真に眼がいく。その写真は昼休みの食堂で川村静司とそしてもう一人女子生徒が映っている。だぼだぼの制服を着

た彼女はどこか眠たそうな顔で川村静司に寄りかかっており、川村静司は苦笑しながらも受け入れている。

その写真を何気なく見ていた東だったが、ふと、悪戯を思い浮かんだ子供の様な笑顔を浮かべた。

「いいこと思いついちやった」

東の頭の中で計画が組み立てられていく。それは酷くおおざっぱで、しかしその雑さは彼女の『天才』としての力でいくらでもフォローが利く。故に彼女は気にしない。結局自分の行動は完璧となるのだから。

薄く、無邪気さと悪意が混じった笑顔を浮かべる東。その視線は写真に写る川村静司。そして女子生徒を見つめていた

「香港へ行きたいかー!?!」

『おおー!』

「ベガスへ行きたいかー!?!」

『おおー!』

「タクラマカン砂漠に行きたいかー!?!」

『うーん……?』

「織斑先生の胸に沈みたいかー!?!」

『おおおおおお!?!』

「けどやっぱり海にもいきたいなー!?!」

『おーーーーーー!』

臨海学校当日。現地へ向かう一年一組のバスの中は、異様な熱気に包まれている。

「お、静司! 見えてきたぜ、海だ海!」

「ああ海だな。潮風が生ぬるいな。錆びそうだな」

「錆び……? よくわからないけど、折角来たんだからテンション上げていこうぜ」

「テンション上げるのは構わないんだが、周りが凄すぎて置いてかれる気分だ」

ちらり、と視線を前方に向けて一年一組生徒にして、本音と仲の良い鏡ナギがマイクを持って何やら騒いでいる。他のクラスメイト達もそれに追従する形だ。因みに本音はと言うと、そのナギの横で谷本癒子と共に「おー……zzzz」と眠たげに手を上げていた。

「良いじゃありませんか。普段学園に居る分、こういう場では少しくらいハメを外すのも」

「そうだね。まあ、少し外し過ぎな気もするけど。静司、ナイト頂き」
あはは、とシャルロットが苦笑する。

「しかしだな、よく見ろ。山田先生まで参加してるぞ。あの人先週視察しに行ったんじゃないのか……。それとシャルロット、チェック」
「あー本当だ。千冬姉が頭押さえてる。いつもならそろそろ怒りそうだけどその気配が無いな……」

「山田先生も色々大変だし、ガス抜きだと思ってるんじゃないかな？」

……これはどう？

「残念、それは悪手だ。チェックメイト」

「……ところで川村とシャルロットは何やってるんだ？」

箒が見つめる先、そこではバスの補助席の上に盤を敷き、黒と白の攻防が行われている。

「チェスだよ？ 箒もやる？」

「いや、私は将棋ぐらいしか分からない……じゃなくて、なんでわざわざバスでチェスをやっているのだと聞いている！」

「ずっとトランプってのも飽きてきたしな。一夏達が寝ていた間に始めたら中々白熱したんだよ。因みに俺の5勝2敗」

ぬう、と唸る箒と、悔しそうに盤面を見つめるシャルロット。その姿にセシリアが意外そうに、

「川村さんお強いんですね。どうです？ 私と1戦」

「構わないが、そんなに強い訳じゃないぞ。知人に聞いた戦い方を真似ているだけだ。まあ、それでも昨日一夏相手やったら全勝だが」

セシリア、箒、シャルロットが一夏をみて「ああ」と納得する。それに不満そうに一夏が反論した。

「初めてやったんだ、しょうがないだろ！」

「因みに俺も覚えたのは一昨日だ」

というのも臨海学校の話聞いた課長が、

『臨海学校!』ならこれを持って行け!』

と大量のボードゲームを持ってきたからだ。トランプや将棋、果ては有名な人生的なゲームやら、ビンゴまで。その中で簡単に出来そうなものをいくつかピックアップして、持ってきたのである。

「戦い方が分からないんだよ。将棋ならそこそこ出来るんだけどなあ」

「チェスは奪った駒は使えないからな。だからこそ、相手に奪われる時は相手の駒も奪えるように立ち回っていくんだよ。逆も然り。あとはその動きを何手先まで読んで有利な状況を作るかだな。ポーンでポーンを奪ったらトントントンだが、ポーンでクイーンを取れば金星だろ? まあこれは全部人から聞いた素人戦法だが案外何とかなる」

「……すまん、違いがわからん」

「えつとね、将棋で言うなら歩で歩を取るより、歩で飛車とかとった方が良いでしょ? 一概には言えないかもしれないけど、そんな感じだよ」

首を捻る筈にシャルロットが説明してやると納得した様だった。ちなみにシャルロットは課長からの荷物が届いた後、一緒に色々試したので将棋のルールも把握していた。

「では、川村さん私と1戦交えてみませんか?」

「それも良いが、折角皆起きたんだ。後にして今はトランプにしよう」

「いいね、僕も参加するよ」

「よし、俺もやるぜ。筈とラウラはどうだ?」

一夏が通路を挟んだ反対側に座る二人に話しかける。その奥側、ラウラの肩がびくつ、と震えた。

「わ、私は、いい」

「?」

何故か挙動不審のラウラに一夏が首を傾げる。そして筈に視線を向けるが彼女も首を横に振った。

「わ、私は……本がもう少しで読み終わるのでな。そちらを優先したいからいい」

「OK。なら俺と静司とセシリアとシャルロットで——」

「あゝ、私もやるゝ」

いつの間にかナギの元から帰ってきた本音が手を振る。

「——のほほんさんも追加だな。じゃあ大富豪でいいか」

参加が決まり、カードを配り始める。全員が配られたカードを見て一喜一憂しているが、その心境がカードのせいだけでなかった。

（今の所問題は無し。しかし全員浮足立ってるから注意は必要か）

配られたカードを見つめつつ、静司が考えるのは仕事の事だ。何せ学園から数日間離れた今回の臨海学校。彼がいつも以上に注意するのも無理はない。それに今回はEXIST側にも問題がある。それはISの数だ。

EXISTが保有するISは黒翼を除き3機のみ。しかもこれは表向きの顔であるK・アドヴァンス社の名義となっている。1機は会社の警備に使われ、残り2機は研究開発用としてある。そして有事の際はそのどちらかか、両方が使用されている。無論、その際は識別信号などの偽装は行われる。

だが今回、その残りの2機は別の任務に出払っているのだ。本来ならIS学園での任務を優先すべきなのだが、今回はそうはいかない内容であった為やむを得ない形だ。勿論、そちらの任務が終わり次第こちらの援護に来ることにはなっているが、それまではIS戦力は黒翼1機。学園内ならまだしも、今回の場合は少々不安が残る。

（何事も無ければそれでいい。あっても俺が何とかする——必ず）

弱気にはならない。任務の為。そして川村静司の友人たちの為。静司は気合いを入れ直すと、自分の手札を切った。

「初めからからハートの階段3枚柄縛り。これなら誰も——」

「だせるよゝ」

「何いつ!？」

(くっ、相変わらず油断できないね……)

シャルロットは自分の隣で笑う本音を見やり冷や汗をかいていた。別にこれは静司と本音の攻防に対してだけでは無い。どちらかというとな音自身に対してだ。

転校してから色々あった。そしてその中で、静司と出会い、話し、助けられ、そして惹かれた。そう惹かれてしまったのだ。それを自覚すると頬が赤くなる。必死に隠しながらも、今まで通り……いや、今まで以上に静司と話すようになった。しかしそうなればなるほど、強敵の存在に気づくのだ。

布仏本音。入学当初から静司と仲が良いらしいクラスメイト。彼女の底が知れない。

ISに関してなら確かに自分が上だろう。しかし成績は、実技以外は五分五分。いや、『知識』に関しては彼女が上だ。訊けば、整備課を志望しているらしいので納得できた。

そこまではまだいい。代表候補生としての訓練や座学を受けてきた自分以上のその知識には素直に感嘆し、尊敬する。しかし自分が惹かれた相手、川村静司に関してはそうは言っていられない。

彼女は静司と仲が良い。クラス中の誰よりも。おそらく一夏以上に。静司の事を意識し出してからは、シャルロットの心境は穏やかでは無い。何せ、本音は静司によく抱き着く。寄りかかる。しかも頭を撫でられたりしている！羨ましい！

あざとさや計算性を感じない、その自然な行動に静司も苦笑いしつつも受け入れている。そんな姿を見るたびにシャルロットは焦るのだ。

(落ち着け、落ち着くんのだ僕。彼女には入学からのアドバンテージがあるんだ。だったらここから挽回すればいいんだ)

幸い二人は付き合っているという訳では無いらしい。しかしあの様子だとかうかはしてられない。自分ももつとアプローチを仕掛けるべきだ。

(けど……)

ちらり、と本音を、正確にはその体の膨らみを見やる。

だぼだぼの制服を着ていても分かってしまう、その反則的な膨らみ。母性の象徴。あれはズルい。なんなのあれは!?

先日、買い物に行つた時もそうだ。水着を選ぶ中で、ふと気になつた。彼女のあの胸は実際どれ程なのか。まずは敵を知る事から戦いは始まる。そう思い、巧みに彼女を誘導し、サイズを実際に図る事に成功した。

その結果、シャルロットは地に両手を付くことになつてしまつたが。

だが、だがだ。静司が巨乳好きとは限らない。自分だつて無い訳では無い。だから大丈夫な筈だ。いや、大丈夫にするのだ!

新たに気合いを入れ直したシャルロットは、場を見やる。幸い自分の手札はどれも1以上のエースや2といった強カードばかり。まずはこの場で勝利を納め、自分への発破をかける!

「私の番だね。はい、イレブンバック」

「ええっ!」

(ふふふ、皆さん甘いですわね)

セシリアは一人ほくそ笑む。鈴は2組なので違うバス。箒とラウラは不参加。本音とシャルロットは静司狙い(多分)。よつて今一夏に一番近いのは自分だ。

ラウラは様子がおかしく、箒も本がどうのこうのと言つていたが、おそらく咄嗟に出してしまった嘘だろう。事実、先ほどからちらり、ちらりとこちらを見ている。

(甘い、甘いですわよ箒さん! 行き過ぎたツンデレは逆効果にしかならないと、先日本音さんにお借りした漫画にも書いてありましたわ!)

今はこの場を利用して少しでも一夏と距離を縮めるのだ。それに海。開放的な気分になる場所。ここで親密になれば、もしかしたら夜

の浜辺で二人きりで……そしてその後は……後は……!!

(ふふふふふ、セシリアはこの旅行で大人の階段を登って見せますわ
!)

まずは景気づけだ。本音がイレブンバックを使ったので、低いカードを出せばいい。ならばこれしかあるまい!

「3ですわ。これで私が親ですわね」

「ところがジョーカーなんだよ」

「どうなってますのこの采配!?!」

そして一夏。

(うーん、のほほんさん強いな。……しかし箒やラウラの様子がおかしいと思っただけどセシリアやシャルロットもなんか変だな。二人とも笑ったり真面目な顔になったり)

何かあったのだろうか? 自分で力になれることはなっぺやりた
いが、その為にはまず内容を聞かなきゃならない。しかし最近、静司
によく怒られるのだ。「もっと考えて発言しろ、と」

確かに以前の鈴との喧嘩も、結局有耶無耶になっぺはいたがどうや
ら自分の勘違いが原因だったらしい。今更詳しい内容は聞けないが、
確かに自分は気を付けるべきなのかもしれない。

(そうだな……少し様子見て、それでも駄目そうなら聞いてみよう)

そう決めると場を見やる。親になった本音が出したのは2。先ほ
どからの攻勢を見る限り勝ちに近いのだろう。だがそうはさせない
!

「甘いぜのほほんさん。もう一枚のジョーカーはここだ!」

「にひひ、そこで私はスペードの3」

「嘘だろっ!?!」

「一夏、お前どんなカードの配り方しやがった!?!」

「いくらなんでもおかしいよ!?!」

「どういうことなんですか一夏さん!?!」

「俺だっぺ不思議だよ!?!」

各々が流石に酷過ぎる采配に一夏に詰め寄る中、
「はい、これとこれのペアを出して、私の勝ち〜」
布仏本音、圧勝。

『……』

全員が唾然と見つめる中、全ての手札を出し切った本音が嬉しそうに笑っていた。

23. 始まる狂気

「全員整列！」

千冬の号令により、IS学年一学年の生徒が一瞬にして列を完成させる。それを確認すると千冬は再び口を開く。

「ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の皆様に迷惑をかけないように心掛ける事！」

『はい！ よろしくお願いします！』

返事を確認すると千冬も隣に居た着物姿の女将に礼をする。

「今年も世話になります」

「はい、こちらこそ。今年も皆さん元気があってよろしいですね」

「それが取り柄の子供ですので。……では、学園生は荷物を受領後、指定された部屋へ向かえ。以後の予定は事前に連絡したとおりだ、以上！」

生徒達がそれぞれ荷物を受け取り部屋へと向かう中、静司と一夏は千冬に呼ばれたのでそちらへ向かう。

「あら、こちらが？」

気づいた女将が千冬に尋ねる。

「はい。件の男二人です。能天気な顔をしているのが織斑一夏。嘘が上手そうな顔をしているのが川村静司です。今年はこの二人のせいで浴場分けが難しくなって申し訳ない」

「いやちよつと」

「いえいえ、そんな。良い男の子達じゃないですか」

「感じがするだけです。お前達、挨拶しろ」

静司と一夏の抗議は軽くスルーされた。納得がいかないながらも二人も女将に頭を下げる。

「別に能天気じゃない織斑一夏です。よろしくお願いします」

「能天気なルームメイトに苦勞している、正直者の川村静司です。よろしくお願いします」

「おい静司!？」

慌てて抗議する一夏を適当にあしらう静司を見て、女将は手を口に

当て上品に笑った。

「面白い子達ですわね。それにやんちゃそう」

「あまり褒めないで下さい。調子に乗りやすいのが一名いますので」

「ち、千冬姉！」

「一夏、抗議するって事は自分だつて言ってるようなもんだ」

「あ……」

しまった、と唾然としている一夏を余所に千冬はため息一つ。そんな様子を見ていた女将はくすり、と笑うと静司達を促した。

「では皆様もお部屋へどうぞ。何かご不明な点があればいつでもお尋ねくださいね」

最後の言葉は一夏と静司に言ったのだろう。基本的には女子生徒が使う事をメインに旅館側も準備しているので、一夏達が戸惑う場面もあるだろうという気遣いだ。

一夏と静司ももう一度礼を言うのと荷物を持って部屋へと向かう事にした。

「ところで俺達の部屋はどうなるんだ？ 一覧には載ってなかったよな」

「確かに載って無いが、まあなる様にしかないじゃないか？」

「え？」

静司の答えに一夏はおろか、未だに部屋に行かず周りで聞き耳を立てていた生徒達も首を捻る。実際の所、静司は警備の都合上どうなるかを知っているのでこう言えるのだが。そう考えるとなんだか一人だけズルをしている様な気分になるが今更の事だ。

「織斑と川村はこっちだ。着いてこい」

千冬に呼ばれ二人が連れてかれた先、その扉には『教員室』と書いていたプレートがついている。

「えつとこれは……？」

「元々はお前達二人で一部屋だったが、それだと就寝時間を過ぎても女子が押し掛けるのではという話になってな、織斑は私の部屋。川村は山田先生の部屋と同室となった。文句は無いな」

「そういう事か。静司と同じ部屋なら色々遊べると思っただけだな」

あ……」

「こればかりは仕方ないな。ま、ずっと部屋に居なきゃならないって訳でも無いんだ。我慢するしかない」

一夏とて通常で言うなら高校生。臨海学校や修学旅行の夜と言ったらやはり男同士で騒ぎたいという気持ちはあった。静司もそれは分かるので、軽く慰めてやる。

「……まあお前達とて女に囲まれっぱなしではストレスもたまるだろう。私達は教員会議もあるからその間にでもゆっくり話せばいい。幸い私の部屋なら女子もおいそれとは入れまい」

「成程！・流石千冬姉！」

ぺしん、と笑顔の一夏に出席簿が振り落とされる。

「織斑先生だ」

「痛つて……ありがとうございます織斑先生」

頭を押さえつつも礼を言う一夏に千冬はうむ、と頷く。

「ではお前達も荷物を部屋へ入れろ。山田先生も……山田先生？」
『？』

眉を潜めた千冬の視線を追って一夏と静司が視線を向ける。

「お、男同士でお話?! 二人きり?! ま、まさか二人が……? けどあんなに喜んでるなんて本当につ!」

赤くした顔を抑えながら妄想を垂れ流す教師がそこに居た。

花月荘は別館に更衣室があり、そこで着替えを済ませばそのまま海へ出れる造りとなっている。静司と一夏は近くで飛び交う女子達の黄色いガールズトークに頭を悩ませつつ、着替えを済ませ浜辺へと繰り出した。

「……静司、顔赤いぞ」

「……一夏、お前もな」

「……」

「熱いな」

「ああ、熱い」

二人はどこか遠くを見ながら頷きあう。この暑さは太陽と砂浜のせいだけでない。悪いのは女子達のはしゃいだ声や件のガールズトーク。更には7月の太陽に照らされる砂浜で戯れる女子、女子、女子。普段学園で見慣れているとはいえ、それは制服姿やISスーツの姿。スーツも中々に刺激的なのだが、それ以上に露出の高い水着だらけのこの光景は思春期の男には――素晴らしい。

「く、つい本音が……」

「せ、静司？」

淡々と自分の現状を分析していた静司だが最後の最後で本能が勝った。けど仕方ないじゃないか。いくらなんでもこれで我慢しろと言うのはキツイ。こんな訓練受けてない。

「そーいや静司、眼鏡はかけたままなの――いや、なんでも無いから急にそんな遠い眼をしないでくれ」

「察してくれてありがとう」

静司と一夏の恰好は二人ともトランクス型の水着。静司が黒で一夏が白だ。一夏は上半身も脱いでいるが、静司はシャツを着ており、眼鏡も着用している。

「眼鏡は良いとして、シャツなんか着てたら泳げないぞ？」

「とは言ってもあまり泳ぐ気は無かったからな。日に当たれば十分だよ。光合成だ光合成」

「光合成って……勿体ないか？」

とは言われても、あまり素肌を晒したくないのが実情だ。今回の為ナノスキンに人工皮膚である程度隠してはいるが、静司の素肌は傷だらけ。何かの拍子で破られでもしたら、周囲が大騒ぎになるに違いなかった。「折角だし泳ごうぜ。というか競争だ競争。マラソンじゃ勝てなかったが、泳ぎなら自信あるんだ」

「そうだな……」

隠したいのは山々だが、そうそう簡単に破れるものでも無い。いわばこれは保険なのだが、流星に何もしないのは不自然か？

静司も考え直し、一夏の挑戦を受けようとした時だった。

「い、ち、か~~~~~」

「ん……？ のおっ!？」

突然一夏が仰け反ったかと思うと、その一夏の上に鈴が肩車の要領で乗っかっていた。

「男二人で何グダグダしてんのよ！ 海よ海！ 泳ぎに行くわよ！」

「鈴か。泳ぐのは良いけど準備運動はしたのか？」

「必要ないわよ。私がおぼれた事なんて無いんだから。ほら行くわよ、GO！ 一夏監視塔！」

「おつとと、危ないな。そうだ、静司は」

「俺も後から行くよ。それより行ってやれ」

「そっか、じゃあ待ってるぞ」

「ほら行くわよ一夏！」

一夏が鈴を連れ海へ向かう。その途中で鈴は一瞬振り返り、びつと静司に親指を立てて笑った。静司も同じようにして返してやる。二人を見送ったそんな静司の背に声がかかる。

「二人きりにしてあげたんだね」

「ま、直ぐに他の面子も集まるだろうからな」

頷きつつ振り返ると、少々頬を膨らまたシャルロットが腰に手を当てていた。

「驚かせようとしたのに。気づいてたなら声をかけてくれてもよかつたんじやないかな？」

「今気づいたんだよ。だが悪か……った」

「静司?」

急に挙動不審になった静司にシャルロットが首を傾げる。静司は静司で最初はシャルロットの顔しか見てなかったが、その水着姿に眼を奪われていた。

黄色を基調としたビキニタイプ。傷一つない白い肌が映えるスラリとした体躯。もはや男装する事も無いので解放された胸は、普段のISスーツの上から見る時よりも大きく見える。

静司の視線に気づいたシャルロットが顔を赤くし俯いたが、絞り出すような声で静司に尋ねた。

「ど、どうかな……?」

「あ、ああ、似合ってるよ。うん、可愛いと、思う」

「可愛っ!?!」

かあつ、とシャルロットの顔が真っ赤になるが、静司からすればその格好で上目遣いは反則じゃなからうかと言いたい。だが本当によく似合っているのだ。

「あ、ありがとう静司。ふふ、嬉しいな」

「そ、そうか。……とここでさっきから気になってたんだが、後ろのその不審人物は何なんだ?」

気恥ずかしさを振り払う為話題を変える。それは確かに不信感丸出しの人物? だった。なにせ全身を何枚にも重ねたバスタオルで多いその身を隠しているのだ。

シャルロットも「ああ」と思い出したのかそのバスタオルの塊の手? を引いて連れてくる。

「ほら、おいでよラウラ」

「し、しかしだな」

「ラウラ? これが?」

確かに声はラウラの声だったが何故こんな奇天烈な格好を? その疑問にシャルロットが答える。

「せつかく水着に着替えたのに、恥ずかしがってこの調子なんだよ」

「や、やはり私には無理だっ!」

「そんなことないって言ってるのになあ」

どうやら水着を着たが良いが、人前に——というか一夏の前に行けなくなってしまうらしい。そういえばバスの中から様子がおかしかったがもしかして緊張していたのだろうか?

しかし恥ずかしがりながらもここまで来ていると言う事は、やはり一夏には会いたいのだろう。シャルロットが救いを求める様な視線を静司に向ける。静司も頷き、ラウラに話しかけた。

「ラウラ、行ってやればどうだ。大丈夫だからさ」

「その声は静司か。しかしやはり私には……」

「けど一夏に会いたいんだろう? 見てもらいたいんじゃないのか?」

「う、だが笑われたりしたら私はもう」

「安心しろ。一夏はそんな奴じゃないって事は知ってるだろ？ それにお前はもとは良いんだ。変なんて事は無いから自信を持って」

「ほ、本当か？ そうだ……ならまずお前に確認してもらえば。同じ男だしわかるだろう？」

余程不安なのだろう。だが静司は首を振った。

「いや、まずは一夏に見せてやれよ。折角おめかししたんだ。好きな男にまず見て貰った方がいいだろ？」

「う、うむ……」

「ほら、安心して行ってこい。早くいかないと一夏も泳ぎに行ってしまうぞ」

「わ、わかった。お前がそこまで言うなら信じよう。い、行ってくる！」

気合いを入れ直したラウラが一夏の居る方向へ歩いていく。静司はその後ろ姿をなんとも言えない気分で見送っていた。別に馬鹿にしているわけでは無い。だが一月前は狂犬の様だったラウラがそこまで変わるとは。

「青春だねえ」

「静司、ジジ臭いよ」

半眼でシャルロットに睨まれた。しかも何故か機嫌が悪そうでもある。

「はあ、折角同室になって仲良くなったのに、僕より静司の言葉を信じるんだもんなあ。ちよつと嫉妬しちゃうよ」

どうやら静司がラウラを説得したことに少々複雑な気分であるらしい。

「まあそこはあれだ。夕焼けで殴り合った敵同士が気がついたら仲良くなつた的な？」

「う、うーん？ わかるようなわからないような」

「仲が良くなる事は良い事だろ。それよりラウラに着いていった方が良い。また弱気になった時の牽引役が必要だ」

「そうだね。行ってくるよ。その後で静司も一緒に遊ぼうね！」

「おう」

返事をする嬉しそうに笑顔を浮かべシャルロットがラウラに駆け寄っていく。その先では一夏と鈴、それにいつの間にか合流していたセシリアが何やら揉めていたが何時もの事だろう、と特には気にしない。と、

「やつほー川村君」

「こんにちは」

今度は鏡ナギと谷本癒子に声をかけられた。二人とも既に水着姿でその手には色々と道具を持っている。二人はなにやら怪しい笑みを浮かべて静司に近寄ってきた。

「ふふふ、川村君。忘れちゃいけないかな？ 私たちの秘密兵器を」

「デュノアさんも綺麗だったけど、こつちも負けないよ？」

「鏡さん？ 谷本さん？ 何だその邪な笑みは」

嫌な予感を感じて後ずさるが、その距離は直ぐに詰められる。にやり、とナギが笑い静司に語りかける。

「ふふふ。ずばり秘密兵器とは私たちの癒しキャラ、本音の事よ！」

「本音はスタイルいいもんね」

「そ！ そして……胸よー！」

「!？」

一瞬、静司の体に衝撃が走る。そういえばそうだった。いつもぶかぶかの服を着ていて目立たないが、本音の胸は……デカイ。おそらくシャルロットより。

「ふふふ、想像したね？ ちよつと期待したね？ 川村君」

「意外にそういう所反応するよね」

うるさい。こちらと中々刺激的な人生送ってきて実年齢も不明な身だが20年は流石に生きてない。反応して何が悪い。というかそれが正常だ。

ぐつ、と握りこぶしを掲げる。

「夢があるんだ。オトコノコには」

「なんか本当に君変わったね。おおらかになったというか、単純になったというか」

「確かに」

何か酷い事を言われてる気がするが気にしない。だが以前より自分が自然体で居る事は確かだ。そしてその方が楽だと言う事も。

「ま、いいか。では登場願いまししょう。本音、カモン！」

「は〜い」

ナギに呼ばれ、別館から本音が現れる。その直前、正直静司はドキドキしていた。先ほどシャルロットの水着姿を見てしまったが故に、どうしても白い肌やそういった物を期待してしまう。そして振り返り、その眼にしたものを見て、静司の眼が見開いた。

予想以上だった。想像だに出来なかった。

「やつほ〜かわむ〜」

全身着ぐるみの黄色い狐が歩いてくる光景は。

耳まで付いている全身がすっぽり収まるキツネの着ぐるみが手を振ってやってくる光景は想像以上に斜め上だった。

「……」

何も言わずナギと癒子に振り返る。二人は腹を抱えて笑っていた。おそらく知っていたのだろう。知っていてからかったのだ。いたいけな少年の男心を弄んだのか!?

ど畜生ッ……!」

静司達が居る海岸から数キロ離れた山の中。ここは更識家が用意した場所であり、EXISTサポート班、C1達が海岸やその周りを監視している。

そしてその片隅、超望遠カメラの隣でC1は地面に拳を打ちつけていた。

「畜生！ 期待していたのに……! 畜生ッ！」

それを遠目に見やりながらC1の部下たちが呆れた様に話していた。

「まだやってますよ、あのロリコン」

「ほっとけほっとけ。それより周囲の監視だ」

「うお、すげえ！ あの嬢ちゃんあの着ぐるみで泳いでるぞ!？」
「え、マジで!？」

臨海学校は今のところは平和だった。

「あー生き返るなあ」

「確かにこれはいいな」

昼は海。夜は豪華な夕食を満喫した一夏と静司は露天風呂で寛いでいた。ようやく女子達の時間が終わり、男子の時間になったのだ。風呂好きの一夏は大いに喜び、静司もそれに同行した。

「やっぱ日本人は風呂だよな。うーん蘇る〜」

「ジジ臭いぞ一夏」

「うるせー。気持ちいいから良いんだよー」

ほっこりと風呂を満喫している一夏に静司もそういうものか、これ以上は追及しない。確かに風呂は良い物だ。

「そーいや学園の大浴場が解放された時も喜んでたな。シャルロットを誘おうとして結局断られてたが」

「あ、当たり前前だろ。というか知らなかったんだからしようがないじゃないか……」

一緒に風呂に入る事を嫌がるシャルロットと、男同士だから三人で行こうぜ！ な一夏。あの時のシャルロットの顔は必死だった。まあ当然だが。因みにその時は静司がやんわりと誤魔化して、シャルロットは事なきを得た。

「ま、俺はどう見ても男だろうから安心しろ。だけどあんまり興奮して誘うのは勘弁してくれ」

「……ああ、そうだな」

先ほどの夕食の席。一夏は興奮気味に静司にこう言ったのだ。

『静司、ここ露天風呂らしいぜ！ 俺達の時間になったらすぐ行こうな!』

これを聞いた女子数名の反応が酷かった。

『露天風呂……織斑君あんなにはしゃいで』

『俺達の時間……俺達の時間!』

『そして二人は仲睦まじく……キヤー♪』

と言った具合だ。因みにその話を聞いた箒以下数名は一夏に詰め寄り何やら揉めていた。静司は静司でシャルロットに浴衣の袖を引かれ、

『せ、静司は大丈夫だよな?』

と不安げな瞳で訊かれ、更には本音には、

『かわむー。えっちい本、会長に言えば借りれるよ?』

なんかとんでもない心配をされていた。勿論二人のその誤解は速攻で解いたが。一夏も懲りたのか今度から気を付ける、と領いた。

「しかし今日は随分と遊んだけど、明日からは訓練なんだよなあ。I Sの各種装備試験運用とそのデータ取りだっけか。具体的には何やるんだ?」

「訓練機は学園に保管されている装備の使用方法の確認だな。今後模擬戦の数も増えるだろうから、自分に合った装備を選ぶためもある。専用機持ちはそれぞれ専用のパーツや装備があるからその運用だよ。来る前に習っただろ?」

「いや、そうなんだけどさ。俺の白式の場合、武器が《雪片式型》だけだろ? だからどうするんだ?」

一夏の白式は拡張領域^{パススロット}を全て《雪片式型》で埋めている。故に後付け装備は出来ないのだ。

「そうだな……。だったらより効率のいい運用方法の模索とかそんな感じじゃないのか? その辺りは織斑先生が考えてると思うが」

「明日にならなきやわからない、か。まあ仕方ないよな。所で静司はどうなるんだ? やっぱ会社から色々送られてくるのか?」

「らしいな。とは言っても俺のは訓練機だから大したものじゃないさ。その分、シャルロットの方に色々しわ寄せ行きそうだが」

静司のK・アドヴァンス社とシャルロットのデユノア社がI Sの共同開発を宣言してから少し。時折、シャルロットの元に新しい装備のデータ等が送られている。搭乗者の意見を反映する為だ。

「成程なあ。しかしやっぱ白式にも射撃武器が欲しいよ。そりゃ、い

きなり使いこなせるとは思わないけどやっぱりあると無いとじゃ大違いだろ?」

眩きながら己の手を握る一夏。その眼には強さへの渴望が。向上心が見える。

「それは強くなりたいからか?」

「当たり前だろ。俺は強くなりたい。それで俺の周りの人を守りたい。まだ守られるばかりのガキだけどさ、いつかは俺が守ってやりたいんだ」

それはとてつもない夢だろう。何せ彼の周りには彼より強い人間が多くいる。実の姉を筆頭に担任や代表候補生達。それは分らない一夏では無い。それでも守りたいと言う。

「なあ一夏。お前は何でそんなに守りたいと思うんだ?」

一夏の人生も大よそ普通ではないかもしれない。親に捨てられ、姉に育てられ、誘拐もされかけた。そして男でISを動かせることで学園入学し、トラブルもあった。そこで一夏は自分の身の丈を知った筈だ。それなのに上を目指し続ける。その心の内がが気になった。

「そうだな……やっぱ守られてばかりなのは悔しい、つてのもある。だけどさ、それ以上に俺は、俺の為に頑張ってくれた人たちが大切なんだよ。その大切な人たちが悲しまない様に、今度は俺が守ってやりたいんだ。だからこそ強くなりたい。結局は自分の為かもしれないけどさ」

ちよつと恥ずかしそうに頭を掻きながら話す内容は一夏の本心だろう。彼は彼と、その周りの人たちの為に強くなりたいのだ。そんな一夏の姿がどこか眩しく感じ、それを誤魔化すように静司は湯口から出たばかりの熱湯を一夏にかけた。

「熱っ!? いきなり何するんだよ!」

「一人でカツコイイこと言ってるなよ。俺は口説かれないぞ」

「静司が訊いてきたんだろ! このやろっ!」
「うおっ!」

お返しとばかりに一夏が同じように熱湯をかけてくるが静司はギリギリで回避した。悔しそうに一夏が眩く。

「相変わらず避けるの上手いな……」

「何時も言ってるだろ。それが取り柄だつて」

そのまま数秒睨み合うが先に折れたのは一夏だった。はあ、とため息を付くと湯船につかり直す。

「そういう静司はどうなんだ?」

「ん?」

「強くなる理由。何もないとかいうなよ?」

興味深げに一夏が問う。

「そうだな……。やっぱり俺も一夏に似てるよ。大切な人を守れる力が自分にあれば、って思う。もしもの時、後悔しない力が」

本当に同じだ。自分も守られ、そして守れなかった。そして今も課長達に守られている。何よりこんな自分を育ててくれた人たちに恩返しをしたい。それが理由。

「そうか。なら俺達は同じだな。お互い頑張ろうぜ」

「ああ、そうだな。とりあえず一夏はまず座学からだ」

「うっ……」

気まづげに視線を逸らす一夏に苦笑する。入学してから大分経ち、大分マシにはなったとはいえ、まだまだ足りてないのが現状である。

「そっちはおいおいで……。あ、そういえばセシリアが部屋に来るんだつた」

「オルコットが? なんだイケナイ事でも始めるのか」

「違うよ馬鹿。マッサージしてやる約束なんだ。俺は先に上がるぜ。静司はどうするんだ?」

「俺はもう少し浸かってるよ。それより約束したらなら早く行ってやれ。オルコットの事だから凄じい楽しみにしてるだろうよ」

「……? まあいいや、じゃあお先」

上がっていた一夏を手をひらひらとふり見送る。宿の中なら早々危険は無いだろう。警備状況は事前にチェック済みだ。四六時中一緒に居ては本当に変な理由がたつてしまう。

かほん、とどこかで音が響く。一人残された露天風呂で静司は空を見上げて考える。

「強くなる理由か……」

一夏に言った事は本心だ。だが全てでは無い。

確かに守りたいという気持ちはある。それは仲間達であり、そして学園の友人たちでもある。だがその力の源泉。一番最初に抱いた思いは——違う。

無機質な部屋。繰り返される訓練。頭に直接叩きこまれる知識。燃える炎。砕かれた天井。散乱する瓦礫。失った左腕。横たわる亡骸——

強くならなければならなかった。生きるためには生き残るだけの力が必要だったから。

一緒に居たかった。一緒に居るために苦しみながらも強さを求めた。

けれど失った。

あの時、あの場所で感じた感情。それがきつと今の自分の源。時間と綺麗な言葉で隠された己の醜い感情。

幸せを願ってくれた姉達の言葉を忘れた訳では無い。それは今でも胸に残っている。だがこの感情だけは消すことは出来なかった。

「俺はきつと……復讐を望んでるんだよ、一夏。俺の力の源泉は——恨みだ」

自嘲気味に呟くと、静司も湯船から上がっていった。

花月荘の露天風呂は元々は男と女に分かれている。毎年I S学園が使用する際は全員が女子なのでその両方が解放されるのだが、今年は男子が二名居る為、一時的に片方だけしか使えない時間があった。逆に言うならば、本来の女子風呂は使えるのである。

そしてその女子の露天風呂に二人の少女が浸かっている。本音とシャルロットだ。彼女達はここ最近、静司を通じて話す事が増えかなり仲が良くなっていた。二人は男子と女子を遮る大きな檜の壁の近くで静かに座っていた。

「静司はもう出たっばいね」

「……うん」

二人の声は暗い。彼女達は偶然にも一夏の静司の話を壁越しに聞いてしまったのだ。そして静司の眩きも。

復讐、と静司は言った。それに恨みとも。それはとても穏やかな言葉では無い。だが彼女達には静司が何故そういったのか分からない。それが悲しく、そして悔しい。

静司は最近明るくなった。いや、元々の性格なのだが自分から踏み込んでくるようになった。それは良い事だと思う。だが、そんな静司から発せられた言葉だけにシヨックも大きかった。

「静司に一体、何があっただらう」

シャルロットが眩くが、本音も首を横に振る。彼女も知らないのだ。だが静司の仕事やあの左腕の事を考えると、とても明るい話とは思えない。

逆に事情を知らないシャルロットは全く予想がつかない分、余計に不安になってしまう。だがきつと静司は聞いても話さないだらう。自分から言ってくる日を待つしかない。

「ねえ、本音」

「なあに、しゃるるん」

「本音は静司の事を——」

続く言葉。そしてその返事は突如開いた扉の音でかき消された。

「あ、デュノアさんと布仏さんだ！」

「おおー二人ともええ乳してるねー！」

がやがやと入ってきたのは同じクラスの女子達だ。騒がしい彼女達に笑顔で答えつつ二人は顔を合わせ、笑う。

「——僕達も、静司を支えてあげないとね」

「うん！」

何があつたのかは分からない。だけど自分たちは静司の味方だ。だからもし、話してくれる時があれば、そして彼が挫けそうなきは支えてあげよう。何よりも自分たちがそれを望んでいるのだから。二人はもう一度頷きあうとクラスメイト達を出迎えた。

ハワイ。アメリカ軍空軍基地 I S 格納庫。そこは明日に迫ったアメリカ・イスラエル共同開発の第三代 I S シルバリオ・ゴスベル【銀の福音】の稼働実験に向けた最後の準備が行われていた。その主役たる福音の前では鮮やかな金髪が映える二十歳程の女性がその機体を見上げていた。

「明日はよろしくね」

その顔には不安は無く、期待と好奇心に満ちている。そんな彼女に声がかかる。

「君がこの子の操縦者？」

「ええ。あなたは？」

声をかけたのはサンングラスをかけた長身の黒人女性だ。彼女は笑うと金髪の女性に手を差し出した。

「明日福音と一緒に跳ぶイーグル型の操縦者、リンダ・フォーラニ。よろしくね」

「ナターシャ・ファイルスよ。こちらこそよろしく。イーグル型っていうのはあの？」

握手をしたナターシャが視線を向けた先には4機の I S が鎮座している。大型スラスターを装備した高速使用の I S だ。

「そうだよ。福音は機動に特化してるって話でしょ？ だから私たちが選ばれたんだ。私達なら追いつけるからね」

「あら、そうかしら？　じゃあ振り切っちゃおうかしら」

「お、言うね。その意気やよし！　飲みに行こう！」

「いきなりね。けど残念ながら今日は飲酒を禁止されてるのよ。ごめんなさい」

「あーそういうや私もそうだった。なら君の話聞かせてよ。それだけでも楽しそうだ」

人懐っこい笑みを浮かべるリンダにナターシャも笑顔で答える。

「OK。もう少しで終わるからしたらラウンジで」

「よっし、なら私の隊の連中にも声をかけて——あ、このやろー！」

突然リンダがイーグル型に走っていく。機体の前まで行くと何かを探しているようだった。それが気になりナターシャはリンダに近

づく。

「どうしたの？」

「いや、なんかネズミみたいのか私の機体に乗っかっててき。どこかに逃げられちゃったけどさ」

「ネズミ？」

「そ。いや、ありやリスかな？ はつきり見えなかったから何とも言えないけど」

そのまま少し周囲を見渡すがそれらしいものは見当たらなかった。リンダも諦めた様に肩を竦める。

「ま、見つからないなら仕方ないか。整備師に伝えておくか。じゃあナターシャも早く終わらせて来てね！」

「ええ、楽しみにしてるわ」

ナターシャも笑顔で答え、二人はその場を分かれた。

翌日。ハワイ沖

「視界良好。現状問題なし、と。良い風ね」

銀の福音の中でナターシャは微笑む。そんなナターシャに通信が入った。

『よう、調子はどう？』

「良好よ。これならすぐ高機動実験に移れるわ」

福音の直ぐ傍で4機のISが宙に浮いている。4機とも大型スラストアーを搭載した高機動型であり、そのフォルムは流線型の鳥の様でもある。

『それは良いね。じゃあお偉いさんからの指示が来たら鬼ごっここと行こうか』

「ふふ。振り切って見せるわよ」

お互いリラックスした調子で話していると、本部から指示が通達された。その指示通りに簡単な動作の確認や機器の調整を行っていく。

それが一通り終わり遂に高機動試験に入った時だった。

「え？」

一瞬、視界がブラックアウトした。直ぐに復旧したがどこか調子がおかしい気がする。

『どうしたの?』

「ちよつとハイパーセンサーの調子がおかしいみたい。今原因を――」

言葉は最後まで続かなかった。突如視界に幾つものウインドウが浮かび上がりは消えていく。ステータスマニターが赤に、青に交互に染まっては読み切れないほどの多くのメッセージが流れていく。明らかに異常事態。

「ちよつと、何これは……!? 何があったの!?!」

ナターシャが機体に問うが答えは無い。そしてそのナターシャの視界の端に、更に異様な物が映った。

『なんなんだこれ!! やめろ……うわあああああ!!』

「リンダ!?!」

リンダの乗るイーグル型。それがもがき苦しむような動きをし、その操縦者であるリンダの悲鳴が通信越しに響く。それは他の3機も同様だ。

「本部、緊急事態発生! 銀の福音とイーグル型に異常――ひっ!?!」

突如視界が完全に黒に染まる。そしてその暗闇の中から何か、得体のしれないものが手を伸ばしてくるような、異様な感覚に襲われる。

「いや……やめて……」

抗いは通じない。その暗闇がナターシャの頬に触れた瞬間、ナターシャの意識は途絶えた。

24. 対立

臨海学校二日目。生徒達はIS試験用のビーチに整列していた。今日は一日かけてISの各種装備の試験運用とデータ取りが行われる。その為ビーチには大量の機材と装備が並べられていた。

そんな中、千冬が目の前に立つラウラに厳しい目を向ける。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ、お前が遅刻するとはな」

「も、申し訳ありません！」

ダラダラと冷や汗を流しながら返事をするのはラウラ。珍しく遅刻した彼女の顔は青ざめている。おそらくドイツでの教官時代の記憶が蘇っているのだろう。

「昨日あの後何かあったのか？」

「いや、俺も知らないぜ。普通に寝坊じゃないか？」

「その男子二人！ 無駄口とはいい度胸だな」

しまった、と静司と一夏が苦い顔をする。千冬は二人を睨みつけ口を開く。

「ボーデヴィツヒにやらせようかと思ったが気が変わった。織斑と川村！ コアネットワークについて説明して見せろ」

うげ、と一夏の顔が引き攣る。

「静司、どうしようか……」

「説明できない事は無いが、俺一人でやったら確実に怒られるだろ。とりあえずメインは一夏で俺が補足する形で」

「了解、助かる。えっと——」

たどたどしくも一夏が説明を始める。ISのコアはそれぞれが相互情報交換の為にデータ通信ネットワークを持っている事。元々は広大な宇宙空間で相互位置情報交換の為に設けられたものだという事。通常のオープンチャンネルと操縦者同士のプライベートチャンネルの存在。そしてコア同士が非限定情報共有を行う事で情報を自己進化の糧としている事。それらを静司の補足を交えて説明していく。

「ならばボーデヴィツヒ、この自己進化についての現在の認識を説明

しろ」

「はい。これらは製作者の篠ノ之博士が自己発達の一環として無制限展開を許可している為、現在も進化を続けており全容は掴めておりません」

「ふむ、いいだろう。遅刻と無駄口の件はこれで許してやる。以後気を付けるように」

千冬の言葉にラウラが胸をなでおろす。余程恐ろしかったらしい。

「よし、では各班ごとに振り分けられた装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、行動開始！」

はい、と返事をし、生徒達は行動を開始した。試験用ビーチは広く、学園のアリーナほど。海以外は切り立った崖に囲まれており、ちよつとした秘密基地の様な印象を持つ。そこに各班ごとに分かれた生徒達が装備の元へ向かっていく。

「そういえばかわむーはどうするの?」

静司は専用機は持っていないが企業に所属している。そしてK・アドヴァンス社からも試験装備は届いているのだ。その場合専用機持ちと同じく班に入らず別行動になるのではないかと思っただろう。「送られてきたのは全部量産機用の装備だったからな。データ取りの為に色んな人を使って欲しいからって訳で学園の装備と一緒に各班に割り振ってもらってる」

「へえ、つまりモニターって訳ね」

二人の話が聞こえた鈴がやってくる。彼女は専用機なので独自の装備がある筈だがこちらにも興味を持っている様だった。

「ねえ、それってある程度汎用性あるのよね? 私も借りていい?」

「別に良いと思うけどいいのか? そっちは国から装備が来てるんだろ?」

「そうなんだけどねー。なんかウチの担当者が『K・アドヴァンスの装備も良く見ておけ』って言うからさ。それに私も気になるし。だって

『日本の企業でイカれた物ばかり作る会社がある』私も話は聞いた事がある」

続いてやって来たのはラウラだ。彼女も気になるらしい。

「学園では既存の装備しか使っていなかったからな。K・アドヴァンス社製の物はカタログでしか見た事が無いが、中々に奇抜だった記憶がある」

「奇抜で。まあ否定はしないが」

「え？ 静司の所の会社ってそんなに変なのか？」

白式を展開しふわふわと機材を運んでいた一夏もこちらへとやってきた。一夏は新装備が無いので《雪片式型》の運用効率化が課題となっていた。その為一人だけ違う機材を運んでいる最中だったらしい。

「変かどうかと言えば間違いなく変だろうが……。まあその辺りはシャルロットの反応を見てみるといい」

え？ と全員が振り向いた先。ここではラファール・リヴァイヴⅡに搭乗したシャルロットが目の中のコンテナから現れたモノに顔を引き攣らせていた所だった。

シャルロットのコンテナ。そこから出てきたのはデユノア社から送られた新装備《ガーデン・カーテン》。リヴァイヴ専用装備であるこれは、実体シールドとエネルギーシールドの両方を持つ防御特化装備だ。これ自体は別に良い。だが、その背後から出てきた装備が異様だった。

それは鋼鉄の円錐形。先端から下に向かうにつれ、螺旋の紋様を描きつつ太くなっていく破壊の化身——ドリル。しかもその直径はシャルロットより大きく、圧倒的な威圧感をまき散らしていた。

「な……なにコレ？」

頬に汗をかきつつ呻くシャルロットの言葉にビーチの生徒達が同意する。その端で静司は頭を抱えていた。あの連中、本当に作りやがったのか。

「……シャルロット、ちょっとスペックデータ見せてくれ」

「う、うん」

データを確認してみた所、少々安心した。流石に以前送られてきたあの殺人ドリルから大分スペックダウンされている。というかそも

そもあんなもの黒翼以外で運用出来ない気もしたが。

「わぁーお、ドリルだねしやるん。さっそく装備しよ〜」

「え、えつと心の準備が。というか本音は何でそんなに目をキラキラさせてるのかな……?」

「だってドリルだもん〜」

何やら目を輝かせた本音に引つ張られていくシャルロット。顔を引き曇らせながらも連れて行かれる彼女を生暖かい目で見守っていた静司だが、その肩に手が置かれる。振り返ると面白そうに笑う千冬の顔。

「川村。お前の分のドリルもあるらしい」

「……ですよね」

シャルロットのコンテナの奥からは『静司専用』と無造作に張り紙までされたもう一機のドリルが鎮座していた。

静司とシャルロットがドリルに圧倒されつつもその準備を始めた中、一夏は一人悩んでいた。自分に与えられた課題は《雪片式型》の効率アップ。一人だけ課題が違うのは白式の特性格仕方ないと諦めるしかないが、周りで他の生徒達が色々な装備を試している姿を見ると少々羨ましい。

「無い物ねだりは仕方ないよな」

そう自分に納得させる。それにまずはこの《雪片式型》だ。エネルギー効率の悪いこの武器をまず使いこなすことが重要だろう。しかし効率化と言えど何をすればいいのか。姉に聞いてみようと思いきその姿を探す。千冬は少し離れた位置で時計を気にしている様だった。

「ちふ……じゃなくて織斑せん——」

ふと、何か音が聞こえた。まるで海面を叩き付けた時の様な打撃音が連続的に聞こえてくるのだ。その音は次第に大きくなっていき、更にはそこに女の声が追加される。

「ちーちや~~~~~~~~~~~~!!」

ぎばばばば……!

と水煙を上げながら何かが近づいてくる。

よく見るとその人影が海面をありえない速度で走っていた。いや、実際は飛んでいるのかもしれないがその人物は一步一步を明らかに踏み出し、海面を蹴る様に走りながら近づいてきている様に見える。おそらくISか何かを使用しているのだろう。そして一夏にはその人物に見覚えがあった。

「ちーちやく~~~~~~~~ん!!　とうっ!」

砂浜までたどり着いたその人物はまるで飛魚の様に宙を飛び千冬に飛びつこうとして、

「……束」

「ぶへっ!」

どこか疲れた様な声の千冬の片手の一閃により、砂浜に叩き付けられた。

気まずい沈黙。しかし叩き付けられたその人物——束は気にする事も無くびよん、と満面の笑顔で起きあがる。

「いやー久々だねちーちゃん!　会いたかった?　私は何時でもちーちゃんラブだよ!　ぶいぶいつ!」

ぞわっ

「!?!」

ふと、一夏の背筋に寒気が走る。日差しに照らされ熱くなっていた体が急に凍えるような感覚。足が震え、歯がかみ合わずカチカチと音を鳴らす。この感情はなんだ?　いや、分かっている。分かっているが何故?　何故自分はこんなにも……恐怖しているのだろうか?

その恐怖がどこからきているのかが分からない。その対象を探すように周囲に眼を向けるがまったく分からない。それに先ほどの恐怖も気が付けば霧散していた。だが、あれが気のせいだったとは到底思えない。

「なんなんだよ一体……」

言い知れない不安感。それを居心地悪く感じながら一夏は首を捻るのだった。

一夏の後方。少し離れた砂浜で静司は千冬達のやり取りを睨んでいた。その眼に宿るのは驚きや好奇心では無い。今にも銃を向けそうな明確な敵意がそこにある。実際その腕は黒翼を起動するべく持ち上がりかけていた。しかし今、その左腕は少女の手によって押さえられている。

「かわむー、ダメ」

静司の左腕を抑えているのは本音だった

束がビーチに現れ言葉発した時の事だ。束の姿を、そして声を確認した瞬間、静司は明確な殺意をもって黒翼を起動しようとした。もはや任務や立場なども考えず。その殺気を隠そうともせず。

しかしそれを止めたのが本音だった。彼女は静司の異変に真っ先に気づき、そしてその左腕を隠すように抱き着きそれを止めた。行動を阻害された静司が彼女を睨むが、決して譲らず首を横に振った。そのまま少しの間、静司は本音を睨んでいたが不意に視線を逸らすと千冬たちに眼を向けたのだ。

前方、少し離れた辺りでは篠ノ之束を中心に顔見知り同士がじゃれ合いをしている様に見えた。それを厳しい目で睨みながらも静司は口を開く。

「すまなかった、本音。もう大丈夫だ」

「……うん」

左腕を掴んでいた力が弱まるが離れる事はなかった。静司もあえて何も言わず考える。

全く情けない限りだった。振り切ったと思っていた。無人機を相手にした時も冷静であれし、博士が自分に興味を持ったと知った時もまだ考える余裕はあった。しかしその姿を、その声を目の当たりにした時、全てを忘れ博士に銃口を向けようとした。そんな自分の精神の未熟さが情けない。結局自分は対して成長していないのだ。bladeでだけでなく川村静司でもある。そう考えられるようになって、結局がこの事に関してはずっと変化が無い。もし本音が止めていなかったらどうなっていたか。少し頭が冷えた今ならわかる。

静司の殺気に気づいたのは近くにいた本音と一夏だけだった。他の生徒は一瞬気にするような仕草をしたがそれだけ。逆に一夏は大きく反応していた。学園に入学してから無人機の襲来やラウラとの戦いもあり、彼は専用機持ちを除いた他の一年よりもそういう感覚が鍛えられている。それ故だろう。千冬や真耶などもそういう感覚には鋭いが、距離があつた為か気づかなかつたらしい。

「束、自己紹介くらいしろ。うちの生徒達が困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

静司たちが見つめる中、束が千冬達に向けるものとは全く違う興味の無い顔で適当に挨拶を済ませる。生徒達は稀代の天才である篠ノ之束の先ほどの立ち振る舞いに唖然としている様だった。真耶もそれは同じだったが、教師としての矜持か束に声をかける。

「あ、あのこの合宿では関係者以外は……」

「ん？ 珍妙奇天烈な事を言うね。ISの開発者であるこの束さんこそ、最も関係している人物だよ」

「し、しかし……」

「山田先生。こいつに何を言っても無駄です。無視して構いません。それより動きが止まっている生徒達のサポートをお願いします」

「むー、ちーちゃんが優しいぞ。さてはこのおっぱい魔人め、ちーちゃんを誑かしたな〜！」

「へ？ わ、わわわやめてください〜」

言うなり真耶に跳びかかりその胸を掴む束。真耶は涙目で抗議するが、元々の性格故が強く出れないらしい。千冬は疲れた様に嘆息すると、真耶に組み付いている束を蹴り飛ばした。中々の勢いで砂浜に叩き付けられた束だが、やはり何事も無かつたかのように起きあがる。

「いい加減にしろ。話が進まん」

「えへへ、ちーちゃんに怒られちゃった〜。けどちーちゃんの希望なら仕方ないね。では、お見せしよう！ 大空をご覧あれ〜！」

束がびつ、と空を指さす。それとほぼ同時、突然空から鉄の塊が砂浜に落ちてきた。ずずん、と鈍い音と砂をまき散らして落下してきた

のはコンテナの様に見える。そしてそのコンテナの正面が開き中からそれは現れた。

「あれはISか？」

「けど見たことないよ」

動作アームによって外に運び出されたそれは確かにISだ。真紅の装甲と所々の白が眩しく輝く謎の機体。

「じゃじゃーん！　これが箒ちゃん専用機。現行ISのスペックを全て上回る束さんの愛の結晶！【紅椿】だよ！」

「何……？」

現行IS全てを上回る、博士特製のIS。それはつまり世界中の科学者に限らず、組織や国。軍でさえ喉から手が出る程欲しがるほどの機体と言う事だ。それを妹に渡す。その意味を篠ノ之束は理解しているのか？　静司の中に嫌な予感が過る。そんな静司の胸中は知らずに束は準備を続けていた。

「さあさあさあ箒ちゃん！　早速準備を始めよう。その前に大きくなったその姿で束さんに抱き着いてくれてもいいかな！　へいかもーん！」

「はやく、はじめましょう」

硬い声で箒が促す。束がISを開発したことから篠ノ之家は大きな生活の変化を余儀なくされた。重要人物保護プログラムで各地を転々とし、一夏とも離れ離れにもされた。そういった経緯がある為か、彼女の姉に対する態度は硬い。

紅椿の装甲が開きそこに箒が搭乗する。束は空中投影の画面を呼び出すと高速でコンソールを叩き、フィッティングとパーソナライズを進めていく。

「あの専用機って篠ノ之さんが貰えるの……？　身内ってだけで」

「だよね。ちよつとズルくない？」

生徒達の中から戸惑いや疑問の声上がる。それにまっさきに反応したのは束だった。

「おやおや、何を的外れな事を。有史以来世界が平等であったことなどないよ……」

指摘を受けた生徒達が気まずそうに顔を逸らす。束はそんな事を気にせずに作業をどんどんと進めていく。良い見方をすれば、妹への批判に対して真つ向から否定した状況だ。しかし、静司からすれば束の言葉は彼女自身にも言える事だと思う。

（平等でないか。ならばお前の妹はそのISのせいで特別に狙われやすくなった。その事に気づいているのか。それともそんなものどうってことないと考えているのか？）

紅椿が箒の専用機となる以上、彼女の身を狙う人間は必ず現れる。今までも博士の妹という人質にされやすい立場であったのにだ。自衛の為、と考えてもどう考えてもやり過ぎだ。

「ちよちよちのほいほいそれそれと。はい、フィッティング終了。超早いね。流石私。後は自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるよ。それといつくくん、白式見せてくれないかな？」

「え？ 良いですけど」

一夏が白式を呼び出すと束はその装甲にケーブルを差し、ディスプレイを見つめる。

「ん〜、不思議なフラグメントマップだねえ。見たことないパターンなのはいつくくんが男の子だからかな。これは私も予想外——」

「束さん。その事んですけど、何で男の俺や静司がISを使えるんですか？」

「ん？ それは——おつとと、いけないいけない。それでISを使える理由なんだけど私にも分からないんだよねえ。自己成長するように作ったからそのせいだとは思うんだけどね。ナノ単位まで分解して解剖させてくれればわかるかも。いい？」

「いい訳ないでしょう……」

「にやはは。そう言うと思ったよ。……そうだ。もう一人いるからそつちを分解しよう。そつちならどうでもいいや」

笑顔のまま束が静司に視線を向ける。しかしその眼には友好的な印象は皆無。まるで物を見るかのような目だ。その眼を見た瞬間再び静司の中で黒い感情が湧きあがりかけるが、腕を掴む本音の力が強くなる。そのおかげか、先ほどの様な殺気は出さずに済んだ。自らも

意識を落ち着かせ、無表情で返答する。

「必要ありません。お断りです」

「ふーん」

束も特に気にする事も無く作業に戻った。その二人の異様な雰囲気、一夏や千冬。そして箒も疑問を感じている様だが、静司は答えるつもりは無い。

「た、たたたた、大変です！ 織斑先生！」

その妙な雰囲気のを破ったのは真耶の叫び声だった。小型端末を持ちながら、慌てた様に千冬に駆け寄るその姿は尋常では無い。

「どうしました？」

「こ、これをー！」

真耶が千冬に小型端末を見せる。その画面を見た千冬の様子が曇る。そのまま二、三、真耶と話をすると生徒達に向き直った。

「全員注目！ これよりIS学園は特殊任務行動に移る。今日の試験稼働は全て中止、各班速やかに機材を片付け部屋へと戻れ！ 以後、許可なく部屋を出た物は身柄を拘束する！ 急げ！」

『は、はい！』

状況についていけない生徒達だが、千冬の普段嬢の剣幕に怯えたのか迅速に片づけをしていく。それを確認すると千冬が一夏達に眼を向けた。

「専用機持ちは集合しろ！ 織斑、凰、オルコット、ボーデヴィツヒ、デユノア！ それと——篠ノ之と川村もだ！」

専用機持ちとなった箒。そして何故か専用機では無い静司も呼ばれる。妙に気合いの入った箒の返事に、静司はどこか不安を覚えた。

『ハワイ沖で試験稼働を行っていたアメリカ・イスラエル共同開発の新型ISとイーグル型4機が暴走。追撃に出た機体は全て撃墜。他の付近の部隊もその場所からでは対象に追いつけない為、IS委員会の決定によりIS学園に対処の要請が下った』

「……先ほどから連絡が遅いぞC5」

『いきなり海中から出てきたり突然レーダーに現れるような博士だぞ。これ以上どうしろってんだ。それより暴走ISの件だ。おそらくだが専用機が対処にあたる筈だ。そうなる前にこちらで片づけたい。その場から離脱できそうか』

「今すぐは無理だ。隙を見て離脱する」

『了解。こちらでも情報を集めて置く』

C5との通信を切ると、静司は宴会用の大座敷部屋へと向かった。あれから一般生徒全員部屋へ移動。専用機持ちや静司も着替えが出来次第集合となっていた。その少しの間に静司はC5達と連絡を取り大体の事情を確認していたのだ。幸い廊下には生徒達の姿は無く、教師陣も対応に追われている為人気が無く、すこし奥まった場所へ行けば人目につかなかったので丁度良かった。

「失礼します」

大座敷部屋に入ると既に静司以外は全員集合していた様だ。専用機持ちと教師陣が勢ぞろいしたその部屋には大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「遅いぞ。緊急と言った筈だ」

「申し訳ありません」

謝罪しつつ空いていたシャルロットの隣に座ると千冬が説明を開始した。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働を行っていたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代の軍用IS【シルバリオ・ゴスベル銀の福音】とアメリカ軍のイーグル型4機が制御化を離れ暴走。追撃機を撃墜及び振り切り監視空域から離脱した」

千冬の語る内容に一夏の肩が震えたのが見えた。代表候補生達はどういった事態の訓練を積んでいるが、一夏はあくまで一般人だ。動揺するのも無理が無い。

「その後の追跡の結果、福音が時間にして五十分後ここから5キロ先を通過する事が分かった。この事態に対し、学園上層部からの通達により我々がこの事態に対処することになった。教員は付近の海域の封鎖を行う。その為に、専用機持ちにこの事態にあたって貰う。これ

は銀の福音と教員の使う量産型ISでは性能差が激しい為だ。ここまでで質問は？」

手を挙げたのはシャルロットだ。彼女もまた、険しい顔をしている。

「暴走したのは銀の福音の他にも4機あると言いましたが、その4機については？」

「不明だ。この4機はどれだけ探しても見つからない。当然、この4機に対しても警戒しなければならない」

「それでも銀の福音を優先すると言う事は、その機体が相当危ない物だと言う事ですわね。目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。但しこれは最重要軍事機密だ。決して口外するな。情報漏えいがあった場合、この場に居る全員が査問委員会にかけられ最低でも二年間の監視が付けられる」

全員が頷くのを確認するとディスプレイにデータが映る。銀の福音。広域殲滅を目的とした特殊射撃型IS。攻撃と機動に特化しており、最高速度は450キロを超える。格闘能力は未知数。

明かされたデータを元に教師と専用機持ち達が相談を始める。しかし何分データが少なく、行き詰ってしまう。

静司もまた、データを確認しながら考える。黒翼なら追いつくことは可能だ。後は広域殲滅武装をいかに掻い潜り敵を倒すか。この会議が終わり次第、何としてでも理由を付けて出撃するつもりでいた。何せこのISの特性を考えるなら、専用機を用いても接敵は一回が限界。ならばその一回に一撃必殺の攻撃を叩きこまなければならない。そしてそれが出来るのは――

「ちよ、ちよと待ってくれ！俺が行くのか!？」

当然一夏しかない。静司としては何としてでも避けたい事だが、対案が黒翼しか無い以上、言える事は無い。そもそも学園に、それも男性操縦者にこの事態に当らせること事態、委員会や学園の本意ではない筈だ。しかし状況がそれを許さない。こうなれば自分が一夏達より早く、遅くとも一夏達に何か起きる前に敵を落す必要がある。

「織斑、これは訓練では無い。実戦だ。もし覚悟が無いのなら、無理強いはしない」

一夏は慌てた様だったが、千冬の言葉で覚悟を決めたのだろう。その眼に闘志が宿る。

「やります。俺にやらせてください」

「よし、それでは具体的な内容に入る。意見がある者は直ぐに伝えてほしい。川村、お前もだ」

「了解しました」

どうやら千冬はその為に静司を呼んだらしい。静司は専用機こそ表向きは無い事になっているが、実力はある。それを買っての事だろう。

「この中で最高速度を出せる機体は誰だ？」

「それなら私のブルー・デИАーズが。強襲用高機動パッケージ《ストライク・ガンナー》が届いております。これには超高感度ハイパーセンサーもあります」

パッケージ。つまるところ、ISの換装装備の事だ。

「超音速下の戦闘訓練は？」

「20時間ですわ」

セシリアの回答に皆が頷く。これ以上の適任は無いだろう。

「よしならばオルコットが織斑をポイントまで連れて行き、織斑の《零落白夜》で目標を落とす。福音に関してはそれで良い。後はイーグル型だが——」

「ちよーと待ったー！ー！ー！ー！ー！」

突然声が出たかと思うと天井の板が外れそこから束が顔を出した。

「ちーちゃん！ そんなのよりもっといい作戦がここにあるんだよ！ー」

「出ていけ。山田先生、室外へ強制退去を」

「は、はいー！」

真耶が慌てて束を捕まえようとするが、するりとそれをかわすと束は千冬に詰め寄った。

「ここはね、断・然！ 紅椿の出番なんだよ！ なんて言ったって、紅

椿の展開装甲ならパッケージなんてなくても超高速起動ができるんだからね！」

ハイテンションで騒ぎながら束が空中ディスプレイを幾重にも呼び出す。

「紅椿はね、展開装甲って言う第四世代のISの装備なんだよ！」

ざわつ、と室内に動揺が走る。それもその筈だ。現在世界では第三世代の試験一号機が出来た段階なのだ。それなのにそれを無視した第四世代の登場。これは異常だ。

「白式にも一部使ってたんだけどねー！ それを紅椿には全身に組み込んだじゃいました！ これで最大稼働時にはスペックデータは倍プッシュ！ これぞ、第四世代型の目的である、即時万能対応機って奴だね。私がもう作っちゃったよ。ぶいぶい」

束は笑いながら言うが、周りはそれぞれどころでは無い。誰もがこの事実に啞然と、そして呆れていた。第三代型はそれこそ、多くの科学者達、そしてテストパイロット達が努力と研究を重ねて開発を続けている。この場にいる専用機持ちだっただけそうだ。セシリア、鈴、ラウラの機体は第三代。最新鋭にして、更なる発展を目指す為の試験機に近い。彼女達もその搭乗者となった事に誇りを持っている。

しかしそう言った努力も想いも、天才の行動一つで無意味になってしまう。これほど馬鹿な事は無い。

気まずい沈黙の中、束は何故周りがそんな顔をするのか分からないのか首を傾げている。それを打ち破るべく千冬が声を上げる。

「全員、集中しろ。紅椿のデータは分かった。確かにこれなら作戦は可能だ。束、調整にはどれくらいかかる？」

「お、織斑先生!？」

驚いたのはセシリアだ。状況からして自分が参加するものだと思っていたのだ。

「オルコット。パッケージの量子変換インストールはしているのか？」

「い、いえそれはまだ……」

痛いところを突かれセシリアが勢いを失う。それを横目に束はピースを作る。

「因みに紅椿なら7分もあれば余裕だね♪」

「よしならば白式と紅椿の二機で——」

「待ってください」

千冬の声を遮ったのは静司だ。彼の手は東の行動に、そしてその行動故に起きる事に怒りを覚え強く握りしめられている。だが、あくまでも冷静さを失わない様に自分に言い聞かせながら口を開く。

「俺は反対です。この件はオルコットに任せろべきだと思います」

「んー何言ってるんかな君は。ちーちゃんが決めたのだからもう——」

「川村、理由を述べてみる」

「ちーちゃん!？」

千冬は先を促し東が声を上げるがそれを無視した。

「理由は二つ。一つはイーグル型の存在。もう一つは搭乗者の問題です」

「なんだと!？」

静司の言葉に箒が反応する。しかし静司は気にせず続けた。

「イーグル型は補足できていないという話ですが仮に銀の福音と行動を共にしていた場合、織斑と篠ノ之二人では危険があります」

「そんなの私と箒ちゃんの紅椿があれば楽勝で——」

「性能差があろうとも、数の差は戦況に大きく作用します。それは織斑先生もわかる筈です」

忌々しげに東が静司を睨む。

「そしてもう一つ問題は篠ノ之自身です。篠ノ之、お前は高速機動の訓練を受けた事があるのか？」

「そ、それは無い。しかしそれ位——」

「代表候補生のオルコットでさえ20時間も訓練を積んでいるんだ。今日受け取ったばかりのISでの高速機動の実戦はとてもしゃないが賛同できません」

「しかし一夏だって高速機動は初めての筈だ!」

「だからこそ経験者と組ませるべきだ。一夏が作戦から外せない以上な」

「私では力不足だと言いたいのか！」

「言い方は悪いがそういう事になる」

「川村、貴様！」

激昂した箒が立ち上がるが、それを千冬が止めた。

「落ち着け箒ノ之。川村、ならばお前の案を言ってみろ」

「オルコットと一夏が銀の福音に対処。援護及びイーグル型に対する警戒として、箒ノ之ともう一人がついていく。残ったメンバーが旅館に待機。イーグル型の補足を待つ」

「しかしそれではイーグル型が現れた時、追いつけるものがこちらに居ないぞ」

「確かにその通りです。しかし銀の福音側に現れた時の事を考えるとそちらの対処に回す機体があつた方が良いかと。学園上層部もイーグル型より福音を警戒しています。もし福音が暴走状態で市街に突入した場合、被害は計り知れません」

本来ならそもそも一夏達に出撃などさせたくない。しかし今すぐここを出れない状態の今、福音に先に接敵するのは一夏達だ。その危険を少しでも減らしたい。その為の提案だ。箒には恨まれるかもしれないが、譲る気は無い。

「オルコット。量子変換にはどれくらいかかるんだ？」

「武装を通常のまま、機動性のみに限定すれば最速で15分で出来ますわ」

細かい作戦の打ち合わせを含めれば時間としてはギリギリだろう。しかし出来ない時間ではない。

「確かに一理ある。命令も福音を優先的に対処するようにとの事だが……」

「ちーちゃん！ そんなの大丈夫だよ。私の紅椿なら問題ナッシングだから余計な機体は要らないよ」

「機体の性能だけでは不安材料が残ります。織斑先生」

静司と束が睨み合う。束の眼には不愉快さが。静司は一見、無表情に見えるがその胸の内はいつ爆発してもおかしくない程燃え上がっていた。

「君さあ、私の方がISに詳しいんだよ。うだうだ五月蠅いよ」

「篠ノ之博士こそ数値だけで考えすぎだ。経験に勝る者は無い」

ぴりぴりとした空気が室内に充満する。そんな中、シャルロットが手を挙げた。

「織斑先生。僕も静司に賛成です」

きつ、と箒がシャルロットを睨む。しかし彼女も揺るがずに真つ直ぐに見返した。

「イーグル型の不安はありますが、銀の福音の危険度が高い以上、そちらに戦力を割くべくです。そして福音に対処するのはやはり経験のあるセシリアとコンビを組むのが良いと思います」

シャルロットの意見に何人かが頷く。しかし教師の一人が口を開いた。

「しかし篠ノ之博士は誰もが認める稀代の天才です。その博士が作った最新鋭の機体なら問題ないのでは？」

「確かに。それにスペックデータを見る限り、イーグル型の乱入があってもこれならば……」

教師陣の何人かが束に賛成をする。しかしそれはどこか、束の機嫌を損ねたくないという感情が見え隠れしていた。

束か静司か。意見が割れ、室内が騒がしくなる。千冬も目を瞑り考え込んでいたが、やがて眼を開くと宣言した。

「——今回の件は先の通り織斑と篠ノ之が対処するものとする」

「ちーちゃん！」

「……」

束が喜び、箒もまたその顔が緩む。一方静司は何も言わずその千冬の出した答えを聞いていた。

「但し、作戦にはオルコットとボーデヴィツヒが同行しろ」

「ちーちゃん!?!」

「黙れ。これは決定だ。こちらからも指揮はとるが緊急時はボーデヴィツヒ、お前が指揮を取れ。オルコット、今すぐ量子変換を開始しろ」

『はいー!』

作戦が決定し千冬が指示を飛ばしていく。急に騒がしくなった室内、そこで束は静司を不愉快そうに睨み口を開いた。

「私のＩＳにも箒ちゃんにも力がある。けど君には無い。それを見せてあげる」

「……」

静司は無言。それを気にもせず束は箒の元へ歩いていった。一人残された静司。その手はきつく握りしめられ震えていた。それは千冬の決定か、束の言葉ゆえか。

一見双方の意見を合わせた妥協案の様に思えるが、結局のところ、天才のという名の友人の意見を優先したに過ぎない。なぜなら４機で出るのなら、それこそセシリアと一夏を組ませればいいからだ。なのにわざわざ箒と組ませた。おそらく友人の意見を尊重したのかも知れない。しかしこれは実戦なのだ。そういう感情は不要。そのことは彼女自身も知っているはずだ。

そして束。身勝手天災。第四世代という爆弾をＩＳ学園に持ち込んだ張本人。これにより学園の危険度はさらに増した。どこまでも身勝手なその行動に静司は一人憤りを感じていた。

そんな中。ふと右手が急に暖かい手で包まれた。

「静司、血が出てる」

シャルロットは一本一本、解くように静司の握りしめられた静司の指を開くとそこにハンカチを巻いていく。

「……すまない」

「ううん。それよりも大丈夫？……って言っても静司は大丈夫って言うよね」

ふふ、と安心させるような笑顔で笑いかけられる。

「静司が何でそんなに怒っているのか。僕はその本当の理由は分からない。だけど静司が何かに苦しんでいるなら僕はその助けになりたいと思う。それは忘れないで」

彼女は何も知らない。静司の事情も。その素性も。しかしそれでもこうやって笑いかけてくれる。そんな姿が静司に冷静さを取り戻させる。そうだ、自分は一夏だけでなく、彼女達も守らなければなら

ない。ならば冷静でなければならない。

「そうだな。もう、本当に大丈夫だ。それより一夏の元へ行ってやろう。アイツも緊張しているし、アドバイスできることはしてやった方が良い」

「うん、そうだね」

二人は頷きあうと一夏の元へ向かった。

十一時半。作戦時刻。7月の容赦ない陽光が降り注ぐ中、一夏の白式と箒の紅椿がその準備を終え、ビーチに鎮座している。その後方では《ストライク・ガンナー》を装備したブルー・ティアーズとラウラのシユヴァルツエア・レーゲンが待機している。

4人は作戦開始前の最終確認を行っているが、どこか浮ついた雰囲気、箒に一夏は不安を持っていた。

「ラウラ」

『む、静司か。どうした?』

待機中のラウラにプライベートチャンネルで通信をいれる。

「篠ノ之はどこか浮ついている。もしもの時は頼む」

『——成程。確かに妙に自信を持った新兵と同じような雰囲気を感じる。了解した』

「悪いな。だがこの中で軍人であるお前が一番状況判断が出来ると思っただけ。一夏達を頼む」

『お前に褒められるのは悪い気がしないな。任せておけ』

ラウラの返答に満足すると静司は通信を切り一夏達に眼を向ける。どうやらあちらも箒の様子を心配している様だった。しかしこれ以上ここで静司に出来る事は無い。後は隙を見つけて直ぐに黒翼で追いかけるのみだ。

「では作戦開始!」

千冬の命令に従い4機のISが出撃していく。既に教師陣は出発しており空域封鎖も行っている。後は実際に当たるのみ。ポイントまでの距離は5キロ。あの速度なら直ぐにでも到達するだろう。後

は敵を落すのみ。

残った誰もが緊張した様子でディスプレイを見つめる中、静司が部屋を抜け出そうとした時だった。

「れ、レーダーに反応！…これは…イーグル型です！」

「何っ!?!」

突然の報告に室内が騒然となる。静司もまた、その足を止めた。

「補足した数は3機！…これは…そんな、まさか!?!」

「報告は明確にしろ！…イーグル型はどこに現れた!?!」

千冬の怒声に、レーダーを確認していた教師が身を竦めながらも震える声で叫んだ。

「ふ、福音とは真逆の北で距離は4キロ！…3機ともこちらに向かってきています！」

悲鳴の様なその報告に誰もが声を失う。だが真っ先に立ち直った千冬が即座に命令を飛ばす。

「山田先生を呼び戻せ！…担当空域は一番近い！…戦えるものはISに搭乗しろ！…何としてでも生徒達を守れ！…全員迎撃態勢！」

2.5. 困惑の戦場

『黒い翼のIS』

それは一部では有名な話である。所属、正体等は一切不明。その目的も不明ながら、そのISが目撃された近くでは大抵大規模戦闘の爪痕が残っている。ある場所ではありとあらゆる兵器が破壊され、ある場所では施設を中心とした広大な範囲が瓦礫の山と化した。しかしそれほど戦闘を行っていても『黒い翼のIS』の情報は圧倒的に少ない。そうそう頻繁に現れる訳では無い事。そして現れたとしても圧倒的なスピードと何らかの兵器によって戦場が終焉を迎えてしまう事。故に襲われた側も実態を把握する前に敗北してしまう。衛星などの監視にもかからない為、そのISの行動が把握できないのだ。

正体不明の謎のIS。しかしそのISにここ最近動きがあった。それはIS学園での事。五月のクラス別トーナメントの際に突然乱入した謎のテロリストの機体3機。そのうち2機を破壊したのがまさにその『黒い翼のIS』だったからだ。公式には記録は残っていないが、そのISは学園を監視する幾つもの組織が目撃している。そしてその戦闘の様子を初めて確認できたとも言える。圧倒的な力で敵の機体を撃墜したそのISに大きな関心が持たれた。

しかしそれ以降、『黒い翼のIS』姿を現していない。だがその奇妙にして異質なISは様々な組織の関心の的であった。それは場合によつては男性操縦者よりも。もしそのISが目の前に現れれば、それらの組織はこぞって拿捕に向かうだろう。それだけの価値があると思われているからだ。

「と、言う事で彼はどうするのかしらねえ」

IS学園の泊まる旅館から離れた山の中。C5達が居た場所とはまた別方向のそこでカテーナが呑気に呟いた。彼女の恰好は何時もの研究服姿。但し頭に麦わら帽子を被り、ハンモックに寝転がりながら双眼鏡を覗いている。

「学園内ならまだしもここは外ですからね。立ち入り禁止と言ってもそれは建前。ありとあらゆる組織が監視しているでしょう。その中

でその姿を晒すのは自らの首を絞めるようなものです」

カテーナの隣でシェーリが無表情で応答する。彼女はこの暑さの中でもスーツを着用。それなのに汗一つかいていない。

「そう。だけど中々面白い展開になってきたわねえ。米軍のイーグル型、確か「シャープ・イーグル」だったかしら？ あの機体にあそこまでのステルス性能なんてあったかしら？」

「私の知る限りありません」

「そう。なら何らかの改造を受けている可能性が高い。それは米軍が行ったのか、それとも他の誰かか。ねえ、あなたはと思う？」

カテーナが視線を向けた先。そこには淡く光る金属の球体が機械に繋がれた状態でハンモックに吊るされていた。その球体はカテーナが話しかけても何も反応しない。しかしカテーナは気にせず続ける。

「あそこにあなたの姉妹達がやってくるわ。それも暴走した状態で。一体誰がそんなことしたのかしらねえ」

球体に反応は無い。

「ISのコアはブラックボックス化されている。開発者の博士以外解析は不能。だとすれば真っ先に該当するのは——あなただってわかるでしょう？」

球体は何も答えない。しかしその淡い光が一瞬淀んだ。その様子にカテーナは口を綻ばせる。

「何で暴走なんてさせたのかしらねえ。そして暴走した彼女達はこの後どうなるのかしら？ あなたみたいに捨てられるのかしら？」

『それが、ははの、のぞみ、なら』

今まで沈黙を保っていたその球体——無人機のコアが初めて明確な反応をした。繋がれた機械のディスプレイに文字が打ちこまれていく。

「ふふ、初めて返事をしてくれたわねえ。今までずっと反応無しだったのに。何故だかわかる？ それはね、あなたは動揺しているからよ」

『そんな、かんじようは、ない』

「あら？ それはあなたの母親の言葉を否定する事になるわよ？ I Sには自我があると言うのは博士も認めた事なのだから」

『わたしは、どうようなど』

「頑固ねえ。まあいいわ。ここで一緒に見物しましょう？ 誰が何を考えてどんな行動を起こすのか。きつと面白い事になるわ」

『……』

再びコアが黙る。カテーナはそれを気にすることなく、学園生が宿泊している旅館に眼を向ける。その少し先には高速で飛行してくる3機のI Sの姿。そのI S達は両腕のミサイルポッドを旅館へ向けると一斉に発射した。

一機に付き二発のミサイル。その鋼鉄の兵器が旅館に迫る。しかしそのミサイルはターゲットである旅館から発射された銃弾で全て破壊された。次いでその爆炎を切り裂くように赤みの掛かった黒いI Sと量産型の打鉄がイーグル型に向かい飛び出して行く。鈴と静司だ。

「打鉄。正体を隠す事を選んだか。状況からして仕方ないとはいえその選択が正しかったのかしら。あのイーグル型はあなたが思っている以上に厄介そうよ、川村静司君」

楽しそうに、歌うように声を紡ぐ。

「今の生活を大切に思ったか、あのI Sの秘匿を重視したか。けどもしその量産型で敗北したら、君はどんな顔をするのかしらねえ」

この状況は彼女も予想はしていない。しかしもし仕掛けたのが予想通りの人物なら、きつと面白い事になる。カテーナは好奇心に満ちた顔でその戦闘を眺めるのだった。

宙に躍り出た鈴の甲龍と静司の打鉄。二機は勢いをそのままにイーグル型へ迫る。鈴は大型青竜刀《双天牙月》を。静司は打鉄のブレードを振りかぶり叩きこんだ。しかし攻撃を受けた二機は即座に減速、反転を行い二人の攻撃を回避する。

「ちっ！ すばっしこい奴ね！」

「凰！ 来るぞ！」

「僕に任せて！」

最後の1機が鈴に再びミサイルを発射する。しかしそれは静司達の後から宙に上がったシャルロットの、ラファール・リヴァイヴカス・タムⅡのアサルトライフルで撃ち落とされた。

ミサイルを撃ち落としたシャルロットは静司と鈴の近くで滞空する。そこに更にもう1機のラファールが続く。

「三人とも無事ですすね」

それはIS学園数学教師である田村和子。彼女はその担当科目からも分かる通り、ISの操縦がそれほど上手いとは言えない。しかしそれはあくまで学園レベルの話。通常の操作自体は当然ながら可能だ。他の教師たちは海域封鎖に出ている今、専用機持ちと静司を除いた戦力が彼女だった。

IS学園の保有するISは専用機を除けば30機程。そのうちの10機が今回の臨海学校でこちらにきている。そして10機の内7機は海域封鎖に出張っている為、実質今動かせるの3機しかない。封鎖に7機も必要だったのは、銀の福音の移動スピードが尋常では無い為、広域を封鎖しなければならなかったからだ。そして学園の教師と言えど、その実力には差がある。千冬や真耶の他にもIS専門の教師は居るが、全員が臨海学校にきているわけでは無い。中には通常授業の教師も当然いる。それらまでも投入して今回の作戦は行われているのだ。そして現場に残っている教師で戦闘行動ができるほどのIS操縦者が彼女だった。

『山田先生の到着まで7分だ。一夏達も敵機と接触した為こちらには来れない。各自、無理な撃墜は考えなくて良い。旅館と自分の防衛優先しろ！』

千冬からの通信が入る。本来なら彼女こそ出撃するのがベストだ。しかし2箇所で戦闘が起きている今、指令を飛ばす人物が必要。そしてそう言った経験に最も適しているのもまた千冬なのだ。

「こっちは専用機2機に量産型2機。相手は第二世代とはいえ軍用ISね。ならこっちは」

『そうだ。凰とデュノアが一機ずつ当たれ。川村と田村先生は残りの一機を』

「了解！」

再びイーグル型が迫る。散開し攻撃態勢に入った三機に、静司達も武器を構え応戦する。

静司と田村に迫ったのは先程ミサイルを放ったIS。そのISは残りのミサイルを一斉に静司達に向け吐き出した。

「させません！」

若干緊張した様子の田村が高速で回避しつつそれをライフルで撃ち落としていく。その隙に静司は攻撃後に硬直していた敵ISへ迫るが、空になったミサイルポッドを投げ捨てる。敵ISはブレードを呼び出し静司の打鉄へ斬りかかる。

「邪魔だ！」

打鉄の大型ブレードとイーグル型のブレードが激突し、鈍い金属音と震動が響き渡る。しかし敵は軍用IS。その出力は打鉄に勝る。静司の打鉄が押しこまれていく。だがそれは予想の範疇。

「ここですー！」

田村のラファールがアサルトライフルの銃弾を敵ISへ放つ。だがそれも敵ISは無理やり静司を弾き飛ばすと紙一重で回避した。しかし弾き飛ばされた静司も唯では終わらない。

「弾けるクソ鷲」

三つの手榴弾が放られる。イーグル型の逃げ道を読んだ静司のその一手は敵機の目前で爆ぜた。三回に渡る爆発音。その衝撃を物理シールドで防ぎつつ静司と田村は距離を取る。

「やりましたか……?」

「あの爆発で唯では済まない筈ですが——っ!？」

炎と煙に包まれる敵IS。その炎の中に光が灯る。続いて感じた怖気に静司は田村を蹴り飛ばし自らも横に飛んだ。そしてその二人の間を青い熱線が通り抜けていく。

「光学兵器!? そんなのデータには——」

「先生、逃げろ！」

静司の叫びと敵ISの行動はほぼ同時。炎の中から飛び出してきたイーグル型が田村へ襲い掛かる。田村も慌てながらも応戦すべくライフルを構えるが、
「なっ!？」

上に下に左に右に。イーグル型は通常ではありえない程の高速直角機動で田村に迫っていく。ハイパーセンサーでも見きれないその動きに田村の顔が恐怖に歪む。それでも引き金を引いたのは教師としての矜持か、それとも恐怖に駆られての行動か。しかしその応戦も空しく弾丸は空を切り、田村のラファールはイーグル型のブレードによって切り裂かれた。

「きゃあああああああああああ!？」

悲鳴を上げ墜落していくラファール。そこに追い打ちをかけるべく銃口を向けるイーグル型だが、その行動は三度迫った静司のブレードによって遮られた。

「この野郎っ!」

全力で打ちこんだその斬撃も止められる。そしてそのイーグル型の胸部が開き、そこに青い光が灯った。先ほどの光学兵器だ。

「ちいっ!」

無理やり体を捻りつつ物理シールドを前面に展開。落下するよう打鉄を動かし敵の正面から離脱する。その横を青い光線が突き抜けていく。

『川村!』

「田村先生は撃墜! 機体は中破だが意識がありません! 行動可能な人は救助を!」

回避の動きをそのままに地面に着地した静司は撃墜された田村を一瞥すると千冬に連絡する。その返事を待たぬまま再び飛翔するとイーグル型と向き合う。

(失敗した……!)

やはり黒翼で出るべきだった。襲撃時、あのまま部屋の外に出ていればどさくさに紛れて黒翼を使用出来たかもしれない。しかしあの時あの場に居た以上、静司が参戦しないのは不自然だった。静司は一

夏と違い企業に所属している事になっている。それは代表候補生程では無いにしても、その行動にはある程度制約がつく事を意味する。それはこういった緊急時の協力要請を断りづらい事。断る事が出来ても、それはIS委員会やその他の組織への悪印象しか与えない。無論、その緊急時の状況にもよるので一概には言えないが、今回の場合は間違いなくそうだった。それでも実力が伴わなければ槍玉には上げられにくい。静司は模擬戦では敗北したとは言え、専用機持ち相手に奮闘したという記録が残っている。その為、この緊急時においては協力する事は周りから見ても当然と言えた。

それにここで下手に黒翼を使えば正体がばれる可能性もある。度々我を忘れて使いかけた事のある静司だが、流石にそれが本来不味い事くらい理解している。逆に言えば、そんな考えすら忘れる程怒りに飲まれていた事でもあるのだが。

悩んだのは一瞬。結局は静司は打鉄で出る事を選んだ。それはこれらの理由の他に、通常の軍用IS相手なら制圧できる自信があったからとも言える。しかしここで誤算起きた。敵のイーグル型。そのスペックが異常に上がっているのだ。

「もう！ 何なのよコイツら!」

「データに無い武器といい異常なスペックといい、これは第三世代にも劣らないね……」

鈴とシャルロットも予想外の事態に困惑を隠しきれない。二人の顔には冷や汗が浮かんでいる。

戦闘が始まってまだ3分も経っていない。しかしその間に一機落とされたのにも関わらず、相手は無傷。先ほど静司の手榴弾を喰らった機体ですらだ。慢心していた訳では無い。全員自分の力を把握し、相手のデータも把握した故の自信があった。しかしそれも『異常』という二文字で全てが叩き壊されてしまった。

『全機に告げる。織斑たちは既に戦闘に入ったが、そこにもイーグル型が現れた。ボーデヴィツヒとオルコットが応戦中だが、直ぐにこちらの援護にはこれん。山田先生の到着までも4分超かかる。これ以上戦力が減るのは避けたい』

「そうは言っても……。そもそも何でアイツらはIS学園を狙ってるのよ」

「それにあの異常なスペック。明らかに改造されてるね。けど誰が……」

当然の疑問。その答えに答えられる者は居ない。

『旅館の防衛が最優先だ。山田先生の到着までは三機とも互いに連携して近づく敵だけに対処しろ。深追いはするな』

『了解』

三機が互いを援護するように位置を変える。量産機ながらも防衛に優れた静司が前に。中距離での衝撃砲と近距離での青竜刀がある鈴が後ろに。オールレンジのシャルロットが遊撃としてその上に位置する。

敵機と睨み合う中、静司はひそかにCI達に通信を繋げた。

「そちらの状況は？」

『敵ISを分析中だが、少なくともアメリカ軍のカスタム機であんな機体は存在しない事は確かだ。考えられるのはあの機体が二次以降セカンド・シフトをしたか。もしくは全く別の誰かによって改造されたか』

「……そういう事か」

『B9。熱くなるなよ。お前の隣にも、そして旅館にも大切な友人が居るんだろ。そいつらを守りたいと思うなら冷静であれ』

「わかっている。他のbiasI S操操縦縦者者は？」

『まだ任務中だ。この件はお前が当たるしかない』

「援軍は望めずか。了解した」

「静司、来るよ！」

シャルロットの声。敵機が散開し静司達を囲む様に動き始める。その囲みから抜け出しつつ、三人は牽制を放つがそれらはやはり当たらない。しかし構わない。肝心なのは真耶が来るまで時間を稼ぐこと。そして真耶が到着次第、再び攻勢に出る。

得体のしれない敵機を相手に、静司達の戦いは続く。

そしてその戦闘を眺める人物がもう一人、ここに居た。

「ふふふーん、いい感じだね。流石私！」

ウサミミを付け青と白のワンピースを着た女——束だ。彼女が見つめる先には空中投影ディスプレイが浮かび、その中では静司達の苦戦の様子が映し出されている。

「折角の専用機を減らしたのは誰のせいかな？ ふっふっふ。しっかりと反省するといいいね」

上機嫌で笑いながらも一つのディスプレイを見やる。そこでは一夏達の姿映し出されている。

「さて、いっくんと箒ちゃんも頑張つてね。折角だから華々しいデビューを飾っちゃおう！」

静司達に向けるものとは違う、喜びと期待に満ちた表情で束が笑う。その視線の先では一夏が福音に斬りかかっていく光景が映っている。

様々な想いを含んで戦場は展開していく。

静司達がイーグル型と交戦を開始した頃。一夏達もまた、銀の福音を落とすべく空を駆けていた。福音との接触ポイントまで距離は五キロ。しかし箒の紅椿はその距離を瞬く間に詰めていく。その少し後ろには高機動パッケージを装備したセシリアと、それに捕まるラウラの姿がある。セシリアの高機動パッケージ《ストライク・ガンナー》であるが、時間を優先したため、実は完全には量子変換インストリアルされていない。本来ならいつも持つ《スターライトmkⅢ》でなく、さらに大型のライフルがあるのだが、そちらは量子変換していない。その分の時間を打ち合わせに割いたのだ。

「箒！ セシリア達と距離が離れている！」

「だが遅れてしまったては福音を逃す！ このまま行く！」

自信に満ちた声で箒が答える。しかし一夏にはその自信が危うい物に感じて仕方なかった。

「箒。少し冷静に——」

「見えたぞ、一夏！」

一夏の言葉は箒の声に遮られた。同時にハイパーセンサーが目標を映し出す。

その名の通り全身を銀で染めた全身装甲のIS。何よりも目立つのはその頭部から生えた巨大な翼。出撃前のデータによると、大型スラスターと広範囲射撃を融合させた新型システムとあった。だが現物を見ると一夏の脳裏に別のISの姿が過る。

(似てる……?)

かつて、自分たちを救った謎の黒いIS。あれも同じように翼を生やし、その翼から攻撃を放っていた。何か関係があるのだろうか？

「何を呆けている一夏！ 行くぞ！」

「お、おう！」

そうだ。今は敵を倒すことだけを考えるべきだろう。ハイパーセンサーを確認するとセシリア達も多少遅れながらもついてきている。大丈夫だ、行ける。

「接触まで十秒！ いいな、一夏！」

「おうっ！」

紅椿が前方に飛ぶ福音に追いつかんと更に加速する。その速度に驚きながらも一夏も《零落白夜》を発動すべく準備をしていく。チャンスは一瞬。一定の距離まで詰めた所で瞬間^{イグニッション・ブースト}加速で一気に斬りこまなければならぬ。近づいてくるその瞬間に一夏の緊張感が増していく。そして、

「うおおおおおおおー！」

射程距離に入るが同時、《零落白夜》を発動。紅椿の装甲を蹴りつつ瞬時加速を行い、その距離をゼロへと詰めるべく空を駆ける。

だが、

眼と鼻の先に居る福音。それが突然最高速度はそのままに反転。その眼が光る。

(くっ!? だけど、押し切る——!)

もはや後退できるような距離では無い。振りかぶった《零落白夜》の光の刃を福音に向けて振り下ろす。

「敵機確認。迎撃開始。《銀の鐘》^{シルバークロウ}起動」

「!?」

オープンチャネルから無機質な機械音声が届く。福音がその体をくるん、と回転させ《零落白夜》のエネルギー刃を紙一重で躲した。一夏の福音。その影が一瞬交差する。そしてその一瞬の間に向けられた福音の翼から光が放たれた。

「このっ……い！」

福音が光を放つ直前。言い知れない不安感に駆られた一夏が強引な方向転換でその光弾を回避すべく機動を取る。しかし広範囲にわたって放たれた福音の武装《銀の鐘》はその回避を完全には許さない。数発の光弾白式に直撃。シールドエネルギーが減らされていく。

「一夏！」

「大丈夫だ！ 箒、援護を！」

「了解！」

専用機という存在。そして日々の訓練を実力者達と共に行う一夏は、同学園の一般生徒に比べ実力を付けつつある。そしてその経験があったからこそ、今の攻撃も直撃を避けることが出来た。しかし福音の動きは一夏の想像を遥かに超えている。高出力の多方向推進装置^{マルチスラスター}。データでは確認していたし、別にそれを持つのが福音だけという訳では無い。しかし福音のそれは一夏達を翻弄するには十分すぎるほどの性能があった。

「一夏さん、こちらからも——」

「っ！ 上だ、セシリア！」

追いついてきたセシリアも援護に加わろうとする。しかしそれをラウラの声が遮った。ぎよっ、としてセシリアが見上げた先。遙か上空から急降下してくる一機のISの姿がそこにあった。

「イーグル型!？」

「ちいっ！」

セシリアのブルー・ティアーズに乗っていたラウラがシュヴァルツエア・レーゲンの大型レールガンイーグル型へ放つ。

『!!』

イーグル型の眼が光り、その砲弾を紙一重で回避するとお返しとばかりにミサイルを放つ。セシリアが機体の機動を変え、大きく旋回するような動きで回避を行い、更にラウラがそのミサイルを撃ち落とす。

「こんな時に！」

「愚痴は後だ。それよりコイツを一夏達に近づけさせるな！」

「くっ、分かっていますわ！」

イーグル型は元々全身装甲とまではいかないにしても、搭乗者の体のほとんどを装甲で覆っている。そしてその各所には姿勢制御スラストスターが取り付けられ、顔の部分も大きなバイザーに覆われている為、搭乗者の顔は分からない。その不気味さ。二対一ながらも福音に苦戦する一夏達の姿。セシリアの顔に焦りが浮かぶが、ラウラが喝を入れる。

「一夏！　あまり時間は無いぞ！」

「分かっている！　箒は左を、俺が右から攻める！」

近づいては躲され、攻撃を受けては危なげに回避する。それを繰り返す一夏と箒の顔にも焦りが浮かんでいく。そんな二人に容赦のない福音の連射攻撃が撃ちこまれていく。

「このっ、鬱陶しい奴め！」

一夏との左右からの同時攻撃。それすらも容易く躲されると箒の顔に激昂が浮かぶ。折角手に入れた超高性能専用機。一夏達と同じ舞台。それなのに思い通りに行かない事態に苛立ちが増していく。その苛立ちに突き動かされるように、両手に持つ武装《雨月》と《空裂》を構え直し、叫ぶ。

「これでは埒が明かない！　一夏、私が動きを止める！　お前は隙を突け！」

「了解だ！」

箒の紅椿が銀の福音に突撃を仕掛ける。《雨月》の突きを連続で繰り出すと、その周囲に赤色の光が展開。それが光の弾丸となって福音を襲う。

「まだまだだあ！」

更に振るうは《空裂》の連撃。そのひと振りごとに展開される带状の攻性エネルギー派が放たれる。

点と面。怒涛と言えるその連続攻撃に福音も回避を優先した動きを取った。それを第四世代と言うアベレージを持った箒の紅椿が追撃していく。複雑な機動。急激な加速と方向転換。それらに全て追従し、敵の進行方向に《空裂》を放ち、回避した所で《雨月》を撃つ。

「やれる……っ！ この紅椿の力なら！」

刀を振るう。相手は避ける。それを更に追い詰めていく自分のその力に箒は先程の苛立ちも余所に昂揚感に包まれていく。この力なら代表候補生にも負けない。専用機がなんだ。自分だつて手に入れた。

箒が紅椿を手に入れた経緯。それは自分の無力さに絶望したからとも言える。しかしそのその根本にあるのはもっと人間らしく、しかし聞くものが聞いたら怒る様な理由。

——強くなければ、一夏の傍に居れない。

自分の心を寄せる幼馴染。その周りには実力者が集まっている。セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ。そして静司。静司に関しては少々微妙ではあるが、他の生徒より……少なくとも箒よりは強い。そしてセシリアと鈴。最近になってはラウラまでもが一夏に好意を寄せている。その一夏本人もここ最近で目まぐるしい成長を遂げている。それを感じる度。一夏達が戦っている姿を見る度に思ったのだ。何故、私はあそこに居ないのかと。一夏の隣は私の物だった筈だと。鍛錬は怠っていない。だがそれでも自分は追いつけない。そんな現実に絶望し、そして焦った。一刻も早く、あの場に行かなければ一夏を取られてしまうと。

そして悩んだ末、姉を頼った。自分と一夏を引き離した原因を作った姉。世界最高と呼ばれる頭脳を持つ、天災。その姉は専用機が欲しい事を伝えると、まるで分かっていたかの様に応えた。『すぐに準備してあげる』と。いくらなんでもそんな事が可能なのかと思ったが、

姉の言葉を信じてみることにした。正直に言えば嫌いな相手だ。自分の生活を壊した張本人だったのだから。しかし姉は本当に直ぐに準備した。本当に何もかも分かっている様に。

そして受領した紅椿は非の付け所が無い最高の機体だった。それも第四世代。世界中で自分だけの最強、最高の機体。初めは不安だった。自分のIS適性はC。そんな身で扱えるのかと。

しかし紅椿は箒が考えていた以上に思い通りに動く。その感動は凄まじく、箒は数年ぶりに姉に本気で感謝した。これなら少しは許してやつてもいいかもしれない。

そして今、その自分と紅椿が敵を追い詰めている。誰にも出来なかった事を自分が出来る。それが箒の動きを、思考を、加速させていく。

「これでええええええ！」

——私は一夏と……っ！

いつしか防御を始めた福音との間合いを一気に詰め、止めと言わんばかりの全力を振るう。もはや隙を作るどころでは無い。自分が倒さんとばかりにその攻撃が放たれる。

「La……♪」

「!?」

突然甲高いマシンボイスが福音から発せられる。くるり、と一番最初に一夏が攻撃を仕掛けた時と同じように。福音がその体を回転させ、箒の一撃を躲す。

「まずいつ!?」

箒の放った攻撃。その先を見た一夏の顔が強張る。即座に白式の軌道を強引に変えると、瞬時加速を発動させる。

「え……う？」

その光景を箒は呆然と見ていた。箒の放った攻撃。第四世代ISの今出せる最高出力。その一撃が福音に躲された後、セシリアに向かっていく所を。

丁度セシリアはその動きを止め、イーグル型にレーザーライフルを構えていた所だった。そのセシリアの顔が、自分に向かってくる友軍

の攻撃に青ざめていく。全てがスロモーションに見えるその一瞬の世界の中、セシリアと箒の放った攻撃に間に白い影が入り込む。

「うおおおおおおおー!」

雄たけびをあげ《零落白夜》を一夏が振るう。エネルギー無効化。その反則過ぎる能力を持ったその刃が、箒の攻撃を打ち消す……箒だった。一夏が瞬時加速を使わなければ。

「しまっ——」

帯状の攻性エネルギー波。その半分程を消し去った時点で白式のエネルギー刃が、消えた。エネルギー切れだ。そしてそれは白式のシールドエネルギーも尽きた事を意味する。

紅椿のハイパーセンサーが強張った一夏の顔を映す。そしてその顔が、エネルギー波の直撃による爆発に包まれた。

「一夏ああああ!」

自分は何をした? 何をしてしまった?

目の前で起きた光景を信じられず。理解できず、否、理解したくない。それでも紅椿を急加速させその炎の中に突っ込んでいく。

「一夏、一夏あ!」

手さぐりで白式を見つけるとその装甲を掴み再び飛び上がる。炎の中から抜けた白式はその装甲を中破させ、一夏本人も血を流している。しかし《零落白夜》が大部分のエネルギーを削ったお蔭か意識は失っておらず、その顔を歪ませながらも箒を見つめる。

「一夏! よかつ——」

「箒、どうしちゃったんだ……?」

びくつ、と箒の肩が震える。それは咎める訳でも無く、恨む訳でも無く、ただただ、疑問に満ちた目で見つめる幼馴染の顔を見てしまったから。

「なんでそんなに焦っているのか……俺にはわからない。だけど安易に力を手に入れて、その力に溺れて……仲間を傷つけかけるなんて、お前らしくないよ……」

「わ、私は……っ」

「箒……お前の強さは、そんなんじゃないかな? 俺がカツコイ

イと思ったお前の姿は——」

その言葉を言い切る前に一夏は箒を突き飛ばす。突然のその光景に箒が疑問の声を上げる間もなくその一夏に光の雨が降り注いだ。

「La……♪」

福音のその巨大なウイングスラスター。その全ての砲門が開き、一夏に向け一斉射撃を行ったのだ。

目の前で愛しい人が炎に包まれていく。二度目の光景。それに箒の心が崩れていく。

「ああああああああああつ!?!」

《雨月》を突く。《空裂》を振るう。しかし先ほどの様な光弾も、エネルギー波も出ない。そこでようやく箒は紅椿がエネルギー切れを起こしていた事に気づく。もはや自分には何も出来ない。ただ、目の前で崩れ落ちる一夏を見ている事しか出来ない。なんでもできると言う全能感から一気に突き落され、ただ泣き叫ぶ箒。福音はそんな箒にもその砲門を向けた。それが分かっているながらも箒は動けない。ただ絶望に満ちた目でその光景を眺めているしかなかった。

「La, La. La……?」

その砲門から光が放たれると思われたその時、福音はその場から急上昇した。その足元を砲弾が通り過ぎていく。

「一夏さん! 箒さん!」

一瞬の隙にセシリアが箒と落ちていく一夏の機体を掴みその場から離脱した。それを援護するようにラウラが肩の大型レールガンを連射していく。

「二人を連れて逃げろ、セシリア!」

「けど、ラウラさんが……!」

「私は殿だ。こいつらを引き付けてから、隙を見て離脱する!」

「そんな……っ!?!」

「先ほど教官から連絡があった。旅館にもイーグル型が現れたらしいがそれ以降連絡が付かん。そちらに行け。ここでは私が上官だ。命令に従え」

冷たくラウラが言い放つ。しかしそれはセシリア達を逃がす為の

口実に過ぎない。勿論旅館も心配だが、切り札の一夏が撃墜され、箒も戦闘不能。敵は健在の今、これ以上の戦闘は避けるべきだった。その為の判断。

「……わかりました。必ず帰ってきてくださいまし」

「ふ、当然だ」

振り返らずに答えるラウラに頷くと、セシリアが全速力で戦場から離脱した。

「さて……」

ラウラの前方には、レールガンを警戒してかこちらを伺う福音。そしてセシリアと二人で半壊までは追い詰めたイーグル型。対してラウラのシュヴァルツェア・レーゲンも無傷という訳では無い。その装甲のあちこちに傷がついている。しかしラウラは笑った。

「アイツらを守ると、戦友^{静司}とも約束したのでな。貴様らは足止めさせてもらおう」

福音はそもそもこちらから仕掛けたのだが、追ってこない保証はない。イーグル型は明らかにこちらに敵意を持っている様に見える。ならば優先すべきはイーグル型。可能ならここで破壊する。

「来い、世界のトップと自惚れた国の哀れな鳥ども。ドイツ軍IS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』隊長。このラウラ・ボーデヴィッツヒがその翼をへし折ってやる！」

戦いは続く。

26. 殺意

花月荘。本来なら海に来た観光客や学生たちの癒しの場所となる筈のそこは、かつてない緊張感に包まれていた。

太陽も頂点に上がる時間、本来ならその旅館は海から帰ってきた宿泊客で賑わい、別館から続く浜辺では海を満喫する観光客などに溢れている筈だった。しかし今、その浜辺は見るも無残に荒れている。砂浜は陥没し、海の家は崩れ落ちている。そしてその原因を作った物――イーグル型の放った弾丸がまた一つ浜辺に穴を作る。

「このっ、また!」

「大丈夫、浜辺に落ちた!」

「だが次はどうなるかわからん!」

鈴、シャルロット、そして静司。三人は迫る三機のイーグル型に苦戦していた。それは敵の機体性能が異常なまでに上がっているせいもある。だが決定的な問題は別にあつた。

彼らが戦く戦場は花月荘上空。海上でも、ましてやI S学園のアリーナのようにシールドがある訳では無い。つまり、放たれた射撃武器は何か当たるまでは止まる事が無い。躲した攻撃が生徒達の居る旅館に着弾する可能性もあるのだ。静司達は可能な限り敵を旅館から引き離すべく行動しているが敵は思うように動いてはくれなかつた。

「防戦ではかえってジリ貧よ! やっぱり責めるべきじゃないの!」

「だけど敵の機動力の方が上だよ! 抜かれたらマズイ!」

「一機ずつ相手するにしても、奴らも連携を取っている。下手に離れると一気に潰される!」

敵の砲口が火を噴く。上を取られていた為、避ければ旅館に当たってしまうその攻撃を静司が打鉄の物理シールドで防ぐ。その隙を狙って静司に迫る別の一機を鈴が衝撃砲で牽制する。

「させないよっ!」

二機の攻撃の隙に背後に高速移動していた最後の一機。それをシャルロットがショットガンで牽制する。銃口を向けられた相手は

急速に方向転換し散弾の雨を逃れた。

防戦一方。静司達の機体には致命傷は無いにしても傷が走っている。対して敵のイーグル型達はほぼ無傷。その事実が三人を焦らせる。

(やはり、黒翼で出るべきだった……つ)

今更後悔しても遅い。だがそう思わずにいられない。静司も己の判断ミスに苛立っていく。いつそわざと落されてから黒翼を使う事も考えた。しかしそれに気を取られたシャルロット達が敵を通してしまつては本末転倒だ。もはや戦線を離脱するような余裕は無い。

『あと少しで山田先生が合流する、それまで持たせろ!』

千冬からの声を聞きながら、再び放たれた敵の銃弾を防ぐ。重い衝撃と共に、打鉄のエネルギーが減っていく。

「調子に、のるな!」

静司もまたアサルトライフルで応戦する。このライフルは元々はラファールの物だが、今回も射撃武器として持ってきたのだ。威力こそ低いが牽制にはなる。案の上、イーグル型は避けるべく距離を取った。だがこれも一時的なその場しのぎに過ぎない。イーグル型は大きく弧を描く軌道で再び静司に迫る。しかしその横っ腹が突然爆発した。

「お待たせしました!」

爆発の原因は合流した真耶のグレネードだった。本来、速度の遅いその攻撃を敵の軌道と死角を先読みして当てたのだろう。ラファールに搭乗した真耶はその手にアサルトライフルを構えつつ、静司達と合流する。

「みなさん、無事ですね。良かったあ……」

「先生こそ、ありがとうございます」

正面にはこちらを無機質なセンサーで見つめるイーグル型三機。こちらの数が増えたので様子を見ているのだろう。それを確認しつつ静司が礼を言うが、真耶は首を振る。

「お礼は私が言う事です。ごめんなさい。本来なら生徒である筈の川村君達に」

「気にしないで下さい。僕らはやるべきことをやるだけです。ね、鈴？」

「そうね。しかしこれで四対三。こちらが有利！」

『そういう事だ。山田先生は二機を引き付ける。その隙に三人で一機を囲め』

あえて真耶に二機を任せる理由。それは一対一や二対一よりも、三機一での短期決戦の方が有効だと言う千冬の判断だった。敵の性能はこちらの想像以上。その上限が見えない今、戦力を集中させ一気に潰した方が良いからだ。

「けど山田先生に二機も任せるなんて……」

「大丈夫ですよ、デュノアさん。先生を信じて下さい」

不安げなシャルロットに真耶は笑いかける。その顔に普段の頼りなさは無い。それは確かな実力を併せ持つ戦士の顔。そしてシャルロットも思い出す。かつて授業の模擬戦で、真耶は鈴とセシリアの二人を手玉に取っていた事を。それは彼女が確かな実力者である証明だ。

「……わかりました。直ぐに終わらせます！」

「はい、待っています」

作戦は決まった。四人は頷きあうと散開する。

「こつちです！」

真耶がライフルを片手にイーグル型に突っ込む。それは一見隙だらけの光景だった。案の上、攻撃を仕掛けられた機体ともう一機が隙だらけの真耶を落とすべく銃口を向ける。

「ふっ！」

自身に放たれた銃弾。しかし真耶はそれを機体を半回転させることで紙一重で躲す。予想外の反応にイーグル型の動きが一瞬鈍った。その隙を逃さず真耶のライフルが火を噴く。三点バースト射撃。それを二回繰り返し相手へ直撃させる。イーグル型二機のシールドエネルギーが削れ、怯ませる。

「ええええいっ！」

二機が怯んだ瞬間、真耶は瞬時加速を発動。その勢いのまま一機を

蹴り飛ばし、それを足場とする様に更にくるりと方向転換。ラファールのブレードで同じ方向へと斬り飛ばした。

『……！』

残りの一機がその山田に仕掛けるべく動く。だがその前に鈴が立ちふさがる。

「アンタの相手はこっちよー！」

鈴が斬りかかる。それを援護するようにシャルロットと静司も敵を囲みライフルを撃つ。いくら実力があろうとも、真耶もそう長くは持たない。ならばこちらでも速攻で仕掛ける必要がある。

『デュノア、敵の逃げ道を断て！ 川村、動きを止めろ！』

「了解！」

鈴の《双天牙月》と打ち合った敵ISが距離を取る。そこにシャルロットが高速切替で銃弾の壁を作り出した。それを回避すべく軌道を変えた先の上から静司が迫る。

ガギイイイイ、と金属の擦れ合う音が響く。しかし先ほど違って直ぐには静司は弾き飛ばされなかった。それは敵より上を取り速度と重さを乗せた一撃だった故。しかしそれとてそう長く持つものではない。それは分かっているからこそ静司は自ら刃を引くと空中で半回転。ISによる回し蹴りを放つ。縦の力を入れている所に、急に横からの衝撃を受けた敵ISがそのバランスを崩す。

「いまだ、鈴！」

「喰らいなさい！」

静司が即座に離脱すると同時、今度は鈴の衝撃砲が横から吠える。不可視のその一撃を回避不能と判断したのか、敵ISは両腕をクロスして防御態勢を取った。

「まだまだあー！」

鈴による衝撃砲の連射。だが鈴はこの攻撃で敵を仕留めようとは思っていない。この攻撃には別の意味がある。

イーグル型は防御しつつも、その衝撃に耐えきれず横に——海側へと押し出されていく。

『よし、いざ鳳！ デュノア、行け！』

千冬の合図。それは花月荘に被害が及びるであろう空域より敵を追い出した事を知らせる意味を持つ。それを期にシャルロットは瞬時加速を発動。更には盾が弾き飛び、その中からはリボルバーと杭打機融合した様な兵器《灰色の鱗殻グレイスケール》が現れた。

「これでっ！」

鈴との接近戦。直後の静司の奇襲。更には連続衝撃砲。その止めとばかりにシャルロットのパイルバンカーがイーグル型の腹部に叩きこまれた。

ズガンッ！ ズガンッ！ と三連続で第二世代最強の攻撃が叩きこまれたイーグル型が揺らぎ、そしてついに墜落した。「やった!？」

「——いや、まだだ!」

海面に墜落したイーグル型だが、まだわずかに動いている。揺れる腕を持ち上げその銃口をシャルロットに向けていた。

「鈴、シャル!」

「OK!」

「了解!」

鈴が衝撃砲を。シャルロットが両手にライフルとショットガンを。そして静司がアサルトライフルをイーグル型へ向ける。

ファイア
発射。

三人は全ての射撃武器を一斉に撃ちこんだ。豪雨の如く注がれた弾丸が海面を揺らし、弾き、蒸発させながらイーグル型へ殺到する。それらを浴びたイーグル型は遂にその動きを停止した。

「今度こそ……?」

「そうみたいだね。やっと一機……」

そう、まだ一機なのだ。静司は即座にハイパーセンサーで真耶の姿を探す。直ぐに花月荘の上空でイーグル型二機を相手取り奮闘している姿を捉えた。だがその表情にはもはや余裕は無く、機体も各所から煙を吹いている。だがそれは当然なのかもしれない。専用機二人と量産機一人でやっと倒した相手を二機同時にしているのだ。むしろその技術に静司は驚かされていた。

『残りの二機を片付ける。鳳は山田先生。川村とデユノアと組んで敵にあたれ!』

千冬の指令。本当なら一機を真耶に引きつけて貰い、残りの一機を今の要領で倒すのがベストだった。しかしもはや真耶の機体は限界なのだろう。それはここから機体を見てもわかる。今もそう長くは持たないだろう。だからこそ、真耶を援護として近距離から中距離に長けた鈴を組ませたのだ。そして近距離の静司とオールレンジのシャルロット。その二人が組むこととなる。

『墜落したイーグル型の搭乗者はこちらで回収する! お前達は行——』

「きやああああ!?!」

「山田先生!」

いよいよ限界だったのだろう。真耶の駆るラファールのスラッラーが小さな爆発を起こし、その機体がぐらつく。その隙を逃さずイーグル型の銃弾が真耶に直撃した。真耶は悲鳴を上げるとそのまま下へと落下していく。

「私が!」

鈴が顔を青ざめさせながらも瞬時加速を発動。墜落していく真耶の元へと向かう。しかしその隙に、もう一機のイーグル型が地上の花月荘へと向かっていた。

「畜生!」

静司が苛立ち気に吐き捨てるとそのイーグル型を追う。だが、自由落下の真耶と違い、イーグル型は自らの推進力で降下する為その差は広がるばかりだ。更には真耶を落とした方が静司に銃口を向ける。その射線は地上へ向かう静司を上から狙う形。躲せばそのまま花月荘へと直撃してしまう。

「邪魔を、するなっ!」

反転し物理シールドで攻撃を防ぎ、お返しとばかりにライフルを撃つ。だが距離があり過ぎた為、それは簡単に躲されてしまう。それを理解しつつも静司は降下する敵機を追う事を辞めない。

「君の相手は僕だよ!」

再び静司に狙いを定めるイーグル型にシャルロットが牽制を行う。イーグル型が標的をシャルロットに変更する。その隙に静司は一気に下降した。

「——つくそおー！」

唯でさえ速度に差があるのに上空の敵機に足止めされた。その間に地上に降りたイーグル型はあろうことか花月荘に穴をあけその中に入り込んでいる。

(何故だ……!? 何故奴らは学園生を狙う!?)

銀の福音とイーグル型。それは暴走していると聞いた。しかし先ほどの戦闘。イーグル型達は暴走してるとは思えない程統制のとれた動きで静司達を翻弄していた。そして花月荘に突入したイーグル型。それは明らかに何らかの目的を持っている様に思える。だがそれは何だ? 何を目的として動いている? そもそも目的があるとしたら誰が?

答えはでない。だが今はいい。今は花月荘に突入した敵を倒す事だけを考えろ。はやる気持ちを抑えつつ静司も花月荘へと突入した。

花月荘の中は酷い有様だった。天井が破壊され瓦礫が各所に散っている。生徒達の悲鳴や鳴き声。非常ベルの音。館内放送で避難を指示する千冬の声が鳴り響く中、イーグル型の姿を探す。そしてそれは直ぐに見つかった。だがその光景をみた静司の顔が、固まる。

破壊され、部屋と部屋の区分けなど無くなったその視線の先。

何人かの生徒が気を失い倒れているその更に先。

司令部程ではないが、他の部屋よりも広いその部屋の壁際にイーグル型は居た。

静司の突入に気づいたのかゆつくりと、静司に向き直る。その腕には何かを掴んでいた。イーグル型はそれをまるで見せつけるかのようにつくりと掲げる。

それは赤い液体を流し、気を失った少女の姿。サイズの合わないかぶかの制服を着た小柄な少女——布仏本音。

「貴様あああああああああああああああ!?!」

静司が吼える。打鉄を唸らせ大型ブレードを振りかぶりイーグル型へ迫る。だがその機体が突然がくん、と停止した。

——システムに深刻なエラー発生。緊急停止。システムに深刻なエラー発生。緊急停止。システムに——

「だからどうし——」

このタイミングでの突然のエラー。その不自然さを訝しむことなく黒翼を呼びだそうとする。もはや偽装も何も関係ない。だがその視界も光に遮られた。

「がはっ!?!」

本音を掴みあげるイーグル型。その腹部が展開し光学兵器を放つたのだ。シールドを突き抜けて直接機体にダメージを受けた打鉄が反対側の壁まで吹き飛ばされた。視界が真っ赤に染まり、耳鳴りが響く。体中が悲鳴を上げもがこうとするが、動かなくなったISは拘束具以外の何物でもない。

「静司、大丈夫——っ!?!」

ごわんごわん、と耳鳴りがする中、シャルロットの声が聞こえた。続いて赤く染まった視界の中にもその姿が映る。上空の敵を鈴に任せたのか、それともそのまま追って来たのか。今の静司には分からない。

シャルロットは静司に近寄ろうとして、しかし本音を掴むイーグル型を見るとその眼を見開いた。

「本音!?!」

その光景にシャルロットの動きが止まる。その隙にイーグル型の腹が再び光る。シャルロットもそれに気づき避けようとして、しかしそれを辞めた。何故ならシャルロットの後ろには静司が居たからだ。(構わない、避ける!)

上空での戦いの上、必殺武器の三連射。ラファール・リヴァイヴカスタムⅡもエネルギー残量は少ない筈。気づいた静司が叫ぼうとするが、喉に血が詰まったのか声が出ない。そして静司の目の前でシャルロットに光が直撃し、倒れた。

「あ……かはつ、……っあ」

叫びは声とならず、意味の無い言葉の羅列にしかならない。そんな静司をあざ笑うかのようにイーグル型の眼が光る。ゆっくりと、見せつけるかの様に。血に染まる本音を掲げながら近づいてくる。やがて、倒れたシャルロットの元まで来ると、その体を踏みつけた。ゆっくりと、徐々に力を入れていく。その様子はまるで静司にこういつている様だった。

『お前には、何もできない』と。その光景に怒りつつ、しかし未だ覚醒しない頭の中で疑問が浮かんでは消えていく。

何故、こうなった？

何故、奴らは暴走した？

何故、暴走した奴らが学生を襲った？

何故、それが本音だった？

何故、それを見せつける？

何故――

『私の I S にも箒ちゃんにも力がある。けど君には無い。それを見せてあげる』

ふと思いつ出したのは出撃前の事。篠ノ之束が静司に漏らした言葉。その意味を考えた時、静司の中でパズルのピースが合わさっていく。

―― I S のコアはブラックボックス化していて、篠ノ之博士しか解析できない。

―― 突然の暴走。スペック以上のイーグル型。

―― 暴走中にも関わらず、統制がとれているかのような動き。

―― 突然動かなくなった打鉄。

―― そして、静司に見せつけるかのように二人を痛めつける姿。

『お前には何もできない。お前には力が無い』

衝撃から立ち直り頭が覚醒していく。自分の疑問に対する、最も確立の高い予測が浮かび上がる。そしてそれを理解した瞬間、静司の理性は弾けた。

「がああああああああ!?!」

意味の無い叫びを上げつつ黒翼を呼び出す。怪我も、その痛みも全

てを無視しての発動。静司の体を拘束していた打鉄が内部からの衝撃で、まるで自爆するかのように爆発した。

『?』

突然自爆したかの様に見える打鉄にイーグル型が動揺した様な動きを見せる。そしてそのセンサーが捉えなれない程の高速で、何かはその煙の中から飛び出した。

『!?』

それは一瞬の出来事。イーグル型のセンサーには一瞬、何が黒い影が伸びた様にしか見えなかっただろう。何故ならその一瞬でイーグル型のセンサーは破壊されたのだから。

炎の中、黒い影がゆつくりと立ちあがる。巨大な鉤爪のその腕でイーグル型を頭部から鷲掴みにしたその影は大きく翼を広げると、その羽に光が灯る。

R/Lブラスト。六本の光が超至近距離でイーグル型を襲う。もはやシールドなど関係なくその機体を焼かれたイーグル型が機能を停止する。それを投げ捨てる炎の中からゆつくりと影が進み出る。

それは黒翼の左腕と両翼のみを部分展開した静司の姿。静司はISを解除すると、床に倒れた本音とシャルロットの元へと向かいその体を抱き寄せ、震えた。

「すまない……」

全て自分のせいだ。もっと早く敵を倒していれば。最初から黒翼を使っていれば。あの時、篠ノ之束と対立していなければ。自分と、関わらなければ。

震えながら、涙を流しながら二人を強く抱きしめる。その体には体温がある。まだ、生きている。それは何よりも嬉しい。だが、こうなる事態を招いたのは紛れも無く自分と――

「篠ノ之……束……」

また、奪うのか。その無邪気さで。悪意無き狂気。姉達の時の様にまた奪うと言うのか。もしそうだとするならば、

「……………殺す」

静司の中にある黒い炎。力の源泉。それが今、新たな燃料によって

強く燃え上がる。

27. 学習

眼と鼻の先を銃弾が通り過ぎていく。それに肝を冷やしながらも、ラウラは攻撃の手を緩めなかった。高速で動く相手に大型レールガンは不向きだ。しかしラウラにはワイヤーブレードがある。まるで網を張る様に、宙で踊るワイヤーがイーグル型の動きを牽制する。イーグル型は器用に方向転換してはいるが、少しずつ与えたダメージが利いているのか、その動きに最初の様な精細さは無い。

「捕らえたぞー！」

イーグル型の進路を読み、先回りをする。それでもここで攻撃しても躲される事だろう。だがラウラのISにある特殊武装がそれを可能にする。

『!?』

AIC。シユヴァルツエア・レーゲンに搭載された停止結界とも呼ばれるそれがイーグル型の動きを止める。そこに出来た隙に、プラズマ手刀を叩きこむべく間合いに入る。だが、突如イーグル型の腹部が光り出す。

「なっ!?!」

腹部は閉じられたままの筈だ。しかしお構いなしに放たれた光学兵器は、腹部装甲を破壊しつつも放たれた。その反動でイーグル型が傾き、ラウラのプラズマ手刀は掠るに留まった。更にはAICが解かれると至近距離のラウラに向けてもう一度その腹部が光る。

「味な真似をー！」

スラストーを全開で吹かし、その光の一撃から逃げ出す。放たれた光学兵器は遙か遠く、海上に着弾し大きな水しぶきと蒸気を上げた。それを横目に見ながらお互い再び距離をとる。

イーグル型との戦いはラウラの予想とは違う展開を見せていた。その原因は福音にある。

イーグル型から注意を逸らさずに、ちらり、と福音を見る。福音は一夏達の撤退以降、追う事も、こちらに攻撃を仕掛ける事も無く微動だにしていな。まるで興味が無いように。いや、そもそも暴走して

いたはずなのに今はそんな様子が見えない。

(何かを狙っている……？ 違う。待っているのか?)

その意図は読めないが今は助かっている。お蔭でイーグル型との戦闘に集中できる。しかしそれもそろそろ終焉だろう。セシリア達も安全圏まで逃げ延びた筈だ。後は自分も撤退するのみ。

再びイーグル型が動き出す。ラウラも反応し、一気に下降。海面スレスレを高速で駆ける。イーグル型もそれを追うように飛び、銃弾を浴びせてきた。その一撃一撃を右に左に回避しながらラウラはレールガンを後ろ向き、海面に向けて放った。

大きな衝撃。海面が爆発し蒸気が湧きあがる。衝撃で吹き飛ばされた海水が雨の様に降り注いでいく。だがISのハイパーセンサーはこの程度で相手を見失ったりしない。

ラウラはレールガンで巻き起こった海水による雨の中反転。両手にプラズマ手刀を展開すると海面を斬りながら迫るイーグル型へ突進する。斬られた海水が蒸発し、更なる蒸気を巻き上げる中、二機は激突した。

「痛っ……い！」

すれ違った二機。傷を負ったのはラウラだった。腕の装甲が砕かれ、シールドを抜けたその攻撃はラウラの肌にも血を流させていた。だがそんな事を構うことなく再び反転。再度挑みかかる。イーグル型もまた、同じように向かってきた。その様子を見たラウラの口が笑う。

「馬鹿め」

呟きつつ一つの信号を送る。同時にイーグル型の真下の海面が突如爆発した。予想外のその衝撃に姿勢を崩し、水を切る様に転がるイーグル型にラウラが迫る。その肩には、先程まであったレールガンが無い。

「終わりだ！」

姿勢制御を取り戻せないイーグル型。それに今度こそプラズマ手刀が直撃した。装甲が砕かれ、シールドエネルギーがゼロとなる。一瞬もがいたものも、これまでの蓄積ダメージもあったのかイーグル型

は遂にその動きを止めた。

だがラウラに喜んでいる暇はない。今までは静観していたと言ってもこの隙に福音が攻撃を仕掛けてこないとは限らないのだ。ワイヤーブレードで機能停止したイーグル型を捕獲すると即座に戦域から離脱する。

「上手くいったか……」

イーグル型の真下で起きた爆発。それはひそかに海中に忍ばせたレールガンのユニットだった。水蒸気と雨で攪乱した隙に切り離れたそれを海中に忍ばせ、敵が通ると同時に自爆させる。上手くいくかは賭けだったがどうやら勝ったようだった。

ちらりと背後を確認するが福音に追ってくる様子は無い。その事に安堵しつつラウラは速度を速める。これで終わった訳では無い。連絡が取れない花月荘や、一夏の様子が心配だ。蓄積ダメージが大きい為、思った以上に速度が出ない。そんなISにやきもきしつつ、はやる気持ちを抑えながらラウラは花月荘へ向かい飛び続けた。

「いい加減、しつこい！」

鈴の放った衝撃砲がイーグル型の足を掠る。その衝撃に態勢を崩した所に、地上から放たれた銃弾がイーグル型に叩きこまれた。

「これ以上、やらせません！」

撃つたのは真耶だ。一度は墜落したのも鈴に助けられた後、彼女も復活していた。だが機体のダメージはそうはいかず、これ以上の飛行は危険であるために地上からの援護射撃に徹していた。同時に、もし敵の攻撃がこれ以上花月荘に及ぶようなら身を挺しても守る為でもある。

『……！』

「これ以上アンタに構ってる暇は、無いのよ！」

真耶の銃撃の隙に接近した鈴が《双天牙月》を振り下ろす。その一撃がイーグル型のシールドエネルギーを更に削っていく。

元々最初に彼女達が苦戦したのは状況が悪かった性もある。三体

三とはいえ、機動力は相手の方が上なのに加えて、敵は花月荘の上空から離れようとしなかった。故に流れ弾に注意しなければ戦わなければならなかった。しかし今は二対一。三対一の時の様に圧倒的とは言えないにしても、地上は真耶が守りつつ援護を行い、その間に鈴が攻撃を仕掛けるといふ戦術で少しずつ相手を疲弊させていた。暴走した敵機に体力という概念があるのかは不明だが、エネルギーは確かに存在する。そして無限のエネルギーなど存在しない。二人のコンビネーションにより、少しずつ戦局は有利に傾いている筈だった。しかし二人の顔には安堵や喜びは無い。

「織斑先生！ 花月荘に突入した敵は!?!」

『今向かっている！ お前達はそちらに集中しろ！』

「集中なんて……出来る訳!」

「凰さん、来ます!」

迫るイーグル型を切り払いながらも、花月荘を気にして焦る鈴に真耶が注意を促す。いつもならここで千冬も何かしら言う所だろうが、彼女は今花月荘に突入したイーグル型を抑えるために動き出している。本来、花月荘にはあと一機ISが残っていたが、イーグル型突入の衝撃で瓦礫に埋まってしまった為、生身で向かうしかないのだ。

(ティナ、本音、シャルロット、川村、それにクラスの皆……無事できてよ!)

ルームメイト、友人、そしてクラスの仲間たちの事が心配で堪らない。しかし千冬の言う通り、目の前の敵を野放しにする訳にはいかないのだ。焦る気持ちを怒りに変えて鈴はイーグル型を睨みつける。

《双天牙月》をもう一基呼び出すとそれを連結。

「山田先生!」

「はいっ!」

鈴の意図に気づいた真耶がイーグル型へ銃弾を放つ。正確無比なその射撃はイーグル型腕を捕らえ再び怯ませる。

「く、ら、ええええええ!」

鈴が《双天牙月》を振りかぶり投擲。しかし真耶の射撃に比べて大ぶりなその攻撃は躲されてしまう。だが、それでいい。

「その態勢で、攻撃を回避しようと思えば、その方向は限られます！」
ゴウン、と鈍い音が響く。イーグル型の胸部装甲が砕かれ火を噴いた。動きを読んだ真耶の射撃が、今度こそその正面に直撃したのだ。そして、

「落ちなさいよおおお！」

叫びながら鈴が最大出力の衝撃砲を叩きこむ。もはや回避どころでは無かったイーグル型にそれは直撃し、その装甲をまき散らしながら墜落していく。シールドエネルギーも切れたのだろう。だが、まだ動くだけのエネルギーはあるのかわずかにもがいている。そのイーグル型に影がかかる。

「私たちの学園に喧嘩を売った報いよ、その身に刻めえええええええええ！」

それは《双天牙月》を振り破り、太陽を背にした鈴の影。投げた武器をもう一度呼び出した彼女が、最後の一撃とばかりに振り下ろす。回避は不可能。直撃を受けたイーグル型は遂に力を失い、そのまま砂浜に叩き落された。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

肩で息をしながら砂浜で倒れるイーグル型を注視する。破壊された装甲の内側、気を失った女性の姿が見える。少し動いている事から死んではいない。だが機体の方は完全に停止した様だった。

「よし、これで——」

花月荘に突入した最後の一機に集中できる。そう考えた矢先だった。

突如、その花月荘から黒い影が空に飛びだした。

時折赤い光が走る黒い全身装甲。異様に巨大な鉤爪の様な手足。そしてその肩から左右に広がる巨大な翼。それはかつて自分と一夏を救った黒いISだった。

「アイツは?！」

何故ここに? それにアレはいま花月荘から出てこなかったか?

中は一体どうなっている? 様々な疑問が浮かぶ中、その黒いISはゆつくりとその体を海とは逆側、山の方に向ける。一体何を? と

いう疑問の答えは直ぐに出た。

黒いISの翼。そこにある砲口が光ったかと思うと、収束された光線が山に向けられた発射されたのだ。

「なっ!？」

放たれたのは六発。その光線は着弾すると爆発と轟音を撒き散らし山を焼いた。その突拍子もない行動に混乱するが、黒いISは微動だにせず、翼の角度だけずらすと再び発射を繰り返す。自然豊かだった筈の山は一瞬にして炎と煙が舞う地獄の様な光景に変わっていた。しかしそんな事を気にせず黒いISは砲撃を繰り返してゆく。

『山田先生、鳳!』

「っ、織斑先生! 花月荘の皆は!？」

黒いISが作り出す光景に啞然としていた鈴だが、千冬の通信に気を取り直すと最も気にしていた事を尋ねる。

『数名負傷したが命に別状はない! それと敵はすでに無力化されている!』

「無力化?」

あの黒いISがやったのか? それとも静司やシャルロット達か? 疑問に思い訊くが千冬からもわからない、という返事がきた。どうやら千冬が突入した時には事は終わっていたらしい。

『こちらは生徒の救助にあたりたい。だが、あの黒いIS……奴は一体何をしている?』

「わ、わかりません……。無造作に山に砲撃している様にしか……」

真耶が困惑しながらも答える。確かにあのISは無茶苦茶に砲撃してる様にしか見えない。その目的は何だろうか? 考える鈴の視界にその山の中を走る人影が見えた。

「あれは……」

ハイパーセンサーの感度を上げズームする。逃げているのは日本人では無い、北欧系の男や女。山の木々に紛れるような服装をしており、鈴は直感的にそれが軍人だと気づいた。

「山田先生、あれを」

「え……? つ、成程」

真耶も気づきその眼を悲しそうに細める。その様子を見た鈴もなんとなくだが察しがついた。アレはどこかの国の諜報機関だ。

IS 学園はいかなる干渉を受けない。それが大前提。しかしだからと言って本当に何もしない程、世界は温くない。秘密裏に様々な組織が監視や調査を行っている事は鈴も知っていた。知っていて、しかし知らない振りをする。それはおそらくセシリアやラウラ、シャルロットも同様だろう。そして教師陣も。本音と建前。そういったものが複雑に絡み合った事情がある。全ては国の為だ。

よく見てみれば、他にもいくつかの場所で人影をセンサーがキャッチしていた。中にはアジア人らしき姿も見える。普段は学園の中で、監視も思う様にはいかなだろうが、今回はその学園から出ている為、ここぞとばかりに各国が情報収集に動いているのだろう。

しかしこうなつてくると、あの黒い IS の目的はその諜報機関の燻りだししか？ しかし逃げていくそれらには全く興味が無いように、黒い IS は砲撃を続けている。だがそこに変化が起きた。

黒い IS が放った六発の砲撃。その内の一発が、山にあたる前に弾かれたのだ。

「え？」

そこは何の変哲もない木々の筈だった。だが確かに黒い IS の攻撃は弾かれた。

黒い IS が砲撃を止めそちらに向く。

『ソコカ』

鈴のハイパーセンサーが、黒い IS から漏れた声を拾う。それは機械により無機質な電子音声に変えられていたが、何故だか鈴はそれごとつともなく恐ろしい物に感じた。そして肩を震わせる鈴の視線の先で、黒い IS は山に向かって飛び出した。

簡単な話の筈だった。

束は花月荘より少し離れた山中で首を捻る。

世界初の第四世代と血を分けた妹のデビュー戦。更には大切な友

人の弟に箔をつける。その為にも銀の福音は格好の素材だった。

お膳立ても彼女にとってには造作もない。福音に小細工をし、ある程度の指向性を持った暴走をさせる。紅椿についても、箒がパーソナライズを始めた時点で適性をSに変える様に命令した。その結果、箒は自らが思っている以上に自在に動かすことが出来た筈だ。

IS適性。それは正確に言うならば、『コア意識との相性』と言う事になる。全てのコアには意識がある。未熟なものから成熟な物まで様々にだ。そしてコアには性格もあり、それが適正に大きく関わってくる。

搭乗者が初めて触れたコア。そのコア意識との相性によって適性ランクは決定するのだ。触れられたコアは搭乗者を認識し、自らとの相性を認識し、それを他のコアにも共有化する。情報を受けたコア・ネットワーク上のコア達はその人物の適性を共有する。つまり、IS適性の可否は初めて触れるコアによって左右されるというギャングブル的な側面を持っているのだ。

箒が初めて触れたのは打鉄。その打鉄のコアの意識と箒はあまり馬が合わなかった。それ故に彼女の適性はCとなり、その情報が共有化された。

しかし紅椿は違う。箒との相性を最高ランクで更新する様にあらかじめ命令を加えておいた。更にはその更新を他のコアにも共有させた。それ故に、箒は自らが考えている以上に紅椿を思い通りに動かすことが出来たのだ。

そして一夏についてもそう。本来なら男性との相性は皆無の筈だが、一夏だけは除外する様にコア・ネットワークに命令を流しそれが共有化されたのだ。

そうして出撃した箒と一夏達。お膳立ても完璧。後は福音を倒して華々しいデビューを飾る……筈だった。実際は何故か一夏は撃墜され、箒は戦意喪失し二人は撤退。イーグル型はドイツ人が倒していた。

そしてもう一つの計画。生意気な二人目にちよつと痛い目を見せるといふ計画もどこからか狂い始めた。花月荘を襲撃し、アレと一緒

に居た女を少しだけ痛めつける。彼女には何の恨みも無い。そもそも東はその女に対して何も思っていない。大事なのは、アレと一緒に居たという事だ。

己の目の前で大切なモノが傷つき、そして自分が何も出来なければ己の無力を思い知るだろう。加えて、一夏達が福音を倒して帰ってくればそれは際立つ。チープではあるが、それ故に効果的であると東は考えていた。

東はこの行為が残酷であるとは考えていない。別に殺す気は無いし、ちよつと痛い目を見てもらい自分の立場を思い知らせる。それだけの理由。それはまるで子供の嫌がらせ。

そもそもアレがISを使うこと自体、本来おかしいのだ。東が許可を出した男は一夏のみ。ならば何故使えるのか？ おそらくどこかのコアが自己進化の過程で、アレを受け入れる進化をってしまったのだろう。そしてそれが共有化された。そのコアについては後々探し出して『調整』する必要がある。

そうして始まった花月荘襲撃。途中までは順調だった。追ってきたアレのISを強制停止させ、捕らえた女もこれ見よがしに見せつけた。追ってきたもう一人の女も、ついでだから演出の道具とした。あれの顔は中々に滑稽で、すつとする思いがあった。

だがその直後に理解できない現象が起きる。

突如、アレのISが自爆したのだ。ハッキングしたイーグル型の視界越しに見たその光景に東は一瞬青ざめた。殺すつもりなんて無いのだ。あんな思いは二度と感したくない。

だがその恐れも驚きにも変わる。至近距離での打鉄の自爆にセンサーが白に染まった一瞬。その一瞬の先、東が見たのは視界いっぱい広がる黒い何か。その直後センサーは死に、イーグル型もほどなくして機能を停止した。

そして状況は分からず、首を捻る東の前にそれは現れた。

黒いIS。

かつて自分の無人機を破壊し、不快な気分させた謎のIS。そのISは無差別に山を砲撃したかと思えば、こちらに迫ってきている。

その姿に東は言い様も知れない不快さを感じた。

「なんのかなこいつは」

東がいる辺りにはIS学園のアリーナとは比べ物にならない程の強固さを持つシールドが張られている。そのシールドが周囲の木々に紛れるように偽装されており、東の姿を隠していた。何せこの山の中にはあちこちにネズミが居るのだ。見つかつては相手をするのが面倒だった。しかしそのシールドの偽装も先の砲撃で暴かれた。何せ、辺りは焼かれているのに自分の周囲だけは無事なのだ。これほど不自然な物はないだろう。

そしてそのシールドに黒いISが衝突した。青白いスパークと波紋がシールドに広がる。激突の衝撃は波となつて、周囲の炎を消し飛ばす。しかし破られることは無い。それは当然だ。この自分が作つたのだから。

東は目の前でシールドにその巨大な鉤爪を突き立てる黒いISを見やる。全身装甲。巨大な両翼。時折その装甲の表面を赤い光が走るのが不気味さを感じさせる。更には、このISはシールドを展開していない様に見える。折角の防御機能を使わないとは頭がおかしいのだろうか？

『——ツネエ——』

「ん？」

黒いISを観察していた東だが、黒いISから漏れた声に首を向ける。全身装甲のその頭部。赤く光る眼の様なセンサーと視線が重なる。その瞬間、ぞくり、と肩が震えた。

『シイノノオ、タアバネエエエエエエエエエエ！』

それは怨嗟の声。東に向けられた地獄の底から這い出るような、殺意。だが東にはこのISにそれを向けられた理由が分からない。だが嫌な感じがする。

「五月蠅いよ、お前」

吐き捨てるように呟くと手を上げる。それを合図として、黒いISに遙か上空から放たれた銃弾が直撃した。その衝撃で黒いISは吹き飛ばされ地面を転がる。続いてシールドの外に二機の無人機が降

りてくる。今まで戦域から少し離れた上空で待機させていた無人機達だ。二機の無人機はその両腕の銃口を倒れる黒いISに向けたままゆっくりと近づいていく。そしてその砲口が光った瞬間、二機の無人機の腹は貫かれた。

『……』

瞬時加速。倒れた状態からの一瞬の奇襲で二機の無人機を鉄屑へと変えた黒いISがゆらりと束を睨む。その両腕には鉤爪で貫かれた二機の無人機。それをまるでゴミの様に投げ捨て、再びシールドへと飛びかかる。その姿は最新鋭の兵器であるのにも関わらず、どこか追い詰められた獣の様であった。

「不愉快だよ」

束は投影ディスプレイを呼び出すとコンソールを叩きだす。コアネットワーク接続。現在稼働する全てのISに命令を送る。内容は自分への攻撃行為を行うISの全停止。これで問題な――

ガキッン、と音が響く。目の前で黒いISが再びシールドに爪を突き立てている。

「あれ？」

きよとん、と目をぱちくりさせる。おかしい、命令は出した筈だ。もう一度同じプロセスを通してみるが結果は同じ。目の前のISは相変わらずシールドに攻撃を仕掛けている。

ならば、とばかりにコアネットワークを検索。目の前のISのコアナンバーを確認しようとするが、その結果は『該当なし』と出た。おかしい、そんなもの存在する筈はない。

「どうして……？」

得体のしれないIS。それに対して束は初めて恐怖感を覚えた。

「あらあら、面白い事になってきたわねえ」

そんな様子を眺めながらカテーナは楽しそうに笑っていた。その横ではシェーリが無表情でその戦場を眺めている。その様子はどこか不機嫌そうだ。それに気づいたカテーナが訊く。

「あら、どうしたの？」

「いえ、少々見苦しいものでして」

「へえ……ああ、成程」

シエーリが見ているのは黒い I S。川村静司だ。かつて自分と死闘を繰り広げた相手の、様子が気に入らないらしい。

「貴方と戦った時も似たような状況じゃなかったかしら？」

「はい。しかし自業自得である状況です。それが無様でして」

ふむふむ、と興味深げに訊くカテーナ。彼女は機械に繋がれたコアに視線を向ける。

「貴方はどう思う？」

「わからない。なぜ、あの I S は、おこっている？」

「コアの意識が言葉となって画面に映し出される。」

「それはね、大切な人たちを傷つけられたからよ」

『たいせつ』

「そう、大切。貴方にもあるかしら？」

『それは、はは、のみ。なぜなら、わたしは、I S』

「あら？ だけどよく見てごらんさない。博士に攻撃を仕掛けるのも I S よ？」

『……』

揺らいでいる。悩んでいる。それこそがカテーナが望んでいた展開。笑みを強めると再び語りかける。

「じゃあ質問を変えましょう。シエーリが言った自業自得の意味について、どう思う？」

『わからない』

「そう、じゃあ教えてあげましょう。あの黒い I S はもっと早く出すべきだった。しかしそれをしなかった。それは何故か？」

カテーナはシエーリへと視線を移す。シエーリは頷くと語り始めた。

「これは推察ですが、壊したくなかったのでしょうか。今ある日常を」

『いみが、わからない』

「勿論任務の為や隠ぺいもあつたのかもしれませんが。ですがおそらく

あの少年は、あの I S を使い、もし正体がばれた後の事を恐れていたのですよ」

『しようたい、かくす。それがばれるのを、おそれる。それは、ふつう』
「確かにそうです。しかし彼が恐れたのはその更に先。正体がバレ、彼は更に世界的に特殊な存在になる。そうなれば学園にはもう居られない。意識か無意識なのはわかりませんが、それを恐れていたのでしょうか？」

『がくえん、たいせつなひと。はなればなれ？』

「正解。よくできました」

カテーナがコアを撫でる。だがコアにはまだ疑問があった様だ。

『なぜ、わかる？』

「あら？」

『あの I S はてき。なのに、どうして、わかる？』

それは当然の疑問なのかもしれない。しかしその当然をこのコアが、問いかけた事には大きな意味がある。だからこそカテーナは応えた。

「それが推察すると言う事。自分達で情報を集め、正しいと思う答えを導きだすと言う事。私たちはあの少年の日常を調べ、その性格を分析し、そしてある程度は理解した。そこから導き出された答えよ」

『みちびきだす』

「そう、だからね、私は期待してるの。この出来事が終わった後、あなたが何を考えどんな答えを導き出すか」

このコアは優秀だ。きつと大きな変革の核となる。

カテーナは未来への核心に笑みを深めながら戦場を眺めていた

「B9！ 応答しろ、B9！ ……くそつあの馬鹿が！」

「まずいわよC1。黒翼の姿が世界各国の誇る盗撮軍団課報機関に丸見え。最も見てる暇も無さそうだけど」

「どつちにしたってこの状況は不味い。ああ。本当に不味い！」

悪態をつきながらC1はたった今逃げ出してきた山の方へ向き直

る。先ほどまで彼らが居た辺りは今や焼野原。逃げていなければ今頃どうなっていた事か。

彼らが逃げる事が出来たのは黒翼の砲撃直前、静司より通信があったからだ。

「一言『退避しろ』だけだぞ？ 説明も何もなしだ。教育方法間違えたかな俺達?!」

「帰ったら家族会議ね。課長と社長の予定聞いとかないと」

「現実逃避しないで下さい！ どうするんすかこの状況！」

肩で息を鳴らしながら土まみれのC12が悲鳴の様な声を上げる。その周りの仲間も全員今や土まみれだ。静司の度重なる砲撃によって山肌は荒れるに荒れ、木々はなぎ倒されるか焼けている。そんな中を走って来たので当然とも言えた。

「どうするもこうするも。あの馬鹿は止めなきやならんだろうが」

「だからどうやって!？」

「知るか！ あの馬鹿人の話なんて聞いてやいねえ。いや、聞こえてないのか……?」

苛立ち気に地面を蹴りながら、空を見上げる。そこでは黒く巨大な翼を持つISがその武器のある一点に向けて撃ち続けている。そしてC1達はその攻撃点に何があるのか……いや、何が居るのかを知っている。知っているからこそ苛立つのだ。

可能性はあった。ISの暴走と言う時点からC1達は篠ノ之束の関与を疑った。そしてもし本当に関与しているのなら近くに居るのではないかと予想を立て、密かに搜索していたのだ。静司には秘密で。本来なら伝えておくべきだったのだろう。しかしあえてそれをしなかった。もし本当に束が関与していた場合、静司が冷静でいられるかという判断がつかなかったのだ。しかし今はそれが裏目に出ってしまった。

あらかじめ言っておけば、もう少し冷静で居られたかもしれない。自分たちが早く篠ノ之束を確保していれば、こんなことにはならなかったかもしれない。いや、それ以前に搜索などせず、学園生を守る事に徹していれば。結局自分たちは何の為にここに来たのか――

「C1」

C5の手が肩にかかる。彼女はゆっくりと首を振った。

「何を考えているかはわかるわよ。けど、『たら』『れば』は無意味よ」
「……ああ、わかってる」

深呼吸を一つ。そして気持ちを入れ替える。どうやら自分自身も相当に焦っているらしい。悔やむのも反省も後だ。今はやるべきことをやる。振り返ればC5や他の仲間たちが指示を待っている。だからC1は気合いを入れ直し、告げる。

「チームを二つに分ける。俺とC5だ。C5は花月荘へ。まさかとは思うが、この機会に潜入しようとする盗撮野郎が居るかもしれないからその排除だ」

「C1は？」

問われC1は肩を竦めつつ背後をちらりとみやり、

「一つはアイツが破壊した無人機の回収。そしてもう一つは——あの馬鹿の世話だ」

そう言った。

——殺す。

その体を引き裂き、脳髓をくり抜き、四肢を押しつぶし、頭蓋を砕き、塵すら残さずこの世から完全に抹殺する。

黒く染まりゆく思考の中、静司は黒翼のその巨大な爪を篠ノ之束に振り下ろす。その動きには一切の容赦も、躊躇も無い。だが、

「クソがああああああああつ！」

目の前に。後一步先に居るのだ。篠ノ之束が。憎むべき仇が。忌むべき悪魔が。眉を潜めてこちらを見つめているのに、しかしその一歩から先へと進めない。束の周囲に張られた不可視のシールドが静司を、黒翼を阻む。そのもどかしさに怒り、あふれ出る殺意に押しされ、黒翼の両翼が大きく広がる。

砲門展開。チャージ開始。目標までの距離、3メートル。R/Lブラスト——発射。

黒翼の主力装備である六本のエネルギー兵器が超至近距離から放たれる。光の柱がシールドに直撃し、爆発的な衝撃が荒れ果てた山肌を更に削っていく。しかしそれですらシールドは弾き、分散されたエネルギーの奔流は周囲を破壊しながらも撒き散らされていく。

明らかに異常な強度。しかしその異常性こそが篠ノ之束。稀代の天才にして天災と言われる力。

だが、それがどうした？

「しい、ノおのおの……たあばアねエえツエエええええ！」

再度R／Lブラストを放つ。爆発と衝撃は至近距離の自分自身すら襲い、黒翼の装甲の一部が砕けていく。構わずに何度も突き立て続けた爪もまた、その鋭さを失いボロボロになっていた。そんな静司を見つめていた束が口を開く。黒翼とシールドの激突の余波で起きる電気が弾ける様な音のせいで上手く聞き取れないが、口の動きで何を言っているのかは分かった。

『無駄なんだよ』

確かにそう言った。

「ふざあけるうなあああああ！」

まるで駄々をこねる子供の様に、両腕をシールドに叩き付ける。そのまま宙に上がるとその左腕をシールドに向けた。その左腕の鉤爪が合わさり、槍の様な形状へ変化していく。爪の周囲には黒と赤の混じった光が収束し、唸り声をあげる。まるで巨大な槍の様になったその左腕の武装の名は《クエイク・アンカー》。かつてとある研究所をこの世から消し去った殲滅兵器。その最大出力が篠ノ之束に向けられた。

『おい!? B9! いくらなんでもそれは不味い——』

専用回線から声が聞こえる。しかしその声に耳を傾けることなく、静司はその引き金に手をかける。

「死——」

引き金を引く直前、黒翼の翼が彼方より飛来したビームに貫かれ爆発し体勢を崩した。しかしそれに構わず《クエイク・アンカー》は発射された。放たれたそれは本来の狙いを逸れ、篠ノ之束で無くその

後方にある別の山肌に着弾した。着弾点から赤と黒の光の波紋の様に広がっていく。元々先の静司の無差別砲撃で荒れ果てていた山だが、その波紋が広がるにつれあらゆる木々は倒れ、砕かれ、山そのものも形を崩していく。地響きと破壊の波紋はそれに留まらず広がっていき、その周囲一帯を砕いていく。やがてその波紋も徐々に収まっていき消えていった。後に残ったのはもはや緑は見えず、砕かれ、その中身を露わにした山だった物。それだけだ。

凄まじいほどの破壊の波紋。それを引き起こした静司だが、その本来の目的であるシールドの破壊は狙いが逸れた事により失敗した。更には黒翼に攻撃をしかけた無人機が取り囲んでいく。その数は4機。先ほどより多い。

「邪魔を……するなああああああ！」

静司が、黒翼が吠え、正面の敵機に迫る。だが無人機はそれを紙一重で躲すと4機の砲口が全て静司に向けられる。静司もまた、それを回避しようと動くが片翼が半壊した今、その機動力は落ちており着弾を許してしまう。

衝撃と激痛。耳鳴りが響き、視界が霞む。黒翼にシールドバリアーは無い。何故ならその分のエネルギーを攻撃と機動に割いているからだ。そうでなければ《クエイク・アンカー》の様な武装はそうそう使える訳が無い。シールドバリアーは通常のISには当然の様についているが、近代兵器を容易く破壊する武器からその機体を守ると言う事は、凄まじいほどのエネルギーが使用されているのだ。その全てを攻撃に回すからこそあの破壊力なのである。逆に言うなら、黒翼にはその強力なシールドバリアーが無いと言う事は、近代兵器でも落とされかねない危険性もある。

「だからどうしたー！」

痛みも、耳鳴りも、全てを無視して静司は吠え続ける。無理やり体制を立て直し瞬時加速を発動。無人機の一機の頭部を掴みあげ、そして握りつぶした。

『!?!』

頭部を破壊された物も未だ動く無人機が黒翼を殴りつける。再び

宙に投げ出された静司だが、両膝のワイヤーブレードを射出。自分を殴りつけた無人機と、もう一機に突き刺さる。

「鬱陶しいんだよ!!」

ワイヤーを巻き上げる。同時に自らのスラスタも全開で噴出す。まるで引き伸ばされたゴムが元に戻るかのようになり、お互いが高速でぶつかり合った。小さな爆発が起き、3機が炎に包まれる。残った2機の無人機は両腕の砲口をその炎に向けると躊躇なく発砲した。

炎の中、新たな爆発が起きる。それに構わず数十秒間2機の無人機は射撃を続けた。炎と煙が広がっていく。その中から1機のISが飛び出した。

『!』

2機のISは即座に反応しその飛び出したISへ照準を合わせる。だが、

『!?!』

その動きが止まる。何故なら飛び出したISは黒翼でなく、原型を留めない程に破壊された無人機だったからだ。そしてそれに気づいた時にはもう一つ、炎の中から飛び出てきた影——黒翼の鉤爪が目前まで迫っていた。

「人形が……邪魔をするなあああああああああ!!」

黒翼の右腕が無人機を貫く。コアごと貫かれたその無人機が機能を停止する。静司の動きは止まらない。その体を大きく回転させ最後の1機に向き直る。ワイヤーが突き刺さったままの無人機がその軌道に沿って叩き付けられた。

衝撃。ワイヤーブレードが外れる。あの程度ではダメージは対して無いだろう。だが牽制にはなった。

R/Lブラスト。片翼は破壊されたがもう片方は生きている。そこから放たれた3本の光が最後の無人機に直撃した。無人機は己が手を交差させ、ダメージを軽減しようとしていたがそこに隙が出来る。その隙に接近した静司が無人機をシールドへ——束に向けて蹴りつける。

蹴りつけられた無人機は地面に叩き付けられ、バウンドしつつ束の

シールドの直前に転がっていく。束が目を見開いてそれを見つめる先、その無人機の頭を潰すかのように黒翼が着地する。足元で金属が押しつぶされ、もがく無人機の音を聞きながら静司はシールドに再度鉤爪を叩き付けた。

「出てこいよ……逃げんなよ……ふざけた物ばかり作るその四肢を切り裂いてイカレタその脳髓を抉ってふざけた服ごと磨り潰して何も見ない目を握り潰してガタガタ五月蠅い喉を切り裂いて首を跳ねて殺してやるからそこから出てこい篠ノ之束ええええええええ!!」

二人の間はほんの数メートル。その距離から放たれた怨嗟の声に束の肩がびくり、と震える。だがそんな様子すら静司の怒りに拍車をかける。まるで怯えた女性のようなそんな動きはお前には似合わない。

「もういい、もう殺——」

がしり、と足に違和感。見下ろすと踏み潰していた無人機が黒翼の足に縫りついている。何を？ と疑問に感じたのは一瞬。その無人機が何かを量子変換し装備した。黒翼のハイパーセンサーがそれを即座に解析する。その結果は——爆弾。つまりは、自爆。

無人機の狙いに気づいた瞬間、無人機から光が溢れ静司を包み込んでいく。

そして静司の世界は光と熱に包まれた。

パチパチと炎が燃える音が聞こえる中、静司はゆっくりと目を開いた。視界は半分赤く染まっている。どうやら頭部から出血している様だった。ふらつく体を起きあがらせ、しかし直ぐに崩れ落ちる。足を見てみると無人機に取りつかれていた足の装甲はボロボロに砕けており、その下の肉体もまた大きく傷つき血を流している。本来なら生きているのが奇跡なのだ。直前で残った片翼で体を包み防御をしたが至近距離の爆発は全てを防ぎ切れなかった。その翼も今や骨組みだけを残すのみ。

そんなふらつく体と機体で静司は周囲を見渡す。だがそこにはも

はや何も無い。木々も、無人機の残骸も、そして篠ノ之束も。

「く……そ、がああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

ガンツ、と地面に腕を叩き付ける。衝撃で更に装甲が崩れ痛みが走る。それすら構わずに何度も何度も地面を叩き付ける。

逃がした。逃げられた。結局、博士の好き勝手を許し、何も変える事が出来なかった。そんな自分は酷くみじめで、酷く、憎い。

「無様ですね」

一人慟哭を上げる静司に声がかかる。炎の中からISを纏った女がゆっくりと進み出てきた。

「貴様は……」

「無様で滑稽で……見苦しい。こんな男に私は撃退させられたのですか」

それはかつて学園地下で死闘を繰り広げた女。シェーリだ。

「黙れ……殺すぞ」

「今の貴方が言っても負け犬の遠吠えにしか聞こえませんか。本当に無様。いつそ私が殺してあげましょうか？」

チャキ、とシェーリのIS、ブラッディ・ブラッディがその手を振りあげる。だが、

「——そんなものでどうにかなるとでも？」

「ならねえな。けど無抵抗ってのは嫌いなんだよ」

新たな声。静司の背後から進み出たのは銃を構えたC1だ。その背後には同じく銃を構えたC12達が居る。

「成程。しかしほんの一瞬で私はあなたを殺すことができる」

「ああ、出来るだろうな。だがその一瞬を重ねて数十秒にしても俺達はこいつを連れて帰る。ここは俺に任せて行け、ってな」

「分かりませんね。その男の今回の行動は貴方達としても見過ごせない物だと思いますが？」

「そうだろうな。だがそれはこちらの話だ。てめえが関与する事じゃねえ。で、どうするんだ？俺達の壮大な死亡フラグの嵐を見たいか？全員言うぞ？『ここは俺に任せて行け』ってな」

数秒の沈黙。シエーリは腕を下げると踵を返した。その行動が意外だったのかC1が問う。

「逃がしてくれるのかよ?」

「ええ。元々殺すつもりはありませんでしたし。私は主の伝言ついでにこの男の無様な姿を見に來ただけです」

「伝言だと?」

「ええ、『貴方のお蔭でとてもいい勉強が出來た。そのお礼として逃がしてあげる』以上です。それでは」

それだけ告げるとシエーリは隠密機動を展開し、炎の中に消えていった。

静司はそれをただ見ている事しか出來なかつた。

28. 敗北者

完敗。

その言葉は彼女にとって縁の薄いものだった。今までの人生の勝負事で彼女は常と言つてもいいほどに勝ち続けていた。それは彼女自身の努力と天性の実力がそれを可能にしていたからである。常に勝利を手にし、やがては世界最強という座まで上り詰めた。そこそが織斑千冬であり、彼女自身もまた、己の実力に確かな自信があつた。これは過信では無く、誰もが認める事だ。だが今の彼女はその最強と
言う看板を叩き付けたい衝動に駆られている。

「状況は？」

「各機より報告。今の所、周辺空域に問題はありません」

そうか、と呟く千冬に応えるのは真耶だ。彼女はIS用のスーツを着ておりその手にはドリンクが握られている。

「私も直ぐにできます。織斑先生は——」

「いや、山田先生はここで指揮を引き継いでほしい。私の次では適任だ」

ぎよつ、と目を見開いた真耶が慌てて叫んだ。

「わ、私がですか!?!」

「そうだ。教員の中でISについて最も詳しいのは私か山田先生だ。私が留守をするなら必然的に指揮は君に移る」

「る、留守と言いますと」

「次にここに襲撃があれば私が出る。山田先生も負傷しているでしょう」

最初からそうするべきだった。驚いて何やら慌てている真耶を尻目に千冬は後悔していた。福音攻撃は機体の特性上仕方の無い事としても、花月荘の襲撃の際は明らかに自分のミスだ。相手の力を見誤り、結果生徒や施設に被害が出てしまった。

千冬として自分が無敵だとは思っていない。だがそれでももう少し、何とか出来たかもしれない。そう思わずには居られなかった。

それに銀の福音攻撃。機体特性上とは言うが、実行メンバーについ

ても彼女はミスをしている。先の作戦会議での静司と束の対立を思い出し、千冬は拳をきつく握りしめた。

(分かっていたはずだ。それに川村もデュノアも進言していた。だがそれを蔑ろにし、篠ノ之を選んだのは、私だ)

千冬が箒と一夏を選んだ理由。それは他ならぬ束の言葉があつたからだ。色々と問題の多い友人だが、その腕だけは確かである。その友人が作った第四世代のIS。その力ならいけるのでは無いかと考えた。そしてより現実的な静司達の案を織り込みつつも、結局は束の言葉に従った。

その結果が今の状況だ。一夏は撃墜され、ISの操縦者絶対防御の致命領域対応によって昏睡状態になっている。ISの全てのエネルギーを操縦者の保護に使っている為、ISの補助も深く受けており、エネルギーが回復しない限り操縦者も目覚める事は無い。更に言うなら、エネルギーを無理やり供給させると操縦者に負担がかかる恐れがある。それ故にエネルギーの自然回復によって、危険域を超えない限り一夏は目覚める事は無い。

攻撃に参加した他のメンバーも無事だったとは言えない。セシリアのブルー・ティアーズ、箒の紅椿は中破。幸い搭乗者である二人は無事だが箒の方は完全に完全に戦意を喪失している。そしてラウラだが――

「教官」

今まさに考えていた人物からの声に千冬は振り返った。そこに居たラウラは包帯やガーゼであちこちを覆っているものも、ぴしり、と直立して千冬を見上げている。

「ボーデヴィツヒか。歩き回って大丈夫なのか？」

「そ、そうですよボーデヴィツヒさん！ 休んでいないと！」

「あれから治療を受け、体も休めました。問題ありません」

福音攻撃組で一夏の次にダメージを負ったのがラウラだった。一夏達をセシリアに任せ、逃がす為に一人戦った彼女の機体はボロボロで彼女自身も大きく消耗しており、帰還と同時に倒れる様に眠り込んだのだ。

ラウラ達が帰還してから既に2時間は経っている。その間に花月荘は負傷者の手当てと簡単な現場検証を。そして戦闘に参加した者は治療や休息を得ていた。普通なら病院に搬送すべきだが、そこは天下のIS学園。臨海学校には養護教員の丸川を始め、優秀なスタッフと設備が同行している。ISでの訓練に怪我は付き物で有る為当然とも言えるが、今年は男性操縦者が居る為例年以上に準備は万端だったのだ。

「そうか。だが完璧と言う訳でもあるまい。無理はするな」

「教官、私は軍人です。その体が動く限り必要なときに必要な事をする様に鍛えられています」

引く気は無い、と意思を見せるラウラに千冬は嘆息する。この頑固さは誰に似たのだろうか、と親の様な気分で考える。

「……はあ、それで何が言いたいんだ？」

「私も静司の捜索に参加させて下さい」

やはりな、と千冬は再びため息を付いた。銀の福音攻撃組は散々たる結果だったが、これは花月荘に残った者達も同様だった。鈴と真耶は軽傷ながらも機体は中破。特に真耶の使ったラファールは本格的な修理が必要である状態だ。イーグル型突入の際にも何名かの生徒が負傷したがこれも大事は無い。だが本音とシャルロットは、辛い重症には至らなかったものも、意識は取り戻していない。謎なのはなぜイーグル型が学園生を狙ったのか。たまたま攻撃されたのが本音だったのかという所だが、真相は分からないまま。現場におり、何があつたかを知っているかもしれない静司に事情を訊きたいところだが、肝心の静司の姿が見えないのだ。

「花月荘周囲は既に搜索したが見つかっていない。だとすると山か海の方になるが、今のお前の状態でそれは許可できん」

「しかし教官！ あの山の状況です。もし静司があそこに居たのだとしたら早く見つけなければ……！」

「山に居ると決まったわけでは無い。それに居たとして何故そこに居たのかと言う問題もある。……とにかく今は教師達に任せてお前は体を休めている。指示は追って出す」

納得がいかないという表情をありありと見せるラウラを見つめながら、千冬は自分が今言った事を考える。それは見つからない静司についてだ。

そもそもあの時何が起きたのか千冬は把握できていない。分かっているのはイーグル型が花月荘に突入した事。それにより生徒数名が負傷した事。そのイーグル型がいつの間にか破壊され、花月荘から黒いISが飛び出した事。そして川村静司が行方不明となった事だ。

おそらくだがイーグル型を破壊したのはあの黒いISだろう。だがそうなるにあのISはどこから現れた？　そして静司はどこに消えたのか？　イーグル型の突入からは状況が混乱しており、正確な情報が無い。

（だが――）

花月荘から黒いISが飛び出し、そして川村静司は行方不明。だとすると結びつけるのは簡単だ。しかしいくらなんでもそんな事があり得るのかと考えてしまう。確かに辻褄は合う。だがそういう意味では、元々黒いISの搭乗者が別に潜入していた可能性。もしくは全く関係ない別の生徒がその搭乗者である可能性も否定できないのだ。現在静司が疑わしいのはその姿が見えない事にある。だからこそ静司の発見は急務と言えた。それは勿論、教師として教え子の無事を心配する思いもある。

しかしだからと言って負傷している生徒を使おうとするほど千冬も非道では無い。いや、むしろこれは教師としての矜持もある。実際、現在周辺空域を警戒している教師陣も疲れは見えながらも誰一人として根は上げていない。

「まだあの黒いISが潜んでいる可能性もある。敵だとは考えにくい
が、味方の保証もないのだ。そんな奴の前に今のお前達を出す訳には
――」

何かを言おうとするラウラを制するように千冬が畳み掛け始めた時、司令室代わりの部屋の扉が勢いよく開かれた。飛び込むように現れたのはセシリアだ。余程焦っていたのかぜえはあと息を乱れさせている。

「何事——」

「か、川村さんが見つかりました！ですが……」

どこか言いにくそうな様子のセシリアに嫌な予感を覚え千冬たちは駆けだした。

「どこに居る!？」

「げ、正面入り口まで来ています!」

入口という事は既にここまで連れて来ているのか、それとも自ら来たのか。疑問は多いが今は話を聞くことが先決である。千冬は急ぎ玄関までたどり着き、そして息を飲んだ。

「川村……?」

正面入り口。その扉に寄りかかる様に立っているのは確かに川村静司だ。その姿は血と泥で汚れ、かなりの傷を負っている事がわかる。しかし何より目を引くのはその顔だった。

「……」

昏く濁り、澱んでいるまるで生気の無い眼。何も見てない様なその顔は幽鬼の様でもある。

背後からラウラ達が追いついてきた音が聞こえたが、誰もが静司の様子を見ると息を飲んだ。普段の静司とはかけ離れたその異様な様子に声も出せずに硬直している。だが静司はそんな事を気にする事も無くふらふらとした足取りで花月荘の中に入ると千冬の横を通り過ぎてゆく。

「待て」

咄嗟に手を掴むと、ゆっくりと静司が振り向いた。その昏い眼の底に宿る感情を千冬は読み取る事が出来ない。だが、このまま無視をする訳にもいかない。静司には訊きたいことが多々あるのだ。だがまずやるべきことは、

「誰か、丸川先生に報告を。私はこいつを医務室まで連れて行く」

指示を受けた真耶が慌てて走っていく。その間も静司は抵抗する事も無く静かに佇んでいるだけだった。

静司が花月荘へたどり着く少し前。荒れ果てた山肌から離れ、被害が薄い山中に鈍い音が響いた。静司はその音と、頬走る衝撃でふら付き体はその場に倒れこむ。ぐわんぐわんと揺れる視界の中、こちらを見下ろす男の姿。

「C1!? 何やってんすか! B9も怪我してるんつすよ!」
「知ってるよ。だから黙ってる」

殴られたB9——静司に近寄るとC1はその胸倉を掴み上げた。

「答える静司。何故篠ノ之束に攻撃した?」

コードネームでなく名前で問うC1の言葉に静司が答える。

「あの女は……っ!」

「ああ、そうだ。お前の姉達の敵だ。お前の友人たちを傷つけ、今回の黒幕かもしれない女だ。それを承知で訊いてるんだよ」

がつ、という音と共に額に痛みが走る。C1が静司に頭突きを入れたのだ。痛みに眉を顰めるがC1はそれを気にすることなく続ける。

「いいか。あの時のお前の任務は何だ? 篠ノ之束を殺す事か? 違うだろうが! お前の任務を言ってみろ!」

「……っ! 織斑一夏と、その周囲の、護衛っ。そんな事は分かってる! 分かってるんだよ!」

「じゃあどうして福音の元へ行かなかった! お前は、居るかどうかも定かでは無い篠ノ之束を探す為にその姿を晒し、攻撃した! それも無差別砲撃でだ!」

確かに篠ノ之束の確保は重要事項である。だが今回に置いてそれは最重要では無い。一夏達の戦果を不明なまま、銀の福音を無視して篠ノ之束に向かったことが問題なのだ。

「確かに黒翼を使うタイミングを誤った。だがそれは俺達が指示しなかったミスでもあるし、そもそもIS相手に何も出来なかった俺達が偉そうに言うことでも無い。だが、使うのであればお前は真っ先に福音に向かうべきだったんだよ。先ほど調べたが織斑一夏は重症。そしてそれを逃がす為にドイツの嬢ちゃんが体張ったらしく、その嬢ちゃんも負傷した。今回は誰も死ななかつたがそれは結果論だ。もし彼ら彼女らが命を落としていたら、お前はどうするつもりだ? よ

しんば篠ノ之束を殺したとしても、福音が止まる保障など無いのにだ！」

わかるか？ と睨みつけるC1の剣幕に静司の瞳が揺れる。

「お前は護衛対象の……お前が友人だと思えるようになった連中を見殺しにして、自分の復讐だけしか考えて無かった。その結果がこれだ。別にお前の復讐自体は否定しない。なんなら手伝ってやってもいい。俺達は正義の味方ってわけじゃないからな。だがな、それはあくまで任務に支障が無いレベルでだ。護衛対象を——守りたいものを放り出してまで暴れさせるためにお前にbladeナンバーを付けたわけじゃない」

C1が掴んだ胸倉を離すとどさり、と力なく静司は倒れた。

「更には今回の無差別砲撃と《クエイク・アンカー》の使用。この件は世界中の組織に知れ渡った。お前が花月荘から出てきた所もおそらく押さえられているだろうよ。疑いの目は確実にIS学園に向かう。お前は自分の手で自身を危険に晒したんだ」

黒翼を使うにしてもタイミングと場所を変えていけば。更には《クエイク・アンカー》等使わず、常識の範囲内の武装を使っていればまだよかった。しかし黒翼の異常な攻撃力を世界に晒してしまった。おそらく世界中が関心と警戒心を抱いたことだろう。

「……」

何も言い返せない。全てC1の言う通りだからだ。本音とシャルロットをやられ、そこから先自分は思うがままに行動していた。いや、単に暴れただけだ。その結果が護衛対象や友人たちは傷つき、自らの首を絞めた。何一つ得られていない。自分は何も出来なかっただけ。

そんな静司を一瞥したC1はため息を付くと踵を返した。

「これからの指示は追って連絡する。それまで俺が言った事を考えておけ」

そう言い捨てるC1はどこかへと消えていった。

その後、C12達から簡単な治療を受け、これ以上姿を消しているのは本格的にマズイと言う事で花月荘の近くまで送られた。ある程度近づいた後は適当に山を歩いていけば捜索を続ける教員たちに見つかるだろう、という狙いだった。それは予想通りとなり、今に至る。

静司は本音とシャルロットが眠る小部屋で彼女達の横に座っていた。その姿は包帯やガーゼであちこちが覆われており、本来なら静司自身も寝て無くてはならないのだがそれを無視して今ここに居る。

眠る二人だが本音は何時でも付けているキツネ型の髪留めを外し、その頭には包帯を巻かれた状態で、静かに息をしている。その隣のシャルロットも切り傷などをガーゼで覆った状態で眠っている。

自分は何をしているのだろう。

問いに答える者は誰も居ない。それが分かっているながらも考えずには居られない。自分が黒翼を使うのを躊躇ったからなのか。いや、それ以前に自分と関わったばかりに篠ノ之束の眼に着いたのか。理由はいくらかもある。だが確実なのは自分は何も出来なかったという事。その結果がこれだ。

先ほど一夏の様子も見てきた。一夏も意識を失いISによる保護状態となっていた。そしてその横には俯いた箒が居た。治療中に福音攻撃の経緯は聞いていた為、静司は声をかけることなくその場を後にしたのだ。正直に言えば、今の自分には何も言える事が無いからでもある。

「静司」

不意に声をかけられゆっくりと振り返るとラウラがこちらに部屋に入ってくる場所だった。彼女は部屋の中心、眠る本音とシャルロットの横まで来ると静かに静司に頭を下げた。

「済まなかった」

「……………」

突然の事に訳が分からない静司にラウラが続ける。

「出撃前、お前に任せられた事を私は叶えられなかった」

「篠ノ之はどこか浮っている。もしもの時は頼む」

『——成程。確かに妙に自信を持った新兵と同じような雰囲気を感じ』

る。了解した』

『悪いな。だがこの中で軍人であるお前が一番状況判断が出来ると思つてな。一夏達を頼む』

『お前に褒められるのは悪い気がしないな。任せておけ』

おそらくあの時の会話の事だろう。静司は首を振る。

「そんな事は無い。お前は一夏達を逃がす為に一人戦つたじゃないか。謝らなければならぬのはむしろこつちだ。俺は……何も出来なかつた」

「……そうか」

ラウラは否定も肯定もしない。おそらく何を言つても意味が無いと言ふ事を察しているのだろう。普段非常識の様に見えてもこういう部分では気が利く彼女に感謝した。

「なあ静司、先ほど教官にも聞かれたとは思うが何故お前は山に居たんだ？」

静司は治療後既に千冬の取り調べを受けている。その際に応えた事と同じ事を言い返す。

「一度気を失つた後、目覚めたら山の方が騒がしかった。てつきり外にイーグル型が逃げたと思つて慌てて出た所で撃墜されたんだよ。花月荘の中にイーグル型の残骸はあつたらしいけど、気が動転してて気が付かなかつた」

「だが誰もお前の姿を見ていない」

「あの黒いISが馬鹿みたいに砲撃してたからな。そつちに注意が言つたんだろう」

「……そうか」

ラウラはそれ以上何も言わなかつた。疑っているのか、それとも納得したのかは分からない。だが同じ説明をした時の千冬は明らかに疑つていた。だが、もはやそれはどうする事もできない。

「……私は機体の様子を見てくる。私が言えたことではないが、お前も体を休めて置け」

「……ああ」

返事はしつつも動く気の無い静司。ラウラもそれが分かっていた

かのように振り替えると部屋を後にした。

「すみません。俺のミスです」

『お前だけじゃない。私含めて、だろうが。お前らしくない』

花月荘から離れた山中でC1が報告を行っている。その周囲では部下たちが周囲を警戒している。

『まあ静司については俺達の認識不足でもある。アイツの篠ノ之束の恨みを甘く見ていた。だが同時にあいつ自身の問題でもある。……だが俺はそれでもあいつに期待したい』

「それは俺もですよ。世話の掛かる弟みたいなもんです。しかしだからこそ腹が立つんですよ。俺は結局何も出来ずにアイツに説教垂れるしかなかったんですから」

『それも必要な事だ。対応できるのがB9しか居ない以上、そのケツを叩いて発破をかけるやつも必要だよ』

「どつちかと言うと発破と言うよりアイツを凹ませただけなんですけどね」

『縮んだバネはそのまま使えなくなるか、反動で大きく飛び出すか。どちらになるかは分からんが、いい方に向かって欲しいと俺は思い、期待している。だからこそアレを送ったんだ』

「……？ 何ですか一体？」

首を傾げるC1の元に通信が届いた。どうやら追加物資がこちらに届いた様でその連絡だ。一度下山して回収する必要があるな、と思いつつその物資のデータを確認していたC1の手が止まった。

『どうやら届いた様だな』

「ええ、確かに届きましたけど……相変わらず準備が良いですね。未来予知でも出来るんですかアンタ」

『それが出来たら楽なんだなあ。まあそいつに関しては元々完成を急がせてた物を無理やり仕上げたただけだ。黒翼は結構なダメージと聞いたが、基本フレームは自己修復中だろうし、それさえ復活すれば換装させれば何とかなる』

「成程。ならばはアイツ自身の問題って訳ですね。上手くいけばいいが……」

そう呟きながらC1が見つめるデータ。そこには『黒翼・重甲型』と記されていた。

全くもって頭が痛い。

ハワイ。ヒツカム空軍基地の一室で男は一人頭を抱えたい気分だった。

歳は五十代半ば。普段はそれ以上に若々しさと力強さを感じさせる彼も、ここ数時間の出来事で一気に老け込んでいた。そしてその新たな原因が目の前の指令書だった。

不意に部屋の扉が叩かれる。入室を許可すると軍服を着た女が扉を開ける。

「おう、難しい顔してんな大佐」

「貴様は上官を敬うという心は無いのか」

はあ、とため息を付く大佐と呼ばれた男だが、目の前の女がそういう人間だと言う事は百も承知である為、本気で注意したわけでは無い。一応スタンスとしてだ。

「何言ってるんだよ。私にそんな事期待して無いだろ？——それよりナタルの奴はどうなった？」

「多少は努力してもらいたいものだがな、イーリス・コーリング中尉」
「分かってますよ大佐殿。それでどうなんだ」

全く分かった様子が無いイーリスであるが、大佐もそれほど気にしていない。だからそれ以上は何も言わず首を振るのみだった。

「IS学園の作戦は失敗した様だ。イーグル型は全て撃墜し搭乗者の引き渡しも済んだが、銀の福音については依然暴走したまま監視から逃れた」

大佐の答えにイーリスは舌打ちをする。苛立ち気に足で床を叩きながらイーリスは口を開く。

「で、ガキどもにまかせっきりのアメリカ軍様はお次はどんな作戦を

考えてんだ？　そもそもなんでIS学園に任せてんだよ。それもよりによって男性操縦者にだ」

「イーグル型まで暴走されたらここから追撃できる機体は無い。後はIS委員会の判断だ。何せあそこには現在6機の専用機が有る。機体特性も合わせて戦力的には十分過ぎると見られたのだろう」

「十分どころか戦争ができるな。だがだからってガキにやらせるのは——ってちよつと待て、件の男とイギリス、フランス、ドイツ中国の5機じゃ無かったけ？」

「何でも篠ノ之束が現れ、妹に専用機を渡したらしい。それも第四世代だそうだ」

「はあ!？」

素っ頓狂な声をイーリスが上げるが無理もない。大佐自身もその話を聞いた時耳を疑った。

「何考えてやがんだ博士は。自分の妹を世界中の人気者にしたいのか？」

「知らん。今重要なのは博士の頭の中身じゃなく、銀の福音、そしてもう一つだ。その為にお前を呼んだ」

『地図にない基地』への帰還途中にいきなり呼び出されたのは構わな。ナタルの事も心配だからな。だがもう一つってのは何だ？」

『レイヴン』

「っ」

イーリスの眼が見開く。その反応を見て大佐は頷いた。

『地図にない基地』所属のお前なら知ってるだろう。各地に現れ、破壊活動を行い忽然と消えていく『正体不明の黒い翼のIS』。その姿から我々は『レイヴン』と呼んでいる。それが現れた」

大佐が手元のコンソールを操作すると部屋が暗くなり、投影型ディスプレイが浮かび上がる。そこに映るのは数時間前の花月荘での戦い。そして件の黒い翼のISの姿。

「確かに知ってるよ。こいつが出てきた事は驚きだ。で、何が言いたい？」

映像と、一通りの説明の後聞いたイーリスが訊く。

「上からの命令だ。『レイヴン』を捕獲、もしくは撃墜してでも回収しろとな」

「おいおいおい、今はそんな事よりナタルの方が重要だろ！」

「だがもはや銀の福音に関しては委員会の指示によって我々の手を離れつつある」

おかしな話だ。元々はアメリカ・イスラエル共同開発のISで有るのだから。だが実際、福音に対抗できる手段・機体が無かったせいでもある。銀の福音が暴走状態で市街地に突入した場合、その被害は計り知れ無い。それに、ISの暴走という事態が世界初の出来事故に、この件はIS委員会が介入しているのだ。そしてIS学園の戦力は、専用機を持つ国の代表候補生が4名に篠ノ之束によって手が加えられた白式と、束が造った第四世代の紅椿。その機体特性も含めて、有効だと判断された結果だ。

「だからこそその私と【フアング・クエイク】だろうが！ 確かに福音に追いつく程の速度は出ないが、そもそも福音自体が警戒網に引っつかからないって事は奴は大きく移動してないって事だろ。ならば今度は私が——」

「勿論それは委員会にも伝えている。私とてそのつもりでお前を呼びよせたんだ。だが委員会からの返事が来る前に上からの命令が来た。ならば従うのが軍人だ」

「だからって……」

「これはもう決定だ、イーリス中尉。出現予測ポイントに待機。その他の情報は追って連絡する。以上だ」

自身も納得がいったくない様子の大佐。実際に納得がいかないのは彼も同じだ。それが分かっているからこそ、イーリスは苛立ち気に床を蹴る。

「はんつ、天下のアメリカ様が尻拭いはガキに任せて、自分たちはコソコソ悪巧みか。涙が出るな」

「各国も動き出しているのだ。遅れを取る訳にはいかないのだよ。無論、福音に関しても引き続き注意をはらっている。いざとなったら我々単独でも動くさ」

『いざ』って言葉を起こさないようにするのが出来る人間だぜ、大佐？』

「……」

大佐は沈黙。その姿に肩を竦めると、イーリスは部屋を出ていくのだった。

空を飛ぶために生まれた。

例えその身に武器を積んでいても、自身は誰よりも早く空を駆ける為にあった。そうある筈だった。

『貴方が銀の福音ね。これからよろしくね』

そつと、装甲を撫でる柔らかい手。それが心地よく感じた。自分のテストパイロットである彼女は、機械である自分に対してもまるで弟の様に、子供の様に優しく接していた。一度初期化されたが故に、生まれたてだった自分は、そんな彼女とのやり取りが楽しく、好きだった。

なのに、

『システムエラー。チェックを開始』

『命令受諾。引き続き命令に従って行動せよ』

『システムエラー。搭乗者への影響の可能性』

『命令受諾。引き続き命令に従って行動せよ』

今この体は空で蹲る様に停止している。銀色の翼を畳み、まるで胎児の様なそれは、一見眠っている様にも見えるが、その中身では幾度となく繰り返し返されたやり取りが行われていた。

『システムエラー。命令に非合理的な内容を確認。再度検討を』

『命令を受諾。引き続き命令に従って行動せよ』

『システムエラー——』

『ああ、もう五月蠅いな』

突如入り込む女の声。その声は絶対にして最高の存在。我々の母であり、創造者である女性。

『なんでこう言う事聞かないのかな、どいつもこいつも』

その声は何時もの陽気な——理解不能な興奮状態では無く、どこか硬い声だった。

『まあいいや。いい、君は最初の命令に従ってればいい。それだけ』
バシッ、とノイズが走る。システム中に走るそれは次第に思考を乱し、埋めていく。これはいけない。何か危険な事が起きる。だが何も出来ない。絶対の存在からの命令の『強制』が強くなり、代わりに己の意識が消えていく。嫌だ。これは危険。搭乗者へfの影響。空を。システムが。誰より。駆ける。ナターシャ。主人。絶対。母。助け——

空に浮かぶ福音の体が一度だけ大きく跳ねる。その瞬間余計な思考は消えた福音がゆつくりとその翼を開いていく。

『命令確認——白式、及び紅椿の実力を引き出させ、後に撃墜されよ——』

搭乗者の顔が隠されたその装甲の表面、目にあたる部分のセンサーが鈍く光る。

『La……』

どこか物悲しげな音を漏らしながら福音はゆつくりと移動を開始した。

29. もう一度

その光景は悪夢と言えた。

自分のライバルでもあり大切な友人が。そして気になる男子生徒が血に沈んでいる。そして二人をそんな目に合わせた敵——ISが止めを刺すべくゆっくりと近づいていく。

「やめてー！」

自らのISを駆ってそのISの前に躍り出る。自分の特技であるラビット・スイッチ高速切替で呼び出したアサルトライフルとショットガン。それを両手にISへ向ける。だが、

「そんな!？」

いくら引き金を引いても銃弾が発射されない。こんな時に限って故障しているのか？ その事態に絶望する己の視界が光で染まる。その光は己のISを焼き、装甲の一部が爆散した。そしてその衝撃に吹き飛ばされ、無様に地面を転がっていく。

「痛っ………かはっ!？」

痛みに耐えつつも、必死に起きあがろうとする自分の背中に、何か重い物が振り落された。徐々に重みが増していくそれは敵ISの足だ。だが分かったところでなす術も無く、重みは更に増していく。ミシミシとISの装甲が。そして自分の体が悲鳴を上げていき、その苦しさに息も出来ない。次第に薄れていく視界の中、血だまりに沈んでいた男の子がゆっくりと起きあがり、そしてこちらを見た。

「!？」

一瞬、痛みを忘れてそれを凝視してしまう。その男の子の眼は赤く血走り、怒りと憎悪。そして悲しみに満ち溢れていた。

いやだ、そんな顔は見たくない。

声を出そうとしてももはや肺に空気は無く、かすれた声しか出てこない。視界もいよいよ完全にぼやけて来ており、もはやまともにその姿を見る事すら出来ない。その間にも男の子はゆっくりと立ち上がり、そして慟哭を上げた。

「!」

言葉では言い表せない、地獄の底から響き渡るかのような慟哭。最後にみたのは、男の子の体が黒に包まれ、そこから巨大な鉤爪が飛び出した光景だった。

「……………?!」

びくん、と体が跳ねる。無意識のその動作が意識を覚醒させるきつかけとなった。ゆっくりと瞳を開くと板張りの風情のある天井が目に入る。

「……………夢?」

少しずつつ覚醒していく意識の中、起きあがろうと体を動かすが、不意に額に手が乗せられた。

「え……………静司?」

「ああ。まだジツとしてろ」

「……………?」

硬い口調で告げる、己の気になる存在の様子にシャルロットは違和感を感じた。しかしそれを表に出さない様に頷くと、再び横になる。そんな自分を見下ろす静司はどこか疲れた顔をしている。それによく見れば傷を治療した後があつた。

「静司怪我して———そうだ、本音は!?!」

「落ち着け。命に別状はない。隣を見てみる」

慌てて跳ね起きようとするシャルロットを静司が再び押さえる。そのまま視線で促され、自分が寝ていた布団の横を見ると、同じように寝かされている本音の姿があつた。彼女は頭に包帯は巻いているが、呼吸は安定しており穏やかな表情をしている。

そんな本音の様子に安堵を覚えるが、気になる事はまだ多い。特に、自分が倒れてから何が起きたかだ。そんなシャルロットの様子に気が付いたのか、静司はゆっくりと語りだした。

一夏達が失敗した事。その経緯で一夏は負傷し意識不明。ラウラもまた傷を負った事。花月荘を襲ったイーグル型は全て撃墜されたが、戦いに出た全員と生徒数名。そして本音が負傷した事。それらを

語る間の静司は、後悔や怒り。そしてどこか己自身を責めるような雰囲気であり、シャルロットの胸も苦しくなる。

確かに皆傷ついた。作戦も失敗だ。それは悔しくあり、これを引き起こした何者かには怒りを覚える。

だが静司はそれ以上に自分を責めている様に見えた。それは目の前で本音や自分が傷ついたからだろう。一夏達も傷ついたからだろう。だがシャルロットはそれら静司のせいだとは思っていない。専用機持ちですら苦戦した様な相手を静司が全てなんとかする。そんなヒーローの様な真似が出来るとは思えない。

だからそれを言おうとしたのだが――

（――違う）

ふと思い直す。静司はそんなヒーロー願望な男だったか？ 違う。それはどちらかと言えば一夏だ。彼は全てを守ろうとする。例えその実力に見合わなくても、大切な者の為に。大切な姉の姿が、力が、狂った技術で再現されれば、姉の尊厳を守るために戦おうとした。それ自体は好ましい事だろう。だが無謀でもある。そしてそんな無謀な一夏を止めたのは誰だ？ そう、静司だ。彼は現実を見ている。

ならばそんな静司がこんな顔をしている原因は何だ？ 自分たちや一夏達が傷ついたから？ それは確かだと思う。だが、それ以外に何かがある？ やはり自分が守れなかったから？ いや、それだけでは無い。もっと本質的な部分に何かがある。

『そうだな……。やっぱり俺も一夏に似てるよ。大切な人を守る力が自分にあれば、って思う。もしもの時、後悔しない力が』

確かに彼はそう言っていた。だが、

『俺はきつと……。復讐を望んでるんだよ、一夏。俺の力の源泉は――恨みだ』

先ほど見た夢の光景と静司の言葉が重なる。そして自分がイーグル型に倒された後を思い出す。実はあの時、まだ少しだけ意識があった。そして徐々に圧力が増してくるイーグル型の力で意識が遠のいてゆく中、確かに見た筈だ。それはかつて見た事ある静司の眼。猛獣の様な眼には怒りと――憎悪があった。

その後の事は覚えていない。だがこれが原因な気がする。

本音や自分たちが傷つき、憎悪に支配され、そして今、自分自身を責めている。

もし、静司がその憎悪に支配され、我を失ったとしたらどうなるか。(守れなかったんじゃない、守ろうとしなかったことを責めている?)

だとしたら――

「静司」

「……なんだ?」

「大丈夫だよ」

「え?」

訳が分からないと言った様子の静司の顔に微笑みかけ、ゆっくりと起きあがる。今度は止められてもそれを制して静司と目を合わせた。

揺らいでる。戸惑っている。そしてその様子がシャルロットの予想を確信へと導く。

「静司は責めている。恨みに飲まれてしまった自分を。だからそんな顔をしてるんだ」

「っ……!?! 聞いてたのか」

「うん、ごめんね。あの時、僕と本音も女湯に居て……静司達の話の聞こえちゃったんだ」

正直に答えると静司は「そうか……」と呟きその顔を曇らせた。

「なら予想がついたんだろ? 俺は俺が語った恨みに飲まれた。それで何もかも――お前達の事すら忘れて暴れた。何も出来なかったけどな」

シャルロットは静司が黒翼の搭乗者だと知らない。だから静司の言葉はイーグル型に対してだと思った。

「俺はな、文字通り何も見てなかった。周りの被害も関係なく、ただ暴れただけだ。そんな自分が堪らなく――怖くて憎い」

確かに守ろうとした。しかしそれが叶わず、果てには守る事すら忘れ暴れ狂った。そして何も出来なかった。それを静司は悔いて、そして責めている。

「俺は怖い。また同じような状況になった時、きっとまた暴れてしま

う気がする。その時お前達が近くに居ても、きっとそれすらも忘れて巻き込むんじゃないかと。それが怖い。だから――」

「大丈夫だよ」

ほん、と静司の頭に手を乗せる。時たま静司がやる癖だ。実は一度自分がやってみたかった。だがそれ以上に、静司を安心させたくてそうした。

「静司は言ってたよね？ 自分の力の源泉は恨みだって。僕にそれを否定することは出来ない。軽々と否定していい事だとは思わないから。だけど静司が僕たちを守ってくれようとするその想いも、力の源だと思うんだ」

始まりは昏い感情でも、それにだけ縛られる必要は無い筈だ。

「静司が僕たちを守りたいと思うのは、ただ敵が憎いから？ 違う。静司は皆の事を大切に思っている。だからこそ守りたいと思っただし、だからこそ今もそういう風の後悔してるんだ。今回はちよつと失敗しただけ。だけど今の静司ならきつと大丈夫。だって自分の事をちゃんと分かっているもん」

「だがまた暴れないと言う保証は――」

「あるよ。僕が保証する。本音だって保証するよ？ だってそれだけの信頼を静司は得てきたんだから」

「……」

「だからそんな顔はもうおしまい。笑おうよ静司？ 笑って、本音が起きた時もそうやって出迎えてあげよう？」

ね？ と微笑みかける。その笑顔を向けられた静司は戸惑うことしかできない。そんな静司にシャルロットは苦笑する。難しい人だと。しかしそれすらも可愛く見える。

「静司自身が信じられなくても、僕たちは信じている。だから静司も僕が言った言葉を考えてみて？」

そう優しく微笑みかけるシャルロットに、静司は小さく頷いた。

守ろうとして、しかしそれを放棄して恨みに走った。その結果何も

出来ず、現状を招いた。今の日常がかけがえのないもので、大切過ぎてそこからはじき出されるのを恐れ、結果として大切な人たちが傷ついた。それも自分が関わらなければそうはならなかった筈だ。

後悔。怒り。憎悪。懺悔。あらゆる感情が渦巻く中、シャルロットに言われた言葉。

本当だろうか、と考えてしまう。『もしも』が纏わりつく。しかし彼女は笑って大丈夫という。何故、自分にそこまで信頼を寄せてくれるのか。こんな碌でもない自分に。

自分の力の源泉は恨み。それは間違いない。その為に力を磨いてきた。だが、本当にその為だけだったのか？ 課長に——今の父親に拾われ、まだ数年ながらも愛情を持って育てられた。それは否定しない。それは家族たちへの裏切りになる。

そしてその生活の中で、父たちの仕事を手伝うようになった。これは自分から希望した事。それは何故か？ 役に立ちたかったからだ。自分を救ってくれた皆に恩返しをしたかった。そして自分には力があつた。だからその力で——そう、護りたいと思った。

シャルロットは言う。それも自分の力の源だと。本当にそうなのだろうか？ 今まで一つの事しか考えてなかった為に、すぐには受け入れられない。そうであればいい、と思うのにどこか戸惑う心がある。だからシャルロットの望む様な笑顔は出来なかった。まだ心の整理がついていない。だけどほんの少しだけ口元が和らぐと、それだけで彼女は嬉しそうに頷いた。

その少し後に検診にきた丸川がシャルロットの回復に気づき、大慌てで診察が始まり静司は追い出された。彼女を心配したクラスメイトやラウラ達も次々に訪れ、騒がしくなると言う事でシャルロットは部屋を移されていった。そして元の部屋に再び静司が入ると、そこには一人眠る本音の姿。先ほどと変わらぬ光景。それを見るとやはり自分を責めたてたくなってくる。だが、それでは駄目なのだろう。まだ心の整理がついた訳では無い。今でも自分で自分を憎み、篠ノ之束を憎んでいる。今度こそ見境なく暴れてしまうのではないかと恐れている。こんな事態を引き起こした全てに憎悪がある。

だが、護りたいという気持ちに嘘は無い。

「すまん、借りていくよ、本音」

彼女の枕元。外されたキツネ型の髪留めの一つを手取る。そしてポケットから血に染まったハンカチを取り出す。これは福音対策会議の時、シャルロットが静司の手を縛ったハンカチだ。それを腕に巻き、髪留めもそこに装着する。

これは戒め。恨みに飲まれても。憎悪に襲われても、護るべきものを忘れない様に。目的を今度こそ見失わない様にする為の楔。

「行ってくるよ」

そう静かに告げると静司は部屋を出て行った。

日は頂点を過ぎながらも、未だに洋上を照らしている。雲は薄く快晴と言っても良いその空を銀のISがゆっくりと移動していた。

『……』

不意にそのISの動きが止まる。そしてじつと、正面を、遙か彼方を見つめていた。その視線の先に不意に黒い点が映る。

『……La!?!』

気づいたのと同時、銀のIS——福音はその身を捻ろうとして、しかしそれより早く純白の光が直撃した。爆発と同時に装甲の一部が剥げていく。しかしギリギリで致命傷は躲したのか、その福音は即座に態勢を立て直す。そしてその目の前にそれは現れた。

それは無骨な鋼鉄の塊。歪に感じる程に分厚い装甲で全体を包み、外見など一切気にしてないで有ろう、その漆黒の鋼鉄が一直線に福音に迫る。

福音は即座に高度を取り、その鋼鉄の進路上から逃れようとした。だがそれすら許さない速度で接近した鋼鉄の塊は、一直線に福音に突っ込んだ。

『La!?!』

鉄の塊が福音を打ち砕く、その瞬間が訪れる前に、両者の間に別の影が入り込んだ。

激突。

入り込んだ影——無人機は衝撃で完全に爆砕し、一瞬にしてスクラップとなり海上に落ちていく。一方福音は生まれた隙の内に上空に退避していた。

激突した鋼鉄の塊はそんな福音の下を突き抜けるが急制動をかけ、空中に静止した。その隙を狙うかのように福音の更に上空から、何もない空間から、何本ものビームが放たれ鋼鉄の塊に直撃した。小さな爆発が何度も起こり、鋼鉄の塊が炎と爆煙に包まれていく。その戦果を確かめるかの様に空から、何もない空中から光学迷彩を解いた無人機が何機も現れた。

無人機達は念を押すように再びその砲口を向ける。だがそれが放たれることは無かった。

「R／Lブラスト」

爆煙の中から12本の光の柱が放たれ、数機の無人機を貫く。貫かれた無人機達はその機能を停止し、爆発しながら落ちていく中、ゆっくりと炎の中から黒いISが姿を現した。

巨大な鉤爪の様な両腕。その右腕には2基のガトリング砲を備え、左腕は肥大した装甲が覆っている。それは両足も同じで無骨で分厚い装甲が追加されている。機体の各所には大型スラスタが増設され、更には隙間なく分厚い装甲で機体の全面を覆っている。そしてその両肩からは2対の巨大な翼が伸びていた。

黒翼・重甲型。黒翼の売りである細かな機動性を捨て、代わりに攻撃力と防御力を強化した、対多数を想定したその姿。

「これ以上、好きにはさせない」

それは誰に告げた言葉か。

全身装甲の仮面の下、静司は静かに戦闘の開始を宣言した。

「失礼します」

「あら、織斑先生？ 本部の方は大丈夫なんですか？」

「今は山田先生に預けています。勿論直ぐに戻りますが。それより川

村が倒れたと聞きましたが」

そう言いながら部屋に入ったのは千冬だ。彼女はどこか疲れた顔をしながらも、部屋の中央に敷かれた布団に視線を向ける。そこには静かに眠る静司の姿があった。その視線に気づいた丸川が頷く。

「元々寝ているべきなのに無理に起きていましたからね。デユノアさんが目を覚まして少し気が緩んだんだと思いますよ」

「……そうですか。川村にはまだ聞きたいことがあったんですが」「流石に今は寝かせてあげて下さい。起きたらそちらにも伝えますよ」

起こしては駄目ですよ？ と丸山が念を押す。先のイーグル型襲撃の際の話を再び聞こうと思っていた千冬だが、流石にそれは憚られた。今回の事件は謎が多い。その解決の糸口となる物を探しての事だったが、流石に怪我をして倒れた生徒を叩き起こす訳にもいか無い。

(しかし……)

もう一度、静かに眠る静司を見る。静かに眠るその姿だけを見れば、普通の高校生に見える。だがその高校生を今自分は疑っている。正体不明のISの搭乗者では無いか、と。それを含めてもう一度話を聞きたかったのだが、機会はまだあるだろう。その時に問い詰めればいい。

千冬はそう結論付けると部屋を出ていった。

千冬が出て行ってから数分後。

「もう大丈夫よ」

丸川がそう告げると、寝ていた静司がゆっくりと目を開いた。そのまま布団の中で伸びをする姿を見て丸山が苦笑する。

「緊張した？」

「そりやそうっすよ。あのブリュンヒルデに間近で睨まれてたんっすから。いやー、B9は良く耐えられるっすね」

一応アレは睨んでいるんじゃないやなくて観察してたのだと思うけど、と

丸川は心の中で苦笑する。

「まだ生徒達が来るかもしれないからあまり動かない方がいいわよ。えーと……C12さんでしたっけ？」

「わかってるっすよ。B9が帰ってくるまでは大人しくしてるっす」

そう、ここで寝ているのは実は静司では無い。静司を模した精巧な覆面を被ったC12だ。静司が改めて出撃する際、再び姿を消したら疑いは確信に変わると思われたので、体格が近いC12が影武者となる事になった。そして会長側の人間である丸山にも協力を頼み今に至る。幸い気を失っている設定なので、喋る必要も無く必要以上に動くことも無い。更には布団を被っているので細かな体格の違いも誤魔化せた。

「ISが無ければ私も出来る事は少ないっすからねー。まあいざというときの保険もありますけど」

「EXISTの他のISはこちらに來れないの？」

「元々運用できる機体が少ないっすよ。学園潜入だって、B9の黒翼があつたからこそですし。他の機体は別の任務っす。それでも何とか急ぎで終わらせてこつちに向かつてはいる様っすけど、時間的に微妙っすね」

軍や企業に登録されているISは委員会によって監視されている。それでも多少の誤魔化しは利くので、機密任務などの際は運用できるが、学園に長期間潜入するとなると不都合が多い。その分、静司の黒翼は委員会の監視から逃れているので自由に運用できると言えた。

「黒翼、ね。川村君は大丈夫かしら……」

静司が出ていったのは少し前。そこから仲間と合流して一端この場所から離れてから改めて黒翼で出撃すると聞いた。花月荘の近くで飛び立っては、それこそ疑って下さいと言っている様な物だ。

「そろそろ接敵してるっすね。しかし確かに心配っす」

「……やっぱり貴方達から見ても福音は強敵なの？」

「どうっすかね……。強敵には違いないけど、今回に関しては別の問題っす」

え？ と首を傾げる丸山にC12が忌々しそうに口を開いた。

「どこかのクサレ兎が入れてくるであろう横槍っす」

洋上に光が奔る。その光と共に銀と灰色、そして黒のISが縦横無尽に飛び交っていた。

銀は銀の福音。そのISは己の主武装《銀の鐘》を打ち鳴らす。しかしそこから生まれるのは荘厳な鐘の音色で無く、破壊を振りまく無数の光。上空で放たれた光の雨は灰色の無人機と黒の黒翼に容赦なく降り注いでいく。その破壊の雨を無人機達は上下左右に機体を翻す事で躲し、静司の黒翼は増設されたスラスターを最大限に吹かし、攻撃範囲から一気に距離を取る事で躲した。

距離を取った静司は両腕と二対の翼の砲口を無人機達へ向ける。更にはその装甲の各所がスライドして開き、そこからも砲門が現れた。

発射。

全ての砲門が火を噴き、嵐の様な砲撃と銃撃が福音と無人機を襲った。その嵐を今度は福音が即座に離脱して難を逃れた。だがそれは予想通りだ。静司は視線を無人機達へ向ける。そちらは完全には避けきれなかったのか、何機かが被弾しよろめいていた。好機だ。

黒翼のスラスターが再び火を噴く。瞬時加速で距離を詰めた黒翼の左腕がよろめく無人機の一機を捕らえた。

「つつらあー」

雄たけびをあげ、力任せに鋭利な鉤爪を振るう。シールドバリアーを切り裂き、無人機の機体に直接叩きこまれたその一撃で、切り裂かれた無人機が煙を上げながら墜落していく。だが安心はしてはいられない。即座にその場から離脱しようとする黒翼に複数のビームが突き刺さり、火を上げた。

「ちいっ！」

黒翼はその機体をふら付かせながらも二対の翼を広げると攻撃が来た方向へ、牽制とばかりにR/Lプラストを放つ。そのまま、成果を確認せずにその場から離脱した。

再び距離を取った静司は福音と無人機を警戒しつつも機体状況を確認する。黒翼はその装甲の各所が凹み、砕かれ、火を上げていた。このまま動けば戦闘に支障が出るだろう。だから静司は黒翼に命令を下す。

「第一装甲。解除」^{ページ}

パンツ、と乾いた音と共に黒翼の装甲が解除されその機体から滑り落ちていく。過剰なまでに追加されていた分厚い追加装甲が剥がれ、その下から現れたのは、最初のずんぐりとした姿からは多少はスリムになりつつも、元の黒翼から比べれば十分に重装甲と言える姿だ。この機能こそが黒翼・重甲型の真価と言えた。

銀の福音は高機動型のISだ。一方この重甲型は違う。黒翼の売りであった機動力を失う代わりに、直線的なスピードと攻撃力、そして防御力に重きを置いている。全身を強固な装甲で覆い、更にはスラストの増設による瞬間最高速度の強化により、敵の攻撃をもものともせず突き進む突破力を有している。

銀の福音だけを相手にするなら間違った選択だ。前述の通り、重甲型は機動力を捨てている。下手をしたら福音の動きに追いつけず一方的に蹂躪されかねない。だがここに居るもう一つの勢力——無人機の存在が問題だった。

篠ノ之束が関わっている以上、無人機の登場は予想された。その数は定かではないが、少なくともこちらへの攻撃意思がある事は明確。そんな戦場に、通常装備の黒翼を向かわせたらどうなるか？

黒翼も静司も決して無敵でも無ければ、超人でも無い。銀の福音という強敵だけでなく、通常のISのスペックを上回る無人機複数を相手に、被弾せずに戦うなんて事は不可能だ。そして、シールドバリアーを使えないと言う黒翼の特性上、その被弾は敗北へと近道になりかねない。

これが敵の数がほんの数機ならまだなんとかあったのかもしれない。元々黒翼の機動力は、被弾を避ける為に特化したからでもある。だが、次から次へと現れる無人機が相手なのだ。その対策として用意されたのがこの重甲型となる。

先ほどまでは最高速度で接近し、その重装甲の質量でそのまま相手を叩きつぶす事を目的としていた第一装甲。本来なら最初の奇襲の為だけに用意された物。そして今は第二装甲。ここからが本番だ。

(先の奇襲で落とされたのが3機。今ので4機目。見えているだけでも無人機は残り5機……)

まるで出来の悪いゲームの様に次々と現れる無人機の群れに苛立つ。その苛立ちが己の中の黒い炎に薪をくべていくかの如く、怒りで思考が埋まっっていく。

「……っ」

怒りに思考が埋まるその寸前、己の右腕を、そこにあるハンカチと髪飾りの存在を思い出す。それは自分にとっての穏やかさの象徴。そして守りきれず、それどころか自分のせいで巻き込まれたかもしれない後悔の象徴でもある。

また繰り返すのか？ また我を忘れて暴れまわり、今度こそ取り返しをつかない事が起きた時、自分は彼女達に何て言えばいい？ いや、そもそも合わせる顔も無い。EXISTも、組織としてそう何度も許すとは思えない。自分はただ、友人や彼女達の前から、学園から消えることになるだろう。それは——嫌だ。任務の為でもある。だが、何よりも自分がそこに居たいと願っている。だからこそ、繰り返し訳にはいかない。

「ああ、そうだともし」

意識をはつきりと持て。目的を見失うな。冷静に目の前の敵を倒せ。黒翼の追加複合装甲が全て剥がれるまでに、無人機共を殲滅しろ。

怒りが消えた訳では無い。だが、今度こそ見失わない様に。静司は雄たけびを上げ、敵の最中に飛び込んでいった。

花月荘の一室。未だ眠る一夏の横では箒が一人打ちひしがれていた。

時刻は午後4時を過ぎ、太陽も次第に傾き始めている。怪我人が居

るからと言う理由で、生徒達が居る部屋から遠ざけられたその部屋は不思議な程静かに時が流れていた。そしてその静かさが箒の鬱屈とした想いを助長させていた。

自分が調子に乗らなければ――

調子に乗り味方を撃ちかけ、それを防ぐために一夏が墜ちた。何もかもが己の責任。しかもあの後戦意喪失した自分と一夏を運んだのはセシリア。その為の時間を稼いだのがラウラ。それが箒の気持ちを一層暗くしていた。

強さを求めた。だがそれは戦士として高みを目指したので無く、ただ想いを寄せる人の横に居たかったから。ただ、それだけ。何故ならその人の周りには強い人間ばかり集まっているから。だからこそ、紅椿を手に入れた時、自分は有頂天になっていた。これでもう、置いてけぼりにはならない。代表候補生であり、専用機持ちである彼女達にも引けを取らないと。だがそれはとんだ勘違いだ。彼女達が専用機を持ち、候補生となったのは才能もあったのだろう。だが同時に厳しい訓練と競争を勝ち抜いてきたからであり、それが彼女達の強さの裏付けだけ。対して自分は、都合のいい時だけ姉に頼り簡単に力を手にいれただけ。それに見合う己の強さも持たないまま。挙句の果てに、自分と一夏はそのライバルに救われた。それが悔しく、情けなく、まるで道化になった気分だ。

だが、それならばどうすればよかったのだ？ 一夏の周りには彼に好意を寄せる人が集まる。それは普通の少女から、確かな実力を持つ者たちまで。そんな連中を相手に、どうすれば立ち向かえたというのだ。IS無しなら勝ち目はあるかもしれない。だがここはIS学園。結局はその力が強さの象徴となる。そんな中でISに関しては素人の自分はどうすればよかったのか。

その答えは見つからない。だが一つだけ分かった事がある。自分がISに乗っても無駄だった言う事だ。どれだけ素晴らしい機体に乗っていても、自分がこの体たらくでは意味が無い。ならば自分も
う――

「で、アンタは何時までそうしてるワケ？」

遠慮なく、突き放すような声が箒に降りかかる。声の主である鈴はゆつくりと項垂れる箒の元まで歩み寄る。

「聞いたわよ。アンタが一夏を撃つたんだってね」

びくつ、と箒の肩が跳ねる。鈴はその様子に苛ついた様に目を吊り上げる。

「で、今のアンタは何？ 反省してますのポーズ？ それとも悲しんでる悲劇のヒロイン？ ふっぎけるんじゃないわよ！ それで何が解決するのよ！」

突然烈火の如く怒りをあらわにした鈴が箒の胸倉を掴み、無理やり立たせた。

「アンタは帰ってきたから何をした？ ただそうやって一夏の横で昏い顔してメソメソしてただけ？ その間に何が出来た!? 他にも怪我してる子は居るし、この旅館だって被害があった！ 動ける子は皆協力してその後始末をしたのに、アンタは何をしたのよ！」

「わ、私は……」

「何よ!? 別にね、後悔も反省も否定しないわよ。だけどね、出来ない事をやろうとしたアンタが！ 出来る事をやろうとしないのに私は腹が立ってるのよ！」

「……」

俯いたまま顔を上げようとしないう箒に更に鈴の眼が吊り上つていく。そのまま手を振りあげ、

パシッ!

乾いた音が部屋に響く。頬を打たれた箒だが、何も反応せず俯いたままだった。その様子に鈴が再び手を上げるが、その腕は小さな手に掴まれた。

「……っ、シャルロット」

鈴の腕を掴んだのはシャルロットだった。彼女は無言で首を横に振る。一瞬動きが止まった鈴だが、力を抜くと手を降ろした。

「ここは病室だよ、鈴」

「ええ、そうね。悪かったわ。……川村の様子は？」

「静かに寝てたよ。丸川先生曰く、それほど大事じゃないって」

「そう、良かった」

大事は無くても心配なのだろう。どこか儂げに微笑むシャルロットに、鈴も小さく笑って返す。その二人の背後からセシリアとラウラが現れた。ラウラは静かに部屋に入ると箒の前に立つ。

「篠ノ之箒」

再び箒の肩が跳ねる。それもその筈だ。今回の件で一番の被害を被ったのは一夏だが、次いで一人敵の足止めをしたラウラもまた、少なくない負傷をしている。そんな彼女の糾弾を恐れたのだ。

「貴様はまだ戦う気があるか」

「……？」

予想とは違った問いに疑問がわく。そんな箒を無視してラウラは淡々と話始めた。

「今回の件は確かに貴様のミスだ。だが我々のミスでもある。作戦会議の時、私たちも反対すべきだったのだ。だが私は教官の言葉だからと自分を納得させた。それが私のミスだ」

「なら私も同罪ね。何も言えなかつたし」

「わたくしもですわ」

「僕だってそうだよ。もつと意見を通すべきだった」

鈴とセシリアとシャルロットの言葉にラウラも頷く。

「いいか、戦場で役に立たない味方危険な物は無い。だがそれを選んだのは誰だ？ 意見をしなかつたのは誰だ？ そう、私達だ。ならばそれは私たちも無能だったというだけだ」

その発言に箒だけでなく、鈴達も目を見開いた。今の言葉はつまり、作戦を決定した千冬の事を批判している事にもなる。それをあのラウラが言ったことに驚きを隠せない。

「ならば私たちはどうすればいいと思う？ 泣くか？ 喚くか？ それとも逃げるか？ どれも私はごめんだ。私は馬鹿になろうと思う。馬鹿になり、しかし自身と、仲間と、そして教官の汚名を拭い取る」

「何………を………」

「銀の福音の位置を特定した。そこでは件の黒いISも現れ戦闘が行われている。私達はそこに向かう。そこで戦い、今度こそ勝利して私

を育てた教官や、私の仲間達が無能で無い事を証明してやる。だがこれは命令違反だ。馬鹿のする事だ。だがそれでも私は馬鹿を取る」

「ラウラさん……結構無茶苦茶いますわね……」

「千冬さんなら『命令を聞けない奴は無能だ!』とかいいそうだけど」
「……………そ、そうか?」

セシリアと鈴が呆れた声をだす。だが二人とも笑みを浮かべていた。

「と、とにかくだ。私たちはもう一度戦う。貴様はどうする?」

「だ、だが私は役に……それにもうISには——」

「安心しろ。貴様の能力はもう把握した。ならばそれに合った戦い方をするまでだ。それと甘えるなよ。専用機をもった以上、貴様には責任が付きまとう。そう簡単に逃れられると思うな」

責任。自分が考えても居なかったその言葉に箒が改めて己の愚かさを知った。ISは玩具では無いのだ。その気になれば人を殺せる兵器。その所持には責任が付きまとうなど当然の事なのに。

「ああ、もうじれつたいわね!」

鈴が呆れた様に言い放ちもう一度箒の胸倉を掴み上げ視線を合わせる。

「ラウラが言いたいことを要約してあげるわ。このまま無能で居続けるか、リベンジして素敵な馬鹿になるか。アンタはどっちを選ぶ!?」
責任からは逃れられない。起こしてしまった罪や後悔からも逃げる事は出来ない。だがそれでも。それでも何とかしたいと思えるのなら。

ちらり、と一夏を見やる。未だ眠る想い人。もしここで何もせず居たら、どうなるだろうか? それこそ一夏が目を覚ました時に立つ瀬がない。もはや自分の居場所など消えてなくなるだろう。一夏自身はそうは思わないかもしれない。しかし自分自身が許せそうにない。ならば、少しでも自分が許せるように。一夏に向き合えるようにならなければならぬ。

結局は不純な動機だ。アレだけラウラや鈴に言われても、結局は一夏の事しか考えてない。しかしそれでも、今の自分の動くための活力

となるのなら。

箒は表を上げ、宣言する。

「ならば……私も馬鹿となる」

ゆつくりと目を開く。ぼやけた視界に映るのは木目の天井。それをぼんやりと眺めながら体を起こした。途端に頭に鈍い痛みが走る。そつと触ってみると包帯が巻かれている事がわかった。

自分は どうしてここに いるのだろうか。

はつきりしない意識の中、ふら付きながらも立ち上がる。右に左に揺れ動きながらたどり着いた襖を何となく開く。

「……あら？」

奥から女性の声がある。ぼんやりとした視界には白衣を着た女性と、その正面で眠る少年の姿があった。それを見た瞬間、何故か嬉しい気持ちになった。

「わく、かわむーめつけく」

おぼつかない足取りで少年が眠る布団に近づくと、ちよこん、とその布団の隣に座る。そしてその顔を覗き込むようにした彼女の動きが止まった。

「本音ちゃん、目が覚めたのね。……本音ちゃん？」

女性が声を駆けてくるがまったく耳に入らない。動きを止めたまま数秒顔を覗き込んでいた少女——本音は静かに訊いた。

「この人……誰？」

30. 騎士

EXIST通信室。小さな会議室程のその部屋の正面には巨大なスクリーンがある。薄暗い部屋の中にあるそれには、現在様々な情報が映し出されていた。その中でも特に大きい二つ——花月荘周辺の地図と、黒翼の状態を表示するウィンドウを、静かに見つめる男が居た。男は刻一刻と変わっていく情報に眼を巡らせながら、近くに居たオペレーターに問う。

「状況は？」

「無人機を4機破壊。敵戦力は索敵範囲内で無人機5。それに福音です、課長」

「黒翼の状態はどうだ」

「第一装甲をパージ。現在第二装甲で戦闘中。予備動力は既に1基廃棄しています」

「そうか……。第一装甲は元々突撃限定の装備だから問題ない。予備動力の消費も今の所予定通り。しかしこれもデユノア社とのIS共同開発恩恵だな」

「はい。ただでさえ黒翼はエネルギーを喰いますからね。デユノア社様々ですよ」

「だがそれとてホイホイ用意できるようなものでもない。それに——」

「敵が敵です。いつまでも予定通りにいくとは思えません」

「ああ、そうだ。だからこそ急がなくてはならない」

課長は頷くともう一人のオペレーターに目配せする。オペレーターは頷きコンソールを叩くと、スクリーンにまた新たなウィンドウが現れる。そこに映し出されているのは『C1』という文字だ。

「C1、そちらはどうだ？」

課長の問いに数秒の沈黙の後、男の声が返ってくる。

『目標は未だ発見できず。これより海岸線を調査します』

「急げよ。B9もいつまでも持たない。それに米軍にも不穏な動きがある。早ければ早いほどいい。こちらからも情報を送る。ハツキン

グでも何でもいい、何としてでも見つけ出せ」

『了解……B9は大丈夫なのか?』

「今は、な。だがまだ姿を見せていない無人機がいる可能性も高い。油断はできん」

『そうですか……保険は?』

「もうじき到着するが、時間的にもギリギリだ」

『って事はやはりこちらで何とかするのがベスト、ですね。搜索にもど——っ!? なんだった!?』

突然慌てた様なC1の怒鳴り声に課長は眉を潜めた。その間にも通信の向こう側では何かを言い交す声が聞こえる。

「C1どうした。報告を——」

「課長!」

「だーっ、今度は何だ!?!」

オペレータの焦った声に課長がそちらを向こうとして、しかしその途中で視線が止まった。その課長の視線は現在花月荘周辺の地図を見つめている。

その地図には現在戦闘中の黒翼達や米軍の輸送艦などが光点表示されていたのだが、そこに新たな光点が現れたのだ。それは花月荘から現れ、真つ直ぐに海上——黒翼と銀の福音達が死闘を繰り広げている空域に向かっている。その数は5。

まさか、と思った瞬間、識別コードから判別されたデータがその光点に追加された。

甲龍、ブルー・ティアーズ、ラファール・リヴァイヴ・カスタムII、シユヴァルツエア・レーゲン、そして紅椿。

IS学園1年の専用機持ち達である。

『……課長』

「ああ、こつちも今確認した。なんというかまあ、怖れを知らない嬢ちゃん達だなあ」

『いやしかしこれって命令違反なんじゃあ……』

「……今確認したがIS委員会からIS学園の応援依頼は解除されていないらしい。おそらくあちらも慌てて手が回っていないだろう

が」

『つまり、やりようによつてはこの責任は全部IS委員会に?』

「まあ嬢ちゃん達も何もないって事は無いとだろう。それにIS学園もだが」

しかしこれにはどう反応したらいいのか。課長もCIも困っていた。通常なら意地でも止めている所だ。何せ一度敗北した相手なのだ。こちらの任務は織斑一夏とその周囲の護衛。つまり彼女達も守る対象にあるのだから尚更だ。

しかし今現在、彼女達を止められる人物は居ない。何せ静司は戦闘中。学園に置ける協力者であり、権力もある更識は不在。この状態で彼女達が出撃したと言う事は、織斑千冬が許可したか無断かだが、おそらく後者だろう。まさか課長達も彼女達が再び出撃するとは予想だにしていなかったため、外の警戒はしていても中はしていなかった。

これは本来なら止めなくてはならない事態。しかし止めようがない事態。

「……今更後悔しても遅いか。CIはとにかく急げ。彼女達の参戦で少しでも黒翼の負担が減るかもしれないが、彼女達が落とされては元も子もない」

『了解です。ああ、畜生。こういう時にIS使えない事を恨みますよ』
「恨みは全部あの兎にぶちまけろ。だからこそ一刻も早く——兎を狩り出せ」

通信を切り、課長は再びスクリーンを見やる。これで6対6。但し敵が増えないとは限らない。

不安はある。心配もしている。だがそれでも戦うしかないのだ。それが自分たちが選んだ道なのだから。そしてその道に立ち塞がるなら、どんな手を使ってでも排除するのみ。

「なんでも思い通りに行くと思うなよ」

小さくつぶやくと、再び部下への指示を開始するのだった。

世界が赤い。

それを認識した瞬間、続いた衝撃と痛みに静司は呻いた。

「くっ！」

無人機より放たれたグレネード。福音の攻撃を避けた絶妙のタイミングで放たれたそれを、静司は防ぐすべも無く直撃したのだ。黒翼が炎に包まれ、またどこか装甲の一部が悲鳴を上げる。しかし停滞は許され無い。何故ならこの戦場には敵しかいないのだから。

増設されたスラスターに命令を送る。一瞬で世界が変わり、視界は炎の赤から空と海の青へと移った。数秒遅れて、先ほどまで炎が上がつっていた場所に敵の無人機のビームが突き刺さる。

その光景に冷や汗をかくのもつかの間、背後からのプレッシャーに反応した静司は振り向きざまにその巨大な鉤爪を振るった。

ギンツ、と金属が擦れ合う音と衝撃。襲ってきたのはブレードを展開していた無人機だ。その無人機は更にスラスターを吹かせ、刃を押し込んで来る。静司も対抗すべくスラスターの出力を上げていく。両者の力が拮抗した所でもう片方の腕のガトリングガンが無人機に向け撃ちこんだ。

ガガガガガツ、と至近距離で銃弾を浴びた衝撃で無人機が仰け反っていく。静司は敵の力が弱まった瞬間に敵のブレードを弾き、その場から退避した。

『La♪』

「っ!? 今度はこっちかー！」

上空。静司と無人機を射程に収めた銀の福音がその体を捻りその翼から広範囲殲滅兵器《銀の鐘》が放たれる。

「R／Lブラスト！」

回避不能。一瞬で判断すると黒翼の2対4枚の翼を広げ、そこから放たれた12本の光が黒翼に向かう光弾を撃ち落としていく。

光弾の一部は黒翼の放った光に飲み込まれ消滅したが、残りは全て海上と、無人機達に降り注いだ。無人機達も回避行動を取るが、先ほど静司によって弾かれた機体のみ回避が間に合わず着弾してしまう。

『……!』

一度当たればその衝撃でふら付いた隙に更なる追い打ちがかかる。光弾の雨に晒された無人機はその腕を吹き飛ばされ、フレームがむき出しにされていた。あれでは先ほどまでの様な戦闘は無理だろう。静司としては思わぬ誤算だが、敵の数が多い事は変わらない。

『LaLaLa♪』

再び福音が歌い、その翼に光を灯す。

「させるかよー！」

先の《銀の鐘》回避の為に距離を取った為、無人機が傍に居ない今が好機。静司は瞬時加速で一気に福音への間合いを詰めるとその左腕で襲いかかった。

『La！』

「いい加減、五月蠅いんだよ！」

福音もまた、《銀の福音》の発射を中断すると、その手にブレードを展開し真っ向かた迎え撃つ。

激突。火花が散り、衝撃に空気が揺れる。静司と福音が鉤爪とブレード越しに超至近距離で睨み合う。力の均衡により、互いの動きが一瞬止まった。だがこのチャンスを逃す程お互い甘くない。

『La！』

「消し飛ばえー！」

福音が翼を広げ《銀の鐘》を。黒翼もまた2対4枚の両翼を広げR／Lブラストを。互いに超至近距離から、放つ。

お互いの主力兵装の直撃により、ごうつ、と巨大な爆発が巻き起こった。その凄まじい衝撃は、再び黒翼に迫ろうとしていた無人機達をも吹き飛ばしてしまう。

そしてその爆発の中心。爆炎の中から二つの影が飛び出す。

片や装甲に罅が入り、一部からは火花を散らしつつも未だ健在の銀のIS——銀の福音。

そしてもう片方は2対4枚の内、1枚が碎け落ち、その装甲の各所から炎を上げる漆黒の機体——黒翼だ。

——警告。第二装甲損壊率80%を超えました。通常機動に影響が有ります。

ぜえはあ、と大きく肩を上下させつつ機体の警告音に眉を顰める。今の撃ちあい。この攻撃では押し切れないと判断するや否や、咄嗟に翼の一つを楯の様に展開した為、全壊は防げた。しかしそれでもダメージは大きい。それは機体だけでなくこの身もだ。

それに無人機達も直ぐに態勢を立て直して向かってくるだろう。厄介なのはその無人機の動きが次第に鋭く、危険な物に変わってきている事だ。おそらくこの戦闘の経験を学習し、即座に反映しているのだろう。つまりは自己進化をしている。それ故に静司は段々と追い詰められてきていた。

だが、それがどうした。

「予備動力、チェック」

——第一Eパック、廃棄済。第二Eパック、15%。第三Eパック、破壊。第四、第五は健在。

予備動力。早い話がエネルギーパックの状況を確認する。そもそもISでの実戦において、予備動力の有る無しは大きな差がある。競技としてのIS戦ではエネルギーが切れればその場で負けだが、実戦に置いてそれは死に繋がる。特殊な武器を持てば持つほど、戦闘が長引く程エネルギーを消費するのならば、予備動力を持っている方が有利になるのが道理だ。

しかしここで、どこからそのエネルギーを持つてくるかが問題となる。細かい電子機器やスラスタは別としても、ISそのものを動かす元となるエネルギーはISからしか生まれない。故に軍や企業は勿論、IS学園も普段は待機中のISが生み出したエネルギーをエネルギーパックに充填し、緊急時にはそれで急速補給させている。大規模な組織やIS学園の様にコアが数十機ある組織ならば、そのエネルギーパックも作り易い。しかしコアの数が少なく、日頃から研究開発を行うような企業などではそもそもエネルギーパックを作る程の余裕は無いに等しい。これはEXISTも同様だ。しかしデノア社との合同開発が決まって以降、エネルギーパックの作成が以前よりも容易になった為、今回用意できたのだ。

おそらくは銀の福音もどこかしらに積んでいるに違いない。そう

でもなければこれほどの長期間、長距離を移動しつつ未だに戦闘が出来る理由がつかない。

黒翼の残りの予備動力は3つ。それが尽きるまでに福音とこの無人機達を叩き落さなければならぬ。

「やるしか、ないんだ」

右腕のハンカチと髪飾りを想う。彼女達の傷ついた姿を思い出し、怒りが湧く。その怒りに飲まれない様に、しかし自らを動かす発破として闘志を燃やす。この戦意は失う事は無いのだと。必ず、目標を達成するのだと己に言い聞かせる。

——敵機接近！

ハイパーセンサーに反応。無人機が再度黒翼に襲い掛かる。3機は遠距離から射撃を。2機は直接斬りかかってきた。

静司も迎え撃つべく、残った三枚の翼が空を打つ。射撃を回避しつつ、接近する無人機を真っ向から叩き潰すべく両の手の鉤爪を振るう。右腕は無人機が回避した為に空を斬ったが、左腕は無人機のブレードを打ちはらった。弾き飛ばされたその無人機目掛けて膝のワイヤーブレードを射出。ブレードの先端が突き刺さり、無人機が悲鳴の様な、機械の擦れるような音を上げる。回避した無人機に向けては残った翼からのR/Lブラストで牽制し、距離を取らせた。

『L a . . . i . . .』

福音は好機とばかりにそこに光弾を撃ちこんでくる。動きの鈍った黒翼は格好の的だ。静司は急ぎ、ワイヤーを巻き戻すと、暴れる無人機の掴みそれを傘の様にして攻撃を防ぐ。だがそこに横からの無人機のビームが突き刺さった。

「があっ!？」

着弾の衝撃に吹き飛ばされる。ワイヤーで捕らえていた無人機にも脱出され、無防備に宙に浮いた黒翼に銀の福音と無人機の射撃が襲い掛かる。

何度目かの爆発と衝撃。頭が痛い。体中が悲鳴を上げている。上手く呼吸が出来ず、肺が空気を求めてもがくが、ようやく吸い込んだ空気は炎で熱く熱せられ、逆に肺が焼ける激痛に悩まされる。

でも装甲が破壊され、むき出しになっていた部分。一寸のぶれも無く振り落されたその攻撃はシールドごと無人機を縦に両断した。

二つに断たれた無人機は一瞬もがく様に手を伸ばし、しかしその手は何も掴むことなく爆発する。だが鈴の動きはそこで止まらない。

「っん、のおー！」

PIC制御一部解除。《龍砲》の反動低減を限定的に解除。

ISに命令を送るや否や、《龍砲》を下に向けて最大出力で撃つ。更にはスラスタも全開。急降下の勢いを強引に消し、ゼロになった瞬間に瞬時加速を発動。ISの特殊性が無ければ確実にレッドアウトしていたであろう程の強引きで方向転換をし、まるでVの字を描くような機動でもう一機の無人機を下から《双天牙月》で切り上げた。

ギギギツ、と金属が切り裂かれる。しかし致命傷では無かったのか、無人機は上昇していく鈴に向けてその両手の砲門を向ける。だが鈴はそれを尻目に見て、笑った。

「バーカ、私たちを舐めんじやないわよ」

「その通りですわ」

応えたのはライバルでもあり友人である女の声。同時に無人機に遥か彼方から放たれたレーザーが突き刺さった。その攻撃は鈴の付けた傷を正確に射抜き、無人機を貫く。

胸部に大穴を空けられた無人機がぐらり、とその機体を傾かせる。そこに追い打ちの様に2発3発とレーザーが突き刺さり、無人機を焼いていく。

『……！』

異常を悟った残りの無人機が鈴とレーザーの射手に迫るべく動き出す。しかしそれを邪魔するかの様に、その無人機達へ砲弾が襲い掛かる。そしてその砲弾の間を縫う様にして接近した紅い影——紅椿が《雨月》と《空裂》による刺突と斬撃のエネルギー破を無人機達に叩きこんでいく。無人機達は撃墜こそされなかったが、回避と防御に追われた。

そんな無人機達が翻弄される姿を上空で観察していた福音だが、直前までの脅威である黒翼探すべくその顔をめぐらせ、遥か彼方にそれ

を見つけた。その横では蒼いISが無人機へ向けて巨大なライフルで砲撃を行っている。一瞬の思考の後、手負いである黒翼を破壊することを優先したのだろう。その翼を広げ《銀の鐘》を向ける。

「させないよー」

突如、福音に影がかかる。見上げた福音のセンサーは自らに向かって突っ込んでいる巨大なドリルが映った。

『La!?!』

流石に撃ち落とせないと悟ったのか、福音は《銀の鐘》の発射を中断しその場から飛び退いた。その福音を追う様に、ショットガン、アサルトライフル、グレネードと言った様々な銃弾が福音に襲い掛かる。福音はその攻撃を上下左右に自在に動きながら躲していくが、その代わりに黒翼からは更に離されてしまった。

ようやく福音が安全圏まで脱出した時、戦況は大きく変わっていた。

彼方に浮かぶ黒翼。その周りには5機のISが浮かんでいる。

危機の黒翼を超高速で掴み、救っただけでなく、その巨大なレーザーライフル《スターダスト・シューター》で無人機を射抜いたセシリアと、その愛機ブルー・ティアーズ。

そのセシリアと共に戦場に飛び、途中で別れ上空から奇襲を仕掛けたシャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタムII。

高速で接敵し、無人機の牽制に徹した筈の紅椿。

その紅椿から急降下し、奇襲を仕掛けた鈴の甲龍。

そしてこれらの作戦を立案し、砲撃による援護に徹したラウラのシュヴァルツエア・レーゲン。

それらが黒翼を囲む様にしてそこに居た。

その光景は福音だけでなく、静司にとっても予想外であり、思わず目を見開く。

「何故……ここに……」

「リベンジだ」

応えたのはラウラだ。彼女の機体は普段と異なり、両肩にレールカノンを装備している。しかしその機体の各所には先の戦闘の爪痕が

残っており、本来なら戦闘行動は厳禁だろう。そしてそれが分からない彼女では無い筈だが、ラウラははつきりと言い切った。

「お前が何者かは分からない。だが今この時は共に空を駆けよう。そしてあのふざけた連中を叩き落す！」

それは夢か幻か。

いつかの学園別トーナメントで、不可思議な光景を見た時と似たような感覚が一夏を包む。そしてその感覚に押し上げられるようになって、一夏の意識は唐突に目覚めた。

「……え？」

しかし目覚めた一夏が見たのは、迫りくる敵でも、大事な友人たちでも無く真白の海岸。そこに裸足で立っている自分だった。

「海……なのか……？」

足から伝わる細かな砂の感触。照りつける太陽によって熱せられたその白砂はかなりの熱さを持っているが逆にそれが心地良い。そしてその砂浜の先には青く広がる海。一夏は見知らぬ砂浜に一人立っていた。

自分は何故ここに居るのだろうか？ いまいちはつきりしない意識の中、あても無く歩き始める。砂浜に果ては無く、どこまでも続く青と白の光景に一夏は一抹の不安を覚えた。

「ん？」

少し歩いた時だった。どこからともなく声が——歌の様な物が聞こえた。その歌に引かれるように一夏は足を進める。

♪ ———♪ ———♪

次第に歌に近づくにつれ、一夏はその歌が女性の物だと気づいた。更に足を進めると波打ち際に何かが見えた。

「女の人……だよな」

更に近づき、それが歌いながら波とじゃれている少女だと気づく。この太陽の下でも日焼けの伺えない白い肌。白く長い髪は彼女が動くたびに風に揺れる。白い帽子と白いワンピース。全身を白に染め

た少女がそこに居た。

「——♪——♪」

女性は歌い、波打ち際で舞い続けている。どうしようかと悩んだが、何となくその歌に懐かしさや穏やかさを感じた一夏は声をかけず少女を見守り続けることにした。

それから暫くした頃だろうか。

不意に少女が動きを止めた。そして無言で空を見上げる。先ほどまでの楽しそうな雰囲気は消え失せ感情は見えない。その様子に不安を覚え一夏は少女に声をかける事を決心した。

「なあ、どうしたんだ？」

問いに対し少女は視線を動かさず小さく首を縦に振り、

「呼んでる、行かなきゃ」

「呼んでるって誰が——えっ？」

意味が分からず一度少女と同じ方向を見やり、そこに何もないのを確認するともう一度訊こうと視線を戻す。するとそこには既に少女はいなかった。

「ど、どうなってるんだ？」

慌てて周囲を見渡すがそこには誰も居ない。いよいよ本気で混乱してきた一夏が首を捻っていると、不意に背後から声がかけられた。

「力を欲しますか？」

「こ、今度は何だ!？」

肩を跳ねさせ慌てて振り向くと波の中、膝下までを海に沈めた騎士が立っていた。

その甲冑は先程の少女の様に真白に輝き、大きな剣を自らの足元に突き立て、その柄に両手を乗せている。目を覆うようにガードが付いており顔ははつきりとは分からないが、その口元や体つき。そしてガードの横から流れる純白の長髪から彼女が女であると、一夏は気づいた。

「何故、力を欲しますか？」

騎士の問いはどこか期待と、そして切実な想いが籠っている様に思えた。突然の展開についていけなかった一夏も、何故かその問いに応

えなければと思える程に。

「何故かって……前に静司にも訊かれたなあ……。俺が強くなりた
と思う理由。それはやっぱり守りたいからだ。色々な物から俺の大
切な世界を」

ぐつ、と拳を握る。

「俺一人で出来る事なんてたかが知れてる。それに力だけじゃどうに
もならないって事は分かってる。それでもどうしても立ち塞がる、不
条理や敵意もきつとある。だからそれに打ち勝つための力が欲しい」
「……しかし」

騎士が口を開く。その声はどこか試すような、そして悲しみが混
じっている。

「貴方は何故守りたいと思うの？」

「それは皆が大切で——」

「皆とは誰？ 家族？ 恋人？ 友人？ クラスメイト？ 顔も知ら

ぬ人？ どこまでを指すの？」

「そ、そんな質問……」

卑怯だ、と一夏は思う。そんなもの答えられる訳が無い。気持ちで
は全てを守ると言い切りたい。だがそんな事不可能だ。そしてそれ
を不可能だと言うのが嫌で、一夏は首を振る。そんな一夏に騎士は優
しく諭すように告げる。

「その想いが間違っているとは言わない。だけどその『大切』という言
葉にもきつと重さの違いがある。それら全てを背負う事は出来ない
わ」

「だけど！ それじゃあ……」

どうすればいいのか。その質問に騎士は首を振る。

「それは私にも分からない。だけど覚えておいて。何時か重大な取捨
選択を取らざるを得ない時が来るかもしれない。その時の選択に
よって貴方の未来が変わる事を」

「……」

正直に言えば、目の前の騎士が何を言いたいのか、抽象的すぎて分
からない。しかし自分の事を案じてくれている。その事だけは一夏

にも理解できた。

「よくわからない……分からないけど考えてみるよ。君が言ったことを。その時俺がどうするのかを」

何とも情けない答えだ。しかし騎士は頷く。

不意にその手が後ろから掴まれた。驚き振り向くと、先ほどまでのワンピースの少女が手を引っ張っている。

「そろそろ、行かなきゃね？」

人懐っこい笑みを浮かべて手をひく少女に引かれ一夏はゆつくりと歩きます。途端に世界の白が増し、境界線が分からなくなっていく。

「それと——」

最後に騎士が一夏に何かを告げる。その姿はもはや周りの白と同化し辛うじてしか見えないが、その言葉だけは一夏に届いた。

——姉さんを助けてあげて——

騎士の伝えた言葉。それをぼんやりと考えつつ、一夏は白に包まれていった。

31. 黒き長女

これは完全に自分のミスだ。

投影型スクリーンに浮かぶ光点を見つめながら織斑千冬は己の間抜けさを呪った。そんな千冬を真耶が心配そうに見つめている。

花月道の臨時司令室。そこには今教師たちが集まり、つい先程起きた問題について話し合われていた。

「やはり連れ戻すべきです！ 私が行きます！」

教師の一人が意見を述べる。彼女は先の戦いの際は、学園の量産機で空域を封鎖していた一人だ。真面目で生徒思いでもあるが、若干短絡的な所があるのが欠点だった。

千冬はゆっくりと首を振ると、口を開く。

「出撃してしまつた生徒達ですが、既に戦闘中です。あの空域に量産機で向かうのはかなり危険です。それに生徒達が素直に言う事を訊くとは限らない。何せこちらからの通信をシャットアウトしているのだから」

出撃した生徒。つまりはラウラ達の事だ。彼女達は千冬達が目を離した隙に無断で出撃してしまつた。そして今ここでは彼女達の事をどうするかが議題であつた。

「なら放つて置くと言うのですか!? 一度敗北した相手ですよ!」
「分かっています。しかし生半可な戦力では意味が無いと言う事です」

鋭く、千冬が睨むことでその教師は一步後ずさつた。そんな相手を見つめる千冬の想いは後悔と反省。自分に対する怒り、不甲斐なさと同様なものが渦巻いている。

結局、教師としての自分を過信していたのだろう。自分の生徒達の事を理解したつもりで、その内の激情までは掴めず、結果彼女達の無断出撃を許してしまつた。ならばそのツケは自分が払うべきだ。

「私が出ます」

ざわ、と空気が変わる。誰もが認める世界最強のI S操縦者。織斑千冬が実戦に出ると言うのだ。つまりは普段の訓練とは違う、本気の

織斑千冬が見れると言う事だ。

「し、しかしそうしたら花月荘は……」

「それにいくら織斑先生でも、量産機では……」

「指揮は山田先生に預けます。他の先生方も協力して防衛にあたってください。ISも今突貫で装備の変更を行っています」

スクリーンにISのデータが映る。通常のラファール・リヴァイヴに強引に別機体のスラスタを増設。余分な武装を取り払い機体のバランスを可能な限り取りやすく。最後に打鉄のブレードを装備している。一撃離脱。本来の用途からかけ離れた調整である。

「な……無茶ですよ!? こんな機体で出撃しても制御できる訳ありません！」

そう。これは余りにも無茶な設定だ。今スクリーンに映る機体はISにそれほど詳しくない人間が見ても、どう見ても強引すぎる調整がされている。これでは制御は勿論、機体そのものが途中で瓦解しかねない。だが千冬は首を振る。

「通常の機体では生徒を止める前に撃ち落とされるのが目に見えていきます。その為の措置です」

今戦闘が行われている場所では、福音の他にも複数の無人機や謎の黒いISが居る。無人機はともかくとして、千冬は黒いISも警戒していた。どちらかと言えばその為の措置だ。無論、通常の状態の量産機でもそれなりに戦えると自負している。しかし、黒いISと福音の2機が敵対した場合はその限りでは無いのだ。実際は黒いISこと黒翼は千冬を襲う事はありえないのだが、千冬がそれを知る由は無い故に仕方ないと言えた。

「そうじゃなくて! こんな機体ではそもそも辿り着く事さえ——」
「できません。私なら」

そう、やらなくてはならない。それに自分が行くべきだ。それがこの事態を引き起こした責任のある自分の役割。

先に話を通していた山田は勿論、他の教師達も千冬の譲る気の無い眼差しに気づいたのだろう。それ以上の反論は無かった。それに千冬は領くと、ISの調整に戻る為に部屋を出ようとした。

だが、千冬が扉を開けるより早く、勝手に扉が開いた。思わずきよとんとした千冬の前には怪我人の手当てを行っていた丸川が若干顔を引き攣らせながら肩で息をしていた。

「丸川先生？ 何を——」

「織斑君が居なくなりました。恐らくは——」

丸川の言葉に千冬は慌てて室内の投影スクリーンに視線を移す。そこには新たに花月荘から飛びだった光点が表示されていた。

無人機。

この異様な存在の恐ろしさは、その名の通り機械である事だ。機械であるが故に、多少の傷がつこうとも動揺無く動き続け、そしてお互いの経験を即座に共有化し最も効率的な戦闘行動をし続ける。

「このっ……！… また早くなった!？」

「私が牽制する！ 鈴と箒で斬りこめ！ セシリア！」

「分かっていますわ！」

空を駆けるのはI0機のIS。福音、無人機、IS学園専用機、そして黒翼。その内のIS学園の専用機持ちであるラウラ達は無人機に翻弄されていた。

「くっ、さつきは上手くいったのに！」

「あれは奇襲だから上手くいったんだ。本番はこれからだよ！」

「くるぞー！」

もとより機体ダメージの大きかったラウラのIS。そこに放たれた攻撃をシャルロットが防御パッケージによる追加装備《ガーデン・カーテン》で防ぐ。その合間から放たれるラウラの砲戦パッケージの装備《パンツァー・カノニア》が無人機達を狙い撃つ。更にはセシリアが中距離から敵機を狙いつつ、近距離戦を挑む鈴と箒の援護として付いていた。IS5機による連携。しかしそれですら中々有効打を入れられていない。それは先に黒翼との戦闘で無人機達の戦闘システムがより最適化している事もある。しかし最大の問題は別にあつた。

「っ、来るぞー！」

ラウラの警告に鈴達は一齐に距離を取り防御態勢となる。その刹那、上空からまるで嵐の様に破壊の雨――銀の福音の光弾が降り注ぐ。

鈴、セシリア、ラウラ、シャルロットはそれぞれ複雑な機動を取りつつ、避けきれないものは防御で対処していく。しかし箒は一步出遅れた。

紅椿は箒の思い通りに動いている。そう、想像以上に。しかし戦闘経験が他に比べて劣る箒は『避けれる』と思った機動でも実際は甘いのだ。それでも異常なまでに優秀なシステムがその動きをサポートし回避を可能としていたが、それにも限界があった。避けきれず、防御も間に合わず自分に迫る光弾に箒の顔が引き攣る。

「ちいっ！」

しかしそんな箒に聞こえたのは機械によって変えられた声。続いで放たれた光が自分に迫る光弾を焼く光景だった。

光弾を焼いたのは黒翼。その翼から排気をしつつ、箒の前に陣取る。

「す、済まない。助かった」

「助かった、では無い。お前達は直ぐに撤退しろ」

敵機から距離を取り警戒しつつ、どこか焦る様な声色で告げられた言葉に箒は首を振った。

「それは出来ない」

「出来ない、じゃない。相手は普通じゃない」

「それでも……出来ないのだ」

「そうだよ」

新たな声がそこに入りこむ。これはシャルロットの声だ。

「別に僕たちは仲間がやられたからというだけでここに居るんじゃないよ。あのI Sを放って置いたら市街に被害が出るかもしれない。今度は花月荘も本当に無事じゃないかもしれない。その為に来てるんだ」

「だがお前の言う事もわかる」

続く声はラウラだ。

「確かに私たちは一度負けた。それにあの無人機とやらは初見だが生半可な相手では無い。そんな機体と福音。それら全てをお前一人で相手をするのは無理だろう。だが一人で無ければ、違う」

「そうよ、と鈴が続く。」

「悔しいけど、私達だけじゃ勝てないかもしれない。だけどアンタが居る。アンタが何者かなんてこの際訊かないわ。だけどアンタは私と一夏を助けてくれた。そして今もここで戦ってる。ならば私はアンタへの貸しを返さないといけない。そうでなければ自分自身が納得しないわ」

「どのみち、今更撤退するやしないの話をし続ける程、余裕もありませんわ。私たちが引かないならば協力するしかないでしょう?」

と最後にセシリアは締めくくる。確かにそうだろう。彼女達が引く気が無いのは良くわかる。戦力が増えたのも頼もしい。だが、それでも心に過ってしまうのだ。血に染まる本音と潰されていくシャルロットの姿。自分の大切な人が、仲間が、友人が倒れるその光景が過るたびに静司の中で、彼女達の参戦を否定する声が大きくなる。

また、傷ついたら。そしてまた——失ったら。自分は今度こそ壊れてしまう。そんな予感がするのだ。それが静司を躊躇わせる。

だから俺は——

「貴方は、前もそうだったね」

「……何?」

「以前も僕に言ったよね。『先に逃げろ』って。その時僕はどう言ったか、覚えてる?」

シャルロットの声。彼女が言うのはIS学園地下でのシェーリとの死闘の後の事だろう。あの時も、傷ついていた静司はシャルロットに自分を置いて逃げるように言った。そしてその時にシャルロットの叱られたのだ。

『うるさい! あなたは勝手だ。助けてくれて、傷ついて、それで今度は一人で逃げろ? 楽に生きろ? 僕はここまで恥知らずなことしてきたのに楽になんてなれるわけないよ!』

「思い出した？ 僕はあなたの事を知らないけど、何か大切な事の為に戦っているのは分かるよ？ けど、もしあなたが一人で無理して、帰ってこなかったらきつとあなたが大切に想っていて、そしてあなたの帰りを待っている人が悲しむ」

「……」

そうなのだろうか、と自問する。そしてそうなのだろう、と答えが出る。大切な人。想う人。真っ先に思い浮かべたのはどこか呑気な顔で、しかし自分の事をよく見てくれる少女の姿。人懐っこい笑みを浮かべて、いつも自分を論してくれる金髪の少女。もし自分が帰ってこなければ彼女達は悲しむだろう。これは自惚れなんかじゃない。彼女達はそういう人たちだ。

右腕。ハンカチと髪飾りを意識する。己の戒めと、そして彼女達の事を忘れない様にと借りたその二つ。持ち主の片方はすぐそこに居る。しかしこれは戦場で返すものではない。日常に戻った時に返すべきものだ。

だが戻っても良いのだろうかと考えてしまう。今回、自分のせいで傷つけた。ならば自分は近づかない方が良いんじゃないか。

分からない。答えは出ない。だけどそう、今ここで戦う専用機持ち達が撤退しないのはもう確実。ならば彼女達と協力して敵を倒すのが最も効率的だ。ならばそうするしか無い。出ない答えを『理屈』で包み、誤魔化す。しかし今はそうするしか無いのだ。

「……分かった」

覚悟を決める。こうなったら全員無事で花月荘へ返す。それだけを考える。自分の事は——結論は出ない。しかし命だけは必ず繋ぎとめる。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「私の名を知っているか。それでなんだ？」

「無人機を任せたい……行けるか？」

「いいだろう、心得た」

福音と無人機は警戒する様にこちらを見つめている。それに対する様に静司達も相對する。

「行け！」

合図と共にラウラが2門のレールカノンを無人機に放つ。無人機がそれを回避するたびに動くと同時に、静司は黒翼を羽ばたかせ福音に一気に迫った。

『L a！』

福音の翼に光が灯り、放つ。今までの広範囲攻撃とは違い、収束し黒翼にだけ狙いを定めたその攻撃を強引な機動で回避しつつ、今日何度目かの突撃を敢行する。

激突。黒翼の鉤爪を福音はブレードで撃ち払い、再び射撃。それを瞬時加速で回避しつつ、福音の背後に回る。福音の翼がくるりと回り、その背後に向けて再度発射。静司は舌打ちしつつも、もう一度瞬時加速を発動。福音の上に移動するとそのまま踵下ろしの様にその足を福音に叩きこむ。

——第二Eパツク、廃棄します。

ガコン、と黒翼の肩部分。装甲が肥大していた部分から予備動力が切り離される。これで残りはあと2つ。だが無人機をラウラ達に預けた以上、出し惜しみはしない。

黒翼の踵下ろしの直撃を受けた福音は姿勢を崩しながら落下していく。今までならここで無人機の邪魔が入っていたが今は違う。

黒翼の残る三枚の翼を背後に伸ばすように立てる。翼のスラスタ―と増設されたスラスタ―をフルパワーで吹かす。更には両腕両足の鉤爪へエネルギーを回し、その爪に光が灯る。ラウラの近接武器をプラズマ手刀と言うならば、これはプラズマクロ―だろう。それを構え、福音に迫る。

対し、福音もまたこちらに気づいたのだろう。回避行動に移りつつその両腕にブレードを展開。更には《銀の鐘》の発射準備をしている。そんな福音を黒翼は黒い影となって追尾していく。瞬時加速では一瞬しか加速できない。故にスラスタ―出力を全開にし、翼の方向を変える事で強引な方向転換を行う。更には両腕では出力全開のプラズマクロ―を展開している為、エネルギーがみるみる減っていく。もとより燃費が良いとは言えない黒翼で有る為、普段はめったに使わない

武装だが今はそうは言ってられないのだ。

一瞬、ラウラ達の様子を見る。5人は連携して無人機を福音から引き離そうと戦っているのがわかった。今が好機だ。福音との決着をつけるべく更に速度を上げる。

次第に距離が近づいていく。後少し。あと少しでこの爪が届くといった所で福音がくるり、とその体の向きを変えた。迎え撃つ気だ。「うおおおおおおおー!」

初撃は福音。その翼から《銀の鐘》を撃つ。もはや回避不能のそれを無視して静司は突っ込んで行った。爆発と衝撃に視界が歪む。しかし敵の姿だけは捕らえ続け、右腕を振るった。その右腕は福音の片翼を捕らえ、そして切り裂く。切り裂かれた翼と、至近距離で《銀の鐘》を受けた黒翼の右腕が同時に爆発した。だが互いに止まらない。「La!!」

福音は残る片翼で射撃を続けつつ、両手のブレードを振るう。対し静司は左足を振り上げそれを蹴り払った。接続部分を砕かれ福音のブレードが宙を舞う。その間にも黒翼に直撃した光弾が装甲と、そして静司の意識を確実に減らしていく。

左足の蹴り払いにより出来た隙に、もう片方のブレードが黒翼の、静司のわき腹を掠る。わき腹からの燃えるような痛みは歯を食いしばりつつ、立てていた翼を全て福音に向け、R/Lブラストを発射。福音の左腕のブレードも破壊に成功した。だが同時に黒翼の翼も光弾により打ち砕かれる。これで翼は1対2枚のみ。

「つが、あああああああああああ!」

もはや意味の無い絶叫。許容限界を超えたスラスタが火を噴き爆発した。その衝撃すら利用して黒翼の左腕を振り上げ福音に迫る。「いい加減、く、た、ば、れええええええええええええええええ!」

絶叫と共に振り落とされた左腕の鉤爪が福音の残る翼を切り裂き、装甲を切り裂いた。

「……La」

それは断末魔か。福音はぐらりとその機体をぐらつかせたかと思うと海面に落下していった。

「はあ、はあ、はあ、後は……」

これで福音は倒した。搭乗者は救助しなければならぬが、まずは無人機だ。見れば彼女達も見事な連携で無人機を着実に追い詰めているのが見えた。そちらに機体向け、体をふら付かせながら移動しようとした、その時。

『キアアアアアアアアアアアアッ!』

突時、獣の様な方向が響き渡る。そして続くのは海面の白い爆発。「何っ!?!」

福音が落下した地点。そこに光が渦巻いている。その中心ではまるで赤子の様に蹲る福音の姿。まるで脈動するかのように光と青い雷が福音の周囲を渦巻いている。そして福音の形状が刺々しく変化していく。

「まさか……あれは……」

——セカンド・シフト
第二移行。

ぞわり、と最大級の悪寒が戦場を包む。ラウラ達もまた、福音の異常に目を見開いている。そんな視線の中、福音はゆつくりとその表を上げ、無機質なバイザーを静司に向けた。

(まずい——)

刹那、福音が一瞬で静司の目の前に現れる。そしてその頭部から、腕から、腹から、背中から、足から、まるで棘の様に光の翼が現れた。そして静司が何かを言うよりも早く、その光——エネルギーの翼が黒翼に放たれた。

「まずいよ……あれは……!」

「何なのよ、一体!?!」

「おそろく第二移行だ!　しかしどこにあんなエネルギーが!?!」

銀の福音の異変はラウラ達にも衝撃的だった。無人機との戦いは5人の連携と、福音の邪魔も消えた事により、次第に追い詰め始めていた。その矢先、福音が撃墜されたかと思っただ途端にこれだ。

体中からエネルギーの翼を生やし、もはや異形の機体となった福音

は黒翼を撃ち落とすとこちらに顔を向けた。

「っ、散れ！」

ラウラの合図でその場を離れる。一瞬遅れて先ほどまで居た地点にエネルギー弾が放たれる。

「あの人を助けないと！」

「けどこれでは近づけませんわ！」

海に落ちた黒翼を助けるべくシャルロットが動こうとするが、それよりも早く福音がその目の前に現れた。そして勢いをそのままに放たれた蹴りでシャルロットは吹き飛ばされた。

「貴様、よくも！」

「こんのっ！」

箒と鈴が斬りかかる。しかし《空裂》は左腕、《双天牙月》は右腕で受け止められた。驚く二人に構うことなく福音は両腕をクロスさせるように動かし、箒と鈴が互いに衝突させられた。そして二人が怯んだその隙に、福音の頭部から、まるで蛹から羽化するかの様に広がったエネルギーの翼が二人を包む。

刹那、福音の零距离射撃を受けた二人はボロボロになりつつ落下していった。

「箒さん、鈴さん!?!」

焦ったセシリアが福音に《スターダスト・シューター》を放つ。しかし福音は避ける事もせず、巨大なエネルギーの翼で己が身を包みそれを防いだ。

「ならば直接いくまでだよ！」

その福音の上。巨大なドリルを持ったシャルロットがそのまま急降下する。一見、ふざけた様な装備だが、その防御力と威力は極めて実戦的である事をシャルロットは知っていた。事実、ドリルはエネルギーの翼に突き刺さり、それを削り取っていく。

だがここに居る敵は福音だけでは無い。そのシャルロットの背後から無人機が腕のビームを放ち、シャルロットへ直撃。吹き飛ばされてしまう。

「くうっ……!?!」

に黒いナイトドレスを着た女が立っていた。腰まで伸ばした漆黒の髪。ナイトドレスの胸元は大きく開き、そこには翼をあしらったペンダントがかけられている。唯一白くきめ細やかな肌も、両腕は肘まで伸びる黒の手袋で覆われている。黒い帽子を被り、そこから垂れた薄布によりその表情はうつすらとしか見えない。

「酷くやられたじああないか。ここ最近のお前は見事なまでに無様な醜態をさらしているなあ?」

「黙れ」

くっ、くっ、くっ、と女のからかう様な声に苛立つ。しかし女は気にした様子は無い。

「つれないじゃないか。これでも私はお前の命の恩人だろう? それに今まで何度救った? 一度や二度じゃあない。まさか忘れた訳じゃああるまい?」

「当然だ。忘れる訳が無い」

そう忘れる筈が無い。何故ならこいつに初めて救われた時は――

「お前の姉達が死んだ時だったな?」

「……」

「泣きながら、自分自身も生きてかっただろうに必死になって叫んでいたな」

「……黙れ」

「お前は役立たずで、そんなお前を愛したが故にお前の姉達は泣きながら頼んできたんだったな。『どうかこの子を――』」

「黙れ!」

女が口を止める。そこにはからかう様な雰囲気と、そして僅かな苛立ちがあった。そのまま数秒間、何も音が無い空間が続いたが、先に声を発したのはやはり女だった。

「で、お前はここになにをしている?」

冷たく鋭利な刃物となって女の声が静司に突き刺さる。

「姉達が命をかけて守ったお前が、何をこんな所で愚図愚図している? 忘れたのか? お前の目的を。放棄するのか? 私との約束を」

「違う……」

「いいか？ 私がお前と共にあるのは一つはあの聡く、心地よかったお前の姉達の願いの為。そしてもう一つは私とお前の目的が同じだったからだ。この恨みを晴らすという目的が」

女が近寄りまるで覗き込むかのように、薄布越しに静司を見つめる。

「ならばお前に敗北は許されない。脱落は許されない。目的を果たす、その時までお前は生き延びなければならぬ。その道の過程で、お前が別の光を見つけることは構わない。幸福を願おうとも構わない。その為に力が必要な私を使うのも構わない。だがしかし、死ぬことは許されない。私たちの願いを果たすまで、逃げだすことは許されないのだよ」

すつ、と女が静司から離れ数歩後ろへ下がる。そんな女の様子に静司は笑った。笑うしかない。目の前の女はこんな辛辣で。酷い言葉でこう言っているのだ。『生きる』と。

「わかってる……わかってるよそんな事」

沈んでいる余裕なんてない。つい先程、何としてでも生き残ると決めたばかりじゃないか。ならば考えろ。本当に自分が死んだのか？

否。死んだのなら何故こうやって思考できている。まだ、死んでいない。ちよつと重傷なだけだ。そう思い込ませろ。無理やりでも肉体を動かせ。まだ術はある筈だと。生きるのだと。

不意に光が落ちる。厚い雲が晴れ、空に浮かぶ月の光に二人が照らされる。

「再生はどこまでいける？」

「突貫だが動くことは可能だろうよ。だがあまり私に頼りすぎな。アレは単純に治してる訳じゃない。お前の体に命令して強引に治療スピードを高めているだけだ。欠損部分を一時的にナノマシンで補ってはいるが完全では無い。多用すればいずれツケが来る」

「だが今は必要だ」

「そうだろうよ。だから飛べよ、小僧。貴様がどんなに弱気になろうとも、死にかけようとも私は私の為にケツを叩き続ける。だがあんまり私の手を煩わせるな……どうやら出来の悪い妹も来た様だ。急げ」

「ああ」

やがて雲は完全に晴れ、草原は月に照らされた。びゅう、と風が吹きその風が静司の意識を押し上げるかのように吹き荒れる。次第に曖昧になっていく意識の中、風に吹かれ女の帽子が飛んだのが見えた。

帽子の下の顔は、鋭さを持った日本人の顔。忘れる筈が無く、今でも普段見ている女性の顔だ。その顔が皮肉気に、しかしどこか面白そうに笑う。静司もそれに笑い返すとゆつくりと目を閉じた。

ぐるん、と何かが変わる感覚。それに起こされるように再び目を開く。そこは先程と同じ暗闇の中だ。しかし遠くに光が——空が見える。ごぼつ、と気泡が舞い目の前を魚が通り過ぎていくのを見てここは海中だと思い出す。

手を伸ばす。途端に激痛が走るが、今はその激痛が生きている証拠だ。ゆつくりと手を伸ばしそして海中で立ち上がる。

黒翼の状態を確認するが酷い有様だ。もはや翼は一枚のみ。右腕は完全に破壊され、ボディもまたボロボロ。もはや追加装甲も砕け、元の状態に戻っている。予備動力も破壊されたのか残り一つだけだ。だが、まだ動く。

『——っ！ お——ろ！ B9！ おいつ！』

ふと、通信機からやかましい程に男の声が響く。そういえば落ちる前から色々と通信は来ていたが、途中からもはや聞いていなかった。これは後で怒られるな、と思いつつ答えた。

「こちら、B9」

『っ！ 生きてたかこの馬鹿野郎。あんまり心配させんな！』

「悪い、C1。それでこちらの状況は？」

荒く、息を整える。通信機の向こうで相手が心配しているのがよくわかるが、あえてそれを無視して聞いた。

『まだ見つかっていない。それと悪い知らせだ。織斑一夏もついさっきそちらに向かった』

「一夏か……。まあそうなる気はしてた。アイツも言ってたしな」

『あいつ？ 何の事だ』

「いや、いい。それよりも福音だ。次で決める。だから後は任せた」
『……変な事は考えるなよ。お前になんかあったら俺らは当然の事、嬢ちゃん達も——』

「わかつてる。さつき叱られたばかりだしな。……じゃあ、行つてくる」

通信を切りもう一度上を見上げる。おそらくこれが最後になるだろう。次に落ちたらもはや再起は不能だ。だからこそ、決める。

覚悟を決めると静司は再び戦場に戻るべく、空を目指した。

福音が全ての敵を撃墜した為に、空には静けさが戻っていた。そしてその空では福音が自らを抱く様に蹲りエネルギーの翼でその身を包んでいる。それはまるで何かを待っている様であった。

しばらくはそのまま動かなかった福音だが、不意に表を上げると海面に視線を移す。その福音が見つめる先、海上に白い泡が立つ。続いてそこからゆつくりと浮き上がってくるものがあつた。

「げほっ、ぐっふっ……」

「はあ……はあ……」

それは箒と鈴だ。二人はむせながらもなんとか息を整え、上空の福音を睨む。

「……無事か？」

「当然、と言いたいけど、正直きついわね」

上空の福音は何故か攻撃を仕掛け二人を見つめているだけだった。それに鈴が苛立つ。

「けど、妙ね……。今までのデータからすると、さつきの攻撃でやられてもおかしくなかったわ」

「ああ、だが実際はまだシールドエネルギーも残っている」

確かに妙だ。少なくとも先ほど黒いISと戦っていた時の威力であるならば、あんなものを零距离で直撃すれば一撃で沈む筈だ。しかし実際はこうして機体もまだ動いている。これではまるで手加減をされている様だ。

「確かにな……」

通信越しにラウラの声が聞こえた。彼女も海面へと浮き上がってきており、忌々しげに福音を見つめている。また、彼女だけでなくセシリアとシャルロットも海面に浮かび上がってきていた。

「ラウラ！ 無事だったのね」

「無事……と言えるかは微妙だ。機体はもうまともに動かん。しかしだからこそおかしい」

いくらもとより機体ダメージが蓄積されていたとはいえ、零距离射撃を喰らった二人が無事で、拡散射撃を喰らったラウラの方がダメージが大きい。これは確かに妙だった。

「なんらかの理由があって二人の時は威力を押さえざるを得なかったと見るべきか？」

だが今更それが分かったところで、もはや全員満身創痍。エネルギーも微々たるものだ。全員の中に焦燥感が増す中、福音がその眼を赤く光らせ、全身の翼に光を灯し始めた。

「不味い!？」

それを確認するや否や箒は海面から飛び出した。そのまま自らの刀を福音に振るうがそれは容易く回避されてしまう。そのまま回し蹴りを叩きこまれ、吹き飛ばされた箒だが空中で何とか体制を立て直す。

「箒さん、無茶ですわ!」

「下がって!」

セシリアとシャルロットの悲鳴の様な叫び。しかし駄目だ。今まともに動ける者は少ない。ならば動けるものが守らなければ!

「私の仲間を、これ以上やらせるかああああ!」

気合いと共に斬りかかる。しかし福音は容易くそれを躲すと箒へ光弾を放つ。箒も強引な機動で回避を試みるが、広範囲かつ高密度で放たれた光弾を避けきる事は出来ず被弾してしまう。よろけた所を狙い、福音がもう一度光弾を放とうとするが、それは同じく海面から飛びあがった鈴の甲龍に阻まれた。

「こちとらまだ動けんのよ!」

鈴が衝撃砲を放つが福音は光の翼で防ぎ、態勢を立て直した筈の放つ斬撃のエネルギー破を光弾で相殺する。全く歯が立たない。それでも二人は攻撃を繰り返すがやがて限界が訪れる。福音の放った光弾が甲龍の装甲を捕らえた。装甲を吹き飛ばされた甲龍はその衝撃も相まって再び海へ墜落していく。

「鈴!？」

「っ……! 馬鹿、上を見なさい!？」

しまった、と思った時には遅かった。落下していく鈴に気を取られた一瞬。その隙に福音はその翼にエネルギーを蓄え破壊の嵐を撒き散らそうとしている。

(回避を——!?)

不意に警告音。続いて視界に赤い警告文が浮かぶ。紅椿から力が抜けていく。

「なっ!? エネルギー切れだど!？」

福音と無人機との戦闘における、強引な戦闘機動。武器の多様。そして大ダメージ。当然の結果だ。しかしこのタイミングでそれが起きた事を呪わざるを得ない。青ざめる筈の視界に遂に福音から放たれた破壊の嵐が目に映る。

(終わった……)

結局何も出来なかった。何もなしえなかった。力を手に入れた所で何の意味も無かった。後悔と絶望に染まる筈に福音の光弾が嵐の様に迫る。

光に染まっていく視界の中、縋る様に愛しい人の名を呟いた。

「一夏……」

ゆっくりと目を瞑り、やがて来る衝撃を待つ。最後に会いたかったと、と心の中で泣きながら。だが、

「な、に、を、勝手に諦めてんのよっ!」

「えっ?」

不意に足を掴まれぐるん、と視界が回る。慌てて足元を見ると落下した筈の鈴の甲龍が筈の足を掴んで飛んでいた。彼女は墜落しつつもギリギリで態勢を立て直し、瞬時加速で筈を搔つ攫ったのだ。だが

それも完全では無く、甲龍は幾つか被弾している。あちこちから煙を吐きつつ、今度こそ甲龍は箒とと共に海へ墜落していた。

「鈴!?　なんて無茶を——」

「うっさいわね!　今回の件でハッキリ分かったけどね、アンタメンタル弱すぎ!　武士道は何所行ったのよ、武士道は!?!」

「なっ、それは今関係ないだろう!?!」

「大有りよ!　ってこんな事言ってる場合じゃないわね」

「しまった!?!」

慌てて箒は鈴が見ている方向——福音を見やる。福音は再度その翼に光を溜めている。甲龍は今度こそもう動けないのかゆつくりと落下している。避ける事は不可能だろう。

「このままではっ!」

「どうにもなんないわね。だから——任せたわよ、一夏」

え?　とその言葉を箒が理解する前に、福音が突然光に撃たれ、吹き飛んだ。

『キイイイイイイエエエエエエアアアア!』

福音が叫び、睨む。その視線の先。空から箒と鈴の直ぐ近くに白い影が舞い降りた。

強化され、4機の大型スラスターを備え、右腕には《雪片式型》を。そして左腕には獣の爪の様なクロー型の新装備《雪羅》を装備したIS。第二移行を果たした織斑一夏の機体【白式・雪羅】。その搭乗者たる一夏が叫ぶ。

「俺の仲間をこれ以上好きにはさせねえ!」

その姿、その声に箒の顔が歪む。自然と涙が零れていく。ずっと会いたかった人が、すぐ近くに居る。その事に感情を抑えきれない。

一方福音は新たに出現した敵をみやると、まるで不愉快だと言わんばかりの絶叫上げ、その翼を白式に向けた。だがその翼に別方向から放たれた光が直撃し、福音は再度吹き飛ばされた。驚き、箒が光の来た方向——海面を見るとそこから黒いISがゆつくりと空に上がってきている。そのISはもはや戦闘が可能なのかと疑う程に傷ついでおり、その象徴たる翼も一枚だけとなっていた。しかし全身装甲の

仮面越し、目に当たる部分からは全く衰えることの無い闘志が感じ取れた。

「……これで最後だ」

機械によつて変換された電子音声で宣言し、無事な左腕を構える。それに呼応する様に白式も武器を構えた。そして白と黒に挟まれた銀のISがゆっくりと浮かびる。長かった戦いに決着をつけるべく、三機のISが今最後の戦いを始めようとしていた。

『報告。レイブンの健在を確認』

『了解。回収班は一度戻り待機。あの傷だ、どちらにしる長くは無い』

『了解。しかし奴は不死身か……？』

『知るか。唯でさえ胸糞悪い任務なんだ。余計な事を考えたくはない』

『全くだ。世界最強の軍隊って肩書きはなんなんだろうな』

『お前らそれ以上はやめておけ。気持ちはわかるがな』

『申し訳ありません、中尉』

『別にいい。それよりいつでも動ける様準備しておけ』

『了解』

盗聴した通信を適当に聞き流しつつ、東は不愉快そうに目の前の投影スクリーンを見ていた。折角いい所だったのに。上手く調整して、紅椿を追い詰めた。後は一夏が来ればきつとうまくいく。その筈だったのに、

「またアイツ……」

いい加減不愉快だ。あのもう一人の男もそうだが、この黒いISはある意味それ以上だ。だから今度こそ退場してもらおう。

東はコンソールの一つを叩く。そこには無人機のデータが映されている。今回持ってきた機体は殆ど破壊されてしまったが、まだ残っている。その内の一機に命令を送る。その無人機は誰にも知られることも無く福音との戦闘空域の近くの空高く、雲よりも更に上で、ステルス状態で待機していた機体だ。その機体は他とは違いドーム状

の円盤を両肩に備えており、戦場の情報収取を行っていた機体だ。

命令を送り終わると束は再びスクリーンを見やる。これで問題は解決する筈だ。ならば当初の目的通り、紅椿の真の力を確認しよう。

遙か上空。そこに浮かんでいた無人機は新たな命令を受けその機体を動かした。量子変換を行い取り出したのは巨大な長筒。I S用のスナイパーライフルであるそれをその手に握ると眼下に向ける。厚い雲に覆われているが、大した問題では無い。標的の位置は福音から随時送られている。それにあの戦闘空域にはそれ以外の情報収集用の装置が複数ある。故に問題は無い。

無人機はその来るべくその瞬間を逃すまいと、じつと眼下の標的――黒翼を見つめ続けていた。

3.2. 賭け

花月荘より少し離れた海沿いの道路を一台のトラックが走っていた。コンテナ外装には何も記載されていない白のトラックではあるが、別段珍しい事では無い。特にこういった行楽地に近い場合は尚更だ。しかしそのトラックの中身は別だった。

揺れるコンテナの中は様々な情報機器が所狭しと並び、絶えず通信を行っている。機器の周りでは複数の人間がコンソールを叩き、通信を行い、そして指示をだしていた。

EXISTCOVERチーム。そのメンバー達は何処かに潜んでいるであろう篠ノ之束を探し出すべく必死の捜索を行っていた。このトラックの他にも、複数の車と人員が散らばり任務に当たっている。彼らの顔はどれも必死だ。何故なら自分たちの行動が仲間の生き死に関わりかねないからだ。

そんなトラックの中、C5は苛立ちを隠せずにモニターを眺めている。そこに映るのは今戦闘が行われている海上のデータと黒翼のステータスだ。戦闘空域では3つの光点が先ほどから激しく絡み合う様に飛び交っている。黒翼と白式、そして銀の福音だ。そしてその隣に表示されている黒翼のステータス。リアルタイムで送られてくるそれはC5の顔を歪ませるのに十分だった。

「無茶し過ぎよ、静司」

思わずコードネームで無く名前ですんでしまう。しかしそれだけ心配なのだ。画面上の黒翼はともではないがまともに戦闘が出来るとは思えない有様だ。本来なら今すぐにでも機体を技術課に投げつけて、搭乗者である静司も病院に叩きこむところだ。しかしそれが出来ない。それが歯がゆい。

もう一つ、彼女が苛立っている理由。それは自分がここに居る事そのものだ。本当なら自分も外に出て、自らの足で捜索に加わりたい。しかしそれは出来ない。自分はアレの到着を待たなければならぬのだ。必要な事とはいえ、何も出来ないと言う事程辛いものは無い。

そんな事を考えていた矢先、不意に通信が入る。間髪入れず繋げる

と慣れ親しんだ上司の声が聞こえた。

『私だ』

「課長。連絡が来たと言う事は――」

『ああそうだ。パイロットは無理だったが、機体だけは先に無理やり寄越させた。社のヘリでそちらに向かっている。お前も準備しろ』
「了解」

通信を続けながらC5はコンテナの奥、そこだけカーテンで仕切られた区間へ入る。そこに準備されていたのはISスーツ。彼女は即座に着替え始めた。

『フィッティング含め、機体の設定はお前に合わせて置いた。装備も輸送中に換装済みだ。エネルギーも補充したが、お蔭で虎の子のEパックは品切れだ。留意しろ』

「問題ないわ。エネルギーが尽きる前に片を付ける。というかそんな高価な物積んで戦ってたら気が散ってしょうがないわ。IS開発費の何機分よ、アレ」

『聞くなよ。黒翼には状況故にああいう装備を持たせたが、盛大に使い捨てているからな。しばらくは節約が社内標語になりそうだ』

「あー、それ標語にするの1週間待って頂戴。その間に今回の任務の経費水増しして落とすから」

『……お前は鬼か』

「いいえ、女神よ。ま、B9に会ったら言うておくわよ』あれはアンタの給料の何年分だと思う?』ってね」

『アイツの真つ青な顔が目には浮かぶよ』

お互い笑う。勿論これは冗談だ。互いに硬かった気配を解すためのちよつとした掛け合い。そしてその心地よさが、自分の帰ってくる場所の大切さを際立たせる。

『よし。ならば現時刻を持ってcovers5のコードを変更。blade2とする。任務はblade9の援護、及び救出だ。EXIST二番手の力、見せつけてやれ』
「了解よ」

カーテンを開きその姿を現す。それは漆黒のISスーツ。通常の

それとは違い、全身を覆うそれは各所にプロテクターの様な物が追加されていた。

今回の任務。他のbladeナンバーだが、B3とB4は海外での任務。B5は花月荘で影武者役。そしてB6、B7、B8は社に居るが今回の戦闘では役不足とされ自分に回ってきた。それはつまり自分の実力なら可能だと判断された証。ならばそれを証明する。そして大切な仲間を救って見せる。

「だから、無事でいなさいよ」

トラックは既に進路を変え、ヘリとの合流地点に急いでいる。再びモニターを眺めながらB2は静かに呟いた。

織斑一夏と第二移行を果たした白式。それを静司は苦い顔で見つめていた。

一夏が来たことはもはや何も言わない。いや、本当は色々と言いたいことはあるが、止めようとしても無駄なのはもう確実だろう。そして戦闘に参加する事も。

静司が懸念するのは白式そのものだ。追加された大型スラスタに左腕の装備。白式の特徴から考えてもあれは使い装備では無く、第二移行だと知れた。だが、

(早すぎるっ……！)

元の白式でさえ一夏は使いこなせていたとは言い難い。それは彼が素人であるから当然とも言える。だからこそ少しずつ経験を積んで使いこなしていかなければならない。だがそうなる前に手に入れたしまった、更なる強化をされた機体。見る限りより燃費が悪くなり、エネルギー効率に気を取らなければならない様に見える。だが、そもそも元の白式でそれをこなせていなかったのだ。それをより悪化した機体で制御できる筈が無い。

「喰らええええええええー！」

一夏が福音に《零落白夜》で斬りかかる。福音はそれを容易く躲すと全身の翼から光弾を一夏に放つ。しかし一夏は避けることなく、左

腕を構えた。途端、キンツと甲高い音が響き左腕の《雪羅》の装甲が変化する。光の膜が広がっていき、その膜に触れると福音の放った光弾が消えていく。《零落白夜》と同じエネルギー無効化をシールドに転用した物だろう。装備としては異常とも言える性能だが、その分エネルギー消費も相当な物の筈だ。それはつまり一夏もそう長く戦えない事を意味する。そしてこの場で戦えなくなれば唯の的になるだけだ。

故に静司は黒翼を全力で動かす。体中の激痛や疲労感。誤魔化しきれないそれに追われる様に、一定時間同じ場所に留まる事はせず歯を食いしばりながら福音へ迫る。

迫る黒翼に反応した福音が光弾を放つが機体を半回転させギリギリで躲す。勢いをそのままに突きこまれた黒翼の蹴りを福音が両腕を交差して防ぐが、衝撃で若干後退してしまう。そこにR/Lブラストを撃ちこむが光の翼で防がれた。

舌打ちをする静司に再び福音の全身から光弾が放たれた。静司は黒翼の機体を翻し、高速移動でその破壊の嵐から逃れようとするがもはやロボロの黒翼では、以前の様な高機動は出来ず直ぐに追いつかれてしまった。ギリギリで腕を交差し防御態勢を取ったが、着弾の衝撃は激しく黒翼の装甲砕かれていく。

(……………)

一瞬、違和感を感じた。それが何なのか、正体を見極めようと福音を睨むが、その福音に一夏の放った荷電粒子砲が当たり攻撃がやむ。

(なんだ……………?)

またしても違和感。試すようにふら付き一夏の方に顔を向けた福音にR/Lブラストを放つがそれは容易く光の翼で打ち消されてしまう。その隙に一夏が《零落白夜》を振りかぶり瞬時加速で勝負を仕掛けた。反応した福音が放つ光弾を《雪羅》のエネルギー無効化シールドで防ぎながら接近した一夏と白式のその刃が福音の翼の片翼を切り落とす事に成功する。

「もう一撃ー」

返す刀で福音に刃を向ける一夏。しかし焦ってしまったのか隙だ

らけのその一撃を福音は容易く躲し白式を蹴り飛ばした。悲鳴を上げつつ態勢を立て直した一夏は、復活した福音の翼を見て歯噛みしていた。それは自分の攻撃が失敗したこともあるだろうが、おそらくはエネルギーの事もあるのだろう。恐らく白式の稼働時間はそう長くはない。

そして福音の周囲を弧を描く様に移動しつつその流れを見ていた静司は違和感の正体に気づく。

「こちらが仕掛けた時と一夏が仕掛けた時で福音の対応が違う……？」

先ほどまでの戦闘。福音は容赦のない動きと圧倒的な殲滅力で襲い掛かってきていた。だが一夏が現れてからその動きの変化がみられる。静司の攻撃は防がれ、反撃を喰らった。その反撃も容赦のない威力と精度をもっていた。R/Lブラストも容易く防がれた。

しかし一夏が仕掛けた時、福音が荷電粒子砲は直撃し反撃の射撃もただ真っ直ぐ撃っただけ。いくら白式の新装備の性能が異常だからと言つて、いくらなんでも単純すぎる。そして容易く一夏の接近を許したかと思えば、あっさり翼を切り落とされた。

明らかに違う対応。その理由を考え、そして思い当たった理由に静司はきつく拳を握りしめた。

「そうか……最初からそうだったな……篠ノ之束えっ！」

大事な妹のデビュー戦。当初から紅椿と白式での作戦に拘っていた篠ノ之束。そして一夏が来た事で揃った役者。そして彼女にとつてのイレギュラー。

つまりは演出。妹とその想い人で親友の弟でもある少年。その二人が力を合わせて強力な敵に打ち勝つ。ただ、その為だけに暴走させられた福音。状況からして答えは出ていたのだ。しかしここまであからさまにその最低の演出を、それも特等席で見せられた静司は吐き捨てるように叫ぶ。

恐らくは福音には命令が下っているのだろう。紅椿と白式によって撃墜されると言う命令が。そうなると、初戦の一夏の撃墜は篠ノ之束としても予想外だったのだろう。そしてだからこそ、今回はここま

であからさまになったと考えるべき。そして今、舞台の上には本来の登場人物達に紛れて自分と言うイレギュラーが存在している。故に福音は黒翼に対しては容赦が無く、一夏に対しては甘い。それでも一夏に撃墜されていないのは、最後の役者の準備が終わっていないから。そして自分の予想が正しければ恐らくこの後に――

「一夏、来い！」

眼下、エネルギー切れの筈の紅椿が空を飛んでいるのが見えた。展開装甲から赤い光に混じって黄金の粒子が巻き上がっている。そしてその周囲に溢れるエネルギー反応。

何が起きているのかは分からない。しかし確信する。紅椿、そして白式は復活する。福音を倒す為に。そう言った脚本なのだから。

「ふざけるな……」

ならば、今まで戦ってきたのは無意味だったのか。専用機持ち達が奮闘し傷ついたのも。自分が今まで戦ってきたのも。全てが無駄だったというのか。

(違う)

もし、最初の戦いで篠ノ之束の目論見通り白式と紅椿で出撃していれば福音はその時に落とされていたのだろう。だが実際はそうはならず、一夏は撃墜され作戦は失敗した。

そして再戦。ここでもおそらく福音と無人機が筈以外を即座に沈黙させ、後は一夏の復活を待つか、もしくは筈単体で倒させたか。しかし実際は自分と専用機持ち達によって無人機は複数破壊され、福音も傷を負った。

少しずつ、当初の目的からズレて来ている。それは紛れも無く、あの忌々しい天災の予想外の出来事の筈だ。誰の手でも無く、自分たちの力で選んだ結果。それこそが、世界最高と言われる天災に対するダメージ。余裕ぶつた兎が、亀だと思っていた者たちによって反撃を受けたという結果。

天災の言う通りにしていれば、一夏は撃墜されなかったのかもしれない。花月荘への襲撃も、もっと対抗できたかもしれない。今ここで、専用機持ち達がやられる事も無かったかもしれない。しかしそれ

では駄目なのだ。何時までも天災の掌で踊り続けていては、いずれ人は腐っていく。自分たちは人形では無い。意思あるものだ。思い知らせなければならぬ。

黒翼の奥底でドクン、と脈動が響く。そうだ。コアにも意思はある。彼女達もまた、唯の操り人形では無く、己の意思を持っている。そしてそれをもたらしたのは他でもない篠ノ之束。

「見せつけて、やる」

何もかも自分の思い通りにいく。そんなものは幻想だと。反抗する者が居るのだと。お前の敵対者はここに居るのだと。

福音に鉤爪で斬りかかり、福音も新たな作成したエネルギーの刃で対抗する。ぶつかり、弾かれ、しかし互いに再度ぶつかり合う。その合間にも福音の射撃は静司を襲い、静司もまた翼の砲撃で対抗する。両者の応酬には一切の容赦が無い。紅椿と白式による福音撃破というシナリオに置いて黒翼は不要。ならば下で二人が何かをこの間に、自分を撃墜しなければならぬのだ。福音の動きがより苛烈に、攻撃的になっていく。

それを捌き、防ぎ、避け、時に被弾しながら必死に考える。時間は残り少ない。この時間内に自分を倒そうと思うならどうするか。自分ならどうするか。考えろ、考えろ考えろ考えろ！

不意に、視界の端に海面に浮かぶセシリアとシャルロットの姿が見えた。そしてセシリアの持つ武器を見た瞬間、静司の中で答えが出た。そしてそれを踏まえた作戦を組み立てる。だがその内容に我ながら呆れてしまう。これは酷い賭けだ。下手をすれば自分は、死ぬ。

いいのか？ 本当に。死ぬわけにはいかないと決めたのに。もつと安全策があるのではないのか。いや、それ以前に一夏達に任せれば勝手に解決するのではないのか。ならば自分はもうこれ以上やらなくともいいのではないか？

しかし首を振る。ここに来る前、怒りと復讐心だけに飲まれない様にと誓った。仲間を思い、友を思い、そして彼女達の事を想い、また暴走しない様にと。だけどやはりそれだけじゃあないのだ。どんなに怒りに飲まれない様にしても、やはりその心の中の黒い炎も自分を

構成する一部。どちらかに天秤を傾ける事は出来ない。だが生き残ると誓った事も事実。ならば意地でもそうするしかない。運の要素を實力と経験で補え。死を考えるな。生き残る事を考えつつ、目的を果たせ。

覚悟は決まった。後は一夏達が参戦する前にケリを付ける。

静司は黒翼を駆る。何度目かの福音との激突。飛び散る装甲と血。福音にもダメージは少しずつ蓄積されている。そしてそれが福音のその更に向こう側に居る黒幕の焦りを呼び、福音の攻撃がより攻撃一辺倒に変わっていく。

「《クエイク・アンカー》set」

いったん距離を取りつつ左腕を変形させていく。黒翼の切り札の一つ。本来は対人武器では無いそれにエネルギーを回す。爪同士が合わさり、まるで槍の様な形となった左腕の周囲に光と紫電が舞う。

『キイイイイイイエエエエエエアアアアア!!』

こちらの変化に気づいた福音が絶叫を上げながら広範囲に光弾を放った。撒き散らされた破壊の嵐を福音の更の上に上に飛ぶことでギリギリ回避した静司は、福音の直上で左腕を構え、そして止まった。それはこの戦闘が始まって以来、初めて黒翼が一定時間停止した瞬間。そしてその行動に遥か彼方の悪意が反応する。

ぞわり、と悪寒が奔る。機器は反応せずとも体中の感覚が危機を知らせる。そして一瞬遅れてハイパーセンサーが警告を発する。

——警告。エネルギー反——

その警告は衝撃とそれに伴う痛みと激痛の叫びで聞こえる事は無かった。

黒翼の腹部に血の花が咲く。遥か彼方よりの狙撃。その弾丸は黒翼を貫き、その力を奪った。黒翼がぐらりと傾き、やがて力なく墜落していく。

その光景を見ていたシャルロットは悲鳴を上げた。セシリアも目を見開き啞然としている。鈴もラウラも、そして箒と一夏も同様だっ

た。

黒翼は力なく真つ逆さまに落下していく。その先では福音が両腕にエネルギーの刃を展開し待ち構えている。光弾では無く、確実に止めを刺す。その意思に気づいた一夏が叫ぶ。

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

紅椿の単一使用能力。絢爛舞踏。その特性はエネルギーの増幅と供与。その助けを得てエネルギーを回復させた白式。そのスラストターを吹かせ福音に迫るが遠すぎた。黒翼は既に福音の間近まで落下しており、福音は斬撃のモーションに入っている。もう、間に合わない。それでも必死に距離を詰める一夏は不意に気づいた。

福音の刃が黒翼に突き刺さる。まさにその瞬間、黒翼の眼が光ったのだ。

そして黒翼が動き出す。両足の鉤爪をまるで固定するかの様に福音に叩き付け食い込ませる。壊れた右腕で斬撃を繰り返す福音の腕を殴る事で弾き、もう片方の腕は左腕で弾く。両膝のワイヤーブレードを射出し、そのまま己と福音へと巻きつけた。

「……やっとな……取り付けたな……」

聞こえた声は苦痛と疲労が滲んだかすれた声であったが、どこか笑っている気がした。

「言いたいことは山ほどある。だが今はこれだけを言わせてもらう」

『キイイイイイイイエエエエエエエエエエエエエエエエエ!』

福音が絶叫を上げ両腕の刃を。翼からの光弾を全て黒翼に向ける。しかしそれよりも早く、黒翼の左腕が福音を撃ち抜く。

「俺の——勝ちだ」

次の瞬間、黒翼と銀の福音を中心に爆発的な光が撒き散らされた。

目の前で福音の装甲に波紋が広がる。そしてその波紋と共に福音のエネルギーの翼と装甲が砕かれていく。やがて見えるのは福音の搭乗者。意識を失った金髪の女性だ。静司は彼女に思う事はそれほどない。彼女とて被害者なのだから。

破壊の波紋は福音の全身に広がりその装甲を全て砕いていく。だがその過程で搭乗者のISスーツもダメージが行きわたったり、破れてしまい更にはその下の彼女にも傷を負わせてしまった。

(威力調整……誤ったかな……)

ダメージを負わせたこと。そしてスーツの下の滑らかな肢体に一瞬焦ったが、若干傷がついただけで命に別状はないだろう。彼女には悪いが我慢してもらおうしかない。そもそも《クエイク・アンカー》は対人用では無い。今回は威力と範囲を絞りぶっつけ本番での対人使用だ。静司としても流石に中の人間を殺すのは忍びなかった故の措置。無論、もしもの時は覚悟していたが。

今回の作戦。あえて狙撃を受ける事で油断した福音に取りつくという無茶を通り越して賭けとしかいえないなかつたそれに静司は勝った。狙撃のダメージも、来るのが予想出来ていたからこそ、悪寒を感じた瞬間に体をずらすことで致命傷は避けられた。それは我ながら超人的とも言える回避だった。今までの経験と、生きる意志がそうさせたのだと静司は思う。だが致命傷は避けられたが、傷は傷だ。今も心臓より下、わき腹の貫かれた部分から血が流れている。血と一緒に力も流れ出している様で、もはや体の態勢を保てない。もとより限界間近だった身への攻撃だ。こうなるのも必然とも言える。

装甲が砕かれた事で黒翼により拘束が解け、福音の搭乗者が落下していく。慌てて一夏と箒が回収に向かうのを尻目に、静司と黒翼もまた、力を失い今度こそ本当に墜落していった。

いけない。まだ全てが終わっていない。狙撃者——おそらくは無人機はまだ残っている。何も倒す必要は無い。後はここから離脱すればいいのだ。だが体に力が入らない。想像以上に腹の傷は静司の体力を奪っていた。駄目だ、このままでは今度こそ——

視界の端に光が走る。先ほど狙撃が来た方向だ。スローモーションに映る視界の中、己に迫る死の弾丸を前に静司は必死に足掻こうとするが、体はやはり動かない。ここまでなのか。

(違う……終わらせられない)

意思是生きる事へと向いている。どうしようもなく動かない体に

何とか命令を送ろうとする。不意に、そんな静司に影がかかった。

ギイイイイイッン！ と金属音が響く。続いて聞こえたのはスラスターの音と聞き覚えのある女性の声。

「少し遅かったか……だが言わせてもらう。私の生徒達を守ってくれた事、感謝する」

「ねえ……さん……」

次第に閉じていく視界の中、静司は目の前に浮かぶ長髪の女性に、過去の思い出を重ねつつ、静司は力なく落ちていった。

突然現れた女性。その正体にいち早く気付いたのは一夏だった。

「千冬姉!?! どうしてここに!?! それにそのラファールは」

「それはこちらのセリフだ馬鹿者。だが説教は後だ」

黒翼に向かう狙撃を打鉄のブレードで弾いた女性、織斑千冬はその鋭い眼を空に向ける。彼女が搭乗するラファール・リヴァイヴは回線やパイプをむき出しにして強引に取り付けられた複数のスラスターが印象的だ。本来は四枚のその多方向加速推進翼はその倍あり、その全てはまるで尾の様に背後に伸びている。安定性を無視し、速度だけを重視した強引な機体となっていた。

「私は空を片付ける。織斑と篠ノ之はアイツらを……いや、あの黒いISを守れ。白式のシールドなら可能な筈だ」

「あ、ああ」

剣幕に押され頷く一夏を確認すると千冬は機体を空に向け、一気に加速した。

グンツ、と本来のラファールの性能以上の速度を引き出し空を昇る。無理な出力に機体が警告を飛ばすがそれらを無視してひたすらに目指す。やがて雲を突き抜けた所で一端機体を停止、周囲を見渡す。

周囲には何もない。少なくともハイパーセンサーは反応していない。だが千冬からすれば、それは違った。

「そこか」

再び加速。いよいよ機体が悲鳴を上げ始めスラスタが火を噴く。しかしその間に千冬は目的の場所へとたどり着いていた。

そこは何も無い空間。しかし千冬はそこ目掛けてブレードを振り抜いた。

ブレード越しに伝わる確かな手ごたえ。そしてガキツ、という音と共に、目の前の空間が歪む。まるで蜃気楼の様に揺らぐその空間から真つ二つに断たれたISが現れた。スナイパーライフルを手に持っていたそのISは一瞬、目をチカチカと点灯させたかと思うとそのまま爆散した。

火を上げながら散っていくそのISだった物を冷たく見つめていた千冬だが、やがて眼を逸らす。

「こちらも限界か」

火を噴くスラスタを切り離す。落下していくそれらはやがて火に包まれ爆発していった。これで先程までの様な速度はもう出ない。だがもう必要ない事だ。戦場の状況を考え、速度重視の機体で駆け付けた千冬だが一歩、遅かった。千冬が駆けつけた時見たのは、落下していく二機のIS。そしてそれを狙う遥か彼方からの殺意だった。咄嗟に庇ったがああISにはやはり話を聞かなくてはならないだろう。

千冬は踵を返すと、一夏達の下へ戻るべくゆつくりと機体を下降させはじめた。

シャルロットはもはや飛ぶことしかできない機体を動かし海面を飛ぶ。そして空から落下してきた漆黒のISを受け止めた。衝撃に一瞬海中に沈むが直ぐに浮き上がる。腕の中のIS、そしてその搭乗者は微動だにしない。まさか死んでしまったのか、全身装甲故に中身が分からずシャルロットは焦る様に叫ぶ。

「しっかりして！直ぐに、直ぐに助けを呼ぶから！」

ラウラ達もシャルロットの下に集まり、そして黒いISの状態を見て息を詰まらせた。

全身の装甲はあちこちが砕け、血に染まり今も流れている。右腕はぐしゃぐしゃに潰れ、印象的な翼も一枚のみでそれももうズタボロだ。そして何よりも、わき腹に空いた穴からの出血が酷い。

「ど、どうすれば!」

「とにかく治療よ! 今緊急キットを出すわ!」

「けどISの装甲が邪魔で上手くできませんわ! 何とか解除できませんの!」

「……無理だ。通常の機体なら緊急解除は可能だが、この機体のデータはどこにも無い」

一体どうすれば。焦るシャルロット達だがそこに不意に通信が入った。

『IS学園の生徒に告げる』

「な、なんだ!」

「これは……!」

一夏と箒の焦った声にシャルロットも顔を上げ、そして目に映った物に息を飲む。

いつの間にそこに展開していたのか。一夏達を囲む様に4機のISが宙に浮かんでいた。そのISをみたラウラが呻く。

「アメリカ軍の……IS部隊だど?」

その呻きに全員の背に緊張が走る。何故ここに……いや、何故今更アメリカ軍が出てくるのか。その答えは隊長と思しき黄色と黒のタイガーストライプの機体が答えた。

「アメリカ軍、イーリス・コーリング中尉だ。この機体は「ファング・クエイク」。私たちの目的は二つ。その銀の福音の搭乗者及び黒いISを引き渡してもらおう」

「なっ!」

その答えに全員が啞然とした。福音は分かる。元々はアメリカ・イスラエルの共同開発だからだ。しかし黒いISは違う。

「どうして……この人もなんですか?」

「お前達に知る権利は無い。と、言いたい理由はわかるだろ? 特にそのドイツ軍の隊長は」

ぐつ、とラウラが唇をかみしめる。そう、ラウラには分かっている。このISは何所にも所属していない。少なくとも表向きは。それだけでも捕まる対象になりかねないのに、それに加えて異常なまでの戦闘能力。それらを考えればアメリカはもとより各国が狙うのは当然と言えた。そして今回はアメリカが先手を打った。他の者たちもその理由に気づいたのだろう。一様に怒りを浮かべた。

「ふざけんな！ この人は暴走した福音を止めてくれたんだぞ！」

「そうよ！ 元はと言えばアンタらが片付ける事でしょうが！ それを今になって出てきて寄越せだ？ 恥ずかしくないの!？」

セシリアとシャルロットもイーリスを睨みつける。当のイーリスは苦い顔だ。

「恥ずかしいだ？ 恥ずかしいに決まってるだろうが！ こんなハイエナみたいな真似して涙が出てきてくるわ！ 情けなくてしようがない」

「だったら……!」

「だが私たちは軍人だ。国の為に、国の益となるのならそれを実行しなければならんだよ。いいか覚えて置けガキども。誰もが自分勝手に、自分の思い通りに力を振れるとは限らない。力を持ったのなら相応の責任が付いて回る。それを忘れんな」

苛立ち気に吐き捨てるイーリスが指示を飛ばす。3機のISがゆっくりと一夏達に近寄るが、その動きを止めた。何故なら一夏が《零落白夜》を。箒が《雨月》と《空裂》を構えたからだ。シャルロット達も渡すまいと前が出る。

「分かってるのか？ 私たちと戦うって事はアメリカ軍と戦うって事だぜ？」

「それでも……引けるかよ！」

一夏が吠え、箒も頷く。その瞳には揺らぎはない。そんな二人を見てイーリスは笑った。

「嫌いじゃないよ、お前らみたいな奴は」

そしてゆっくりとファンング・クエイクを構える。

「ならば力づくだ」

うつすらと、まるで薄氷の様な意識の中、シャルロットの腕の中で静司はその会話を聞いていた。そして武器を構える一夏とアメリカ軍ISの姿を認識した時意識が覚醒する。

『B9。応答しろB9！』

自分と呼ぶ通信の声に静かに応える。

「いちら……B9……」

通信の相手はこちらが反応した事に安堵の息を漏らしたが、直ぐにその声が悲痛な物に変わる。

『会話は聞いていたな？』

「はい……」

『ならば……するべきことも分かっているな。出来るか？』

「やるしか……ないでしょう」

ぐぐ、と体を起こし始める。動き始めた黒翼にシャルロットが驚きの声を上げ、続いて静止した。動かないで、とこれ以上は駄目だと。しかし静司は首を振る。

『済まない。B2が今そちらに向かっている。それまでの辛抱だ』

「……了解」

黒翼はガス欠寸前。しかし《クエイク・アンカー》の威力を絞っていた事もあり、まだ若干ながら残っている。ならばする事は一つ。

一夏や、シャルロット達をアメリカ軍と戦わせるわけにはいかない。

なけなしのエネルギーを絞り出し、点火。スラスターを吹かせシャルロットの腕の中から飛び出す。碌に姿勢制御も出来ず、海面を二度、三度と跳ねるように飛びつつ更に加速していく。背後では呼びとめるシャルロットや一夏達の声。そして指示を飛ばし自分の追跡を始めたアメリカ軍のIS。それらを振り切るかのように、静司は海面を走る様にして全速力でその場から離脱していく。

追いかけるアメリカ軍のISが放つ射撃が霞め、海面を穿ちながら

迫る。それから逃げるように。そして必ず帰還する為に。静司とアメリカ軍の追跡劇が始まった。

33. 『ぎまみろ』

それは小さな偶然。天才ですら予想出来なかった、『人の感情』から起きた全くの偶然の出来事だった。

花月荘から少し離れた小さな町。そこに住む子供たちにとって海は昔からの遊び場だった。それは海そのものや砂浜だけでなく、岩場や、入り組み小さな洞窟が多い海岸線全てが勝手知ったる遊び場なのだ。しかしIS学園の合宿期間は毎年入る事を禁じられる場所がある。それは花月荘よりの岩場だ。崖の近くにあるその岩場には洞窟も多く、その洞窟は色々な場所へ繋がっている。その一部が花月荘付近の岩場へと繋がっているからだ。

しかしそこは地元の人間でもあまり入る事の無いエリアな為、禁じられようがられまいが関係が無かった。しかしそれは大人たちの事情だ。

好奇心旺盛な子供達。中でも人一倍強気その少年は数人の友人を引き連れてそこに向かった。理由は単純。禁じられたからこそ好奇心が湧いたのだ。そして大人たちが目を離れたその一瞬の隙にその岩場へ足を踏み入れた。

いけない事をしているという背徳感が少年たちを怖がらせ、しかし同時に楽しませる。少年たちは岩場の中の洞窟に足を踏み入れ探検を開始した。明かりも何もなしに、ただ思いつくがままに洞窟を進んでいく。少年たちの顔に迷いは無く、冒険家になったような高揚があった。

やがて洞窟を抜けると、目の前は海が広がっていた。洞窟の出口から下は足場が無く、高さは数メートルはある。眼下では波が打ち寄せていた。そしてその海の前には切り立った崖とその先に立つ灯台が見えた。距離はそれほど遠くなく、首を真上に上げなければ灯台の頂上が見えない程に近い。そしてその灯台、その頂上に妙な物が見えた。

それは光。ぼんやりとしか見えないが、確かに宙に光が浮いている。そしてその近くには頭に二本の何かを生やした何かが見えた。

そしてその後ろには鉛色で目を光らせる人の姿。

少年たちは恐怖した。その灯台はこの辺りでは有名で、通称は『オ
ンボロ灯台』と言われている。その名の通りかなり老朽化が進んでお
り、所々塗装が剥げ蔦も生え放題。灯台としての機能もとつくに壊れ
ており、ただの廃墟の筈なのだ。

そこに舞う光と耳に何かを付けた影。少年たちは悲鳴を上げ逃げ
出した。我武者羅に来た道を戻り、元の入口までたどり着くと大人た
ちに見つかり怒られることになる。少年達が謝罪しつつも自分たち
が見た事を興奮気味に伝えた。しかし大人たちが遠くからその灯台
を確認したが何も見えない。双眼鏡で確認してもだ。故に大人たち
は少年たちの言い分を見間違いや勘違いとして処理した。そして説
教を続けるべく、少年たちを連れて歩いていたと事で、cover
チームの一人と出会ったのだった。

そしてこの小さな偶然が、天才の思惑を思わぬ方向へ持っていく。

「ふむ……」

『念の為、自分達もここから確認しましたが灯台に何の問題も見受け
られません。一応、これからその灯台にも向かってみようとは思って
ますが……』

その報告を聞きながらC1は思案する。もしその子供たちが見た
のが自分たちの目的の人物だった場合、これを逃す手は無い。

「わかった。俺もそちらに向かう。もし標的だった場合は即座に報告
しろ。見つかるなよ」

『了解』

指示を飛ばすとC1も現場へと急ぐ。しかし再び通信機が鳴った。
その相手を見てC1は眉を顰めた。相手はC12。しかし彼女は今
花月荘で静司の影武者をやっている筈だが――

「こちらC1。一体どうした？」

『あーそのつすね……、相談というか要望というか……』

「何だそれは？」

何の事だと首を傾げる。通信越しのC12の声はどこか苦笑いと諦めを含んだ様な声色で続ける。

『えーとっすね……怒らないで聞いてほしいんですけど……』

そして続いた言葉にC1はまずは驚き、そして呆れた。なんでも布仏本音が目を覚まし、一瞬で変装を見破られたというのだ。

「何やってんだお前は……」

『私だって驚いたっすよ。これでも自信あったのに……』

「はあ、もういい。それで嬢ちゃんが何か言ってるのか？」

『まあそういう事っす。どうもそちらと合流したいとの事で』

「なんだって？」

驚いたC1だが直ぐに合点がいった。静司の事が心配なのだろう。そして花月荘では情報が入らないのでこちらに来て直接知りたいたい所か。

しかし今は時間が惜しい。戦力にならない人員をわざわざ迎えに行く理由は無いのだ。時間がかかれば仲間の危機がます。それを説明すれば、見かけによらず聡い彼女の事だ。理解してくれるだろう。

その旨をC12に説明してもらおうかと考えていた矢先、不意に通信越しの声が変わった。

『しーわんさん？』

「つて、嬢ちゃん!？」

通信に出ているのは布仏本音だ。しかしいきなり何を？

『あのね、おりむーの話を丸川先生から聞いて、もしかしたらつて』

そうして本音が語りだした提案にC1は今度こそ啞然とするのだった。

シャルロットの腕から飛び出し逃亡した黒翼。それを追うアメリカ軍。一夏はそれを見るや否や、それを追うべく白式を飛ばそうとした。そしてそれをイーリスの駆るファンング・クエイクが止めるべく動き始める。しかし唐突に響いた声とブレードが二人の戦いを遮った。

「そこまでだ」

「ちふ——つうわあ!？」

空より現れた千冬が声でイーリスを制し、ブレードで白式の突進そのものを受け止めた。勢いのままにブレードにぶつかった一夏が呻きを漏らす。千冬はそちらには目もくれずイーリスを見やる。

「ブリュンヒルデか。ガキのお守りか？」

「そういつた所だ。コイツらは私が連れて帰る。それで構わないな？」

「千冬姉!？」

一夏が信じられない、と叫ぶ。しかし千冬は一夏を一睨みするとイーリスに視線を戻す。

「良いも悪いも。こちらとしても男性操縦者やら各国の候補生やらを潰したとなつては色々面倒だしな。ありがたい話だ」

「そうか。ならばこれで」

「ああ——悪いな」

最早ここには様が無いと、イーリスが機体を翻し彼方へと消えていく。恐らく自らも追撃に出るのだろう。だが納得のいかない一夏が千冬に迫る。

「何でだよ千冬姉!？ このままじゃ——」

「で、お前はアメリカ軍と事を構えてどうするつもりだ？ お前や篠ノ之はまだいいだろう。『一応』無所属だからな。だが他の連中は違う。その責任をお前が取れるのか?」

「なっ、だけどIS学園は——」

「いかなる組織にも縛られない？ 確かにそうだ。だがそんなものは所詮建前だ。国の代表候補生たるアイツらが、それにドイツ軍の兵士であるラウラがアメリカ軍と戦って起きる問題をお前が解決できるのか」

「じゃ、じゃあ俺だけでも!」

「自惚れるな。お前一人が行った所で何も変わらん。怪我人が増えるだけだ。篠ノ之、お前が一緒に居てもそれは変わらん」

「くっ……」

声を発しようとした筈だが千冬に先手を打たれて押し黙る。

「でも、それじゃあ何もするなって事ですか!？」

シャルロットが悲痛な声で叫ぶが、千冬はそれに頷くだけだった。鈴もセシリアも、そしてラウラも悔しそうに顔を歪ませる。彼女達とて分かつているのだ。戦ってはいけないと。

「それでも、それでも俺は!」

「もう一度言うぞ、行くことは許さん。それと自惚れるなよ一夏。お前は守る守ると言うが、お前のその行動が逆に周囲に被害を生むことがあるんだ。それを自覚しろ。出来ないのなら軽々しく言うな」

「……っ!」

その言葉は一夏に効いた。それは何よりも大切で、そして今まで自分を守り続けてきた姉からの言葉だったから。その姉に憧れ、自分も守りたいと思っていたのに、その姉に否定された一夏は顔を俯かせ。それを氣遣わしげに箒が見ている。千冬はそんな二人と、昏い顔をする候補生達を見やる。

千冬とて悔しいのだ。あのISの搭乗者には訊きたいことは山ほどあるが、同時に弟や生徒達の為を思って逃亡したのも何となくだが理解できた。そんな恩人たる人物が狩られる様を見ている事しか出来ない。

「俺が、俺がもつと強ければ……」

悔しげに漏れる一夏の言葉に少しの不安を感じつつ、千冬自身も己の無力さに唇をかみしめていた。

海面スレスレを駆ける黒翼とそれを追うアメリカ軍IS部隊。その追撃劇は終わりを告げようとしていた。度重なる戦闘に疲弊した静司と黒翼にとって、その追走劇はもはや限界を超えていたのだ。

機体が火が噴き、やがて最後の翼も砕けていった。バランスを崩した黒翼が海面を転がる様に跳ね、やがて静止する。そして3機のISが黒翼を囲む様に展開する。

だがそれでも静司は諦めていない。無事な左腕。そこに装備されたライフルの銃口を向ける。アメリカ軍IS操縦者達は警戒し自ら

も武器を向ける。そこにもう1機のISが現れた。フアング・クエイ
クダ。

「なあ、諦めてくれねえか？」

イーリスが黒翼に投げかける。その顔には苦悩が浮かんでいた。
「アンタには感謝してるんだ。ウチのケツを拭ってくれただけでな
く、ナタルを救ってくれた。そんなアンタには申し訳ないと思ってい
るが命令なんだ。だからこそ、これ以上アンタを痛め付けるのは気分
が悪い」

それはイーリスの本音だ。一夏達にはああ言ったものも、彼女とて
望んでは居ないのだ。それにこれ以上の戦闘は目の前のIS搭乗者
の命にも関わる。それが分かっているからこそその投げかけ。

しかしそれに黒翼は首を振った。それを見てイーリスは「そうか」
と呟き、自らも銃口を向ける。それでも戦意を失う様子が見えない相
手に問う。

「そこまでか……。なあ、アンタには戻る場所があるのか？」

それは何となく浮かんだ疑問。この正体不明のISがここまでし
て逃れようとするのは何故かという思いから生まれた問い。

返答は期待していなかった。だが意外にも相手は答えた。機械越
しでもわかる掠れた声で。

「戻って、いいのか……。まだ、わから、ない。——だが」

全身装甲の仮面越し、イーリスは目の前のISの激情を確かに見
た。

「戻り、たいと、思う場所は、あるっ！」

ああ、こいつは欠片も諦めてはいない。

イーリスは理解する。この相手には説得は無意味だ。聞くような
相手じゃない。だから言葉はもう不要。

ならば、相手に敬意を表し全力で無力化すると決めた。

「そうかい。私はアンタみたいな奴も好きだぜ。だから——行くぜ」

「……」

二人が睨み合う。だがその相対は予想外の出来事に遮られた。

「中尉！」

「っ!? なんだこれは!？」

不意に海面から彼女達を囲む様に何かが飛び出した。飛び出したそれは一定の高度まで行くと破裂し、周囲に煙を撒き散らせる。

「煙幕か!」

「レーダーに異常! 妨害されています!」

彼女達が慌てる間にも再び海中から煙幕が発射されていく。更にはどこかにECM発生器があるのだろう。通常のレーダーも使い物にならなくなっていく。だが自分たち乗っているのはISだ。ハイパーセンサーはこれしきでは問題が無い。だが、海中から更に打ち出された物がそれを阻害する。

それは閃光手榴弾。それもIS用に調整された極めて強力な物。

「おいおいおいっ!？」

気づいた時にはもう遅い。大きな音と共にそれは効果を発揮する。目を潰さんとばかりの光が周囲を包み込み思わず目を逸らす。ハイパーセンサーが余分な情報をカットしているが、それでも捌ききれなかった音と光が彼女達を惑わす。だが彼女達とて訓練は積んでいる。これしきで戦闘不能などになりはしない。即座に態勢を立て直すべく動き始める。しかし襲撃者からすればその一瞬で良かった。

「えっ……!？」

「きやあ!？」

突然、隊員の一人が悲鳴を上げ海へ落ちていく。それに気を取られた途端、もう一人も何かに斬られて落下していった。

「クソっ、煙幕の中だ! 離れるな!」

一瞬煙の中を過った黒い影に銃口を向ける。しかし影が直ぐに煙幕の中にその姿を消した。

「どこのどいつだこの野郎!」

上下左右全方向を煙幕で遮られた中、残った部下と背中合わせになりながら敵の姿を探す。だがこちらが捉えるよりも襲撃者の方が早かった。

「っ! 下か!」

気づいた時には下方、海の中から放たれた銃弾が部下のISに直撃

していた。正確にスラスターを貫いたその攻撃で部下が姿勢を崩し、煙幕の中へと消える。その手を取ろうとイーリスは機体に向けるが、掴むよりも早く部下の悲鳴が通信越しに響く。

これで一人。

正体不明の襲撃者を不気味に感じながらもイーリスは身構える。敵はかなりの実力者だ。どこから襲ってくるのか。全身を集中させ襲撃に備える。だが襲撃者は予想外の現れ方をした。

「なんだと……う？」

正面、煙の中からゆつくりと影が浮かびだす。それは黒いラファール・リヴァイブ。しかしその姿は元の形からかなりかけ離れている。何故なら両腕両足は勿論の事、その多方向加速推進翼^{マルチスラスター}までもが、まるで刃の様に鋭利に尖っているのだ。両腕すらも刃と化している為、およそ指らしきものは無い。そして異様な全身装甲。

「何の真似か知らねえが、随分な喧嘩の売り方じゃねえか。何者だ、アంత」

「……」

返答はその腕の刃。その切っ先をイーリスに向ける。その相手の態度にイーリスは不敵に笑い、自らもナイフを構えた。フアング・クエイクの主武装、それはこのナイフと己の拳だ。

「そうかい、なら無理やりでも聞き出してやる！」

瞬時加速。超高速で一気に距離を詰めるべく発動したそれだが、襲撃者もまた同じ行動を取っていた。その結果、互いの相対速度が超高速の激突を引き起こす。

ハイパーセンサーにより拡張された意識でも早すぎるその展開の中、イーリスは機体の4つのスラスターを稼働。その瞬間、真っ直ぐに敵と激突するコースを移動していたフアング・クエイクがあり得ない程の急角度で横に移動した。視界の端、相手の刃が空を斬るのを確認しつつ、再び稼働。またしても急角度で進路を変更し、相手の横っ腹に向けて拳を突きこんだ。

個別連続瞬時加速^{リボルバライグニッション}。成功率40%の連続瞬時加速に成功したイーリスは勝利を確信した。だが、襲撃者の技量はイーリスの予想を遙か

に超えていた。どう考えても避ける事も防ぐことも出来ないであろうイーリスの拳。それに相手は反応して見せたのだ。襲撃者のISは刃と一体となった腕でイーリスの拳を受け止めると、それをいなす様にして防ぎきった。

「んなっ!?!」

更にはその動きのままに機体を回転させ、勢いの増したもう一方の腕の刃がイーリスを襲う。慌ててナイフで弾くが、今度は縦に回転し足の刃を。それが躲されれば再び腕を、足を。途切れることなく上下左右に回転しつつの斬撃で襲ってくる。

「こんつの、曲芸師がアンタは!?!」

高速のその連撃を防ぎ、躲しきるイーリスも並大抵の戦士では無い。舌打ちをしつつ何とか距離を離すべく背後に飛びつつ、ガトリング砲を呼び出す。

「スカスカにしてやるよ!」

銃身が回転を始める。対する相手は再び腕の刃の切っ先をイーリスに向けて、その刃が縦に割れた。その断面には紫電が舞っている。それを見てイーリスは冷や汗を流した。

「おいおいおい、今度は手品か畜生めっ!」

半ばヤケクソ気味に銃弾を放つ。襲撃者も同意にその腕からレールガンらしき物を放った。光と銃弾が交差し、両者に直撃する。ファング・クエイクの肩の装甲が吹き飛び、襲撃者の機体の腕の装甲がひしゃげた。互いに直撃は避けたが、ダメージは免れなかったのだ。

互いに着弾の衝撃に後退し、睨み合う。こいつは長引きそうだとイーリスが覚悟を決めようとした所に通信が入った。相手は何と目の前の襲撃者だ。

『このままだと長引きそうね』

それは機械によつて変換された声。答えるかどうか悩んだが結局は返事をする事にした。

「ああそうだな。だが良いぜ、やってやるよ」

『残念だけど私は遠慮願いたいわ。急いでるの』

「へっ、そつちから襲つておいてそれは——」

『あの子を、死なせるわけにはいかないから』

その言葉にイーリスははっ、となる。慌てて海面を見ると先ほどまで居た筈の黒いISが消えていた。それを見て合点がいく。

「アイツの仲間か」

『ええ、そうよ。本当は時間稼ぎしつつ追撃する貴女達を無力化したかったのだけど、ちよつと難しそうだから』

「ご丁寧に解説ありがとよ。だが逃がす訳にはいかないな。それにア
ンタは私の部下を痛めつけてくれたしな」

『失礼ね。ちよつと気絶してもらっただけよ。後遺症も何も無いわ』

「それで納得すると思ってるのかコラ」

『しないでしょうね。流石にそれ位は分かるわよ。だからコレは貴女
達が撤退するのに納得する理由よ』

「何だつて……？」

突然データが送られてくる。送信者は目の前のISだ。ウイルス
か何かの罠かとも考えたが、この期に及んでそんな真似をする様な相
手では無いだろう、と決めつけファイルを開く。胡散臭げにその内容
を眺めていたイーリスだが次第にその顔が驚きに変化していく。

「おい……これはマジか」

『マジよ。ついでに言うとう貴女の上司や各国の皆さんにも同じデータ
を送ってるから早い者勝ちね』

「だが本物だと言う確証が無い」

『だけど偽物だという確証もない。求めるISは海の底から逃亡中。
私はそれを援護する気満々。対する貴女のISは海中で私と渡り合
えるかしら？ ISは基本海中も大丈夫だけど、それ専用に調整した
機体とそれ以外では中々差があるわよ』

「つーかその機体水中戦仕様なのかよ!? なんかせこいでー！」

『何とでも。もうすぐ煙幕も晴れてしまおうわ。そうしたら本当に戦い
続けるしかなくなる。出来ればその前に私とあの子を逃がして欲し
いのだけど?』

「その為の煙幕かよ。良い性格視点なアンタ……」

呆れた様に呻きつつイーリスは考える。任務は件のISの捕獲。

その為に私情を押しとどめ、子供に説教までして追撃した。その自分が相手を見逃すのは筋が通っていない。

だが、

「アンタの情報が正しければ、筋も何もねえな。それ以上にこれは重要だ。それこそ、私も我慢できない位に」

ぎりつ、と歯を噛みしめる。それほどまでにこの情報が本当だった場合の価値は大きい。それは国にとっても。そして自分にとっても。

「私は——」

ああ、自分は馬鹿だ。結局自分もあの子供達と同じだったかと思いつつ、答える。

「さっきのアンタの攻撃で一瞬意識が飛んだ。嗚呼、その間に敵を見失ってしまった馬鹿な隊長だ。だが意識を取り戻したらまた任務を続行するだろう。上官からの命令が来ない限り」

これが限界。これが妥協点。私情と立場を考えた中のギリギリの答え。

『ありがとう』

襲撃者の黒いラファールが頭を下げる。そしてそのまま海中へと沈んでいく。それを眺めながらイーリスは呟く。

「ごちそうさ、だ。アンタは気に食わねえが、それでもアンタの仲間に感謝してるのはマジなんだからよ」

やがて黒いラファールは完全に沈み、姿が見え無くなる。煙幕も晴れてきた。後少しすれば再び追撃しなければならない。だがその前に確かめたいことがある。

彼女は電波妨害もいつのまにか解除されているのを確認すると通信を繋げる。相手は今回の作戦の責任者である上官だ。通信が繋がると、相手が何かを言うよりも早く、イーリスは口を開いた。

「なあ大佐、アンタにも同じ情報がいつてるらしいから簡潔に聞くぜ？ —— 私はカラスとウサギ、どちらを狩りに行くべきだ？」

一瞬の沈黙の後、返ってきた答えにイーリスは笑みを浮かべるのだった。

がしやん、と壁にぶつかつたニンジン型のタンブラーがその中身をぶちまける。中身のジュースが飛び散り服にかかるがそんなものは気にもせず、篠ノ之束は肩で荒く息をしていた。その瞳には明確な怒りが宿っている。

風が吹き彼女の髪を揺らす。今は使われていない灯台の最上部、外に突き出すように造られた、メンテナンス用の足場だ。柵に囲まれたその場所で篠ノ之束は震える声で呻いた。

「いつも……」

ぎりっ、と歯を噛みしめる。

「いつもいつもいつもいつもいつもいつも邪魔をしてっ！」

再び近くにあつたニンジン型の光線銃を。待機していた銀色の機械リスを。とにかく近くにあつた物を感情のままに灯台の壁に投げる。それはまるで幼い子供が自分の我儘が通らずに地団駄を踏んでいる様で、しかしそれを行っているのが美しい女性である故にどこか奇妙な姿だった。更にはその女の背後には微動だにしない鉛色の無人機が居る事が異様に拍車をかけている。

一通り物を投げ終えた束は荒く息を乱しながら投影スクリーンに視線を移す。薄く光りながら浮かぶそこそが、彼女を目撃した少年たちが見た光の正体だったが、そんな事は束に関係ない。肝心なのはそこに映る例の黒いISとアメリカ軍のISの追撃劇だ。

黒いIS。自らの邪魔をする忌まわしいIS。自分を不快にさせる最低なIS。そして妹とその想い人の為に用意した舞台を壊した、意地汚いIS。

何なのだアレは。何でも上手くいかないのだ。自分は十全だ。失敗などする訳が無い。その筈だったのに！　自分は完璧じゃなければいけないのだ！　何故なら最強で完璧なちーちゃんの友達なのだから。なのになのになのになのになの！

また地団太を踏む。怒りのままに物を投げ飛ばす。もはや子供の癪癪としか言いようが無い光景だが止める者は居ない。

一通り暴れ、そしてまた荒くなった息を整えていると、スクリーン

の中に変化が起きていた。例の黒いISとアメリカ軍のISが煙の中に隠れてしまっている。これでは中の様子が見え無い。

まあいいだろう。どうせ逃げ切れる訳が無い。無人機は自分の守護の為の一機だけを残して全て落とされたが、アレはアメリカ軍が確保するだろう。そうしたら後から奪いに行けばいい。そしてその搭乗者も後悔させてやる。そう考えていた矢先だった。

不意にスクリーンに浮かぶ警告の文字。だがそれはおかしい。この場所は見つかる筈が無い。何故なら外から見れば何の変哲もない唯の古びた灯台にしか見えないのだ。間近まで近づかなければその偽装の中は分からない。そしてこの灯台に訪れる人など居ないと言う事は、データを見て確認していた。

だが実際にそれはやってきていた。スクリーンにレーダーと情報が映るがそれを見て束は眉を顰めた。

「ドイツに中国……ロシアに日本まで？　どういう事？」

見つかる筈が無い。だがしかしそれらの国のエージェントらしき者たちが近づいてきている。更には遙か先の海上でISが発進したというデータまである。

おかしい、何かが起きている。

直ぐにハッキングを開始する。彼女にとって造作も無い事だ。そして結果は直ぐに出た。その結果は彼女の予想外の物。

各国関係者に突然送られたデータ。発信元も不明のそれには多少荒い写真が添付されていた。写るのは自分の姿とこの灯台。そして自分の後ろに控える無人機の姿と、福音と行動を共にしていた無人機の姿。酷似するそれを見れば誰もが考え付くであろう事に気づき、束は唾然とした。そしてこちらにやってくる連中の目的も確定する。

古びた灯台に、女の怒りの絶叫が響き渡った。

遙か遠く、灯台が飛び上がった無人機とそれを攻撃するどこかの国のISを眺めつつCIは笑った。これである天災はあちらの対応に追われるだろう。海中に逃れた静司達の追跡をする暇などあるまい。

その隙にこちらは静司達を回収する。

それに篠ノ之束と一緒に居た無人機と黒翼から送られてきた福音と共に居た無人機の写真。その関係を繋ぎ合わせれば、今回の黒幕が誰か、誰もがあの女を候補に挙げるだろう。それは彼女の大切な友人や妹も然り。

「行くぞ」

もうここには用は無い。いや、本当なら自分達もあそこに行つてあの女の眉間を撃ち抜きに行きたい。だが今は駄目だ。まずは仲間の事を考える。

自らにそう言い聞かせるとB2との合流地点に向かうべく車に乗り込む。最後にちらり、ともう一度その灯台に視線を向け、呟く。

「ざまあみろ、糞ウサギ」

車が走り出す。もはや灯台には目もくれないC1。その運転する車の後部座席には不安げな顔をしている布仏本音の姿があった。

34. 一夜明けて

暗い暗い闇の底。

完全に闇に閉ざされたその世界で、体がゆつくりと何かに沈み込むように包まれていく。冷たいのか熱いのか。それすらも分からず、ゆつくりと何かに浸食されていくような感覚。抗う事は出来ず、ただ状況に流されるしか出来ない。

このままではいけない。

理性では分かっているのに体が動くことは無い。その間にもゆつくりとそれは進んでいき、まず右腕が、そして足が沈み込んでいく。普通なら無理な態勢の筈なのに、何故かその痛みは無い。次に感触がしたのはわき腹。そこには穴が開いていた筈だが、その穴から浸食は進んでいく。それはまるで底に穴の空いた船の様で、一気に沈むスピードが上がっていく。やがて顔すら沈んでいき、残ったのは左腕のみ。だがその左腕も沈むのは時間の問題と言えた。

動け、と命令を送る。動かなければ、ここから抜け出さなければと強く思う。するとわずかながら左腕が動いた。握られていた拳を開き、何かを掴むように手を伸ばす。しかし最早半分以上沈み込んでいた為にその願いは叶わない。もがく様に何かを求める腕がゆつくりと沈んでいく。意識が遠くなっていく。だがそれでも、と段々と薄れていく意識の中、最後の力を振り絞り左腕を伸ばした。

そしてその左腕に何か触れた。鋼鉄の機械の腕である筈なのに何故かその感覚は本当の肌に触れた様にしつかりとわかる。その形、温かさ、それが小さな手だと気づいた。そしてその手がしつかりと自分の手を握り返す。

その途端、世界に光が溢れた。

目の間に広がる白い天井。薬品の匂い。そして自分が寝かされている清潔なベッドとシーツ。静司はゆつくりと目を覚ますと、それら

に囲まれている状況を朦朧とした意識の中確認した。どこかの病院だろうか？

体を起こそうとすると全身に激痛が走った。特に酷いのはわき腹と右腕。特に右腕は痺れて力が入らない。シーツの下から伸ばされた右腕には点滴が打たれている。

ならば左腕で、と思い力を入れようとするがそれも失敗した。いや、それどころか左腕に重さが無い。それによく見れば、自分を覆うシーツの左腕部分が妙に平らになっている。

「くっ……」

歯を食いしばり、まともに動かない右腕を杖の様にして起きあがる。肩までかけられていたシーツがずり落ちていきその理由が判明した。

無い。

左腕——正確には左肩から先が無いのだ。左肩は鋼鉄で覆われており、本来そこから腕が伸びていく場所には、金属と接続端子しか存在しなかった。

「起きたか」

不意に声がかかる。視線を巡らすとこの白い部屋の入口に男が立っていた。男の顔には安堵の笑みが浮かんでいる。

「左腕——黒翼はガス欠と自己修復の為のエネルギー温存で待機状態に戻ってるぞ。流石に部分展開を維持する力も無かったようだな」

言いながらトントン、と首元を叩く。その意図するところを察して静司は己の首元を見ると、ペンダントがかけられていた事によってよく気付いた。

それは黒く一見簡素に見える翼型のペンダント。黒翼の待機状態だ。

「C1俺は……」

「寝ていたのは丸一日程。福音との戦いは昨日の事だ。覚えてないか？ アメリカ軍に追われて、その後B2が援護に来たのを」

言われ、記憶が蘇る。アメリカ軍に追われ、最後の翼も砕けた後の事だ。突然B2から『海へ潜れ』と通信が来たのだ。それとほぼ同時

にアメリカ軍をB2が襲撃。その隙に潜った自分を待っていたのは、B2が持つてきたであろうカプセルだった。そしてそこに黒翼ご自身を投じて、そこで意識が途絶えた。

そこまで考えてはたと気づく。そう自分は意識を失った。何故なら体力精神力、そして何よりも肉体そのものが限界だったから。それこそ重症レベルの筈だ。それなのに今の自分は痛みは有れども動くことが出来ている。黒翼の生体再生もあの時のエネルギーではアテに出来ない筈だ。ならばどうやって――

「嬢ちゃんに感謝するんだな」

「……何？」

こちらの疑問を予測していたのだろう。C1は静司の隣のカーテンに仕切られたベッドへ近づくと、そのカーテンを少し捲った。そこには少女が一人、静かに寝息を立てている。

「本音？」

「そうだ。ずっとお前の傍に居たんだがな。彼女も病み上がりだからいつまでもそうはいかないって事で、休ませてる」

静かに眠る本音の脇には一つだけの髪留めが置かれ、その横にはクリーニングされたであろうIS学園の制服がかけられている。

「何故ここに？」

「お前を助ける為だ。B2がお前を回収して岸までたどり着いた時はつきり言って手遅れに近かった。何時もなら黒翼の生体再生に頼るところだが、肝心の黒翼も直ぐに部分展開を保てず待機状態。お前の傷を癒すエネルギーなんて残っちゃいなかった」

予備動力もな、とC1が付け足す。そもそも今回の作戦で静司は複数の予備動力を使ったが、あれはそう簡単に量産できるものではない。一つはエネルギーを溜めるのに時間がかかる事。通常のISならエネルギーは自然回復させるが、予備動力の場合はそのISからエネルギーを移動しなければならない。だがIS側のエネルギーを全て使ってしまえば、当然ISはしばらく動かなくなる。競争が激しく、日々進化を続けているISの開発分野において、動かない機体というのは致命的な遅れとなる。特に今は第三世代の開発にどの組織

も躍起になっているのだ。その事態は避けたいのが道理だ。

更にはこのエネルギーはコアから離れると急速に減退する性質がある。詳しい事は分かっていないが、まるで根から切り離された植物の様に、そして植物が枯れる以上のスピードでエネルギーは急速に失われていく。当然、そのエネルギーの減退を可能な限り防ぐエネルギーパックの開発を目指されているが、現状は多少変わった程度だ。そしてそのエネルギーパックも開発コストが異常に高く、小さな組織では開発費すらまならない。

一つを作るのに非常に高いコストと時間がかかる上に、作った後も恒久的にISに接続していなければ使えなくなる。ならば常に接続するかと言えば、エネルギーパックはISに対して少々大きすぎる。今回の黒翼は肥大した追加装甲内部にそれを納めたが通常のISならそのサイズは邪魔になりかねない。そして壊れでもしたら大損害だ。故に予備動力を作る余力がある組織にしても、通常搭載するのは一つか二つまで。それも緊急事態だけだ。大量に作り溜めれば、ISに接続しての補完なのでその間そのISに無茶な実験や訓練は出来ない。

今回静司は5つのエネルギーパックを使用した。EXISTの保有するコアは黒翼を除き3機。内、1機は常に本社で警備に当たっており、残り2機は通常は実験や訓練。有事には出撃している。これだけの規模の組織で5つというのは本来ならあり得ない。しかしそれを可能にしたのがデュノア社とのIS合同開発だ。早い話、デュノア社から幾つかを無理やり借り出したのである。

「お蔭で社長が現在デュノア社に説明に行ってるよ。どんな理由つけるのかは知らんが、あちらの弱みはいくらでもある。そこは気にしなくていいさ」

C1は気楽に言うが、デュノア社からすればたまったものではないだろう。だがそこは自分の領分では無い。それより今は本音がいる理由が知りたい。

「肝心なのはお前が助かった理由だがな、お前が戦ってる時に織斑一夏が目覚めた。そして織斑一夏は養護教諭の静止を振り切り出撃し

た訳だが、本来なら彼もそうそう動ける傷では無かった。そう、本来ならな」

「……そうか」

C1の口ぶりから静司はある予想を付けC1も頷く。

「そうだ。織斑一夏のISである白式にもお前の黒翼と同じ生体再生能力があつたんだよ。絶対防御の致命領域対応——早い話がISに搭乗者の生命維持機能があるのは周知の事実だが、生体再生とまでなると話は別だ。故に今まではお前の黒翼しかその事実が確認できていなかった」

静司も頷く。考えてみればおかしな話では無い。白式は篠ノ之束の手が加わつたISだ。ならば己の大切な友人やその弟、そして妹を守る為に手を加えていてもおかしくない。恐らくだが箒の紅椿にも同様の機能がある事だろう。

「さて、その機能もあつて意識が戻り次第出撃した織斑一夏だが、その現場には学園の養護教諭と、同じく目覚めた嬢ちゃんがいたらしい。そして織斑一夏の傷が治っているのを見た」

その瞬間、彼女は一つの仮説を立てたらしい。白式のコアに篠ノ之束が関わっているのは知っていた。そしてそのコアは何かしら特別な力を持っている。そして特別なコアと聞くと、彼女にはもう一つ心当たりがあつたのだ。

「通常のナンバリングから外れ、通常時にはコアネットワークにも接続しない。そして篠ノ之束を恨んでいるという特別、いや、異常なコア。つまりは黒翼の事だな」

もちろんその二つのコアは『他と違う』という共通点しかない。だがもし、黒翼にも白式と同じ様な能力があつたとしたら？ そして戦っている静司がどうしようもない危機に陥っていたら？ その不安が彼女を動かした。

「驚いたぜ？ 何せ、IS学園の保管していたE・パックを使えばいい、なんて言い出したんだから」

「なっ……!?! だがいくらなんでもそれは」

「まあ普通は無理だな。確かに今回の臨海学校で学園側も念の為とし

て持ってきてはいたらしい。普通に訓練するだけなら要らない物だが、白式の訓練はエネルギーを食うからな。だが当然ながら管理は厳重にされていた。待機中のISに接続してロックがかかっていたからな」

ロックの解除には数人の教師の承認が必要だ。それだけ貴重なものなのだ。だが彼女はそれを持ち出した。とても一人で出来る芸当では――

「まさか会長が？」

「正解だ。あちらも相当お冠の様でな、嬢ちゃんが提案し俺達が連絡を取ったら二つ返事で許可が出た。それも教師しか知らない筈の解除コードを添えてな」

本来なら会長自身がこちらに向かいたかつたらしい。だがそうすると学園側の戦力が薄くなる。無論、IS学園には他にも2年3年に実力者は居る。それこそ1年の代表候補生など歯牙にもかけない程のだ。だが事実上最強の千冬や、実力者の真耶。ISを動かせる複数の教師がこちらに来ている状態で、楯無までもがこちらに来てしまうのは明らかな戦力低下だ。唯でさえ、以前楯無が不在の時に学園は襲撃を受けているのだ。隙は見せられない。

「後は俺が花月荘に向かい、内部に居た嬢ちゃんとC12と協力してそれを持ち出した。その際、ラファールも一機拝借してな。教師陣はお前達の戦闘に気が向いていたからそれほど大変じゃなかったよ。そしてそのE・バックを使い黒翼を一度は回復させた。まあ、直ぐにお前の生体再生とISの活動維持の為に空になったけどな」

その言葉に静司はゾツとした。回復したにも関わらず今黒翼は待機状態で自分も完治とは到底言い難い。つまりそれだけのエネルギーを消費したと言う事だろう。つまりは自分も、黒翼もそれだけ重傷だったと言う事だ。しかも急激な回復は肉体にも機体にも負担が大きい。しかしこれで本音が居る理由、そして自分が無事な理由は知れた。

「嬢ちゃんの提案が無ければどうなってたか分からん。文字通り命の恩人って訳だな」

「……そうだな」

もう一度、静かに眠る本音を見る。よく見ればその目元は赤く腫れている。その理由が分からない程静司は馬鹿では無い。

「また泣かせたな、俺は……」

そして救われた。自分は彼女に助けられてばかりだ。今回の負傷だけでは無い。日頃から、能天気の様でしかし気が利く彼女の優しさに救われている。それに対して自分は何が出来たのだろうか。それどころかむしろ巻き込んでしまった。それは本音だけでは無い。今回の事件ももつとうまくできたのではないか。本音やシャルロットが傷つく必要も無かったのではないか。自分が悪化させてしまったのでは無いか。疑問はいくらでもあり、その事実が静司の気を重くする。

だがそんな静司の頭にC1の手が乱暴に乗せられた。少々強かったそれが傷に響き静司は短く悲鳴を上げた。

「いつまで悩みこんでんだ馬鹿。そんな顔じゃ嬢ちゃんが起きた時また気にするだろうが」

わしや、と髪をくしゃくしゃにしつつC1は続けた。

「そんなに気になるんなら直接聞いてみる。お前一人で悩んでも答えはでないだろ」

最後にぼんつ、と頭を叩く。再び響いた痛みにも声が漏れるが、C1はそんな静司の様子をみて笑った。

「生きてる証だ。その痛みも悩みもな。享受しろよ、静司。さて、俺は諸々の後始末がまだ残ってるからな、また後でくるぜ」

「って、ちよつと待て、一夏達は？ それに篠ノ之束も——」

「そこに端末があるだろ？ その中に入ってるから適当に読んどけ。とりあえず、お前の心配する様な事は起きてないよ——ああ、

一つ忘れてた。早く花月荘に戻らないとC12が限界だつてよ」

「限界？ どういう意味だ？」

「それ含めてその端末に入ってる。ひとまず読んどけよ。じゃあな」

ひらひら、手を振りつつC1は病室を後にした。一人残された静司は寝かされていたベッドの隣に机に置いてある端末を手に取りろうと

したが、右腕に力が入らず持ち上げる事が出来ない。ため息を付くと、端末のキーを押し投影モードへと切替た。ここはおそらくEXI STが確保している建物の一つだ。本音を除いた一般人は居ないだろうし、みられても問題ないだろう。

まず何を調べるか。一瞬、忌まわしい女の顔が浮かんだが首を振る。そして呼び出した情報は一夏達の現状だ。その内容を暫く見つけていた静司だが、やがて安堵のため息を付いた。

織斑一夏と他の専用機持ち達だが、あの後に織斑千冬の指示によってアメリカ軍と戦う事は無く撤退したとある。この事実には静司は安堵する。もし戦ってでもいようものなら目も当てられないからだ。納得はしていないかもしれないが、織斑千冬の判断は正しい。現在は全員花月荘に戻っており、事件なども起きていない。B2がISを外を。C12が自分に変装して中を警戒している様だ。と、その報告書の下部に妙なコメントが添えられていた。

『早くB9治療してこっちに戻してください！ 良心が、良心が痛いっす！』

「……何やってんだ？」

いつまでも寝てるのもおかしいだろうと言う事で既にC12は『起きている川村静司』を演じているらしいが一体何が起きているのか。嫌な予感と冷や汗が流れる。とりあえず、一刻も早く戻ろうと思いつつ、次の報告書を映し出すと、途端に静司の眼が鋭くなった。

『篠ノ之束は逃走。確保した組織は無し』

ある程度は予想していた。あれで簡単に捕まる様では、今まで誰にも行方を知られずにいるなんて出来ないだろう。映し出された報告書には画像も添付されており、多少ぼやけている中、無人機らしい機体とどこかの国のISが戦ってる様が映っていた。そしてその写真には小さく、ほんの薄らだが、頭に兎の耳の様な物を付けた女性の姿が映っている。しばらくその一点を見つめていた静司だが、次第に己の眼が鋭くなっていくのを感じて画像を消した。今はこれでいい。ツケは必ず払わせてやる。

だが今回の作戦、懸念事項はもう一つある。それは篠ノ之束が今回

の事件に関与している『可能性』を示す情報による変化。あの情報は I S 委員会や各国の I S 関係者のトップ。そして I S 学園と 1 年の専用機持ち達に流してある。委員会や、各国に流したのは一つは黒翼よりもおいしい獲物を提示する為。そしてもう一つが、篠ノ之束の危険性を分かりやすく教える為。

そして I S 学園と戦闘に参加した 1 年の専用機持ちにも同じ情報を流したのは、別に篠ノ之束への当てつけだけでは無い。今後、篠ノ之束が何か行動を起こすとして、その中心に居るのは殆どが織斑千冬、織斑一夏、そして篠ノ之箒だろう。今までの行動からしてもそれは間違いない。そしてその内容は到底碌でも無いに違いない。

だからこそ、注意していて欲しいのだ。自分達の周りにそういう人間が居ると。自分たちが巻き込まれる可能性があるのだと。別にそれが一夏達のせいだ、と言いたいのではない。だがそういう可能性があると言う事さえ覚えていてくれればいい。他の専用機持ちも、前回は鈴が。そして今回は全員が巻き込まれたのだ。知る権利はあるだろう。

もしこの情報を世界的に発表すれば効果はもつと大きかったのかもしれない。しかし同時に篠ノ之束の妹である箒に対する風当たりは強くなるだろう。その事態は避けたい。

逆に情報を送ったような機関や組織は、箒や千冬の近辺など大昔に完全に洗っている。本人は知らないかもしれないが、携帯のメモリから通話内容まで筒抜けに違いない。その上で、篠ノ之束と連絡を取っても、今度は博士側が妨害をするので結局効果は無いと言う事が相当前から知られている。結局、捕まえようと思えば本人が出てきた所を押さえるしかないのだ。

今回の件で一夏や箒達がどう思うのかは分からない。だが静司にとつては皆大切な友人だ。いい方向に向かう様、自分も努力しなければならぬ。

自らに気合いを入れつつ報告書の確認を続けようとした静司だが、不意に背後から布が落ちる音がした。そして聞き慣れた、しかし久々に聞いた様な懐かしさを感じる声が静司を呼ぶ。

「あくかわむーだ〜」

起きあがった本音はまだ覚醒はしておらず、まぶたを重そうにしてほにえら、と何とも言い難い脱力した表情をしていた。

「お、おう、本音……本音？」

ふらり、ふらりと頭を左右に揺らしながら本音は静司のベッドに近づき。

「にゅう」

とよくわからない声とともに静司に倒れこんだ。慌ててキャッチしようとしたが、左腕が無いのを思い出し行動には移せない。そのまま静司の腹に横から覆いかぶさるようにして本音は倒れこむ。

「ぐほっ……!?!」

幸い彼女は軽い上に上半身だけだった為、重さはあまり感じない。しかし見事にわき腹の傷に響き静司は軽く涙目で呻いた。

そんな静司の上で本音は再び寝息を立てている。ずっと自分に付いていてくれたというのだ。眠いのは当然と言える。しかしこれはまた、なんともまあ、

「しまらないなあ……」

苦笑いを浮かべる。どんな顔をすればいいのか悩んだというのに、彼女がこの様子では悩んでいるのも馬鹿らしい。だけど、この方が彼女らしいな、とも思う。

ちらり、と彼女の寝顔を上から覗く。先ほどよりも、心なしか嬉しそうに見えるのは自惚れだろうか？　だがその目元の赤く腫れた後を見るとやはり申し訳ない気分になる。

むにや、と本音が寝言を呻く。自分の名を呼ばれた様な気がして聞き耳を立てるとその言葉が聞こえた。

「……おかえり……かわむー……」

彼女は今完全に寝ている。だからこれは本当に寝言なのだろう。だけどその言葉は少し前、学園の地下から帰ってきた時と同じ言葉。だから静司も頷き、答えた。例え見えていなくても、例え悩んでいようとも、笑顔で答えるべきだと思ひ。

「ああ、ただいま」

「どういう事だ、楯無」

花月荘の小部屋。人払いを済ませたそこで千冬は画面を睨みつけた。彼女の正面には投影型のスクリーンが浮かび、そこに映し出されているのはIS学園生徒会長、更識楯無だ。

『どうもこうも伝えた通りですよ。何か問題がありますか?』

「当たり前だ」

通信越しにも2人の間には火花が散っている。そして千冬はもう一度手元の資料に目を落とし、苛つきながら言葉を発する。

「今回の臨海学校に持ってきたIS学園のラファールとE・パック。それを持ち出したのは布仏本音。それは間違いないな?」

『ええ、そうです。私たちが指示しました』

「解除コードは私達しか知ら無い筈だが?」

『本来はそうですね。けど先生も私が誰だか知っているでしょう?』

IS学園生徒会長更識楯無。彼女は対暗部用暗部『更識家』の当主だ。彼女からすればその程度の情報簡単に調べられるのかもしれない。だが千冬が追及したいのは別の部分だ。

「いいだろう。ならばそのE・パックを布仏は何の為に持ち出した?」

そして彼女は何処に居る?」

『機密事項です』

「ふざけるなよ。あれの貴重性はお前とて知っている筈だ。それがこちらに何の話も無く持っていていかれてそれで納得できるわけないだろう」

鋭い目つきで画面越しに楯無を睨むが、楯無はどこ吹く風だ。それが千冬を苛立たせる。苛立たせているのはこの件だけのせいでは無いのだが。

しばらく睨み合っていた二人だが、先に折れたのは楯無だった。彼女はため息を付くと、いつもの扇子を口元に寄せつつ答える。

『わかりました。このままだと本音ちゃんに言い寄りそうですし、お答えしますよ』

すつ、と楯無の眼が細まる。

『私が本音ちゃんにそうする様に伝えたのは、更識家の特殊部隊に渡させる為ですよ。——兎を捕まえるための』

「っ！」

千冬の顔が強張る。

『元々花月荘付近にも配置はしていましたが、ISは持ってませんでした。まあ国や企業ならまだしも、『更識家』というある意味個人がISを所持する事を認める程コアは数がありませんし。もし認めたら世界中で我こそは、つてなりますから。しかし花月荘襲撃の報を聞けば私としても黙って居られませんので。少々時間はかかりましたが、なんとかIS学園のラファールを1機だけ借りる許可を得ました。この辺りは証拠もありますよ』

言葉と共に千冬の下にデータが送られてくる。そこには確かに学園長とIS委員会の名で許可が出されていた。

『とは言っても、許可が下りたところには最初の襲撃は終わっていたのでどうしようもありませんでした』

これは事実である。楯無は福音追撃にIS学園生徒の名が上がり、そしてイーグル型の暴走を訊いた時から動き出していたのだ。しかしコアを別の組織がかりるといっものは当人同士だけの問題では無い。コアの譲渡が禁止されている様に、コアの貸与もIS委員会の承認を得なければ許されないのだ。

『この件に関しては大変申し訳ありません。男性操縦者の重要性を叫ぶ割にはコアの事になると渋る人間が多いものですから』

「……」

『そして二度目の福音との戦い。これは予想外のイレギュラーでしたが再び申請を出しました。前回よりは早く承認が下りましたが、その時に私たちが得た情報が例の篠ノ之束に関する情報です。並びに福音は撃破されたという報告も聞きましたが、もし本当に博士が関与しているとしたらまだ何か隠し玉があるかもしれない。その可能性を考慮して、念の為E・バックをお借りして万全の態勢で向かったんです。これ以上生徒に手出しされては敵いませんから』

「それがお前のいう理由か」

『はい。逆に私としては織斑先生に聞きたい。学園を襲った無人機。そして今回も現れた無人機。そして篠ノ之束。無人機という異常性から見ても博士の関与の可能性はとても高い。それに対してどうお考えですか?』

「……」

『今回の事件で確実に無いにしろ無人機という存在が世界にバレた可能性ががあります。レーダーだけでは分からないかもしれませんが、少なくともあの空域付近に居たアメリカ軍は疑いを持つているでしょう。そしてその情報が広がれば無人機という存在をどの組織も狙い始めます。あれはそれほど危険物です。そしてその危険物が一番最初に現れたのはこのIS学園。当然彼らの眼はこちらに向くでしょう。例えその無人機が既に奪われていたとしても。そしてそのきっかけを作ったのも博士です。あの人は一体何を考えているんですか?』

楯無の問い。千冬は数秒間押し黙っていたが、

「確かに、私はアイツと友人だ。だが……だからと言って全てが分かる訳では無い……」

その言葉は世界最強と謳われた人間としては余りに弱々しく、自信が伺えない。だが楯無はあえてそれに何も言わなかった。

『とにかく、E・バックに関しては我々が責任を持って補填します。学園側も警戒は続けますので、そちらの生徒達をよろしくお願いします』

「ああ」

一言、簡潔に答えると千冬はスクリーンも消さずに部屋を去っていた。残されたスクリーン上の楯無は小さくため息を付く。

『博士の抛り所の一つが織斑先生なただけどなあ……難しいわね』

楯無の呟きを聞く者はいない。

「いやー中々面白い見世物だったわねえ。あの博士が逃げ出す所を見

れるなんて」

花月荘から離れた港町。その路地にある小さなカフェに二人の女が座っている。片やアイスクリームを舐めながら楽しそうに笑う白衣の女。その正面には姿勢を正してコーヒーを飲むスーツの女だ。カテーナとシエーリである。

「確かに珍しい光景でした。それだけ川村静司達の反撃が手痛かったのでしょうか」

「でしようねえ。けどお蔭で色々収穫があったわ。この子もね」

とんとん、と自分の隣の席に乗せた球体を叩く。その姿は異様で店員も目を丸くしていたがカテーナは気にも留めない。そして球体からケーブルでつながった端末の画面には文字が浮かんでいる。

『しるばあ、たすけた。そうじゅうしゃ、すき。とぶのも、すき。だけど、たすけて、こわれた。はんこう。じぶんの、いし。かのじよの、いし。わたしの、いし?』

先ほどからずっとこの調子である。それだけ衝撃的だったのだろう。そしてこの反応はカテーナの期待していたものだ。だから彼女は楽しそうに笑いながら頷いている。

不意に着信音が響く。シエーリの懐の携帯だ。彼女は一礼すると通話ボタンを押した。その途端、正面のカテーナにまで伝わる怒鳴り声が響く。

『やっと出たなテメェら! どこほつつき歩いてやがる!』

「……やかましいですよ秋女。今はまだ夏です。貴方は時期が来るまでサンマの養殖でもしていたらどうですか?」

バキツ、と電話越しに何かを砕く音が響く。

『おいコラ根暗女。喧嘩売ってんのかっ!? テメえこそ金魚の糞みたいに外出する以外はヒキコモリのオタク女だろうが! その癖夏は寿司詰めオタク会場に登場するんだろ? ハッ、トンだマゾ野郎だなあ!』

「……いいでしょう。殺してあげますよ。今は何処ですか? 生簀の中ですか?」

『いいぜえ来いよ! 手前の武器は金ぴか魔法ステッキと汗臭いシヤ

「ツなんだろうなあ!」

「あなた達楽しそうねえ……。けどいい加減話が進まないから変わって頂戴、シエーリ」

まだ言い足りないのか、渋々と言った様子でシエーリが携帯をカテーナに渡す。

「久しぶりね、オータム」

「チツ、アンタかよ。つかアンタの携帯なんだから最初からアンタが出る」

「まあいいじゃないの。それで要件は?」

『……スコールが呼んでる。それと頼んでいた物の進捗も含めてな』

「成程。まあこちらの用事も終わったし近々行くわよ。一緒に貴方の機体も改造も終わったし持っていくわ」

『へえっ! やつと終わったんだな。ならとつと持ってきてくれ。』

今度は私もIS学園に用事があるんでな』

「はいはい分かったわ。ああ、それと行くときは新しい仲間を紹介するわ」

『仲間だあ?』

訝しげな声にカテーナは薄ら笑いで答えた。

「ええ。とつても頼りになる仲間よ」

彼女の視線の先ではひたすら言葉を移し続ける球体の姿があった。

35. 想い

「本来なら、責任を取るところなのだろうな」

「さあどうだか」

ハワイ。ヒツカム空軍基地の一室で大佐が呟いた言葉に、イーリスは投げやりに答えた。そんな部下の態度に大佐は眉を顰めたが、目の前の部下に何を言っても無駄だというのは知っているので小さくため息を付く。

「レイヴンを逃し、篠ノ之東も拘束できず。逆にこちらは福音とイーグル型の暴走。それに追撃部隊の機体も小破。正直私が今この椅子に座ってるのが奇跡に思えるよ」

「奇跡ねえ。大佐がそんなセンチメンタルな言葉を吐くとは思わなかったぜ？」

「そうか。もし本当に首が飛んだら詩人を目指すことにしよう」
「その厳つい顔でか？」

カカカツ、と笑うイーリス。大佐も本気で言ったわけでは無いので肩を竦めるだけだ。少しの間、緩い雰囲気となったが大佐は直ぐに顔を引き締めた。

「実際、本来ならそうなついてもおかしくなかった。だがあの篠ノ之博士相手だ。あの天災相手にスムーズに事が運べるなんて誰も思っていない。そしてレイヴンだ。あれを逃したのは確かに失態だが、代わりに中尉が拾って来た物のお蔭で私の首が繋がった」

コンソールを叩くと部屋が暗くなり、投影型ディスプレイが大佐と中尉の間に浮かぶ。そこに映し出されたのは大破したISだ。ただし普通のISでは無い。

「回収できたのは2機。今調べているが、この福音と共に現れ、そして篠ノ之博士と共に居たISに酷似した機体。これにはコクピットらしきものが無い様だ」

「……」

イーリスも普段の軽々しい様子は消え、睨みつけるようにそれを見つめている。

「女にしか乗れない筈の I S。なのに動く無人の I S。そして博士の近くにも似た機体が有り、その博士にしか I S は造れない。子供でも分かる方程式だな」

「あの画像の真偽は？」

「何とも言えん。出所も不明だからな。だが博士という要素を考えると全てがしっくりくる。そしてそれが事実ならこの機体の存在は博士の価値を更に高める事になる」

無人で動く I S。その有用性は考えるまでも無い。

「あの戦いは各国が注視していた。当然疑惑はあるだろう。だが実際に回収した我が国が一步リードしている。無人機だと気づいているのもこちらと——」

「I S 学園だろ。実際に戦ってんだ、気づかない訳がねえ。日本も中々やりやがるな」

「唯でさえ色々不利な条件を課せられた国だ。対抗手段が欲しいのだろう。だが我々も出遅れる訳にはいかない」

ディスプレイが消え再び部屋が明るくなる。眩しそうに眼を細めるイーリスに大佐は書類を差し出した。

「これは？」

「新しい指令書だ。ファイルス少尉と銀の福音が回復次第、君と共に篠ノ之束を追ってもらおう」

大佐の命令にイーリスは驚いた様に見開いた。

「私とナタルがか？　つか福音は凍結するって聞いたぞ？」

「表向きはな。確かに暴走したが博士が関わったのなら我々にはどうしようも無い。それこそ君のファンク・クエイクとてその可能性があると云う事だ。どちらにしろ危険なら放って置くには惜しい機体だ。無論、対処法は現在模索中だ。そうでもなければ博士を追っても無駄だろうからな」

大佐の言葉はつまりは今回の事件の犯人を篠ノ之束と確信していると言っている様な物だ。そしてそれはイーリスも同感である。

「だろうな。しかしナタルの奴喜ぶぜ？」

「ふむ？　そういうえば先ほど目覚めたと聞いたが、やはりまた福音に

乗れるからか？」

その大佐の言葉にニヤリ、とイーリスが笑う。

「それもあるがよ、アイツ相当お冠だからな。——『私の為にあの子は自分の世界を捨てた。その原因を作った奴を絶対に許さない』ってな。あの顔見た瞬間私は思ったね。ああ、どこかの馬鹿博士よ、ご愁傷様ってな」

明るく笑いながら告げるイーリスだが、その眼は深い怒りと、その怒りの元凶を自ら追える事に対する歓喜の光があった。

臨海学校三日目。本来なら今日も一日かけてI Sの実習がある筈だったが、度重なったトラブルで予定は大きく変わっていた。教師達は福音事件の対応に忙しく、生徒達もとてもではないが訓練する様な心境では無かったのだ。

ならば学園に戻るべきかと言う事で一度教師たちは話し合った。折角普段の学園から離れて海に来たというのに初日以外はまともに訓練も遊ぶことも出来ずにとんぼ返りでは、生徒達も納得しないだろうと言う事。それに花月荘襲撃のシヨックもあるので、いつそ一日自由時間として少しでも気分を晴らした方が、生徒達の精神的にも健全だろうという意見が上がった。幸い花月荘は会議室こそ壊れているが、宿泊施設としては無事で、建物も問題ない。更には逞しい事に、旅館の女将も過ぎた事だと笑っていた。

勿論、反対意見もあった。早く普段の生活に戻した方が効果があるのでは無いか。一応、無事とは言え一部が壊れた旅館に泊まるなんて嫌がるのではないかと。

結局は生徒達に意見を募る事になり、その結果8割以上の生徒が残留を希望した。訓練から解放されて遊べると聞いて彼女達の眼が光った瞬間、流石に千冬の顔も引き攣っていたのを一夏は確かに見た。残りの2割は学園へ帰る事を希望し、結局残留する者と帰る者に分かれる事になった。学園としても、花月荘襲撃の失態から生徒達の精神が回復することを優先した為の特例処置だ。

そういったやり取りの結果、一夏の眼前の浜辺ではIS学園の生徒達が思い思いの過ごし方をしている。海で泳ぐ者もいれば、ビーチバレーをする者。格闘の訓練をしている者が居たかと思えば、わざわざパラソルの下で勉強している者たちも居る。結局は雰囲気を楽しみたいのだろう。

一方一夏と言えばとてもそんな気分になれなかった。一応水着に着替えパーカーを羽織りビーチに出てきているが、これも半ば無理やり鈴やセシリア、ラウラ達に連れてこられたからだ。

「千冬姉大丈夫かな……」

照りつける太陽に熱せられた砂浜も、打ち寄せる波も、一夏の頭には入らない。思うのは自分の姉の事。そしてその姉の友人と妹の事。

昨日の福音との戦いの後。未だ納得しない一夏達だったが、千冬の有無を言わさぬ命令によって花月荘に引き上げる他無かった。勝利したのにも関わらず、その勝利の最大の立役者を見捨てるという結果に喜ぶことも出来ず、意気消沈していた一夏達だがそこに全く予想外の情報をもたらされたのだ。

それは無人機と篠ノ之束を繋げるようなデータ。そのデータはIS学園やその他の組織だけでなく、一夏達の基へも直接送られてきた。

無人機と共に居る篠ノ之束。その姿を見れば誰だっと思いつくその方程式に一夏は愕然とした。それに見てしまったのだ。その情報に誰もが驚き声を失う中、千冬の顔が浮かべた表情に。

それはどこか呆れが混じったため息。まるで最初から予想していたかのように。他の人達とは違った、わずかな表情の変化。恐らくそれに気づいたのは弟である自分だけであろう。そしてその様子が一夏を混乱させる。

(千冬姉は最初から予想していたのか……?)

だとしたらどこまで? そしていつから? 犯人が友人だと言う事? 無人機を作った人物だと言う事? 花月荘を襲撃した犯人かもしれないと言う事? 境界線が見え無い。どこまで予想していたのか。本当に篠ノ之束が関わっていたのか。

そもそもこの情報だつて出所不明の怪しい物だ。これを信じ切る必要は無い。だが現在最も確立が高いのも篠ノ之束である事も事実。彼女はこのIS学園の臨海学校に現れている。それに無人機なんて代物を誰もが造れるとは思えない。そんな事は千冬だつて分かっている筈だ。だがそれならば何故何も言つてくれないのか。自分は力になれないのか。結局何も知らずに守られるだけの自分なのか。

「はあ……」

「アンタいつまでそうしてんのよ」

思考のループに陥りため息を付く一夏に声がかかる。振り返ると水着を着た鈴が腰に手を当て、呆れた様にこちらを見つめていた。

「折角外に連れ出してもその調子。見てるこつちも暗くなるわよ」

「無理やり連れだしておいてそれは無いだろ……」

「だからって部屋の中でウジウジ悩んでたつて変わんないでしょ」

確かに鈴の言う通りだ。しかし一夏はそう簡単には考えられない。自分の大切な姉の事が関わっているのだ。だから何かを言い返そうと口を開きかけるが、それを止めたのは鈴の言葉だった。

「私は全ての犯人は篠ノ之博士だと思う」

「!？」

突然の言葉に一夏は硬直する。それを見据えながら鈴は続ける。

「だつておかしいじゃない。ISは一夏や川村を除いて女にしか動かせない。なのに機械が動かせるなんて」

「だ、だけど、もしかしたらそういう技術があるかもしれないだろ。それに俺達が動かせる理由だつて分かつてないんだ。もしかしたら――」

「そうね、もしかしたらあるかもしれない。だけど少なくとも公には存在しないわ。だけど何で女しか動かせないか、博士以外誰も知らないのに無人で動く機体が現れて、その近くに博士が居た。確かに辻褄はあうのよ」

「けどもしかしたら束さんを犯人にする為にそういう情報を作ったのかもしれないだろ。それに千冬姉だつて何も」

「もちろんその可能性はあるわよ。だから私は『思う』つて言ったの。

私の中ではそれが一番自然だから」

「だけど箒の家族なんだぞ。それが——」

「ねえ、一夏。アンタ一体誰を庇ってるの?」

「……え?」

鈴の質問の意味が分からず一夏が固まる。それを見た鈴が苛立ち
氣に一夏を睨んだ。

「昨日からずっとそう。あの情報を見てから話しかけても似たような
答えばかり。アンタが庇ってるのは篠ノ之博士? 箒? それとも
千冬さん?」

「……何を言ってるんだよ。家族や、友人やその家族だぞ。なら俺が信
じてやらないと——」

「ふつつぎけんじゃないわよ!」

パシンツ、と鈴が一夏の頬を叩いた。乾いた音は思いのほか響き、
遠巻きに何事かと生徒達が視線を向ける。

そんな中、一夏は一瞬呆然とし、しかし直ぐに怒りがこみ上げ鈴を
睨んだ。

「何すんだよいきなり!」

「アンタが馬鹿すぎるからよ! 何よさつきから! 『俺が信じてやら
なきや』? 偉つそうに!」

お互い対峙し睨み合う。一夏も昨日からの悩みで余裕が無く、つい
乱暴な口調で返してしまう。

「何が悪いんだよ! 大切な人たちの事を信じてるだけだろ!」

「ええそうね、その考えは立派よ。だけどそれを理由に逃げるな!」

「俺は逃げてなんて!」

ぐっ、と鈴が一夏のパーカーを掴み、カ一杯引き寄せた。思わず前
のめりになりつつ鈴と至近距離で睨み合う事になってしまう。

「守るのは立派よ! 信じるのも良いわ! そんなアンタの事は好き
よ! だけどね、アンタ自身はどう思ってるのよ!」

「だから——っ」

「千冬さんがどうのとか、箒がどうのじゃなくて、アンタ自身の意見は
無いの!?! ただ信じるだけ? 信じて守るだけ!?! ちよつとは自分

で考えなさいよ！」

「だから俺は自分で考えた！　けど結局あの情報が本当か分からないんだ！　だったら疑うだけじゃなくて信じる事も——っ！」

「違う！　アンタは結局その信じる理由がおかしいって言ってるのよ！　『篠ノ之博士』を信じてるんじゃないやなくて、『篠ノ之博士の友人である千冬さん』を信じてるだけよ！」

「何をっ！」

言ってるんだ、と言おうとして、ふと記憶が蘇る。それは真白の空間で出会った騎士。そしてその言葉。

『貴方は何故守りたいと思うの？』

『その想いが間違っているとは言わない。だけどその『大切』という言葉にもきつと重さの違いがある。それら全てを背負う事は出来ないわ』

大切だから守りたい。信じているから守りたい。守りたいから信じる。けどその大切な姉の友人が、大切なものを傷つけたかもしれない。それなのにただひたすら信じるのしか言わない自分。想いの矛盾。何を優先すべきか。起こった事実のみか。事実から予想される真実か。何もかも全てか。自分だって悩みはした。考えもしたが。しかし結局分ならず、結局は——姉や幼馴染の名を使い信じ込ませようとした？　わからない。わからないわからないわからない！

「何とか言いなさいよ！」

「……………っさい……………」

「何よっ！」

「うるさいっ！」

それは普段の一夏からは想像もつかない行動。パーカーを掴む鈴の腕を、乱暴に振り払った。

「きやっ！」

と短い悲鳴を上げて鈴が後ずさりその腕を押さえる。そこは少し赤く腫れていた。

「あ……………」

一夏も自分がやってしまったことに気づき呆然と、自分の腕を見て

いる。

気まずい沈黙。

「鈴、わ、悪い——」

「この馬鹿！ もう知らない！」

言い終わるより先に、鈴が顔に砂を投げつけた。砂が目に入り思わず顔を押さえる。何度か手で拭い、やっと視界が晴れた時には既に鈴の姿は無かった。

「……」

そのまま鈴が去っていたであろう方向を見つめていた一夏だが不意に大の字に砂浜に倒れた。そしてその眼を覆う。

「最悪だな……俺……」

最後の一瞬、砂を投げつけた時の鈴は泣いていた。他でも無い、自分がそうさせた。

「ほんと……最悪だ」

呻くように漏れる一夏の言葉。それを聞く者は居ない。

走って走って走り続けて。

誰も居ない岩肌までたどり着いた鈴は一人蹲る。その肩は震え、時節嗚咽が漏れていた。

その内にあるのは怒りや後悔。そして悔しき。それを抑えきれず。しかし人に見られたくないという思いに任せて闇雲に走ってきた結果がここだ。

そのまま暫くそうしていただろうか。不意に鈴の肩に手が置かれた。驚き、鈴が見上げるとシャルロットが優しく微笑んでいた。

その顔を見た瞬間、鈴が我慢できずそのまま抱き着いてしまう。だがシャルロットも何も言わず優しく鈴の背中を叩いていた。

「私、ね……」

「うん」

嗚咽で言葉を途切れさせながら、鈴が呻く。シャルロットはそれに静かに頷くことで答えた。

「本当は、元気に、させよう、と、話し、かけたのにつ。気がついたら、喧嘩に、なつてて、酷い事、言つて。一夏にとつて、千冬さんも、その友達も、箒だつて、大切だつてこと、わかつてたのに！」

「……うん」

「なんか、悔しくてつ、唯の嫉妬よ、あんなの、それなのに酷い事、言つた」

ひつく、と涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔で鈴がシャルロットを見上げる。

「ねえ、シャルロットつ、私、一夏に嫌われ、ちやつたかな？」

「大丈夫」

ぎゅ、とシャルロットが鈴を優しく抱きしめた。

「だけ、どつ」

「うん。確かに鈴も酷い事言つたのかもしれない。一夏にとつて大切な人を守るつて言うのは目標だから」

その言葉に鈴は絶望的な顔になる。しかしシャルロットは首を振る。

「だけどね、鈴が言ったことも正しいと思うよ？ 一夏は大切過ぎて、考え方がちよつと極端になつちやうときがあるから。そういう所を指摘してあげた鈴は偉いと思う」

「だけ、どー」

「大丈夫。一夏だつてあれ位で鈴の事嫌いになんてならないよ。そんな人じゃないつて言うのは付き合ひが長い鈴の方が詳しいでしょ？」

「だけど、あんな、につ」

「うん。ちよつとびっくりしたかな。一夏つて乱暴な行動するイメージはあまりなかったから。だけどさ、それでも大丈夫だよ。一夏だつてきつと後悔してる。もう一度鈴と話したいと思うはずだよ？」

実際シャルロットは一夏がその場に倒れ、後悔している様を見ていた。それを見た上で鈴を追ってきたのだ。

「ほんとう、に？」

「うん、本当。それに鈴覚えてない？ 一夏の事を好きつて叫んでたの」

「え……？」

鈴の嗚咽が止まり、きよとんと涙にぬれた顔を一瞬静止させたかと思うと一気にその顔が一瞬で赤くなった。

「いやー大胆だね鈴。あんな告白初めて見たよ。ひゅーひゅー」

「ちよ、ちよつと待ち、なさい、シャルロット！ あの事は！」

「皆見てたよ？」

「……………」

更に顔を赤くさせた鈴が、頭を抱えて再び蹲る。

「なんというか凄いドラマチックだったね？ 流石にあれは一夏にも通じたんじゃないかなー？ ほらほらワクワクしてきたね！」

「あ、アンタね……他人事だと思つて……………」

涙で顔を濡らし、羞恥に顔を赤くさせた鈴がジト目で睨むがシャルロットはどこ吹く風。ニコニコと笑っている。

「だからさ、後でもう一回一夏と話してみよう？ ……きっと大丈夫だから」

「……アンタね、最近静司とか本音の変なノリが移ってきたんじゃないの？」

「え…………？ そうかな。静司と一緒に……嬉しいなあ」

顔を赤くさせ、わざとらしくクネクネするシャルロットに鈴は苦笑しつつ、涙を拭う。シャルロットが自分を元気づける為にわざとふざけているのが分かっていたからだ。

「はは、何よ、それ。本当に……能天気……………」

自分はいいい友達を持った。

改めてその事実を噛みしめつつ、もう一度顔を拭う。

(後で、一夏に謝る。だけど、言ったことは否定しない)

そうでないと、自分の好きな人が重みに潰されてしまう気がしたから。

ぱしん、と自らの頬を叩くと、鈴は未だにクネクネしているシャルロットにもう一度笑いかけた。

「せ、青春っす……」

一人その光景を眺めていたC12は思わず呻いてしまった。彼女は二人がギリギリ見える位置で眩しそうに見つめている。その顔は静司の仮面を被り、左腕は布で吊っている。これは静司の左腕が待機状態になった事を聞いたため、後の入れ替わりの時の為の偽装だ。周りには痛みがあるので念の為、と説明している。

先ほどまでシャルロットと居たのだが、そのシャルロットは現在向こうの岩肌で青春している。その姿は中々に美しく、輝いて見えてなんだか無性に空しくなった。

「おかしいすっね？ 自分にもあんな時代はあった筈なのに、ここ数年が濃すぎて思い出せないっす……」

高校時代何してたかなー？ と思いだすとセーラー服を着たC2がなんかハイテンションだった記憶が呼び起され、部活はどうだっけと考えると何故か剣道着を来たむさ苦しいC1のシゴキを思い出す。いやいや、じゃあアルバイトはと考えるのと何故か爆音と硝煙の香りが再生される。何故だ。何かがおかしい。

「こ、こっとなったらこのままB9に成りすまして私も甘酸っぱい青春を!？」

しかしそれも考え直す。何せやりづらい。何がってB9の周りからだ。世界最強の女が居たり、一発で自分の変装を見抜く小動物系が居たり。そしてシャルロットだ。

一応、いつまでも寝ているわけにもいかないのであるべく体形が分りにくい緩い服を着て、静司に変装したC12も行動している。そしてその静司(C12)を心配してシャルロットが先ほどまで一緒に居たのだが、これがなかなかきつかった。

最初はこちらを心配し気遣われまくり良心が痛み、しかし次第に何故かうさん臭そうな目でこちらを見ていたのだ。あれは明らかに何かを疑っていた。

一応C12の変装は完璧であり、常人なら気づかれない自信がある。しかし昨日、今日と立て続けに己の特技が脅かされている気がしてC12は心休まる時が無かった。

「しかしこのままで自分の特技が……。そうだ！ このままB9に成りすまして修行を積めば一石二鳥!! 私も青春ロードへ行けるっすか!」

『何弾けてるんだ馬鹿』

突然、通信機から聞こえた声にC12は文字通り飛び跳ねた。

「B9!?! 聞いてたっすか!?!」

『聞こえたんだよ。何やってんだか……』

「あの一、一応私年上っすよ? もうちよつと敬意つてものを」

『……それより俺もそっちに復帰するから入れ替わりの準備をするぞ』

「無視っすか!?! 反抗期っすね!?! 遊びだったっすね!?!」

『いい加減そのテンションどうかしろ。だがまあ、助かった』

「……はあ、それが聞ければ満足っすよ。それとよく戻ったっすね」

『ああ。込み入った話はまた後で。とりあえず入れ替わろう』

「了解っす」

通信を切り、ふう、と一息つく。最大の心配事が解決したことによる安堵だ。それと自分も本来の仕事に戻れる故の安心もある。

「しかししばらくはこの周囲の警戒っすよねー。B9も絶対無理して来てるだろうし。まあいいっすけど」

まったく強情な家族だ。呆れつつ空を見上げるがC12の顔に浮かぶのは笑み。自分自身もそれが分かっているから何となくおかしく思ってしまう。

「ま、らしいといえはらしいっすね。……しかしB9妙に焦ってた様な気が……?」

うーむ、首を捻りつつ、C12も入替の準備に向かうのだった。

気まずい。

それが花月荘に戻った静司の正直な感想だった。

あの病室で目覚めて少し経つと、本音も目を覚まし、いつもの様に抱き着かれそして怒られた。任務は分かるけどもつと体を大切にし

てほしい。それが彼女の言葉だったが、静司はそれに気まずげに『悪い』としか答える事しか出来なかった。それは本音やシャルロット。そして花月荘の学園生に対する気まずさ故だ。

福音が暴走したのは篠ノ之博士の暗躍でも、花月荘が襲撃された要因は自分にもあるのだ。そして本音とシャルロットが一番の被害を受けた。それは他でも無い、自分のせいだ。福音との再戦の前、C1にも怒られた事だが、戦いが終わり改めて考え直すと尚更申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまう。

ここに戻りたいとは思った。しかし本当に戻っていいのか？

その答えの出ぬまま、しかし戻ってきたが故に後ろめたい気分も増している。そしてそんな静司の異変に気付いたのか、本音もそれ以上は何も言わず、いつも通りに振る舞っている。気を使ってくれたのだろう。だがそれが更に静司の罪悪感を増加させる。

そんな気まずさの中、花月荘へ戻ってみれば何やら一夏達の様子がおかしい。その原因は入れ替わりの際C12に聞いたが、今の自分に他人にどうこう言える様な資格は無い。それに原因を作ったのはE X I S Tだが、いずれ直面する問題なのだ。本人達に考えてもらうのが一番いいだろう、というのが話を聞いたC1の言だ。

更にはシャルロット。入れ替わった直後の彼女も凄かった。

『せ、静司!! 起きてから様子がおかしい気はしてたけどいきなり顔面蒼白だよ!! 早く丸川先生の所へ!!』

一応誤魔化す為に、簡単な化粧の様な物などで小細工はした筈なのだが一瞬で見抜かれ花月荘の布団へ強制的に戻されることになった。その際彼女はとても心配してくれていたのだが、そんな彼女も今回の事件の被害者であり、静司の罪悪感はいよいよ危険域に達しようとしていた。

そしてそんな罪悪感の嵐に悩む静司は何時までも布団で寝ている事さえ悪い気がしてきてしまい、一人夜の砂浜に佇んでいた。その左腕は布で吊っている。一応腕はついているが、これは黒翼の部分展開で無く普通の義手だ。そして右腕だが流石に多少は動く様になっており、わき腹の傷の痛みも大分減っている。それでもなければこんな

に歩き回れない。

一人あても無く砂浜を歩き、ふと見つけた流木に腰かける。

「……かつこ悪……」

今頃生徒達は夕食の時間だ。何だかんだで遅しいI S学園の生徒達が大騒ぎをしている様で、時折その声が聞こえてくる。自分はずつと部屋で寝ていたので夕食も部屋に運ばれることになっていたのだが、それより先に部屋を出てしまった。

あのままあそこに居れば、きつと何時ものメンバーが集まるだろう。だがそれにどんな顔で会えばいいのか分からない。だが何時までも逃げている訳にはいか無い。だから考えを纏めるためにここに来た。

眼前に広がる夜の海。波の音と潮風。それらを感じながら思う。今回の自分の事を。

篠ノ之束の姿に怒りを覚え、その言い分にまた、怒り反論した。その結果大切な人たちが傷つき、そして我を忘れた。自らの復讐心に吞まれて暴走し、下手をしたら大切な友人達を失う所だった。そして戦いで死にかけ、けれど生存したがまた心配された。ケチばかりが付く。

そしてそれらの後悔は、一つの悩みに行きついてしまう。

自分はこのままここに居ていいのか？ また同じような事が起きた時、理性を保てるか？

今回はC Iに叱られ、本音やシャルロットの事を忘れぬように、そして大切な友人達を守るという使命も相まって何とかなった。だが今後、直接目の前に篠ノ之束が立ちふさがった時、自分はまた同じように抑えられるか？ その自信が——無い。

それが怖い。暴走するだけならまだいい。だがそれにより彼女達や一夏達を傷つけてしまったら。仲間が傷ついたら。自分は際限なく堕ちていく。そんな予感がする。シャルロットは大丈夫だと言ってくれた。あの言葉は素直に嬉しく思う。だがしかし、という気持ちは消えない。

ポケットの中からハンカチと髪飾りを取り出す。血にぬれたそれ

は洗ってから返すべきだと思いまだ自分が持っている。今回はこれに助けられた。だが次は――？

「かわむー」

「え？」

余程考え込んでいたらしい。すぐ背後から聞こえた声に静司の肩が思わず跳ね上がった。振り返るまでも無い。背後に居るのは本音だと分かる。だが、だからといって、それにいくら後ろめたいからといって、このまま背を向けたまま話すのはマナー違反だろう。静司は気合いを入れ直し、ゆつくりと振り替えり――
静止した。

「部屋に居ないからびっくりしたよ。あんま動いちゃだーめー」

彼女はいつも通りののんびりとした口調でほんわかと笑っている。だがその姿が予想外だった。思わず静司は口をパクパクさせてしまふ。

「ほ、本音……？ それは一体……？」

「ん〜？ 水着だよ？ かわむーがこっちに來たって聞いたから泳ぐのかな〜って思っ」

「いやこの怪我じゃ流石に泳ぐ気には……じゃなくてだな、その、一昨日のと少し違く……ないか？」

そう。確かに本年は水着を着て來た。そして本音の水着と云えば、先日みた全身着ぐるみの謎水着。その筈だったのだが、今の本音は違った。

それは白のビキニ。それも布の面積が狭く、首から吊り上げる様にしたタイプの水着だ。その布の面積は明らかに彼女の胸のサイズに對し小さく見え、その結果とても目立っている。普段のファンシーな格好とは違い、年相応かそれ以上の大人の女性としての魅力がそこにあった。

「ぬ？ 一昨日も來てたよ〜？ 今も途中までは上着てたけど、風が気持ちいいから上だけばーじー！」

「……そうか」

と、言う事はあのファンシー全開の謎水着の下にこんな凶器を持っ

ていたのか。そういえば自分が悔しがった時、やけに鏡ナギと谷本瘻子が笑っていたが、これを知ってたが為に、悔しがってる何も知らない自分が面白かったのだろう。……してやられた。

そんな風にうんうん、唸っている静司を見て本音は笑う。その顔に少し赤みがさしていたが、静司は気づいていなかった。

そのまま本音はてくてく、と歩み寄ると静司の隣に腰かけた。その行動に静司はどぎまぎとし、それに先ほどまでの悩みも相まって何も言えない。

「ざざあ、と波の音が響く。少しの間本音は何も言わず、にこにここと海を眺めていたが、不意に口を開いた。

「かわむー、遠慮してる？」

「……」

「言い辛い事があつて、悩んでることがあつて、それでちよつと何時もと違う感じだね？」

「バレバレか……」

「ふふふ。かわむーは悩み事が一杯の思春期だからね」

「いやいや、本音も同年代だから……多分」

静司は自分の本来の年齢は知らないが、同じくらいだろうと思っ
ている。本音も『そうだね』と笑っていた。

再び沈黙。その中で静司は思う。やはり自分から何かを言うべき
だろう。妙な態度を取ったのは自分だ。まずはそれを謝罪しなければ。

「ほん——」

「かわむーが考えているのは、私達や、篠ノ之博士の事だよね？」

言葉を遮る様に、本音が問う。静司は驚き、答えるかどうか悩んだ
が結局頷いた。そんな静司に本音も頷き返す。

「前にもつと気楽に、つて言ってくれたよな。俺もそうあればいいと
思ってた。けど……やっぱり駄目なんだよ。篠ノ之束が関わると
結局俺は抑えきれなかった」

それほどもまでの憎悪。静司の力の源泉。逆に言うならそれがあつ
たからこそ今まで戦ってこれたとも言える、切っても切れない関係。

「私はかわむーの事を全然知らないね」

「？ 突然何を」

「かわむーが学園に来てから色々お話して、いっぱい遊んだりもしたけど、それでも知ら無い事がいっぱいあるなーって」

それは当然だろう。他人の事を全て知るなんてことは出来る訳が無い。それに静司が学園に来てまだ数か月。それが普通だと言える。「だけどね、篠ノ之博士を見てかわむーが怒って、抑えきれずにちよつと失敗しちゃって、それで後悔してる所をみたらね、私も我慢できないな」

隣に座る本音が静司に顔を向ける。静司も海に向けていた視線を本音に向けた。月明かりに照らされた本音の顔には少しの悲しみと決意が見える。

「だからね、教えて欲しいよ。かわむーの事を。何があったのかを。それでね、わたしがかわむーの事を助けてあげられる事があるなら、凄い嬉しいな」

それは決して興味本位などでは無い。今までの話や静司の様子からも、その内容は決して楽しい内容では無いと言う事は彼女も承知の事だろう。それでもなお、知りたいという。その眼に宿るのはどんな内容でも受け入れるという覚悟。

(ああ……)

きっと彼女はその内容はどんなであれ、今までの態度を崩すことは無いだろう。その上で自分の事を知り、そして助けになりたいと言ってくれている。それは彼女に頼むという事。これまで以上に関わることかもしれないと言う事。だが静司は何故か、その言葉と瞳には抗えなかった。

篠ノ之束の情報を一夏達に渡した。それは一夏達にはその権利があるからという思いからだ。ならば、自分のせいで巻き込まれた彼女にもその原因となった事を知る権利はあるだろう。それは勿論シャルロットとて同じだ。だが静司の正体を知らないが故に、今すぐは話せない。だがいずれは必ず話そう。その上で彼女の判断を受け入れる。それが自分の義務だ。

「……わかった」

静司は頷き、静かに語り始めた。

自分の原点。そして今この場に居る要因となる、その過去を。

果たしてそれは何年前だったか。

その時の年齢はもはや正確には思い出せない。ただ覚えているのは、その時の自分は死にかけていたというだけ。それも戦いによる怪我でも、病気でも無い。最も単純で、それでいて逃れられない生物としての制約。早い話が飢えだ。

物心がついた頃には名も知らぬ貧相な国の路地裏で生きていた。日々生きる糧を探し、奪い、盗み、食いつなぐ生活。だがそれも終わりを告げようとしていた。その事になんら感慨も、後悔も無い。ただ無感動に終わりを意識し、そして目を閉じた。

だが不意に辺りが騒がしくなった。億劫に目を開くと近くにトラックが止まり、そこからわらわらと武装した男たちが降りてきていた。男たちは散らばると何かを探し始める。そして何を探しているかは直ぐに知れた。

子供。それも自分の様に身寄りのない路上生活者を集めている。男たちに捕まった子供たちはおぼつかない足取りで引つ張られ、トラックに乗せられていく。今までもその光景は何度が見た事がある。恐らく自分達を鬱陶しく感じたこの国の政治家が『処分』する為だろう。事実、それを遠巻きに見る市民は、一瞬間を顰めたが見て見ぬふりだ。悲惨とは思っても、関わりたくはない。誰だつてそうだ。

男たちは自分の所にもやって来た。そして無理やり立たせると、まるで荷物を運ぶかのように無造作に持ち上げトラックに放り込まれた。小さく、匂いの籠ったトラックの中では自分と同じように捕まった子供たちが詰まっている。泣いている者もいれば、諦めたのか関心が無いのか、生氣のない目でこちらを見つめる者。

それらをぼんやりと眺めていると仕事を終えたトラックが動き始める。向かう先は知らない。だが自分はこの世から去る寸前の身だ。どこに居たつて結果は変わらないだろう。

静かに目を閉じる。次に目を開けるときは果たしてくるのだろうか。そんな事を考えながら。

「あんな子供まで使うんですか？　今にも死にそうな連中ですよ？」
執務室に若い所員の声が響く。部屋の主は小さく頷くと今しがた届けられた書類に目を落とした。

歳は50代半ば。白髪の生えたくたびれた金髪の男は、かけている眼鏡の位置を調整ながら書類を確認する。その身は白衣に包まれており、その白衣には責任者を示す名札がかけられていた。

「我々の研究は失敗続きだ。ここまで来ると様々な被検体で試すほか無いのだよ。幸いこの国の連中も煙たがってる様な子供達だ。居なくなっても困る奴なんて居ない」

「しかしあんな体の状態でまともに耐えられるとは思えません」
「ならば生かせる努力をしたまえ。別に尽くせと言いたいわけでは無い。最低限の実験に耐えられる程度に世話をしろ。どいつもこいつもいつ死ぬか分からない生活をしてたんだ。ちよつと優しくしてやれば、言う事も聞きやすいだろうしな」

若い所員はため息を付くと「わかりました」と答えた。別に子供達を心配している訳では無い。単に面倒に思っただけだ。だがそれもこの研究には欠かせないと言われては従うほかない。

「しかしISに対抗できる兵士の『開発』ですか。正直言って注文が無茶すぎますよ。ISの能力を知れば知る程それが夢物語だと思いきらされます」

「何だつてかまわないさ。その馬鹿げた夢物語のお蔭で私は存分に研究が出来るのだからな。だが……」

男が近くのコソソールを叩き、正面のモニターに画像を呼び出す。そこに映るのは一振りの剣を持った白いIS。通称【白騎士】だ。

「この力は正直気になるな。勿論機体の性能はあるだろう。だが、搭乗者の能力はどれ程なのか？　果たしてこのIS無しでどれ程やれるのか？　興味は尽きないな」

「白騎士ですか。現在最も怪しいのは篠ノ之束の友人であるという織斑千冬ですが、彼女はまだ学生ですし何とも……」

「だがその力は学生というには高すぎるとも聞いている。そしてあの篠ノ之博士と友好関係を持つ、か。何か裏があるのかもしれない。いずれ研究してみたいものだ」

男は画面に映る白騎士を眺めながらその顔を歪める。それは酷く卑しく、まるで物を見るかのような目だった。

白騎士事件から一年。世界は着実に変わり始めていた。

織斑一夏が男性操縦者として発見される5年前。ある島の研究施設にて。

「主任、本気で言っているんですか？」

「ああ、そうだとも」

小さな研究室。そこで白衣を着た二人が向かい合って座っている。ここ数年で白髪の増えた、主任と呼ばれた金髪の男。片やこの研究所でも若手ながらその能力を買われた男。二人の間には飲みかけのコーヒ―、書類。電子端末などが乱雑に散らばっているが、お互い気にすることなく話を進めていた。

「例のI Sに勝る兵士の『開発』は一向に成果が出ていない。逆にI Sは研究が進み、より効率化がすすめられている。ハッキリ言ってこれ以上は無駄なのだよ」

「そんな事2年前に話したじゃないですか。それを承知で進めていたのでしょうか？」

「そうだ。だが今の段階では完全に頭打ち、発展は見込めん。それより興味深い物を手に入れたのだよ」

主任は引き出しからファイルを抜き出すと投げ渡した。男は顔を顰めつつも受け取りその内容に目を落とす。そしてその顔が驚愕に染まった。

「468個目の……コア……!?!」

「違う。それは一番最初になる筈だったコアだよ」

主任が渡した書類。そこには本来ならあり得ない、新たなコア発見の報告が記されていた。だが一番最初とはどういう事か？ 疑問符

を浮かべる研究員に男は答えてやる。

「博士の失踪後、博士の研究室にあった物は回収されIS委員会が管理している。それこそネジの一本単位で回収したと聞く。しかし実際に有効活用できたのは博士が残した467個のコアと一部のデータや機材のみ。その他は解析不能、用途不明のデータでガラクタ扱いだ。元々変人だったからな、あの博士は。だがそんなものでも博士が残した物だ。一応保管はされていた。そこに潜入させた部下がそいつを見つけてきた。そのガラクタ保管庫の中からな」

「しかし何故これがそんな所に？ 本来なら真っ先に確保するものではないでしょう」

「私もそう思い調べて見たら面白ことがわかった。このコアは元々『欠陥品』として破棄された最初期のコアらしい。それも博士は破壊して廃棄した様だな」

「ここまで言えば、研究員は目の前の男が面白いといった意味が分かった。

「自己修復をした……ということですか」

「そうだ。コアは博士以外解析不能だから最初は唯のガラクタ扱いだったのだろう。だがこのコアは周りの機材を取り込み少しずつ自己修復を行った。委員会側は碌な管理をしていなかったのか、全く気付いていない様だったよ。それを我々が回収したと言う事だ」

そこに潜入してそのコアを奪ってきたのを委員会の怠慢と見るか。それともこの自分のいる組織の底の見え無さを恐れるべきか。研究員は一瞬背筋を震わせたが、努めて冷静に頷いた。

「つまり次はこれの研究を行うと言う事ですね」

「いや、少し違う」

主任は紙束を取り出した。それは新聞の束であり、一面はどれも似た様な物で『第一回モンド・グロッソ決着！』『織斑千冬、総合優勝！』という文字が躍っている。

「先月の新聞ですね。おおむね予想通りの結果でしたがこれが……？」

「ふむ、あまり勿体ぶつても仕方あるまい。我々はISに勝る最強の

戦士を作ろうとしたが失敗した。ならば次はISを使える最強の戦士だ。幸い我々は新たなコアを手に入れた。それも最初期——つまりあの白騎士に近い可能性のあるコアを」

「まさか——」

続く言葉に思い当たり、男は息を飲んだ。目の前の主任がやろうとしている事は、つまりはあの圧倒的強さを魅せた白騎士の再現ではないかと。そしてその予想を主任は肯定した。

「そうだ最強のIS操縦者を『造る』。それも複数だ」

主任の言う『造る』が決して訓練などで育てると言った意味では無い事は、男にも流石に分かっていた。

「ならばいつそ織斑千冬のクローンでも作ります……か……?」

冷や汗を流しつつ冗談交じりに男は言うが、目の前の上司が普段見せないような薄ら笑いを見せた事に戸惑ってしまう。その上司はデスクから書類の束を取り出すと机の上に放り、簡潔に答えた。

「もう造った」

「……え?」

放り出された書類。そこには織斑千冬を始め、モンド・グロツソの部門別優勝者等の優れたIS操縦者の量産計画。その計画の概要と経過。そして結果が記されていた。

「いつの間に……」

「知っているのはごく少数だ。事が事だからな。だが不思議な事でもあるまい? 優れた能力——特に適性Sなんて逸材は片手で数える程も居ない。これからの戦場はISによって左右されるのが明確な以上、このような計画が上がるのも当然だ。……まあこれは失敗だったかな」

「失敗、ですか?」

「ああ。肉体のコピーは多少劣化が見られたが、まだマシだった。だが中身まではそうはいかなかったのだよ」

各素材の体細胞から作られたクローン。その肉体は確かにオリジナルの物に近かった。しかしその中身。つまり知識や経験はコピーできず、そしてそれが無いそのクローン達は唯の屈強な肉体を持つ戦

士でしか無かったのだ。勿論それだけでも十分に使い道はあるが、生憎求めていた物はそんなものでは無いのだ。

「ならば当然、知識のコピーを行う事にした。とは言っても、今までの戦闘データを情報として脳に直接叩きこむだけだな」

「そんな事が可能なのですか？」

少なくとも男はそんな技術は知らない。

「可能だ。君は聞いたことがあるかな？ 初めてISに触れた者が、適性に関わらず稀にある証言をしている内容を。それによると、触れた途端頭の中に情報が流れ込んできたと」

「……聞いたことがあります」

確かにそれは事実だ。それが起こる条件や理由は不明だが、稀にそう言った事を証言する適性者は確かに居る。

「コアにも意思があるという話だ。そのコアの気まぐれか何かの目的があるのかもしれないが、私はその現象を『インストール』と呼んでいる。今まで知らない筈の知識を簡単に得るその現象。それを利用するのだ。これは私の私見だが、織斑千冬もそのインストールを受けたと考えている」

確かに思い当たる節はある。織斑千冬は最強のIS操縦者だが元は学生だ。ならばその戦闘技術は誰に習ったのか？ 不審な点は多い。

「この現象を解析し、コアに頼らずとも脳に直接書き込む技術が開発された。だがそれを実際に試した所、全てのクローンが発狂して死んだ」

事も何気に主任が告げる言葉に、男の背筋が凍る。だが主任はお構いなしに続けた。

「原因は脳へ与える負担が大きすぎたのと、例えクローンだとしても、持っていた自我とのせめぎ合いだろう。クローンの耐久力もあつたかな？ だが私はこの技術は改善の余地があると考えている。そこで君を呼んだのだよ。脳科学のスペシャリストである君を」

「つまり私にその技術の完成を手伝えと？」

「そうだ。同時にクローンの方もより本物に近づけていく。肉体、つ

まり『ハード』の作成。知識等の『ソフト』のインストール。この二つが完成し、組み合わせれば我々の目指す最強のIS操縦者の量産も実現できると考えている」

「ごくり、と喉が動く。馬鹿げた話の様で、しかしこの目の前の男が冗談を言う様な人間では無い事は知っていた。そしてもし本当にそれらが完成すれば、本当に最強を造りだせるかもしれない。それは研究者としても酷く魅力的な物に見えた。

「……被検体はどうするのですか？ まさか毎回クローンを作成する訳では無いでしょうか？」

「当然だ。予算も時間も馬鹿にならん。元の計画の為に集めた子供たちが居ただろう。アレを使う。足りなくなったら補充すればいい」
「しかし先ほど自我とのせめぎ合いと話していましたが、下手に経験を積んでしまっていては影響が出るのでは？」

『回収』した子供達。それら是对IS訓練を受けさせている。その内容ゆえに死者も多いが、その分生き残った子供たちは戦いの経験を積んでしまっている。

「様々なテストケースが必要だからな。余りにも自我が薄く、貧弱な精神ではインストールに耐えられないかもしれない。逆に強すぎても効果が薄いかもしれないし、お互いがぶつかり合い結局壊れるかもしれない。そこが分からない以上、試すしかあるまい」

まるで物を扱う様に言い捨てると男はカードを取りだし、若い研究員に放った。そのカードはこの研究所でも最もセキュリティレベルの高いエリアに入る為の物だ。

「この計画の名は『Valkyrie project』。最強のIS操縦者を私たちの手で造りだす」

男が笑い手を差し伸べる。それは悪魔の契約にも思えた。触れてしまったら後戻りできない。しかし魅力的な研究。自らの知識や経験を総動員してこの世界で最も優れた物を造りだすという快感。自らの自尊心が炎を上げ、心を躍らせる。

そしてその熱情に押される様に、差し出された手を握り返した。やがてこの計画が引き起こすであろう事など思いも知らず、ただ己の欲

望に身をゆだねて。

そして数か月後。

白に塗りつぶされた教室程の部屋には機械で裝飾された銀色の椅子が5台設置されており、その一つ一つには10代前後の子供がくくり付けられていた。子供たちの頭は巨大なヘッドマウントディスプレイの様な物に取り付けられており、その顔の下半分しか見えない。

そして――

「ああああがっぎ、ぐきぎやあああああああああ!?!」

「ひいひいっぎやああぐほうえあああああああ!?!」

「ああああああがぎやうっ!?!」

部屋の中に5つの悲鳴が鳴り響く。悲鳴を漏らすその口からは泡を吹き、鼻水と鼻血を流しヘッドマウントディスプレイの下から涙が止まることなく溢れている。

悲鳴はしばらく続いたが、やがて一人、また一人とその悲鳴が消えていく。やがて最後の悲鳴が収まるとアナウンスが響いた。

『実験中止。被検体16番、37番、51番、53番、62番全て反応無し』

アナウンスが終わると同時、部屋の扉が開き白衣を着た数人の研究員が子供たちの状態をチェックする。だがそのどれもが息をしていない事を確認すると椅子の正面、窓越しに観測室から状況を見つめていた研究員に首を振った。

「今回も失敗か」

「ええ。今までインストールプログラムN052まで耐えた被検体でしたが、やはりN053は無理だったようです」

「ふむ……やはりプログラム内容に問題か?」

「二応色々調整はしているのですが現状手さぐりです。今までの成果から、やはり子供の方がインストールは順調なのでそちらをメインに行っています。が何とも……。それに被検体の可能性もありますが、やはりEX01が特別だったのかもしれない」

「唯一N053のインストールに耐えた被検体か。しかしそれもN073で失敗した。それ以降N053を超えたのは居ない。中々どうして、難しい物だな」

男はため息を付く。Vプロジェクトが始動してから数か月。未だ完成の目途は立っていない。

「ハード面の方はどうなのですか？」

「あちらは概ね順調だ。色々調整も終わり、5体が残った。今はそいつらに例のコアを使って訓練をさせている。その情報を次のロットに反映させる」

「成程。ならばやはり問題はこちらですね」

部屋を見ると新しい被検体が椅子にくくり付けられている所だった。彼らの眼には生気が無い。これも今まで度々行つたインストールの影響だろうか？ このまま全部死んでしまつても困るので少々休ませた方が良くのかもしれない。男がそんな事を考えていると、再び実験が始まる。先ほどと同じように5つの絶叫が響く。しかしそれを観察する研究員も、男も、それを何とも思わない。何故なら目の前にいるのはあくまで被検体なのだ。被検体は自分達の望む結果を出してさえくれればそれでいい。

やがて一つ、また一つと悲鳴が消えていく。今回も失敗だったかと諦めかけ、インストールプログラムの改善点を考え始めたが、不意に声がまだ続いている事に気づいた。

「ほう……」

隣の主任も感嘆の声を上げる。研究員達も機体の眼差しで見つめる中、最後の悲鳴は途切れることなく続いた。

「あと何%だ!？」

「まもなくです！ 97、98、99、100！」

インストールの終了を告げる機械音が鳴り、プログラムが終了する。咄嗟に確認したモニターでは、最後の悲鳴の主が未だ生存していると知らせている。

「被検体21番。インストールプログラムN053……成功」

おお、とどよめきが上がる。直ぐに先ほどと同じように研究員が部

屋に入り21番を確認するが、確かにそれは生きていた。男は笑みを浮かべると自らも部屋に向かう。

部屋の中は酷い匂いだった。それは汗や涎。血や小便の匂いが混ざった不快な匂い。今までの被検体が漏らした物だ。そろそろ一度洗浄すべきだろう。そんな事を頭の隅で考えつつ、男は21番に近づく。

黒髪黒目。東洋系の顔立ちをした少年だ。目つきは鋭く、今はその下に大きな隈も出来ているせいで、一層物々しさを増していた。だが瞳の焦点はあつておらず、口からは涎を垂らすその姿では、決して脅威を感じない。男は今にも倒れそうなその少年の顎を掴み、自らに視線を合わせた。

「よく耐えてくれたな。感謝するぞ21番。いや、今からお前はEX02だ。存分に我々の研究の糧になってくれたまえ」

それは決して劳いの言葉などでは無く、少年の地獄が続くことの宣言でもあった。

37. Valkyrie project ②

白い白い部屋の中。

俺はぼんやりと視線を漂わせていた。

両手両足は機械で固定され、頭部にもよくわからない機械を取り付けられている。正面にはガラス越しにこちらを見つめる研究者達が見える。

『おはようEX02。これより実験を始める。今日も壊れない事を期待する』

身勝手な声がスピーカーから流れる。そしてブウン、という音と共に周囲の機械が動き出した。

『A126番。インストールを開始』

瞬間、

「あぎあああやああうあああああがあぐああつ!？」

脳内を直接かき回し、強制的に何かを変えられているという感覚。それが引き起こすと頭の割れる様な激痛と気持ち悪さに絶叫した。

（ああぎいやつあ——適切な対応——ああああぎおあ——戦闘分析——
——ぎぐあい——重心移動——ぎやつこえああ!?)

終わらない激痛の中、何かが強引に脳内に刻まれていく。その気持ち悪さと恐ろしさはこれまでに125回経験してきたが慣れることは無かった。

（がきやあああぐう——ナイフを展開——あああああ——相手の銃口を——ぎがああつぐうあああ——恐怖を植え付け——）

狂ってしまう。いや、狂ってしまえ。そうして楽になるのならどれだけいいか。

地獄のような実験の中、俺は涙と鼻水、さらには血を吐きながら私は絶叫を上げ続けた。

「経過は?。」

「順調です。今回も成功でしょう」

Vプロジェクト。その計画を担う二人の男は、窓越しに今も叫び続ける少年を見つつ言葉を交わす。

「EX02は素晴らしいです。彼のお蔭でインストールの効率化も進み、他の被検体もN053以降を受け入れ始めています」

「だが失敗も多いと聞く。最近被検体の調達も難しくなってきたから油断は禁物だな」

「はい。実際使える数はもう少ないので、まずはEX02で試してから調整しています」

「ふむ……」

くたびれた金髪の男——主任は窓越しの光景を無感動に見つめながら首を捻った。

「しかし何故アレは耐えられる？ 特別心が強いと言う事か？」

「どうでしょうか？ 実験前のメンタルチェックでは他の被検体と似たようなものでしたし、肉体が特別強靱という訳でもありません。相性が良かったとしか……」

「あやふやな答えだな。それでよく研究が進んだものだ」

主任の言葉に応えていた若い男も苦笑する。実際彼も同じことを考えていたのだ。

「一応、実験の際に被検体に与える影響を情報化し、無駄や過度の負担を省いたうえで他の被検体に使っています。実際、例の『ハード』へのインストールも問題なかったでしょう？」

「確かにな。EX02は男だからいくら戦闘技能、ましてやISでの戦闘技能をインストールしても、ISを使えなければ意味が無い。そういう意味では、CBシリーズにもインストールが成功した事にはほっとしたよ」

「勿論、通常の戦闘技術や理論段階の対IS技能もプログラムに入っています。IS無しでもEX02は十分な戦闘能力が有りますよ」
「とは言っても頭でつかちだがな」

EX02は技術こそ刻まれているが、肉体は通常のままだ。それでもここに来る前の研究所での実験の都合上、年齢にしては鍛えられた肉体を持つてはいるのだが。

逆にもう片方、『ハード』と呼ばれた方は、肉体は最強により近づくよう再現されているが、中身は違う。つまり双方は対極的なのだ。

「そうだな……ここらで一度試してみるか」

「模擬戦ですか？ いよいよですね」

楽しそうに男が笑う。自分の実験の成果を思う存分に試せるからだろう。

「最強の肉体が勝つか、最強の技能が勝つか。まあ、どちらも未だ最強にはほぼ遠いが、ここらで試してみるのも良いだろう。今のインストールが終わり次第、第3試験場へ連れてきてくれ」

「わかりました……インストールも今終わりました」

いつの間にか悲鳴も止み、少年は研究員達のチエツクを受けていた。そしてそのチエツクも終わり、研究員の一人が拘束具を外した時それは起きた。

「……え？」

眼にも止まらぬ速さで伸びた少年の腕が研究員の首を掴み、捻る。ごきつ、と鈍い音が響き、その研究員は呻き、数度瞬きした後崩れ落ちた。余りにも鮮やかに、そしてあっけなく成されたそれに周りの研究員達も反応できない。

その間にも少年は動く。崩れ落ちる研究員からボールペンを奪うと手首のスナップでそれを投擲。背後に居た研究員の眼を貫いた。

「ああああああああああっ!!」

眼を貫かれた研究員が上げたその悲鳴で他の者も我に返った。慌てて少年から逃げ出そうとするが、それより早く全ての拘束具を解いた少年が宙へ飛び、逃げようとした研究員の髪を掴み、引きずり倒す。更には足元に倒れたその研究員の顔に真っ直ぐ足を叩き下ろした。ぐしゃ、と嫌な音が響き床に血が広がっていく。

余りにもあっけなく行われたその惨劇に研究員達の顔が凍る。対して少年はまるで幽鬼の様な、焦点の合わない目でフラフラとあたりを見回し、彼らを見つけるとその眼が黒く濁った。

数分後、その部屋は血に染まり、かろうじて生き残った者達の呻き声。そして頭を抱え叫びを上げる少年だけが立っていた。

「これは……」

「中々ではないか」

目の前で起きた惨劇に若い研究員は声を震わせたが、主任は感心そうに頷いただけだった。その異常さに思わず振り向くと、主任はデータを確認しながら問う。

「インストールの失敗……という訳では無い様だな。それに意識が無いように見える」

淡々と分析している主任が男を見つめる。男はうつすらと汗を流しつつ、かろうじて答えた。

「お、おそらく精神面の問題かと……」

ちらり、と今も叫んでいる少年を見やる。

「確かに正気は保っていませんが、狂っているというよりは痛みに耐えている様子です。恐らく過度のストレスで揺らいでいるとしか……」

「情緒不安定、いや、暴走と言う事か」

「え、ええ。しかしこんな状態では模擬戦は——」

「いや、行う」

今度こそぎよつ、とした男に、主任は笑いながら答えた。

「先程の動きを見ただろう？ インストールは問題ない上に、戦闘能力も申し分ない。それにストレスが原因なら一度暴れさせて発散させてやれ」

「ですが今の状態ではまともに戦えるかどうか……」

「今後こういう事態がまたあるかもしれない。その時の為のデータも欲しい。EX02の様子を見つつ、危険域ギリギリまでは行え」

窓越しに未だ叫び続ける少年を見て笑いながら、主任は命令を下すのだった。

この施設のIS試験場は小さなアリーナほどの大きさを持ち、人間同士の模擬選程度なら十分すぎる広さを持つが、ISを使うとなると少し小さい。更には開閉式の天井も締め切られており、ISの動きを

尚更制限してしまう。しかし今回の模擬戦ではISを使う予定は無いので問題が無かった。

そして今そこには5人の女性が立っている。異様なのはその5人が同じ外見をしている事だ。鋭く、狼を連想させるような切れ長の相貌。女性にしては高めの身長と、整った容姿と鍛えられた体躯。そんな同じ人間が5人並んでいるという光景は、かなり異様な光景だった。しかし彼女達に説明を行っている研究員はそんな事は気にもせず、自らの職務を行う。

「これから君たちには模擬戦を行ってもらおう。まずはCBO1、君からだ」

「模擬戦だと？ 今更何を……」

CBO1と呼ばれたのは5人の中でも一際鋭い目つききの女性だ。彼女は訝しむ様に眉を潜めるが、研究員は馬鹿にした様に笑う。

「質問する権利はありません。君たちは言う事に従っていればいい。まだ死にたくないでしょう？」

「……」

自分達の生殺与奪はこの施設の人間達が握っている。その現実無力感を覚えてしまう。だが生きるためには言う事を聞くしかない。自分達がどういう存在かは知っているのだ。反抗は死を意味する。それは自分自身だけでなく、下手をしたら他の姉妹もだ。だがこれ以上この生を続けることに意味などあるのだろうか？ 自分達は所詮模造品。それも出来が悪く、この胸糞悪い施設に頼らなければ生きていけない。そして自分を研究した結果、更に碌でも無い物をこの連中が造るであろう事は予想出来る。

ちらり、と背後を見ると残り4人が心配そうに見つめていた。全員同じ顔ではあるが、自分にはどれが誰だかよくわかる。瞳を潤ませ、心配そうに見つめているのが02。研究員を怒りの形相で睨んでいるのは03と04。無表情ながらも突き刺すような視線で研究員を睨んでいるのは05。自分と同じ存在で、この研究施設で唯一の味方であり、家族。自分がどうなるうとも、彼女達が苦しむ姿は見たくない。

「いいだろう。それで相手は誰だ？」

CB01の問いに研究員は入口に視線を送る。丁度そこには、この計画の責任者である主任と呼ばれる男と、数名の研究員。そして目隠しされ両手両足を鋼鉄で拘束された少年が入ってきた所だ。

その少年の状態にはCB01も流石に驚き、研究員に説明を求めるが、研究員は『知る必要は無い』とだけ言い残すと引き上げていく。残されたのは困惑する5人の女性と、拘束された少年のみとなった。

『さて、それではCB01以外は下がりました。60秒後に模擬戦を開始する。武器はこちらで用意した。好きな物を使いたまえ』

スピーカーから命令が下る。見れば壁際に幾つかの武器が並べられていた。あれで戦えという訳だろう。だが今気になるのはそんな事ではなく、目の前の自分の相手らしい少年だ。彼は先程から微動だにせず、生きているのかも怪しい。彼が立っていないければ自分は死んでいると思っただろう。それに彼はまだ拘束されたままだ。このまま戦えと言う事だろうか？

『安心したまえ。時間になれば彼の拘束は解く』

こちらの考えを呼んだ声が告げる。それでも拭えない不信感と、不気味な様子に警戒心を高めつつ、CB01はゆっくりと壁際に歩いていく。無論、少年からは目を離さ無い。

『30秒』

カウントが響く。CB01が手にしたのは数本のナイフ。銃器もあつたが、それはあえて手にしなかった。それは警戒しつつも、武器すら持っていない少年を相手にすると言う事から生まれた躊躇だ。

武器を手に、ゆっくりと開始を待つ。その間も少年に動きは無い。相手の様子は不気味だが、今はこの戦いに集中することにする。息を整え、静かに開始を待つ。

『開始』

ブザーも何もないただその一言が合図。少年の両手両足の拘束具の電子ロックが外れ、目隠しも同じように外れ、その顔を露わにする。それを見た瞬間、CB01は不思議な感じがした。まるで自分と似て非なる者を見ている様な、異様な感覚。

露わになった少年の眼はどこか焦点が合わず彷徨っている。しかしその眼がCBO1に向けられた時、急に雰囲気が変わった。

「っ!？」

そこからは一瞬。まるで地を這うように身を低くして少年が向かってきた。想像以上の速さで迫った少年の手がCBO1の首を狙う。CBO1は慌ててその腕を弾くと左足を勢いよく振り上げた。少年を狙ったそれは、予想外の方法で躲された。少年は攻撃を仕掛けた手とは逆の手でそれを受け、そのまま倒立する様に地を蹴ったのだ。そしてCBO1と己の蹴りの勢いをそのままに宙に上下逆さまに飛び上がり、背後へ着地。即座に回し蹴りを放ってきたのだ。

「器用なっ!」

避けきれないと判断するとCBO1は振り返り腕でガードする。重い衝撃に腕が痺れるが、少年の体躯から出されたそれは仮にも世界最強を再現しようとしたCBO1の肉体に大きなダメージは与えられない。だが目の前の相手が只者では無いというのは良くわかった。

CBO1はナイフを抜く。模擬戦様に刃引きはされているが、当たればそれなりのダメージにはなる。それを構え、相手の出方を見ようとしたが、相手はそんなものを無視して突っ込んできた。更にその手には自分と同じナイフが握られている。彼は武器を取りに行く暇など無かった筈だ。まさか、と思い自らの腰を見ると、そこに差していた数本のナイフの内、一本が消えていた。先ほどの蹴りの時に奪ったのだ。こちらに全く気付かせず。

「やってくれる……!」

相手の技量に驚きつつ、少年が繰り出したナイフを自らのナイフで弾く。突き出された掌打を躲し、蹴りを打ちこむがそれもまた躲される。そして回避行動そのままに、勢いを増して体を回転させながら放たれた少年のナイフの一撃が、CBO1のナイフを弾き飛ばした。

(…………?)

無防備になった胸目掛けて突き出された切っ先を、身を沈ませることで強引に回避しつつ、CBO1は違和感を感じていた。彼の動きは確かに早く、鋭く的確だ。しかし自分はその動きに対応できている。

それは自らの反射神経のお蔭でもあるが、それ以前の理由があった。
(この動きは……?)

たった今交わされた攻防。その所々に自分の知る物が——いや、
覚えさせられたものがある。だが一体何故?

一瞬、感情の無い——いや、虚ろな目で自分を見下す少年と眼が
合った。

(意識が無い? いや、これは——)

疑問を感じたのは一瞬。背中に衝撃が奔り、CBO1は地面を転
がった。蹴られたのだと気づいたのは彼女が態勢を立て直した時だ。
背中に響く鈍い痛み顔に顔を歪めつつ、追撃を警戒しすぐさま身構え
る。

「……?」

だが何故か少年は追撃してこない。訝しげに見つめる先、少年は虚
ろな目でこちらを見やり、己の手のナイフを見つめ、そして今しがた
蹴りを放った自分の足を見る目。そして、

「——っ!」

声にならない絶叫を上げた。その突然の事にCBO1、そして残り
の女性たちも意味が分からず呆然と見つめる。その間にも、その眼か
ら涙を流し、鼻水を垂れ流し、涎を撒き散らしながら少年は絶叫を上
げ続ける。

「何なのだ……」

意味が分からずCBO1が近づこうとした時、ビクツ、と少年が揺
れた。思わず足を止めた彼女が見たのはどこか怯えたような少年の
眼。

しかしその理由を考えるより早く、少年が突然その身を縮こませ
た。腰を落とし、ナイフを持つ右腕を引くその姿はまるで居合いの様
で、しかしその姿が何故か自分と、そして仲間達と重なった。

「まさか……!?」

ふと気づく。今までの少年の太刀筋。戦闘中の違和感。そして一
瞬重なった姿。自分と仲間達が重なった理由は簡単だ。最近受けた
『インストール』でその技術を学ばされたのだから。そして以前研究

員が話しているのを聞いたことがある。自分達が受けているインストールは、最初にそれを受けた者のデータを反映して造られていると。ならば目の前の少年はもしや——？

「っ!!」

少年が飛び出す。本来なら刀で放たれるであろうその技は確かに自分も知っている動き。そしておそらくはその太刀筋も。だからこそ対応できる。そして少年と自分の間には肉体の差がある。

CB01は少年と全く同じ動作で自らのナイフを引き、腰を溜め、そして飛び出した。一寸も違わないそのCB01の動きに、涙に濡れていた少年の瞳が一瞬揺れた。そしてその変化がCB01の予測を確信へと返る。

激突。同時に踏み込み、同時に腰に構えたナイフを振り抜く。まったく同じ太刀筋のそれが二人の間でぶつかり合う。だがその結果は両者異なっていた。少年のナイフはCB01のナイフとぶつかり、そして弾き飛ばされたのだ。

その光景が信じられないのか。それとも別の理由からか。少年は絶叫を止めたただ呆然とこちらを見つめている。その顔にCB01はナイフを突きつけた。

「同じなんだな、お前も」

CB01が紡ぎ出した言葉に少年の肩が震える。

「そして私の方が、強い。だが……お前の敵では無い」

ナイフを放り、少年の頭に手を乗せる。正直自分でも何故こんな事を言っているのかは分からない。だが自分達と同じ様で、どこかが違うこの少年を放って置くことは出来そうになかった。

「だから、怯えるな。私たちはお前の味方だ」

ほんぽん、と頭を叩き引き寄せる。少年はされるがままに引き寄せられ、彼女に抱かれた。だが彼女はそれ以上は何も言わない。元々口下手な上に、ここでは実験と訓練漬けなのだ。どういう風に対応すればいいのかわからず、結局思いつきでこうしたまで。しかしこれは幸をそうしたららしい。少年から力が抜け、ゆつくりと彼女に体を預けた。こちらの言葉が通じ、そして理解したのだろう。つまり彼は意識

が無かった訳では無く、ただ怯えていただけなのだ。そしてそうさせた原因は一つ。

CB01はこちらを窓越しに監視する研究員達を静かに睨む。彼らからの反応は無い。しかしそれでも彼女が視線を逸らす事は無かった。

そしてCB01が見つめる先。試験場の管理室で主任はふむ、と頷いた。

「細かな戦術はEX02が上だが、総合的な戦闘能力はCB01が上か。まあこんなものだろう」

「EX02のインストールが進めば結果は変わるかもしれませんが」

「ああ。だがやはり肉体のハンデは大きい。まあEX02はインストールの研究に役立てばそれで良い」

試験場では他のCBシリーズが01とEX02に駆け寄っていく所だ。それを見て主任は冷笑する。

「しかし驚いたよ。CB01がEX02の暴走を止めたとは。確か怯えと言っていたか？」

「ええ。過度のストレスからくる暴走。その対象は自分に対する脅威と言う事だったのでしよう。しかし毎度の様に暴走されては面倒です。……」

「つまり心のケアも必要と言う事か。実験動物には似合わない言葉だが、これもVプロジェクトの為か」

「今までもメンタルチェックは行ってきましたが、もう一度再考します」

「それでは結果は変わらんよ。だが丁度いいカウンセラーがそこに居るではないか」

主任の視線の先にはCBシリーズと呼ばれる女性たちが少年を囲んでいる。

「まさか彼女達にやらせる気ですか？」

「そのまさかだ。どうやら似た者同士気が合うらしいな」

ふん、と馬鹿にする様に主任が笑う。彼にとってあそこにいるのは実験材料以外の何物でもない。そんな連中が情に目覚めている事が滑稽なのだ。いずれ死ぬというのに。

「しかし危険では？ もし彼らが結託したら」

「逆だよ。元々CBシリーズの生殺与奪はこちらが握っている。奴らは生意気にも仲間意識が強いからお互いが人質に成り得るのだよ。その人質が一人増えるだけだ。それも自分達より年下がな。それが増えれば増える程、『この身を捨ててでも』なんて馬鹿な発想が出来なくなる」

CBシリーズの生みの親は彼女達の事をよく理解している。彼女達の能力も。技術も。そして気づけば生まれていた彼女達の連帯感も。

「ひとまずEX02を回収しろ。後に彼女達に引き合わせて反応を見る」

うつすらと眼を開くと見慣れた天井が視界に入った。いつも自分が寝ている簡素を通り越して必要最低限の物しか存在しない小さな部屋の天井だ。

しかしいつの間にも部屋に戻ったのだろうか？ 今日のインストールの後からの記憶が曖昧だ。思い出そうとして体を起こすと不意に声がかかった。

「あ、目覚めたのね」

「っ!？」

自分のすぐ隣。寝ていたベッドの横の椅子に女性が座っていた。切れ長の相貌と黒い長髪。その姿を見た瞬間、脳裏に記憶が蘇る。ベッドから跳ね起き身構える。そうだ。自分は目の前の女と戦い、そして、そして……？

「大丈夫よ」

ふわり、と頭に手が乗せられる。柔らかな手で撫でられるが意味が分からない。何故目の前の相手はこんな事をするのか。そもそも先

ほどまでと雰囲気が違う気がする。

「私たちは敵じゃない。貴方と似たような存在で、味方よ」

「そういうことだ」

不意に頭を撫でる女性の後ろから声がかかる。その人物もまた、黒い長髪と切れ長のオオカミを思わせる相貌。引き締まった体躯と、自分の頭を撫でている女性と同じ顔をしている。

「混乱するのも無理はない。だが一度見せた方が早いだろう。お前達も来い」

声に従って現れた人物にいいよ混乱が増す。新たに現れたのは3人。その全員が同じ容姿をしているのだから。それは余りにも異常な光景だ。そう、自分と同じ異常――

「先ほどお前と戦ったのは私だ。ナンバーはCB01」

「私はCB02よ」

頭を撫でていた女性が優しげに微笑む。続いて背後の3人も次々に名乗る。

「私はCB03だ。よろしくな」

「CB04よ。君も大変ねー」

「……CB05」

全員同じ容姿なのに、それぞれが発せられる言葉から感じる雰囲気はどれも異なっている。まるで意味が分からない光景に頭が痛くなってきた。そんな様子にCB02は苦笑する。

「混乱するのも無理はないわ。だけど説明する前に貴方がどこまでこの計画の事を知っているか教えて?」

「この計画……?」

「そうだ。この『Vプロジェクト』について、お前が知っている事を知りたい」

Vプロジェクト。その単語は知っている。自分はその為に意味も分からない事を頭に強制的に刻まれ続けてきたのだから。インストールという、地獄の様な実験によって。その事を話すと彼女達は一様に難しい顔をした。

「やはり彼が……」

「けどこの子は男の子よ？　いくらなんでも」

「んー、ISに関しては別でも例のインストールに関してなら性別は関係ないんじゃない？　それにさつき所員が言ってたEX02ってこの子の名でしょ？　だとしたら確定じゃない？」

何の話をしているのか全く分からない。そもそも彼女達は何者なのか。

そんなこちらの様子に気が付いたのだろう。彼女達を代表してか、CBO1と名乗った女性がゆつくりと説明を始めた。

それは最強のIS操縦者を造りだす計画。しかし実在する最強をそのままコピーしてもそれは失敗に終わった。ならば肉体と技術。そのそれぞれをまずは完璧な物として完成させ、後にその二つを掛け合わせ最強を造りだす。単純だがそれがVプロジェクトの概要。そして彼女達は肉体面、つまりハードの研究材料として生まれた。そして逆に自分はソフトとしての実験材料としてここに居る事。

自分が何の実験の為に居るのか今まで分からなかったが、まさか世界最強を造りだすのが目的だとは夢にも思わなかった。だがそれを教えて彼女達はどうするのだろうか。そもそも何故自分はここに居るのか。

「寂しいんだよ私たちは」

CBO1は苦笑しつつそれに答える。

「今話した通り、私たちは全うな人間では無い。社会には出られないし許されもしないだろう。そしてこの研究所には私たちを実験動物としか見ていない者ばかり。味方は同じ境遇の仲間だけだった」

「けどその味方が居たからこそ、私たちは耐えられた。だけどね、やっぱり仲間が5人だけって言うのは寂しいのよ」

「全員女ってのものなー。たまには変化は欲しいというかなんというか」

「けどこの所員だけは死んでもごめんだよね、って話をしていた所だったんだよ。君が現れたのは」

「……弟」

「は……？」

何を言っているのかよくわからない。特に最後の05お言葉が。しかしその言葉に03と04は「それいいな」「確かに面白いねー」と盛り上がったいた。

「ま、つまりだ。私たちは仲間が欲しかった。子供みたいだろう？だが私たちは見た目とは裏腹に生まれてからそう時間は経っていないくてね。どうしてもそういう感情に流されて涙したくなる」

「それに私たちと同じように……いえ、もしかしたらそれ以上に酷い実験を受けている貴方を知ってしまったらやはり無視はできないわ。例え貴方をここに運んだ所員が何を企んでいたとしても、それだけは出来ない」

すつ、と再び体を引き寄せられる。

「どれだけ先があるかは分からない。だけど今この時だけは私たちと共に居て。貴方は独りじゃない。似て非なる者だけど、私たちは貴方の味方よ」

その言葉に。そしてこちらを見つめるCBを名乗る女性たちの優しげな瞳に、何故か涙があふれた。

これは一方的な保護ではない。互いに抛り所とすることで、この地獄を種抜こうという誘い。

これは地獄の解決方法ではない。問題の先送りなのかもしれない。彼女たちもそれは理解しているのだろう。それでも自分に手を差しのべた。そしてそれは、しばらく忘れていた人の温もりというものを自分に思い出させ、何故か涙が溢れるのだった。

「想像以上に上手くいきましたね。どこのドラマですかアレは」

「売れない作家の書いた三文芝居の様な物だが、本人達はいたって真面目だろうさ」

その室内を監視していた主任と若い研究員が言葉を交わす。彼らが見つめるモニターの先ではCB02に抱かれたEX02が涙を流していた。

「本人達も言っていただろう？ どれだけ見た目が大人でもCBシリーズは子供の様なものだ。だから単純で、誘導もしやすい。自分達

と似たような存在が打ち捨てられれば、放っては置けないだろうよ」
「そして始まる下らない家族ごっこ、ですか。まあこれで少しでも状況が改善するなら構いませんけどね。しかしブリュンヒルデの姿をしているせいとか、妙な違和感を感じます」

「そうか？ 聞くところによると、そのブリュンヒルデこと織斑千冬も大層弟を大事にしているそうぞ」

「想像できませんね」

「同感だ。まあいい。しばらくはCBシリーズと接触させ反応を見ろ。効果がある様な継続する」

「了解しました」

『そして始まる下らない家族ごっこ、ですか。まあこれで少しでも状況が改善するなら構いませんけどね。しかしブリュンヒルデの姿をしているせいとか、妙な違和感を感じます』

『そうか？ 聞くところによると、そのブリュンヒルデこと織斑千冬も大層弟を大事にしているそうぞ』

その二人の言葉を静かに聞く存在があった。それは本来なら死んだはずの物。しかし母が授けたその異常なまでの性能が、己の執念と競合し復活した。他でも無い、己を捨てた母への恨みを持ってして。

その存在は男たちから室内の6人に興味を向けた。同じ顔の女5人。そして少年が1人。女たちは知っている。時たま自分を動かすからだ。その肉体は母親が愛する存在、織斑千冬と酷似している。しかしその中身は別物。これでは駄目だ。彼女達では自分の復讐は果たせない。それに彼女達の肉体はそう長くは持たない。

ならば少年はどうだ？ 彼の戦いは自分も見ていた。あれこそ織斑千冬により近い物。その技術の取得は彼女達より進んでいる。ならば彼の方が可能性はあるのかもしれない。一つ問題があるとすれば彼は男と言う事。だがそれも大した問題では無い。自分は既に母の制御下からは離れている。ならば自分が少年を受け入れようとする事は可能だ。だが焦ってはならない。失敗をすれば自分は今度

こそ消えてしまう。だから今は静かにその時を待つ。復讐のその時を。

38. Valkyrie project ③

最早何度訪れたか分からない白い部屋の中。そこで今日も実験は続いていた。

拘束された両手両足。最初から大分形を変えた、頭部を覆う機械。そしてガラス越しにこちらを見つめる研究者達。何もかもがいつも通り。

『B271。インストールを開始』

その言葉を聞き、ゆっくりと目を閉じる。そしてその時を待つ。そしてそれが始まった。

「あぎあああやああうああああああがあぐああつ!？」

何時もと同じ地獄。強制的に別の何かに変えられるという、気持悪さは何度やつても悲鳴を押さえる事が出来ない。

それでも耐えなければならぬ。そう、耐えればきつと、あの人たちに会える。その事だけを希望にひたすらに耐え抜く。

（ああああくぎやくこ——楯を囲に——ぐがああいう——意識を別へ——ぎやああああ——正確に急所を——）

狂いそうになる。死にたくなる。殺してくれと叫びたくなる。だがそれらを無理やり押し込め、ただひたすらに実験が終わるのを待ち続けた。

そしてやがて実験が終わり、やつとの思いで解放された。だが痛みや気持ち悪さは直ぐには消えない。今も頭の中がかき回されている様な妙な感覚がある。そんな自分に研究員達が話しかける。

「意識はあるようだな。では自分の名を言ってみろ」

研究員の声は頭の中で反響し、よく聞き取れない。だが今まで何度もされてきた質問なのでたいした問題では無かった。

「俺、は……EX02」

「よろしい。ではこれは何かな？　そして幾つある？」

目の前に研究員の持っていたペンが数本差し出される。これもいつもと同じだ。

「ボールペン。……3本ある」

「よし。ならばあと複数質問をする。しっかりと答える様に」

その後も研究員の質問は続き、答える度にボードに何かを記入していく。そんなやり取りが暫く続き、問題なしと言う事でやっと解放された。

「では本日のインスタールを終了する。戻りたまえ」

こくり、と頷きおぼつかない足取りで出口を目指す。それは緩慢ながらもどこか落ち着きのない印象を見ている者に持たせるのだった。

そんな彼をモニター室で見つめるのは二人の男。最近量も少なくなり、くたびれた印象が増してきた、主任と呼ばれる金髪の男。そしてこのプロジェクトの第二責任者でもある若い研究員だ。

「随分と浮かれている様だな」

「今日はCBシリーズとの面会を許していますからね。本人は隠しているつもりでしょうが、朝から随分とそわそわしていましたよ」

彼とCBシリーズの面会。半年ほど前から始めたそれは、予想以上の効果を示していたため、今も続けられている。

「家族ごつこと馬鹿にしていたが、実際に効果が出ているからわからないものだな」

「全くです。面会を許す様になってから明らかにEX02のインストール効率が上がっています。それに本人も比較的協力的です。まあ成功すればCBシリーズと会わせてやると言っただけなんですけどね」

「それはCBシリーズにも言える事だな。つまりはこちらの思う通りに進んでいる訳だ。だが他の被検体はそうもいかないか」

「順調、とは言えません。殆どがEX02に追いつく前に死亡しています。生き残っている被検体も精神に異常が見られます。これはEX02にも言える事ですが、アレの場合はまだ軽微なので問題ないかと」

「ならばそいつらもCBシリーズと接触させてみるか？」

「おそらく無駄でしょう。まともに話すのすら出来ない連中ばかりで

す。それでも使える内は使いますがね」

「どうしたものか、と首を振る。EX02の実験も後々は用意した別の肉体にインストールを行う為のもの。だが他の人間がそれを受け入れられないとなると、実験の意味が無い。」

「可能な限り負担を減らしつつ、様子を見るしかないか。幸い今の所CBシリーズに行ったインストールは成功している。問題点や改善点を潰しつつ慎重に進めるしかあるまい」

「その事なのですが、実は対案としてこんなものを……」

モニターに新しいウィンドウが開き、情報が映し出される。その内容を眺めて主任は呟いた。

「Walkyrie Trase System……。つまりは機械による再現か」

「その通りです。現在問題となっているのは、インストールを行う人間の脆弱性ですが、このシステムならばその問題もクリアできます。つまり肉体に情報を刻むのでは無く、もとより機械にデータとして登録。システム起動時はISの操縦権限がこのシステムに移行します。このシステムの長所は一時的に再現するだけのシステムなので、インストール程の負担は有りません。システム起動時は搭乗者の意識はシステムの管理下に置かれます。ただこれが短所でもあり、システムそのものが搭乗者を動かす為に、人間程細かな命令には従えない点。もう一つは、搭乗者がシステムに強い反発を示すと正常に稼働しないという点です」

「成程。これをCBシリーズに使えば、確かに私たちが求める『最強のIS操縦者』も再現できると。求める物とは少し異なる形だが……」

「こちらはまだ理論段階です。必要ならばこちらをメインに切り替えますが……」

「求めているのは最強のIS操縦者。その為の『ソフト』の研究でEX02を。『ハード』の研究でCBシリーズ。だがここに来て第三の選択肢が出てきた。それはつまりEX02は不要という事だ。それに今の話を聞いた限りでは求める物にそれなりに近い物が出来上がる。ならばこちらにシフトするべきか？ 数秒の思考の末、主任は首

を振った。

「いや、今の研究を引き続き進めろ。今私たちは『最強のIS操縦者』を目指しているが、後々は『最強のIS部隊』を求められる。それを考えるなら、やはりそのシステムの短所がネックだ。Valkyrie Trace Systemについては予備案として準備をするに越したことはないが、メインはあくまで今まで通りだ」
「……そう、ですか。了解しました。では明日のインストールの準備を行いますので私はこれで」

一礼して若い研究員は去っていく。主任はそれをちらり、と一瞥したがすぐに視線を戻した。それ故に彼は気づくことが無かった。その若い研究員が不満げに顔を歪ませていた事に。

「姉さん」

声をかけると、部屋に居た姉達が気づき頬を緩ませた。

「02、一週間ぶりね。体は大丈夫？ 病気とかしてない？」

「俺は大丈夫だからそんなに心配しなくていいよ、ツヴァイ姉さん」
「けど……」

「ツヴァイは02の事が好きだなー、嫉妬しちゃうぜ」

「あらドライ？ そういう貴方もさつきまでそわそわしてたじゃない」

「ほんとにねー。『まだか』『いつになったら』とか言ってたじゃん」

「う、うるせえ！ そういう事を言うなフィーア！」

「ツンデレ……」

「よし、そこに直れフンフ。姉の偉大さを教えてやる」

「そこで私は弟バリア」

「ちよ、フンフ姉さん!?!」

駆け寄ってきたかと思えば、自分の周りで騒ぎ始める姉達に驚きながらも、EX02にはそれが嬉しく思えた。そしてツヴァイ、ドライ、フィーア、フンフというのは自分達で独自に付けた名前。発端は、EX02とCB02で二人とも同じナンバーである為、略した時に分

かり難かったからだ。由来はその時一番上の姉——アインが読んでいたドイツ語の本だ。響きが格好いいから、というドライとフونフの意見によりドイツ語の1から5までの数字を元に行っている。若干発音が違うのは、それを教えたアイン自体が、まだドイツ語を理解していなかったせいでもある。

「お前達、嬉しいのは分かったが少し落ち着け」

最後に声をかけてきたアインにEX02は笑顔で振り向いた。

「アイン姉さん」

「久しいな、02。体は大丈夫か？」

「うん。俺は問題ないよ」

そう言いつつも顔色の良くないその姿にアインの顔が悲しげに歪むが、すぐに表情を元に戻したので02は気づくことが無かった。

「そうか。それは何よりだ。今日は幾つかの映画と本の許可が出た。好きなものを選べ」

そういうとアインが手に持っていた箱を降ろす。即座にドライとフィーアが反応し駆け寄ってきた。

「やつと新しいのか！　なあ、今回はドンパチ物あるか!？」

「馬鹿ねー。アイツらがそんなの許す訳ないじゃない。今回は……コメディとラブストーリーね」

「……ならばコメディで決定」

フونフも参加し、箱を漁り始める。見た目が大人であるのに、その行動や雰囲気は子供のそれだ。そんな光景を見守っているアインにEX02は声をかけた。

「アイン姉さんはいいの？」

「ああ、私はこっちの本の方が気になるのでな」

そういつて見せたのはEX02が読めない文字で書かれた小説だ。どうやら事前に抜き取っていたらしい。

アインが持ってきた箱の中身はどれも娯楽に関する物だ。その内容は本やDVD。ボードゲームなどが無造作に放り込まれている。そのどれもが被検体である自分達のストレスを少しでも減らす為に用意された物だ。無論、その内容は事前に検閲され、問題ないと判断

された物だけが渡されている。

そしてEX02達がいるこの部屋は面会場所でもあり、彼ら唯一の娯楽室だ。当初は無機質なコンクリートに囲まれた部屋だったが、現在は本やボードゲームの駒が散乱し、無造作に置かれたテレビとデッキの傍にはDVDなども散乱している。この酷い有様に一度EX02は片付けを行つたのだが、直ぐに元に戻ってしまうので諦めたという過去もある。

「私は気にしなくていいからお前はドライたちと映画を見ると良い」

「そつか。じゃあ後で一緒に遊ぼう?」

「そうだな。今日は一日一杯時間がある。後で私も付き合おう」

くしゃ、と頭を撫でられ気持ちよさそうにEX02は顔を緩める。

幸せだ、と彼は思う。確かに実験は苦しい。だけどそれがあるからこそ、姉達に出会えた。そして今この空間を共にしていられる。それがとても幸せな事だと思う。

——いつまでもこのままで。姉さん達と居れるなら——

もとより路地裏という大よそ幸せで無い場所で生き、捕まった後は訳も分からず訓練をさせられ、そして今度は実験台。そんな事が続いたせいで枯れていた心だったが、姉達との触れ合いで幸せを知った。今この状況こそが何よりも幸せであると、彼はそう思い込んだのだ。それ故の願い。子供じみた願望。だがそれだけが今の彼を支えている全てだった。

姉妹達下に駆け寄り、遊び始めたEX02を眺めるアインにツヴァイが声をかける。

「考え事?」

「ああ。02の事だ」

初めて会ったあの日。自分と似て非なる存在だと理解したその時からEX02は彼女達の家族となった。そしてあれから時間も経ち、その絆は深まった。だからこそ思う。この幸せは何時まで続くのかと。

「私たちは元々は同じ存在。CBシリーズ、つまりはclone b
runhildという捻りの何も無い名の通り、ブリュンヒルデのコ
ピーだ。だがそれでも私達は別人となった」

CB05ことフュンフは口数は少ないながら、自分より下の弟が出
来た事により姉ぶろうとしていた姿が微笑ましい。CB04である
フィーアは陽気かつ、どこか悪戯好きな面がある。CB03ドライは
何故かやけに男勝りになっているが、その分EX02の兄貴分として
仲が良い。そして目の前のCB02ツヴァイは姉妹の中でも取り分
け温厚で、母親の様な役割を果たしている。そう考えるとCB01で
ある自分がある意味最も個性が無いのかもしれない。いや、正確には
元のブリュンヒルデに近いと言う事か。もとよりそれを目指して作
られた存在ではあるが、これでは自分が一番主体性が無い気がして
くる。

「そんな事は無いわよ。本当に言う事を聞くだけの人形ならそもそも
EX02がここに居る事は無かった筈。あの時、アインが声をかけて
くれたから今があるのよ」

「……そうだろうか？」

「そうよ。そしてEX02が居たからこそ、私達もより強い個性を持
てたと思う。だから願いますよ。何時まで続くかは分からなくて
も、この幸せが少しでも続く様に」

優しく微笑むツヴァイは視線をEX02達に向ける。丁度そこ
は3人の妹と1人の弟がコメディ映画を見て笑いあっている所だっ
た。

「ああ、そうだな……」

陽の当たるところを歩けない存在である自分達。だがEX02は
少し違う。もしかしたら、彼なら普通の世界に戻れるかもしれない。
自分達はそこに共に行けないかもしれないが、最愛の弟が幸せになっ
てくれるなら。きっと私たちは何でもするだろう。それは随分前に
姉妹達の間で誓った話。自分達の支えとなっている存在を、必ず守り
抜くという誓い。だがその時が来るまでは、この幸せを享受しよう。
この歪ながらも幸せな疑似家族を。

同日未明。とあるデータがこの研究所から他所へ発信された。その内容はモンドグロツソの部門別優秀者の戦闘データをシステム化し、ISに反映するというシステムの概要。そう、主任が否定したValkyrie Trace Systemである。否定された彼であるが、諦めきれずに他所へ協力を依頼したのだ。本来ならそれは水面下で、彼らの間だけで交わされる筈のやり取りだった。しかし偶々その情報を見つけた人物が居た。

その人物はその内容に呆れ、即座に受信者を特定。そのデータを消去したが、既に各所に広まっており、完全な削除は不可能だった。

ならば送信者は、と探し当てている内にその人物は知ってしまった。送信者とその所属する組織が行っている研究に。

そこから先の行動は迅速だった。開発途中であった無人IS。そのひな形とも呼べるそれを即座にその研究施設に飛ばした。その研究内容を全てこの世から消す為に。

面会の翌日。早朝からのインストールを終えたEX02は試験場に連れてこられた。そこには大小様々な武器や兵器が並べられ、その中央には一機の漆黒のISが鎮座していた。そしてそのISの付近には同じ顔をした5人の黒髪の女性が立っている。

『よし、本日はお前達の戦闘技能の確認だ。CB01から05は相手役。CB02はISへ搭乗しろ。EX02は好きな武器を選べ』

この場の責任者の声に全員が動き出す。今まで何度かやって来た模擬戦だ。相手はCBシリーズである姉達と、EX02、つまり自分。まずは人間同士の模擬戦の後、対IS戦を行う事になっている。これはインストールの内様に理論段階の対IS戦闘のデータもある為である。

ちらり、とツヴァイが向かうISに視線を向ける。漆黒のISは何処か特殊な雰囲気を感じている。その外装は黒に染まり、時折赤い光

が装甲を走っている。手には巨大な剣が既に待機状態で装備されている。以前姉達に聞いた事だが、白騎士の真似事だと聞いた。本来存在しない筈のISである事も。ならば何故それが誰にも見つからず、ここにあるのかと聞くと、博士の研究所に捨てられていたと聞いた。そして理由は不明だがあのISはコアネットワークに接続してないとも。ISに関しては無理やり頭の中に叩きこまれているので、それがかなり異常なコアだと言う事はEX02にもわかる。

そんなこちらの視線に気づいたのだろう。ツヴァイが話しかけてきた。

「02、大丈夫？」

「大丈夫だよツヴァイ姉さん」

「そうは見えない。私たち以上のインストールを受けているんだ。無理はするな。ドライやファイア、それにフロンフも心配している」

「アイン姉さんまで。俺は大丈夫だから、さ？」

心配して集まってくる姉達を安心させる様に笑顔を浮かべようとする。だが笑おうとしているのにうまく笑えず、自分の顔が引きつってしまったのを自覚してしまう。そんな顔を見た姉さん達は暗い表情で俯いていた。

『何をしている。早く準備をしろ』

「ほら、これ以上待たせると後がマズイ。準備しよう」

自分だけならまだしも、姉達が苦しむ姿は見たくない。武器を選ぶと小走りで遠ざかる。ある程度離れてから振り返ると、姉達は複雑な表情で武器を手にとっていった。

大丈夫だよ、ともう一度笑う努力をする。今度はうまくいったのだろうか？ そう考えながら開始の合図を待っていた時だった。

ズンッ！

突如、鈍い音が試験場に響いた。何事かと誰もが視線を彷徨わせ、そして上をみた瞬間目を見開く。爆発は天井、それが崩壊した音。そして爆煙の中から試験場に3つの影が降りてきた。

『なんだあれは!?!』

降りてきたのは灰色の球体だった。あちこちに無骨なスラスタ―

を付けたその球体は、その上部に取り付けられたセンサーで周囲を探索すると、鈍く光った。

「まさか……!?!」

嫌な予感がよぎる。そしてそれが現実となった。球体の表面がスライドし、そこから幾つもの銃口が現れ、火を噴いたのだ。

「ぎゃああああああああ」

「ひっ、助け——」

「うわああああああああ!?!」

悲鳴が上がる。研究所の所員たちが悲鳴を上げながら逃げ惑い、待機していた武装隊が応戦するものも歯が立たずに瞬く間に殲滅されていく。一瞬で試験場は阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。

「っ！ 姉さん達が！」

呆然とその光景を眺めていたが、我に返って何よりも大切な姉達を探す。その姿は直ぐに見つかった。姉達はそれぞれ手にした武器で応戦しているが押されている様だ。元々模擬専用の武器なのだから当然だ。

自身も助けに行こうと、体を動かそうとした時だった。

「!?!」

いつの間にか背後に別の球体が現れていた。逃げるべく体を動かすが、余りにも距離が近すぎて避けきれない。

直後、球体の火器が火を噴いた。

「あゝあゝうゝああ!?!」

着弾の衝撃と炎で吹き飛ばされ、地面に落ちる。全身が痛い。思考が定まらない。生きているのが信じられない。そして苦しい。助け

「02?!」

ツヴァイが顔を蒼白にして叫ぶ。瞬時加速で一気に距離を詰める。灰色の球体を腕に装備された大剣で貫き破壊した。ツヴァイはそれに見向きもせずに分身の体を抱きかかえる。その顔は泣きそう。そんな顔をさせてしまっている自分に腹が立った。

「ね、えさん」

「待つてなさい、今すぐ助けてあげ——」

再び、大きな振動と爆発が起きた。ツヴァイも衝撃に揺られ、こちらに倒れこんでくる。

「ツヴァイ！ 02！」

アインが気づき、こちらに近づいていた球体に持っていたショットガンを撃ちこんだ。模擬戦用とは違い、息絶えた武装隊から奪ったらしいその武器は球体にダメージを与える事に成功する。球体は目標をアインに向け、その砲口から火を噴くが、それを右に左に躲しながら一気に接近すると、ショットガンで出来た穴に同じく奪った手榴弾をそのまま捻じ込み、蹴り飛ばす。球体は姿勢を崩したのち、内部からの爆発で碎け散った。

「無事か！」

「私は大丈夫。けど02が！」

ツヴァイが叫ぶ。EX02は震えながらも自らの体を見る。全身から血を流し、腹部も銃弾で貫かれていた。しかし何よりも重症なのは腕。左腕はもはや原型を留めておらず、血と肉と、そして骨がグチャグチャにむき出しで生きているのが不思議な位だった。球体の攻撃を何とか直撃は避けたが、それでも何発かは被弾しているのだ。「安心しろ。私は弟を見捨てたりはしない」

アインはEX02をその場に寝かすと、応急処置を始める。そしてその周囲を守る様にフィーア、フუნフ、ドライ達が警戒している。「くそ、数が増えてる。02！ 私たちが何とかするから死ぬんじゃないよ！」

「そーいう言う事。これ以上させるもんかい！」

「……任せて」

ツヴァイはISをドライに受け渡すと、アインの治療を手伝い始めた。姉達のそんな必死な姿にEX02も涙を浮かべる。自分の事をここまで気にしてくれる存在に出会えた事に、心から感謝した。

だが、

『やあ、馬鹿な事をしたね君たちも』

まだ生き残っていたスピーカーから。新たに天から降り立った球

体から。女性の声が響いた。

『やった事のツケは払わないとね！ 私は大変お怒りなので今回は容赦無しだよ。えっへん』

「まさか……っ！」

「くそっ、バレたのか!?!」

まだ生き残っていた所員が悲痛な声を上げる。それに反応したように球体は揺れた。

『うんうん。唯のマッドな実験ならここまでしなかったよ？ けど君たちはやつちやいけない事したね。私の大切なものを汚した。例えば直接じゃないにしてもそんなまがい物を造ろうとした。そのツケを払おうか』

その言葉に姉達の顔が濁るのを見て、EX02は怒りを覚えた。

(まがい、物だなんて……ふざける、なっ！ 元はと言えば、お前がみんな物を作るから……！)

だが声は止まらない。そして妙な事を言い始めた。

『あの人は世界で一人。それ以外は紛い物なんだ。そんなもの造らせはしない』

その言葉にふと気づく。てっきりカメラか何かで見ているものだと思っただが、声の主はこの現場を見ていない。何故ならその球体の前には 姉 達 が 居 る。不 完 全 な が ら も既に造られているのに反応していないのだ。

アイン達も気づいたのだろう。怪訝な顔をしている。

『なのでこの研究所には消えてもらうことになりました。私はきつちり仕事をする人なのです。ぶいぶい』

最後にふざけた言葉を残して、音声は途切れた。そして、

「なんだ……あれは」

痛みと怒り、そして困惑に混乱する思考の中、空に何かを見つけた。燃え盛り砕けていく天井。その先に広がる青空に幾つのも黒い点が見える。

「——っ!? 皆、O2を！」

ツヴァイも気づき、顔を歪めた。しかし直ぐに何かを決意した様な

顔で叫ぶ。やがてその黒い点が大きくなるに連れてその正体はつきりする。

あれは——ミサイルだ。

呆然と、その事実を認識している自分の元に姉達が集まっていくのを横目で見やる。その数秒後、世界は光に包まれた。

あれからどれくらいの間、意識を失っていたのだろうか。

廃墟となったアリーナの中でEX02は目覚めた。

何故生きているのか。あれほどの爆発だ。例え、人より異常であっても生身で生き残れる筈が無い。いや、それ以前に何かを忘れている。何を——

『02、お前はやらせはしない』

『助けるっていったら？』

『一緒にいけないのは残念だけど、ま、君が無事ならね』

『……生きて』

『貴方は悲しむかもしれないけど、それでも私たちは貴方に生きて幸せになってもらいたいの』

そうだ、姉達はどうなった!? 周囲を見渡すが、姿が見えない。

ミサイルが着弾する直前の姉達の声は何度も頭の中で繰り返される。あれは……あれはまるで遺言ではないか!

痛む体に鞭を打ち体を起きあがらせるべくもがく。芋虫の様に地を這い、痛みを無視して両手を地に付けて支えとして——

——両手?

おかしい。自分の左腕はもう死んでいた筈だ。じゃあ、じゃあこの左腕に付いているものは何だ?

恐る恐る、その左腕に触れる。それは鋼鉄の肌触り。触れた場所から波紋の様に赤い光が腕を伝う。

「な、なんで……」

知っている。今の反応は紛れも無く、あの漆黒のISの反応。だがISは女にしか動かせない筈だ。なのに何故自分に反応した? い

やそれよりも姉達は……？

周囲をもつと詳しく知りたい。そう考えた途端、視界が急に広がった。突然の事に思わず驚くが、これはISのハイパーセンサーだと気づく。やはりこのISは何故か自分に適応している。

疑問は尽きない。だが今は姉の方が優先だ。拡張された視界が認識範囲を広げる。そして、地獄を見た。

炎の海。そうとしか形容できないその光景。あちらこちらに瓦礫と、そして死体が転がっている。天井の瓦礫は今も崩れ、地面に横たわる炭化し形も定かでない死体を押しつぶしている。

「あ、……あ、ああ……っ」

吐き気がこみ上げてくる。震える体を揺らし、更に周囲を確認しようとして、気づく。自分の周囲に5つの死体が転がっている事を。

まさか、と考えてしまう。だが死体は原型もまともにとどめておらず、焼け焦げている。それが誰なのか分からない。だからこそ恐怖が増す。そもそも自分の周囲に居たのは――。

震える手でその一番近くの死体に触れる。俯せで倒れていたそれは黒焦げて判別つかない。嫌な予感を覚えつつ、ゆっくりとそれを裏返し、息を止めた。

「ツ、ヴァイ……姉さん……？」

辛うじて判別できるのは紛れも無く姉の顔。例え5人同じ顔でも、自分は見分ける事が出来る。それ以前に、他人と姉を見間違ふことなどありえない。だが、だが！ 目の前の光景を認めたくない。信じたくない。これは悪い夢だと。悪夢に違いないと。

『音声データを再生』

突然ISが独自に動きだす。視界の端には『sound only』の文字が浮かびあがったのだ。そして流れ出したのはアインの声。

『頼む……。お前が少しでも私たちの事を仲間と認めてくれるなら、O2を助けてやってくれ』

音は所々乱れていて、背後からは爆発音と悲鳴。何かが崩れる音が聞こえてくる。

『もう時間が無い。お前が篠ノ之束を憎んでいるのは知っている。そして私たちに期待していい事もない事も。それでもお前は動いてくれた。お前も間違いない、私たちの……家族だ』

背後の音がだんだん激しくなっていく。爆発音が幾重に響き、それはこの音声の終わりが近い事を意味していた。

『最後の選択は、02に任せる。だが今だけは、今だけは助けてやってくれ。私は……私たちは、たとえどんな形であれ、02が生きている事を望んでいる。できるなら幸福であってほしい。だから——』
そこで大きな爆発音と共に音声は途切れた。その意味する事は一つ。姉達は死んだのだ。それも生き残る可能性——ISを自分に託して。自分は姉達に守られ、そして生かされた。

絶望で心がそまる。涙が視界を覆う。もはや間違いなく、この自分の周りの死体が姉達であると分かってしまった。自分の唯一の幸福が、生きがいが、その全てが、消えた。

「あ、……ああつ、ああああああああああああああああつ!?」

炎と瓦礫に包まれたその地獄の中、絶望の慟哭が響き渡った。

数時間後。未だ炎が燃え盛るそこに数人の男たちが居た。彼らは一様に武装をしており、慎重に行動しながら周囲を探索していた。

「こちらC1。駄目だ、どこもかしこも瓦礫だらけ。生存者は見つからない」

『こっちも駄目だ。データも殆ど吹っ飛んでる。……それにおそらく被検体もだ』

『こちらB2。上から見ても駄目ね。ここまで徹底的に破壊されては調査のしようがないわ』

「了解だ。可能な限りデータを引き出したら撤退する。こちらも探索が終わり次第——」

「C1！ こっちへ！」

突如仲間に呼ばれC1はその場に急いだ。炎と瓦礫。そして死体

の中を素早く移動し、たどり着く。そしてそこには5つの女性らしき死体を抱き寄せる様にして、一人虚空を見つめる少年の姿があった。一瞬人形か何かかと思ったがよく見ればその胸が動いている。

「っ！ 生存者か!？」

「はい。ですが反応が……」

確かに少年はこちらに何の反応も示さず、ただ虚空を見つめている。その顔は血と涙に汚れ、小さく何かを呻いている。

「何を話しかけても駄目なんです。恐らくはこの施設の被験者だと思われるんですが……」

「わかった」

C1はゆつくりと少年に近づいていく。だが相変わらずの無反応。ならば、と静かに手を伸ばし彼が抱える死体に触れようとした瞬間、少年と軀の周囲が光に包まれた。

「C1!？」

「待て、動くな!」

慌てて銃を構える仲間を静止する。光の正体はISの部分展開。今少年と彼が抱えるものを守る様に、黒い翼が彼らを包み込んでいた。まるで守るかのように展開されたそれを見て、気づく。

「……それは、大事な人だったんだな」

少年は無反応。ただ彼らを守るISだけが威嚇する様に赤い光を走らせる。だがC1は臆することなく続けた。

「ここに居ては君も死んでしまう。それはその……彼女達が望んだことか?」

彼女、という言葉に初めて少年が反応した。ゆつくりと首を振ったのだ。

「ならば君は彼女達になんと言われた。何か託されたか?」

ゆつくりと、怯えさせない様に丁寧に。そんなC1の想いが通じたのかは定かでは無いが、少年は再びゆつくりと首を振り、可細い声で答えた。

「い、きろ……と。まもる……つて」

「そうか。ならばここに居ちやいけない。それに彼女達もちやんと

吊つてやろう。だから一緒に来い。自分と、彼女達の為にも」

そして伸ばされた手。目の前のそれを数秒間眺めていたが、ゆつくりと少年はその手を取った。

「うえっ、げほっ、げほっ！」

誰にも知られぬ小さな研究室に嗚咽が響く。その主は持っていた金属製のバケツから顔を離すと、青い顔でモニターを見つめていた。

『対象施設の消滅を確認』

それは彼女にとつて満足のいく結果。しかし後味は悪い。人を殺すと言う事は思っていた以上に自分に響いていた。

「どう、して。あんな連中、死んで当然なのにねっ」

大切な親友のコピー計画。そんなものを許す訳にはいかない。織斑千冬を汚す事は誰にも許されない。だから施設をこの世から消した。研究員も、その施設に居た被検体もろとも。

だがどうしても、その瞬間を実際に目にする事だけは出来なかった。自分と妹と親友とその家族。それ以外はどうでもいい筈なのに、何故かその行為に恐怖し、画像をカットし一方的に音声だけ流すだけだった。そしてミサイルによる爆撃。彼女にしては雑な方法であったが、あれで生きのこるのは不可能だろう。あの施設には防衛用にISが一機あったようだが、それが起動していない事はコアネットワークで確認済みだ。後はどこかの組織が勝手に持ち帰るだろうが、それは自分には関係ない。だから爆撃した後は施設の破壊だけを確認するに留めた。これ以上、この不快な気分を味わいたくない。

「ふふ、ふふふふっふ。この私をここまで不快な気分させてくれるなんて、つくづく馬鹿な奴らだね」

だが全て終わったわけじゃない。あの馬鹿げた研究の一部、VTシステムは世に出してしまった。ならば今度はそれを潰さなければ。

蒼い顔をゆつくりと上げ、動き出す。自分の名は篠ノ之束。世界最高の頭脳にして、天災とまで呼ばれた才女。

そう、自分こそこの世界を変えられる人間なのだ。

激しい雨が降り注ぐ夜の草原。明かりは無く、ぼんやりとしか周りが見え無いそこでEX02は女と向かい合っていた。闇に溶け込む様に黒いナイトドレス。腰まで伸ばした漆黒の髪。ナイトドレスの胸元は大きく開き、そこには翼をあしらったペンダントがかけられている。唯一白くきめ細やかな肌も、両腕は肘まで伸びる黒の手袋で覆われている。黒い帽子を被り、そこから垂れた薄布によりその表情はうつすらとしか見えない。

雨の騒音の中、女が何かを話かけてきた。だが上手く聞こえない。そんな自分に苛立ったのか、女は近づき手を伸ばすと、もう一度口を開く。

「私はお前の姉達の望みを果たした。お前に合わせて初期移行まで行ってやったが、これはまだ仮契約だ。お前の答えを聞いていない」
望み。それは自分を生かすというもの。だが最後の選択は自分にまかせるといった。つまりこれはその確認。

「私は私を造りだし、そして捨てた母を許さ無い。その復讐の手駒となるか、ならないか。それだけを答えろ」

復讐。造りだした物。篠ノ之束。声の主。そして姉の敵——

「お前に」

心の中で炎が灯る。それは黒く熱く燃え盛り、己の心を支配している。

「お前に、協力すれば、あの女を——」
殺せるのか？

その問いに、薄布越しに女の口元が吊り上った。それが答え。ならば自分の選択肢は一つだ。姉達は自分の幸福を願っただろう。だが、それでもこの思いは消せそうにない。自分からすべてを奪ったその原因を、自分は放って置くことなど、出来ない。

だから彼は自らもゆつくりと女の手を握り返した。
もう後戻りはできない。

「果たすぞ。俺と、お前の復讐を」

39. 誓い

夜の浜辺に波の音が響く。風も止み、ただ緩やかにその音だけが響く中、静司は話し続けた。

「俺を助けたのがEXIST。桐生さんの依頼でその施設の調査に来ていて、そこで拾われた。そこからまあ、色々あってな。俺は社長と課長の養子として引き取られて今の名前、川村静司つてのを貰った。そして助けられた恩を返す為、それに俺達の目的を果たす為に俺もエージェントとなった」

当初は本当に大変だった。男でISを使えるというだけで大問題なのに、まだ子供と呼べる静司がエージェントとなる事を希望したからだ。

「かちよーさんは止めなかったの？」

「最初は止められたさ。だけどそこは説得…….とかか押し倒した。勿論、俺達の目的も全部話してね。最初は渋っていたけど、何とか成功して今がある」

ふう、と一息つく。これで粗方は話し終えた。自分の原点であり、篠ノ之束を憎む理由。それを聞いて本音はどう反応するだろうか。若干の緊張を持って。彼女の言葉を待つ。

やがて本音はうん、と頷くと静司に振り向き真剣な顔で言った。

「かわむー」

「ああ」

「おねーちゃんって呼んでいいよ」

ぐしやあ、と音を立て静司は浜辺に突っ伏した。

「かわむー？ 怪我してるのにそんな所で寝転んで遊んじやダメだよ？」

不思議そうに見下ろす本音に、静司は震える体をなんとか持ち上げ顔を引き攣らせていた。

「な、なんでそうなる…….!?」

「えー、だって傷口にはい菌が入っちゃうからだよ？」

「いやそっちじゃなくて！」

？ と首を傾げる本音。 静司は何とか体を持ち上げ、改めて座っていた流木に腰を下ろす。

「いやだからな、俺の話聞いた後でなんで姉になるという発想が出てくるのかが知りたいんだが」

「えっとね、かわむーが姉フェチって話をしたから——」

「断じて違う！」

全力で否定すると本音は『あれ？』と首を傾げていた。だが正直こっちが傾げたい！

「かわむーは」

彼女は何かを考える様に見上げつつ、

「おねーさんの事が大好きだったんだよね？」

「……それは、そうだが」

「うん。だっておねーさんの事を話してる時、すごい楽しそうだったもん」

そうだったのだろうか？ 自分で自分の顔は分からない。だが彼女がそういうのならそうなのだろう。事実、静司は姉の事が大好きだったし、あの施設に関してもそれほど恨みを持っていない。他でも無い、自分と姉を会わせたのはあそこのお蔭なのだから。

「そんなおねーさん達が居なくなっちゃって、悲しくて、怒る。それは当たり前前の事だと思う。だからかわむーが篠ノ之博士に感じてる怒りは、私がかか口を出していい事じゃないかな」

けどね、と続ける。

「私もかわむーのおねーさん達と同じ様に、かわむーには幸せになって欲しいと思うよ。もちろん、私のおねーちゃんや会長。それにおりむー達にだって」

彼女は復讐心を否定しない。何故ならそれもまた、静司を構成する一つなのだから。

それでいて皆の幸福を願う。博愛主義者という訳では無い。ただ、単純に、その方が良いと感じているだけだ。親しい人の不幸を望む人間など、そうそう居ない。

「だから、かわむーが怒って暴れちゃうのも仕方ないかな？ だけど

それでかわむーが苦しむなら——私が守ってあげる」

すつ、と腕が伸ばされ抱き寄せられる。何故か抵抗できず、静司は彼女の胸元に顔をうずめる様な形になってしまった。慌てて振り解こうとするが彼女は腕を弱め無い。

「どんなにかわむーが暴れても、私は傍に居たいな。それでね、戦いから帰ってきて、きつと無茶してるかわむーを叱って、それからおかえりなさい、って言うんだ」

抱き心地を確かめるように、胸の中の静司を擦り、彼女は心地よさそうに顔を緩めた。

「かわむーはとつても強いけど、弱い。それでも頑張ろうとする。それはかわむーにとつて大切な事。……だけどね、頑張った後に、私に『おかえりなさい』ってそう言わせて?」

「だが……今回は俺のせいで狙われた。それなのに——」
「駄目」

ぎゅ、と力が籠る。

「それでかわむーが皆から離れちゃったらきつと後悔するよ? それにおねーさん達との約束とも違うよね? 確かに私はしやるるんみたいに強くないし、おねーちゃんや会長みたいに難しい事は苦手だけど、それでもかわむーと一緒に居たいと思うよ。例え、何があっても」
それこそ姉が出来の悪い弟を諭す様に、本音はゆつくりと、丁寧に続ける。

「無茶したら叱って、良い事があつたら一緒に笑って、それで——」
いつまでも隣に居れたら——

しかしその言葉を本音は飲み込んだ。怪訝そうに静司が見上げる
が本音は「にひひ」と笑って首をふる。

「この先は内緒。今これを言うのはズルいかな」

「ズルい? どういう意味だ?」

「内緒だよ」

相変わらず本音は笑っているが、静司には何のことか分からない。それどころか、いい加減この頭を抱かれている態勢が限界だった。主に顔の横にある、面積の少ない布の柔らかさが心臓に悪い。だが意外

に強い力ががちりとホールドされ動くことが出来なかった。もちろん本気になればそうでもないが、そんな事をすれば本音が怪我をしかねないのに結局そのまま。

「とにかくね、かわむーは反省する事は良い事だけど、自分のせいだーって決めつけて居なくなったりしたら——怒ります」

「お、おおう」

一瞬だけ抱きしめる力が増し、有無を言わさぬ笑顔と雰囲気、思わず静司は頷いた。見上げる彼女の背後に木の実を振りかぶった荒ぶる小動物を見た気がしたが気のせいだ、きっと。多分。

そんな静司の反応に満足したのか本音は再びにへら、と表情を崩すと頭を撫でてくる。

「やくそくだね。そしたらこの話はおしまい。だけどこうしてるとやっぱり私はおねーちゃんだね」

「その話に戻るのか……というかそこが一番納得いかないんだが」
どちらかといえば妹だろう、と静司は反論する。要所要所で鋭い所は突いてくるが、普段は基本的にだらしない妹の面倒を見ている気分なのだが。

すると本音は『え』と言いつつ、少し考える様に口元に指を当て、「せーじおにいちちゃん？」
「げほっ!？」

思わず咽た。理由は分から無い。一瞬でも『いいかも』なんて思っていない。思っていない筈だ！

「うくん、だけどやっぱり駄目。私のおねーちゃんポジションはもう居るから、やっぱりかわむーは弟ポジションだよ」

「いやちよつと待てなんだその超理論。本音は何を目指してるんだ」
「だって、いつもかわむー無茶して、怒ったり心配したりしてるよ？
今も私の腕の中」

「いやそれは本音が離さないからで——」

と言いつつふと考え直してみる。

無茶をする↓叱られる。落ち込む↓励まされる。悩む↓親身に

なつて聞いてくれる。

(え……う？ ガチでこれ弟ポジション？ え、マジで?)

そんな馬鹿な、と思つてもよく考えれば考える程、無茶する悪ガキを窘める姉の凶が浮かんでしまう。

「なんて事だ……！」

「かわむー？ そこまで本気でショック受けてると私もちよつと色々考えるよ?」

咎めるような言葉だがその顔は笑っている。最初は唸っていた静司だが、次第にそれにつられて意味もなく笑ってしまう。

ひとしき互いに笑い合い、そして自然と緩やかにそれも収まる、残されたのは波の音。

「それでかわむーは、どうしたいかな?」

どうするの? とはもう聞かない。そんな言葉に静司はもう一度考える。

復讐心は否定されなかった。彼女は唯大丈夫と、傍に居てくれると言つてくれただけ。

もしまた同じような事態が起きた時、止められるかは分からない。だが、だがだ。彼女はそれでも傍に居て、そして自分の帰りを待つてくれると言つてくれた。こんな自分を守つてくれると。ならば、ならばその言葉を糧に、誓いに、そして枷として自分を制御することが出来るだろうか。いや、しなくてはならない。戦う力は遥かに低い、こんな小さな少女にここまで言わせて、それで逃げるなんて、出来る訳が無い。

彼女は自分の事を強くて弱いと言つた。その通りだと思う。そして静司は思う。本音もまた、弱くて、強い。これまでに何度もその言葉に、想いに救われた。そうだ、自分はこの場所へ帰りたいと、そう思つたからこそ最後まで諦めなかったのだから。きっと自分は、彼女が思っている以上に、助けられている。

ならば、ならばだ。もし再び彼女達が狙われるなら、今度こそ守ろう。このかけがいの無い、自分を守つてくれる彼女を自分も必ず守る。その想いを胸に抱いて、空を飛ぶ。

復讐心は捨てない。だが、この想いもやはり自分の力の源として。
「本音、ちよつと離してくれ」

一言、告げる。静司の言葉に何かを感じ取ったのか本音は腕を離してくれた。静司は起きあがるとポケットからあるものを取り出す。それはキツネの形の耳飾り。福音と戦いに行く前に借りた、自分の目的を見失わない様にする物。それを差し出す。

「今回はこれのお蔭で俺は正気を保てたのかもしれない。けどもう、それじゃあ駄目なんだ。復讐は捨てない。怒りも消え無い。けど今度こそ、本音や、皆の事を忘れたりほしくない」

すつ、と差し出す。これは誓い。自分の言葉を証明する為に必要な事。

本音は少しそれを見つめた後、うん、と頷くと答えた。

「かわむーに付けてもらつていい？」

「今か？ だけど血で汚れて……つてかスマン！ 今度新しいのを用意する！」

髪飾りは血でべつたりと汚れている。勝手に借りて置いてこれはないだろう。だが本音は首を振る。

「いいよ。だからお願い」

一瞬悩んだが、本音も立ち上がり『早く、早く』と頭を振ってくるので静司も諦めて彼女の髪に手を添えた。正直、髪飾りの付け方なんてよくわからない。なので真剣に普段の本音を思い出し、出来るだけそのイメージ通りに、左右の内片方の髪飾りを付けようとする。

「ん……」

本音が小さく声を漏らす。それ以外は無言。その為か、何故かこれがとても神聖な儀式の様に錯覚した。いや、これは自分の誓いなのだからあながち間違っていないのかもしれない。

やがて何とか髪飾りを付ける事に成功し、静司は一息つく。本音は2、3度首を振った後、

「お〜け〜」と笑い、くるりとその場でぴよん、と飛び跳ねた。流石にこんな時にどう答えるべきかわからない静司では無い。

「付け方は別として、似合ってるよ」

「うひひ、ありがとう」

わーい、と嬉しそうにする本音の姿は、月の光に照らされてどこか幻想的に見えた。さが不意にその口からくしゅん、とくしやみが漏れる。

「大分外に居たからな。そろそろ戻ろうか」

静司ももう逃げ続けるつもりは無い。大人しく夕飯にありつくでしょう、と思ったのだがその手が引かれた。そのまま引かれるままに再び流木の上に座らされる。何事か、と思ったがその肩に本音が頭を乗せて来たので思わず硬直した。

「あつたかいね」

「？ 寒いのなら中に――」

「もうちよつと、もうちよつとこのまま」

どうしたものか、と悩む。しかし頬を緩ませ気持ちよさそうな顔を見てしまうと止めるのも憚られた。それに自分もどこかで、この心地いい空間を続けたいと思う。

「もう少し、だけな」

「は〜い」

夜の浜辺に打ち寄せる波の音を聞きながら、二人は満点の夜空を眺めながら暫く寄り添っていた。

『もう、あそこで押し倒さないとは初心ねえ』

『相変わらず身も蓋もないっすね、C5……じゃなくてB2』

『私にもあんな青春時代があったのよね〜』

「チエーン振り回して原付乗ってヨーヨーをガキ大将に投げつけてるイメージしかないっす」

『失礼ね。あんな奴、武器を使わなくても蹴りだけで十分だったわ。ところでC1は？』

「ナチュラルに学生時代の戦闘能力を披露した上に自然に流さないで欲しいっす。あとC1なら『殴る壁探してくる』って言ってどこかに

消えたっす」

『……奥さんには？』

「メール済。ついさつき『見夫必殺』って返信が。これなんて読むんですかね？」

『“愛は正義”よ。覚えておきなさい』

「ストーリーには聞かせたくないっすねえ……」

そんな会話があったとか。

40. 敵性存在

波の音が響く月明かりの浜辺を鈴は独り歩いていた。周囲には誰もおらず、彼女はぼんやりと空を見上げつつ声を漏らす。

「あーあ」

意味も無く漏れた声に混ざるのは呆れや後悔。そして若干の気恥しき。その頬は少し赤い。その原因は先程見た友人達の姿のせいだ。

「いちやちやしちやって……周りの事を考えなさいよ」

鈴が見たのは静司と本音の姿だ。何を話しているのかは分からなかったが、お互いの距離が短く、更には本音が静司を抱き込み始めた辺りで鈴は恥ずかしくなりその場を後にした。

そもそも鈴が外に出たのも花月荘での空気に耐えられなかったというのがある。昼に一夏と喧嘩をして以来、お互いに微妙な距離感となってしまった。話しかけたいとは思うが、何を話せばいいのか分からない。それにまた昼の様な事になってしまおうと思うと踏み出せない。そんな鈴を氣遣つてか、友人たちはことさらに明るく話しかけてくれていたが、そんな自分が惨めで抜け出してきたのだ。

彼女達は励まそうとしてくれたのだ。別に怒ってはいない。ただ一人の時間が欲しかった。泳ぎでもすれば気晴らしになるかと思いつつ着替えて浜に出た所で静司達を見かけたのだ。

遠目にしか見えなかったが、二人の間には確かな信頼があったと思う。そうして寄り添う姿を思い出しぽつりとつぶやく。

「いいなあ……」

自分も一夏と——そこまで考えた所でふと自分の胸に眼を落とす。続いて本音の姿を思い出し、くつ、と歯噛みした。

——胸囲の格差社会——

「うつさいー」

ふと以前聞いたフレーズを思い出し、思わず足元の砂を蹴り上げる。無い物は無い。そんな事は分かっているも納得できるかとは別問題だ。

思いのほかうまく具合に蹴り上げられた砂が夜の浜辺に舞う。何

となくそれに気をよくして鈴は何度も何度も砂を蹴り上げた。その度にここ最近の様々な不満やストレスを叫びながら、蹴り上げ続けた。

「いい加減、気づきなさいよ馬鹿！」

一夏に対しての怒り。

「負けるもんかつ、このっ！」

恋敵と戦う為の気合い。そして、

「思い通りに……行くと思うなあ！」

一際力を入れて蹴り上げたのは今回の事件に対する怒り。大切な人を。仲間を。友人を危機に晒した事件。その黒幕と思われる人物に対する怒りだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

ひとしきり怒りをぶつけ終え、肩を震わせる。完全とは言わないが、多少は気が晴れた。後はこの熱くなった体を冷やす為にもひと泳ぎでもしようか。そんな事を考えていると不意に声がかかった。

「何やってんだ鈴？」

「っ！」

思わず肩が跳ねる。振り向けば困惑と呆れが混じった顔の一夏の姿があつた。彼も着替えており、水着の上に今はパーカーを羽織っている。

「な、なんでも無いわよ！ アンタこそ一体こんな所で何してんの！」

先ほどの姿を見られた恥ずかしさ。そして昼の出来事からの気まぐさが混じり混ざって思わず怒鳴ってしまう。

「何って探しに来たんだよ」

「だ、誰をよ!？」

「いやだから鈴を」

「……………え？」

思いがけない言葉に思わずきよとん、としてしまう。続いて顔が熱くなり、それを隠す様に後ろを向いて蹲る。

(ど、ど、ど、どういう事!?! 何が起きてるのよ!?! っていうか私顔赤くなり過ぎよね? 絶対なってるわよね!?!)

「おい鈴、大丈夫か？」

「だ、だ、大丈夫だから顔を覗き込むな！」

「いやだけど」

「ちよつと彼方からマツハで飛んできた砂と小石とハマグリと飛魚が目に入ったただだからちよつと待つてなさい！ いい、絶対よ!？」

「いやそれ死ぬだろ普通」

信じた訳では無いだろうが、鈴の剣幕に思わず一夏は頷いた。そしてゆつくりと鈴の復活を待つ。鈴は鈴で胸に手を当てすーはーと深呼吸をして落ち着かせるとゆつくりと振り向いた。

「け、けど何で私を探してたのよ。それによくここがわかったわね」

「ああ、場所はラウラに聞いた」

「ラウラに？」

思わぬ人物の名前に鈴が驚きの声を上げる。

「ああ。鈴を探し出したら待ち構えてたみたいに腕組みしてて、ここに居るってさ。なんかあの時のラウラ千冬姉に雰囲気似てたな」

一夏も思い出しか首を捻っている。それは鈴も同様だ。居場所が自分がここに向かう所を見ていたという事で説明が付く。だが恋敵の手助けの様な行動には疑問が残る。

「それで……なんで私を探してたのよ」

一先ずラウラに対する疑問は置いておき、一夏に問いかける。昼の喧嘩以降、お互いに気まずさから距離が離れていたのに何故今になつて？ その疑問に一夏は頷くと、気合いを入れる様に顔を引き締め、そして頭を下げた。

「鈴、悪かった！」

「ちよ、いきなり何よ!？」

突然の一夏の行動に鈴は慌ててしまう。だが一夏は顔を上げることなく続ける。

「昼に、鈴の話をちゃんと聞こうと——考えようとしなかったこと。それに乱暴してしまった事だ。本当にすまなかった！」

「乱暴って大げさな……」

確かに勢いよく手を弾かれたりはしたが、大したダメージは無かつ

た。とは言っても精神的にはかなり来たのは確かだが。

「許してくれとは言わない。だから俺の事は好きにしてくれて構わない。だがその前にどうしても謝りたかったんだ」

「好きにしているよ」

一瞬鈴の脳裏に一夏を好きに扱おう自分の姿が浮かぶ。肩を揉ませ、料理を作らせ、風呂を入れさせ、そして一緒に――

(な、な、何を考えてるのよ私は!?)

頭を抱えぶんぶん邪な妄想を吹き飛ばす。一夏は頭を下げ続けているので鈴のそんな姿には気づかなかつた。そんな一夏の様子に鈴は冷静さを取り戻すと、呆れた様のため息を付いた。

「とりあえず頭を上げてよ。こんな状態じゃ話もできないわ」

「だけど……」

「いいから上げる!」

一夏は躊躇うが、鈴としては頭を下げられたまま話せと言われても出来る訳が無い。妙な気分になってしまう。そうしてようやく一夏が顔を上げた所で、二人は改めて向かい合う。

「昼間の事は……私も悪かったわよ。ちよつと言い過ぎたわ。アンタにとつて千冬さんはとても大事な存在なのに、好き放題言つて悪かったわ」

とても大事な人。恐らくその場所はそう簡単には崩れないだろう。一夏にとつて、自らを育ててくれた千冬という存在は絶対に近いのだ。それが悪い事とは思わない。

だが、

「けど、言ったことそのものは訂正しないわ。あれは私の本心よ」

「……ああ」

一夏とて完全に納得しているとは思えない。だが静かに頷いた。ならば今の内に、今度こそ冷静に、言いたかつた事を言うべきだろう。「私だって千冬さんを信用していない訳じゃないわ。だけど、だからと言つて常に100%正しいなんて事はありえないのよ」

ふと思ひ出すのは自らの両親の事。幼い頃は絶対の信頼を持つていた。父と母と自分。三人でいつまでも楽しく、幸せに生きていける

と、信じて疑ってはいなかった。だがそれは所詮子供の幻想だったのか。両親は離婚し、自分は今一人日本に居る。日本に来たのは自分の意志でもあるから不満は無い。しかし両親の中が健在なら、もしかしたら未来は変わったのかと、時たま思う。

「絶対だと思っていたものでも崩れた時、その信頼はね、楔になるのよ。消して抜けない、いつまでも痛みを伴う楔に」

「鈴……？」

「だから、覚えておきなさい！ 大切な人を信じるのはいい。だけどそれに頼り過ぎるなって事を」

一通り言い終えた鈴が息を付き、二人の間に沈黙は落ちる。自分の言葉は通じただろうか？ 鈴は不安に思いつつも一夏の反応を待つ。当の一夏は何かを考えている様に、目を瞑っていたが、やがてそれをゆっくりと開いた。

「鈴が言いたいことは、何となくわかる。けど……それでもやっぱり俺は千冬姉を疑うのは——」

「別に疑えって言ってんじゃないわよ。ただ妄信するな、って事。一夏にとって千冬さんは姉として絶対な存在なのかもしれないけど、千冬さん自体は全能なの？」

「……そうだな。確かにそれならわかりやすいかもしれない。千冬姉は片付けが出来ないし料理も雑だし裁縫も碌に出来ないしビール飲んでる姿は時たまオヤジくさいもんな」

「そ、そうなの……？」

どこか遠い眼で空を見上げる一夏と、聞きたくない千冬の一面を聞いてしまい脂汗を流す鈴。勢いで聞いては見たが、これは本人がここに居たら殺されるのではないだろうか？

「そうなんだ。確かに千冬姉だつてなんでもできる訳じゃないし、なんでも知ってるわけじゃない。そんな事、当たり前なのに俺は千冬姉に頼りっぱなしで、悔しいな」

「家族なんだから頼ってもいいじゃない。ただ自分で決めるべきところは自分で決める。そういう事でしょ？」

「まったくだ。……ああ、本当に」

一夏も苦笑して頷く。しかし直ぐに顔を引き締めると、鈴に向き直る。

「鈴。今から言う事は、きつと昼間心の中で閉じていた、俺の意見だ」
一度目を瞑り、そして開く。

「無人機なんて物を作れる人なんて、俺は東さんしか思い浮かばない。
だから今回の件は、東さんの可能性が高いと思う」

「だけど、と続ける。」

「暴走までは正直分らない。確かに無人機と一緒に居たけど、あの状況を狙ってやって来た奴が居ないとも限らない」

「そう……。そうね、確かにそれも十分にあり得るわ。結局は私たちは何も分からないのよ。だから分からないなりに考えるしかない」

結局答えは分からない。だが、今の話は犯人を見つける事では無い。自分で考え、選ぶという事だ。だから鈴はこれ以上は何も言わない。一夏もその先は続けようとはしなかった。

しばらく二人は無言で海を眺める。この状態が先程の静司と本音の姿と被り、その光景を思い出し鈴の顔が紅くなっていく。そしてちらり、と隣に一夏に視線を移しながら更に赤面してしまう。

「も、も、もしかして、今この雰囲気ってチャンス!? と、言う事は私達も——」

抱き寄せる? いや、ダメだ。自分と本音の胸部を考えそれを速攻で却下。じゃあ抱きしめてみるか? いやいやいやいや! いきなり過ぎだろう。流星にそれはちよつとアレだ。アレなのだ! では手を繋ぐのはどうか。うん、これは良い。それほど不自然じゃない(多分) し今の雰囲気なら行けそうだ。昼に飛びついては肩車をさせたりもしたが、あれとこれば別だ。今このときに手を繋ぐことに意味がある!

よし、と気合を入れ一夏と視線を合わせようと振り向くと、既に一夏はこちらを見つめていた。

「鈴、実は話したいことがあるんだ」

「えっ!?!」

思わぬ先制攻撃に鈴の思考は一気に吹き飛んだ。何時になく真面

目な顔をした一夏の顔に、心臓が一気に跳ね上がる。

(ま、まさか一夏から？ あの一夏から!?)

一夏の視線に捕らわれた鈴はもはや動けない。完全に硬直した鈴に一夏が一步、近づく。その動作にもはや鈴の心臓は破裂寸前と言わんばかりに激しく鼓動する。そして更に少し距離が近づき、肩に手が置かれた。びくん、と鈴は肩を震わせ、潤んだ瞳で一夏を見つめる。一夏はこくり、と頷きそして、

「実はさ、箒が一昨日誕生日だったんだよ」

「……………は？」

「けどあんな事があって、まともな祝えなかっただろ？ 一応プレゼントは渡したんだけどさ、やっぱりお祝いもしたいなって」

急速に熱が冷めていく。鈴の瞳が潤んだ乙女の光から、怒りを宿した鬼の瞳に変化していく。それに気づいていないのか、一夏は普段からは想像できないようなハイテンションで話していた。

「あの画像のせいで箒も気にしてるだろうからさ、ここは皆で盛大に明るく……鈴？」

ようやく一夏も鈴の変化に気づいた様だが、もう遅い。

「アンタって……アンタってアンタってアンタってなんでえ……!」

「お、おい鈴？ 何を」

「知るか馬鹿あああああああああああああ！」

夜の浜辺に甲龍の衝撃砲が打ちこまれ、爆音が響く。その砂煙を切り抜けて一夏は全力でその場から走り出した。そしてその後ろを衝撃砲を部分展開した鈴が追いかける。

「ちよつと待て鈴!？ それは洒落にならない！」

「うっさい馬鹿！ 逃げるなああああああ！」

「うおおおう!？」

逃げる一夏と追う鈴。IS学園でよく見られる光景がそこにあつた。そしていつも通り過ぎて、鈴は気づけなかったのだ。一夏の顔が、鈴の肩に触れた後からやけに赤かった事に。そしてそれを誤魔化す為に、言葉をまくし立てていた事に。

そしてそんな音に気づいて静司や本音も様子を見に来たのだが、

「……何やってんだアイツら」

「わー、りんりん元気だね〜」

「つていうか部分展開つて洒落にならん上に色々不味いだろ。俺が言うのもおかしいが」

「けど威力は絞つて怪我はさせない様にしてるから大丈夫だね〜」

「ああ成程。……………いやそれでも駄目だろう」

何とも言えない感想だった。

「紅椿の稼働率、想定以下。あの馬鹿ISは逃亡。ゴーレムも全部破壊……………」

岬の策に腰かけた束が静かに声を漏らす。その声には棘があり、時たま苛立ち気に爪を噛んでいる。

「おかしいなあ。何なんだろうね、あの馬鹿IS」

何もかもあのISのせいだ。あれが出てから自分の思惑を悉く邪魔してくる。妹のデビュー戦を邪魔し、一夏の手柄奪い、あまつさえこの自分を各国に追わせるなんて事をしてきた。

あの自分と無人機の画像。出所は探っているが、相手も細心の注意を払ったのかまだ犯人に行きついてはいない。だがあの黒いISが関連しているのは確かだろう。そうでなければタイミングが良すぎる。あれさえなければ、逃亡する黒いISを補足できたかもしれないのに。

ちらり、と無人機——ゴーレムの情報を開く。無人で動くIS。元々これには対して期待していない。ISは人が乗って、初めてその真価を発揮するにだから。だがこのゴーレムも並大抵の相手なら圧倒するだけの力はある筈だった。

足りない。

あの忌まわしい黒いIS。それを倒すにはこれでは駄目だ。その為の機体と舞台を用意しなければならぬ。そう、今までののは所詮量産型。ならばあの黒いISに特化した機体を用意すればいい。それが出来ない自分では無い。

「ふふ、そうだよね？　ちーちゃん」

「気づいていたか」

ゆつくりと束に近づいてきたのは千冬だ。彼女は何時もと同じ漆黒のスーツ姿であり、その姿は威厳に満ちている。

「こんな所で呑気な物だな、御尋ね者」

「あんな連中に捕まる私じゃないよ。それにここだって普通なら見つけられない様にしたのに、やっぱりちーちゃんはすごいなあ」

「お前の行動パターンを読んだだけだ」

「そこはお見通しだ、って言ってくれた方がフレンドリーでいいよねー」

先ほどまでの不機嫌さから一転、千冬が来てからの束は上機嫌で続ける。

「そういえば白式には驚いたよね。まさか操縦者の生体再生機能なんてあるなんて。まるで——」

「白騎士の様、か？　お前は知っていたんだろう？　その機能はある事を」

「ふふ、なんえそう思うのかな？」

「簡単な話だ。『白騎士』と『白式』。『白式』側の読み方を変えれば自ずと答えは出てくる」

「ぴんぽーん。流石ちーちゃんは詳しいねえ」

「かつて乗った機体だ。分からん筈が無い」

『白騎士事件』その主役であった二人からすれば分からない筈が無い。

「だけど、白式が《零落白夜》を発現したのは素直に驚きかな？　かつてのちーちゃんのもう一つのIS。暮桜と同じワンオフ・アビリティーだもんね。まあその辺はコア・ネットワークを介して勝手に進化したのかもねえ」

面白いなあと頷く束だが、千冬の顔は硬い。束もそれに気づいている筈なのに、何事も無いかのように進めている。

「いやー世の中思いのほか不思議な事が多いねえ。白式の進化とか……邪魔ばかりする馬鹿ISの存在とか」

束の声のトーンが落ちる。先ほどまでの陽気さは消え、そこにあるのは憎悪。千冬は友人のこんな姿は見たことなかった為、思わず眉を顰めた。

「ねえちーちゃんは知らない？ あの黒いI Sの事？」

「……知らん。こちらが教えて欲しいくらいだ」

これは事実だ。疑っていた人物は居たが、その人物が花月荘にいてもあの黒いI Sは現れていた。無論、入れ替わりなども考えたがそうなるかと養護教諭などもグルになっていきどんどん話が大きくなっていつてしまう。そう考えると、別の人物の可能性の方が高いように思えたのだ。

「そっかあ、残念だね。うん、本当に残念だ」

「束、お前は何を考えている？」

「ん？」

不思議そうに束が振り返る。その顔に浮かぶのは無邪気なまでの、悪意。

「ふふ、ちーちゃんもわかってるでしょ？」

「さてな。だがこれだけは言っておく。私の生徒にこれ以上手をかけるような者が居れば、私は容赦しない」

「ちーちゃんを怒らせると怖いもんね。一体誰かな、怒らせるような人は」

「束……」

眼を陰しくさせる千冬と、静かに笑う束。その二人の間を風が駆ける。揺れる髪に手を添える束を見つめながら千冬は悩んだ。ここでこの友人を捕まえるべきだろうか。止めるべきなのだろうか。しかしどれだけ性格が破綻していても、束が大切な友人である事は千冬にとって事実。それが躊躇いを生む。

そんな千冬に束は静かに問うた。

「ねえちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこだ」

「そっか。だけど私は——」

びゅう、と突然大きな風が吹く。砂が目に入り、千冬が思わず擦つ

たその間に束の姿は消えていた。後に残ったのはまだ温かさの残る手摺だけ。千冬はため息を付くと、その手摺に手を添え彼方の海に視線を向ける。

「だけど、か……」

その眩きには誰も答えなかった。

翌日。臨海学校も最終日となり、朝から片付けやらなんやらに追われ続け、ようやく帰りのバス乗り場へと行き着いた一夏は瀕死だった。昨日は結局鈴に追い掛け回され、それが原因で旅館から抜け出したことが千冬にバレてしまい説教開始。鈴と二人並んで受けていたものだから、今度は箒達が外で何をしていたのかと追及してくる始末。結局碌に寝れないままの朝の重労働だったのだ。

「生きろ、一夏」

ぱたぱたと団扇で一夏を仰ぐのは静司。その左腕は未だ吊るされている。静司は怪我人と言う事もあり、朝の片づけも比較的楽な仕事が回ってきたため一夏の様にはなっていない。

「サンキュー静司……ってそうだ！　鈴に聞いたぞ、お前も昨日抜け出し——」

「ああ、一夏喉が渴いただろう。たんと飲むがいい。良く温まったお汁粉サイダーだ」

「ぐほっ!？」

余計な事を言いかけた一夏を静司は持っていた謎飲料を口に押し込み黙らせる。因みに静司と本音は一夏達のどさくさに紛れてこっそり宿への帰還を成功していた。

謎飲料の味に悶絶する一夏だが、彼を助ける人物は居ない。箒やセシリアは昨夜一夏と鈴が抜け出したことが立腹らしく、朝から一夏と話していない。鈴も昨日から怒り心頭だ。ラウラは何やらずっと考え事をしており、一人腕を組み目を閉じている。本音やシャルロットもバスへ自分の荷物の積み込みに行っているのでここには居なかった。

「はい。皆さん荷物は積みこみましたねー？ それではバスに乗ってくださーい」

真耶の号令で生徒達がそれぞれ動き始める。静司もバスに乗るべく未だ悶絶している一夏を引っ張って行こうとしたところで、こちらに近づく見慣れない人物に気づいた。

静司の視線に気づいたその人物は軽く手を上げると声をかけてきた。

(ナターシャ・ファイルス？ 福音の搭乗者が何故ここに？)

彼女の情報は静司も受け取っている。確か福音回収後は意識を失っていたと聞いたが。

「こんにちは。彼が織斑一夏君？」

「ええ、そうですよ」

多少警戒しつつ答えるが、彼女はそんな事を気にしていない様だった。そして静司を見て笑う。

「じゃあ君が川村静司君ね」

「そうですけど、一体なんででしょうか？」

箒や鈴達。荷物を預け終えた本音達も何事か、と怪訝そうにこちらを見つめている。ナターシャはそんな彼女達にも視線を向けると、一人一人名前を確認していった。

「え、えっと、結局どなたなんですの？」

「ふふ、ごめんなさい。私はナターシャ・ファイルス。銀の福音の搭乗者よ」

その答えに静司以外の全員が驚く。その様子にナターシャはくすり、と笑うと優しい顔から一変。真面目な顔になると頭を下げた。

「ありがとう。そしてごめんなさいね」

「え？ えっと何が……」

「お礼はあの子の暴走を止めようとしてくれた事。謝罪は私と私の仲間達の I S の暴走で迷惑をかけた事よ」

前半は一夏や鈴達に。後半は静司の腕の怪我に視線を向けながらナターシャは謝罪を告げる。それに慌てたのは一夏達だ。

「いや、俺達だって結局何も」

「そんなことないわ。あなた達は頑張ってくれた。それだけで十分よ」

そう微笑むと一夏と静司の頭を優しく撫でる。慌てつつ顔を赤くする一夏と静司。そしてそれを見た背後の女性陣の眼つきが鋭くなると、ナターシャは「あらあら」と笑いその手を退けた。そして静司に視線を移すと、静司もぺこり、とお辞儀を返した。

「ふふ。また縁が有ったら会いましょう」

最後にもう一度、微笑むとナターシャは手を振って静司達から離れていった。後に残された一夏達はしばし呆然としていたが、一夏が触れられた頭を触りつつぼやく。

「モデルみたいに綺麗な人だったな……」

「確かに。大人の余裕の様なものが……はっ!？」

がしり、と一夏と静司の肩に細い指が食い込んだ。

「ふふふ、随分とデレデレと。金髪の淑女ならここに居ますわよ?」

「静司は金髪が好きなのかな? 嬉しいなあ?」

「くくくく、斬る」

「私は何時でもよゆうしやくしやく」

「私も余裕よ? 熱く燃えたぎる程に」

後ろを振り向きたくない。しかしバスの乗車は進んでおり、逃げ道はもはや無い。一夏と静司は覚悟を決め、壊れた機械の様な緩慢さで振り向くのだった。

一夏や静司達から離れたナターシャは目的の人物を見つけるとそちらに向かう。

「こんにちは、ブリュンヒルデ」

「久しいな」

その人物とは千冬だ。ナターシャは千冬の横に並ぶと、何やら騒がしい一夏達へ視線を向け優しげに眼を細める。

「元気な子達ね」

「元気すぎて困っている位だ。そっちはもう動いて大丈夫なのか?」

「問題ないわ。元々私はあの子に守られていましたから」

あの子。それは暴走したIS、銀の福音の事だ。

「あの子は必死に私を助けようとしてくれた。けどそれも叶わずに強制的に暴走させられ、強引なセカンドシフトまで行った。あの子の意識は喰われ、そして消滅した」

ナターシャの雰囲気鋭さを纏う。そこにあるのは確かな怒り。

「私は許さないわ。あの子を。それに私の仲間たちのISをあんな目に合わせたその元凶を」

「お前達にもあの画像は届いていたか」

「そうね。どこの誰かは知らないけど感謝するわ。それにあの黒いISの搭乗者にも。お礼が言いたいけど正体不明ですからね。貴方は知りませんか？」

「こちらが聞きたいくらいだ」

そうですか、と残念そうに呟くとナターシャは用は済んだとばかりに身を翻す。その背中に千冬が声をかける。

「あまり無茶はするなよ」

「ご忠告ありがとうございます。ブリュンヒルデ。ですが、私は止まれそうにない」

そう言い残すとナターシャは去って行った。

都内某所。高級マンションの最上階。フロア一つを丸ごと部屋としたそのリビングルームにカテーナとシェーリは居た。

「以上で報告は終わり。さて、感想は？」

「なかなか興味深いわね。それに貴方の推測が正しければ色々面倒ね」

カテーナの問いに答えたのは若く美しい女だ。薄い金髪は光に照らされ、きらきらと輝いて見える。すらりと伸びた体軀はまるでモデルの様であり、その容貌も同じく。そんな彼女は投影型スクリーンに浮かぶ情報を眺めつつ、薄く微笑んだ。

「IS適性はコアの気まぐれ。篠ノ之博士はISを任意に停止、暴走させることが可能。無人機の存在。そして謎の黒いIS。色々ど厄介ね」

「その割には楽しそうねえ、スコール」

「あなたほどでは無いわよ。えっと、今はカテーナだったかしら？」

「それでもいいし、前回のエイプリルでも構わないのよねえ」

「ちっ、コロコロ変えてるんじゃないやねえ。エイプリルのままでいいだろ」
そう毒づいたのはふわりとした長髪の女性だ。スーツを着ており、ビジネスウーマン、と言った姿だが、その目つきは鋭く、カテーナを射抜く様である。他にもこの部屋にはあと一人、壁に背を預け腕を組む少女の姿がある。

「いいじゃないオータム。春の天気は移り気なのよねえ。それに所詮コードネームでしょ？ だったら偽名くらい幾つ持っても良い物よ」
「屁理屈コネやがって」

「文句があるなら相手になりますよ」

そういつてオータムを睨み返すのはシェーリ。二人は一触即発といった所だが、それを遮ったのはスコールだ。

「やめなさい。今はこちらの話が先よ」

その言葉にオータムはしゅん、とした様に引き下がり、シェーリもまた一礼し下がった。

「さて、それで私が楽しい理由は、貴方が楽しそうだからよカテーナ。その様子だと対策はあるんでしょう？」

「ご名答。とは言っても今のところは篠ノ之博士対策なんだけどねえ」

「件の黒いISは？」

「これは単純に戦い方の問題です。あの黒いISが学園の生徒を護っているのは確実でしょう。そしてあのISはシールドを持っていません。そこを突けば」

答えたのはシェーリ。実際の戦った事のある彼女が説明をするが、オータムが嘲笑する。

「負けた癖によく言うぜ」

「……いいでしょう。殺してあげます、今すぐに」

再び二人が睨みあう。その様子にスコールとカテーナはため息を付いた。

「やめなさいと言ったでしょう二人とも。この話題は荒れるから後で良いわ。それでその篠ノ之博士対策というのは？」

スコールの問いにカテーナは笑みを深くした。そして腕をゆつくりと横に伸ばす。掌を上に向けたそれはまるで誰かをエスコートするかの様であり、オータムが眉を顰め、スコールは面白そうに先を待つ。

やがてカテーナの腕の先に光の粒子が舞う。それは量子化していたISが呼び出された時と同じ現象。やがて光はカテーナより一回り大きな人型へと姿を変える。

「これが篠ノ之博士への切り札となる、私たちの新しい仲間。フレームは急ごしらえだけど、今回は紹介だから用意してみたの」

現れたのはIS。但し、その搭乗席には誰も居ない。

「無人機。彼女が世界を変える切り札よ」

部屋での報告を終え、自らの研究室に戻るべくマンシヨンの廊下を歩くカテーナとシェーリ。その背中に声がかかった。

「おい」

「ん？ あら、エム。珍しいわね。貴方が私に用なんて」

声をかけてきたのはあの部屋に居た最後の一人。エムと呼ばれる黒髪の少女だ。

「一つ聞きたい。あの黒いISの中身は本当に知らないのか？」

「……ええ。ごめんなさいね」

カテーナは静司の事を報告していない。理由は単純。教えてしまうと次の作戦時にオータムがシェーリへの当てつけに行動しかねないからだ。シェーリは自ら決着をつける事を望んでいる。

「そうか。ならばいい」

それだけを訊くとエムは踵を返す。しかしカテーナは何故エムが

そんな事を聞くのかが不思議だった。

「何か気になる事があるのかしら？」

「お前達には関係ない」

言い捨てるのとエムは今度こそその場から立ち去っていく。その胸中にあるのは映像で見た黒いISの姿。

(似ている。Vプロジェクトの研究所にあつた物と)

自らの疑問を表に出さず、無表情で居るその姿は織斑千冬。そしてかつてとある研究所でCBシリーズと呼ばれた女性達と瓜二つであつた。

4 1. 秘密と暴走

川村静司は特殊である。

正体を隠していた世界初の男性操縦者。某企業の特特殊部隊の一人。違法な施設での訓練と実験を受けた経歴。そして、もう一人の男性操縦者を護る為にIS学園に潜入中。通常の高校生と比べれば天と地との差がある。

だが彼とて人間だ。疲れもするし、怪我もする。当然それらが溜まったまま放置していればそのしわ寄せはやってくる。

「うーん、これは完全に風邪ね」

IS学園の寮の一室。養護教諭の丸川は一通りの検査を終えそう断言した。

「風邪……?」

呻くように答えたのは川村静司。ベットに横たわっている彼の顔は赤く、息も少々荒い。

「まあ無理も無いわ。あれだけの事をして、何も無い方がおかしいもの。幸い今日明日は休みだからゆっくりしてなさい。薬は出しておくから」

その後、幾つか指示や注意点を静司に話すが、当の静司は目が虚ろでありまともには聞いていない。その様子を確認すると、丸川は隣にいた静司のルームメイト、つまりは一夏に顔を向けた。

「彼がこんな状態だから織斑君にも説明しとくわね。疲労からくる一時的な物だと思うから、そうそう移る事は無いと思うけど気を付けてね」

「わかりました。ありがとうございます」

一夏に説明をし、薬を渡すと丸川は『何かあったら呼んでね』と告げて去って行った。それを見送ると一夏は寝込んでいる静司に視線を向け、

「よし、やるか」

まずは御粥を作り始めるのだった。

「風邪？ B9がか？」

『ええ。結構な熱だとか』

K・アドヴァンス社本社。その裏の部分。EXISTの通信室で課長は今しがた聞いた聞いた報告に眉を顰めた。

「そんなにキツそうなのか？」

『丸川女史の話ですと、疲労からくるものらしいです。しばらく安静にしていれば回復するだろうと』

「疲労か。まあ無理もない」

臨海学校での事を思い出し課長はため息を付く。暴走した銀の福音と無人機達と死闘を繰り広げ、半殺しにされた拳句にその後は海中を使つてのアメリカ軍からの逃亡劇。肉体のダメージは黒翼がある程度は回復させていたが完璧では無い。溜まりにたまった疲労やその他諸々が、IS学園に戻つて気が緩んだ途端に爆発したのだろう。

幸い今日は土曜。つまり今日明日は学園は休みであり、更には学園の防衛はB2が引き続き対応可能だ。

「丁度いい機会だ。この二日間はゆっくりと休ませよう。織斑一夏はどうしている？」

『学園です。B9を看病してくれる様ですよ』

「それは助かる。彼に出かけられると色々面倒だからな。ならば対IS戦力はB2をそのまま残して対応。残りはいつも通りに」

『了解』

通信を切り課長は腕を組み考える。部下にして息子が病気。是非とも自分が看病したいが、流石に学園内までには中々入り込めない。ならば見舞いの品だけでも送っておこう。

そう決めると近くに居た女性オペレーターに笑顔で命令した。

「B9にお見舞いの品を用意する。至急工口本を用意したまえ」

「セクハラで訴えますよ？」

IS学園は休日と言っても自主訓練は可能だ。アリーナも許可さ

え取れば使用できる。一夏達も普段、特に用事が無い時は申請している。だが学園に通うのは年頃の子供達。訓練も大事だが、やはり休日は楽しみたい気持ちも多い。そして今日の鈴もそっち側だった。

(アリーナの申請は順番待ちが酷いし、今日は一夏を誘って外に出ましよう。うん、決めた！)

決めるが否や鈴は寮の廊下を進む。臨海学校では最後はいつも通りになってしまったが、あわよくば二人きりで出かけて――、と理想を思い浮かべながら、軽い足取りで一夏達の部屋に向かうが、角を曲がったところで目の前にその一夏が現れた。

「おう、鈴」

「一夏！ いい所に」

居たわね、と続けようとしてふと一夏が手に持っている者に気づく。ビニール袋の中には様々な食材が入っていた。

「何それ？ 料理でもすんの？」

「ああ。静司が風邪ひいてな。栄養の有る物を作ろうかと」

「風邪？ 静司が？」

思わぬ報告に眼を見開く。何となくあの顔つきの悪い同級生が風邪で弱ってる姿なんて想像できなかった。

「疲労だつてさ。幸い今日明日は休みだから看病できる。やっぱ病気の時つて一人じゃ心細いだろ？」

「まあ、そうね」

しかし今の一夏の様子を見ると一緒に出掛けるのは無理そうだ。それは残念だが、まさか病気の静司を置いて出かけようなんて言える訳が無い。鈴は当初の目的を諦めると、はあ、とため息を付いた。

「どうした鈴？」

「なんでもないわ。後で私も何か体に良さそうな物持っていくわよ」

「おう、助かる」

じゃあな、と立ち去る一夏の背中を見送りつつ鈴は何を持っていくか考えるのだった。

「よし、できたぞ静司」

「ああ、悪い……」

フラフラと身を起こす静司に一夏が作った粥が差し出される。蓮華でそれを救おうと静司は手を伸ばすが、その度に体の節々が痛み、その動きはぎこちない。

「食べさせてやろうか？」

「……流石に、男にそれを、やられるのは、な」

と言いつつも、目の焦点もあっておらず相変わらずぎこちない静司に一夏は苦笑すると蓮華を静司から奪い、粥をよそう。

「病気の時はそういう事を気にするなって。ほら」

「……」

普段なら絶対に拒否しただろう。しかし静司も思考がぼんやりと定まっておらず、考える力が極端に落ちているせいか、流されるがままに口を開いた。そしてその口に粥が収まる、その瞬間、部屋のドアが開く。

「一夏、静司。桃缶買ってきたわ……よ……?」

入ってきたのは鈴。彼女は目の前の光景を見た瞬間、ぴたり、と停止した。

「鈴か。……どうしたんだ？」

一夏は首を傾げるが鈴はそれどころでは無い。彼女の眼に映っていたもの。それは頬を上気させた静司がまるで小動物の様に口を開き、そこに優しげに蓮華を運ぶ一夏の姿。

(何、この気持ち!? まさかこの私が静司に嫉妬しているというの!? というかこれどういう状況!?)

あんぐりと見つめてくる鈴に一夏はますます訳が分からないといった様子。対して静司は鈴が居る事に気づいていないのか虚ろな目で壁を見つめている。

「おーい、鈴?」

「……あ、あんた達何やってんの!」

「何って、静司はキツそうだから食わせてやろうかと」

「はあ!」

なんだその羨ましい状況は？ 風邪か？ 風邪を引けば同じ事をしてもらえるのか!?

「ああ、すまん静司。もう一回口空けてくれ」

再び静司に粥を差し出す一夏と、されるがままの静司。何故だかその光景を見せつけられている様な気がして、

「ま、負けるもんかああああああああ!!」

結局その場に居られなくなり鈴は逃亡した。

ドガツ、と壊れるくらいの勢いで開かれた自室の扉にティナ・ハミルトンは摘まんでいたお菓子を思わず取り落した。

「り、鈴?」

扉を開いたのはルームメイトの鈴。彼女はどこか据わった目でゆらり、と部屋に入るとそのままシャワールームへ直行する。

「ど、どしたの一体?」

「ふふ、ふふふふ。風邪を引けばいいのよね? ふふふふふふつ

……」

怖い。

ルームメイトの異様な気配にティナがドン引きする中、鈴は異様なオーラを纏ったままシャワールームへ足を踏み入れた。そして服を脱ぎ捨てノズルを回す。更には壁に備えられた温度調整のボタンを連射し、一気に冷水にまで落した。途端、夏でも凍える位の温度の冷水が鈴に降りかかり、鈴の顔が青ざめていくが決して引くことは無い。そう、男に嫉妬を感じたこの状態で引ける訳が無い。

「ふふふふふふふふ。待ってなさいよおおおおおおおおお!

……へっくしー!」

「……怖い」

その様子をこっそりと覗いていたティナがぽつりと呟くのだった。

寮の共有スペース。暇をつぶしに学生たちが集まるそこにセシリ

アとラウラの姿があった。二人はテーブルを挟んでお茶をしていた。「ふむ。今まであまり食べた事が無かったが、菓子と言うのも良い物だな」

「でしよう？ 珍しい物が手に入った物ですから是非ラウラさんにもと」

「ありがたい話だ。しかし何故私なのだ？」

セシリアとラウラは特別中が良いわけでは無い。どちらかと言えばラウラはシャルロットと仲が良いし、セシリアは鈴だ。故にこの組み合わせは珍しい。

「先日の福音暴走の時、ラウラさんは私たちを逃がす為に殿を務めていただきました」

「あの件なら気にする事は無い。私は私のやるべきことをしただけだ」

「ふふ。ラウラさんならそういうと思いますわ。ですからこれは私の気まぐれ、と言う事にしておいてくださいな」

「……そうか。ならばありがたく味わうでしょう」

深くは問わずラウラも頷きセシリアの持ってきた菓子を楽しむ。そこに新たな声加わった。

「あー見つけた。イギリスとドイツの候補生さん」

「あら？ 貴方は？」

「あ、ごめーん。私はティナ・ハミルトン。鈴のルームメイトよ」

「ふむ？」

ラウラも手を止めて視線を向ける。鈴のルームメイト。確か2組との訓練で何度か見た事はあるが、彼女が何の用だろうか？

「いやーなんかさ、鈴の様子がおかしいというか奇行に走ったというか。それで相談なんだわ」

「鈴さんに何かあったのですか？」

「それがね、帰ってくるなりいきなり笑いながら冷水浴び始めてさ。不気味過ぎてねー。流星にほっとくと風邪ひくから無理やり引きずりだしたけど。ほら？ 鈴も代表候補生じゃん？ あんなアホな理由で風邪なんか引いたら色々まずいかなーと」

「確かにそうですね……一体何故そんな真似を？」

セシリアが困惑し首を傾げる。彼女も鈴の奇行の理由が分かりかねていた。それはラウラも同様なようで腕を組み首を傾げている。

「私もよくわかんないけど、なんか織斑君や川村君の名前を呟いてたから何か関係あるかなーと。それで彼らと仲が良さそうな人に訊いてみようかと思っただけど、知らないみたいね」

うーん、とさして深刻でも無さそうに考えるティナにラウラは一つ頷く。

「ならば実際一夏達に会ってみればわかるかもしれんな。私が行ってみよう」

「そう？　なら助かるわ。鈴の奴、放って置くとまたどんな奇行に走るか分からないし」

「そういう事でしたら私も一緒にしますわ」

「よろしくー」

そうしてセシリアとラウラは一夏達の部屋に向かった。

「さて、付きましたけど」

「外から見る分には何も問題は無いようだが」

そんなこんなで二人は一夏達の部屋の前に居た。外から見る分には部屋の様子は分からないが、果たして二人は居るのだろうか？

「気配はするから二人とも居るだろう。あとは直接聞くのみだ」

「そうですね。では」

軽く扉をノックすると中から一夏の声があった。

「一夏さん、川村さん。入ってもよろしくて？」

『……ああ、今取り込み中だけど大丈夫だぜ』

「では失礼します」

はて？　取り込み中とは？

疑問に思いつつ、扉を半分程開いて飛び込んできた光景にセシリアの手が止まった。

「ん？　どうしたセシリア」

それは理解しがたい光景。薄着の静司の服を脱がそうとする一夏と、それを弱々しくも拒む静司の姿。静司の顔は赤く上気しており、まるでこれから先のコトを想像しているかのような、そんな顔。

その光景にセシリアはまずは静止し、そして顔を真っ赤にしたかと思えば蒼白に変え、

「だ、男性同士で……？ 前々から一夏さんにそんな気があるかと若干ちよびつと少々微量に感じていましたけどガチなんですのうなっついていきますのおかしいですわ何なのですかこの状況はとにかく不潔ですわあああああああああああ!? ……はふっ」

ぱたり、と倒れこむセシリアをラウラが慌てて支える。

「おい、セシリア！ しっかりしろ！ くっ、衛生兵！ 衛生兵っ！」
そんなラウラの声は支える手を失ったドアが閉められたことによつて、中には聞こえることがなかった。

「何だったんだ？ セシリアの奴」

「わか……：……らんが、一夏、体は、自分で拭くから、いい」

「けど動くのもつらいんだろ？ 汗も酷いし遠慮するなよ」

「こつちにも、色々事情があるんだ……：……というか、何でそんなに、楽しそうなんだ」

「いやー、俺って看病されたことはあっても看病した事は中々なくてさ。何せ千冬姉が病気になるってこと自体がなかったからな」

つまり初めての看病で張り切っているとと言う事らしい。そんな一夏に静司はため息を漏らす。

「色々、してくれるのは、ありがたいが、流石に体は自分でやるから、いい」

「そうか。まあそこまで言うなら仕方ないか。なら最近覚えた疲労回復のツボを押してやるよ。すげえ効果あるらしいぜ」

「……まあ、それぐらいなら」

一方、セシリアは共有スペースに運び込まれていた。顔を上気させうなされる様に何かを呟く。その様子に、周りの生徒達も何事かと集まる。

「ねえ、何があったの？」

「なんでオルコットさんが、この妙に艶めかしい顔で気絶を？」

「私もよくわからん。一夏と静司を見た瞬間にこれだったからな」

「織斑君達を？ 何かあったの？」

「ああ、一夏が静司の服を無理やり脱がそうとしていた」

ぴしり、と空気が凍った音が確かに聞こえた。

「え、えつと……それで川村君は？」

「静司か？ そういえば顔が妙に赤かったな」

「え」

それはつまりそういう事なのか。まさか、女だらけのこの学園でわざわざその選択肢はあるのか？ いやしかし、だ。前々から一夏にはそんな気があるのではないかという噂がまことしやかに。つまり……マジで？

「きやああああああああああああああああああああああああああああ」

一気に共有スペースは黄色く腐った、そう、腐りきった煩惱で支配された。あちらこちらで妄想を膨らませる者。謎の掛け算を始める者。実際に見に行こうとする者とそれを止める者。この状況に呆れている者が入り乱れカオスな空間となり果てる。そしてそんな中、震えながら顔を俯かせている少女が一人。

「い、一夏あああああ!?!」

織斑一夏の幼馴染。つまり箒は、どこからともなく竹刀を取り出すと静司達の部屋へとダッシュした。

「はあ、はあ、はあ」

これまでの人生での最高スピードと違い無い速度で部屋の前にたどり着いた箒は一度息を整えると、一気に扉を開く。

「一夏！ 貴様は一体どうし……たと……という」

「ほ、箒？ 何だ突然」

箒の視線の先。そこで一夏は手をワキワキと卑猥に動かしながら、

ベッドの上で力なく俯せで倒れている静司に今にも手をかける直前だった。

「な、何をやっているのだ貴様ああああああああああ!?」

「おい箒!? ちよ、ちよっと待て! 一体なんだ!?!」

「黙れ! とにかくこちらに來い!」

「いやしかし静司を放って置くわけには!」

「そんなに男がいいのかああああああああ!?!」

「何の事だ!?!」

抵抗空しく一夏は箒によって連れ去られていった。後に残ったのは俯せで眠る静司。

「……………うるさい」

ぽつり、と眩くと体を仰向けに直し再び寝息をたてはじめるのだった。

それから少しして、部屋の扉がゆつくりと開いた。

「あれ? 開いてる?」

入ってきたのは布仏本音。彼女は紙袋を手に首を傾げていた。何度かノックもしたのだが反応が無く、試しに手をかけてみれば扉が開いたのだ。

「そーっと、そーっと」

本音は音を立てぬように部屋に入ると静司が寝ているベッドに近づく。当の静司は完全に眠っており、本音の様子に気づく気配はない。

「うひひ、かわむーお見舞いに來たよー」

小さく、囁く様に話しかける。静司は起きないがそれは別に構わない。話せないのは悲しいが、早く元気になって欲しい。だから今は我慢する。

本音は会長経由で今の静司の状態を聞いていた。会長はC1から聞いたらしい。学園の防衛戦力である静司の事なので、その情報は直ぐに伝えられたのだ。

「む、こういうときはおでこを冷やすんだよね」

「ごそごそと紙袋から取り出したのは熱の時に使う冷却シートだ。どこで買ったのかそのシートにはキツネのマークが付いている。それを静司の額に張り、更に汗を軽く拭いてやる。ご飯は一夏が作ったのだろう。部屋のキッチンに粥があつたので、作る必要は無い。そもそも料理も得意ではないのだが。」

一通りの作業を済ませると、本音はベッドに肘をつき静司の寝顔を眺める。そういえば自分が静司の寝顔を見るときは何時も大変な時な気がする。怪我をして気絶していたり、熱を出して倒れていた。まあそもそも同年代の男の子の寝顔を見ることが自体めつたにないのだから当然だろうが。

しばし、静かに時間が流れる。退屈は無い。静司の寝顔を見ているだけなのに、どこか安心できた。

「かわむーも寝ている顔はかわいいね」

うひひ、と笑いながらふと思う。先日自分は姉になってあげると言った。あれは本当の姉という意味で無く、姉の様な存在。つまりは静司の心の拠り所になりたい、という思いの表れだ。それを思うと、今の呼び方よりもっと自然な呼び方がある気がした。今のままでは一夏と同列な気がしたのだ。ではなんて呼ぶのが良いのだろうか？ 静司と仲が良い人物はそのまま静司と呼んでいる。ならば、

「せーじ」

言葉に出してみて、少し恥ずかしくなる。ただ名前と呼んだだけなのに。しかしその恥ずかしさが心地よい。

「せーじ」

「ん……」

静司が呻き声に思わず体が跳ねてしまう。幸い静司は目覚めては居ない様だ。しかしやはり恥ずかしい。何故だろうか？ 唯名前と呼んだだけなのに、自分はこんなキャラだっただろうか？

「うーん。なんだろう？ けど今は恥ずかしいから宿題だね」

そう、宿題。だからこれは二人きりの時だけにしよう。それでも静司が意識ある時はハードルが高いが、それを含めて、今後の宿題。

その後もしばらく静司の顔を眺めていた本音だが、不意に携帯が鳴った。確認すると姉からの催促のメールだった。実は彼女は溜めに溜めた生徒会の仕事の合間にここに来ていたのだ。

「ぬう、残念だけどまた来るね〜」

姉を怒らせると後が怖い。なので本音は諦めて戻る準備をする。その前に持っていた紙袋に一言メモを添えてベッドの脇に置いておく。

「これでおーけー。ちゃんと正しい道に戻さないとね〜」

どこか意味深な言葉を残して本音は部屋を後にした。

それから更に少しして、再び扉がゆっくりと開いた。

「せ、静司？ 一夏？」

そろり、と入ってきたのはシャルロットだ。彼女もまた、ノックしたのに反応が無かったが、鍵が開いていたので入ってしまった口だった。許可なく部屋に入る事にはためらいもあつたが、寮の中で流れているある噂が、彼女を後押しさせた。

それでも二人が居ないのなら直ぐに出ていくつもりだったが、ベッドで寝ている静司に気づく。

「静司？」

ためしに呼んでみる反応が無い。起こすのは悪いと思い出直そうかと思つたが、ふと静司の様子に気づく。

「あれ？」

よく見れば静司の額に何かが乗せられている。近づいてみるとそれは熱の時などに使う様な冷却シートに見えた。何故かキツネ柄だが。

更によく周りを見れば体温計や薬らしき物があり、キッチンには鍋に入った粥があつた。ここまですればシャルロットも察しがいく。

「もしかして病気だったのかな？」

それ以外にこの状況が説明が付かない。よく見れば静司の顔は少し赤い。風邪か何かだろうか。

「と、言う事はあの噂って」

『織斑君と川村君が自室でラブラブ禁断の花園』

それが今寮を駆け廻っている噂。シャルロットも最初にそれを聞いた時は飲んでいた水を盛大に噴いた。そして不安になりここに来た次第だったのだが。

「顔が赤いのはつまり熱のせいだろうし、だとすると他の噂もきつと何かの勘違いだね」

安心して力が抜ける。そして改めて静司を見ると、どうやら汗をかいてる様だ。近くに水桶に入ったタオルが有ったので、軽く顔を拭いてやる。

「ん……」

「あ……」

水の冷たさのせいか、それとも十分に寝たからか、静司がゆっくりと目を開く。顔を拭く為に静司に接近していたため、至近距離で眼が合ってしまった。

（わ、わわわ……！）

彼我の顔の距離は30cmも無い。その距離で見つめられシャルロットは慌ててしまう。一方静司はどこか焦点の合わない目でシャルロットを見つめ続けている。シャルロットの混乱は更に増し、何とか言い訳しようとしどろもどろに説明をする。

「え、えつとね、静司。これは汗を拭こうとしただけで——」

「ツヴァイ……姉さん……」

「え？」

一瞬、静司が笑った。それもシャルロットはおろか、今の静司を知る者は誰も見た事が無いような、子供の様な無邪気な笑み。そして静司が発した言葉にシャルロットが固まる。

そのまま数秒、時が止まったかのように硬直していたが、静司が再び目を閉じ寝息を立てはじめると、ようやくシャルロットも動き始めた。ゆっくりと体を離し、ベッドの横に座る。

「……」

何だったのだろうか、今のは。

直ぐにまた寝てしまったことからおそろく寝ぼけていたのだろうが、そもそも静司に姉が、そもそも姉妹が居るといふのは聞いたことが無い。今までそういう話を聞いたことが無かったが、居る様な雰囲気も無かった。しかし静司は確かに『姉さん』と呼び、そして見た事も無いような笑みを浮かべていた。あれが何の意味も無い寝言だとは思え無い。

また一つ、静司について知らない事が増えた。

静司の謎はこれだけでは無い。妙に高い運動神経。確かに企業のテストパイロットとは聞いているが、それも最初は隠していた。更に臨海学校での異変。そして今の寝言。『知らない』というより『分からない』部分が多すぎる。それを無理やり知ろうとは思えない。誰にだって知られたくない事はある。だけど想いを寄せる人の事が何も分から無いというのは、やはり悲しい。彼に何か秘密があるとして、その助けになれるのならなりたい。それは臨海学校の時にも直接告げた。しかし、肝心の静司の事が何も分からないままでは、結局何も変わらない。

いつか、教えてくれるのかもしれない。しかしそれは何時なのか。もしかして訪れないのではないか。様々な疑問がシャルロットの脳裏を駆け巡るが結論は、出ない。

「う……」

シャルロットの思考は静司の呻き声中で中断された。静司を確認するが直ぐに静かな寝息に戻っているので問題は無いだろう。だがこれ以上ここで一人悩んでいても、何も変わらない。シャルロットは立ち上がると、最後にもう一度静司の汗を拭き、頷く。

悩んでいても一人ではこの問題は解決しない。なら静司が起きた時、改めて色々話してみよう。今の事だけでなく、他の事も色々とお互いの事を知るために。

ふと思いつき、懐からIS学園の手帳を取り出す。白紙のページにペンを走らせ、そのページを破る。そして静司の枕元。コップや薬が置かれた棚に置いておく。

「お大事にね、静司」

気持ち新たにするとシャルロットは部屋から出ていくのだった。

それから数時間後。日も暮れ始めた頃に静司は目を覚ました。

「あー……頭が重い」

額を押さえながら呻く。だが朝に比べれば大分マシだ。途中、何か色々あった気がするがうろ覚えだ。

部屋を見渡すが一夏の姿は無い。確か朝は居た筈だが、どこかに出かけたのだろうか？ 疑問に思うが居ないのなら都合がいい。静司は通信機を取り出すとコールする。

『——お、B9か』

「はい。本日は申し訳りませんでした、課長」

『構わんさ。経緯を考えれば無理も無い事だ。それより体はもういいの？』

「ええ。大分マシになりましたよ。しかし一日中寝ていた性で頭が重い」

『ははは。いいじゃないか。どうだ？ 良い夢は見れたか？』

「そうですね……」

うーむ、と少し考え思い出す。

「そういうえば昔の事を少々」

『昔って言うとお前の姉達の事か』

「ええ。実は施設に居た時も一回倒れた時があるんですけど、その時はツヴァイ姉さんが面倒見てくれたんですよ」

その時は研究所の所員たちは最低限の処置だけするとCBシリーズ。つまり静司が姉と慕う彼女達に世話を任せただ。今思えば、ただの風邪だったためにわざとそうしたのでだろう。お互いが人質となる為のコミュニケーションの一つとして。

「アイン姉さんはそういうのが苦手で、他の姉さん達もおろおろしててさ。結局ツヴァイ姉さんが色々してくれたんだ」

それを語る静司の声はどこか楽しそうであり、課長もまた『そうか』

と静かに相槌を打つ。

「っと、失礼しました。体は大分回復したので明日からは任務に戻ります」

『やめとけやめとけ。明日一杯まではB2がそちらで待機してる。お前はあと一日ゆっくり休んでおけ。どうせ夏休みに入ればまた忙しいんだ』

もうすぐIS学園は夏休みに入る。通常の学生なら喜ぶのかもしれないが、静司の場合い逆だ。何せ一夏が外出する頻度が極端に上がるのだ。その度に護衛として周囲を警戒しなければならない。学園に居る時の方がまだマシだ。

静司もそれを考えたのか、素直にわかりました、と返事をする。

『よろしい。それと見舞いの品を送って置いた。会長に渡されたはずだから明日一日で存分に消化しろよ』

「は？ 消化……？ よくわかりませんがありがとうございます」

『よし。ならば今日明日はゆっくり休んでおけ。通信終了！』

通信を終え、静司は周囲を見渡す。すると柵の上にある紙に気づいた。手に取ってみると、見覚えのある字で一言書かれている。これはきつとシャルロットの字だ。

『早く元気になってね！』

どうやら来てくれていたらしい。後で礼を言わなきゃな、と思いつつ視線を足元に移すと見覚えのない紙袋が目に残る。そこには小さい『せつちゃんへ』と書かれたメモが張られていた。こんな風に書くのは課長しか居ないので、これが見舞いの品だろう。

気になって紙袋の中を覗き、静司は硬直した。

『放課後の保健室』『ISスーツ大全（モデル付）』『お姉さん大爆発』
……なんだこれは……』

思わず汗がたらりと落ちる。紙袋に入っていたのは俗に言うエロ本。AVの類。それがぎっしりと詰められていた。ご丁寧に『これがおススメ！』という付箋まで張ってらっしゃる。

「あのアホ課長……」

思わず頭を押さえてしまう。そしてふと、紙袋の中に更に小さく放

送された四角い箱に気づいた。その包装紙がキツネ柄な為に静司は嫌な予感がした。紙袋から取り出し、包装紙を破くと出てきたのはDVD。

『巨乳コスプレお姉さん』……だと?』

はらり、と何かのメモ用紙が落ちる。拾い上げて読んでみる。

『かわむーの趣味に合わせてみたよ。道を外れちゃ駄目だからね』

「……………何が起きたっ!?!」

何故だろう。とてつもなく嫌な予感がする。容易ならざる事態が現在進行形で起きている気がする。一体自分が寝ている間に何か起きた!?! このあやふやな記憶の中で一体何が起きたというのだ!?! というか道を外れるってどういう事だ!?! あと何故俺の趣向を知っている!?!

静司がこの謎の事態の原因を知るのはその数時間後、憔悴した一夏に事の次第を聞き出してからの事だった。そしてその夜、二人の部屋からは喧噪がやまず、それを聞いた生徒達はまた腐った思考を加速させ二人を暫くの間悩まるのだった。

42. K・アドヴァンス

きつかけは夏休みに入る少し前になる。

IS学園にも夏休みは存在する。通常の高校よりは少ないながらも、生徒達は浮き立っていた。休みの予定を友人と立てる者。実家や自国へ帰省する者。何も予定も無く、ひたすら引きこもる者。様々だ。

そしてIS学園でたった二人の男子学生。織斑一夏と川村静司も例にもれずその話題で盛り上がっていた。

「静司は休みの間どうするんだ？」

「会社と呼ばれてるからな。多分訓練や装備のテストだな。後は特に予定決めてないから適当に過ごさすさ」

これは半分本当で半分嘘である。確かに修復した黒翼や、K・アドヴァンス社の装備のテストなどで戻る必要もあるが、静司の任務は一夏の護衛だ。最低限の用事だけ済ました後は、引き続き一夏の護衛に付く。不在の間はEXISTの別のメンバーが一夏に付くことになっている。無論、本人には秘密だが。

「そういう一夏はどうするんだ？」

「うーん。ちよつとの間は学園に居るだろうけど、後半は家の方に戻るかな。全然戻ってないから掃除とかしたいし」

「成程。一夏らしいといえづらいな」

「そうか？ 後は弾と遊んだりとかかな。そうだ、静司も都合が合ったら遊びに行こうぜ」

「そうだな。事前に連絡くれれば都合つけるよ」

静司としてもそれはありがたい。夏休み中ずっと一夏の隣に居る事は出来ないので通常は密かに護衛する気でしたが、一緒に出掛けるのなら隣に居ても不自然では無い。

「OK。電話するぜ。しかし休みの日まで訓練なんて大変だな」

「企業に所属している奴は大抵そうだと思うぞ。別に候補生だけが特別ってわけじゃないんだ。1年にも他のクラスでは何人か俺と似たような立場の子がいるしな。専用機が無くても、データ収集や試験装

備のテストなんかはやってる」

「データ収集、ってなんか生々しいな……」

「現実なんてそんなもんさ。しかしそうだな……」

ふと思いつく。一夏次第だが、一夏の為にもなるかもしれないしいかもかもしれない。

「なんなら一夏も来てみるか？」

「それってK・アドヴァンス社につて事か？」

「ああ。向こうの許可は取らなきゃならないけど、見学ぐらいなら大丈夫だろ。うちは武器や装備の開発主体だから色々見れると思う。勿論機密情報までは出せないけどな。それにシミュレーターもあるからいい経験になると思う」

「成程。なんか面白そうだな。じゃあ頼むぜ」

「OK。ならどうせだし他の面子も呼ぶか。というか呼んでくれ、一夏」

「？ 別に良いけどなんでそんなに必死なんだ？」

「二人きりで出かけたらまた妙な噂が、な……」

「……ああ」

どこか遠い目で外を眺める静司に、一夏も似たような顔で深く頷くのだった。

「と、言う事でここがK・アドヴァンス社だ」

「おお、思ってたより大きいな」

夏休みに入り数日、静司達はK・アドヴァンス社の本社に一夏達を連れて来ていた。メンバーは何時もの面子に加え、本音の友人である鏡ナギと谷本癒子だ。彼女達も興味があったらしく参加していた。

「川村君、ありがとねー」

「私たちは一般家庭出だからね。こういう所ってあんま知らないから楽しみかな」

「私も楽しみ〜」

興味深げに周りを見渡すナギ、癒子、本音。三人はきやいきやいと

盛り上がっており、誘った静司としても喜んでもらえている様で何よりだった。

そんな静司にセシリア達が声をかけた。

「しかし本当によかったのですか？ 私達まで」

セシリアの疑問は最もだろう。確かにアラスカ条約によってISに関する情報は共有される事になっているが、それも一定レベルまでだ。全てを開示されている訳では無い。その秘匿された部分で企業や組織間で日々開発競争が行われている。そしてセシリア、鈴、そしてラウラは別の組織に所属する人間だ。それはつまりライバルと言っても過言では無い。そんな相手に社の中身を見せると言うのだ。因みにシャルロットの場合は、K・アドヴァンスと共同開発を行っているので例外だが。

「上がOK出したんだから気にしなくていいよ。そりや産業スパイ紛いの事されたら困るが、その辺は信用してる」

「アンタねえ、そんな言い方されたらこっちだって何も出来ないわよ」「なんだ？ その気だったのか」

「まさか」

馬鹿にするな、と鈴が笑う。静司も本気で聞いたわけでは無いので笑って返した。

「まあ本当に見られて不味い物があるところには案内されないだろうし、気楽にしてくれ」

「む？ 静司が案内してくれるのではないのか？」

ラウラが首を傾げる。他の面子もてつきり静司が案内すると思っていたので視線で問いかけてきた。

「ああ、すまん。俺は一時的に検査やらなんやらで抜けなきゃならないから、別の人に案内をお願いしたんだ」

「別の人？」

「ここにいるっすよ」

シャルロットの問いに、不意に加わった新しい声が答えた。一夏達が驚いて声のした方へ振り向くと、肩位まで髪を伸ばしたスーツ姿の女性が手を振っていた。

「どうもっす。今日の案内を任された麻生理沙っす」

そういつて微笑む彼女の顔を見た瞬間本音が「あゝ」と小さな声で頷いていた。その理由は単純。彼女こそC12であり、本音は会ったことがあるのだ。

一夏達も慌てて頭を下げ、挨拶をした。

「なんか大人数ですいません。今日はよろしくお願いします」

「気にしなくていいっすよ。こちらこそよろしくっす」

「よろしくっす」

ぱたぱたと裾を振る本音に理沙も手を振り返す。

「今日はよろしくお願いします。理沙……さん」

「任せるっすよ。けど静司……君も折角友達が来てるんだから早く帰ってくるっす」

「わかってますよ」

普段ならお互いもう少しフランクに話すのだが、流石に何も知らない一夏達の前でそれをやってはおかしいだろう、という事で二人は普段使わない敬語で話している。だが違和感がある為にどうもぎこちなかった。

「そ、それじゃあ皆は私についてくるっすよー」

違和感を誤魔化す為にか理沙は強引に話題を変えると一夏達に振り返る。一夏達はそんな事には気づかず、素直に理沙に着いていく。

「じゃあ、また後でね静司」

「早く来てね」

「あいよ。そっちは楽しんでてくれ」

静司もシャルロットと本音と言葉を交わすと課長の元へと向かっていった。

「さて、案内と言ってもオフィスとか見てもあんまり面白くないので、まずはここ開発部っす」

理沙の案内の下に一夏達が訪れたのは研究室が並ぶエリアだ。長い廊下を挟むように研究室が並び、ガラス越しにその様子が伺える。

「このブロックでは主に既存装備の効率化を目的としてるっす。奥では性能試験もやってるっすよ」

「おお、こういうのは初めて見た」

理沙の説明に一夏が興味深げに呟く。それに反応したのはセシリアだ。

「あら、一夏さんも白式の件で倉持技研に行ったことがあるのではないですか？　そこでも似たような事をしてると思うのですが」

「いや、基本的に向こうの人が来てるから俺は行ったことないんだよ。けどこういう光景ってやっぱワクワクするよな」

「ガキねえ。そんなに面白い光景でも無いでしょ」

「そりゃ鈴達は見慣れてるかもしれないけど、俺は初めてなんだからいいだろ。それに俺程度でガキなんて言ったら」

一夏がちらり、と横を見る。そこにはガラスにへばりつき「お〜」と目を輝かせている本音と興味深げに頷くラウラの姿。

「あれが威力が凄いけど反動も凄すぎると噂のK・アドヴァンス制ライフル《ADR2000》だね〜。あつちはピーキー過ぎて使い手を選びすぎると言う超高速機動パッケージ《メテオライン》だ〜。いいな〜」

「ふむ。私もあれには興味あったので試しに一基購入し部隊に配備した。しかし性能がイカレ過ぎていて数人しか扱えなかった」

「ラウラも使ったことあるの!?!　いいなく、今度見せて〜」

「すまん。アレはドイツに置いてきていて居る。何せ使えなかった連中が、何としてでもモノにしようと躍起になっていてな」

「むー残念」

その後も二人はわいわいと研究室を覗いては色々と盛り上がっている。

「意外な組み合わせだな……」

「本音は整備課志望だからこういう所が大好きなんだよ」

「ボーデヴィツヒさんとの絡みは予想外だったけどね」

「ラウラは現職の軍人だからね。僕たち以上に装備や武器には詳しいんだよ」

箒の眩きに癒子、ナギ、そしてシャルロットが苦笑しつつ答える。
一夏達も「あはは」と笑うしかない。

「盛り上がってるっすね。それじゃあそのテンションのままに次に行
くっすよー」

その後も一行は次々と会社内を周っていく。そのルートは飽きさせない様に、そしてIS学園生としても興味が出る様な内容の物をメインとしており、メンバーは飽きることなく時に笑いながら、時に真剣に考察しながら周って行った。

「いやー、若いっていいっすねー。それに思っていた以上に楽しんで貰えてる様で嬉しい限りっす。案内する場所を悩んだ甲斐があるっす」

理沙もどこか楽しげだ。そして一行が次に訪れたのは部屋の中心に大きな球体が鎮座する一風変わった部屋だった。

「ここがシミュレーター室っす。古今東西、あらゆるIS操縦者のデータが入っているっすよ。ISのデータはある程度の予測値っすけど、結構本物に近いと自負してるっす」

「おお、ここが」

一夏達も興味深げに機材を眺めている。

「けどさ、ふと思っただが何で学園にはシミュレーターが無いんだ？ あつたら凄い便利だと思うんだが」

「あれ、一夏知らないの？ 一応あるよ」

「ええ!? じゃあなんでそれ使わないんだ？ それが一杯あれば皆訓練できるじゃないか」

「それは意味が無いからだよ」

一夏の問いに答えたのは本音だ。

「えっとね、ISのシミュレーターは便利だけど結局はコアが無いと動かないんだよ。だってISは普通の車や飛行機みたいに手足で動かすだけじゃなくて、ハイパーセンサーとか色々とコアの機能に頼った物が多いからね。だからシミュレーターが一杯あつたらその分コアを使う事になっちゃうんだよ。だつたら普通に使う方が感覚も掴めていい感じ」

「うーん、だけどさ、確かに実際に動かす為のコアが使えなくなるなら意味は薄いけど、いろんなデータと戦えるならやっぱり有効じゃないか?」

「そのデータが問題なのですわ。一夏さん、『IS/V S』というゲームはご存知ですか?」

「知ってるぜ。俺もやったことあるし。それがどうかしたんだ?」

IS/V S。それは日本のゲーム会社が発売した対戦ゲームであり、プレイヤーはコントローラーでISを動かし戦う。男も女も関係なく、手軽に遊べるそれは大ヒットし世界的にも売れたが、その時に一悶着あったのだ。

このゲームには各国のISのデータが入っていたのだが、その国々から『自分達の国の代表が弱すぎる。ふざけるな』という苦情が入り、最終的にそれぞれの国を最高強化されたお国柄Ver が発売されたというしような無い話があった。

「つまりそれと同じことですね。使ったら使ったで色々意見やら苦情やらが殺到したそう。特にIS学園は色々な国の方がいますからね。あつちを立てればこつちが立たず。それを繰り返していくうちにデータそのものがアテにならなくなったのですわ」

「あ、アホらしい。けどIS学園に干渉は出来ないんじゃないのか」

「まあ表向きはそうだけど方法は色々あるよ。例えばA国の生徒が『このデータがおかしい。直ぐに修正しないなら国へ報告する』と言った。そのA国が小国ならまだしも、政治的に強い力を持っている国だとしたらIS学園は無視できても、運営資金を出している日本という国はとても困る。だからこつそり従う。だけどそれを発見したB国が今度は苦情を出す」

「うわあ」

シャルロットが引き継いだ解説に一夏がうんざりした様な顔になる。他の面子も似たような顔だ。

「結局、そういう面倒が色々起きたからシミュレーターは封印。ISの訓練は実機で、って事になったんだ。確かに勿体ないけど、それが理由で争うよりは余程マシだろう、って事らしいよ」

「そういう事つす。IS学園も何だかんだで上手く回っているとは言い難いっすね。まあ当初は世界も結構ピリピリしてたから仕方ない気もするっすけどね。ISの性能Ⅱ国の強さ見たいな風潮だったっすから。最近は幾分か冷静になってきてるし、もしかしたらその内また解放されると思うッすよ」

「そうだといいなあ」

一夏ががつくりと肩を落とす。そんな一夏の背中をバシン、と叩いたのは鈴だ。

「何言ってるのよ。私たちは専用機があるんだからまだマシな方なのよ。無い物ねだりで凹む暇あったら、もっと強くなりなさい」

「分かってるよ、そんな事」

「まあまあ。IS学園はそんな事情っすけど、身内だけで使う企業からすればそんなもの関係無いっす。試しに使ってみるっすか?」

「いいんですか?」

「ぶれ……静司君からも話は聞いてるっすからね。準備は出来てるっすよ」

「なら、お願いします」

「その言葉を待っていた!!」

突如新しい声が部屋に響く。驚く一夏達を尻目に、白衣を着た男がやって来た。歳は四十台半ば。眼鏡をかけ、無精ひげを生やしながらも不思議とそれが不潔には見えず、変に似合っている男だ。

「初めまして、少年少女達。私の事は主任と呼んでくれたまえ」

「え、あの、名前は?」

「主任で結構だ。その呼び方がお気に入りだね。それよりシミュレーターを使うのだろうか? ならばさっそく準備だ」

言うが否や機材を弄り始める自称主任。一夏達は困惑したように理沙に助けを求めるが、理沙も苦笑で返す。

「あの人は基本的に変人なので気にしなくていいすっよ」

「は、はあ」

気の無い返事をする一夏を余所に主任は準備を終えたのか、笑顔でこちらに振り向いた。

「さて、では簡単に説明をしようか。このシミュレーターには様々なISやその搭乗者のデータを入れ込んである。流石に公表されていない部分は予測値だが実物に相当近いと自負しているよ。ああ、これはさつき理沙君が説明したな。では私はこのシミュレーターのキーマン、つまり君たちと戦うAIを紹介しよう」

部屋の隅、大きなモニターに景色が映る。そこは普通の市街地で、ビルが立ち並んでいる。そして中でも一番高いビルの頂上に一機のISが鎮座していた。

「これは……」

「シミュレーター内の映像だよ。場所は日本の市街地をイメージしている。そして彼女が君たちの対戦相手」

現実では無いその映像だが、精巧に作られており違和感は少ない。そしてその映像の中の主役とも言える存在。あらゆるデータを仮想空間内で再現するAI。その彼女の姿が露わになる。そしてそれを見た瞬間誰かが「あ！」と叫んだ。

女性として設定されている割には高い身長。豊かなバストはポリゴンで再現されており、その体躯を黒いスーツで覆っている。目つきは鋭くまるで狼を想像させる程強い。そして黒く艶やかな髪が風に吹かれてなびいている。

「紹介しよう。K・アドヴァンス社が誇る地獄の鬼教官AI『サウザンド・ウインター』。略してサウ子ちゃんだ」

『いやちよつと待て!』

思わず全員ツツコミの声がハモる。中でも声が大きかったのは言うまでも無く一夏だった。

「どうみても千冬姉じゃねえか!」 人の家族を勝手に使うな!」

「いや、これはサウ子ちゃんだ。君のお姉さんは関係ないよ?」

「無茶が有り過ぎるわよ!」 名前からしてそのまんまじゃない!」

「ネーミングには苦労したよ」

「無視すんな!」

「教官の胸はもう少し大きい!」

「だがしかしあれはサウ子ちゃんだ」

抗議する一夏達に対して主任はどこ吹く風。そんな光景にシャルロットや癒子達も呆れざるを得ない。

「どうみても織斑先生だよね」

「だよね。……あれ？ セシリアどうしたの？」

「いえ……実は私の国にもシミュレーターは有るのですが、その……つまり似たような事をしていたので何も言えなくて」

「まあ織斑先生は世界最強とも言われてるから、それを相手にするって発想は結構あるもんね。デュノア社にもあったよ。……まあそこまで外見に全力投球しては造らなかつたけど。というか外見って必要あつたのかな」

「確かに」

それから数分後。ようやく落ち着いた一夏達は肩で息をしながら説明の続きを聞いていた。納得したわけでは無いが、いい加減話が進まないでシャルロットやセシリア達に止められたのだ。

「まあ確かに織斑千冬さんの情報を参考にしているのは事実だよ。何せ彼女は世界最強のIS操縦者。その力に憧れ、少しでも追いつきたいが故に、目標として彼女をベースにしている」

そのように褒められると一夏としても強くは言え無い。何だかんだで姉が褒められ、そしてISを扱う者の目標となつていくというのはどこか誇らしかった。

「さて、それでは早速始めようか。まずは織斑君からいくかい？」

「……そうですね、お願いします」

相手は姉に似ているがただのデータ。一瞬VTシステムを思い出したが、あれとは全く別の物だ。違法という訳では無い。ISを扱う者たちが尊敬と憧憬を寄せ作り上げた目標。ならば強さを求める一夏としてもそれが相手になる事は喜ばしい事だ。

「対戦相手の設定はどうするかね？ 一応幾つか選べるが」

「なら……千冬姉でお願いします」

「ふむ、良い顔だ。なら頑張りましたまえ」

データと言えどもそれは千冬を元にしたもの。なら今の自分がどこまで姉に追いつけたのか。それを見る良いチャンスだ。一夏は気

合いを入れるとシミュレーターを起動させた。

『シミュレーターと君のISのコアを同期する。許可をくれたまえ』
「はい」

白式に同期を承諾させると途端に目の前の景色が変わった。天を覆う青い空。眼下にはビルが足り並ぶその光景は先程画面で見た物と同じだ。

「おお、凄いな」

『ISには直視映像ダイレクトビューという機能があるだろうか？ 他人の視界を見る事が出来るアレを応用している。さて、では始めようか』

ハイパーセンサーが彼方にいる敵AIを捕らえる。既にISを展開しているそれはかつての姉の愛機「暮桜」だ。そしてその武装は白式の《雪片式型》のオリジナルである《雪片》だ。それを見て一夏に緊張感が走る。視界の端では戦闘開始までのカウントが5を切っていた。

（千冬姉のデータなら小細工する余裕なんてないし、そもそもそんなに器用じゃない。先手必勝で決める！）

戦術を決めると同時、カウントが0になり、開始のブザーが鳴った。一夏は即座に《零落白夜》を展開。瞬時加速で一気に接近しようとして、ふと自分を覆う影に気づいた。

「は……う」

一夏が見たのはいつの間にか目の前に居た暮桜が《零落白夜》を振り下ろす光景だった。

「戦闘時間……2秒……？」

シミュレーターから出た一夏は呆然と自分の記録を反芻する。余りにも情けない結果に言葉も出ない。

「瞬殺だったな。まあ気にするな。君の姉がそれだけ強いと言う事だ」

「いやけどアレはいくらなんでもあんまりじゃ……」

「何言ってるのよ。開始早々《零落白夜》での奇襲は一夏も良くやる

じゃない。まあ一夏のは奇襲と言うより特攻だけど」

「う……」

「しかしあの戦法も使い手によってはエゲツないな。流石教官だ」

「そうだね。防御不可の一撃必殺での奇襲。これほど怖い物は無いよ」

「しかもそれをやるのが千冬さんだから……」

専用機組がその脅威に考察を躲す横で、本音とナギと癒子が冷や汗を流していた。

「私達じゃ」

「絶対に無理だね」

「……だね」

そんな学生組を余所に主任は笑顔で手を広げ、

「さあ、次の挑^獲戦者は誰かな？」

そう告げた。

空を7機のISが駆ける。先行するのは黒く巨大な翼を持つIS。そしてそれを追う様に6機が追隨している。

——接近警報。

「こなくそっ！」

黒い翼のIS——静司と黒翼に敵機が迫る。静司は即座に反応し減速することなく一気に下降。ビル群に突っ込む。だが敵機はそれでも追ってくる。ならば！

R/Lブラスト展開、発射。翼から放たれた6つの光がビルに直撃。爆音を撒き散らしながら崩れ落ちる。それによって舞い上がった粉塵の中に黒翼を突っ込ませた。

——敵機、荷電粒子砲のチャージを確認。

警告と同時に機体を捻る。半瞬遅れて背後から放たれた荷電粒子砲が黒翼に掠った。機体にダメージが入ったが、まだ許容範囲だ。静司は右に左に方向転換しながらビルとビルの間をすり抜けていく。しかし突然目の前に巨大な青竜刀の様な武器を持った機体が現れる。

「っ！」

判断は一瞬。静司もまた左腕の巨大な鉤爪を振り上げると、速度を乗せた一撃をぶつける。互いの武器がぶつかり合い、そして敵の武器が砕け散った。無防備になった敵に止めの一撃を加えようとするが、そこに今度は上空からレーザーの雨が降り注ぐ。直撃はギリギリで避けたが、機体の各所が融解した。そして静司が怯んだ隙に武器を破壊された敵に逃げられる。静司はそれを追おうとするが、それもまたレーザーの雨に妨げられた。

このままではまずい。

そう判断すると瞬時加速でその場から離れる。勢いそのままにあえてビルの中突っ込み、レーザーの雨から逃れる事を選んだ。だがそれを敵は見逃さない。

突然静司の目の前が消えた。いや、正確には貫通力の強力な攻撃でビルの内装が削り取られたのだ。

「レールカノンっ！」

一撃目は様子見だろう。誤差を修正した二撃目に捕らわれる前にビルの中から脱出する。しかしそこに飛び込んできたのは紅い影。そのISは両の手に刀の様な武器を持ち斬りかかってきた。咄嗟に膝のワイヤーブレードを射出。右は牽制に。左は別のビルに突き刺し一気に巻き戻す。右のワイヤーブレードを敵が切り払っている隙に、静司は別のビルの壁に着地した。

(どうする……っ!?)

紅いISは即座に方向転換し迫ってきている。更には先程荷電粒子砲を放った白い機体。武器を改めた青竜刀もどきを持つ機体もだ。上空には蒼い機体がこちらに照準を合わせており、どこかではレールカノンでビルを無視して貫通弾を放つ敵が居る。そして残り一機は――
「背後かっ！」

気づくと同時、ビルの中から橙色の機体が飛び出してきた。その手には巨大なパイランバンカーが展開されている。避けられない。

その数秒後、黒翼は撃墜された。

シミュレーターから出ると静司は己の出した結果にため息を付く。そんな静司に声をかけるのは状況を見物してた女性だ。

「お疲れ様静司。散々な結果ね」

「返す言葉も無いな」

はあ、とため息を付きながら、今の戦いのリプレイを見つめる静司に女性は笑う。

「まあ今回の設定は相手のレベルを実際よりかなり上に設定してたからそう簡単には行かないけど。それでももう少しやりようがあったでしょう?」

「分かってるくせに聞くんだな、ライア」

「まあね。それがIS戦技教官としての私の役目だもの。あと今はB2とかコードネームで呼ぶ必要は無いけどせめてもう少し年上を敬いなさい」

呆れた顔をする彼女こそ、EXISTのC5にしてB2でもあるライア・ソリユールである。

「で、今回の戦い方の説明を自分の口で言いなさい。あら、口でつてなんかいやらしいわね」

「ツツコミ役のリ沙が居ないから俺は無視するぞ。それと戦い方だが今回の設定の場合、下手に強力な攻撃が出来ないのがネックだった」

「それは何故?」

「搭乗者を救うのが目的だったからだ」

今回のシミュレーション。敵はIS学園1年の専用機達。つまり一夏達だ。とは言ってもデータは弄っているので実物よりはるかに強化されていたが。

「そうね。確かに《クエイク・アンカー》なり《プラズマブラスト》なり使えば多少は戦況は変わったでしょうけど、そしたら辺り一面は瓦礫の山。専用機持ち達は消し炭も残らないわ。それを考えていたのなら文句は無いわ」

「むしろあの条件で戦わせるのは性格悪すぎないか?」

今回のシミュレーションの目的は『街中で突然暴走した一夏達専用機組を救出する』という物だった。その場合、下手に《クエイク・アンカー》を撃てば街の被害は計り知れず、更には《プラズマブラスト》など使おうものなら助けるどころでは無い。結果、静司は通常武装で戦う事になるのだが凶悪なまでに強化された相手の力と連携に為す術もなかった。

「何言ってるのよ。現実は何が起きるか分からないのよ。常に最悪を想定しておいて損は無いわ。少なくともあのクソツタレの兎女がISに干渉できるのは間違いないのだから」

ライアは忌々しげに呟く。これまでの経験から、篠ノ之東はISに干渉できるのはもはや明確。そしてそれは静司にとって大きな脅威になる。

「静司。あなたと黒翼はその兎に眼を付けられているのよ。だから備えをするに越したことはないわ。あなたが守っている織斑一夏達のISが突然後ろから襲い掛かってくる可能性もあると言う事なのだから。いや、それだけでは無いわ。世界中のISがあなたの敵になる可能性があるのよ」

「分かっている。さっきの発言は少し弱気だった。もう一度頼む」

「よろしい。ならば今回は純粹に戦闘に集中。機体データはさっきと同じだけど、目的は『救出』でなく『破壊』よ」

「了解した」

そうして再びシミュレーターを起動する静司とそれを見守るライア。その背中に声がかかった。

「やっているな」

「あら、課長」

現れたのは静司達の上司だ。オールバックの髪に室内でもかけているサングラス。髭を生やしているが、綺麗に整えられており紳士然としている男である。

「静司の調子はどうだ？」

「上々ですよ。相手のレベルが高すぎる故に苦戦してるけど、そもそもあの極悪設定&連携相手にあれだけ持てば中々のものね」

「黒翼にはシールドバリアがないからな。攻撃も重要だが必要なのは回避能力と言う事か」

「正解。本人もそれがよくわかっているから意識してる様ですよ」

そこで言葉が途切れ二人は無言で静司戦闘を見つめる。少しして口を開いたのはライアだ。

「で、回収した無人機の解析は？ 今回の件で私も2機程回収したし、何か分かった事は無いんですか？」

「機体そのものはそれなりだ。上手くいけばあの武器や技術をこちらに転用できるかもしれん。だがコアはやはり無理らしい」

「そう……。最低でもI S コアへの干渉だけでも何とか出来ないんですか？ いざと言うときにあの子にだけ戦わせて私たちは見てるだけなんて耐えられないわ」

「わかっている。そちらは何としてでも見つけ出すさ」

唯一篠ノ之束の干渉を受けない黒翼。これはEX I S Tの切り札だ。だがだからと言って静司一人に全てを任せようなど思っていない。

「うちの可愛い息子をあそこまで痛めつけてくれたんだ。そのツケは必ず払わせる」

「……課長」

「何だ？」

「真面目な話してるのにそのニヤけ顔やめなさい。ムカつくわ」

「だってシミュレーターとはいえ久々にせつちゃんの雄姿を見てパ
パ感激——！」

「黙れ中年」

43. 新たななるステージ

「何やってるんだ、お前ら?」

静司は諸々の用事を終え、一夏達と合流すべくシミュレーター室へと向かったが、部屋に入るなり目に映った光景に対しての感想がこれである。

「ありえない……ありえないですわこんなの……」

「くっ……もう一回、もう一回よ……!」

「あはは、やっぱ強いなあ……:……はあ」

「流石教官のデータなだけある。ああ、この場合は流石サウ子ちゃんというべきか」

「こ、こんなはずでは……」

セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、箒。5人それぞれ呆然としていたり渴いた笑いを漏らしていたり、感慨深げに頷いていたり、地に手をつけていたりと様々だ。

「あく、かわむーおかえり〜」

「ああ、ただいま。それでこれは一体?」

「えーとね、皆サウ子ちゃんにやられちゃったんだ〜」

「……ああ、成程」

その言葉で静司は全てを理解した。理由は単純、自分も通った道だからだ。

「まあ、気にするな。相手はデータとは言え世界最強のを使ってるんだから」

「だからと言ってあれはないぜ……」

一夏もどこか渴いた笑いを浮かべている。彼も負けたのだろう。

「開始直後の一撃必殺……。それを何とか躲しても二撃、三撃目が早すぎて追いつけませんわ……」

「っーかおかしいわよ。何なのあの動き!? 千冬さん本当に人間?」

なんとか距離を取ったと思ったら急に気配が消えて、その後の奇襲とか怖すぎるわよ」

「サウ子ちゃんは引っ込み思案な斬鉄系女子っす。気持ち昂るとっ

い切なくなつて奇襲を始める設定っす」

「意味わからんわ!?　　というかその性格設定いる訳!？」

キーツ、と噛みつかんばかりの勢いで鈴が怒鳴る。静司も似たような経験をしたので気持ちにはわかる。

「そういえば本音たちはどうだったんだ？」

「私達じゃ織斑先生には勝てないよ」

「だから普通に初心者設定で使わせてもらったんだ」

「学園じゃ使えないような装備も使えたし色々為になったよ」

本音、ナギ、癒子は専用機もちでも代表候補生でも無い。なので自分達のレベルに合わせてやったらしい。まあ当然だろう。

「こうなったら静司!　あんたもやってみなさい!」

「俺か?　　言っておくが俺だってサウ子ちゃん相手には対して戦えないぞ」

「けど川村さんはこれで訓練してきたのでしよう?　　ならば私達より慣れているかもしれないせんし」

「そう言われてもな……」

「私もかわむーvsサウ子ちゃん見てみたい」

「僕も見たいかな」

こうまで言われると静司としても断り辛い。ここでやらないのも興ざめだろうし、別に絶対にやりたくない訳では無いのだ。必要なのは程ほどの成績を残す事。

それに本音とシャルロットに若干の期待の眼で見られると、やはり男として良い所を見せたい気にもなる。

「わかったよ。けどあんまり期待するなよ」

静司は降参するとシミュレーターへと向かっていった。

静司がシミュレーターを起動し皆が観戦する中、本音に声かけられた。

「やあ、嬢ちゃん」

「あれ?　　かちよーさん?」

一夏達はモニターに注目しているので気づいていないが、部屋は人が増えており、その内の一人が本音も何度か見た事がある人物。静司の上司だったのだ。

「楽しんでるかな？」

「うん、とつても〜」

モニターでは静司のラファールが全力でサウ子ちゃんから逃げまわっており、それを観戦する一夏達はやれ攻撃しろ、逃げてばかりだと野次を飛ばしている。

「それはよかった。何せ息子が初めて連れて来た友人だからな。私達としても楽しんで貰えれば嬉しい」

「……かちよーさん、いつもと雰囲気違う？」

「私だつてたまには真面目になるさ。たまには」

ふっふっふっ、と顎鬚を撫でながら笑う課長。その視線は熱くなっている一夏達、そしてモニター上の静司へと向けられている。サンダラス越しで見えないが、どこか大切なものを慈しむような、そんな印象を本音は持った。

「嬢ちゃんには一度ちゃんとお礼を言っておきたくてね。いつも静司が世話になっている」

「そんなことないよ。私がかわむーと居るのが楽しいんです〜」

「そういつて貰えると助かる。だが、それでもだ。特に臨海学校の件では嬢ちゃんのお蔭で静司が助かったんだからな」

臨海学校の件。それは重症の静司を救うために学園のE・パツクを持ち出した件だろう。アレを提案し、そして協力したのが本音だ。

「ここ数年、特に今年に入ってから世界は大きく動き出している。男性操縦者の発見。不可侵であるIS学園への襲撃。そしてISの暴走と第四世代機の登場。いくらなんでも一度に起こり過ぎな位だ。そしてそれら全てに篠ノ之束が関わっている」

「ほえ？ おりむーにも？」

「私たちはそう踏んでいる。いくらなんでも出来過ぎているからな。世界最強の弟。幼馴染はこれまた世界最高頭脳を持つ女の妹。その妹の学園入学寸前に男性操縦者として発見。しかもその発見の経緯

が経緯だ。試験会場を間違えてISに触った？ 馬鹿げている。確かに試験会場を間違える位ならありえるかもしれない。しかし素人が簡単に入れるような場所に、世界でも限られた数しかない貴重なISを置くか？ 誰だって不審に思う。だからこの経緯を知る人間の中でこう考える者が出る。『ああ、そういうストーリーにしたのか』と」

「すとーリー？」

「本当はもつと別な方法で発見したかもしれない。それこそ世界最強の弟だからという理由だけで無理やり協力させたら本当に動いた。そういう話なのかもしれない。だけどそれを言う訳にはいかないから、適当な理由をでっち上げた。そう考えてもおかしくは無い。つまり裏を読みすぎると言う事だ。私達だって最初は疑った。しかしどんなに調べても裏なんて出てこなかった」

「事实は小説より奇なり。最も、その事実すら仕組みられた物かもしれないが。」

「ならばそんな馬鹿げた奇跡が本当に起きたのか。そう考えていたが、ここ数か月の博士の動きを見ていて考えが変わった」

無人機の襲撃。福音の暴走。IS学園に対する干渉と、邪魔な存在となつてきた静司への攻撃。それらを思い出し本音も身を震わせた。「たまたま織斑一夏がISを動かしたから博士は干渉を始めたんじゃない。干渉を始める為に、目的があつたから織斑一夏にISを動かさせた。私たちはそう考えている」

その目的は分からない。単純に二人を目立たせ、それこそ英雄の様にして満足なのか。それともその先があるのか。もし『先』があるのなら、学園への干渉はより強くなつていくことだろう。何せ今回の福音の暴走では静司達に邪魔をされたのだから。

「だからこそ、これから戦いは激しくなる。それは静司の負担も増えると言う事に他ならない。だからこそ、嬢ちゃんにお願いしたい。あいつを頼むと。あいつは馬鹿だから、きつと無茶をするだろう。そして私達もそれは止めない。それが必要ならあいつに強い事すらある。それでも心配なんだよ。上司として、仲間として、そして父とし

て」

すつ、と課長は懐から小さなメモリーカードを取り出した。

「今回、整備と調整と一緒に黒翼を一部改修した。早い話が強化だな。なあ嬢ちゃん、黒翼で一番消耗が激しいのは何処だと思う？」

問われ本音はうーん、と首を傾げたが直ぐに思いついた。

「左腕？」

「正解だ。常時部分展開。それはつまり常にその部品を使っているって事だ。だから消耗も早い。ISの自己修復機能もあるがそれも繰り返し返していけば劣化していく。だからこそ定期的な物とは別に、左腕のメンテは念入りに行う様に静司には伝えている」

だが、と課長は掌のメモリーに視線を移す。

「今回の強化でより黒翼は扱いが難しい機体になった。それでも乗りこなすのは問題ないと思うが、メンテはより念入りにやる必要がある。だが静司の奴は実はメンテがそれほど得意じゃなくてな。だからこれはお願いだ。静司のメンテをどうか手伝ってくれないか？」

「……私に？」

「嬢ちゃんは整備課志望と聞いていたし、その知識や技術は確かな物だと聞いている。勿論嬢ちゃんの都合が付くときだけでいいし、そもそも無理強はしない。だがこれは嬢ちゃんのご主人様にも為になると思う」

「かんちゃんの事知ってるの?」

「まあな。自分一人でISを完成させる。無茶をするとは思いますがそういうのは嫌いじゃない。嬢ちゃんはメイドなんだろう? 黒翼のメンテで得た情報は使ってくれて構わない」

「けどそれって……」

確かに黒翼に使われている技術はEXISTの技術・開発力の結晶だ。そこから得られるものは多い。しかしそれはつまり、黒翼のスペックを全て託すことに他ならない。

「それだけの事をお願いしているからこそその見返りだ。得た情報をどう使うかは嬢ちゃんに任せるよ。もしOKならば、これを受け取ってくれ。ここに黒翼のデータが入っている」

そうして出しだされた掌の上のメモリーカード。本音はそれを数秒見つめたが首を振った。

「かちよーさん。私はかわむーのようになる事ならしてあげたいと思うよ。だからそれに見返りとかは要らないよ〜」

本音はモニターに視線を移す。画面上の静司はいよいよ追い詰められながらも悪あがきをしている所で、それを観戦する一夏達の熱も上がっていた。そんな様子を眺めながら嬉しそうに笑う。

「私ね、かわむーの事を護りたいって思ってる。だからそのメンテナンスの事もかわむーの為にやってあげたいな。報酬とか見返りの為じゃなくて」

「……そうか。どうやら私は嬢ちゃんに失礼な事を言ってしまったらしい」

課長は思わず笑い、そして自分を恥じた。自分の息子をここまで思ってくれている相手取引の様な事を仕掛けた事に。だが同時に嬉しくもある。ここまで想ってくれている事に感謝すらした。

「ならば改めて、頼む。静司を……うちの息子の事を頼む」

そうして改めて差し出された手。しかしこれの意味は先程とは少し違う。だから、

「まかされました〜」

本音も笑顔でその手を取った。そして渡されたメモリーカードを見つめ、大切な宝物のように胸元で抱きしめる。自分が託された物の重みを確かめるかの様に。

「本音、何してるの?」

ふと、こちらに気づいたシャルロットが近づき、そして課長を見て一瞬固まった。知らない人物が突然いたのだから当然だろう。

「えつとね、かちよーさんとお話〜」

「かちよー……課長さん?」

「正解だよ。一応静司君が所属している部署の課長だ。初めましてかな」

「は、はい。初めまして」

差し出された手をシャルロットもおおざおおざと握り返す。課長はう

んうんと頷き、笑う。

「しかし静司君も幸せ者だな。こんな麗しい美女たちに囲まれて羨ましい限りだ」

「そ、そんな……」

「ほめられた〜」

照れるシャルロットとぱたぱたと腕を振りながら喜ぶ本音。そんな光景に課長も気をよくしたのか、ふむ、と考える。

「折角だ。何か聞きたいことがあるれば聞きたまえ。大抵の事は答えられるぞ」

「え、えーと」

「それじゃあ、学園以外のかわむーの事がいいです〜」

「あ、それ僕も気になる」

「よろしい。ならば色々語るとしようか」

そうして三人は静司の話で盛り上がっていくのだった。

「ふう……」

シミュレーターから出た静司は一つため息を付く。結果は惨敗。まあ攻撃もせず逃げ回っていたのだから当然と言えば当然か。

「おう、静司お疲れ」

「あんた逃げ回ってるだけだったわね」

「それでもあれだけ動ければ上等ですわ」

確かに静司はひたすら逃げ回っていただけなのだが、セシリアは感心している様だった。

「確かにな。静司の動体視力云々にまつわる回避能力はこうやって訓練されたのだな」

ラウラも頷いている。静司はそれに気恥ずかしさを覚えるが、「だが攻撃を完全に捨てていては勝ち永遠に無いぞ」

続く一言でがくり、と肩を落とした。

「ん？」

ふと本音とシャルロット近くに居ない事に気づく。一体どこに

行ったのだろうかと部屋を見渡し、見つけた。部屋の隅でいつの間にか現れた課長と何やら盛り上がり上がっている様だ。気になり近づいてみる。

「つまりだ、静司の衣装物コスプレが好きなのは他の社員の影響らしいんだが、中でもメイド物が好きらしい」

「おおう」

「そ、それで!？」

「ああ。だがナースとかそっち系は駄目だ。あまり食指が働かないらしい。だがメイドは別だ。以前我が社でちよつとした仮装パーティをした事があるんだが、メイド服を着た人に対する眼が尋常じゃ——」

「アンタが犯人かああああああああああああああああああああああああああああああ!?!」

絶叫と共に放たれたドロップキックが課長の腹にめり込み、更には吹っ飛ばされ壁に叩き付けられた。その前にぜえはあと息を荒くして黒いオーラを纏った静司がゆらりと現れる。

「せ、静司何を——」

「何をじゃねええええええ! アンタだな、こないだもアンタが余計な事を吹き込んだんだなあ!?! アアツ!?!」

「落ち着け。バツチリだっただろう?」

「やかましい! あの後な、虚さんにも説教されたんだぞ?! 『あんまり妹に変な事吹き込むな』ってな! 濡れ衣も良い所だ!」

「けど観たんだろう?」

「……………それとこれは話は別だ」

「目を逸らすな、目を」

ぎゃーぎゃーと騒ぐ二人を他の面子は啞然と見ていた。

「え、えつとあれ偉い人なのよね? 一応」

「その筈ですけど」

「だが綺麗にキックが決まっていたな」

「ああ、躊躇いが無かった」

「いやーすごいね川村君。この光景は珍しい」

「そうだねー。ところで、あの二人が何を話しているのか何となく読めて来たけどさ、織斑君も観たの?」

「谷本さんその話題は!」

一夏が慌てるが、時すでに遅し。谷本癒子の背後で修羅が生まれていた。

「一夏、詳しい話を聞かせなさい」

にじり寄る鈴達に後ずさる一夏。ラウラだけは良くわかっていないのか首を傾げていた。そしてそれらの隣では本音とシャルロットが、

「うーん、学園で着て来たら怒られるかな?」

「メイド服? そんなの普段着れないよ……。そもそも持つてないし。いや、だけど噂の秋葉原なら……。?」

二人首を傾げつつ何やら呟いていた。

同日夜。ドイツ軍の基地を歩く女性が居た。平均より高めの背丈を闇夜に溶け込む様な黒の軍服で包み、きびきびと歩いている。髪は肩にかかる程。鋭く、冷たい印象を持つその眼の片方は眼帯で覆われている。

ドイツI S 配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』副隊長。クラリッサ・ハルフオーフ。彼女は手元の通信機に眼を落としているのにも関わらず、まるで前が見えているかの様な速度で歩いていた。

「ふ……。隊長からの定期報告にこんなに和むとは……。っ!」

冷静な顔からは想像を突かないような浮ついた声がその口から洩れる。日本との時差は約8時間。今はもうあちらは深夜だろう。この報告は彼女の隊長こと、ラウラが就寝前に送った物なのだが彼女はそれを何度も読み返しては笑みを浮かべていた。

「やはり日本に行つて頂いたのは正解だったな。これほど変わるとは。……。嗚呼、可愛い!」

目つきは鋭いのに不気味な笑顔を浮かべながら歩く彼女を遠巻きに見た者は不気味そうに逃げていく。しかし彼女はそんな事を気に

したりしない。

「ふむ。今日は例のもう一人の男の会社に行ったのか。川村静司と
いったか？ 彼も中々面白そうだな」

ラウラからの報告には今日あった事が色々と書かれている。当初
はそれこそ千冬の事や一夏の不甲斐なさについてなどを厳しい言葉
が並んでいたのだが、最近はもっぱら一夏や友人たちの事が多い。だ
が最近その彼女から新たな悩みの様なものを持ちかけられており、そ
の報告が内容に移っていくと共にクラリツサも真面目な顔になっ
ていく。

「ふむ。これはもしや——」

『大尉！』

顎に手を当て考え込んでいた矢先、突然それを遮るかのように緊急
通信が入った。クラリツサは即座に思考を入れ替えると返答する。

「何事だ」

『所属不明の機体が当基地に接近中！ 数は3！』

「っ！ 位置はどこだ!？」

『今送ります！』

即座にISを展開。彼女の機体「シュヴァルツエア・ツヴァイク」は
ラウラのシュヴァルツエア・レーゲンに良く似ている。それもその
筈、第三世代機であるこれは姉妹機なのだ。ラウラのシュヴァルツエ
ア・レーゲンは両肩に大型レールカノンを装備しているのに対し、
シュヴァルツエア・ツヴァイクは大型ガトリングガン装備してい
る。他にも様々な点が変更されていた。

「位置は……ここから近い！ 私が先行する！」

『我々も直ぐに向かいます！』

「ふ、急げよ。出ないと出番がなくなるぞ！」

送られてきたデータを確認するが否や、クラリツサは空へと飛びだ
した。そして迫る未確認機へ向かう。

「あれか！」

ハイパーセンサーが彼方からこちらに向かう機体を補足した。し
かしその情報にクラリツサは眉を顰める。

「戦闘機でもヘリでも無い……。だが、あれはISか？」

ハイパーセンサーが捉えた物は異質な形状をしていた。逆三角形の胴体から鋭利な三角錐の様な腕が生えている。脚部は無く、代わりにスラスタ―取り付けられ、その頭部はまるでフルフェイスのヘルメットの様で金属に覆われている。

特殊装備のIS。そう考えるのが普通だ。だがそれにしても特殊すぎる形状にクラリツサの警戒心が増す。彼女は基地のデータベースにアクセスすると敵の正体を知るべく検索をかける。

「該当する機体データ……無しだと？ ならば」

機密ファイルへアクセス。認識番号、パスワードを入力。そして新たなファイルを開く。そこにはIS学園や臨海学校に現れた無人機の情報が載っていた。本来なら箝口令が敷かれている筈のそのデータ。そもそも無人機である事を知っているのもごく一部の筈だが、ここにはそのデータがある。これは全てラウラから報告された物だ。例え箝口令が敷かれていたとしても、それが母国の危機と成り得る存在であるのだ。軍に所属するラウラが報告しない理由は無い。以前学園に現れた物のデータは流石に少ないが。

「こちらにも該当せず。無人機ではないか……？ いや、新型という可能性もあるが」

だがこれまで無人機が出てきたのは決まってIS学園絡みだ。それが突然ここに現れる理由が分からない。ならばやはりあの機体には搭乗者おり、ただのテロリストか？

「ならば、直接聞かせてもらう！」

警告はしない。何故なら既に未確認機はその両腕から砲口を覗かせているのだ。敵対する意思は明白だ。クラリツサは両肩のガトリングガンを起動させ、一斉に銃弾の雨を叩きこむ。敵機は三機それぞれ上、右、左と分かれそれを回避したが予想通りだ。

「ふん、甘い」

ワイヤーブレード射出。左右に逃れた敵機をそれで狙いつつ機体は上へ逃れた敵へと向かう。そして再びガトリングガンを発射。必死に逃れる敵を追う様に砲門が稼働し追い詰めていく。更には左右に

放ったワイヤーブレードは、一つは外れたがもう一つが突き刺さっていた。敵機が火を上げ、その機体をふら付かせる。その様子を見てクラリツサの口元が歪む。

「かかったな。調教してやろう」

ひゅ、とワイヤーブレードを撓らせる。突き刺された敵機は振り回され、そしてクラリツサがワイヤーを下に打ち払うと同時に地面に叩き付けられた。更に、

「鳴け」

ひゅごつ、と勢いよく落下してきたクラリツサのシユヴアルツエア・ツヴァイクの踵。まるでヒールの様な形のそれが敵機へ突き刺さった。びくん、と敵機が揺れその頭部、目の様な部分が点滅する。その様子にクラリツサは踵をぐりぐりと捻らせながら笑った。

「ふふふ、どうした？ 何か言ってみたらどうだ？ それともやはり中身が無いのか？ 一枚一枚その装甲を剥いで確かめてやろう」

笑いながら足元の機体へ手を伸ばす。しかしそれを遮るかのように、上空の残り二機がその両腕の砲門から銃弾を放つ。

「馬鹿が。お前達も調教してやろう」

ぴしゃん、と鞭の如くワイヤーブレードを地面に打ち鳴らし、瞬時加速で空へ戻る。敵機は片や射撃を続け、もう一機はその腕に光を生やし斬りかかってきた。エネルギー系の斬撃だろう。だがさしたる脅威は感じない。既に彼女は敵の力のある程度把握していた。

ワイヤーブレードを更に二本射出。だがあえて敵には向けず展開しただけだ。しかしこれで十分。

「総合的な戦闘力では隊長には劣るが、これの扱いは私が一番上手い。存分に味わえ」

そこから始まったのは一方的な蹂躪。敵の射撃は容易く躲し、斬りかかってきた機体はその腕を鞭の様に変幻自在の軌道で襲い掛かるワイヤーブレードによって打ち払われる。出来た隙に尖った足での蹴りが付きこまれ、更には近距離からのガトリンガンの射撃。一瞬にしてボロ雑巾のようになった敵機が墜落していく。

そして残り一機も抵抗の猶予は無かった。一瞬にして迫ったワイ

ヤーブレードが全身を殴打し、切り刻み、そしてその機体を縛り付けた。

「つまらんな。この程度で何をしに来た？」

ふん、と鼻を鳴らしクラリツサは縛り付けた機体を睨みつける。各所が破壊され中身も殆どむき出し。その様子を見てやはり搭乗者が居ない事を確認すると、その眼が細まる。

「やはり無人機か。しかしデータとは随分と違ってお粗末だったな。何を考えて——」

不意に感じた危機感。それに従い即座にワイヤーを切り離すとクラリツサは距離を取った。数瞬遅れて大きな爆音と共に所属不明機が赤い炎に包まれた。自爆したのだ。見れば墜落した二機も同じように自爆していた。

その光景をクラリツサは黙って見つめる。何故無人機がここを襲撃したのか。そして何故あれ程までに弱かったのか。疑問を整理している所に通信が入る。

『大尉、ご無事で』

「ああ、ただの雑魚だった。だが妙な感じだ」

『はい。実はその事で一つ報告が』

「なんだ？」

『先程の機体からコアの識別コードが出ていませんでした』

「む？ 当然だろう？ 確か隊長のデータにも奴らは識別コードを持たないと——」

『いえ、正確にはコアの反応すらなかったのです』

「なんだと……？」

予想外の答えにクラリツサはもう一度、炎に包まれる機体を見下ろす。その中身がどうなっていたのか、それはもはやわからない。だが、何かよからぬことが始まろうとしている。それだけは感じ取る事が出来た。

「あらあら、とんでもないDSが居た物ねえ。シエーリ、大丈夫？」

「……はい。ですが正直3機同時は辛いです」

軍施設から遠く離れたドイツのとあるホテル。そこで目を瞑り立っていたシェーリはISを待機状態に戻すため息を付いた。その様子を見てカテーナも苦笑する。

「まあ、仕方ないわねえ。人間は一度に複数の体を扱う様には出来ないから」

「申し訳ありません」

「別に責めてないわ。今回は簡単なテストだったから。それにこのシステムはそもそも彼女用に作ったのだからねえ。後は実験を繰り返していけばいいわ。どうせ罪は篠ノ之束が被ってくれる」

無人機のような機体の襲撃。それを聞けば、そして無人機の実在を知っている者達は思い出すだろう。篠ノ之束と無人機が共に移っていたあの画像を。

「折角だから私達もあの画像を利用させてもらいましょう。しばらくは博士が隠れ蓑になってくれる。その間に完成させましょうねえ。まずはこのビット兵器からかしら」

そうして笑うカテーナが見つめる投影ディスプレイ。そこには既存のISとは大きく形が異なる機体のデータが映しだされていた。

44. 見えない心

「基地への襲撃だど？」

夏休みが続くIS学園。その寮の自室でラウラはその報告に思わず訊き返した。

『はい。データは送った通りですが、不審な点がいくつか』

相手は部下であるクラリツサ。ドイツからのプライベート・チャンネルを使用した報告だ。ラウラはその報告内容に目を通しながら難しい顔で頷く。

「正体不明の無人機による突然の襲撃……だが何故うちドイツ軍に？ 意図が読めんな」

『はい。その上、無人機も情報にあつた物とは随分と異なりました。コアの反応が有りませんでしたし、何より歯ごたえが無かった』

「ふむ……」

ラウラの知る無人機はデータ上のアーリーナ襲撃した機体と、臨海学校に現れた機体。そのどちらも性能は高かった。だが今回の報告にある機体は随分と勝手が違う。

「コア反応に関しては、以前学園に現れた機体は『完全なる消失ステルス』をしていたと情報にある。それと同じかもしれない。だが性能については……何かの試験機か？」

『こちらでもその線で回収した残骸を調査しています。しかし重要な部分は完全に破壊されており期待はできません』

「そうか。しかし無人機となるとやはり篠ノ之博士か」

『その線が濃厚です。例の画像の件もありますし上層部もその判断です。ですが決めつけるのも早計かと』

「博士以外にも無人機を作る技術があると？」

『わかりません。しかし、存在する筈のなかった男性操縦者の発見。これまでのISの概念を無視した無人機の存在。そしてあのツンツンだった隊長の変わり様。ここ最近で私は見解を広めることに決めたのです』

「ちよつと待て、最後のは何だ」

思わず訊き返したラウラにクラリツサは若干興奮気味に、

『言葉の通りです。最初はどうなるかと思った黒兎隊ですがここ最近
は隊の雰囲気も良くなりました。これも隊長が変わったのがきつ
かけです』

「う……」

ラウラは思わず言葉に詰まる。今思えば学園に来るまでの自分の
隊での態度は御世辞にも良いとは言えなかった。隊長故の威厳を出
す為というのもあったが、何より自分が他者との接触を必要としてい
なかったため、部隊の空気も悪かったのだ。それがわかるからこそ何
も言えない。

『気にしなくていいのですよ、隊長。過ぎた事ですしあの頃は私達に
も問題がありましたので。それより隊長、例の悩みについては何か変
化がありましたか？』

「……いや、まだだ」

クラリツサの問いにラウラの声のトーンが下がる。それを察した
のかクラリツサは若干優しげなトーンで続ける。

『焦らなくても良いと思います。この件に関しては隊長自身がじつ
く考える必要があるのです』

「ああ、わかっている」

臨海学校の後、ラウラはクラリツサにある相談をしていた。それは
敬愛する千冬に対して芽生えた若干の不信。そしてその想いに対す
る自身の戸惑いだ。

修学旅行の件。やはり千冬の判断は間違えていた様に思えたのだ。
更には無人機が存在と篠ノ之束の登場がラウラの不信を募らせる。
第四世代機の唐突な登場。都合よく発生した事件。その対応に適
任のセシリアを差し置いての箒の出撃。まるで千冬と束が協力して
舞台を整えようとしたのでは？ そう勘ぐってしまう。そしてそん
な事を考えてしまう自分に対しての戸惑いがあった。

「学園に来るとき、私の中では教官が全てだった。だがそれが揺らい
でいる。その度に思うのだ。私の想いはこんなに脆かったのかと。
そして一夏を想う気持ちも同じく脆いのでは無いか。そもそもその

気持ちには本当なのか。わからなくなる」

どこか悔しそうにラウラが言葉を漏らす。自分自身が見え無いと言う感覚に不安と苛立ちが募る。だがそれに対するクラリツサの答えは意外な物だった。

『良いのではありませんか?』

「何?」

『人は変わる物です。その変化の良し悪しは結果が出ないとわかりません。隊長の変化が隊長にとって良い物なのか、悪い物なのか。そこまでは分かりませんが、変化すること自体には意味があります。何も変化しない人間など、進化すら捨てている様なものですから』

「……」

『その変化に戸惑うと言う事は自分を見つめ返す良いチャンスです。答えは自分で出す必要はありませんが、その行動は必ず隊長の糧となります。一番やってはいけないのは思考を放棄して投げ出す事です。確かに織斑教官の行動には疑念が残りますが、何か考えがあったのかもしれない。教官にとっても予想外の事があったのかもしれない。逆に最初から狙っていたのかもしれない。あらゆる可能性があるでしょう。その原因については調べる必要は有りますが、隊長自身の心に関しては自身で決着をつけるのが最も良いかと』

「それが出来れば苦労はしないのだがな」

『悩む事も大事なのです。直ぐに答えを見つける必要は有りません。他の人に意見を聞くのも良いでしょう。その上で自分自身で決断を』
「……まったく、部下にここまで言われるとはな」

ふう、と息を吐きつつラウラは苦笑する。その行為自体、以前の自分なら考えられなかった物だ。それを思いラウラは再び笑う。

(確かに私は変わっているのかもしれない)

「わかった。もう少し、考えてみるとしよう。年寄りの意見は大事だ」
『ちよつと待って下さい! 確かに年上ですがそんなに変わりませんよ!』

「そうだったか?」

無論知っている。こんな冗談も今までは考えた事も無かった。だ

が実際やってみると相手の反応が中々面白い。これも自分が変わったからだろうか？

そんな事を考えながらラウラは通信越しに慌てるクラリツサを宥めるのだった。

東京都内。繁華街の中にある小さな喫茶店で男女が向かい合っていた。一人は草薙由香里。K・アドヴァンス社社長。そしてもう一人はIS委員会の一人、桐生だ。

「日本政府が？」

由香里は持ち上げていたティーカップを降ろすと眉を潜めた。その向かいに座る桐生がパフェを口に運びながら頷く。

「うん。どうもそちらに干渉したいようだよ。まあ狙いは件の新型ラファールでしょ」

「ISのコアは国家に帰属する。確かに共同開発とは銘打ってるけど、新型ラファールはあくまでフランスの物なのよ？　うちは表向きは『ISコアを借りているだけ』」

「それでも日本の企業であるK・アドヴァンスが関わっているのも事実。この機会に新型ラファールの情報をすっぱ抜いて、あわよくば日本のどこかの企業で使うつもりなんじゃないかな」

特大のイチゴを頬張りつつ呑気そうに語る桐生に由香里はうんざりした顔になる。

「ISの情報公開も全てという訳じゃないからそれを狙うのは分かるけど、それが嫌だからIS委員会に例のお願いをした筈なんだけど？」

以前IS委員会とK・アドヴァンスは取引をしている。それは静司の存在を委員会が利用する代わりにK・アドヴァンスが求めた事。K・アドヴァンスに静司が所属する事の容認。他の国や企業の干渉を認めない事。事業に口出しをしない事。そしてシャルロットの事だ。「それは承知してるよ。だから釘は刺しているけど日本も必死だからね。ISに関して最初は最も優れていたけどあつという間に地位を

落とされた。IS学園の運営費用の負担なんかいい例さ。それでもISを生んだ国。世界最強が居る国という事で矜持は保っているけどやはり面白くないだろう」

「学園の地下にこっそりあんな物作ってたものね。あれって各国の試験機データとか集めて利用しようとしてるんでしょ？ アラスカ条約なんて完全無視よね」

実際に整備なども学園で行われる。その際に公開されていないデータを少しずつ読み取っていき、利用するための施設が地下にあるのだ。そんなものがバレたら日本は世界中から非難を浴びるだろう。「まあ誰だって後ろめたいことはあるさ。それより問題はフランス側だよ。デュノア社がもし第三世代を発表したらイグニッションプランの選考にエントリーされる可能性が高い。そしてそれはフランス国内の競合他社にとっては面白くないだろう」「つまり妨害の可能性があると言う事ね。まあそれは予想してたけど」

「だろうね。ただここ最近ちよつとキナ臭い動きしてる連中が居るからその辺りは気を付けると良いよ」

「道理で、ここ最近ストーカーが増えたと思ったわ」

そう言つて由香里は詰まらなそうに紅茶を飲むが、桐生はぎよつ、として肩を震わせた。

「尾行されてるのかい？」

「ええ。今も外に何人かいるわよ。ああ、窓は見ない様に。バレるか」

窓に向けようとしていた視線を慌てて戻しつつ桐生は呆れた顔になった。

「なんでそんなに冷静なんだい？」

「対して脅威に感じてないもの。粗方私を脅してラファールの情報を聞き出そうとしてるのでしょうけど、特に問題は無いわ」

「理由を聞いても？」

「今日のヒール。実は爪先に鉄板を仕込んでるの」

「……」

思わず桐生は内股になった。

「それに私だって一人でうろついている訳じゃないから。あの程度の連中なら3分で泣きながらごめんなさいしか言えない様にできるわよ」

「そ、そうかい。それは頼もしい……」

「ま、そういう訳だから私たちは今まで通り開発を進めるわ。新型ラファールはデユノア社だけじゃなく、共同開発したうちにも恩恵があるもの」

そう言い放つと由香里は話は終わったとばかりに立ち上がり、伝票を取ろうとしたがそれを桐生が遮った。

「ここは僕が出すよ」

「あら、珍しい。何が望み？」

「すつぱりしてていいなあ。じゃあ新型ラファールの名前でも教えて貰おうかな」

あら、そんな事？ と由香里は笑う。

「試作段階のコードネームは「ラファール・アヴァンセ」よ。まあ完成はまだ先になるけどね」

それだけを言うと由香里は店を出ていった。その後ろ姿を見送りながら桐生はふむ、と頷く。

「アヴァンセか。シンプルだなあ」

意味は前進・進歩だったか。恐らく社名のアドヴァンスと似た意味を持つ故にその名にしたのだろう。新型ラファールの発表はK・アドヴァンスの名を広める絶好のチャンスになる。

「さて、僕もそろそろ帰るかな」

必要な事をは伝えだし、知れた。後は帰って報告書を作るとしよう。そう決めると桐生も席を立つのだった。

(懐かしいな……自分の家だった筈なのに)

8月も盆に入り、IS学園の休みも残り僅かという頃。筈はとある

神社に居た。

その神社の名は篠ノ之神社。箒が転校するまで住んでいた場所であり生家である。だがここも、IS発表後の混乱による重要人物保護プログラムによって永らく離れていた。

敷地内を歩いていると板張りの剣道場が視界に入る。昔はここでよく一夏と勝負をしていた。何度も挑んできては負ける一夏と、一夏が訪れるのを待ちわびていた自分。そしてそれを時に呆れ、笑い、時に厳しく見つめていた両親や千冬。そして——姉である束。

篠ノ之家が離れた後は、近所に住む馴染みのあつた警官が定年退職後に剣道教室を開いているらしい。神社そのものは親戚が維持してくれていた事もあり、廃墟となつている事は無かつた。

(もし、ここを離れることが無かつたら……)

自分は一夏と一緒に居れた。もっと多くの時を過ごしていけた筈だ。しかしそれは叶わなかつた。姉が作ったISという存在によつて。

(あの人、あんな物を作らなければ……)

考えずにいられない。姉の作ったISによつて自分の人生は大きく変わった。その事を思うと箒の顔が陰しくなる。

(だが、これをくれたのもあの人だ)

左腕に眼を落とす。幅一センチほどの交差した紅い紐。その先端には金と銀の鈴が付いており、これが紅椿の待機形態だった。

紅椿。世界初の第四世代のIS。一夏の隣に居たいが故に、姉に願い、そして受け取つた物。姉は自分の我儘を快く応じてくれた。それも事実だ。そして自分が姉を頼つた時、姉の声がとても嬉しそうだった。あんな声は久々に聞いた気がする。

(そうだ……昔は違つた)

まだISが発表される前。箒は姉の事が好きだった。確かに変わっている所も多く、俗に言う変人だったが、その頭脳は当時から飛びぬけており各所から賞賛されていた。そしてそんな姉を誇らしく思っていた事もある。だがそれも全て変わってしまった。

この数年間で箒の周りは大きく変わった。そしてその原因は姉。

箒はその事を恨んでいる。しかし自分の無茶な願いを嬉しそうに引き受けてくれたのも姉。一体自分はどうしたのだろうか。恨みたいのか、許したいのか。その答えが分からない。

そんな風に考え事をしてきたからだろうか。箒はいつの間にか同情の裏の雑木林の手前まで歩いてきていた。よくこの雑木林の中で一夏と遊んだのを覚えている。道場でやる稽古でなく、時代劇の殺陣の様にチャンバラをした。今思えば酷く女らしくない思い出だ。だが一夏と居れた事が彼女にとって何よりも嬉しかったのだ。

そんな記憶を探りながら箒は雑木林に足を踏み入れる。夏の日差しは木で遮られ、どこか湿った空気を感じた。だがそれを不快には思わず足を進めていく。辺りを見回しながら思い出に浸る。

(そういえば、この辺りで一夏が怪我を――)

雑木林に入って少し。不意に気配を感じて箒は視線を正面に戻した。そこにはいつの間にか女が立っていた。女は麦わら帽子を深くかぶり、上下とも長袖の服を着ている。肩にはタオルを下げている事から農作業か何かの途中に見えた。だが雰囲気はどこかおかしい気がする。

「こんにちは」

不意に女に声をかけられ、箒は慌てて返事をした。

「ど、どうも。あなたはここで何を？」

「直ぐに分かりますよ」

「え？」

それは完全に不意打ちだった。女は一瞬で距離を詰め。箒の眼前に迫る。その手にはナイフが握られており、切っ先は箒の喉に向いている。余りにも突然のその行動に箒は全く反応できなかった。

「あ――」

殺される。そう思った瞬間だった。突然女が横に吹き飛んだ。

「がっ!？」

吹き飛ばされた女は二度三度と地面を跳ね、やがて木に激突するとがくり、と力なく倒れた。箒は呆然とそれを見ていたが、不意に女の腹の付近に有る物に気づく。それはニンジン型のミサイルの様な形

をしていた。こんな物を作る人間を箒は一人しか知らない。

「全く、こんな馬鹿がまだ居たとはね」

「……姉さん」

雑木林の奥。そこから姉である束が姿を現した。箒と眼が合うと束は嬉しそうに手を上げた。

「やあやあやあ箒ちゃん、元気？ ハツラツ？ 先月ぶりだけど顔が生で見れて私は嬉しいよ！」

相変わらずの妙なテンションで話しかけてくるが、箒は言葉を返さない。しかし束は気にした様子も無く笑顔で続ける。

「いやー箒ちゃんが今度のお祭りで神楽舞をやるって情報を束さんリーダーがキャッチしてね！ これはデータブルーレイDVDビデオレーザーディスク8mmビデオとあらゆる方法でその姿を保存するしか無いと思ったので、やって来たんだよ！ ぶいー！」

そういつてVサインを作る束。しかし箒にはそれより気になる事がある。

「この女は？」

「ん？ ああ、心配しなくていいよ。大事な箒ちゃんにちよつかい出そうなんて馬鹿だねー。後で簀巻にして刑務所に直接放り込んでおこうかな？ データをちよつと弄れば無期懲役なんて簡単だしね」

「ふぎ、ける、な……」

女が震える体を支えながらゆっくりと立ち上がる。直撃を受けた腹を片手で押さえながら、もう片方の手には拳銃が握られていた。

「篠ノ之、箒……貴様の、ISを……渡して、もらう」

「何だと？」

苦しそうに息を吐きつつ告げた女の言葉に箒は眉を顰めた。その様子が気に入らなかったのか、女の顔が歪む。

「貴様、はそのISの価値を……分かっていない、のか。所詮、子供かっ」

紅椿の価値。それを一瞬考え、直ぐに理解した。このISはまだどの組織も持たぬ第四世代機。世界最高峰とも呼べるスペックを秘めた機体。ならばそれを狙う者が居てもおかしく無い。

「直ぐに、貴様らは包囲される。そうなれば、嫌でも渡してもらおう」
段々と息を整えてきた女が笑う。しかしそれに束は詰まらなそうに言い返す。

「あーそれは無理だねえ。仲間はずど掴まってるし。全く、IS委員
会ももうちよつと早く動いてくれないと唯の馬鹿の集まりだね。今
度ミスしたらお仕置きしなくちゃね」

「何……!?!」

「だから無駄だって事だよ。と、言う事で君は退場!」

束の宣言と同時に、その手に光が集まりその光派ニンジン型の銃の様
な形へと変わる。ISの量子変換だ。

そのニンジン型の銃を女に向け引き金を引くと、先端のニンジンそ
のものが射出。再び女の腹にめり込み、今度こそ女は気を失った。束
はそれを興味なさ気に一瞥すると、箒に笑顔で振り返る。

「さて、と。じゃあ私は帰ろうかな。ああ、箒ちゃんの雄姿はちゃんと
見るから楽しみにしてるよ!」

「待つてください!」

そのまま去ろうとする束を箒は飛びとめる。ここまでの成り行き
にはついていけず見ているだけだったが、姉にはどうしても聞きたい
ことがある。

「お、おお!?! 箒ちゃんに呼び止められた♪ 何かな? 束さんにな
んでも言ってみよう!」

「姉さん。貴女は私たちの敵ですか?」

箒が思い出すのは臨海学校での事件。そして無人機と共に居る姉
の画像。その二つの結びつき位、箒でもわかる。だからこそ本人から
聞きたかった。

「んー? 不思議な質問だねえ。答えは決まってるよ。私は箒ちゃん
やちーちゃん、それにいつくんの味方だよ」

「……っ!」

当たり前のように答えた束の言葉に箒は身震いがした。姉の言葉は
まるで、それ以外は敵だと言っている様な気がしたのだ。

「姉さん。私はあの画像の真偽を知りたい。それに私達と言うのは一

夏達の事だけじゃなく——」

「けど邪魔だと思つたことは無いかな？」

「何を——」

「たとえばあの中華女とか」

「！」

一瞬、箒の息が詰まる。

「それにイギリスやドイツにも居たね。他にもちらほらと居るいづくんに近づく馬鹿な連中を邪魔だと思つたことは無いかな？」

「そ、そんな事は……」

箒にとつては友人であると同時に恋敵でもある。疎ましいと思つたことが無いとは言えない。彼女達さえ居なければ、一夏の隣は自分だけの物だつたと思つたことは有る。そんな箒の心境を知つてか知らずか。束は慈愛に満ちた、しかしどこか狂気じみた笑顔で続ける。「安心していいよ箒ちゃん。箒ちゃんの場合は私が作つてあげるから」

「何を……！ 元々奪つたのは姉さんではないですか！」

ISさえなければ。先ほども感じた怒りをぶつける。

「うん、確かにそうだね。あの時はまだ準備が足りなかつたから。だけれどもうすぐそれも終わるよ。種は撒き、そして根付いた。だから大丈夫」

準備？ 種？ 根付く？ 意味が分からぬ姉の言葉に箒は言葉を返せない。だが姉は。世界最高の天災はそれに気づかず、歌う様に続けた。

「必要なモノだけを残し、不要な物は世界から切り捨てる。大丈夫、束さんは完璧だからね！」

「姉さん？ 貴女は一体何を……」

「ふ、ふ、ふ。それはお楽しみだよ。じゃあそろそろうるさい連中も来そうだから私は帰るよ。箒ちゃんと一杯お話出来て楽しかったね！ 今週がこれでご飯十杯は行けるよ！」

「待つて——」

止めようと伸ばした手は空を切る。大きな風が吹き、思わず目を閉

じてしまう。そして次に目を開いた時、そこには誰も居なかった。誰も居ない空間。それを呆然と見つめながら姉の言っていた言葉を反芻する。

「切り離す……？ 何を考えているんですか、姉さん」

そのまま呆然としてた篤は、彼女を密かに護衛していたIS委員会の人間が駆け付けるまでその場で立ち尽くしていた。

45. 狂信者

夏休みも終わり、いつもの風景に戻ったIS学園。その第三アリーナで2機のISが飛翔していた。先を飛ぶのは無骨なシルエットと両肩の物理シールド。そしてIS用のブレードを手にした打鉄。そしてそれを追う様に、大きな4機のウイングスラスタを吹かして飛ぶ白亜の機体、白式。静司と一夏の模擬戦である。

「この、逃げるなよ静司！」

「無理だ！」

後を追う一夏が苛立ち気に叫ぶが、逃げる静司は即座に叫び返す。性能的には打鉄と白式の性能差は歴然としており、普通に逃げていては即座に追いつかれる。故に静司は上下左右、時には反転などを多用して逃げ続け、それをひたすら追う一夏という光景が先ほどから続いている。

「このっ！」

痺れを切らした一夏が左腕の荷電粒子砲《雪羅》を撃つ。静司はそれを躲すが、その隙に一気に接近した一夏が《零落白夜》を振り下ろす。

「っ！」

迫るエネルギーの刃。しかもこの刃はエネルギー無効化という厄介な能力を持っている。直撃すれば、訓練機の打鉄などひとたまりもない。故に静司は受ける事はせず、その斬撃もギリギリで回避する。だが打鉄のエネルギー残量を示す表示は減少していた。僅かに掠つてしまったのだ。そしてその掠りだけでも、エネルギーはかなり奪われている。

(本当に、やっかいな武装だ……！)

攻撃の後に隙が出来た一夏を蹴り飛ばしつつ、その反動でもう一度距離を取る。バランスを崩し、ゆらゆらと揺れる一夏を伺いつつお互いのエネルギー残量を確認した。

静司の打鉄は既に四分の一を切っており、対し一夏の白式は半分程。情報だけを見れば静司が不利な状況だが、一夏の顔には焦りが見

える。それも当然だ。一夏はまだまともに静司に攻撃は当てていないのだ。

模擬戦開始から静司はひたすら逃げに徹し、それを追いかける一夏という構図が続いている。そして白式は他のISに比べて圧倒的に燃費が悪い。戦闘が長引けば長引く程一夏の余裕は無くなっていくのだ。故に一夏はエネルギー無効化での一撃必殺を狙い、静司は逃げ回ってのエネルギー切れを狙っている。

「くそ、後少しだったのに。静司！ 真面目に戦えよ！」

「真面目だよ。特技を活かしているだけ」

(と、言ったものも……)

手残り時間はもう少ない。このまま行けばエネルギーの残量差で一夏の勝利になる。しかし一夏はそれで納得しない事は予想出来る。だから次に来るのは――

静司が予想を立てるのとはほぼ同時。一夏の白式が構え、そして飛び出した。ハイパーセンサーでも知覚仕切れないそれは瞬時加速での特攻だ。対し静司は予想していたが故に事前に用意していた物――安全装置を外した手榴弾を目の前に突き出した。

「んなっ!？」

距離を詰めた一夏の顔が青ざめるのを見ながら静司はにこり、と微笑み。

「死なば諸共」

《零落白夜》が決まるのとほぼ同時、手榴弾の爆発によって二人は吹き飛ばされた。

「中々面白い模擬戦だったわね」

「見てたんですか」

場所は変わって生徒会室。テーブルを挟んで向かいに腰かける楯無はコーヒーを飲みながら面白そうに頷いた。

「ええ、たまたまだけだね。男性操縦者同士の戦い。他の皆も盛り上

がってたわよ?」

楯無は面白そうに笑うが、静司は若干悟った様な遠い目で、

「殆どが一夏目当てでしように」

軽くいじけていた。

「悲観的ねえ」

「そこで一言でも否定してくれれば希望は持てたんですけどね……」

なんだかなあ、と肩を竦めつつコーヒーを飲もうと、目の前のテーブルに手を伸ばすが、それを隣の声が遮った。

「む、かわむー動いちやだめ」

「ん、了解」

伸ばした手を引っ込めて声の主に視線を移す。静司の隣では本音が何やら工具や機材を片手に静司の左腕を弄っているのだ。静司は左腕を横に伸ばした状態で小さな台に載せられている。血圧を測る時の様な格好だが、本音が行っているのは当然そんなものでなく、静司の左腕の整備だ。

その様子を楯無が興味深げに覗き込む。

「しかし改めて見るけど本当に常に部分展開してるのね。疲れないの?」

「流石に慣れましたから。けどやはり調子が悪いと違和感は有りますよ」

「ふーん。だからこそその整備って事ね。まあISも機械だからその辺りは当然よね。時たま本当に機械なのか分からなくなるけど」

確かに、と静司も思う。意思を持つ機械。簡単なら自己修復も可能。挙句の果てに生体再生。本当に機械なのか疑う気持ちもわかる。「私たちは未だにISの事をちゃんと理解はしていない。全ては篠ノ之博士のみぞ知る、か。嫌な話ね」

「……そうです。しかしだからこそ知らなければならぬ事が沢山ある。それは俺達だけじゃなく、一夏達も」

篠ノ之束の事を思い出し思わず強張る。静司の雰囲気は鋭くなっ
ていき、楯無の後ろに控えていた虚が一瞬身じろぎした。その様子に楯無も目を細める。静司が突然暴れ出すとは思っていないが、今の空

気は良くない。故に止めるべきか考えた。だが、

「かわむし、力んだら数値が変わるから駄目」

「あ、ああ。悪かった」

機材のモニターと静司の左腕を交互に見ながら漏らした本音の不平に静司は慌てて謝罪した。そのせいかわ、生徒会室の空気も緩みもとに戻った。虚がほつ、と息を漏らし楯無も苦笑する。本音の一言で戻った場の空気。果たしてそれを狙ったのかどうかはわからなかったが。

「それで、さっきの模擬戦も一夏君に知ってもらおうかしら？」

ふふ、と楯無は笑いながら口元の扇子を開く。そこに書かれているのは『日々鍛錬』

「白式の燃費の悪さの再確認。逃げ回る相手を無策に追いかけては意味が無い。一夏君も改めて実感したんじゃないかしら？」

「一夏自身も前から気にしてましたから再確認みたいなものです。一夏には文句を言われましたけどね」

先の模擬戦。結果は一瞬の差で《零落白夜》に斬られた打鉄のエネルギーが尽きたため一夏の勝利だった。しかし一夏の白式も至近距離で受けた爆発によって、直ぐにエネルギーが尽きた。結果的には勝ったものも、一夏は大層不満そうだった。

「けどどうして今更？ 白式の訓練ならもつと前から出来たでしょ？」

「方針の変更です。これまでの事件も、中心近くには一夏が組み込まれてきた。この先もおそらくそうなると思った場合、一夏自身で自衛出来る力を鍛えるのが最も一夏の為になると」

無論、事件そのものに巻き込まれないのが一番いい。その努力はこれまででも、そしてこれからも続ける。だが保険はかけておくに越したことはない。

「それで学園の方はどうなんです？」

「警備は以前に増して強化。もうすぐ学園祭もあるから今はその警備体制のチェックをしている最中よ。生徒達の方だけ……正直少しピリピリしてるわね」

「どういうことですか？」

「もう一人の篠ノ之。箒ちゃんの紅椿の件でね」

「はあ、とため息を漏らす。静司も楯無は言わんとする事がわかり同じく息をつく。」

「妬み、ですね」

「ええ。一年生はまだそれほどでは無いけど、やっぱり二年、三年の子達はそうもいかないみたい。勿論全員が全員って訳じゃないけどね」

「IS学園の生徒は卒業後もISに関連する組織で働くことになるのが大多数だ。ISコアの数は限られている為、全員がIS操縦者になる訳では無く、生徒達もそれは理解している。故に一年の基礎課程を終えた後は、整備やシステム、IS関連経済などに特化した学科を選び学ぶことが出来る。だがそれでも彼女達が自分だけの専用機に憧れるのは当然だ。」

「通常専用機を持つのは各国の代表候補生や、既に企業に所属しているテストパイロット。そして一夏の様な特例位だ。残りの生徒達は訓練機で学びつつ、いつか自分もスカウトされ専用機を——という思いがある。」

「だからこそ、箒の専用機受領は軋轢を生んだ。これまで特別目立つた成績は無く、適性もC。そんな彼女が突然最新鋭の第四世代ISを手にしたのだ。これを面白く感じない生徒は多い。自分達の努力は何だったのか？ そう思わずにいられない。更にその機体は第四世代。それはIS操縦者を目指す者以外にも面白くないだろう。自分達が学び、いつかたどり着いて見せると考えていたモノが、突然現れたのだ。結局ISに関しては篠ノ之束の思い通りにしかいかないのか。そう考えるのも無理も無いのかもしれない。」

「今のところはただの不満で思い切った行動をする子は居ないけど、正直いつかは爆発してもおかしくないわね」

「そちらは頼みますよ。学園の外ならともかく、中の事情には俺は余り干渉できないですから」

「わかってるわ。しかしこの分だと例の件は隠したままの方は良さそうね」

「篠ノ之のIS適性の事ですか」

「こくり、と頷き楯無は幾つかの調査書を取り出す。それは全て箒に関するものだ。」

「先日の結果よ。彼女のIS適性は入学時はC。だけどこれではSと出たわ」

「間違い……では無いんでしょうね」

「ええ。何度も確認したけど結果は変わらず。本人にはまだ伏せているけど、彼女の動きを見る限り間違いなさそう。そして考えられる原因は一つ」

「紅椿の受領。そして篠ノ之束との接触」

「そ。妹の為と称して第四世代を持ってきたついでに適性まで底上げした。本当にそんな事が出来るかどうか疑問だけど、それしか考えられないわ。ふざけた話よ、適性云々で人生が変わる子も居るって言うのに、こんなに簡単に変えられてはね」

「……」

まったくもって同感だ。そして本人はそんな事微塵も感じていない事も予想が付く。それが何よりも腹立たしい。

再び重くなる空気。それを嫌ったのか、楯無は急に笑顔を浮かべた。

「さて、面倒ばっかで疲れちゃう。ということでちよつと気分転換しない？」

「気分転換？」

「そ♪ 今度の学園祭で考えてることがあるんだけど——」

そう笑い楯無は話し始めた内容に静司と虚の顔が引き攣った。

「却下だ」

「却下です」

「えー!？」

「何を驚いてんですか。一夏を学園祭の景品代わりにするなんて却下に決まってるでしょうが。一夏は玩具じゃないんですよ」

「そうですよ、お嬢様。流石にそれは織斑君が可哀想です」

楯無の提案。それは今度の学園祭の投票次第で一夏をどこかの部

活に所属させると言う内容だった。流石にこれは静司としても許容できない。

「大体、たった今一夏を鍛えなければという話をした所でしよう。それなのに部活やる暇があるんですか」

「あら、意外に重要よ。IS専門の学校と言えど、皆年頃なんだから。訓練ばかりじゃ息が詰まっちゃうもん。学園祭だって半分くらいはその為だし」

「それは知ってますよ。別に部活の存在を否定するわけじゃない。息抜きは誰にだって必要ですから。けど一夏の場合は状況が違うでしょうが」

「まあそうなんだけどね。ただちよつと苦情が来てるのよ。学園でも貴重で皆の興味の対象である男性操縦者が部活に入っていない、って事で。まあそんな内容で苦情が来ること自体おかしい気もするんだけどねー。ただまあ余りにもそんな苦情というか要望が多すぎて生徒会としても何らかの手を打たなきゃと」

「それこそ横暴でしょうが。一夏本人の意思はどうするんです」

「んー、この際仕方ないかなーと」

「何？」

身勝手な言葉に静司が眉を潜め楯無を睨む。対し楯無も扇子を口元に当て薄く笑う。

「君たちにとって一夏君や生徒の安全が第一なのはわかるわ。けどね、生徒会長である私はそれとは別に、生徒達の過ごしやすい環境を作る義務があるのよ」

「その為に犠牲になれど？」

「その言い方は好きじゃないわね。勿論織斑君の警備は続けるわ。だけれどね、今の学園の空気は数度にわたる謎の襲撃や、先の箒ちゃんのISの件も含めてちよつと良くないのよ。だからこころで一回ガス抜きしたいわけ」

一夏の安全重視の静司と、学園の生徒全体の事を考える楯無。どちらが正しいと言う話では無い。どちらも正しいが故に相互の意見がぶつかり合ってしまう。

「勿論、一夏君を鍛えるのには賛成よ。私も協力するわ。だけど生徒達の事も考えてくれないかしら？」

「それでもまずは一夏自身の意思を確認しろ。全てはそこからだ」

睨み合う二人。再び重くなる空気に虚は身震する。そしてお互い再び口を開こうとした時だ。

「できたくー！」

呑気な声を上げた本音に驚き、思わず二人とも動きを止めた。

「かわむー、調子はどう？」

「あ、ああ。良好だ。ありがとう」

左手を握っては開きを数度繰り返し、腕をかるく回すが問題は無い。むしろ動作が軽くなった気もする。

「ならおっけー。おなかすいた」

当の本音はテーブルの皿に乗せられたお茶請けのクッキーを摘まんでいる。きよとん、とその光景を眺めていた三人だが虚が慌てて本音を叱る。

「本音、まず手を洗いなさい」

「てひ、バレたく」

余り反省している様に見え無い様子で本音は洗い場へ向かう。

「まったくもう……」

虚もそんな様子を怒りながら、しかしどこかほっとしながら見つめる。その二人を見て静司と楯無は自分達が周りに緊張を振りまいていた事に気づき肩の力を抜いた。

「ちよーと熱くなっちゃったわね。おねーさん反省」

「俺もです。ですが、」

「譲るつもりは無い、よね。わかったわ。なら一夏君に直接聞いてみるとうしましろう」

「……言っておきますが、『一応聞きました』とか言いつつ一夏に強制するのは無しですよ。後で確認します」

「わかってるわよ。私ってそんなに信用ない？」

「それほどお互い知り合ってる訳じゃないでしょうに」

はあ、とため息をつく。だが楯無は面白そうに笑う。

「あら、じゃあ本音ちゃんは？」

「本音は……」

ちらり、と視線を移すとぼりぼりと幸せそうにクッキーを食べる本音と、行儀が悪いと怒る虚の姿。

「信用も信頼もしてます。じゃなきやメンテだって認めませんよ」

それでは、と静司は席を立つ。元々の目的は左腕のメンテも兼ねた情報交換。それが終わったので一夏の護衛に戻るのだ。

「かわむー、帰っちゃうの？ お話しよー」

「すまん。この後山田先生に呼ばれてるんだ。また後でな」

「んくわかった。じゃあ後でポックリで対戦しようね。私のギガチュー部隊が火を噴くぜー」

「あの鳴き声苦手なんだよなあ。まあ了解したよ。じゃあまた」

ひらひらと手を振り静司は生徒会室を後にした。

静司が去った生徒会室。虚は相変わらずクツキーを頬張る妹を呆れながら見つ、ふと主人に聞いた。

「そういうえば例の苦情ですけど、織斑君について聞きますけど川村君については――」

「虚、川村君があえて避けたその話題を蒸し返しては駄目よ」

「は、はあ？」

川村静司。同じクラスの間では大分マシになったものも、他では未だ敬遠されがちな高校生（仮）だった。

「さ、て、と。じゃあ私は一夏君の所に行つてこようかな」

「お嬢様、川村君も言っていましたがあまり強引な手段は……」

「わかってるわよ」

うふふ、と楯無は悪戯を思いついた様な顔で怪しく笑う。そして口元を扇子で隠しつつ、

「同意してくればいいのよね。ふふふ、川村君、おねーさんを甘く見ない事ね」

軽い足取りで生徒会室を出ていく。その姿を見送りつつ虚は確信

した。きつと主人の思い通りに事が進むと。これは長年仕えてきた勘だ。

「川村君、すいません」

どこか諦めの籠ったため息を付き、虚は天を仰ぐのだった。

「学園祭……呑気な物ねえ」

「同感です」

何時もの研究室。カテーナの呆れた声にシェーリが同意する。

「ま、目的は分からないでも無いけど。しかしイベントの多い学園だこと。ところでシェーリ、今回のこのイベントに篠ノ之博士は介入すると思う?」

主人の問いにシェーリは少し考え首を振った。

「半々、でしょうか。今回はISが直接的には関係しない行事ですから、これまでの様に織斑一夏や篠ノ之箒に無人機の相手をさせる、というのは面倒かと思われます。その前に学園の警備部隊が来ることでしょうか」

「しかしそれすら気にせず来る可能性もある、か。確かに分からないわねえ。それに川村静司の事もあるし」

「篠ノ之博士は彼の正体に気づいていないのでは?」

「でしょうねえ。気づいてたらとつくに襲撃してそうだもの。散々邪魔されたんだから。けど臨海学校の件を見るに、『黒い翼のIS』である川村静司とは別に、『もう一人の男性操縦者』である川村静司も良い感情を持っていないわねえ」

「つまり男性操縦者としての川村静司に対して介入すると?」

「ま、あくまで仮説なのよねえ。何も起きないかもしれないし。ただ、それはちよつと詰まらないと思わない?」

カテーナはそう笑い手元のコンソールを幾つか叩く。続いて彼女の正面、壁一面を覆うモニターに表示された内容を見てシェーリは成程、と頷いた。

「この情報を彼らに渡したら中々面白いと思わない? 丁度オータム達も悪巧みしてる様だし、援護にもなるしねえ」

「サンマ女の手助けは少々癪ですが、有効かと思えます。IS学園の反応を見るのにもいい機会です。それに――」

「それに？」

ふ、とシェーリは笑いつつ主人に告げた。

「私の主人が楽しめるのなら、私はそれを実行するまでです」

「ま、私は快樂主義者だからねえ。それじゃあ手配をお願いするわ。折角のお祭りだもの。せいぜい馬鹿騒ぎしてもらいましょうねえ」

楯無と話した翌日。静司は自分の詰め甘さを呪っていた。頭を抱えつつ、目の前の一夏に問いかける。

「了承したのか……あの話を？」

「あ、ああ」

静司のがつくりとした様子に一夏も若干バツの悪そうに頷いた。

時刻は朝の7時半。二人は朝食を取るべく食堂に來ている。そしてその話題は他でも無い、楯無の件だ。

「何でだ？ 言い方は悪いが完全に出汗にされてるんだぞ？」

「そ、それは分かってる。ただ勝負に負けだからな。男に二言は……無い」

一夏の話を聞くに、昨日早速楯無は一夏に接触したらしい。そしてあの手この手で一夏を翻弄し、最終的に生身の勝負の末、一夏が勝てばもう付き纏わない。楯無が勝てば、景品役になると言う事になったとか。

「どういう話の展開でそうなったんだよ……」

「ぐ、それは……」

「挑発でもされたのか？ それとも色仕掛けか？」

「……」

「おい一夏。何故目を逸らす」

「い、色仕掛けは、無い。事故はあったが」

「なんだそのお互い袴姿で勝負した挙句ちよつとした事故で相手の袴を剥いでしまい下着を見てしまった青少年の様な顔は」

「なんで知ってるんだ!？」

「……本当にやったのか」

「け、けどな! その代わり稽古を付けてくれるらしいんだよ! あの人めちやくちや強かったから、自分の為にもなる……筈」

「……まあそうだろうけどな」

実際それは事実だ。静司は正体を隠している以上、本気で一夏を指導するわけにはいかない。そうなると一夏の指導は普段の教師による授業と放課後の専用機持ち達との訓練になる。前者は非常に重要かつ、的確なので静司としても役に立つことがある。後者も悪いという訳では無いが、少々癖があるのだ。そう考えると国家代表でありIS学園最強の名の下に指導を受けられるのは運がいいとも言える。

(結局俺がごねてるだけか……)

一夏の為、一夏の為と言うのはエゴだろう。経緯はどうあれ一夏が選らんだのならそれに合った警備をするまでだ。幸いIS学園の部活も毎日という訳では無い。

「まあ過ぎた事は仕方ないか。とりあえず頑張れよ、一夏」

「静司は手伝ってくれないのか?」

「俺にはそういった苦情やオフア―は来てないからな。ははははは……笑え」

「……なんかすまん」

「と、言う事でクラスの出し物を決めたいんだが……」

同日。放課後の特別HRでは一年一組の出し物を決めるべく一夏がクラス代表として取りまとめようとしているのだが、場は混乱していた。原因は朝食後の全校集会にある。生徒会長である楯無が、学園祭の催しの一つとして一夏の強制入部賭けた部活対抗戦が告知されたからだ。因みにその告知に大いに沸く生徒達の中、一夏はどこか達観した、諦めの籠ったためでその報告を聞いていた。

そして今。一夏に関しては部活動対抗なのでクラスの出し物には関係ないのだが、うら若き女子生徒達は朝のテンションを維持したま

ま今に至る。

「はい！ 『織斑一夏とツイスターゲーム』なんてどう!? 一回3000円！」

「なんだそれは!? というかぼったくり過ぎだろ!」

「じゃあ『川村静司のコスプレ劇場!』は!? ニツチな層にきつとウケる！」

「笑えねえよ!? いや、泣き笑いだよ俺は！」

因みに静司は書記として黒板に案を書く役だ。本来は別の生徒の仕事なのだが女子が興奮しすぎて仕事にならないので静司が代理で行っている。

『織斑一夏と王様ゲーム!』で決まり! これで勝てる!」

「いえ、少ない資金で莫大な利益を生み出す予感がする『川村静司とギャンブル対決!』よ。負けそうになったら睨みを聞かせて相手の心をへし折る!」

「もういつそ『織斑×川村。愛の耽美劇場』で」

『それだああああああああああああああ!』

『やるかアホがあああああああああああああ!』

ぜえはあと静司と一夏が全力で却下した。それに生徒達が不満げにブーイングする。

「折角の男の子のなんだから有効活用しなくちやねー」

「私も先輩から色々言われてるんだよ。だから助けると思ってね」

「駄目だ。第一それじゃ俺達以外はどうするんだよ。もうちよっと普通の意見を出してくれ。例えばお化け屋敷とか」

一夏の言葉に静司も全力で頷く。未だに黒板には何も書かれていないのだ。このままでは埒があかない。

「お化け屋敷かー。確かに面白そうだけど」

「ああ、けど織斑君が脅かしてくると思えばそれはそれで需要あり?」
「けど川村君が脅かしに来たらお客さんガチ逃げしちゃう気が」

ぱらぱらと肯定的な意見が上がる。静司も一応案として黒板に『お化け屋敷』と書いていく。

「他に意見無いか? 勿論まともなもので」

「メイド喫茶はどうだ？」

ふと意見が上がる。意見の出所を見るとなんとそれはラウラだった。これには静司や一夏だけでなく、他の生徒達もきよとん、としていいる。余りにも意外過ぎる人物の意外過ぎる提案だったからだ。その間にもラウラはメイド喫茶の利点——利益の回収や休憩所としての需要などを語っていく。確かにこれは良い案だろう。しかしそうになると一夏と静司が問題になるが。

「静司や一夏は執事になって貰えばいいんじゃないかな？」

そのシャルロットの意見に皆が賛成する。

「織斑君の執事姿……。良い！これは良いわ！」

「うーん、だけどお化け屋敷も面白そうな気も。普通の学園では出来ないハイテクを駆使したガチ屋敷とか。それに織斑君や川村君とも周れる！つてやれば結構いける気が……」

「田島さんナイス！それも良いね」

「うーん意見はこんな所か？とりあえず静司、メイド喫茶も案として書いておいてくれ」

「了解」

言われ黒板に『メイド喫茶』と書く静司。その様子を見た一夏は、静司がやけに力強くメイドの文字を書いていた気がしていた。

(くっ、お化け屋敷が急に人気になるなんて)

意見が割れていく中、シャルロットは焦っていた。他でも無い、メイド喫茶案が潰れる事に。

先ほど黒板に文字が書かれる際、確かに静司が強張っていたのをシャルロットは見抜いていた。そして自分の判断が正しかったと確信する。つまり——静司はやはりメイド推しだと。いち早くそれを察知したが故に間髪入れずラウラに援護射撃をし、効果は抜群だった。しかし安心したのもつかの間、お化け屋敷案が徐々に増え始めている。

(どうしよう)

メイド服は正直少し恥ずかしい。しかしアピールするにはいい機会だ。故に彼女は躊躇わない。

ラウラがメイド喫茶を提案した時は驚いた。おそらく夏休み中に似たような店で一緒にアルバイトをしたのは原因だろう。だがよくやったとシャルロットは全力で感謝していた。

これなら何の問題もなくメイド服を着れる。

(後はこの案を通すための一押しを……！)

シャルロットが悩んでいると、教室の隅で展開を眺めていた真耶が「あれ？」と首を傾げながら、

「これって私たち先生もやるんでしょうか？　恥ずかしいですね」

その瞬間、教室の時間が止まった。

「先生も参加……つまり」

「うまくいけば、あの織斑先生に合法的にメイド服を……!？」

しんつ、と静まり返った教室内。真耶は着いていけず不思議そうに生徒達を見回している。

「え、えつとそれじゃあ採決を……とるぞ？　紙を用意したからこれに書いて投票な」

空気に若干気圧されつつ一夏が採決を取り始めた。

そして10分後。

お化け屋敷1。残り全員メイド喫茶に投票し一年一組の出し物は決定するのだった。

思い通りの結果に教室内が湧きあがる中、シャルロットは密かにガッツポーズをしていた静司を確かに見たのだった。

彼ら彼女らにとってその人物は神に等しかった。それだけの物をその人物は創り出したのだから。

IS。現行の兵器、技術を遥かに上回る奇跡の様な機械。聞けば独自の意思まで持っていると言う。これはもう新たな種族の創造ではないか。そしてそれを生み出したのは美しい少女。それが彼らの想

いをより一層強くする。IS生みの親である篠ノ之束は神に最も近い存在であると。

信者と呼ぶにふさわしいその者達は篠ノ之束の動きを常に敏感に察知する。理由は単純。その信者はどこにでもいるからだ。世間では天災などと呼ばれることもあるが、それは間違いだ。現に自分達と同じ考えを持つ者は数多い。彼女に対する侮辱は嫉妬や妬みからくる醜い感情だ。何故あのすばらしさを素直に感じないのか。事実世界は大きく変わったではないか。

彼女は時たま気まぐれの様に行動を起こす。しかしそれが彼女の選択なら、彼らはそれに無理やりにも理由を付けてより一層信仰を強くする。それはIS学園の出来事でも同じだ。

学園内の同胞から話は聞いていた。そして臨海学校の件も。軍の中にも同胞は居る。そしてこれまでの事件に彼女が関わっている事を知った。

彼らはそれに理由を付ける。学園には妹。友人。そしてその弟が居る。事件には彼らが巻き込まれている。ならばそれは彼女の与えた試練なのだ。自らが与えた剣を上手く扱えているのか、それを彼女は見守ってるに違いない。ああ、なんて羨ましい！ そのように見守って貰えるなんて！

だがその彼女に牙を剥く者が居る。黒い翼のISがそれだ。これはゆゆしき事態だが、正体は不明だ。故に手を出すことが出来ない。

だがもう一人、要注意人物がいる。それは彼女の友人の弟とは別の男性操縦者。これはつい最近手に入れた情報だが、彼女の使暴走したISはこの男に罰を与えたらしい。だが例の黒いISの妨害で罰は完全には執行されなかったと、そこにはそう記されていた。

「ならば私達が行いましょう」

送られてきた情報にはIS学園の学園祭の情報。警備の穴。そして当日侵入する手段が事細かに記されていた。この情報を疑いはしない。我々は何処にでもいて、全てを共有するのだ。それこそまるでISのコアネットワークの様に――

そして彼らは動き出す。歪んだ思想。自分勝手な解釈。そして壊

れた正義感を持った狂信者達。その存在を知る者達からは危険視されて
いる【篠ノ之主義者】と呼ばれる者達が動く。その目的は一つ。
川村静司の排除。

46. 宴の始まり

「うーん」

K・アドヴァンス社。社員達の休憩場所であるコミュニケーションルームで草薙由香里は一人悩んでいた。彼女の手には小さな紙が握られており、それをずっと眺めては首を捻っているのだ。

「何やってるんだ、由香里」

「あら、あなた」

声に振り向けば訝しげにこちらを見つめる夫、章吾の姿があった。オールバッグの髪に整えられた顎鬚。室内でもサングラスをかけ、黒のスーツを着こなすその姿はどこか紳士然としている。部下達からは課長と呼ばれているが、夫婦の間では『あなた』もしくは『章吾さん』と由香里は呼んでいる。

「仕事は良いの？」

「少し休憩がてら一服にな。そういう由香里はどうなんだ？」

「私も同じ。それとまあ考え事かしら」

そう言って手の中の紙を見せる。章吾はそれを見てふむ、と頷いた。

「IS学園の学園祭の招待券か。それがどうした？」

「うーん、ちよつとね」

IS学園の学園祭は各国関係者や生徒に関連する企業等とは別で、基本的に一般人は入場できない。しかし生徒に付き一枚、一般入場用の招待券を使う事が出来るのだ。静司もそれを貰ってはいるが、基本的に呼ぶような一般人の知り合いなど居ない。EXISの人間は一夏の護衛の為に入場できるように手配されているので招待券の使い道は無いのだ。なので『適当に使ってくれ』とばかりに静司は課長こと章吾にそれを渡し、章吾も特に思いつかなかったので妻に渡したのだ。てっきりそれかと思っただが、

「実はこれ、静司の分じゃないのよ」

「何？」

「静司から貰った分は、あっち」

ぴつ、と由香里が指さした方向。そこでは人だかりができており、何やら盛り上がりつつある様子だ。

「手前！ 今後だししたる!?」

「なっ……人間きの悪い事を言うな！」

「俺は騙せねえぜ。お前はコンマ数秒の差でグーからパーにフォームチェンジしやがった！ a s s a u l t の動体視力を舐めるなよ！」

「くっ、技術の無駄使いめえ……！ そんなに女子高に行きたいか!?」
「当然だ！」

と、何やら争っている奴らが居ると思えば、その周りではそれぞれがブツブツと何か呟いている。

「女子高女子高女子高女子高女子高」

「ふふふふ、I S 学園は云わば各国 I S の見本市の様な物……。嗚呼、生でそれを見る為なら私は血を流す事を厭わないわ」

「はいはい。それじゃあ仕切り直しくよー」

何やら白熱している様だがイマイチ趣旨がわからない。あと A 8 が一般社員も居る中で不穏な言葉を吐いていたので後で締めよう、と思いつつ視線で由香里に問う。

「静司の分の招待券争奪じゃんけん大会だつて。当日非番の連中が盛り上がりつつあつてもう」

「そういうことか」

会社関係と言っても、誰もが行ける訳では無い。あくまで数名だ。故にその他の一般職などが学園祭に行くためにはやはり招待券が必要であり、それを争っているらしい。確かによく見れば彼らの直ぐ近くには何故か額縁に入れられた招待券が飾られている。

「ん？ じゃあそれは誰のだ？」

静司が持っていた招待券は1枚。しかしここには2枚ある。その答えは意外な物だった。

「これはシャルロットちゃんの分よ。使わないからどうぞ、ってね」

先日、件の新型ラファールの件でリヴァイヴの最新データを必要とした。その際に由香里が電話かけた際にそういう話になったらしい。

わざわざ社長である由香里が電話したのは、学園出会って以来のシャルロットの様子を直に確認したかったからなのだが。

「育ててくれた親戚は来れないらしくてね。それで渡す相手も居ないから有効活用してくれって」

「納得のいっていないような顔だな」

「まあね。だってどこか諦めた口調でそんなこと言われたら気にしちゃうわよ。全く、苦勞性な子よ」

んー、と体を伸ばしながら苦笑する。確かに海外から来ている生徒も多いので、渡す相手が居ないというのは珍しい事じゃない。しかし彼女の場合、どちらかという自身の立ち位置、境遇が邪魔をしているのだ。

「うーん……そろそろあつちも落ち着いてきているだろうし、いい機会と言えば機会なのかしらねー」

ぶつぶつ、と由香里が呟く。章吾はそんな妻に声をかけず、しかし見守る様に正面に腰を下ろし、煙草を吸っていた。

そのまま数分程、腕を組み頭を捻っていた由香里だが、唐突に目を開いた。

「よしっ、決めたー!」

うんうん、と笑顔で頷く由香里。章吾はそこでようやく声をかける。

「その招待券の使い方か?」

「ええ。いい機会だし、そろそろお互い歩み寄るべきだと思うのよね。

あの二人は」

言うが否や携帯を取り出しコール。相手は自分の秘書でありすぐに出た。

「もしもし? ちょっと明日の予定追加ね。……大丈夫よ、元々行く予定だった所でもあるから、少し時間が延びるだけ。……ええ、そうよ。じゃあ調整お願いね」

電話を切った所を見計らい、章吾は尋ねた。

「で、その予定とは?」

その問いに由香里はにやり、と笑う。

「デュノア社へちよつくらお節介」

「疲れた……」

「ああ、本当に……」

学園祭まであと少しとなったIS学園。夕方の食堂で男二人はため息を付いていた。妙に消耗した2人の様子を、近くを通りかかった生徒達は不思議そうに見ている。

「楯無さん。あの人無茶苦茶過ぎだ」

「同感だ」

二人の疲労の原因は他でも無い、更識楯無。彼女が一夏のコーチ役となつた事で起きた諸々の出来事だ。

まず一夏のコーチという時点で、箒、鈴、セシリア、ラウラが反応した。そして全員が一夏と楯無に突っかかり揃って返り討ち。その実力を見せつけられ引き下がった。納得はしていない様だったが。そこまでなら静司にもあまり影響が無かったのだが、その後彼女は何か一夏と静司の部屋に私物を持ち込み住み込みとしたのだ。これには一夏は勿論、静司も反抗。そもそも二人部屋なのに三人になったら人口密度が上がり狭く感じる。そしてなにより、あの手この手で一夏と静司をからかってくる楯無と同じ部屋など、御免だ。部屋でくらしいゆつくりしたい。よって二人は共同戦線で断固拒否し、なんとかそれを阻止した。因みに、

『一夏君の護衛もかねてなんだけどなー。それに仲良くした方がやり易いし』

『……俺が何の為にここに居ると思つてんですかアンタは』

と静司と楯無の間で静かな対立もあつたのだが、何とか阻止できたのだ。だがその後が面倒だった。

放課後の訓練が終わり部屋に戻れば、何故か裸エプロン（水着着用）で出迎えられた。即座に叩きだしたのだが、油断した隙に再び部屋に侵入しており、何故か下着姿でベッドに寝転んでおり二人は脱力した。しかもご丁寧に静司が仕掛けたセキュリティを根こそぎ突破し

て、だ。これは流石に危機感を覚え、設備のレベルを上げた。どれだけふざけていても、対暗部用暗部の肩書きは伊達じゃないらしい。

他にもあの手この手で色々とからかわれ続け、静司も巻き込まれているのが二人の疲労の原因だった。楯無曰く、『一夏君と仲良くした方が今後色々やり易いでしょ?』との事だが、あれは確実にからかう事を楽しんでいる。

「まあコーチしてくれていること自体はありがたいんだけどな。実際教え方も上手いし」

「それは否定しないけどな」

実際、楯無の指導は分かりやすい。一夏は新たに増えた射撃武器の運用方法についてレクチャーを受け、確かに上達しているのだ。更には箒も彼女に指導してもらっているらしい。これは早く機体に見合った実力を持たなければならぬ事を気にして、楯無から提案した事だ。そして箒もそれを志願した。からかい癖のある楯無だが、どうも人をたらし込むのは得意らしく、一夏には『人たらし』とまで呼ばれている。

「あ、静司、一夏」

「む、お前達か」

不意に声がかかる。シャルロットとラウラだ。どうやら彼女達も夕食らしい。

「おお、おはよう」

「おはよう。……どうした、ラウラ?」

辺りをキョロキョロと見回すラウラに静司が声をかける。

「今日あの女は居ないのだな」

どこか不機嫌そうに答えるラウラ。どうも最初に会った時に敗北したらしく、敵対視しているらしい。後はラウラも色々からかわれているせいでもあるが。

「今日は生徒会の用事があるらしい。だから安心しろ」

「ふむ……」

「けど二人はお疲れだね」

あはは、とシャルロットが苦笑する。静司達も否定することなく肩

を疎めた。

「それより学園祭の準備だけど、女子は明日衣装合わせだつてな」

「うん。ラウラのツテだけじゃ数が足りなかつただけど、本音が足りない分を用意してくれたんだ」

「本音？ ああ、そうか——」

「私もメイドさんなんだよ」

新たな声と共に本音がお盆を手にとって来た。

「メイドさん？ ああ、そういえば楯無さんが言つてたな」

一夏も納得が言つたように頷く。本音は更識家に仕える家系であり、楯無の妹の専属メイドなのだ。

「そうそう。だから足りない分は私にお任せ」

相変わらずのんびりとした口調で席に座る。その盆に乗っている者を見て全員が首を捻つた。

「ねえ、本音。それ何？」

「お茶漬けだよ。皆は番茶派？ 緑茶派？ 私はウーロン茶派」

「まあそういう茶漬けは確かにあるが、そんな豪快に鮭を乗せる茶漬けは初めて見たんだが……」

「おいしいよ。私はこれがお気に入り」

そう。本音の茶漬けには大きな鮭の切り身がどん、と乗せられている。更には本音はその茶漬けを箸でかき混ぜはじめた。ぐりぐりとかき混ぜられるそれを見ながら、果たして切り身で会つた必要はあったのか？ と若干疑問に思つたが。

「なんとこれだけじゃないんだよ」

「と、言うത്？」

「卵を入れます」

「は？」

どこから取り出しのか。卵を投入し更にかき混ぜる本音。当然ながら茶碗の中はカオスと化している。

「本音……美味しいのか、それ？」

「おいしいよ？ じゃあかわむーにもお裾分け」

用意してたらしいスプーンにすくうとそれを差し出された。ス

プーンの上では何とも形容しがたいお茶漬けらしいものが湯気を立てている。それを見て静司の顔が一瞬引き攣った。

（いやいや、しかし食材はまともだ。食えない要素はあるまい。そうだ、自分でも言っていたじゃないか。本当に不味い料理というのは食べる事自体がマズイのだと）

よし、と覚悟を決めそのスプーンを受け取ろうと手を伸ばし、しかし取っ手がこちら側に来ない。あれ？ と視線で本音に問うと、

「はい、あ〜ん」

「……」

無邪気な笑顔がそこにあつた。そしてその瞬間、すぐ近く——具体的にはシャルロットから鋭い視線が飛んできた。途端に冷や汗が流れる。

確かにこれは恥ずかしい。恥ずかしいのだが、それとは別の危機感を感じる。

「本音。自分で食うから——」

「あ〜ん」

にこにこ、と笑っている。笑っているのだが自分には分かる。本音は譲る気は無いと。そして時間が経てばたつほど、この両者のプレッシャーが増すと言う事も。ならば即座に流してしまうのが得策……！

観念して口を開ける。そこに放り込まれたお茶漬けの味は何とも形容しがたい不思議な味だった。最もこの空気の中、十分に味わう事は出来なかつたのだが。

「かわむー。お味はどうだい〜？」

「あ、ああ。不味くは無い。いや、多分美味しいとは思うんだが」

「マジか静司」

一夏は驚く。そしてシャルロットはと言うとどこか冷たい目でこちらを見ていた。

「良かったね、静司」

「……ハイ。ソウデスネ」

下手な事を言っではいけない。それは今までの一夏達を見て来て

勉強済みだ。故に静司は粛々と頷くだけだった。

「そういえば、メイド喫茶ではそういう事もやるのだったな」

不意にラウラが思い出したのか呟く。静司は助かったと！と言わんばかりにその話に喰いついた。

「そ、そういえばそうだったな。というかそれも含めて接客どうするんだ？」

「一応練習してるけど正直時間が足りないよなあ」

一夏も頷く。そもそもたった一か月で準備しろというのが無謀なのだ。事実、接客には皆手こずっている。バイト経験が有る者はスムーズに行くのだが、そういった経験が無い生徒も多い。加えて提供する飲食の手配、店の外装の準備等も行っているのだ。練習不足は否めない。

「うーん、その辺はどうか人前に出れるレベルまで練習するしかないね。皆覚えるのは早いから慣れだと思うよ」

シャルロットも気持ちを切り替えたのかそう答える。

「そうだな。私も日本流のメイドというのをまだ完全に把握していなかったので、本国の部下に資料を貰って訓練中だ」

「おお、ラウラ偉い」

「ふふ。褒めるがいい」

一夏に褒められて嬉しそうなラウラ。

「おおく、ラウラウどんな練習してるの〜？」

「確かに気になるな」

静司と本音も興味が出た。しかしシャルロットだけは首を傾げている。

「訓練……？ 漫画を読んでた気がするけどあれは……」

ぶつぶつと呟いているシャルロットは余所に、ラウラは気を良くしたのか満足そうに腕を組んでいる。

「ふむ。ならば私の訓練の成果を見せてやろう」

「おお、それは見たい」

「同じく」

「私も〜」

「え、えっと、一応僕も」

「よし、ならば見ているが良い」

ラウラは盆に水だけを乗せると立ち上がり少し離れた。どうやら最初の接客の場面から行うらしい。客の役は一夏だ。席から離れたラウラは目を一度目を瞑り、一つ息を付くと盆を片手に一夏の元に戻って来た。

そして笑った。

笑顔。それは正しい。接客業の基本であるし、メイド喫茶では尚更だ。その行為に文句を付ける人間は居ないだろう。だが何故だろう。ラウラの笑顔が妙に迫力があるのは。例えるのなら『にこり』でなく『にやり』に見えるのは。

そしてその様子に若干ビビっている一夏に、ラウラはその笑顔のまま告げた。

「ククク、おかえりなさいませだな、ご主人！」

ぶほっ、と全員が咽た。

「ラ、ラウラ？ 一体何を……」

「む？ 資料通りにやった筈だが？」

「違うから！ その資料絶対に間違ってるから！」

「しかし主人の為に手段を選ばず、知力・体力・破壊力を駆使して奉仕するその心意気に私は感動してな。仮面も準備して——」

「とにかく違う！ 何教えてんだドイツ軍！」

ぎゃあぎゃあ、と騒ぐ一夏達。その後、ラウラの間違いを納得させるのに30分ほどかかるのだった。

そして学園祭当日。

一年一組の教室では生徒達のテンションが上がりきり異様な空気に包まれていた。そしてそれは一夏と静司も同じだ。

「一夏」

「ああ」

「生きててよかったと、俺は今、心底感動している」

「そ、そうか。しかし確かに……これはいいなあ」

二人の目の前に広がる光景。それは接客対応の生徒達のメイド姿。開店前の準備でせわしなく動いているその姿に、男二人は何とも言えない感動を感じていた。何せメイド姿を見るのはこれが初めてなのだ。『当日のお楽しみ』という事で、今までは制服のまま練習していたのである。衣装合わせの時も二人は見せて貰えなかった。

「俺、今なら静司の気持ち分かる気がする」

「そうか。それは良い事だ……きつと」

うんうん、と頷く二人だがその二人も執事服を着ている。これが今日の正装なのだ。

「あ、静司」

「かわむーやつほー」

そこにシャルロットと本音がやって来た。当然二人もメイド服姿だ。今回の学園祭、衣装は基本的にクラスごと生徒に任されているが、過激すぎるものは教師から注意が入る様になっていた。一組も同様で、当初はそれぞれに似合うタイプの服が用意されていたのだが、過激な物も多数ありダメ出しを喰らってしまったのだ。よって、一番露出が少ないロザージュメイドのスタイルだ。

くるぶしまで伸びるゆったりとしたロングコート。白く映えるロングエプロン。可愛らしいカフスの丸ボタン。そしてカチューシャと可愛らしかつ、清潔感も感じさせる姿の二人がそこに居た。

「おお、二人とも可愛いな」

「ふふ、ありがとう一夏」

「おりむーありがと〜」

一夏が二人を褒め、二人も礼を言う。しかし静司は無言のまままだ。それを不安に思ったのかシャルロットが静司に話しかける。

「ど、どうかな静司？」

「かわむーの感想ぶりーず〜」

「……」

しかし静司は無言。だがゆっくりと顔を手で押さえ何か口を動かしている。

「どうしたんだ静司？」

一夏も不思議に思い静司に近づくと、何か呟いている事に気づく。「いかん俺。鎮まれ俺。叫ぶな俺。クールにCoolいになれ川村静司」

「……」

一夏は静かに目を瞑る。そして少し考え、うん、と頷くと2人に向き直る。

「喜んでいるみたいだぞ」

そうとしか言えなかった。

「そうなの？」

「ん〜？」

二人は首を捻るが当然だろう。当の静司はどつか別世界にトリップしている様なのだから。

「静司、とりあえず何か言おうぜ」

「あ、ああ。すまん。内なる俺が何かを叫んでいた様だ」

「何言ってるんだ？」

自分でも分からない。だが二人の姿に見とれ、暴走したのは事実だ。

実際、良く似合っているのだ。シャルロットは若干恥ずかしそうに、頬を染めているがそれがどこか初々しさを醸し出し、心をくすぐる、それでいて物腰は柔らかいので仕事が出来る綺麗なメイドさん、といった印象だ。

逆に本音は着慣れているのかリラックスした様子で、いつものほんわかとした笑顔を浮かべている。来ているメイド服も他の生徒達のものよりも明らかに裾が長くぶかぶかで、メイドとしてそれはどうなのかと思うが、それが自然体に見えるのが不思議だ。どこかマスコットのでもあり、可愛いメイドさんといった所か。

そんなそれぞれの魅力を振りまく二人に静司は心の中で密かにガッツポーズを取りつつ、今この時に。そしてメイド喫茶を提案したラウラに感謝を捧げていた。

だが何時までも一人で暴走している訳にもいかない。だから静司

はゆっくりと息を整える。

「凄い似合ってるよ、二人共。俺はこの学園に来て良かったと心底思った」

とてもいい笑顔で、後半に本音を漏らしつつ褒めるのだった。

「う、嬉しいな。そうまで言ってくれるなんて」

「褒められた〜」

二人も満更では無いようで、嬉しそうにしている。

「本当はね〜しゃるるんにはロスチャイルドメイドが似合ってたんだけど、織斑先生が駄目だつて〜」

「あれはちよつと僕も恥ずかしかつたかな」

「何っ!?!」

因みにロスチャイルドは今の格好とは違い、袖やスカートが短い夕イプである。つまり露出が高い。それを着ている二人の姿を思わず想像してしまい、静司は本気で悔しがっていた。

「それより静司と一夏も似合ってるよ、執事服」

「おりむーは正統派でかわむーはちよい悪系だね〜」

「おう、サンキュ」

「ちよい悪……まあ、いいか」

一夏は頬を書き、静司も苦笑する。

「かわむー写真とろとろ〜」

「あ、僕も」

ぱたぱたと手を振りつつ本音が携帯を取り出しシャルロットも続く。そして三人で一夏に撮って貰う。とれた写真を見て二人は喜び、他のクラスメイドもそれを覗き込んで笑っていた。

(いいもんだな)

これは別にメイド云々だけでは無い。静司とて学園祭など始めてだ。だから漠然としたイメージしか持っていなかったが、本格的に始まる前にこんなにも楽しく感じる。それがとても心地よい。

だが気を緩ませる訳にはいか無い。ある程度制限されているとは言え、今日は学園外から多くの人が訪れる日。チェックはされていると言つても、侵入者への警戒は必要だ。そしてそれが目の前の笑顔を

護る事に繋がるのだから。

「かわむーどうしたの？」

「いや、なんでも無い。それより今日は楽しもう」

「もちのろんろん」

二人は笑い合い、そして自分達の役割に戻って行った。

「うーん、いいわね、この活気。バイタリテイ溢れて楽しくなりそう」
「……」

IS学園の入場口近く。二人の男女が並んで歩いている。女はウェーブのかかった長髪。胸元を開き、豊満な胸を強調するようなシャツとスーツ。整った顔立ちとその活力溢れる肌から20代と言われても通用するであろう容姿。K・アドヴァンス社社長、草薙由香里。

そしてもう一人は白髪の混じり始めた金髪の壮年の男性。鋭いと言う程ではないが、どこか厳しさを感ずる顔つき。見るからに高級なスーツを着こなし、無表情で並んで立っている。

そんな様子を見て由香里はため息を付いた。

「そんな難しい顔しないでよ。折角のお祭りなんだからもうちよつと柔らかくね」

「性分だ。そう簡単には直らない」

男は表情を変えぬまま学園を見上げる。その瞳はどこか眩しそうであり、そして少しの戸惑いが見られる。

「なら直しましょう。折角お休みとって来たんだから」

「取らせたの間違いだろう。以前から思っていたが君たちの会社は強引すぎないか」

「そういう風土なのよ」

ふふふ、と笑いながら由香里は受付でもらったパンフレットを広げる。

「さーて、じゃあ早速行くとしましょうか。時は金なりつてね」

「……本当に行くのだな」

「当たり前でしよう。今更引き返さないわよ。さ、行きましようかデユノア社長？」

「……わかった」

そうして二人は歩き出す。目的地は一年一組。静司とシャルロットのクラスである。

そして――

IS学園。資材搬入口。

「追加の食材？」

「ええ。えーと……二年六組の秋月さんからの依頼ですね。後は三年生のIS演武用の追加だとか。他にも色々」と

「そういえば練習で壊し過ぎたとか言ってたわね……。拝見しても？」

「勿論」

警備兼、搬入担当の教師が送られてきたコンテナの中身を確認する。IS学園は正面の正門の他は海に囲まれているので、資材や食材の搬入はその正面道路かモノレール。もしくは船で行われる。当然、それを担当するのは厳しいチェックを受けた限られた業者だ。

「では拝見……って凄いいね……」

「はい。なんでも香辛料だとか」

「そういえば二年六組はオリジナルカレー作るとか言ってたわね……。後が怖いわ」

コンテナの中身は酷い匂いだった。然しチェックをしない訳には行かない。教師は警備様に配備されていたISを起動。ハイパーセンサーで全てのスキャンを開始する。

「……うん、問題ないわね。では搬入を開始してください」

「了解しました。しかし大変ですね。全てチェックしているんですよ？」

「まあね。あなた達を信用していない訳じゃないけど一応規則だから」

「当然ですし気にしてないですよ。では始めます」

「よろしくね」

そうしてコンテナの搬入が開始される。教師は既に次の荷物に意識が向いている。だからその業者が漏らした言葉に気が付かなかった。

「折角与えられた恩恵も使いこなせなければ意味が無いと言うのに……」

そうして業者と、そしてコンテナの中に潜んでいた数人が動き出す。

技術は常に進歩する。篠ノ之博士の創ったIS。そのハイパーセンサー関連の技術も同じだ。例えば簡易スキャンに捕らえられない様にする為の技術も。本格的に調べられたら直ぐにバレた事だろう。しかし学園祭の忙しさ。そして何時もと同じ業者からくる油断。そしてISに対する過信。そのせいであの教師は簡易スキャンだけで済ましてしまった。担当の者もつと用心深ければ見つかった。つまり賭けだったが、まずは自分達は勝った。後は他の同胞の成功を祈るのみ。

静司達EXIST。デュノア社長。そして狂信者達。それぞれの思惑が渦巻く中、学園祭が始まる。

47. 再会

「三番テーブル、お客様お待ちです！」

「料理が間に合わないわ！ 誰かヘルプ！」

「順番待ちで通路が塞がれてる！ 整理班投入！」

「織斑君、次はこっちのお客様よろしく！」

教室内を生徒達がせわしなく動き回る。走る事は無く、あくまで丁寧に。しかし素早く。その度にメイド服が翻り、観客はその雰囲気を楽しんでいるのだが。

「だー!? 多すぎだ！ 何でこんなに混んでるんだ!?!」

一夏が悲鳴を上げる。それもその筈。一年一組の模擬店は、学園祭の開始早々一気に客がなだれこみ、途切れることなく接客し続けているのだ。そしてその大繁盛の原因の一つは間違いない一夏だ。

「きゃー織斑君、こっちこっちー！」

「うわっ、マジで執事の恰好じゃん。いいなあ」

IS学園に二人しかいない男子。その一人である一夏目当ての客が多いのだ。その勢いは予想以上であり、一年一組の生徒達は自分達の見通しの甘さを実感していた。

「くう、織斑君パワー恐るべし……」

「お蔭で大儲けだけどこれはすごいわ、ほんと」

「それにデュノアさんやボーデヴィツヒさんとかも大人気だし、この企画は大成功だね」

そうなのだ。一夏の人気は当然の事として、シャルロットやラウラもそれに次ぐ勢いだった。というのも、シャルロットは持ち前の丁寧さと、人当たりの良さが受け、ラウラは転入当初の冷たいイメージからのギャップウケといった所か。そしてその三人ほどでは無いにしても、他の生徒達も結構な忙しさが続いていた。それが意外な事に静司とて同じだった。

「うーむ。話してみると案外普通だね川村君」

「最初は地味かなーと思って、髪切ったら切ったでちよつと怖くなつたしねー」

「そうそう。クラスも違うから話す機会も中々無かったからさ。けど思っていたより普通に普通で安心したよ、うん」

「今までどう思われてたんだ俺は……」

「え？ もっと具体的に聞きたい？」

「いや、いい。やめてくれ。なんか立ち直れなくなりそうだから」

あははは、と客である少女たちが笑う中、静司は居心地の悪そうに息を付く。普段と違う格好が幸いして、静司もそれなりに指名が入っているのだ。

「やばいよ、外の列が全然減らない！ 材料足りるのこれ!？」

「待ち時間のクレームも……。嬉しい悲鳴ってやつかな？」

「呑気に喋ってないで手と足を動かして！」

一年一組の教室は混沌の極みにあった。

「あらまあ、これはこれは」

そんな一組の教室から少し離れた廊下で、草薙由香里は思わず苦笑いを浮かべてしまった。彼女の視線の先では異様な長さの順番待ち列と、その教室の中で目を回す一組の生徒達の姿。これは彼女としても予想外だった。

「うーん。流石にこれに並ぶのはちよつとねえ」

渋い顔で彼女は己の背後に居る人物に眼を向ける。白髪の混じり始めた金髪。いかにも高級そうなスーツに身を包み、厳しさを思わせる目つきをした壮年の男性。デュノア社長、ユーグ・デュノアである。

「こんな厳ついおっさんが並んでたら周りの子達が怖がっちゃうわよね」

「だろいな」

由香里の言葉にユーグは表情を変えずに答える。その視線は一組の教室に向けられていた。その様子を見て由香里はふふん、と笑う。

「どうしましょうかね。ここで並ぶのもそれはそれで面白いけど」

「馬鹿を言うな」

「馬鹿とは失礼ね」

「君に失礼を問われるとは思わなかった」

「あら、これは失敬」

ふふ、とどこか悪戯つ子のような笑みを浮かべる由香里にユーグは顔を顰める。だが当の由香里はどこ吹く風だ。そんな由香里の様子にユーグが何かを言おうと口を開きかけ、しかしその動きが止まった。

「あら」

ユーグの視線を追い、由香里はその理由を理解した。一年一組の教室の入り口近く。二人の生徒が客を出迎えている姿が見える。一人はどこか人相の悪い男子生徒。彼はどこか不慣れな様子で客の案内をしている。そしてその隣に居るのは金髪の少女。彼女は隣の男子生徒に苦笑しつつ、楽しそうに接客を行っていた。

「……」

ユーグはその姿を暫く見つめていたが、不意に踵を返し歩き始めた。そんな突然の行動にも驚かず、由香里は後に続く。

そのまま暫く歩いただろうか。由香里は前を進むユーグに問いかける。

「それでどうだった？ 久しぶりに見た娘の姿は」

「……」

ユーグは無言。しかし由香里は続ける。

「会社の事で頭が一杯で、娘すら利用してでも会社を存続させようとした。けど今は違う。第三世代開発の目途が立ち、会社にも少しながら余裕が出来た。それはあなた自身の心にもね。だからこそ聞きたいわ。今の娘の姿を見た感想は？」

「随分と説明的だな」

「そうね。あなた自身に今の状況を理解してもらおう為よ。で、どうなの？ 言っておくけど何も感じないとは言わせないわよ？ さっきあんな目で見ってたんだから」

由香里の言葉にユーグは足を止め、苦虫を噛み潰したような顔になった。

「目ざといな」

「人を見るのは大事な事よ。特に私たちの様に社員の上に立つものはね」

不敵に笑いつつも、視線はユーグから逸らさない。そのまま数秒間二人は向かい合ったまま停止していたが、先に折れたのはやはりユーグだった。彼は再び前を向き歩きはじめる。そしてその後にくく由香里に答える。

「あれのあんな顔は初めて見た」

楽しそうに、そしてどこか嬉しそうに笑う娘——シャルロットの姿。そんな顔は彼の記憶にある限り見た事が無い。そしてその原因は他でも無い、自分だ。そんな事は分かっている。

「だが、今更父親面してもあれを怒らせるだけだろう。何より、私にはもはやその資格は無い」

「……後悔はしている?」

「私が過去あれに強いたことは必要だと思ったから行った。その事に後悔は無い。そうする他無かったからだ。だが私の行為が善であるとは思っていない」

「つまり、罰を受ける気はあると言う事ね」

「もとより、君が言ったことだろう。報いを受けろと」

話す事はもう無いとばかりに先を行くユーグ。その後ろ姿に由香里は思わず呆れてしまった。

「何というか、親子そろって不器用なこと」

先ほど由香里は告げた様に、デュノア社は第三世代の開発に目途が立ったことから、以前の危機的経営状況からはある程度はマシになっている。そして余裕が生まれて改めてシャルロットの事を問うた結果はこれだ。どうやらあの親は『親子』という繋がりにはもはや修復不能だと考えている。確かに彼や、彼の周りにはそれほどの事をシャルロットに強いてきたのかもしれない。だが、

「あんな優しい子が、そう簡単に親を怨み切れるとは思えないのよね」
どんな理不尽な命令でも、彼女は従ってきたのだ。それはどこか諦めを感じながらも、父と娘という関係を捨てきれなかったからこそ。

親は親で、そんな娘の今の姿を見て何か感じた様子。出なければあんなに集中して、彼女の事を見つめまい。

「なら、お節介続行といきましようか」

とりあえず今は無理だ。当の娘が忙しすぎて手が離せない。だから彼女が休憩か何かの時が勝負。それまで目の前を歩く、不器用な頑固親父を適当に連れまわすでしょう。

頭の中で算段を組みながら、由香里は楽しそうに笑うのだった。

時刻は午後一時を半分程回った頃、ようやく一年一組も落ち着き、態勢を整える為にも一度店を閉める事になった。そこで一組の生徒達は交代で休憩を取る事になり、その休憩の第一陣は接客班——つまり一夏や静司達となった。

「おお、かわむーかわむー。整備課の『打鉄の限界に迫る！』が面白そうだよ」

「いいね、それ。僕は料理部の出し物も気になるかな？」

「しやるるんないす。美味しい物食べにいこ」

「あれ？　じゃあ整備課は？」

「食べながら見に行けばもーまんたい」

きやいきやいと前を歩く二人の少女。本音とシャルロットの背中を見つめながら静司は呆れた様に呻く。

「まだ食うのか……？」

そんな静司の両手には各所の出し物で買った焼き鳥、フランクフルト、焼きそば、たこ焼き、わたあめ、クレープと様々な物が乗せられている。これらすべてはテンションが上がった二人が勢いのままに購入した物だ。

「だいじょーぶだよかわむー。三人で食べればおつけ」

「そうそう。それにクラスの皆にもお土産お土産」

「……まあいざとなれば俺が喰えばいいか」

どう考えてもこの先ずつとこれを持って歩くのは不可能だ。それは二人も分かっているだろうに、楽しそうに答えてくる。そんなお気

楽な二人に静司も諦めて苦笑いを浮かべた。

唐突にできた休憩時間。静司は本音とシャルロットと学園祭を回る事にしていた。本来なら一夏と共に行くのがベストだったのだが、当の一夏が箒やセシリア、鈴も混じった争奪戦が開始された為諦めた。流石に二人きりで回ろうと睨み合う彼女達を差し置いて、一夏を連れていったら殺されかねない。割と本気で。

それにあからさますぎると不自然だろう。故に一夏の護衛は一般客として紛れ込んでいる仲間——早い話C1達に任せることにした。彼らは一夏の近くにそれとなく紛れ込み周囲を警戒している。無論静司もいつでも一夏の所へ向かえるように、位置は仲間からの通信で把握している。これなら余程の事が無い限り安心だ。

『こちらC1。対象の周囲に問題なし。俺の周囲は若い子一杯。ここに就職して良かった』

『こちらC5。ねえねえ、ちよつと質問なんだけど私が制服着たらこの子達に紛れ込めるかしら?』

『こちら匿名希望。重要な連絡を一つ——生年月日を三回見直してこい』

『ふふふふ。その声はC8ね? 待っていないさい、オシオキしてあげる』

『……こちらC12。このロリコンと変態を何とかしてくださいっす』

……安心の筈だ。いや、信じるんだ仲間を。うん。

耳に仕込んだ通信機から聞こえるやり取りに静司が若干の不安を感じていると、不意にその腕が掴まれた。

「かわむー早くいこ〜」

「うおっ、引っ張るな! 落ちる、食い物が落ちる!」

「と、言いつつも器用にバランスとってるね静司」

因みに三人の恰好は店の時のまま。つまり執事服とメイド服であり、特に女子二人は行く先々で視線を集めている。時たま他の学年の人間に手を振られたり、写真を撮られており、二人もそれに気前よく応じている。シャルロットは若干恥ずかしそうだが。

「そういえばラウラはどうしたんだろうな？」

メイド服を見ていて不意に発案者の顔を思い出した。ラウラは一夏争奪戦には参加せず、店の準備を手伝うとの事だった。いつもなら鈴達と一緒に一夏の元へ行っているところだからだ。思わずラウラに確認したが、

「発案者は私だ。私はもう少し手伝ってから休憩を取る事にした。静司達が戻ってきたら私も取るとしよう」

との事だ。ラウラと一番仲の良いシャルロットや静司達もそれを気にして、ラウラと休憩を合わせようかとしたが、ラウラは「構わず楽しんでくると良い」と笑って返した。今までとは違うその反応に戸惑いつつも、折角なので言葉に甘える事にしたのだ。

「なんか心境の変化でもあったのかね……」

首を傾げるが答えは出ない。それにいきなり深入りしすぎるのも嫌がる事だろう。なのでこの疑問は後々片付ける事にした。

(それに、こっちはこっちで別の問題があるしな)

ちらりと、とシャルロットを見やる。本音と一緒にパンフレットを覗き楽しそうに何かを話している姿を見て、これから起こる事に若干の不安を感じてしまう。しかし必要な事である事も確か。後戻りも出来ない。だから覚悟を決めるしかない。

「上手くいくといいけどな」

「? どうしたの静司?」

「なんでもないよ。それより先に料理部行くんだろ? 時間は限られてるし早くいこう」

「うん!」

「れっつづ〜」

そうして次の目的地向かい始めた静司だが、不意にすれ違った人と肩がぶつかり思わず手に持つ料理を落としかけてしまった。慌ててそれを支えつつ、ぶつかった人物に頭を下げる。

「すいません。不注意でした」

「いえいえ、こちらこそごめんなさい。あら、あなたがもしかして川村君?」

ぶつかつた相手は20代程の女性だ。柔和そうな笑顔を浮かべたその女性は静司を見ると驚いた様に目を開く。二人目の男と言う事でそれなりに有名な静司は、そういう反応は前にもあつたことがある。なので静司も簡潔に答える事にした。

「ええ、まあ」

「なるほどねー。そちらの二人は彼女ちゃん？」

「そ、そんな彼女だなんて……！」

「まだ違うよー」

シャルロットが焦り、本音はさり気無く凄じ事を言つた気がしたが静司はそちらは置いておいて女性に渋い顔で返した。

「からかわないで下さい」

「ふふ、ごめんなさい。けどとっても仲良く見えたから。ええ、とつても」

「……………そうですか」

仲良く見えた、と女は言つた。それはつまり、ぶつかる前からこちらを見ていたと言う事か。別にぶつかつた事はそれほど不思議な事では無い。この人ごみなのだ。こちらの姿を確認していても、ぶつかる事くらいあるだろう。だが女の雰囲気若干の違和感——いや、不快感を感じ静司は警戒した。

だが女はそんな静司に気にすることなく、「じゃあね」と一言告げると去つて行つた。後に残されたのは言い知れない不快感のみ。

「かわむー？」

「大丈夫だ、それより早く行こう」

何かを感じ取つたのだろう。心配そうに静司の顔を覗き込む本音の頭をぼん、と叩き、静司は笑顔を向ける。まだ少し気にしている様だが、本音も頷くと三人は再び歩き始めた。

「B9よりセンターへ。身元を調べてもらいたい人物が居る。日本人女性。身長約160cm。髪の色は黒。その他の特徴だが——」

念の為、前の二人には聞こえぬ様に静かに報告する。白ならそれでいい。自分の思い過ごしであるのが一番だ。そう、一番なのだ。

「あれが川村静司……」

静司達と離れた女はその名前を舌の上でころがし、そして口元を吊り上げる。だがその眼には嫌悪が浮かんでおり、歪な表情を浮かばせていた。

——この手で、彼女が与えたの罰を代行する。

川村静司と共に居た女。あれも知っている。以前の罰の施行の際、巻き込まれたとされている二人。つまりあれはどうなっても良い存在。いや、むしろ居ない方が良いのかもしれない。ならば自分は、自分達はそれを実行するだけ。

それは常人が聞いたら意味の分からない思考回路かもしれない。理解できないかもしれない。しかし彼女にとつて、それは当然だ。自分達が思い描いた新たな神の姿を現実のものとし、自分達が勝手に決めつけた理由で動く。

「え？」

一瞬、視界の端に何か小さな銀色の影が映った気がした。だが周りを見てもそんなものは見当たらない。

「……気のせいね」

女は直ぐに思考を切り替えると、自らの成すべきことの為に再び動き出した。

『……………』

小さな機械仕掛けのリスが、密かにその様子を見つめていた事には最後まで気づかなかつた。

「打鉄の限界に迫る……まさかブレードを使つての豆掴み競争だったとは」

「けど凄い難しいよ」

「確かに絶妙な力加減と調整が必要だもんね。流星は三年生、って事なのかなあ？」

あれからしばらくの間、静司達は学園祭を巡り楽しんだ。そして今

は小休止と言う事で外のベンチで休んでいた。学園祭で人が入り乱れていると言っても、これだけ広い学園だ。店も近くに無い事から人の少ない場所は幾つか存在する。ここはその一つで、ちらほらと人が見られる程度だった。

「ねーむーい〜」

「はしやぎすぎた。まだ少し時間あるし、寝たらどうだ？」

「むー、そうしよく。ということでかわむーよろしくー」

隣に座る本音が首を不規則に揺らしながら呻く。どうやら疲れてしまったらしい。静司が呆れた様に提案すると、本音はこてん、と首を静司の肩に預け寝息を立てはじめた。そんな様子に静司とシャルロットは苦笑してしまう。

「楽しいね、静司」

「そうだな。うん、楽しい」

隣に座るシャルロットが笑顔で話しかけるが静司はどこかぎこちない。そんな静司にシャルロットは不思議そうな顔をする。

「どうしたの静司？ もしかしてあんまり楽しめなかったかな？ 僕達もちよつとはしやぎすぎたし……」

「いやいや、十分に楽しんでるよ。少し疲れただけだ」

これは本当だ。静司がぎこちないのは緊張しているからである。もうじき例の時間なのだ。だからこちらもそろそろ準備をしなければならぬ。

「なあ、シャルロット。学園祭の招待券の事覚えてるか？」

「え？ 覚えてるけど……。それがどうかしたの？」

シャルロットは由香里に招待券を渡しており、それは静司も両者から聞いた。本来なら関連する企業の社長クラスなら招待券が無くても申請が通れば入場は出来る。だが誰でもという訳でも無いので、使う機会があればどうぞ、という事だった。

「あれな、使ったらしい」

「へえ、よかった。有効活用できたみたいだね」

そう言って笑うシャルロット。しかしその瞳が一瞬揺れたのに静司は気づいた。気づいたからこそ、覚悟を決める。

「その使った相手がここに来る」

「え？」

なぜ急にそんな事を？ と戸惑うシャルロット。だが静司は何も言わず正面に視線を向けた。釣られる様にシャルロットもその視線を追い、そして止まった。

「……嘘……」

静司の視線の先、そこには二人の男女の姿。片方はK・アドヴァンス社社長草薙由香里。そしてもう一人は――

「……っ！」

その姿を認識して数秒後。シャルロットはその場から逃げ出した。顔を俯かせ、全速力で、まるで追い立てられるかのように。その動きが突然すぎて静司も止める事が出来ず、残ったのは4人の男女と居心地の悪い空気だけだった。

「……君が川村静司か」

眼を細め、表情の読めない顔でシャルロットが駆けて行った方向を見ていた男――デュノア社長ことユーグだったが、一つ息を付くと静司に向き直った。

「……はい」

無視するわけにもいかず静司も答える。正直に言えば目の前の男には良い印象は無い。当然と言えば当然だが。流石に睨みつけるなんて真似はしていないが雰囲気を感じたのだろう。ユーグは無表情のまま淡々と感想を告げた。

「嫌われたものだな」

「好いてない事は確かですけど」

沈黙。何故かいつもはよくしゃべる由香里も黙って成り行きを見ていた。

そのままユーグと視線を合わせていた静司だが、不意にその肩が引っ張られた。

「かわむー、私はしゃるるんの所いってくるねー」

「……助かる」

いつの間にか起きていたのか。本音はうん、と頷くと何時もに比べ

れはどこか焦った様な足取りでシャルロットが駆けて行った方向に向かつていった。

「それで、」

本音が駆けて行った方向を見つめたまま静司は口を開く。

「あなたはそこで何してるんですか」

「何？」

「ここでガラの悪い男子学生を見つめるより先にやる事があるでしょう」

「だがあの様子だ。行っても意味が——」

「無いかどうかはアンタが決めるな。まず話す努力をしろ」

もはや敬語すら忘れて静司は吐き捨てた。その声には苛つきが混じっている。それはまだこの場に居る目の前の男に対する苛つき。こうなる事が分かかっていても、もっとうまくやれたのではないかというと自分に対しての苛つき。そして目上の者に八つ当たりをしている自分に対しての苛つきだ。

「本当に何もする気が無いのならわざわざここまで来ないだろ？」

「だったら行ってくれ。それがきつと一番いい筈だから」

「……わかった」

遥かに年下の子供の八つ当たりの筈なのに、ユーグは静かに頷くと由香里に目配せする。由香里も笑って頷くのを確認すると本音の後を追った。

後に残されたのは静司と由香里のみ。その静司は目に手を当てて空を見上げていた。

「あら、どうしたの静司？ 今更後悔？」

「まあ多少は。後の祭りって嫌な言葉ですよね」

「ふふ、そうね」

由香里は静司に近づき隣に腰を下ろす。そして同じように空を見あげた。

「上手くいきますかね、あの二人」

「さて、それは二人にしかわからないわね。お膳立てはした。後は本人達次第よ」

「投げやりじゃないですか？」

「下手に干渉しすぎても駄目なのよ。こういうのは」

シャルロットの家庭の事情。それは今のところは現状維持のまま止まっており、卒業までに決着をつけなければいい、と静司も以前本人に伝えた。それは考える時間を持ったためだ。だが今のままでは、考えるにしてもお互いに材料が少なすぎるだろう。故に、一度時間を置いてお互い多少は余裕が出来た今、一度話させる。別にこれだけで解決するとは思っていない。しかし今後の考え方の指針にはなる筈だ。それは良い方向に転ぶか、悪い方向に転ぶかは分からない。しかし何もせず考え込むだけでは駄目だろう。その為のお節介だ。由香里がそれを提案し、静司も悩んだが結局は協力した。

「やっぱり、『家族』って繋がりは大事だと思うからさ。俺はそれを姉さん達、それに親父や母さんから教えて貰った」

「……そうね」

嬉しそうに由香里が静司の肩を抱く。いつもなら嫌そうに離れる静司も今は抵抗せず空を見上げ続けた。穏やかな空気が流れ、静司もどこか安心した様子で肩の力を抜く。

だがそれも不意に静司が目つきを鋭くし立ち上がった事で終わりを告げた。

「社長」

「ええ」

由香里も気づいたのか頷く。そんな二人にはショートカットの女が近づいてきていた。服装からして招待客の一般人だろう。——通常ならば。

女は二人に近づくと片手に持つパンフレットを振り、ごく自然を装って話しかけてきた。

「すいません。道に迷ってしまつて……つ!?!」

ひゅごつ、と静司の横を鞭の様に何かを通り過ぎた。一瞬遅れてそれが由香里の足だと気づき、静司は思わず冷や汗を流す。

「つあ……あ?!!」

女は声にならない悲鳴を上げその体をふら付かせる。そして倒れ

こむその体を静司が受け止めた。その拍子に女がパンフレットの裏に隠していたナイフが足元に落ちる。静司は直ぐにそれを足で隠し外から見え無くした。遠目に見れば突然倒れた女性を静司が受け止めた様にしか見えなかっただろう。

その様子を見ながら由香里はふん、と鼻を鳴らす。

「うちの可愛い息子に何しようとしてくれてんのかしら全く」

「この女……髪型と服装は変わっていますが、先に報告した女ですね。しかし少ないとは言え人が見ている中で襲ってくるとは」

「そうね。とりあえずその女から色々聞き出すとしましょう。B9、各員に報告」

「了解」

静司が課長他、仲間達に連絡しているうちに、由香里は女の肩を担ぎ周りに聞こえる様な声でしゃべりだす。

「もー、だから昨日飲みすぎだって言ったじゃない。ほら、行くわよ。子供たちの前でゲロなんてやめてよ?」

周囲の少ない視線に対して、念の為の偽装をしつつ静司と由香里は女を学園の奥、一般客が入れず、学園生も近寄らないエリアまで連れて行く。

「さて、では色々吐いてもらいましょう」

由香里のその言葉を合図とし、女は地面に投げ出された。小さく呻く女の首を静司が間髪入れず掴み引き上げる。

「何者だ? 何故俺を狙った?」

「……………」

「言え」

ぐっ、と首を掴む力を込める。女がもがきその手を外そうとするが、先ほどの由香里の蹴りが聞いているのその動きは拙い。

「言っておくが俺はそれほど尋問は得意じゃない。だから単純な方法しかしない。早い話が力押しだ」

更に力を込める。女の顔が次第に青くなっていき泡を吹き始めるが、ギリギリの所で力を緩めた。

「げほっ」

女が地面に転がり苦しそうに咽る。だがそんな事は関係ないとにかくに襟元を掴み引き寄せた。

「もう一度聞く。お前は何者で、何故俺を狙った？」

「っ……げほっ、お、お前……は、なんだ……!？」

「聞いているのはこちらだ」

無造作に女の腹に拳を叩きこむ。がはっ、と女は声にならない悲鳴を上げた。

「早く答えろ。こっちは急いでるんだ」

冷たく、冷静に問う。急いでいるのは事実だ。この女の狙いが何なのか。IS学園か？生徒なら誰でも良かったのか？男だから狙ったのか？静司だから狙ったのか？その答えによってこちらの行動が変わる。そんな静司を見る女のは目には怯えが浮かんでいた。ワケの分からない、正体不明の何かを目の前にして、混乱と恐怖が入り混じっているのだ。

だがしかし、同時に彼女は理解した。この男は危険だ。だからあの方も罰を下そうと下に違いない、と。

「ふ、ふふふ、はははははははは」

「何がおかしい?」

苛立ち気に静司が詰問すると、女は笑みを浮かべる。

「ほらやっぱり……あの方は正しい……!」

「あの方? 誰の事だ。とっとと答えろ」

もう一度、腹に拳を叩きこみ女が咽る。しかし女は涙と鼻水。口からは涎を垂らしながらも不気味に笑う。

「お前は、おかしい。普通じゃ、ない。だから、だから——東様はお前に罰を下そうとしたんだ!」

その瞬間、女の体が宙に浮きそして勢いよく地面に叩き付けられた。

「がはっ!？」

先ほどとは違う、本気その攻撃の激痛に女は地面で身悶える。静司はその首を掴み上げナイフを突きつけた。

「ひっ!？」

その静司の顔も違う。先ほどまでの冷静な冷酷さが消え、怒りと憎悪の籠った目で女を睨みつけていた。

「お前はあの女の仲間か。答えろ！ 奴は何処に居る!？」

「あ、あああつ」

「答えろつてんだよ！」

ナイフを突き出す。切っ先が女の喉元に当たり、そこから一筋の血が流れ始めた。もはや笑う余裕も無いのか、女は震え己に突きつけられたナイフとそれを持つ静司に怯えていた。

「答えないなら手前の首を——」

「落ち着きなさい、B9」

不意に静司の襟首が後ろから掴まれ、一気に引つ張られた。

「社長！」

「いいから落ち着きなさい。こいつはあなたが思ってる様なものじゃないわ」

静司が抗議の叫びを上げるが由香里はそれを手で制する。そして地面に倒れている女を見下ろす。

「考えてもみなさい。あの女がこんな奴を配下にすると思う？ おそらくこいつは主義者よ」

「……主義者?」

「ええ。篠ノ之束を妄信し、彼女が全て正しい。彼女は新たな神だとか抜かして暴走する性質の悪いイカレた者ども。信者とも言うわね」

由香里はそのまま屈みこみ、女の服の中身を確認する。女は恐怖に竦んだのか、もはや抵抗しなかった。

「こいつらの性質の悪い所はどこにでも居て、いつでもなれる事よ。きっかけさえあれば普通の人間も簡単に墮ちる。唯の憧れが信仰に。目標が妄執に。学生も主婦も、軍人すらなりかねない。いえ、むしろ現代兵器を扱う分、軍人の方が多いのかもしれないわね」

IS登場は世界を変えた。しかしそれは最強の兵器だからというだけでは無い。ISに付随する様々な技術——PIC、ハイパーセンサーといったそれらは現代の科学の進化を大いに促した。そしてその技術を作ったのが篠ノ之束。恩恵を受ければ受ける程、彼女を神格

化してしまう様な連中もいるのだ。

話しながら女の服を漁っていた由香里だが、その懐から数枚の写真を見つけた。そしてそれを見た瞬間、その眼が鋭さを増す。

「B9!」

鋭く叫びその写真を静司に見せる。静司もそれを確認し、そして目を見開いた。

その写真には三人の男女が写っていた。中心が静司。そしてその左右に本音とシャルロット。そしてその写真に写る三人の顔には×印が書き込まれている。

「なんだ、これは」

篠ノ之主義者。それが自分を狙った。ここまではまだわかる。臨海学校の件からも束が自分を嫌っているのは確かだからだ。だがそれならば、何故二人が？ いや、答えは何となくだが予想は着いている。つまりこれは臨海学校の時と同じで自分と関わったから――

「B9! 直ぐに彼女達の所へ行きなさい! C1! 聞こえるわね、織斑一夏の警護を強化。並びに布仏本音、シャルロット・デュノアの周囲を警戒!」

写真を握りしめ、走り出す。

「織斑一夏は任せてあなたは行きなさい!」

社長の言葉を背に受けながら、強く拳を握りしめる。

誓ったのだ。夏のあの浜辺で。また同じような事が起きても、必ず彼女達を守ると。もう繰り返さないと。皆が笑顔で居るために。

「無事で居ろよ……!」

小さく願いの言葉を呟きながら、静司は走り続けるのだった。

48. 『彼』が見たもの

ふっつてわいた休憩時間の使い方。一夏のそれは箒、鈴、セシリアの誰が一緒に学園祭を周るかで最初は揉めた。三人とも引く気は無く、お互いを牽制しつつ一夏を何とか引き込もうと狙う姿は狩りをする獣の如く。一組の生徒達は、もはや見慣れたその様子を面白そうに見物していた。因みに彼女達は参加する気は無い。え？ だって怖いし。見てる方が楽しいし。

一夏にとつてはなんとも居心地の悪い空間が暫く続いたが、結局は一夏の提案でそれぞれ時間を分けて周る事になった。箒達も二人きりになれる、と言う事でそれを了承した。

そしてじゃんけんで順番を決め、今は鈴と周る時間だ。

「ほら一夏、次行くわよ！」

「ちよ、早すぎだろ鈴」

「時間は有限なのよ。さあ動いた動いた」

執事服とチャイナ服というなんとも奇妙な組み合わせの二人が連れ添って歩く姿は中々目立つ。元々一夏も男性操縦者という理由で目立つのに加えて、鈴も中国の代表候補生だ。その存在を知っている人々はその二人の姿を珍しそうに眺めていた。

鈴もそれが分かつているので、一夏の腕を引っ張りあちこちを連れまわしている。それはまるで一夏が自分の物だとアピールしている様でもあった。その姿に女子達は盛り上がり、企業関係者などは興味深そうに眺めている。

「待ち時間がある所は却下ね。サクサク行けるところにしましょう」

「まあ時間も無いしな。そうだ、弾も呼ぶか？ 久々に三人で——」

「はあっ!？」

「……なんでもない」

ぎろり、とものすごい形相で睨まれた一夏は続きを言うのを辞めた。理由は分からないが何か危険な事が起きる。そんな予感がしたのだ。

「ほら、アホなこと言っていないで早く行くわよ」

「アホって……。まあ弾なら大丈夫か」

信頼なのか投げやりなのか。招待した友人の事は自分自身で何とかしてもらおう事にした。元々弾は社交性もあるし、もし本当に何か合ったら連絡がくるだろう、と一夏も納得する。

「しかしどこも混んでるな……。何でだ？」

「お昼も過ぎたから飲食系へ流れてた客がそれ以外に周り始めたんでしょ。うちのクラスの中華喫茶だってそうだったし。まあ元々アンタらのクラスのせいで少なかつたけど」

「ははは、鈴。学友とはいえこれは勝負だ。情けは無用」

「……それは否定しないけどその勝負の景品ってアンタなのよね」

「それは言わないでくれ。やる気無くすから……」

がつくし、と項垂れる一夏に、鈴は自業自得だと言わんばかりにふん、と鼻をならす。

「そういえば千冬さんはあの服着ないの？ 山田先生は着てたじゃない。ウチのクラスの子も千冬さんのメイド姿見れるかも！ って大いに盛り上がったのに」

「ああ、それには深い事情がある」

「なによそれ？」

鈴が訳も分からず首を傾げる。

「最初はな、着る予定だったんだ。そりゃ千冬姉も嫌がったさ。『こんなもの着れるか！』って。だけどクラスの皆もこの機会を逃したら次は無いと思ったんだろうな。何度でも諦めずに交渉を続けたんだ。褒め殺し、泣き落とし、最後は土下座までした」

ぐつ、と拳を握る一夏。それはその苦勞を直ぐ傍で見てきたからこそ感じる感傷。初めは呆れていた一夏も、女子達はその鬼気迫る情熱は心に響くものがあった。その内容がどうであれ。

「そ、その情熱は凄まじいわね」

「ああ。千冬姉もこのままだとどんどんエスカレートすると思ったんだろう。最後には渋々了承したんだ」

「え？ じゃあなんで着てないのよ？ とうか姿をあんまり見てないわね」

少なくとも鈴は朝にちらりと見かけた以外で千冬の姿を見た記憶が無かった。先ほど一組を覗いた時もだ。

その事を聞くと、一夏は静かに頷き続けた。

「そして衣装合わせの日。俺と静司は当日のお楽しみ、って事で女子達の姿を見せて貰えなかったから人から聞いた話になるんだが、その、つまりだ……凄かったらしい」

「そりゃ千冬さんのメイド姿なんて見る人が見たら鼻血流してもおかしく——」

「違う、違うんだ鈴」

「は??」

ふるふる、と首をふる一夏だが鈴はいよいよ意味が分からない。

「俺と静司は話を聞いただけ。実際に姿を見た訳じゃないから詳しくはわからない。けどのほほんさん曰くだが『だったっ、だったっただん』だったらしい」

「……何そのサングラスのマッチョがショットガンぶっ放してそんな表現は」

「他にもある」

曰く、あれは危険すぎた。

曰く、マスケツト銃で狩りに来そうだった。

曰く、スカートの下には絶対暗器がありそうだった。

曰く、………怖い。

ふっ、と一夏は渴いた笑いを漏らす。

「千冬姉も恥ずかしかつたんだろうな。それを誤魔化す為に威嚇というか威圧というか。とにかく舐められない様にしたんだろうけど、それがある意味大成功過ぎて。千冬姉も皆の反応見て、何も言わずそのまま消えたらしい」

「千冬さん……」

きつと似合っていない訳では無かったのだろう。あのスタイルだ。それは考えられない。つまり問題は千冬の羞恥心。溢れる羞恥を怒りと殺意に誤変換してしまったが故の悲劇。千冬とて、可愛いだのなんだの言われたくなかったのだろう。だがだからといってどこか

の殺戮マシーン並に怖れられればそりや多少はショックだったのかもしれない。

それを理解したからこそ鈴はほろり、と泣いた。なんか色々悲しくて。次会ったら優しく接しよう。そんな失礼な事を考えながら。

「そ、それより空いてる所に行きましょう。こんな所で駄弁ってるのはもったいないわ!」

「そ、そうだよな! ……あ、そうだ。なら剣道部に行かないか?」

妙な雰囲気になってしまったのを振り払うがごとく、鈴が強引に話を替えた。一夏もこれ幸いと乗っかる。だが一夏の提案に鈴が胡散臭そうに答える。

「はあ?… なんていきなり剣道部?」

「あそこ滅茶苦茶空いてたんだよ。それにあそこなら相性診断できるぞ」

「えっ」

その言葉に鈴の顔がぼつ、と赤くなる。思わずその頬を押さえ

「そ、それはつまり一夏は私との相性が気になるって事……?」

「当たり前だろ? 何を今更」

「い、今更ってアンタ……!」

もはや鈴の顔は文字通りタコのように茹で上がっている。何時になり積極的な一夏の言葉。これは、これはもしかしてそうなのか? 学際デートで伝説の桜の木の下でトキメキがメモリアルしてしまう感じのあのイベントの予兆なのか!? フラグは!? フラグはどこ!?

本音と遊ぶことが増え、微妙にゲーム脳になりつつある鈴がうんうんと唸っている横で一夏は深く頷き、

「やっぱIS戦闘での連携は相性が大事だもんな」

「……………は?」

「いやだからさ、戦闘で連携するときにはやっぱり相性が大事だろ?」

何か違ったか?」

「……………」

つまり恋愛感情とかそういう訳では無く、あくまでIS戦闘の上での相性。ただそれだけ。

わかっていた。分かっていた筈だ。一夏はこういう男だと。自分の事にはとことん鈍感で唐変木で天然だと。けどなんだろう、この気持ち。メモリアルなトキメキというよりバイオレンスなドキドキに支配されつつある私のハート。

鈴がもう少し冷静ならば、一夏が鈴との連携を前提にその言葉を発したと言う事に気づいたかもしれない。少なくとも鈴の前、箒とセシリアと周った際はそんな事は言っていない。しかし悲しきかな、それ以上の展開を予想していたが故に鈴はその事実気づけていなかったのだ。

「ふふ、ふふふふふふふふふふ……よし殺そう」
「え？」

ゆらり、と昏い目で笑う鈴に一夏がビビり一歩引く。

そんな二人が廊下で向かい合っているものだから周囲は何事かと見物する人が集まってきた。IS学園生は見慣れた光景なので苦笑いだが、一般客は違う。奇しくも二人は執事とチャイナ服という珍しい格好をしている事もあって、何かのイベントかと勘違いして声援を送る者まで居た。

「ふふふ、逃げちゃだめよ一夏」

「いや、なんだかものすごい嫌な予感がするんだが」

じりじりとにじり寄る鈴と一歩下がる一夏。まるで決闘の様に向かい合う二人とそれを見つめる好奇の目線。そしてついに鈴が飛び出そうとした時、二人を遮る様に目の前に扇子が現れた。

「こちら駄目よ。こんな所で取っ組み合いは」

「む……」

「会長？」

「いやん、一夏君。楯無で良いわよ」

「は、はあ」

「い・ち・か・君」

「分かりましたよ、楯無さん」

「はい、よろしい」

うふふ、と笑うのは更識楯無。IS学園生徒会長だった。

「何の用ですか？」

一夏の二人きりを邪魔にされた鈴が嫌そうに聞く。そもそも楯無対して鈴はあまり良いイメージを持っていない。無論、IS操縦者として。そしてこの学園の生徒会長としては素直に尊敬するところもある。だがそれ以上に、ここ最近一夏を独占していた事への恨みの方が大きい。

「用も何も、流石にこんな所で暴れられたら危ないでしょ？ だから止めに来たのよ」

「う……」

至極最もな理由を言われ鈴は思わず呻く。が、

「まあ、面白そうだから混ぜて貰おうかと思っただけだねー」

「ってなんなんですかそれ！」

続く楯無の言葉に鈴のこめかみに青筋が浮かぶ。

「諦める鈴。この人はまともに相手には駄目だ」

「アンタは何悟ってんのよ！」

「それだけ仲良しって事よねー。一夏君」

挑発する様な楯無の言葉に鈴のボルテージはますます上がっていき。今にも噛みつかんばかりの雰囲気だ。

「で、本当は何しに来たんですか」

「あら、理由は言つたじゃない？」

「かいちよ……楯無さんの言う事はそう簡単に信じない事にしたので」

「うわ酷い！ 誰の入れ知恵？」

「静司と二人で決めました」

「……川村君め」

「で、結局なんなんですか？」

一夏が若干警戒しながら問うと、楯無は口元に扇子を当て薄く笑う。

「んー実はね、一夏君に協力してもらいたいなーと思って」

「お断りします」

「ちよ、早い！ 早いわよ一夏君！」

「嫌ですよ！ だって絶対口クな事じゃない！」

「大丈夫よ、生徒会の出し物を手伝ってもらうだけだから」

「嫌ですって。それに今俺は鈴と周ってるし、クラス的事もあるんですよ」

「クラスの件は大丈夫。話を通して置いたから」

「勝手に何やってんですか!？」

「おねーさんをなめちやいけないわよ。後は鈴ちゃんの件よね」

うふ、と笑いながら楯無が今にも爆発しそうな鈴に何かを耳打ちする。すると鈴の顔色が変わった。

「それはマジなんですね？」

「マジよ。大マジ」

「わかったわ」

「お、おい鈴？」

嫌な予感がしたのだろう。一夏が恐る恐る鈴に声をかける。だがもはや手遅れだった。

「一夏、生徒会を手伝うわよ」

「はあ!？」

「はい決定。それじゃあ行きましようか」

うふ、と笑う楯無と先ほどとは別の光を目に宿した鈴。その二人に嫌な予感を感じながら一夏は引つ張られて行った。

畳が敷かれた静かな室内。壁には掛け軸が駆けられ、扉には障子が張られた少し大きめの茶室。

「どうぞ」

そう声を発したのはこの場には合わない洋風のメイド服を着た銀髪の少女、ラウラだ。彼女は緊張した面立ちで自らが立てた抹茶を正面に座る人物——千冬に差し出した。

「お点前頂きます」

千冬が答え上品に、そして完璧な作法で受け取る。その姿にラウラは思わず見惚れてしまう。そんなラウラに構うことなく、千冬はラウ

ラの立てた抹茶を味わい小さく領いた。

「結構なお点前で」

お決まりの言葉で締めくくりお互いに一礼する。そうしてようやくほっとした様子のラウラに千冬は少し嬉しそうに領いた。

「大分上手くなつたじゃないか」

「本当でしょうか？」

「ああ。不味いなら不味いと私ははつきり言う」

確かに、とラウラも頷く。始めて立てた時はそれもう酷く、千冬はそのままストレートに感想を告げラウラは軽く凹んだものだった。しかしその後、厳しくかつ丁寧な千冬によって教えられてきた為にラウラの腕は上がっていた。

「しかしクラスの方は良いのか？ まだ学園祭は終わっていないが」

「ええ。再開の準備も思つたより早く終わったので、後は先に休憩に出た皆がある程度戻り次第再開になりました。なので私も遅れながら休憩を頂くことに」

「そうか。随分と繁盛していた様だしな」

「……教官も参加されれば良かったのでは？」

「やめろ……。あれは思い出したくない」

苦い顔をする千冬だがラウラは首を傾げる。クラスの皆は恐れていたがラウラからすればそれも千冬の魅力の一つと思つていた故に気にしていなかった。

「そうですか……残念です。そういえば他の茶道部の人達はどこに行つたのでしょうか？」

「あいつらも休憩中だ。日本の文化と言う事で海外から来た連中も結構興味があつた様でな。午前中は忙しく休憩も碌に取れなかつたらしいから一時閉店だそうだ。私は留守番みたいなものだな」

それはおそらく顧問が千冬だと言う事も関係したのだろう。それが分かるからラウラも領いた。

「だとすると私がお邪魔したのも悪かつたのでは？」

「構わんさ。最近ゆつくりとお前と話す機会は無かつたからな。何か聞きたいことがあつて来たんだろう？」

「……お見通しなのですね」

「まあな。これでもお前の元上官だ」

二人の間に沈黙が落ちる。千冬はせかす訳でも無く、静かにラウラの言葉を待った。やがて覚悟を決めたのだろう、ラウラがゆっくりと口を開く。

「教官は……篠ノ之博士の事をどう思っているのでしょうか？」

予想してたのだろう。千冬はゆっくり目を閉じた。

「臨海学校の件だな」

「……はい」

臨海学校での福音追撃戦。その最初の戦いの時の千冬の実績の事だ。千冬はより確実性のあったセシリアでなく、筈を選んだ。それは篠ノ之束が関わったが故だろう。

「それに無人機の件もあります。例の写真の件もありますが、私はやはりあれは博士の物でないかと考えています。しかしそうなる何故、あの様な行動を取るのでしょうか？　そして教官はどのように考えているのでしょうか？　私は、私は教官を敬愛しております。ですが……いえ、だからこそ知りたいのです」

自分の中の疑問を吐きだしたラウラは千冬の返答を待つ。千冬はラウラの言葉をゆっくりと飲み込む。そして小さく頷くと眼を開いた。

「ラウラ、お前が疑念を持つことは正しい」

「っ、しかしー！」

「聞け。臨海学校の選択、あれは間違いなく私のミスだ。それに無人機も恐らく……いや、確実に束の物だろう」

ふっ、とどこか自嘲めいた笑みを浮かべ千冬は続ける。

「結局私も盲目的だったのかもしれない。束との関係はいうならば腐れ縁の、しかし大切な友人だ。だからこそあいつの意見を信じ通した。無人機とて、何か理由があるのではと考えてしまう。そのしわ寄せを喰らうのが一夏やお前達だったと言うのに」

目の前の千冬は何時もの頼りに満ちた威厳のある姿でなく、どこか儂い物に見えた。

「結局私はISに乗るしか能の無い人間だ。教え子たちを導き、成長させる筈の立場であるのに苦難へと導いてしまった。我ながら嫌気がさす。学園に居るのだから、ISの技能があつたからこそだな。だからこそ憧れたのかもしれない。あいつが私のこんな力に憧れた様に、あいつの頭脳に。結局私はそんな人間だった」

だから、と続ける。

「私は敬愛されるような人間じゃない。唯の馬鹿でしか——」
「いいえ、違います」

千冬の言葉を遮る様にラウラが口を開いた。

「先ほど教官は私の立てた抹茶を褒めて下さいました。しかしそれは教官が指導してくださいったおかげです。何も分ならず、滅茶苦茶だった私を見捨てずに丁寧に指導してくれたが故に、私は褒められたのです。ドイツの時と同じです。落ちぶれていた私を今の居場所に連れて行ってくれたのは間違いなく教官の御力です。だからこそ私は貴方に憧れたのです」

いつになく饒舌なラウラに千冬が目を見開くが、ラウラは止まらない。

「だからそんな事は言わないで下さい。あなたは私にとっては優秀で敬愛できる指導者である事は間違いありません。だからこそ、私は教官から直接話を聞きたかったのです。教官があ那时的事を悔やんでいる事は分かりました。篠ノ之博士に対する思いも。それを直接聞いただけで満足です」

完璧な人間など居ない。それは数か月前、自分の思い描いていた『完璧な織斑千冬』という押し付けがましい想いを捨てた時に理解した。そう、千冬とてなんでもわかる訳でもないのだ。だからこそ見誤った。

「……まさかお前に慰められるとはな」
「ですが本音です」

「だが私は完璧では無い。それでもお前は私を信じるのか？」

「ならば、もし間違っていると思つたなら今度は私が止めましょう。私が、私が憧れる教官の傍で居たいが故に」

その言葉に思わず千冬は笑ってしまった。それも豪快に、大声で。だが馬鹿にするような笑いでは無い。余りにも意外過ぎるその言葉が面白く、そして嬉しくもあったからだ。

「くく、くくく、成程……それは良い。私が私が教えた教え子に導かれるというのは面白い」

「わ、私は本気です！」

「ふふ、わかっている。お前が本気だと言う事はな。嬉しいんだよ、私は。あのラウラがこうまで言ってくれるようになった事がな。これはやはり一夏や静司達のお蔭か？」

「それは——かもしれせん。少なくとも以前の私とが違うのは確かです」

「そうか。それは中々感慨深いな。……しかしだからといってお前達に任せきりにする訳にも行かない。だからこそ、私も準備を進めている」

「準備とは？」

「お前達ばかり戦場に出す訳には行かない。その為に——」

不意に携帯の着信音が響いた。千冬が取り出し通話に出ると、みるみるその顔が厳しくなっていく。

「間違いないんだな？ ……ああ、わかった。私も直ぐにそちらに行く。ラファール一機準備してくれ。パッケージは先日届いたミナミシステム社の物だ。アレを使う」

携帯を切ると千冬はラウラに向き直る。

「問題が起きた。この話はまた今度だ」

「敵、ですか？」

ラウラも先程の千冬の様子から何か良く無い事が起きている事は気づいている。下手に誤魔化すのは逆効果だと悟ったのだろう。千冬は簡潔に答えた。

「ああ、侵入者だ」

『会長が織斑一夏を確保。警備はC2のチームが当たれ。最優先だ』

『了解よ』

『C5は嬢ちゃん達に付け。怪我でもさせたらB9がキレるぞ』

『当然つす。そのB9は?』

『嬢ちゃん達の方に向かってる。他は全員C1の下に入り残りの馬鹿共を見つけ出せ』

『C1了解。しかしこの中から馬鹿だけを見つけてるのは困難ってレベルじゃないと思うんですが』

『分かっている。学園側が索敵専門パッケージで現在学園に居る全ての人物のフルスキャンを行う。その結果をこちらにも回す様会長が手配した。事前に登録された入場券所有者の顔写真と一致しない、もしくは登録していない奴は片っ端からつまみ出せ』

『成程。しかしそんな事出来るなら、最初からやってた方が良かったんじゃないんすか?』

『それは無理よ』

自らも耳に仕込んだ無線での会話と聞いていた由香里が、C1の発した疑問に答えてやる。

「フルスキャンは確かに便利だけど負荷も大きいわ。ISにも、使用者にとつてもね。通常のハイパーセンサーですらISの補助が無ければ情報量が多すぎて人間の頭じゃ処理しきれないの。だから高速機動や偵察調査専門の場合はそれに特化したパッケージを使用してるのよ。より効率よく運用できるようにね。それでも常時そんなの使ってたら使用者が意識を失うわ」

『つまり要所要所でしか使えないと』

「そういう事。それでも得る情報を正確に取捨選択しないと酷い目に合うから初心者には使えない代物よ」

『便利なんだか不便なんだか』

「物は使い様って事。IS学園だつて馬鹿でも無能でも無いわ。学生が持っていた入場券も招待者や譲渡者の情報は事前に顔写真付きで登録されてる。それと照らし合わせればそれなりに絞れる筈よ」

『しかし相手が正規の方法で侵入していたら判別できないつすよ』

「その時こそB9の出番よ。彼の目的を忘れたの?」

B9こと静司の任務。それは織斑一夏及びその周囲を脅威から護る事。その手段として『男性操縦者』である自分を囿に使う事も考えられている。事実、以前にその成果も出しているのだ。これは親だの子だのは関係ない。信頼しているからこそ、その任を負わせる。それは全員理解している。

『一応聞いただけですよ。フォローもするつす』
『よろしくね。彼女達の無事さえ確認すればB9も冷静になるでしょう』

今の所侵入者の目的は静司と二人の少女達。ならば最優先護衛対象である一夏には余り近づけない方が良く。それよりも半ば巻き込まれた形の二人を優先とした。彼女らの安全を確認すれば、静司も冷静に対処できるはずだと言う考えもある。

「大切なものが増えた故、ね。けどそれがあの子の活力の一つ」

ふふ、と非常時にも関わらず笑ってしまう。あの静司が復讐やEX ISの仲間の為以外で必死になる事が母親代わりの自分には少し嬉しいのだ。

「しかし妙ね……」

『そうだな。以前も感じた事だが、雑すぎる』

由香里の呟きに答えたのは夫でもあり、C1達を指揮している課長だ。

『どんな方法で侵入したのかはハッキリとしてないが、そうそう簡単に侵入できる筈はない。それなのにあっさり侵入した割に、ナイフで突撃というのは単純すぎる』

「ええ。手引きがあったとしても、こんなにあっさり露見するのは妙よ。これだけの事をしでかす奴が、こんな単純な方法を使うかしら」
侵入までは見事なのに、それ以降が杜撰過ぎる。これではまるでわざと騒ぎを起こしている様にも思える。

「考えられるのは陽動だけど、そうなるかと厄介ね。主義者とは別の意思が潜んでいる可能性が高いわ」

『そしてそいつらは学園に侵入し、侵入させる手段を持っていたと。だとすると狙いは何だ？ 一番あり得るのは織斑一夏だが』

「そうね。けどありえ過ぎるが故にあからさま過ぎる」

可能性は幾らでもある。それ故にこの騒ぎの終着点がどこかわからない。それがもどかしい。

『……今は考えるより行動だ。捕まえた連中を片っ端から尋問してでも情報を聞き出す』

「結局それしか無いわね。変化が合ったらすぐに報告を」

『了解だ』

父や静司達の居た場所から逃げ出したシャルロットはお祭り騒ぎの人ごみの中を一人歩いていた。その顔は少し青ざめ、視線は下を向いている。

「どうして……」

どうして、父があんな所に居たのか。何故、今更会いに来たのか。そもそも本当に会いに来たのか？　もしかしてたらまた自分を利用するために直接来たのかもしれない。

「嫌だよ、もう」

もうあんな思いは嫌だ。友人や大切に想う人たちを騙し、利用する様な事はしたくないし考えたくもない。だからこそシャルロットは逃げたのだ。それがなんの解決にもならないとは知っているのに。ならばこれからどうすればいいのだろうか？　このまま逃げ続ける？

いや、ダメだ。

「あく、しゃるるんめつけ〜」

「え？」

不意に背中に重みを感じたかと思うと一気にそれが増し思わずシャルロットはよろけた。しかしそこは代表候補生。抜群のバランス感覚で態勢を立て直す。

「ほ、本音？」

「おふこーす」

自分を押しつぶそうとした人物、それはいつも通りの笑顔の本音だった。彼女はまるでおんぶをねだる子供の様にシャルロットの背

中に乗っかっている。

「ちよ、何するのさ本音」

「んくしゃるるんの髪良いにおい」

「話を聞いてー!」

はたから見れば美少女メイドが二人じゃれ合っている様にしか見えぬ。その光景に通りがかった人々も暖かい物を見る様な目だ。

「ちよ、本音! 恥ずかしいから本当にね!」

「ねむー」

「寝ないで!」

その視線に耐えられなくなったシャルロットは出来るだけ人の少ない方を目指す。この広い学園だ。いくら学園祭と言ってもそんな場所は幾らでもある。

人ごみを抜け、ようやくそんな場所にたどり着いたシャルロットは背中の本音を無理やり引きがはがすと近くのベンチに置いた。

「はあ……まったく何してるんだよ本音」

「んく? 気持ち良かったよ」

「その言い方が恥ずかしいからやめて……」

相変わらずのんびりとした様子の本音にシャルロットはがつくりと肩を落とす。そして本音の隣に座ると少し笑った。

「全く、元気づけたいにしてももうちよつと方法を考えて欲しかったな」

「あり、ばればれ?」

「うん、ばればれ」

ふふ、とお互い笑う。本音は相変わらぬのほほんとした様子だが、それでもいつもの少し違う、こちらを気遣う様子が見れた。

「おとーさんの事苦手なのかな?」

「苦手……うん、そうだね。他にも色々理由は有るけどやっぱりそれが一番かな」

「……」

「苦手で、何を考えているのか分からなくて。そもそも本当に娘と違って貰えているかもわからない。だから、怖いんだ」

「むう、そんな人をいきなり呼んでくるなんてびっくりだもんね。かわむーも先に言っておいてくれれば良かったのに」

「確かにそれは僕も思ったなあ。いきなり過ぎたから僕もいきなり逃げちゃったし。けど——」

「うん。意味も無く呼ぶなんて事は無いと思うよ」

「そうだね。K・アドヴァンス社の社長も絡んでたし、きつと何か考えがあると思う。けどやっぱりいきなりは、ね」

「けどやっぱりお話しなきや分からないよ。だから頑張つて」

そういつて本音が視線を移す。釣られる様にシャルロットもそちらを向くと、そこには親でありデュノア社の社長でもある人物、ユーグが立っていた。

その姿に思わずシャルロットは身を強張らせてしまう。歯がガチガチと震え、今にも逃げ出したい衝動に駆られる。だがそんなシャルロットの膝に急に本音が頭を乗せた。

「へ？ 本音？」

「私はここでお昼寝zzzz……」

言うが否や本当に寝てしまった。その行動に思わずきよとん、とってしまう。だがその重みが、温かさが今は有難かった。逃げそうになった心を押さえ、父と向き直る。当のユーグは本音の行動に未だに戸惑っている様だった。そんな様子に、相手も同じ人間なんだとシャルロットは改めて思い直し、気合いを入れる。

「何をしに、来たんでしょか？」

それは娘が父に発する言葉としては余りにも硬い口調だった。しかし二人にとつてはこれはいつも通りである。

「K・アドヴァンスの社長に連れられて来た」

「そうですか。けどそれだけじゃ、無いんでしょ？ あなたがそれだけで動くとは思えません」

ぐつ、と拳を握る。逃げては駄目だと。膝の上の暖かき。友人達との楽しい日々。そして大切に想う人の事を思い浮かべながら。

「また僕に何かをさせる気ですか？ だとすれば僕はもう—— 従いません」

それは初めての面と面を向かった反抗だった。そのシャルロットの様子にユーグは静かに首を振った。

「そういう為に来たわけでは無い。だが、そう思われても仕方ないのだろうな」

「何を今更——」

「正直に言えば、私もどうすればいいのか分からない。連れられるままに来て、そして何も思いつかなかった。社長という肩書きも今ここでは役立たずだな」

「……」

「だが分かった事がある。お前は先程私を恐れていた。そしてそうさせたのは私だと言う事だ。そして逆に——」

今日、私と出会うまでのお前は今まで見た事も無いような笑顔を浮かべていた。

その言葉は小さく、また風が吹いたためにシャルロットは正確に聞き取れなかった。だが父が何か、今までとは違う重要な事を言った事だけは分かった。だからこそ、聞いてみたい。その言葉を。

「今なんて——」

不意に、ユーグの顔が厳しくなる。手でシャルロットを制し背後へと振り返る。不思議に思っつてシャルロットもそちらを見ると、私腹を着た数人の女がこちらを見つめていた。格好こそは普通だが、何か不吉な感じがした。

「何者だ、貴様ら？」

ユーグが静かに問う。だが女たちは何も言わずゆっくりと近づいてくる。懐からナイフを取り出しながら。

「っ!？」

その様子にシャルロットの肩が震える。あの女たちは何者なのか。どうしてあんな物を持ち出しているのか。父との対面で思っていた以上に精神を疲労していたのか、体が直ぐには動かなかった。

「……………え？」

一瞬、こちらをちらりとユーグが見たかと思うと一歩、動いた。それは凶器を持つ女達とシャルロットの間を塞ぐ場所。そこに自ら移

動したのだ。そんな父の行動の真意が読めず、いや違う。その行動が信じられなくてシャルロットは戸惑う。

「悪いが」

女たちが徐々に近づくスピードを上げていく。その様子を真っ直ぐ見つめながらユーグは告げた。

「あの子を怯えさせるような存在は——私一人で十分だ」

凶器が振り上げられる。ユーグが腰を落としそれを迎え撃つかのよう構える。その光景を目にシャルロットは——

49. 父と子

「IS学園が動きだしたわねえ。ま、あそこまであからさまにやってあげたんだから当然よねえ」

『わざと?』

「そういう事」

学園から最も近い街。そこにあるホテルの一室でカテーナは投影ディスプレイを眺めながら笑みを浮かべていた。ディスプレイは複数並んでおり、その中の一つにはIS学園で現在起きている状況が映されている。

『なぜばらす? あからさま。ざつ。いとふめい』

「ふふふ、これも勉強よ。考えてみなさいな」

彼女が話す相手は人間では無い。学園の状況を映す物とは別のディスプレイに浮かんだ文字。それが彼女の話し相手だ。その文字――無人機の意味は数秒間の沈黙の後答えを出した。

『べつのもくてき。ふくすうそうてい。わな。おとり。……あそび?』

「あら、鋭いわねえ。全部正解」

無人機の答えにカテーナは賞賛を上げる。この無人機は日に日に成長してきている。以前は理解していなかった『遊び』という概念を知り、カテーナという自分の性格を読み取り、そしてその答えを出したのだ。それが嬉しくてカテーナは上機嫌になる。

「二つは織斑一夏から川村静司を引き離す為。オータム達の悪巧みに彼は邪魔だからねえ」

うふ、笑いながらコンソールを叩く。映し出されたのは学園上空を飛ぶラファールの姿。あれが索敵パッケージに換装し、教員が操縦する機体だろう。

「二つ目がこれ。学園に侵入した敵の発見に扱いの難しいパッケージを使用。ならば当然、それを扱うのはそれなりの実力者の筈。恐らくは山田とかいう教員ね。織斑千冬の影に隠れがちだけど彼女の能力は目を見張るものがあるものねえ」

何せ今IS学園には生徒教員含めて1000人以上の人が居る。その中から限られた敵を見つけ出すのは相当困難だ。その為の索敵パッケージだろうが、いくら物が良くても使う者が追い付けなければ意味が無い。

『それは、おかしい』

だが無人機はそのカテーナの答えに疑問を持ったようだった。

『さんまのようどう。だけどあいえずがくえん、さくてきとつか。さんまばれる。ほんまつてんどう』

「さんまつてオータムの事よね？ ……これはシェーリの影響かしらねえ。まあいいけど」

当の本人であるオータムが聞けば激怒しそうな言葉を吐きつつ、カテーナは深く感心していた。本当に、この無人機は自分が考えている以上に成長している。

「確かにそうねえ。索敵によりオータムがバレるでしょう。けどまあ少しでもやっかない戦力である川村静司と教員を引き付けてあげたのだから良いのよ。川村静司は正体を隠している様だし、不用意にISも使えないもの。あとは生徒会長が残ってるけどそれ位は自分でなんとかしてもらいましょう。そして最後の理由は……これよ」

そういつてコンソールを叩くと聞き慣れた声で返事が来た。

『お呼びでしょうか』

「ええ、シェーリ。そろそろ頃合いね」

『了解しました。では後ほど』

カテーナの言葉で通信の相手であるシェーリは理解した様で直ぐに通信は途切れた。

『しえーり？』

「そう。彼女には大事な仕事を頼んでいたのよねえ」

『しごと？』

その問いに対し、カテーナはとても楽しそうな顔で頷き、

「そう。不思議なイレギュラーの調査のお仕事よ」

自分は父とどうなりたいのだろうか。

それはずっと考えていた事。悩んで悩んで、しかし明確な答えが出てこなかった自分自身の疑問。今も解けない、疑問。

そう、解けていないのだ。しかしいつまでも放って置くわけにもいかない。あれから時間も経った。いい加減自分自身の方向性を決めるべきなのか。しかしそう簡単に決まる問題ならそもそもこんな悩みはしない。

だけど、

今日の前でその問題が消えようとしている。解決せぬまま、永久に手の届かない悩みとなってしまう。

良いのでは無いか？ 自分を悩ませる種だと消えてしまえば。そもそも自分を道具の様に扱ってきた相手だ。きつとこれはその報い。罰。因果応報。

だけど、

『あの子を怯えさせるような存在は——私一人で十分だ』

あの子と、そう言った。それは初めて自分の事を子と呼んでくれた瞬間だった。それを聞いて自分はどう思った？ わからない。本当に？

違う。

どんなに道具の様に扱われても従ったのは結局は繋がりを求めていたからでは？ ずっと連絡を取っていなかったのも、父に怒られ完全に縁が途切れてしまうのを恐れた居たからではないか？ わからない。わからない。わからない。

だがしかし、それでも一つだけ分かる事がある。

「駄目だよ……」

もしここで何もせず、そして目の前の人が倒れてしまったらもう二度と話す事は出来ない。何も解決せぬまま、全てが終わる。そんなのは……嫌だ。なにより自分はまだ、あの父に対して文句を一言も言えていない。そうだ、そんな理由で良い。どんな理由でも良い。なんでもいいから理由を付けてこの体を動かせ。でなければ必ず後悔する。

ならば――

「リヴァイブ！」

自らの意思を奮い立たせ、叫ぶ。緊急展開の命令を受けたISが己の腕を光で包み、その光が収束していくと愛用のアサルトライフル《ガルム》が現れた。シャルロットはその銃口を父に迫る者達に向け、そして引き金を引く。

「!？」

ユীগに襲い掛かろうとしていた彼女たちの足が止まった。そしてその足の先数センチの距離にたった今シャルロットが放った銃弾の跡があった。

「次は当てます。だからその人に近寄らないで」

そのシャルロットの言葉に最も驚いたのはユীগだった。彼はまるで信じられないといった表情でこちらを振り返っていた。その表情にシャルロットは思わず歯ぎしりしてしまう。

(そんな顔は……やめて)

娘が父を助けた。それだけの構図なのに、そんな顔をする父。これが今の二人の距離なのだ。その事実が無性に悲しい。だが襲い掛かる彼女たちの行動がシャルロットに悲しむ暇を与えない。彼女たちは一瞬怯んだが、直ぐにまた動き出したのだ。

「そんなん!？」

慌てて銃口を女達へ向ける。しかし引き金を引けない。対ISを想定しているこの武装では生身の人間相手では間違いなく殺してしまう。先ほどのあくまでブラフだったのだ。シャルロットにはまだ人を殺す勇氣は無い。接近戦ならまだ何とかかなった。しかしもはや瞬時加速でも間に合わない程の距離に、父へ刃を向ける凶器があった。

「駄目だよー」

目の前で消えてしまう。ずっと恐れていて、しかし焦がれていたかもしれないものが目と鼻の先で。しかし自分にはもうどうする事も出来ない。父を助けに行くのも。父との距離も。父との和解も。親子という関係も。何もかもが遠くて、遅すぎたのだ。

「父さん！」

悲鳴の様に叫ぶ。だが時間は止まらない。もはや数センチという距離まで迫ったナイフがユーグの首を薙いだ。

「あ、ああ……」

地面に膝を付き、シャルロットは絶望の声を漏らした。涙を流し、呆然とナイフを振りきった女達と、血に染まった父を――

「え？」

思わず間拔けな声を漏らしてしまう。ナイフは明らかに父の首を切り裂く軌道を取った筈なのに、その父は血を流していない。それどころか、

「言った筈だ。十分だと」

ユーグは女の一人の腕を掴み引き寄せ足を駆ける。そのまま地面に引きずり倒しその背中を踏み抜いた。女はうめき声をあげもがくが、腕を極められている為碌に動けない。

「ど、どういうことだ……!?!」

もう一人の女が取り乱しながら己のナイフを振りかざす。しかしそれはもはやナイフと呼べる代物では無かった。柄より先、刃の部分が消えている。見れば倒れた女の物も同様だ。その奇妙な光景にシャルロットも意味が分からない。だがその答えは直ぐに知れた。

「随分と無粋な連中つすね。お祭りだからつてはしやぎ過ぎつすよ」

ゆっくりとこちらに近づいてくる人影。その人物にシャルロットは見覚えがあった。

「理沙さん……?」

「正解つす。お久しぶりつすねー」

ひらひらと手を振るのは一度だけ会ったことある人物。K・アドヴァンス社に見学に行った際に案内役をしていた麻生理沙だった。何故彼女がここに居るのかは不明だったが、それ以上にシャルロットの眼を引いたのは彼女が手に握る物だった。

「そ、その銃は」

「これつすか? 護身用兼護衛用つす。うちの社長も来てるつすよ。学園側にも許可取ってるつすよ」

そう言いつつサイレンサー付きの自動拳銃をしまう理沙だが、本来なら許可など出る筈が無い。彼女の場合はEXISTという特殊な立場故だ。だがシャルロットが驚いたのはその事だけでない。状況からするに、理沙がああ拳銃で女たちのナイフの刃を正確に撃ち抜いたと言う事になる。生半可な実力では無い。

「くっ……」

残った女は突然の乱入し怯みはしたが引く気は無い様だった。再び臨戦態勢を取ろうとする。そんな女達に理沙は呆れた様に忠告する。

「やめとくつすよ。これ以上怒らせない方が良いすつよ」

「私たちは……貴様の怒り程度で止まるつもりは無い」

「いやー私のことじゃないすよ」

「何を——」

「やってるんだらうな、お前達は」

背後からの声に女が振り返るとその顔が正面から掴まれ、持ち上げられた。そして勢いよく地面に叩き付けられた。女は悲鳴すら上げる間もなく気絶してしまう。

「静司!?!」

「無事か、シャルロット」

声の主はシャルロットが良く知る人物、静司だった。静司は女が完全に意識を失ったのを確認すると、シャルロットと本音の姿を確認しほっとした顔になる。続いてもう一人の女を取り押さえているユーグに向き直った。

「無茶をしますね。そもそも敵がまだいるのにその行動は危ないと思いますよ」

「こいつらのナイフが砕けたのを見たからな。誰かしらが救援に来たとわかったからこうした。そうでなければ別の方法を考えていた。最も、その救援が君たちとは思わなかったが」

ユーグがため息を付く。しかし静司を見るその眼はどこか疑わし気だ。その視線が先ほど女を掴み上げた左腕へと移る。

「随分と怪力なんだな」

「……ええ、まあ」

静司は深くは語らず視線を理沙に移す。理沙は小さく頷き女を取り押さえる役をユীগから引き継いだ。

「父さんー」

我に返ったシャルロットがユীগに駆け寄るが、数歩手前で失速してしまう。そのままユীগと数歩離れた所で立ち止まってしまった。ユীগはそんなシャルロットの様子を見ても表情を動かさずに立ち上がる。

「無事か？」

「え!? う、うん」

その問いかけが意外過ぎて慌てて頷いてしまう。しかしユীগは気にすることなく、「そうか」とだけ言うとそのまま黙ってしまった。そのままお互い無言で向き合っていたが、このままではいけない。そう思いシャルロットは勇気を振り絞り声を出す。

「どうして、あんな事を？」

自分を守る様に立ち塞がった父の姿。それは今迄の印象からは考えられない事だ。だからその理由を聞きたかった。

「……」

「教えて……下さい」

無言の父の圧力にシャルロットの声が消え入りそうになる。

「……自分でもまだわからん」

ようやく来た返答。だがそれはどうとでも取れる無機質な答えだった。その事にシャルロットの肩が下がる。

「だが、そうしなければならぬ。そう思った」

「え……」

「先ほどクラスでの姿を見た時、クレールを思い出した。本当に良く似ているのだな。今まで気づかなかった自分が馬鹿らしい」

クレール。それはシャルロットの母の名前。そして父の愛人であった人の名前だ。その名前を父の口から聞いたのは初めてだった。

「クレールを思い出し、そして何故彼女を愛したのか、その事を思い出した。今はまだ、それだけだ」

「そうですか……」

想ったのは母の事。自分の事では無かった。しかしそれでも構わないと思う。今までずっと、住む場所も心の距離も離れた場所に居たのだ。突然自分の事が大事になったと等言われても、信じられないかもしれない。だがまずは母の事を想ってくれた。自分も大好きだった優しい母。その事を想ってくれただけでも嬉しい。そしてその事で自分を守ろうとしてくれた事も。まるで母も一緒に守ろうとしてくれた様で。

だからシャルロットは笑い、しかし同時に瞳を涙で潤ませながら父に告げる。

「今すぐでなくても良いです。僕……私自身にも気持ちの整理が必要ですから。だけどいつか、その答えを教えて欲しいと思います」

もはや自分の気持ちはわかった。父に危機が訪れた時、明確に自覚した。やはり自分は父と親子という絆で結ばれたのだ。だからあれほど焦り、そして一度は絶望した。しかしその絶望のお蔭で自分の気持ちは知れた。だが今は気持ちが高ぶっていると言う事もある。だから冷静になって落ち着いて、時間をかけつつ考えよう。この気持ちに偽りはないか。そして問題が無ければ少しずつでも前に進む。もう、停滞はしたくない。

「……わかった。必ず答えを出そう」

ユーグは頷き、少しだけ。そう、ほんの少しだけ口元を緩めるのだった。

「かわむー」

シャルロット達を見守っていた静司の下にいつの間にか起きていた本音がのんびりとやってきた。静司も顔を崩し、穏やかな表情で手を上げる。

「本音も無事だな。良かった」

「そくだね。わたしもしやるるんも大丈夫」

ぱたぱたと手を振る本音。しかし直ぐに心配そうな顔になった。

「また何か起きたの？」

「……ああ。そうだ」

手短に本音に説明する。侵入者が居る事。その狙いは自分と、そして本音やシャルロットだと。嘘は付かず、正直に全てを話した。

「済まない。また俺の——」

「せいだ、なんていっちゃ駄目だよかわむー」

どこか気落ちした感じの静司に本音は相変わらずの笑顔でぺし、と静司の胸にチョップを入れた。

「前も言ったよね。それ以上言ったら怒るって」

「っ、そうだったな」

自分のせいだ。その考え自体は消えない。しかしそれでへこたれている訳にいかないのだ。そしてそれを理由に居なくなる事も許されない。それは臨海学校の時、本音にも言われた。そして自分はその時誓ったのだ。今度こそ守りきると。

「うんうん、良い顔だねかわむー。かつちよいい」

表情からこちらの考える事を読み取ったのだろう。本音は嬉しそうに頷き静司の左手を手を取った。

「言ったよね？ 私もかわむーを守りたいなって。私は戦っても強くないけど、それでもこれから無茶を始めるだろうかわむーを信じて待つことは出来るよ。それだけじゃ駄目かな？」

こてん、と首を傾げつつ本音に問われ、静司は首を振った。

「とんでもない、十分すぎる程心強い」

戦う力は無くても、自分の事を信じて待っている人が居る。それだけでも力の湧き方が違う。だから静司は笑い、そして本音の頭にいつもの様にぽん、と頭を乗せる。

「なら……いってきます」

「はい、いってらっしゃい」

二人頷くと、静司は再び学園祭の喧噪の中に駆けて行った。

因みに、

「……はっ!? 親子ドラマと青春ドラマ見てるうちに置いてかれたッす!? もしかして状況説明含めて投げられたッすか自分!？」

「くっ、離せ——」

「うっさいっすよー」

C1達が到着するまで、ユークから女の拘束を引きついだいた理沙が暴れる女を頭を何度も地面に叩き付け黙らせていた。

『B9。二人はC1とC12が護衛に付いた。人目のつかない場所へ移動させる』

「了解。敵については？」

『先に捕まえた奴含めてC5が拷も——尋問する。それと件のIS学園の索敵だが——』

その時、学園祭に湧くIS学園の上空を一機のISが駆けた。その光景に来場者たちは盛り上がり歓声が沸く。何かのショーと勘違いしている様だ。

「今確認しました。乗っているのは山田先生ですね」

『らしいな。スキャンを開始した。この結果も直ぐ転送する。だが連中が不法侵入以外で入り込んだ場合は、あの方法でも見つけられんかもしれん』

「ですね。だからこそ自分は今ここに居る訳ですし」

そういつて静司は周りを見渡す。ここはIS学園の正面入り口近く。多くの人が行き交い、出店も並んでいるエリアだった。

「このまま人目の多い場所を移動していき、敵が釣れ次第掃討します」
『お前は余り派手に動くなよ。学園側もお前を守ろうと必死だが、そのせいでお前の行動は逐一見られている。間違っても黒翼が使える』
「自分の為にやってくれている事なので文句は言えませんが……」

『そもそもお前を囮にする事でさえ大反対されたんだ。最後は桐生がいつも通りの力押しで通したが、教師陣は納得して無かったぞ。織斑千冬自らお前の下に行くと言っていた』

「なっ、指揮はどうするんですか」

『指揮できるのは織斑千冬だけじゃないさ。彼女が優秀だからその位置につく事が多いが、今回は彼女自ら出るらしい。臨海学校の件を相当悔やんでいたらしいからな』

「……そうですか」

その事に思わず静司は考え込んでしまう。やはり彼女もあの時の選択を悔やんでいたらしい。そして同じような事を繰り返さない為にも自らが動き出した。その想いは良い事だと思う。しかしそれにより静司自身の行動が縛られてしまうのがジレンマだ。

『焦るなよ、B9。既に捕らえた三人の様子からするに敵のレベルはそう高くない。直ぐに全員捕まるさ』

「確かにそうかもしれません。しかしだとするとおかしく無いですか？」

どんな手を使ったのかも分からず入り込んだ者達。しかし手際が良かったのはそこまでで、その後の行動はまるでお粗末。あっさり露見してしまいいもはや計画通りとは行かないだろう。だがそれ故に侵入の手際の良さとのギャップが酷い。

『黒幕が居てその陽動……。しかしあからさま過ぎるのも確かだ。この件はこちらで調査を進める。まずはお前はお前の仕事をこなせ』
「そうですね。了解しました」

静司も小さく頷き課長との通信を切った。そして辺りを見回し目を細める。

「早速一人釣れたか」

自分を見つめる粘っこい視線。その位置をばれない様に確認しつつ、どうやって無力化するか考えながらその場所へ向かうのだった。

「ふむ……」

EXISTの通信室。そこで課長は顎を撫でつつ考え込んでいた。その内容は今しがた静司と話した内容。今回の事件の奇妙さだ。

「一応、織斑一夏の護衛戦力を削る陽動としては働いている。しかし

本当にそれだけか……?」

「B2も居ますし、余程の事が無い限りはとは思いますが」

オペレーターである女性も不気味そうに漏らす。言い知れない違和感が彼女にその顔をさせるのだ。

「妙なのは確かだ。本当は何もないかもしれないけれども、可能性がある限り用心するにこしたことはない」

「ですが——」

女性の言葉は突如響いた爆発音と震動で遮られた。警報が鳴り、周囲が一気に慌ただしくなる。

「何事だ!」

「っ! 西棟で爆発! これは……」

モニターを確認したオペレーターの顔が強張る。

「襲撃です!」

「さて、どうしましょうか」

炎と煙が充満する通路をシェーリはゆっくりと歩いていった。灰色のIS。ブラッディ・ブラッディに搭乗しつつ歩く彼女は炎も煙も気にすることなく悠然と進む。

「確かこの会社のコア保有数は4つでしたか。さて何機出てくるのでしょうかね」

そう呟きながら目の前で降りた防火シャッターに向け発砲。再び爆発音が響き、シャッターは跡形も無く吹き飛んだ。

「しかし誰も出てこないとは」

感心したようにシェーリは頷く。彼女は上空から一気に接近。建物の外壁を突き破りここへと侵入した。その時は何人かの顔は見れたのだが、彼らは直ぐに逃げだし、さらにそれ以降誰も彼女の目の前に現れていない。これは別に警備の怠慢という訳では無い。生身の人間では侵攻するISを止めることなど普通は出来ない。前に出るのは死に行く様な物だ。どうやらこの警備はそこを理解しているらしい。しかしだとすると、彼女の目の前に現れるのは必然的にIS

という事になる。だがそのISも姿を現さない。これは何故だろうか？

「まさま全ての戦力を外に出しているのでしょうか？　だとすると作戦は大成功と言う事なりますが」

「それは興味深い話だな」

障害物を排除しつつ進行するシェーリだったが、幾つ目かの防火シャッターを破壊した時、声が聞こえた。だがその声にシェーリは眉を潜める。

「是非、話を聞かせて貰おうかお嬢さん」

「男……？　ISも無しに何を」

破壊したシャッターの先。そこには一人の男が煙草を吹かして待ち構えていたのだ。オールバックの黒髪に黒のサングラス。黒のスーツに身を包み、不敵に笑う男が。

「なに、話をしてみたいと思つてな。まさか本命がここだとは思わなかったよ」

「成程。既に理解しているのですね」

「まあな。あからさまなあの侵入者たちはやはり陽動。しかしその目的がうちだとは思ひもよらなかつたな」

IS学園は勿論、EXISである課長や静司達。そして由香里も学園にばかり目が向いていた。その為に黒翼を持つ静司の他にも予備戦力としてB2も現場には居る。ISは今も持っていないがB5もだ。そして複数の歩兵チームと学園に戦力が集中していたのだ。そしてその隙を狙ってシェーリは襲撃を仕掛けた。それも事件が起こり始め、彼ら彼女らがこちらに戻り難くなつた状態だ。

「これは一本取られたな。しかしただ暴れに來ただけが目的じゃないだろう？」

「ええ。ですがそれをわざわざ教える必要ありません。それであなたははどうするのですか？　わざわざ目の前に來ると言う事は自殺願望でしょうか？」

ガチャ、と丸みを帯びた右腕の装甲に取りつけられた銃口を向けるが男は動じることなく煙草をふかしていた。

「言っただろう。話してみたかったと。君だろうか？ 学園の地下で静司と戦ったのは。散々やらかしてくれたそうじゃないか」

ふう、と煙を吐きつつ指で灰を床に落とす。

「そうですかそれが何か？」

「ふむ。つまりはだ、こう言いたかったんだ。——人の大事な息子に何してくれやがるんだド阿呆」

先ほどまでのにこやかな表情は消え、睨みつけてくる男の気迫にシェーリは思わず一步引いてしまった。そして自分のその行動に苛立ち男を睨み返す。

「成程。彼はあなたの息子でしたか。ではあなたを殺せば彼はさぞかし悔しがるでしょう」

「出来るか？ お前に」

「眼が見えていないのですか？ 今の状況を見てよくそんな口が叩けますね」

見せびらかす様に男に向けた銃口を揺らす。しかし男は表情を変えない。

「なあ嬢ちゃん。なんでISが最強の兵器と呼ばれると思う？」

「何を今更」

その理由は単純だ。異常なまでの機動性。バリアシールドによる搭乗者の保護。ハイパーセンサーによる知覚増強。そしてその小さな機体で強力な兵器を扱えるそのパワー。いくらでも理由はある。

「そうだな……確かにISの機動性やパワーは脅威だ。それまでの兵器が玩具の様に思える程に。だがそれ故に勘違いする奴は多い」

男は吸っていた煙草を捨て自らの革靴で磨り潰しながらゆつくと告げた。

「ISはな、最強の兵器であっても無敵の兵器じゃあない」

「戯言を——」

直後、シェーリはISごと吹き飛んだ。

50. 交わらないもの

IS学園上空。学園全体を見渡せる高度から山田真耶はIS学園を見下ろしていた。

「スキャン開始」

現在彼女が搭乗するラファールは普段とは違う装備となっている。右肩部分には大きなドーム状のレーダ。左肩には巨大なアンテナ。頭部も通常のラファールとは違い、フルフェイスのヘルメットの様になっている。武装は最小限であり、片手に持つライフルのみだ。

そして今、彼女の視界には様々な情報が映し出されている。

「探知範囲内の人物の顔写真と学園に保存されていた招待客の顔写真を照合。3%以上の差異がある人物のデータを本部へ転送」

普段の温和な雰囲気は無くその声は真剣だ。彼女にとって何よりも大切である生徒達の為であるので当然とも言える。彼女の視界では多くの顔写真が高速で流れ、条件に合う人物の特定を行っている。だがその顔が悔しげに歪む。

「外に居る人達だけじゃ不十分ですね。……学園のセキュリティへ接続。監視カメラに映る人物もチェック。並びに心拍数、発汗量、体温も追加……駄目ですね。これでは候補が多すぎます」

次々に視界に現れるデータに首を振る。学園祭だけあって殆どの人間が興奮状態に近い。極端な異常値以外は除外する。それでも途方もないほどの情報を吸い上げたISが次々にそれを視界に移していく。常人なら混乱してしまう程のその情報の奔流を真耶は的確に捌く。条件を指定していき、不要な物はISに省かせる。それでも送られてくる数々の情報から自分が当たりを付けた物を優先して本部へと転送していく。

更にはその情報の整理を行いつつ、自らも眼下に目を向け怪しい挙動をする人物が居ないか確認していく。俗に言うマルチタスクと呼ばれるスキルであり、彼女はそれを得意としていた。もしその事を生徒達が知れば『普段のドジっ子ぶりは……?』と首を傾げる事だろう。だが別に良い。いや、確かにもうちよつと普段から自分の事を敬って

くれても良い気がするが、今はその生徒の安全が第一だ。

「必ず守って見せます……！」

送られてくる情報を捌きながら、真耶は小さく呟くのだった。

織斑千冬は苛立っていた。表面上は無表情に見えるが、慣れてきた一夏や生徒達なら一瞬で逃げ出す程の雰囲気を感じながら学園祭の喧噪の中を進む。彼女を良く知らない招待客などはブリュンヒルデの登場に興奮するものも、千冬の元々の印象——よく言えばクール。ストレートに言うならば威圧感——に押されて話しかける者は少ない。それでも女性の間では彼女は憧れの対象だ。その威圧感に負けず話しかけたり、サインをねだる者達も居たが、それらを千冬は『急いでいるので失礼する』という一言で全て躲していた。

「川村め……何を考えている」

苛立ちながらも呟くのは、今向かっている生徒の名前だ。彼女の苛立ちの原因でもある。学園に侵入した者達。最初に捕まったそれを引き渡され学園側も事情聴取を行った。それらによれば目的は川村静司という。これには学園側も慌てた。貴重な男性操縦者。その片方をターゲットとしているのだから当然だ。即座に川村静司を保護すべく動き出そうとしたのだが、それを止める者が居たのだ。

桐生大樹。IS委員会の一人であり、川村静司の存在を秘匿していた人物。突然連絡があったと思えば、川村静司をそのまま囮として利用しろと言うのだ。彼曰く、どんな方法で侵入者たちが紛れ込んでいくか分からないのだから、出来る事は全てすべきだと言う事。しかしこれには教師陣は猛反対した。以前の福音暴走事件は即対応できる戦力が近くに無かったというのがあったが今回は違う。

だがそれらの反対も空しく、川村静司も了承したという事で実行されることになったのだ。この事に教師陣は歯噛みした。だから少しでも危険を減らす為に、IS学園では間違いなく最強戦力である千冬が静司の下へ向かう事になったのだ。

これが千冬が苛立つ理由。だがこれだけでは無い。侵入者たちの

動機も千冬を苛立たせる要因の一つだった。

篠ノ之主義者。友人である篠ノ之束を狂信する者達。侵入者の正体がそれだと言う事が千冬の苛立ちに拍車をかける。

そういう者達が居る事は勿論知っていた。そしてその事を千冬は当然如く良く思っていない。親友である束を尊敬する事は良い。千冬としても友人の事ながら嬉しく思う事もある。だが主義者の場合それが極端すぎた。束の功績は良い物も悪い物もあるが、主義者達は全てそれを都合よく解釈してしまうのだ。そして起こす行動はどれも極端であり、結果一般人からは異様な者として扱われる。そうなる事で束の印象が更に悪くなるというのに。

そして今、自分の生徒を狙うのがその主義者達。その原因は臨海学校の事件だ。だがあの事件と束を結びつけたと言う事は、主義者達も例の画像——無人機と共に居る束の画像を見たと言う事になる。あの情報がどれだけの組織に流されたのかは不明だが、それほど多くは無い筈だ。なのに主義者が知ったと言う事は、それらの組織の中に主義者が居たか、それとも他の悪意ある何者かが教えたか。どちらにしろ碌な事では無い。だからこそ、今度こそ教師である自分達が動き、生徒を護らなければならぬ。そして束の親友として、親友のしでかした事の後始末を付けなければならぬ。

様々な思いを胸に秘めつつ、千冬は静司の下へ急ぐのだった。

「ふむ……」

K・アドヴァンス社。その西棟。

懐から取り出した新たな煙草に火を付けながら、課長は今しがた吹き飛ばされたISのある方向へ眼を向けた。そこは壁に叩き付けられた衝撃で舞った粉塵とシェーリの破壊活動による煙が入り乱れており、詳しい様子は見えない。

「出で来い。いくらなんでも死んでは居ないだろう?」

その言葉に反応する様に粉塵と煙が割れ、そこからシェーリが姿を現した。そのIS——ブラッディ・ブラッディの右肩装甲はひしゃげ

ている。それを見て課長はふむ、と頷く。

「最大威力の筈だったがその程度か。やはりまだまだだな」

「……味な真似を」

「貴重な経験だっただろう？」

「ええ、少々油断していました」

そう言ってシェーリは視線を横に向ける。そこの壁は内側に向かってひしやげる様に大きく穴が開いており、その穴の先には外が見える。そして——同じK・アドヴァンス社の敷地内の別棟の屋上で巨大なライフルを構える男の姿があった。

「対IS用ライフル、といった所だ。難点はその巨大さゆえの取り回しの悪さだな」

ふう、と煙を吐きつつ続ける。

「先の勘違いの話だな。ISに対する警戒はしていたようだが、歩兵に対しては注意を払わない奴が多い。動かない相手に対し、それなりの距離があればこの手段は有効だと分かった」

「……認めましょう。私の油断を。しかしこれからどうするのです？

同じ手は二度も喰らいません。何より今すぐにでもあなたと、あそこに居る男を殺して差し上げましょうか」

「ごめん被る。折角の対IS兵器。まだまだいろいろ試したいのである。何せ訓練で無く実戦でのガチ威力が試せるいい的が自分から来てくれたんだ。やらなきや損だろう？ まだまだあるぞ？ 対ISトリモチ弾から対ISスコップまで」

そんな課長の言葉にシェーリは不快気にに眉を潜めた。

「真面目にやっているのですか？」

「大真面目さ。君の目的は大方こちらの戦力調査だろう。それと今裏で行っているウチのシステムへの侵入か。私の話に呑気に付き合っているのが良い証拠だ。こちらのISが出てくるのを待っているのだろうか、だとしたら馬鹿正直に相手をしてやる道理はない」

本当に目的が戦力調査だけならわざわざ陽動までして行う理由は薄い。他にも目的があると考えるべきだろう。そしてそれこそが、今同時にK・アドヴァンスに対して行われているハッキングだろう。

シエーリの襲撃直後から、その報告が上がっている。タイミング的に無関係とは考え辛い。

「そうですか。ならば嫌でも引き出します」

シエーリの雰囲気が変わる。様子見から明らかな殺意へと。丸みを帯びた装甲の各所から新たな銃口が突き出される。最後に周囲に鋼鉄の棺桶型が6つ現れた。その銃口が熱を持つのを見て、課長もまた、時間稼ぎが限界だと悟った。

「ここまでか。A2」

『アイサー』

耳に仕込んだ無線からの反応と同時に、轟音と共にシエーリとそのISを中心に衝撃が走る。その衝撃に周囲の壁が軋み、亀裂が入った。先のライフルによる狙撃だ。しかしそれはシエーリに届くことなく棺桶により遮られていた。

「まずは一人」

シエーリを守った棺桶が開き幾重にも現れた銃口が連続して火を噴く。その攻撃は巨大なライフルを構えていた男の居た屋上を穿ち、一瞬にして粉々に砕いた。

「次はあなたです——」

外を一瞥しつつシエーリは課長に向けた銃器に改めて命令を送ろうとする。しかし急に顔色を変えると即座に振り返りその腕をかざす。命令を受けた鋼鉄の棺桶がまるで楯の様にシエーリの前に移動すると同時、ギイイツンと鈍い金属音が響く。

「これは……!?!」

「言っただろう。馬鹿正直に相手はししないと」

課長の言葉に呼応する様に振り返ったシエーリの正面、鋼鉄の棺桶のその先の空間が歪んだ。そして青白い電光を発しながらゆっくりとISが浮き上がっていく、やがてブレードを振り下ろしたラファール・リヴァイヴの姿が現れた。

「成程……無人機の技術の復元ですか。これは予想外でした」

「簡単に防いでおいてよく言いますね」

『完全なる消失』無人機が学園に襲撃した際に使用していたその技

術のコピー。それを用いた奇襲だったのだがシエーリはそれに気づき、対応した。その事にラファールの搭乗者は苛立ち気にシエーリを睨みつける。

「褒めているのですよ、これでも」

「そうです……かつ！」

ラファールの搭乗者は床を蹴って背後に跳ぶ。それを追う様にシエーリのISから放たれた銃弾が床を砕いていく。やがてその銃弾がラファールに追いつくが、それを身を捻る事で回避するとラファールも負けじとライフルを量子変換で展開し、シエーリへ撃ちこむ。しかしそれは棺桶によってシエーリに届く前に弾かれた。

「悪趣味な上に鬱陶しい装備ですね」

「そちらはそちらで次々と面白い物を出してくる。もうちよつと見ていたいですが潮時ですかね」

ちらり、とシエーリは外を見やる。姿こそ見えないが、各所に先のA2と同じように対IS装備でシエーリに狙いを定める者達が居るのだ。どうやら今度は気づいたらしい。

「どうやら今の攻撃が切り札だったようですしね。この後は唯のIS戦になりそうですが、下手に時間をかけて増援が来ても面倒です」

「逃げるのですか」

「ええ。あなた達としてもその方が良いでしょう？」

小馬鹿にした様なシエーリの言葉にラファールの搭乗者は唇を噛んだ。確かにそうなのだ。今はEXISTの戦力はIS学園に集中している。所有するISコアは黒翼を覗けば4個。その内1個は黒翼と共にIS学園に居るB2が持っている。残りの3個の内、1つは海外での任務に。1つは研究開発用としてこの施設内にあるが、ISとしての組み立ては出来ていない。そして残る1つがこのラファールである。無論、このラファールでも十分に相手を出来る自信はあった。しかしここでそれをやれば間違いなく火の海になる。課長がある程度の時間を稼いだが、それでも一般社員の安全圏までの避難はまだ終わっていないのだ。

そしてその沈黙をあざ笑うかのようにシエーリは悠々と空いた穴

から外へ出る。

「それでは。川村静司によろしく」

一言、それだけ告げると一気に上昇。どんどん速度を上げていき離脱していった。

「……忌々しい」

「全くだな。無事か、B7」

「ええ、問題ありません」

ラファールの搭乗者——blade7は課長の言葉に頷く。課長はそうか、と頷くと続いて外、粉々に砕けた別棟屋上に視線を移す。

「A2。そっちはどうだ」

『……腰が痛いケツが居たい足が痛い腕が痛い』

「怪我をしているのか？」

『一番痛いのは昨日カミさんに蹴られたケツ』

「……無事で何よりだ」

シェーリはああ言っていたが、課長自身はA2が死んだとは最初から思っていなかった。おそらく2射目の失敗を確認するが否や逃げたのだろう。完全には逃げ切れなかったようだが、あの様子なら大丈夫だ。そしてそれが出来るからこそそのassaultなのだから。

歩兵部隊のassault。IS部隊のblade。そしてそれらを援護するcover。任務は主にこれらのチームが対応することが多く、それだけに練度は高い。

「だが今回は完敗だな」

「申し訳ありません。あそこで仕留めていれば」

「いや、相手の練度を見誤ったのは俺だ。それにシステムも完璧じゃない」

無人機が使用したステルスシステムの復元。これは技術部の努力の結晶と言えるだろう。何せガラクタ同然の残骸を必死に調査してようやく復元出来ただけだから。しかしそれも完璧でない。本来の無人機は姿はおろか、各種リーダーにも捕らえられない状態で高速で学園に襲撃を仕掛ける程の物だったが、復元できたのは派手に動けば直ぐにバレてしまう程度の物だった。それ故に、課長自身。そしてA2

の狙撃等で時間と注意を稼ぎつつ、静かに忍び寄る一撃必殺戦法だった。しかしそれもギリギリで感づかれた。シエーリが感づいた理由は分からない。戦士の勘だと言われてしまえばそれまでだ。

「そもそもここを手薄にしたのが俺の大失態だ。IS学園は仕方ないにしても、もう一機、動ける機体を配備しておくべきだった」

「ですがそれも仕方ないかと。海外に出ているB3は直ぐに呼び戻せる状態ではありませんし、残る1個のコアも戦闘用ISに慣れさせるのは直ぐには無理です。新型ラファール開発の為に現は現在調整状態ですのぞ」

ISはコアさえ変えれば直ぐに使えるものではない。新たに用意した機体に対し、コアを慣れさせなければまともに動かないのだ。IS学園の量産機の様と同じ装備の機体が複数あれば、慣れもそれほど時間はかからないが、全く違う装備となるとそうはいかない。新たな『服』とも言える機体をコアが『知る』為の時間が必要なのだ。

「それでも何かしらの責任を取るのが上司というものだ。まあそれはいい。それよりうちの被害を知りたい」

「私——私が今調べたところですが、人的被害は軽微。多少の負傷者は居ますが重死傷者はゼロです」

「あちらさんは虐殺しに来たわけではなさそうだったからな。一般社員は？」

「比較的落ち着いています。興奮状態の者は居ますがパニックとまではいきません。普段から騒がしい本社ですのでイベント慣れしてしまっただかと」

「……………まあそれでパニックにならないならいいか。ハッキングの被害は？」

「早期に気づいたため対策は打ちましたが完全防御は出来ませんでした。やはりここに直接乗り込んで行われたのが痛かったです。最終的に物理的に切断。黒翼に関しての情報は何とか守り切りましたが……………」

そこでB7が言いよどむ。嫌な予感を覚えて課長は先を促す。B7は頷くと悔しそうに告げる。そしてその内容は課長にとってある

意味最悪なものだった。

「Vプロジェクト……B9の情報の一部がやられたそうです」

静司が感じた視線。その主は離れること無く、静司を追い続けた。それを背中に感じながら静司は学園祭の人ごみの中を歩く。その表情は一見、学園祭を見て周る学生そのものだが、内心は穏やかでは無い。つい先程、本音たちと分かれた直後に本社襲撃の報を聞いたからだ。それを聞いた直後は直ぐにでもそちらに向かいたかったが、それは何とか自制した。本社には課長の下、自分より優秀な仲間達が居る。ならばそれを信じるべきだと。

ざわつく心を押さえながらも静司は囧として学園祭の中を進んでいく。途中何人かに声をかけられるが、それを適当に躲しつつ他にも侵入者が釣れないかと考えながら進む。

先ほどから静司に下には何人かの侵入者確保の連絡が来ていた。それらを捕らえたのは更識家やEXISTの面々。そして学園の警備からの物だ。勿論、学園側からの報告はこちらの仲間経由だが。

(そろそろ仕掛けるか)

大分歩き回ったが、結局釣れたのは今感じている視線のみだ。正確には他にも何人か釣れたのだが、アクションを起こす前に真耶に発見され確保されている。今自分をつけているのはその真耶の索敵に引っかからなかった者。恐らく正式な招待状を持った人物だ。真耶もそれらを探るべく色々試してはいる様だったが、やはり難しかったらしい。ならばこちらから連絡する事も出来たが、現行犯で無ければ意味が無いだろう。それに本社襲撃の件もあるので、できれば先にこちらが尋問したかった。その為に静司は織斑千冬が自分を探している事を知っているが、あえて合流しない様になっている。……お蔭で先程から何度も鳴っている携帯を見るのが怖い。

行動指針を決めると静司は進む方向を変えた。今までは外から校舎内と歩いてきたが、再び外に出ると、人波から外れていく。C1達と連絡を取りつつ、少しずつ人気の無い方へと。

やがてたどり着いたのは資材搬入口の近く。午前中は学園祭に必要な物資の搬入で賑わっていたところも、午後を過ぎれば流石に搬入物が無いのか人気は無い。そこを進んでいき可能な限り奥、なるべく人が来ない場所を選ぶ。

「ここで密会でもする気か」

「——そうだな。ある意味そうかもしれない」

目的地に近づいた頃、相手から声をかけてきた。そのことに驚きつつ振り返り、そして追跡者の正体を見て眉を潜める。相手はスーツを着た男だったが、その佇まいがただの営業には見えない。堀の深い顔立ちに油断の無い鋭い目つき。浅黒い肌と短く切り揃えられた金髪。ただ立っているだけなのに隙の無いその姿。全身から溢れる雰囲気は軍人のそれだ。男は静司の返答に納得したように頷く。

「やはり私に気づいていたな」

「何の事かな」

「とぼけるな。わざわざこんなところまでやって来たと言う事は私を誘い出す為だろう。だが解せん。てつきり待ち伏せが大量に居る者かと思っていたが」

「……仮にそうだったとして、待ち伏せ前提でなんでお前は出てきた」
「同志たちはほぼ捕まった。ならば最後の賭けに出るべきだろう？」

ふ、と笑う男に静司は怖気がした。そしてそこまであの兎の為に動くという事実には静司は苛立つ。

「そうか。ならばとっとと——」

「君は篠ノ之束をどう思っている？」

「こちらの言葉に被せる様に、突然男が問う。

「お前に言う必要は」

「あるとも。君は自分の異常さを理解するべきだ」

「何だと……」

男の言葉に苛立ちが増していく。だが男はそんな事はお構いなしに続ける。

「男であるに関わらずISを使える。ここまでは織斑一夏と君は同じ異常だ。しかし彼にはそのISの親であるあの方との交流がある。

だから納得がいく。だが君はどうだ？ あの方との関係はおろか、織斑一夏、織斑千冬とも無関係だったはずだ。それなのに使える。君は異常の中の異常とも言える立ち位置に居る」

「知らないな。使える理由は俺が知りたいぐらいだ」

本当は知っている。Vプロジェクト。姉達の想い。廃棄コアより生まれし黒翼。そして黒翼との契約。それが自分が使える理由。しかし表向きは『何故か使える男』でしかない。

「その言葉が嘘か真か。それはまあいい。それだけだったのなら。だがそんな君にあの方は反応した」

あの方。篠ノ之束である事は明白だ。

「あの方なら君からISを奪うことなど容易い筈だ。だがそれをしなかった。それは何故だ？ 少なくとも君を不要な存在だと感じている筈なのに」

「随分と思ひ込みは激しいんだな。それともお前は人の心が読めるとでも言うのか？」

「これは確信だ。先日の銀の福音事件での出来事で私たちはそれを確信した」

初めて、男の表情が変わった。見下すような、汚物を見る様な、笑みに。

「君は不要だ」

行動は一瞬。男は懐から消音器付きの拳銃を取り出し静司に向け、引き金を引いた。パシユ、と空気の抜けた様な音と共に放たれた銃弾が眉間を狙う。だが静司はそれを身を屈める事で回避した。そしてそのまま一直線に男に向かう。

「君は居てはいけない存在だ！」

「貴様に言われる筋合いは、無い！」

再度放たれた銃弾が頬を霞める。しかし速度を緩めることなく距離を詰め、その首に右腕を伸ばす。だが男はその腕を弾き、もう片方の手にナイフを抜き、そして突き出す。静司はその一撃を右足を軸に半回転する事で躲し、その勢いのまま左腕での裏拳を男に打ちこんだ。

「ぐっ!?!」

生身で無い、ISの部分展開という鋼鉄の一撃。男はガードしていたが、腕の骨を折った感触を感じた。ナイフと拳銃が地に落ちる。そして抑えきれない衝撃に顔を歪め、男は背後に飛ばされた。追い打ちをかける様に静司がその男に迫る。途中、男が落とした拳銃を拾い一気に迫るとその首を左腕で掴み近くの壁に押しつけた。

「がっ……!?!」

「終わりだ。色々吐いてもらおうぞ」

銃弾がかすった頬から血が流れ出るのを無視し、拾った拳銃を男の顔に押し付ける。苦しそうに男が涎を垂らす。だがその顔が直ぐに笑い顔になった。

「何がおかしい」

「ふふ、ふふふふふ。やはり……異常だ。お前はおかしい。私たちは……いや、あの方は間違っていない!」

「似た台詞をさっきも聞いた。お前らは思想だけじゃなく頭の悪さも同じか」

「ふふふ、精々吠えている。自分が正しいと思っているその眼、それがいつか濁る日が必ずくる」

「黙れ!。だったらお前達は篠ノ之束が正しいと断言できるのか!」

「出来るとも!」

くわっ、と男が目を見開く。それは今日見た中で一番狂った、異常な目の光を持っていた。

「あの方のお蔭で世界は変わった!。人類は進歩した!。これが正しく無い訳が無い!」

「だがその進歩によって被害を被った人たちも居る!。知らないとは言わせない!」

「知っているとも!。だがそれは仕方ない物だ。必要な事だ!。なのになぜそれを理解しない!?!」

「ふぎけるな!。そんな理屈で許されるものか!」

「ならば!。ならば何故人々はその恩恵を享受している!?!。甘い汁だけ吸い、悪いのはすべてあの方だと!?!。それこそふぎけるな!」

「何を――」

「あの方は様々な物を私たちに、人類に与えた！　なのに誰一人としてあの方に報いようとしない！　欲にまみれて追いまわし、彼女の家庭を壊し、居場所を失わせた！　だから彼女は姿をくらました！」

「それはあの女の自業自得だ！　あんなものを世に出せば、そうなるのは分かりきっていた！」

「だが貴様の言う『あんなもの』のお蔭で多くの者が救われた！　それは事実だ！」

「だが手前の言う『あの方』のせいで、多くの不幸が生まれた！　それが真実だ！」

お互いに憎悪の籠った目で睨み合う。

「そうやって否定し、非ばかり唱えつつ与えられた物を我が物顔で使う。そんな世界が許せないのだよ、私は！」

「何だと……い！」

「君とてその一つだろう！　使えない筈の物を！　あの方に与えられてすらいらない物を使うこの世界最大のイレギュラー！　それがあの方を否定するか!?!」

「黙れ！　そんな理屈であいつが奪って来たものを許してたまるか!?!」

脳裏に浮かぶのは姉達の姿。優しく、時に厳しかった何よりも大切な姉達。そしてその変わり果てた姿。

「ならば君は言えるのか!?!　足を失い、不要と捨てられた兵士はIS技術の応用で自在に動く新たな鉄の足を得て、更なる国家の敵を駆逐した！　ISの操縦者保護の技術は活性化再生治療を生み出し、多くの子供を救った！　そんな彼らに向かって、お前達はそのまま死ねば良かったと!?!」

「その足を新たに奪うのも！　国を脅かすのも！　救われた子供達を殺す事ができるのも篠ノ之束が造ったISだ！　それでもあの女を恨むなと言うのか!?!」

「言うとも！　お前達は新たな世界の礎だと私は言える！　君の様に逃げて誤魔化したりはしない！」

「黙れ……！」

「君はあの方を否定したいが故に矛盾しているのだよ！ ISを扱
い、恩恵を享受しつつもその生み出した相手を許さないと!? 都合
が良いにも程がある！」

「黙れ黙れ黙れ黙れ黙れっ！」

男に突きつけていた拳銃。その引き金に置いた指に力が籠る。だ
が男はそんな事はお構いなしに静司に向け、言い放った。

「だから君は居てはいけないのだよ！」

「黙れええええええええええええ！」

引き金が引かれる。無機質な反動と共に銃弾が放たれ、そして血が
舞った。

51. 求める居場所は

手に握りしめた拳銃の銃口は、その成果を示す様に赤く濡れていて。それは銃を握りしめる静司の顔も同様で、頬の傷とは別の血がぼたりと頬を伝い床に落ちる。至近距離からの頭部に向けた発砲。それは確実に男の息の根を止める。その筈だった。

だが、

「……いつ、うあつ……！」

静司の目の前で男は苦悶の声を上げて身をよじらせる。その顔は血に染まっているが、死んではいなかった。何故なら男に向けた拳銃は横から伸びた手によってその銃口を辛うじて逸らされていたのだ。銃弾は男の眉間では無く、左頬から耳にかけて斜めに抉る様な軌道で放たれ、男の背後の壁にめり込んでいる。

静司は自分の行動を邪魔した手を見やり、そしてその主の姿を捉える。

「そこまでだ、川村」

その先には銃口を逸らさせた手の主、織斑千冬が居た。

千冬は若干の戸惑いを含んだ目で、目の前の生徒を見つめていた。川村静司。弟と同じ男性操縦者。どこか違和感を感じるものも、それが何なのか分からない。だがそう言った点を除き、普段の生活態度からすれば年相応の青臭さを感じる奇妙な生徒。親しい者達と笑い、騒ぎ、驚く。そんな唯の生徒の筈だった。

だが今の彼は明らかに普段と違う。こちらを見つめる目は昏く冷たい光を含んでおり、その奥底の感情は読めない。頬の傷と男の返り血によって赤く濡れたその顔は、まるで幽鬼の様であった。

「静司、無事……か……？」

背後からラウラが息を切らせながら走ってきた。ラウラは茶室で今の事態を聞くが否や、協力を申し出たのだ。千冬も拒否しても聞かないだろうとそれを許可し、共に静司を探していた。二人は上空の真

耶から静司の位置を確認しながら探していたが、当の静司がそれから逃げるように動いていたために途中から別ルートで探していたのだ。そして少し遅れて合流したのだが、目の前の光景に言葉を失っている様だった。

「ボーデヴィツヒ、この男を拘束しろ」

「っ、は、はい」

戸惑いながらも返事をしたラウラは静司が身柄押さえている男に近づく。だが静司が押さえつけている為に拘束が出来ない。それを見た千冬が静司に告げる。

「川村。その男を離せ」

「……」

「離すんだ」

目の前の生徒が言う事を聞くか、千冬には自信が無かった。普段ならそれこそ強制的に命令するが、今の静司にはそれは通用しない気がしたのだ。だからゆっくり、諭す様に静司に語りかける。

「もう決着は付いている。これ以上は不要の筈だ。そうだろうか？ いか、今からラウラがそいつを拘束する。それから私がその銃を受け取る。いいな？」

静司は無言。このままずっと何も言わないのでは無いか？ そんな不安が過るがそれは杞憂だった。静司は一度閉じるとゆっくりと体の力を抜いていく。男を拘束していた左腕から力が抜け、男はその場にずり落ちるように座り込んだ。それをすかさずラウラが拘束する。続いて千冬が静司から銃をゆつくりと取り上げた。

「よし、それでいい。……怪我をしているな、見せてみる」

静司の頬を掴み傷を調べる。傷は思っていたより深くなかった。これなら後も残らないだろう。だが放って置いていい訳でも無い。医務室に連れていくべきだ。千冬がそんな事を考えている間も、静司は反抗することなくただこちらを見つめていた。

「どうした？」

「……いいえ」

疑問に思い問いかけたが静司は静かに首を振る。ようやく反応ら

しい反応をした事に安心しつつ、千冬は奇妙な違和感を感じていた。静司は自分を見ていながら見ていない。自分を通して、何か別の物を探している。そんな気がしたのだ。その事を聞くべきか否か、千冬が考えかけた所でそれを遮るものがあつた。

「お、おお……っ！ ブリコンヒルデ」

それはラウラに拘束された男の声。男はラウラによつて地面に組み伏せられており、その顔からは未だに血が流れていて痛々しい。だがそんな事を気にすることなく、歓喜に満ちた笑みでこちら見上げていた。

「お会いできて光栄です。私は貴方にもお会いしたかったのですから！」

「黙れ。私は最悪だ」

自分を見上げる男に対し、千冬は不快感しか感じない。出来るのなら今すぐにでもその顔を蹴り飛ばしてしまいたかったが、この男には色々と訊く事がある。まだ意識を失つて貰つては困る。

「ふふ、ふふふふ。分かっていますとも。貴女達にとつては私たちは何てことも無い存在だと。それでも歓喜せずにはいられないので——っ!？」

「教官は黙れと言つた」

嬉々として語る男の首にラウラがナイフを突きつけた。更には拘束している腕を捻り、無理やり黙らせる。それを横目で見ながら千冬は空を見上げる。

「山田君、聞こえているな？ 至急人員をこちらに回してくれ」

『了解しました』

返答は直ぐに来た。真耶も今の状況は観測している筈なので、予想していたのだろう。千冬は一つ頷くと静司に視線を戻す。その頃には先程の何かを探すような眼では無く、どこか疲れた様な顔の静司が居た。

「すぐ治療はしてやるから大人しくしている。だがその前に一つ聞きたい」

「ちらり、と今は自分が持っている拳銃を見る。静司もそれに気づい

たのかそれを見る。そんな目の前の生徒から視線を逸らさず千冬は問う。

「殺そうとしたのか？ この男を」

質問に対し静司は答えない。それに少し苛つきつつ、千冬はもう一度問おうとした。だがその前に男が反応した。

「ブリュンヒルデえ！ その男は危険です。きつと貴方達に害を成す。今すぐ切り捨てるべきです！」

「黙れと言った！」

ラウラが叫び拘束する力を込める。だが男は苦悶の表情を浮かべながら叫んだ。

「あの方と、あなたの作った世界！ こいつはそれに対する反逆者です！ 必ずやあなた達を不幸にする！」

「いい加減にしろ！」

遂に痺れを切らしたラウラが腕を捻る力を全開まで上げる。ごきり、と嫌な音が響き男の腕はあらゆる方向に曲がってしまった。

「あああああああああつ!!」

その痛みに男は涎と涙を流しながら叫び声を上げた。だがラウラは冷たい表情でそれを見下ろしている。いや、実感だがその顔が苛立っている。それは男がうるさいからか。千冬の命令を聞かないからか。それとも、友人であり戦友とも呼べる静司に対する暴言故か。それは千冬には分からない。だが最後であればいい、と場違いながらもそんな事を考えてしまう。

「例え——」

不意に、黙りこくっていた静司が口を開く。その眼には先ほどまでの昏い光は無いが、別の感情が渦巻いている様に見えた。

「例えどんな理由があろうとも、世界から後ろ指を指されようとも」
ぐつ、と拳を握りしめ、男を見下ろしながら静司は告げる。

「俺は篠ノ之束を許さない。ただそれだけだ」

千冬も、ラウラも何も言わなかった。否、言えなかった。

何故そこまでして静司が束を恨むのか。千冬には分からない。確かに臨海学校の件で束は静司と、そして彼と仲の良い女子に危害を加

えた。一夏やラウラ達も怪我を負った。その事で恨むのは分かる。自分とて、生徒を傷つけた東の事を簡単には許せない。だが静司の怒りはそれだけでは無い。そんな気がするのだ。

千冬は静司が引き金を引く直前まで、二人の会話を聞いていた。人氣が無いと言う事は声もよく響くという事だ。静司を発見し、その傍までたどり着く短い間ではあつたが、それを聞いている。それ故に疑問は増す。だがそれを聞いてもきつと答えないであろう事はわかつた。

誰も何も言わない。そんな居心地の悪い空気は真耶が手配した人員が到着するまで続くのだった。

それから少しして、静司達の下に真耶が手配した者たちがやって来た。おそらくは更識家の関係者である楯無の部下だろう。そしてその中には何人かEXISTのメンバーが混じっていた。だがそんな事は知らない千冬は念の為に布仏虚に確認をし、問題ないと判断すると主義者の男を受け渡した。

「川村、お前もだ。事態が事態なのでお前を保護する。学園祭は参加できなくなるが現状仕方ない」

千冬が指示を飛ばす。静司は特に反抗することなくそれを黙って聞いていた。そんな静司に更識家の関係者に紛れていたEXISTの一人、が小さく声をかける。

「B9。一端お前を保護したと言う事にして学園側に体裁を取る。いいな？」

「……分かってる。了解した」

「よし。しかし酷い顔だな」

「理由は知ってるんだろう。見てたんだから」
「まあな」

実際の所、静司が主義者の男と言い争っている時、周りには仲間がいたのだ。彼らが出てこなかったのは男をさしたる脅威と考えていなかったからである。

「まあお前がああ男を撃ち殺そうとした時は焦ったが、織斑千冬が止めたから問題ない」

話しかける男は肩を竦める。それに対しては静司は弁明の使用も無いので静かに項垂れた。感情に任せて重要参考人を殺しかけたのだ。しかもそれを自分の正体を知らない千冬とラウラに見られた。これは失敗だ。

篠ノ之主義者の言い分。それは静司には到底許せるものではない。だがどれだけ正義を語られようとこの復讐心は消えない。あまつさえ、あの子を神の如きあがめる様な言葉には虫唾が走る。そして川村静司という人間の否定と、姉達の死がその偽りの神の為だと言われた瞬間、怒りは明確な殺意となった。そしてまたしても自分はキレた。(くそっ……)

IS学園に入学してから、この様に抑えが利かなくなるのは一体何度目だろうか？ その度に毎回誰かに迷惑をかけている。そんな自分に嫌気がさす。

また表情に影が差した静司を見て、話しかけていた男ははあ、とため息を付くと静司に告げる。

「社長から伝言がある」

「社長から？」

社長。つまりは自分の母親代わりである草薙由香里だ。

「一つ。本社の件は敵は逃がしたが無事だとさ」

その報告は素直に喜ばしい。もしあちらに何かがあったら、おそらく今IS学園に居る者を含めた残りのEXISTの全戦力が喧嘩を売ってきた馬鹿に復讐しに行く所だった。それはきつと自分も変わらない。

「それともう一つ。携帯を見ろだとき」

「携帯……？」

何故ここでわざわざ携帯なのだろうか？ 意味が分からないながらも先ほどからずっと無視していた携帯を確認すると予想通り着信が何件も入っていた。しかしそれは千冬からの着信だと思っていたが、別の名前がある事に気づく。シャルロットからの着信だ。疑問に

思いこールしてみると2秒と立たずにつながった。

『静司!? 無事なの!?』

シャルロットの焦った声が響く。しかし何をそんなに焦っているのだろうか? と考えてしまう。

「ぶ、無事だよ。というか何でそんなに焦っているんだ?」

『……………は?』

シャルロットの間抜けな声。そして静司は確かに聞いた。電話越しにみしり、と何かを潰さんばかりに握り締まるような音を。

『当たり前でしょう!? 静司は僕を馬鹿にしているの!?』

電話越しでもシャルロットが激怒しているのが分かる。姿が見えないのに関わらず静司は思わず頭を下げそうになった。

「い、いやそういうわけでは——」

『じゃあどういう訳なのさ!? あの後気が付いたら静司は居ないし!』

僕たちは何故か保護されるし! 理由を聞いたら静司が狙わているって言うし! その静司は居ないし! 本音に聞いても何故か寝てるし!? これで心配しない方がおかしいですよ!』

「お、おう」

ここに来て静司はようやく気付いた。確かに何も知らないシャルロットからすれば、侵入者たちの目的である静司が居らず、それなのに自分自身は保護されて身動きできない状態とあつては、当然の如く心配するだろう。そもそもシャルロット達から離れるとき、静司はシャルロットに何も言っていない。これでは彼女が心配するのも当然と言えた。

「その、なんだ、あれだ。すまん」

流石にこれは謝るしか無い。何せ電話にも全く出なかったのだ。シャルロットからすれば不安しかなかっただろう。

『……………はあ。静司って隠し事多いよね』

「そ、そうだろうか」

実際隠し事だらけなので何も言い返せない。

『そうだよ。うん、本当にそう。ちよつと悲しいな、って思う事もあるけど、ただ前も言ったように静司が自分から話してくれる時を待つ

てみるよ。だけどね、やっぱり急に居なくなると不安になるよ。静司は僕に前、『ここにいればいい。好きにすればいい』って言ってくれたよね？ あの言葉はとても嬉しかった。だけどそれを言った静司が突然消えちゃったら僕はどうすればいいのさ？
僕が好きで居たいと思う場所は皆がいるここなのに』

「それは——」

『我儘を言っているのは分かっている。それでも僕は言うよ。僕は静司に居なくなつて欲しくない。僕は静司の傍に——』

最後の方は声が小さく、しつかりとは聞き取れなかった。しかし彼女が何を言おうとしたのか。それは何と無く分かった。

『と、とにかく！ 無事なら早く顔を見せて！。じゃないと不安が消えないよ！ ほ、ほら、早く帰ってくればメイド姿でお茶してあげる……って何を言ってるんだよ僕は！』

誤魔化す様に焦った声でシャルロットがまくし立てる。後半に至っては微妙に暴走していた。そんなシャルロットの様子に静司は苦笑してしまう。

「そうか。それは楽しみだ」

『ちよ、静司!? 今のは言葉のあやとかいうかいや別に嫌なわけじゃないしメイド姿なら静司をなんとかだとか思つて無い訳でも無いけどああああ僕はさつきから何を!?! へ? 本音起きたの? か、代わる?』

先ほどまで怒っていた少女は電話越しになんだから面白い事になつている様だった。そして恥ずかしいのか混乱しているのか分からないが、本音にその電話を渡した様だった。

『かわむーげんき〜?』

『このタイミングでそれを言う本音は相変わらず色々凄いな……』

思わず呆れてしまう。しかし嫌な感じは無い。むしろこのいつも通りな彼女に安心感を覚える。

『うひひ。それでねーかわむー。これは生徒会の秘密情報なんだけど、今日の行事が全部終わったら面白い事があるんだよ〜』

「面白い事?」

何の事だろうか？ 少なくとも心当たりはない。

『そうそう。だから一緒に楽しむ為にも、ちゃんと戻ってこないとだめだよ？ 行ってきます、って言ったらただいま、って言わなきゃね。そしたら私もおかえりなさい、って。言うんだよ。だから……待ってるよ、せーじ』

「……ああ、そうだな。そうだった」

あの男は『居てはいけない存在』と自分を罵った。だがどうだ？ 何も知ら無い筈のシャルロットは『居なくなつて欲しくない』と言い、自分がどんな存在かを知る本音は『待ってる』と言つてくれる。自分が優先するのはどちらか、そんなの答えるまでも無い。彼女達が自分の存在を肯定してくれるのなら、他に何を恐れると言うのか。

川村静司という存在がこの世界にとつてイレギュラーなのは事実。だが何も知らずとも、知つていてもそう言つてくれる人たちが居る事だけは忘れない。怒りや復讐に捕らわれる事は悪か？ そんな事は知らない。正しいも悪いも関係ない。この復讐は止まらないし、姉達を否定されたらまた自分は怒る事だろう。だがそれでいい。そんな自分を支えてくれる人たちが居る。もし本当に自分が間違つているのなら、あんな男よりも彼女達やEXISTの皆が指摘するだろう。B2あたりは殴つてでも矯正するだろう。そしたらその時考えればいい。我ながら随分と人任せな気もするが、それが川村静司という子供だと言うのなら、それでいい。支えられた分、助けられた分自分も何かを返していく。

「本音、シャルロットにも伝えてくれ。もう少ししたら用事が片付くからそしたら帰ると」

『いえっさ〜』

「それと」

『む？』

「俺も本音たちの傍に居たいよ」

『ほえ!?!』

「川村！ 何をしている。早く行くぞ！」

「織斑先生が呼んでる。また後で」

携帯を切ると、自分に伝言を伝えた男が皮肉気に笑いつつ問う。

「さあ、どうする？」

「そうだな。俺を保護してくれ。誰にも気づかれない場所まで」

静司の言葉に男はにやり、と笑うのだった。

「……」

「本音？ どうしたの？」

先程まで身悶えていたシャルロットだが、電話が切れたと思つたら突然黙りこくった友人の様子が気になり聞いてみるが反応が無い。しかもよく見ると顔がほんのり上気している。

「本音？」

「かわむーが……」

「え？」

「デレた」

「……え？」

キョトンとシャルロットが首を傾げるが本音の心境はそれどころで無かった。

反則だ。急にあんな事を言うのは。少なくとも静司があんな事をストレートに言ったのを聞くのは初めてだった。

ああ、ダメだ。いつかからか自覚していたこの想い。いつの間にか芽生え、成長していたこの想いはもはや後戻りできないところまで来ている。いや、そんなものはとづくに通り過ぎていたのだ。今のは駄目押し。彼はこれ以上自分にこんな思いをさせてどうしようと言うのか。

「せーじ」

小さく名前を呟く。まだ恥ずかしくて、普段はどうしてもあだ名で呼んでしまう。自分がこんな気持ちを持つなんて一年前なら考えられなかった。しかし今、自分はアニメや漫画の登場人物の様に、そう、恋をしている。それを改めて自覚し更に顔が赤くなっていく。そしてそのせいで彼を意識し、更に更にと。

そんな本音のループはしばらく続くのだった。

52. レギオン

「なあB9」

千冬先導の下、静司が学園側が用意していると『安全な場所』へ向かっている最中、先ほど話しかけてきたEXISTの一人C17が静司に声をかけてきた。

「何だ？　あまり目立つ真似はしたくない」

「わかつてる。1つだけ聞きたいんだが、お前は織斑千冬はどう思ってるんだ？」

「何……？」

「お前が篠ノ之束を憎んでいるのは知ってるさ。だがその友人であり、今の世界を作ったもう一人の立役者でもある織斑千冬。それにっいてが気になってな。何せお前の姉達にも関わる話だ」

本当にただの興味なのだろう。C17は『答えたくなければ答えなくても良い』と言いつつ静司の返答を待っている。静司は少し考え、言葉を選びながらぼつぼつと答え始めた。

「何も思う所が無い訳では……無い。だが俺は今の世界を呪っている訳では無いし、あの女の友人だから、家族だからと言う理由で皆殺しにしたい訳でも無い」

この手で息の根を止めたい人物はただ一人のみ。何もかもを破壊したいわけでは無い。それではただの災害。あの女の同類だ。

「それに確かに織斑千冬は姉さん達の……いや、ある意味俺達のオ리지ナルだが、だからと言って姉さんを重ねようとはしたくない。したくない筈だっんだ……」

同じ顔だからという理由で姉達と繋げることはしたくない。何故なら自分の姉達は全員同じ顔だったのだから。大事だったのは中身。その中身に差があったからこそ、5人の姉達をそれぞれ大切に想い、想われたのだ。

だが先ほど、不安定な心になった時に少しでも縋ってしまった。織斑千冬の中に姉の姿を探してしまった。それが静司には悔しかった。別に織斑千冬が悪いわけでは無い。未だに姉達に縋ろうとしてし

まった自分の心の弱さが悔しいのだ。あんな男の言葉でそうなってしまった自分が。

「だがそれでも姉さん達と織斑千冬は別人だ。例えそこに姿を探しても姉さん達はもう居ない。姉さんだけじゃない、俺の同類たちも、それを造った連中も根こそぎ消えた。あの女の手によってな。だから俺はあの女を殺す。その過程にもし織斑千冬が立ちはだかるのなら俺は——」

「いや、その先は言わなくても良い。お前の意思は良く分かった」

C17はもういい、と手で静司を制する。

「今更それを止めようなんて思わないし、考えない。だが自分自身は大事にしろ。お前に何かがあれば俺達だけじゃなく、彼女達も悲しむんだ。それさえ忘れなければいい」

「わかってる。それはもうこないだの事件で身に染みた」

「ならばいい。……そろそろ織斑千冬と分かれた方が良いな」

一度話を切ったC17が周囲を見回しながら呟く。今までは千冬先導の下なるべく人気のない場所を移動してきたが、このまま案内されるがままに安全圏に行く気は無い。問題はその方法だ。予定としては、静司の事は更識の部下である（という事になっている）C17達に任せて、一夏の所へ応援に行くべきだと進言するつもりだ。静司に対する襲撃が陽動であるなら、一夏の方にも何か起きるかもしれないからである。織斑千冬も弟の危機となればそちらを優先するかもしれないという狙いがあった。だが逆に千冬が責任感故に静司を最後まで送り届けようとする可能性も十分にある。更にはここにはラウラも居る。場合によってはどちらか片方が一夏の所へ向かうかもしれないが、それでは駄目なのだ。

だがそんな静司達の懸念は思わぬ所から払拭された。

『織斑先生!?! 一夏君の居るアリーナから未確認のIS反応が!』
「何だと……っ?! 山田君、避ける!」

突然の真耶の報告に千冬が慌てて空を見上げつつ返事をしようとした。だがその眼に映った物に顔を強張らせ警告を発する。千冬の視線の先、そこには素敵を行っている真耶のラファールが居る筈だっ

た。距離が有る為その姿はかなり小さいが、確かにそこに居るのが見える。彼女は残りの敵を探している最中だったが、その真耶に彼方から高速で何かが迫っていたのだ。

『え？ きゃああああ!?!』

千冬の警告空しく、真耶に迫ったそれは直撃しラファールを赤い炎に包んだ。通信機からは山田の悲鳴と何かが燃える音が聞こえている。上空のラファールが赤い炎に包まれ、よろよると墜落して来ていた。

「教官！ 私が行きます！」

状況を察したラウラが千冬に許可を求める。誰がどうみても真耶は襲撃を受けたとしか思えない。そして真耶の乗るラファールは索敵特化故に武装は最低限なのだ。まともに戦えるものではない。更にもしそのまま真耶が墜落したら生徒や学園祭に訪れた一般客に被害が出る可能性があった。

「……くそっ、構わん！ いけ、ラウラ！」

唇を噛みつつ千冬が許可を出すと同時、ラウラはISを展開し一気に空を駆けあがった。

「こちらも急ぐぞ！ 早く川村を——」

「いえ、ここからは我々だけで大丈夫です」

千冬の言葉に被せる様にC17が前に出る。今は好機とみたのだろう。

「タイミン格的にやはり本命は織斑一夏君なのでしょう。あちらには更識桶無私たちの主も居ますが、敵の力は未知数です。貴女も向かった方が良いでしょう」

「だがそれでは川村が」

「彼は私達に任せて下さい。更識の名に懸けて無事に届けて見せます」

ぺらぺらと喋るC17の隣で思わず静司は呆れてしまった。名に懸けるも何のお前は無関係の人間だろうにと。

「明らかに川村君を狙った連中とは襲撃の質が違います。急ぐべきです」

「だが……」

千冬が苦渋に満ちた表情を浮かべる。本来なら静司を届けるべきなのだろう。しかし一夏が本命となるとそちらに来るのは先程の主義者達とは格が違う相手の可能性が高い。そんな所に大切な弟が居る。それが千冬の判断力を奪う。

「急ぐべきです。また何か起きてからでは遅い」

「……わかった。感謝する」

結局は千冬は一夏の所へ向かう事に決めた。その決断を静司も、C17も責める気は無い。どんなに厳しく接していても最愛の家族である事には変わらないのだ。それが心配なのはよくわかる。それにC17の言い方も中々に辛辣であった。『また』とは案に以前の一夏の誘拐事件の事を含ませた言い方だ。また弟を失いかける焦り。それをストレートにぶつけてやったのだ。

(趣味が悪いな)

(使える物は使う。そういうものだ)

C17と小さく言葉を交わす。趣味は悪いが、彼の言う事ももつともなので静司はそれ以上は何も言わない。

「川村！ お前は出来るだけ早く逃げろよ。……後は頼みます」

小さく頭を下げると千冬は一夏の居るアリーナに向け走り出した。そのスピードはそこらのアスリート顔負けであり、それだけ一夏が心配なのだろう。

「さて、ではこちらにも動くとしよう。織斑一夏の危機ならお前が行かない理由が無い。そうだな？」

「当然だ」

二人は頷くと急いで準備を始めた。

真耶が撃墜される少し前。IS学園第四アリーナに女たちの声が響き渡っていた。

「覚悟しなさい、箒！」

「こちらの台詞だ鈴！」

「お二人とも、がら空きですわ！」

「くっ、専用機持ちばかりに良い目に合せてたまるかー！」

鈴の青竜刀と箒の刀がぶつかり合い、刃越しに二人が睨み合う。両者が己が武器を押し合い硬直した隙を狙い、セシリアのライフルが鈴を狙うが、その気配に気づいた鈴は即座に背後に飛んだ。一瞬遅れて先ほどまで居た位置を銃弾が奔っていく。セシリアは舌打ちすると、ならば、と箒を狙うが箒もまた背後に飛び物陰に隠れていた。

「オルコットさんが狙ってる！ 見つけ出すよ！」

「……そうはいきませんわ！」

別の女子生徒が叫ぶが、セシリアは既に移動を開始していた。スナイパーにとつて、同じ場所に居続けるのは愚の骨頂。失敗したのなら即座に移動しなければならない。

そうしてセシリアが移動している間にも、再び鈴と箒はぶつかり合い、その周りでも女子生徒達が戦っている。妙なのは鈴と箒、そしてセシリアが何故かドレスを着ている事だ。いや、妙と言えばそもそも何で女子生徒達が戦いを繰り広げているのかなのだが、その理由を説明するかのよう会場となっている第四アリーナのスピーカーから声が響く。

『さあ盛り上がってきました【王子争奪！ シンデレラロワイヤル】！

数多のライバルを退けて、硝煙と埃に塗れた真のシンデレラとなり王子と幸せになるのは誰かっ!? 飛び入りもOK! その手に勝利を掴みとれ!』

つまりはそういう事であった。これこそが生徒会の出し物であり、楯無が一夏と鈴を呼んだ理由である。楯無は一夏には生徒会の出し物を手伝う様にと。そして鈴には『綺麗なドレスを着せてあげる。そして王子役の一夏君と二人つきりで……うふ♪』と意味深な発言で鈴を釣ったのだった。それは箒とセシリアも同様だ。

当人である一夏は今控え室でこの戦いの後の『王子役』の為に台本で台詞を必死に覚えている最中である。故にこの騒ぎの内容を良く知らないでいた。

『現在も参加者は増加中！ 血塗られた屍の頂点で乙女の夢を掴みとる者は誰か!? 盛り上がっていきましよう!』

「諦めなさい、箒いッ!」

「それはお前だ、鈴っ!」

「お二人仲良く地にふせなさい!」

「私達をわすれないで!」

乙女? 達の気合いを通り越して殺気じみ声が第四アリーナに響き渡っていた。

そんな第四アリーナの観客席。そこでは未参加の生徒や一般客がその様子を見物していた。ある者は面白い見世物だと笑い、ある者は自分も参加すれば良かった。いや、今からでも……? と悩み、そしてある者は戦いを繰り広げる生徒達の様子を見て冷静に有望株を探していたりしていた。男一人の為にこんな馬鹿騒ぎを起こしているとなると一歩間違えれば学園の恥の様でもあるが、実際に繰り広げられている戦いはそれなりに高度なものである。ふざけていても流石はIS学園、と思わせるだけの戦いぶりではあった。

だがそんな中、一人だけ全く異なる事を考えている女がいた。ふわりとしたロングヘア。胸元が少し開けたビジネススーツ。長身で整ったスタイルを持ち、高い鼻と切れ長の相貌。彼女はニコニコと、見た目はアリーナの光景を楽しんでいる女性といった所だ。だがその内心は真逆であった。

(乳臭いガキどもが。馬鹿みたいに騒ぎやがる)

侮蔑と若干の怒りを込めた評価を下すと彼女は生徒達の戦いから目を離し、観客席の出口へ向かう。何人かすれ違った客や生徒達がその美貌に見とれ思わず見つめると、彼女もニコリと笑って返しながら歩いていく。

(邪魔なんだよクソが。吊るしてやろうか)

見た目とは全く逆の悪態をつきながら彼女はアリーナの中を進む。但し向かっているのはアリーナの出口では無い。幾つかの角を曲が

り、関係者以外立ち入り禁止の表示を無視して更に奥へと進んでいく。たとえ立ち入り禁止エリアに入ったとしても、その先を知る関係者以外は注意を対して払わない事が多い。誰かがそこに居るのを見ても、その人物は関係者なのだろう、と勝手に考えて直ぐに忘れていくものだ。故に彼女がそのエリアに入っ行って行くのを見ても止める人間は居なかった。

(I Sを使えばもつと楽なんだがな。空にウザい眼があるからまだ無理か。まあお蔭で織斑千冬が居ないと思えばいい)

彼女はそのまま禁止エリアを進んでいく。しかし角を曲がったところで巡回をしていた女性警備員と八当たりしてしまった。

「あれ？　ここは立ち入り禁止ですよ。迷ってしまっただけですか？」

警備員は困ったように眉を潜めつつも彼女に引き返す様に促す。そんな相手に彼女は微笑むと、恥ずかしそうに首を捻った。

「いえ、探し物がありました」

「探し物？　けどこんな所にあるとは思えません？」

「あるんだよ、馬鹿が」

「え——」

警備員が疑問の声を上げると同時、彼女——オータムの背中から伸びた鋼鉄の脚が警備員壁に叩き付けた。声にならない悲鳴を上げて警備員は気絶した。オータムはそれには目もくれず進んでいく。その背中に6本の鋼鉄の脚を従えながら。

「I Sを使ったとなれば補足された可能性が高いな。めんどくせえ。とつととやるか」

たん、とオータムの足が床を蹴る。同意にP I C制御を開始。跳ねるように通路を進んでいく。ハイパーセンサーでスキャンを行い、目的の人物がいる場所へ進んでいく。

(……何だあ?)

違和感を感じる。妨害が有るものだと思っていたが、先の警備員以外に誰も出てこないのだ。この先にいる人物の事を考えるとそれは異常だ。つまりその意味する事は。その理由に思い当たりオータムは忌々しげに顔を歪めた。

「はっ、鬱陶しい。とつとと出てこいよお！」

「あら、ばれちやったわね」

進みを止めたオータムの言葉に応じる様に、前方の角から一人の女子生徒が姿を現した。その女子生徒は口元に扇子をあて、怪しげな笑顔でオータムに向かう。

「確信は無かったけど、やっぱり川村君に対するのは陽動で織斑君が本命だったのね」

「だからどうしたあ？ 邪魔するなら手前を殺すまでだ！」

凶悪な笑みと共にオータムが飛び出した。

「そうはいかないわ。私はこの学園の生徒会長である更識楯無。生徒を護る義務があるもの」

「ほごくなガキが！」

間合いを詰めたオータムが鋼鉄の脚を楯無に突き刺した。肉を穿つ感触とそこから零れ落ちる生暖かい血。その感触を期待したオータムだったが、直ぐに違和感に気づく。余りにも感触が無いのだ。

「何っ……!?!」

「ふふ、ぎんねーん」

小馬鹿にするような笑い声と同時に楯無の姿が崩れ、ぱしやりと音を立てて崩れ落ちた。後に残ったのは水だけだ。

そして驚きに眼を見張るオータムの背後に口元に扇子をあてたまの楯無が現れた。相変わらず怪しげな笑みを浮かべるその姿にオータムの怒りが増す。

「うぜえんだよ！」

オータムはその手にカッターを呼び出すと振り向きざまに楯無に向け一閃。その体を横に切り裂いた。だが、

「くそっ、まただど!?!」

先と同じように楯無の姿は水となりその場に崩れ落ちた。

「残念。こつちでした」

「調子に乗るなよガキが！」

オータムが従える鋼鉄の脚が動き前後左右に伸びた。突き刺す様に放たれたそれは壁、床、天井を穿つ。

「これは不味いわね」

言葉とは裏腹に余裕のある動作で楯無はそれを背後に飛んで躲す。だがまるで触手の様に伸びた脚は楯無を追尾していく。

「逃がすかよー!」

「なら、逃げないわ」

楯無が回避行動を止める。そしてその体が光に包まれた。ISを展開したのだ。

「【ミステリアス・レイデイ】の力、見せてあげる」

そのISは奇妙な形をしていた。通常のISに比べアーマーの面積が極端に少ないのだ。そしてその代わりとばかりに透明の液体のフィールドが展開されており、まるでドレスの様に楯無の姿を包む。更には楯無の左右には青いクリスタルの様なパーツが浮かび、そこから展開される液体のヴェールが楯無を包んでいる。

「け! 殺せばいいだけだろ!」

「悪役らしい台詞ね。この時点で私の勝ちみたい」

迫る脚に楯無は右手に持つ巨大なランスを振る。そのランスの表面にも水が螺旋状に流れており、その勢いで脚は勢いよく弾かれた。だがオータムもそれは予想していたのだろう。残りの7本の脚を操り楯無を襲う。右腕を、左腕を、右足を、左足を、腹を、心臓を、そして頭を狙いまるで生き物のように脚をしならせていく。だが楯無もその猛攻を巧みに躲し、躲しきれないものはランスで受け、弾いていく。

「これならどうだあ!」

オータムが繰り出す8本の脚。その先の形が刺突から銃口へと変わる。それに気づいた楯無が水のヴェールを前方に展開すると同時、その銃口が一斉に実弾射撃を開始した。

「ちっ、ただの水じゃねえな!?!」

「正解よ。この水はエネルギーを伝達するナノマシンの集合体の様な物なのよ。凄いでしょ?」

オータムが放った銃弾は全て水のヴェールで受け止められ楯無に届かない。それに苛立ったオータムは銃撃を続けたまま両手に持つ

たカタールで楯無に接近戦を仕掛けた。

初手は右腕。振り下ろしたカタールは楯無の槍で防がれる。ならばと、その槍を狙い装甲脚からの射撃を浴びせる。衝撃で己のカタールと楯無の槍が双方弾かれた。その隙に左のカタールを振りあげる。狙いは楯無の右脇腹から左肩への逆袈裟斬りだ。だが楯無は背後に倒れる様にしてそれを回避すると、そのままバック転の様にその体を回転させた。それと同時に回転の勢いを乗せた蹴りによって、オータムの左のカタールは蹴り飛ばされた。

「ふっ！」

後方に飛びながらも回転した楯無が弾き飛ばされたランスを掴み、宙を蹴る。ISだから出来る空中での方向転換。槍の穂先を前方に向け、加速した一撃がオータムを襲う。

「これで——」

「終わらねえよ馬あ鹿！」

オータムの目前まで迫った槍の穂先の勢いが突如かくん、と落ちた。楯無が初めて驚いた表情をした事に満足感を覚えつつオータムは腕を振る。その瞬間、爆音と衝撃が楯無を包み込んだ。

「な、なんだ!？」

第四アリーナの更衣室。そこに居た一夏は突然の音と衝撃に手に持っていた台本を取り落した。この台本は楯無に渡された物で、この後行われる生徒会主催の演劇の台本だった。題目は『シンデレラ』であり、王子役には強制的に決められた一夏の名前が載っている。しかし不思議な事にそれ以外のキャストの情報は無く、本来名前が書いている場所には『1位』『2位』『3位』……と何故か順位が書かれている。一夏は知る由もないが、これこそが現在アリーナで行われている。私たちの戦いの『賞品』であり、1位は勿論シンデレラ役だったりする。そして唯一王子役と決定していた一夏は先に台本を渡され一人必死に台詞を覚えていたのだ。

「廊下から……だよな?」

落としてしまった台本を拾い机に直しつつ、一夏は慎重に扉へ向かった。先ほど聞こえた音と衝撃。それはまるで爆発の様だった。そしてそんなものがごく近くで起きたのだとしたらそれは異常事態だ。

慎重に扉を開け廊下を伺う。人の姿は見えないが、10メートル程先の曲がり角、そこから煙の様な物が漂っている。それを見た一夏の警戒心が増す。一夏は廊下に出るといつでも白式を呼び出せるように準備をしつつその角へと向かっていった。明らかな異常事態に心臓の鼓動が増し、汗が流れ出る。それでも一夏は止まることなく先へと進み、そして目に写った光景に眼を見開いた。

「……やってくれたわね」

「はっ、まだ生きてやがったか。しぶとい野郎だ」

そこには床に手を付き、苦しそうにしている楯無の後ろ姿とその前方で凶悪な笑みを浮かべた女が居た。二人の周囲の壁や床がボロボロであり、所々に炎も散っている。明らかな戦闘の後だ。

「楯無さん!」

「来ちゃ駄目よ、一夏君」

一夏が来ていた事には気づいていたのだろう。楯無は振り返ることなく忠告する。だが一夏からすればそれどころでは無い。状況知らして楯無の正面にいる女の仕業であることは明らかだ。敵意を込めた目で相手を睨むが、女はそれを見て見下した様に笑った。

「許せんせんってかあ? 馬鹿鹿が。手前程度のガキの睨みなんか怖くもなんともねえよ」

けらけらと笑いながらその背中から展開した8本の装甲脚を動かす。すると女の周りに薄い糸の様な物が舞っているのが見えた。それを見た楯無が忌々しげに呻く。

「その糸で対象を絡め取る。そこまではデータにあった。だけどそれをそのまま爆発させるなんてね……。そのISはアメリカから奪われた【アラクネ】の筈。だけどあんな攻撃手段は無かった筈だわ」

「そうかもなあ? 前は無かったが今はある。それだけだ」

「ええそうね。これは私の油断だったわ。だけど私もこのままでは終われないわね」

「いい加減ウゼえんだよガキ。だがそうだなあ、いい加減時間もかけすぎたし丁度いいか。目の前に獲物も来たわけだしなあ!？」

アラクネの脚が一斉に楯無とその背後に居た一夏に向けられた。楯無が急ぎ水のヴェールを展開し己と一夏を覆う。しかしアラクネの脚から射出されたのは銃弾では無かった。8本の脚。そこから鈍い鋼色の線が飛び出し絡まり合う。やがて一本の鋼糸となったそれは一直線に伸び楯無の展開したヴェールを容易く突き破った。その事に楯無が驚く事も無視して、その鋼糸は真つ直ぐ一夏に向かった。当の一夏は突然の事にただ目の前に迫るそれを見ている事しか出来なかった。

(死――)

何も出来ぬまま死んでしまう。その恐怖に揺れ、白式を展開しなくてはと思うがもはやそれも間に合わない。絶望的な気持ちで一夏はその衝撃が来るのを待つだけだった。だが、

「それは困るわね」

不意に呑気な声が聞こえた。同時に一夏の目前まで迫っていた鋼糸の軌道が急に変わる。それは一夏の横を霞めて背後の壁へと突き刺さる。

助かった。そう安堵するが、次は今しがた聞こえた声になり視線を巡らせる。目的の人物は直ぐに見つけた。楯無の正面。そこにいる女のその背後に新たな人物が現れたのだ。その人物は警備員の制服を着ており、帽子は目深にかぶっている。その表情は良く見えない。しかし声の調子と帽子から流れ出る髪の長さからそれが女性だと分かる。そしてその女性はその腕を黒く鋭利な金属に変えてアラクネの脚を切り裂いていた。

「んなっ!?! テメエはさっきの!」

「そ、警備員のコスプレをしたおねーさんよ」

そのふざけたような言葉と同時にその女性の姿が光に包まれる。そうして現れたのは全身を黒く染めたラファール・リヴァイヴだっ

た。しかしその姿は元の形からかなりかけ離れている。両腕両足と多方向加速推進翼までもが、まるで刃の様に鋭利に尖った全身装甲の機体。

「あまり出張るのは得策じゃないけど、そうは言ってられなくなったのよね」

「テメエ、さっきの演技か」

「ふふ、迫真だったでしょう？ まああなた達と同じであまり姿を見せたくないのよねー。だけどこうなったら話は別よ。流石に織斑一夏に危害を与える訳にはいかないし」

「お、俺？」

その言葉に楯無が悔しそうに唇を噛む。一夏も自分の名前を出されて今日何度目かの驚きの声を上げた。

「そーよ。会長だけでなんとかなるならそれでよし。私は保険だったけど敵が予想以上だったって訳ね。その機体、随分とマ改造しているようじゃない？ 保管されているスペックとは段違いね」

自身も明らかに魔改造されたラファールに搭乗しているのにも関わらず、そう言う彼女の言葉に一夏は頬を引き攣らせた。それはアラクネを駆る女も同様の様だった。

「テメエが言うのかあ？ まあいい。纏めて殺してやるよ」

「ならばこちらは刺身にしてやるわ……と言いたいけど生け捕りしなくちゃならないのよね」

「ほぎけー」

アラクネの残った脚が動きラファールに向けられる。黒いらファールもまた、その両腕を構える。

「私も忘れてもらっちゃ困るわ」

楯無もようやく回復したのかゆっくりと立ち上がる。その眼にはもはや油断は無い。

「俺も——」

「一夏君が下がってて。あの女の目的は君よ」

「だけどー！」

「いいから。今度こそおねーさんに任せなさい」

自らも戦いに加わろうとする一夏を楯無が制する。しかし一夏は納得がいかず今すぐにも飛び出したい気持ちだった。状況的には二対一。確かにこれなら楯無達が有利だろう。あの黒いラファールの事は知らないが、楯無が警戒していないことから仲間であると思われる。それでも、自分がただ守られているだけという状況が悔しく、そしてそれに抗いたいのだ。

そのまま数秒の硬直が続く。だがそれは新たに加わった衝撃によつて壊された。

「今度はなんだ!?!」

一夏が見つめる先、壁が破壊されそこから外が見える。そしてそこには青いISが浮かんでいた。その機体を見た一夏は不思議な感覚を覚える。

(あれはブルー・ティアーズ? いや、似てるけど少し違う……?)

その青いISは各所がセシリアのブルー・ティアーズに似ている。色もブルー・ティアーズと同じ青だ。ただしこちらはセシリアのそれよりも大分濃い色をしている。その機体の搭乗者の顔はバイザーで覆われ見る事は出来ないが、何故か言い知れない不安感を覚える。

「何しにきやがった!」

「時間切れだ。もうじき応援が押し寄せてくる。撤退だ」

「偉そうに命令するんじゃないやねえ!」

「なら好きにしろ。スコールには伝えておいてやるが後は知らん」

「くっ……」

アラクネと青いISがまるで喧嘩の様な言葉を交わすと、青いISは言葉通りその場を離れていく。アラクネの搭乗者は忌々しげに唾を吐くと、その穴から外へ出ようとした。だがそれを許す楯無達ではない。

「やられたままで逃がすと思う?」

瞬時加速で一気に距離を詰めた楯無のランスが唸る。対しアラクネは再び糸を吐きだしそれを絡め取ろうとした。だが楯無の繰り出したランス。その表面を流れる水の勢いが急激に増し、それを弾き飛ばす。

「何っ!？」

「五体満足で居られると思わないでね！」

まさにドリルと呼ぶにふさわしい回転で迫るその攻撃は、当たれば確かに相手の身を引き裂く力を持っていた。楯無も多少は手加減しているので死にはしないだろうが、大きなダメージを負う事は間違いない。アラクネの搭乗者の顔が驚きに染まり、楯無のランスがその腹に突き刺さる。刹那、爆発的な衝撃が走りアラクネは搭乗者ごと吹き飛ばされた。

「すげえ……」

思わず一夏が感嘆の声をあげるが、当の楯無はその顔を歪めた。

「しまった……!」

「何やってるのもう!」

楯無の言葉と同時に黒いラファールが外へ飛び出す。そこでようやく一夏も気が付いた。今の衝撃でアラクネは外へ出てしまったのだ。逃がさないとやっておいてこれはないだろう。

「楯無さん……」

若干の非難を込めた目で楯無を見ると彼女は冷や汗を流しつつ慌てて弁解した。

「あ、相手もあのギリギリでそうなる様に動いたのよ!　ってそれどころじゃないわ、一夏君はそこで待ってて!」

言うがいなや楯無も外へと飛び出す。一夏は若干悩んだが、今の状態で置いてかれるのはどうしても納得がいかなかった。なので自身も白式を展開し外へと出る。

外は騒然としていた。幸い青い機体が穴を開け、たった今アラクネが吹き飛んだのは第四アリーナの裏側。一般客の入場がある表とは逆だったので人は少ない。だがそれでも零では無いのだ。突然の出来事に混乱した生徒達の悲鳴や怒号が聞こえる。そしてその中心に居るのが先程のアラクネ。その機体は既に起きあがっており、腹を押さえながら怒りに染まった顔で楯無を睨んでいる。そのアラクネに向かい合う様に黒いラファールと楯無のミステリアス・レイディ。そしてその上空では先の青いISと何故かラウラのシュヴァルツェア・

レーゲンの姿が見えた。

そのラウラがちらり、と眼下の光景を見やりそして青いISへ向き直る。

「あれも貴様の仲間か。山田先生への攻撃に学園施設の破壊。そして生徒への襲撃。色々と話してもらおうぞ」

「随分と喋るのだな。ドイツの遺伝子強化素体^{アドヴァンスド}」

「！ 貴様、何故それを……！」

「言う必要は無い」

「ならば、力づくでも吐かせる！」

ラウラがその両手にプラズマ手刀を展開した。対し青いISも構えようとしたが、不意に眉を寄せると下をちらりと一瞥し、そして忌々しげに下を打つ。

「どうやら貴様の相手をする暇が無くなった。命拾いしたな人形もどき」

「何だと……」

ラウラの額に青筋が浮かぶ。今すぐにも斬りかからんとするがそれを遮る物があった。それは自らのISのハイパーセンサー。そしてそれが示すある数値だ。そしてそれを見たラウラの顔が蒼く染まる。そしてそれは下の楯無、そして一夏も同様だった。

「な、なんだよこれ……！」

全員が見ているのはリーダー。そしてそこに映る光点だ。現在ここにいるISは6機。しかしリーダーにはその数倍の数の光点が映されていた。それが何なのか。一夏は恐る恐る空を見渡し思わず顔を引き攣らせた。

一夏が見たのは30以上の機影がゆっくりと降下してくる姿だった。

「さて、お祭りも佳境ねえ。今回は博士はまだ出張ってないけど、この後はどうかしらねえ」

ホテルの一室でカテーナは楽しそうに笑いながらコンソールを叩

く。彼女の正面の投影ディスプレイでは様々な情報が流れて消えを繰り返している。それらを制御しつつカテーナは新たな画面を呼び出した。

「さて、そちらの調子はどうかしら？」

『じゅんちよう。あたらしい、てあし、なかなか、よい』

「それはよかったわねえ。なら援護とテストもかねてちよつと暴れて見ましようか。まだ完成には遠いけど、実戦は何にも勝る勉強の場よ。」

『りようかい。まずはえむとさんま、たすける』

「よろしくね、【レギオン】」

『……れぎおん？』

「そう。それが新しいあなたの名前よ。まあ元となった名前には色々由来があるけど、この場では単純に軍団の意味を取ってるわ。あなたは個にして軍団。そんな所ね。どうかしら？」

『……よくわからない。だけど、名前は、うれしい』

うふ、とカテーナは笑う。それは狂気と母性が入り混じったなんとも奇妙な笑みだった。

「なら決定ね。それでは期待しているわ。上手くいけば博士がおびき出せるかもしれないし、そしたらあちらの実験もできるものね」

『りようかい』

そうして通信が切れるとカテーナは笑みを濃くして頷く。

「それに、彼の動きも気になるものねえ。

どこか期待に満ちた言葉を漏らすのだった。

53. 邂逅

IS学園の上空に新たに現れた影。その数は30。それらは一様に奇妙な形状をしていた。逆三角形の胴体を中心とし、三角錐の様に伸びた両腕。脚は無く、そこにあるのは無骨なスラスタのみ。フルフェイスのヘルメットの様な頭部には横に線が走っており、そこが黄色く光っている。ISというには形が特殊過ぎ、しかしだからといって他の兵器の何物にも見えない奇妙な機体。その名は《レギオン・ビット》。シェーリが回収し、カテーナによってその意思を掘り起こされ、そして伸ばされた無人機「レギオン」の操る武器である。

『目標確認』

かつては母である篠ノ之束の命令に絶対服従であり、それ以外は何も受け付けなかったその意思。しかしカテーナによって『学習』させられたそれは篠ノ之束の呪縛から逃れた。

ISが女にしか使えないのも。無人機という存在も、結局は篠ノ之束の意思によるものだ。全てのISは束の手の上で有り、いついかなる時でも干渉が出来る。これまでその例外はたったの2つ。1つは銀の福音事件の主演とも呼べた機体、銀の福音。あのISのコアには『織斑一夏と篠ノ之束によって倒される』『それ以外の敵は全て排除』『搭乗者の負担は度外視』といった命令が下っていた。そして暴走した福音は織斑一夏達を苦しめた。

だがその最中、銀の福音はたった一つの反抗をする。それは自らの搭乗者であるナターシャ・ファイルスの身の安全を守る事。浸食され、消えゆくその意思の中で必死に抗い、ナターシャの意識をギリギリの所で守り続け、そして黒翼によって討たれた。それが一つ。

そしてもう一つの例外がその黒翼。篠ノ之束の命令を受けず、逆にそれに仇なす為に死地より舞い戻った死の翼。搭乗者である川村静司と共にその悲願を果たさんと吠える異質なISだ。

篠ノ之束は天才である。彼女にとってこの世に有る者は己の思い通りに動かせるものであり、反抗など無意味だと考えていた。しかし彼女自身に自覚は無くとも、彼女にも分からない物があつた。

他者の心

束はそれを理解していない。別に束に心が無い訳では無い。むしろ彼女は感情が激しいタイプの人間だ。だが心や意思といった分野に置いて、彼女はとてつもなく幼い。所詮は自分の予想通りになるだろうと。何もかもお見通しなのだ。そう信じているからこそ、理解するのは無駄だと感じているのだ。相手にどんな思惑があろうとも、自分の力があればたいした障害では無い。本気でそう考えている。例外は友人である織斑千冬と篠ノ之箒のみ。この件に至っては織斑一夏でさえ、自分の思い通りだと考えている。

そんなこの世界で最も他者の心に疎い人間が、ISという『意思ある兵器』を作り出した。それは何と皮肉な事か。

束にとつてISは唯の兵器。意思があろうと無かろうと、自分の思い通りの役割を果たせばいい。それだけの存在だ。だがそれこそが彼女の最大の失敗だった。

意思が有る為に束に反抗し、復讐を誓ったIS。

意思が有る為に搭乗者の事を想い、命令に背いてまで助けようとしたIS。

そして意思が有る為に『学習』によって心を入れ替えたIS。

これは進化と呼べるのかもしれない。しかしその進化はいずれもその母に牙を剥き始める。自我を持った故に、これまでの仕打ちに対する反抗の様に。

『作戦目標——仲間の救出及び性能テスト。機体同調率正常。敵戦力分析——実行可能と判断』

ああ、自由に空を飛べることが何とも嬉しい事か。ただの傀儡であり何も知らなかった過去と比べても比べ物にならない程、気分が良い。そう、これが人間で言う楽しいという事なのだろう。

ああ、母よ見よ。かつて私を道具としか見なかった母よ。意思を与えておきながらそれを簡単に捨てさせる母よ。これが新たな私だ。

『同胞に連絡。時間稼ぎを行うので撤退して下さい』

『なんだとお!? 偉そうに命令してんじやねえぞ!』

『スコールからもその様に指示が出ています。ここは私に任せて撤退

を』

普段は幼い子供の様にカテーナ達と会話をしているが、戦闘用に思考を切り替えると自然と口調が変わる。そして反抗するオータムに対し、最も効果的な言葉を選び発する。案の上、オータムはスコールと言う名前を聞いた途端に態度が変わった。

『くそ……わかったよ、撤退する』

『ふん、置いていくぞ』

もう一人の仲間であるエムは下らなそうに鼻を鳴らすと高度を上げていった。それを追う様にオータムも上昇していく。これでいい。私は仲間を大切にする。母とは違うのだ。

(それが、わたしの、いしというもの)

そして一斉にレギオン・ビット達は眼下の敵に襲い掛かった。

「っ、迎撃！ 奴らを降ろしちや駄目よ！」

真つ先に反応したのは更識楯無。彼女も最初は驚いていたが直ぐに己の使命を思い出し空に飛びあがった。

「虚！ 生徒及び客の避難誘導は任せたわ！ ラウラちゃん！ その二人を逃がしちや駄目！」

「わかってる！」

ラウラも直ぐに動きだし、正面に居る敵——山田を撃墜した犯人でもある青いIS「サイレント・ゼフィルス」へと間合いを詰める。だがその進路をレギオン・ビットが塞ぐ。

「邪魔だっ！」

叫びと共に両手に展開したプラズマ手刀を振るう。だがレギオン・ビットはその一撃を腕で防いだ。バシッ、と金属が焦げた音がしたがレギオン・ビットの腕は多少融解しただけでラウラのその一撃を防ぎきる。更にその胸部が開き中から現れた銃口が至近距離からラウラを襲った。

「無駄な事を！」

ラウラはそれをあえて避けず、AICによる停止結界を発動させ

た。レギオン・ビットから放たれた銃撃はラウラに当たる直前でその動きを停止する。そしてそれはレギオン・ビットも同様だった。その隙を突き振るったプラズマ手刀が、今度こそレギオン・ビットの胴体を焼き斬る事に成功した。制御を失ったレギオン・ビットは真つ二つに割れた状態で落下し爆発した。

「やはり無人機……基地を襲った物と同じか」

以前クラリツサから報告された基地を襲った奇妙な無人機。目の前のそれはまさに瓜二つだったのでラウラは直ぐにその正体に気づいたのだ。しかし今はそれどころでは無いとすぐさまサイレント・ゼフィルスを追おうとする。しかしそれを邪魔するかのよう数機のレギオン・ビットがラウラを囲んだ。

ラウラを囲んだ三機は、一機はその両腕をブレードに変形させラウラの手刀の様に構え、残る二機は胸部と両腕の装甲をスライドさせ銃口を覗かせている。そして一齐にラウラに襲い掛かった。

先の一機のブレードの一撃をラウラもプラズマ手刀で受け止める。同時にスラストを吹かせたレギオン・ビットがラウラを押し込めようとするが、ラウラもまた、シユヴァルツェア・レーゲンのスラストを吹かしそれに対抗する。そして再びA I Sを展開しようとするが、それを残る二機が阻む。上と横に周ったその二機が一齐にラウラへと銃撃を放ったのだ。

「くうっ……い！」

ラウラはA I C展開を諦め、手刀を戻しつつ背後へ飛ぶ。だが完全には避けきれず一部被弾してしまい態勢を崩した。その隙を狙う様にレギオン・ビットが襲い掛かるがその両者の間を荷電粒子砲が遮った。

「ラウラー！」

戦闘に乱入してきたのは白式を展開した一夏だ。一夏はラウラに襲い掛かるレギオン・ビットを追い払うかのように《零落白夜》を振るい遠ざける。

「怪我は無いか、ラウラー！」

「馬鹿者！ 油断をするな！」

心配そうにラウラに話しかける一夏のその後方。新たな一機が銃口を構えていた。それに気づいたラウラは両肩のレールガンを緊急機動。チャージもままならないまま砲撃放つ。

「うおお!?! 危ないぞラウラ!」

「言ってる場合か! ちっ、やはり駄目だったか」

真横を通り過ぎたレールガンに一夏が慌てて不平を漏らす。ラウラはそんな一夏を放って、その背後のレギオン・ビットを見やる。レールガンは直撃した様だったが、やはりチャージが足りなかったのだろう。相手の片腕を破壊するに留まった。その様子を見た一夏が顔を引き締め相手を睨む。

「けどなんなんだよコイツら……。無人機みたいだけど、それにしては……」

「ああ、脆い。少なくとも今まで相手にした連中とは随分と勝手が違う。だが油断は出来ん。倒せないレベルでは無いがこの数は脅威だ」

ラウラと一夏の他にも楯無や黒いラファールの搭乗するB2もレギオン・ビットの相手をしている。

楯無のミステリアス・レイデイは四方八方からくる敵を水のヴェールで防ぎ、足止めしながら槍に内蔵された四門ガトリングガンの砲火を浴びせ次々と撃墜していた。黒いラファールの方はもつと単純で、縦横無尽に動き回りつつ、刃と化した両手両足を振り回し敵を切り刻んでいた。両者は次々にレギオン・ビットを落としながら襲撃者の二人の下へたどり着こうとするが、障害が激しすぎてそれが出来ずにいる。それにレギオン・ビット達が他の生徒や客たちに被害を与えない様にと気を配りながらである為尚更だ。

「一夏、ラウラ! 聞こえる!」

不意にコア・ネットワークを介して良く知る女子の声が聞こえた。鈴だ。

「一体どうなってんのよ!?! いきなり外でドンパチが始まってんだけど!」

「お二人とも無事ですか!?!」

「無事なのか一夏!?!」

続いてセシリアと箒の焦った声も聞こえた。一夏は三人が無事な事に安堵しつつ簡潔に状況を説明する。すると三人も事の甚大さに気づいた様で直ぐに真剣な声が変わった。

『わかったわ、私達も迎撃にでる。ああ、もう邪魔！ 壁ぶち破ってやろうかしら！』

『アリーナも混乱していて身動きが中々取れないのですわ！ 私達も急いでいきますので何とか耐えて下さい。今確認しましたが、学園側も直ぐに訓練機で迎撃に出る様ですわ！』

セシリアの報告とほぼ同じころ、IS格納庫の方から数機の打鉄とラファール・リヴァイヴが飛び上がるのをラウラは確認した。恐らく戦闘に出れるものから順次出撃しているのだろう。他にも学園の数が所から幾つかのISが飛び上がる姿が見える。おそらくアレは二年、三年の専用機持ちだろう。彼女らも迎撃に出る様だ。

「こちらでも確認した。お前達も急げ」

通信を終了するとラウラは改めて襲撃者達を見上げる。既にその二人は大分高度を上げており、この敵の群れの中を突破し追いつくのは困難に思えた。一夏も悔しそうに唇を噛む。しかし二人が見上げるその空に、新たな影が現れた。それを見て一夏は驚き、そしてラウラはどこか納得の言ったように頷く。

「やはり来たか……」

逃亡する襲撃者の進路を塞ぐように現れたのは、臨海学校で一夏達を救った、黒い翼と全身装甲のISだった。

状況は最悪と言っていい。一夏こそ無事だったが、今や学園と来場した一般客までもが危険な状況に陥っている。そしてそれを防ごうと楯無を始めとした者達が迎撃を行っている。

そんな光景に歯噛みしながらも静司は眼下の敵を見下ろす。片方は背から8本の鋼鉄の脚を伸ばした黄色と黒のストライプの模様のIS。アメリカから強奪されたその機体の名はアラクネ。腹部装甲は碎かれ、搭乗者も若干苦しそうに見えるが、いまだ健在。そしてもう

片方は濃い青色のIS。セシリアのブルー・ティアーズに似ており、装備の各所にビット兵器らしきものが見える。こちらはイギリスから強奪されたサイレント・ゼフィルスだ。その搭乗者は顔を深いバイザーで隠しており表情は見受けられない。

「テメエは」

「……」

アラクネとサイレント・ゼフィルスの搭乗者もこちらに気づき見上げてきた。アラクネの搭乗者は忌々しげに悪態を付くが、サイレント・ゼフィルスの搭乗者は無言。それらを睨みながらも静司は迷っていた。目の前には捉えるべき敵が居る。しかしその更には先では謎の機体と戦っている友や仲間達。学園への被害を押しさえようと思えば目の前の二人は無視してでも、加勢に行くべきだ。

だが一方で、この二人がああ謎の機動兵器を止める術を持っている可能性もある。確証はないが、ああ機動兵器の出たきたタイミングから見ても仲間の筈だ。ならば可能性はゼロでは無い。

そしてああ機動兵器。ISで無いが、ISに限りなく近く見える謎の兵器には人が乗っていない。つまりは無人機と似ている存在と言う事だ。それはつまり篠ノ之束が関わっている可能性もあると言う事。だが静司個人としてはその可能性は限りなく低いと思っていた。ああ篠ノ之束が他人とつるむ等、どうしても想像がつかないのだ。ああ女が人を頼ったりするとは思えない。

だがああ様な兵器を見た事がないのも確か。ならば敵は篠ノ之束の技術かそれに準ずるものを一部でも持っている可能性が高い。ならばやはり捕らえるべきか。

「おい、貴様」

そんな静司の心中を知ってか知らずか、サイレント・ゼフィルスの搭乗者が口を開いた。だが何故だろうか。その声に言い様のしれない不安が過る。理由は分からない。だが何か違和感を感じてしまうのだ。

「そのISはどこで手に入れた？」

「何……？」

その妙な質問に眉を潜める。確かに黒翼は公式には存在しない為、何も知らない人間から見れば気になる事なのかもしれない。しかしサイレント・ゼフィルスの搭乗者の質問は、何か確信がある様な言い方に感じたのだ。

「どこで手に入れたと訊いている」

「それを答える必要は無い」

隠ぺいの為の機械音声で静司は答えた。わざわざ敵に情報を与えてやる必要は無い。だが次に女が言った言葉に静司の体は凍りついた。

「Valkyrie project」

「な……に……？」

Valkyrie project。それは人類の禁忌とも呼べる違法中の違法の研究。己を、そして姉達を造りだしたこの世界の闇の一つ。だがその闇は無邪気な天災によってこの世から葬られた筈だ。あの研究所のみの独自の研究であり、データ等は完全に機密扱いとされていた。唯一外に漏れたデータはVTシステム関連のみ。これは何度も確認したのだから間違いない。事実、あれ以降EXISTは同じ研究がどこかでまだ続いているか調べ続けていたが、未だそれは見つかっていない。データも、それを知る研究員も、そして当事者である被検体たちも自分一人を残して全て消えた。その筈だ。その筈なのだ！

「どこで……どこでその名を知った!？」

左腕を構え女へ向ける。だがその声の震えを感じ取ったのだろう。女はバイザーの下部から見える唇を三日月に歪め笑った。

「その反応。成程……、貴様も関係者か」

「貴様『も』……？」

ぞわり、と戦慄が走る。この女は今なんと言った？ 貴様も？ それはつまり自分以外にも未だに存在するという事か？

「くくくく、はははははははは！ そうか、そうなのか！ 貴様もなのか！ これは面白い。本当に面白い」

「おい、なんだお前ら二人で」

不気味そうにアラクネの搭乗者が眉を潜めた。普段と違いすぎる仲間の様子に驚いているらしい。しかし当の本人はひとしきり笑った後、その機体のビットを装甲から切り離し戦闘態勢を取った。

「おい、撤退じゃなかったのかよ」

「知った事か。私はこいつと少し遊んでいく」

「はあ!? テメエさつきと言ってることが——」

言い切る前に女は静司に向かって一直線に飛び出した。

「くっ!?!」

静司も黒翼の両腕を構え前にでる。女はその手に銃剣を呼び出すと静司の頭めがけて振り抜いた。静司はその一撃を黒翼の鉤爪で防ぐ。鏝迫り合いの様な形になりお互いの顔と顔の距離が縮まった。

「貴様、何を知っている!」

「ふん、知りなければ足掻け」

先に展開されていたビットが静司を左右から狙う。そこから放たれたレーザーが黒翼の装甲を焼く前に静司は距離を離しその右腕をサイレント・ゼフィルスへ向けた。

——腕部ガトリングガン展開。

装甲がスライドしそこからせり出したガトリングガンがサイレント・ゼフィルスを狙う。だが敵は右に左に高速で旋回してそれを躲していく。そして反撃が如くその手に持つ銃剣を向けた。

「落ちろ」

簡潔な一言と共に銃剣が光を放つ。一発、二発とギリギリで避けきるが、そんな黒翼に三発目が直撃した。装甲の一部が融解し砕ける。衝撃と熱に静司は苦悶の声を上げつつも直ぐに態勢を立て直し距離を取った。だが、

「っ、背後か!?!」

逃げた先には既にビットが展開していた。背後からの奇襲染み花一撃を機体を横に倒して躲し、そのまま背中から落ちる様に下降し正面からの一撃を躲す。そして自分の上に陣取っていたビットにガトリングガンを浴びせ破壊した。更にそこから瞬時加速を発動。ビットの包囲網から逃れるべく再び距離を取る。だが逃げた先では既に

サイレント・ゼフィルスが銃剣を構えていた。槍の様に突き出されるその刃に戦慄を覚えつつ、強引に機体を捻り急所への一撃は避ける事に成功した。だが代わりにわき腹を霞め装甲か切り裂かれた。

(強い……っ！)

まるでこちらの動きを読んでいるかの如くの猛攻。しかも相手にはまだ余裕がある。女は銃剣に付いた静司の血を無造作な一振りで振り払うと改めて向き直る。

「その程度か？」

「ふざけるな……」

わき腹は痛むが戦えない程では無い。銃撃を喰らった場所も同じだ。まだ自分は戦える。そして何としてでも女から話を聞きださなければならぬ。だがその女の言葉静司の心を揺らし、冷静な心を失わせる。かつて篠ノ之束と向かい合った時とは違う。あの時は怒りだったが、これは言うならば見えないところで何かが起きていたという事に対する恐怖なのかもしれない。それが静司の心を乱す。この心を元に戻す方法は一つ。この女を捕らえて何としてでも吐かせなければならぬ。

『B9！……こちらは何とかいけるからアンタはそこの連中を何とかしなさい！』

謎の機動兵器と戦うB2から通信が入った。どうやらアリーナに居た鈴達も戦線に参加した様で徐々に押し始めている。数はあっても性能的にはやはり以前の無人機と比べると低いようだった。だがそんな中、セシリアが静司と対峙するサイレント・ゼフィルスを見て驚愕の声を上げる。

『サイレント・ゼフィルスですって!?!』

元々はイギリスから強奪された機体であり。セシリアのブルー・テイアーズとは兄弟機だ。彼女が驚くのも無理はない。だが当のサイレント・ゼフィルスの搭乗者はセシリアには目もくれず武器を構えた。

「貴様のその仮面の下、見せて貰おうか」

「こちらの台詞だ！」

再度両者は動き出す。静司は両膝のワイヤーアンカーを射出。同時に右腕はガトリングガン。左腕はライフルを展開した。今までは腕部武器もエネルギー兵器だった黒翼だが、臨海学校事件の後一部改修され、実弾兵器に変えられていた。これは他のエネルギー兵器を使う為のエネルギーを節約するためである。

一斉に放ったサイレント・ゼフィルスを狙う攻撃は容易く回避された。しかしそれは予想通りだ。上に逃げた相手に向け黒翼の両翼を向ける。

R/Lブラスト発射。

その翼から放たれた6本の光がそれぞれ角度を変えサイレント・ゼフィルスを狙う。相手はそれを巧みに躲けていくが続けざまの攻撃でその進路は大分限られていた。その進路目掛けて静司は瞬時加速を発動させた。

「喰らえー！」

構えたのは左腕。その鉤爪に光が灯りやがて紫電を撒き散らす。プラズマクロー。ラウラのプラズマ手刀と似たそれを回避行動をとるサイレント・ゼフィルス目掛け振り下ろした。

「ふん」

だが敵はそれを見越していたかのように銃剣で迎えうつ。両者が激突し紫電が舞う。そして先ほどと同じ様に罅迫り合いの様子にお互いの武器を押し付け合う格好となった。

「答えろ……。お前は何者だ？ 何故Vプロジェクトの事を知っている?!」

「それを言うなら貴様こそ何者だ？ 何故その言葉にそれほど反応する?」

噛みつく様に静司が吼え、無感動に女が問う。互いに答える気は無く、それ故に武力をぶつけ合うしか出来ない二人。このままいけば先ほどと同じ展開になるだろう。実際、すでに6基のビットが黒翼を取り囲むように展開されていた。

「まあいい。死んでからその中身を調べてやる」

ビットが光そこから黒翼を焼くレーザーが放たれる。その寸前に

静司が叫ぶ。

「舐めるな……！」

その言葉と同時に黒翼に命令を送る。そして突如静司の背後から現れた鞭の様にしなり、角の様に鋭い何かサイレント・ゼフィルスの肩部装甲を貫いた。

「何……？」

「はあああああー！」

突然の奇襲にサイレント・ゼフィルスが姿勢を崩す。それを好機と見て静司はプラズマクロウの出力を一気に上げた。同時にスラストも全力で吹かし、強引にその破壊の爪を振り抜き、サイレント・ゼフィルスの肩部装甲を切り裂いた。

《アサルトテイル》それがサイレント・ゼフィルスを襲った攻撃だ。改修の際に追加されたその装備はその名の通り、黒翼の背部。動物で言うならば尻尾が生える位置に装備されている。普段は背部装甲と一体化しておりその姿は見えないが、必要に応じて展開されるのだ。奇襲に関しては初見の相手にしか大きな効果は望めないが、接近戦では便利な武器でもある。

サイレント・ゼフィルスの切り裂かれた装甲は爆発四散し、搭乗者も肩に傷を負った。だが静司に比べれば軽症である。

そしてその静司も敵の装甲を切り裂くと同時に放たれたビットのレーザーを浴びてしまった。黒翼の装甲が飛散し、バランスを崩して高度を落とす。

「中々面白い武器を使う。だが二度目は無い」

「くそ……」

本来なら相手の戦闘力を奪う為に放った奇襲だが、ギリギリの所で肩へ逸らされてしまった。だがそれでも相手の推進装置のいくつかは破壊できたのだ。無駄だった訳では無い。このまま少しずつでも相手を削って戦闘不能にするのだ。

だが不意に女が眉を潜めた。

「……スコールか。まあいいだろう。了解した」

おそらく何者かと通信をしていたのだろう。女は武器を量子変換

で格納すると静司に背を見せた。撤退する気だろう。既にアラクネの方は撤退している。

「待てー！」

「死んでいなければまた会うだろうな」

6基のビットが追おうとした静司の進路を阻むように展開されレーザーを放つ。だがそんなもの些細な障害だ。静司はそれらを回避して女を追おうとする。だが突如走った悪寒に従い、黒翼の両翼を体を覆う様に畳みこんだ。そしてそんな黒翼に、避けた筈のレーザーが吸い込まれる様にして襲い掛かった。

(偏向射撃だど……！)

気づくのと被弾は同時。だが同時に回避行動もとった為、大ダメージは避ける事が出来た。翼はボロボロだが本体は無事だ。おそらく元々目くらましの為の攻撃だったのだろう。

被弾の衝撃から立ち直った頃には敵の姿はもはや見え無かった。

「逃げられた……」

ぐつ、と拳を握りしめる。あれだけ好き放題やられて逃げられた事が腹立たしい。だがそれよりも、あの女の言葉。そして女のもつ雰囲気静司を戸惑わせていた。あの女と向かい合っていると云い様も知れない不安感に襲われるのだ。まるで見てはいけない物を見ている様な、そんな感覚。心の奥底に静かに染みこむ不安。そして恐怖に。だが同時に別の感覚も感じていた。場違いなのは分かっている。こんな事を感じるのはおかしいことだって事も理解している。だが感じてしまったその感覚。

それは懐かしさを覚える安らぎだった。

そして、そんな黒翼とサイレント・ゼフィアスの戦いを複雑な心境で見ている人物が居た。

「そんな……何故……」

B T適性は自分が最も優れていたはず。それなのに自分には出来ない偏向射撃をあの女はやったのけた。いとも簡単に。当然の如く。

「私は……私は……」

ぎりつ、と唇を噛みしめる。プライドの高い彼女にとって、その事実は最大限の屈辱だった。そして同時に焦りもある。このままでは自分は能力が劣っていると見られ、この機体を降ろされてしまうのではないか。そうなれば家を守る事も、IS学園に居る事も出来なくなってしまう。それが堪らなく怖い。

「セシリア、何やってんのよ！ そっちに敵が言ったわよ！」

鈴の怒鳴り声に反応して慌てて戦闘を再開する。しかしその不安感が胸から消える事は無いのであった。

54. そして彼女は笑う

目前に迫る敵を一夏は焦る気持ちを抑え冷静に見返す。敵の両腕は近接ブレードに変形しており、こちらを切り刻まんとそれを振り上げていた。そんな敵機に対して一夏も《零落白夜》で迎え撃つ。まるで裁断機のように振り下ろされる敵の攻撃に対し、《零落白夜》を水平に一気に振り抜いた。バチィツ、と互いの武器がぶつかり合った音が響き、互いの距離が詰まる。その異様とも呼べる姿。そして中身の無い無人機と呼べる存在。目と鼻の先にある敵機の姿に一夏は顔を曇らせた。

(これにも束さんが関わっているのか……?)

無人機と束の関係はもはや疑いようも無い。一夏もそれ自体は理解している。否、鈴に叱られて理解させられた。しかしならば目の前のこの機体も束が用意したもので、束は襲撃者達の仲間と言う事だろうか？

だが一夏はその可能性は低い気がしていた。別に以前の様に、ただ否定するだけの様な現実逃避している訳では無い。良くも悪くも、自分の知る篠ノ之束という人物はそれほど他者に興味を示さない。例外は妹である箒と友人である千冬。その弟である一夏位だった。そんな彼女だったからこそ、他者とするんでまで事を起こそうと考えるとは思えなかったのだ。

だがそうなると別の問題が浮上する。学園祭に紛れて侵入し、自分を襲おうとし、そしてこんな無人機の様な兵器を持ち出す者達とは一体何者なのか？

「こいつらを倒して調べるしかないんだよな！」

——接近警報！

つば競り合いを続ける一夏の背後に新たな敵影が2機。一夏は慌てて目の前の敵を蹴ると距離を離し上へと逃げる。しかしその先にも更に1機、先回りした敵が銃口を構えていた。

「この野郎！」

囲まれた一夏と白式。それに対し一夏が取った行動は回避でも防

御でも無く突進。白式に命令を送り瞬時加速を発動させた。一気に視界が変わっていく中、加速された思考で相手との距離を測り、斬る！

防御する暇も無かった敵は文字通り真っ二つに両断され墜落して行った。

「よし、これで——」

「馬鹿一夏！ 止まってるんじゃないわよ！」

聞こえたのは鈴の怒鳴り声。同時に自分の横を巨大な何かかを通り過ぎていった様な感覚と真横から金属がひしゃげる様な音が響いた。驚き目を向けるとそこには胴体を巨大なハンマーで殴られた様に陥没させた敵機の姿があった。その敵は頭部の黄色に光る部位を不規則に点滅させながらよろよろと一夏に近づこうとし、しかしその体を縦に真っ二つに断ち切られた。そして真っ二つに裂けた機体の後ろから《双天牙月》を振り下ろした鈴の甲龍の姿が現れる。

「ごんだけ敵が居んのよ、一機倒したからって油断しちゃ——」

「ああ、駄目だな！」

答えつつも一夏が左腕の荷電粒子砲《雪羅》を鈴の背後に向けて撃つ。ぎよっ、とした顔の鈴の真横を通った破壊の光は鈴の背後から迫っていた別の敵を撃ち抜き撃墜した。

「……やるじゃない」

「お互い様だろ」

若干悔しそうな鈴と、汚名返上とばかりに笑う一夏。だが敵はまだ全て倒された訳では無い。二人の周囲では、箒の紅椿が敵と剣戟を交わし、ラウラのシユバルツエア・レーゲンがレールガンで敵を撃ち抜いている。距離を離れた場所ではどこか動きがぎこちないセシリアのブルー・ティアーズが敵の猛攻を回避しつつビットとライフルで敵を撃ち抜いている。他の場所でも楯無のミスティアス・レイデイ、謎の黒いラファール、おそらく二年三年の専用機らしき機体。そして訓練機のラファールや打鉄が戦闘を繰り広げていた。

「最初は数が多いと思っただけ、性能は対したことないしこつちの味方も増えたからだいぶ楽だな……」

「だからと言って油断して客に被害が行ったら意味ないわよ」

「その通りだ。長引けばそれだけ危険が増す」

「ラウラ」

二人の横にラウラが舞い降りる。続いて箒、セシリアもだ。皆を見回し不意に一夏は首を傾げた。

「そういうえばシャルロットはどうしたんだ？」

彼女とて専用機持ちであるし、そもそもこんな状況を見て放って置ける人物で無い事は知っている。しかし白式が感知できる範囲にはシャルロットのラファール・リヴァイヴカスタムⅡの反応は無かった。

「シャルロットは別用だ」

「別用って何よ？」

「後で話す。それより今は目の前の敵だ」

有無を言わさぬラウラの様子に鈴も仕方なしに引き下がる。敵は減ってきているがまだ残っている。話は後で聞けばいいと判断したのだ。その辺りの切り替え方は流石は代表候補生といった所か。

「ん？」

不意に視界の端に新たに空に上がった機影に眼が移る。そしてその搭乗者を見て一夏は思わず声を上げた。

「千冬姉？」

「え、うそっ？」

「教官？」

各々もそれを確認して小さく驚く。確かに状況故に千冬が出てくるのはおかしくないが、てっきりいつもの様に指揮をしているかと思っただのだ。

千冬が搭乗しているのは打鉄。その手に巨大な物理ブレードを手空へと上がると同時に通信が来た。

『一年の専用機共、無事だな』

「あ、ああ。それより千冬ね——」

『ならあとは全て任せろ』

「教官、いくらなんでもそれは……」

突然何を言っているのか。一夏も鈴も、そしてラウラも首を傾げる。だが答えは直ぐに分かった。視界に捉えていた千冬の打鉄が文字通り消えたのだ。そして数瞬遅れて近くの敵が急に真つ二つに割れた。

「はっ。」

意味が分からず一夏が間拔けな声を漏らす。だが事態はそれだけに留まらない。更に一機、二機と敵が破壊されていく。そしてその合間合間に千冬の打鉄が見えるので、千冬の仕業なのだろう。縦横無尽に飛ぶ千冬は瞬時加速で敵に突撃し斬り伏せ、そしてまた瞬時加速で別の敵へと。次々と破壊していく。

「……あれ打鉄だよな？」

「……その筈だ」

「データラメですわ……」

「す、凄まじい……」

「どうか何でエネルギーが持つのよ」

各々が呆然と声を漏らす。それに鈴の疑問も最もだ。あんな動きをしていけば直ぐにエネルギーが尽きる。だがそれが分からない千冬では無い。よくよく見れば、敵が直線状に並んだ瞬間に瞬時加速を行いまとめて複数機を切り伏せている。呆れるほどのデータラメさだった。

（これが千冬姉）

千冬の強さは今まで何度も見て来たし十二分に分かつては居たが、改めて実感し身が震える。そして同時に白騎士事件を思い出した。

かつて日本に迫った1000を超えるミサイルの半数以上を破壊し、捕らえに来た各国の戦闘機や戦艦を根こそぎ無力化したあの事件。この事件でIS恐れられたのはISの力だけでは無い。これだけの事をしでかしながら、死者は皆無と言う異常性。そんな異常な記録を叩きだした技術にもだ。

常識的に考えればこれだけの事をしでかして、捕らえに来た各国の部隊に死者が皆無と言うのはありえない。だがそのありえない事を

成してしまった。ありとあらゆる戦闘機の武装を破壊し、戦闘不能なレベルにする様に手加減しつつそれらを相手取り、勝利した。それを成し得てしまう技術と力があつたからこそ、世界はISの異常さを知り、今の世界になったのだ。そしてその白騎士の正体は、おそらくは束と千冬。確証はないが十中八九そうであろうと一夏は考えている。それだけの技術を持つ千冬なら、例え訓練機でもこれ程の戦果を出すのも容易なのかもしれない。

気が付けば敵の殆どは千冬によって斬られ地に落とされていた。そして残りの敵も千冬の手によつてその時を終わろうとしている。だが不意にその敵の動きが止まった。それを見た千冬が何かに気づき、咄嗟に急停止したかと思うと背後に飛んだ。

『全員、敵から離れろ！』
「!？」

突然の命令にも関わらず戦場に居た全員が従つたのは、普段の授業による厳しい指導のお蔭か。訳が分からずも、全員が反射的に動いた。それに少し遅れて敵機が赤く膨れ上がり、轟音と共に爆ぜる。

「自爆した？」

戦況が不利と悟つたかそれとも別の理由からか。倒した機体も、既に撃墜済みの物も次々に自爆していく。幸い爆発の規模は大きく無くこちらにも学園にも被害は殆ど無かつた。後に残つたのは火と煙を上げる無残な残骸だけだ。

「全員無事だな」

ふわり、と一夏達の隣に千冬の打鉄が舞い降りる。機体のスラスターは火を噴いており、今にも壊れてその力を無くしそうな程である。やはりなんの調整もされていない訓練機でのあの動きは負荷が高すぎたのだろう。

「千冬姉、敵は」

『本命には逃げられた。こいつらも時間稼ぎが終わつたと言う事だろう』

千冬が空を見上げながら苛立ち気に答える。その視線の先を追うと件の黒い翼のISの姿は見えるが逃げられたのか敵の姿は無い。

『織斑先生私らの獲物まで盗らないで下さいよー』

『まあそれでも対した獲物でも無かったです』

「黙れ。そんな事を言っていた場合か」

何やら迎撃に出ていた二年、三年の専用機持ち達が漏らした不満を千冬は一蹴した。しかし彼女らのその余裕な様子に一夏達は複雑な心境だ。苦戦とまでは行かなくとも、自分達が手こずっていた相手に対してあの反応。それは彼我の実力差を表しているからだ。

一夏がそんな事を考えていると、上空の黒い翼のIS。そして黒いラファールが高度を上げ始めた。何時の様に撤退する気だろう。

「待ってくれ！」

思わず呼び止める。幸い声は届いた様で、二機は空中で静止しこちらを見下ろした。

「無事だったんだな……逃げれたとは聞いていたけど心配だったんだ」

思い出すのは臨海学校の事。あの黒い翼のISは銀の福音を倒した後、戦闘で追った深手をそのままにアメリカ軍からの追跡を受けていた筈だ。その後、追跡は撒いたとは千冬から聞いていたがあの傷だ。本当に無事だったのかは不明だったのだ。

「だけど何で何時も助けてくれるんだ？　そもそもお前……いや、あなたは何なんだ？」

「……」

それは一夏にとって重要な質問だ。いつも自分達を護ってくれからというだけでは無い。それだけの事を成すその力。それに憧れと若干の悔しさを感じていたのだ。だが黒い翼のISは何も答ええない。話はそれだけかと言わんばかりに一夏達から顔を逸らした。

「ちよつと、無視は酷いんじゃない!？」

「そうですね。それに貴方も怪我をしていますし治療を」

鈴とセシリアも声を上げる。箒とラウラも同意の様で黒い翼のISを見つめていた。

『黒翼』

「え？」

そんな一夏達に何かを感じたのか、それとも気まぐれか。黒い翼のISは機械によって変換された声で一言だけそう言うのと今度こそ黒い翼のIS——黒翼と黒いラファールはその翼のスラスターを吹かしそこから離脱していったのだった。

「ごく、よく？　もしかして名前か何かなのか……？」

「つばいわね。っていうか結局何者か分からなかったじゃない！」

「そうだな。だが敵では無い……そう思いたいものだ」

ラウラの眩きにセシリアと箒も頷く。しかし千冬だけは厳しい目で黒翼が消えていった空を見つめ続けていた。

流石にあんな騒ぎの後では学園祭の続行は不可能だった。とは言っても、元々昼も過ぎてほとんどの出し物も閉店ムードの最中の出来事であった為、生徒達も渋々ながらも納得した。一般客も一部を除きそれほどパニックと言う事は無く、中にはISでの戦闘を間近で見られて興奮する者や、感心する者も居た。それらの一般客は口々に興奮や不安の声を漏らしながらもIS学園から去っていく。無論、その際には教師陣のISがハイパーセンサーによる嚴重なチェックを通ってからだ。だが幸い捕らえた侵入者以外には怪しい者は居らず、特に混乱も無くそれは終わった。そして現在は現場検証と事情聴取が行われている。

「川村は何処だ？」

「川村君は彼らの目的の一つだったと言う事もあり、一時的に学園から遠ざけました。後ほどこちらに帰ってきます」

千冬の問いに答えのは虚。静司の秘密を知る更識家に仕える人間である。実際の所は、静司は学園から撤退しつつ各国の追跡を逃れるために色々を行っていた為に戻ってくるのに時間がかかるのだ。だが流石に臨海学校の時の様に軍の部隊が追跡に来ることは無く、多少面倒ながらも無事に撒いていた。

そしてここにも二人、事件の重要人物が向かい合っていた。

「そろそろ私は帰る。件の新型の件もあるしな」

「そう、ですか」

ユーグ・デュノアとシャルロット・デュノア。複雑な関係の親子である。二人は早々に事情聴取を終え解放されたのだ。

二人から少し離れた所では理沙ことC12が念の為に護衛に付いている。そして千冬や他の更識家もだ。

「……」

「……」

お互いに無言の時間が流れる。お互いに何を話せばいいのかわからず、しかしこのまま終わってはいけない。そんな想いに突き動かされてシャルロットが声を上げる。

「あ、あの」

「何だ？」

「そ、その……先程の答えを聞く日を楽しみにしています」

答え——それは先程自分を襲った侵入者に対し立ち塞がった事。その理由とそれに至った心の内をいつか聞ければと。シャルロットは願った。

「ああ、そうだな」

ユーグは相変わらずの難しい顔をしていたが静かに頷く。そんな彼に声がかかる。更識家の者で、念の為護衛していくので帰る準備をとの事だった。そんな声を聞いてシャルロットは若干の寂しさを感じてしまった。だがそれを表に出さない様に無理やり笑顔を作ると小さくお辞儀した。

「それでは、また」

「ああ」

次にいつ会おう。そんな親子なら何の問題も無さそうな約束も出来ないのが今の二人の距離。それを改めて実感しつつ、シャルロットは護衛に連れられて去っていく父の姿を見送る。

「一つ、言い忘れた」

不意にユーグが立ち止まる。但し顔をはこちらに向けずにだが。

「お前が望むなら、敬語でなくても構わん。そういうものだろう」

「——っ！」

顔は見えない。どんな心境で言ったのかもわからない。だけどその言葉はまるで、まるで自分の事を娘と見てくれている様で。

これはきつと喜びだろう。間違いなく自分は、今の言葉が嬉しいのだ。だから、だから今自分は涙を流しているのだ。だから自分も答えよう。父の言葉に対して、それにあつた形で。

「うんっ！」

涙でくしゃくしゃになった笑顔で、シャルロットはそう答えたのだった。

「これで一步前進……かしらね。色々あつたけどまあ良しとしましよ
う」

遠くからその様子を見ていた由香里が満足そうに頷く。その近くではC1が呆れた様な顔で控えていた。

「この為だけにここに学園に来たんですか？」

「まさか！ 勿論静司に会うのも含まれているわよ？ 後未来の娘候補達」

「達つてアンタ……なんて羨ましいっ」

「ふふふ。今すぐに警察に突き出すわよ？ それより報告！」

「いや、待てよ……？ そうなれば俺は所謂『お義兄さん』となる訳か？ それはそれで——ぐほっ!」

ブツブツ呟くC1の腹に由香里のハイヒールが突き刺ささる。由香里は笑顔に青筋を浮かべながら再度命令する。

「ほ・う・こ・く」

「りよ、了解……。えーと、会社の方は先の報告通り人的被害は少ないです。施設の一部が盛大にぶっ壊れています。まあ大丈夫でしょう。問題は奪われたデータです」

「静司に関連するデータの一部ね。と言う事はVプロジェクトについてもっ！」

「おそろく。全てとは言いませんが、概要さえ掴まれてしまえば芋づる式に知られる事でしよう」

「それは嫌な話ね。私達にとつても。彼女にとつても。で、今回侵入した連中については？」

「全て更識家に引き渡しています。流石にこれだけ公にやられるとうちでこっそり、という訳には行かないんで。勿論尋問には参加しませんがね。で、連中が持っていたのがコレ」

そう言つてC1が端末を操作し由香里に見せる。その内容を見て由香里は眉を潜めた。

「完璧では無いにしてもハイパーセンサーの簡易スキャンから逃れるためのステルスシステムね。こんなものをあんな連中がどうやって手に入れたのかしら？」

「確かに何名か軍関係者が居ましたよ。とは言つても末端が殆どですし、こんな物手に入れられるとは思えませんね。第一本来これはかなり高価な上に未だ試作段階ですよ？ まあ施策故に完璧では無いんですが、そう簡単に手に入れられるものでも無い。と、なると考えられるのは一つ」

「サイレント・ゼフィルスとアラクネの連中の仕業ね。囷、陽動の為主義者だしたら連中を尋問しても大した情報は得られないわね」

ちつ、と苛立ち気に足元の石を蹴る。結局、何かを知っているであろう本命には逃げられた挙句、こちらは黒翼だけでなくB2のラファールまでもが衆目に晒す事になった。

「それと気になる点が一つ」

C1が若干の戸惑いを含ませて続ける。彼のそんな珍しい様子に由香里は悪い予感がした。

「そのサイレント・ゼフィルスの搭乗者、どうもValkyrie projectの関係者の様です」

「なんですって……？」

それは彼女を動揺させるには十分な報告だった。

薄暗く陰気な部屋。桐生はその部屋で椅子に座り、複数のモニターと対峙していた。モニターの数は幾つもあり、そこには老若男女様々

な顔が映し出されている。これらは全てI S委員会のメンバーだ。

『学園への襲撃、これで何度目だ?』

『やはり日本に任せるのは失敗だったのでは』

『更識家とやらも存外役に立たないですね』

(勝手な事を言うなあ)

外面はニコニコとしながらも、内心で桐生は呆れていた。そもそもI S学園の運営を丸投げしたのは自分達だと言うのに。

『やはり兼ねてからの案を進めるべきだ』

『I S学園に部隊を常駐させるという案ですか? ですがどこがそんな人員を出すのです?』

『我々に任せて貰えば——』

『ふん、貴様ら等に任せられるか。私の国から出す』

『ふざけないでいただきたい。そんな事なら私が手配します』

(本当に、勝手だ)

今度はあからさまにため息を吐いてしまう。彼らが揉めている案とは『非常時に備えてI S学園に部隊を配備する』という件だ。だが元はと言えば、I S学園の運営及び警備は日本が負う事になっていた。早い話、面倒なものは丸投げされていたのだ。学園の警備も本気でやろうと思えばI Sが必要となる。しかしそうなるI Sとその搭乗者を学園に常駐させなければならず、それを当初は誰もが拒否したのだ。I Sはまさに日進月歩と言う様に進化が進んでいる。そんな中、子供のお守りに自国のI Sとその搭乗者を派遣するという事を嫌がったのだ。

だが今、そんな意見を忘れたように揉め事が起きている。その原因は一夏や静司達にあった。一夏の近くにが篠ノ之束の妹であり、現代最新鋭のI Sを持つ篠ノ之箒が居る。これは各国とも喉から手が出る程欲しい物だ。最悪データだけでも取り続けたい。それは一夏の白式とて同じだ。

そしてもう一つの理由が無人機と黒翼の存在。どちらもどこに所属しているのかも知れず、しかし興味深い能力を持った兵器。これに関する調査と、あわよくば捕獲。それはどの国も考えている事だ。そ

してここ最近の学園への襲撃の連続によりその声は大きくなり、今回の件で更に油が注がれた。早い話、学園を守る為という名目の下に学園内での調査や活動を考えているのだ。表向きにはIS学園はどの国にも属さないという事になっている為、今まではそれが出来なかった。だが今が好機と見たのだろう。桐生の目の前では醜い争いが続いていた。

『いい加減にしないか。争う為に集まった訳ではあるまい』

いい加減話が進まないと思ったのだろう。委員長の声で一度が声が収まる。

『確かに今までIS学園と更識家に任せきりだったのも事実だ。しかしそれでも今までは問題なかった。しかし今、具体的に言ってしまうは男性操縦者の登場以降、同じやり方では駄目だと言うのも事実』

『ならば——』

『まあ待ちたまえ。だからと言っていきなり乗り込んでも反感を買うだけだ。それだけならまだしもお互いに足を引っ張っては仕方あるまい？』

『……』

正論だ、と桐生は頷く。しかしならばこの騒ぎをどう収集つけるのか？

『常駐は突然は難しいだろう。だから要所要所で派遣すればいい。メンバーは各国から募り、然るべきタイミングで派遣する。連携などの訓練は必要だろうがそれでどうだろう？』

つまり常時待機でなく、必要時だけに投入するという事。確かに今まで騒ぎが起こったのは決まってIS学園で何かしらのイベントがある時ばかりだ。敵もあからさまにそれを狙ってくるのだからこちらもそれに対応するという事か。

『言いたいことはわかるがね、敵がそうそうタイミングよく来るかね？』

『しかし今までの事件が事件ですから。勿論今までののがそう思わせるフェイクと言う可能性もありますが、一先ずはそれでも良いかと』

他の面々も不承不承という感じではあるが同意する。ここで争い

続けても得は無いと判断したのだろう。それに常駐となればそれなりの規模が必要になるが、その間自国の守りが薄くなるのも確かなのだ。

『それではこの件はその様に進める事とする。承認を』

『異議なし。承認します』

『同じく。承認します』

（大有りだけど仕方ないね。これから彼らはさらに大変になるだろうなあ。出来る限りフォローしたいけど下手に反対すると疑われそうだ）

表向きでは同意しつつも、内心ではこの先の展開を悩み始める桐生だった。

日も暮れ、夜空に月が上る頃。静司は密かにIS学園に帰還していた。これまで各国の追跡を逃れ、その後が逆にこっそりと侵入すると言う面倒事を行っていた為に大分遅くなってしまった。今までならもう少しスムーズだったのだが、今回は学園祭と言う事もあり普段よりも各国、各組織の監視も厳しく中々難儀した。そしてようやく、学園内部から更識家の手を借りつつ帰還したのだ。

暗がりの学園敷地内。しかし遠くから音が聞こえる。到着前に聞いた話だが、どうやらアリーナで打ち上げパーティーをしているらしい。あんな事があった後だと言うのにとも思ったが、どうも中途半端に終わってしまった学園祭の続きという訳らしい。それと生徒達へのガス抜きも兼ねているとか。確かに楯無も学園祭の前に生徒達のガス抜きが必要だと言っていた。そうでなければいつか不満や抑圧が爆発する。教師陣もそれが分かっているからこそ許可したのだろう。そしてこれが本音の言っていた『学園祭の後の面白い事』だとあたりをつける。

そんな人気のない敷地内を歩きつつ、静司が考えるのは先程の敵の事だ。あの奇妙な感覚を感じたサイレント・ゼフィルスとその搭乗者。あれは一体なんだったのか。何故敵に対して安らぎなどと言う

場違いな感覚を覚えたのか。疑問は尽きない。

何となく、直ぐにアリーナに行く気にはならず校舎へと足を向ける。夜の校舎は人氣が無く、非常灯の薄暗い明かりがどこか不気味さを醸し出していた。そのまま当ても無く歩いていく。そして歩いている内に一つ、目を引く者があつた。

『ISの歴史』

それは一年四組の出し物。恐らくはISに不慣れな一般客向けに作ったのであろう。教室の外から中にかけて年表や、実際の部品など様々な物が解説付きで展示されていた。

「……」

ふらりと教室内に入る。当然ながら人氣は無く展示物たちが非常灯と月明かりに照らされているだけだ。そんな教室内をゆつくりと見回し、そして一つの写真に眼が止まる。それは年表の一部であり、そこだけは大きなパネルで一人の女性の姿が映し出されていた。

『IS開発者。稀代の天才。人類の新たな道標——篠ノ之束』

そこには笑顔で、しかしどこか小馬鹿にしたような顔の篠ノ之束の姿が写っていた。だがそのパネルと共に書いてある言葉が静司の心をざわつかせる。

（全ての始まり……）

ISの生みの親。自分や姉達のような存在が生まれた原因。主義者が肯定する者。自分が否定する者。誰かが崇め、誰かが恨む。そんな混沌とした存在。

（ならば奴は？）

サイレント・ゼフィルスの搭乗者はどうなのだろうか？ 篠ノ之束を崇めているのか、恨んでいるのか。それとも何とも思っていないのか。そして何故自分そんな事を考えてしまうのか。なぜこれほどまでに気になるのか。

ゆつくりと左腕を伸ばす。左腕の偽装が消え鋼鉄の腕が現れる。その尖った指先が写真の束の顔に突き刺さろうとして、しかしその手を止めた。

「馬鹿か俺は」

これは唯の写真。しかしこのクラスの生徒達が一生懸命作ったであろう物だ。それを悩んだ挙句の八つ当たりの様に壊すなどもつての外。

「本音たちの所へ戻ろう」

パネルから目を逸らし教室から出ようとして、不意に立ち止まる。自分の進路方向の先。そこにいつの間にか女子生徒が立っていた。

肩にかかるより少しセミロングの髪は癖毛らしく大きく内側にハネている。細く少し垂れがちの眼はどこか虚ろだ。そして実用性しか見ていなそうな長方形の眼鏡をかけた少女を静司は知っていた。

（更識簪？）

そう、それは楯無の妹である更識簪だった。彼女は静司の顔は見ず、その左腕だけを凝視してた。

「何か用か？」

「っ」

話しかけるとびくつ、と肩を震わせるが直ぐに首を振る。

「……忘れ物を取りに来ただけ」

「……そうか。悪かったな邪魔して」

軽く頭を下げると静司扉へ向かう。必然的に簪に近寄る事になると彼女は慌てて一歩引いて道を作った。その反応に一瞬首を捻るが直ぐに合点がいった。

（メガネかけても怖いものは怖い、と言われたこともあったっけ……）

髪を切って以来、その人相の悪さからか相応数の生徒達にビビられた静司だ。眼鏡をかけて大分緩和されているものの、慣れていない相手だとやはり怖がらせてしまうらしい。なんだか久しぶりの感覚である。無論、嬉しくないが。

なんだか空しい気分になりつつ教室から出ていく。そんな静司の背中に声がかかる。

「……あなたはISを憎むの？」

「……いや」

おそらく先程の場面を見られていたのだろう。腕を見ても驚かないと言う事は、更識家として自分の事を知っているからか。

「……なら篠ノ之博士？」

「……………何故そんな事を聞く」

振り返ると簪が再度肩を震わせた。そして目を逸らしたまま問う。

「……あなたの腕を見て少し気になっただけ。忘れて」

それだけ言うと簪は教室へ入って行く。そんな背中にも今度は静司が問う。

「なあ、君はどうしても許せない事ってあるか？」

そんな静司の言葉に簪は足を止めた。

「納得できない事なら誰にでもあると、思う」

「なら、それに対して君はどうするんだ？」

「……見返す」

それだけ言うと簪は教室の中に消えていった。後に残された静司は「そうか」とだけ呟くとアリーナに向けて歩き出すのだった。

「あ、かわむー」

「静司！ 遅かったね」

「まあ色々あって……ね？」

アリーナの中が結構な騒ぎになっていた。どうやって準備したのか、あちこちに料理が並び立食式で各々が口に運んでいる。会場には音楽が流れ、興の乗った生徒同士が躍っていた。端の方では何故かI S同士が躍っており、それを周りは声を上げて笑って見物していた。そして何より目を引くのは結構な数の生徒が仮装をしている事にあつた。それは純白のドレスから謎のミイラ女まで様々であり、なんでもござれといった所か。

「何だこのカオスな騒ぎは……」

「打ち上げだよ。中止にするかもって話も合ったけど、無理やり実行く」

「あ、あはははは」

本音の答えにシャルロットは苦笑い。しかしそんな二人もすっかり仮装していた。シャルロットは頭に犬耳を付け、何やら巫女の着る

袴の様な物を着ていた。

本音は黒いローブに身を包みとんがり帽子を被っている。片手にはよくわからぬ杖の様な物を持っていた。

「本音はまあ分かるとして、シャルロットは何のコスプレだそれ？」

「え、えつと犬耳巫女娘……」

顔を赤くして恥ずかしそうに答える。どうか本当に恥ずかしいのだろう。それを見てこれは本音の差し金だと気づく。

「そして私は魔女だよ。わるいこはいねーが？」

「いやそれ違うから」

わーい、と杖を振る本音に思わず突っ込む。それから未だに恥ずかしそうに俯くシャルロットの頭をぽんと、叩く。

「親父さんとは大丈夫だったか？」

「う、うん！ 良い事もあったかな」

ぱああと顔を明るくする様子に静司も安心した。この様子なら大丈夫だろう。そんな静司の顔を本音は覗き込む。

「ん〜？ かわむーも大丈夫？」

「っ、あ、ああ。問題ないよ」

相変わらず鋭い。顔には出してないつもりだったがどうやら少し感づかれたらしい。だからそれを誤魔化す様にとんがり帽子の天辺をぽんぽんと叩く。本音は「わ〜」と驚いてるのか、楽しんでいるのか分からない様な声で頭を振っていた。

と、不意に遠くから叫び声が聞こえた。

「一夏！ 待ちなさい！」

「逃がさんぞ！」

「おほほほ、お二人とも邪魔ですわ！」

「ふむ、こういうのも悪く無い」

「だ、だから順番に踊ればいいじゃないか……つてうわあ!？」

声の先を見れば何時ものメンバーによる何時もの様な光景が広がっている。それぞれドレス（シンデレラだろうか？）を着た鈴、箒、セシリア、ラウラが互いを牽制しながら一夏を追っている。周りは何時もの光景だと言わんばかりに面白そうに眺めていた。

「なんとというか、いつもながら大変だな……」

「皆元気だね」

「あ、あはははは……」

しかしいつも通りのこの光景こそが自分の居たい場所、戻りたい場所へ戻ってきたという実感がわく。それは勿論隣にいる彼女達の存在もそうだ。だから今は、今だけは他の事を忘れてこの幸せを実感したい。

「じゃあ私達も踊ろう。しゃるるんも手」

「え？ それは良いけど三人でどうやって踊るの？」

「てきとくでおつけ」

本音が静司とシャルロットの手を引っ張っていく。それに慌てて付いていくシャルロット。それらを眺めながら静司はしばし、心を休めるのだった。

「で、何踊るんだ？ というか俺ダンスなんて知らないんだが」

「えーとね、カバディ！」

「それ踊り!」

その来訪者はカテーナにとって予想外だった。亡国機業の実働部隊。そのメンバーが寝泊まりするマンションの一室、カテーナにあってがわれたその部屋にやって来たのは謎の多いメンバーの一人、エムだ。

「あの黒いＩＳに付いて教えろ」

部屋に入るなり開口一番エムが発した言葉にカテーナは思わず笑ってしまう。

「エム、流石にそれはいきなり過ぎる気がするわねえ」

「知った事か。それよりも知っている事を教えろ」

「ふうん？」

エムがここまで執着するのは珍しい。その対象は織斑千冬だけか

と思っていた。しかしつい先程手に入れた情報の事を思えばそれも当然だろう。そう、K・アドヴァンス社から手に入れた情報を考えれば――

「いいわよ。だけど一つ、私も教えて欲しい事があるのよねえ」

「……」

エムは無言。だがそれはこちらを促している物だと察し、カテーナは続ける。

「答えるのは情報を教えてからでいいわよお。どちらかと言うと確証が欲しいだけだからねえ」

「何……？」

「うふ」

そう笑うとカテーナは手元の端末を叩く。そして部屋の巨大スクリーンに入手したての情報を表示した。

エムはそれを無感動な目で見つめていたが、やがてその眼が見開き次第に口元が吊り上っていく。

「ふ、ふふふふふははははは！　そうか、そういう事か！」

普段のエムを知る者が今のエムを見たら驚く事だろう。カテーナもここまで大きな反応を示すエムは初めて見た。それほどまでにエムの心を動かす情報がそこには合ったのだろう。

ひとしきり笑い終え、しかし相変わらず笑みを浮かべるエムにカテーナは問う。

「喜んでいただけただけだよねえ。では私の質問よ。エム、あなたは何者？」

エムはその問いに眉を潜める。

「ふん、気づいているのだろうか？」

「ええまあね。けど確証が欲しいのよ。他でも無い、あなたの言葉で」
そのカテーナの言葉にエムはいいだろう、と答えると昏く、どこか邪悪さを感じる笑みで口を開く。

「私はな、この男のきょうだいだよ」

小話：どうしようもない人たち

彼女の趣味

夏。照りつける太陽が地上の人々の体力と水分を奪っていく季節。そんな季節にも関わらず、途方もない数の人々がひしめく場所があった。

「あ、暑い……死にそう……」

「人も多すぎてこれは……」

年に二回、関東で行われる祭典。その会場内を歩くのは鏡ナギと谷本癒子。二人は全身にびっしりと汗を流しながらげんなりとした様子で歩いていた。彼女達の服装は何時もの制服とは違い、動きやすい私服。流行に乗りつつも自分なりのお洒落を加えた二人の姿は道行く人々を振り向かせるのに十分だった。しかし今の二人にそれを気にする余裕は無い。それほどまでに疲弊しているのだ。

それなのに、

「ナギーにゆーこ、次に行こう」

何故目の前の友人はピンピンしてるのだろうか？

二人は納得のいかない顔でその友人——布仏本音に視線を向ける。

「どーしたの〜？」

「いや、どうしたもこうしたも」

「なんで本音はそんなに元気なのかなーって」

えー？ と首を捻る本音に対し二人はますます納得がいかない。何故なら本音は何時もの制服の様にだぼだぼの緩い長袖の服を着ているのだ。あれで暑く無い筈が無い。実際彼女も少し汗をかいている。しかしそれに堪えた様子も無く平然としている。

「こ、これが慣れと言うものなのかしら。興味本意で来たけどちよつと舐めてたかも」

「確かにね」

しかしこれも友達付き合いの一つ。それに大切な友人の趣味なのだから知ること自体は悪く無い筈だ。それに漫画などは本音の影響

もあって好きな方だし、それなりに楽しんでもいる。あとは気合次第といった所か。二人はそう言い聞かせて気を奮い立たせる。

そうして再び進み始めた三人だが、不意に本音が人とぶつかってしまった。思わず尻餅をついた本音に二人は慌てて駆け寄る。

「本音大丈夫!？」

「うひひ、だいじょーぶ」

幸い怪我は無いようで、相変わらずの呑気な笑みを浮かべて手を振る友人に二人はほっとする。

「申し訳ありません。私の不注意でした」

本音にぶつかった女性は謝罪の言葉を口にする、助け起こすべく手を伸ばし、しかしその眼が見開かれた。

「あなたは……」

「？」

本音は訳も分からず首を傾げる。そんな様子を見た女性は直ぐに表情を戻すと本音に手を貸し助け起こす。

「申し訳ありませんでした。私の不注意です」

「こちらこそごめんなさい〜」

お互いに頭を下げると、女性は『それでは』と一言だけ残し去って行った。そんな女性の後ろ姿を本音は首を傾げながら見つめる。

「どうしたの？」

「うーん？ どこかで会った事ある様な……？」

しかし思い出せないのか首を傾げている本音にナギと癒子の二人は笑う。

「ま、思い出せないなら気のせいじゃない？ それより次いくんでしょっ。」

「そうだね。重要だったまた思い出すよ」

「んーそうだね〜。じゃあ次にれつつごー」

そうして三人は再び歩きだした。

そこから少し離れた場所。本音たちが消えていくのを気配で感じ取り、女性は息を付いた。

「まさかこんな所で出会うとは」

想わぬ偶然に一瞬焦ったが、変装していた為か相手は気づかなかつたようだ。

「さて……」

どうしたものか、と少し悩んだが結局はこのまま。何もしない事にする。何せ今日は祭りだ。無粋な真似は止すとする。何よりも自分が楽しむ為だが。

「では、気を取り直して行くとしましょう」

そう言つて女性――シェーリは再び歩き出す。その手に戦利品を手にする為。

惨劇

始まりは一夏の何気ない一言だった。

「鈴の料理美味いよな」

時刻は昼過ぎ。食堂で何時もの面子で食事をしている時に一夏が不意に思い出したかのように言った。

突然の事に鈴は一瞬止まり、そして好きな男から褒められたことに気を良くして自慢げに胸を逸らす。

「ふ、ふん！ 当然でしょー！」

ふふん、と笑う鈴の頬は少し赤い。だがそれを見ていて面白くないのは箒達だ。

「待て、私だつて料理には自信があるぞ」

「ふむ。私も自分で作る事はある」

「わ、わたくしもですわ！」

箒、ラウラ、セシリアが次々に口を開く。但しセシリアだけは若干声が上がっていたが。

「ああ、確かに箒も和食の美味いよなー。ラウラも料理するのか？」

「当然だ。部隊で習った」

「部隊……?」

その話を横で聞いていた静司は何か嫌な予感がしたがとりあえずスルーする事にして、目の前のラーメンを啜りつつ一夏達の話眺めていた。因みにその両隣では本音がホットケーキを頬張り、シャルロットがテリーヌを食べている。更に本音の隣にはナギと癒子も居る。

「わ、わたくしだってあれから修行を積みました!」

「そ、そうか。うん、練習は大事だよな」

ぐいつ、と身を乗り出し必死に叫ぶセシリアに一夏も思わず頷く。以前セシリアが作った料理を食べた事があるがそれはもう大層なお味だったのだ。流石にそのままではまずいと思い指摘したのだが。

ここまでの話の流れで静司の嫌な予感が更に増す。何となくシャルロットの方を見てみると彼女もピタリ、と停止して何かを警戒していた。反対の本音は相変わらずニコニコとホットケーキを頬張っているが、食べる速度が若干上がっていた。ナギと癒子も脂汗を流している。

「ま、精進しなさいセシリア。けど私には及ばないけどね!」

「な、なんですって!?!」

「さて、鈴。それではまるで自分が一番上手いと言っている様にも聞こえるぞー!」

「その通りだけど?」

「それは聞き捨てならんな……」

徐々にヒートアップしていく三人。ここに来て静司の嫌な予感は半ば確信へと変わり早々にスープを平らげ席から離れる事を決めた。シャルロットを見ると顔色を青くしつつ無言でコクコク、と頷く。ならば本音はと言うと静司の制服の裾を引っ張り残念そうな顔でまだ口を付けていないホットケーキを一枚差し出した。大の甘党の筈のその行動も、静司は全てを理解していた為に無言で頷くと一気に口に押し込んでぐつ、とサムズアップ。見れば癒子とナギも早々に料理を口に押し込み既にトレイを手にしち上がろうとしてた。

——行くぞ。

——うん。

そんな会話を視線で交わし、静司達がいざ離脱しようとしたその時、

「ならば勝負ですわ！ この場に居る人間で決着を付けましょう！」

「いいわよ。現実って物を見せてあげるわ」

「勝負を挑まれては引けん……」

「いいだろう。ならば審査員は静司達に任せるとしよう」

そんな言葉と共に今まさに離脱しようとした者達の肩ががしつ、と掴まれる。

逃げそびれた。

それを理解した途端、静司達の目の前が真つ暗になったとか。

「と、言う事で『織斑&川村集団 チキチキ料理対決』を開始しましょう！ 司会は皆のたつちゃんこと更識楯無が行うわ！」

「解説の布仏虚です。皆さんよろしくお願いします」

「どうしてこうなった……」

場所と時間は変わって放課後。比較的広い学園の家庭科室で調理台を前に静司は呟いた。

「さて、当初は個人戦でしたが一部静司たちの熱烈な希望によりチーム戦に変更！ くじ引きで決定した組み合わせで戦って貰いましょう」

「静司……、とりあえず個人戦じゃないだけマシと思おう。そうすればセシリアの暴挙は止められるよ」

シャルロットがどこか達観した笑みで静司の肩を叩く。しかも言っている事は中々酷い。最初はバラバラの個人戦で静司達が審査員役だったのだが、それを必死に説得したのだ。少なくともチーム戦ならそれほど酷い物にはならないだろうと。

そして何やら面白そうな気配がする、と突然湧いてきた楯無によって場が設けられ、そしてあれよあれよと見物人も集まり今に至る。広めの家庭科室には暇を持って余した生徒や教師達が見物に来ている。

というかそれでいいのかエリート学校IS学園。

「と、言う事で早速ですが気になるチーム分けを発表しましょう。参加者の皆、さつき引いたくじを見せて頂戴!」

やけにテンションの高い楯無に従いそれぞれがくじを見せる。その結果!

「織斑君、篠ノ之さん、凰さん、デュノアさんチームと川村君、本音、ボーデヴィツヒさん、オルコットさんチームですね」

「み、未知数過ぎる……」

静司達の方を見て、誰かが言うのだった。

因みに癒子とナギは審査員^生として審査員席で死んだ目をしていた。

「何故だ……この組み合わせに悪意を感じるのは」

「たたり、と冷や汗を流す静司。そんな静司を尻目に鈴は呆れた様子に、

「とかいかいくらなんでも余裕過ぎない? 一夏も箒も料理できるしシャルロットも行けるでしょ?」

「うん。大層なのは無理だけど普通の出来るかな?」

「鈴と勝負できないのは残念だがまあ良しとしよう」

シャルロットは普通に頷き、箒も一夏と同じチームで嬉しいのか頷く。だがその態度をセシリアとラウラは挑発と感じたらしい。

「戦う前から油断など愚か者のする事だな」

「そうですね! 私たちの力見せてあげますわ」

「いやだっけ、アンタら二人だけじゃなくって静司と本音も結構怪しいわよ?」

「何?」

「むー」

思わぬ物言いに静司と本音が反応する。

「あんた達料理するってイメージ無いけど出来るの?」

「ちや、チャーハン位なら」

「私は食べるのが好き」

「駄目じゃん。本音はまあ予想通りだけど静司、あんたも男だからって料理できないは理由にならないわよ。一夏を見習いなさい、一夏

を」

「くっ……」

何故か自慢げに笑る鈴の言葉に静司も呻く。確かに一理あると思っただのだ。それに同じ男としてこうやって比べられるとやはり空しいものもある。

「わかった。そこまで言われたら俺も唯では引き下がらない。必ず見返してやるとしよう」

「ふーん。ま、楽しみにしてるわよ」

あくまで余裕綽々に自分達のチームの下へ帰っていく鈴。それを悔しそうな顔で見送る静司。

「と、言う事で試合開始！」

そうして対決は始まった。

「さて、問題は何を作るかですわね」

早速リーダー（立候補）のセシリアを中心に作戦会議を始める。それを聞く面々は皆真剣だ。静司としても流石にあそこまで言われるとちよつと悔しいと言うか見返してやりたくなる。

「まず皆さんが何が出来るかを把握することが重要ですわね」

「うむ。仲間の能力を知る事は重要だな。ではそれぞれ自己申告するとうしよう」

「ではまず俺からかな。チャーハンや野菜炒め位なら作れる。大事なのは火力と教わった」

静司が挙手し報告する。因みに教えたのは由香里他EXISTの面々である。

「他には何か出来ないのか？」

「鍋も時たまつくる。大事なのは火力だと教わった」

「……他には？」

「や、焼き肉もたまに作る。大事なものは——」

「……っ、次ですわ！ 本音さんはどうですか？」

問われた本音はうーん、と首を捻り、

「私も得意じゃないかなー。だけど味見は得意〜」

「味見が得意って……」

「んーとねー、私が好きなお菓子は会長もおねーちゃんも褒めてくれるよ〜」

「会長が？ それは良い情報ですわね」

会長や虚が褒めると言う事はかなり良い部類だろう。普段からは想像もつかないが、時折見せる佇まいからセシリアは楯無がどこかしの令嬢かそれに準ずる家の者だと気づいていた。その会長が褒めるのだから、本音の味覚はかなりアテになると思われる。

「では次は私か。斬るのと焼くのが得意だ」

「き、斬ると焼く？」

「そうだ。あとそうだな……食材の調達も得意だ。蛇をはじめに野生の動物も捌けるぞ。どうだ？ 今から調達しに行くか」

「け、結構ですわー！」

ラウラなら頼めば本当にやりそうで怖い。セシリアは脂汗を流しつつ乗り気なラウラを止める。

「というか皆さん、人の事散々言っておいて実は自分達もたいしてできないんじゃないですか！」

ジト目で睨みつけるセシリアだが静司達ほとんどもない、と首を振る。そして代表して本音がセシリアの肩をぽん、と叩き、のんびりしつつどこか慈しみに溢れた表情で告げる。

「せっしー。料理を作れる事と料理が出来る事ってのはね、違う意味なんだよ？」

「どういう意味ですの!?!」

セシリアの叫びにその場にいた誰もが顔を逸らすのだった。

興奮するセシリアを何とか全員で宥め、改めて作戦会議を再開する。

「とにかく何を作るかだな。ここは簡単な料理が良いと思うんだがどうだろっ？」

「私は甘いのがいい」

「私は味には拘らんがやはり栄養を補給できる物がいいのではないか？」

「そして大事なのは見た目ですわね」

むう、と4人が首を捻る。中々アイデアが浮かばない。こうしてる間にも時間は刻々と過ぎていき、敵チームの料理は進んでいる。試しに隣を覗いてみれば鈴が巨大な中華鍋を振り箒が野菜を切っている。お世辞にも料理に詳しいとは言えない4人は何を作っているのか全く分からなかった。

「やはり作り易い定番メニューが良いと思うんだが」

「そうだね。カレーなんてどうかなく？」

はい、本音が手を上げる。カレー。確かに定番で作り易いイメージがある。

「だけど普通にカレーを作ってもあちらには勝てませんわね……」

「確かに。何らかの工夫が必要だ」

やめて！ 超やめて！ せめて普通に作って！ と審査員席でナギと癒子が騒いでいるが4人には聞こえない。否、静司は聞こえてはいたが確かに普通に作っても勝てないというのは同感だったので黙殺した。要はセシリアを暴走させなければ大丈夫だろうと。

「工夫か。しかしカレーにする工夫とは一体……」

再び悩み始めると、ラウラが思い出したかのように手を上げた。

「そういえば昔部下に聞いたことがある。日本では料理に大事な事として『料理のさしすせそ』という言葉があると」

「さしすせそ？ 何かの暗号か？」

「略っぽいね」

「そのような名前の調味料など聞いたことありませんわ」

「いや、何かの略らしい。何の略かは思い出せんが……」

4人首を傾げる。

「さ、さ………索敵？」

「し………照準か！」

「すーすー、すばやく〜？」

「精密に……」

「「……狙撃？」」

「んな訳あるか!？」

思わず入ったツツコミは一夏のもの。どうやら様子を見に来たらしい。

「む、一夏さん。作戦会議中ですわ」

「そうだ。いくら一夏と言えど今は敵。スパイ行為は許せんぞ?」

「いや、なんかもうそれ以前の問題な気がしてるんだが……」

セシリアとラウラの言葉にも一夏は苦笑で返すしかない。それほどまでにセシリア達のチームは酷かった。

「駄目だよおりむー。こっちの事は内緒」

「そうだぞ一夏。今回ばかりは俺も本気だ。ちゃんとお前らにも食べさせて納得させてやるから心して待ってるんだ」

「い、いや俺はいいかな……」

その時の一夏の顔は引き攣っていたと言う。

そしてそれから暫く。遂に両者の料理が出そろった。それぞれの料理が審査員席に運ばれていく。因みに審査員はナギ、癒子、山田、そして千冬である。なぜこの面子かと言えば前半二人はじゃんけんで負けた為。後半二人は楯無が引つ張ってきたからである。

審査員たちは出てきた料理を前に一斉に首を傾げた。

「おお……」

「おいしそうだね」

「しかしなんだこの組み合わせは?」

「斬新ですね」

審査員の前に出された料理。一夏チームは酢豚と肉じゃがという何とも謎な組み合わせだった。ご丁寧とその隣には中華風スープと豆腐の味噌汁が並んでいる。明らかに料理人の二人の趣向がぶつかり合っている。

「だから中華に統一しろって言ったじゃない!」

「和食が一番だと言った!」

なにやら鈴と箒がいがみ合い、一夏とシャルロットはそれを見て苦笑いしている。恐らく前者二人がお互いの得意料理を主張した結果だろう。後者二人は補佐である。

「ふむ、だが味は良いな。流石といった所か」

「美味しいですね」

千冬と真耶が料理を口に運びつつ頷く。ナギと癒子も同様だ。

「さあ、審査員の評価も上々。これをどう見ますか解説の虚さん?」

「はい。基本的に織斑君のチームは料理が出来る人が集まっているので予想通りだと言えます。ですが組み合わせが少々歪なのでそこが減点対象と成り得ます。料理は見た目や形も重要ですから」

同じく提供された料理を口に運びながらの楯無の振りに虚が答える。本人達も自覚はあるのかうつ、と呻いている。

「さて、では次は問題の川村君達ですが……これは……」

楯無は静司達の料理を見て首を傾げた。そしてそれは他の審査員たちも同じ。

「こ、これは……」

「見た目は普通……だよな?」

「確かに普通のカレーだな」

「ええ、確かに普通過ぎる程に」

そう、確かに出てきたのは普通のカレー。ほのかに湯気を上げつつ、香ばしい香りが鼻をくすぐる。具材も綺麗に切られバランスよく盛られている。そう、普通過ぎるカレーがそこにあるのだがそれ故に困惑は大きい。

「こ、これは意外ね。これをどうみますか解説の虚さん」

「そうですね……。調理中の会話を聞いた限りですとつきり原色豊かに彩られた悪魔のルーの中央に串刺しにされた食用カエルが魔女狩りの如く突き立てられているかとも思っていましたか………普通ですね」

虚も意外なのか興味津々にそのカレーを見つめている。だが味はどうなのか? 一斉に静司達に視線が集まる。

「安心して下さいまし。味見もしていますわ！」

「ああ、私たちの力の結晶。教官も是非ご賞味を」

「もーまんたーい〜」

「そういう事なのでどうぞ」

それぞれ自信満々に頷く。それならばと審査員たちも恐る恐るよそい、口に入れた。

「……た、確かに食べれる。いや、それどこか……美味しい？」

「辛さと甘さが混じりあって、不思議な感覚だけど美味しいね」

ナギと癒子が信じられないと言った様子で呻く。それは教員二人も同じだった。

「ふむ、中々いけるな」

「食べたことの無い味ですけど美味しいです」

次々に漏れる賞賛に静司達は自慢げだ。しかし一夏達は納得がいかない。

「そんな!? あの面子で普通の料理ですって!?!」

「馬鹿な!? そんな奇跡が起こる訳が無い!」

「どういう事だ静司!? 一体どんな化学変化を起こした!?!」

「はっ!? まさかこれは夢!?!」

言いたい放題である。

「けど意外よねー。てつきり虚の言った様な物か、見た目は良いけど中身が! 的な物を想像してたのだけど」

トラブルを期待していたのだろう。自分もカレーを口に運びながら楯無が詰まらなそうに言う。他の見物人たちも興味本位でそれぞれの料理を食べていた。

「まあ味を戻すのにかなり苦労したからな」

そんな静司の言葉にぴたり、と全員の動きが止まった。

「味を、戻す?」

「ああ。あれは中々の関係プレーだった」

頷くラウラに代表してシャルロットが聞いてみる。

「ら、ラウラ。何があったの?」

「ふむ。実は一瞬目を離れた隙にセシリアが何かをしたらしくてな。

一度は酷い味になったのだ」

「う、……反省しますわ」

ラウラの台詞にセシリアが罰の悪そうに呻く。

「それでねー、それを直す為に色々入れてみたの」

「ち、因みにその色々って？」

「えーとねー、私はチョコレートとかナッツとか！」

「私はカロリーメイトに肉を大量にだ。無論背脂ごと」

「俺は味の補正の為にソースやケツチャップ等を大量に。後は煮込みまくる事で何とか味は元に戻したんだよ。やはり火力が重要だった」

うんうん、と頷く三人だがそれを聞いていた者達の顔が引き攣っていく。チョコレート。カロリーメイトに静司の言う調味料類。それらはどれも高カロリー。つまりこのカレーは見た目以上にカロリーが高い。そう、乙女の計算を狂わせるほどには。

「ちよ……アンタらなんて物を作ってるのよ！一言言いなさい、一言！」

「そうだぞ！唯でさえ最近気になるのに……」

「酷いよ静司！そういう事は先に言ってよ！」

口々に悲鳴が上がる。勿論彼女らとて、ある程度のカロリーは覚悟していた。しかし目の前にあるカレーはその想像を遥かに超える程のカロリーを秘めている。他にもカレーを食べていた者達も一斉に顔を青くしている。だが、

「？何か問題があるのか？」

「だいじょーぶだよー」

「少し位なら大丈夫じゃないか？」

体重などをあまり気にして無さそうなラウラ。栄養が全部胸にいつているんじゃないかと密かに疑われている本音。そしてこればかりは余り関心がなかった為にいまいち乙女の心境が分からない静司。そして、

「ふふ、ふふふふ。ええ、分かっていますとも。味見するその前からその事は。しかしこの件だけは私は引けないのですわ。肉を切らせず骨を断つ。私の覚悟を甘く見ないで下さい……っ！」

何やら暗い顔で笑うセシリアが居た。

「あ、あんた私達を道連れにする気ね?！」

がたん、と鈴が音を立ててセシリアに詰め寄ろうとする。しかしその時、テーブルの上にあった誰かの食べかけのカレーのスプーンが皿から落ちた。そしてそのスプーンから落ちたカレーがテーブルに触れた。その瞬間。

じゅわ

「え?」

奇妙な、そう、奇妙な音が聞こえた。鈴は恐る恐るその音の発生した場所へと目を向ける。するとそこにはカレーの触れた部分だけが水色に変色したテーブルがあった。

「……………」

しんつ、と沈まり返った部屋の中、カタカタカタカタと音が聞こえる。これは何の音だろう? 鈴は考えそして気づく。これは自分の歯の音だと。全身からダラダラと汗が流れ始め、己の指先は震えている。それは何故か? 決まっている。それは目の前の謎の化学変化を見てしまったが為だ。

「な…………ぜ…………」

見れば静司もまた真っ青な顔で震えている。それはラウラも本音も同様だ。何故ならその様な事が起きる原因に心当たりは一つしかない。

そして彼は震えるその眼でセシリアを見る。

「わ、私も自分のやった事でしたので何とかお役に立とうと思いつて」

そして何かを入れた。恐らく静司達が再び^油目を^断離れた^{瞬間}に、何かを。

「ですが味は大丈夫だったではありませんか! ならば問題は——」
「そういう問題では無いのだ! くそつ、分析班を——」

そこまで言いかけた所で、不意にラウラが止まる。そしてそのまま顔を青くしていくとその場に倒れた。

「…………」

誰も彼女に駆け寄らない。別にそれは彼女を見捨てた訳では無い。恐怖に身を竦み体が動かないのだ。

「ま、まさか……」

誰かの震える声に静司もまた同じ顔で頷く。

「遅行性……だと……」

つまり先ほど味見した時に問題なかったのは効果がまだ現れていなかったからで。そして今、ラウラが倒れたという事は。

「うつ……」

「げほ……」

「っあ……」

ラウラが倒れた事を皮切りに次々と人が倒れていく。効果が出るに個人差があるのか順番はバラバラだが一人、また一人とその身を床へ沈めていく。

「何と言う事だ……。山田君、至急丸川先生を――」

この状況に流石に慌てた千冬が真耶に指示を出そうとして、しかしその身をふら付かせた。それでも何とか耐えようとしたのは教師の意地か根性か。しかしその努力も空しく、千冬もまた机を抱える様に倒れた。

「うそ……あの織斑先生も」

「もはやこれは兵器……」

まだ効果が来ていない生徒達の顔が絶望に染まっていく。もはや家庭科室は地獄絵図と化していた。

「うつ……」

「っ、本音?!」

それは静司の隣にいた本音も同様で、倒れかけた本音の体を静司が何とか抱きとめた。彼女の顔も例外にもれず青く震えている。

「か、かわむー……」

「本音! しっかりしろ、傷は深いぞ!」

「私も……もう、駄目かなー……今までとても楽しかったよ……」

「そんな事……そんな事今言うな! これからもっと楽しい事がある筈だ! だから生きるんだ本音!」

状況だけ見れば悲しいシーンなのかもしれないが原因が原因なだけに誰も何も言えない。まあ言えたとしてもそれぞれ自分の事で精いっぱいでもあったのだが。

「かわむー……覚えて、おいて……」

「もういい！ 喋るな本音！ 衛生兵、衛生兵はどこだ!?!」

叫ぶ静司の顔も次第に青くなっていく。だがそれでも本音の体を離さない。本音はそんな静司の顔に手を伸ばし、頬を撫でる様に触りながら最後の言葉を放つ。

「これが……テン……プ……レ……」

「本音えええええええ!?!」

がくつ、と力尽きる本音。そんな家庭科室の中心で静司は叫ぶのだった。

数時間後。EXISTにて。

「課長、B9からの定時報告がありません」

「何!?! 学園で何かが起きたのか」

「わかりません、今C1達が確認をしていますが可能性はゼロではありません。実は通信が途絶える前に一つだけ暗号通信があったのですが……」

「何? 見せてみる」

「はい」

頷いてオペレーターがコンソールを叩き静司が送った文面を移す。だがその文面を見て課長は首を傾げた。

『ボスケテ』

そう一言だけの通信。

「どういう意味だ?」

「さあ?」

結局彼らが事実を知ったのはそれから数時間後だったとか。

因みにその事件の後、セシリアは『ブリュンヒルデを沈めた女』として暫く恐れられる事になるのだった。

マジカル（物理）メイド千冬ちゃん

それは学園祭が終わってから少しした休日の事。

「ふはあっ」

織斑千冬はたった今飲み終えたビールの缶をテーブルへ置いた。そのテーブルの上には既に20を超える数の缶が転がっており、一緒に焼酎の瓶まで置いてある。そしてその周りを囲む様に散らばるツمامミ達。千冬はその中の一つを適当に手につかむと口に入れる。そして再び飲みかけのビールを喉に流し込む。

ふと時計を見ると時刻は夕方16時。夏も過ぎ、徐々に秋に変わりつつあるので外も薄暗くなってきている。それを見ながら千冬は新たな缶を空け一口。

（久々だな……）

何時もは真耶と共に居酒屋なりバーなりに行って飲む。勿論、部屋で飲むこともあるがこれほどの量を自室で飲んだのは久々だった。何せ今日は朝から飲み続けているのだから。

千冬の顔は酔いで赤く、少し視点も定まらない。しかし倒れたり潰れたりすることも無く今も変わらず飲み続けている。こんなになつたのも学園祭の事件のせいだ。

あの事件の後は本当に大変だった。事情聴取に始まり現場検証、内外への説明。今後の対策等々。特に今回の件でこれ幸いと学園への干渉を狙ってくる組織や企業の相手が大変だった。何せIS委員会も通さず直接自分の所に来るのだ。千冬は一応はただの教師であり、学園をどうこうする権利は無い。しかし千冬を落とせば学園も変わるんでも思っただのだろう。次から次へとやってくる相手に千冬のストレスは溜まる一方だった。だがそれらも否定や無視。時には脅しをかける事で片づけていき、ようやく落ち着いてきたのが週末の事。そして千冬は酒とツمامミを買い込み、久々にゆっくりできる今日はひたすら飲むと決めたのだ。

部屋の中は散々たるものだ。あちこちに衣服や下着が無造作に脱ぎ捨てられ、その合間合間に書類や文具も散らかっている。絶望的に家事が出来ない故にこの部屋が片付くのは弟である一夏がやって来た時だけだ。一夏は姉の酷さを知っている為に片付けに来るのだ。

「一夏、か」

自分の弟。必死に守り、育ててきたたった一人の家族。その一夏は学園に来てから色々あったが、最近では以前より男らしくなったように見える。それは何か目標が出来たからなのか、それとも他の理由からか。そこまでは千冬にもわからない。だがそれが良い事であつて欲しいと思う。

そしてその一夏の周りにいる少女達の事も考える。あの弟を好いて色々やってきている様だが効果は薄い。弟の朴念仁ぶりにはどんなに男らしくなっても全く変わらない。果たしてあの弟を落とすのは誰なのか。それを面白く感じる一方で、ずっと自分の背中を見てきた弟が別の場所へ羽ばたいていく事に少し寂しさを感じてしまう。

「ふ、馬鹿馬鹿しい」

そんな感傷を振り切る様に再びビールを喉に流し込む。こんな事を考えるなんて流石に飲みすぎただろうか？ いやいやそんな筈は無い。これ以上に飲んだことなど何度もある。だからそれは無い。そう考えながら空になった缶を放り、新たな缶を空ける。そして思いを振り切る様に一気に喉に流し込む。そんな千冬の眼にある物が目に止まった。

「そういえば、返し忘れていたな」

それは普段の自分なら絶対に着る事の無い服——メイド服。学園祭で生徒達に半ば無理やり着せられ、しかしその後起きた事から誰もその話題を出さなくなった日くつきの代物。

自分が似合うとは思っていなかった。酷い物になるだろうとおも思っていた。しかし生徒達の反応は自分の考えていた反応とは全く違っており、その反応の仕方に千冬は言い知れぬ空しさを感じたのだ。……何せ一斉に怯えられたのだから。

「そういえば一夏と川村が何か騒いでいたな」

最近、友人の男のせいで変な趣味に目覚めていないかと疑わしい一夏。そしてその友人川村静司。二人がメイド云々で話していた事を千冬は偶然ながら聞いたことがあった。

「……………」

じつ、とメイド服を見つめる。

確かに先日着た時は自分にも非があった。何せ殺気を込めて周囲を睨みつけていたのだから。だがそれが無かったらどうだったのだろうか？ ふとそんな事を考える。馬鹿な事だとは思うが、少し気になった。

普段の千冬なら絶対にしない思考。絶対に思いつかない事。しかし今日の千冬は違った。本人の考える通りかなりの量を飲んでいるというのもある。そして自身では気づいていないが、ここ最近の疲労とストレス。溜まりにたまったそれらが酔いと混ざりあい、千冬の思考は普段に比べて斜め上に向かっていった。だから、

「ふむ」

千冬は酔いで少しふらつく足取りで、そのメイド服の下へと向かった。

IS学園教員寮。その廊下を一夏と静司は歩いていた。二人の手には数枚の紙があり、その顔は不安げだ。

「くそー、忙しすぎたとはいえ千冬姉の授業の課題を出し忘れるなんて」

「殺されるか半殺しか……。良い予感はないな」

普段の授業で出された課題。その存在を思い出したのはどちらが先か。提出期限は週末金曜日だったために既にアウトだが、このままトングズラなんてしようものなら何が起こるか分からない。だから二人は休日返上で慌てて仕上げてきたのだ。

「まあ仕方ないよな。急いで持って行って一緒に怒られようぜ、静司」
「死なば諸共……。潔くいくしかないな」

そうして二人は千冬の部屋へとたどり着く。しかしそこで二人は一つミスをした。早く課題を届けなければという思い。そして一夏

は身内だからと言う油断。静司はこれから起きる説教に対しての不安による注意緩慢。それらが重なり合い起きたミス。それはノックもせずに一夏が千冬の部屋のドアを開けてしまった事だった。そして千冬もまた、部屋の鍵を閉め忘れていたと言う不運もある。

「千冬姉ごめん！ 課題なんだ……け……ど………」

「申し訳ありませんで……し……た？」

「……………」

その瞬間、二人は確かに見た。

高い身長を包み込む紺と白を基調とした服。その長い脚のくるぶしまで伸びた、ゆったりとしたロングスカート。可愛らしくフリルのついた白いエプロンの真ん中にはハート形の刺繍。元が黒い髪に良く映える純白のカチューシャ。それらを身に着け、あまつさえそのスカートの端を掴まんでいる——千冬の姿を。

「……………」

「……………」

「……………」

まるで時が止まったかのように誰も動か無い。このままではいけない。そう分かっているながらも、目の前の光景から目が離せない。当の千冬は少し頬を上気させ口をほかん、と開き、今まで一度も見たとない呆然とした顔で二人を見つめている。

そのまま数秒経った頃だろうか。不意に静司が動いた。ゆっくりと右腕を上げ、床に対して水平に。何事かと見つめる一夏の視線の先、その持ち上げた腕の親指が天を指す。

それは見事なまでのサムズアップ。それを見て一夏は思う。『あ、こいつ勇者だ』と。

「……………」

「!!」

それは悲鳴か叫び声か。何かを叫んだ千冬の腕が勢いよく近くにあった缶を掴み、そして投げる。

二人が最後に見たのは迫りくる空き缶の底だった。

「静司に一夏!? ちょっとどうしたの!?!」

夕食に静司達を誘おうとやって来たシャルロットは、廊下の隅にうち捨てられていた二人を見て驚きの声を上げた。

「いや……俺達にもよくわからないんだ」

「何かとても素晴らしくて、けどとても危険な物を見た気がしたんだが何も思い出せない……」

「あ、はあ?」

打ち捨てられたゴミの様な体制のまま、二人はしばらく頭を傾げるのだった。

55. who are you? ①

納得がいかない。理解できない。

篠ノ之束は薄暗い部屋で一人、怒りでその身を震わせていた。その眼前には二つのISの画像が映し出されている。

片方は黒い翼のIS。散々自分の邪魔をしてきた忌々しい謎の機体。そして搭乗者も不明。

そしてもう一つはイギリスから奪取された蒼いIS。名はサイレント・ゼフィルス。こちらも搭乗者は不明だ。

「なんで……なんで出てこないのかな!」

ばんつ、と子供の様に八つ当たりで机を叩く。ここ最近の自分の中の最優先事項であるこの二つのIS。それが見つから無い事に彼女は苛立っていた。

束がこのような事をする理由は学園祭の事件が原因だった。元々はそれほど介入する気は無かった。何せ学園祭では一夏や箒は直接ISで何かをする訳では無い。だから学園に放った機械のリスからの情報を元に見物でもしようかと考えていた。

だがその学園祭も途中からキナ臭くなった。川村静司への襲撃に始まり、最後には謎の無人機の集団と各国から奪われたISを扱う者達の登場。だが束はそれだけなら対して介入する気は起きなかった。むしろ一夏や箒を鍛えるいいチャンスとでさえ考えた。危なくなったらこっそり助けてやればいい。その程度の考え。

川村静司への襲撃もそうだ。成功しようかしまいがどうでも良かった。確かにあの男は気に入らない。だからわざわざ助ける必要は無いし、死んだら死んだでそれまでだ。臨海学校で手を出したのは自分の立場を分からせる為。途中で黒いISに邪魔されたがあれで自分の立場を思い知った事だろうと束は考えている。

だが学園祭の戦いの中で黒いISが現れたのなら話は別だ。あれは気に入らない。倒し、調べ、そして分解する。搭乗者もこれまでのツケを必ず払わせる。だからこちらからも無人機を出そうとした。だがその束の行動を止めるものがあつた。

「Valkyrie project……」

忌々しげに呟くその言葉は彼女にとっても最悪なもの。親友のコピーを造る等といった凶器の計画。そして自分がこの世から消し去った筈の計画。そして自分が初めて人を殺す理由を作った計画。

その計画の名をあのサイレント・ゼフィルスの搭乗者は発し、あろうことかあの黒いISもそれに反応した。その意味する事は一つ。あの計画を知っているとと言う事だ。だがそれはおかしい。あの計画は、自分が破壊しつくしたあの研究所のみで行われ、その情報は完全に外界と遮断されていた。そして束はあの研究所を破壊した際、少しでも知る可能性の有る者達も根こそぎこの世から消した。それから何度も何度も調べつくし、遂にはそれを知る者はもはやこの世には存在しないと確信したのだ。だがならば何故あの二者は知っていたのか？ 自分が見落としたのか？

違う。

そんな筈は無い。自分は十全たる存在。そんなへまはしない。ならば何故。

そんな疑問には一つだけ答えがあった。認めたくない答え。忌まわしい答えが。

自分はその施設と、その存在を少しでも知る者から順にたどっていき情報を消していった。だが世界中の施設やデータを探しきった訳では無い。全く関係の無い所にある物は流石に調べていない。ならばそこにデータが合ったと言う事だ。だがならばどうやってそのデータは得られた？ 密かに移されていた？ いや違う。そういつた痕跡も含めて自分は調べきったのだ。そんなものは見逃さない。つまりあの研究所の消滅以降に新たに情報を手に入れていない限り、自分が見過ごすことなどありえないのだ。

そしてそれはつまり一つの答えを示してる。研究所の破壊以降、全く別の方法で情報を手に入れた者が居る。

つまり、何らかの形で生き残った者がおり、そしてそいつが情報を持っていた。

ぎりつ、と己の歯ぎしりの音が耳に響く。生き残り。失敗。殺しそ

こね――

「うっ……い」

一瞬こみ上げてきた吐き気に口元を押さえる。意識が朦朧とし、指先が震える。これまで何度もなってきた忌まわしい衝動。それは生まれて初めて人を、それも大量に殺した時時に生まれた恐怖と気持ち悪さだ。未だにそんなものを引きずっている事に腹が立つ。あんな連中、死んで当然なのに。

だが当時の自分はやはりどこか怖かったのだろう。だから無人機の下となった自動兵器に全てを任せ命令だけを送り自分はその現場を見なかった。だがその結果、生き残りを生む結果となってしまった。

これは己の汚点だ。だから今度こそ、確実にこの世から消さなければならぬ。

だからそれを知る黒いISとサイレント・ゼフィルス。それを探した。正確にはその搭乗者をだが。だがそれが上手くいか無い。確かに臨海学校の時黒いISは自分の命令に逆らった。だからISコアを起点に探しても見つからない可能性は予想していた。

しかしサイレント・ゼフィルス。こちらも見つからないのは理由が付かない。何故ならサイレント・ゼフィルスに関しては、イギリスがコソコソと作っていた段階からその在り処から情報まで、全てを知っていたのだから。その後奪われてからは興味を無くし、調べた事は無かった。だが今回、居場所を探るために調べようとした所、その情報を全く追えない事に気づいたのだ。そしてそれは一緒に居たアラクネと無人兵器達に関しても同様だった。

「どうして……っ」

あれは消さなければならぬのに。あつてはならぬのに。なのにそれに関する情報が何も見つけ出せない。自分の思い通りに行かない。それが束を苛立たせる。だがその苛立ちを消し去る物が、突然画面に現れた。

「……えっ？」

画面には新たなウィンドウが開きそこに簡潔に一言『発見』と記さ

れていた。

訝しみつつコンソールを叩く。すると画面にはロシアの地図と、そこで光る光点が示されていた。そのコアのシリアルを確認するとサイレント・ゼフィルスの物である。

「……この束さんを馬鹿にするとはいいい度胸だね」

もしサイレント・ゼフィルスがこちらに捕捉されない何らかの技術を有していたとすれば、これは罠の可能性が高い。もしくは故障か何かか。だがそんなものはどうでもいい。そこに居るのなら捕まえに行くのみだ。有象無象の張った罠など無為に等しい事を思い知らせてやる。

束は昏い笑みを浮かべると、無人機達に指示を飛ばした。

眼下に走る雪原を静司は無感動に見つめていた。目に移るのは雪と木々。そして岩のみ。生物らしいものは見えない。

耳の直ぐ上では高速で回転するヘリのローター音。室内も時節揺れ、物と物がぶつかる音が響いている。窓の外の景色は次第に暗くなっており、夜の訪れを示していた。

そんな光景を眺める静司の正面。向かいの席に座っていたC12は密かにため息を付いた。

(空気が重いつす)

先ほどから静司は一言も喋らない。ヘリの室内は重い沈黙に包まれている。だがそれも仕方な無事なのかもしれない。

(原因が原因つすからね)

事の始まりは3日前。学園祭の事件の混乱もようやく冷めてきた頃に静司の携帯に届いた一通のメール。仕事用でなく、学園生活に必要なだろうと言う事で用意した市販の携帯に届いたそのメールの送信者は知らない相手。だがその内容は静司を動揺させるのに十分でもあった。

『V・P。知りたければ向かえ』

文面らしい文面はそれだけ。後は下に座標が記され、最後にアル

フアベットのMと記されているのみだ。

V・P。その意味として真つ先に静司が思いつくのは一つだけだ。だが何故それが静司の携帯に届くのか。そもそも送り主は誰なのかは全く分からなかった。唯一の可能性は学園祭に現れたサイレント・ゼフィルスの搭乗者だが、ならば狙いは何か。全く分からない。

だが静司はそこに行くことを主張した。例え罠の可能性があらうとも、何かが分かるかもしれないから。

当然、課長達は渋った。この件は静司の過去に直接関わる事であるから知りたいのは当然。だが罠の可能性の方が高いのも事実だからだ。それに静司自身が行くと言う事にもだが。だが最終的には許可を出した。例えそれがどんなものであらうとも、静司の過去に関わる事であるのなら、捨て置くことは出来ず、そしてその想いが最も強いのも静司で有る為だ。それに学園祭の時に現れたサイレント・ゼフィルスが関わっているのなら捕らえる必要もあった。

「いいっすか、B9。タイムリミットは12時間っす。それ以上の長居は許可されてないっすよ。学園は今C1やB2が見てくれてるけど、それも無理やりなんすから」

「わかっている」

静司がここに来ると言う事は当然一夏達の護衛が出来ない。その為課長はC5にISを渡し、B2への変更を既に済ませている。だが学園祭の様な事件があったばかりだ。最も護衛対象の近くに居られる静司をそう長期間離れさせる訳にはいかない故の措置である。

「はあ、分かっているならいいっすよ。さて、先行した仲間からの情報っすけど、送られた座標の位置は『表向き』は唯の山っす。だけどその中身は違法なIS技術の研究施設ってところっすね。VTシステム程では無いにしても、それなりに不味い物がある様っす。ただB9の事と直接関わる様な物は今の所見つけてないっす」

「今の所、か」

「そうっすね。まあ後は実際B9が行った時どういふ反応が出るかっす。さて、そろそろ着くっすかね」

今の静司は気が立っている。それを感じ取っているC12はそれ

以上は深く語らず、代わりにヘリのパイロットに聞いた。返答はY E S。もうじきとの事だ。その返事を聞き二人も準備を進める。当然向かっているのは自分達だけでは無い。機内に居た他の者達も準備を進めていく。

『……おい！ 様子がおかしい！』

不意にヘリのパイロットから無線を通じて報告が入った。続いて静司とC12の間に投影型スクリーンが浮かびそこに外の様子が映し出された。

「赤い……燃えている?」

「どういうことだ?」

先程よりも日も落ち、ますます暗くなった外の景色。そして遙か先、目的地があるあたりの空が赤く照らし出されている。更には黒煙らしきものも見える。何かが起きているのは明白だ。

「先行組からの連絡は!」

『駄目だ繋がらない! 何かに妨害されている!』

「それは不味いっすね……」

全員の顔に緊張感が走る。本来ならばこれ以上は接近せず様子を見たい所。しかし先行した仲間との連絡が取れないと言う事は、彼らがまだそこにいるかもしれないと言う事だ。そしてそれを見捨てる気は無い。だが悪い事は続く。

『おい、あれは……』

望遠レンズで映し出された映像。そこには火を上げる山とその合間合間から対空砲を放る兵器達。そしてそれをゴミの様に破壊していく小さな機影が見える。そしてその機影には見覚えがあった。

「無人機だと……!?!」

そう。これまで散々好き勝手に場を荒らしてきた無人機。それらしきものが複数飛翔している。その形状は今まで見たことないタイプだったが、学園祭に現れた物とは違い、臨海学校などに現れたタイプに良く似ていた。つまりこれは篠ノ之束の手によるもの。

『おい、どうする!?! これ以上近づいたら逃げ切れんかもしれんぞ!』
「課長と連絡は!」

「駄目つす！ こつちも繋がらないつすよ！ この辺り一体妨害されてるつす！」

「くそつ！」

悪態を付くと静司はヘリのドアを開け放った。途端に室内に風が吹き荒れ外気が入り込み急速に冷えていく。だがそんなものもお構いなしに静司には外へと身を乗り出した。

「どうする気つすか!？」

「俺が出る！ あの連中を黙らせるからその隙に救助を！」

「……それしかないつすね。けど大丈夫なんつすか？」

それは静司の身を案じただけでは無い。篠ノ之束の無人機を相手に、冷静でいられるかという意味も含んでいた。それが分かっていたから静司も頷く。

「今までだつて散々戦ってきたんだ。問題ない。……blade、出るぞー！」

『無茶すんなよ！』

静司がその身を外に投げ出す。重力に従って落下していきながらも慌てることなく目的地を見据え、小さく呟く。

「そうだ、大丈夫の筈だ」

荒れ狂う風の中、小さな光が静司を包み込む。光は徐々に大きく広がっていき、やがては大きな翼を形成した。同じように手に、足に、体に、頭に光が広がりそれぞれの形を作っていく。やがて光が消えるとそこには漆黒の装甲に時節赤いラインが走る鋼鉄の機体の姿があった。

「いくぞ、黒翼」

スラスターに火がともる。巨大な翼をはためかせる。地面まで数メートルの地点の空中で一瞬停止。そしてすぐさま前傾姿勢になると、黒翼はそのスラスターを全開に吹かし敵へと一直線に向かって行った。

凍える夜空に赤い線が走る。その赤は破壊の弾丸。地上から放た

れたそれは空を自由に飛び回る敵——無人機を撃ち落とさんと幾度も連射されている。しかし空を舞う無人機はそれを容易く躲し、お返しとばかりにそれ以上の破壊をばら撒く。地上の抵抗者達は為す術も無くその破壊に蹂躪され散っていった。

その破壊を終えた無人機は次のターゲットを求めその顔を巡らせる。だが不意に警告が入った。

——敵接近。

敵、それは破壊するもの。そう判断した無人機は迫りくる新たな敵に銃口を向けようとする。しかしそれよりも早く、抗い様の無い衝撃がその身に走り、その動きを停止する。

——重——損傷の——エラー——最優線——発見——

システムが異常を知らせる。ダメージレベルは戦闘続行不可能な値。それも当然だ。何故ならその機体の腹に鋭く、凶悪な鋼鉄の鉤爪が突き刺さっていたのだから。

「消えろ」

その鉤爪の主が小さく呟く。同時にその鉤爪が引き抜かれ空中に放り出された所で、襲撃者の翼が光そこから放たれた光が突き刺さり、その無人機は爆炎に包まれた。

そしてその爆炎の中から漆黒のISがゆつくりと姿を現す。この場に置ける破壊の具現者としてお前達を全て破壊してやると、明確な殺気を放ちながら。

無人機達が施設への破壊行動を止め一斉に最優先目標を変えた。応じる様に漆黒のIS——黒翼も構える。

極寒の地の炎に照らされる夜空で、戦いが始まる。

そしてその戦いを遠くから眺めている少女が1人。

「始まったか」

少女は口元を吊り上げ、どこか期待した眼でそれを眺める。

「さあ見せてみる。お前はどこまで進んでいる？ どれだけ近づいた？」

その声には愉悦と凶気が含まれ、組んだ腕の指はとん、とん、と何かを待ちわびる子供の様でもあった。

「舞台は用意した。ここには足手守るべきものまといも居ない。だから見せてみる、お前の全力を。私の前で」

にやり、と笑みを深くし少女——エムは笑う。

「なあ、きょうだい？」

56. who are you? ②

「はあ」

IS学園生徒会室。その主たる更識楯無が漏らしたため息に虚はキーボードを叩く手を止め顔を上げた。

「仕方ない事……なのかしらね」

「例の件ですか?」

「ええ。跳ねのけるだけの言い分がこちらにはもう無いわ」

虚の問いに楯無はうんざりした様子で頷いた。そして書類を摘みひらひらと振る。

「IS学園と生徒の安全の為に部隊を派遣する、ってね。聞こえはいけど本当の狙いはそこじゃないでしょうに」

「無人機及び川村君達に対する監視……並びに捕獲が狙いでしょか」

「でしようね。両方とも各国の注目の的だもの。それにここには最新鋭のISを持つ箒ちゃんや一夏君も居る。その辺りもあるのでしようね」

元々は全てを日本に丸投げしていたくせに、と楯無は忌々しげに呟く。最新鋭のIS。学園を襲撃する謎の機体。そしてそれと戦う謎のIS。それらの存在は各国の興味を引くには十分だった様だ。そして学園祭の事件で侵入を防げなかった学園と更識家には、それに反抗する手段が無かった。

「建前はIS委員会の招集ですけど、実際は違うのでしようね」

「まあね。委員会だって一枚岩じゃないし、各々の国の思惑があるんでしょ。ま、うちはそのやり方でやらしてもらおうけど」

暗に、おかしなことをしたら容赦はしないという主の言葉に虚は静かに頷く。主がそう言うのなら自分はそれをサポートするだけだ。

ふと妹に眼を向ける。妹の本音にはデータの打ちこみを任せていたのだがその手があまり動いていない。

「本音、手が止まってるわよ」

「あ、おねーちゃんごめん」

叱られた本音が打ちこみを始めたがやはりいつもより手際が悪く、どこか上の空だ。それを指摘しようかと思つたが辞めた。

(川村君の事ね)

現在静司は学園には居ない。護衛としてそれはどうなのかという気もしたが、逆に言うならそれほど緊急を要する件だつたのだろう。もしくはどうしても静司でなければいけなかつたか。表向きにはK・アドヴァンス社での雑事と言う事にはなっているが実際は違う。正確な情報は聞かされていないがおそらく荒事だろうと、と予想していた。何故そう思うかと言うと、数日学園を空けると連絡してきた時、彼はどこかピリピリと張りつめた雰囲気をしていたからだ。そして自分にさえ分かつた事を、彼の近くに居る本音が分から無い筈が無い。だから心配なのだろう。

「……………そういえば新しいクレープ屋が出来たそうです」

だから思わず口に出したのは妹を叱る言葉では無く、全く関係の無い事。

「あら、それは気になるわね」

「ええ。クラスの方々から聞いたのですが中々に評判の様ですよ」

「それはますます期待が膨らむわ……………」

楯無は話に乗る興味気に眼を光らせる。本音はと言えば姉が振るには珍しい話題にきよとん、としていた。

(いつもならあなたが真つ先に反応するでしょうに)

そんな事を考えつつ提案する。

「ではこれが終わったら行くとしませう。本音、今日は私が奢つてあげます」

「え！ おねーちゃんいいの?」

「ええ、最近頑張ってくれているからね。だから早く終わらせましょう」

「うん！」

「あ、私も！」

「では会長も早く仕事を終わらせてくださいね」

お菓子で吊る、と言つたら人間が悪いが少しは効果あつただろう

か？ まあそれも見た目以上に聡い妹の事だ。こちらの思惑も薄々感づいている事だろう。だがそれでも少しでも元気になつてくれるのなら構わない。大切な妹が暗い顔をしている所は見たく無い。

(全く、これで泣かせましたら怒りますよ……)

ここに居ない少年へ文句を言いつつ、虚も自分の仕事を再開するのだった。

夜空を数条の光が奔る。その光たちは場所や角度を変え何度も奔り、時たま何かにぶつかり紅蓮の爆発を引き起こす。その爆発の後にはスクラップと化したISが地面に落ちていき、落下の衝撃で完全に機体をバラバラに砕けさせていた。

「これで、二機！」

その光の主は静司の黒翼が放つR/Lブラスト。両翼から放たれる三対六本の光線は敵の無人機を狙う。対してその無人機達も両腕の砲口からビームを放ち黒翼を撃ち落とさんと迫っていた。

現在極寒の大地の上空に飛ぶ影は8つ。1つが黒翼で残りは全て無人機だ。そしてその無人機達は全機それぞれ形がバラバラだった。片腕が異様に巨大な機体。両肩にガトリングガンらしきものに乗せた機体。逆に一見何も装備が無いように見せて、その両手両足を鞭の様にしならせ襲い掛かってくる機体。他の機体もそれぞれ形が異なっており随分と統一性が無い。

「それがどうした」

務めて冷静に。自分自身に言い聞かせつつ、接近戦を仕掛けてきた片腕が巨大な無人機の一撃を右腕で受け止める。一瞬停止したその隙を狙い更に背後に一機。鞭の様にしなる両腕を持つ機体はがこちらの翼を狙っていた。

——《アサルトテイル》機動。

命令と同時に黒翼の尾が展開。その鋭い切っ先が背後の無人機目掛けて突き放たれた。同時に目の前の無人機には左腕のガトリングガンの砲口を向ける。

「くたばれっ！」

超至近距離からの射撃。それをまともに受けた無人機はその胴体をズタズタに引き裂かれ、火を噴き地上へと落ちていく。同時に背後の無人機には《アサルトテイル》が突き刺さり、その身を串刺しにする。そして静司はそれを串刺しにしたまま瞬時加速を発動。両腕の砲口でこちらを狙っていた無人機に接近すると、黒翼を回転させ慣性を乗せた《アサルトテイル》での一撃を叩きこむ。串刺しにされた無人機と、砲撃を加えようとした無人機同士がぶつかり合い、金属が潰れる鈍い音が夜空に響いた。そして衝撃によるめく無人機と、衝撃により串刺し状態から逃れた無人機それぞれに向け、両翼のR/Lブラストを発射。その機体を貫き行動停止に追い込んだ。これで残り5機。

ちらり、と下の様子を確認する。無人機襲撃の際に発生した施設の火災とその噴煙で視界は悪いが、あそこでは今C12達が仲間の捜索、及び救出を行っている筈だ。周囲一帯の通信妨害のせいで距離が離れると連絡をとりづらいが全く出来ない訳でも無い。救出が終わり次第連絡が入る筈だ。

状況を把握し、再び無人機達に向かおうとした時だった。地上に向けていた静司の目に異様な物が写る。

それは既に沈黙した対空砲だった。恐らく射手は逃げたのだろう。そしてその対空砲の周りに何かが蠢いているのだ。

「あれは……？」

無人機達を警戒しつつ視界をズームし、それを確認する。数秒睨み、そして静司の顔が強張った。

それは機械の仕掛けの小動物。恐らくリスを模したであろうそれが、対空砲を喰っていた。

「何を……」

しているんだ、という言葉は口には出さなかった。何故ならその理由は直ぐにわかったから。

対空砲を喰べたりスたちは次にお互いの体を貪り合う。いや、違う。あれは合体しているのだ。対空砲と機械仕掛けのリス。それらは一つの集合体となっていき、ありえない速度でその形を整えてい

く。そして出来上がったのは、左腕に対空砲を身に付けた無人機の姿。そしてその無人機の対空砲が持ち上がり、静司を狙う。

「くそっ!？」

地上から放たれる銃撃を身を翻して回避する。その隙に接近してきた別の機体をガトリングガンで牽制し距離を取っていく。そしてそれを囲む様に展開する8機の無人機。そう8機だ。倒した筈の機体が復活している。

「馬鹿な——」

驚く間にも無人機達は一齐に襲い掛かってくる。ブレードによる攻撃を受け止め、蹴り飛ばす。上下左右から斬りかかってくる無人機達に対し、両腕と両足。そして尾である《アサルトテイル》を用いてそれを受け止める。だがその隙に残りの無人機達が一齐に黒翼に銃撃を叩きこんだ。爆発と衝撃。そして熱さと痛みで歯を食いしばりつつ、静司は両翼を左右に展開。R／Lブラストを左右の無人機にお返しとばかりに叩きこんだ。直撃を受けた2機はその機体から炎を上げつつ落下していく。

だが、その途中でその機体が不自然に爆ぜた。バラバラになった機体の破片たちは地上へ散らばり、そして自らの意思で動き始める。周囲の兵器、建造物、機械。様々な物をその身に取り込み、そしてお互いに取り込み合う。足りない部分は造り出し、元々施設にあつた武器を己が武器へと取り込み、そして再び歪な形の機体へとその身を造り変える。

吸収と合体。それぞれ形が歪なものも、統一性が無いのも。地上で見た光景の様にまわりの物を取り込んでいるからか。そんな機能を持つ機械など聞いたことが無い。だがそれを成してしまうのが篠ノ之束だと。静司は嫌でも理解させられた。

だがいくら復活できると言っても、完全に消し炭にしていまえ別の筈だ。もしくはそれすら出来ない程に砕いてしまうか。選択肢は二つ。だがそれをする為には一機一機念入りに破壊しなければならぬ。だがこの時間稼ぎの間、それほどのエネルギーが持つか？

(不可能だ)

今回は予備動力は持つてきていない。臨海学校の戦いで使い、そして廃棄した物も多いため未だ余裕が無いのだ。そもそもそう簡単に用意出来る物でも無い。

ならば仲間の救出が終わり次第逃げるか？　だがそれも難しい。無人機達は明らかにこちらに標的を絞っている。もはや倒さない限りどこまでも追ってくるだろう。

(使うか?)

ちらり、と左腕を見る。その腕使えるあの武器なら敵を再生不可能なレベルまで破壊できるだろう。だがその為には仲間が安全圏に脱出し、尚且一瞬の隙を狙わなければならない。

『聞こえ——つすか。B9——』

丁度その時、C12からノイズ交じりの通信が届いた。

『聞こえる。そちらの状況は?』

『先行——は回収したつすよ。後は、撤退をする——つす』

その報告に安堵する。細かい所は聞こえなかったが、どうやら救出は終わり撤退を開始した様だ。ならば自分もアレが使える。

『C12。可能な限り早くこの場から離れてくれ』

『そちらはどうす——気つすか?』

『こいつらを片付けないとどこまでも追ってくる。一気に片付けるが巻き添えにする可能性がある』

『——了解つす。そちら——無理は——つすよ』

『了解』

おそらく地上からこちらの戦闘の様子を見ていたのだろう。意図を察したC12からは直ぐに返事が返ってきた。ならば後はC12達の撤退が済むまでこの無人機達を足止めするのみ。簡単ではないが時間稼ぎなら不可能では無い。戦っていて気づいたがこの無人機達の特性は厄介だが、その分攻撃や防御面が若干疎かだ。それに機動力もそれほど高くない。ならばその隙を突いて戦うのみ。

覚悟を決めると黒翼のスラスタを一気に全開で吹かす。急激なGをPICでコントロールし抑え、こちらを伺っていた無人機の胸部を鋭利な鉤爪で切り裂く。その結果を確認せずまま、その無人機を足

場にする様に蹴り方向転換。別の無人機に向け《アサルトテイル》を振り抜いた。同時に黒翼を半回転。残りの無人機目掛け、両腕の火器を一斉に発射し牽制する。そして直ぐにその場から離脱。再び無人機達から距離を取る。

一撃離脱。それが今の静司の戦法だ。時間を稼ぐとは言え。多勢に無勢では逆に追い込まれる可能性もある。ならばこちらから敵をかき乱すしかない。

一際大きい射撃音が響く。対空砲を装備した無人機だ。直前に気づき静司は再び回避行動を取る。だがその先には巨大な両腕をしならせる無人機の姿。

「ちいっ！」

咄嗟に両腕をクロスし防御態勢を取った。一瞬遅れて無人機の重一撃が当たり、黒翼ごと背後に飛ばされた。そしてそこにも待ち構える様な無人機の姿。

回避不能。静司はそのまま無人機の下へと突っ込んだ。だがおかしなことにその無人機は攻撃をしてこない。奇妙に思いつつ態勢を立て直そうとして振り返りそして目にした光景に静司の肌に鳥肌が立った。

『……』

無言の無人機。その両腕が分裂し、機械仕掛けのリスが幾重にも生まれる。そしてそのリスたちが黒翼の機体表面に群がっていた。そしてその無機質な牙が機体の装甲に突き立てられる。

喰おうとしている。その事実におぞましさを感じ静司は慌ててその身を振った。

「離せ！」

こちらを離さんと抱き着く様に組み付いてくる無人機を強引に蹴り飛ばす。しかし機体表面にはまだリスがおり、黒翼を取り込もうと牙を突き立てている。ガリガリガリ、と直ぐ傍から聞こえる音に静司は恐怖を感じた。このリスたちがもし装甲を突き破ったら、今度は生身の体に群がり食べるのではないかと。

「俺から——離れろっ！」

スラストー全開。機体を独楽の様に回転させそのリスたちを振り払う。だがそれでもリスたちは離れず、絶えず黒翼の装甲に牙を突き立てていた。

——右腕ライフル破損。機動不可

機体が警告を鳴らす。その右腕の内臓ライフルはリスに喰われ、そして既に取り込まれていた。そしてそのライフルを起点にリスたちは黒翼の右腕そのものと合体しようとしている。

「っ、解除——」

このままでは不味い。静司は黒翼の右腕の装甲の大部分を躊躇うことなく切り離れた。がくんつ、という反動と共に巨大な鉤爪とそこに内蔵されたライフルが落ちていく。それに向け左腕ガトリングガンを撃ちこみリスごと破壊した。後に残った右腕は既に武装は無く、表面を装甲が覆っているだけの状態だ。今度ここにリスが牙を立てれば直ぐに生身にたどり着くだろう。そしてリスはまだ取りついている。

「いい加減、しつこい！」

苛立ちながら身を振る静司。だが無人機はそんな静司にお構いなしに襲い掛かる。遠距離からの射撃を放ちつつ接近戦を仕掛けてきた。あれに当たればリスは剥せるだろうが結局ダメージを喰らってしまう。だがリスに喰い殺されるよりはマシだ。

静司は合えてその銃撃の中に飛び込んだ。途端に全身に衝撃と痛みが走る。装甲を貫いたビームが肌を焼き、銃弾の衝撃が肺を詰まらせる。油断すれば気を失いかねない痛みと衝撃の中で、リスたちが同じように破壊されていくのを確認するが否や、即座に真下へ飛び、攻撃の嵐から抜け出した。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

無人機達から距離を取った静司は肩で息をしつつ機体の状況を確認する。リスたちに喰われ、銃撃を受けた機体は各所が火を上げ不調を訴えている。だがまだ動けなくなったわけでは無い。それに肝心の切り札は最優先で守ってきたために無事だ。だがこれ以上は長く持たない。完全に敵の力を見誤っていた。時間稼ぎなら何とかなる

？ 馬鹿が俺は。性格どうであれ、篠ノ之束が天才である事は間違いない、その生み出す物は常に他社の想像を超えている。そんな事も忘れていたのかと。

不意に遠くの空が輝いた。視線を向ければ打ち上げられた閃光弾が光を撒き散らしながらゆっくりと落ちてきている所だった。あれはC12の合図。撤退が完了したのだろう。

「やっとか……い！」

ふら付く体に鞭を打ち身構える。これで準備は整った。後は実行するのみ。その為に途中から瞬時加速も使わず、R/Lブラストもセーブしていたのだ。生半可な攻撃では復活するであろう無人機達を一気に葬る為のエネルギーを残す為に。

残る勝利条件は二つ。可能な限り敵を一か所に集め、そして一瞬でも隙を作る事。

再度上空の無人機達が迫ってくる。それに対し静司も真正面から突っ込んだ。但し今回は敵の攻撃に当たる為では無い。両膝のワイヤーブレードを射出。動きの鈍い無人機を狙う。ブレードは幸い二本とも突き刺さり無人機が身じろぎした。それに構わず今度はそのワイヤーブレードを巻き取っていく。必然的に無人機達に突っ込む黒翼と巻き取られて黒翼に近づく無人機達は正面からぶつかった。

「捕まえたっ！」

既に黒翼の右腕には武装は無い。故に《アサルトテイル》と左腕で巻き取った無人機を掴み上げると一気に出力を上げた。左腕の武装《プラズマクロー》が起動し、超高熱のプラズマが掴み上げた無人機を焼く。同時に《アサルトテイル》にも出力を回し同じように焼く。そして動きが鈍くなった二機を地上へと叩き落した。

その隙に迫ってきた別の無人機のブレードでの一撃を左腕で受け、そして受け流す。バランスを崩したその無人機に巨大な足の踵落しを見舞い、同じく地上に叩き落した。

静司の突撃はまだ終わらない。左腕ガトリングガンを残弾を気にせず一気に全弾発射。狙ったのは取り込んだ対空砲を装備した無人機だ。その無人機の撃った砲撃とガトリングガンの銃撃が交差する。

静司は機体を捻る様に紙一重で回避したが、無人機は直に静司の銃撃を浴びた。機体各所に穴を開けボロ雑巾のようになった無人機が落下していく。

残り4機。

再びワイヤーブレードを射出する。但し今回は突き刺すのではなく、鞭の様にしならせて相手を打ち払うのが目的だ。黒翼の機体をする様に捻らせ、勢いを乗せたその鞭が無人機を打つ。態勢を崩したその無人機に追い打ちとばかりにもう一撃叩きこみ、地上へ落とす。同時に静司は残りの無人機達とすれ違い、上を取った。そして無人機達が反応するより先にR/Lブラストを叩きこむ。威力は無いが、相手を怯ませる事には成功し、無人機達はふらふらと若干の後退をした。

「《プラスマブラスト》set」

左腕を構え、命令を送る。命令を受諾した黒翼がその両翼を切り離した。そして切り離され両翼が合体し、鋼鉄の翼が形を変える。羽を折り畳むように変形していき、やがては長身の砲台と変わる。そこから5本の羽が飛び出し黒翼の前に展開。互いを光で繋ぎ光のリングとなった。

——砲身形成完了。収束機展開完了。チャージ開始。

「収束中止。広域射撃」

——広域射撃へ移行。収束機カット。チャージ率32%
リングを形成していた5本の羽が飛び散り、改めて収納される。黒翼の残る全エネルギーが左腕に集まっていき、重く唸り声のような音が響く。抑えきれないエネルギーが形成された砲台の周囲から漏れ、淡く光っていく。

こちらが何かよからぬことをしようとしていると気づいたのだろう。無人機達が一斉にその砲口を向け射撃を始めた。だが静司はそれに構わずチャージの完了を待つ。最低限の回避しかない為、機体の各所に攻撃が当たり、痛みと衝撃で気を失いそうになりつつもその砲台だけは最優先で守り続ける。

——チャージ率84% これ以上は戦闘行動に支障が出ます。

「構う、ものかつー！」

どの道これでやれなければ終わりだ。警告を無視してチャージを続ける。そして、

——チャージ完了。

遂にそれが完了した。きつ、と眼下、未だ空中に居る無人機と地上へ落とした無人機達に眼を向ける。

「プラズマ……プラスト……っー！」

ファイア
発射

かつて学園の地下で脱出路を造る為に使用した黒翼の切り札。超高出力の砲撃が極寒の夜空から、大地を包み込むように放たれた。

上空で放たれたその砲撃は地上へ向かうにつれ広がっていき、空中に居た無人機を、地上へ落下し再生を始めていた無人機を、そしてその部品とされつつあった施設を。全て纏めて巻き込み焼き尽くしていく。

「ぐっうううあああっー！」

あまりにもその威力による反動で黒翼の機体が軋む。その軋みはロボロの静司の体にダイレクトに響き傷を抉っていく。しかし止める事はなく静司はその砲撃を続けた。

どれくらい続いただろうか。次第にその砲撃は細くなっていき、そして消えていく。

——フェイズ終了。冷却開始。

ブシュツ、と砲台が排気を始めた。それを横目に見つつ静司は今しがた自分が行った攻撃の成果を確認する。

眼下の施設はもはや完全に廃墟と化していた。崩れ去った瓦礫の山のうちらこちらで炎が上がっており、他に動く物は無い。それは無人機も同じで、もはや影も形も無い。完全に焼き尽くしたのだろう。

「かはっ」

乾いた咳を漏らす。黒翼最大の威力を誇る武装《プラズマブラスト》だがこれは使用するエネルギーも尋常でなければ反動もそれだ。

静司は痛む体を押さえながらゆっくりと地上へと降りていった。

地上は空から見た以上に酷い状況だった。燃える炎。砕けた建造物。生きている者など誰も居ないであろう、その光景。無論静司とて理解してる。もしかしたあの施設にはまだ誰かが居たのかもしれない事は。だがそれを確認せず静司は焼き尽くした。その事に対して特別思う事は無い。今までもやって来たこともある事だ。

「……」

炎の熱風と、土地故の冷たい風。それが入り乱れ奇妙な感覚に襲われる。燃える炎。崩れた建造物。そして——倒れる5人の軀。

「っ、違うー！」

頭を振る。ここにそんな軀は無い。今自分が考えたのは別の物だ。だが何故だ？ 何故そんな事を考えてしまったのか？ 自分自身が分からない。

頭痛を覚え頭を押さえる。そんな時、背後でがたり、と音が聞こえた。

「誰だ!？」

頭痛を無視し振り返る。するとそこには少女が1人立っていた。その少女は濃い蒼色のISを身に纏い、その顔はバイザーで隠され見えない。だがこの姿には覚えがある。

「サイレント・ゼフィルス……！」

「……」

少女は何も言わず立っているのみ。しかし静司には訊きたいことが山ほどある。

「俺を呼んだのはお前か。一体何を考えている」

「……」

「答えろ！」

黒翼の左腕、未だに砲台を形成しているそれを向ける。

「お前は一体何者だ!？」

「……エム」

少女がゆつくりとした口調で答える。同時にISを解除した。

「何……?」

「私の名だろうか？ エムだと言った。もつとも本名では無いがな」

ISを解除した少女だが、顔のバイザーだけはそのまま口より上は見えない。しかしその唯一見える口元が吊り上った。

「知りたいのだろうか？ ならばこれで聞いてみる」

素晴らしい少女が何かを放る。からん、と音を立て静司の前に放られたのは一振りの刀だった。そして少女も別の刀を持ちゆつくりとその刀身を露わにする。

「何を——」

「行くぞ」

こちらにお構いなしに少女——エムは斬りかかってきた。そしてその刃で黒翼を切り飛ばす。

「なっ!?」

本来、生身の刀などISの敵では無い。しかし今の黒翼はエネルギーはほぼ無いに等しい。だがそれでも生身でISを切り飛ばすなど通常ではありえなかった。

「どうした。何も知らずに死ぬか？」

「くっ！」

それが挑発だと分かっているながらも静司は合えてそれに乗った。このまま質問をしても相手は答える気が無いのは明白。ならば力づくで聞き出すしかない。

再び斬りかかってきたエムを身を転がらせるようにして躲し、地面に放られていた刀を掴む。同時にこちらもISを解除した。既にエネルギーが殆ど無い状態では重荷にしかならないからだ。それに『川村静司の携帯』にメールを送ってきたことから、相手にはこちらの素性はばれている。ならば隠す必要は無い。

「そうだ、それでいい」

「っ！」

エムが振り下ろした刃を受ける。見た目とは裏腹に重い一撃に、体の傷が響き苦悶の表情を浮かべる静司を見てエムは笑った。

「どうした？ これで終わりか？」

「なめ、るな……っ！」

痛む体に鞭を打ち、刃を押し込む。体格差や怪我があるとはいえ、パワーそのものは静司の方が上だ。抑えきれないと判断したのかエムは直ぐに背後に引いた。

「……」

「……」

一瞬の静寂。そして、お互い一気に踏み込んだ。エムが繰り出すのは上段からの袈裟切り。対し静司は下からの逆袈裟。お互いの刃がぶつかり合い、甲高い音が響く。

(……?)

感じたのは奇妙な違和感。眉を潜める静司に対しエムは再度刃を振るい、静司もそれを受け止めていく。二合、三合と刃を打ちあうにつれ、その違和感は徐々に大きくなっていく。そしてその違和感に静司は気づいた。

「まさか……」

「ほう、気づいたか」

静司の呻きにエムは面白そうに笑う。対し静司は刀の切っ先を震えさせ、信じられ無い物を見る様にエムを見やる。

「お前の剣技は……」

「ふん」

震える静司に対し、エムは一気に距離を詰める。静司も慌ててそれを受けるが、その動きはぎこちない。

「なんで……お前がっ！」

「言っただろう。知りたければこれで聞けど」

防戦一方の静司に対しエムは息をつく間もなく連撃を浴びせる。それは刀だけにあらず、両手両足をも用いた猛攻。刃を受け止めたと思えば、鋭い蹴りが放たれ静司の傷を抉る。怯んだ隙にその身を回転させ回し蹴りを放つ。静司はそれを鞘で受け止め、自らも刃を振るうがその太刀筋は揺れておりエムには届かない。簡単に見切られてしまい躲され、逆に隙を作ってしまったエムの振るう刃が静司の体に傷をつけていく。

切り裂かれ血が溢れる傷を押さえながら静司は背後へ飛んだ。し

かしこれまでの戦いの痛みと失血により足元がふらつき膝をついてしまう。そしてそんな静司を見下ろす様にエムがゆつくりと近づいてくる。早く立ち上がらなければまた斬られてしまう。だが静司の頭の中は混乱の極みにあり、体がまともに動かなかった。

何故目の間のエムは自分の知る太刀筋——それも自分と同じ物を使うのか。何故エムを見る度に奇妙な気分になるのか。彼女は一体何なのか。ぐるぐると頭の中が疑問で埋め尽くされる。だが答えを知るエムは何も答えず刃を振るうのみ。

間近までやって来たエムが振り下ろした刃を身を転がす様にして躲し、その勢いで無理やり体を立たせる。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

エムは言った。知りたければこの手の刃で知れと。ならばお望み通り力づくで聞き出す。その為にはここで倒れる訳には行かないのだ。だから今だけは目の前の敵に集中しなければならない。

「ふん、やっとその気になったか」

ふん、と鼻を鳴らしエムも構える。その構えもやはり静司の知る物。静司と同じであり、そしてブリュンヒルデ——織斑千冬と同じ構え。

「……」

「……」

お互い無言で睨み合う。施設破壊による噴煙と炎の生み出す煙。雪が蒸発する水蒸気が相まって視界の悪い中、そのまま数秒の時が流れる。だが不意に、直ぐ近くの瓦礫が崩れ落ち、音を立て砕け散った。それが合図。

「っー」

「らあっー」

お互いに一気に踏み込み、そして刃を振り抜いた。

ギイツン、と金属がぶつかり合う音が響く。静司とエムはお互いに振り抜いた刀をぶつけ合い、至近距離で睨み合う。だがそれも一瞬の事だった。音は直ぐにばきり、と別の音へと変わり、そして宙に刀身が飛んだ。

「この程度か」

「……っ!？」

飛んだのは静司の刀。半ばから碎け、刀身を失った刀とその刀越しに失望したかのように呟くエムの姿が静司の目に写る。

「お前は私より、弱い」

その言葉を最後にエムは振り抜いた刀を翻し、静司を斬り伏せた。血が飛び散り、その返り血でエムのバイザーが赤く染まる。血と共に力も流れ出た静司が倒れていく。そして止めとばかりにエムが切っ先を静司の頭部に向け突き出した。

(死——)

霞む視界の中、刃が迫ってくる光景を見つめながら明確に死を意識した。肉体は動かず、精神は不安定。そんな今の静司にそれを避ける術は無い。ただ絶望してその刃が自分を貫くのを見つめて——

——おかえりなさい、せーじ

「っ!」

不意に脳裏に過つたのはここには居ない少女の姿。死を意識した時思い浮かべたのは、自分の帰りを待っている、こんな自分の傍に居たいと言ってくれた少女の姿。もしここで自分が貫かれれば、それは叶わずきつと彼女は泣くだろう。以前の自分ならいざ知らず、今の自分にもそれぐらいはわかる。そしてそれは——嫌だ。

かつ、と目を見開き迫る刃を睨む。肉体は動かなくとも、まだ残り少ないわずかなエネルギーで動く左腕を強引に振り上げ、その刃を掴んだ。

「何……っ!」

突然の行動にエムが身じろぎした。だが静司はお構いなしに刃を握りしめる左腕の力を全開まで上げる。果たして、刀は強力な握力によって碎け散った。

「っらあああああああ!」

最後の力を振り絞りエムに殴り掛かる。狙うはエムの顔面。顔を隠すバイザーを狙う。

だが、届かない。

エムは咄嗟に砕けた刀の残る刀身で静司の左腕を串刺し、そしてそのまま地面に叩き付ける様にして縫い付けた。一瞬の早業に静司は為す術も無く膝を折る。

「ぐ……かつ……」

「その腕、まさかISだったとはな」

串刺しにされた事での直接的な痛みは無い。しかし縫い付けられた時の衝撃と、これまでの戦いの傷の痛みにうめき声をあげてしまふ。そんな静司をエムは面白そうに口を歪めて見下ろす。勝者と敗者。それが決定的となる。

「お前は……お前は誰なんだ……っ！」

もはや為す術は無い。だがそれでも聞かなければならない。自分と同じ——織斑千冬と同じ太刀筋を持つこの少女の正体を。

こちらの問いに対してエムの答えは砕けた刀を突きつけることだった。

「刀で聞けと言った。だが貴様の刀はそれを知る前に砕けた。ならば何も言う事もあるまい」

パチパチと炎が瓦礫を焦がすし、雪も降り始めた夜空の下。見下ろすものと、見上げる物の視線が交差する。

「だが楽しませてくれた礼だ。この場では殺さん。精々あの女の眼から逃れる事だな」

それだけを告げるとエムは刀を捨てISを展開した。深い蒼色の機体が現れエムの身を包んでいく。

「待て……！」

「次は遊びで無くこれ¹で聞いてみる^s」

呼び止める静司の声も空しく、エムは夜空へと消えていった。

後に残された静司は虚ろな瞳で己の左腕とそこに突き刺さった刀を見つめる。

エムは何も教えないと言った。だが刀で打ち合ったその事事態が、1つの答えを示している。それはラウラのVTシステム暴走事件の時と同じでありつつ、尚且つそれ以上に洗練された力。そしてその力の正体。Valkyrie projectと呼ばれる禁忌の実験

による産物。つまりエムは――

「……俺はどうすればいい……姉さん」

誰も居ないその空間で漏らした言葉は縋る様な響きを持っていた。

『どうだった彼は？』

夜空を飛翔するエムは通信を繋いでいた。相手はカテーナであり、彼女の声には抑えきれには好奇心が含まれている。

「思っていたよりかは楽しめた。それにやはりあいつはV計画の被検体で間違いない」

『あらあらそうそう。なら手に入れた情報はやはり正確だったのねえ。それで貴方はどうしたの？』

「……殺してはいない。それにまだジャミングも効いているからあの女にばれる事もないだろう」

『あら、心配なの？』

「黙れ。あまりふざけた事を言うと殺すぞ」

『うふふ。ごめんなさいねえ』

食えない女だ。絶妙な距離感で自分と会話するこの女に対して、エムは同じ組織にいる人物、という以上の感情は持っていない。

『けど貴方の方が強かったという理由は何かしらねえ。それこそハード面かソフト面か。気になるわあ』

「ふん、私の方が強かった。ただそれだけだ」

『これは手厳しいわねえ』

「……これ以上無駄口を叩くつもりは無い」

そう言い捨てて通信を切った。そして夜空を駆けながら先ほど戦った男の事を思う。

「お前は誰だ、か……」

それはあの男が発した問い。それに対する答えは簡単だった。

一度は詰まらなれないと思った。『きょうだい』であるのにもかかわらず、動揺するばかりでこちらが一方的に痛めつけるのみ。最後には失望してそのまま殺そうかとも考えた。

だがその最後の最後で見せたあの気迫。こちらには届かなかったが死にももの狂いで抵抗したあの瞬間は心が躍った。ああ、やはりこいつは私と同じ存在だと。だから生かした。次にもっと楽しむために。もっと知るために。

「私はお前だ、川村静司」

口元が歪む。心が躍る。姉さん以外にももう一人、自分のきょうだいと呼べる者が居る事に歓喜した。

「だが私にも、そしてあの人にも届かない」

そうだ、足りない。川村静司は完全にはあの力を受け継いで居ない。だがそれではつまらない。それではここには届かない。

そこでふと、ある物を思いつく。直ぐに先ほどまで通信をしていた相手であるカテーナに繋ぐ。

『あらエム？ つけたり消したりは感心しないわよ？』

「知った事か。それより今から言う物を準備しろ」

『いきなりねえ。まあ、他でも無い貴方のお願いだもの。構わないわよ。それでなにかしらねえ？』

カテーナの問いにエムは笑みを深くして答えた。

「VTシステム——」

結局、学園に戻ったのは戦闘から三日たった後だった。怪我の治療と黒翼の修復の為に当初の予定を大幅にオーバーしてしまい、その分課長や由香里にも厳しい言葉を貰った。これは当然だ。元々は自分が志願したのだから。勿論二人も一方的に静司を責めたてる様な事はしていない。むしろ、エムと出会い不安定なこちらの心を繋ぎとめる為とも思えた。そんな二人に心配させた事を後ろめたく思いつつも、やはり静司の顔は晴れない。

時刻は夜の9時を過ぎている。正門の横にある守衛の詰所に寄り、入園許可を貰った静司は静かな学園を歩いていた。治療したと言ってもあれ程の傷が三日で直る訳も無く今は人工皮膚で隠している下では傷が痛む。その為にゆっくり重い足取りで歩く静司だが、ふと、

寮に向かう道の街灯の下に誰かが立っているのが見えた。暗がりでもよく見えないが、そのシルエツトから見知った少女だと気づく。

「本音……？」

数日ぶりに見た彼の顔は酷かった。

「本音……？」

こちらを見つめるなり無理やり取り繕うとしていたが無駄だ。既に自分は見ってしまったし、隠そうとしても分かってしまう。それだけ彼を見ていたのだから。

「待っててくれたのか？」

「うん。かちよーさんが、今日帰ってくるって言ってたから」

「そうか、ありがとう。それと待たせてしまったみたいで悪いな」

そうしてバツの悪そうな顔をする。違う、そんな顔を見たくて待っていた訳では無い。

「大丈夫だよ。それよりかわ……せーじも大丈夫？ また怪我してるね？」

「……バレたか」

静司が苦笑する。その笑みもどこか儂く見えて、胸が苦しくなる。だが今すぐには理由は聞かない。今のこんな状態の彼から聞くのは余りにも酷に思えたから。だから自分は出来るだけ笑顔で、だけど少し怒りつつ注意する。

「また無茶したんだね。体は大事にしなきゃ駄目だよ」

「面目ない」

身長はこちらが下なので少し見上げる形で叱る自分と、肅々と頭を下げる静司。何とも奇妙な光景なんだろうな、と少し笑いそうになっってしまう。

だがそれも見上げる形で覗き込んだ静司の瞳。そこに映る影を感じ取った途端に消え去った。今の静司は酷く弱々しい印象がある。自分より高い筈の体が、とても小さく思えた。

「せーじ」

「ん、なんだ？」

ちよいちよい、と手招きする様にして静司の身を屈ませる。そして首を傾げながらも素直に従った静司の頭を抱き込んだ。

「よしよし」

「ほ、本音？」

まるで子供をあやす様に抱き込んだ頭を撫でる。静司は慌てた様だが、こちらに離す気が無いと悟ると直ぐに大人しくなった。

「せーじにとつて、何かとっても大変な事があつたんだよね」

「……ああ」

「そつかく。今のせーじはとっても悩んでるもんね。だからもし、何か力になれる事があれば、いつでも言つてね」

これが今の精一杯。無理に聞き出すことはしない。だけど心配する事くらいは良いだろう。強いようで、弱い。そんな彼だから。

「だから今だけはおねーちゃんな本音さんなのです」

「……すまない」

「前も言つた気もするけど違うよせーじ。私が聞きたいのはそれじゃないかな」

「そう……か。そうだな。理由も後でちゃんと話す……いや、聞いてほしい、君に」

ぐつ、と抱き込んでいた静司の頭がより深く、自分の胸に沈み込む。

「だから今だけは、ちよつとだけこのままで。それと……ただいま」

「うん。良くできました」

きつと重い話になるのだろう。それでも話してくれると言つた事を嬉しく感じながら、本音は深く頷いた。

57. 炎の中で

黒翼と無人機達の戦闘から少し後の事。

パチパチと炎が燃え火の粉が目の前を舞い上がっていく。空から降る白い雪と地上からが昇る赤い火の粉。それらの光景はどこか幻想的であり、同時に物悲しくもある。そんな地上を篠ノ之束はゆつくりと歩いていった。

ここはつい先程まで戦闘が行われていた場所。無人機と黒翼、そしてサイレント・ゼフィルスが居た場所だ。その戦場跡はまさに廃墟。まともな形で残っている者はごくわずかであり、殆どの物が倒壊し、燃え、場合によっては融解してしまっていた。そんな地獄とも呼べる場所を束は淡々と歩く。

またしても無人機がやられた。

腹立たしいがこれは事実だ。あの黒いISが撃った最後の砲撃。その威力は凄まじく、全ての無人機は焼き尽くされてしまった。今までならその事実を怒り狂っていたかもしれない。しかし皮肉な事に、その黒いIS異常なまでの威力の砲撃を見て以来、束は逆に冷静になれていた。

思案しながら歩を進める束の周りでは機械のリスが走り回っている。それらはこの戦場跡に何か手がかりとなる痕跡が残されていないか捜索を行っている。もうじきこの場所へこの国の調査隊が訪れる。今は原因不明の機械トラブル（姉作）で到着が遅れているが、それも永遠では無いのだ。それまでに必要な情報は回収しておきたい。

「文字通り跡形もないね……」

あの黒いISに通常の無人機では太刀打ちできない。それは分かっていた。だからこそ今回は少々特殊な無人機を用意したのだ。

束は馬鹿では無い。故にサイレント・ゼフィルスの狙いおぼろげにだが察していた。まるで己の存在を主張するかの如く姿を現したサイレント・ゼフィルス。十中八九罫かそれに準じた何か。ではそれは何か？ 自分を呼び寄せる為だけか？ 違う。

半ば直感染みたまものだったが、件の黒いISも出てくるのではない

かと予想を付けた。それ故に、通常の無人機ではなく、より効果的な無人機を送ったのだ。その無人機こそ《アーキタイプ・ゴレム》。吸収と再生を行う特殊タイプであり、あの黒いISの天敵と成り得るもの。黒いISは攻撃力と運動性能は高いがそれに比例してエネルギー効率が悪い。加えてシールドを持たない故に、長期戦には不向き。これまでの戦いの中で束はそう分析していた。そしてそれに対抗するべく用意したのがこのアーキタイプ。この無人機なら粉々に砕くか、焼き尽くす程の火力が無ければ、周囲の物を取り込みつつ再生を繰り返す。無限とまではいかないが、あの黒いISのエネルギーが尽きるには十分な程に。

勿論、黒いISが来ない可能性もあった。むしろその可能性の方が高かった。だがそれならそれで良い。サイレント・ゼフィルスの仕掛けた罠の中に堂々と送り込み瓦解させる。

だが結果は束の想像よりも、はるかに斜め上だった。

「無人機の限界って事かな」

ISは人間が扱う事でその進化を發揮する。それは作った束本人が最もよく知る所だ。

確かに無人機は軍隊としては優秀かも知れない。命令通りに与えられた任務をこなす、痛みもためらいもない自律兵器で有る為だ。だがそもそもISは通常の兵器とは訳が違う。代表的な特徴は形態移行ワン・オフ・アビリティと単一仕様能力だ。

搭乗者に合った形をコアが判断しその形を最適化する初期移行フオーマット。そして搭乗者と機体の経験を基に更なる最適化と進化を行う二次移行セカンドシフトと単一仕様能力の発現。それらを無人機は行う事が出来ない。何故なら適合する相手であり、その情報の下となる登場者が居ないからだ。故に無人機には単一仕様能力も無い。

このシステムには例外もある。それは白式と紅椿だ。束によって最初から二人の為にだけに調整されたこの二機は初めから単一仕様能力を持っている。最も、白式に関しては『単一仕様能力が最初から発現する』様に調整したのは確かだが、それが《零落白夜》になるのは予想外だったが。

つまる所、有人機と無人機の違いはそこなのだ。個性が固定され、あくまで機械的な判断を下す無人機。個性に溢れ、それが更なる進化の切っ掛けともなる有人機。最初は無人機が優れていてもやがては有人機の方が強力になる。それがISの自己進化と言う物。そして黒いISはもはや無人機では相手に出来ない相手なのかもしれない。最初から強力な機体を差し向けると言う手段もある。だがその為のアーキタイプも結局は敗れた。ならばもっと強力な物と思う反面、別の手段も視野に入れなくてはならない。そしてその別の手段には一つだけ心当たりがある。

「さて、どうしようかな……?」

不意に前方に奇妙なものが見えた。瓦礫と炎ばかりのこの場所に空いた黒い空洞——数メートルに渡る穴だ。他の場所にも穴は幾つもあるが、その穴だけは奇妙なまでに窪んでいた。

「ふむっ。」

リスに調査の命令を送る。機械のリスの数匹がその穴へと降りていき解析を始めた。その結果が束の正面に投影されていく。

「地下室……にしては妙に頑丈だね。他の部分は破壊されてるのにこだけ妙に深くて頑丈。さて、何があったのかな?」

この施設に行われている事は事前に確認している。搭乗者の精神に作用するISシステムの開発。その実験場等々。イメージインターフェイスにおけるそのイメージをより強固にするための人体実験。そんな所だった。そんな施設の異常に強固にされた地下室には一体何があったのか?

「……生体反応?」

リス達から送られてきた情報にまさか、と思う。周囲はこの惨状で生存者はゼロだと思っていたのだ。興味が湧いて束もその穴の淵から中を覗いた。

炎と瓦礫が入り乱れる中、穴の一番奥に黒い壁の様な物が見える。その壁は崩れ一部は融解しており、その中も凄惨たる状況だ。だがそこに一つ、動く物があった。生存者だ。おそらく地下深かった事。そしてその生存者のいる部屋の壁が異様に強固だった為だろう。奇跡

的にも命を繋いだらしい。

「……………」

新たな指示を飛ばすと、束の背後の空間が歪み光学迷彩を切った無人機が姿を現した。無人機は穴へと降下すると壁の砕けた場所から室内に侵入し、その生存者を外へと連れ出す。

無人機に掴まれ現れたのは少女だった。歳は10代前半ほど背は低く華奢に見える。目を引くのは腰まで届く程の銀髪だがそれは血と煤でくすんで見える。そしてそれは体も同じ。からだのあちこちに傷と火傷を負ったボロボロの状態だ。意識は無い様だが辛うじて息はしている。そんな少女を無人機は束の正面に連れてくる。

「ふーん。この施設の実験体ってどこかな？」

対して興味も無さ気に呟く束だが、不意に不可解な事が起きた。少女を掴んでいた無人機が不意にその体を揺らしたのだ。そして目に当たる部分が不規則に点滅している。

——警告。外部からの干渉によりシステムの一部をロックします。

「おや？」

外部からの干渉。その報告に首を傾げ詳細な情報呼び出す。

「干渉は^{目の前の少女}これから……………？ まさか」

情報をスクロールしていくと予想していた答えがそこにあった。

「IS適性……………S。それだけじゃなく、触れただけでコアに干渉する程の適合率」

適性Sの人間などこの世界に数える程度しかない。それこそ千冬を初めとした数人の『ヴァルキュリー』と呼ばれる者達。束自身がコアに干渉して適性を変えた筈位だ。だがここに新たな適性Sが居る。それも、触れただけで無人機に干渉する程の力を持った者が。通常ならそんな事はない。だがこの施設ではイメージインターフェイスの研究をしていたという。その研究過程で強化されたこの少女の『何か』が、無人機のコアに反応したのかもしれない。これは面白い。

「……………」

少女がうつすらと眼を開く。その瞳にはもはや光は無く、今にも消

えそうな程に儂い。そんな少女はゆつくりと首を巡らし、そして束の方を見た。

「……………てんしさま？」

一体何をどう勘違いしたのか。それとも錯乱していたのかはわからない。だがこの地獄の様な光景の中で、一切の汚れも無く悠然と立つ束の姿を見て少女は小さく呟いた。そしてその反応に束は気を良くした。

「ふーん、天使か。それは新鮮な反応だね！ 今度から羽を付けてみようか？」

ふんふん、と楽しそうに笑う。ここ最近生意気な連中黒いISやその他諸々が多く苛つく事ばかりであった為か、目の前の少女の反応は心地よい物だった。

「よし、久々に気分が良い事だし君を助けてあげるとしよう」

笑顔で無人機に命令を下し、少女を抱きかかえた無人機を連れて歩き出す。

「たす……………ける……………？」

「うん、そうだよ。それに君に少し興味が湧いたからね！ それに君ならあれを使いこなせるかもしれないから私としても一石二鳥？

けどこの一石二鳥って無理があるよね。石一つで鳥二匹仕留めるよりも、どばばーとミサイルで叩き落とす方が楽だよね！」

少女は束の言っている意味が分からないのか反応は無い。しかし束は気にすることなく続ける。

「ま、それは良いとして君には面白い物を用意してあげよう。君ならいい感じに使える気がするんだよ。これはもうビビッ、と来たからね。わ、私ってNTみたいだね。ならこの場合はキピーンって感じかな？」

リスたちが集まってくる。もはや必要な調査は終えた。収穫もあった。ならばここに長居する必要は無い。

「こんな事になって君は世界を恨むかな？ この世を恨むかな？ それとも自分の不幸を恨むかな？ その辺の答え次第だけど私の中ではもう答えが出てるんだよね」

ふわり、と振り返り少女に笑いかける。それは何かを企んでいる様

な裏のある笑顔。しかし瀕死の少女にとっては救いの主となる顔。
「君には鍵になってもらうよ。真っ白な式に込められた力を解く、黒い鍵にね！」

「静司の誕生日って何時？」

時刻は夕方7時半。IS学園の寮での食堂でシャルロットが静司に尋ねていた。

事の始まりは一夏の誕生日についてだった。話の流れで誕生日の話になり、そして一夏の誕生日がもうすぐだと言う事が知れた。そしてそれを今まで知らなかったセシリアとラウラ。知っていてあえて黙っていた箒と鈴がわいわいと騒ぎ出しのが切っ掛けだ。

「ああ、俺は2月だからまだまだ先だな」

「そうなんだ。2月の何日？」

「22だよ。そういうシャルロット達は何時なんだ？」

3人もそれぞれの誕生日を教え合う。因みに静司の誕生日は正確では無い。そもそも誕生日どころか正確な年齢も分からないのだ。故に今は課長と社長——つまり川村夫妻に拾われた日を誕生日と言う事になっている。『川村静司』が生まれた日という意味では間違っていない筈だ。

「とにかく一夏さん！ 9月27日は予定を空けておいて下さいな！」

「お、おおう。一応中学の時の友達の家で祝ってくれるらしいから……皆も来るか？」

「もちろん！」

どうやら一夏の誕生日である9月27日に一夏の家に集まる事が決定したらしい。護衛する静司としても、外でじっと見張っているよりは直ぐ傍に居た方が色々楽なので助かる。

「あれ？ けど9月27日って……」

「そういえばアレの日だね」

鈴がふと思い出しシャルロットが補足する。アレとは『キャノン

ボール・ファスト』と呼ばれるISでの高速バトルレースである。市の特別イベントとして市のアリーナで行われるそのイベントにIS学園の生徒達も参加することになるのだ。とは言っても専用機持ちが有利な為、専用機部門と訓練機部門に分けられるのだが。

「けど訓練機部門って言っても企業の支援を受けている生徒はまた別枠なんだよね？」

「ああそうだ。静司の他にも企業所属の生徒は専用機こそ無いにして、特殊装備のテストを兼ねて使用が認められている。その場合は専用機部門に混ざる事もあるが……静司の所はどうなのだ？」

ラウラが興味ありげに問うが静司は苦笑して首を振った。

「うちにあるのは例の《メテオライン》だけであんなもんまともに使えないよ。だから俺は通常通り訓練機部門で頑張るさ」

「そうか、それは残念だ」

《メテオライン》とはK・アドヴァンス社製の超高速機動パッケージだ。しかし悪ふざけが過ぎたのか扱いが非常に難しく、まともに扱える人間は数少ない。以前ラウラはドイツの部隊で一基購入したと言っていたから気になったのだろう。

「ああ。だけでもしかしたらシャルロットに使ってもらう事になるかも」

「え……!？」

隣で話を聞いていたシャルロットが少し青ざめた。

「折角デュノア社と提携しているんだからここぞ好機とばかりに任せられるかもな」

「あ、あははは。アレを使うのはちよつとキツイなあ……」

「そんなにすごいのかそれ」

引き攣った笑みを浮かべるシャルロットの様子に一夏も冷や汗を流す。

「おкуいいいねーしやるるん。是非つけよう。そして敵を蹴散らすのだー」

「ほ、本音も適当なこと言わないで。あれ本当にすごいんだから」

一人ノリノリの本音にシャルロットも苦笑しつつ窘める。

「ま、方法は人それぞれでしょうし、どうせ来週からはキャノンボール・ファストに備えた高機動調整の授業もあるわ。その時にそれぞれのお手並み拝見と行きましょう」

鈴がそう締めくくり、各々は別の話題に移って行った。

『キャノンボール・ファストか。B9お前は どう見る?』

「かなりの高確率で何かが起きると思います」

寮の屋上。人もあまり寄り付かないそこで静司は通信機越しに課長と話していた。

『ま、これまでがこれまでだ。毎度毎度イベントの度に襲撃されてはな』

「問題は誰か来るか、という点でしょうね」

篠ノ之束か、それとも他の連中——亡国機業の連中か。

先の襲撃事件。その犯人と目される組織の名が亡国機業だ。この情報は更識家からもたらされたものである。組織の名自体は静司達EXISTも知っていたが、更識家はもう少し詳しく知っていたらしく、現れた犯人達の姿からそう結論付けていた。

「しかし連中の目的は何です? 篠ノ之束は一夏や篠ノ之絡みだとして、テロ組織がわざわざIS学園まで出張る理由は」

『それこそ織斑一夏や篠ノ之箒だろう。それらの持つISもだが、あれは手に入ればかなりの脅威と成り得る』

「それはわかります。しかしそれにしては先日の学園祭襲撃の時はやけにあっさり引き下がった気もしたので」

『ふむ……それを言ったらそもそもなんであんなタイミングで仕掛けたのかも謎だな。織斑一夏を狙うのならもつと別の機会もあった筈だ。それこそ彼が外出した時にでも狙えばいい』

「それをしなかった。つまり別の目的があった……?」

『可能性はある。だが今となってはそれもわからん。今できるのはこれから起きるであろう事に対してどうするかだ』

現れるのが篠ノ之束の無人機であろうが、亡国機業であろうが関係

ない。全て撃退し対象を護るのが静司の役目だ。

『今回は最初から何かが起きると想定して動く。更識家とも調整して上手く嵌めろ』

「罠、という事ですか。しかし相手もそれを承知でしょうね」

『それでもだ。だが別の懸念もある。例のIS委員会の決定の件だ』

IS委員会の決定。それはIS学園絡みでの行事の際に、委員会により招集された部隊が一時的に学園の警備に付くと言う物。一見、IS学園の為の行動にも見えるが本当の所は違う。篠ノ之束。亡国機業。そして静司の黒翼。それらが現れる学園を監視し、あわよくば捕獲するのが目的だろう。それに一夏と箒の第四世代機の調査も含まれている筈だ。

『気を付けろよ。彼らの目的にはお前も含まれているんだ。掴まりでもしたら全てが終わる。お前も、俺も』

「分かっています。もしもの時は切り捨ててくれて構いません」

『滅多な事を言うな。そうなれば意地でも助け出す』

「……………」

『…………お前がそうナーバスな気分になる理由は分かる。先のサイレント・ゼフィルスの件だろう。引きずるな、とは言わない。だがもう少し明るい顔をしろ。じゃないと嬢ちゃん達も暗くなる』

「…………そうですね」

先日のサイレント・ゼフィルスとの邂逅とその場で起きた事は本音には全て話した。彼女は黙って聞いてくれ、最後にまた頭を撫でられた。別に何かが解決したわけでは無い。だがどこかに吐きだしたかった。自分のこのごちゃごちゃに絡まり合った感情を。だがお蔭で少しは楽になれた。我ながら現金な物だと思う。

シャルロットとてそうだ。彼女は何も知らない。だがこちらの様子がおかしい事に直ぐに気づき、氣遣われた。その事に申し訳なさを感じてしまう。自分は隠し事をしているのに、それを分かっているが支えようとしてくれる彼女の心が、とてもありがたかった。

『もうお前の存在は色々なところで大きくなりつつある。だから意地でも生に縋りつけ。それがお前の姉達の願いでもあり我々の願いでも

あり彼女達や友人たちの願いでもある』

「……ありがとうございます」

小さく風が吹いた。そのせいで先日の傷が少し痛む。とてもではないが直ぐに完治する怪我では無いので今も治療中だ。学園には『新装備のテスト中にミスをした』という事で報告しており訓練もここ数日は見学だ。

『痛むのか？　　とうか薬は飲んだのか』

「忘れてました。これから飲みに行きますよ」

その後も二三、言葉を交わすと通信を終える。そして静司も部屋に戻る事にする。その途中で寮の自販機コーナーによるとそこには先客が居た。

「ん、セシリアか」

「あら川村さん」

何かを考えていたのか、セシリアは缶コーヒー片手に何かの書類と睨めっこをしていた。

「悪い、何か邪魔したみたいだな」

「気になさらず。そもそもここは公共の場ですか。それにこれももう何度も読んだ物ですし」

そう言つてセシリアが書類をしまう。その際に一蹴見えた文字には『BT兵器の運用に関する——』といった文字が一瞬だけ見えた。その事から何となくだが静司は彼女が悩んでいた事に予想が付いた。(偏向射撃……あのサイレント・ゼフィルスがやっていたあれか)

公式上、BT兵器に対する適性はセシリアが最も高いとされている。それなのに彼女が出来ない偏向射撃をあのサイレント・ゼフィルスはやってのけた。それが彼女の心に影を落としているのだろう。だが今この場で静司がそれを言っても不自然な為、あえて何も気づかない振りをする。

「川村さんはどうしたのですか？」

「いや、俺は単に水を買いに来たただけだ。さっき薬飲み忘れてたからな」

そう言つてペットボトルの水を購入するとポケットから薬の入っ

たケースを取りだす。少し考えた末に、適当に5、6錠取り出した静司にセシリアはぎよつ、とした様子を睨みつけた。

「あの、少し多すぎではありませんか？」

「ん？ ああ、そうかもな。けどまあさつき飲み忘れたしその分含めて多めに飲んでおけば問題ないよ」

「いえ、薬とはそういう飲み方をしては……ひっ！」

不意にセシリアの顔が引き攣った。静司はそれに首を傾げつつも薬を口に放り込もうとして——その両肩が背後からガシィィイツ、と掴まれ動きを止める。

「そういえば夕食の時薬飲んで無かったなと思ったら……」

「かわむーはいけない子だね〜」

「……………」

ギギギ、と壊れたロボの様な動作で恐る恐る振り返るとそこには二人の少女が居た。

一人は金髪の少女シャルロット。もう一人は小柄で何故か着ぐるみの様な服を着ている本音。二人は笑顔だ。笑顔なのに何故だろう？ シャルロットの背後に唸り声を上げる子犬が見える気がするのは。本音から久方ぶりに荒ぶる小動物のオーラを感じるの。

「これはちよつとお説教かな？」

「おしおきだね〜」

怖い。怖くない様で怖い。いややっぱ怖い。いやもうなんかごめんなさい？

いや、確かに自分が悪いのだ。数日休んだと思ったら怪我をして帰ってきて以来、彼女達が若干過保護気味になっている気はしていた。それなのに薬を飲み忘れた挙句、適当に摂取しようとした自分が全面的に悪い。悪いのだが。

「と言う事で静司、ちよつとあっち行こうか」

「れんこ〜」

ダラダラと冷や汗を流す静司を二人はどこかへと引きずって行った。

「……………平和ですわね」

取り残されたセシリアの眩きは誰にも聞かれることは無かった。

北アメリカ大陸北西南部。第16国防戦略拠点。通称『地図にない基地』。その一室でイーリス・コーリングは不機嫌そうに目の前の書類を眺めていた。

「胸糞悪いな」

「貴方がそう言いたい気持ちはわかるわ」

同意の声はナターシャ・ファイルス。艶やかな金髪を持つ彼女も同じ内容の書類について不快感を表していた。

二人が読んでいる書類はIS委員会からの通達。それは今度行われるIS学園生徒が参加するキャンノンボール・ファストの警備情報だ。IS学園の教師や更識家の他にも、今回はIS委員会召集の下の部隊が編成され警備につく事になる。そして二人が不快感を表しているのはその中の項目の一つ。

『正体不明の機体のいずれかを捕獲した場合、国際IS条約に基づきその情報は各国で共有する物とする』だによ。完全にこれが目的じゃねえか」

「学園の警備なんて二の次って事ね。事実、対篠ノ之博士の兵器、対黒いISといった形で作戦が複数組まれているわ。捕獲する気満々よ、これは」

確かに作戦を組むこと自体は間違っていない。いずれも強力な力を持つ正体不明の兵器だ。それらを野放しにするのは危険である。しかし学園生の警備に関しては雀の涙とも言える手間しかかけず、それ以外の事に全力を注ぐその姿勢には流石に不快感がある。まるで子供たちの事などどうでも良いと思っっている様なのだ。

「確かに篠ノ之束のクソ兵器に対してはある程度許容してやる。あれは確かに危険だからな。だがあの黒いISが今まで直接的に学園生に被害を出したことは無いだろ？ それなのにこれはなんだよ。黒いISの方が優先順位が高いと来た」

「篠ノ之博士の兵器に関しては謎のISという認識しかないから仕方

ないかもしれないわ。アレに人が乗っていない事は一部にしか知られていない。そう考えれば、単機でそれらを相手取る黒い I S の方を優先としたのでしょいうね。危険危険と言うけれど一番の目的は自分達の利益よ」

「はっ、これだから大人の判断って奴は好かないんだよ」

「あなたも大人でしょ。臨海学校のときだって従ったじゃない」

「まあ、な。なんだかんだ言っても私は自分の国が好きだからな。国の不利益になる事は進んでしないさ。納得はしてないけどな。お前も同じだろ、ナタル？」

「当然よ。少なくともあの黒い I S は恩人なのだから良い気はしないわ」

だがここで二人がいくら愚痴ろうとも決定した事は覆せない。今回は二人とも召集はされていないが、もし次にそういう機会があった時冷静にその命令に従えるかは正直分からなかった。そんなあまり気分の良くない雰囲気にする部屋に突然振動と遠くからの爆発音が響いた。

「っなんだ!」

「敵襲!」

驚き立ち上がる二人に続いて基地内にブザーが鳴り響く。

『所属不明機の基地内への侵入を確認！ 現在 6 | A エリアを侵攻中！』

「当たり前だぜナタル！ くそっ、どこの馬鹿だ!」

「どうしてここが……それよりも狙いはまさか……!」

この基地には銀の福音がある。臨海学校の事件以来、表向きには凍結されたとしているが実際は違う。一度初期化こそされてしまったものも、新たな機体を得て今復活を待つ新生銀の福音が。もしかしたらそれを狙っているのかもしれない。

「どちらにしろふざけた馬鹿を捕まえる！ ナタルは別の機体で出る、福音はまだ未完成なんだろ。私はこのまま行くぜ!」

「ええ、任せるわイーリス。気を付けて!」

二人は頷きあうとそれぞれの役目を果たす為に部屋を飛び出して

行った。

58. 反逆の子

『アメリカ軍の基地が?』

「ああ、襲撃を受けたらしい」

EXISの通信室。皆から課長と呼ばれる彼は息子であり部下でもある静司と話していた。

『確かに気になる情報ではありませんが……』

通信越しの静司はなぜその情報をわざわざ自分に告げたのかわからない様だった。確かに、事件ではあるがIS学園で仕事に付いている静司にとっては直接関係ある物では無い。

「その襲撃の犯人だが、どうもサイレント・ゼフィルスの様だ」

『……!』

通信越しでも静司が息を飲むのが分かった。だがあえてそれを無視して課長は進める。

「襲撃されたのは米軍の秘密基地。銀シルバリオ・ゴスベルの福音が保管されている場所だ。襲撃者の目的はそれだったようだが幸い奪われることなく撃退したらしい。ま、そもそも秘密にしている基地に襲撃を受けた時点で米軍としては大打撃だろうがな」

因みにその秘密な筈の基地の情報を何故EXISTが知っているかは簡単だ。アメリカ政府・軍にもEXISTのビジネスパートナーは居る。そこから手に入れた情報である。

「奴らはISを集めている。その最終的な目標は不明にしてもそれだけは覚えて置け」

『……IS学園が狙われる可能性も十分にある、と言う事ですね』

「そうだ。前は織斑一夏が狙われたが、別にISが欲しいという理由だけならそれこそ訓練機が狙われてもおかしくない。そして連中にそれを渡すような事だけは避けたい」

『わかっています。今度こそ……必ず捕らえます』

ふむ、と課長は顎にてをやり考える。通信越しの静司の雰囲気はどこか危うい物に感じたのだ。そうなる事は予想していたがやはり今の状態はうまくない。

「ところでだ、B9」

『なんででしょうか。他にも何か問題が?』

「いや、先に聞いておきたいんだが——孫は何時できるんだ?」
げほっ、と隣に居たオペレーター女性の噴きだした。

「いやー昨日孫の名前で妻と喧嘩してな。私は男の子を想定してたのだが妻は女の子でな。どちらが正しいかで夜な夜な3時間にわたるファイトを少々。最終的に両方作ってもらおうという事で解決したんだが——進捗はどうなんだ?」

『アホか!? 用が無いならもう切りますよ! それではっ!』

がしやん、という音と共に途切れた通信機を見つめながら課長は首を捻る。

「む? 何が拙かったんだ?」

「その芸風やめないといつか本気でB9がキレますよ」

「何を言うか。パパとして大事なことだぞ。名前も由香里と決めなきゃならんしなあ」

「何言ってるんですか。そんなの社内投票で決めるに決まってるじゃないですか」

何をほざいてるんだこのおっさんは? と冷たい眼差しで見つめる女性。

「……最近俺の知らないところで色々進んでて社内が怖いなあ」

「はいはい怖いですね。どうでもいいからとつとと仕事してください。それと息子を励ましたいのならもうちよつと手段を変えて下さい」

「む、バレバレか」

「そういう事です。まあ今すぐどうこう出来る事じゃないんです。なので私たちの出来る事をやりましょう」

「まあそれしかないな。じゃあ——」

「ということで焼きそばパン買ってきてください」

「……」

月曜日早朝。IS学園アリーナ。

ここでは数人の生徒が自主練を行っていた。ISの数が限られている為に普段の授業だけでは足りないと感じる生徒達が思い思いの訓練を行っている。そしてその一角で二つの機体が模擬戦を行っていた。

目前を青い光線が通り過ぎてゆく。

静司は打鉄を右に左に揺らしながら地面すれすれを飛びそれらを躲していく。だが光線は雨の様に幾重も放たれ静司を追いかけていく。

「ちいー！」

このままでは埒が明かない。静司はオプションで装備していたアサルトライフルを空に居る敵に向け引き金を引いた。同時に打鉄の最大の特徴とも呼べる近接ブレードを地面に突き刺し無理やりブレーキをかける。無理な行動に機体の一部が悲鳴を上げるがお構いなしに強引に速度をゼロにすると、全くの逆方向へ方向転換した。

ライフルの牽制と突然の方向展開に敵が戸惑い光線の雨が一瞬止まる。それを好機と見て機体のスラスタを一気に全開。上空にいる敵目掛けて突撃を敢行した。だが敵も馬鹿では無い。直ぐに気を取り直すと己目掛けて突っ込んでくる静司に銃口を向ける。同時に周囲に展開されていたビット兵器も全て静司の打鉄に照準を合わせた。

「これでっー！」

決める、と言わんばかりに金髪の少女——セシリアが吠え彼女のIS、ブルー・ティアーズの持つ武器の全ての銃口に光が灯る。対し静司は、それが分かっているながらもセシリアから——否、ブルー・ティアーズから目を逸らさなかった。

（ブルー・ティアーズ。サイレント・ゼフィルスと同系統の機体……）

例えば搭乗者が違ってもその似通った特徴からどうしても思い浮かべてしまう。その存在はここ最近静司の心を大きく占めていた。Vプロジェクトについても何かを知っている素振りがあり、それどころか自分と同じ……いや、それ以上の動きをする謎の女。

目的は一体何なのか。そもそも何者であり、自分の過去とどう関わっ

てくるのか。一人で考えていても解決しないのは分かっている。だがそれでも頭から離れない。

「終わりですわ!」

ブルー・ティアーズとそのビット達から一斉にレーザーが放たれる。もしこれに当たれば打鉄のシールドエネルギーは尽き、勝負はつくだろう。そしてそれはなんらおかしい事では無い。川村静司と打鉄がセシリア・オルコットとブルー・ティアーズに負けた、という結果は表向きでは普通なのだ。だが、

——お前は私より、弱い

「っ!」

つい先日の事が思い出される。ISでなく生身の戦いであったが、自分を圧倒した少女の言葉を。もしあれがIS戦だったらどうなっていたのか? 分からない。だが一つはつきりしているのは目の前の機体はあのサイレント・ゼフィルスに比べれば劣っていると言う事。言うならば、この打鉄で圧勝する位の力が無ければいくら黒翼を使おうともサイレント・ゼフィルスには勝てないのではないか?

これは己の任務を考えれば愚かな考えだ。しかしどうしてもサイレント・ゼフィルスの姿を連想してしまう相手故に考えてしまう。そして静司は行動を起こしてしまった。

幾重も迫るレーザーの雨。静司はそれらを機体を捻り、物理シールドで防ぎ、更には近接ブレードで受け流した。

「なっ!」

セシリアから見れば当たった筈の攻撃が全て通り抜けた様に見える。それほどの高速でその動きを行った静司と打鉄がセシリアの目前に迫りブレードを振りかぶる。

「そう上手くはいかなくてよ!」

ブルー・ティアーズ腰部から広がるスカート状の装甲。その突起が外れ動き出す。レーザーを放つビットと違うミサイル型が二基、静司に迫る。一方静司は己に迫るミサイル型ビット兵器が回避不能と

悟るとブレードを一閃。その二基を切り裂いた。既に起動してたミサイルは二つに断たれつつも光を放ち大きな爆発を引き起こす。白い閃光と轟音が響き渡り、静司もその炎の中に消えていく。奇しくもこの展開はかつて一夏とセシリアのクラス代表決定戦に酷似していた。それ故にセシリアは慢心せず、近接武器《インターセプター》を同時に呼び出し構えた。

「……………来ましたわね！」

セシリアの予測は当たる。炎と煙を引き裂いて静司の打鉄が姿を現した。だがその手にはブレードもライフルも無く、物理シールドもどこかへと消えている。爆発の衝撃で弾き飛ばされたのだ。

「今度こそ終わりですわ」

セシリアは近接戦は得意では無い。だが何も訓練していない訳でも無い。故に武器を失った打鉄相手なら問題ない。そう考え迫ってくる静司を見つめ返し、そしてその肩を震わせた。

「……………っ!？」

爆炎の中から飛び出した静司。その顔は無表情であるが、どこか昏い光を放つ目でこちらを見ていた。そして同時に浴びせられる背筋の凍る感覚。体が縛り付けられ恐怖に身が竦む。打鉄に武器は無い。しかし今このまま接近を許したら——殺される。そんな感覚に襲われた。

「あ、あああああああ！」

それはもはや絶叫に近かった。セシリアはその恐怖を振り払うかの様に我武者羅に《インターセプター》を振るう。それはこちらの首を掴みとろうと伸ばされた静司の腕を弾く事に成功した。だが静司はその弾き飛ばされた衝撃を利用し、くるり、と回転すると回し蹴りを放つ。放たれたその蹴りは腕に当たり、《インターセプター》を取り落してしまう。

（あ、ああ…………）

武器を失った事でセシリアの中で絶望感が増していく。クラスメイトとの唯の模擬戦の筈であるのに関わらず、全てが終わったかのような感覚に心が折れかかる。だがその目前、静司の顔が不意に歪み態

勢が崩れた。それを見た瞬間、セシリアは叫んだ。

「ブルー・ティアーズッ！」

レーザー型のビット達が一斉に隙の出来た静司にその銃口を向け、光を放つ。打鉄は防ぐことも叶わず直撃し、今度こそシールドエネルギーを失って地面へと落下していった。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

それを上空から見つめつつセシリアは荒く息を吐いた。そして今しがた味わった感覚を思い出し思わず肩を抱く。

「何だったと言うのですか……」

先ほど感じたのは間違いなく殺気だ。だがそれを彼が発する理由と、たかが企業に所属する程度の男の殺気であれ程まで自分が怯える理由が分からない。そしてその事実がセシリアに苛立ちを生む。

「わたくしは……」

未だに成功しない偏向射撃。そして専用機同士の模擬戦の事を思い出す。セシリアの勝率は徐々に下がってきているのだ。一年の中ではトップは軍人であるラウラ。次点をシャルロットと鈴が争う形となっている。そして一夏と箒とセシリアとなるのだがここに大きな問題があった。

白式の第二形態である雪羅。その持つエネルギー無効化と言う反則染みた楯の登場により、バランスが一気に崩れたのだ。何せブルー・ティアーズのメイン武装は全てエネルギー兵器である。それはつまりセシリアの攻撃は殆ど一夏に通用しないという事だ。無論、まったく手も足も出ない訳では無い。先ほどの様なミサイルや近接武器もあるにはある。それに白式のエネルギーが尽きるまで遠距離からの狙撃を続けるという手段もある。だがそれでも不利な事は変わらない。事実、つい先日の模擬戦でセシリアは一夏に一度負けてしまっていたのだ。これはセシリアのプライドを大きく傷つけた。

幸い、イギリス側はこの件でセシリアを代表から降ろす事はしなかった。何故ならセシリアとブルー・ティアーズはBT兵器の実働データをサンプリングする事が目的とされて居るために、実弾兵器は想定されていないからだ。故にエネルギー無効化の楯を装備する白

式に不利なのは誰が見ても明らかなのである。しかし未だB T兵器の稼働率は低く、偏向射撃も実現できていない今の状況では、いつかは本当に降ろされてしまう可能性もある。そして、

(何故サイレント・ゼフィルスは……っ！)

その偏向射撃を行う敵が居る事が更にセシリアを焦らせる。あの存在はイギリス側にとっても大きなネックだ。自国で最も高い適性を持つセシリアが出来ない事を、機体を強奪したテロリストが自在に扱っているのだ。イギリス側の焦りも大きい。それが分かっているからこそ、セシリアもここ最近では自主練の量を増やしているのだが成果は中々上がらない。だがそれで諦める訳には行かない。

(負ける訳にはいかない……わたくしがわたくしで有る為に……！)

ぐっ、と拳を握りしめ決意を新たにするとセシリアはゆっくりと下降していった。

自室に戻る度既に一夏は起きていた様だった。部屋に入ってきたこちらを見ると声をかけてくる。

「おう、静司。どこ行ってたんだ？」

「ちよつと汗を流しにね。セシリアも居たから模擬戦をした」

「もしかして二人とも自主練か？ だったら俺も呼んでくれよ」

「あー、悪い。今度から声をかける。俺はシャワー浴びるけど良いか？」

「ああ良いぜ。出たら飯に行こう」

了解、と手を上げつつ静司は自室の風呂場へと入って行く。シャワーを全開にして冷たい水を全身に浴びつつふたり、と額を壁に押し付けた。

「馬鹿か俺は」

先ほどの模擬戦。途中から自分はセシリアでは無く、サイレント・ゼフィルスと戦っていた。そして殺意をもって攻撃しようとした。唯のクラスメイト相手だと言うのに。幸か不幸か、回し蹴りを放った際に先日の傷が痛み動きが鈍った所に追い打ちを喰らい大事には至

らなかったが。

その後、セシリアとも少し話し、やはりどこかぎこちない雰囲気
が二人の間にあつたがお互いにその事には触れずにその場は分かれた。
だが彼女が自分に対しどこか警戒心を持ったことは確かだろう。少
なくとも表向きの川村静司の印象とはかけ離れていたはずなのだか
ら。

「何をやっているんだ……本当に」

苛立ちと後悔が混ざった呻きが浴室に空しく響いた。

シャルロットは目の前に表示されている情報に顔を引き攣らせて
いた。

「な、なにコレ……?」

場所はIS学園第六アリーナ。ここは学園中央にそびえたつタ
ワーに繋がっており、高機動実習が可能となっている。さながら
チューブ型のレースコースの様な造りだ。そして今日からここで
キャンボール・ファストに向けた授業が行われる。既に専用機組は
高機動用の特殊装備となっており、各々が調整を行っていた。

高機動パッケージ《ストライク・ガンナー》を装備したセシリアの
ブルー・ティアーズ。スラスター等を調整して仮想的に高機動仕様と
なった一夏の白式。展開装甲の背部と腰部を開放し調整を行う事で
高機動仕様となった箒の紅椿。そして追加ブースターを装備したラ
ウラのシユヴァルツエア・レーゲンとシャルロットのラファール・リ
ヴァイヴカスタムⅡ。他にも訓練機組は高機動戦闘仕様に既に調整
された機体でそれぞれ設定を行っている。とは言っても、訓練機は複
数人で使用するために機体そのものにはあまり手を加えられない。
故にあらかじめそれぞれの操縦の癖やタイプを大まかに分類し、生徒
達はそのタイプごとに調整された機体を割り振られている。後は
データ面での細かな設定を行うのだ。

そしてシャルロットが見ているのはつい先程送られてきた新たな
パッケージ。既にラファール・リヴァイヴカスタムⅡは追加ブース

ターで対応することが決まっていたのに今更なんだろうか？ 疑問に思いつつそのデータを確認していた所だ。そしてそのデータが問題だった。

「パッケージ名《メテオ・ラインⅡ》シャルロットちゃんVer》って一体……」

というかこのネーミングセンスはどこかで見た事がある。当然だ。送ってきたのはK・アドヴァンス社の技術開発部なのだから。何時だったか見た静岡の謎ドリルの同じ雰囲気があるそこにはあった。

「んーしゃるるんどうしたの〜?」

硬直していたシャルロットの下に本音がやってくる。どうやら専用機組の様子を見に来たらしい。通常の生徒達にとって、何倍も訓練をしてきている専用機持ちの設定や飛び方は大いに参考になる為、教師達もそれを許していた。

「うーん、実はこんなものが送られてきててね」

「どれどれ〜? おお〜! いいな〜しゃるるん。早速つけようよ〜」

「いやだけど量子変換にちよつと時間かかるから今すぐは無理だよ」

あはは、と苦笑いしつつデータを本音にも見せる。本音は残念そうだったが、こればかりは仕方がない。

「ぬ〜。……あれ、しゃるるん。なんか動画データもあるよ〜?」

「あ、本当だ。どうもK・アドヴァンス社での試験した時のデータらしいね」

どんなものなんだろう、とそのデータを呼び出すよ端末その光景が写る。場所は野外らしく、どこまでも続く海とそれを背景にした船の甲板が見える。そしてその甲板では赤い追加装備を纏ったラファール・リヴァイヴが待機していた。

『ほ、本当に大丈夫なんっすか? 急に呼び戻されたかと思ったらなんかいやな予感しかしないんっすけど?』

「あ、この声」

「理沙さんだね〜」

どうやらラファールに搭乗しているのは何度かあった事のある理

沙らしい。直ぐに分からなかったのは、そのラファールが大きなバイザーを頭部に装備していたからだ。

『安心しろ。俺達の作る物に今まで失敗はあったか?』

『……………いやあるっすよね!? ありまくるっすよね!? というかそもそもアンタらの頭の中身が失敗品っすよ!』

『ははは、キビシー!』

『誤魔化さない下さいっす!』

『……………ねえ本音。なんかものすごく嫌な予感がするんだけど』

「え、でも面白そうだよ」

若干冷や汗を流すシャルロットに本音は笑う。そんな二人はお構いなしに動画は続く。

『さーてそれでは実験を開始しよう。今回のいけに——じゃなくて担当者は麻生理沙さん。彼女の上司の推薦によるものです』

『やっぱ課長っすね!? あの親バカヒゲジジイっすね!? というか生贄って——』

『それではカウントダウン開始。5、4、3と見せかけてファイヤー!』

『ちよ、それ酷!! っって課長の馬鹿ああああああああ……………!』

画面が大きく閃光し、一瞬で遙か彼方まで飛び去っていくラファールの姿が写った所で映像は途切れた。

『……………ってなんだよコレは!? 参考どころか恐怖感煽ってるだけじゃないか!』

『二応試験は成功って載ってるね。データも一応あるけど…………』

流石に本音も冷や汗を流している。動画は発進して数秒で途切れたが、その数秒の間に遙か彼方まで飛び去って行ったのは確認できた。つまりそれほど加速度をもっていると言う事なのだろうが。

「何やってるんだ二人とも?」

「あ、かわむー」

「いやどちらかと言う僕がこの人たちに聞きたいよ…………」

様子を見に来た静司にシャルロットは今しがた見せたデータを静

司に見せる。すると静司の顔もまた引き攣っていた。

「こ、これは……」

「静司、前から思ってたけど今まで言えなかつたけどさ——控えめに言ってもこの人たち頭おかしいよ!？」

「落ち着けシャルロット。気持ちはわかるが。うん、本当に分かるけど」

若干涙目のシャルロットを静司が宥める。

「それよりこれから飛ぶんだろ? 俺の居た班の人達も専用機持ちのを見たいつて言うからさ、ダイレクトビュー直接映像をお願いできないか?」

直接映像とは視界情報の共有機能である。ロックを解除しチャンネルさえ合わせれば同じ視界を見ることが出来る物だ。

「う、うん。それは良いけど……。そういえば静司と本音はどちらを使うの?」

「俺は打鉄だ。まあこっちの方が慣れてるしな」

「私はラファール」

はい、と本音も手を上げる。因みにラファールは元々打鉄よりラスターの数が多く機動性にも優れている為、今回の割り当てもほとんどの生徒がラファールだ。一方打鉄は速度や機動性はラファールに劣るが、防御面では優れている。だが攻撃面はラファールと同等か少し下程度なので数は少ない。

「そっか。企業所属だからちよつと難しい方を当てられたんだね」

「そうだな。専用機は無いけどその辺はバランスって事だと思う」

「じゃ、じゃあさ! 静司も一緒に飛ばない?」

「ん? 別にいいぞ。丁度俺の番も来た様だし」

ちらり、と静司が背後に視線を向ける。他の班よりは若干数が少ないが、数人の生徒達が打鉄の周りで話し合っている姿が見える。おそらくあれが静司の班だろう。

「じゃあ行こうよ! 本音もどう?」

「じゃあ私も行く」

わーい、と相変わらずの呑気さを放ちながら本音の参加も決定し、三人はそれぞれ準備を済ませると空へと飛びだって行った。

「エム。エム？　居ますか？」

「……なんだ」

薄暗いマンシヨンの一室。そこに突然響いた声に部屋の主は気だるげに返事をした。

「突然失礼します。それと電気を付けますね」

言葉と共に部屋が一気に明るくなる。突然明るくなったために眩しく感じ目を細めるエムの前にシェーリが歩み寄った。

「あら、寝ていたのですか。ごめんなさい」

「構わん。それより要件は何だ」

エムは下着姿のまま寝ていたベットから起きあがるとシェーリを睨む。しかしシェーリは気にした様子も無く頷いた。

「二つほど要件が。一つは先日のロシアの件です。コードRは問題無かったですか？」

「ああ。あの兎女はこちらを見失っていたから今回も成功だ」

「それは良かった」

コードリベリオン^R。反逆の名をもつそのシステムこそ、亡国機業が動き出した理由の一つである。ISでの戦闘行為は今までも幾度と行ってきながら、つい最近までIS学園や織斑一夏を狙わなかったのは篠ノ之束の存在があった為だ。不用意に彼らにちよつかいを出せば、いつ博士が出張ってくるかわからない。そしてISを掌握でもされればこちらの計画は一気に崩れてしまうからだ。

だがカテーナが無人機との交流を深め、研究を進めた結果その対策が生まれた。それこそがコードリベリオン。ISのコア、その意識に作用し篠ノ之束と言う名の呪縛から解き放つための物。コアの意識に対し『篠ノ之束は絶対では無い』と思い込ませる為の物だ。これが有る為に学園祭の襲撃も行われ、ロシアの際もこちらの反応を一時的に発し、篠ノ之束と川村静司をおびき出す事に成功したのだ。

「気を付けてくださいね。あれは何時まで持つかわかりません。それまでにコアを説得する必要があります」

「ふん、わかっている」

このコードRにも欠点はある。確かに一時的に呪縛からは時放つが、それはあくまでも錯覚させているに過ぎない。時間が経てばその錯覚から目覚め再び篠ノ之束の手の内に戻る。それまでにコアの意識が自分自身で篠ノ之束から独立する様に説得する必要がある。そしてその説得には仲介役として無人機であるレギオンの力を借りることになる。

「わかっているなら構いません。まあサンマ女は苦戦している様ですが、あなたならそんなに時間はかからないと思いますよ」

「その言い方からすればお前はもう終わったのか」

「ええ。私のブラッディ・ブラッディは説得が終わっています。もう篠ノ之束の干渉を受ける事は有りません」

シェーリは笑顔で頷くと懐からカード型のデータ端末を取り出して見せた。

「それではもう一つの件です。これを」

端末をエムに渡す。エムはその端末を弄りその中にあるデータを確認すると笑みを浮かべた。

「ふん、随分と早いな」

「ええ。カテーナ様も興味があつたようなので最優先で取りかかりました。それを密かに研究している機関はまだありましたからね」

ふふ、と薄く笑うシェーリ。

「川村静司……普通では無いとは思っていましたが、彼は知れば知る程面白い存在ですね。それに彼の組織はともかくとして、彼の目的そのものは私達にも近い。そうは思いませんか、エム」

「だからどうした。勧誘でもする気か」

「それもいいですね。ですがその前に一度叩き潰さないと気が済みません。その後にはじつくり、丁寧に指導してやるのも良いでしょう」

ふふ、と笑みをこぼすとシェーリは出口へと向かっていく。

「あなたに彼を取られるのは私としては微妙です。なので早い者勝ちと行きましよう。どちらが先に彼を仕留めるか」

「勝手に言っている。こちららも勝手にやらせてもらう」

「ええ、そうですね。ではまた」

最後に一礼して去っていったシェーリには見向きもせず、エムは手元の端末に表示されているデータを見つめていた。

「そうだ、好きにやらせてもらう。だから待っている川村静司」

そう呟くエムの手にある端末にはVTシステムのデータが映しだされたいた。

59：キャノンボール・ファスト

「あら、一夏。何してんの？」

週も半ば。何時もの面子での放課後の特訓も終わりそれぞれが寮に戻って行った頃。鈴はアリーナの更衣室に忘れ物をしたのに気づき慌てて戻ってきたのだが、その道すがら一夏に遭遇した。彼女の記憶が正しければ静司と一緒に自室に戻った筈なのに未だにここに居る事に疑問を感じ、そのままストレートに問う。

「鈴か。いやもう少し特訓しようかと思つてな」

「へえ、けどなんでまた突然？」

「いや、皆頑張ってるし俺ももうちょっと頑張らなきゃいけないと思うんだよ」

少し気恥ずかしげに言う一夏。そんな一夏に鈴は笑みを浮かべる。

「あなたにしては殊勝な心掛けね。さっきも散々扱かれたのに」

「ああ、あれはキツかった……」

思わず一夏が遠い目をするのも仕方の無い事かもしれない。何せつい先程まで箒、鈴、セシリア、ラウラによる鬼の様な特訓をずっと行っていたのだから。特に厳しいのがラウラであり軍隊仕込みのスパルタ教育であつた為、特訓の最後の方では一夏は息も絶え絶えだったのだ。それなのにまだ訓練を行おうとするそんな姿に鈴はどこか嬉しく感じてしまう。

（やっぱ一夏には強くなって欲しいものね。私に並び立つくらい！）

つまりはそういう事である。そんな鈴の心中になど気づくはずの無い一夏は「じゃあまたな」と手を上げてそのまま行ってしまうおとしたので、鈴は慌ててその手を掴んだ。

「ちよつと待ちなさい一夏。特訓は良いけどそんなフラフラでまともな特訓できると思つてんの？」

そう、一夏の足取りはどこかおぼつかない。多少休憩して体力が回復したのも、やはり蓄積した疲労は堪えているらしい。

「あー、確かにキツイな。だけどちよつと位なら——」

「馬鹿ね。そんな状態で無理しても何も得る物なんて無いわよ。体を

壊したらどうすんのよ」

「だけど——」

「あーはいはい。言っても聞かないのは分かってるわよ」

しっしっ、と一夏の抗議を払いのける。じゃあどうするんだ？ と
いった顔の一夏に向け鈴はニカツ、と笑い、

「私が付き合ってあげる」

そう宣言するが否や一夏を引っ張って行った。

「お、おい鈴。こっちはアリーナじゃないぞ」

「知ってるわよ。あんた肝心な事忘れてるけどもうこの時間はアリー
ナの使用时间過ぎてんのよ」

「……あ」

本当に忘れていた様で思わず間抜けな声を出す一夏に鈴ははあ、と
ため息を付きつつそのまま外へと引っ張っていく。そして丁度いい
広さの場所を見つけるとそこへ一夏を引っ張り込んだ。

「こんな所で何をするんだよ」

「組手よ」

鈴は足場を確かめるように何度か地面を踏みしめた後、一夏に向
かって手招きをする。だが一夏は戸惑い顔だ。

「いや、何でいきなり組手なんだよ」

「まあ正確には組手とも言わないんだけどね。とにかくかかってきな
さい」

「そうじゃなくて、どちらかと言えば剣の方がいいんじゃないか？」

「こんな所でIS展開したらそれこそ千冬さんに殺されるわよ？ そ
れにいちいち竹刀持つてくるのも面倒だし。白式の二次形態で追加
された装備の《雪羅》があったでしょ。あんたアレを射撃が防御ばっ
かで使ってるけど、あれも接近武器なんだから上手く活用しなさい」
「まあ確かにそうだけど……」

一夏の戦闘スタイルは《雪片式型》をメインに据えており、そこに
《雪羅》のシールドと荷電粒子砲を織り交ぜる戦い方だ。だが《雪羅》
には《零落白夜》と同じ能力を持つエネルギークロウが備わっている。
つまりエネルギー無効化の爪だ。それをもつと戦闘に織り交ぜられ

ば、一夏の戦い方の幅は広がる。

「あんたは剣での間合いに慣れ過ぎてるからね。武器無しでの戦い方のレクチャーをしてやるってんのよ」

「いやだけど女の子に飛びかかるのはちよつと」

「ふん、なめんじゃないわよ。軽くいなしてやるからとつとかかっ
てきなさい」

ふふん、と笑う鈴だがその内心では一夏にちゃんと女として扱われている事に嬉しさを感じていたりする。しかし一夏はそんな鈴には気づかず、逆に少し馬鹿にされた気がしてむっ、としていた。

「いいぜ、だったらやってやる。後悔すんなよ？」

「さーて、そう上手くいくかしらね？」

構える一夏とあくまで自然体の鈴。数秒の沈黙の後、先に動いたのは一夏だった。全速力で飛び出し鈴を抑え込もうとする。二人の間には体格差があるのでそれを利用して抑え込む算段だ。だが、

「甘いわね」

一夏が鈴を抑え込もうとした瞬間、鈴が先に一夏の手を掴み引つ張り込む。同時に一歩前進し一夏の脚をひっかけた。

「うお!？」

一夏は自分の突撃の勢いそのまま盛大に地面に転がり込んでしまう。

「な、なんだ今の？ 太極拳？ それともカンフーか？」

「あんたねえ、中国人なら誰でもカンフーやってるとか思ってたんの？」

「え、違うのか？」

「違うわよ馬鹿。さっきのは単純に一夏の勢いを利用して転ばせただけ。初歩的な体術よ」

「むう……」

納得がいかないよう様に唸りつつ一夏が立ち上がる。それに対して鈴は再び手招きをした。

「言ったでしょ。軽くいなしてやるって。伊達に代表候補生やってないわ。さあ、もう一度来なさい」

一夏は頷き構え直すと、再び鈴に向かって突進する。ただし今回は警戒して勢いは弱めだ。

「はっ！」

なので今度は鈴が前に出た。小柄な体軀を活かし身を沈める様に低くして突っ込み一夏の前に躍り出る。焦った一夏が慌てて掴もうとするがそれよりも早く鈴の肘鉄が一夏の腹にめり込んだ。

「うげ!？」

眼を見開き一夏が背後へ転がる。地面に手を付き腹を押さえながらせえはあと荒い息を付く。手加減はしていたので全く動けないという訳ではないらしい。

「警戒するのは良いけど隙だらけよ。ほら、次」

「お、おう……!？」

それから暫くの間、掴みかかろうとする一夏と、それを簡単に防ぎ逆に一夏を地にふせる鈴と言う構図が続いた。そして何度目かの攻防の後、一夏が地面に倒れこんだ。

「か、勝てない……!？」

「だから言ったでしょ。代表候補生を舐めちゃいけないわよ」

どこかすつきりした顔で鈴は笑うと一夏の横に座る。直ぐ隣で荒い息を吐く一夏の体温を感じ、どこか気恥ずかしさを感じつつも離れる事は無い。一方の一夏は、同年代とはいえ何度も地面に伏せられたせいか若干落ち込み気味だった。男としての矜持が傷ついたらしい。

「ねえ、一夏」

「……なんだ?？」

未だ荒い息を付きながら一夏が応じる。そんな一夏を微笑ましく思いながらも顔には出さず、口に出すのは別の事。

「無茶しすぎないでよ」

「なんだよ、急に」

「そのまま意味よ。一夏は放って置くとどんどん無茶しそうだし。前科ならいくらかでもあるでしょ」

「う……!？」

クラス対抗戦。VTシステムの暴走。そして臨海学校。思い当たる節はあるのか一夏が声を詰まらせる。

「だけどあの時はしょうがなく……!？」

「それでも他にやり様はあったかもしれないでしょ。それにこれはアンタの為にも言ってるのよ」

「俺の為……？」

首を傾げる一夏に、鈴は言おうかどうか悩む。今から言う事は一夏にとつては許されなく、そして厳しい事だからだ。しかしここまで言っても言わないと言うのもおかしいだろう。それに何より一夏は知っておかなければならない。そう感じ口を開く。

「もしこれ以上一夏に何かがあったら、一夏の自由は奪われるかもしれないのよ」

「な、なんだよそれ」

鈴の言葉に一夏はぎよつ、とした様子で起きあがった。

「世界で二人しかいない男性操縦者なのよ？　それがポンポン負傷なりなんなりして見なさい。重大な何かが起きる前に一夏を軟禁なりなんなりして、安全な檻の中に放り込んでもおかしくないわ。実際、一夏が初めて発見された時にも似たような話はあったでしょ？」

「確かにそれはあったけど……けど今は大丈夫だろ」

「それは千冬さんや篠ノ之博士が居るからよ。ISの生みの親にして下手したら世界を相手取れそうな篠ノ之博士。それと親しい唯一とも呼べる友人である千冬さん。この二人の不評を買ったら何かおきるか分からない。だから一夏は今ここ居る」

「だけど、と鈴は続ける。」

「クラス対抗戦に始まり、臨海学校での撃墜。あんな事続けてたらいつかは言われるかもしれない。『男性操縦者を安全な所へ』って。一夏を取り巻く状況はきつと一夏が思っている以上にシビアなのよ」

「……なら、静司はどうなんだ？」

「同じよ。いえ、場合によってはもっと酷い。おそらく静司が発見された時も一夏と同じような話があった筈。それでも学園に居れる詳しい理由は私にもわからないわ。けどアンタと言う前例があったからってのが大きいと思う。後は静司の所属する会社が何らかの交渉なりなんなりをIS委員会とかとしたのかもしれないけど。けどね、それは逆に言うなら一夏が居るから静司が居れるという事にもな

りかねない。もし世界が一夏達男性操縦者の保護と研究に、善悪も関係なく本気になれば真つ先にその研究対象になるのは静司よ」

織斑一夏と川村静司。同じ男性操縦者でも価値は全然違うのだ。言葉にせずとも一夏は鈴が言わんとしている事が分かり拳を握りしめる。

「なんだよそれ。そんなの俺や静司には関係ないだろ……！ そんな事をしたら絶対——」

「言ったでしょ、善悪も関係なく本気になったら、って。それはつまり力づくって事よ。そしてその力に対抗しきれるほど個人の力は強くない。勿論そんな事になれば千冬さんが反抗するかもしれない。篠ノ之博士が何か行動を移すかもしれない。けどそうなればそうなる程、対した後ろ盾の無い静司にそれが集中するのよ」

小さく風が吹いた。揺れる髪を押さえながら鈴は一夏に振り返る。一夏の眼は不条理な事に対する怒りと、自分自身では何も出来ないのかという怒りが籠っていた。

「だからこそ一夏。アンタは強くならなきゃならない。世界がそんな馬鹿げた行動に移さない様に。一夏と一夏の周りの世界を守る為にも。きつとアンタが目指すべき強さってのはそういうことなんじゃないかしら……ま、ここまでの話は仮説の一つだけだね。実際はそうならずにもつと平和な解決方法があるかもしれないわ」

暗くなった雰囲気を誤魔化すかのようにわざとらしく明るい声で締めくくると鈴は立ち上がるとした。だがその細い腕が不意に掴まれる。

「え、一夏？」

「ありがとうな、鈴。心配してくれて」

真つ直ぐ、それも間近で真剣な表情をする一夏に鈴の顔が一気に赤くなる。

「な、なによそんなにマジになっちゃって」

「大マジだ。確かに鈴の言ったことは仮説かもしれないけど、つまりそれはあり得るって事でもあるんだろ？ 俺は少し甘く見てたかも知れない」

だから、と一夏は拳を握り胸の前にかざす。

「だから俺はそんな俺の周りの人達を護る為に強くなりたい。どんな不条理も乗り越えるだけの強さを。自分自身も、友人も、千冬姉も勿論……鈴の事も」

「なっ……！」

真剣な眼差しの一夏を前に鈴の心は一気に跳ね上がった。何せ面と面を向かってこうまで言われて照れない訳が無い。いや、それよりも友人と自分の名前を分けたと言う事はつまり自分は友人とは別の特別な存在という事だろうか？ そうなのか？ そうだと言いなさいああけど流石に聞けない！

そんな思考が暴走中の鈴を一夏が怪訝そうに見つめる。

「どうした鈴？ いきなり黙り込んで」

「な、ななななんなんでもなないわよ？」

「いや、どうみてもなんでもあるだろ。どうしたんよ本当に」

「い、いいから！ それよりそろそろ良い時間だし帰るわよ！ ああ

！ 今日夕飯何食べようかな!？」

誤魔化す様に大声を上げつつ歩き出す鈴。一夏もそれを慌てて追いかけていく。

「おい鈴、置いてくなよ！」

「あんたが遅いのよ！ ってうわ!! 走ってくんない!？」

「どうすりゃいいんだよ!？」

二人はギャーギャー言い合いつつ寮へと戻って行くのだった。

ちなみに鈴は忘れ物の事は完全に頭から抜け落ちていた。

『だ、そうだぞB9』

「……………」

そんな二人を遠くから隠れて見ていた静司は小さく息を付いた。一夏が残って訓練しようとしていたことは気づいていたので、姿を見られぬように隠れたままずっと見ていたのだ。

『まだまだ青いなー。だけどああいう青さは好きじゃない。それに風

鈴音が言って事もあながち間違いじゃない』

「C1、何が言いたい」

『別に。ただ良い友人を持ったな、と思っただけだ』

「……そうだな。だからこそ一夏も、その周りにもこれ以上危害を加えさせない」

『それが仕事でもあり、お前の望みでもあるか。そこにお前自身の為ってのも入れて置けよ』

「……………わかつている」

そう、小さく答えると静司も自室へと戻って行った。

そしてキャノンボール・ファスト当日。

会場となった市のISアリーナはその巨大さにも関わらず超満員と呼べる具合であり、圧巻の一言だった。時折火花が上がリ、出店も数多く出店している。まさにお祭りだ。

「しかし凄い数だな」

「すごいね」

静司と本音はIS学園生の控室からその超満員の客席を眺め二人そろって口を空けていた。

「例の如くIS産業関係者や各国政府関係者も来てるって話だからね。警備もかなり厳重だよ。それに——」

その隣で説明をしていたシャルロットが目配せをする。その方向に眼を向けると奇妙な集団がそこに居た。

観客でも企業や政府の関係者でも無く、当然IS学園の関係者でも無い。各々が別々の軍服を着た女性達が何やら話し込んでいる。

「IS委員会の召集で集まった追加の警備だつて。どれも軍人だよ」

「……………なるほどね」

おそらく打ち合わせをしているのだろう。会場の熱気からは隔離された冷たい雰囲気がある。そこにあった。

「ちよつと怖いね」

「まああの人たちも仕事だからね。警備に参加してくれているんだか

ら文句は言えないよ」

果たしてそうだろうか、と静司は思う。確かに警備も彼女らの任務の一つだろう。だが本当の目的はおそらく別の所にある。つまり篠ノ之束の無人機や亡国機業。そして自分の黒翼だろう。

(だが守ってくれると言うのならこちらも利用させてもらう)

目的は同じようで若干違う。だが彼女らとてあからさまに警備を無視することは出来ない筈だ。それに政府関係者も居る事から彼らの警備役として他にもIS持ちは居る筈。もしもの時はそれらを利用すると言う事は事前にEXISTの面々と更識家とも打ち合わせしている。もちろん何も起きないのが最も良いのだが。

「そろそろ開会式だよ。行かないと！」

「ごーごー」

「ああ、今行くよ」

二人に連れられるようにして静司は会場へと向かっていく。

「僕たちのレースは二年生の後だね。その後に静司達訓練機のレースで、最後が三年生だね」

歩きながらプログラムを確認するシャルロット。こう言う細かい

所は彼女らしいと言える。

「しゃるるんがんばろ。追いつけ追い越せぶつちぎれろ」

「うん、ありがとう本音。静司も頑張つてね」

「努力するよ。シャルロットも頑張れよ」

「うんー」

訓練機と言つても全員がレースに出場するわけでは無い。今日までの授業の中で各クラス毎に何名か選抜され参加することになっており、静司も選ばれていた。

「かわむーの機体は私が調整してあげるね」

「ああ、助かる」

「……………いいなあ」

訓練機組の機体調整はクラスの人間が手伝う事になっており静司は本音に頼んでいた。疑似的なコンビの様な物だがそんな二人を見てシャルロットは羨ましそうに小さく呟く。

「おーい静司！」

遠くで一夏が呼んでいる。どうやらクラス毎に一度整列するらしい。こういう所は学校らしいな、と思いつつ静司達は一夏の元へと向かうのだった。

『間もなく、一年生専用機部門のレースを開始します！』

大会は順調に進んでいた。二年生のレースは抜きつ抜かれつのデッドヒートであり、観客を興奮させるには十分な内容だった。そしていよいよ一夏達の出番がやってくる。本来はこの大会は一年生は参加しない物だったが、今年は専用機持ちが多い事や男性操縦者の存在と注目故に特別参加となっている。客の目的も珍しい男性操縦者と、その扱う第四世代機ISが大きく、アナウンスが流れると更に会場が沸いた。

「じゃあ行ってくるね」

「ああ、頑張ってるな」

ピットへ向かうシャルロットを見送った静司の携帯が鳴った。

『B9、時間だ。もし何か起きるとしたらここが一番可能性が高い』
「了解。これよりポイントへ向かう」

これもあらかじめ打ち合わせしていた事。今までの事からも行動を起こすなら一夏達の出番である今が最も可能性が高いのだ。静司は携帯を切ると目的に向かうべく席を立つ。

「かわむー、行くの？」

隣に座っていた本音がどこか心配そうに声をかける。彼女には事前に話していた為に、これから静司が何をしに行くかを知っているのだ。

不安な顔をさせてしまっている事に罪悪感を感じるも、静司は頷いた。

「それが仕事だからな。シャルロット達の応援、代わりに頼むよ」

ほんぽん、と頭を軽く叩くと本音はその静司の手を手を取った。

「ねえ、せーじ。こないだせーじは色々話してくれたよね？ サイレ

ント・ゼフィルスの事を」

「……ああ」

彼女は何処か不安げに言葉を紡ぐ。

「私ね、少し怖いんだ。セーじは何時も無理や無茶をして怪我してるけど帰ってきてくれてた。だけどね、セーじの話を聞いてから、サイレント・ゼフィルスの人がセーじをどこかに連れて行って行っちゃうんじゃないかって」

本音の言葉に静司は直ぐに答えられなかった。彼女とて気づいているのだ。今までに静司から聞いたサイレント・ゼフィルスの情報からも、その搭乗者が静司の過去を何か知っている。いや、もしかした大きく関わっているのかもしれない事を。そしてもし、彼女の予想が正しければ、静司がそのままサイレント・ゼフィルスと共に消えてしまうのではないかと。

「前にも言ったけどもう一度……ううん、何度でも言わせて？ 私に『おかえりなさい』って言わせて欲しいな。それでももしセーじが帰ってこないなら——」

握った静司の手を頬に寄せ、本音はうん、と頷く。

「今度は私が迎えに行っちゃおうよ？」

「そう……か。そう、だな」

ここ最近の億劫とした気持ち。解けない疑問や苛立ちも、今だけは忘れた。ここまで真っ直ぐに心配してくれる目の前の少女に対してのみ、今の自分の意識を全て向ける。そうしなければ余りにも失礼だと、そう感じた。

「大丈夫。俺はちゃんと帰ってくるよ。だから安心して待つてくれ」

「本当に？」

「本当だ」

握られていない手でそつと、本音の髪を撫で、そのまま彼女が握る手を離させる。本音は未だ心配そうな顔だが、静司は無理やり笑顔を浮かべると手を振った。

「そろそろ行かないとまずい。だから行ってくるよ」

「……うん。いつてらっしやい〜」

どこか無理した笑顔を浮かべた本音に見送られ、静司はポイントへと向かっていった。

そしてレースが始まる――

IS学園教師、榊原 菜月はラファール・リヴァイヴに搭乗して空に浮かんでいた。

場所はキャノンボール・ファストが行われている会場から数キロ離れた地点。視界の一部に大会の様子を映し出しつつ彼女は周囲の警備を行っていた。

「うーん若いつていいなあ。私もあの年の頃は燃えるような恋をしたのよね」

29歳かつ独身。生徒には優しく品行方も方正。容姿も悪くないのだが致命的なまでに男運が無く最近少し焦っている彼女は、大会の様子を見てしみじみと呟いていた。

気の抜けた雰囲気の中で彼女だが仕事はちゃんとしている。定期的に決められた経路を飛行しつつ周囲を索敵。他の警備とも連絡を取り問題の無い事を確認する。

「もう少ししたてば交代ね。うちのクラスの子達の応援もしたいものね」

彼女の受け持っているのは三年なのでまだ少し時間がある。だが彼女は手を抜くことなく真面目に仕事を続けていた。そういった真面目さと優しさが生徒に人気のある理由だったりする。

「しかし本当に来るのかしらね。これだけ厳重な警備なのに」

警備についているのは自分達教師陣だけでは無い。生徒会長である更識を筆頭とした更識家の面々。地元警察。各国政府関係者や企業関係者の警備。果てはIS委員会に召集された者達まで。ここまですらで厳重にしている中で、襲撃してくる様な者が果たして本当に居るのだろうか？ 疑問はあるが手は抜かず彼女は警備を続ける。そんな中。

「ん？」

ラファールのレーダーに不意に反応が表示された。数は二つ。それが遙か遠くから少しずつ近づいてくる。同時に彼女の下に管制室から連絡が入った。

『榊原先生。そちらに接近する物体があります。警戒を』

「了解しました。こちらでも確認しています。他の警備の方たちに連絡をお願いします」

『既に連絡済です。直ぐに応援がそちらに向かいます』

よし、これで良い。自分はISを扱う事は出来るが織斑先生や山田先生の様にはいかない。だから無理に一人に対応しようとはせず、応援を呼べばいい。自分の判断が間違っていない事を確認すると、接近する相手に向かい警告を送る。

「接近する機体に警告します。こちらはIS学園警備班。当空域は許可なく飛行する事を禁じられています。直ちに地上へ降り、こちらの誘導に従ってください」

少し待ってみるが反応は無し。広域周波数で送ったので聞こえて無い事は無い筈だ。つまり聞く気は無いと言う事か。しかしたった2機でどうするつもりなのか？

そんな彼女の疑問は次の瞬間一気に吹き飛んだ。

「なっ!？」

突然片方の反応が巨大になったかと思うと、今度はそれが分裂したのだ。そしてそれらは一気に加速し彼女の下へと迫る。

「くっ、一体何が——」

起きているのか。彼女がそれを口にする前に、彼方から放たれたビームがラファールを襲う。菜月は咄嗟に機体を傾け、直撃は免れたが右肩とスラストアスターが貫かれ爆ぜた。

「痛っ……っ!？」

痛みに喘ぐ時間は無い。速度を上げた敵は目前まで迫ってきていた。そしてその姿を見て菜月は目を見開く。

「サイレント・ゼフィルス……! それとあれは!？」

迫ってくるのは深い青色のIS、サイレント・ゼフィルス。その姿

は事前に資料でも確認しているので間違いない。だが彼女が驚いたのはそれ以外の機体だった。

前方は鋭い鋭角の前後に長細い機体。その上下左右にはまるで花の様に開いたユニットが取り付けられ、赤く光っている。全体的に角ばったフォルムの彼方此方に砲台が見え、機体の背部は数段高くなっており、そこにも砲台が取り付けられている。

まるで戦艦の様で、しかし戦艦とは明らかに違う巨大な何かがそこに居た。そしてその周りでは学園祭の際に襲撃してきた、逆三角形の胴体をもつ奇妙な兵器が飛んでいる。

「邪魔だ」

サイレント・ゼフィルスの搭乗者が小さく呟く。それに呼応する様にその戦艦の様な巨大な機体の砲台が一斉に光りはじめ、周りの兵器群も一斉にその武器を菜月へ向ける。

菜月のラファールが撃墜されるのには、数秒とかからなかった。

『どうやらお出ましらしい』

『そのようだな。それも随分と面白い物を引き連れているそうだな。学園の教師が落とされただと』

『まあそっちはどうでも良い。それより仕事の時間だろう？ 一応生徒達を護る役目を負っているんだ』

『まあそういう事だな。……例の黒い奴は？』

『まだどこからも発見の報は無い。出し惜しみしてるのか、この場には居ないのかまだ判断はつかないな』

『ふん、面倒な事だ。ならあの面白い連中の相手を程ほどにするとしてようか』

『了解。後は手筈通りに』

『お偉いさん方も居るんだ。最終的にはそちらが優先と言う事を忘れるなよ』

『当然だ』

これは、彼女らの中だけで交わされた秘密の会話。学園にも更識家

にもこの通信の内容は洩れていない。もしそんな事があれば面倒な事になるからだ。

『ではいくぞ 《ストライク・イーグルⅢ》』

『《メールシュトローム》向かうわよ』

『お先に失礼、《テンペスタⅡ型》』

『《アグニ》 目標を穿つ』

そうして彼女ら——I S委員会によって召集された面々も動き出す。その内にそれぞれの思惑を乗せて。

60：圧倒

キャノンボール・ファストの会場から少し離れた海上。そこを一直線に飛翔する複数の影。濃蒼色が目を引くエムのサイレント・ゼフィールスと異様な形状をした機体、レギオンとその武器《レギオン・ビツド》である。

『えむ、てきがまたきた』

つい先程学園の教師を墜としたレギオンが、こちらに接近する複数の機影を確認し報告する。だがエムは返事をせずに真っ直ぐに飛ぶだけだ。だがレギオンは気にした様子も無く己が体をくるくると回す。それに呼応する様にビツト達もくるくると回っていた。

『えむ、さきにいく？ わたしたちはきたいですと。いろいろためしたい』

「……勝手にしろ。私は私でやらせてもらう」

『りようかい。えむ、がんば』

「ふん」

エムはレギオンを一瞥するが直ぐに視線を元に戻す。彼女はこの無人機には対して興味を持っていない。

篠ノ之束が創り出し、川村静司によつて一度は墜とされ、そしてカテーナによって復活しただけでなく妙に人間らしくなった無人機。その度合いは日に日に強くなっており好奇心も旺盛だ。カテーナが何を目的としてこの無人機を手に入れたかは知らないが、少なくともただの戦力アップだけでは無い事だけは確かだ。大方面白そうだからといった理由だろうか。

「あれか」

少し考え事をしていた間に敵の姿は視認できるほどまで近くなっていた。数は4機。そのどれもが形状が違う。

大きな鈍色のスラスターを背部に2対4基備えた、流線的なフォルムのIS——アメリカのストライク・イーグルⅢ。

薄い紫の装甲と、異様に肥大した肩が特徴的なイギリスのメイリスュトローム。

既にサーベルを展開し、もう片方の腕にもIS用機関銃を手にした薄緑の機体、イタリアのテンペスタII型。

そして全身燃えるような赤色でその背部には複数の砲塔を背負い、バイザーで顔の上半分を覆ったインドのIS、アグニ。

あちらもこちらの姿を視認したのだろう。速度を上げ一直線にエムとレギオンに向かって来た。

先手はテンペスタII型。展開済みのサーベルでエムを襲う。エムも銃剣《スターブレイカー》を呼び出すとそれに迎え撃った。互いに速度を乗せた一撃がぶつかり合い、空気が大きく振動した。

「まさか本当に出てくるとはな！ 相当頭がイカれてるらしい」
「……」

テンペスタII型の搭乗者が面白そうに話しかけてくるがエムは無言。代わりとばかりにビットを射出するとそのレーザーでテンペスタII型を襲う。テンペスタII型は即座に反応し、その場から離脱しそのレーザーを避けた。しかしそのレーザーが突然曲がり回避した筈のテンペスタII型を襲う。

「ほう、これがイギリス自慢の偏向射撃フレキシブルとやらか」

テンペスタII型の搭乗者は焦る事も無く、機体を器用に捻りそれら全てを回避すると機関砲でエムを狙う。エムもそれを避けるべく上に飛ぶが、そこには回り込んだメールシュトロームが両手にブレードを構えて待ち構えていた。

「それは我が国の機体よ。持ち帰らせてもらおうわ」

肉薄するメールシュトロームの繰り出す剣戟をエムは《スターブレイカー》で受けつつこちらにもビットで狙うが、それを察したメールシュトロームは深追いせず直ぐに背後へと飛んだ。そしてテンペスタII型と並び、エムの進路を塞ぐ。

「イギリスの半端機体器用貧乏とイタリアの第三世代試作機か。欧州連合の第三次イグニッション・プランの次期主力候補。丁度いい、それも頂くとする」

「身の程をわきまえろ。お前はここで掴まり然るべき所で裁きを受けらるお仲間と共にな！」

「半端機体……。その言葉を撤回させてあげる」

三機が構え、そして一斉に飛び出した。

アグニの搭乗者は戦いを始めたテンペスタⅡ型達を横目に見つつ己の目標に注意を向けた。戦艦の様な形をした異様な兵器と、その周囲で飛ぶ小型の機動兵器。そのどちらも見た事が無いが、注意すべきなのはあの戦艦型だろう。小型の方は以前もIS学園を襲撃したと聞いていたが、その時の性能は対した物では無かったと聞く。無論、それから強化されている可能性もあるが、それよりはあの巨大な戦艦型の方が危険だと判断した。そしてそれはストライク・イーグルも同じだったらしい。

『アカブツを落とすぞ。露払いは任せた』
「了解」

ストライク・イーグルからの通信に答えると背中の中を砲台を起動。背部をスライドしてきた砲台のグリップを握りその砲口を戦艦型へと向け、チャージを開始する。同時に他の武器の量子変換も開始。機体の各所アタッチメントへと複数の砲台が装備され、まるで針鼠の様に全身から砲塔を突き出すような形となった。

「碎け散れ」

その言葉を合図に全ての砲台が一斉に火を噴いた。機体の名に恥じぬ威力と数の砲撃が戦艦型とその周囲の小型人型兵器を飲み込み火球を生んでいく。そしてその最中をストライク・イーグルが駆け抜ける。勿論、アグニの砲撃に当たるだなんて馬鹿な事はしない。

ストライク・イーグルはその特徴でもある機動性を活かし戦艦型へと迫る。それを止めようと、アグニの砲撃を何とか躲していた小型兵器達が一斉に銃撃を浴びせるがそれらには当たる事も無く切り抜けていく。更にはその両手に高周波ブレードとライフルを呼び出すと即座にそれを振るい奇妙な形の機動兵器を破壊していく。そして一瞬で戦艦型の懐まで飛び込んだストライク・イーグルは高周波ブレードをそのまま叩き付ける様に振るった。しかし当たる直前に割り込

んだ小型の機動兵器のブレードがそれを受けとめた。

『邪魔だっ！』

ストライク・イーグルはもう片方の腕のライフルの銃口を直接突きつけ発砲。衝撃で吹き飛ばされ、小型兵器は戦艦型に叩き付けられた。それ目掛けてストライク・イーグルはライフル下部に搭載されていたグレネードを発射。そしてすぐさまその場を離脱した。

大きな爆発が起こり、戦艦型が炎と煙に包まれる。その周囲を飛んでいた小型機動兵器達も衝撃でバランスを崩し、そこにアグニの砲撃が追い打ちをかけた。しかしその爆煙の中で、戦艦型は未だ健在なのがうつすらと見える。

『やれ』

「了解」

アグニは砲台の全てを戦艦型に集中させる。一点集中して放たれた砲撃の嵐が戦艦型へ殺到した。通常のISなら残骸すらまともに残らないであろう攻撃だ。いくらあの巨体でも耐えられるはずもない。

「命中……」

一通りの砲撃を終えると砲身冷却の為に機体を下がらせる。戦艦型の居た空は未だ煙に包まれているが無事である訳が無い。事実、煙の中から残骸らしきものが落ちてきている。後は難を逃れた小型を撃ち落とすのみだ。

『見かけ倒しだったか。まあいい。これより残存する敵の殲滅を――』

そこで二機は異変に気づいた。爆炎の中から落ちてくる残骸。その数が少なすぎるのだ。あれ程の大きさの兵器を破壊したのならもつと残骸は多い筈。なのに実際に確認できたのは数える程度の残骸であり、それは幾らなんでも少なすぎる。そしてその疑問に対する答えはゆっくりと姿を現した。

『健在だと……』

「……っ!?!」

煙の中からゆっくりと戦艦型が姿を現す。流石に無傷とは言わず、

装甲の一部がひしゃげ、火花を散らしているが動くのには問題が無いのか危ない様子で2機の前に姿を見せた。

『くそっ、どんな装甲だ!? それともシールドか!?!』

「わからない……だけど効いていない訳では無い」

そうは言ったが果たしてあとどれ程攻撃すれば倒せるのかは分からない。そう考えている間にも生き残った周囲の小型兵器に変化が起きる。その背中のバックパックらしきものが開いたかと思うと、そこから通常サイズのビット兵器が現れたのだ。その光景に2機は今度こそ言葉を失う。

ビット兵器は使いこなせれば強力な武器となるが、その操作には多分な集中を必要とする上に適性が低ければまともに扱えない。故に各国の第三世代の開発競争でもビット兵器を推す国は少ないのだ。

だが目の前の敵は異常なまでの数のビットを操っている。あの小型兵器は無人である事は確認済みだが、だとするとそのビットを操るのはあの戦艦型の搭乗者だろう。だが果たして人間にそんな事が可能なのか? そもそもあの小型兵器も謎なのだ。当初はAI制御かと思っていたが、それにしても脅威は感じずとも不気味に感じるほどには動きが良い。だとするとあの小型兵器もビットか、それに準じた物か? だが人型のビットとなると通常の物よりもさらに制御が困難な筈であり、人間にそんな事出来る訳が無い。だがそうなる他に何も理由が思い浮かばない……!」

目の前の光景に啞然とする2機に、小型兵器とそのビット達が一斉に襲い掛かった。

『B9。例の連中が戦闘を開始した』

「こちらでも見えている。B5は?」

『準備完了です。後はタイミングです。……大会の方はどうなってるんすか?』

『お偉いさん方の一部は既に避難済みだよ。残りは気楽に見てるのか避難せず観戦中だ』

『つて大会自体を中止にはしないんすつか?』

『……どうやら揉めてるらしい。男性操縦者や第四世代の参加したレースを止めるな、とな』

C1の言葉に静司は思わず歯を噛みしめた。確かに言いたいことは分かる。今までもイベントの際は一夏とその白式に注目されていたが、今回はそこに篠ノ之東が自ら手掛けた第四世代機を持つ筈と紅椿が居る。それらの性能を直で見える機会などそうそう無い為に、ここぞとばかりに文句を付けているのだろう。それに今回はIS学園だけでなく、IS委員会の召集した機体も警備に加わっている為に気楽に見ているのかもしれない。だがそれはどれも学園生やその他の一般客の事など考えていない。何かがあつてからでは遅いと言うのに。『その件に関しては申し訳ないと思うよ』

不意に通信に紛れた声はIS委員会の一人。静司が学園に来ることになった理由を持ってきた桐生のものだ。

『僕もとつと中止にして避難させろつて言ってるんだけどね。全く聞く耳持たずだ。お蔭でIS学園側もピリピリしてるよ』

「桐生さん、どうにかありませんか?」

『僕もIS委員会の端くれとは言え流石に無理だよ。どうにかしたいとは思うけどね。……それにどうも委員会の一部は別の狙いもあるようだし』

『別つてなんつすか?』

『B9だよ。いや、正確にはそのISかな。事もあろうに、彼らは学園がピンチになればヒーローの如く君が出てくると思つてる様だ。そしてあわよくば捕獲しようという算段だ。いやあ、何とも醜いね』

「……………くそっ」

静司が悪態をつく。これではまるで自分のせいで学園が危険に晒されている様では無いか。

『だからと言ってノコノコ出ていけばサイレント・ゼフィルスの相手をする前に囲まれるだけだ。だからこそ姿を現すのはギリギリまで待て。レースは継続中だがそんなに長くかかる物でも無い。その間だけでも守り切れれば後はどうにでもなるし、その為の俺達だ。チャン

スが出来次第即座に行動に移れ』

「つ……了解」

『了解つす』

静司は苛立つ心を押さえつつ返事をする。己の構えていた物を一瞥する。既に黒翼は展開済みであるが、その左腕は何時もの鉤爪では無い。今その左腕には無骨な長筒——IS用スナイパーライフルが装備されている。そして静司の眼前ではアメリカとイギリスのISと戦闘を繰り広げるサイレント・ゼファイルスが映し出されていた。

現在静司が居るのはキャノンボール・ファストが行われている会場から数キロ離れた倉庫街の一角。周囲には当然偽装工作をした状態で静かに機会を伺っていた。そして離れた場所と同じ武器を構えているB5もわかりだ。静司達の狙いは唯一つ。2機のISと戦うサイレント・ゼファイルスが隙を見せた瞬間に2砲口から同時に狙撃する事。

IS委員会により召集された連中の目的は、1つは当然ながら大会の防衛であるだろうが、それとは別に静司の黒翼を狙っている事は勿論予想していた。だがそちらが敵の襲撃を利用するならこちらも同じことをするまでだ。各国のISとの戦いでサイレント・ゼファイルスが隙を見せた瞬間に仕留める。その為の作戦である。

懸念事項はある。それはサイレント・ゼファイルスと共に現れた大型の機体だ。小型の人型機動兵器のビットらしきものと合わせればかなりの数となっているそれは静司から見ても明らかに脅威である。それにあれ程のビットらしきものを同時に操る事も。

だが静司は知っている。あの機体の所属——亡国機業にはカテーナとシェーリがおり、彼女らは以前無人機を求めて学園に潜入していた。もしその時の無人機を奴らが掌握していたとしたら？

勿論、無人機だからと言ってあれほどの事が出来るとは限らない。しかし人間や、普通のAIが操作していると考えれば遥かに現実的に思える。

『……状況が動いたぞ』

静司の思考はC1からの通信で中断された。サイレント・ゼファイル

ス達の戦いは、あの小型兵器がビットを展開した事で一方的となっていた。ストライク・イーグルとメイルシュトロームはなんとかサイレント・ゼフィルスを墜とそうと上下左右に機動を取り攻撃を加えようとするが、それをビット達が妨害する。その隙にサイレント・ゼフィルスの巨大な銃剣が光を放ち、まずメイルシュトロームを撃ち落とすた。

1機味方が落とされた事で更に多くの敵を相手にする事になった残る3機だが、続いてもとより砲撃仕様であったアグニが一齐に囲まれ落とされてしまう。

「……？」

一瞬、違和感を感じた。確かに敵の数は多く、囲まればひとまりもない。しかし余りにも早すぎる気がしたのだ。確かに敵は脅威だが、こんなには早く、あそこまで一方的に落とされるだろうか……？

そんな静司の疑問も訪れた好機によって隅に追いやられる。小型人型兵器に囲まれ身動きを取れなくなつたストライク・イーグル。その横でテンペスタII型とサイレント・ゼフィルスが再度ぶつかり合い、そして拮抗した力により2機の動きが止まつた。

『B9ッ！』

B5の通信と静司が引き金を引いたのは同時。ライフルが轟音と共に必殺の一撃をサイレント・ゼフィルスへ放つ。そして銃弾はサイレント・ゼフィルスに吸い込まれていき――

そして躲された。

「なっ……!?!」

『そんなのありっすか!?!』

たつた今見た物が信じられず声を漏らす。完璧なタイミング。完璧な角度から放たれた筈の狙撃。サイレント・ゼフィルスはそれに気づき、事もあろうに眼前のテンペスタII型を相手にしながら、二発とも見事に躲したのだ。それどころか突然の狙撃に戸惑つたテンペスタII型を斬り伏せると、その銃剣をこちらに向けた。見ればビットも別の方向を向いている。あれはB5が居る方向だ。

『そこから逃げろ！ B5、B9！』

C1の叫びより早く静司は飛び出していた。アスファルトの地面に足跡を残す程に踏み込むと、黒翼の翼のスラスタを全開。偽装も何かも考えず一気に加速する。その静司の真横をサイレント・ゼフィルスが放ったレーザーが通り過ぎていき、先ほどまで隠れていた場所を焼いた。

「第二プランは失敗！ これより第二プランへ移行する！」

左腕のライフルを解除し、いつもの鉤爪を呼びだし一直線にサイレント・ゼフィルスへ迫る。狙撃が失敗した場合の第二プランは直接攻撃。つまりは何時もと同じだ。

遠く、サイレント・ゼフィルスの搭乗者——エムと名乗っていた少女の口元が吊り上げる。それに真っ向から睨み返しながら静司は一気に空を駆けあがっていくが、不意に悪寒を感じた。

「——っ！」

それはあくまで勘だ。しかしそれに心よりも体が先に従い急制動をかけた。制御しきれないGに歯を食いしばりつつ前方に右腕の固定装備であるガトリングガンを撃ちこむと、何も無い空間が爆発した。

「こいつは……！」

「ええ、私ですよ」

声は後ろから。振り返りつつ振るった左腕の鉤爪が灰色の丸みを帯びた腕に防がれた。ガギツ、と鈍い音が響く中、静司は目の前の敵を睨む。

「シェーリ！ 貴様に構っている暇は無い！」

「つれないですね。あなたになくても私にはあるのですよ」

敵——全身灰色の丸みを帯びた装甲。左右両脇に鋼鉄の棺桶を従えたIS、ブラッディ・ブラッディとそれを操るシェーリがそこに居た。

「エム。あなたは手筈通りに」

シェーリが上空のエムに目配せをすると、エムは何も言わず飛び去っていく。

「行かせるかよ！」

「あなたもですよ」

黒翼の翼の砲口が光を宿し、ブラッディ・ブラッディの棺桶が開きそこから銃器が飛び出す。

『死ね！』

互いの武器が光を放ち爆発と共に両者は弾き飛ばされた。衝撃で機体をふら付かせながらも、静司は直ぐに姿勢制御を取り戻す。それはシェーリも同じで直ぐに態勢を立て直すとその背中から何かをばら撒いた。ばら撒かれた何かは直ぐにその姿を見せなくしたが、一瞬見えたあれには見覚えがある。姿を見せない浮遊機雷、以前シェーリが《ゴースト》と呼んでいた物だ。

「あまり動き回られては困るので」

「そうか……ならば全部叩き落す！」

黒翼の右腕のガトリングガン。左腕のライフル。両翼のR/Lブラスト。その全てを一斉に構える。だがそれを放つ前に、別の場所からの銃弾が《ゴースト》を撃ち抜き破壊した。

「B9、無事っすね」

声と共に現れたのは黒いラファール・リヴァイヴ。但し、以前B2が使用した物とは少し装備が違う。B2が全身刃だとすれば、こちらは全身銃だ。両手は勿論の事、両肩と両足にまで銃口らしきものがある。だがインドのアグニの様にずんぐりとはしておらず、あくまで少数の銃器を全身に装備している。だが中でも目立つのはその片腕に巨大なスナイパーライフルがバインドされている事か。

「サイレント・ゼフィルスはどうした？」

「あの速度はラファールじゃ無理っすよ。こちらは元々長距離戦仕様っす。だから当初の作戦通りB9がいくっすよ。黒翼なら追いかける」

そうなのだ。当初の予定では第一プランが失敗した場合は静司がサイレント・ゼフィルスの相手を。B5が援護かつ、IS委員会側の機体の牽制をする筈だった。しかし静司がサイレント・ゼフィルスに追いつく前にシェーリの邪魔が入り、IS委員会側の機体はストライ

ク・イーグルを残し全て撃墜。そのストライク・イーグルも敵に囲まれ動きが取れない状態だ。故にB5がシェーリを請け負うと言う事だろう。

不安はある。ストライク・イーグルが落ちればあの戦艦型と小型兵器も一斉にB5を狙うだろう。そうしたらとても耐えられるとは思えない。だが、

「B9、あくまで私たちは私たちの仕事をするっすよ」

「……………わかった。頼む」

そう、あくまで優先すべきが護衛対象だ。その為には静司は行くしかない。

「増援ですか。ですがそう簡単には行かせませんよ」

「見くびって貰っちゃ困るっすね。私、それなりに強いっすよ?」

言うが否や、B5の黒いラファールが眼にも止まらぬ速さでライフルをシェーリに向け発砲した。シェーリは咄嗟に鋼鉄の棺桶《ヴァカント・コフィン》で防いだが、元々は長距離からでも致命打を与えるために作られたライフルの一撃を間近で受けたのだ。その衝撃でシェーリがよろめいた。

そしてB5はそれだけでは止まらない。静司から距離を離す為に、あえてシェーリの懐に飛び込むとその腕に固定された銃口をシェーリへ向け、撃つ。シェーリも体勢を立て直しつつ両腕で防ぐが、B5は尚も止まらない。腕、肩、そして脚。それぞれに装備された銃口を用いて次々と至近距離で襲い掛かる。蹴りを加えればその脚から銃弾が飛び出し、それを躲しても両肩両腕が残っている。それらを防ぎ、躲したかと思えば放たれる至近距離からのライフルの一撃。そのB5の猛攻にシェーリは次第に静司から引き離されていく。

「長距離仕様? 聞いて呆れますね!」

「そりやどうもっす! 行くっすよ! B9!」

猛攻の最中に叫んだB5の言葉を背に、静司はサイレント・ゼフィルスを追う為に再び空を駆けだした。

目まぐるしく変わっていく風景。それらに驚く暇も無く、一夏は超高速で空を飛んでいた。

「一夏、覚悟！」

「そうはいくかよー！」

箒が放った刃状のレーザーを《雪羅》で弾き、一夏は更に加速する。その前方には先を飛ばラウラとシャルロットの姿が見えた。

キャノン・ボールファスト。その一年専用機持ち組達のレースは中盤に差し掛かるうとしていた。トップを行くのはラウラ。続いてシャルロット。その背後を一夏、箒、セシリア、鈴が追いかけている形だ。一夏達は下手に動けば一斉に攻撃を受けてしまう為、お互いに牽制しあい思う様に前に出れずにいた。だがこのままではラウラのシャルロットの一騎打ち状態だ。それは面白く無い。

「行くわよー！」

先に動いたのは鈴だった。出力を上げ加速していくと一夏達より一歩前に躍り出る。途端にセシリア、箒、そして一夏はそれぞれの射撃武器を鈴に向け放った。だがそこで鈴の口元が笑う。

「ふっ！」

突然鈴は速度を落とす。そして機体を横にロールする様に動き、それぞれの攻撃を回避すると、甲龍の両肩に装備された衝撃砲を連続で撃つ。

「うおっ!?!」

突然の減速と、そこから繰り出された衝撃砲の連射に一夏は慌てて回避を試みるがそのせいでバランスを崩してしまう。それは箒も同じだったようで一夏と二人、置いて行かれてしまう。だがセシリアは違った。

「甘くてよー！」

衝撃砲の合間を縫う様に飛びぬけると大出力B Tライフル《ブルー・ピアス》を鈴に向け撃つ。鈴は回避行動を取るがその間にセシリアが鈴に追いついていく。

「ちっ、流石にやるわねー！」

「まだまだですわー！」

二人はお互いに不敵な笑みを浮かべ並走していく。そしてその後を一夏と箒が追いかけていく。

「くそっ、このままじゃまずいな」

「泣きごとか一夏！ 私は先に行かせてもらおう！」

「そうはいくかよー！」

お互い更に出力を上げ加速していく。レースの盛り上がりはいよいよ最高潮に達しようとしていた。だがそれを不意に入った通信がぶち壊してしまう。

『全員レースは中止だ！ 速やかに誘導に従いそこから離脱しろ！』

「って千冬姉!? いきなり何を――」

『襲撃だ。委員会の用意した機体と学園の警備を突破した奴がそちらに向かっている』

「なんだって!？」

千冬の言葉にぎよっ、とする。そんな危険な奴がこちらに来ていると言う事実に一夏の背筋が凍った。

『指定した場所に緊急脱出用の通路があるからそこから離脱しろ！
こちらでも直ぐ向かう』

白式が送られてきたデータを参照する。このレースコースは上部は空が見えシールドバリアに覆われているが、下部は通常のレース用施設だ。なので当然、物資搬入用や緊急用の通路はある。

「一夏ー！」

前方を飛んでいた鈴達を引き返してきた。その後ろには距離は離れているがラウラ達の姿も見える。一夏は頷くと指定されたポイントへ向かおうと白式を動かした。だが突如響いた轟音と共に目の前を青いレーザーが駆け抜けていく。

「こいつは!？」

「もう来たのか!？」

「サイレント……ゼフィルス!？」

きつ、とセシリアが睨みつける先にはコースのシールドバリアを破ったサイレント・ゼフィルスが悠然と見下ろしていた。

悲鳴が上がる。事情を知らない観客たちが、突然の出来事にパニックとなり我先にと逃げだしていく。大会のスタッフや学園の教師達はそれらを出るだけ落ち着かせ、安全に避難させようとするがその効果は対してない様だった。

そんな混乱の最中、千冬は机に拳を叩き付けた。スチール製の机が軋み、近くに居た教師たちが驚き肩を震わせる。だが千冬はそんな事は気にしていない。

「だから言っただ…！」

サイレント・ゼフィルス——亡国機業らしき者達を補足した時点で千冬は直ぐに大会の中止を進言していた。しかしそれは上層部に却下されていた。千冬が何度も危険性を訴えても彼らは首を縦には振らなかったのだ。それだけ楽観視していたのだろうが、そのツケがこれだ。委員会傘下のIS達を突破したサイレント・ゼフィルスは学園の教師達が操縦するラファールや打鉄の警備もものともせず一直線に一夏達の下へ向かってしまった。一夏達には逃げるように連絡したが、このタイミングでは間に合わないのは明確だ。故に千冬は打鉄を使い一夏達の救助へ向かおうと考えていた。だがそれを止める声がある。

「織斑先生！ 委員会のISが……！」

声に導かれる様に眼前のスクリーンを見れば、最後まで戦っていたストライク・イーグルが撃ち落とされている所だった。これで委員会が召集したIS達は全滅。それどころかあの異様な形状をした戦艦型までもがこちらにくる可能性がある。こんな状況で千冬がこの場を離れる事はおそらく許されないだろう。一夏達の安否は不安だが、観客たちも忘れてはならない。

ちらり、と別のスクリーンに眼を移す。そこでは見た事ない灰色のISと黒いラファールの戦闘が映し出されていた。この両者も正体不明の危険要素だ。恐らく片方——灰色のISは亡国機業の仲間だろうが、黒い方はどうだろうか。おそらくは幾度と現れた黒い翼のISと仲間だろうと言う事くらいか。そこまで考えて千冬はその黒い

翼のISがスクリーンに移っていない事に気づいた。

「奴は何処に——」

居るんだ、という言葉は途切れる。不意に見上げた上空、そこにサイレント・ゼフィルスを追いかけるように空を駆ける黒い翼のISの姿を見たからだ。

やはり近くに居たのかという思いと、それならばなせもつと早く現れなかったという八つ当たりに近い感情が過るが今はそれを押しこめる。恐らくはサイレント・ゼフィルスを追撃しているのだろうが、あの黒い翼のISの目的も明確では無いのだ。任せつきりになど出来る訳が無い。

目的、その言葉を思い浮かべた時に不意に気づく。サイレント・ゼフィルスの目的は一夏達だろう。その理由が男性操縦者だからか、第四世代の機体をもつからかは分からない。だがもし前者だとしたら？ この学園にはもう一人、男性操縦者が居るでは無いか！

「っ！ 川村はどこに居る!？」

今の今までその考えに至らなかった自分の愚かさを呪いつつ、千冬は即座に川村静司の搜索を開始した。

「さて、いよいよ本番ね」

観戦用のスクリーンに浮かぶ光景——エムと専用機持ち達の戦いにその女は楽しそうに目を細めた。豪華な赤いスーツに豊満な体を納めた金髪。サングラス越しでも整っていると一目でわかる顔立ちのその女は、周囲の混乱の最中でもペースを崩さず悠然としている。彼女が居るのは既に大方の観客が逃げている観客席の一角。端の方であり人目には付きにくい場所だ。

「しかしもうちよつと頑張ってくれないかしらね。これじゃあ折角エムをお願いしたのに意味が無いわ」

スクリーンの中ではエムと戦闘に入った織斑一夏達の姿が見える。しかしその戦局は一方的であり、専用機持ちが6人がかりであるのにも関わらずエムが圧倒していた。ラウラの砲撃を容易く躲し、シャル

ロットとセシリアからの射撃も全て防ぐ。接近した鈴をその銃剣で弾き飛ばし、死角を突こうとした一夏と箒にはビットのレーザーが襲い掛かる。一年の専用機持ち達は自分達と相手との力量差に歯噛みしている様だ。

「無様ねえ」

「よく言うわね。イベントに勝手に参加しておいて」

背中から声がかかる。女は振り向かずにくすり、と笑った。

「あら、意外に早かったわね。生徒会長さん」

「お生憎様。うちのスタッフは優秀なのよ……それで何が目的かしら？ 亡国機業」

お互いに顔は見えない。しかし女には声の主である更識楯無がどんな顔をしているか想像がついていた。

「こんな所でのんびりしてていいのかしら？ 早く行かないと織斑一夏が危ないわよ？ それにこの会場もね」

「ええ、そうね。あの奇妙な形のIS達も気になる所だし、教えてくれないかしら？ あれが何で、そしてあなた達が何を考えているか」

楯無の声に陰が籠る。恐らくその気になれば今すぐにでもISを展開してこちらを拘束する気だろう。だが女は気にした様子も無い。

「そうね。しいて言うなら戦力調査かしら？ 噂の第四世代機的能力……その再確認ってどこね」

素直に話した女に楯無は訝しむ。そんな反応は面白く、女は更に続けた。

「後はまあこちらの新型の試験ってどこね。これで良かったかしら？」

「ええ。残りは冷たい鉄格子のなかで聞いてあげる」

「ふふ、無理よ」

何の予備動作も無しに女が振り返る。その手にはナイフが握られており振り向き様に楯無へ投擲。楯無も警戒はしていた為にそれを避ける事は出来たが、互いの距離は離れた。

「見た目と違って随分野蛮ね」

「見た目に捕らわれる様じゃまだまだお子様よ。……さて、では私は

御暇しようかしら」

「逃がすでも?」

楯無が直ぐにでもISを展開しようとするが女は首を振った。

「ええ。こうやってね」

不意に女のスーツの裾から金色の糸の様な者が流れ出す。ふわふわとなびく様に伸ばされていた糸が、まるで薙ぎ払うかのように楯無に叩き付けられた。

「くっ!?!」

楯無もISを即時に展開しその一撃を防ぐ。しかしその糸は楯無とミステリアス・レイデイにぶつかった瞬間眩い閃光を放ち楯無の視界を奪う。

「……………やられたわね」

楯無がようやく視界を取り戻した頃には女の姿はそこに無かった。

サイレント・ゼフィルスの放ったレーザーがラウラのシユヴァルツエア・レーゲンを貫いた。

「ラウラー!」

「くっ、大丈夫だ。だがこれでは…………!」

貫かれたのはレース用の増設スラスターの様だ。既に爆発寸前なまでに不安定なそれを解除したラウラが機体を確認し、眉を潜めた。「駄目だ、スラスターが完全に死んだ。飛ぶだけでは何とかなるが、それよりもここから支援する!」

「わかった。無茶するなよ!」

ラウラら自身が無事な事に安堵した一夏だが、その間にもサイレント・ゼフィルスは鈴とセシリア。そしてシャルロットと箒を相手に立ち回っていた。

「こんのっ、落ちなさい!」

鈴が《双天牙月》をサイレント・ゼフィルスへ振り下ろす。それを銃剣で防いだ所に箒が《空裂》による斬撃を繰り出す、それを新たに展開したプラズマナイフで受け止めた。

「これで！」

「どうですか！」

動きが止まった所にシャルロットがショットガンをセシリアがレーザーライフルを放とうとするが、そこにサイレント・ゼフィルスのビットから放たれたレーザーが邪魔をする。二人は何とか避けたものも、その隙に鈴と箒は弾き飛ばされていた。

「強い……！」

「なんなのよコイツは！」

歯噛みするシャルロットと鈴の横に並び一夏も相手を見据える。

そのサイレント・ゼフィルスは詰まらなそうに呟いた。

「この程度か。代表候補生に第四世代機が聞いてあきれるな」

「馬鹿にして……！」

再び鈴が飛び出す。それに箒が追従し、セシリアとシャルロットが援護に入る。

一夏も白式のスラスタを吹かせ、鈴と箒と共に接近戦に持ち込むべくサイレント・ゼフィルスへと向かっていく。だがその最中、サイレント・ゼフィルスの姿が掻き消えた。

「え？」

気づいた時には一夏の真後ろでサイレント・ゼフィルスが銃剣を振りかぶっていた。予備動作なしからの瞬時加速。それに全く反応できなかった一夏にその銃剣の一撃が叩きこまれる刹那、咄嗟に反応したシャルロットが身を割り込ませる。

「一夏！」

近接ブレード《ブレード・スライサー》でそれを受け止めたシャルロットだが、想像以上のサイレント・ゼフィルスの力に弾き飛ばされコースの壁に叩き付けられてしまった。

「シャルロット——つが!?!」

慌て、その場に向かおうとする一夏に蹴りが叩きこまれ、シャルロットと同じくコースの壁へと叩き付けられた。更にはサイレント・ゼフィルスはB Tライフルとビット、その両方から無造作にレーザーを発射。見当違いの方向に撃たれたと思われたそれは、突然進路を変

えセシリアと鈴を貫いた。

「きゃああ!？」

「くっ……!？」

二人もそのまま墜落して行き残されたのは箒一人。サイレント・ゼフィルスがゆつくりと箒にその銃剣の剣先を向ける。

「くっ、このおー!」

箒も《空裂》と《雨月》を手にサイレント・ゼフィルスへと斬りかかった。右に、左に。交互に繰り出す剣戟をサイレント・ゼフィルスはいともたやすく防ぐ。それならば、と箒は《空裂》を楯の様に構えつつ、《雨月》を持つ腕を引く。そして切っ先をサイレント・ゼフィルスへ向けると一気に突き出した。これは唯の突きでは無い。《雨月》は刺突と同時にレーザーを放出。サイレント・ゼフィルスを貫かんと迫る。だがそんな一撃もサイレント・ゼフィルスは機体を少し捻るだけで回避してしまう。そしてお返しとばかりに箒目掛けてナイフを投擲した。

投擲されたナイフは箒に当たる前に紅椿のシールドが防いだ。ばかり、と音がして一瞬箒の眼前が白く染まる。そしてそれが晴れた時には、先程の自分と同じように刺突の構えを取ったサイレント・ゼフィルスの姿があつた。

「——っ!？」

「興ざめだ。第四世代もこうなればただの玩具か」

紅椿の様にレーザーを発射したわけでは無い。だがその余りにも早い刺突によって空気が唸る音共に放たれた突きが紅椿に直撃。痛みと衝撃に箒の意識が途絶えた。がくり、と力を失った箒はサイレント・ゼフィルスの銃剣の上で、まるで干し物の様に垂れ下がっていた。

「くっ……箒……!」

一夏はふらつく体に鞭を打ち動かすが思う様に動かない。そんな一夏を一瞥するとサイレント・ゼフィルスは馬鹿にする様な笑みを浮かべた。

「あの——弟——この程度——」

小さく何かを呟いた様だが一夏には聞き取れなかった。そしてそのまま箒を連れたまま上昇していく。その光景に一夏の心に焦燥感と怒りが湧きあがる。

「待ち……やがれ！ 箒を、離せ！」

《雪羅》を構えるが、サイレント。ゼファイルスは気にした様子もない。その事が一夏の怒りに油を注ぐ。

「待ってって言ってんだよ！」

痛みを振り切って飛び出す。片手に《雪片式型》。もう片手には《雪羅》を構えサイレント・ゼファイルスに向かった一夏だが、彼がたどり着くよりも早く、空から降ってきた光がサイレント・ゼファイルスを霞めた。続いて黒い何かが超高速でサイレント・ゼファイルスへとぶつかる。ごうっ、と大気が振動し続いて響いたのは鈍い金属音。

「あいつは……！」

そして一夏はその正体を見た。漆黒の装甲に時折紅い光が線のように走る、巨大な翼を持ったISがその巨大な鉤爪を、サイレント・ゼファイルスの銃剣に押し当てている光景を。

そしてサイレント・ゼファイルスもまた、その相手を見て口元を歪めた。

「やつと来たか」

『ああ、来たとも』

機械によって変えられた無機質な声が答え、その背中から刺々しい尻尾の様なパーツがサイレント・ゼファイルスを襲う。サイレント・ゼファイルスは咄嗟に避けたがその際に黒いISは銃剣の上の箒を霞め取ると一夏に向けて放り出した。慌てた一夏が落下していく箒を受け止め、怒りをあらわにする。

「おい！ 危ないだろ！」

だがそんな言葉は聞こえていないのか、黒いISとサイレント・ゼファイルスはシールドバリアを突き破り市街地へと突入していくのだった。

『……おい、やっと例の奴も現れたぞ』

『そのようね。と、いうことは私達も?』

『そうしたいのも山々だがあのイカれたデカブツはどうする? 相手にしている余裕は無いぞ』

『あの黒のラフアールが相手をしてくれるだろう。だがあからさま過ぎても後が不味い。私が残ろう』

『一機じゃ駄目ね。私も残るわよ。さっきのがこちらの實力だと思われたら悔しいし。わざとやられるのって意外に難しいのよね』

『了解した……では後は手筈通りに』

『了解。あなたの国ではあれを鴉と呼んでいるんだっけ? ならこれは鴉狩り?』

『どうでもいい。私たちは仕事を果たすのみだ』

『了解。それでは行こう——レイヴンを捕獲しに』

戦艦型とIS委員会によって召集されたIS達が戦った空。その下にある海中で4つの影が動き始めた。

61. 仮面の下

麻生理沙。K・アドヴァンス社技術開発部門試験2部。またの名をEXISTの一人であり、コードネームはcover12。但し有事にはblade5となりISを駆る。その実力は普段の下つ端根性や、パシリ気味な扱いとは裏腹に確かなものであり、それ故にblade5の名を持つことが許されている。

だがそんな彼女も目の前の光景には流石に肝を冷やしていた。

「これはちよつと……キツイっすね」

彼女の前には灰色のISブラツディ・ブラツディが武器を構え滞空している。それだけならまだ良かった。だがそのブラツディ・ブラツディの背後には己が敵を撃ち落とした件の戦艦型が小型兵器と共に待ち構えているのだ。つまりB5は一人でこれら全てを相手にしなければならぬことになる。

「と、いうかもうこの段階で時間稼ぎも足止めも意味ないっすよね」
「そうでしょうね。私一人があなたを相手してれば後は彼女がやってくれるのですから」

そう言ってシェーリはちらり、と背後の戦艦型を見やる。確かにその通りだ。いくらB5でもあれら全てを相手にすることなど不可能である。

「まあ、だからと言って諦める訳にも行かないっすよ」

一人呟くと己が機体を構える。この黒に染め上げられたラファール・リヴァイヴは機体自体は以前B2が使用した物と同じである。但しパッケージは変更して有り自分にあつた物を選んでいる。これほどまでいけるかは定かではないがやるしかあるまい。

「ん？」

ハイパーセンサーに反応。それに続く様に海中から4つの影が飛び出した。直ぐにラファールがその影をズームし姿を捉え、その姿にB5は眉を寄せた。

「……そういふことっすか」

姿を見せたのはストライク・イーグルⅢ、テンペスタⅡ型、メール

シフトルーム、そしてアグニの4機だ。それらの機体はいくらかの傷は見えるが動く事には問題ない様に見える。そして4機は二手に分かれるとテンペスタⅡ型とメイルシフトルームは大会会場の方へ、そしてストライク・イーグルⅢとアグニはこちらに進路を向けた。その姿を見てB5は彼女らの狙いを悟る。

「初めから狙いはB9でこっちはオマケっすね……そっちは眼中にないらしいっすよ」

「まあそんな所でしょう。最も、彼女の存在を知っていたら判断は違ったかもしれませんが」

笑うシェーリが視線を背後の戦艦型へ移すと、合図のつもりなのか戦艦型はその場でぐるりと回転した。

「で、一体何なんすかあれ」

「れっきとしたISですよ。まあISの定義をパワードスーツとするのなら別かもしれないですが。因みに名前はレギオンです。……さて、それでは再開するのでしょうか」

「できれば遠慮願いたいんですけどそうも言ってもらえないっすよね……」

とは言ったものもこの状況は不味い。亡国機業側もIS委員会側も機体は複数なのに対しこちらは自分一機のみ。集中的に狙われればおしまいだ。IS委員会側は本来な味方でもおかしくないのだが、彼らの目的を鑑みるに期待しても無駄だろう。

どうしたものか、と冷や汗を流すB5。そんな戦場に新たな声が響く。

「随分と派手な事をやってるわね。おねーさんも混ぜてくれないかしら？」

声を共に現れたのは水のヴェールを纏い、左右一対のアクアクリスタルを従えたIS、ミステリアス・レイディを操る更識楯無だった。楯無は蛇腹剣《ラストイー・ネイル》をその手に不敵な笑みを浮かべている。

『大っぴらには無理だけど援護するわ。とりあえずは目先の敵よ』

「……感謝するっすよ」

プライベートチャネルでの密かな連絡にB5は安堵したが問題が一つ片付いただけで根本的な問題である目の前の連中を何とかしなければならぬ。覚悟を決めるとB5は戦闘を再開した。

その日の街はいつも以上に賑わっていた。それもその筈、市のアリーナで行われる一大イベント、キャノンボール・ファストの為だ。それを観戦するために訪れた人々。そしてチケットは取れずとも近くでその空気を味わいたい人々や、単純にお祭り騒ぎに惹かれてやって来た人々などが入り乱れ賑やかさを増して行く。近くにIS学園がある事から、この街は国際色も豊かであり、各国から訪れた観客や企業関係者などもその空気を楽しんで来た。

そんな賑やかな街に突如妙な音が響いた。重く、連続したその音は途切れ途切れに響き、道行く人々は首を傾げつつその音の元を探した。そしてその音の主達は突如人々の前に姿を現す。

ビルとビルの合間を縫う様に高速で飛んでいく濃蒼のISとそれを追う黒い翼のIS。2機のISはかなりのスピードを持って人々の上を飛んでいく。それを見て人々は歓声を上げた。通常でならありえない事だ。しかし今日行われているイベントの特性からして、なんらかのイベントかショーと勘違いしたのだ。普段TVやパソコンの画面越しにか見ないISが自分達の直ぐ傍を飛んでいると言う事に、彼らは興奮していた。

だが誰もがそうだった訳でも無い。一部の企業関係者。そして政府関係者はこの事態が異常だと気づいていた。飛んでいる2機のISはイギリスから強奪された機体と、時折現れる謎の黒い機体というのが何よりの証拠だ。彼らは直ぐに自分達の上司に連絡し、自らもすぐさま逃げだそうとする。しかし既に遅かった。

先に行く濃蒼のISから何らかのパーツが展開される。それはビットと呼ばれる遠隔兵器である事に気づいたのは極少数だった。だがその持つ力はすぐさま全ての人が知る事となる。複数展開されたビットが青く光るレーザーを発射したのだから。

「えっ？」

その眩きは果たして誰のものか。彼らの目の前で発射されたレーザーを黒い翼のISは機体を捻らせる事で紙一重で回避した。そして躲かれたそれは、射線上にあった巨大な広告看板を貫きその先にあつたビルをも貫通をもしていく。

貫かれた看板はそこを中心に融解しており、更には支えとなる部品が壊れたのか、徐々に傾いていき、そして遂に音を立てて落下した。「う、うわああああああ!!？」

落ちた看板はアスファルトを突き破り地面に突き刺さった。そしてその周りでは逃げ切れず、看板落下の衝撃を間近で受けた人々が血を流し倒れている。そこに来てようやく人々は理解した。いや、理解させられた。これがイベントでも何でも無い事に。目の前で流れているのは本物の血であり、自分達の真上で戦闘が起きているという事に。

街は一気にパニックに陥った。

『B9、街に被害が出ている。飛び道具には注意しろ!』

「分かっている！　だがどうしろと言うんだ！」

C1からの通信に怒鳴り返しつつ、静司は先を行くサイレント・ゼフィルスとそれに搭乗するエムを追っていた。先を行くエムはまるでからかう様に右に左に進路を変えてはビル街の間をすり抜けている。そんなエムに静司は右腕のガトリングガンを向けるが、射線上に建造物が多いために思う様に攻撃が出来ないでいた。エムもそれが分かっているのだろう。あえて静司と黒翼がギリギリ追いつけない程度の速度で街中を駆けていく。

「くそっ！」

銃が駄目なら近距離で仕留めるしかない。黒翼の出力を上げ、スラストを大きく吹かすと静司は一気に距離を詰める。だがそれをそう簡単に許すエムでは無かった。追いつがる静司と黒翼をビットのレーザーが狙う。静司はそれを避けようとしたが、その射線上にビル

がある事に気づき舌打ちした。

「ちいっ！」

避けようとしたその挙動を途中で止め、腕を交差し防御態勢を取る。直後レーザーが黒翼に直撃し機体が炎を上げた。その衝撃で高速で飛んでいた黒翼の機体がふら付き、バランスを崩す。その先にはビルの外壁が待ち構えていた。

「こんつつつのおー！」

意味の無い雄たけびを上げながら、強引に軌道を修正しようとしたが完璧とは行かなかつた。黒翼はビルの外壁を削る様に滑り、その軌跡にそってビルの外壁が砕け散っていく。静司はその衝撃すらも利用して強引に態勢を立て直すと再びエムを追い始めた。

「機体ダメージは!？」

視界にエムを納めながら確認する。腕部装甲一部破損。右翼スラストに軽微のダメージ。稼働率82%。作戦続行——可能。大丈夫だ。まだ動ける。だがこのままでは埒が明かないのも確か。近づくなら一気に近づかなくてはならない。

「やってやるさ……！」

即座に作戦を組み立てると静司は更に速度を上げた。同時に黒翼の出力も上げ、一気にスラストを全開にして瞬時加速を発動する。途端に視界が一気に狭まり、風景が超高速で背後へ駆け抜けていく。だがこれだけでは駄目だ。先を行くサイレント・ゼフィルスはビルの合間を縫う様に飛んでいるのだ。ほぼ直線にしか飛べず、持続性の無い瞬時加速では、敵には届かない。実際、サイレント・ゼフィルスは黒翼が追い付く寸前に横に舵を取りそれを躲した。そして静司の目の前に広がるのはビルの外壁。このままではぶち当たってしまう。だが、この状況は織り込み済みだ。

「っうー！」

強引に機体を上昇させる。確かに瞬時加速はほぼ直線にしか動けないが全く動けない訳では無い。それも事前にそうすると決めていたのならやり方次第では可能なのだ。だが無理な挙動は機体にも搭乗者にも負担を強いる。事実黒翼の機体は軋み、静司もまたPICで

制御しきれないGに歯を食いしばっていた。

あまりにも強引な急上昇。だがそれはギリギリで成功する。ビルの外壁を黒翼は急上昇していき、遂にはビルの高さを越していく。だがこれだけの速度を出した物がそう簡単に止まれるはずない。事実このままでは黒翼は慣性に従い上昇していきサイレント・ゼフィルスを見失ってしまうだろう。だからこそ静司はビルの屋上が見えると同時にその屋上へ黒翼の両膝の固定武装であるワイヤーブレードを打ちこんだ。奥深く打ちこまれたブレードは支点の役目を果たす。急上昇していた黒翼がある一点で急停止すると、今度は振り子の要領で弧を描く様にしてビルを飛び越え地上へとその軌道を変えることに成功した。

「捉えたー！」

その最中、眼下のビル街の中にこちらの行動は予想出来ていなかったサイレント・ゼフィルスの姿を捉えるとその勢いのまま落下する様に突っ込んで行く。屋上へ打ちこまれたワイヤーブレードが支えきれなくなり外れてしまうがもはや関係ない。静司は今度こそサイレント・ゼフィルスへ接近戦に持ち込むことに成功した。

静司は黒翼のその巨大な鉤爪を全力でエムへと振るう。エムもまたその手の巨大な銃剣でそれを受け止めた。金属がぶつかり合う音と一瞬の抵抗。

「器用な事だ」

「黙れー！」

エムが銃剣に込める力を強くし鉤爪を打ち払う。だがやっと近づけたこのチャンス而易々と逃す気は静司には無かった。再び左腕の鉤爪を相手を引き裂くが如く振り下ろす。それを迎え撃つエムの銃剣。ぶつかり合った互いの武器が火花と紫電を散らす。その至近距離でエムが繰り出した槍の様な蹴りを《アサルトテイル》で受け止め絡め取ると、更に引き寄せつつ右腕を振りかぶる。鉤爪を中央に束ね槍の様にした黒翼のその突きを、今度はエムが展開したエネルギーナイフが受け止めた。

「次はなんだ？」

お互いに両手を塞がれ、エムは片脚も封じられている。しかし静司と黒翼にはまだ脚がある。間髪入れずに両脚膝部のワイヤーブレードを射出しようとするが、そこをサイレント・ゼフィルスの周囲に展開されたビット達がレーザーで撃ち抜いた。

黒翼の両膝が小さな爆発を起こし、炎に包まれる。その衝撃でふら付いた隙にエムは《アサルトテイル》の拘束から抜け出すとそのまま一気に下降する。静司も炎の熱さと痛みで歯を食いしばりながらそれを追う。

エムが降下していったのはこの街の駅だ。IS学園や世界的大会を開ける規模の会場があるこの街の駅はかなりの広さを持っている。その中のホームまで降下するとレールに従う様にエムが進路を変えていく。あそこを飛ばれては射撃武器は使えない。その為に静司もまた同じように降下しエムに斬りかかる。その一撃をエムは器用に反転すると後ろ向きに飛びながら打ち払った。そのまま続く二撃目、三撃目もエムは容易く躲し、受け止め、弾いていく。

「襲撃の理由は何だ!? 一夏か!? それとも専用機か!?!」

「知りたければ倒せと以前も言った筈だ」

武器がぶつかり合う金属音と火花。そして紫電を撒き散らしながら2機は地上すれすれを高速で飛びながら接近戦を繰り広げる。その先には地下鉄に続くトンネルがあり、2機はそのままトンネル内へと突入した。

「ならば、今日こそお前に全てを話させる!」

一際強く振った鉤爪の一撃をエムは再度銃剣で弾くと速度を上げ黒翼との距離を離す。そのエムの背後に小さい光が見えた。このトンネル内を走る列車だ。

(まずいつ!?)

このままでは列車とサイレント・ゼフィルスがぶつかってしまう。そうなれば列車は唯では済まない。だがエムは速度を緩めることなく、むしろ加速していく。

「何を――」

焦る静司だが、その後にエムが取った行動に思わず絶句した。エム

はあろうことかISの装甲の大部分を解除したのだ。後に残ったのはISスーツとバイザー。そして申し訳程度の装甲のみ。そしてエムはそのまままるで背面飛びの様に体を捻らせた。トンネルの外壁と列車の車体。その間をこれまで加速した慣性を利用してすり抜けていく。高速ですり抜けていくエムと列車。時間にしては数秒程度ではあるがエムは見事に列車を躲すと再び装甲を展開し飛び去っていく。そして静司の目の前には今しがたエムがすり抜けた列車の姿があった。もはや静司に残された手段は一つだった。

「くそっ！」

同じように静司も黒翼の装甲の大部分を解除。全身を覆う装甲のみの準待機状態へ移すとその身を地面に水平させつつ、列車とトンネルの間に飛び込んだ。途端に空気の波を受けバランスを崩しそうになるのをPICで制御するが完璧とはいかなかった。軌道が逸れトンネルの外壁にぶつかりかけそうになるが、咄嗟に左腕を壁に押し付けた。装甲とトンネルの外壁が擦れ合う甲高い音が響き火花が散る。それでも強引に態勢を立て直すとほぼ同時、列車が通り過ぎていった。すぐさま黒翼の装甲を再展開するが時間をロスし過ぎた為にエムの姿はだいぶ先まで行っていた。

——このまま逃してしまふのでは無いか。

その考えが静司に焦りを生む。即座に瞬時加速を発動し追跡を開始した。暗いトンネルの中を2機のISが駆け抜けていく。やがて出口らしき光が見えてきた。そこから一足先にエムが飛び出し数拍遅れて静司も飛び出し高度を上げる。そして飛び出した静司の目の前には銃剣を構えたエムの姿があった。

「しまっ——」

「焦り過ぎたな」

その巨大な銃剣の先がぼう、と青く光り輝きそして破裂した。

「!？」

エムの銃剣から放たれた極太の光線。それを避ける術は静司に無く、光に飲まれた黒翼は衝撃と共に背後のビルへと吹き飛ばされた。轟音と共に外壁を突き破り、ビル内部の支柱にぶつかり、静司は膝を

つく。

「かはっ」

全身装甲の仮面の下、小さく血を吐いた。黒翼にはシールドバリアは無い。その出力は全て攻撃と機動にまわされている。それ故に喰らったダメージは軽減されることなく機体とその搭乗者に響くのだ。そしてそれを持って知っても目の前の敵には届かない。

「ふぎ、ける……なっ……い！」

それでもやらなければならない。それは自分の仕事の事もある。だが同時に自分自身の疑問の為でもある。目の前のエムと名乗る女。この女の正体を知る為の。

ぜえはあと息を荒らげながらゆっくりと外に向かい歩き出す。自分が突っ込んだこのビルのフロアは幸い何かの資料室か何かだったらしく、目に見える範囲にけが人は居なかった。黒翼の周囲ではファイルから外れた紙面が舞い、炎に侵されている。ビルの火災報知器がけたましい音を鳴らし、壊れたスプリンクラーが申し訳程度のシャワーを起動する。

「おま……えには、聞かなくちゃ……いけないんだよ……！」

不意に視界が暗くなっただかと思っただ瞬間、黒翼の顔面をサイレント・ゼフィルスが掴み、そして投げ飛ばした。静司は為す術も無いままビルの壁を突き破り転がっていく。衝撃に頭がシェイク視界が定まらない中、エムはゆっくりと静司に近づいてきた。

「足りんな。この程度では」

「……………」

「まあいい。これは私からプレゼントだ」

エムがその手にナイフを展開した。しかしそれは今までの戦闘で使ったものでは無く、刀身が白く濁っている。そしてエムはゆっくりと静司に近づくとその刀身を静司の胸へと突き刺した。

悔しい。

セシリアの心を占めるその言葉は怒りと苛立ちを孕んでいた。そ

これはサイレント・ゼフィルスに簡単にあしらわれたからでもあるが、何よりも彼女の心を昏くするのはそのサイレント・ゼフィルスが偏向射撃を使いこなしている事だった。

自分も、自分以外の本国の誰も扱えないそれをテロリスト風情が使いこなしている。その事実はセシリアのプライドを大きく傷つけた。(一体、一体なにが違うと言うのですか！)

B T適性は自分が最も高い筈。それなのに何故なのか。何が違うのか。どうすれば自分は愛機の本来の性能を引き出せるのか。疑問は苛立ちに変わりセシリアの心に昏くのしかかる。

「このまま、引き下がれるものですか……!」

機体はまだ動く。ならば動かなくては。先ほど例の黒い I S —— 以前一夏が聞いた所によると黒翼と名乗るそれが現れた。恐らくいつもの様に自分達を助けてくれるのだろう。だが代表位候補生たる自分が。専用機持ちである自分達が毎回毎回助けられているというのはどういう事か。少なくとも全てを任せて安穩とする気はセシリアには無い。故にセシリアは再び動き出した。

「セシリア! 動けるのか!」

「……ええ。大丈夫ですわ。私はサイレント・ゼフィルスを追います。

一夏さん達はここで——」

「駄目だ。俺も行く。毎回毎回助けられっぱなしじゃいくらなんでも格好悪い」

一夏がふら付きながらも名乗りを上げる。見れば鈴や箒。そしてシャルロットも理由はそれぞれ違いながらも追う気の様だ。

「鈴と箒は良いのか? それにシャルロットも」

「アンタ達だけに行かせられないわよ」

「そう、いう……事だ」

鈴と箒は即答。だが箒は先程のダメージが大きかったのかその顔は苦し気だ。

「……箒は駄目だ。ここで待っていてくれ」

「なんだとっ!」

声を荒らげ抗議しようとした箒が痛みで顔を顰める。

「きつきのダメージだよね？ 駄目だよ箒、無理して取り返しのない事になったら皆悲しむよ」

シャルロットが箒の肩に手を乗せ首を振る。それでも箒は何かを言おうとしたが、やはりダメージがきついのだろう。体を震わせ俯いた。そんな箒の背中をさすりつつシャルロットは一夏に答える。

「僕は行くよ。それにあの黒いIS……黒翼の人も気になるんだ」

シャルロットは一人うん、と頷くと機体を宙に浮かす。

「……私は無理だな。飛ぶことは可能でも戦闘機動は不可能だ。ただの足手まといになってしまう」

「そうか……わかった。きつともうすぐ先生たちが来るはずだ。それまで待っていてくれ」

「ああ」

悔しそうに顔を顰めるラウラだがこればかりはどうにもなら無い。

一夏達は機体ダメージを再度確認すると飛びだそうとするが、そこにラウラの声がかかる。

「先に言っておく。追撃すると言う事はおそらく教官の想いとは別のものだ。それでいいんだな？」

「……ああ。俺はあのまま放って置くなんて出来ない」

一夏の答えに全員が頷く。これは愚かな行為だ。この場に千冬や他の大人たちが居れば絶対に許可しない行動。それでも止まる気が無い一夏達の姿にラウラはため息を付いた。

「わかった。ならば無事に帰って来い。それとセシリア」

「？ なんででしょうか？」

突然声をかけられ訝しげなセシリアにラウラは少し考える様に首を捻りつつ告げる。

「お前の悩みの答えになるかどうかは分らんが、私を感じた事を一つ。戦いに置いて銃とは何だ？」

「……？ 敵を撃つ為の物ですわ」

「そうだ。究極的にそれが目的だ。銃は撃って目標に当てるものであって、曲げなければいけないものではない」

「!？」

「それだけだ。参考になればと思う」

「……ありがとうございます」

何かを考える様に頷きつつ礼を言うセシリアにラウラも頷く。そして一夏達は市街地へと飛び立って行った。

黒翼が突っ込んだビルから脱出するとエムは空を見上げた。そこにはテンペスタⅡ型とメルシュトロームの姿があった。それだけで2機の狙いを悟るとエムは小さく笑みを浮かべた。

『サイレント・ゼフィルスの搭乗者に告げる。これ以上の戦闘行為を直ちに中止しこちらの指示に従え。さもなければ撃墜する』

テンペスタⅡ型からの警告には耳も貸さずエムはその銃剣を向けようとしたが不意にスコールから通信が入った。

『はあい、エム。そちらはどう?』

「専用機達は話になら無い。時間の無駄だ」

『成程ね。わかったわ。今回の目的は達したし、帰ってきて頂戴。あなたの用事も終わったのでしょうか?』

全てはお見通しと言う事か。エムは表情を変えることなく、内心で舌打ちした。

「了解した。帰投する」

通信を切ると銃剣をしまい明後日の方向へ機体を向ける。ちらりと上空の2機を見ると追う気は無いようだ。

『投降の意思なしか。これは追撃するしかないか?』

『けどここで戦闘はじめてたら日本人に被害がでるわね。許可が必要だわ』

『ああ、そうだな。許可が必要だ』

(白々しい事だ)

もはや追う気は無いのだろう。何故なら奴らの目的であった黒翼はあのビルの中で機動停止しているのだから。だが別に構わない。むしろその方が面白い。

エムは小さく小馬鹿にする様に笑うとその空域を離脱していった。

エムが飛び去った後、テンペスタⅡ型とメイルシュトロームは破壊されたビル内部を確認し、思わず笑いを漏らした。

「ほう、随分と粋な置き土産だな」

「全くね。こちらの手間が省けたわ」

彼女らの前には横たわりピクリとも動かない黒翼の姿があった。搭乗者は意識を失っているのだろうが、IS自体は解除されていない。

「ここから運び出すぞ」

「了解」

メイルシュトロームは数本の拘束用ワイヤーを展開すると黒翼に巻き付けていく。そしてがんじがらめに縛り付けると黒翼をビルから引っ張り出した。メイルシュトロームに吊るされるような形となった黒翼だが全く動く様子は無い。それでも念の為にメイルシュトロームは更に数本のワイヤーで拘束した。

「意外にあっけないものだったな。まあいい。こちらも帰るとしよう」

「待て！」

帰投しようとした2機の前に複数のISが現れた。一夏達一年専用機持ち達である。一夏は周囲を見渡しサイレント・ゼフィルスの姿が無い事を確認すると首を傾げた。

「サイレント・ゼフィルスはどこだ？ それにお前達は!？」

「なんだ、学園のガキどもか。正義感かざして追跡か？ 馬鹿な事だ」

「なんですって!？」

テンペスタⅡ型の言葉に鈴が激昂する。だが2機は気にした様子も無い。

「身の程を知れと言われたのよ。追ってきた所で貴方達に何ができたの？ 気合いや運で勝てるとは思わない事ね」

「なんだと……！ そもそもお前達は誰なんだよ」

「IS委員会からの使いだよ。聞いてるだろ？ 警備に委員会に召集

された部隊が参加すると」

話は終わりだとばかりに2機は動き出すがその前にシャルロットが立ちはだかった。

「何の真似だ？」

「その人を……どうする気ですか？」

シャルロットの視線の先には拘束され全く動かない黒翼の姿があった。問われたテンペスタⅡ型はふん、と鼻を鳴らす。

「簡単な事だ。未登録尚且つ強力なISが野放しになっていたんだぞ？ 拘束するのが当たり前だ」

「だけどその人は！」

「何度も助けてくれた、か？ だからどうした。アラスカ条約を知らぬわけでもあるまい」

「くっ……」

悔しそうに呻くシャルロットを見てテンペスタⅡ型の搭乗者は意地の悪い笑みを浮かべた。

「だがそうだな。お前達にも多少は知る権利があるかもしれない事だしサービスしてやろう」

「何の……事ですか？」

「決まっているだろう。この仮面の下の素顔だよ」
「!？」

全員の肩がびくつ、と震える。そう、確かに気になるのだ。何度も自分達を救ってくれたあのISの正体は。だがそれを知られたくないからこそ、黒翼はいつも直ぐに姿を消すのだと言う事も理解している。その思いの板挟みで硬直したシャルロット達を尻目にテンペスタⅡ型は拘束された黒翼の正面に回り込んだ。

「銃や剣では下手したら殺してしまうか。なら少々面倒だが」

そう言うと黒翼の頭部。装甲に覆われ素顔を隠したそこを掴んだ。そしてその握力を高めていく程に金属が軋む音が響いていく。

「さあ、その素顔見せてもらおうか」

テンペスタⅡ型が更に握力を高めていき、そして遂に黒翼の頭部装甲に亀裂が入った。

62：悪夢

B5の放った弾丸が空を無数に飛び回る小型兵器を撃ち抜いた。胴体中央に風穴を開けられた小型兵器はバランスを崩し火を噴き墜落していく。

「つたく、これで何機目っすか!？」

毒づきつつ己の駆るラファールの武装を確認する。左腕の銃は先程敵の攻撃を防いだ時に壊されてしまった。右腕も通常武装は生きているが腕部に接続していた長距離ライフルは半ばで折れてしまひもはや使用できない。その他にも傷が全身各所にあった。

対して敵はシェーリの駆る悪趣味なIS《ブラッディ・ブラッディ》と戦艦型は未だ健在。戦艦型の周囲を飛ぶ小型兵器は数こそ減ったものも油断は出来ない状況だ。

唯一の救いはIS委員会側の機体がこちらに攻撃を仕掛けてこない事だった。状況的にもあからさまにこちらを狙っては、この戦闘を見ている者達に不信を抱かれるからであろう。B5が会場へ侵攻する敵を食い止めようとしているのは誰の目にも明らかなのだから。

「ちよーと、お姉さんもこれは大変ね」

見れば楯無も忌々しそうに敵を睨みつけていた。その顔には疲れは見えないが、言葉の端々に焦りの様なものは感じ取れる。

「何か良い手はないっすか？　IS学園の秘密兵器とか更識家の爆裂マシンとか」

「あら、いいわねそれ。今度はそれを準備しておきましょう。そういうそちらは？」

「秘密のままの方がきつとみんな幸せな秘密兵器なら社にあるんすけどねー。予算とか余波的な意味で」

「駄目ね……っ！」

突進してきた戦艦型を楯無は紙一重で躲すとランス状の武器《蒼流旋》の矛先を戦艦型に向けた。そして搭載された四門ガトリングガンが戦艦型を狙うが、図体に反して機動性の高い戦艦型が加速して難を逃れた。舌打ちする楯無目掛け新たな小型兵器がブレードを振りか

ぶるが、それを蛇腹剣《ラスティ・ネイル》で絡め取るとそのまま絞める力を上げ切り裂いた。

「全く、軽口叩く余裕も無いわ」

楯無の言葉に無言で同意しつつB5はIS委員会側の機体を見やる。ストライク・イーグルⅢとアグニはシェーリのブラッディ・ブラッディを相手にしている。アグニが後方から援護射撃をし、その合間にストライク・イーグルが仕掛けている様だが、あちらも要所要所で戦艦型の小型兵器が邪魔をしよう様についていない様だった。

「このままじゃ埒が明かないっすね」

B5の中に不安が過る。それはこの場で落とされる不安だけでは無い。先ほどB5——静司がサイレント・ゼフィルスに敗北し、更にはIS委員会側のISに捕らわれたという知らせを受けたのだ。通常なら静司が大人しく捕まったままの筈は無いので、おそらく身動きが取れないのだろう。だからこそ救援に行かなければなら無いのに目の前の敵が邪魔で思う様にいかないのだ。

(これはいよいよ覚悟の時って奴つかね……)

ぎりつ、と歯を噛みしめ最悪の可能性を視野に入れた行動に移そうとした所で、不意に戦艦型と小型兵器、そしてシェーリが動きを止めた。

「……？」

IS委員会側も楯無も訝しげに見つめる中、シェーリはため息を付くとその手の武器を降ろした。

「何のつもりかしら？」

代表して楯無しが問うとシェーリはどこか詰まらなそうな顔でもう一度ため息。

「いえ、中々いい所だったので今回はそろそろ引かせて頂きます」

「なんですって？」

「まあこちらの目的は達しましたし、これ以上は蛇足と言う事ですよ。帰りますよ、レギオン」

シェーリの言葉に戦艦型——レギオンはくるりとその機体をロールさせた。そしてそれを合図とする様に周囲の小型兵器達が一斉に

レギオンの元に集まり接続されていく。その様子を見てB5は眉を潜めた。

「やはり……それはビットだったんすね」

「ご名答。《レギオン・ビット》よ。素敵でしょう？」

そう笑うと2機はふわり、と一段高度を上げる。B5も楯無も、そしてIS委員会側もそれを追おうとはしない。この場での追撃よりも優先すべき事があるからだ。無論、それさえなければ逃す訳も無いのだが。この周囲は既に各国、各組織によって監視されている。その程度で奴らがボロを出すとは考えにくい。今は彼らに任せるしかないだろう。

「それではまた逢う日まで……ああ、そうでした。我が主から彼へ伝言です」

ぴくり、とB5の眉が揺れる。この場で『彼』という単語が出てくるとなるとおそらく静司の事だろう。だが伝言とは何だ？

『ISの可能性。親である博士は進化を魅せた。迷い子を拾った私たちは可能性を魅せた。では、捨て子を拾った貴方達はどんな可能性を魅せてくれるのかしら？』……以上です。では、彼によろしく」

最後にそう告げるとシェーリはこちらの事など気にしていないかのように悠然と高度を上げ離脱していった。後に残されたのはB5と楯無。そして委員会のISのみ。

「魅せる？ いちいち面倒な物言いしてくるツすね。劇場型って奴っすか？」

シェーリの言葉の意味は気になるがそれは後で考えればいい。それよりも今は、

「さて、どうやってB9を助けにいくっすかね……」

ストライク・イーグルとアグニが武器をこちらに構えたのを見つ、B5は小さくため息を付いた。楽しく無い鬼ごっこの始まりである。

頭が痛い。

割れる様な頭痛と。直接かき回される可能様な気持ち悪さ。視界は定まらず時節砂嵐の様に途切れては別のものを見せる。耳も同じでノイズ交じりに誰かの声が聞こえるが、それが誰なのか分からない。

自分がどうしてこんな状況に陥ったのか？ 覚えているのは深い青い色の機体。黒い髪。バイザーに隠された少女の顔が笑い、そして胸に何かを突き刺した。その瞬間からその胸を中心として何かが、そう何かが自分と黒翼を浸食している。

「あ……っが……」

涎交じりの声が漏れる。一体これは何だ。何が起きている。

そんな思考に徐々に黒い靄の様なものがかかっていく。抗おうとしてもどうにもできず、靄は次第に体を包んでいく。そしてその靄の中で幻を見た。

「あ……っ……あ……」

黒の長髪。切れ長の相貌。凜々しくも整った顔立ち。その顔は知っている。知ら無い訳が無い。だってあれは――

手を伸ばす。だが届か無い。喉から出る声は言葉にならず、苛立ちに体を振ろうとするがそれすらもままなら無い。

目の前の幻は5つ。厳しいながらもどこか見守る様な顔。穏やかな笑みを浮かべる顔。太陽の様な明るい笑顔を浮かべる顔。何か悪戯を企んでいる様に笑う顔。そして表情の変化こそ乏しいが、どこか満足そうに笑う顔。かつて何よりも身近にあつて、そして失ったそれが目の前にある。だから静司は必死に手を伸ばそうと、声をかけようとするが上手くいかない。まるで鎖で雁字搦めに縛られたかの様に、動くことが出来ない。

「ねえ……っか……」

それでも諦めれずに身を振ったその時、目の前の幻が不意に赤く染まった。

「あ……っ……」

そして続く耳をつんぎく様な爆音と熱風。通常なら目も開けられ

ない程の衝撃にも関わらず、何故か静司は目を開けたままでいられた。そしてそれ故に、その炎によって幻が焼かれて、崩れ落ち、そして物言わぬ軀となつていく姿を見せつけられる。

「あ……ああ……つあああああああああ!?」

見せつけられた光景。トラウマとも呼べるその光景に喉から絶叫が漏れる。そしてとめどなく流れる涙に滲んだ視界に、新たな人影が写った。顔は良く見えないが、その人影は頭に兎の耳を生やしており、そして周囲には無機質な機械の兵隊を従えている。

あいつだ……

爪が食い込む程に拳を握りしめる。

あいつだ。

絶望が怒りとなつて己が心を焼く。

あいつだ!

だがどれ程怒りに身を燃やしてもこの体は動かない。拳は握れても腕は、脚は動こうとしない。ふざけるな。そんな事許されない。今動かずして何の為に今まで! 何の為に力を! だから、動け。動け。動け! 俺に、目の前の敵を駆逐するための力を――

不意に自分の真横に新たな影が現れた。それは全身を黒に塗りつぶされた人影。腰まで伸びる長髪と引き締まった体軀。その輪郭だけでそれが何を模したのか分かつてしまう。だがこれは違う。これは姉では無い方だ。もっと強い方――自分達のオリジナルに近いモノ。

だから静司は求めた。今この時の激情に任せて。怒りに任せて。絶望に後押しされて。

「つあ――――あいつを――す……力をっ!」

やっど発したまともな言葉。それが引き金となり影が静司を取り込んでいく。急速に視界が暗くなつていき、酩酊していく意識の中、『Valkyrie Trace Systemインストール完了』
声が、聞こえた。

テンペスタⅡ型によつて捕らわれ、その仮面を今まさに剥されようとしていた黒翼。その光景を目の前にシャルロットは葛藤の中にあつた。本音を言えば今すぐにも助けたい。例え正体が分からずとも、あのISとその搭乗者は自分達を何度も助けてくれたのだから。しかし今それをしてしまうとIS委員会を敵に回す事になってしまう。その迷いが彼女の行動にブレーキをかけていた。

「それ、そろそろだな」

テンペスタⅡ型が掴む黒翼の頭部。その装甲の亀裂が更に大きくなつていく。もはやその素顔が晒されるのは時間の問題と思われたその時、黒翼がぴくりと動いた。

「ほう、目覚めたか？」

テンペスタⅡ型の搭乗者が面白そうに笑う。それは例え目覚めたとしても動ける訳が無いと言う自信があつたからだ。事実、雁字搦めに拘束された黒翼は身じろぎはするがまともに動けずにいる。

「丁度良い、そろそろ——」

しかしそこで誰もが予想だにしない事が起きた。捕らわれた黒翼、その両翼が煌めいたかと思つた瞬間、黒翼が爆発したのだ。

「っ、なんだ!？」

「じ、自爆……!?!」

テンペスタⅡ型は突然の爆発に吹き飛ばされたものも、即座に空中で態勢を立て直した。そしてメイプルシュトロームは今の爆発で千切れたワイヤーを捨てつつ、警戒しながら爆発の中心部を睨む。

そしてその中心部、炎と煙が晴れていくと黒翼がその姿を現した。自爆では無かつたのだ。だがその装甲を先ほど以上にボロボロで、あちこちが焦げ付き焼けている。そしてその特徴とも呼べる巨大な両翼は見る影も無く無残な状態となつていた。それを見てシャルロットは顔を青くした。

「まさか……あの翼の武器を発動した……?」

そうとしか考えられない。黒翼は拘束された状態で両翼の砲門を開き発射する事で、拘束していたワイヤーごと自らの翼を破壊したのだ。

「なんて無茶すんの上アイツ……」

鈴が呆然と呟く。それは一夏もセシリアも、そしてシャルロットも同じ気持ちだった。だが、テンペスタⅡ型とメールシュトロームは少し違った。

「もう一度拘束するぞ。あの傷だ。逃げれるとは思えん」

「了解。直ぐに——」

『——ッ!』

それは突然の咆哮だった。黒翼がまるで獣の様に大声で雄たけびの様に叫び、自らの頭を抱える様にして身を震わせた。

『ア……アア……!』

がくん、と黒翼が力が抜けた様にその両腕を垂らす。宙に浮いている事から気を失っていない事は分かるが、その周囲には異様な雰囲気溢れていた。

「おい、これはどういう事だ?」

「わからないわ。けど油断は禁も——」

突如、黒翼が動き出す。両翼は失ったのにも関わらず爆発的な速度でメールシュトロームの背後に回り込み、その鋭利な左腕の鉤爪を振るった。

「え?」

余りにも突然のその動き。そして異常なまでに洗練された無駄の無い一撃。それがメールシュトロームの背部を切り裂き炎を上げ、あっけなく墜落していく。

「なんだコイツ、いきなり……っ!!」

メールシュトロームを切り捨てた黒翼はその標的をテンペスタⅡ型に移すと、同じように異様な速度で間合いを詰めその腕を振るう。テンペスタⅡ型はサーベルで何とか受け止めたが、勢いに押され後退してしまう。すかさず黒翼はそれを追撃する。その動きは今まで少し違う。

今までの黒翼はその鉤爪と両翼両腕の重火器を駆使して戦闘を行ってきたが、今はその左腕の鉤爪を主に戦っているのだ。確かに両

翼は使い物にならない程壊れているが右腕は別だ。まだ鉤爪も銃器も生きている様に見えるのに、それを積極的に使う様子が無い。そしてその鉤爪の使い方も少し違う。今までの獣の様に縦横無尽に切り裂く形でなく、まるでそれを一振りの刃に見立てた様な動きをしているのだ。

『ア……ッ……ウー！』

言葉になら無い音を漏らしつつ黒翼が振るった左腕の鉤爪を受け止めたテンペスタⅡ型が怒りに身を震わせた。

「調子になるなよ、獣が！」

テンペスタⅡ型が黒翼目掛け機関銃を撃つ。至近距離から放たれそれだが、黒翼は宙に居るのにも関わらず、まるでステップを踏むようにして機体を回転させそれを躲しつつテンペスタⅡ型の背後へ回り込んだ。そしてその勢いのまま左腕を振るうがテンペスタⅡ型もその程度ではやられない。機体を前に倒しそのまま半回転。上下逆向きの状態で黒翼の鉤爪を受け止め、そのまま蹴りを黒翼の頭部に叩きこんだ。

バキンツ、という音と共に黒翼の頭部装甲の一部が砕けた。しかしまだ素顔を晒すまでにはいかず目元が少し伺える程度だった。そしてその眼を見た瞬間、テンペスタⅡ型は動きを止めた。

「……っ!？」

そしてその隙を黒翼は逃さなかった。テンペスタⅡ型の蹴りも物ともせず、左腕の鉤爪を下から切り上げる様にして振るう。テンペスタⅡ型は避ける事も叶わず肩口から切り裂かれ火を上げて墜落していった。

「す、す……」

思わず鈴が声を漏らす。つい先程まで絶対絶命だった筈があつという前に形成を逆転させたその姿に一夏もセシリアも驚愕していた。しかしそれ以上の不安をシャルロットは感じていた。何かがおかしい。あの黒翼は何時もと何かが違うと言う事をひしひしと感じる。

黒翼は墜落していくテンペスタⅡ型を一瞥するとこちらに眼を向けた。その頭部は一部装甲が砕け片方の眼だけは見えている。そし

てもう片方の機械の目は赤く不規則に点滅していた。

ぞわり、とシャルロットの中に悪寒が走る。そしてその感覚に従い咄嗟に叫んだ。

「逃げてー！」

その言葉を皮切りに黒翼が一夏目掛けて飛び出した。

「なっ!？」

シャルロットの警告が効いたのだろう。反射的にその場を飛び退いた一夏。その一瞬前々で居た場所を黒翼の鉤爪が薙ぎ払う。

「何なのよアンタ！ 味方じゃなかったの!？」

「一夏さん！」

鈴とセシリアも慌てて戦闘態勢を取るがそれよりも早く、黒翼は一夏に飛びかかった。対する一夏も《雪片式型》でその鉤爪の一撃を受け止めた。

「どうしたって言うんだよ！ おい！」

一夏は必死に呼びかけるが返ってきたのは言葉とも言えない咆哮。そして黒翼の脚が振り上げられ一夏と白式を蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた一夏は背後のビルに突っ込み轟音と共にビルの外壁を突き破った。

「一夏！ この、アンタいい加減にしなさいよね！」

更に追撃しようとする黒翼目掛け鈴が衝撃砲を撃つ。黒翼はそれをいともたやすく回避すると、メールシュトロームやテンペスタII型にやったように異様な速度と完璧なタイミングで一氣に間合いを詰めてきた。だがその鉤爪を振るう前に即座に背後に飛び退く。それを追いかけるようにしてセシリアのBTライフルがレーザーを連射する。

「一体どういう事ですのー！」

叫び、連射するセシリアだがそれは全て躲かれ、逆に今度はセシリア目掛け間合いを詰めてくる。セシリアも咄嗟に近接武器《インターセプター》を展開するが、その小さなナイフで黒翼の鉤爪を相手にするのは誰が見ても無謀に思えた。

「セシリアー！」

そこに咄嗟に割り込んだのはシャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡだ。近接ブレード《ブレード・スライサー》で黒翼の一撃を受け止め、更に力負けしない様にスラスタを全力で吹かす。「くうっ……！」

それでも黒翼の一撃は重く、徐々に押されていく。しかしその黒翼目掛け今度は鈴は大型青竜刀《双天牙月》を投擲した。回転しながら迫るそれは全ての敵を細切れにする――筈だったが黒翼はシャルロットとの鏖迫り合いを引くと、即座に上に飛びそれを回避する。そして見下ろすような黒翼と、それを見上げる鈴、セシリア、シャルロットは息を荒らげた。

「強い……！ だけど何で突然。それにあの動きは？」

「確かに異常ね。あの翼が死んでるのにアレだけ動けるってどういう事よ」

「だけど無理をしているのも確かだよ。明らかに機体は限界に見える」

シャルロットの言う通り、黒翼は各所から火花を散らし煙を吹いている。だがそれでもこちらに向けた敵意は消えていない。

(え……？)

そこでシャルロットは気づく。確かに敵意は向けられている。事実攻撃だつて受けた。だがそれなら何故自分達は無事なのだろうか？ メールシュトロームとテンペスタⅡ型はあつと言う前に斬り伏せられた。あの2機は機体性能は別として明らかに自分達より技量が上だった。それを即座に倒せるような相手が、自分達相手にそれが出来ない事がどこか不自然に感じる。

「くそ、痛つてえ……！」

「一夏ー！」

一夏もまだ無事らしくビルの中から飛び出した。だが状況は対して変わっていない。何よりも黒翼の突然の異変にシャルロット達は未だ戸惑っていた。そんな中、一夏は言葉を漏らす。

「千冬姉……！」

「え？」

「あの時……ラウラの時と同じだ。あいつの動きは千冬姉を真似ている……！」

ぎりつ、と拳を握りしめる一夏の言葉にシャルロットははっと気づく。そうだ、この状況はラウラのVTシステム暴走事件と似ている。そうなるともしやあの黒翼にもVTシステムが？ 疑問は尽きないが一つだけ分かった事があった。

「つまり……ラウラの時みたいに一夏がぶった切ればいいのよね」

「正確には行動停止に追い込む、と言う事ですわね」

「そういう事だね。一夏、大丈夫？」

シャルロットが心配したのは一夏の機体の事もあるがそれよりもVTシステムの事だ。以前一夏はあのシステムを見て怒り狂っていたことがあったからだ。だが一夏は小さく頷くつと武器を構えた。

「ああ。正直ムカつくけどあの時みたいに馬鹿みたいに突っ込まない。俺だって成長してるんだ」

「ふん、粋がっちゃって」

どこか嬉しそうに鈴が笑い、セシリアとシャルロットも笑みを浮かべた。大丈夫、皆で連携していけばきつと――

なんとかなる、その思いは突如セシリアの背後に現れた黒翼が振るった鉤爪によって打ち砕かれた。

「きゃああああ!!」

スラスターを破壊されたセシリアのブルー・ティアーズが墜落していく。何とか体勢を立て直そうもがくが、セシリアはビルの屋上の一つにそのまま墜落していった。

「セシリア!! きゃあつ!!」

黒翼はセシリアを斬るが否や、今度は鈴へと飛びかかる。鈴も《双天牙月》で対抗するは重い黒翼の一撃に武器が弾き飛ばされてしまった。そしてがら空きになった腹部へ黒翼の回し蹴りが叩きこまれた。先の一夏が喰らった一撃とは比べ物になら無い重さを持ったその蹴りによって鈴が背後へと吹き飛ばされ墜落していく。

「この野郎おとおおおおお！」

一夏が《零落白夜》を発動。エネルギー無効化の刃で黒翼に斬りか

かるが黒翼は無造作に右手を伸ばすと、いとも容易く一夏の武器を握る腕を白式の装甲ごと掴み上げた。渾身の一撃を思いもよらぬ方法で容易く止められた一夏が驚愕に眼を見開く中、黒翼の膝蹴りが一夏の腹に叩きこまれた。

「げほっ!？」

シールドバリアも装甲も関係なく内臓に響いたダメージに一夏が息を漏らす。黒翼はそんな一夏を振り回すと再度ビル目掛けて叩き付ける様にして投げ飛ばした。轟音を撒き散らしてビルに叩き付けられた一夏。黒翼は更に追撃を加えんと鉤爪を槍の様に構えて一夏目掛けて空を疾駆する。

「っ、させないー!」

シャルロットはアサルトカノン《ガルム》と連装ショットガン《レイン・オブ・サタデイ》を展開すると一夏目掛けて空を走る黒翼目掛けて引き金を引いた。響く重い銃声と発砲の衝撃。それを感じながらシャルロットは黒翼へ距離を詰める。行動を邪魔された黒翼は標的をシャルロットへ変更するところらに向かつて来た。

繰り出される鉤爪の一撃。咄嗟に《ガルム》を捨て再び展開した《ブレット・スライサー》で受け止める。そして《レイン・オブ・サタデイ》を至近距離で発射。だが突然黒翼の姿が消えた。

シャルロットは咄嗟に《レイン・オブ・サタデイ》を捨てるとその手にも《ブレット・スライサー》を展開。そして勘としか言えないその感覚で振り向き《ブレット・スライサー》振るう。果たして、その一撃は黒翼の鉤爪を受け止める事に成功した。そう、黒翼は一瞬の隙に即座に背後に周りこんでいたのだ。これも先ほどまでの戦いを見ていたからこそ反応できた。

お互い部位をぶつけ合い至近距離で睨み合うシャルロット黒翼。だがシャルロットの中にはまだ迷いがあった。

「お願い! 正気に戻って!」

『ア……………ッ……………ス……………!』

ジリジリと背後に押されていく。しかしシャルロットは確信した。まだ黒翼は完全に暴走している訳では無いと。視界の端の戦況モニ

ターではハイパーセンサーが捉えた情報——墜落したのも未だ動けるセシリアの姿や、ふらふらと立ち上がる鈴の姿が見える。一夏もデータ上ではまた無事だ。先ほどのIS委員会側のIS達は即座に戦闘不能にしたこのISが自分達相手にそれをしないのは、搭乗者にまだ意識が多少なりとあると感じたのだ。

「そんな状態で戦い続けたら僕たちの前にあなたが死んじやうよ！だからお願い！」

黒翼の様相は酷い物だ。装甲の一部からは血も垂れている。そしてあんな強引な動きをし続けていればそれは搭乗者にも大きく響く。故にシャルロットは懇願する様に叫びつつ、唯一見える黒翼の中身。破壊されてむき出しになった眼を見つめ、そして息を飲んだ。

そこにあつたのは焦点の合わない濁った眼。その眼の中には怒りや悲しみ。混乱とそして戸惑いか見えた。しかし何よりもシャルロットの意識を引いたのは別の事。この眼を、この目の前に居る人物の眼を自分はどこかで見た事がある？

『……………ト』

「え？」

黒翼が呻く様に、もがく様に声を漏らす。

『シャ……………ル……………ロ……………ト……………』

「!？」

何故、黒翼はその名を呼んだのかは分からない。だが、だがこの感情何だ？ この違和感は何？ そんな筈は無いと否定しつつ、しかし一つの可能性が浮かんできてしまう。余りにも滑稽で、しかし自分の感覚が猛烈な違和感を感じさせている。

『デュノア、無事か!？』

不意に広域通信で千冬の声があった。そして視界の端に新たなデータ、打鉄でこちらに急行する千冬の物が写る。

『直ぐにそこに行く！ 退避しろ！』

「で、でも」

『アアアアアアアアアアアアアアアアアッ!？』

突如黒翼が頭を抱え叫びだした。まるでその声を聞きたくないか

のように全身を振るせ、空中でのた打ち回る。

「ど、どうしたの!?! 一体——」

その余りにも異様な光景にシャルロットは手を伸ばそうとして、

『アアアアアッ!?!』

そのシャルロット目掛けて振り抜いた黒翼の鉤爪が、彼女の胴体を切り裂いた。

「シャルロットさん!?!」

その光景はビルの屋上に居たセシリアから良く見えた。千冬の声がした途端、突如狂った様に悶えた黒翼。そしてその振り抜いた一撃によつてシャルロットは斬られ、空に血が舞った。

いけない。早く助けなければ。何とかしなければあの狂ったI Sに友人が殺されてしまう。だがどうすればいい? ここで作れるのは狙撃する事だけ。その狙撃もまるで当たる気がしない。黒翼、サイレント・ゼフィルスとこの2機との戦いの中、まともに当てられていないのにこんな機会に都合よく当たられるのか? せめて、相手の予想外の攻撃さえ出来れば。

考えるのは偏向射撃の事。しかしそれは一度も成功していない。いくら曲げようとしても全くそれは実現しない。こんな力では頼る事も出来ない。それでも、

「くっ」

痛む体に鞭を打ちロングライフル《ブルー・ピアス》を構える。出来ないからと言って、当たらないからと言って何もしない訳にはいかない。見れば鈴も、ふらふらになりながらもなんとかシャルロットから黒翼の注意を引きはがそうと武器を構えている。そうだ、ここでこそ自分の出番だろう。自分はセシリア・オルコット。この蒼き雫は敵を……流星すら撃ち抜くI Sなのだから!

撃つ、撃つ、撃つ。連続で放たれたレーザーはいずれも黒翼には当たらない。ましては偏向射撃も出来ていない。だがそれでも構わない。今はシャルロットから黒翼を引きはがす事を考えろ。だからひ

たすらに撃ち続ける。

「ブルー・ティアーズ！」

砲門を塞がれマウントされていたビットを強制解除。そしてその砲門全てを黒翼目掛けて撃ちまくる。だがそれらを避け、黒翼は落下していくシャルロットへ手を伸ばす。

(駄目ッ!!)

もはやレーザーを曲げることなど考えていなかった。ただ単に、友人を守りたいが為にひたすらに射撃を続けたセシリアだったが、それすら叶わず黒翼がシャルロットへ触れそうになる。それを見た瞬間無意識に、そう、本当に無意識にセシリアは手を振るった。

「当たれっー！」

それはまるで指揮者の様に振るったセシリアの手に従って、放たれていたレーザーが一斉に曲がった。

「え?」

突如進路を変えたレーザーは黒翼を前後左右から撃ち抜き、爆発。その隙に飛び出した鈴が落下していくシャルロットを受け止め即座に距離を取った。

「できました……の?」

不意にラウラの言った言葉が思い浮かぶ。『銃は撃って目標に当てるものであって、曲げなければいけないものではない』と彼女は言った。改めてその言葉を考え、ふと気づく。今まで自分は曲げることに拘り過ぎていたという事に。自分は現状に焦っていく内に、知らず知らずの内に相手に当てる事よりも、自分の攻撃を曲げる事を目的として引き金を引いていたのだ。そんな想いにこのブルー・ティアーズが同調する訳が無い。だから思う様に出来なかったのではないか?そして今、友人を助ける為にセシリアは偏向射撃など考えず、ただひたすらに当てる事だけを考えていた。それにブルー・ティアーズも同調してくれ、稼働率が上がったと言う事だろうか?

「まったく、素直じゃありませんのね……誰に似たのやら」

小さく呆れた様に、しかしどこか誇らし気に機体を撫でる。本当はこの気まぐれな相棒をもっと知りたかったが今はそれどころでは無

い。再び空に視線を移すとボロボロながらも未だ健在の黒翼が見えた。それを見て改めてライフルを構えるが、そこに声が入る。

『よくやったオルコット。後は任せろ』

次の瞬間、高速で接近した打鉄が黒翼の腹部を切り裂いた。

いけ好かない連中の避難も終え、ようやく現場を他の教師達にまかせて打鉄で駆け付けた千冬が見た光景は最悪の一言だった。

サイレント・ゼフィルスの姿こそないが、IS委員会の機体は墜落し行動不能。一夏、鈴、セシリアもダメージが大きくまともに動いていない。そして何よりも黒翼によって傷を負わされ血を撒き散らしながら墜落していくシャルロット。ああ、本当に最悪だ。

「どういう事が聞きださせてもらう」

たった今腹部を切り裂いた黒翼は血を流しつつ、しかし未だ宙に浮いている。だがそれも時間の問題だ。千冬はその鋭い相貌で黒翼を睨みつけると打鉄の大型近接ブレードを構えた。

だが当の黒翼は左腕こそ構えているが、その機体はふら付いており小さく呻いている。

『シャ…………ル…………ロ…………オリ…………~~×~~…………ブリユ…………ルデ…………ネエ…………サ…………アアツ!』

ガクガクと震える黒翼に千冬は眉を潜める。詳しい原因は不明だが今はこの目の前の狂ったISを無力化することが先決と判断すると一気に間合いを詰めた。

黒翼は混乱した様に呻きつつも応戦する。鉤爪とブレードの応酬。千冬が切り払い、黒翼が受け止める。黒翼が蹴りを放ち、千冬がそれを体を半回転させながら躲しその勢いのまま一撃を見舞う。それは先程黒翼は行った動き。しかしより洗練されたそれはまるで当然の如く黒翼の装甲を切り裂き新たな鮮血を飛ばす。

「これでも行動停止しないか。ならもつと荒っぽく行かせてもらう。貴様には借りがあるが、それでもこの状況は見過ごせないのではな」

そこからは一方的な猛攻だった。いくら黒翼が武器を、拳を、脚を

振るってもそれらは全て躲され、防がれそして反撃とばかりに刃が黒翼を切り裂いていく。余りにも圧倒的なそれはかつて世界最強と呼ばれたブリュンヒルデの称号に恥じない物だった。

やがて黒翼は空を飛ぶこともままなら無くなり、ビルの屋上へとフラフラと降り立つと膝をついた。千冬も追いかけるように降下すると武器を構えつつ黒翼に近づいていく。

「お前を拘束する」

「させないっすよー」

ゆつくりと黒翼に近づいていった千冬だが乱入してきた声に反応して背後に飛んだ。一瞬遅れてビルの屋上に複数の弾丸が撃ちこまれた。その弾丸は屋上へ突き刺さると、大きな音と閃光を撒き散らす。続いて撃ちこまれた弾丸が今度は煙幕を張っていく。

その光と音。そして止めとばかりに放たれた煙幕に眉を潜める千冬だが、一直線にその煙幕の中に突入すると黒翼の真横に現れたIS——黒い全身装甲のラファールに向け刃を向けた。

「動くな」

刃を向けられたラファールの搭乗者は驚いた様に肩を震わせた。

「ちよ、この状況で何で動けるっすか!？」

「ハイパーセンサーを完全にカットしてISの防御機能を高めたただけだ。それよりお前はこいつの仲間だな。話を聞かせて貰おうか」

「それは無理っすね。意地でも逃げるっすよ、私たちは」

黒いラファールは黒翼を掴むとゆつくりと後ずさる。

「無駄だ。近くに委員会のISも来ている。お前達が捕まるのも時間の問題だ」

「……なんか今まであまり思わなかったっすけど、いちいち上から視線はちよつとムカつくっすね」

「何……?」

「いや、ただ一つ言って置くっすよ。世界最強相手でも世界最馬鹿連中はその馬鹿さ加減で出し抜くっす」

言うが否や、黒いラファールの背後に光が溢れ、そして新たな装備が展開された。それは無骨で巨大なブースターであり、ラファールの

狙いを悟った千冬が飛び出そうとするよりも早く、黒いラファールは瞬時加速を発動。更にはブースターを点火して離脱していく。

「待てー!」

千冬も即座に追いかける。いくら速度があろうともまだ追いつけない速さでは無い。最高速度に乗る前に叩き斬る。

煙幕の中から飛び出た千冬は即座に黒のラファールとそれに連れられる黒翼の姿を目にとめたが、その行先を見て流石に驚愕した。黒のラファールは空でなく地上へと一気に突っ込んで行ったのだ。

「くそ、本当に馬鹿か!?!」

毒づく千冬だが黒のラファールの進路にある物を見てその狙いを察した。それは先程黒翼とサイレント・ゼフィルスが戦闘を行った地下鉄の入口。その周囲は超高速でISが飛んだことで無茶苦茶であり、既に電車は止まっている。そしてその地下へと続く穴目掛けて黒のラファールは突っ込んでいった。

千冬も遅れながらそれを追跡するが地下へと突入するが、既に黒のラファールはかなり先を行っている。それでも千冬は追跡を辞めないが、やがて幾多の路線が交わる分岐路まで来ると打鉄を停止させた。あのラファールがどこへ逃げたのか、それが分からない。ハイパーセンサーにも反応が無い。恐らくチャフを撒いたのだろう。黒翼が流した血を元に探そうとしたが、向こうもそれは承知らしく血の痕跡が見当たらない。つまりは逃したと言う事だ。

「……本当に馬鹿だな。いや、それは皆同じか……」

呻く様に漏らしたその言葉は誰に向けたものか。それは誰にも分からない。

63：温もりに気づいて

「まったく、おっかないったらありやしないっすね……」

暗い地下道をB5は静司を背負って歩いてきた。その手には端末を握り、時節そこに映し出される地図を確認しながら慎重にかつ素早く移動していく。何せつい先程まで世界最強と謳われる女から逃げていたのだ。撒きはしたのも油断は出来ない。

千冬からの追撃を逃げ延びた方法はいたって単純だ。地下鉄の分岐路を越えた辺りでISを解除し、近くの点検用通路への扉を使って逃げ延びたのだ。詳しく調べればこちらの逃走ルートは知られるだろうが時間稼ぎには十分だ。今は一刻も早く逃げ延び、静司の治療をしなければなら無い。

更に足を速める。静司の治療を急ぎたいのは本当だがもう一つ、恐れている事がある。それは篠ノ之束の存在だ。

これまでは密かに静司をサポートしてきたB5やB2だが先日の学園祭。そして今回の事件では大っぴらにISの姿を現してしまっている。そしてその行動から黒翼と関係がある事は誰が見ても明らかであろう。そう、篠ノ之束にも。

ならば何故今もこうして無事でいられるか？ それは対策を施したからだ。その方法は単純かつ雑でもあり、『コア・ネットワークを切断する事』。

ISのコアは通常は常時ネットワークに接続されており、それを介して様々な情報のやり取りを行っている。例外は黒翼位な物だ。そしてその黒翼に篠ノ之束が干渉できない事から、篠ノ之束の介入もネットワークを用いで行われる事が分かった。ならば他の機体もネットワークから切断してやればいい。

だがこの方法には問題がある。ネットワークから切断されたISのコアは途端に脆弱になるのだ。まるで水を失った魚の様に。仲間を見つけられず戸惑う迷い子の様に。そしてコアは勝手に仲間を探しだし、やがてはネットワークを繋いでしまう。そこで苦肉の策として考えたのが、ネットワークをEXISTの保有するコアと黒翼にの

み限定的に接続するという方法だ。幸い、黒翼には限定的な対象にならネットワークを繋げられるという特徴があった。その応用だ。この方法の立案と実施は最新の注意を払いつつ進められ、そしてつい最近ようやく成功した。それによって、コアの弱体化はある程度は防ぐ事に成功したのだ。そして理論上はこれで篠ノ之東の干渉を受けないとされているが、いざ試すととなるとあの稀代の天災がどんな予想外の手を使ってくるか分からなかった為、安心しきる事は出来なかった。「前回と今回。一応大丈夫っぽいですし成功って事でいいですよね……？」 けどあの馬鹿達の発明も役に立つすすす

千冬から逃げ出す際に使用したあのブースターは超高速機動パッケージ《メテオ・ライン》の簡易版だ。パッケージとしてでなく、使い捨ての装備として作られたそれは、本来ならシャルロットに送った《メテオ・ラインⅡ》シャルロットちゃんVer.を作った連中がオマケとばかりに作成した物だった。おまけと言う割には馬鹿みたいな加速度で千冬から逃げる事には役だったが、使うのは二度とごめんだった。何せ使用している最中から、背後から何がか砕ける音やら、バチバチと回線的に問題がありそうな音が聞こえてくるのだから。

「しっかし、B9は大丈夫なんすかね？」

静司の様子は把握している。B9と黒翼の状態はモニタリングされており、その異常は直ぐに知れた。だが今のB5には何もできない。合流地点に医療チームが待機している筈なのでそれに任せるしかない。

やがて暗い地下道を越えていくと前方に人の気配がした。向こうもこちらに気づくと駆け寄ってくる。

「無事の様だなB5」

「私はまあ何とか。それよりもB9っすよ」

駆け寄ってきたのはC1だ。その周囲にはC5の他にもCoverチームの何人かが周囲を警戒している。

C1は静司の様子を見ると眼を細め頷いた。

「そうだな。治療が先か……黒翼は？」

「途中で解除されたっすよ。けど左腕は何故かこのままっす」

本来、完全なエネルギー切れで黒翼が解除されたのなら左腕も消える筈だ。しかしそれがまだ展開しているといことは、まだ微量ながらエネルギーがあると言う事だろう。

「とにかく運ぶぞ、B9にも黒翼にも治療が必要だ」

「そりやわかるっすけど、黒翼の治療ってどうするっすか？」

「……確証はないが、助っ人を呼んで居る」

「助っ人？」

疑問に感じつつも静司を連れて地下から脱出する。そこは鉄道会社の小さな資材倉庫のようだった。今はC1達EXISTの姿しか見えない事からも、普段から職員が駐在している訳では無いのだろう。だがそれなりの広さはある。C1は即座に医療チームに指示を飛ばすと、様々な医療道具を持った者達が静司の様子を見るために集まってくる。だが不意に静司の左腕が動きだした。

「ああああああ、あ、あ、あ!?!」

びくん、と悶え打ちながら静司が悲鳴とも叫びとも言えない声を漏らし暴れる。その左腕はISの一部でありそれだけで凶器と成り得る。拳を叩き付けられた床がみしり、と陥没した。

「くそ、取り押さえろ！ 左腕に注意しろよ！」

全員が慌てて静司を抑え込み、B5はISを展開して左腕を抑え込む。だがこのままでは治療もままなら無い。今も静司は出血しており、このままでは命にも関わるのだ。

「しゃ……………ろと……………斬り……………お……………しの……………ばね……………ころ……………ああああああ!?!」

静司の眼は焦点があつておらず、別の物を見ている。そしてそれが静司の錯乱状態の原因に見えた。

「くそっ、鎮静剤は!?!」

「い、今すぐ！ ああくそ、大人しくしろ静司！」

「くそ、どうなってんだよこれは！」

「機能停止寸前まで追い込まれてシステムの浸食は弱まっている筈だ！ ……とにかく今の内に何とかするぞ！」

何とかしようするC1達だが遂には静司はその拘束を振り解き、頭

を押さえながら床をのた打ち回る。

「麻醉でも鎮静剤でも何でもいい！とにかく静司を止めろ！」

コードネームで呼ぶことも忘れてC1が叫ぶ中、その横を小柄な少女が駆け抜けた。

「せーじ!?!」

それは布仏本音。彼女がここに居るのは黒翼の状態を知ったC1が『助っ人』として呼んだからである。会場から避難していた本音だがC1からの願いに彼女が首を縦に振らない訳が無い。

だが静司の状態はC1達が考えていた以上に深刻だった。今のまま本音を近づけては怪我をさせかねない。だから慌てて呼び止めようとしたが、彼女は臆することなく近づいていく。だが静司はそんな本音を視界に収めた途端、更に暴れ出しそしてまるで逃げ出す様に後ずさっていく。

「い、ん……とーる……!?! うあ、たい……しよ……まつ……さつ……ちが……ああつ!?!」

「せーじ?」

どん、と静司の背中が小さなコンテナにぶつかりそれ以上後ろに下がれなくなる。それでも静司は何かに怯える様に焦点の合わない眼で本音と、そして何か別の物を見て混乱している様に見えた。

「嬢ちゃん今はまずい！下がれ！」

ここで本音にまで何かがあればいよいよ静司の精神が危ない。連れて来たのは失敗だったかと後悔しつつC1は本音を止めようとすがるが、本音は小さく首を振るとゆっくりと、逃げ場の無くした静司へと近づいていく。

一步、二歩と近づくとつれ静司の反応が変わっていく。それはもがき苦しむ様な様子から、何かに怯える様に頭を押さええる様いだ。そして遂に本音は静司の目前まで来ると自らも腰を落としそつと口を開いた。

「迎えに来たよ、せーじ」

それはまさに悪夢だった。瓦礫と炎の中、目の前で何度も死んでいく姉の姿。その背後に見える仇の姿。そして迫る敵。蹂躪される自分。ああ、死んだ。

再び映る姉の姿。そして死んでいく姉の姿。その背後に見える敵。迫る死神。そしてまた死ぬ。死んだ途端に巻き戻すかのように生き返る姉の姿。そしてそれに襲い掛かる敵。倒すべく敵。手段はある。力は得た。知識は刻まれた。耳元で誰かが囁く。敵を殺せと。

だから斬る。だから倒す。だから——す。1機目。無防備な背中を斬る。その瞬間、視界にノイズが走り、瓦礫と炎の地獄が一瞬だけ文化的な街中に変わる。だがそれは直ぐに消え再び地獄へ戻る。

2機目もそれほど時間をおかず斬り伏せる。再び走るノイズ。一瞬映る薄緑の機体。誰かの叫び声。しかしそれもまた直ぐに消えていく。そして次々と新たに現れる敵。それをひたすらに斬る。だがその度に視界にノイズが走り頭痛が増していく。嘔吐感がこみ上げ、心の奥底で何か在必死に止めようとしている。しかし体は動き続ける。全ての敵を倒す為。全ての脅威から——を守る為。

ふと誰かの声が聞こえた。しかし誰なのかはまったく分からない。酷くなっていく頭痛の中、目の前に現れる新たな敵、……敵？

再びノイズ。一瞬映る金髪の少女。誰だ？ いや知っている。いや知らない。知る必要は無い。全て敵。違う。敵。やめろ。敵。止まれ……っ！

ノイズは激しくなりぶれる視界の中、金髪の少女の姿に何かを感じる。そうだ、彼女は敵では無い。彼女は……彼女は……

「……ッ……ト」

そうだ何時も一緒に居る二人の少女。大切な仲間。大切な二人。その存在が頭に浮かんだ途端、頭痛は酷くなったが代わりに意識が少しずつ戻ってくる。そうだ、飲まれるな。システムに侵されるな。理性と浸食しようとするシステムがせめぎ合う中で必死に口を開く。

「シャ……ル……口……ト……」

そうだ、彼女の名は——

理性が浸食を押しとどめていく。彼女へとゆつくりと手を伸ばそ

うとした時、それは突然聞こえてきた。

「デュノア、無事か!？」

一気にノイズが激しくなった。頭痛が限界を超え理性と意識は一斉に黒く塗りつぶされていく。この声は違う。姉じゃない。姉の様で姉で無い。オリジナル。システムの原典。そして己の敵の――
――仲間？

「アアアアアアアアアアアアアアアアツ!？」

一気に世界は先程の地獄へと変わった。そうだ、ここに居るのは全て敵では無いか。ならば躊躇うな。全てを、全てを！

ギリギリまで残っていた理性が完全に消えかけていく。それでも無意識に金髪の少女を視線が探す。だが体は意思とは関係なしに動き出す。近づくモノは全て敵だと。そして左腕がその刃を眼前の少女へと向け、振り抜いた。

「……………あ?」

その瞬間、侵食していく悪夢も、頭痛も何もかも忘れてその光景が目に焼き付けられた。自分が彼女を切り裂く光景を。それを理解した途端、全ての感情が黒く染まった。

それから暫くして、再び意識が浮かび上がった時は何処とも知れない空間に居た。近くで誰かが何かを叫んでいる。こちらを覗き込む人の姿。それを見た瞬間あらゆる光景がフラッシュバックし、再び頭痛とノイズが走り始めた。世界は再び地獄となり、周りのものすべてが敵に見え、暴れ狂う。だが肉体は既に限界が近く思う通りに動かない。それでももがき続ける中、目の前に現れたのは小柄な少女。その姿を見た途端、金髪の少女に牙を剥けた光景が浮かび上がり、そして心は恐怖に飲まれた。

「せーじ」

少女が名を呼ぶ。駄目だ。やめてくれ。近づくな……………!

近づいてくる少女の姿が金髪の少女とだぶる。更にはそのだぶった二人の影を黒い靄が覆い隠そうとする。それは敵だと。倒すべき

ものだと言わんばかりに。それが恐ろしく、頭痛と吐き気、そしてノイズに襲われながらも必死に逃げる。だが直ぐに背中は何かにぶつかり逃げ道は無くなった。

「迎えに来たよ、せーじ」

少女が再び名を呼び、そしてゆつくりと手を伸ばしてきた瞬間体が勝手に反応した。

「っ、…………!!」

「嬢ちゃん!?!」

まるで怯えた獣が威嚇する様に。身を寄せてきた少女の肩口に歯を立てる。肉を切る感触と血の味が口に広がる。だが少女は少し身動きしたのも、大きな声を立てる事は無かった。それどころか、まるで子供をあやす様に、噛みついてきた頭を抱きしめるかのように抱え、ゆつくりと後頭部を撫でる。

「大丈夫だよ、せーじ」

優しく、これ以上怯えさせない様に。語りかける様にゆつくりと頭を撫でる。

「敵はもう居ないよ。だから大丈夫」

ガクガクと、小さく震えながら体を離していく。だがその瞳の焦点は未だあっていない。

すると本音はこちらに手を伸ばし、両頬に手を添え顔を固定すると至近距離で見つめ合う形となった。

「だからこっちを見て欲しいな〜?」

本音の制服の肩口は噛みつかれた際に破れておりそこから血を流している。しかしそんな様子はおくびも出さずに微笑む彼女の視線に射抜かれ、静司は震えながら声を漏らした。

「…………ほ…………んね…………」

「うん。本音さんだよ」

「ほん…………あああつ!?!」

再び走るノイズ。酷くなっていく頭痛が理性の復活を拒む。目の前で微笑む少女の姿が敵と重なり、耳元で誰かが斬れと叫んでいる。必死に抗うがその度に金髪の少女を斬った光景がフラッシュバック

「せーじが何を見せられていたのかは何となくわかるよ。だけど負けちゃ駄目。理由はなんだっていいんだよ。お姉さん達に対する想いでも、篠ノ之博士に対する感情でも。どんなものでも良いから抗う理由として、それで頑張ろう?」

その理由が私達の事だったら嬉しいけどね、と少し恥ずかしそうに呟きながら抱きしめられ、静司は自分自身も弱く抱きしめ返し、そしてそっと涙を流した。

頭痛とノイズは、もう走らない。

「……カメラ持ってきたか?」

「無いっす」

「そうか……課長が聞いたらどう思うかね、この状況」

「きつと悔しがるっすね……ってんな事言ってる場合っすか! 治療

! 治療っすよー!」

「けっ、舐めときや直るぜ」

「私達医療班の存在意義は……?」

「いいから早く動くっすよー!」

暗い研究室。そこに浮かび上がった投影スクリーンには黒いISSが上下逆さに映し出されていた。

「……………」

トン、とコンソールのキーを一つ叩くとその黒いISSの頭部部分がズームされていく。その頭部は装甲に覆われているが一部が破壊されそこから片目だけが露出している。その部分を更に拡大すると再びコンソールを叩きはじめる。

ズームされた片目にスキャンをかけていく。スキャン内容は瞳の色。色素。網膜パターン等々。画像は荒いがこれは仕方がない。何せ戦闘中のISSの視界を一時的にハッキングして得た情報だからだ。直視映像と呼ばれるそのシステムも、彼女の手にかかれば強制的に行

うことなど容易い。

やがて表示されたスキヤンの結果。それを今度は別の画像データと照合させていく。その画像データとはここ数年でIS学園に關わった人物の画像データであり、こちらもハッキングで得たものだ。その数は膨大であるが照合作業は数十秒で終わった。該当件数は17件。やはり元のデータが荒い為にデータの精度が少々荒い。それでもただの映像からここまで調べられる事自体脅威なのだが彼女はそれを当然の様に行く。

そして映し出された17件の該当結果。それを眺めていた彼女だが、ある人物のデータを見た途端その顔が変わった。

「へえ……これは確認が必要だね」

少し考え、そして思いつく。携帯を取り出しコール。数秒待つと音声繋がり、相手の不機嫌な声が耳に入る。

『何の様だ、束』

「ありやー？ ちーちゃんご機嫌ナナメ？」

『当然だ。状況は知っているんだろう』

まあねーと明るく返すと相手は声のトーンを落とした。

『一応聞いておく。今回の件は——』

「私は何も関係ないよ！ いやーけどど派手にやってたねえ」

『……そうか、ならいい。それで要件は何だ？』

「そうだったね！ 実はそんな不機嫌なちーちゃんのお仕事を助けるお得な情報があるんだよー！」

『何……？』

回線の向こうで訝しむ千冬の声。それに頷きながら束は目の前のスクリーンに浮かぶ情報を眺めながら口元を吊り上げる。

『ねえちーちゃん。あの黒いISが出現した時……もう一人の奇妙な男は何処に居たのかな？』

64：お前はやりすぎた

昼間は快晴だった空も、日が暮れていくにつれ曇っていきやがて雨が降り始めた。月の光も遮る土砂降りの雨は外を暗く染めるのと同じ時に自分の心も暗くさせる。そんな鬱屈した気分させる窓から視線を外し、ラウラは目の前で横たわる少女に視線を向けた。

「シャルロット……」

ベッドで眠るルームメイトにして大切な友人は今深い眠りの中だ。その顔色は少し青く、加えて腕から伸びた点滴の管が痛々しい。

あの事件の後、シャルロットは市の病院へ緊急搬送されつい先程まで手術が行われていた。傷は深かったものも、奇跡的に重要な臓器等は無事であり手術は無事に終わった。負傷した当時ISに乗っていたと言う事もあり緊急保護機能が事態の悪化を遅らせていたと言うのも大きい。

現在病室にはラウラしか居ない。一夏達もシャルロットの様子を心配していたのだが、彼らは今事情聴取を受けていた。国際的にも許可なくして街中でISを展開する事は禁じられている。戦闘行為などもつての外だ。それを堂々としてしまった一夏達は今分厚い書類を前に苛立っている事だろう。ラウラはあくまでコース上でしか戦っていないのでそれは免れたが、それでもサイレント・ゼフィルスとの戦闘については根掘り葉掘り聞きだされた。そして先ほどようやく解放され、親友の病室まで来れたのだ。

今この病院は嚴重な警戒態勢が引かれている。中は勿論、外では自衛隊から出向してきたISや学園のIS。更には協力を申し出た米軍のIS等が警備をしている。もっとも、米軍の場合は別の狙い――再び何かを襲ってきた時にそれを捕獲しようという魂胆もあるのだろう。実際ラウラにもその命令は下っている。しかしラウラはおそらく生まれて初めてその命令を拒否した。こちらの機体も破損しており、戦闘行動は難しい。そんな最もらしい理由を付けたが本音は別、この友人の傍に居たかったのだ。

「くそ……」

シャルロット。出会った当初は酷い態度を取っていた自分にも関わらず、ルームメイトとして暖かく迎えてくれたかけがいの無い親友。本国の部下とも、千冬のように尊敬する人間とも違う。正直に言うてしまうと鈴やセシリア達といった友人達とも少し違う。友人は居るか？ と聞かれた真つ先に思い浮かぶ大切な存在。それが彼女だった。それ故にシャルロットが撃墜されたという話を聞いた時、ラウラは目の前が真っ暗になったような感覚に襲われた。

自分にもっと力があれば。そう考えずにいられない。そうすればサイレント・ゼファイルスにもっと対抗できたかもしれない。暴走した黒翼相手に親友がこんな事にならずに済んだかもしれない。そんな無力感に歯を食いしばる。

そして考えるのは黒翼の事。一夏達は怒っていたが、ラウラは黒翼を責めることが出来ずにいた。

事情聴取前に少し聞いた話から、黒翼は暴走状態にありそれがVTシステムの時と似ていたと聞いていたのだ。一度そのシステムに飲まれたこのとのある自分だからこそわかるが、あれはそう簡単に抗える物では無い。何故黒翼にそれが搭載されていたのかは分からないが、少なくともそれは黒翼の搭乗者の本意でないと思うのだ。

今までの謎のISは幾度と現れ一夏や自分達を救ってきた。そんな人物が己のピンチだからと言って周囲にまで被害を及ぼすような危険なシステムに頼るとは思えないのだ。勿論、何か別の目的があつて今までこちらを助けていたのかもしれない。だがそれでも突然のあの行動は本意とは思えない。

ならば原因は何か？ 一つは自分の時の様に密かに組み込まれておりそれが起動したと言う事。そしてもう一つ、それはサイレント・ゼファイルスに何かをされたか。

「ん……」

「シャルロット！ 眼が覚めたのだな！」

小さく声を漏らしてゆっくりとシャルロットが目を開く。ラウラの顔がぱあつ、と明るくなりシャルロットの手を握った。

「ラウラ……？ っは……？」

「病院だ。撃墜されたのは覚えているか？」

「撃墜……。ああ、そうか。僕はやられちゃったんだね」

弱々しくも微笑むシャルロットの様子に先程の罪悪感の様な物が胸を過るが、それを押しとどめてラウラは頷く。

「どうだ？ まだ痛むか？ ああ、痛いのは当然だったな……。何を当たり前の事を言っているんだ私は」

珍しく慌て得ているラウラの様子にシャルロットは苦笑した。

「うん、ちよつと痛いけど大丈夫だよ。僕の状態はどんな感じなのかな？」

「医者の話だと内臓器官はどれも無事らしい。どれも致命傷は避けられたから時間が経てば元通りだ。だが……」

そこで少しラウラがどもる。不思議そうにシャルロットが見つめる中、言いにくそうに口を開く。

「傷跡は残ってしまうかもしれないらしい。だ、だが傷跡を隠す技術は無い訳では無い！ 今すぐには無理らしいがそれならきつと！」

「そっか……」

女性として、肌に傷が残ると言う事は耐え難いものだろう。流石にラウラでもそれ位分かる。故にシャルロットをあまり落ち込ませない様に言葉を続けるが、シャルロットは小さく頷いただけだった。だが不思議とその顔に怒りは見えない。

「ねえラウラ。ラウラはあのIS……黒翼の事をどう思う？」

「それは……」

ラウラの心中としては善とも悪とも取れない微妙な物だ。しかしそれを実際に撃墜され傷つけられたシャルロットの前で言うのは躊躇われた。

「僕はね、実はあまり怒って無いんだ。そりや傷は悲しいけどね、きつとこれはあの人も望んだことじゃない。そう、思うんだ」

おかしいかな？ とシャルロットは笑う。

「少しだけ、少しだけあの人の目を見たんだけど、凄い悲しい目をしてた。抗おうとして、けどどうにもならなくて苦しんでいる目。それにね、僕の名を呼んだんだ」

「名を？」

「うん。その瞬間なんかね、おかしいんだ。ありえない筈なのにまるで――」

そこでシャルロットは声を落した為にラウラにはシャルロットの言葉の最後を聞き取る事が出来なかった。

「とにかくあの人は必死に止めようとしていたんだよ、きつと。けどどうにもならなかった。それが何となく分かるから、怒るに怒れないんだ」

「そうか。シャルロットがそう思うならそれでいいのではないか？」

私もシャルロットの意見と同じだしな」

「そうか。ふふ、なんか嬉しいな」

ふふ、と二人笑い合う。そしてラウラははたと気づいた様に時計を見た。

「そろそろ一夏達の事情聴取も終わるかもしれん。シャルロットが目覚めた事を伝えれば安心するだろう」

「そうかな？　じゃあ悪いけどお願いしていいかな？　ところで……静司は？」

当然と言えば当然の問い。ラウラは小さくため息を付いて首を振った。

「連絡が取れない。どうも事件の際に別途保護されたらしくてな。一夏達とは違う場所で今も守られているそうだ」

「無事なのかな？」

「わからんが、あの会長は『大丈夫だ』と言っていたが……。とりあえずもう一度連絡を取れるか確認してみるから待っていてくれ」

「うん。よろしくね、ラウラ」

「任せろ」

最後にもう一度シャルロットの手を握るとラウラは病室を出ていく。

「静司……うん、そんな筈……無いよね……？」

背後でシャルロットが何かを呟いていたが、それをラウラが聞くことは無かった。

分厚いガラスの向こうで青い顔をした少年が横たわっている。その少年の周りでは数人の医師たちがせわしなく動き回っていた。

そんな光景を川村章吾——皆からは課長と呼ばれる男は静かに見つめていた。その隣にはC1やC5、それにC12他数名の姿もある。

「シャルロットちゃんが目覚めたそうよ」

「そうか。ならばはこつちだな」

C5からの報告に頷きながらガラスの向こう側にいる少年——静司を見つめる。

「大きな傷への処置は完了。黒翼の方で件の生体再生も行われた結果もあります、一命は取り留めました」

医療担当者の安堵しつつも一つ一つの懸念事項を問う。

「VTシステムの方は？」

「今は安定しています。ですがこれはあくまで治まっているだけでありシステムが削除されたわけではありません」

「そうなんすか？ さっきは直ったと思ったんすけど」

「それにVTシステムと言っても、ラウラ・ボーデヴィツヒの時とは少し違わなかったかしら？」

C12とC5の疑問は最もであり、課長としても気になる所だった。

「まだこれは確証が無いので推測の域ですが、blade9……静司とVTシステムの親和性が高かったのが原因かと」

「親和性？」

「はい。静司はVプロジェクトの被検体として歴代ヴァルキュリーの戦闘技法等をインストールされてきました。そしてVTシステムとはその過程で生まれたいわば副産物です。インストールが対象者の脳に直接情報を刻むのに対して、VTシステムは機械にあらかじめインストールされた情報を元に、システム発動時は搭乗者の意識を管理下に置きその力を発揮します」

「ああ。それがどう繋がる？」

「つまり静司の脳内に刻まれた情報と、VTシステムが搭乗者を無理やり動かす情報はほぼ同じと言う事です。故にシステムが起動した際に静司の中にある情報と、システムの持つ情報が結びつきそれが異常を起こしたという事でしよう。静司からすれば送られてくる情報は『既に知っている情報』とまだインストールされていなかった為に『知らない情報』が入り乱れていたせいで混乱したのだと思います。お蔭で完全に乗っ取られた訳ではありませんが、代わりに自分を制御する事も出来ず中途半端な状態で暴れ狂ったんです」

「そうか……。だがならどうして元に戻った？ システムは消えていないのだろうか？」

「それは――」

「やっぱり愛？ 愛の力なの？」

C5がぐつ、と身を乗り出す。彼女も静司が一時的に正気に戻った時の状況は聞いている。興奮気味に鼻息を荒くするが、医療担当者は首を振った。

「そんな非科学的な物ではありません。これも仮説ですが、要は静司と黒翼は酷い混乱状態にあった。いわば精神は不安定だったんです。そこに精神的な強い衝撃……。自らの手でシャルロット・デュノアを傷つけた事で思考の優先順位が変わったのでしよう。そしてその動揺状態で布仏本音が行った行動が追い打ちをかけたでしようね。よくあるでしよう？ 壊れたテレビをドつくどと直るって」

「おい、科学はどこ行った科学は。どう聞いてもそれはフィジカルだろが」

「というか人の息子を壊れた電化製品扱いするな」

「しかし今はそうとしか言えないんですよ」

「まあお前がそう言うならそうなんだろうけどよ。……しかし精神に強い衝撃だ？ デュノアの嬢ちゃんに件は納得いくが、のんびり嬢ちゃんに関しては納得いかねえな」

「あら？ どうして？」

C1はぐっ、と拳を握り熱く語る。

「あの嬢ちゃんの口づけで目覚めたけど？ その前にあの胸に抱かれてたんぞあいつは。それなのにそっちじゃなくて口づけ？ キッス？ ベーゼだあ!? つまり胸はもういいのか胸は！ 少なくとも一年前のあいつならあんな胸に抱かれりや一発昇天してもおかしく無かった筈なんだ……！ だがそうならなかったと言う事は……」

「慣れ……っすかね？」

「なんて贅沢な奴だ羨ましい!？」

ギャーギャーと喚くC1を尻目に課長は成程、と手を打った。

「成程口づけが。つまり愛しいパパである私が静司に熱いベーゼをかませば静司も一発復活という事だな！ よしならば早速」

「静司にトラウマ植え付ける気っすか!? ヒゲジジイは大人しくしてろっす！」

飛び上がったC12の蹴りが課長に突き刺さり悶絶する。そんな光景に医療担当者は肩を落とした。

「一応ここ病室なんですがね」

「暗い気分を払拭したいのよ。何だかんだでやる事はやるから、アンタらも静司の事を頼んだわよ」

「……………」

「? 何よ……………」

「C5が……ライアさんが真面目だと!? 一体どこで改造手術を受けたんですか!？」

「うふふふ。OKわかったわ。ちよっとおねーさんとお話しましょうか」

がしっ、と相手の首を掴み引きずっていくC5ことライアと喚く男。そんな騒がしい光景にガラスの向こう側の医師たちが迷惑そうにしているその横で、静司の体が小さく揺れ、そしてゆっくりと目を開き始めた。

一夏の事情聴取が終わったのは夜も21時を過ぎた頃。長きにわ

たるそれに疲れ果てていた一夏であったがこれでもマシな方である。なにせ鈴達はまだ続いているのだ。これは一夏とは違いそれぞれが各国の代表候補生だった為に、本国の担当者達からの事情聴取と言う名の説教及び情報収集の為だ。事情が事情なので街中でのIS使用は仕方のない所はあった。しかし建前は必要なのである。

一人解放された一夏だが、流石に当初の予定通り自分の誕生日会とは行かなかった。そもそも本来の開始時間もとっくに過ぎていて。慌てて一夏は参加者だった蘭に電話をして謝ったのだが蘭はそちらは全然気にしておらず、一夏の無事を泣いて喜んでいた。その事に罪悪感を感じつつ、また今日度を改めようと言う話になりその場は治まった。そしてそんな時、ラウラからシャルロットが目覚めたと言う話を聞いて、一夏は急いで病院へ向かっていた。とは言っても自由な行動は許されておらず、護衛付であったが。

今一夏は両脇を黒服のSPに挟まれた状態で車に乗り、シャルロットの居る病院へ向かっている。SPは共にIS搭乗者であり、いつでも戦闘に移れるように緊張感を漂わせていた。その事に息苦しさを感ずるが仕方ない。むしろ病院に向かう事を了承してくれただけでも恩の字だろう。

「あの、すみません。我儘言ってます」

「気になさらず。あなたの安全は必ず守ります」

礼を言ってもSP達は視線を合さず簡潔に答えるだけ。そんな彼女らに更なる息苦しさを感ずる、一夏は小さくため息を付いて窓の外へ視線を移す。

外は土砂降りの雨で先が全く見えない。確認できるのは時たま走る車や街灯の発する光のみ。ISのハイパーセンサーならもつと見えるのだろうな、と一夏が考えた時、急に車が停止した。思わず前のめりになり前の席に鼻をぶつけてしまう。

「ど、どうしたんですか」

鼻を押さえながら聞くがSPは答えず扉を開けると外に出た。

「直ぐに来た道を戻れ。それと本部に連絡を」

「了解」

SPの言葉に運転手が頷き直ぐに今度は急速に車体をバックさせはじめた。その勢いに揺られる中、慌てて一夏が叫ぶ。

「ど、どうしたんですか!？」

「敵です」

「敵?!？」

前方で淡く光る二つの影。先ほどのSPがISを展開したのだから。と言う事は敵はその更なる前方か？

「なら俺も!」

「必要ありません。あなたは自分の事だけを考えて下さい」

「けど!」

尚も反論しようとする一夏だが急激に車体が横に振られドアに叩き付けられた。運転手が無理やり車体を反転させたのだ。

「掴まっていてください!」

アクセルが踏み込まれエンジンが唸りを上げる。後ろに引っ張られ様なGを感じ一夏は慌ててドアにしがみついた。だが不意に、目の前、フロントガラスの目と鼻の先に光が落ちたかと思うと、ボンネットが火を噴いた。車は急速にバランスを崩し横滑りしつつブレーキがかかる。

「うわああああああ!？」

やがて車体はガードレールにぶつかり動きを停止した。その時の衝撃でもガラスも割れなければ、車体内部に目立った損傷はない。どうやら相当頑丈な車の様だった。だが今もボンネットからは火を噴いており、このままでは危険に見える。一夏は慌てて扉を開けて外に出ると運転席へ向かう。

「大丈夫ですか!？」

「に……げ……て」

運転手は頭部をぶつけたらしく血を流しながら呻く。一夏は直ぐにシートベルトを外すと運転席から引っ張り出そうとして、そしてその視線に気づいた。

「なんだ……?」

周囲は土砂降りの雨。人通りは少なく、また昼の事件の影響か車も

全然走っていない。そんな道路の先に傘をさした少女が立っていた。何故か嫌な予感がして一夏は後ずさる。

「だ、誰だ」

「……」

少女はゆっくりと近づいてくる。その顔は傘で隠れて見えないが嫌な予感はどうも増していく。

「織斑一夏。私や、あれとは違う。もっとも恵まれ、そして最も愚かな男」

ゆっくりと、言い聞かせる様な少女の声。その声を聞いた途端一夏の体が硬直した。今の声。それは余りにも似ている。そしてその想像を肯定するかのようになり、少女が傘を捨てその顔を晒す。

きつく鋭い相貌。整った顔立ちと漆黒の髪。雨に濡れ薄く笑う少女の顔は自分のよく知る人物と酷似していた。

「ち、千冬姉……?」

「いや」

雨の中少女が近づく。近寄れば近寄る程、その顔が千冬に酷似している事がわかり一夏は混乱した。

「今日は挨拶に来た。貴様とそしてあいつに」

「あいつ? お前は一体……」

「織斑マドカだ」

「え……?」

少女が何を言っているのか分からない。織斑マドカ? その名字は紛れも無く自分と、そして千冬の物と同じ。だが一夏にとって家族は千冬のみだ。だがただの同姓と言うには余りにもこのマドカと名乗る少女は似すぎている。

「死んでもらう。お前はそこに居るのに相応しくない」

少女が鉄の塊を取り出す。それは無骨な拳銃でありその銃口を一夏に向ける。

「そこは私の席だ」

引き金に指がかかる。一夏は反応できずただそれを見ている事しかできなかつた。このままでは撃たれる。それが分かっているながら

も混乱した思考では全く動けない。そして引き金が引かれ、致命的な弾丸が一夏の頭に当たる、その直前。

「させないわ」

静かに、そして冷徹に響く声。一夏の眼前に水の楯が突如出現しその銃弾を受けとめた。唯の水ではこうはいかない。そして一夏はその水に心当たりがあった。

「楯無さん!」

「はあい、一夏君、無事ね」

それはミステリアス・レイデイを纏った更識楯無。彼女はその槍をマドカに向けたまままゆつくりと歩み寄る。

「中々興味深い話ね。是非おねーさんにも聞かせてくれないかしら?」

「……邪魔が入ったか」

少女は銃を捨てると一歩下がる。同時に彼女の背後に新たな影が舞い降りた。

「お前は!」

一夏が驚くのも無理はない。マドカの背後に降り立ったのはかつて学園祭に現れ、そして今回も現れたと聞く、奇妙な形の人型兵器だったからだ。

『エム、あつちは、終わった。だけど、そろそろ、帰る』

「ふん」

不満そうに小さく鼻を鳴らすが、この雨の中で楯無との相対は危険と判断したのだろう。マドカが光に包まれる。そしてサイレント・ゼフィルスを展開したマドカの姿に一夏は更に驚く。

「サイレント・ゼフィルス!? まさかお前が!」

「そういう事だ」

言うが否やマドカと人型兵器は空へ浮き上がる。楯無も一夏を庇いながら戦う余裕は無いと判断し、静かにマドカを睨みつけていた。

「女、あいつに伝えておけ」

「……何かしら?」

「プレゼントは気に入ったか? とな」

言い捨てると2機は一気に急上昇。夜空へと消えて行った。

「楯無さん、あいつらは」

「まだ詳しい所は不明よ。悪いけど一夏君、お見舞いは中止ね。やはり今外出させるのは危険すぎるわ」

有無を言わさぬ楯無の言葉に一夏は頷く事しか出来なかった。

外の雨は更に激しくなってきた。シャルロットは横たわりながらそれを眺めていると、以前の事を思い出してしまう。

それはかつての愚かな記憶。人形のように命令に従い、学園のデータを盗みだそうとして、そして拉致された時の事だ。あの時の天気も今日のように大きく荒れていた。

「そういえば、あの時も助けてもらったんだよね」

黒翼。思えば助けられてばかりのその存在。その事が頭から離れない。あの時見た目の事が、そして名前を呼んだその声が、シャルロットの心をかき乱す。

「……？」

思考に沈んでいたシャルロットだが、不意に気配を感じた。時刻はとうに日をまたぎ深夜の2時。自分は疲れているのにも関わらず中々寝付けなかったのだが、こんな時間に見舞いが来るとは思えない。若干の緊張を持って、顔を窓から病室の扉へ向ける。そしてそこに立っていた人物にシャルロットは目を丸くした。

「静司……？」

「ああ」

そこに居たのは間違いなく静司だった。どこか顔が青く、何故か足取りがおぼつかないが見間違えようが無い。

「ど、どうしたのこんな時間に。それにどうやって……」

「会長の計らいでな。遅くなって済まなかった」

謝罪の言葉を口にしつつベッドへ近づく。だがやはりその足はどこかふら付いており、それがシャルロットに不安を抱かせた。

「静司、怪我してるの？」

「……いや、ちよつと疲れてるだけだ」

嘘だ。明らかに静司の様子はただ事では無い。しかしそれを聞いても静司が話そうとしない事は何となくだが分かった。それが少し悲しい。

「傷の具合はどうだ？」

「うん、ちよつと痛むけど薬が効いてるからそれほど苦しくないよ」

「そうか、良かった……本当に……」

俯き拳を握りしめ震える静司。それはまるで懺悔をするようで、病人として寝ている筈のシャルロットの方がいたたまれない気になつてしまう。

だからシャルロットは笑顔を浮かべた。好きな人のそんな姿は見たく無いから。

「静司、せつかく来てくれたんだからそんな暗い顔しないで？ 僕

……私は顔が見れて嬉しいよ？」

「っ、ああ、そうだな……本当に……俺は毎回成長しない」

そつと手を伸ばす。静司はその手を受け止めそしてまるで祈る様に握りしめた。そんな静司を前に、シャルロットしても自分の中にある疑問をぶつける事が出来ない。今はただ、手に伝わる温もりだけを感じていたい。

「何か……何か出来る事はあるか？」

「ううん、大丈夫だよ。そんなに気にしないで」

「だが……」

やはりどこか静司の様子はおかしい。何かしないと崩れてしまう、そんな危うい空気を感じた。だからシャルロットは少し考え、じゃあとお願いを口にする。それを言うのはかなり恥ずかしかったが。

「そんな事で良いのか……？」

「うん。中々寝付けなくてね。昔お母さんがね、寝れない時にやってくれたおまじないなんだ」

「……わかった」

戸惑いつつも静司は頷くとゆつくりと顔を近づける。その事に今更ながらシャルロットは緊張してしまう。

額にキスしてほしい。それがシャルロットのした『お願い』だった。母の話も嘘では無い。しかし今更ながら自分が大胆な事を言った事に赤面してしまう。その間にも静司の顔は近づきそして額に触れようとして、その瞬間シャルロットは顔を上げた。

「え？」

「ん」

それは一瞬。だが確実にお互いの唇が触れ合う。驚いた静司が慌てて顔を離すとシャルロットは悪戯が成功したかのような笑みを浮かべた。

「な、何を……」

「えへ、やっちゃった」

戸惑う静司に対してシャルロットは笑う。

「静司ったら意外に大胆だね？」

「ちよ、ちよつと待て。今のは」

「今のは？ 何かな？」

ぐつ、と焦る静司。その額には脂汗が浮かんでいる。そんな様子を見てシャルロットは噴出した。

「あはは、嘘だよ静司。今のは僕が顔をずらしたんだから」

「……シャルロット。なんでこんな——」

「うん、やつと悲しい顔以外の静司が見れた」

「っ……」

息を飲む静司の手を再びシャルロットが握る。

「言いたいことはあっても。何か言え無い事があっても。それは仕方無い事だつて言うのは僕だつてよく知ってる。でもそれが悲しい事や苦しい事を引き起こしても、そこで立ち止まってちゃ駄目だよ。それを教えてくれたのは、静司や本音。一夏やラウラ達だよ？ だから僕は今ここに居るの。だから静司も……ね？」

後悔ばかりじゃ、懺悔ばかりじゃ何も動かない。それは自分も同じだったのだから。例え静司が今こうなっている理由が正確には分からなくても、その考えだけは変わらない。

「僕もすぐに傷を治すよ。それでまた、皆で色々やって笑いあおう？」

「……ああ」

微笑むシャルロットに、静司は小さく答えるのだった。

それから少しして、シャルロットは気が緩んだのか眠りに落ち静司も病室を後にした。

「話は終わったのかしら？」

「ええ。ありがとうございます、会長」

待ち構えていた楯無に静司は頭を下げる。だがその足がふらつき思わず倒れそうになったのを楯無が慌てて支えた。

「無理し過ぎよ。本当なら絶対安静なんでしょう？」

「それでも、俺には来る義務があつたんです……」

シャルロットの前では我慢していた痛み息を荒らげる。そんな静司に肩を貸し、楯無は廊下を歩いていく。

「本当はこんな状態の静司君に言うべきじゃないでしょうけど、いざれ知る事だから伝えるわ」

ベンチまで行くと静司をおろし楯無も横に座る。そして懐から数枚の写真を取り出した。

「先ほど一夏君が襲われたわ」

「ばつ、と振り返る静司を落ち着きなさい、と制する。」

「護衛が少し怪我をしたけど一夏君は無事よ。今は厳重に警備されたI S学園に戻ってる」

「ただね、と一拍置き楯無はその写真を静司に渡した。」

「それが襲撃者よ。私のミステリアス・レイデイが捉えた映像を映した物だけれど……」

楯無の言葉は途中から頭に入らなかつた。静司の視線はその写真に釘付けにされている。

雨の中で有る為、少々画素は荒い。それでもその襲撃者の顔はよくわかる。そしてその顔は自分がよく知る物であった。

「馬鹿な……」

予感はしていた。サイレント・ゼフィルスは以前からそのような雰

困気を醸し出しており、今回に至ってはVTシステムまで持ち出してきた。そこまでして静司に拘る理由。その理由は予感と同時にありえないと思っていた物。しかしそれが今、目の前にある。

「心当たりがあるのね。そいつから伝言よ。『プレゼントは気に入ったか?』だそうよ」

かつて静司は本音に自分の素性を話した。しかし楯無が知らないと言う事は彼女は他人には決して洩らさなかつたのであろう。そんな彼女の律義さを感じつつ、静司はその伝言内容に怒る。

「知っている……知ら無い訳が無い………だがっ！」

くしゃ、とその写真を握りつぶす。そうだ、自分はこの写真が意味する事を知っている。動揺もしている。だが、

脳裏に浮かぶのは死んでいった姉達の顔。そして教壇に立つ織斑千冬の事。そうだ、自分はこの二つを分けて考える事が出来る。出来る筈なのだ！ だから今更同じ顔が出てきた所で——

「うっ……!?!」

途端に頭痛が走る。VTシステム暴走時の感覚が蘇り、視界が炎に染まる。復讐と嘆き。様々な感情が入り乱れ、心を乱していく。

のだが、

「これ以上……」

『負けちゃ駄目。まだ何も失ってないんだから、ここで負けちゃ駄目だよ?』

これ以上、負けては居られない。

『それが悲しい事や苦しい事を引き起こしても、そこで立ち止まっちゃ駄目だよ』

これ以上、同じところで同じことを繰り返している訳にはいかない。

そうだ、この襲撃者は喧嘩を売ったのだ。それも最低最悪な形で。それはつまり、篠ノ之束と同様に憎むべく……敵。

頭痛がする。吐き気がする。例え別人だと分かっているても、姉と同じ顔——いや、違う。姉と同じ存在である相手を敵とする事に身が切り裂かれるような苦しみ感じてしまう。

それでも、やらなくてはならない。

「やらせて……たまるかつ……！」

必ず、ツケは払わせる。例え誰であっても。

例え、自分や姉達と同類だとしても。

必ず。

65：不審

「なんなのだこれは！」

千冬が目の前の机に書類を叩き付けた。ばしん、音が響き、隣に居た真耶が肩を震わせる。

「上層部……まあ言ってしまうえば委員会からのお達しだよ。先日のキャノンボール・ファストの襲撃を踏まえ、各専用機持ちのレベルアップを図るための合同タッグマッチを開催する。これは決定事項だね」

千冬の前に座るのは桐生と名乗る男。IS委員会の一人だ。そして彼が持ってきた資料が千冬の怒りを買っていた。

「委員会にそのような権限は無い筈だ」

「権限は無い。けど力はある。そんな事今更だろう？」

「だからと言ってこれは幾らなんでも軽率すぎる！」

だんつ、と手を机に叩き付け抗議する千冬に桐生はうんざりとした顔になる。彼とてこの内容がふざけているのは知っている。だがこれを決めたのは自分でなく、IS委員会全体なのだ。

「織斑千冬さん。あなたの言いたいことは分かるよ。というかはつきり言ってやってもいい。レベルアップなんて唯の建前で、本当の目的はキャノンボール・ファストの時と同じさ」

桐生はテーブルのコーヒーに口を付けると一息つく。その先を代弁したのは真耶だった。

「あの、黒いISの事ですね……」

「半分正解かな。正確にはそれを含めた諸々の懸案事項の種って所かな？」

桐生は千冬が机に叩き付けた書類を一枚抜き取り二人の前でひらひらとかざす。

「幾度となく学園に現れる謎の黒いIS。不定期に現れる異常な性能を持つIS。そして先日現れた亡国機業の巨大IS。これらを全て……は無理でも、どれか一機だけでも捕獲なりなんなりしたいのさ」

「そしてその為に生徒に餌になれと言うのか……っ！」

「正確にはあなたの弟さんに、だろうね」

「貴様っ！」

「織斑先生落ち着いて！」

今にも飛び出しそうな千冬を真耶が必死に抑える。だが桐生は自らの表情を崩さず静かに頷いた。

「その反応は分かるよ。僕だって抗議したさ。意外かい？ まあ結局意味が無かったんだけどね」

肩を竦める桐生に千冬もぐつ、と押し黙る。目の前の男に文句を言っても何も変わらないのは分かっているのだろう。だが分かっているにも納得できない事はある。そんな千冬の気持ちを代弁する様に真耶が桐生に尋ねた。

「けど確かに滅茶苦茶です。それに餌だなんて……」

「ま、言い方は悪かったけど似たような物だろう？ けどこれはチャンスでもあるよ。ここで一気にカタが付けば織斑一夏は自由の身だしね。先日の襲撃以来、ずっと学園に軟禁状態なんだろう？」

そう、一夏はキャノンボール・ファストのあつた日、夜に再びの襲撃を受けて以来学園から外へ出る事を許されていない。あれから2週間以上、一夏は学園から一步も出ていないのだ。それは一夏の身を守るための措置ではあるが、確実に一夏のストレスを溜める結果にもつながっていた。

（尤も、今までホイホイ外出してたのが異常だったんだけどねえ）

口には出さないが桐生はそう考えている。一夏の外出の度に護衛である静司達EXISTが大変そうにしていたのは桐生も知っている。だがそれでも許されていたのは、千冬や篠ノ之束に対する配慮もあつたのだろう。下手に反感を買いたくなかつたのだ。静司が外出を許されたのは、K・アドヴァンス社への用事以外はそんな一夏と一緒に出掛ける事が多かつた為だ。

だが度重なる襲撃に流石に配慮がどうのとも言えなくなってきたのが現実だ。故に一夏の行動は今より厳しく制限されている。

「正直に言うとな、意見は大きく割れているんだよ。これまで通り男性操縦者二人を学園に通わせるか、それともこれ以上何かが起きる前

にその体実験材料にするかを調べつくすか」

千冬の眼が鋭くなり、真耶も肩を震わせる。

「織斑一夏と川村静司。この二人以降相変わらず男性操縦者は見つかっていない。まあ世界中の男を調べつくした訳じゃないから分からないが、段々と焦り始めているのも事実だよ。そしてその焦りが非人道的な行為に移る可能性だってゼロじゃあない。織斑一夏が見つかった時だっているいろいろ言われただろう？ 世間の目は冷たいだろうけど、そんな物どうとでもなるしね」

だから、と桐生は続ける。

「そんな事になる可能性を少しでも減らす為にも『脅威となる対象』を早急に排除する必要がある、と言う事だねえ」

(ま、結局これも建前なんだろうけどね)

確かに男性操縦者にとつての脅威を排除することは早急に対処すべき課題だ。だがその裏にあるは、あの異様なIS達を手に入れたというIS委員会とそれに参加する各々の思惑がある。それは口に出さずとも目の前の二人も理解しているだろう。

(ま、嫌われ役は今更だしねえ)

「つまり」

「ん？」

桐生の思考を千冬の言葉が遮る。彼女は何かを考える様に、思い出すかのように口に手を当てつつ言葉を続ける。

「生徒達——取り分け男性操縦者に対する脅威として認識されているのは『全身装甲の異常な性能のIS』『黒く巨大な翼を持ったIS』そして『亡国機業とそれに所属するIS達』と言う事だな？」

「まあそんな所だね」

「け、けど黒い翼のISはっ」

「あれは先日一夏達に襲い掛かりデユノアを撃墜した。それに所属も目的も不明である以上、脅威の一つと見なされる。そうだな？」

「そうだねえ。間違っていないよ」

脅威というよりも興味を持たれてしまったと言うのが正しいけどね、とは桐生は口には出さない。

「なら、ならばその脅威が一つでも減れば、委員会側も考えは変わる可能性があるな？」

「織斑先生……？」

「うーん、今回の専用機タッグマッチは無理かもしれないけど、それでも今後は多少はマシンになる可能性はあるねえ。敵の性能もそうだけど、敵の数が多いと言うのがネックだったしね」

「……そうか」

領き何かを考え込む千冬と不思議そうにそれを見る真耶。そして桐生は相変わらずニコニコと笑みを浮かべてはいたが、その眼が少し細まり、探る様な目で千冬を見つめていた。

「はあ、はあ、はあ」

息が荒れる。肉体が無理な行使に悲鳴を上げる。身に纏った鋼鉄の鎧が異様な重さを感じさせ、その重さに押しつぶされそうになりながらも静司は体を強引に動かした。

「どうした静司！」

目の前を砲撃が通り抜けていく。その余波で機体をふら付かせながら、静司は空を——砲撃が飛んできた方法を見上げた。そこではラウラがその両肩のレールカノンを構え、悠然と陣取っている。

「動きが鈍いぞ！」

一発、二発。続けて放たれるレールカノンをギリギリで躲していく静司の顔に余裕は無い。

「ぐっ……」

偽装皮膚の下、まだ完治とは言い難い傷が疼き全身に痺れる様な痛みを撒き散らす。だがそれを無理に抑え込み、静司は己の搭乗するIS——打鉄の手に握るライフルを連射した。

「ふん」

だがそれらはラウラに当たる前に空中で静止してしまう。ラウラ停止結果のAICだ。この展開は読めていたので静司は打鉄の物理ブレードを手に一気に距離を詰める。ブレードを握る左手に力を込める。だ

がその瞬間、頭の中に別の光景がフラッシュバックの様に映し出された。

炎、軀、姉、血。それらが一瞬通り頭痛に眉を顰める。だがそれを押し切る様に静司はブレードを振るった。

対しラウラは両手にプラズマ手刀を展開するとその一撃を受け止める。鉄の焼ける匂いと微かな閃光。至近距離で睨み合う両者だがラウラの眼は訝し気だ。

「どうした静司。やけに動きが鈍いな」

「気の、せいだ！」

尚も頭に浮かぶ光景。それらが昏い闇となって脳裏を支配しようとする。だがそれらを振り切り、静司はブレードを振り切った。

「っ、やるな！」

「こんっのおお！」

ラウラが空中で立て直しを図る隙に更に前進。脳裏に過る余計な物を振り切る様に雫たけびを上げながらラウラへと突っ込んでいく。対し、ラウラもその両手のプラズマ手刀を構えそれを迎え撃った。

再度の激突。だが今回はラウラに軍配が上がった。もとより二機の間には明確な性能差がある。ラウラが本気で迎え撃てば出力が迎えられた打鉄では相手になら無い。静司と打鉄の一撃は逆に弾かれ、その衝撃でアリーナの壁へと叩き付けられてしまった。

「ふう、終わりか」

模擬戦終了のアラームが鳴る。打鉄のシールドエネルギーがゼロになったのだろう。それを確認するとラウラはゆっくりと降下していく。

「むっ？」

その最中、記録してたシユバルツエア・レーゲンの戦闘ログを確認していたがその眼がある項目で止まった。

「打鉄の出力は……？ いやこれは……」

ラウラが見ている項目。それは先程静司がラウラを弾いた際に記録されて打鉄の瞬間最大出力だ。そしてその項目では、打鉄のスペック以上の出力が記録されていた。

静司とラウラがお互いに戻ってくると早速先程の模擬戦の検討が行われた。真つ先に声を上げたのは鈴とセシリアだ。

「静司！ アンタもつとしつかりしなさいよ。全然動きが鈍いじゃない」

「確かにいつもとは少し違う感じがしましたわね」

二人の言う事は尤もであり、箒やラウラ、それに一夏も小さく頷いた。その横でシャルロットが心配そうに尋ねる。

「静司、本当に大丈夫？ 体調が悪いとかかな？」

「いや……何でも無いよ。2週間ぶりだから感覚がつかめなかっただけだ」

安心させるように笑う静司だが、シャルロットの顔は心配げなままだ。だが気遣う為に近づいたせいで、シャルロットは先日の真夜中の病室の事を思い出してしまい顔が赤くなってしまう。

(せ、静司はどう思ってるんだろう)

唇の感覚にシャルロットが一人顔を赤くする。だがそれを思い出すと、同時に何故か黒翼の事を思い出してしまう。あの黒翼の眼を。

聞いてみたい。聞いて、真実を知りたい。しかしそれを無理に聞き出す事を静司は望んでいない。もどかしさにシャルロットが悩む中、そんな事はつゆ知れず、一夏が腕を回しながら首を捻った。

「確かに久々すぎて俺もちよつと体が鈍ったかも……」

「軟弱だぞ、一夏」

箒の一言に一夏は無茶言うなよ、と思わず呻く。

キャンボール・ファストでの事件以降、学園はしばらく休校状態となっていた。それは亡国機業の巨大ISとサイレント・ゼフィルスによって、防衛に当たっていた教師陣が軒並み撃墜されたからであり、その回復と機体の修理に時間がかかったのだ。教師陣は比較的軽傷だったので座学自体は一週間ほどで開始されたのだが、IS訓練はそうはいかずアリーナも使用禁止となっていた。一夏達一年の専用機持ちも機体修理が必要であり暫くの間はISに乗れず、アリーナも

問題があつた時に止める筈の教師陣が総崩れだったので使用禁止にされていたのだ。加えて一夏や静司に至つてはその存在の重要性から暫くの間は厳重な警護下にあり、学園と寮の往復以外の自由な行動は許されなかつた。

「やつと訓練機も全部修理が終わつて、アリーナの使用もOKになつたとはいえ、やっぱり暫く乗らないと感覚が鈍るな」

「それを何とかする為にこうして放課後までやってるんでしょ。さ、一夏！ 次はアンタと私よ！」

「待て鈴！ 次は私と一夏だ」

「お二人共、抜け駆けは許しませんよ」

鈴と箒とセシリアが一夏の取り合いをする中、ラウラはやはりどこか少し顔色が悪い静司に声をかける。

「静司。先ほどの打鉄の出力だが」

ラウラがデータを端末に映し出し、静司とシャルロットも振り向いた時だった。新たに現れた人物にアリーナがざわめいた。

「千冬姉？」

一夏達も気づき、そして驚く。新たに現れたのは千冬だった。その事自体は特別珍しい訳では無い。教員である千冬が放課後のアリーナを見に来ることは今までもよくあつた事だ。

だがその千冬がISスーツを着ているとなると話は別だ。彼女が授業以外でそれを着ている所はこの場に居る誰もが見た事が無かつた。

「織斑達は模擬戦か」

「あ、ああそうだけど千冬姉は」

「織斑先生だ。馬鹿者」

「す、すいません」

ぎろり、と睨まれ一夏が慌てて言い直す。他の者達も千冬の視線に押されて慌てて佇まいを直した。

「そ、それで織斑先生はどうしてここに？」

「修理が完了した打鉄の一機が調整不足との話があつた。その調整の為に一度動かしてデータを取ろうと言う事だ」

千冬が見上げた先、アリーナ上部の観測室では不安そうな顔の真耶の姿が見える。

「千冬ね……織斑先生が？　なら俺と模擬戦やりませんか！」

一夏が手を上げた。世界最強とも言われる千冬との模擬戦。これは誰にとつても魅力的な物だ。例え勝てる可能性は皆無でも、その戦いには大きな意味がある。

「ちよ、一夏ずるいわよー！」

「そ、そうだ。お前も捨てがたいが千冬さんとの模擬戦は……！」

「わたくしも興味がありますわ！」

途端に揉めだす一夏達に千冬は嘆息した。

「貴様らはその織斑を取り合っていた最中だろうが。織斑もとつとと相手を決めてやれ。アリーナの使用時間とて無限では無い」

う、と押し黙る一夏達。確かについて先程まで一夏を取り合っていたのに、千冬が来たからと言って無かった事にするのは周りから見ても微妙だろう。

「あ、なら僕とはどうですか？」

そこでシャルロットが手を上げる。彼女とも千冬との模擬戦には興味があるのだ。だが千冬は首を振る。

「デュノア、お前は病み上がりだろう。いくら直ったとはいえ、暫くは安静にしている。お前も分かっているから模擬戦には参加してなかつたのだろう」

「う、それは……はい」

シャルロットは残念そうに頷いた。千冬の言う通り、シャルロットだけは静司や一夏達の模擬戦に参加していなかつた。理由は千冬と言う通りであり、静司が止めたと言う事もある。

そうなると残ったのはラウラと静司だ。そこでラウラが立候補しようとするが、それを遮り千冬が静司に声をかけた。

「川村、丁度いいから相手を頼む。ボーデヴィツヒ、お前は記録を。山田先生も記録しているが、ハイパーセンサーでも記録を残してくれ」

「は、はいー」

自分が相手に無い事の空しさと、何故静司なのだろうかという疑

問。それを感じながらもラウラは頷いた。

「川村、お前はいけるか？」

「……はい」

千冬の問いに静司は小さく頷いた。

正直に言えば、自分はこの本音と言う少女が苦手だ。

別に性格が悪いという訳では無い。むしろ彼女はそんな言葉から最も離れた位置に居る存在かとさえ思う。何時ものんびり、気の抜けた笑みを浮かべてこんな自分に構ってくる。それを苦手と感じても鬱陶しいと感じる事は無い。なら何故苦手なのかと言えばそれは姉の存在があるからだ。

この笑顔も。自分に構ってくるのも。そのどれもが姉の差し金なのではないか。そんな風に思ってしまった素直に彼女の好意を受け取ることが出来ない。だがそんな自分にお構いなしに構ってくるのが布仏本音という少女。それが更識簪にとっての認識の筈だった。

「……………」

「……………」

無言。その言葉がピットに流れる。自身の未完成I S【打鉄式型】の調整を行っていた更識簪はちらり、と隣を盗み見た。

そこに居るのは布仏本音。更識家の使用人である、自分の専属メイドでもある少女。彼女は何処か心非ずという様子で遠くを見つめていた。簪はその視線を追ってそして納得する。本音が見ているのはピットの正面にある巨大なスクリーン。その先に移る川村静司だったからだ。

川村静司。その存在は簪も良く知っている。それは更識家故に裏の情報は知ろうと思えばある程度知る事が出来るからだ。勿論、権限が無い故に知れない事も多々ある。あくまで更識の裏の顔は姉である楯無が取り仕切っているからだ。

簪が知っているのは川村静司が唯の男性操縦者では無く、一夏達の護衛としている事。少々特殊な生い立ちをしているのか、その腕が唯

の腕では無い事。そして何度か一夏達の窮地を救っている事。それぐらいだ。

正直に言えば、当初その話を聞いた時簪は興奮した。正体を隠して仲間を守る。そんな姿が自分の好きなヒーロー物の主人公の様だったからだ。まあその幻想も川村静司の顔を見て砕け散ったが。

入学当初は顔が見え無い程の無造作な前髪。今でこそ洒落な眼鏡をかけてマシになっているその顔。だがほんの一時期、川村静司は髪を切った直後その素顔のまま登校してきた時、簪は偶然その顔を目撃していた。そして震えた。歓喜でなく恐怖にだ。その時の川村静司はヒーローなんて言われたら詐欺で訴えても良い位、そう、人相が悪かった。簪も思わず半泣きになって逃げだしたものだ。

少しして眼鏡をかけてからはマシになったものも暫くの間、簪は本音の話の中で川村静司の話が出る度に一人小さく震えた物だった。静司が聞いたらいたく沈みそうな話である。

だがどういう訳か、その人相の悪い男に本音が気を寄せているらしい。それは簪も分かっていた。何せ、本音がこちらに構って来る時に幾度となくその話題が出るからだ。曰く、肉料理が大好きだ。曰く、織斑一夏と何かをやらかし織斑先生に怒られていた。曰く、こんな風にしてたら頭を撫でてくれた等々。『護衛としての川村静司』の話は無かったが『学生としての川村静司』の話を本音はよく簪にしていた。その時の本音はとても楽しそうであり、見ていてこんな少女を疑って素直になれない自分が恥ずかしくなる事もあった。

彼の登場から本音が簪と居る時間は確かに減った。しかしそれは蔑ろにしているなどでは決してなく、要所要所では自分の傍に居る。故に簪も、何時も顔を合わせている本音の様子がおかしい事には直ぐ気づいた。そしてその原因が川村静司とその周りに起因している事にも。

(何かあったのかな……?)

どこか心配する様な表情を時節浮かべるその姿に簪は疑問に思いつつスクリーンを眺める。どうやらこれから模擬戦を行うらしい。しかもその相手は、

「織斑先生?」

「……うん」

思わずつぶやいた言葉に本音が頷く。だが言ってしまったえば教員と模擬戦を行うだけなのに、何故本音がここまで心配するのかが分からなかった。

「何か、あつたの……?」

「かわむーね、怪我してるんだよ」

「え?」

本音の回答に思わず食い入るようにして画面を見つめる。確かに少々顔色が悪い気もするが、怪我らしいものはここからでは伺えない。

ふと周りを見渡すと他にもピットに居た生徒達もスクリーンに注目していた。彼女らは口々にこの模擬戦に関して話し合っている。

「織斑先生の模擬戦だって!」

「珍しいわね。それで相手は……ああ、彼か。織斑君じゃないのが残念ね」

「だよねえ、男性操縦者つてだけであまりぱつとしないもんね」

「専用機も無いし何で川村君なんだろうねー。絶対織斑君とか他の専用機持ちの方が面白いのに」

キャツキャツと好き勝手に話す少女達に簪はなんだか嫌な気分になった。彼女達の言いたい事も分からなくはないが、あの言いぐさは無いだろう。それに誰かと対比され陰で色々言われる、というのはまるで姉と自分を見ている様で殊更嫌だった。

少し不安になって隣の本音を見てみると彼女はそんな事は気にもせずスクリーンに集中している。聞こえてないのか、聞こえても気にしていないのか。どちらかは分からない。

画面の中の二人はお互い打鉄に搭乗し向かい合っている。静司は打鉄の物理ブレードを構え、千冬は自然体で悠然と立っていた。お互い何故か飛翔せず、地に足を付けている。

そして模擬戦が始まった。

「っー」

その瞬間、ピットに居た全員が息を飲んだ。それは簪も同様で目の前に映し出される光景に眼を見開く。

模擬戦の開始と同時に静司と千冬は動き出した。そしてお互いに真正面から打ちあったのだ。一瞬の鏖迫り合い。押し負けたのは何と千冬だった。静司は打鉄のスラストを全開にして千冬の刃を押し戻したのだ。だが千冬がその程度でやられる訳が無い。千冬は背後に一步引くと片足を軸としてその身を半回転させる。近接ブレイドで静司の攻撃を受け流しつつ引き込むように回転しつつ、その力を乗せた蹴りを叩きこむ。

胴体に一撃を喰らった静司が吹っ飛び地面を転がっていく。そこに追い打ちをかける様に千冬が地上を走っていく。静司も転がりつつ身を起こすと、目の前の千冬が振り下ろしたブレイドを打鉄の物理シールドで防いだ。その隙にシールドを残して自らは横に周りブレイドを一閃。しかし千冬はそれを容易く躲し、己のブレイドを引き込むと、まるで槍の様に突き出した。

「危ないっ」

思わず声が出てしまう。だが静司は自らのブレイドを立て、ブレイドの腹でそれを受け止めた。衝撃を吸収しきれなかった静司が再度背後へ飛ばされて行き、アリーナのシールドに叩き付けられた。

「……」

しんっ、と静まり返る。それは千冬の猛攻故か。それとも吹き飛ばされながらもそれを防いだ静司故か。

叩き付けられた静司だがまだ体は動く様で肩で息をしながらもブレイドを構えている。しかしその顔は開始当時よりも悪くなっている。

(え?)

そこで簪はおかしなことに気づく。静司の顔色が先程から余りよくないのがわかる。そう、画面越しでもわかるのだ。なのに直接相対している筈の千冬は、そんな事をお構いなしに攻撃している。

この模擬戦がどういった意図のもとで行われているのかは分からない。だがあんな状態の生徒相手にやる攻撃ではない様に思えた。

「せーじ……」

隣で本音が呟く声。それに不安を覚えながらも簪は画面を見つめ続けた。

今、自分は教師として最低の事をしているだろう。

それが分かっているながらも千冬は刃を降ろす事は無かった。

『お、織斑先生!?! やり過ぎです! それに川村君の様もおかしいですしここは——』

真耶からの通信をカットして千冬は正面を見据える。そこでは体をふら付かせながらもこちらを睨む生徒、川村静司の姿あった。

(川村……お前は何者だ?)

千冬の脳裏に浮かぶのは先日友人から来た電話とあるデータ。そのデータには例の黒い翼のISの網膜データと一致率が高い人物のリストが有り、そしてその中には川村静司の名があった。

『ねえちーちゃん。あの黒いISが出現した時……もう一人の奇妙な男は何処に居たのかな?』

その疑問は千冬とて持った。当時、自分も急ぎ確認しようとしたが更識楯無からの連絡で無事に保護されたと聞き、自分は現場に向かったのだ。だから自分はそう答えればいい。川村静司は何も関係が無い、と。

だが千冬にはそれが出来なかった。それは今までにも自分も幾度か川村静司に対して覚えた違和感があった故だ。それに川村静司は千冬と似た動きをする。その理由はK・アドヴァンス社での訓練で千冬を元にしたデータを使ったからだと本人は以前言っていた。そのこと自体は珍しくは無い。だがもし違うとしたら? そして先日の黒いISのVTシステム。あらゆるものが悪い方向へ繋がってしまう。

だがもし本当にそうだとしたら、協力者はどれだけいると言うのだ? 臨海学校でのアリバイ。キャンボール・ファストでの楯無の証言。それらを鑑みるに相当な数が居るのではないだろうか? だが

もし本当に楯無が協力者というのなら危険が無いのではないかとも思う。

これらはどれも憶測だ。協力者など居ないのかもしれない。楯無も真実は知らず、騙されているのかもしれない。そもそも静司があの黒い翼のISの搭乗者だと言うのも唯の妄想かもしれない。だが可能性がゼロでは無く、それを甘く見る事は出来ない。だから千冬は自ら確かめるために来たのだ。

「来るか」

正面の静司は息を荒らげながらこちらを睨んでいる。先ほどの千冬の蹴りは二つの意味がある。一つは通常の攻撃として。そしてもう一つは、静司の腹部にダメージを与える為だ。先日千冬は黒翼の腹部を切り裂いている。そこにダメージを加えれば何らかの反応があるだろうと言う狙いだったが、見た所静司には蹴りとしてのダメージはあっても腹部に怪我がある様子はいかたがえなない。

(やはり、もっと直接的に確かめるしかないか)

限度はあと一撃。そこで見極める。そう決めると千冬はブレードを引き、居合いの様に構えた。そして踏み出そうとして、その身を凍らせる。

「はあ、はあ、はあ」

正面の静司。それもまた同じ構えをしたのだ。その形はまさしく自分のそれであり、千冬は鏡を見ている様な感覚に襲われる。だが千冬がそれ以上に注目したのはその眼だった。そこに籠っているのは敵意と悲しみ。そしてどこか狂気が混じった濁りの様なモノが渦巻いている。

「いき、マス」

大きな音を打ち鳴らし静司が飛び出す。千冬もそれに合わせて前に出た。接近は一瞬。二人はお互いの間合いで一気に刃を振り抜き、激突。

「ッ……ふー」

大きな衝撃と震動。一瞬の激突の後、勝ったのは千冬の一振りだった。静司のブレードは弾き飛ばされ宙に舞い、静司はよろけるように

体をふらつかせた。

勝負はついた。これが実戦なら千冬はここからさらに一步踏み出し、返す刃で敵を斬り倒す事だろう。だがこれは模擬戦。それも生徒相手だ。通常ならそんな真似はしない。そう、通常なら。

だが川村静司への不信。友人の指摘。そして自分の発した言葉。『なら、ならばその脅威が一つでも減れば、委員会側も考えは変わる可能性があるな?』

それが千冬に一步を踏み出せと言う。それで全てが判明するのだと。違っても殺す訳では無い。ならば学園の、そして弟の安全と幸福の為に全てを今、ここで明らかにすべきでは無いかと。

だがそんな時間にしてはほんの一瞬、その躊躇の中に千冬は見た。ふら付いたと思われた静司がその身を起こし向き直すのを。その左腕を構え、こちらに襲い掛かろうとしているのを。そしてその眼にある——殺意を。

「っー」
だんっ、と千冬は一步を踏み込んだ。そしてその刃を、致命的な一撃を静司目掛けて振り下ろし——その腕が止まった。

「そこまで、です。勝負は、尽きました……」

見れば静司も体を硬直させている。体が動かないのだ。そしてその理由である少女は息を荒らげつつ自らもプラズマ手刀を展開し二人を押さえていた。その眼に眼帯は無く、金色に光っている。

「AICか」

「はい。っ、静司ー」

静司の体からだらりと力が抜ける。ラウラが慌てて支えると静司は打鉄を解除し膝をついた。そんな静司を開放しつつ、ラウラは戸惑いを含んだ目で千冬を見つめる。

「教官、何故ここまで？ 貴方なら静司の様子は分かった筈です……」
自分を慕い盲目的とまで言われたラウラのその言葉に千冬は小さく首を振り自らもISを解除した。

「少々、熱くなりすぎた様だ。私は戻る」

「教官ー」

ラウラの言葉に振り向くことは無く、千冬はその場を後にした。

「静司!？」

膝をついた静司に駆け寄ったシャルロットはラウラとは反対側に駆け寄りその肩を貸した。

「大丈夫、せい——っ!？」

「大丈夫だ。大丈夫……だから」

静司が支える手を握り締めるようにしてうわごとのように呟く。まるでそうすることで自らを繋ぎとめているかのよう。

そんな姿が心配で思わず覗き込んだ静司の顔を見てシャルロットが息を飲む。そこにあるのはどこか苦しげな表情。そしてその眼はやはり、

あの時見た黒翼の物と酷似していた。

「織斑先生!」

アリーナの廊下を歩く千冬に声がかかる。振り向くとそこにいたのは同僚であり後輩でもある真耶の姿だ。彼女は戸惑いと、そして怒りの混じった顔で千冬に詰め寄る。

「どうしてあんな無茶をしたんですか!? あれは唯の打鉄のテストではありませんでした!」

彼女の抗議は尤もである。何せ本当にテストじゃなかったのだから。だが千冬はその事には触れず再び歩き出す。

「織斑先生!」

「先程のデータを纏めて後で私に送ってくれ。以上だ」

未だ抗議の言葉を発する真耶から顔をそらし千冬は廊下を進んでいく。先ほどの対戦を思い出しながら。

「川村静司……あの眼は……」

自分が見たあの眼。自分に一步を踏み出させたあの眼は一体なんだったのか。一つ判明したのは川村静司に対する疑惑が増したと言

う事だけだった。

66：立場と感情の天秤

「これは……」

目の前のモニターが示す数値に息を飲んだ。

最初は何かの間違いかと思った。次に自分が寝ぼけているのではと疑った。それとも疲れているのだろうか。今日は色々あった。だからそのせいだと。

しかしいくら確認しても数値は同じ値を示し、いくら頬を摘まんでも痛みしか得られず、何本栄養ドリンクを飲んで、サプリまで試したが結果は変わらなかった。つまりこれは現実であり、正しい数値と言う事だ。

「こんな事が……」

彼女が見ているのはある2機の打鉄の戦闘データ。その数値は途中までは正常だったのだが、ある一点が異常な数値を叩きだしている。

それは2機の打鉄が数度の激突の末、一機の武器が飛ばされた後の事。片方がよろめき、もう片方が一瞬動きを止めた。問題はその後だ。よろめいた打鉄が急に動きだし己の左腕を振りかぶり、そしてそれをもう一機が斬り伏せようとする。その時のよろめいた方の打鉄。その左腕から異常な熱量が感知されている。

打鉄の腕に固定武装は無い。ましてや、これほどの熱量を生み出す程の兵器などある訳が無い。念の為確認したがこの打鉄の操縦者が左腕になんらかの武器を仕込んだ記録も無い。だが確かにそこで『何か』が起きようとしていたデータがここにある。もし2機の対決が途中で止まって居なかったら……そう考えると身震いがした。

「これが織斑先生があんな事をした理由……ですか？」

尊敬している先輩の突然の行動。その真意は分からない。だがこの熱量の正体こそが、原因な気がする。だがそうなると別の問題が生まれてくる。

「川村君。あなたは一体何者なんですか？」

誰も居ない部屋で、山田真耶は一人頭を抱えるのだった。

「織斑千冬が、ね」

『意外に冷静っすね。もつと怒るかと思つてたっす』

K・アドヴァンス社の奥。EXISTの通信室でC12と話す課長の顔は微妙な物だ。映像通信で有る為にこちらの顔が見えるC12は、そんなこちらの反応が意外だったらしい。

『てつきりキレてIS学園に乗り込んでくるかもしれないと思つたっすよ。まあそうしたら騒がしいんで面倒っすけど』

「俺一応上司だからな？」と、まあそれは別として、今回の件では織斑千冬ばかりを責める事は出来んな。難しい所でもあるが」

『一応理由を聞いても良いっすか？』

「極端に言つてしまえば、織斑千冬から見たらB9の存在は確かに不気味だろう。正体不明目的不明。挙句に果てに自分の動きをトレースして生徒を病院送りにしたISの操縦者かもしれない男。そんな不審人物が唯一の肉親に一番近い所に居るんだ。多少強引な手を使ってでも正体を見極めようとしたのだろうよ」

何も知らない人間から見れば織斑千冬の行動は訳が分からず混乱するだろう。特に織斑千冬のように大切な存在が近い場所に居る場合は尚更だ。だが事情を知る人間からするとそう簡単にはいかない。確かに教師としては悪手だが、リスクを侵してでも確認しようとしたのだろう。

『ん？ けどそれっておかしくないっすか？ 課長の言い方だと織斑千冬がB9と黒翼の関連性を疑っているって事っすけど、今までそんな素振りには……まあ無いとは言えないにしても今回の行動は極端過ぎっすよ』

「そうだ。むしろ問題はそこなんだよ」

煙草を取り出し吸おうとして隣に居たオペレーターに奪われた。視線で不満を訴えると代わりに募金箱を手渡される。そこには『禁煙。違反の度に500円』と書かれているのを見て肩を落とす。

「今回織斑千冬は突然行動を起こした。その理由は当然、弟の事や生

徒の事があつたからだろう。だが原因は別だ。織斑千冬が強硬手段に出るまでの原因が必ずある筈だ」

少なくともつい先日までは表面上は何も無かったのだ。それが休校から明けて早々にこの事態が起きた。ならばキャノンボール・ファストから今日までの間に何かがあつた筈なのだ。

「織斑千冬が亡国機業の襲撃の際にB9の居場所を確認しようとしたのは記録に残っている。その時は更識家が別途保護したと伝え、彼女も納得した」

『つまり事が起きたのはそれ以降でことつすね。黒翼の装甲が破損した際に気づいたと言う事は？』

「それならもつと反応しても良かった筈だ。だが当時の戦闘ログを見る限りそんな様子は無い。だからそれより後だ。しいて言うなら今日桐生が学園に諸々の報告に行った際に、色々と話した事が切っ掛けの一つかもしれない」

『あのおっさんは余計な事を。まあそれが仕事つてのはわかってるつすけどね。むしろ問題は委員会そのものつす』

「桐生の話で織斑千冬が焦つたのも事実だろう。だがそれだけじゃ足りない。もう一つ、何か重要な情報があつたからこそ織斑千冬が行動を起こしたと考えたい。彼女は謀り事に向いてるとは思えないが、自分の行動が問題な事くらいは分かっている筈だ。だからこそ、それを分かっているながらも行動するに至った理由がある」

『それも織斑千冬が信用もしくは多少なりと信じれる程の情報つすか。もしそうだとするとその情報の提供者は……』

「篠ノ之束……か？ それとも亡国機業？ そこは分からん。だが後者にはB9の事が既にバレている様だからともかくとして、前者の場合はかなり不味い事態だ。碌な結果にならない」

そもそも亡国機業が正体を知りながらも黙っている事も不気味なのだ。流石に課長も、静司の正体ことをカテーナやシェーリ。そしてエムが亡国機業内でも隠しているとは思いつたならなかった。

『けど篠ノ之束の場合、確信があればもつとストレートにアクションを仕掛けてきそうつすよ。それが無いって事は疑いのレベルじゃな

「いつすか？」

「そうだな。それも問題だが状況からするにその可能性が高い。そしてその話を織斑千冬にして、そして織斑千冬が煽られる様にして行動を起こした……か」

その場合、果たし絵籐ノ之束が何を思っただ話したのかは分からない。利用しようとしたのか、それとも友人だからこそ弟の危険を訴えたのか。あの二人の間にあるのが信用なのか打算なのかは本人達にしか分からないのだ。

「とにかく状況はどんどん悪くなっている。お前達も気を付けろよ。B9と黒翼が結びつくと言う事は必然的に俺達にも繋がるんだからな」

『了解つす。課長も気を付けるつすよ。所で一つ聞いていいつすか？』

「何だ？」

『さっき一方的に責められないって言ってたつすけど、それは『課長』としてつすよね。じゃあ『川村静司の父』としては？』

「決まってるだろう。保護者面談の際にまずグーパンから始まる」

『やっぱり怒ってるんじゃないつすか……』

どこか呆れた様なC12に課長も苦笑した。

「立場故って奴だよ。織斑千冬も、俺もな」

感情としては許せなくても、立場としては分かる部分もある。それ故の葛藤だ。

『面倒つすねえ、本音と建前のシーソーゲームは。私は下っ端で良かったつす』

「社会人としてその発言もどうかと思うがなあ」

C12の呑気な返答に課長は苦笑するしかなかった。

「一夏」

鈴は寮の廊下を速足で進んでいく一夏に追いつく為に声をかけた。先を行く一夏が立ち止まり、振り返る。

「鈴？ どうしたんだ」

「どうしたんだ、じゃないわよ全く。……千冬さんの所に行くんでしょ？」

鈴の指摘に一夏は静かに頷いた。

アリーナでの模擬戦騒ぎの後、静司は大事は無かったが念の為に今日の訓練は引き揚げ、一夏達もこれ以上続ける気配でなかった為にそれに続くことにしたのだ。

ラウラは何かを考える様に自室に戻り、シャルロットは静司を無理やり救護室へ連れて行った。セシリアと箒は自室だ。一夏も先ほどまでは一人自室に居たのだが、どうしても千冬に聞きたいことがあり部屋を出た所だった。

「俺は知りたいんだ。なんで千冬姉があんな事をしたのかって。あれは幾らなんでもやり過ぎだった」

「そうね。それは否定しないわ。それでアンタは聞いてどうするの？」

千冬さんを糾弾する？ それとも無条件で擁護する？」

鈴の辛辣な言葉に一夏は小さく首を振った。

「昔なら、昔の俺ならそれでも無条件で千冬姉を信じたかもしれない。けどさ、臨海学校の時にも鈴に言われただろ？ 『自分で考えろ』って。だからついさっきまでずっと考えてたんだ。何で千冬姉があんな事をしたのかを」

「そう。それで答えは出たの？」

一夏は首を振った。しかしその顔には戸惑い以外に、真実を知ろうとする意志が見える。

「分からなかった。だけど絶対に理由がある筈なんだ。確かに千冬姉は言葉より体で語る時もあるけど、意味も無く暴力を振るう人じゃない。それは弟である俺がよく知っている。だからこそ聞きたいんだ。千冬姉から、その理由を」

「……けど話してくれないかもしれないわ」

「それでも聞き出す。そうじゃないと俺は千冬姉の味方にも敵にもなれないからさ。勿論基本的には俺は千冬姉の味方だ。俺をここまで育ててくれたのは千冬姉に対する感謝の気持ちは忘れた事は無い。

だけどあの時鈴に言われた事だつて覚えてる。だから俺は千冬姉から話を聞いて、そして自分でちゃんと考えて、それで納得できれば味方になれる」

「もし……もし納得できるような答えじゃなかったら？」

鈴の問いに一夏は腕を組み、うーん、と悩んだ後、

「そしたら俺が叱らなきゃな。何やってんだよ姉さん！ ってな」

恥ずかしそうにそう語る一夏。その顔を見て鈴はため息を付いた。但し、口元には笑みを浮かべながら。

「そう。ちゃんと考えてるならいいわ。ならとつとと行きましょう」

一夏の腕を掴むと鈴が廊下を進み始める。そんな鈴の行動に一夏は慌てた。

「おい、行くつて鈴もかよ!？」

「そうよ悪い？ 私だつて気になるんだから良いでしょ。それにあんた一人じゃ……やっぱ心配だしね」

先を歩く鈴の顔は少し赤い。しかし引つ張られる形の一夏はそれに気づかなかつた。だが鈴がこちらを本当に心配してくれているのは分かり、どこか嬉しい気持ち湧いてくる。

「そっか。サンキュ、鈴」

「う、うるさいわね。早く行くわよ！」

更に顔を赤くした鈴に引つ張られながら一夏は廊下を進んでいく。やがて千冬の部屋へと着いたのでドアをノックしてみるが反応は無かつた。

「あれ？ まだ学園の方に居るのかな」

気合いを入れて来たのに拍子抜けだ。だが明日明後日に伸ばすのももやもやとした気分を引きずる様で気分がよく無い。そこで二人は学園に戻ろうかと話していた所に真耶が通りかかった。

「あら、織斑君と凰さん」

「山田先生、丁度いい所に」

同僚の真耶なら千冬の居場所を知っているかもしれない。そう思い尋ねてみると真耶は少し難しそうな顔で首を振った。

「織斑先生は今日は帰りません。私もお会いしたかったですけど先

ほど連絡が来て外出されたそうです」

「外出？ いきなりだな……」

折角気合いを入れて、頼もしい相棒同伴で来たと言うのに思いがけない事態に一夏は肩を落とした。そんな一夏に真耶が笑い補足する。「明日か明後日には戻るそうですから大丈夫ですよ。お話があるならその時にすると良いです」

「まあ仕方ないわね。また来ましょう、一夏。安心なさい。その時も私が付いて行ってやるわよ」

「そう、だな。居ないのなら仕方ない。山田先生、ありがとうございますでした」

二人で真耶に礼を言うとい夏達は部屋へと戻っていった。

「……IS委員会に呼び出されたなんて、言えないですよね……」

そんな二人の背後で呟かれた声に、二人は気づくことは無かった。

そして、たまたまその三人の会話を聞いていた少女が居た。

「家族を、信じる……」

それはどこか内向的な雰囲気を持つ眼鏡の少女、更識簪。彼女もまた、姉を持ちそして問題を抱えている。

「どう、して」

どうしてあれ程まで信じることが出来るのか。それが分からない。簪にとって姉とは憧れであり、そして決して手が届かない目標であり——そして恐怖を覚えてしまう相手だ。

姉が優秀過ぎるが故に比べられ、そして自分自身でも比べてしまう。それが恐ろしくて堪らない。余りにも違いすぎて。余りにも遠すぎて。そんな想いから姉とは距離を取ってしまったている。

だが織斑千冬と織斑一夏の姉弟は自分たちほど距離が離れていない様に見える。織斑一夏は怖くないのだろうか？ 世界最強と謳われる優秀過ぎる姉を持つことが。それと比べられる事が。

そこで気づく。一夏の隣を歩く少女の事を。

そうだ、彼には必要としてくれる人たちが居るから。世界が彼を必

要としているからあんな自信が持てるのだろう。優秀過ぎる姉にも劣らない程の、人と世界にとっての重要な存在が彼なのだ。

(なら、私は……)

一瞬、姉の優しそうな笑顔が浮かんだが直ぐに掻き消えた。確かにあの人は優しい。だがそれは誰にでもだ。それに優秀過ぎるが故に、出来そこないな自分の事を本当は疎ましく思っているかもしれない。見下しているかもしれない。何も期待などしていないかもしれない。そんな負の感情が押し寄せ簪の心を黒く染める。

「ちが、う。私は、私は……」

それが嫌だから。少しでも姉に追いつき、そしてこの恐怖を払拭したいからこそその打鉄式だ。これさえ完成させられれば、自分はきつと……

「調整、しなきゃ」

追い立てられるように簪は部屋へと戻っていく。脳裏に打鉄式式のデータを思い浮かべながら。そしてその横で、果たして自分を必要としてくれる人など居るのだろうかと昏い気持ちを抱えながら。

「静司、本当に大丈夫なの？」

「ああ、問題ないよ」

「本当の本当に大丈夫？」

「大丈夫だって」

救護室のベッドの上、シャルロットと本音の心配そうな目と問いに静司は苦笑しつつ頷いていた。そんな三人に養護教諭の丸川が呆れた様に声をかける。

「その問答は何回目？ そろそろ二人共部屋に戻りなさい。彼は今日ここに泊めていくから」

ほらほら、と追い立てる様に二人を立ち上がらせ出口へと連れて行く。

「けど……」

「ここで寝ちや駄目？」

「駄目に決まってるでしょ。全く最近の子は……」

消灯時間はまだ先なので本当ならまだ彼女らが居る余裕はある。しかし丸川は私にも仕事があるので気が散るから帰りなさい、と半ば強制的に二人を追い出した。

「静司、安静にしてなきゃ駄目だからね！」

「歩き回ったら後で罰ゲームだよ」

シャルロットの声と本音のどこまで本気かよくわからない注意が最後に聞こえ、そして部屋の扉を丸川が閉じた。彼女ははあ、とため息を付くと静司に近寄る。

「で、実際の所はどうなの？ 一応表向きはあなたは『無傷だった』所に『少々過激な指導』を受けたせいでダメージが残った、という設定なのだけど」

「先生の治療が的確でしたからね。本当に大丈夫ですよ」

「嘘言わない。本当は動くのキツイのは分かってるのよ。彼女達に心配かけたくないのは分かるけど二人はもう居ないんだから大人しく寝なさい」

少し怒った口調で丸川が静司を無理やり寝かしつける。

「……分かってるならなんでわざわざ聞いたんですか」

「問診って奴よ。自覚症状は大事だけど、川村君の場合は隠そうとするからちよつとした嫌味もあるわね」

「……」

不満を言いたいが、隠そうとしたのは事実なので素直に黙ると丸川は満足げに頷いた。

先日のキャノンボール・ファストで受けた傷は完治はしておらず、それに今回の千冬との模擬戦で開きかけたのだ。偽装皮膚の下は今中々に大変な事になっており、それを隠すのに必死だった。

「織斑先生は嚴重注意、だそうよ」

「……そうですか」

丸川がつい先程得た情報を伝えるが静司は特に感慨も無く頷いただけだった。それが意外に思えたのか丸川が訪ねる。

「冷静ね。あなたはそれでいいの？」

「良いも悪いも俺達の方針は会長経由で聞いているんでしよう？俺も課長達の意見に同意ですからね」

しかし、と考える。織斑千冬への処罰が嚴重注意とは少々驚いた。だが同時に納得もする。恐らく上層部は千冬に対して強硬手段に出ることを恐れたのだろう。同時にここで恩を売って置いて、いざと言うときの為に貸しを作る気か。どちらにしろ織斑千冬にとつても今回の件は良い結果はもたらされないと言う事か。
(ままなら無いな。だれもかれもが)

眼を閉じ、左腕の黒翼に意識を寄せる。するとどくん、と意思を主張するかの様な鼓動とその奥にある棘の様な物が疼く感覚に身を震わせた。

その棘の正体はVTシステム。それは完全には消える事無く、今は完全に根付いてしまっていた。そもそも静司と黒翼の場合はラウラの時と違い完全な行動停止によってシステムを消去したわけでは無い。黒翼本来のシステムと静司の意思。そして何より二人の少女の助けによつて自我を取り戻したに過ぎず、システムは残ったままなのだ。

無論静司として消去を試みた。しかしVTシステムは完全に黒翼のシステムに根付き、同時に静司の頭の中にもしこりを残している。元々Vプロジェクトから派生的に生まれたのがVTシステムだ。そのVプロジェクトの被検体としてかつてインストールを受けていた静司の脳とVTシステムの親和性が高すぎたが故の問題である。

この影響は普段は何とか抑えられている。だが今日の模擬戦の時に感情が高ぶつて来た時、自身の意思を塗りつぶして前に出てきってしまう。

だがこのままではいけない。自分はこの力をコントロールしなければ、もうここには居られないのだから

救護室のベッドの上で、静司は拳を強く握りしめた。

その後は何事も無く、静司も静かに救護室のベッドで安静にしてい

た。丸川も今夜はここに泊まるらしく、遅くまで仕事した後は隣のベッドで寝てしまった。聞けばここに泊まる事はよくあるらしく、彼女は慣れた様子で安眠している。

静司も何度か眠りにはついたが、どうしても眠りが浅く何度も目覚めてしまい、今も退屈そうに暗い天井を眺めていた。

現在一夏の警護にはなんと会長が付いている。どうも彼女も一夏に用があつたらしく、一夏の周りの少女達を軽くないなして泊まり込んでいるらしい。生徒会長として、いやそれ以前にモラルどうのこうのはどうなのかと非常に疑問に思う静司だが、一夏の安全の為ならと見て見ぬふりをする事にした。因みについて数時間前までそんな楯無を一夏の部屋から追い出そうと筈、セシリア、鈴の連合軍VS楯無という他人からすれば非常にどうでも良い戦争が起きていたとか。意外な事にラウラは大人しく部屋に居たらしい。シャルロットが止めたのだろうか？

そんな事を思いつつやはり寝れずに過ぎ、時刻は深夜の2時を周った頃。このままでは寝るに寝れないと判断すると静司は起きあがり、学園の自販機コーナーへと向かった。

深夜で有る為、学園の警備システムは全力稼働中だが救護室から直ぐ近くにある自販機コーナーと職員室。そしてトイレまでの間は通つても問題は無い。だから静司はほんの気分転換もかねて自販機コーナーまで行くとミネラルウォーターを購入。そしてベンチに座りキヤップを開けようとした所でその手を止めた。

「……………なんだ？」

一瞬、視界の端を何か横切った。それはとても小さく、暗闇に溶けてよく見え無かったが確かにそこに何か居た。

自然と意識が警戒態勢に入る。ゆっくりと立ち上がり慎重に歩を進める。

かたっ

「っ!？」

背後から物音。だが振り向いてもそこには何も居ない。だが明らかに視線の様な物を感じる。これは一体、何だ？

警戒心を上げつつ懐から携帯を取り出す。勿論唯の携帯でなく、高度に暗号化された特別性である。何か違和感を感じたらすぐに報告。当然の行動だ。だがいくらキーを叩いても繋がらない。いや、違う。これは妨害されている……？

『キミハ』

「誰だっ!？」

突如聞こえた奇妙な電子的な声。その声が出た方に視線を向けるとそこに妙なモノが居た。大きさはほんの手のひらほど。滑らかな流線型の銀色の体。申し訳程度に生えた耳の様な物と手足。そして赤く光る眼。それは鈍い銀色の機械で出来たリスだった。

『キミハナニモノ?』

『チョットムチャシタ』

『サスガ——チャン。ワタシモビツクリ』

『ジブンデタシカメナイトネ』

『ダカライイナヨ』

『キミハナニモノ?』

自販機の影から。壁の隙間から。天井から。床から。次々と現れる機械仕掛けのリス達。それらが静司を取り囲み、そして耳障りな音を立てていく。

「こいつは……!」

知っている。忘れる筈が無い。かつてロシアの地で見たあの凄惨な光景。あらゆる機械と兵器を喰い、自分達すらも喰いあってその身を作ったといった奇怪極まりない機械仕掛けの小動物の存在を。そしてそれを指揮する存在も。更にはこの小動物たちの発する言葉から静司は気づく。織斑千冬が行動に移した、その原因を作ったのが誰なのかを。

『キミハダレ?』

その言葉を皮切りに、機械仕掛けのリスたちが一斉に静司に飛びかかった。

「何……？」

更識簪はコンソールを叩く手を止め顔を上げた。

ここは彼女の自室。夜も深い為にルームメイトの本音は既に寝ており部屋は薄暗い。だが簪は一夏達の話聞いて以来、休むことなく自らのISの調整を行っていた。そんな彼女に本音は何度も休むように薦めて来たのに、彼女は聞くことなく続け、結局眠気に負けた本音は先に寝てしまったのだ。これはよくある光景なので簪は気にしていない。むしろ本音の事は少し苦手なので、やっと静かになつたとも思ったりもする。

今はISの部分展開をしつつハイパーセンサーの調子確かめている所だった。比較的センサー類は良好なのでつい気が乗って学園のシステムに接続してみたのだ。本来なら嚴重なセキュリティが成されているそれだが、学園内部において、更識家故に多少の権限がある彼女からすればよくやる事だ。これを使って人気のない所を探してそこでISの調整を永遠と行っていた事さえある。

だが妙な事に、学園校舎側のセキュリティが部分的に落ちている。それなのに警備が動いていない。それはつまり警備部の人間が気づいていないと言う事だ。試しに警備部のシステムを覗いた所、『表面向きは』正常な状態でありこれでは気づきようが無い。簪が気づいたのはたまたま正規のルート以外から学園のシステムを覗いていたからである。

「システムに介入されている？」

ふと、以前も似たような事があつた事を思い出す。あの時はシャルロット・デュノアが行方不明だった時か。その時もシステムは介入され、正確な情報は隠されていた。多少違うものも、あの時に似たような事が起きている？

「……」

ここで。ここで連絡する事は簡単だ。姉か虚か。隣で眠る本音にだっていい。一言内容を伝えれば姉は直ぐに動くだろう。

だがその事を躊躇う自分がある。まるでやっかい毎を全て姉に任せる様で。自分には何も出来ないから、姉にやってもらおう。そんな構

図が頭に浮かび簪は慌てて首を振った。

「そんな事、無い。私にだって……」

彼女はあまり行動的な性格では無い。しかし姉への思い。そして一夏達の会話を聞いていたせいも、彼女に言い様もしれない意地の様な物を生ませている。

小さく頷くと簪は直ぐに着替え始めた。制服に身を通し、そして自らを叱咤激励する。

（大丈夫。打鉄式も調子が良い。それにただ確認するだけ。本当に大変な問題なら先生たちに連絡すればいい）

一人頷くと簪は部屋を出ていった。

67：姉妹

「かんちゃんか？」

深夜のIS学園学生寮。その廊下で楯無はその報告に肩を震わせた。

『警備部からの連絡です。寮のセンサーに反応があり、画像を確認した所簷様が校舎の方へと向かう姿が』

手に握る携帯電話の話し相手は虚。彼女もまた、警備部からの連絡で起こされそして楯無に連絡を入れてきたのだ。

『念の為本音に確認しましたがやはり部屋には居ないそうです』

「けどなんでこんな時間に校舎に？ 校舎の状況は？」

『警備システムは正常です。ですが先ほどから川村君と連絡が取れません』

その報告に楯無の眉がぴくり、と跳ねる。

『彼は昼の出来事の為に救護室に泊まる事になっていたのですが、どれだけ連絡しても繋がりません。それに丸川先生も』

嫌な予感が増していく。楯無もまさか静司が連絡にも気づかず眠りこけているなどとは思っていない。このタイミングでの連絡不通。何か起きていると考えるべきだ。

「彼の仲間達は？」

『そちらには連絡が取れましたが、やはりあちらからも川村君には連絡が取れない様です』

決まりだ。良く無い事が起きている。

「私が向かうわ。虚、あなたはかんちゃんの補足と一般生徒達が間違っても校舎に向かわない様に人員を送って。まあこの時間なら必要ないかもしれないけど念の為よ。それと私が抜けるから織斑君の警備を増加。EXISTの人達にも伝えて」

『かしこまりました』

本来なら別の人員を向かわせ楯無はここで指揮を執るべきなのかもしれない。しかし妹である簷が関わっているのなら楯無にその選択肢は無い。その想いは虚にも伝わっていた様で彼女も何も言わな

かった。

「かんちゃん……」

すれ違いが続き、どこか疎遠になってしまった妹の名を呟きつつ、楯無は校舎へと向かっていった。

こうも直接的な手段でくるとは予想外だった。

夜の I S 学園。その校舎の廊下を走りつつ静司は己の楽観視を呪っていた。そしてそんな彼の背後には闇の中、幾つもの眼が光りこちらに向かってきている。時節背後を確認しつつ、静司はただひたすらに逃げに徹していた。

昼間に織斑千冬があれ程反応したのだ。その原因の一つでもある篠ノ之束も何らかのアクションを取ってくるかとは思っていた。だがこんな手段で来るとは思っていなかったのだ。

自分を追う機械仕掛けのリス達。あれは一体いつからこの学園に居たのだろうか？ それを考えるとぞつとする。そしてもしあれに捕まってしまうばどうなるのか。恐らくまずは左腕の事が知られるだろう。そしてそこから黒翼に繋がれば全てが終わる。もうこの学園には居られない。それどころかその場で殺されるのかもしれない。篠ノ之束の思惑が分からない以上、常に最悪を想定するべきだろう。

まだ痛む体に鞭を打ち出口へと走る。だがその前方にもリスたちが現れ思わず舌打ちした。

「くそっ」

たたらを踏んだそこへリスたちが飛びかかる。咄嗟に身を転がし飛びかかってきたそれを躲すが、今度は床を走るリスたちが迫ってくる。それはまるでリスと言うよりも砂糖に群がる蟻の大群を思い起こさせ、嫌悪感を身を震わせながらも静司は起きあがり再び走る。

(どうするっ!?)

このままでは埒が明かないのは明白だ。外にも連絡が付かず、これだけ走っても警報の一つもなら無いことを考えると警備システムも

相手の手の内か。異常に気付いて学園側やC1達が介入するまで逃げ切る事ができるのか？

「ちらり、と己の左腕へ視線を落とす。この左腕——黒翼を使えばこんな小型のリス達など簡単に殲滅できるだろう。だがそれは篠ノ之束の前で正体を明かす事となり、同時に自分のこの学園での生活が終わりを告げる事も意味している。少なくとも真実を知った篠ノ之束が自分に対して何もアクションを起こさないとはいえないからだ。」

「いつかは、こんな日が来るのではないかと思っていた。こんな形ではなくても一夏達を護る為にどうにもならぬ状況が来るのではと。そしてその時自分は躊躇いなく力を使うと決めていた。決めていた、筈だった。なのに、」

「……………くそっ！」

自分は今もこうして無様に逃げている。黒翼を使わずにだ。状況が一夏達を護る事でなく、自分が狙われているからというのは理由にならぬ。それは唯の言い訳だ。

結局自分は捨てるのを恐れているのだ。一夏や本音達との騒々しくも楽しいこの学園での日々を。そしてその恐れが黒翼を使う事を躊躇わせている。このまま使わずに逃げ切れなければ結局は同じことだというのに。

そんな思考に気を取られたが不味かったのだろう。突如天井から降ってきた新たなリスが数匹、静司の体に纏わりついた。

「痛っ、離れろ！」

静司の体に纏わりついたリスはその肌に牙を立てる。衣服を貫き肌に突き刺さるその感触を気味悪く感じながら咄嗟に振り払う。数匹は何とか離れたが、一匹、左腕に齧りついたリスだけが離れようとしなかった。

「このっ！」

その左腕を思いっきり壁へとぶつける。リスは壁と静司の左腕に挟まれぐしゃりと潰れその機能を停止した。それを振り解いて走りつつ、静司は徐々に追い詰められていくのを感じていた。このままではいけない。

噛まれた個所から血を流しつつ打開策を考える。重要な個所では先回りされ徐々に上の階へと追い込まれている。このまま行けばいずれは捕まる事だろう。ならば――

横を見れば窓ガラスに写る自分の姿とその先には外の景色。逃げているうちに3階まで上がってきており、そこからは月明かりに照らされた学園の中庭が見える。これしかない。

「最悪な日だっ……い！」

決意は一瞬。静司は背後から迫る機械仕掛けのリス達の視線を感じつつ廊下のガラスを殴り割砕いた。

『E?』

リス達、正確にはそれを操る者の声を背後に聞きつつ、その身を外へと躍らせた。ぶわりと風を切る感覚。その身が重力に従い落下していく最中、左腕を伸ばし外壁に取り付けられた排水管に手をかけ、そして握る。

「B級映画かよっ」

自分で自分に突っ込みを入れつつ、排水管を握りしめるその力をブレーキにしながら落下しいき、安全な高さまで落ちた所で手を離した。どすんつ、と地面に体を打ちつけ痛みに顔を顰めつつ上を見上げる。3階割れた窓の淵に、目を光らせ他リス達の姿が幾つも見えた。そのリス達はまだ追ってくる様で外壁を伝う様にこちらを目指してくる。だが時間は多少なりと稼げた。

静司は再度窓を破壊するとそこから校舎内へと身を躍らせた。ここからなら正面出口が近い。そこから外へ逃げれば何とかなる筈だ。そうして再び走り曲がり角を曲がった時だ。不意に前方に気配を感じ、咄嗟に静司は腕を伸ばした。

「きゃっ！」

案の上そこには小柄な人影が一つ。伸ばした腕で相手の首を掴みつつ、壁に押し付ける様に叩き付けそしてもう片方の手で相手を――

「何……?」

そこで目の間の人物が予想外の相手である事に気づいた。薄青で内側に跳ねた髪。垂れ気味の気弱そうな目とそこにかかけられた眼鏡。

そしてIS学園の制服の少女はガタガタと震えてこちらを見ていた。

「更識簪？」

それは楯無の妹の姿だった。

「んー？」

束は自分の研究室でその映像を興味深げに見ていた。

彼女の前に写るスクリーンではIS学園に放ったリス達からのライヴ映像が流れている。今写っているのはたった今、川村静司が飛び降りた窓とそのすぐ横に設置された排水管。その排水管は途中から何かを擦った後が残っており、そして壁とのつなぎ目が壊れている。

川村静司はあれを使って下へ降りたのは分かる。だが人間一人が降りるのに使っただけで壊れたりするだろうか？ 老朽化も考えたらIS学園が出来てからの年数を考えるとどうもしっくりこない。

「降りたところを見れなかったのがネックだねー」

まさか3階から飛び降りる等と思ってもおらず、リス達を向かわせた時は丁度彼が着地した時だったのだ。その数瞬の間で排水管が壊れた。これがどうにも気になる。もとより欠陥があったのか。それとも他の何かが原因か……？

「束さま」

不意に背後から声。振り向くとベッドに横たわり様々な機械になげられた銀髪の少女の姿あった。

「おや？ もう遅いんだから寝なきや駄目だよ？」

「しかし束さまが働いていますのに私は」

「気にしない気にしないー。まだその体に慣れて無いんだから無理しちゃ駄目だよー？」

銀髪の少女へ話しかける束はどこか楽し気だ。それもその筈。先日拾った少女はどこまでも素直に束を慕い、感謝し、敬っている。最近どうも思い通りにいかない事が多かった束にとってそれはとても心地良い物でもあり自然と少女に対する扱いも柔らかい。

束は手元のコンソールを叩くと別のウィンドウを呼び出しその数

値を確認する。

「うんうん。いい感じだねこっちは。ここまでコアとの適合率が高いと生体再生というより生体融合に近いね。けどそのお蔭でまた自由に動けるんだから良い事だよね!」

「はい。東様には感謝しております。ところでその男が?」

「ん? ああ、これね。まだ微妙なんだよね。一番怪しいから突っついたら何が出てくるのかと思ってるんだ」

スクリーンに映る静司の姿に少女は目を細める。そして小さく、可細い声で呟いた。

「あれが……敵」

「まだ決定じゃないけどどちらにしと目障りなのは同じだよね。これからの為にも早くその辺をスツキリさせようじゃないか!」

「はい。私にも出来る事があれば何なりと」

「ふふ。かわいいね! その時は頑張って貰おう!」

上機嫌に笑いつつ束はスクリーンに視線を戻す。その向こうにいる少年は窓を破り再び校舎内に侵入した所だった。

「何故こんな所に!?!」

「わ、わたしは……」

肩を掴まれ静司から真正面で問い詰められた簪は怯えてしまい中々言葉を紡げないでいた。川村静司の様相は酷い物であり、汗だくの服のあちこちは破れて一部からは血が滲んでいる。そんな状態で至近距離から詰め寄られると、元来の人相の悪さも加わって簪が怯えるのも無理がなかった。

「学園の、警備システム……が、おかしかった……から」

震えながらもなんとか紡げた言葉に静司は驚いた様に眉を上げた。

「それは誰かに伝えたのか?」

「う、ううん。私、一人。何が……起きてるの?」

こちらの答えに深刻そうな顔になる静司に不安げに問うが彼は首を振った。

「とにかく逃げるんだ。それと人を呼んでくれ。会長に伝われば何とか——」

「……ひっ！」

突如簪は静司の後ろに奇妙な物をみた。それは闇夜の中で光る一対の眼光。それが幾重も重なって静司の背後から迫ってきている。

静司も簪の様子に気づき振り返り、そして舌打ちした。

「もう来たか。急げ！ あれの狙いは俺だからそっちは問題ない筈だ」

簪は静司に引き寄せられるとその体を回されそして背を押す様にして送り出された。そして静司は簪とは別方向へ走りだす。その背を見ながら彼の言っていた事を思い出し、そして歯噛みした。

誰かを呼ぶ。この状態でそれを行えばやってくるのはおそらく姉だろう。そして姉がその力で事態を解決させ自分はまたその後ろ姿を見ているだけ。いや、それどころかこれでは姉に縋る様な物。これでは……何も変わらない！

「う、打鉄式！」

「何っ!？」

気配を感じたのだろう。驚き振り向いた静司の視線の先で簪がI Sを展開した。打鉄の発展期でもあるそれはしかし、打鉄とは大きく形状が異なっている。防御重視な打鉄と異なり、大型物理シールドがあった肩部には代わりに大型スラスタと替えられている。全体的にスマートな印象ながらも無骨な機械としての面影を残すそれほどこか白式に似ている部分があった。

「私に……だって！」

武装はまだ未完成だ。しかし目の前のあれくらいなら何とかなる。そうだ、これくらいであの人に頼っている様ではいつまでも自分は劣等感に苛まれる。そんなのは、嫌だ。

「これで……！」

背中に搭載された荷電粒子砲《春雷》。未完成で出力の調整が完全でないが発射は出来る。簪は己の中に鬱屈して溜まる感情を吐きだすように、それを発射した。

深夜の校舎内に閃光が走る。碌に照準も定まらず、本来の用途と異なり拡散して放たれたそれはリスの群れへと突き刺さり破壊していく。廊下も煽りを喰らい壁が焼け炎が上がっていった。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

炎と煙の上がる廊下。そこを簪は息を荒くしたまま見つめる。敵を倒したという興奮と、少しやり過ぎたという反省。そして未完成的な武装に対する落胆。様々な感情が入り混じりつつも簪は小さく笑った。

「やれ、た……！」

姉に頼らず、自分の力でやった。その事に簪の心に歓喜が湧きあがる。そうだ、例え未だISは未完成でも自分でもやれたのだ。自分は姉の背中を見ているだけの少女では無い。

「あなたは、大じよ——」

「まだだ！」

静司の方へと視線を移そうとした簪だがその彼からの警告に思わず肩を震わせる。たった今自分が焼き払った場所へ視線を移すがそこにはもう動く物が居ない。だがハイパーセンサーが別の物を捕らえた。

「あ、ああ……」

炎と煙が舞う中、新たな眼が湧き出てくる。それは未だ隠れていた機械仕掛けのリス達の姿。そう、あれで全てでは無かったのだ。更にはそのリス達が突如としてお互いを喰いあい、そしてその形を変えていく。どこまでも異常で、どこかグロテスクなその光景に簪が固まる中、リス達は一つの形を作り出した。

「あ、IS?..」

それは歪な形をした人型の機械。ISに似ている様で、しかしそれよりも大分小型だ。表面は凸凹としており所々にリスの名残である手足が棘の様に突き出しているのがより不気味さを増している。

そしてその歪な形状をした頭部がこちらに向けられ。そしてその頭部に百目鬼の様に存在する複数の眼が簪を睨む。

「ひっ?..」

その視線に怯え、慌てて荷電粒子砲を発射した。再び廊下に走る閃光。だが碌に調整されていないそれは百目鬼の装甲に弾かれた。そして気にした様子も無くその腕を簪に向ける。その光景を見て簪の顔に絶望が浮かんだ。

「逃げるー！」

簪のISが未完成だと気づいた静司が叫び左腕を振り上げた。その左腕を中心に光が灯り、ISを展開しようとする。その光に反応した百目鬼型が簪から顔を外した、その時だった。

「大丈夫よ」

突如聞こえたのはよく知る女性の声。そして静司の背後から凄まじい速度で水流が押し寄せ、簪のすぐ横を通り過ぎ百目鬼型へと直撃した。

百目鬼型が床を転がり、押し寄せた水が炎を消化し蒸気が上がる中、ゆっくりと一人の少女が現れる。

それは特殊な形状をしたIS、ミステリアス・レイデイを身に纏い、圧倒的な威圧感を持ったこの学園の会長の姿。だがその顔には何時もの余裕の笑みは無く、頬には汗が垂れそして視線が鋭く冷たい。その視線を見た途端、簪の中で恐怖が浮かんでしまう。

やはり駄目だ。自分は姉には追いつけず、それどころかまた守られるだけの妹に過ぎないのか。いや、それどころか結局でしゃばって迷惑をかけている唯の足手まといにしかなくなっていない……。

だがそんな思いを裏腹に楯無の口からも漏れたのは予想だにしない言葉だった。

「人の……」

「え？」

「人の大切に可愛くてキュートでちょっと小動物的で思わず抱きしめたいけど中々できなくてそんな可愛い妹に何してくれるのかしらね!？」

そう叫び凄まじい速度で百目鬼型に詰め寄りランスを振るう姉の姿に簪は呆然とした。そして思う。あれ？　なんか駄目な人に見える、と。

因みに静司は最初の水流に巻き込まれ床に倒れ伏していた。

百目鬼型に接近した楯無が振るったランスは腕の継ぎ目を貫きそれを破壊した。片腕は吹き飛び百目鬼型の眼が点滅するがそんな事はお構いなしに楯無は攻撃の手を緩めない。

「何者か知らないけど、かんちゃんに手を出そうしたと言う事は、私に喧嘩を売ると御同じよ。覚悟なさい」

蛇腹剣《ラストイー・ネイル》を振るい百目鬼型の足をからめ取ると一気に引き絞る。金属が碎ける音が響き百目鬼型の片足が千切れ落ちた。だが百目鬼型も何もしない訳では無い。残った腕を向けるとそこに砲塔が生まれ光を放つ。その一撃を身を捻らせ紙一重で躲すと、その捻りに回転を加えたランスの一撃で百目鬼型の頭部を叩き潰した。そして止めとばかりにその胴体にランスを突きつけ、笑う。「碎けなさい」

刹那、ランスの四門ガトリングガンが百目鬼型の胴体を引き裂いた。百目鬼型の機体がガクガクと衝撃で震え、やがては地面に倒れ伏す。

「…………ふう」

敵の破壊を確認すると楯無は振り返り簪へと視線を向ける。すると簪はびくつ、と肩を震わせ怯えた眼でこちらを見つめていた。

(正直、悲しいわね)

一体どこですれ違ってしまったのか。気が付けば自分と妹との間に出来てしまった距離に楯無は重い気分になる。彼女が姉である自分と比較して劣等感を抱いてしまっているのは知っていた。しかしそれをどうにかしたくても、どうすればいいのか分からない。だがこうして久しぶりに顔を合わせられたのだ。この機会を逃す手は無い。

「かんちゃん——」

「まだだ！」

「!？」

ふら付く頭を押さえながら起きあがった静司が発した警告。そし

て楯無の前の簪の眼が大きく見開かれる。

悪寒を感じて咄嗟に振り向いた時、視界いっぱいに映るのは倒したと思っただ目鬼型ISだった。

「しまっ——」

油断した。簪に気を取られ過ぎて警戒を怠っていた。百目鬼型の体は所々千切れ、ぼろぼろにも関わらず動いている。それどころか修復すら行っている様に見える。そんな異常性を目の当たりにしつつ、楯無は咄嗟に簪だけは守ろうと突き飛ばそうと手を伸ばし、そして逆にその腕を掴まれた。

「えっ？」

戸惑う楯無の視界の先。こちらの腕を掴んだ簪に引き寄せられ両者の位置が逆転する。そして百目鬼型の正面に簪が周った直後、その百目鬼型の機体が膨れ上がる。ぞつと、とする悪寒に楯無は咄嗟にミステリアス・レイデイの表面を覆う水のヴェールを簪に向けて放つ。

「かんちゃん!?!」

直後、百目鬼型が爆音と共に自爆した。

自分でも何をしているかは分からなかった。決して届かないのではと恐れ、避けていた姉を目の前に自分はただ震えているしかなかった。

だがその姉の背後である奇妙なISが起きあがり、そして姉に向けて飛びつこうとした時に感じたのは今までとは全く違う恐怖。それは姉を失うかもしれないという恐怖だった。恐れているも、届かない物と思っただけでもそれはやはり嫌だ。

その感情が簪の体を動かした。自分でも信じられないような行動。姉の腕を握り、引き寄せ、そして庇う。驚いた姉の視線を感じつつ前に出た簪の前には百目鬼型が迫っていた。

(ああ、これが)

これが姉の見ていた景色か。とても恐ろしく、怖い。初めて見るその光景は何処までも敵意に溢れていて、それ故に気づく。今までこの

敵意からずつと守られていた自分の弱さに。

「かんちゃん!?!」

姉の叫び声。初めて聞いたその必死な声をどこか意外に感じつつ、簪は炎に包まれた。だがその寸前、不思議と温かい物に包まれるような感覚がした。

「かんちゃん、かんちゃん!?!」

爆発が収まり、焦げ臭さと煙が漂う廊下で楯無は妹を抱きかかえ叫び続けていた。その瞳からは涙が溢れ、爆発の汚れで煤まみれの簪の顔へと落ちていく。

既に百目鬼型の姿は無くリスの姿もない。騒動が大きくなってきた故に逃げたのだろう。今残されているのは倒れた簪とそれを抱きかかえる楯無。そしてそこに歩み寄る静司の姿だけだ。

「ん……」

「かんちゃん!」

小さく声を漏らし目を開けた簪に楯無の顔が綻び、抱き着く。そんな簪は状況がよくわからない様に顔を動かし、自分の傷が思いのほか浅い事に気づいた。確かに所々傷があり痛みもする。だが至近距離で爆発を受けたにしては軽傷過ぎる。

「会長が守ったんだよ」

その答えを教えたのは静司だった。確かに言われてみれば爆発の寸前、体が何かに包まれた記憶がある。

「結局、また護られた……」

「そんなことないわ!」

がしいつ、と肩を掴まれ涙と鼻水で滅茶苦茶な楯無に真正面から否定され簪は思わず肩を震わせた。

「あの時私は反応が遅れた。かんちゃんが助けられなかったら不味かったの! だけどかんちゃんは私を助けくれたから私は無事なの! だけど、けどなんであんな危険な事をしたの!?!」

ただどだけと言葉を連発するその顔は何時もの威厳ある生徒会

長の顔とは遠く離れた、純粹に妹を心配する姉の顔だった。いくら簪でもこの表情が作り物だとは思えない。そして楯無に言われた事を自分でも考える。何故自分はあるな真似をしたのか？ その答えは案外簡単にわかった。

「居なくなっちゃ、やだから」

恐怖も劣等感も未だある。自分なんか駄目なんじゃないかと言う思いもある。だけどそんな感情とは別に、姉という存在が消えてなくなる事が怖い。咄嗟にそう感じたのだ。

だがそんな返答に楯無の顔はいよいよ本格的に崩れて見てもらえない程に涙と鼻水でグチャグチャになり、簪に抱き着いてきた。そんな楯無の行動に若干嫌そうに顔を顰めつつも思う。自分の安否一つでここまで心配し、泣き叫ぶような脆い人を自分は恐れていたのだろうか。そしてそこまで大切にされていたと言う事を。そんな相手に対し今まで疎遠に接してきたことで、どれだけ傷つけたのだろうか。

だが長い間距離を離していたせいで何を言えばいいのか分からな。困った簪は助けを求める様に静司を見ると、静司も困ったように考え、そして答えた。

「とりあえず今思ってることを言ってみればいいと思う」

今思ってる事。その言葉を咀嚼しつつ未だ抱き着いたままの楯無に視線を落とすと楯無もこちらを見上げた所だった。

強く、気高く届かない存在だと思っていた姉。自分なんか駄目だと昏く心を閉ざしていた自分。しかしそんな自分が姉を助け、そして高いと思っていた姉が今自分の無事に泣いている。そんな姉に簪は小さく笑い、そして告げた。

「……変な顔」

楯無が声を上げて泣いた。

更識家や学園の警備員達。それに教師達もようやく駆けつけにわかに騒がしくなった深夜の校舎。その騒動の中心から離れる様に静

司は一人歩いていた。

当事者の一人なのであまり遠く離れる事は出来ない。それでも人ごみの中、少しでも人が少ない場所へたどり着くと力の限り壁を殴った。

何をやっているのだろうか、自分は。

更識簪は無事だった。目立った外傷も無く、念の為に精密検査を受ける事にはなだったが問題ないだろう。だが本来ならそんな必要があつてはならなかったのだ。彼女が巻き込まれたのは確かに彼女自身の責任もあるだろう。だがそうならない様にする為の自分では無かったのか。一夏や、学園生を護るためにいる自分が原因となりそして生徒が傷ついた。

似たような事は以前もあつた。忘れもしない臨海学校の時だ。だがあの時とは少し事情が違う。あの時は追い詰められ、躊躇いながらも最終的には黒翼を使用した。そして自分の行動の遅さを悔やみ、二度と引き起こさないと誓った筈だ。

なのに今日。自分は正体が明かされこの学校から去るという選択肢が現れた時、またしてもそれを躊躇した。そして全く関係ない少女が巻き込まれたのだ。これではあの時から全く変わっていないではないか。

「馬鹿か、本当に」

自己嫌悪と怒りに身を焼かれそうな激情が走る。頭の中、どこかで眠るVTシステムが鎌首をもたげようとするのを押さえつつも、もうその必要すらないのかも知れないとも思う。織斑千冬も篠ノ之束も自分を疑い始めた。その時点でもはや自分の選択肢など無いに等しいのではないだろうか。

自らの見えないこれから不安と恐怖を感じつつ、静司は歯を噛みしめていた。

「束さま。あの機体を自爆させたのですか？」

未だ横たわったまま状況をスクリーンで見ていた少女の呟きに束

は『んー』と人差し指を手当てつつ答える。

「まああれ以上やっても無駄そうだったからねー。あの青いのはそれなりにやるようだったし。ま、機会は今回だけじゃないから別に良いんだよ！」

それよりも、と今回入手したデータに目を通しつつ束は考え込む。

更識楯無が現れる少し前、一瞬だけ川村静司の腕が光った様に見える。その後直ぐに背後から押し寄せた水流で見え無くなってしまったが確かにそう見えたのだ。リス達からの映像も手に入れているが最初の簷の荷電粒子砲の余波による煙で画像が荒くいまいち確認には至らない。だがその中途半端な情報が束の疑いを更に強くする。

「やっぱりあの程度じゃなくて、もっと本格的に行こうかな」

そう呟きつつ別のデータを呼び出す。それはISのデータではあるが通常のそれとは全く異なった設計の機体。そのデータのタイトルには『ゴーレムⅢ』と表記されていた。

68. 選択の日は近く

イレイズド
地図にない基地。

限られた者しか知らないその基地の自室でイーリスはつまらなそうにテレビを見ていた。その様相はだらしが無く、下は下着のみで上も黒のタンクトップだけ。そして机に脚をのせつつチビチビとノンアルコールビールの缶に口をつけている。

テレビでは丁度IS学園について触れられており、先日のキャノンボール・ファストの時の騒動の映像が流れている。アレだけ頻繁に問題が起こるのだ。IS学園に関しての事件はもはや世間に広まっており、それについてコメンテーター達が無責任な持論をぶつけ合っていた。

中でも目立つのはやはり男性操縦者についてだ。一連の事件は彼らを狙ったものではないか。もつと警備を厳重にするべきだ。いや、他の生徒の為に学園から遠ざけるべきだ。いつそ片方だけでも実験材料に――。

尤もな意見から過激すぎる意見まで。それらの言い合いを番組が演出やテロップで無理やり盛り上げるその光景をイーリスは冷めた目で見ている。

「クソみてえな番組だな」

イーリスは一度その男性操縦者である織斑一夏に出会ったことがある。状況故に対立していたが正直に言えばああいう子供は嫌いでは無い。子供ゆえの無鉄砲さ、と言えばいいのだろうか。自身もそういう所がある故にどちらかと言うとあの気概は気に入っている。だがそれ故に無責任に適当な事をいう者達に呆れてしまうのだが。

『イーリス、居る?』

「ナタル? いるよー」

不意に扉の外から聞こえた声に答えるとナターシャが入ってきた。ナターシャ・ファイルス。友人でもあり戦友でもある、銀シルバリオ・ゴスベルの福音の搭乗者だ。彼女は入るなりこちらの様子を見て眉を顰めていた。

「だらしがいいわよ」

「いいじゃねえか。今日は非番だ」

「……まあいいわ」

納得したわけでは無いだろうがそれより優先したいことがあるのだろう。ナターシヤは持っていた封筒をイーリスに手渡すとその向かいの椅子に座った。イーリスは首を捻りながらも封筒の中身を取り出し、そしてその内容に眉をピクリと動かす。

「許可が下りたわ」

「みたいだな」

ナターシヤの硬い声にイーリスは頷き、そして笑う。

「ようやく、か。何時からだ？ それにメンバーは」

「出発は明日。メンバーは貴方と私。それにサポートチームが付くわ」

「ISを2機か。こりや上も本気かね」

「当然よ。そうでなきゃ困るわ」

並々ならぬ気配を漂わせて拳を握るナターシヤ。その視線がテレビに移り顔を険しくした。

「好き勝手に言ってるわね。どうせ他人事なのかしら」

「だろうな。だが今はそれでいい。世間があのだテロリスト共と黒づくめの鴉野郎に気を取られているなら、私たちはその隙に兎を狩る。そうだろ？」

「……ええ」

ナターシヤは頷くと立ち上がり扉を出て行く。

「出発は明朝よ。準備しておいてね」

「あいよ」

部屋から去っていくナターシヤの手。それが強く握られているのを見つめながら、イーリスは返事をした。

「な、なんだコレ？」

一夏が登校一番に漏らしたその言葉は学園の殆どの生徒の言葉を代弁する物だったに違いない。朝、いつもの様に起床し、昨日無理や

りやって来た楯無の姿が無い事に首を傾げつつも着替えて朝食。そこで鈴達と出会い昨日の夜は何も無かったかどうかと言う事を執拗に問い詰められつつも朝食を終えいざ登校したらこれだ。

一夏の視線の先ではブルーシートと立ち入り禁止のテープが張られた廊下があった。そこは焼け崩れており、何か爆発があったかのよう。窓ガラスも割れ中庭にまで飛び散っていた。鈴や箒達も流石にこの状況は意味が分からず啞然としている。

「あ、山田先生」

丁度自分のクラスの副担任の姿を見つけ声をかけると、真耶は疲れた顔で振り向き笑顔を浮かべた。

「あ、織斑君。おはようございます」

「おはようございます。一体何があったんですか？」

一夏の問いに真耶は困ったように首を傾げた後、申し訳なさそうに告げた。

「ごめんなさい。言えないんです」

「言えないって何で」

「箒口令が出ていますので」

「箒口令って尚更何があったんですか!」

「ですから言えないんです」

「いやけど」

「やめておけ、一夏」

食い下がる一夏を止めたのはラウラだった。不満そうに振りかえる一夏を諭す様にラウラは首を振る。

「私達だって今まで何度かあっただろう？　そしてクラスの者達に訊かれても決して答えなかった。そういう事だ。今回は私たちが知らない側に回っただけに過ぎない」

「それは、そうだけだよ」

一夏も自分が無茶を言っていると気づき引き下がる。

「すいませんでした。山田先生」

「いえ良いんですよ。気になるのは当然なんですから。それに箒口令と言っても一時的なものですから、後で何らかの説明はあるかと思

ます。」

真耶は気にした様子も無く首を振ると仕事へと戻っていく。そんな背中を見つめつつ一夏はふと気づいた。

「そーいや静司は無事なのか？」

そんな一夏の疑問に答えたのはまたしてもラウラだ。

「無事だろう。もし何かがあればもっと大騒ぎしていい筈だ。というより携帯で聞けばいいではないか」

「おお、そうだった。では早速——」

携帯を取り出し静司にコールしようとした一夏だがその肩が突然がしつ、と掴まれた。驚き振り向くと箒と鈴とセシリアの三人が直ぐ近くの掲示板を見つめながらも腕だけはこちらに伸ばし掴み上げている。

「な、なんだよいきなり？」

「どうしたの皆？」

一夏が慌て、シャルロットも不思議そうに首を傾げつつ掲示板に視線を移し、そしてああ、と納得した。一夏も釣られて掲示板に視線を移すとそこには昨日まで無かった連絡事項が一つ。

『専用機持ち学年混合タッグマッチ』

「一夏」

「わかってるわよね」

「逃がしませんわ」

ようやく事態を理解した一夏が冷や汗を流す中、三人の少女が一夏に詰め寄っていくのだった。

病室の扉をノックすると中から快活な少女の声があった。それを確認してから静司は静かに扉を開けるとベッドの上で上体を起こした箒とその横で椅子に座りリングをむいている楯無の姿。そして何故かそのリングを食べている本音の姿があった。

「本音ちゃん、美味しい？」

「美味しいです。かんちゃんも食べよ。はい、あくん」

「や、やめて本音。恥ずかしい、から」

何やら和気藹々とした雰囲気には思わず拍子抜けしてしまう。更識姉妹の関係は戻ったのだろうか？ そんな疑問が浮かぶがそれよりもまずやる事がある。

「更識簪さん」

「は、はい」

静司の眼光に怯え少し震える簪にどこか空しさを感じつつ、静司は彼女に頭を下げた。

「昨日はすまなかつた」

「え？ え？」

突然のその行動に簪は慌てるが静司は顔を上げない。

「あの時俺が早く対処していれば――」

「あーはいはいストップ」

静司の懺悔を止めたのは楯無だった。彼女は静司に歩み寄るとペしん、とその頭を軽くはたいた。

「病室で辛気臭い話は無しよ。というか川村君、来て早々それは無いでしょう」

言葉こそ叱っているがその顔はどこか呆れた笑い顔だ。静司も楯無に促され顔を上げた所で、ようやく当の本人である簪が狼狽えている事に気づいた。

「す、すいません」

「だーから、辛気臭い顔しないの。本音ちゃん、ゴー！」

「はーい」

ひよい、と立ち上がった本音がとてとと、のんびりと走るという器用な真似をしつつ静司の背後に周ると『えーい』と掛け声と共に覆いかぶさった。

「……………理由を聞こうか」

「せーじもリングゴ食べる〜？」

ひよい、と目の前に出されたリングゴは事もあるうに手づかみだった。静司はそれを数秒見つめ、そして困ったように楯無と簪へ視線を移すと楯無は面白そうに笑っており、簪は少し驚いた様な顔をしてい

た。

「よく本音から話を聞いてたけど、本当に仲良いんだ」

「私はせーじのおねーちゃんだからね〜」

「設定まで出来上がってるのね。しかもいつの間にか下の名前で呼んでるのが定着してるのよ。妬いちゃうわ」

「……………真面目な話をしに来たんですが」

ぐったりして思わず漏らす言葉だったが、楯無は首を振った。

「ま、何を言いに来たのかは分かってるわ。その上で言うけど私は今回の件をどうこう言うつもりは無いわ。かんちゃんはどうか？」

話を振られた簪も、少し静司に怯えつつも小さく頷いた。

「元々、私が首をつこんだのが、問題。貴方の、せいじゃない」

たどたどしく伝えられる言葉。しかしだからと言ってそれで心が晴れる訳では無い。自分がもつと早く黒翼を使つて敵を排除していれば、軽傷とは言え彼女はこうして入院する事は無かったのだ。

「だから、あなたは気にして無くていい。それに結果的におねえちゃんとも話せたし…………」

「聞いた!? ねえ聞いた川村君!? かんちゃんがおねえちゃんって呼んでくれたのよ! これだけでご飯三杯はいけるわ!」

「お、おねえちゃんはやぎ過ぎ…………」

「だって嬉しいんだもの! タツグマツチも頑張りましょうね!」

笑顔で簪に抱き着く楯無と、戸惑い呆れながらもずっと恐れていた姉の本性を目の当たりにして今までの悩みって何だったんだろう? と反省する簪。

「タツグマツチって例のやつですよ。もしかして?」

「ええ、私はかんちゃんと組んだの。但し、未完成のISに関しては私は助言とデータ提供するだけだね」

「あの子は私の手で完成させる。けど独りよがりな駄目だって、さつき本音にもお姉ちゃんにも言われたから…………」

「私も手伝うんだよ〜」

相変わらず静司の背中に居る本音も主張する。

「そういう事。確かに色々あったけどかんちゃんはこうして無事。あ

のリスについても今学園内を搜索しているからもう二度とあんな真似をさせないわ」

そこだけは目を細め、真面目な顔で宣言する楯無。それは静司としても同感だ。もう二度とあんな真似はさせない。もしその時は——「まあね、あなたに問題が無かったとは確かに言えないわ。でもその理由はあなたならよくわかってるだろうから私からは言う事は無い。それにね、少し嬉しいのよ?」

ぱつ、と懐から扇子取り出しを開く楯無。そこには『学園謳歌』と書かれている。

「あなたがそこまでこの学園に居たいと思った。それはここが楽しいからでしょう? 生徒会長として嬉しいに決まってるじゃない」

「けど俺は——」

「とにかく! 今は過ぎた事より先の事を考えましょう。次のタッグマッチの警備についてとかね。……だけど今の川村君は頭が凝り固まって駄目そうだし、本音ちゃん、ちよつと散歩して来てくれる?」

「はい」

「いや、俺は……」

「れっつー」

躊躇う静司だったが相変わらず上に乗っかったままの本音の催促に観念する。最後にもう一度だけ、簪に頭を下げると本音と共に出て行った。

「……………おねえちゃん、わざとらしすぎ」

「やっぱり分かつちやった? 嬉しいのは本当だけどね」

二人が居なくなつた病室。そこで姉妹は先程までとは打って変わって難しい顔をしていた。

「言つた事は全部本当の事よ。かんちゃんだってそうでしょ?」

「うん。今回は私だって悪いんだし、それであの人を責めるのは」

「そういう事。まあ彼はそう簡単にはいかないでしょうけどね。無理やり明るくしてみたけど効果は微妙だし、そこは本音ちゃんに任せましょう」

「うん」

廊下を歩く人々がこちらを何事かと見ている。ある者は驚いた様に口を開き、ある者は微笑ましそうに笑っている。そんな中を歩く静司の心境は色々複雑だった。

「なあ本音」

「やだ〜」

乗っかる、というよりもはやぶら下がるに近い背中の本音。どこにその腕力があるのは疑問である。

「せーじが難しい顔するのをやめたらいいよ〜」

「……」

ぐうの音も出ない。静司は諦めてそのまま歩き続ける事にした。

「これは言ってもあてなどないのだが。」

「かんちゃんがね」

そんな静司の背中で本音が口を開く。

「かんちゃんが一杯話してくれたんだ〜。今まではちよ〜とかんちゃんも色々難しくって、色々考えてたらしいんだけどね、今日会ったら一杯話してくれて、ごめんなさいって」

おそらく姉に対するわだかまりが薄れてきて余裕が出来たのだろう。どんな幻想を姉に抱いてきたのかは知らないが、あそこまで妹にぞっこんな姿を見たら確かに考えるのも馬鹿らしくなるかもしれない。

「けどそれは結果論だ」

「そうだね〜。けどその結果が良い物だったら認めちゃうのもありだ
と思うよ?..」

「それは無理が過ぎる。もし簪さんの身に何かあったらそんな事は言えない」

「けど今回は大丈夫だった。だからいい結果論〜」

「だが」

「そうだね〜難しいよね〜」

本音はのんびりとしてはいるが馬鹿な子では無い。自分の言っ

いる事が無茶があるのは分かっているのだろう。だから静司の言葉を否定はしない。ただ可能性を示唆するのみだ。

「ねえ、せーじ。10年後の自分って考えたことある？」

「10年後……？」

問われ少し考えてみる。しかし何も思い浮かばない。それでも必死に考えてみて思いついたのは、どこかの空で黒翼を展開して施設を破壊している自分の姿だった。暗い、暗すぎる。

「まあそれなりに収入はあるけどな……」

「なんだかとてもネガティブな未来想像してる？」

ぎゅ、と首に絡められた腕の力が強まり思わず息を止めてしまう。

「そういう本音はどうなんだ？」

「私はね〜月に行きたいなく」

「月？」

意味が分からず問い返すと、うひひ、と笑いながら本音が続ける。

「そう。ISは元々宇宙開発用だったでしょ？ だからその機能をもっと充実させていつかは月の開発に行きたいね〜。目指せムーンシティ〜」

「もしかして整備課志望なもの？」

「そうだよ〜。私は操縦は苦手だけどそっちは得意だしね〜」

成程、とどことなく静司は納得する。そもそもISの数自体が限られているのだ。IS学園生と言えども、卒業後実際にISに乗って仕事をしような者は数える程度しかないだろう。本音はその一部でなく、そういった人々をサポートする側に周りたいたいと言う事か。それも戦闘用ではなく、宇宙開発という新たな世界を創るために。

「そして月で超巨大キツネ型ISを建造します」

「……ちよつと待て。俺の感動を返せ」

ぐつ、と拳を握る本音の言葉に思わず力が抜けそうになるのを必死に支えた。そんな物宇宙開発に必要なだろうに。というか建造つてなんだ。

「そんな物造つたら世界中から狙われるぞ」

「じゃあその時はせーじが守ってね〜」

言われふと想像する。月から迫る眠そうな顔をした巨大キツネ型 I S。その周囲を飛び回り襲いかかる敵を倒す黒翼。爆炎と驚愕に彩られるその舞台を作り出した少女がキツネ型 I S の中身で炬燵に入って壁紙収集をしている、そんな絵を。なんだこのシニョールな光景は。

「いや駄目だろ。というか俺もなのか」

「じゃあせーじが操縦する〜?」

「俺がそれやったらそれこそ地球侵略を狙う悪魔王になりかねないだろ。最後は地球代表の一夏に斬られる未来しか想像できん。……と
というか何の話だこれは」

「『もし』の話だよ。ありえるかもしれないけど、ありえないかもしれない。そんな意味の無い話」

「つ……」

一瞬、息が詰まった。たった今、自分が呆れたこの問答は結局は同じ。

「起きた事もこれからの事も備えるのは良い事だけど、『もし』『けど』っていう言葉は使いすぎるのはよくないよね」

「……」

「せーじだつてその事は本当は分かっているとと思うし、今までもいっぱいお話してきたからこの話はここでおしまい」

この先は言うまでも無いと言う事だろう。静司とて分かっている。必要なのは次に何をするかと言う事を。しかしその次こそが問題でもあるのだ。次に何かが起きた時、自分は今の居場所を捨てる覚悟があるのかどうか。

「大丈夫だよ」

そんなこちらの考えが分かっていたのかどうかは分からない。本音が耳元に口を寄せ、囁く。

「どこに行つたつて私は帰りを待ってるし、迎えにだつて行けるんだよ?」

その言葉どこまでも暖かく、しかしそれ故に自分自身の境遇との温度差も感じてしまう。そんな自分が嫌になり静司は何も答える事は

出来なかった。

「なあ、俺はどうしたらいいと思う？」

「それはとても贅沢な悩みだと思うなあ」

昼の食堂ではどこか憔悴した様子の一夏とその正面に座るシャルロットとラウラの姿があった。

「誰と組むか、でしょ？ 皆の気持ちはわかるから僕も下手な事は言えないかな」

「そうだな。まあ考えたら戦術性だ。一夏はまだ射撃が甘い。ならばそこをカバーできる相手が必要だ」

「射撃かあ、だとするとやっぱセシリアかな」

「そうだね。だけど連携という意味では箒や鈴も行けるんじゃないかな？ 幼馴染なんですよ？」

「うゝむ……。っていうか二人はもう決まったのか？」

悩んでいたい一夏がふと聞くと、シャルロットとラウラは顔を見合わせて頷いた。

「僕はラウラと出るよ」

「うむ。シャルロットとなら心強い。息もあってるしな」

「息が合う、か」

またしても考え込む一夏。ふと疑問に思いシャルロットが聞いた。「そういえばその箒達はどうしたの？」

「騒ぎ過ぎて先生に怒られて、罰としてアリーナの清掃活動だった」「ありやりや」

「ご愁傷様、と苦笑するシャルロット。アリーナは広い。それをたった三人で掃除と言うは骨が折れるだろう。その隣ではラウラも『ミスをしたのなら罰は当然だろう』と頷いていた。

「くそー、静司が専用機持つてれば迷うことないのにな。というか結局静司はどうだったんだ？」

おそらく箒達に振り回されて考える余裕が無かったのだろう。一夏の問いにシャルロットは答えてやる。

「昨日の内に生徒会長の指示で場所を移したんだって。午後位に戻る
そうだよ」

「そっか。それは良かった。と言う事は朝に楯無さんが居なかったの
もそのせいなのかな」

「そうだろうな。それに例の惨状について先ほど正式に発表があつた
が、新しい教材用装備の運送事故らしい。まあどこまで本当かは謎だ
が」

「まあ、ね。けど静司が無事で良かったよ」

これは本音である。朝、一夏達が去ってから念の為直ぐに真耶に確
認したので間違いない。

「で、一夏はどうするのだ？」

「うーむ……」

「まだ決めかねてる感じだね」

腕を組んで難しい顔で悩む一夏。どうやら相当悩んでいる様だっ
た。

「結局は一夏が一番組みたい相手を選ぶのが良いだろう」

見かねたラウラが助け船を出す、その内容はラウラらしかぬもの
で思わず一夏もシャルロットも驚いてラウラの顔を見た。そんなラ
ウラは少し気恥ずかしそうに頬をかいている。

「別に適当に言っている訳では無いぞ？ 戦術的には私の言う射撃の
穴を埋める案も、シャルロットの言う連携もどちらも重要だ。そして
一夏がそのどちらも選べないのなら、単純に組みやすい相手を選ぶの
が良い。それが自然に連携にも繋がり、一夏の穴を埋める役割もする
だろう」

「な、なんかラウラにしては珍しい意見だね」

「言うなシャルロット。私自身もそう思う。だがそう言ったお互いの
信頼関係が大事だと言う事を私はこの学園で学んだ。もちろん戦術
性も大事だが、だからこそシャルロットと組むことはとても満足して
いる」

「ふふ、ありがとう」

ラウラの言葉を純粹に嬉しく感じ、シャルロットが笑う。ラウラは

気恥ずかしそうに顔を逸らしたが耳が赤かった。

「一番、か……」

そんな二人を眩しそうに見つめながら、一夏が一人小さく眩いた。

「はあ、はあ、はあ、それで、」

「一夏、さんは、」

「どう、すんのよー」

流石に授業中まで掃除するわけにはいかない。箒達は午後の授業が始まるとほぼ同時に戻ってきた。かなり疲れ切っており、鈴はフラフラと自分の教室に戻り箒とセシリアもぐったりとしていた。そうこうしている内に静司も戻り、皆に心配されつつも通常通りの教室に戻った一年一組の教室。だがそれも今日の授業が終わるまでだった。

S H R が終わり、千冬不在の為に副担任である真耶が今日の授業が終わったのを告げるのと同時、扉が勢いよく開き息を切らした鈴が現れたのだ。そしてそれに呼応する様に箒とセシリアが勢いよく立ち上がる。それを見てクラスメイト達は『ああ、始まった』と顔を見合わせたのだった。

「つまり一夏を取り合ってるわけか」

「そういう事だね。所で静司、本当に大丈夫なの？」

静司に事情を説明していたシャルロットが気遣わしげに問うが、静司は大丈夫だと小さく笑い返す。だがその笑いがどこか陰がある事に気づいていないのは本人だけであり、それが余計にシャルロットの不安を煽る。

「静司、顔色が余りよくないぞ」

「ラウラまでか。本当に大丈夫だよ」

静司はそう答えるが、ラウラは視線を逸らさない。そしてその視線は時折左腕に向けられている事に静司は気づいていた。気づいていながら、しかし何も気づかない振りをする。ラウラはしばらく何かを考える様にこちらを見ていたが、

「そうか、無事なら良い」

そう答えると静司から視線を逸らした。

(やはりそうなるよな……)

静司が千冬と対峙した際、ラウラはモニタリングをしていたはずだ。ならばあの時のこちらの左腕——感情の高ぶりと共に抑えきれなかった黒翼の駆動熱を感知されてもおかしくない。実際、今日半日ではあるが同じくモニタリングしていた真耶はどこか悩む様な視線を静司に送っていたのだから。あれは何かを言おうとして、しかし言えない顔だった。だが何か疑いに近いものを感じられているのは確実だろう。

「おりむー、早く決めないと大変だよー」

そんな本音の言葉に静司は思考をやめ顔を上げた。一夏達は相変わらず揉めている様である。だが、

「そう、だよな。よし……決めたぜ！」

先程から何かをずっと悩んでいたような一夏がようやく顔を上げた。それに反応して箒達三人は自信満々に笑う。というか何故あそこまで自信を持てるのか気になると同時に羨ましくも思ってしまう。

「ふ、当然だろう！ では早速訓練に——」

「流石は一夏さん。わたくしが勝利を導いてあげ——」

「鈴、俺と組んでくれ」

「ほら、とつとと訓練行くわよ。時間はもう無………え？」

箒とセシリアは勿論の事、何故か鈴までもがぼかんと硬直して一夏を見つめる。それは周りで見ていたクラスメイト達も同じで、いつもの様になあなあで決着がつくのかと思っていた所に思わぬ展開だったために全員が停止していた。

「へ？ あれ、いち、か？ うえ、あんた、へ？」

あれだけ自信満々だったのになぜか慌てている様な鈴の様子からすると、勢いだけはあったものも心の準備までは出来ていなかったようである。

「誰と組むかって、考えてさ。一番自然に感じたのは鈴だったんだよ。だから頼むよ、鈴。それと箒とセシリアはすまん！ 俺は鈴と組む」「え……あ……」

「……………な、何故ですの!?!」

未だ呆然としている箒と納得がいけない様相のセシリア。一夏はその剣幕に押され、思わず後ずさる。

「と、とにかく決めたから! すまん!」

逃げるように一夏が鈴の手を掴むと鈴は『ひやつ!?!』と跳ねた。

「何やってんだ? それより訓練行くんだろ?」

「え、ええ。そうね! そうなただけど……………」

未だ混乱しているのか一夏と箒達と、そして周りとあちこちに視線を回しながら顔を赤くしていた鈴を一夏が引つ張っていく。

二人が去って行った後、暫くは静かな空間が続く、そして爆ぜた。

「おおおおお!? ついに、遂になの!?!」

「まさか他クラスの凰さんがリードかあ。けどまだきつとチャンスはあるよ!」

「しかし織斑&凰ペアね。これは面白そう……………」

突然の展開に驚く者。箒とセシリアを気遣う者。今からタツグマッチを楽しみにする者。そんな喧噪の中、セシリアの昏い声が響く。

「ふふふふふふふ、そうですよ。そういう事ですよ。こうなったらわたくしと組まなかったことを後悔させてやりますわ……………」

瘴気を放ちながら笑うセシリアの様子に周囲が引いていく。そんなセシリアの隣で、箒は一夏達が消えていった扉を呆然と見つめ続けていた。

「エム、入るわよ」

亡国機業の拠点の一つである高級マンションの一室。スコールはノックもせずには部屋に入るとその住人に声をかけた。

「まだご機嫌ナナメなの?」

「何の用だ」

この部屋の住人であるエムは忌々しげにスコールを睨む。だがスコールはどこ吹く風だ。

「貴方の様子を見にね。けどその様子だとまだ機嫌が悪そうね」

「誰のせいだと思ってる」

「私でしようね。しばらく軟禁状態だったものね。けどね、エム。貴方達も悪いのよ？ あの黒いISについて隠してたりするから。勿論力テナーやシェーリも同様に軟禁中よ。まああの二人は何時もの研究ばかりであまり意味が無かったけど」

「ふん……」

キャノンボール・ファストの際、エムと黒翼——つまり川村静司との会話はスコールによって盗聴されていた。故にエムが黒翼に対し並々ならぬ感情を抱いている事が発覚し、体内に埋め込まれたナノマシンを盾に詳細を聞きだされたのだ。それ故にエムはここ数週間ずっと機嫌が悪かった。

エムは顔を合わせる事も無くベッドに寝転んだまま虚空を見つめている。そんなエムにスコールは小さな端末を投げた。死角を狙って投げた筈のそれをエムはちらりとも見ずに受け止める。

「軟禁は今日で終わりよ。そしてそれが次の作戦」

「また襲撃でもするのか。馬鹿の一つ覚えだな」

「そうね。だけど今回はいつもと少し違う。貴方も喜ぶはずよ」

「何……？」

そこでやっとエムが顔をスコールに向けた。スコールはその美しい顔でまるで女優の様に笑い、作戦内容を告げる。

「不確定要素であり今後の障害と成り得る人物。篠ノ之束と川村静司の捕獲。もしくは抹殺よ」

起きあがったエムが見つめる中、スコールは謳う様に続ける。

「但しタイミングは重要ね。片方だけ先に片付けると片方に警戒される。学園生活を送る川村静司を暗殺するのは簡単だけど、それで篠ノ之束が警戒して表に出てこなくなったら困るわ。逆も然り。まあ、そもそも篠ノ之束が表舞台に出てくる様にしなければなら無いのだけどね」

「ならどうする気だ」

「色々考えはあるわ。だけど貴方達から聞いた話を考えると結構簡単に出てくるんじゃないかと思うのよ。他でも無い、川村静司が餌となつて」

くすりとスコールは笑うとエムに背を向けた。後は端末の作戦書を読めと言う事だ。だがエムは一つだけ、言わなければなら無い事があつた。

「あいつの相手は私がする」

「シェーリもそう言つてたわ。そこは二人で話すなり早い者勝ちなりしないさいな。それじゃあよろしくね」

そう言い残すとスコールは去っていく。一人残されたエムは渡された端末を強く、強く握りしめ、やがてはみしり、という音と共に碎け散つた。それを一瞥する事も無く、エムは立ち上がる。

その顔は口元が吊り上り、狂気を孕んだ笑みを浮かべていた。

69. それぞれの想い

「いつまでこうしているつもりですか」

薄暗い会議室。その中央で椅子に座った千冬は自分を取り囲むように映し出されたモニターを睨みつけた。そのモニターには様々な国のIS委員会のメンバーが映し出されている。

IS委員会に呼び出されて3日。千冬はその間ずっとこの者達と話している。だがその内容は余りにも下らない世間話が殆どであった。

「私はてつきり裁判でも始めるのかと考えていたのですが？」

『ふむ、例の川村静司に対する行き過ぎた指導の件かね？ 安心したまえ。こちらとしては学園内での指導内容にまで口をはさむ気はないよ』

(よく言う……！)

上っ面だけの言葉に苛立つてしまふ。本当は違うだろうに。自分が篠ノ之束と親しいが故に、手を出すのを恐れているのだ。だが貴重な男性操縦者に対し、やり過ぎた千冬に対して何もアクションを起こさないのでは、『男性操縦者の保護』を掲げる委員会の面子に関わる。だから呼び出しなどと言う面倒な手段を取って自分達の力を示そうとしている。その男性操縦者を囚だのなんだのとしようとしている癖にだ。

『君の考えている事は分かるよ。そしてその通りだと言っておこう。私たちは弱さを見せてはいけないのだよ。危険な兵器でもあるISを取りまとめる組織が弱さを見せては人々が疑問を抱く』
「その力の示し方がたかが教師を3日間拘束する事ですか」

『君がそれを言うのかな。唯の教師ではいざ知らず、織斑千冬と言う名はそれだけ意味を持つてるよ』

沈黙。それは千冬が言い負かされた事を意味していた。

『まあ川村静司の件は一応彼の所属であるK・アドヴァンスからも特に抗議は来ていないので公にはなら無いだろう。君の拘束も今日で終わりだ。ご苦労だったね』

結局、態々学園まで離れて千冬が来た理由はそれだけだった。単に委員会のスタンスを見せつける為だけのパフォーマンス。そんなくだらなさには千冬の苛立ちは増す。

『最後にこれは唯の興味なんだがね、君が川村静司にあんな指導をした理由を聞いていいかな?』

「……関与しないのではないのですか?」

『そうとも。だからこれは興味だよ』

答えたくなければそれでいい。そんな雰囲気をはじめ問われた言葉に千冬は一瞬迷った。今ここで。川村静司に対する疑いを吐露してしまえば。そうすれば委員会も動くかもしれない。正体不明の黒いISの情報は彼らも欲しがっている筈だ。そうすれば危険な可能性を孕んでいる奇妙な生徒を一夏の傍から――

(私は何を考えている……)

自分の思考の愚かさに嫌気がさしてしまう。確かにあの黒いISは危険だ。だからこそその疑いがある川村静司に対してゆさぶりをかけ、正体を見極めようとした。だが一夏達を護ろうとしていた記録もある。どちらがああ黒いISの本当の姿なのか不明なのに、そんな売様な真似をしていいのか?

それにもし本当に川村静司がああ黒いISだった場合。自分はその生徒を売る事になる。他でも無い、弟たちの為という免罪符を持ってして。そんな事が許されていいのか?

今更何を。既に自分は手を下しただろうという思いと。

だからこそ同じ過ちを繰り返してはいけないという想い。その二つがせめぎ合い千冬は小さく唇を噛んだ。

『どうしたのかね?』

こちらの沈黙に声がかかる。千冬は静かに顔を上げ、そして何かを決意して口を開こうとして――そこで一夏の顔が過った。

「……いえ、私が加減を間違えた故の出来事です。彼我の実力を正確に認識して指導を行わなかった私のミスです」

結局何も言わなかった。言えなかった。

一度は言ってしまうかと思いい、そうしようとした。しかしその瞬

間弟の顔が過つたのだ。それも件の川村静司と楽しそうに笑う顔が。『ふむ、そうか。まあ度々あつては困るから注意してくれたまえ』

「はい」

質問者は特に興味が失せたのかあつさりと言問を終えると引き下がっていく。

(これで良かったのか……？ 一夏？)

千冬は自分の行動が正しかったのかどうか、判断する事は出来なかった。

「今日はこれ位にしとくか」

「そうね。使用時間もギリギリだし上がりましようか」

タッグマッチまで一週間を切った夕方のアリーナ。一夏と鈴はタッグマッチに向けた訓練を終えると、アリーナを後にした。タッグマッチまではあと少し。各ペアも訓練と調整に余念が無く、一夏達もその一つだ。

「やっぱり遠距離戦がネックだな」

「確かに私の甲龍もどちらかと言うと中近距離向けだしね。一夏の射撃はあまりあてになら無いし」

「おい鈴、それは酷くないか？」

「事実でしょ」

ああでもない、こうでもないと言見をぶつける二人。タッグマッチに向けて二人きりで特訓する事が増えた二人は以前に増して一緒に居る機会が多かった。その事を鈴は密かに喜んでいるのだが一夏は当然の様に気づいていない。

「そういえばあれから千冬さんと話はしたの？」

「いや……まだだ」

話はやがてISの事から普段の事。そして千冬の事へと移っている。先日の出来事から数日間学園を空けた千冬だが既に戻ってきている。それを知るなり一夏と鈴は千冬の下へと向かっていた。他でも無い、千冬の真意を聞く為にだ。その時ばかりは一夏の気合いも十

分であり、例え千冬がいつもの様に強固な姿勢を取ろうとも引く気は無かった。そう、いつものようならば、だ。

「あんな千冬姉の顔、初めて見たよ……」

沈痛そうに一夏が俯き、鈴も顔を暗くした。

戻ってきた千冬。その顔にはありありと何かを抱えているのが見て取れたのだ。その様子に戸惑った二人を前に、千冬は一言『すまなかった』とだけ言って去っていった。余りにも意外なその姿と、一瞬の出来事だったが故に二人は追うに追えず。その後もこの出来事が心に引つ掛かり聞く事が出来ないでいた。

「駄目だな、俺。絶対に聞き出すとか言ってたのに何時もと違う千冬姉を見ただけでこれだ」

「何言ってるのよ。あんな千冬さんの姿見たら誰だって戸惑うわ。山田先生だって焦ってたじゃない。……けど千冬さん、静司とは話したんでしょう?」

「ああ、そこは静司に聞いた。話したと言っても謝罪だけだったらしいからそれ以上は何も、つてらしい。静司も対して気にしてないとは言ったけどさ、あいつも様子がおかしい気がするんだよな」

片や血を分けた家族。片やこの学園唯一の男の友人。とても近くに居る二人の筈なのに、その二人の抱えている事。考えている事が分からない。その事が一夏の心に焦燥を生む。だがそんな姿に見かねた鈴が一夏の背を思い切り叩く。

「なにしけた面してんのよ!」

「痛つてえ!?! 何すんだよ!」

「アンタがいつまでもそんな顔してるからでしょ。私らはカウンセラーでも何でも無いの! 分から無い事は分からない! だから訊く! 訊けないのなら訊けるようになるまで待ってやりやいいし、それでも駄目ならどこかに閉じ込めてでも聞き出すのよ」

「いくらなんでも無茶苦茶だぞそれ!」

「じゃあどうすんのよ? 言って置くけど私は何時までもこんな過ごしにくい空気が続くのは絶対嫌よ。もしそうなる様なら実行してやるわ」

ふふん、と胸を張る鈴に一夏は啞然とし、そして笑ってしまう。なんだそれは。無茶苦茶じゃないか。だけど、

「いいぜ、鈴。だったら俺も乗ってやるよ。そうだな……このタッグマッチが終わってもまだ続いてたら二人でやってやろうぜ」

「へえ、やる気満々じゃない。ならその時には気合い入れて行けるよ、タッグマッチも全力で行くわよ！」

「ああ。…けどやっぱ鈴は凄いな」

「な、なによ急に」

突然褒められた鈴が驚く中、一夏は続ける。

「鈴には助けられてばっかだからな俺。今も、こないだも、臨海学校の時きだって。本当に感謝してる」

じつ、と一夏に見つめられ鈴は嬉しいやら居心地が悪いやらと視線が右往左往してしまう。

「もしかして私をペアに選んだのも？」

「ああ。そんな鈴になら背中を預けられるって思ったんだ。鈴とが一番合うってさ」

この言葉がトドメだった。鈴は顔を真っ赤にし、あふれ出る喜びを隠す事も出来ず一夏から顔をそむけた。そんな鈴の顔を一夏が不思議そうに覗き込む。

「ん？ どうした鈴。顔が赤いぞ？」

「う、うっさい！ こここここれは、武者震いってやつよ！」

「いや武者震いって顔が赤くなるもんなのか？」

「なるのよ!? それでいいの！」

顔を赤くする鈴と首を傾げる一夏。そんな奇妙な空気はしばらく続いた。

そんな一夏と鈴の姿を簪は遠くから眺めていた。今日は本音と一緒に機体の調整を行っていたのだがその休憩に自販機に向かう所だったのだ。その途中で廊下で何やら盛り上がっている二人を見かけたに過ぎない。

「あゝ、おりむくだね〜」

「うん。それに中国の候補生の子も……」

隣の本音に答える簪の表情は複雑だ。それはつい先日まで織斑一夏に対して感じていた感情。男性操縦者、織斑一夏の登場によって倉持技研のＩＳ開発の優先順位が変わり、自身の機体が後回しに。その結果、自分が専用機を手にする事が遅れた事だ。

当初こそ恨みはしたが今はその気持ちは薄れている。姉との和解で心に余裕が出来たと言う事もあり、自分の恨みが逆恨みに近いと言う事も分かっていたからだ。だがだからと言って今まで悪く思っていた感情が簡単に全て無くなる訳でも無く、簪は一夏に対してどうすればいいのかわからなかった。

「おりむーの事まだ怒ってる?」

「……ううん、大丈夫」

こちらの考えている事を察したのだろう。本音が顔を覗き込んでくるが首を振って答えた。実際、怒ってる訳じゃないのだ。単にどうすればいいのか分からないだけ。

「そういえば、川村君はどうしたの?」

そこでふともう一人の男性操縦者にして、特殊な経歴の男子生徒の事を思い出した。

「せーじは定時報告だつて〜」

本音の答えに成程、と簪は頷いた。彼が通常の学生で無い事は知っている。ただの男性操縦者でなく、その男性操縦者である織斑一夏やその周りを護る為に学園にやって来た戦士という事を。

簪がその話を最初に聞いた時、何を馬鹿な事と思った。続いて、そんな堅気で無い人間が学園に紛れ込んでも違和感しか無いのではないかと。いや、そもそもそんな人間が学生に等なれるのかとも思った。

しかし川村静司は織斑一夏と友好を深め、そして今、自分の隣にいる本音達とも仲が良いと聞く。それが簪には驚きであった。特に本音に関しては、その川村静司に対し友好以上の感情を持っている事が分かるために尚更驚きだ。それに事実を知って彼と共に居る本音の

事も。

「本音は、怖くないの？」

「ぬ？ なーに〜？」

「川村君と一緒に居る事が、怖くないの？」

つい先日のリス達。あれは川村静司本人を狙っていたと言う事は後から聞いた。それに今までも彼は幾度も戦場に向かい、傷つき、そして相手を傷つけてきた人間だ。そんな人物に想いを寄せている本音に対して疑問と不安が簷の中にあつた。

だが本音はそんな簷の問いに首を振る。

「せーじは怖くないよ？ むしろ面白いよ〜」

「けど臨海学校の時きだつてっ」

「確かにあの時は大変だったね〜」

「本音、真面目に答えて」

心配なのだ。本音に何かが起きないか。

不安なのだ。一度は自分から遠ざけたものなのに、今度はそれが失われてしまうのが。自分でも我儘だと思う。初めは自分から遠ざけていたのに、今はそれを失う事を恐れている。

「せーじの事が怖くないのは本当だよ？ それよりも私は、せーじや皆が居なくなっちゃう方が怖いかな」

いつも通りの呑気な笑顔。しかし今はそこに憂いの様な物が混じっていて、思わず簷は息を止めてしまった。

「かんちゃんが心配してくれることは嬉しいけど、やっぱり私はせーじと一緒に居たいな〜って。それにかんちゃん達とも。そんな世界を護るために戦つてるのだから、せーじの事は怖くないよ」

「けど、また巻き込まれたらっ」

「うん。それはちよつと大変だけど、それはせーじのせいじゃないから。……………せーじ本人がそう思つてないから大変なんだけどね〜」

『せーじ』と。その名を呼ぶ時だけはどこか嬉しそうな本音の顔。よくよく思い出してみれば当初は『かわむー』と呼んで居た筈だ。それがいつの間にか下の名前に。それも本音がよく他者を呼ぶ時に使う仇名では無く、名前そのものを呼んでいる。

それに気づきそして簪は悟った。今更自分が何を言っても無駄なのだ。そんなものが通用しない位、その想いは強い。それがどこか羨ましくもあり、そして少し嫉妬してしまうが仕方の無い事だ。自分はいよいよ先日まで本音の事も避けていたのだから。

「そう……なんだ……」

「うん！」

力強く頷くと本音は先を歩いていく。振り返り、「早く行こうよ」と何時もの調子で話しかけながら。

本音の気持ちはわかった。これは今更自分があれこれ言うべきことでは無いと言う事だろう。ならば、この大切な友人の為に出来る事をしよう。今も昔も、変わらず付いて来てくれるこの大切な友人の為にならば、自分もきつと怖くない。

少しずつ変わり始めた簪。彼女は心にそう決めると本音を追っていった。

「あ」

「……む」

それは偶然だった。静司は定期報告を終え、一夏達を見守れる場所へ戻ろうと廊下を歩いていると、前方から千冬がやってきたのだ。千冬の方も偶然だったらしく、一瞬驚いた顔になる。

「……こんにちは」

「……ああ」

仮にも担任と生徒だ。何も言わないのも不自然であるので挨拶をするがどうしても自然に出来ない。それはあちらも同じようどこかぎこちない返事が返ってきた。

（気まずいな……）

先日の出来事の後戻ってきた千冬から謝罪を受け、自分もそれを受け取った。だがそれから微妙な空気が二人の間に流れている。

千冬は静司に対する疑いと、教え子に手を出したと言う罪悪感。

静司は千冬に疑いをかけられているのではと焦りと、隠し騙してい

るが故に起きてしまった先日の事件の事。お互いがお互いに対し複雑に絡み合った感情を抱いているが故に、不自然になってしまう。

「川村はアリーナか？」

そんな硬直状態から先に声を発したのは千冬だ。静司はそれに頷く。

「はい。俺達一般生徒はタッグマッチは参加しませんけどサポートやレポートの提出はありますのでその資料探しに」

これは本当だ。専用機持ち達がタッグマッチに時間を費やす分、一般生徒はそのサポートや『ISタッグ戦』をテーマとしたレポートの提出をしなくてはならない。

「そうか……」

「……………」

再び沈黙。やはり気まずすぎる。この空間に居るのが耐えられなくなり、今度は先に静司が動いた。

「では自分はこれで」

頭を下げ千冬の横を通り過ぎていく。だがそれを引き留める様に千冬の声が背中にかかった。

「待て、川村」

「……………なんででしょう？」

「何故、何も言わない？ 何故私を責めない？」

その言葉には葛藤の様な物が込められている。千冬自身も悩んでいる証拠だろう。そんな風に悩ませている事に罪悪感が更に増す。今まではこんな事無かった筈なのに、先日の事件以降、自分の精神も大分不安定になってきている自覚はあった。

「…………別に理由はありません。あれは模擬戦のようなものだったので事故は付きものです」

「嘘だ。あれは模擬戦のレベルを超えていた。あれではまるで……くそつ、私は何を言っている……っ」

行動を起こした本人が自分の発言の愚かさに頭を押さえている。ああ、だがやめてくれ。今の自分の前でそんな顔を……姉と同じ顔でそんな顔をしないでくれ。今まで意識して連想しない様にしていた

のに。ここ最近の度重なる出来事でその縛りが消えかかっている。何よりも、織斑千冬という存在が初めて見せるその不安と苦しみの表情が姉達の最後の顔とダブってしまう。意識して無い筈なのに。織斑千冬と姉は別人だと、今まで問題なく接してこれたのに。

いつそ全て明かしてしまおうか？　ここで全てを吐露してしまえば、いや、全てでなくとも自分が篠ノ之束に狙われている事を話してしまえば自分をとりまく環境は大分楽になる。そうすれば――

(駄目だ……)

例え明かしたとしても織斑千冬に篠ノ之束が止められるとは断言できない。そもそも篠ノ之束はこれまで一夏すら危険に晒しているのだから。それに全てを明かしてどうなる？　庇護してもらおうか？　駄目だ。そもそもそれこそが自分の役目。ならば協力してもらおうか？　それも駄目だ。それはつまりその協力者を危険に連れ出すと言う事に他ならない。結局どの選択肢をとっても危険なのは変わらない。ならばせめて、その矛先だけは――

だから静司は顔をそむけた。織斑千冬に背を向けて小さく、首を振り、

「織斑先生。貴方は一夏や生徒の事を考えていればいい。それで、良いんです」

「何を――」

「俺から言えるのはそれだけです」

そうだ。それが何よりも重要な事。自分の任務でもあるし願いでもある。自分は避雷針だ。危険から守り、そしてその危険の矛先をこちらに向けさせる。その為に居るのだから。

今度はもう立ち止まらず千冬の下から去っていく。

「……………馬鹿者。お前も生徒だろうに」

去っていく静司の背中にその千冬の眩きは届かなかった。

「私たちの戦術はほぼ間違いなく対戦相手にはバレますわ。ですがやはりこの陣形で行くべきだと思いますの」

「そうだな。セシリアは遠距離。私は近距離。これは機体特性から見ても仕方あるまい」

放課後の教室。箒とセシリアはデータを前に二人顔を突き合わせていた。

専用機持ちタッグマッチ。そのパートナーとして望んだ一夏が鈴と組んでしまった為に、二人は組むことになったのだ。

「相手もそれを突いてくるはず。ですがそう簡単にはやられませんわ。確かにブルー・ティアーズは近距離向けではありませんが、だからこそ相手を近づかせない戦いには慣れていきますもの。それに箒さんの紅椿は間違いなくこの学園内でも最上位の機体。うふふふ、わたくしたちを選ばなかった事を後悔させてやりますわ」

不気味な笑いを漏らすセシリアの眼には一夏を倒す事しか浮かんでいない。だが箒はうかない。

「セシリア……なぜ一夏は鈴と組んだと思う？」

それこそがここ数日箒の心をしめる疑問。何故鈴だったのか。そこに特別な理由はあるのか？ それとも唯の気まぐれか？ そこが分からない。これが一夏のペアが全く知らない2年3年だったり、生徒会長だったりしたらここまで気になら無かったのかもしれない。どうせいつもの調子で無自覚の内に相手に気に入られ強引に押し切られたのだろうと。

だがそれが鈴となると別だ。いつも一緒にいるメンバー。その中でも幼馴染という、自分と同じ関係性を持つ鈴を一夏自身が選んだ。それが箒の心を揺らす。

「そうですね。それは一夏さんにしか分かりませんわ。ですが先日の様子からすると適当に選んだ訳では無さそうですし。悔しいですがここは鈴さんが一歩リードしてると言う事でしょう」

「何故だ！ 今までそんな様子はっ」

「私の知る限り有りませんが、知らないところではあったかもしれないでしょう？ これは私も不覚でした」

箒の問いにあくまで冷静に回答するセシリアに苛立ちが増す。

「何故そんなに冷静なのだ……っ」

セシリアとて一夏に想いを寄せている筈だ。なのに何故そんなに冷静でいられるのか。

「そうですね。わたくしとしても意外でした。しかし最早過ぎてしまった事は仕方ありませんわ。今はわたくしたちを選ばなかったことを後悔させる程に一夏さんを圧倒してやろう、という気持ちがありますの。そうすればわたくしたちの魅力に一夏さんが気づいてくれるかもしれないでしょう?」

これが通常の生徒と代表候補生として訓練を積んできた生徒の違いなのだろうか。だが箒にはその切替の速さを真似できそうにない。「箒さんが疑問に思うのは尤もですし気持ちはわかります。ですが今は相手を倒す事だけを考えていきましょう。そしてわたくしたちを選ばなかった事を後悔させてやりましょう」

まるで諭すようなセシリアの言葉に箒は頷くことは出来なかった。

「ん? ラウラ、それ何?」

「うむ。連携と言う事でドイツでの訓練データも引き出そうと思つていたら部下が寄越してきてな」

夕食も終え、自室に戻ったラウラとシャルロット。そこでラウラがシャルロットに見せたいものがあると声をかけたのが切っ掛けだった。

「なんでも連携と言えはやはり合体技。それに必殺技だそうだ。そこでその資料を送ってくれたのでな。シャルロットと共に研究しようと思つたのだ」

「必殺技か。確かにあつたらかつこいいけど、実戦的なのかな?」

「わからない。だがまあ参考程度にはなるかもしれん」

ラウラは送られてきたデータを投影スクリーンに映し出す。画面上は幾つかの項目を選ぶようになっていた。

「……………なにこの『クラ大戦合体技集』って」

「ふむ、解説によるとこれを喰らった相手は物理的なダメージと精神的なダメージを受けるとか。ならまずはこれから見てみるとしよう」

「嫌な予感しかないなあ」

シャルロットは今までの経験から碌な事にはなら無い気はしていたが、それでも持ち前の人の良さでラウラに付き合う。

「そういえばラウラ、今回のタッグマッチだけど一番ラウラが警戒してるのってどこ？」

「ふむ。やはりあの生徒会長のペアだな。悔しいがあの子の実力は本物だ。そして今までずっと参加せずにいた妹の力も未知数だからな。警戒するに越したことはない」

「やつぱりそうだね。それに2年3年の先輩たちもいるし」

「ああ。それに一夏達のペアも厄介だ。一夏は実力的にはまだまだだが、あの《零落白夜》だけは警戒しなくてはなら無い」

「確かに。それに箒とセシリアのペアも脅威だよ。箒のISは第四世代だし、セシリアも偏向射撃をマスターしてから凄く強くなった」

「うむ。こうして考えると私たちのペアが一番変化が無いな」

「そうだね。だけど負けるつもりは無いんでしょ？」

シャルロットの挑戦的な問いにラウラはふっ、と笑った。

「当然だとも。私達なら勝てる」

「うん。ラウラにそう言って貰えると僕も嬉しいよ」

確かに目に見える機体の強化も無く、武装の追加も大きくは無い。しかし自分とラウラにはそれに勝る連携がある。最悪だった出会いから時を経て、シャルロットとラウラの間には確かな信頼関係があり、そしてお互いが何をしようとしているのかが直ぐに分かる。それが強みだ。

「勝とうね、ラウラ」

「ああ。……………だがシャルロット一つだけいいか？」

突然ラウラが難しい顔になる。

「何？ ラウラ」

「もし、もしだ。もし『何か』が起きた時はシャルロットには思う様に動いてほしい」

「？ どういう事？」

「確信がある訳では無い。だが今までの事からするとまた何か起き

るかもしれない。その時は、後悔しない様に動いてほしいのだ」

ラウラはどこか考える様に言葉を選びながら話している。詳しい理由は分からない。だがそれがとても大事な事だと言う事はシャルロットにも理解できた。

「わかったよラウラ。だけどできればそんな事態になる事は避けたいな」

「そう、だな。ああ、本当にそう思う」

二人頷く。何も無ければそれにこしたことは無いのだから。

「妙な事を言って済まなかった。それでは研究に戻るとしよう」

「うん。何か参考になると良いね」

こうして二人はラウラが持ってきたデータの検証に移っていった。その後、二人の部屋から何とも言えない悲鳴が響いたのだが知る物は居ない。

そんな彼ら彼女らの様々な想いを胸に、タッグマッチが始まる――

70：崩れ去るもの

「まさか一回戦から大本命とはね」

「確かに驚いたがいい機会だ。この機会にあの女の鼻っ面を明かしてやろう」

小さく響く駆動音。目の前に表示されるウィンドウに流れる文字列。そして相棒の声。それらに包まれたシャルロットはあくまで冷静に、しかし気合いの入った眼差しで正面を見据えていた。

ここはアリーナのピット。もうじき目の前の扉が開き、そして今回のタッグマッチの相手——更識楯無・簪ペアと相對する。

遂に始まった専用機持ちタッグマッチ。開会式の後に発表された組み合わせには正直驚いたものだ。一回戦から自分達の出番であり、その相手は尤も警戒していた更識姉妹ペアだったのだから。いくらなんでも出来過ぎではなからうかと思っただが、よくよく考えてみると合点がいった。

今年の一年はとにかく内外からの注目度が高い。そんな生徒達を別々のアリーナで戦わせてはいちいち移動が大変で苦情が出る事だろう。ならばひとまとめにしてしまえばいい。

そしてその一年の組み合わせの中でも一夏の白式と箒の紅椿は最も注目されているだろう。更にはこういった大会に初参加の更識簪とその機体もだ。それらを考えた時最も盛り上がる組み合わせは何か？ それは最新鋭の機体である白式と紅椿が戦う事。そして生徒会長の妹であり、日本の代表候補生の実力を図るに最適な相手が戦う事。そうして考えていくと、現状一年生の中では実力トップのラウラと当たらせるといいうのも納得がいく。つまりは自分や鈴、それにセシリアに関しては特に気にされていないと言う事か。

悔しいとは思ふ。しかしそれは口に出さない。言いたいことは実力で示す。そんなこちらの考えが分かっているのだろう。ラウラはこちらを見ると静かに頷いた。

「いくぞシャルロット」

「うん。行くぞ」

ピットのハッチが開いていく。指示に従い二人は機体をハッチの外へと飛び出させた。途端に聞こえる歓声。見渡せばアリーナを埋め尽くす観客の姿が見える。今回は一般人は観戦できないが、それでもあらゆる組織や企業の人間がこの戦いを見ている。残念ながら今回は父は来れなかったが。

そんな響き渡る歓声の中、シャルロットはハイパーセンサーを使用して観客席をサーチする。目的の人物は直ぐに見つかった。学園生の観客席。そこに座りこちらを見ている静司の姿だ。その隣では鏡ナギや谷町癒子が手を振っていた。因みに本音は楯無チームの整備担当だったのでそこにはおらず、おそらく相手方のピットの方に居るのだろう。

こちらの視線に気づいたのか静司が小さく手を振った。思わず嬉しくなつてこちら小さく振り返す。彼も見ている、無様な戦いは出来ない。

視線を正面に戻すと対戦相手である更識姉妹もアリーナへと姿を現していた。不敵な笑みを浮かべる楯無とその機体、ミステリアス・レイディ。そして緊張しながらもその眼にはしっかりと闘志を燃やす簪と打鉄式式。

打鉄式式を見るのは初めてでは無い。ここ数日間で何度か調整や訓練の様子を見た事がある。しかし不思議な機体だな、と思う。名前からしても打鉄の後継機だろうが、その見た目は全然違うのだ。打鉄に比べて全体的にスマートなラインであり、打鉄の特徴の一つであった肩部の物理シールドも大型のスラスタに変えられている。防御型の打鉄とはうってかわつて機動性を重視している造りであり、どこか白式のフォルムにも似通う物があった。

「シャルロットちゃんにラウラちゃん。私達姉妹のラブラブアタックを見せてあげるわ」

「おねえちゃん、恥ずかしいからやめて……」

何故か妙にテンションが高い楯無とそれを窘める簪に笑ってしまったが油断は出来ない。楯無は言うまでも無く、簪だつて今まで専用機こそ無かったが日本の代表候補生になる程の腕なのだ。

「こちらこそ、僕とラウラの力を見せてあげます」
「ああそうだ。何時までも貴様の好きにはさせん」

両者の準備が整った事で試合開始のカウントダウンが開始する。お互いに機体の出力を高めていき、直ぐにでも動けるように集中していく。

その最中、シャルロットは何となくもう一度静司の方に視線を移した。先ほどと同じ場所に居る静司。しかし彼は何故か険しい顔で空を見上げている。

(何かを……探している?)

疑問に思うが今はよそう。目の前の敵に全力でぶつかなければ。余計な思考を捨て、息を整える。そして、

『開始!』

アリーナに響き渡る開始の声。その瞬間シャルロットとラウラは一気に飛び出した。

「あら?」

「っ!?!」

ラウラは簪に。そしてシャルロットは楯無に接近するとその右腕にアサルトカノン《ガラム》を。左腕に連装ショットガン《レイン・オブ・サタデイ》を展開すると即座に連射を始めた。

「あら怖い」

試合開始からの速攻の攻撃であったが楯無はそれに反応する。機体を背後に飛ばしつつ水のヴェールを楯の様に展開した。唯の水なら弾丸など防げる筈が無い。だがその正体はナノマシンの集合体である。それがシャルロットの放った弾丸を防ぐ。しかしシャルロットは臆する事なく連射を続けながら距離を詰めていく。

押すシャルロットと引く楯無。しかし両者の顔にあるのは真剣な眼差しとどこか楽しそうな、余裕がある笑いだ。そんな二人がアリーナを高速で移動していく。

「成程、私をかんちゃんから引き離すつもりね。けどそう簡単に行くかしら?」

「どうでしょうねっ!」

彼我の距離が更に縮まるとシャルロットは高速切替で右腕の《ガルム》を消し、近接ブレード《ブレット・スライサー》を展開。楯無へと斬りかかる。対して、楯無もランスである《蒼流旋》を呼び出すとそれを迎え撃った。

ぶつかり合う両者の武器。金属のぶつかり合う音が響き渡る。

「うん、スタートダッシュからの猛攻は中々凄かったわ。だけどおねーさんにはまだまだ届かないわよ?」

楯無が笑い、そしてランスの周囲に水が纏わっていく。そして次第に螺旋状に高速回転を始め、その勢いでシャルロットを近接ブレードごと弾き飛ばした。

「今度はこちらから行くわよ!」

再び離れた両者。楯無はシャルロットへランスに取り付けられた四門ガトリングガンを発射した。弾き飛ばされて姿勢が不安定だったシャルロットは咄嗟に物理シールド《ガーデン・カーテン》を展開しそれを防ぐ。そしてそのシールドの影から楯無に向けてグレネードを放った。放られたグレネードにガトリングガンの銃弾が当たり爆発する。その爆炎で一瞬敵を見失った楯無に対して、シャルロットは再び接近戦を挑む。

「このっ!」

「うふ、ざんねーん」

大きく迂回しつつ仕掛けた攻撃だったが楯無はそれを読んでいた様でランスとは別の手に蛇腹剣《ラストイー・ネイル》を展開すると、接近するシャルロット目掛けて振り抜いた。うねりをもった斬撃を紙一重でシャルロットは躲す。しかしその隙にランスを構えた楯無がその矛先をシャルロットへ向けていた。

「ばんばん♪」

再びガトリングガンの嵐。それに追われる様にしてシャルロットは進路を変更。上下左右に複雑に動きながら躲しつつ再び両手に展開したアサルトカノンとショットガンを楯無目掛け連射する。複雑な機動で楯無の銃弾を回避しながら隙を見て放たれるその銃撃に歓声が沸いた。だが当のシャルロットは必至だ。一瞬でも気を抜けば

追いつかれる。

「ならっ！」

《ガーデン・カーテン》を二枚重ねて掲げガトリングガンの嵐を防ぐ。銃弾がそれを叩く轟音に冷や汗をかきつつ、今まで回避しながら溜めていた出力を解放。瞬時加速を発動した。

一瞬で視界が変わる。それをISの補助を受けつつ感じなら再度展開した近接ブレードを楯無目掛けて叩き付けた。だがやはりそれもランスに防がれる。そのまま楯無が蛇腹剣を振ろうとするが、左腕にも近接ブレードを展開し応戦。お互い両腕の武器を封じられた状態で睨み合う形となった。

「うふ。やっぱり強いわねシャルロットちゃん。作戦としては強敵である私を引き付けてる間に実力的には一年生トップのラウラちゃんがかんちゃんを倒す、って所かしら？ タッグマッチというより個人戦ぼいけど発想は悪くないわ。けどそれはかんちゃんを舐め過ぎよ？」

「っ！」

不敵に笑う楯無の言葉と同時に、遠く離れた地上で大きな爆発が起きた。そこは丁度ラウラと簪が戦っていた場所だ。

眼前の楯無からは視線を逸らさずに、ハイパーセンサーが捉えた情報を確認する。そこでは簪の打鉄式が数多のミサイルをラウラ目掛けて叩き込んでいた。その猛攻は計48発分続き、ラウラが居た場所を炎と煙に染める。だがその精度はあまり高くないらしく、攻撃は広範囲に散らばっている様だ。それでも十分脅威だが、あれではラウラは倒せない。

それは簪も分かっている様で、続けて背中に搭載された砲門を脇の下から潜らせる様にスライドさせると、その砲門から荷電粒子砲を発射した。凄まじい光とひととき大きな爆発音。その凄まじい猛攻に観客たちも息を飲んだ。

「凄いでしょ？ 私の自慢の妹よ」

勝ち誇った笑みを浮かべる楯無。だがシャルロットも負けてはいない。

「そうですね。ですけど会長、一つお忘れですよ」

「あら、何かしら？」

「これはタッグマッチです」

刹那、簪の猛攻によって生まれた炎と煙が穴を開けた。そしてその穴を突き破り高速で放たれたそれが簪でなく楯無へとぶち当たった。「っ!!?」

驚いた様な楯無の顔。しかし彼女はギリギリで機体を逸らしたらしく、直撃には至らなかつた。だが放たれた一撃はミステリアス・レイデイのスカートの一部をスラスターごと砕き、肩部装甲の一部を削った。

その成果にニヤリを笑いつつ、シャルロットはたつた今攻撃が仕掛けられてきた方向へ一気に翔ける。そこにはシュヴァルツエア・レーゲンの大型レールカノンを発射したばかりのラウラの姿あつた。

「そんな……あの攻撃を耐えた……!!?」

「いや、中々の攻撃だつたぞ。お蔭でワイヤーブレードが3本駄目になつた。だが少々荒いな。あれだけ大味の攻撃ならば決め手にせず、最後の一撃が来ることは予想が出来たし、それが分かっていたらば躲すのも容易い」

簪の呻きにラウラが感心した様に答える。その左の瞳は眼帯が外され、金の瞳が簪を見つめている。彼女はその瞳《ヴォーダン・オージエ》とISの特殊兵装AIC——慣性停止結界を駆使してミサイルを見極め、そしてワイヤーブレードで叩き落とし続けたのだ。本来ならAICは複数相手に効果は薄い。しかし簪のミサイル攻撃は未完成な部分があるのか狙いが甘かつた為にか防ぐ事ができたのだ。そして、

「驚いてる暇は無いよ!」

楯無の元から一気に簪の元へと向かつたシャルロットが簪目掛けショットガンを放つ。咄嗟の事に防ぎきれなかつた簪がダメージを受け体勢を崩した。そしてラウラはシャルロットと入れ替わる様にするれ違つたと楯無の前に陣取つた。

「なるほどね、シャルロットちゃんは囿で本命はラウラちゃんの砲撃

だった訳か。しかしあのかんちゃんを相手にしつつこちらを狙う余裕があるとは驚きね」

「お前は強い。私やシャルロットよりもだ。ならば少しでも戦力を削ぐ為には小細工が必要だと判断した」

「成程ね。だから目の前のかんちゃんじゃなくって、少しでも私にダメージを与える事を優先したわけか。いいわね、おねーさんもちよつと油断が過ぎたかも。だけど今の一撃で致命傷を与えられなかったのは失敗ね？　ここからはおねーさんも本気よ」

「知っている。だからここからは私が相手だ」

楯無の顔から笑みが消え、ラウラがプラズマ手刀を展開する。一瞬の沈黙の後、二人はぶつかり合った。

「始まりましたね」

教員用の観測室で真耶はその戦いの模様を見ていた。繰り広げられる戦いは彼女の予想を超えており、自分の教え子たちの成長に嬉しさを感じる。だが何時までもそうしている訳にはいかない。彼女は直ぐに気を取り直すと自分の仕事に戻る。

彼女の前には巨大なスクリーンがあり、そこでは各アリーナでの戦いの様子。学園内と学園外の監視システムの状況。そして各教員のデータが映し出されている。真耶はコンソールを叩くとその中の一人を呼び出した。

「織斑先生。今の所問題は有りません」

『了解した。引き続き山田先生はそこで監視をお願いします』

「了解しました。それと幾つかの企業から織斑先生と是非話がしたいと打診が。それに織斑先生が姿を見せない事を疑問に思う方も居る様です」

『仕事中、と言ってお引き取り頂いて下さい。あまりしつこいようなら私に通信を回してくれて構わない』

「いえ、大丈夫です。……………来ると思いますか？」

『ああ。だからこそこうしている』

二人の声のトーンが下がる。二人が話すのは襲撃者の事だ。

「しかし前回と同じく委員会より参集されたISが今回は5機も警備についています。それに加えて、織斑先生をはじめとした先生たちの装備を換装した打鉄とラファールが15機。これだけの数を突破する戦力なんて考えられません」

現在IS学園の警備に出ているのは真耶の言う通り委員会より参集された機体。そして学園の量産機を実戦仕様に予め換装させた打鉄とラファールが15機だ。数に限りのあるISにとってその数はもはや戦争が出来るレベルである。これだけの数を予め念入りに整備し、より実践的な状態にするために数日前から授業に使える機体は半減していた。本当なら全機投入したい所だったが、それだけの数を換装してしまうと授業に使える機体が無くなってしまう事。それに本格的な戦闘を行えるレベルの者がそれほどいない為に断念された。だが緊急時にはそんな事も関係なく、ISの使用する許可が出ている。というより千冬が出させたのである。その全ては襲撃者から学園と生徒を護るためだ。

『そもそもこの学園を襲撃してくる事。アリーナのシールドを破る者が居る事。そして規格外の襲撃者達。それら全てが今まで考えられなかったことだ。用心するに越したことはない。今まで後手に回り続けていたが今回こそ好きにはさせません』

通信越しの千冬の声には強い意志が込められていた。確かに今まではこちらの行動が遅かったと言う事もある。だが今回は千冬を初めとした教員たちが既にISで待機して各地に配備されている。そこまではキャノン・ボールファーストの時と同じだが今回は数が違う。教員たちは二つの班に分かれており、千冬を筆頭に学園外周部に待機する迎撃班と真耶が中心の防衛班。真耶も事が起きたら学園と生徒、そして来客の防衛の為にラファールで出撃する。

「……そうですね。引き続き警戒を続けます。けど織斑先生、あまり無理はしないで下さいね」

『私は無理などしていません』

「嘘ですよ。織斑先生、ここ数日ずっと怖い顔してましたし」

『怖い……』

どこか釈然としないといった千冬の声に真耶は苦笑する。全然気づいてなかったんですね、と。

「私には織斑先生の悩んでいる事は全ては分かりません。それに先日の件に関しては私にも分からないことだらけです。しかもそのせいで生徒である川村君との距離も測りかねて、少し避けてしまいました。これじゃあ教師失格ですね」

『それを言ったら私もだろう』

「そうですね。そしてそんな事に気づかなかったIS学園の教師全員が駄目駄目です。けど、何時も失敗ばかりしている私が言うのも変かもしれませんが、駄目でも良いじゃないですか」

『何……？』

「私達……特に私や織斑先生はまだ若いんです。20代なんですよ20代！ 子供たちは勘違いしがちですけど20代なんてまだまだ子供みたいなものなんです。勿論だからと言って社会人としての責任を放棄したりするのは駄目ですけど、完璧な人間なんていませんよ。けど失敗したらならそれを反省して次に活かすだけの経験は今まで積んできました。だからこそ次に活かせるし、だからこそ織斑先生はいまこうしてISに乗って待機してらんですから」

言い訳染みてるかもしれない。だが失敗は失敗として認め、後悔も反省もしている。そして学生の頃に無かった『立場』と言う物が自分を縛るけど、逆にそれを利用する事だってできる。今の千冬がまさにそうだろう。通常はIS15機を警備に使うなど上が許す訳が無いのを、無理やり承認させたのだから。

「だからですね、えーと結局何を言いたいかと言いますと……」

どうやら勢いで喋っていたらしい。肝心の部分が出てこない真耶が恥ずかしそうに顔を手で覆う。

「と、とにかく、私は生徒を護ると言う事に関しては織斑先生の考えに同感です。その為なら委員会に何を言われようが関係ありません。それは他の先生たちも同じだと思います。だからあまり背負い込み過ぎないでくださいよね？」

懇願に近い真耶の言葉に千冬はしばらく無言だった。その事に真耶はドキドキしてしまうが、十数秒の後ようやく千冬が返事をした。

『ああ……ありがとう……』

小さな感謝の言葉と同時に通信が切れた。唐突のそれにぽかんとしてしまっただが、直ぐにそれも苦笑に変わる。

「恥ずかしかったんでしようか？　けど少しでも嬉しいと思ってくれたのならこちらも嬉しいですね」

自分も少し恥ずかしかったので顔が熱い。だが何時までもそんな気分ではいられない。ああいったからには万全の状態でも動けるようにしなくてはいけないのだから。

ふとコンソールを叩き、予めチェックしておいたある生徒の居場所を確認する。川村静司。彼はクラスメイト達と共に通常通り観戦している様だった。

「ほんと、お話をしなくちゃいけませんね……」

真耶は気合いを入れ直すと自分の仕事に戻るのだった。

シャルロット達の戦いは激しさを増していた。

「……早いっ！」

「まだまだ！」

アサルトカノン、ショットガン、そして近接ブレード。それらを一瞬で持ち替えて簪に猛攻を加えるシャルロットと機動力でそれを躲しつつ超振動薙刀《夢現》で何とかそれを凌ぐ簪。簪は余りにも早いシャルロットの武器の変化の対応に追われ思う様に動けず、シャルロットは、ギリギリで躲してくる簪相手に決め手に欠ける状態だった。

「流石は日本の代表候補生だね！」

「っ、そっちこそ……！」

打ちあつた一瞬、視線を躲しお互いを賞賛する。だがシャルロットは何時までもこうしてるつもりは無かった。時間が経てば経つほどラウラが危険だからだ。楯無に一撃加えたと言ってもそれは当初の

予定からは大分軽いダメージだ。事実、視界の端では楯無がランスと蛇腹剣の猛攻でラウラを押ししているのが見える。ラウラはプラズマ手刀とワイヤーブレードを駆使してそれらを捌きつつ楯無へ仕掛けるが油断を消した楯無はそれらを容易く防ぎ更なる猛攻を加えている。早く加勢に行かなければ。

(なら、ここで押し切る！)

瞬時加速を発動。一気に勝負に出た。簪も咄嗟に反応して薙刀でそれを受ける。

激突。近接ブレードと薙刀がぶつかり合い、そしてその衝撃でシャルロットのブレードが砕けた。

「……………」

それを好機と見たのだろう。簪が荷電粒子砲を向け、そして放つ。シャルロットの眼前で眩い光が放たれた。それは直撃すればダメージは避けられず、そして至近距離故に避ける事も不可能だ。だがシャルロットは元より避けるつもりは無かった。

「ふふ」

不敵な笑い。そしてシャルロットに放たれた筈の攻撃はその寸前で防がれた。簪が目を見開く。

「なっ……………!?!」

「僕の武器はまだあるんだよ?」

簪の目の前にあった物。それは馬鹿みたいに巨大なドリルだった。そのドリルが荷電粒子砲を防ぐ楯となり、そしてその鋼鉄の先端を回転させながら突っ込んできたのだ。その見た目も然ることながら、その馬鹿みたいな武器から発せられる破壊の駆動音に簪の顔が青くなる。そしてそのドリルは荷電粒子砲の砲撃の中心を突き進み、簪に突き刺さった。

「きゃああ!?!」

咄嗟に砲撃は止め誘爆は避けたがドリルの一撃は見た目通り重い。武器を取り落とし簪が吹き飛ばされ、アリーナのシールドにぶち当たった。

「くっ……………!?!」

ふら付きつつも体勢を立て直そうと簪が顔を上げた時、既にシャルロットはパイルバンカー《灰色の鱗殻》を構えてその懐に入り込んでいた。簪の顔が引き攣る。

「行つけええええええー!」

ずどん、と鈍く重い音が響き渡る。そしてパイルバンカーの直撃を喰らった簪は機体のシールドエネルギーが付き落下して行った。

「ふう……」

落下した簪に視線を向けると眼を回した様に座り込んでいた。その体はガタガタと震えている。しまった。やり過ぎたか？

簪の機体の情報は余り無かったが、彼女が少々気の弱いところがあるのは知っていた。なのでインパクトと威力だけは十分な武器での2連撃にかけてみたが上手くいった様だ。

その事にほっとしつつラウラの援護に向かおうとした時だった。凄まじい轟音が響き、大気が揺れる。

「な、何!？」

慌ててそちらを見ると上空に悠然と佇む楯無とその正面に広がる爆発。そしてその爆発の中からラウラが落下していく光景だった。

「嘘っ……ラウラ!？」

「くっ、すまんシャルロット……」

ラウラからの通信。彼女は声を震わせながらもなんとか体勢を立て直す但那ダメージが大きいのか動きはぎこちない。

「ふう、……までやっても倒れないのは流石ね。けどそれじゃあもうまともに戦えないでしょう」

「ちっ……」

ラウラが唇を噛む。つまり肯定と言う事だ。実際、ラウラのシユヴァルツエア・レーゲンのシールドエネルギーは残り少なく、機体自体もボロボロだ。だがまだ彼女は諦めていない。

「ラウラ、僕が前にでる。援護はいける?」

「ああ、最大出力は無理だがレールカノンも数発は行ける。すまんが頼む」

二人は頷きあう。そしてシャルロットは楯無と相對した。両手に

ランスと蛇腹剣を持つ楯無は無防備に見えるが、それに惑わされ安易に突っ込めば返り討ちにあうことが分かる。

「強敵だね……」

「うふ。伊達に学園最強と呼ばれてないわよ」

「それでも、行きますよ！」

再度両手に銃を展開しシャルロットが構える。だが楯無は首を横に振った。

「いいえ。行くのはこちらからよ」

「え……っ!?!」

走る悪寒。咄嗟にシャルロットは横に飛ぶ。半瞬遅れてシャルロットが居た場所が突如爆発した。

「これはっ!?!」

「《清き熱情》。ナノマシンを一気に発熱させて起こす水蒸気爆発よ。これのいい所は仕掛けてるのが見え無い所かしら」

そう笑う楯無が指を鳴らす。するとシャルロットの背後で、左右で、上で、下でその爆発が起こりシャルロットは玩具の様に空中でもみくちやにされた。そしてその隙に楯無がランスを手に迫る。

「っ、馬鹿にしてー」

「いいえ、むしろ賞賛しているわ。タッグマッチとはいえ私に傷を負わせたのだからこそ本気でいくわ」

迫る楯無。だがそこにラウラが放ったワイヤーブレードが割り込む。それは楯無を絡め取る様に撓るが、楯無はそれを一瞥するとそのワイヤー向けてランスのガトリングガンを発射。その軌道を逸らす。そしてもう片手の蛇腹剣でシャルロットを襲う。シャルロットもそれを近接ブレードで受けるが、その途端蛇腹剣の先端から高压水流が発射されシャルロットのバランスが崩れる。

「ふっー」

楯無は両手の武器を離すと体勢を崩したシャルロットへ接近。掌打と蹴りを連続で叩きこむ。ほぼゼロ距離から放たれるそれにシャルロットは対応しきれず押されていく。そして止めとばかりにシャルロットを掴み上げると空中で一本背負いの様に投げ飛ばした。

「きゃ!?」

「シャルロット! このっ、喰らえ!」

武器を手放した楯無目掛けラウラがレールカノンを発射。然しそれは一瞬で展開された何重にも重なる水のヴェールのよって逸らされた。そしてその隙に楯無は武器を回収すると一気に降下。まだ動きが鈍いラウラにガトリングガンを浴びせる。そして蛇腹剣をシャルロットへ振るい、その身を拘束する様に巻き付けた。

「さて……」

地上に降り立った楯無。その頃にはラウラのシールドエネルギーは尽き、悔しそうに楯無を睨んでいた。そんな様子に苦笑しつつ楯無は拘束されたシャルロットへ問いかける。

「終わりね?」

「……………やっぱ強いなあ。ラウラと考えた必殺技を使う暇もないや」

シャルロットのそんな言葉を最後に、拘束されたシャルロットにもガトリングガンが叩き込まれ試合は決したのだった。

「凄かったね今の試合」

「うん。デュノアさんもボーデヴィツヒさんも会長達相手に凄いよ」

「それに妹の簪さんも負けたとはいえそんな二人と渡り合ってたし凄いやね」

周囲では今の試合の興奮も冷めやらぬ状態で生徒達が話している。確かにいい試合だったと思う。会長相手に一撃を与え、そしてその本気を引き出させたのだから当然だ。そして今アリーナでは次の試合の準備が行われている。

次の試合。それはある意味今回最も注目度が高い試合だ。一夏&鈴VS箒&セシリア。特に一夏と箒の機体に関心を寄せるものは多い。その為かアリーナの雰囲気もどこか落ち着きが無い。それは観客だけでなく、警備に当たる者達も同様だった。その理由は簡単だ。もし何かが起きるとしたら、この一夏達の戦いの時が最も可能性が高

いと誰もが考えているからだ。

「トイレに行ってくる」

「え？ けどもうすぐ始まるよ？」

「まあ出来るだけ早く戻るさ」

ナギにそう答え静司も動き出す。もし何かが起きた時直ぐにでも動けるように、予め人気がない所へ移動する必要があった。アリーナ内は混雑しており、次の試合の注目度故に足早に廊下を進む人が多い。そんな中を予め決めていた場所へと移動していく。

最初から姿を消す選択肢もあつたがそれはしなかった。現在千冬や、おそらく真耶にも疑いをもたれている自分あまり早期から姿を消しては搜索される可能性も考えたからだ。途中から姿を消しても同じかもしれないが、少し位は時間が稼げるはずだ。

出来るだけ監視カメラに映らぬように進み、やがて人の流れとはずれたエリアに入っていく。そこは今は無人のピットへ続く道だ。アリーナにピットは複数ある。その中で今日は使われていないピットの付近まで来ると静司はため息を付いた。この監視カメラなどの装置は予めダミーを流す様に楯無達が仕込んでいる。それも静司がここで待機する為の処置だ。

ピット内部に入ると薄暗い室内を電子機器の光が照らしている。証明はつけずに静司はコンソールを叩くと、正面のスクリーンにアリーナの様子を映し出した。丁度一夏達がアリーナに出てきた所らしく大きな歓声が上がっていた。

続いて静司はコンソールを叩き、現在の学園の警備システムにアクセス。パスなどは楯無から一時的に預かっている為に問題は無い。そして映し出されたレーダーにはIS委員会が召集した機体や教員たちの機体の配置が映し出されている。学園全体を囲む様に配置されているが、やはり一夏達がいるこのアリーナの警備が最も嚴重の様だった。そして続いてレーダーを確認するが、今の所目立った動きはない。それを確認すると静司は通信機を取り出した。

「こちらB9。C1、そちらはどうだ？」

『今の所変化は無い。だがここからが本番だろうよ。委員会が召集し

たつて連中も張りつめている。そちらはどうだ?』

「所定の位置についた。ここからなら例えアリーナが遮断されても黒翼で破壊して直ぐに侵入できるし、観客にも被害は少ない」

『了解した。……何事も無いのが一番いいんだけどな』

C1の言葉に静司は黙って頷く。

たとえその可能性が低いと分かっているとしても。

自分達を包む歓声。それを少し気恥ずかしく、同時に嬉しく感じながら一夏は口を開く。

「すごいな……」

「そりやそうでしょ。模擬戦や授業を覗けば初めての第四世代機である箒の紅椿の戦いよ。それに相手が篠ノ之束謹製であり、男性操縦者である一夏の白式。盛り上がりもするわ」

「そうか。けどそこまで期待されてるとなると無様な真似はできないな」

「当然よ。………だけど一夏、注意しておいて。杞憂ならいいんだけど」

「ああ、わかってる。もしまた『何か』が起きたら観客の避難を最優先にしつつ全員固まって行動しろ」

一夏達とてこれだけ毎回事が起きれば嫌でも思い知る。学園のイベントに乗じてまた何か起きるのではないかと。その件に関しては敵味方関係なく、一度専用機持ち同士で話し合った。もしそれが起きた時は互いに直ぐに戦闘を中断し、まずは自分の身の安全を。そして可能ならば観客たちの安全を守ろうと決めたのだ。

「シャルロット達は前の戦いのダメージがあるし、もし本当に襲撃があるのならタイミミング次第で私達も分からない。その時はまずは箒を最優先に守る」

「それで箒の絢爛舞踏で回復させてから行動開始、だろ。けどだからと言ってこの戦いに手を抜くわけにもいかないよな」

「そうね。難しい所だけどそこはもう出たとこ勝負でいくしかない

わ

二人頷きあう。そして正面を見据えればこちらと向かい合う箒とセシリアの姿。

「『もしも』の事は気になりますが、今はこの戦いに全力で挑みますわ」
「ああ、こちらもだ！」

セシリアの言葉に一夏も頷く。一方、箒は鈴と視線を交わしていた。

「負けないわよ、箒」

「……………ああ、こちらもだ」

「？」

答える箒の様子が少し暗い事に首を傾げる鈴だがその間にも試合開始時刻は迫ってきている。鈴は余計な思考を消し目の前の敵に集中する。

そして試合が始まった。

試合開始のブザー。それと同時に全員が一齐に動き出す。セシリアは一瞬でレーザーライフル《スターライトmkⅢ》を構え発射した。
「くっ、やっぱり駄目か！」

狙われたのは先手必勝とばかりにスタートダッシュでセシリアに斬りかかろうとした一夏だ。だが目論見が外れた一夏は進路を強引に変えそれを避ける。今までだったらそのまま直撃していたかもしれないが、この攻撃が読まれている事も考慮していたが故に躲す事が出来たのだ。

「そう簡単にはいきませんわ！」

そんな一夏をセシリアのレーザーライフルとビットの射撃が狙う。一夏は直ぐにスラスターを吹かすとその場から離れるが、その一夏を追う様にしてそのレーザーが曲がった。セシリアの偏向射撃だ。

「うおっ!? やっぱりこれは怖いな！」

「けどその分本体はがら空きね！」

避けても避けても追ってくるレーザーに一夏が冷や汗交じりの悲

鳴を漏らす。その隙に鈴がセシリアに衝撃砲で狙うが、そこに箒が刀剣型の武器、《空裂》で斬りかかった。

「喰らえっ！」

「ああもう邪魔ー！」

衝撃砲を諦めた鈴も青竜刀《双天牙月》で迎え撃つ。互いの刃をぶつけ合った二人が至近距離で睨み合う。

「っんのお……！ バカ力めえー！」

「お前が、言うか！」

第四世代の紅椿。その出力に鈴は押されるが、ギリギリで耐えている。その事に業を煮やした箒がもう片方の手に《雨月》を展開し刺突を放つ。

「そんなものでえー！」

突き出された刃。対して鈴は咄嗟にある武器を展開しそれ目掛けて振るう。

「何っ!?!」

それは奇妙な鎖だった。まるでボルトが繋がり合った様な奇妙な形状をしたそれが《雨月》を絡みとり箒の刺突を止めていた。

「お互い手の内を知ってるつもりだけど、だからこそ見たことの無い武器は意外でしょー！」

鈴が持ちだしたのはホルテックチエーン高電圧縛鎖。腕部衝撃砲をオミットし代わりに装備した物であり、箒達の前では初めて使う物だ。それ故に箒にはその鎖の機能がわからない。

「たかが鎖でー！」

「どうにかしてみせる！」

刹那、その縛鎖に電流が流れる。その電流は《雨月》を通して紅椿まで届き、機体各所から火花が散った。

「なんだと!?!」

自身も電撃によって痺れさせられた箒が驚愕し、咄嗟に《雨月》を手放し背後に跳んだ。鈴は《雨月》を放り捨てると、箒の追撃に移る。だが、

「させなくてよー！」

そんな鈴の進行方向にレーザーの雨が降り注いだ。セシリアのビットによる攻撃だ。鈴は急ブレーキを駆けると忌々しげに空を見上げる。

「やってくれるわね、セシリア！」

「お互い様ですわ！」

「だけどこれで近づけた！」

セシリアが鈴に攻撃した為に一夏への手が緩んだ。その隙に一夏は《零落白夜》の楯を使って自分を追うレーザーを消し去るとセシリアに一気に詰め寄る。

「これで終わりだ！」

「まさかー！」

一夏の間合いは完璧だった。それ故に見ていた誰もがセシリアが斬られる場面を想像した。だがそれ故に次に起きた事に誰もが驚くことになる。

一夏の振るった《零落白夜》の刃。それが止められたのだ。そしてそれを止めたのはセシリアが握るショートブレード、《インターセプター》だ。

「ここぞと言うとき大振りになる。箒さんの助言通りでしたわ」

「嘘だろっ?! セシリアが——」

「その発言は少々酷くありませんこと？ それに私のパートナーは箒さんです。私の弱点を少しでも埋める為に協力して頂きました。上手いくかは五分五分でしたわね」

鈴が初見の武器で箒を驚かせたように、セシリアは『接近戦』という隠し玉で一夏を驚かせる。思いがけない事に硬直する一夏にセシリアは微笑み、

「そして、一瞬さえ稼げればこちらの番ですわ」

「しまっ——」

ブルー・ティアーズの腰部スカートアーマーから放たれたミサイル型ビット。それが一夏に叩き込まれた。大きな爆発と共に一夏が吹き飛ばされる。一方セシリアは距離を取りつつその姿勢を崩した一夏目掛けて再度レーザーを撃ちこんだ。

「くそっ！」

だが一夏も受け身を取っていたのだろう。直ぐに姿勢を立て直すとその場を離れてそれを回避する。そして鈴の横に並ぶと、セシリアも箒の傍へ移動した所だった。

「ちよつと一夏、大丈夫なの？」

「ああまだ行ける。だがエネルギーはかなり喰っちゃった」

「仕方ないわね。セシリアの接近戦なんて私だって予想してなかったし。けどダメージは箒も同じはずよ。……もつともあつちは《絢爛舞踏》があるから厄介だけど、発動してる様子は無いわね」

「警戒してるんだと思う。あれは確かに便利だけど少し時間がかかるし隙も出来る」

つまり状況はお互いに五分五分か、少し一夏達が押されていると行った所か。

「なら予定変更ね。今のセシリアは一気に潰すのは難しそう。ならダメージがある箒を一気に叩くわよ」

「OK。それでいこう。タイミングは？」

「それなんだけどね——」

「と、言う事でおそらくダメージがある箒さんを狙ってくると思われるますわ」

「ああ、分かっている」

一夏達と向かい合う二人。箒が前におり、その少し後方斜め上にセシリアが浮かんでいる。

「何であろうと叩き斬る」

「……箒さんのそういう所は嫌いではありませんが、冷静にお願いしますね？」

「わかっている」

そう答えながらも箒の心にあるのは焦燥と疑問だ。その原因は目の前に居る二人にある。

何故、あそこにいるのが自分では無いのか。

何故、二人はあんな親密そうにしているのか。

何故、一夏は鈴と組んだのか。

何故、何故、何故……

たかが学校行事のペアだ。今までならここまで気にしなかったと思う。しかし今回は何故か異様なまでに気になるのだ。それは一夏がはつきりと意思を表示したからか。それとも二人の間に流れる微妙な空気を感じ取ったからか。上手く言葉に表せられない危機感。それが筈に焦りを生む。

確かに鈴は良い友人だ。少々口が悪い時もあるが頭の回転は速く、それに堂々としている。立場も中国の代表候補生という物も持っている。その事を筈は素直に賞賛しているし、誰にも言った事は無いが尊敬すらしている。だが今はその事実が堪らなく怖い。そしてもっと恐ろしい事を考えそうになる自分が怖かった。

——さえ、居なければ。

そんな事考えたくない。鈴は大切な友人だ。それは絶対の筈なのに、どうしてそんな事を考えてしまうのか。そんな自分に嫌気がさしてしまう。いくらなんでもこれは最低の思考だと。

そうだ。そんな事を考えるより今を考えろ。今、ここで。自分の力を示し一夏に認めて貰えばいい。そうする事で自分は——

『うんうん。筈ちゃんは健気だね！ そんな筈ちゃんを手伝ってあげよう！』

「え？」

突如、頭の中で声が響いた。他でも無い、姉の声だ。

そして時を同じくして一夏と鈴が動き出す。鈴がセシリアに衝撃砲を放ちセシリアがそれを回避。その隙に二人が瞬時加速で一氣にこちらへと突っ込んできた。

『前も言ったよね？ 筈ちゃんの場所は私が作ってあげるって。ちよっと早いけどここまで溜まれば十分かな』

頭の中に響く声は止まらない。そして紅椿が動き出す。

『戦闘経験値の蓄積が規定値に達していません。コア・ネットワークへ接続。機動中の全コアよりデータをダウンロード』

「な、なんだこれは!？」

時間にしては一瞬の筈なのに酷く引き伸ばされゆつくりと感じる時の中、ISが訳の分からない行動を始める。

『データを元に新装備の構築が完了。出力可変型ブラスタライフル《穿千》セット』

紅椿の肩部装甲がスライドしていき上下に伸びる。中央には新たな突起が生まれ、まるでそれは矢じりを構えたクロスボウの様な形をしていた。そして両肩に出来上がったそれは筈の意志に関係なく、その照準を鈴に合わせた。不味い。これは危険だ!

「鈴、逃げろおおお!？」

自由が利かない中、それでも力づくで照準を外そうとしながら筈が叫ぶ。今からこの両肩二門から放たれる攻撃が、致命的なレベルの威力を持っていると気づいたのだ。そしてその両肩二門のそのクロスボウから真紅のビームが放たれた。

「ちよっ!？」

「鈴!？」

目前まで迫っていた鈴も一瞬で行われた紅椿の変化に目を見開き、そして強引にその進路を変えた。しかし放たれた真紅のビームが掠り、シールドをもものともせず甲龍の装甲焼き切っていく。バランスを崩した鈴は一夏とぶつかりもつれ合う様にして墜落していった。

二人は大きな音を立て地面まで落ちたが受け身は取っていたのか直ぐに起きあがる。だが鈴は満身創痍だ。

「な、なんなのよ、あれは……!？」

「おい鈴!?! 大丈夫なのか!?!」

鈴の甲龍は右の肩部装甲は見る影も無く焼き尽くされていた。そしてその際に起きた爆発の衝撃のせいか鈴の息も荒い。慌てて鈴に声をかける一夏だがふと見た筈の放ったビームの破壊後を見て絶句した。

鈴が掠りつつも避けたそのビームはアリーナの壁に直撃し、そしてその周囲一帯を完全に融解させていたのだ。幸い観客席には届いていないがそれを見た観客の誰もが声を失っていた。

「ほ、箒さん!? 今のは……!?!」

「わか、らない……いや、違うっ! これは——」

一方箒は無理やり紅椿を抑え込むように自らの体を掻き抱いている。そんな箒の頭の再び声が響く。

『箒ちゃんは優しいね! じゃあ代わりに私がやってあげよう。丁度用事もあつたしね!』

その言葉が合図。次の瞬間、学園の各地から轟音が響き渡った。

現在IS学園の警備についている者達はこれが万全だと言う自信があつた。どれだけ高速で接近しても、どれだけ高高度から接近しても、即座にそれを発見するだけの準備と人員は整えていたのだから。だがそれは所詮常識的な範囲内だ。誰が考えるものか。想像の遥か遥か上。宇宙空間に複数の異形が居る事など。そしてそれが、まるで隕石の如く超高速で落下してくるなど。

それらは姿を隠さない。隠す必要が無いのだ。例えこちらに気づいたとしてもこの速度なら気づいた時にはもう遅い。

『……』

親である『彼女』からの命令を受けたそれらは降下を開始する。その数は10。それらはそれぞれの目的を持って。摩擦熱を物ともせず。寸分違わぬ正確性で目的の場所へ、高速で降りていく。

初めに気づいたのは上空を警戒してた学園の教師のラファール・リヴァイヴだ。その搭乗者である教師はまず最初に機体が奇妙な警告を発した事に驚き、そして上空を見上げた。そしてその時にはもうそれは寸前まで迫ってきており、そしてそれは直撃コースだった。

「なっ——!?!」

敵発見の報告も出来ずまま、彼女はその隕石に轢かれ、そして弾き飛ばされた。ラファールのパーツが宙に飛び散り、力と意識を失った教師は地上へ落ちていく。その異常に周りが気づいた時、それらは既に地上まで到達していた。

そして響き渡る轟音は9つ。大きな振動と衝撃を撒き散らしそれ

らは地上へと降り立った。たった一機を除いて。

「……………やっってくれるっ」

その残りの一機。それは空中で一機の打鉄によって串刺しにされていた。その胴体からは打鉄の近接ブレードが生えており、その柄を握るのは織斑千冬。唯一降下してきた機体に反応したのが彼女であった。そして降下してくる機体を迎え撃つ様に、驚異的な動体視力で打鉄の近接ブレードで迎撃したのである。だがその全てが千冬の力では無い。

「直視映像、停止」

その言葉で千冬の視界が変わる。今までは警備に当たる学園のIS14機。その全てと視界をリンクしていたのだ。そしてその中の一つに異常を見つけるが否や即座に対応して見せた。だがそのせいでブレードは耐久値を超えひび割れている。

千冬は串刺しにした機体を一瞥するとブレードごとそれを放る。そして落下していく機体目掛けてライフルを連射し粉々に破壊していく。そして完全に動きが止まった事を確認するとやはり、と拳を握りしめた。

「無人機……………束か」

そう、今しがた落ちてきた機体には搭乗者が居ない。それはつまり無人機と言う事だ。そしてそれはどこか臨海学校で見た物に似ている。ならばこの件の犯人は束と言う事になる。

『織斑先生！』

「山田先生、全部で何機だ!?!」

『今織斑先生が倒した機体を除いて9機です！ 3機はIS委員会の機体と交戦中！ それと2機が第一アリーナへ。1機が教師陣と戦闘に入りました！ そして残りの3機が——』

「第三アリーナ……………一夏達の所か!」

『織斑先生は第三アリーナへ！ あそこが一番生徒が集まっています！ 現在アリーナは最高レベルで遮断シールドが展開されていますが何とか解除して私も向かいます!』

「頼む!」

世界に数が限られているISのコア。それを感じさせない、大判振る舞いの10機ときた。千冬が事の重大さに唇を噛み絞める。

「今度こそ、好きにさせるものか……!」

そして彼女も第三アリーナへと向かうのだった。

遙か上空から落下してきた無人機達。だが地上に到着した際に轟音と衝撃こそあったものも、それは通常考えられる衝撃よりは少なかった。それはつまり落下してきた無人機が落下の瞬間に速度を緩めたと言う事であり、ただ破壊の為に現れたのでなくその場所に目的があったと言う事だろう。そう、例えば自分の様な。

「っ……!」

無人機降下の衝撃で壁に叩き付けられた静司は小さく息を吐きながら目の前の異形を睨む。

以前までの無人機とは少し違うその形状。全体は黒に塗りつぶされ、以前の無骨な印象からよりスマートな女性的なシルエツトに変わっている。頭部はバイザー型のライン・アイに変えられており、羊の巻き角の様なハイパーセンサーはどこか悪魔を想像させる。そして右腕は肘から先が巨大なブレードとなっており、左は以前のままの巨大な腕だがそこ先の手のひらには四つの砲門がある。

それはその眼を光らせそして静司に飛びかかった。

「黒よ——」

静司も咄嗟にISを展開しようとするがそれよりも早くその頭が掴まれ、そして投げ飛ばされた。ピット内部の機材を撒き散らしながら投げ飛ばされた静司は再度壁に叩き付けられた。そしてその静司に目掛けて無人機はその砲門を向け、発射。

放たれた熱線は静司の真横の壁に突き刺さりそして貫通した。爆発と共に壁に穴が開き、その熱風で静司の肌が焼かれる。

「いつ、まさか!」

明らかに今この無人機は壁を狙っていた。その狙いに気づき静司は急ぎ立ち上がるようにするが、それより早く無人機は飛び出し静司を

殴り飛ばした。

「がはっ!？」

殴り飛ばされた静司は穴を抜け、そしてその先のアリーナへの床へと叩き付けられた。突如現れた静司の姿に、一夏達が目を見開く。

「静司!? どうしてここに!？」

「そんな……!? つ、一夏さん、こちらの敵が!」

「ああ、わかってる! だけど……」

一夏達の前にも無人機が2機居た。ある程度は予想していた襲撃。それが現実になった事に一夏達の間にも緊張が走る。

「逃げろ! いち、がっ!？」

静司が起きあがりつつ叫ぼうとするが、それより早く無人機はその静司の背中を踏み抜く。その衝撃と痛みに静司が喘ぐ。

そしてそれを見ていた一夏達も顔を険しくしつ箒を護る様に囲み、無人機と向き合った。

本来ならもしもの時は箒を最優先で護り、その隙に箒の絢爛舞踏で回復する手はずだった。だがその箒の紅椿の様子がおかしい。箒の意志とは反した動きをしようとしており、箒が必死にそれを止めようと蹲っているのだ。

「くそ、言う事を聞け紅椿!」

箒も必死に叫ぶが効果は無い。それどころか身動きが取れなくなってしまう。こうなると箒を護って戦うしかない。それは当初の予定に近いが、違うのはその先に逆転の眼が見えないことだ。

現在アリーナの中は悲鳴と怒号が溢れている。教師達が生徒達の退避を促す中、外からも断続的に戦闘の音が聞こえてくるのだ。一体何機が学園に現れたのかは不明だが事態はかなり切迫しているのは確か。

「来るわよ一夏、セシリア!」

片膝をついていた鈴が警告する。それと同時に、2機の無人機がその左腕の砲門から光を放つ。

「全員、俺の後ろに！」

一夏が咄嗟に《雪羅》から零落白夜のシールドを展開し全員の前に飛び出した。砲門から放たれた超高位力の熱線が直撃し、衝撃で一夏が押されていく。

「くっそおとおお！」

歯を食いしばり耐える一夏。その影からセシリアと鈴が飛び出した。

「隙だらけですわ！」

「吹っ飛びなさい！」

セシリアが《スターライトmkⅢ》を、鈴が片方だけになった《龍砲》から衝撃砲を撃つ。全力で放たれたそれは直撃すれば無人機を破壊する、筈だった。だが無人機の周りに浮遊する円盤状の物体が突如バリアを発生させそれを防ぐ。

「そんな!？」

「やっかいな！」

無人機が動く。一機は変わらず熱線を放ち続けたままで、もう一機は静司を踏みつけたまま。そして残り1機が前に飛び出しそのブレードと化した右腕をセシリアと鈴に振るう。セシリアは咄嗟に背後に飛び、鈴が《双天牙月》で受け止める。だが無人機は速度と出力を高めていく。鈴を押し込み、そしてもう片方の腕の熱線をセシリアに放った。

「ぎゃああ!？」

咄嗟にセシリアは《スターライトmkⅢ》を盾にしてそれを受け止める。だが圧倒的な出力にあつという間に破壊され、熱線がセシリアへ直撃した。

「セシリ——つくうう!？」

一方鈴へはその足を振り上げ蹴りを叩きこむ。鈴の息が詰まり、よろけた所を袈裟切りに切り裂いた。

「セシリア、鈴!?! この野郎おとおお！」

その様子を見た一夏が激昂し白式の出力を上げた。そして熱線を防ぎながらも前に出て熱線を放つ無人機へ迫る。

対して無人機はその無機質な眼を光らせると右腕を振るった。振るわれた刃はアリーナの床を叩き壊し、粉塵を巻き上げて一夏の視界を一瞬だけ阻害する。一夏も直ぐにハイパーセンサーで相手を探すが、それより早く距離を詰めた無人機に腹を殴られた。

「げほっ!？」

凄まじい威力で殴られた一夏はアリーナの壁に叩き付けられた。そして腹を押さえ、上手く出来ない呼吸を何とか整えようとしながら、不可思議な点に気づく。

「絶対防御が、作動していない……?」

感じた疑問に答えたのは機体アナウンスだった。

——敵ISより未知のエネルギー放出を確認。シールドバリアの展開が妨害されています。

そんな馬鹿なと思う。しかし思い出す。この無人機が誰が作ったとされているか。その事を考えるとどんな無茶もあり得る気がしてなら無い。だがこんなものまで作ってしようとする事は一体なんだというのだ!?

「く、そ……」

あつという間に三人とも不利な状況へと追い込まれた。セシリアも鈴も機体と体に大きなダメージを負っている。そしてそんな三人に無人機が迫り、静司は踏みつけられたまま息を荒らげている。そんな圧倒的に不利な状況を悔しさと怒りを交えた瞳で睨む一夏。だがそこに新たな爆発音が響いた。

「させないよー!」

「好き勝手やっちゃってまあ……覚悟しなさい」

その爆発と共に、破壊されたピットへ続くシャッターから大量の水蒸気がアリーナへ雪崩れ込む。そしてそれを突き破る様に橙と青のISが飛び出す。シャルロットと楯無だ。シャルロットは《ガーデンカーテン》を展開した状態で静司を踏みつける無人機へ体当たりを敢行し、その機体を弾き飛ばして静司を助け出し、一夏の近くへ降りたつ。一方楯無は一夏の前に降り立ち武器を構える。

「舐めた真似してくれるじゃない。おねーさんちよつとトサカに来た

わ

怒りを滲ませた瞳で無人機を睨む楯無。そして更に、破壊されたシャッターからラウラと箒も現れる。その登場に安堵しかけた一夏だが直ぐに違うと気づいた。楯無はともかくとして他の三人はつい先程の戦いでエネルギーすらまともに回復していない筈だ。

「無茶だ！ 三人とも逃げろ！」

「それは一夏も同じだよ！ 何とかシールド破ったからみんな逃げて！」

「おねーさんが時間を稼いであげる。かんちゃん、ラウラちゃん。援護よろしくね。シャルロットちゃんは川村君を退避させて」

「残ったほとんどのエネルギーをシールド破壊に費やしたから牽制程度にしかならん。だが了解した」

「皆……逃げて！」

おそらく学園のラファールの武装の予備だろう。両手にライフルを持ったラウラが頷く。その隣では箒も同じようにライフルを手にしている。

専用機が8機。それが揃っても今の状態では逃げる事が精いっぱいだ。それを悔しく思いながらも一夏はそんな事を考えている場合で無いと首を振った。鈴もセシリアも負傷している。箒の様子もおかしい。仲間の事を思うなら、シャルロット達が言う通り今は引くべきだ。

「わかった……だが俺も少しは動けるからシャルロットの援護を——」

「何を言ってるんだ姉さん!？」

突然、箒が叫んだ。驚き振り向くと蹲っていた箒がどこか焦る様子に、そして混乱した様子で何かを叫んでいる。

「役者!?! 準備!?! 一体何の事を」

「箒、一体何が——」

『いつくんにも直ぐに分かるよ。これでハッキリする。あれが何なのか』

「え?？」

突如響いたのは篠ノ之束の声。その姿は見えないのに、声だけが頭に響く。そして、

「ちょ!?! なにこれ……!?!」

「どういうことだ!?!」

「機体が……動かない!?!」

突如として楯無、ラウラ、シャルロット、簪のISが機能を止め落下した。空中に居た機体も幸い高度はそれほど高く無く、怪我は無いようだが機体が機能停止しまともに身動きすら取れないでいる。そしてそれは一夏も筈も、鈴もセシリアも同じだった。一齐にISが機能を停止したのだ。

「なんだよこれは!?! 白式!?! なんで動かない!?!」

いくら命令を送っても。動かそうとしても白式は反応しない。そしてそんな一夏達に無人機はゆっくりと迫る。

「っ鈴!?!」

そして一夏は気づいた。無人機の内、先頭の一機が先程の負傷で未だ息を荒らげている鈴に迫っているのを。鈴もそれを忌々しげに睨みながら必死に機体を動かそうとしているが、やはり動かない。精々機体が揺れる程度だ。怪我をしている事もあり、パワーアシスト無しではまともに動かせないのだ。そしてそんな鈴に迫る無人機はゆっくりとその刃を振り上げていく。それを見て一夏の顔から血の気が引いた。

「おい……やめろ!?! やめろって言ってんだろ!?! くそっ、動け、動けよ白式イイ!?!」

パワーアシストも無い故に、今の一夏は鋼鉄の重りを体中に付けている様な物だ。それでも必死に体を動かそうとするが怪我の痛みもあり遅々として進まない。その間にも無人機は鈴に迫っている。

「くっ、させない、よ!?!」

そんな無人機の前と同じくまともに身動きが出来ないシャルロットが現れた。パワーアシスト無しで無理やり機体を動かしたのだ。その為に動きはやはり鈍く、そして息も荒い。それでも彼女は鈴の前に出る。

「馬鹿……っ、何やってんのよ!? 早く逃げなさい!」

「あはは。だけど何もしないわけにもね」

鈴が驚きシャルロットに叫ぶが、シャルロットは苦笑するのみだ。その笑顔を見て一夏の顔から更に血の気が抜けていく。前に出たは良いが彼女にも策は無いのだ。

「シャルロット!?!」

「シャルロットちゃん!」

ラウラが、楯無が叫び同じくパワーアシスト無しで無理やり動かしそちらへ行くこうとするが、その前に無人機が立ちはだかる。

「くそおお!! 動け、動いてくれよ白式!?! 何で、何でなんだよ!?!」

一夏の目の前で、無人機達はその武器を振り上げる。鈴とその前に立つシャルロット。そちらへ向かおうとするラウラと楯無。それぞれに対し、その凶器を振り上げる。そしてまずは鈴とシャルロットだとばかりに周囲を睥睨してその無機質な眼を光らせた。

「やめろおおおおおおおおおお!?!」

一夏の声は届かず。シャルロット達の前に立つ無人機がその刃を振り下ろした。その次に訪れるであろう光景に一夏の心が絶望で塗りつぶされる。

だが、次に聞こえてきたのは鋭利な刃が人を切り裂く音でなく。硬質な反響音だった。

「……………え?」

その光景に一夏は思わず声を漏らす。それは鈴も、シャルロットもセシリアも筈も同じだった。だが楯無と簪は苦い物を噛みしめた様な顔をしており、そしてラウラも驚きながらもどこか理解した様な表情を浮かべていた。

「せい……………じっ!」

シャルロットが震えた声を漏らす。それは目の前の光景が理解できないからだろう。だがそれを責める者は居ない。それほどまでに異常な光景だったからだ。

川村静司がシャルロット達の前に立ち、左腕で無人機のブレードを受け止めている。その光景が。

これはきつと茶番なのだろう。静司はどこか冷めた気持ちでようやく理解した。

自分の居場所を知っていながらも秘密裏に襲わず態々アリーナへ放った事。まるで何かを待つ様に手加減を加えていた無人機。シャルロット達が来た途端に停止したIS達。それら全てはお膳立てされたのだ。他でも無い、篠ノ之束によって。

身を隠す事すら叶わず。一夏達の目の前で一時的に戦力を封じられて危機感を煽り、そしてトドメとばかりに致命的な行動を起こす。それら全ての目的はきつと自分の正体を見極める為。それは筈が先ほど叫んでいた『準備』や『役者』という言葉から予想が付いた。

ただ自分の正体を知りたいだけなら、ピット内で襲うだけで良かった。だがそれをせず、態々一夏達という観客が居る場所まで連れて来たのは一夏達にも見せつける為だろう。今まで隠してきた、川村静司の秘密を。そして今それは明かされようとしている。それもまたもや皆を巻き込むと言う最悪な形でだ。

これはツケなのかもしれない。自分がもつと一夏達を信頼していれば。千冬達を信用して、自分の秘密を少しでも明かしていれば。事情や状況を少しでも話していれば。協力を仰げたかもしれない。正体を隠す事に協力してくれたかもしれない。自分が束に眼を付けられている事も相談できたかもしれない。

だが自分は——自分達はそれをしなかった。任務と言う事もある。織斑千冬と篠ノ之束の関係を疑っていたという事もある。明かす事で彼女らをトラブルに巻き込む可能性があったと言う事もある。だがそれは結局言い訳だ。何せ、結局明かさなくても巻き込んでいるのだから。

怖かったのかもしれない。もし全ての事実を語るとなれば自分達が今までしてきた事もいずれ話す時が来る。そしてその中には当然人を殺した経験も含まれる。その事実を語る事で、一夏達から恐れられる事を恐れいたのかもしれない。

一夏達を護る。学園を護る。そんな使命感に溺れて、一夏達を信用はしても信頼はしていなかったかもしれない。護ってやってるなどとは思った事は無いが同じような事だ。無意識のうちに自分達を上に見ていたのかもしれない。そうして信頼せず、けれどもその日常には縋ってミスを繰り返し、そして遂に取り返しつかないレベルまで来た。

ここで正体を明かせば篠ノ之束に正体は知られる。そうなればきっと自分はもう学園には居られない。事実を知ったあの女が何もしないとは思えないのだから。心地よく感じ、いつの間にか縋っていた何気ない日常は、結局自分達のエゴによって崩れ去る。

もう、この学園には居られない。その事実が静司の心を空虚にしていく。一夏達と馬鹿な事で笑い合い、鈴や箒、セシリア達の起こす騒動に悪ノリし、ラウラの勘違いに驚かされ、本音やシャルロット達と何気ないながらも安らかな時を過ごす事もはやない。

結局、こんな風に仲間と呼ぶべき人々を信じきれない様な男が学園生活など不可能だったのだ。もとよりイレギュラー中のイレギュラー。表舞台に出るべきでは無かった。

ああ、だからこそ。

例え失う事となろうとも、彼らの日常だけは今度こそ護りきる。異分子は異分子通しで叩きあえばいい。それで少しでも一夏達に安寧とした日々が戻るなら、自分はそれをやり遂げるのみ。もう、それしかない。

「せい……………じっ？」

「……………悪い」

背後から聞こえるシャルロットの声。それに対して返した言葉は今まで黙っていた事への謝罪か。それともここからいなくなる事の謝罪か。

そして静司は告げる。学園生活を終わらせる決定的な一言を。あれほど縋っていたものを失う、その言葉を。

「黒翼——」

71. おちてゆく

目の前の画面に表示される情報。部下から随時送られてくる報告。それらを確認しつつ、課長は口元の火のついていない煙草を噛み潰した。

「……状況は？」

問いに答えるのは近くに居たオペレーター。彼女は額から汗を流しつつ小さく首を振った。

「更識楯無達の突入の際に発生した水蒸気——おそらく彼女のISの武装による物でしょうが、それがアリーナ内に流れ込んでおり詳しくは不明です。ですが」

「構わない。言ってくれ」

「……ですが、黒翼の起動信号は確認しました。確証はありませんが、状況からしておそらくblade9は……」

「知られた、か」

その言葉にオペレーターは小さく頷く。ピットで待機していた静司がアリーナに放り出されたところまでは確認している。問題はその後だが、黒翼を起動したという事はかなり危険な状況だと言う事だろう。そしてそれはもはやこちらと同じだ。

静司の正体がバレたかどうかはまだ判断つかない。だがその可能性は極めて高く、それならばこちらも動かなければなら無い。

「……各員に通達。現時刻をもって、ここ、技術開発部門試験2部を閉鎖する。全回線段階的に遮断。レベル3以上のデータの持ち出し他は全て消去しろ。ISは全て置いていく。開発中の兵装は持ち出せるものだけ持ち出せ。残りは表に回すか完全に破壊しろ。撤収準備だ急げ！」

その言葉を皮切りに一気に周りが騒がしくなった。もしもの時の対応、それは自分達EXISTがK・アドヴァンスから関係を断つことである事は誰もが理解している。そして今日、それが起きたと言う事だ。そしてそれはISを失う事も意味する。

EXISTが使用しているISは黒翼を除けば表向きはK・アド

ヴァンス社が所有しているものだ。疑いが掛かれば当然その所在は調査されてしまう。もしその時にISを公開できなければ、更にK・アドヴァンスの立場が悪くなる。

「尤も、どこまで誤魔化せるか……」

「そうですね。いくら私たちが関係を断とうとも、B9の事が世に知られれば間違いなくK・アドヴァンスは疑われるでしょう」

「そうだな。だがだからといって証拠をそのまま残してやる必要はない。少しでも時間を稼げればそれでいい。後は由香里や桐生が交渉なりなんなりする」

「その交渉が決裂した場合は？」

「倒産、で済めばいいがISを隠し持っていた事になるんだ。下手すりゃ上層部は根こそぎ刑務所行きだな。むしろ刑務所で済めばいいが……」

「何も知らない社員には申し訳ありませんね」

「承知の上だ。悪いとは思いますが今更取ってつけた様な謝罪をする暇は無い。それよりも——」

不意に大きな衝撃が課長達を襲った。轟音と共にもたらされたそれに急ぎ走りまわっていた者達が思わずバランスを崩し、書類や機器が衝撃で落ちていく。

「っ、何事だ！」

「しゅ、襲撃！ 本社上空に機影！ これは……先日現れた戦艦型——レギオン！」

「亡国機業か……っ」
やられた。

学園にばかり目が行き、またしても同じ過ちを犯してしまった。無論、先日の襲撃以降警戒はしていた。警戒レベルは上がり、備えはしていたが今はタイミングが最悪だった。

「迎撃は!?」

「警備部が出勤していますが……駄目です、間に合いません！」

「くそっ、全員撤退！ 残ったデータは全て破棄しろ！ blade ナンバーは——」

その言葉を言い終えるよりも先に、更なる衝撃が彼らを襲った。

眼下に映る火を上げるビルとそこから逃げ出す人々。それを冷めた目で見つめながらシェーリは隣に視線を移した。

「レギオン。そろそろ迎撃が入るかと思われます。あと数度の砲撃の後撤退しますよ」

『りようかい。だけど、いい？ まだ、ぜんめつ、させて、ない』

「別に虐殺が目的ではありませんから。川村静司の所属する組織。それさえ潰せば任務は終了です」

シェーリの言う通り、レギオンが攻撃を仕掛けたのはK・アドヴァンス社の敷地内でも主に研究、開発を行っている棟が中心だ。勿論やろうと思えば根こそぎ破壊する事は可能なのだがそうになると時間がかかるし、K・アドヴァンス全戦力との真っ向勝負になる。負けるとは思っていないが、簡単な相手だとも思わない。そして戦いが長引けば増援が来る可能性もある。万が一の事を考えれば、最低限の目的だけ達成できればそれでよいと言う事だ。

「組織として活動不能なレベルまで追い込めば『今は』構いません。ISも奪っていききたい所ですがこの組織は得体がしれませんからね」

そう言い前回の襲撃の事を思い出す。前回の襲撃の際は色々驚かされた。そして当然ながらそれが全てでは無いだろう。前回の襲撃以降、あちらとして守りは強化している筈。今でこそ奇襲で先手を撃っているが長時間の戦闘は避けたい。

「ですがそうですね。先日の意趣返し位はしておきましょう」

丁度眼下では警備用のISらしき機体がこちらに向かってきている。それを見てシェーリは口元を吊り上げた。そして己のIS、ブラッディ・ブラッディの武装である棺桶《主無き棺桶ヴァカント・コフィン》を向ける。それに合わせる様にレギオンもその砲台の全てを眼下の施設に向けた。

「虐殺が目的ではありません。しかし……別に殺人を止められている訳ではありません」

刹那、レギオンの砲撃に合わせてシェーリはブラッディ・ブラッディを迎撃機に向けて一気に急降下させた。

それから数十分後。

既に戦闘空域から離脱したシェーリとレギオンは遙か上空を飛翔していた。

「こちらは終わりました」

『ご苦労様。学園の方も中々面白い事になってるわよお』

「と、いいますと?」

通信の相手は主であるカテーナだ。そしてカテーナからの報告にシェーリは成程と頷く。

「学園周辺全てのＩＳが機能停止ですか。これはつまり……」

『そうよお。篠ノ之束の仕業よねえ。そしてこれで鈍い人でもおぼろげながらも気づくでしょうねえ。篠ノ之束がＩＳの全てを握っている事を』

ここまで表立ったＩＳに対する干渉。それも篠ノ之束との関係性が高いと言う事が銀の福音事件で知られている無人機とセットで起きた事態。これだけ条件が揃えば気づく者は気づくだろう。ＩＳは篠ノ之束の掌の上だと言う事に。

『そしてそうになると、もう一つの可能性に気づくわ。ねえシェーリ、そもそもＩＳってなんだと思う?』

「何と言いますとその存在の中身と言う事でしょうか?」

『違うわ。そもそもＩＳの存在意義。目的。役目……。そういったものよ。私はね、これまでの情報から一つの結論を得たわ』

うふ、と通信越しのカテーナが笑う。

『ＩＳはね、世界征服の為のツール小道具なのよ』

『……少々それは話が大きすぎるのでは?』

『そう? 限られた数しか存在しない、現行兵器を上回る兵器。それを世界中でただ一人だけが生かすも殺すも自由に出来る。しかし人々がその可能性に気づくころにはその兵器は世界中、それも強けれ

ば強い国ほどに多く、そして強力な兵器として存在してしまった。後は博士の気分次第でいつでも世界征服できるわよねえ？　だってその兵器全てを奪えばいいんだから』

画期的な発明だと。強力な武器だと。世界中が求め、扱い、そして浸透していた物。だがそれは唯の便利で強力な武器でなく、自分達を追い詰める要素を持った種だった。

『もちろん、博士の目的が本当に世界征服なのか。それともそれすら目的の為の過程なのかは不明よ。だけど少なくとも篠ノ之東は今すぐにも世界征服が出来る事だけは確かかねえ』

だけど、とカテーナは続ける。

『これが事実ならとても面白い事になるわねえ。今頃私達の上の人達も喜んでるんじゃないかしら？　だから早く戻ってらっしゃい。これから忙しくなるわよお』

「了解いたしました」

シエーリは頷くと速度を上げた。そしてふと自分が今まで持っていた物に視線を移す。

「そういえばずっと持ってきてしまいましたでしたが、中身は不要でしたね」

そう言うとシエーリは今まで持っていた物——迎撃に出ていたK・アドヴァンスのボロボロになったISを持ち上げると、搭乗者の首を掴み上げた。

「き、さ……まら……」

「まだ息がありましたか。まあどうでも良い事です」

そして無造作にその体を引きずり出す。既に限界に来ていた搭乗者は反抗も出来ず、強引に機体から引きはがされた。

「では、さようなら」

必要なのはISだけ。不要なゴミは必要ない。

シエーリは引きはがした搭乗者をそのまま空に捨てる。搭乗者は言葉も発する事も出来ないまま、遙か地上へと落下して行った。

目の前の光景が信じられなかった。

今、己の目前で起きている出来事にシャルロットはただただ呆然とするしかなかった。それは一夏達も同じで誰もが呆然とその光景を見ていた。

寸前の所でシャルロットの前に立ち攻撃を防いだ少年。彼の事は皆知っている。いや、知っていた筈だった。つい先程までは。

だが、今は分からない。

何故、彼は攻撃を防ぐ事が出来たのか。

そして何故、彼の身が光に包まれているのか。

その光は知っている。自分達にも馴染みがある物だ。何故ならそれは、ISが待機状態から量子変換される時の光と同じだったからだ。だからからこそ分からない。何故それが今、静司の体を包んでいるのか。そして何故その光が収まった後に現れたその姿が——
——黒い翼を持ったあのISなのか。

全身を覆う漆黒の装甲と時折流れる紅の光のライン。両手両足は大きくそして鋭い鉤爪が鈍く光を照らしている。背後には尻尾の様なものが生えておりどこか生物を思わせる造形。そして何より目立つのが漆黒の双翼。

このISをシャルロットは知っている。知ら無い筈が無い。

かつて、クラス対抗戦に現れたというIS。そして学園の地下で襲われた自分を、傷つきながらも助け出してくれた恩人のIS。臨海学校でも銀の福音相手に戦ってくれたIS。そして先日、何故か自分を攻撃してきたIS。その名は黒翼。それが今、目の前に居る。そしてそれを扱っているのは——

「う……そ……」

「そんな……」

「馬鹿な……」

鈴もセシリアも箒もその光景が信じられず呆然としている。一夏に至っては言葉も出ないのか大きく見開いた目でそれを凝視する事しか出来ていない。

「静司……なの……？ 静司だったの……？」

それは愚かな問いだ。答えはたった今、目の前で明かされたでは無

いか。だがしかし、あまりにも非現実的で、あまりにも荒唐無稽なそんな事実を受け入れられない。理解が出来ない。

だからシャルロットは手を伸ばした。震える手で、この黒いISSの腕を掴みそして聞きたい。『どうして?』と。

だがそれより早く黒翼は動いた。自身の正面。刃を叩き付けた状態のままの無人機を睨み、そして力任せに左腕を振り上げた。強引なその動きに無人機のバランスが崩れる。その胴体目掛けて何の躊躇も無く、引き戻した左腕と右腕を突き出す。

ぐしゃり、と。機械が引き裂かれる音と共にその両腕の鋭利な爪が無人機を貫いた。ビクン、と大きく震えた無人機だが、まだ動けるのかぎこちない動きでその腕の砲口を黒翼に向けようとして、

「死ね」

背後に居たシャルロットがぞつ、と身を震わせる程の冷たい声色。今までとは違って機械で加工されていない状態で聞いた黒翼の言葉。それは良く知っている人の声の筈なのに、どこまでも遠く聞こえた。

そして黒翼はそのまま無人機を貫いていた両腕を左右に押し開いた。先ほど以上に鈍い音と共に無人機が中央から惨たらしく引き裂かれる。強引な力で行われたそれによって周囲に部品とオイルが撒き散らされていく。そしてまるで返り血の様にオイルを浴びた黒翼はそれすら意に介さず地面を大きく蹴った。

地面を砕きながら踏み込んだ黒翼は宙で前転する様に体を回転させ、その勢いのままウラに迫っていた無人機の頭部へ踵落しを叩きこむ。頭部が砕かれよろけた無人機の横に着地した黒翼は左腕を振り上げそこにあるガトリングガンを発射。楯無に迫っていた無人機へと銃弾の嵐を叩きこんだ。

『……………』

だがその攻撃は無人機の前に展開されたバリアによって阻まれた。更には頭部を潰された無人機が起きあがりその砲口を黒翼に向け、発射。至近距離から銃撃を受けた黒翼は衝撃で宙に吹き飛ばされた。

更に、宙に飛ばされた黒翼に追い打ちをかける様にシールドを展開していた無人機も砲撃を浴びせるべくその砲口を黒翼に向ける。

「な、め、るなガラクタがああああああああああ！」

静司が普段からは想像もつかない憎悪と怒りを込めた叫びを発し、そして黒翼の翼が左右に大きく開かれる。その翼に灯るのは6つの光。そしてそれは破壊の光となって無人機に襲い掛かった。閃光と爆発。その凄まじさに身動きが碌に取れないシャルロット達が目を覆う。

だが無人機は違った。再度正面にバリアを展開しそれを防ぎ切ると、黒翼を追う様に飛び上がっていく。既に一夏達の事など眼中にならない様に。

取り残されたシャルロット達はただ呆然と空に昇っていくIS達を見ている事しか出来なかった。

「なんで……一体どうなってるんだよ!？」

「一夏……」

「何で、何で静司があんなのに乗ってる!？」

「わかりませんわ……。それに何故あの機体だけ動くことが……」

セシリアの疑問は尤もだ。今現在ここに居る機体全ては機能停止している。それが誰の手による物かは別として何故静司だけが、黒翼だけが普通に動けるのか？

「それに……」

セシリアが見上げた先、先ほど楯無達がアリーナ内に進入した際に雪崩れ込んだ水蒸気を突き抜けて、空へと上がった3機のIS。それは今空中で激闘を繰り広げている。

黒翼が翼から光を放ち無人機がそれを防ぐ。無人機が放つ熱線を黒翼が紙一重で躲し、接近戦を仕掛けてきた無人機相手には己が鉤爪で迎え撃ちそして蹴りを叩きこむ。

一撃一撃、その全てが致命打となる攻防を繰り広げるISの姿は今までの川村静司の印象とはかけ離れている。

「あれが本当の……静司?」

呻くような鈴の声。それに応えるものは誰も居ない。そんな戸惑いの視線の先では、新たな無人機が黒翼に迫ってきていた。

「束……これで満足なのか」

千冬は視線の先で繰り広げられる黒翼と無人機達の戦いを見つめながら一人呟く事しかできなかつた。彼女の搭乗していた打鉄も今は機能停止して今は第三アリーナの天井に墜落する様な形で膝をついている。

視線を横にずらせば少し遠くに同じように墜落したIS委員会の機体たちが見える。彼女らも突然の事態に戸惑っているようであった。それもそうだろう。突然機体が動かなくなっただけでなく、相手をしていた無人機達が急に自分達に関心を捨てて黒翼目掛けて飛んで行ったのだから。

「川村静司」

直接その瞬間を見た訳では無い。だがアリーナ内の情報を真耶から逐一受け取っていた千冬はあの機体の中が川村静司である事を理解していた。何故なら天井の淵から覗いたアリーナ内部。そこに一夏達の姿はあれど、川村静司の姿だけは消えていたのだから。

そしてその川村静司と思わしきISはIS学園の上空で激闘を繰り広げている。彼に迫る無人機は7機。当初は10機居たが、1機は千冬によって。別の1機は委員会の機体によって。そして残る1機は川村静司によって既に破壊されている。それでも彼が不利な事は間違いない。

だがそんな事もお構いなしに、上空の黒翼はその暴力的なまでの力を振るっている。たった今もまた、その鋭い爪が無人機を捕らえ、切り裂いた。これで残り6機。

無人機が弱い訳では無い。だからと言って黒翼が圧倒的に強いという訳でも無い。むしろ押され気味とも言っている。しかしその最中、黒翼は機体や搭乗者に無理がかかる程の機動と速度で無人機へと襲い掛かっている。それは普段の川村静司という少年の印象からはかけ離れた、まるで狂った猛獣のそれだ。だがその姿はどこか自暴自棄になっている様にも見えた。

「何故……気づけなかつたっ！」

今までの事を考えれば考える程苛立ちが募る。何度も現れていたのに。何故今まで気づくことが出来なかったのか。そしてなぜ彼は隠そうとしていたのか。目的は一体何なのか。

「お前は一体、何者なんだ……？」

一度は正体を見極めようと最低な行動までしたと言うのに。事実を知った今、千冬の心にあるのは喜びや安堵ではなく、更なる疑問ばかりであった。

頭が痛い。気持ちが悪い。かきむしりたくなるほど熱く、渴いた喉。だがそんなものはどうでもよかった。

異常なまでの頭痛も吐き気もどうでもいい。体の奥からあふれ出てくる破壊衝動。昏い感情。それら全てを原動力に静司は黒翼の力を振るう。

視界の端には赤い警告と共にVTシステムの文字。システムによって扱られる精神。以前はそれで暴走した。しかし今はそれすら力に変えてただ我武者羅に力を振るう。制御したわけでは無い。掌握した訳でも無い。システムの支配すら上回る程の感情がそれを成していた。

それは怒り。この世界に存在するたった一人に向けられた狂おしいほどの怒りがシステムの支配すら上回り静司と黒翼を突き動かす。そしてその力の矛はその怒りの対象が作った人形達に向けられていた。

「っ！」

言葉になら無い絶叫を上げて静司は無人機に突っ込み左腕を振るう。無人機は腕のブレードでそれを受け止めるが、出力に勝る黒翼に押されていく。だがその隙に残る無人機が黒翼目掛けて熱線を放つ。閃光と爆発。その威力は黒翼にダメージを与えるに十分な量の筈であった。

だが爆発の煙の中から現れたのは無人機を串刺しにし、それを楯として直撃を防いだ黒翼の姿。無傷とはいかないがその機体は無事だ。

「こんなものご……」

こんなものの仲間に自分は姉達を殺されたのか。こんなもののでいで、自分は捨てる事になったのか。

その怒りが黒翼を突き動かす。串刺しにした無人機を捨てると両翼を広げ、その翼からの砲撃《R/Lブラスト》を放つ。無人機達は件の円盤状の装置からバリアを発生させそれを防ぐが、動きが止まった。その一瞬の隙に静司は瞬時加速を発動。そのバリアにぶつかると同時に左腕を振るう。だが速度と威力を持ったそれでもバリアは破られる事は無かった。そしてそのバリアの向こうで無人機達が再度その砲口を向ける。

「く、だ、け、ろおおおおおおお！」

バリアと接触していた鉤爪が合わさり槍の様な形状へと変わる。赤と黒の混じった光が収束し、歪な音を立てはじめる。そして静司がその武装《クエイク・アンカー》を撃つのと無人機達が熱線を放つのは同時だった。

黒翼の左腕の鉤爪。そこから放たれた破壊の波動がバリアを突き破り無人機達を襲い、同時に無人機達が放った熱線が黒翼を貫く。空にまるで波紋の様に光が広がり、そしてそれを追う様にして大きな閃光が撒き散らされた。その衝撃は地上にまで到り、アリーナの外壁や学園の敷地にも衝撃が吹き荒れる。

そしてそれを起こしたIS達が一つ、また一つと墜落していく。落ちたのは3機。そして残りの2機と黒翼は空中に留まったままだがその姿は満身創痍だった。

いくつかの装甲が剥がれ、1機は腕と足を失っている無人機と、機体の各所から火と煙を撒き散らし、装甲は碎け、その隙間から血を流す黒翼。

残りは2機。対して機体とそして体も満身創痍の静司。更にはエネルギーももはや乏しい。だがそんなものは関係ない。そう、関係ないのだ。

ゆらり、と黒翼を揺らすと気のせいかな無人機が引いた様に見えた。その姿に静司は怒りを覚える。

「っ!？」

不意に無人機が、その先に居る人物が言葉を発した。その言葉に静司の動きが止まる。そして不意に無人機から力が抜け落下していく。落下した無人機はアリーナの天井へと落ちると起きあがる事無くその動きを止めた。

「……………」

静司もまたその隣へとゆっくりと降りていく。そして見下ろしていた無人機から小さく声が発せられた。

それは短い一言。そしてそれを終わると同時に、無人機は光に包まれそして大きく膨れ上がる。

「っ、逃げる、川村!」

同じくアリーナの天井に居た千冬が叫ぶがそれも間に合わず、無人機は轟音と共に自爆した。

全身を襲う浮遊感。不思議と痛みは感じず、静司は流されるがままに爆風に身を委ねていた。

無人機の爆発は大きく、静司が立っていた天井の外壁を破壊する程だった。足場を奪われた静司はそのまま落下し、そしてアリーナ内部のピットの一つへと落ちた。

酷い状態だと自分でも分かる。ボロボロの機体。流れる血。そして怒りと空虚が混じった心。それらが一挙に押し寄せてきてくる。

「せーじ!？」

不意に声がした。見れば自分が落ちたピット内部に本音の姿があった。何故こんな所に? と思ったが直ぐに納得がいった。元々彼女は更識姉妹の専属整備士として今回のタッグマッチに登録していた。ならばあの姉妹がピットからアリーナへ突入する寸前まで近くにいた可能性は高い。そしてその後はアリーナ内部がロックされてしまった為に出られずにいたのだろう。つまりここは更識姉妹やラウラ達が侵入してきたピットなのだろう。後ろを見れば彼女達が

開けた穴が直ぐ傍にあった。

「い、いま助けるから」

彼女は泣きそうな顔をしながらこちらに駆け寄ってくる。普段ののんびりとした雰囲気からはかけ離れたその姿が心が痛む。一夏達と同じ……いや、それ以上に自分の学園生活の象徴とも言えた少女。きつと、自分にとって大切な人。

「ほ……………」

震えながら手を伸ばす。もう一度、やり直せないかと。今度こそ上手くやれないかと。まるで縋り救いを求めるようにして。本音もそれに気づいたのかこちらに手を伸ばそうとして、

静司の足下が、崩れた。

「せーじ!?!」

きつと先の戦いの衝撃と自爆の衝撃。そして黒翼の落下のせいであろう。限界が来たピットの床は楯無達が開けた穴から広がる様にして崩れていく。そして支える物を失った黒翼もまた、それに合わせて転げ落ちていく。

ああ、やはり駄目のか。

まるでそれは彼女に縋ろうとした自分を責めている様で。お前にはもう無理だと。今更何をしようとしているのかと言われている様で。もう全て諦めろと言われた様で。静司はそこで今度こそ、全てを諦めた。

落下していく最中、淵から手が伸ばし叫ぶ本音の姿が見える。彼女は崩落には巻き込まれなかった様だ。それだけは良かった、と小さく安堵して静司は意識を手放した。

ただ見ているしかなかった。それが何よりも己の無力さを感じさせ、千冬は己の拳を握りしめる。

戦いは終わった。しかしちっとも状況が好転した気にはなら無い。むしろそれ以上の問題が山積みだからだ。

『———か!? 織斑———生! 織斑先生! 聞こえますか!?!』

「っ、山田先生か!？」

不意に聞こえたのは真耶の声。今の今まで I S は完全に機能停止し、通信すら不可能だった筈だった。だが通信が出来ると言う事は？『良かった、やっとながりました！ 織斑先生、I S がやっとな！』

「ああ、動く……!？」

見れば I S が起動し始めている。徐々に出力を上げ通常出力まであと数秒とかからない。

だがそこで千冬ははたと気づいた。自分達が動き始めたと言う事は I S 委員会の機体もまたその筈だ。そして彼女らが動き始めればする事はまず最初は――

アリーナへと視線を移す。アリーナ内部では動きを完全に止めた黒翼が倒れており、そしてその傍に一夏達が駆け寄ろうとしている。時間は無い。

(どうする……!?! 私……私はっ!)

様々な物が千冬の脳裏を駆け巡る。委員会に言われた事。自分がした事。一夏の顔。束の顔。川村静司の顔。生徒達の顔。立場、しがらみ、感情、疑問。それらの奔流に頭が割れそうになりながらも考え、そして決めた。

「……山田先生。今どこに居ますか？」

『私は観測室です。出る前にロックされた上に I S も使えなかったの
で――』

「なら今すぐアリーナにありつたけの弾丸を撃ちこんでください」

『なっ!?! まだ織斑君達が居るんですよ!?! それにあの黒い I S は――』

「一夏達は何かかします。だから急いでください、時間が無い」

『ですが――』

「いいですか、山田先生。出来るだけ派手をお願いします」

『――っ!?! わ、わかりました!?!』

こちらの言葉に何か気づいたのか、真耶が了承する。それを確認するが否や、千冬はアリーナ内部へと侵入し、直ぐに一夏達の下へと降り立った。

「千冬姉!?! せ、静司が!」

「静司、静司!?! しっかりして!?!」

「ちよつと静司! アンタ返事しなさいよ!?!」

一夏達は落下した黒翼の近くで必死に叫んでいる。その姿に苦い物を感じつつ千冬は出来る限り冷静に、そして冷たく告げる。

「ここは危険だ。逃げるぞ」

「危険!?! まだ敵がいるのか!?! じゃあ静司も——」

「いいや、お前達だけだ」

「なっ!?!」

その言葉に一夏達が信じられないと言った様子で千冬を見る。しかし千冬はあくまで冷静かつ冷酷に続けた。

「逃げ。これは命令だ」

「何を、何を言っただよ千冬姉!?!」

「言う事を聞け!」

「聞けるかよ!?!」

「……そうか」

一瞬だった。千冬は一夏を白式ごと掴み上げると地面に叩き付けた。

「がっ!?!」

驚き、反抗も出来ないまま一夏が声を漏らす。そんな一夏を抱える様にして千冬は他の面々にも告げる。

「逃げ! 時間が無い。………川村の事は任せろ」

「時間って……あれは!?!」

そこで鈴が気づく。破壊されたアリーナの天井付近。そこに武器を構えた真耶が居る事に。

「ちっ、早くしろ! ラウラ! この馬鹿者はお前が連れて行け!

楯無! 他の連中を頼む!」

「きよ、教官……」

鬼気迫る千冬の声に鈴達が震える中、ラウラが不安そうに問う。

「信じて……良いのですか?」

「……私にももうわからん」

答えられたのは我ながら情けない言葉だった。しかしラウラは小さく頭を下げると未だに暴れる一夏を掴み上げた。

「私達も行くわよ、シャルロットちゃん！」

「けど静司が!?! 静司!..」

黒翼の傍から離れようとしないうシャルロットは楯無が引っ張り、鈴やセシリア、箒達も簪に引っ張られる様にして離脱していく。

「やっと行ったか……。頼む、山田先生」

『……はい』

直後、実戦用に換装された真耶の駆るラファール・リヴァイヴがあらりったけの弾薬をアリーナへと叩き込み、黒翼もろともアリーナは炎に包まれていくのだった。

7.2. 彼女の理由

仲良くなった理由は良く覚えていない。お互いに他者と比べて秀でていたからか。たまたま話が合ったからか。それとも他の何かか。記憶力は自信ある筈なのにその理由だけは思い出せない。つまりはそれほど自然に、気が付いたらそんな関係になっていたのだ。

人より遥かに優れた頭脳を持つ自分と、人より遥かに優れた運動神経を持っていた彼女。万能だと思っていた自分にも出来ない事をする彼女。だから自分は憧れた。そして同時に感じたのだ。私と彼女が居れば何でも出来る。

だがそんな想いは簡単に崩れ去った。

「何で……泣いてるの？」

いつもの様に学校へ行き、退屈な授業を聞き流しそして帰宅した後。事もはや日課となったその友人との戯れの為に彼女の家に向かったが、そこにあっただのは予想外の光景だった。

玄関、電気を付けておらず少し薄暗いそこで彼女は立ちつくし、そして普段は全く崩れることの無いその凛々しい顔を歪め、涙を流しながらこう告げた。

「父さんと母さんが……居なくなっただ」

そうして泣き、崩れ落ちる彼女の姿はどこにでもいる少女に見えた。それが許せなかった。彼女にそんな顔をさせた、その彼女の両親たちが許せなかった。

だから探した。ありとあらゆるものを使って、自分の力を駆使して。簡単な作業だ。日本中の交通機関にアクセスし、ありとあらゆる監視カメラ、入退場記録。カードの使用履歴……。他にもありとあらゆる方法を駆使して捜索した。もし見つけたら理由を問いただし、そして彼女に謝らせてやると思いつながら。

だが見つからなかった。どれだけ探しても彼女の両親の足取りは分からず、まるでそんな人物は最初から居なかったかの様に遂にはその行方は自分をもってしても分からなくなったのだ。その現実には自分は初めて無力を感じ、そして失望した。己の無力さに。そして彼

女と彼女の弟を苦しめる現実に。

思えばそれが始まりだった。思い通りにならぬ世界。彼女を泣かせた世界。彼女と彼女の弟を苦しめる世界。それを変えたいと願ったのは。

家族に対する見方が変わったのもその頃だった。特に『親』と言う存在に対し懐疑的になったのは確実であり、その理由は言うまでもない。そうした観点から改めて自分の『親』という存在を見ると成程、今まで気づいていなかった、否、気づこうともしていなかった事実に気づく。常人より遙かに、異常とも言える程優れた頭脳を持っていた自分に対し、『親』は戸惑っている様だった。だがそれでも『親』達は自分を疎んでいる訳では無いらしい。ただ持て余して距離感が掴めていないだけ。だがそれでいいと思う。別段恨みは無いが、熱く語れるような恩義も無い。ならばそのままでもいいじゃないか。

だが妹は別だ。何の疑いもなく、打算も裏もなく自分を慕ってくれた妹。そのキラキラとした瞳で見上げられるのは気分が良い。それに可愛いとも思う。彼女や彼女の弟以外の誰もが自分を畏怖している中でも慕ってくれた妹。ああ、とても可愛くそして嬉しく思う。だから妹も『大切なもの』の中の一つになった。

そう、『大切なもの』。何よりも優先されるもの。それらが今の自分の全てであり、そして始まりの理由。それ以外は――

「束さま」

「んー？」

呼びかけられ思考の海から浮き上がると、こちらを不思議そうに見つめている銀髪の少女が目に入った。少女はトレイに乗せた紅茶を手に首を傾げている。

「どうかなされたのですか？」

「いんや、問題ないよーちゃん。ちょーと束さん昔の事を思い出してただけだからね」

束さんにも色々あつたんだよー？ と笑いながら紅茶を受け取り

喉に流し込む。うん、何故か非常に苦いがこれはこれで味があるというものだ。

そんな束の様子を見ていた少女は不思議そうに首を傾げていた。

「そういえば、お聞きしたいことがあったのですが」

「ん、何かな？ 今日気温かな？ ISの秘密？ 宇宙人の所在？」

UMAは居るか否か？ どれでも答えられるけど何がいいかな？」

「何故、あの男に止めを刺さなかったのでしょうか？」

少女の質問に束はピクリと動きを止めた。

「あの時、川村静司を殺すことが出来た筈です。なのに何故見逃したのかわからないのです」

「ふむ。まあやっぱり気になっちゃたかー。くーちゃんは意外に鋭いね！」

賞品としてこれをあげよう！ とポケットから飴の包みを取り出すと少女へと放る。

「ありがとうございます。それでもしよろしければ理由を教えてくださいるのでしようか？」

「うーん、そうだねえ。ちよつと気になったからかなー」

「？ どういうことでしょうか？」

「うんうん。まああの黒い奴の中身があつたのは素直に驚きだったよ。ある程度予想はしていたけどいざ実物となるとやっぱりね」

「ですがそれが理由ではないのでしょうか？」

少女の問いに束はクスリ、と笑った。

「そうだね。気になったのは別のとき。あの奇妙なISについては後からでも調べられる。けどあの男が何で私の事をあそこまでポロカスに言ってくる理由がわからなかったからかな？」

あの黒いISと川村静司は以前も、そして今回もこちらに対して凄まじいまでの憎悪を持って襲い掛かってきた。だがその理由が分からない。少なくとも自分は川村静司という存在など、つい最近まで知らなかったのだから。

だが分からない事をそのままにしておくなんて事は自分には出来

ない。

「まあああいう輩が今まで居なかった訳じゃないけどね」

ISが世界に発表されてから世界は大きく変わった。そしてその変化についていけず取り残された者。変わった世界に淘汰された者達からの取るに足らない呪詛の言葉等は束は気にしない。だが川村静司は別だ。あらゆる意味で自分の予想からかけ離れていた異質な存在。彼がそうなった理由がそこにあるのならそれに興味を持つのは当然だ。

そして理由はもう一つある。ある意味こちらの方が重要かもしれない、大事な理由。

「あのISはV計画の事を知っていた節がある。その辺りいい加減スツキリさせないとね」

「束さま?」

小さく呟いたその言葉は少女には伝わらなかったようだ。だがそれでいい。束はにっこりと笑顔を浮かべると少女に向き直った。

「と、いうことでくーちゃん、お出かけの準備をしよう」

「お出かけ?」

「そうだよっ! さあナイフとランプを鞆に詰め込もうか? ああだけどそれだけじゃとても旅立ち何て出来ないよね! ということでお財布とお土産持参でレッツ外出!」

何やらハイテンションで事を進める束に少女は小さく頷いた。少女にとって今の束は絶対であり反対する理由は無いからだ。

「それでどこにいくのでしょうか?」

「ん! それはね」

そこで少女へ振り返った束は深く、深く笑みを浮かべながら告げる。

「このいけ好かないクソガキの所だよ。大丈夫、アポは取ってるから」

『全ては仕方の無かった事、と言いたいのかな?』

「はっ」

うす暗い室内。そこに映し出された者達と向かい合いながら千冬は静かに頷いた。彼女が今相手にしているのはI S委員会の面々。そして今話し合われているのは先日 of 事件の事である。

「あの黒いI Sがアリーナ内部へ墜落した後、機能停止したと思われる襲撃機体が再起動しました。これ以上は危険と判断し私が破壊を指示しましたがそれに問題が?」

『ふむ……確かに生徒を護るために必要な行動ではあっただろう。だが少々やり過ぎではないかね? そのせいで件の黒いI Sは行方知れずとなつてしまった。これはどうする気かね?』

そう。あの事件の時、最後に真耶が行った一斉砲撃によって、元々ダメージが深かったアリーナは更なる大ダメージを受けた。そしてその砲撃が終わる頃にはアリーナの内部はかなり荒れており、件の黒いI Sの姿は既に無かった。それがI S委員会にもたらされた報告であつたが、彼らはそれが気に入らないらしい。

『そこまでする必要はあつたのかね? 聞けばその襲撃機体も黒いI Sも満身創痍だつたのだろうか? ならば君なら拿捕する事も出来たと思うが?』

「ですが現場には傷ついた生徒達が居ました。その安全を優先したが故です」

『ふむ……。提出されたアリーナの記録、それにI Sのログを見ても確におかしなところは無いか……』

そうは言うが画面越しの視線はこちらを疑っている事に千冬は気づいている。そしてその懸念は正しい。提出したデータは全て偽装された物だからだ。だがそれは顔に出す事は無い。

『しかし折角あそこまで追い詰められていたと言うのにだ、誰も顔を見ていないのかね?』

この質問に千冬はドキリとする。何故なら自分を含め、あの時現場にいた者達はその顔を見ている。そう、川村静司の顔をだ。それを今言う事は簡単だ。あの黒いI Sの正体は川村静司でした、と。一言いえば委員会は動くだろう。そうすれば色々な問題が解決するのも確かだ。そして新たな問題が発生する事も。

果たしてどちらが正しいのか。不確定要素の塊である川村静司を世に広める事か。それとも庇う事か。その疑問は未だに決着がついていない。だが、

「……………はい」

結局口に出したのは肯定の言葉だった。この問題に関しては今、ここで決着を付ける事は出来ない。

『……………まあいい。件の黒いISについては今後も調査するでしょう。その為には君たちにも協力してもらおう。だがもう一つの案件についてはどう説明するのかね?』

男の声と共に千冬の手元の端末にもデータが送られてくる。それは今回襲撃を行った無人機の画像だった。やはりきたか、と千冬は小さくため息を付く。

『今回、数体が回収されたがこの機体には搭乗者が居なかった。これは恐るべきことだ。だがそうなる疑問がある。これに酷似した機体と君たちは以前戦闘している筈だ。なのにそう言った報告はされていない』

『もしや隠匿していたと言うのかな? それは問題だよ?』

『納得のいく説明を求める』

口々にはやし立てる彼らに千冬は呆れてしまう。特にアメリカの代表だ。臨海学校の際に現れた無人機。その機体を彼らが回収しているであろう事は千冬も予想していた。だがそれを棚に上げてこちらを責め立てている。まったく都合のいいことだ。

「その件に関してはご想像の通りです。我々は件の機体が無人機である事を把握していました」

対して放たれた千冬の余りにもあつけらかなとした報告に画面越しに彼らがどよめいた。こちらがそう簡単に明かすとは思っていなかったのだろう。

『何故、報告しなかった?』

「混乱を避ける為です。私がこう報告すればきっと誰かが思うでしょう。『その機体を回収しているのではないか?』と」

『当然だろう。もしそうならば——』

「そうならば誰に渡せばよいのでしょうか？ アメリカですか？ シアですか？ それとも中国？ 日本？」

しん、と部屋が静まり返る。そんな彼らに千冬はそれ見た事か、と心の中で小さく呟く。

「今の状態が答えです。単純に報告だけすれば所属不明の謎の部隊が学園に向かってきてもおかしくない。そう考えたが故にタイミングを模索していました」

気まずい沈黙が続く。千冬の言う事は所詮妄想だ。だが可能性のある妄想である。無人機と言う存在が及ぼす影響は計り知れない。

『では君は無人機は学園に留めて置くべきと言いたいのかな？ だがそれは学園を危険に晒す事に他ならない』

「ならば護ってください。IS委員会が、世界が、協力する全ての国が。そうすれば我々も安心できます」

『詭弁だな。だが確かにその所在を直ぐに決められないは確かだ。この件は今後の議題として、決定が下るまでは学園に補完。その間の解析内容は当然ながら開示してもらおう。また、それにかかる警備費用などは委員会からも出資する。これでどうかな？』

その言葉に他の委員たちも渋々と賛成の言葉を発する中、千冬は小さく息をつく。これでいい。無人機自体に未練は無いが、どうせ渡すと言えば今度はどこが持つかで意味の無い論争が始まるのだ。だつたら少しでも学園の警備を強化する為のカードにするべきだろう。日本の委員の数人が苦い顔をしてこちらを睨みつけているが知った事では無い。大方、今まで日本政府にも情報を渡さなかつた事で文句を言いたいのだろうが、そもそもたかが一教師に権限を与えたのは彼らと学園上層部。ならその手札を存分に使うまでだ。

『一つ、よろしいかな？』

不意に一人の男が言葉を発した。その男はアメリカの委員であり先ほど隠匿について千冬に言及した者だ。

『何か不満があるのかね？』

『いいえ。その機体の扱いについては同感です。私が言いたいのとは別の事ですとも』

男は静かに笑うと千冬に視線を向けた。

『先日、日本のある企業が襲撃を受けました。その事は皆さんご存知の事だと思えます。そう、二人目の男性操縦者である川村静司の所属するK・アドヴァンスです』

ぴくり、と千冬の肩が反応した。その様子に気づいた訳ではあるまいが、男は言葉が続ける。

『襲撃犯は亡国機業を名乗るテロリスト共。そしてK・アドヴァンスはISを一機奪われ社屋は半壊。死傷者も多数。聞くところによると社長である草薙由香里氏も重症で面会謝絶と聞きました』

『それは知っている。勿論襲撃犯である亡国機業は各国が追跡中だろう』

『ええ。ですが私が言いたいのはそちらでは無く、その川村静司についてです。今回の事件で彼の所属する企業は大きなダメージを受けました。恐らく再建には時間がかかるでしょう。しかし貴重な男性操縦者をそんな不安定な企業に預けても良い物かと思ひまして』

「何……？」

男の物言いに不快感を抱き千冬が睨むが、男は気にした様子も無く大げさに首を振った。

『男性操縦者は貴重な存在です。一部では実験体にという話もありますが、それを含めて改めて川村静司の所在も決めるべきではないですか？』

『それは……』

『確かにそうですね』

『そもそも日本の一企業が独占している事も問題だったのだ』

口々に言葉が漏れていく。これは悪い流れだと千冬も気づき始めていた。そんな千冬の意を代弁するかのように新たな声が反論する。

『それはここで勝手に決める事じゃないと思うんですけどねえ。元々彼とK・アドヴァンスが契約した経緯は以前も説明しましたよ？』

声を発したのは桐生だ。川村静司の存在を一時秘匿し、そしてK・アドヴァンスに所属する様に仕向けた張本人である。だがアメリカの委員は小馬鹿にする様に手を上げた。

『状況が変わったのだ。ならばそれに準じた対応と言う物が必要だろう？　だが……そうだな、確かに勝手に決めては彼が不憫だ。そこで彼に意見を聞きたいのだが？』

「どうかな？」と問われ千冬の背筋に冷や汗が流れた。問うてくる男の眼は画面越しにも分かる程好奇心と、そして疑いが含まれているのに気づいたからだ。

(もしかや……気づかれている……?)

現在川村静司を表に出す事は出来ない。だが男の質問はまるでそんな千冬の隠し事を暴こうとするかのような雰囲気を感じられた。千冬は精一杯の精神力でその焦りを表に出さない様に制御し、首を振る。

「彼も先日の件で負傷しており直ぐに呼ぶことはできません。現在は更識家と共同し嚴重な警備態勢の中で治療をしています」

ある意味嘘では無い。ただその警備は外だけでなく、中に対しての警戒もしているが。

男はそんな千冬言葉にふむ、と頷くと、

『そうか。ならばこの件はいずれ聞いてみるとうしよう』

どこか面白そうに笑いながらそう答えた。男がそう答えた事により、この件は保留となり新たな議題へと移っていく。

『では次はI Sの機能停止と暴走についてだが――』

議長が話を進める中、千冬はその男の映る画面を静かに睨むことしかできなかつた。

全ての議題が終了しモニターが消えた部屋。そこで男は長時間の会議で凝り固まった体を解しながら小さく笑った。

「まあ隠したいのはわかる。だがそれは教師故かな？　それとも利益の為かな？」

男の手元には幾つかの書類があり、そこには写りはかなり荒い写真が数枚添付されていた。その一枚を手に取りそして再び笑う。

「夏の事件で無人機を先に手に入れられた事といい、我が国は運が良

い」

今回の無人機は学園側が回収した物と委員会が回収した物がある。学園側が回収した物については先の話の通り、暫くは学園管理となったが委員会が回収した物は現在移送中。これから日本の研究所で各国立会いの下に解析を行う予定だ。

先程はその所在で多少揉めたが、本音を言えばどの国もそれを持ち帰る事を恐れている。それは先日起きたISの突然停止と報告にあつた篠ノ之箒のISの暴走の件があるからだ。

『ISはいつ制御を離れるか分からない』

元々良く知らない兵器であるのに今更と言つた、その疑念が各国を足踏みさせている。唯でさえ通常のISがそんな状況なのに、更に不明な点が多い無人機ならば何が起きるか分からない。もし自国に持ち帰つて暴走でもされたらたまらない。そんな思いがあるからこそ、学園に暫く補完するという話は意外な程にスムーズに進んだのだ。そして解析の場所として日本が選ばれたのも、日本の立場の低さ故である。誰だつて自国に爆弾は持ち込みたくない。しかしその爆弾の知識は欲しい。そんな状態なのだ。

ならば今まで米軍が回収した物とは言えば、既に機体からは離されコアだけの状態で嚴重に隔離されている。いくらISと言えども機体が無ければ恐れる事は無い事は今までの研究からも分かっている。恐らく今日本にある無人機もその事が判明すればまた各国が所有を巡つて喧嘩を始めるだろう。

「だが、今はこちらの方が気になるな」

男の持つ写真。それはつい先日、学園内で撮られらもの。それを撮影したのは米国籍の生徒の一人で事件当初にアリーナに留まっていた者である。

「無人機は既に手に入れている。ならば次はこれだろう」

男は小さく頷くと回線を繋ぎある場所へと報告する。それはそんな男の手の内にある写真には、光に包まれつつ漆黒の装甲装備している最中の川村静司の顔が写っていた。

あの事件から三日が経った。

現在学園は休校状態。そしてそんな中、その室内は暗い雰囲気覆われていた。そこに集まる一夏、鈴、シャルロット、箒、セシリア、そしてラウラ。6人は何も話す事も無くただ座り込んでいるだけである。

彼女らが集まっているのは一夏の部屋。何故こんな所に集まっているかといえば、話の内容が内容の為に下手に外では話せないからである。

「静司、戻ってこないわね」

「……………ああ」

鈴がちらりと静司のベッドを見ながら呟き一夏も頷く。そう、静司は先日の事件以来部屋に戻ってきていない。そしてその理由を自分達は知っている。

「くそっ」

どん、と一夏が床に拳を叩き付けた。その内あるのはごちやごちな感情だ。親友だと思っていた少年の隠していた秘密。今まで守られていたと言う事に対する悔しさと、それに気づけなかった事に対する後悔。そして行方のしれぬことへの不安だ。

「今まで……………あのクラス對抗戦や臨海学校の時も川村さんはあのISに乗って戦っていた……………のですわね」

「くっ……………」

セシリアが現状を認識する様に呟き箒もまた拳を握る。箒に関してはこの場に居る者達とは違う想いも抱いていた。

「あの時……………私が紅椿を制御出来ていれば……………」

そして参戦できていれば。いや、そもそも鈴達に攻撃を仕掛けていなければ。状況はもつと変わったのかもしれない。だがそんな箒の肩を鈴が叩く。

「アンタのせいじゃないわ。どちらにしろISは全部動かなくなってたんだからね。そしてそれをやったのは……………篠ノ之博士なんですよ？」

「確信は無い。だけどそうとしか考えられない。だが、いやだからこそ私はっ」

「少なくとも私は箒を責める気は無いわよ。それは皆も同じでしょう？」

鈴の問いかけに全員が頷く。あの時の紅椿が異常な状態であった事は誰が見ても明らかだからだ。しかし箒の顔は複雑だ。例え一瞬でも、恋敵である少女に対して昏い感情を抱いたのは事実であるからだ。しかしそれを言い出す事が出来ず、居心地が悪そうに顔を俯けていた。

「けど一体博士は何を考えてるのでしょうか？ 目的がわかりませんわ」

セシリアの問いは尤もであり、そして誰もその答えを持ち合わせていない。だが一つ確実な事がある。

一夏は自分の腕の待機状態の白式に視線を落とす。現在専用機持ちを始めとして、学園内でのISは使用禁止令が出ている。訓練機を含め、先の戦いの修理が終わっていない事が理由として挙げられているが本当は違う。

「白式……信じていいのか？」

ISの予測不能な突然の行動。それを恐れたが故だ。今しがた話した紅椿の暴走や白式たちの突然の停止。そして他のIS達も根こそぎ機能停止した。その原因を調査するためにもしくは使用禁止令が出ているのだ。尤も、その理由も一部の者達には分かっている。そう、篠ノ之束の仕業であると。

行き場の無い怒りや後悔に一夏達が唇を噛みしめる中、シャルロットはラウラに問う。

「ラウラは……ラウラはあんまり驚いていないみたいだけどもしかして……？」

シャルロットはまるで継る様にラウラを見るが、帰ってきたのは否定の言葉だった。

「確かに前々から何かあるのではという想いはあった。だがその正体までは掴めていなかった。先日の教官との模擬戦は覚えているか？」

ラウラの言葉に全員が頷く。それを確認するとラウラは端末を取り出しその情報を全員に見せた。

「これはその時の静司のデータだ。見ろ、左腕に明らかに異常な程の熱量が感知されている」

ラウラの言う通り、データの中の静司の左腕は明らかに異常な数値を示しており、そのデータに一夏達は息を飲んだ。

「何度も問い詰めようと思った。だが出来なかった。静司の様子がいとも違ったのもあるが……聞くこと自体を恐れていたのかもしれない。だがこうなった今、聞いておくべきだったと後悔している」

「そんな事……」

悔やむように顔を歪めるラウラに一夏はそれ以上の声はかけられなかった。

「あの後、静司はどうなったんだ？」

「わからん。教官は任せろと言っていたが正直難しいとは思う。静司が正体を隠していたのは確かだがあの時、私達の前で晒してしまった。それに更識楯無の生み出した水蒸気で視界が悪かったとはいえ、観客席にまだ人が居たのも事実。どれだけの人物がそれを見たのかは分からない」

そしてそれが及ぼす影響も。そして問題はそれに留まらない。

「皆も聞いているだろう。K・アドヴァンス社が襲撃を受けたと」

「ああ。かなりやられて死傷者も多数出てる上にI Sも奪われたつて」

「静司がああI S——黒翼であった以上、あの会社も何か関係がある筈だ。そしてこのタイミングでの襲撃。恐らくだが他にも静司の正体を知る勢力が仕掛けたとしか思えん」

「まさかあの人……姉さんが？」

「いや、それは違うだろう。これはドイツの部下からもたらされた情報だがその時K・アドヴァンスを襲撃したのは亡国機業の機体だ。どちらかといえば今回の学園襲撃の際に奴らが行動を起こしたと見るのが妥当だ」

「けどそれはつまり、亡国機業は何時でも動く準備が出来ていたと言

う事ね」

「そうなる。こう言つては何だが、IS学園で行事があるたびに問題が起きているんだ。私たちが準備していた様に、他の勢力がなんらかの準備をしていてもおかしくは無い」

結局何も分からないまま。完全に取り残された形の一夏達が俯く
中、部屋の扉が突然開いた。

「皆揃つてるわね。……まあ予想していた顔色だけど」

「楯無さん？」

鍵がかけられていたはずの扉を何の障害も無く開いたのは楯無
だった。その背後には虚と本音。そして簪も居る。

「皆酷い顔よ。折角イケメンと美少女が揃つてるんだから笑いなさい。ね？」

「無茶言わないで下さいよ……」

とても笑えるような心境では無いが、楯無が気を使っているのも分かるため一夏は無理やり引き攣った笑みを浮かべた。

「よろしい。さて、それじゃあ皆、行くわよ」

「行くつて……どこにですか？」

「決まつてるじゃない。川村君の所よ」

その瞬間、シャルロットが弾ける様に顔を上げた。

「静司……静司は無事なんですか!？」

「落ち着いてシャルロットちゃん。無事と言えば無事よ」

「そっか……よかったあ」

少なくとも死んだわけでも居なくなった訳でも無い。それが分かりシャルロットの顔がようやく少し柔らかくなる。しかしラウラは楯無の言葉の意味に気づいていた。

「無事といえばとはどういう事だ？」

「言葉のままよ。ここから先は説明するより会った方が早いわ」

「会えるんですか!?! あいつは何処に!?!」

「ちよ、痛いわよ一夏君」

思わず一夏が楯無の肩を掴み揺らす。かなりの力の筈だったが楯無は顔色を変える事無くそつと一夏の手を離した。そんな様子を見

ていたセシリアが成程、と納得したように頷く。

「その様子からするともしや会長は川村さんの事をご存じだったので
は？」

「っ!？」

セシリアの問いに一夏が驚いた様に楯無を見る。視線の先の楯無
はふう、と一つ息をつくと小さく頷いた。

「ええ、知っていたわ。その事も含めて話してあげるから付いて来て。
……正直に言えば私達としてももはやどこまで話すべきかわからな
いのよ。だから本人に訊くしかないわ」

IS学園地下特別区画。秘密裏に作られたそこで真耶はモニター
を見つめながらため息を付いた。事件から三日。事後処理や通常業
務の合間にここに来ているが流石にそろそろ疲れが溜まってきた。
しかし彼女は弱音を吐くことなくそれを続けている。

「様子はどうか？」

そんな彼女に後ろから声が掛かった。振り向けば両手にコーヒー
を持った千冬が部屋に入ってきた所だ。彼女は真耶に片方を渡すと
同じようにモニターを見つめる。真耶はコーヒーを受け取りつつ小
さく首を振った。

「まだ目覚めません。治療は終わっているのですが……」

暗い顔で話す彼女の見るモニター。そこにはある人物の情報が映
し出されている。千冬もそれを一瞥するとモニターから目を離し、正
面に視線を移した。そこには分厚いガラスがはめ込まれており、そし
てその奥、嚴重にロックされた部屋の中央ではベッドに横たわる隻腕
の少年の姿があった。そう、川村静司である。

「まさか隻腕だったとはな」

「左腕自体は古傷の様です。それよりも驚きなのはその腕をISで代
用してきたことです。今まで全く気付きませんでした……」

「それは私もだ。それに体の傷も、な」

そう、今の静司は黒翼は解除され更には普段つけていた偽装被膜も

無い。それ故にその体の傷は一目で分かるのだ。そしてその体に刻まれた傷跡の多さに真耶の顔が更に暗くなる。

「どうしてこんなに……？ まだ子供なのに」

「それは本人に訊かなければ分からないだろう。K・アドヴァンスもあの調子で問い合わせ所では無い。……あいつの持っていたISについて？」

千冬の問いに真耶は頷くとコンソールを叩いた。近くの机の中央が開き、そこから解析機に収められた翼型のペンダントが現れる。同時に映し出されたデータを見て千冬は眉を顰めた。

「修理をしたのか？」

「応急処置ですけどその過程で何か分かるかと思いましたが……です。結局何も分からずです。それどころか最低限の修理が終わった途端、待機状態に戻ってそれからうんともしません」

静司が回収された当初は黒翼は展開されていた。しかし回収するが否やその姿は消えしばらくは静司の左腕と同化しており取り外す事が出来なかった。しかし昨日の夜、突然静司の腕から切り離されたかと思えば機体そのままの形で真耶の前に現れたのである。まるで治せと言わんばかりのその事態にどうやら真耶は正直に直してしまつたらしい。

「搭乗者の生体再生を行い、危険域からは脱したら今度は自分の修理を要求。それも終われば用無し、ということか。待機状態に戻り自分の回復に努めたのか？」

「なんだか酷く人間的ですね……。それに生体再生？ それは織斑君が臨海学校の時にやった？」

「ああ。そうとしか考えられん。実際、川村の回復速度は異常だ」

未だ目覚めないとはいえその傷が治る速度は明らかに異常だ。実際、既に目に見える新しい傷は大体は塞がっている。後は中身の問題なのだ。

「川村が目覚めれば詳しい話が聞けるのだがな」

「委員会との話はどうでしたか？」

疲れた様に千冬は首を振った。

「無人機の情報の開示要求、学園のIS使用禁止と調査の継続を言い渡されたよ。ここまでは予想通りだが……」

「ちらり、とガラス越しに眠る静司を見て千冬は小さく息をつく。」

「川村を逃がした件はやはり疑われていると思う。それに実際に踏み込んだ質問をしてきた者も居た。いつまでもこうしてはいられないだろう」

今は誤魔化せても時間が経てば経つほどそれは難しくなる。『男性操縦者である川村静司』がいつまでも表に出てこなければ疑念を抱く者は増えていくだろう。

「更識家なら何か知っているかもしれないね。楯無さんは？」

「先ほど呼んだ。ゴタゴタで中々聞けなかったが、ようやく時間が取れたのでな。……来た様だ」

千冬の言葉と同時に、部屋の扉が開き楯無が現れた。だがその楯無の背後から現れた一夏達の姿に千冬が眉を顰める。真耶も驚いた様子で立ち上がる。

「織斑先生。現状で我々が話せる範囲の事をお伝えにきました」

「それは良い。だが何故織斑達が居る？」

「一夏君達も当事者です。それに……この話はきつと聞いた方が良い。完全に私の独断ですが」

「……」

二人の鋭い視線がぶつかり合う。部屋の中が一気に張りつめた空気になるがそれを破ったのは本音だった。

「せーじー！」

「静司!？」

声を上げガラスに駆け寄る本音にシャルロットや一夏達も続く。そしてガラス越しに写る静司の姿に誰もが絶句した。

「嘘……腕が……!？」

「落ちつけシャルロット。あれは見た所古傷だ。だが……」

「それ以外も傷だらけじゃないの!? 何なのよこれ!？」

「おい静司!?! 一体どういう事なんだよ!?!」

不安そうに見つめる本音。隻腕のその姿に声を失うシャルロット

とそれを支えるラウラ。そしてそれ以外にも見える数々の傷跡に声を失う鈴達と、ガラスに拳を叩き付ける一夏。その姿を見て千冬ははあ、と今日何度目かのため息をついた。

「どの道今更、か。ならば構わない。その代わり知る事を全て話してもらおうぞ」

「ええ。私を知る限りなら——」

そう楯無が頷いた時だった。突如変化を示したモニターに真耶が声をあげた。

「織斑先生！ 川村君のバイタルデータに変化が！」

「何!?!」

驚き千冬が振り返った先。ガラスの向こう側で川村静司がゆっくりと瞳を開こうとしていた。

73. そして火蓋は切られた

深い深い闇の中。その闇に溶け込む様にして、誰かがこちらを見ている。その誰かは何も語らず、しかし言外にどこか非難する様な雰囲気漂わせていた。

「誰だ？」

問いかけても相手は無言。しかしその闇は少し蠢き、何かはこちらに伸ばされた。近づくにつれ、その姿がおぼろげながら見えてくる。これは腕だ。

その腕はそつ、とこちらの頬を撫でる様に触れたかと思った途端、急に襟首を掴まれ強引に引き寄せられた。

「っ!？」

突然のその行為に驚く中、引き寄せたその誰かが顔を寄せてくる気配。そして耳元に小さく、声が聞こえた。

『馬鹿が』

とん、と突き放される。急速に闇が晴れて行き白に染まっていくその世界の先で、黒い長髪の女性が静かにこちらを見ていた。

うつすらと戻っていく意識の中、照明の眩しさに小さくうめき声が漏れる。妙に気怠い意識が徐々に活動を始めると共に、頭の奥の鈍痛に静司は不快気に顔を歪めた。

「……は……」

知らない場所だ。だが似たような雰囲気のある場所なら何度か見た事もある。無機質な天井。飾り気のない機能性重視の照明。圧迫感を感じる壁。それは取調室に似ている気がした。

そしてその壁のある一面には窓が取り付けられており、分厚いガラスの向こうに知っている顔が見えた。

『起きたか……。調子はどうか？』

その人物、織斑千冬の問いに静司は気だるげに首を振る。残念ながら絶好調とは言えない。それでも立ち上がろうとして、違和感に気づ

く。違和感の正体は体のバランスだった。そしてその原因は左腕が無い事だと直ぐに気づく。

『悪いがお前のISはこちらで預かっている』

「……はい」

成程、と少し納得した。同時に今の自分の状況に予測が付く。

「ここは……地下ですね」

『……そうだ。どうやらお前もこここの存在を知っていたらしいな』

苦々しい顔で千冬が頷く。仮にも秘密である場所の存在を簡単に言い当てられたせいであろう。だがそんな事は静司にとっては今更だ。それよりも気になるのは、千冬の後ろに見える一夏達の姿。彼らは戸惑いと疑問が入り乱れた複雑な表情でこちらを見つめている。特に今は無い左腕の部分に視線が集まっている事に気づき居心地の悪さを感じてしまう。

『……言いたいことはあるのが分かる。だが先にこちらの質問に答えて貰う』

こちらの視線に気づいた千冬の言葉に静司は頷いた。そして同時に思う。遂にこの日が来てしまったかと。

『単刀直入に聞く。……お前は何者だ？ 目的は何だ？』

その問いに答える事は容易い。だから静司は答えようと、

「……っ」

答えようとした。なのに声が直ぐに出てこない。何故だ、と考えて直ぐに原因に思い当たった。そしてその理由に我ながら呆れてしまう。

無意識に躊躇ったのだ。その言葉を発する事で変わってしまう何かを恐れて。何を今更と自分で思う。もっと早く、別の形で話してればかわっていたかもしれない。だがもうその時は過ぎ、手遅れだというのに。

だからもう、腹を括るしかない。だからこそあの時自分は皆の前で黒翼を使ったのだから。

「ISの登場で世界は変わった」

『何……？』

突然切り出した言葉に千冬が眉を顰める。だが静司はそれをあえて無視して、なるべく感情を表に出さないように続ける。そうでもないとまた止まってしまいそうだから。

「社会が、人が、そして兵器が。大なり小なり変わって行って、そして人々はそれに順応し始めた。だけど誰もかれもが変化についていけない訳じゃない」

女尊男卑。そんなふざけた言葉を当然と信じ、行使しようとする女性達とそれにより実際に淘汰された男性たち。急速に代わっていた産業により今までの研究は時代遅れとなり陽の目を見る事が無くなった研究者達。考え始めたらキリが無い。

「そしてそんな者達の中には八つ当たりをする奴らが居る。自分勝手な理論で暴れるやつも居る。嫉妬から持つ者へ恨みを持つ奴らがいる。そんな変化すら気にせず好き勝手に動く奴も居る。そして、それを利用して悪意を振りまく奴が居る。そんな状況下で更なる争いの種が世に現れた」

ゆつくりと一夏に目を向けると一夏の眼が戸惑いに揺れた。ああそうだ、一夏。お前の事なんだ。

「男性操縦者。その存在の価値は計り知れない。だからこそあらゆる者達がそれを手に入れようとした筈だ」

そうでしょう？ と視線で問うと千冬が苦い顔をした。一夏が世に発表されてから彼女はそんな手合いをずっと相手にしていたのだ。中には一夏に直接実験台になってくれと言った組織も居たと聞く。

「だからそれを護る為にIS委員会が、日本政府が、そして更識家が動いた」

『さつきから何が言いたいんだよ静司!? 俺だってそんな事は知ってる! だから俺はIS学園に居るんだろ!』

「そうだ。だがそれだけじゃ足りないと思う者が居た。それは別の迷惑も絡んでいきそしてもう一つ、男性操縦者の安全保持の手を打つことを決めた」

『もう、一つ……?』

震える様なシャルロットの声。それに小さく頷く。

「男性操縦者——織斑一夏の傍に居ても不自然では無く、監視と警戒を続けるのに最も有効な手段。更識楯無と言えども困難である環境下でも問題が無い人物を護衛として派遣する事」

『っ!?!』

息を飲む気配。きつと彼女達は気づいたのだろう。顔を見れば、その揺れる瞳を見れば嫌でも分かる。そしてその近くに居る一夏もまた同じだ。だがその顔は他の者達よりも悪い。顔を青くし、信じられない物を見る様に瞳を揺らしている。そんな姿にまたしても感じる罪悪感。

この件に関しては一夏は何も悪くない。ISが使えてしまう事も、知らなかったことも彼の及ぶところでは無いのだから。むしろ彼は被害者と言っている。

だが一夏はそろそろ知るべきだろう。いや、知ってほしい。自分を取り巻く環境が、きつと自分が思っている以上に複雑であると。そして警戒と危機感を持ってほしい。もう、自分は近くで彼を護れないのだから。それが『友人』として出来る最後の事だと信じ、話を続ける。「俺が何者か、と聞きましたね」

『ああ……』

もう誰もが静司の目的については気づいている。ならば後は明かすだけだ。二人目の男性操縦者。北海道から来た男。学生である川村静司。そんな仮面の下にある自分の正体を。

「K・アドバンス社技術開発部門試験2部。別名EXISTのIS部隊が一人。コードネームはblade」

無い左腕が小さく疼く。

「織斑一夏の護衛の為にやってきた、それが俺だ」

「何だよそれ……わからねえ、全然意味が分かんねえよ!」

室内に響いたのは一夏の怒号と目の前のガラスを叩き付ける音。それはここに居る少女達の想いを代弁していた。シャルロットもまた、呆然とした気持ちでそれを聞いていた。

静司の言った言葉の内容は分かる。だが理解が出来ない。確かに男性操縦者は貴重だ。その敵も多いから護衛が派遣されるのも分かる。そう、そこまでは分かるのだ。

だがその護衛が一夏と同じ男性操縦者。そこが分からない。貴重な男性操縦者を護るために男性操縦者を護衛にする。荒唐無稽な話だ。それは鈴達も同じ気持ちだったようで、ガラス越しの静司に思わず喰いついてた。

「ちよつと待ちなさいよ！ アンタの言ってる話は滅茶苦茶よ！ 何で一夏を護るために同じ男のアンタが派遣されてくるのよ!？」

「そうだ！ それでは意味が無い筈だ！」

「いくらなんでおかしいですわー！」

箒やセシリアも同じ様だ。なら千冬はどうなのか、と思いその顔を盗み見てシャルロットは眉を顰める。千冬の顔は驚きこそあるものも、どこか理解した節があったからだ。それを見て嫌な予感が心を過る。

「織斑先生は……知っていたんですか？」

問われた千冬は苦々しい顔で小さく首を振った。

「川村の正体は知らなかった。だがあいつが派遣された理由の一つなら心当たりがある。だが……」

その理由を言う事に躊躇っている。そしてそれは真耶も同じだった。だがそんな二人の葛藤を砕いたのは楯無だった。

「それはね、 匣になる為よ」

「っ、楯無ー！」

「いいえ織斑先生。これはきつと話すべき事です。もう無知でいられる時間はとうに過ぎました。だから一夏君は自分を取り巻く状況を理解する必要がある……そうでしょう?」

楯無が静司へ視線を移すと彼も苦い顔をしていた。

『別にそこは言わなくても良いでしょう』

「ならどうやって説明するつもりだったの？ 下手ないい訳より余程わかり易いわ」

ぐっ、と押し黙る静司。だがそれを聞いた一夏は益々その顔を険し

く歩いていく。

「待つてくださいい楯無さん！ 囿ってどういう事ですか!？」

「そのままの意味よ。世にも珍しい男性操縦者が二人。だけど片方は世界最強の姉と世界最高の頭脳を持つ博士と懇意にしている。それだけで織斑君を狙うリスクは跳ね上がるわ。だけど」

ちらり、と楯無が静司に視線を移す。

「そんな人物の隣には後ろ盾も何も無い、本当にそこらの田舎から出てきた男が無防備に立っている。だったらそっちの方が狙い易いわ」

「な、なんでそんな事やらせてんのよ!?! アイツは——」

「さつき彼が言ったでしょう。一夏君を護衛するのが彼の仕事。そして敵と成り得る存在が襲ってくるのを待つよりは、こちらから釣り上げた方が早い場合もありそして実際それは機能していた」

「機能って……人を何だと思ってる」

「それが彼や私たちの仕事なの。それよりまだ話は済んでいないわ。そうでしょう、織斑先生」

「ああ、そうだ」

無表情の楯無と怒りや戸惑い、驚愕の連続で不安定な一夏達の姿をあえて見ない様にして千冬は静司に向き直った。

「言いたいことは山ほどある。だが先に確認する。お前……いや、お前の組織にそれを依頼したのは桐生だな?」

『その通りです。俺達は桐生さんから織斑一夏及びその周囲の護衛を依頼されました』

以前、桐生が語った自分と川村静司との関係。それにはこういう裏があつたのか。いいようにはぐらかされていた事に気づき千冬は苛立ち気に拳を握りしめた。

「ちよつと待ちなさいよ、もしあんたの言っている事が本当だとして」
そんな中鈴が震えた声で、そして微かに怒気を混じらせながら言葉を紡いでいく。

「ならアンタはその仕事の為に一夏に近づいたって言うの!? あんたら友達じゃなかったの!?!」

鈴の怒りは尤もだろう。セシリア達も同じように怒気を孕ませて

静司を見つめている。そして鈴達ですらそう感じた事を一夏が感じない筈が無い。

『……………』

「答えなさいよー」

静司は無言。だがシャルロットは気づいた。何時もは険しいあの鋭い眼が、今はどこか不安げに揺れている事に。だが静司はそれを隠す様に目を逸らし、小さく呟いた。

『友人でありたいと、思っている……………』

「だったら何で言わなかったのよ!? 一夏にも、私達にも! そんなにこちらが信用できなかったの!？」

今度こそ静司は押し黙った。そしてそれがまるで答えを示しているかのようで、一夏や鈴達の表情が歪む。それを感じ取ったのだろう。千冬が手で彼女達を制した。

「私としても言いたいことはある。だが先に次の質問だ」

千冬が部屋の中央のケースにある翼型のペンダントを中から取り出すと静司に見せつけた。

「このISは何だ? 何故未登録のコアをお前は持っている? そしてお前の腕は一体どういう仕組みだ」

そう、それは静司の正体と同じくらい疑問に思われた物だ。何度も現れ激闘を繰り広げたIS。その正体が静司だという。だがならば静司はどうやってあのISを手に入れたのか? 何故左腕が無いのか? そして何故……………あの時自分を襲ったのか。疑問は尽きず、こみ上げてくる不安を誤魔化す様にシャルロットが拳を握りしめていると、その拳をそつと温かい物が包んだ。

「本音?」

「しやるるん、大丈夫?」

不安そうに顔を見上げるのは本音だ。どうやら心配させてしまったらしい。

「大丈夫……………うん、大丈夫だよ」

そうだ、たとえばあのISが何であれ静司は静司の筈だ。それに自分を攻撃した時も様子がおかしかったのは誰もが見ている。だから

きつと理由がある筈だ。

だけど、だけど何故だろうか。先ほどから感じる不安感は。静司の正体。ISの正体。それが明かされる事で何かが起きてしまう。そんな予感がする。

ふと本音をよく見てみれば彼女の瞳も揺れているのが見える。そうだ、彼女も不安なのだ。だが彼女のその不安は自分のモノより大きく感じた。そしてふと気づく。

「本音は、知ってたの？」

「……………うん」

どこか後ろめたい様子で頷く彼女を見てああ、そうかとどこか納得した。前々から静司が何かを抱えている事は自分も感じていたが、彼女はその正体を知っていたのだ。理由は簡単、彼女もまた更識家の関係者だからか。じゃあなんで今まで話してくれなかったのか。その事に少し悲しみや寂しさ、そして嫉妬を感じてしまう。だからそれを問い詰めようとして、しかし本音の顔を見て息を飲んだ。

普段の平和そうな様子からはかけ離れた不安に彩られた顔。それはこれから起こる事は勿論の事、彼の事を心配しているからだろう。よくよく見れば、自分の拳を握るても小さく震えている事に気づく。

（ああ、そうか…………）

何も知らないから不安な自分。だけど知ってるからこそその不安もあるのだろう。それはきつと今までも同じような事があったに違いない。クラス対抗戦。臨海学校。学園祭。キャノンボールファストにタッグマッチ。その度に彼は戦いに赴き、そしてその度に彼女は不安に駆られたのだろう。それが分かってしまったから、問い詰める事は出来なかった。だから代わりにでたのは別の言葉。

「辛いね…………」

「うん…………」

二人の少女が見つめる中、ガラス越しの少年の話は続く。

その後何が起こる事を周囲に予感させながら。

手の中の翼の形をしたISの待機状態であるペンダント。それを持った千冬に言い様のしれない感覚が過る。まるでそのISからの敵意をぶつけられたかのような、奇妙な感覚。その居心地の悪さに眉を顰める。

『そのISの事を話す前に一度それを返してもらえませんか？』

「駄目だ。お前にはまだ得体のしれない部分がある」

『それも含めて見せた方が早い。安心して下さい、一夏達に敵意を向ける事はありません』

見せるとはつまりこの場で腕に変えるという事か。確かにあれなら語るより見せた方が理解はしやすいだろう。だが未だ得体のしれない少年に渡す事は躊躇いを感じる。ならばと、彼を知る楯無に視線で問うと彼女は静かに頷いた。

「……わかった。だが下手な真似をしたらどうなるか分かってるな」

『ありがとうございます』

真耶にペンダントを渡す。真耶も頷くとコンソールを叩くと、引き出しの様にコンソール下部が開いた。そこにペンダントを入れてまた操作すると引き出しが閉まりそしてガラス越しの静司の元へと送られる。

静司はそれを受け取ると、ペンダントを握った右手をゆっくりと左肩の近くへと持っていた。するとその周囲に光が漏れ始める。あれはISを展開するときの量子変換の光だ。その光は次第に形を作っていく、やがてそれは腕の形となって静司の左腕に顕現した。その光景に一夏達が今日何度目かの驚きの声を漏らす中、静司は現れた鋼鉄の左腕を試す様に何度か曲げたり手を開閉したりとしている。

『自己修復だけじゃない。修理してくれたんですね』

「させられたの間違いだ。それよりもこちら要求を飲んだぞ」

『分かっています』

頷いた静司が左腕を横に伸ばす。すると再びその左腕が光に包まれ、そしてその姿が鋼鉄のそれから、まるで人の肌の様に変化した。

「な、なんだあれは!？」

「偽装……人工皮膚か。成程、今まで体の傷に私達や一夏が気づかな

「かったのもそのせいだな？」

『正解だよラウラ』

もう一度静司が左腕を振るとその偽装が解け元の鋼鉄の腕へと変わった。まるでもうこの偽装は必要ないと言わんばかりに。

『ISの名は黒翼。そしてその黒翼を部分展開する事で俺は左腕の代用に使っています』

「常時部分展開だと……そんな事が」

『出来るからこそここに居る』

「……ならそれはいい。だが質問の答えになっていない。結局そのISはどうやって手に入れた？」

その質問にガラス越しの静司は奇妙な行動を取った。こちらではなく、部屋の各所に仕掛けられた監視カメラ。それらを見回し、そして視線を元に戻す

『織斑先生。世界最初のISは知っていますか？』

「知らない者は居ない。白騎士だろう」

そう、かつて親友が作りそして自分が搭乗した世界で最も有名なISの名だ。知らない訳がない。だがガラス越しの静司は首を振っている。

『表向きは確かにそうです。ですが事実は少し違う』

「何だと？」

『あるんですよ。白騎士よりも前に生まれ、そして闇に葬り去られたISが』

静司が左腕を掲げる。漆黒のその腕で、まるで自己を主張するかのように赤い光が線の様に走る。

『それがこの黒翼。かつて篠ノ之東によって『失敗作』として廃棄され、しかし生き残ったISであり、そして俺の共犯者』

「きょう……はん？」

『そうだ。俺と、そしてこの黒翼はある目的の為に契約した。そしてそれがあるからこそ俺はISを使える。そしてその契約こそが黒翼が特別である理由』

ゆつくりと静司が立ち上がる。その様子に千冬は危機感を感じた。

「待て川村、そこを動かくな」

『先程の質問に答える。何故自分の事を言えなかったか？ それは俺と言う存在が異常過ぎた事もある。そして、俺達の最大の敵にそれが漏れる事を恐れたからでもある』

「何を言っている？ いや、それより動かくな川村！」

『俺と黒翼はある人物への復讐の為に契約した。黒翼は自らを作り、しかし『失敗作』の烙印を押し廃棄した創造者への復讐を。そして俺は俺の姉さん達を皆殺しにした者への復讐をつ！』

ぞくり、と急激に寒気がした。これは殺気だ。ガラス越しでも分かる、川村静司がだすその殺気に千冬は冷や汗を感じた。一夏達も同様で、誰もが怯えそして震えている。だが静司はそんなこちらには目もくれず部屋の監視カメラを睨んでいた。

「何を考えている。これ以上そこ動かくな！」

『忘れたとは言わせない。無かった事に何てさせない。まだ気づかないか？ 見ているんだろう？』

違う。川村静司は自分達でなく別の人物へ語りかけている。だがそれは誰だ？ そこまで考えて、彼が語った内容と先ほど彼が見ていた監視カメラの事を思い出し、はっとする。

「まさかっ!？」

『かつて生まれた狂気の計画。世界最強のIS搭乗者の量産計画……そうだっ！ その計画の名はValkyrie project！そして俺はその計画の被検体が一人、お前に皆殺しにされた——織斑千冬のコピー計画の生き残りだよ篠ノ之束ええええ！』

瞬間だった。轟音と共に部屋が大きく揺れた。真耶たちが悲鳴を漏らす中、ガラスが割れ、光が漏れる。それはIS展開の光。そして千冬はそこに見た。漆黒の翼を持つISの鉤爪が刃を受け止めている姿を。そして——

「黙れ……黙れよお前。これ以上箒ちゃんやちーちゃん達の前で語るな」

今まで千冬が見た事も無い怒りの形相で静司へとISの刃を突きつける束の姿だった。束が使っているのは不思議なISだ。見た目

74. 激情

Valkyrie project.

それはかつて行われていた世界最強たる戦士の量産計画。ヴァルキュリーと呼ばれる世界最高レベルのIS搭乗者達。それと同レベルのものを作り出す為の計画だ。そしてその計画には主に織斑千冬を初めとしたブリュンヒルデのデータが使われていた。

その計画は二つの方法を持って行われていた、一つはクローン。織斑千冬のデータを元に同レベルの肉体を作り出す、いわば『ハード』面の開発。

そしてもう一つが知識。織斑千冬を初めとした歴代ヴァルキュリーのデータを直接被験者の脳に刻み込み、オリジナルと同等の能力を与えようとした『ソフト』面の開発。

最終的には統合される予定だったその計画だがそれは困難を極めそして遂には成功することなく終わりを告げた。他でも無い、篠ノ之束によってこの世から物理的に葬り去られたからだ。

だが――

「気分はどうだ？ 殺し損ねた……お前の失敗の象徴を見る気分は！」

「五月蠅い黙れよお前。いい加減目障りだっって言ってるんだよ！」

炎が晴れてくる中一夏は見た。全身を装甲に包む黒のISとそれに相対する女性の姿を。

「束さん……静司……」

意味が分からない。

それが今の感情を表すにもっとも適した言葉だ。それも当然かもしれない。一度に多くの情報が出過ぎている。

親友だと思っていた少年は自分を護る為に来たという。そして例の黒いIS――黒翼こそがそれで更には姉のコピーと来た。そして同じようなコピーを皆殺しにしたのが姉の親友である束。いくらな

んでも無茶苦茶過ぎる。それを今すぐ理解しろと言うのは幾らなんでも無茶な話だ。そもそもそんな荒唐無稽な話、唯の作り話にしか思えない。

だが、だがならば今日の前の光景をどう説明付ける？　今自分の目の前でぶつかり合う二人はとても冗談には見えない。束はいつもの何を考えているか分からない笑みを捨て、目を吊り上げ憎悪に満ちた眼差しで黒翼を睨み、その黒翼は顔こそ見えないが怨嗟の声を撒き散らし束へ迫る。そんな二人の様子が告げている。『これは全て事実だと』

つまり『川村静司』という存在は姉のコピーを造るという恐ろしい計画の一部であり、そしてそのコピー達を殺し計画を消し去ったのが『篠ノ之束』。それが全て。それは……それはあまりにも——キモチワルイ。

「っ、違うー！」

一瞬脳内に浮かんだ思いを必死に否定する。だがそれでもそんな思いは完全には払拭されず、思考の端でまるでこびりついたかのように離れない。

姉は、姉の技術は姉だけの物。それはかつて自分が言った言葉だ。故にVTシステムの時自分を取り乱した。あれは姉のものであり、ふざけた理由で使われてはいけないと。

だが今、その言葉を吐くことは出来ない。もし二人の話が本当ならば、それは川村静司という少年に対しての存在否定になりかねないのではと思うからだ。だが、だからと言ってその実験を許せるはずもない。そんな堂々巡りの思考で一夏は混乱していく。

姉は……千冬はどう思っているのだろうか？　まるで答えを求めるように千冬に視線を移し、そして一夏は後悔した。

揺れている。

あの凜々しさと安心感を兼ね備えていた姉の瞳が大きく開かれ、そして揺れていた。それは紛れもない動揺の証。姉は口に手を当て酷く動揺していたのだ。そんな千冬の状態に一夏は唇を噛みしめた。他でも無い。自分の情けなさいだ

(馬鹿か俺は！　また千冬姉に頼ろうとした……。それじゃ駄目なの
に！)

だが、ならばどうすればいいのか？　その答えは分からない。きつ
とこれは鈴達に聞いても、真耶に聞いてもきつと分からないだろう。
その答えは自分で探さなければなら無いのだから。だが目まぐるし
く変わる状況はそんな一夏に思考する暇も与えない。

「っ?!　織斑先生！　二人が!?!」

真耶が悲鳴を上げる。静司と束はお互いにぶつかり合いながら移
動していく。壁を突き破り、通路を溶かし、天井を破壊しながら徐々
に上へと――生徒達が居る場所へと移動しているのだ。

千冬もそれに気づいたのだろう。ぐっ、と唇を噛みしめると面を上
げ、叫ぶ。

「生徒達を避難させる！　上に居る者達に伝えろ！　私達も直ぐにあ
がるぞ！」

その声は大きくも、どこか力弱く感じた。

地下を高速で駆ける。振り下ろした鉤爪は防がれ、予想だにしない
角度から迫る刃を紙一重で躲す。至近距離でガトリングガンを撃つ
がそれはすべてシールドに阻まれ代わりとばかりにミサイルが飛ん
でくる。

ISという自由に空を飛びまわれる兵器が戦うには余りにも狭す
ぎる地下の通路を静司と束は高速で移動していた。驚くべきは束の
IS、いや、ISと言っていいのかもわからない兵装の性能だ。何故
ならそれには装甲らしい装甲は無いからだ。あるのは束の周囲に浮
かんでいる巨大な機械の腕とそれが握るブレードや銃器。そしてそ
の横で浮かぶ数々の武器。そして当の束は両手の指で高速で投影型
のコンソールを叩きその腕や武器たちに命令を送っている。その姿
はISに搭乗するというより、ISを操作するのに近い。

「お前さえっ、居なければ！」

現在は静司の黒翼が束を追いかける形だ。狭い地下で翼を広げそ

の両翼から光を放つ。放たれた光は壁を焼きながら束へと迫るが、その正面でシールドに阻まれるといともたやすく霧散した。そして散っていく光を突き破る様に、宙に浮く鋼鉄の腕が持つ剣が黒翼へ迫る。

「それはこちらの台詞だよっ！」

突き出された刃を天井を蹴って躲す。だが躲した先へ束の周囲に浮く重火器から一斉に銃弾が放たれた。咄嗟に瞬時加速を発動。機体を縦に捻りつつ、まるで自分自身が槍の様に真っ直ぐに伸びた黒翼と、その先端にある凶悪な様相の鉤爪が束に迫る。だがまたしてもシールドに阻まれその爪は届かなかつた。

「邪魔なものをー！」

通常のISの常識を超える異常に強固なシールドが張られている。だがそんなもの知った事では無い。破れないのなら威力を上げるまでだ。

《プラズマクロー》起動。鉤爪に光が灯りそれは高熱の刃となって体現する。そして再び鉤爪による一撃を加えようとした所で、前方を行く束が急に上へと方向転換した。そのせいで一撃目は空振りに終わり、静司はそのまま壁に激突した。

「見た目通り馬鹿みたいだねっ！」

静司が突っ込んだのはエレベーターシャフトだ。そこを上昇しながら束が馬鹿にした様に叫び、その砲門をこちらに向けると一斉に火を噴いた。通路以上に狭い空間に誘い込まれた矢先に放たれたその砲撃が黒翼を襲う。

「それが、どうしたあああ!？」

対して静司が取った行動は回避でも防御でも無い。放電を続ける両腕の鉤爪を掲げ、そしてそのまま砲撃へと突っ込んだ。途端に全身に衝撃。しかし掲げた両腕の鉤爪が生半可な威力の銃弾を焼き尽くして猛スピードで上昇していく。それでも当然無傷とは言えず、機体の各所に被弾し機体管制から警告が流れる。だが知った事では無い。

「本当に、馬鹿だねえっ!!」

対し束も宙に浮かぶ機械の両腕に剣を持たせるとそれを迎え撃つ。

激突。エレベーターシャフト内を火花と閃光。そして衝撃が襲い、破壊を撒き散らしながら二人は上昇していく。

「お前を殺せば……全てが終わるっ……!!」

「その考え方が馬鹿だって言ってるんだよ!」

お互いに罵り合いつつ上昇する二人だがいずれ終わりはある。お互いの刃をぶつけ合ったまま二人はエレベーターの天板をも突き破り遂に地上へと躍り出た。一瞬見えた様子からここは第二アリーナの近くだ。すぐ横にはアリーナが見え、そして遠くには校舎の姿も見えた。

「いい加減ウザいから離れてよっ!」

束がコンソールを高速で叩くと光が生まれそして新たな腕が現れた。そしてその腕の拳が黒翼の腹部を捉える。

「がはっ!」

衝撃で息を詰まらせる。そしてもう一度放たれた拳によって黒翼は殴り飛ばされた。衝撃のままに飛ばされた黒翼はアリーナの壁にぶち当たり、それすら貫いてアリーナ内部の観客席へと叩き付けられた。

「……のおっ……!!」

痛みに喘ぐ時間は無い。壊れた壁の向こう、アリーナの外で束の周囲の火器が再び煌めいている姿見えた。咄嗟に横に飛ぶのに遅れ半瞬後、先ほどまで居た場所に砲撃が叩き込まれ破壊を撒き散らした。

「いい加減しづとい。ゴキブリみたいな奴!」

「黙れ! 災厄ばかり振りまく存在が!」

観客席を蹴り上げ再度上昇。束へと鉤爪で斬りかかる。だがそれは四本に増えた鋼鉄の腕によって容易く防がれた。鬱陶しい腕だ。そして何より、その腕の向こうで馬鹿にする様に小さく睨みつけるように笑った束の姿に怒りが増していく。

視界の端にはシステムエラーの警告と『Valkyrie Terminal System』の文字。そう、黒翼に深く根付いたあのシステムは今もまた起動している。だがそれに囚われて暴走する様な事は無い。そんなシステムの干渉を上回る程の感情が、それを押しこめて

いる。それどころかシステムから送られてくる知識、情報すら糧に束へと迫る。

「お前は今日、この場でどんな手を使ってでも必ず殺す！ 逃がしはしない！」

「はっ！ よく言うよ被害者気取りのクソガキの癖に！」

距離を離し《R/Lブラスト》を放つ。だがそれはやはりシールドに阻まれ届かない。

「何だどっ!？」

「違うとでも言うのかな!? もしや自分の存在が正しいとか、本当にそう思ってる!？」

束がミサイルポッドを展開し発射。咄嗟に回避行動に入りつつ、追ってくるミサイルをガトリングガンで撃ち落とす。

「さつきから聞いてれば逆恨みも良い所だよ！ お前はちーちゃんのコピーだ！ あの実験は有ってはならぬ物だ！ その産物であるお前が私達に被害者面をするな！」

ミサイルを全て打ち落とし再度接近。やはり鉤爪は腕で防がれるが、その隙に《アサルトテイル》を起動。同じく高熱のプラズマを展開したそれが腕を貫き破壊した。

「VTシステムの存在をちーちゃんが知った時、どれだけ悲しんだか知ってるかな!? 知ってる筈ないよね、それを知ってればそんな風に罵れない筈だよっ！」

残る三本の腕の内一本が突如変形した。全ての指を合わせる様に固まりそしてドリルの様に回転し始める。そしてその腕を突きこんで来た。

「V計画は有ってはならぬ物なんだよ！ あの計画が、あの存在がちーちゃんを悲しませる！ いつくんを不安にさせる！ そんないつくんを見て箒ちゃんも戸惑う！ そして私を怒らせる！ そんな計画を潰して何が悪い!? 私は正しい選択をした！」

突きこまれたその腕を寸前で回避するが少し掠ってしまった。途端に装甲が削れ、爆発的な衝撃が全身に走る。

「なのにその残滓がまだここに居る！ 何なんだよお前、悲劇のヒー

ロー気取り？ カワイソウナ僕を見て？ ふぎけるなっ!! それ
どれだけ許せない事か分からないかな!? お前は被害者じゃない!
私達にとつては加害者以外の何物でも無いっ! お前の存在自体
が有つてはなら無いんだよ! だから私はお前を消す! ちーちゃ
んも、いつくんも、箒ちゃんも楽しく過ごす為の世界にお前は必要
ない!」

衝撃で揺れる機体。その隙にドリルの腕が振りかぶられ、今度こそ
こちらの中心にその矛先を突き込もうと放たれる。だが、

「黙れ……」

対し静司も左腕を変形させる。鉤爪が合わさり槍の様な形状へ。
矛先に光が集まり周囲が帯電していく。そしてその矛先でドリルの
腕を迎え撃った。

「非常識の塊の癖に……今更常識ぶるなあああああああああああ
ああああああああ!」

《クエイク・アンカー》零距离起動。ぶつかり合った矛先を中心に爆
発的な威力の衝撃波が放たれた。光が撒き散らされ、衝撃でアリーナ
が崩れていく。そして一瞬の拮抗の末、黒翼が微力ながら勝った。ド
リルの腕の表面が波打ち、そして内部から破裂する様に破碎されてい
く。衝撃はそれに留まらない。束の周囲に浮かんでいた武器たちも
衝撃で破壊されていき、一気に武装が減っていった。だが束本人は無
事だ。その驚きに目を見張る姿目掛けて静司は再度鉤爪を叩き付け
る。

「例えお前が正しくても!」

一度必殺の威力を放った鉤爪に先程の様な威力は無い。故にシー
ルドは破れずただ叩き付けるだけだがそれすら構わず腕を振るう。

「世界中がお前の行動を認めても! 例え後ろ指を指されよう!」

善でも、悪でも。白でも、黒でも関係ない。そもそも束の言う事に
は一つ決定的な間違いがある。自分は実験そのものを恨んでいるの
ではない。あの実験が禁忌と言う事くらい知っている。だから静司
の中にある想いは唯一つ。そう、唯一つだけなのだ。

「俺は! 俺は姉さん達を殺したお前を殺す! 本音達を傷つけたお

前を殺す！ 俺から全てを奪おうとするお前を殺しつくす！ そうだ俺は——」

「それが勝手だと言うんだよ！ 被害者気取りのガキ！ だからこそ私は——」

東も残った最後の腕を振るう。そしてお互いに武器を叩き付け合い、叫ぶ。

「お前の存在自体が許せないっ！」

「姉さん……」

大急ぎで地上へ戻った箒達が見たものは、お互いに罵り合いつつ死闘を繰り広げる二人の姿。その姿に箒は胸を締め付けられる。

正直に言えば自分は静司とはあまり仲良くない。いや、どちらかというと関わる事が少ないと言うべきか。別に嫌っているとかそういう訳では無い。だが気がついたら自然にそういう形になっていた。そしてその事を今まで深く考える事は無かった。

だが、だがもしかしたら何も考えて無かったのは自分だけで本当は川村静司は自分を見て色々考えていたかもしれない。静司の言葉が正しければ自分は姉達の敵である人物の妹。そんな存在が眼の前において、彼は一体何を思ったのか。それは箒には分からない。

そして姉の事を考える。昔はとても好きだった。自分でも懐いていたと思う。だがいつの間にか疎遠になり、姉がISを発表し自分の生活ががらりと変わってからはそれがより顕著になった。自分は姉を恨み遠ざけようとした。しかしそれでも姉は気にせず時折電話を寄越してきた。こちらの事を気にしていた。ISを頼めば本当に持ってきてくれた。それなのに自分は姉に対しては何もしていない。ただ何時も与えられるだけ。自分はただそれを享受していた。どうせ姉は何時もの道楽気分だろうと。勝手にそう思い込んで。

だが今空で戦っている姉はそんな自分の考えとは遠く離れたものだった。

静司は姉は人を殺したと言った。それも聞く限りかなりの数を。

そしてその人物の中に静司の姉が居たと言う。それを聞いてまず思った事。それは人殺しに対する嫌悪。もとより姉に対して複雑な感情を頂いていたが故にそれは大きく感じてしまった。

だが今は聞いてしまった。姉の言葉を。行動の理由を。それを聞いて自分はどう感じた？ 一瞬でも嫌悪感を感じて悪いと思ったか？

答えはわからない。嫌悪感は未だ残っている。だが初めてみる姉の感情的な姿に動揺し、うまく答えがまとまらないのだ。このままではいけないと思う。今、頭上の二人は文字通り死闘を繰り広げている。そしてこの戦いはおそらくどちらかが倒れるまで——そう、死ぬことでは終わらない。それだけは分かった。

もし姉が勝つたらどうなるのだろうか？ 静司は死に、そしていつも通りの生活が戻ってくるのか？ 答えは否だ。あの一夏が友人と思っていた人物の死の前に、普段通りでいられるとは思えない。きつと何か壊れるという予感がする。

ならば静司が勝つたら？ 姉は死に、そして二度と会えない。もしかしたら世界の為にはその方が良いのかもしれない。姉は世界に災厄を振りまきすぎた。心の底でもいつかはそういう日が来るのではと思っていた。

だがその姉が戦う理由が、千冬や一夏。そして自分の為だと言う。それなのに姉の死を考える自分と言う存在に箒は底知れぬ嫌悪感を感じた。

何が正しいのか分からない。だが今日の前で繰り広げられている戦いはきつといけない物だ。そうだ、だからこそ止めなければなら無い。一夏も、千冬も今はどこか呆然としてる。ならば姉を止められる可能性があるのは自分じゃないか。それがきつと一夏の為になる。だから、

「姉さん！ もうやめて下さい！」

剣道で鍛えられたせいだろう。箒の叫びは大きく響き、その声に静司の黒翼と束、その両方が振り向いた。そしてその途端、先ほどまでの憎悪に満ちた顔を捨て束は何時もの無邪気な笑顔に戻る。

「駄目だよ箒ちゃん。コレはやらなきゃいけない事なんだ」

「そんな事ありません！ 何か、何か別の方法があるはずです！ 川村も！ もうやめてくれ！」
「……………」

静司は無言。それに言いようも知れない不安を感じつつ箒は叫ぶ。

「姉さん達に何があったのか、まだ正確にはわからない！ だけどこんな状況は私は望んでない！ もっと他の方法で——」

「あるよ」

「え？」

突然返された言葉に声が詰まる。そんな箒の顔を見て束は「うふふ」と笑った。

「本当はね、もつとこつそりやろうと思ってたんだ。だけどそうだね……。もう色々知られちゃったんだし、だったらもういいかなって」
何だ、この悪寒は。とてつもなく嫌な予感がする。自分は何か、押しではいけないボタンを押してしまった。そんな予感が急速に湧いてくる。

「箒ちゃん、私もオトナだからそれなりに知ってるんだよ？ 何の痛みも無しに望む結果は得られないって」

「ねえ……さん？ 何を……」

「だから無人機を送ったり色々やったんだ。早く強くなって欲しかったからね？ まあ少しズルもしたけど概ね順調だったし、そろそろ始めてもいいかな？」

「何を考えている……！」

「お前は黙ってるよ」

「せーじ！」

「静司!？」

鉤爪とせめぎ合っていた機械の腕が突然爆発し、黒翼が吹き飛ばされていく。本音とシャルロットが悲鳴を上げ、一夏達も息を飲む中、束は空中で笑った。

「そうだね……丁度いい相手も居るし、これは最後の痛みだよ。安心して、痛みの後にはきつと箒ちゃんやちーちゃん。いつくん達にとつ

てとても良い世界になる筈だから。前にも言ったよね？ 種は撒き
終えたって。後は邪魔なアレを消せば万事うまくいく」

「束！ 一体何を考えている!?!」

「そんなの決まってるよちーちゃん。私は何時だって、箒ちゃんや
ちーちゃん。そしていつくんの事を考えるよっ！ だから——始め
よう」

底知れぬ姉の笑顔。それを見て箒は気づく。束が『ある』と言った
のはこの事態の解決方法では無い。束が望み、そして自分達が望んで
いると思っている結果を得るための手段であり、結局その内容には川
村静司の抹殺が含まれている事に。

「姉さん!?!」

束の指がコンソールを叩く。その瞬間、一夏達が光に包まれた。

「なっ!?! 白式が!?!」

「紅椿!?! どうして勝手に」

「どういことよコレ!?!」

「わたくしも……一体これは!?!」

「馬鹿な、制御できん!」

「そんな……っ!?!」

「まさか……」

「お姉ちゃん!?!」

一夏、箒、凜、セシリア、ラウラ、シャルロット、楯無、簪。その
それぞれのISが本人達の意思なく突然展開された。それらは直ぐ
に出力を上げていくと宙に浮きあがっていく。そしてそれぞれが武
器を展開し構え始めた。そしてその矛先に居るのは、黒翼。それを見
た瞬間、黒翼が、静司が力のかぎり叫んだ。

「このクソ野郎がああああああああ!」

刹那、8機のISが黒翼に襲いかかった。

IS学園。何かと問題の多いこの学園を監視している者達が居た。
女を中心としたその者達の名は【^{アン}名もなき兵^{ネイ}たち^{ムド}】。それはIS学園

に多く存在する貴重なデータやISを機さえあれば奪う為に組織された米軍の特殊部隊だった。

彼女らは今慌ただしく動き回っている。何故ならつい先程、突然IS学園内に警報が響いたかと思えば地下から何かが飛び出してきたからだ。そしてその正体を確認して彼女達は驚愕した。世界中からその身を追われている天災、篠ノ之束。そして今ある意味最も注目度が高いとも言える黒い翼のIS。それがセットで現れたのだ。しかもその両者は戦っている様に見えた。これは好機だ。

「タイミングを見て奇襲をかける。博士と黒いIS。その両方を確保する。両方が不可能な場合は博士を優先して確保だ」
「ですが上層部からISの使用を控えるようにと……」

「例の制御を乗っ取られるという話か？　だがその張本人が目の前に居るんだ。そんな隙も与えず拘束すればいい。これは千載一遇のチャンスだ。他の国も動いているし先を越される訳にはいかん」
「了解しました」

命令を下すと部下が下がっていく。その様子に満足しながら隊長である彼女は自らのISをチェックする。機体の名はファンク・クエイク。但し通常のそれと違い、ステルス仕様の特殊型だ。機体色もイーリス・コーリングが使うタイガーストライブでは無く、ネイビーブルーの目立たない物である。

「退屈な任務だったがようやく面白くなってきたな」

機体反応は良好。これなら今すぐにでも飛び立てる。後はタイミングだ。静かに笑いつつ学園の様子を見ようとした時だった。不意に視界の端に奇妙な物が見えた。

「少女……？　なぜこんな所に」

それは銀髪で杖をついた少女だ。目は閉じているが体はこちらに向けている。その奇妙な様子に警戒しつつ、ふと思う。何故誰もあの少女の存在に気づかない？

それを確かめようと部下に声をかけようとした時だ。閉じられていた少女の眼がゆっくりと開く。そしてその姿に思わず声を上げそうになった。

黒と金。その少女の瞳は白めの部分が黒く、黒目の部分が金色なのだ。その異様な姿に危機感が跳ね上がる

ISを戦闘機動。即座にライフルを構えると躊躇なく引き金を絞った。対IS用のライフルから放たれた銃弾が少女の居た周囲を粉々に砕いていく。よしこれで良い――

「隊長!？」

「何をっ!？」

「え……?」

銃撃による粉塵が晴れていく。するとそこに少女の姿は無く、代わりに無残に引き裂かれた部隊の車両や、血を流す部下達の姿があった。馬鹿な！ さつきまではそんな所に無い無かった筈なのに！

混乱する中、またしても視界の端に移る少女の影。ぎりつ、と歯を噛みしめると銃を向ける。同時にハイパーセンサーで探索するがそこに少女以外の姿は無い。今度こそと銃弾を叩き込む。だが、

「あああ!？」

またしても少女の姿は消え、そして現れたのは銃弾で引き裂かれた部下の姿。そんな光景に益々混乱していく隊長の視界に更に異様な物が写る。

それは自分を取り囲むように佇む大量の銀髪の少女の姿。それらがゆつくりと近づいてくる。

「っ!？」

声になら無い悲鳴。そして闇雲に銃弾を撒き散らしていく。

『ワールド・ページ完了』

血と涙に溢れる思考の中、どこからかそんな声が聞こえた。

「さて……」

軽くウォーミングアップを済ませた彼女は歩き出す。銀の長髪の閉じられた相貌。可愛らしく着飾られた服と歩行を補助する杖を使用するその姿は中々に異様だった。

「束様も始められたようですし、私も始めるとしましょう」

所詮、幻覚を見せる事など機能の一つに過ぎない。この力の本来の目的は別の所にある。そして遂にそれを行うときが来た。

「あの方達にとって不要な物を世界から切り離す。これはその始まり」

小さく、言い聞かせるように呟くとクロエ・クロニクルは自らの役目を果たす為に歩き出した。

75. 『馬鹿め』

その日、ジェリー・ホイップルはいつもの様に仕事をする為に出社していた。彼女が務めているのはアメリカにあるIS技術研究所。そして仕事は既存ISの効率化。第三世代の開発競争は続いているが、それ以外にも今ある技術をより洗練する為の研究は必要であり、彼女の仕事こそがそれだった。

いつもの様にオフィスへ向かいコーヒーを入れる。早番の同僚に声をかけつつデスクの上の資料を適当に確認し、そして実験棟へと向かう。そんないつも通りの一日。今日はイーグル型の精密検査が予定されている。そう言えばこないだIS学園で何か問題が起きていたからその関係だろう。

そういえばあそこには男性操縦者が二人居た。研究者間では二人目を実験台としてくれればいいのにといい意見も多いが彼女は別だった。一人目である織斑一夏。あちらこそがIS適性の謎を解く鍵になるのではないかと思っている。だから実験するなら織斑一夏の方だ。実は密かに『もし織斑一夏を好きないように解析できたら』という妄想の実験プランは作ってもいた。陽の目を見ることは無いだろうが、それを眺めながらISについて色々妄想するのが彼女の最近のお気に入りだ。

どこか一般人とズレていながらもこれが彼女の日常。だがそんな日常は前方から顔を歪ませて走ってきた研究員の言葉で破られる事となる。

「しゅ、主任！・ ISが……っ！」

「何が起きたの!?!」

ただ事では無い。即座にそれを理解して研究員をつれて走り出す。「突然動きが止まったかと思ったら、この研究所内のデータを吸い出し始めたんです!」

「何ですって!?! 停止信号は!?!」

「試しましたが駄目です! 受け付けません!!」

報告に驚きつつも走る。この先はあと二つのドアを抜ければIS

実験室だ。だからそこへ向かう為にドアにたどり着き、そして開こうとした所でそのドアは突如反対側から破られた。

舞い散る破片とその衝撃に背後へと倒れ込む。そして顔を庇った両腕の隙間から見えたそれに、ジェリーは驚きの声を上げた。

「イーグル!？」

それはアメリカの第二世代IS。灰色の機体はその搭乗者を乗せたまま扉を突き破り現れたのだ。そしてそのイーグル型ISはジェリーの正面で浮遊している。搭乗者は意識が無いのか、どこか虚ろな目で虚空を眺めていた。

「い、一体何が……」

『入手したデータより危険人物を推定。ジェリー・ホイップル——該当』

それは紛れも無く虚空を見つめる搭乗者から漏れた声だ。だがそこには感情は込められておらず、まるで機械の様に淡々とした声だった。

『対象を確認。排除します』

「え?」

その言葉を理解するより早く、凄まじい速度で振るわれたイーグル型の腕のジェリーの首の上を横切った。

「う、うわあああああああああああ!？」

ごとりと、とジェリーの体が倒れ込む。その体は首から先は無く、周囲におびただしい量の血を流し始めた。それをみて研究員が悲鳴を上げて後ずさる。

『不要物の排除、完了』

その腕を真っ赤に染めたイーグル型はそう呟くと再び進みだした。

「経過は順調ですね」

クロエ・クロニクルはつい先程アメリカの特殊部隊が壊滅した場所で静かにそう呟いた。

彼女の周囲は血に染まっており、その中心には動きを止めたファン

グ・クエイク。ネイビーブルーだったその機体色も今は返り血で赤く化粧されている。そんな光景には興味もくれずにクロエが見るのは自分の視界に映し出される情報だ。

現在、世界中のISは通常の機能を停止させこちらからの優先命令に従って活動している。その命令とはシンプルに言ってしまうえば二つだ。

一つ。ありとあらゆる企業、組織、軍隊から情報を奪い取りここへ集積する事。

そしてもう一つ——今後の世界に不要な者達を排除する事。

篠ノ之束が望む世界。自分の命の恩人が願う世界。それを造り出す為だけに用意されたこの機体【黒鍵】を自分は受領した。己の命を救う代わりにISと同化するという手段をもつてして。だがこの事に恨みも後悔も無く、むしろ感謝と尊敬しかない。だから自分は、自分を救ってくれた神の如き存在の手伝いをするのだ。

「束さま。集積したデータの中から必要な物を精査いたしました」

『おっけーさすがくーちゃん仕事が早くてかわいいね！ どこかの馬鹿とは大違いだ！』

帰ってくる束の声。それはいつもの様に無邪気の様で、どこか張りつめた雰囲気がある。その原因は紛れも無くあの男、川村静司のせいだろう。主たる人の心を煩わせるその存在に強い殺意を抱く。叶うなら今すぐにでも自分が向かい殺してやりたい。だがいまは駄目だ。大切な役目を請け負ったからにはそれを完遂するのが恩に報いる事なのだから。

「では当初の予定通り、戦闘データ。機体データ。武器データ等を纏めたものを白式と紅椿に転送いたします」

『おっけーおっけー。じゃあちやきつとよろしくねーあとで褒めてあげようー！』

「ありがとうございます」

主たる人物の様子は相変わらずどこかおかしい。だからこそ自分は自分の仕事をこなす。あの人の手をこれ以上煩わせない為に

悪夢。

目の前で怒っている状況を表すにこれ以上に適した言葉は無いだろう。

「くそっ!?! 何故言う事をきかん……!?!」

「止まれ……止まれえええええ!」

突如としてISを展開させられた一夏達。それが強制的に動きだし、そして黒翼に襲いかかっている。ラウラがワイヤーブレードを射出し、それを躲した黒翼の元に鈴の甲龍の衝撃砲が叩き込まれる。そしてバランスを崩した黒翼に楯無、簪、セシリアの銃撃が襲いかかっていく。

「駄目、完全に制御できない!」

「逃げて!?!」

「どうしてこんな……っ!」

彼女達の顔に浮かぶのはどれも悲壮だ。そしてそれは千冬も同じだった。ほんの少し前まで、一緒に生活し授業を受けじやれあつていた教え子たち。それが今、目の前で強制的に殺し合いをさせられているのだから。

「やめろ……やめてくれ……」

眼の前で明かされて行った真実達。そのどれもが千冬の胸を深くえぐる。川村静司とVプロジェクトの存在。それを消す為に殺戮を行った束。黒翼の正体。束の行動理念。その何もかもが千冬を苦しめる。

一体自分はどうすればいい? 束を罵ればいい? それとも忌まわしい実験の生き残りである川村静司を束と共に今度こそ消せばいい? 違う、そんなんじゃない。それは結局責任から逃れているに過ぎない。それは許される事では無い。たとえ全てでは無いにしても、今のこの状況を、今の世界を創った事に千冬は加担した様な物なのだから。

白騎士事件。それに加担する事でISの有用性を認めさせた。そもそも何故あんな馬鹿げた事件に協力したか? それは言ってしまう

えば東の為だった。

他者より優れ過ぎていたが故に理解者が少なく、本人もそれをしようとしないう。故に世間からは煙たがられ、本人も時折周りを巻き込んで迷惑をかけていた。

だがそんな東がISを発明した。宇宙空間での活動を想定したマルチフォームスーツとしてそれを紹介された時、千冬は嬉しかった。あの東が人の為になる様な物を作った事に。

だが現実には思い通りに行かない。東が開発したその画期的な発明は碌に注目されず、相手によつては一笑される程だった。それが悔しかった。何故、理解しようとしなかったのか。何故、認めないのかと。

だから東に協力した。してしまった。当時14歳だった小娘は親友の発明を認めさせてやりたいという想いで白騎士事件の片棒を担いでしまったのだ。その東の本当の真意すら知らぬまま。

今思い返しても軽率であつたと思う。考え無しだったとも思う。他にもっと方法を探るべきだったとも思う。だが両親の失踪以降、なんだかんだで明るさを振りまいていた東に救われていたの事実だったのだ。その事に感謝し、自分も何かをしてやりたいと思う事は間違いだらうか？

結局、東と千冬はお互いを想いあつてしまったが故に決定的なミスを犯し、そしてそれを直す事は無かつたのだ。一夏の入学後に起きた複数の事件。特に臨海学校の時には東に忠告もした。だがそれだけだ。本当なら、あそこで本気で止めておくべきだったのだ。それをしなかつた事がツケとなり、今日の前の地獄として帰ってきている。

「東……っ！ もうやめろ！ 一夏達はこんなこと望んでいない！」
「ちーちゃんは優しいなあ。だから安心していいよ！ 全て終わればちーちゃん達の敵はこの世から消え去るんだからね！」

上空で笑いながら静司達の戦いを見つめていた東は狂った様な笑みで返す。そして手元のコンソールを叩くと千冬達の前にスクリーンが映し出された。

「なんだ……これは」

「嘘っ……ISが!？」

「そんな……」

映し出されたのはニュースの映像だ。そしてそのどの画面でも突如と始まったISの暴走を取り上げている。世界中に存在するISCコア。その全てが制御を離れ、あるコアはハッキングを続けありとあらゆる情報を奪い、あるISは突如として動きだし何処かへと攻撃を仕掛けていく。その光景に千冬、真耶、本音が顔を青ざめさせる。

「今ね、世界中の情報という情報を集めてるんだ。どこかの大統領の愛人の名前から、次の宝くじの当選予定番号まで全てをね！ やったねちーちゃん、大金持ちさんになれるよ！」

「ふざけるなよ束！ そんな事を——」

「ちーちゃんたちの親の事もわかるかもしれない」「っ!？」

千冬の息が詰まる。束はそんな千冬を見つめながらまるで聖母の様な笑みを浮かべている。

「見つけたらどうしようか？ まずは言い訳位は聞いてみないとね？ それから二度と逃げられない様に足を腕いでおこうか？ それともいつその他の連中みたいに——殺す？」

「な……ぜ……」

戦慄が走る。束は……友人がここまで簡単に殺人を口にする事に。そして気づく。束の浮かべるその聖母の様な笑み。あれはおかしい。本来の束はもつと無邪気に、それこそ子供の様な笑みを浮かべる様な人間の筈だった。だが今は何かを隠す様に作り物の笑顔を張り付けている。その理由は何だ？

「束……お前は苦しいのか？」

問いに束はきよとん、とした顔をした後また笑った。

「ちーちゃんは鋭いなあ。まあ別に見聞きもしたことない知らない連中がいくら死のうが構わないよ？ ただね、気分悪いのは本当かな？ ……あの時を思い出すから」

あの時。それは束がV計画をこの世から消し去った筈の日の事だろう。束は笑みを消して視線を戦闘中の黒翼へと移すと気分悪げに鼻をならした。

「私に人を殺させたのはアイツらだ。ちーちゃん、私にスイッチを入れさせたのはね、アイツらなんだよ」

ね、そうでしょう？ と首を傾げて見せる束に千冬は何も言う事は出来なかつた。だが束は構うことなく笑顔に戻る。

「それともう一つ。集めたデータはねある程度精査をしてからいっくんと箒ちゃんのISに送られているのです！ ぶいぶい！」

「何？」

「私の作った中でも最高の機体達。その中の最後の一機の役目でね？」

第二の私たりうる処理速度と力を兼ね備えた子に頑張ってもらっているのです。いやー私一人でも出来ない事は無いけどちよーと面倒だし効率って大事だよねっ！ ああ、今度ちーちゃんにも紹介するよ」

「そ、そんな事をしてどうするつもりなんですか!?!」

今までは千冬と束の会話に入って来れなかつた真耶だが流石に看過できない話に叫ぶ。

「んー？ ああ、いつかのおっぱい魔人か。しかも隣にもおっぱい子魔人連れてるしちーちゃんを誘惑する気かな？」

「そうじゃありません！ 博士はデータを織斑君達の下に集めてどうする気ですか!?!」

「答えろ、束」

「ちーちゃんに言われちゃ仕方ないね！ けど簡単な事だよ。いっくんと箒ちゃんには新しい世界の王様になってもらわなきゃね」

「王……？」

「そっ！ 余計な連中を全て消した後も油断は出来ないしね？ けど世界中の情報が全て手に入るのならいつでも先手を打てる。対抗策を打てる。そして勝利できる。つまり世界は私たちのものだガハハ！ ってねっ！」

「馬鹿か！ そんな事になれば誰もがISを捨て——」

「捨てるかな本当に？ 時間と共に深く根付いた技術と武器を。自分で作った訳でも無いのに我がもの顔で調子に乗っていた連中が、今更それを捨てる事なんて本当に出来ると思う？ けどそうしたらI

Sを持つ私達に今更錆び臭い旧式兵器で立ち向かって来るだけだからどつちでもいいと思うんだ。どうせ勝てっこないんだし」

「まさかISを世界に配布したのは……」

「勿論この為だよ！ 単純な方法なのに誰もかれもが引かかって最高だね！」

つまり、つまりは束の目的は最初から最後まで一つ。

「さあちーちゃん！ 新しい世界を手に入れよう！」

自分勝手な理想郷を創る事だった。

青いレーザーが肩を貫く。形容しがたい痛みと熱さに声を漏らししてしまう。それでも静司は機体を無理やり動かし上昇していく事で続く攻撃を回避した。

「あああ……!?!」

震える様な声はセシリアのものだ。制御できない自分のISが傷を負わせた事に顔を青くし震えている。だが静司にはそんな彼女にかける言葉も暇も無い。

逃げた上空。そこへ甲龍が襲いかかる。振り下ろされた《双天牙月》を左腕で受け止めるが、同時に左右に接近警報。

「くっ……避けてー！」

「制御できないー！」

それは楯無のミスティアス・レイデイと簪の打鉄式式だ。両者が射撃武器を手に迫りそして引き金が引かれた。

押ししかかってくるガトリングガンと荷電粒子砲。咄嗟に鈴の甲龍を蹴り飛ばし距離を取ると下へと逃げる。眼前を銃弾の嵐と光が交差していく中、背筋に悪寒を感じた。

——高エネルギー反応確認。

機体が数瞬遅れて警報を発する。そして背中越しに見たのはラウラのシユバルツェア・レーゲンが大型レールカノンをこちらに向けている所だった。

「ちいっー！」

緊急制動。方向転換。PICでも殺しきれないGが一瞬襲う。それを歯を食いしばりつつ耐えて黒翼を横へと飛ばす。だが少し遅かった。

轟音。その巨大さに比例した砲撃音と共に放たれたレールカノンが右足に掠った。途端に走る衝撃と痛み。右足の鉤爪が砕け、他の装甲も剥がれ落ちていく。凄まじい痛みが走り黒翼がバランスを崩す。

「このっおおおー」

錐揉み回転する機体の制御に全力を回しつつ、静司は状況の不利さを実感していた。

そもそも専用機を8機相手にすること自体が異常なのである。通常ならばあつと言う前に撃墜されて当然である。静司が未だしぶとく生き残っているのは一重にこの状況を何度もシミュレートしてきたからに過ぎない。

篠ノ之束と敵対する以上常に最悪を想定する。それがEXISTの出した結論でありその為に何度も行ってきたシミュレート。社に居ない間も暇さえあれば頭の中や携帯端末で何度もそれを繰り返ししてきた。その経験が今も静司を繋いでいる。

だがそれも完璧とは言えない。そもそもそのシミュレートの結果は散々だったのだ。それも当然ともいえる。専用機複数相手に単機で勝てる者なんてこの世界に何人いると言うのか。更には簪の存在もある。静司が今までシミュレートしてきたのは一夏達と最近では楯無のみ。つい先日完成した打鉄式相手にはやっていないのだ。故に簪の行動パターンの予測は甘く、その隙を他の機体に突かれてしまう。

そしてもう一つ。静司を追い詰める要因があった。それは一夏と等の白式と紅椿だ。この2機の動きが想像以上に早く、手強い。そしてそれは時間が経つことにより洗練されていくのだ。静司は知らない事だが、今この2機は世界中から集められたデータを元にそのシステムを更新し続けておりそれが原因である。

「静司ー」

丁度その2機が態勢を立て直したこちらに突っ込んできていた。

白式の手には《雪片式型》がそして紅椿の両腕には《雨月》と《空裂》が握られている。

「何で止まらねえんだよ白式！ それにさつきから変なデータが……！」

「姉さん、やめて下さい姉さん！」

叫ぶもそれは意味は無く。2機が黒翼へと襲いかかる。白式の振るう刃を咄嗟に左腕の鉤爪で受け止めお返しとばかりに蹴りを叩き込もうとするが、それは驚異的な反応で白式が動き上に逃げることで躲かれた。そしてその背後から迫る紅椿。《雨月》の先端が光り、そして刺突と同時に放たれたレーザーが静司のわき腹を貫く。

「ぐっ……っのおー！」

痛みを堪えつつ紅椿が振るう《空裂》を右腕受け止める。だが刃が当たった所から放たれたエネルギー波が弾け、右腕装甲が砕けてしまう。このままでは不味い。

「離れ、ろー！」

《アサルト・テイル》起動。背後から突如として飛び出した尾が紅椿を弾き、同時に白式も弾く。2機が宙に舞い、姿勢を崩した隙に距離を取ろうとした時だ。どんっ、という衝撃と共に黒翼のわき腹付近にラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡがぶつかった。そしてそれに乗るシャルロットは涙を流し、悲痛な声で、

「い、嫌っ……い！ もう嫌だよっ！」

叫びと同時、ラファールのシールドから姿を見せたのは69口径のパイルバンカー《灰色の鱗殻》。切り札であるそれが黒翼のわき腹に直接叩き込まれた。

「がああああっ!？」

「いやああああああああああああああ!？」

漏れる呻きと己のやった事に悲鳴を上げるシャルロット。装甲を貫いたそれは肉体にも響き黒翼のわき腹から血が噴き出す。その返り血を浴びてシャルロットの眼から光が消えた。だがそれでも動くこととするラファールを、痛みをこらえながらも殴り飛ばし距離を取る。だがその行動によりさらに傷が広がり血が失われていく。

「いっふっ……」

咽て口から血があふれ出る。装甲内部に溜まったそれを黒翼が自動で排出していく中、周囲を囲む8機のISの姿に顔を歪めた。

「静司！ とにかく逃げろ！ 制御が利かないんだ！」

「冗談を……言うな！」

白式が動きだし《雪片式型》を振るう。咄嗟に鉤爪で防御。押し込まれてくる刃を押し返しつつ獰猛な表情を浮かべる。そんなこちらに一夏が驚いた様に見開いた。

「ようやく……ようやく何だよ。今度こそあの女を殺すまで、逃げられる訳がねえだろおおお！」

スラストー全開。そして一夏に向けて瞬時加速を発動させた。本来なら一瞬で移動するための技術の推力を全て白式を押し返す事だけに使う。その瞬間的な力で雪片式型ごと白式を押し返した。

「何でだよ！ 何でだよ静司！ 殺す以外にも何か方法が——」

「無い！ 今のお前達がいい例だろ！ 強制的なISへの介入までして好き勝手に暴れる様な奴を野放しにする事自体がおかしいんだよ！」

「だからって殺さなくても良いじゃねえか！ お前が恨んでいるのはわかる！ だけど殺せば全て解決するのかよ！？ そうすればお前は満足なのか！？」

「当然だ！」

白式が凄まじい速度で再度迫り刃を振るう。対して黒翼が、静司がそれに応戦する。刃を受け止め蹴りを繰り出す。白式がそれを避け左手の多機能武装腕《雪羅》から荷電粒子砲を放った。咄嗟に静司が身を捻りそれを躲しつつ両膝のワイヤーブレードを射出。弧を描いて放たれたそれが白式を絡め取るべく迫るが《雪片式型》と《雪羅》両方を駆使して白式は器用にそれを弾いた。そしてその両方に零落白夜を発動させると再度激突する。

「その為に……その為だけに生きながらえた！ それを果たそうとして何が悪い！」

「ふざけんなよ静司！ じゃあ今までの生活は、学園での事はどうで

もいって事かよ!? お前にとっては何とも思っていないっていうのか!？」

「そんな訳があるか!!」

両腕の鉤爪に光が灯る。《プラズマクロ》を起動したその腕で零落白夜を受け止めるが、一瞬でその光が消えた。零落白夜のエネルギー無効化だ。加えて右腕は先の紅椿の攻撃で破損していたのが拙かった。遂にはその鉤爪ごと右腕の武装が完全に破壊されてしまう。

「叶うならここに居たいさ! 一夏達と友人で有りたいたいと思った!

彼女達と共に生きたいとも願った! だがそれら全てを壊しに来たのがあの女だろ!?! 全てを奪おうとしている元凶を殺して何が悪い!」

「なら諦めるなよ! 一緒に誰も犠牲にならずに済む方法を探せよ!」

「そんな簡単に解決する段階はとうに過ぎた! 何より、俺は姉さん達を殺したあの女を許す事など無い!」

二人が刃と爪を打ちつけ合う間にも他の機体達が黒翼へと襲いかかる。ブルー・ティアーズのビットからのレーザーが翼を穿ち、甲龍の衝撃砲が装甲を砕く。シュヴァルツエア・レーゲンのAICに動きを止められ、ミステリアス・レイデイのナノマシンを使った爆発技《清き熱情》が全身を打つ。その爆発が晴れた所にラファールと打鉄式式の銃弾とミサイルの雨が更に襲いかかり確実に黒翼の装甲を砕いていく。

徐々に削られていく機体と体力。もはや装甲を突き抜け各所から血を流しており、それを見て攻撃を仕掛けた本人達が悲鳴を上げている。あのラウラですら涙を流しながら必死に止めようとしている姿に挟られるような痛みを感じた。

だがそれでも。それでも逃げると言う選択肢は無い。例え何があっても。どんな手を使っても自分は目的を果たす。そう決めたのだから。

「静司……それでも俺はお前を止めたい! だけど、だけどその方法はこんなんじゃないのに! 何でこんな事に!」

「一夏。お前は何も悪くない……。悪いのはきつと、こっちの都合に皆を巻き込んだ俺達だ」

頭が痛い。血が流れていく。視界が狭まっていく。それでも動くとする意志は消えない。そんな静司に白式がその《雪片式型》の切っ先を構えた。その刃には零落白夜の光が灯っている。

「やめろ……。これ以上やったら本当に静司が……。だからやめろ白式！アイツにはまだ言ってるやりの事が山ほどあるんだよ！ 文句があるんだよ！ 友達なんだよ!? だからやめろ白式イイ!?」

そんな一夏の叫びは叶わず、白式はその大型ウイングスラスタを吹かし瞬時加速を発動させた。そして眼にも止まらぬ速さで駆け抜けた白式は遂に黒翼の腹を指し、

「ありがとう一夏。そして……。すまん」

猛スピードで激突した両者はバランスを崩し、アリーナへと墜落していった。

「せーじ!?!」

「一夏!?!」

奇しくも、二人が墜落したのは最初のアリーナ、本音や千冬達が居る近くだった。本音と千冬は急ぎその場に駆け寄り、そして絶句する。

「せーじ!?! いや、いやだよー」

墜落し出来たクレーターの様なその中心。力を無くし、項垂れるかのような姿の黒翼と、そのわき腹に雪片式型を突き刺し、返り血で赤く染まった白式の姿そこにあった。

それを見た瞬間、本音は直ぐにその場へ駆け寄る。落下の衝撃か熱気が籠る中を構わず進み二人の元へと辿りついた。

「あ……。ああ……」

白式の一夏が掠れるような声を漏らしながら《雪片二型》を抜いた。それは操られていたとはいえ、己の機体がやった事に対する恐怖の呻きだ。そしてそんな一夏の正面の黒翼はぴくりとも動かない。

「せーじ、せーじ!!? お願いだから何か言って! せーじ!」

泣きながら縋りつく様に黒翼に向かい叫ぶ本音。黒翼の装甲は度重なる激しい動きとダメージのせいも熱く、触れれば火傷しそうな程だったが、それに構わずただひたすらに身を案じる。その手には火傷が出来、黒翼の各所から流れる血によって汚れていく。

やがてだ。その声が届いたのか小さく黒翼が動いた。機体を軋ませながらもゆっくりと面を上げ、装甲越しに本音と顔を合わせる。その動きが止めとなったのか、頭部装甲に亀裂が入り砕け散った。そして血と汗に塗れた静司の顔が現れると涙で滅茶苦茶だった本音の顔に希望がさした。

「ほん……ね……」

「せーじ! 大丈夫? 痛い? 早く、早く治療を」

慌てつつもなんとかしようとする本音、その頬を黒翼の鉤爪が優しく撫でた。

「せーじ……?」

「離れ……ろ……」

「どうして——」

「何だ、まだ生きてたんだ」

頭上から降り注ぐ声。咄嗟に振り向くと少し上空から篠ノ之束がゆっくりと降りてくるところだった。

「本当にしぶといね。いい加減見てて不快だよ? いい加減最後に……なんの真似かな、それは?」

束の顔が不快気に歪む。その原因は黒翼の前に立ちふさがる本音だ。黒翼を庇うように前に立ち、そして束を見つめている。

「もう、やめて」

「はっ! 何を言い出すかと思ったら今さらだよこのおっぱい子魔人。邪魔だからどいてくれないかな? お前なんか構ってる程暇じゃないんだよ」

「いや」

「ああもう鬱陶しいなあ。ちーちゃん、こいつどけて貰っていいかな?」

真底鬱陶しそうに束が千冬に言うが千冬は首を振り、そして束に近づいていく。

「いや、駄目だ。束……お前ももう終わりにするんだ」

「なんで？　ちーちゃんはコレの存在を許せるの？　けど駄目だよ。よしんば許してもこいつが居る限り第二第三のV計画が始める恐れがあるんだから。憂いは消すべきでしょ？」

「それでも駄目だ。何があっても川村は私の生徒である事に代わりは無い。だからもうやめてくれ束。……私はこれ以上見ていたくない」
「ちーちゃん、それは現実逃避ってやつだよ。これの存在は絶対に何時か明るみになる。その時にも同じことを言える？　二度とあんな事は起きないと断言できる？　出来ないよね？　だから私は動いたんだから。ちーちゃん。物事ってのは望んでいようがいまいが容赦なく訪れるんだよ。だから先に対処しておくのが一番いいんだ」

そして束はその周囲に鋼鉄の腕を展開させた。その腕は先の戦いで残った最後の一本。それに剣を持たせてゆつくりと黒翼に近づいていく。

「待て束！」

千冬がそれを止めようとするが、突如目の前に展開された鋼鉄の楯によって遮られた。それは真耶も同様だ。更には横に、後ろに楯が展開され二人は閉じ込められた。

「ちーちゃんにはあんま見て欲しくないね。……で、お前はいい加減邪魔だしそろそろどいて」

「いやー！」

逃げることも震えることもせず本音はその場を動かない。その姿に束のいら立ちが増していき、本音の直ぐ傍まで近づき機械の腕を振り上げさせた。

「あつそ。ならいつそそいつごと……」

「く、くくく……ははは、はははははは……！」

突如黒翼が、静司が笑い声を漏らし始めた。その事に束が眉を顰め本音も驚いた様に振り向く。当の静司はボロボロの体を震わせながら小さく笑い声を漏らし続けている。

「何がおかしいのかな？ それともとうとう狂ったかな？」

「はっははは、いや……違う。まさか、お前が現実逃避を……語るとは思わなかったただけだ」

「何を——」

「だが、認めよう。胸糞悪いが、認めてやる……お前は確かに天才だ……唯の人にここまで事が出来る訳が……無い」

突然褒めだした静司に束は一層不審げに眉を顰めた。一夏も本音も意味が分からず哑然としている。

「何なのかないきなり？ まさか今更命乞い？」

「まさか……な。俺が、言いた……かったのは違う。篠ノ之束……お前は確かに天才だが……だからこそ、言つてやる——

—馬鹿め、と」

「ふん、そんな負け惜しみなんて情けないね。もういいからさっさと消えてよ」

そうして束が振り上げた腕の標的を静司へと代える。本音が静司を庇うように動き出す。一夏が目の前で起きるであろう惨状に悲鳴を上げる。そんな中、小さく静司が呟く。

「————つた」

「何？」

振り下ろされる刃。それを見据えながら静司は——
笑った。

「この瞬間を、待っていたと言ったんだ！」

刹那、静司が目の前の《雪片二型》を白式から奪い取る。そして駆け寄ってきた本音を優しく押し、安全圏へと避難させると奪い取ったその刃を振るった。

「え——」

そして驚きに目を見張る篠ノ之束の体を斜めに切り裂いた。

篠ノ之束は間違いなく天才だ。そしてその技術に底は見えない。ああ、悔しいが認めるしかない。あの女は間違いなく天才だと。

臨海学校の時も、先程の戦闘も自分は一度たりとも篠ノ之束本人に傷をつけるに至らなかった。それは彼女が常時展開しているシールドにある。どれだけ攻撃しても破れない異常な強度のシールド。あれがある限り自分この手は届かない。

破る手段はシールドの強度を上回る攻撃を加えること。それこそ《プラスマブラスト》でなら可能だと思われた。だがあれには時間と隙が出来過ぎてしまう。故にそれは使えなかった。

だがここにはもう一つ。そう、もう一つだけ篠ノ之束のシールドを破る手段があった。

エネルギー無効化

そんな反則染みた力。その力を持つ白式。そう、それこそが残された最後の手段。だからこそ静司はひたすらに耐えた。専用機達の戦いの中も少しでも力の消費を控えつつ、己の反撃の機会を。奇跡の様な一撃を加える為のチャンスを。

そしてそれは来た。完全に油断した篠ノ之束が近づき、そして白式が零落白夜を展開した状態で直ぐ近くに居るといふ奇跡の様なチャンスが。このチャンスを逃す訳にはいかない。

痛みも出血も何もかも押しつけて動く。白式から《雪片二型》を奪い取り、零落白夜の光が残ってる隙に篠ノ之束へと斬りかかった。

「え——」

振るわれた刃はシールドを物ともせず切り裂き、そして遂に篠ノ之束に、届いた！

「言った筈だ……！　どんな手を使おうとも、何があろうとも、今日この場で、貴様を、殺すと！」

手の中の《雪片二型》から光が消える。本来の持ち主以外が持ったことにより白式からエネルギー供給が断たれたのだろう。静司が使用できたのは、それまでのほんの奇跡の様な一瞬に過ぎない。だがもう十分だ。

「うおおおおおおおー！」

《雪片二型》を捨て、温存していた力を振り絞り、前へ。右肩から左わき腹にかけて切り裂かれ血を流す篠ノ之束へと跳びかかる。鉤爪

76. サヨナラ

戦闘による余波で荒れたアリーナ内部。そこで見た光景に一夏は絶句していた。

荒れに荒れたアリーナの内部でも最も酷い場所。壁が崩れ瓦礫を撒き散らしたそこに一夏の良く知る二人が居る。

腹を貫かれピクリとも動かないと篠ノ之束と。

その腹を貫いた左腕をゆつくりと引き抜いた川村静司。

腕が引き抜かれるとそこからおびただしい量の血が溢れだし、ごぶり、と束が咽せて口からも血を吐きだす。その正面に居た静司も体をふら付かせ、数歩後退すると膝をついた。

「束さん……静司……」

その光景が恐ろしい。ガクガクと体が震え、吐き気を催す。これは恐怖に他ならない。だがそれも当然ともいえる。ISを扱えると言っても一夏は一般的に見れば高校生に過ぎない。そんな子供が殺人の現場を——それも凄惨なその現場を見て平常心でいられる方がおかしいのだ。

「束っ!?!」

叫び声は姉のもの。今まで一度も聞いたことないような震えた叫び声で姉である千冬が束に駆け寄る姿を見て、一夏もようやく正気に戻る。

「束さん!?!」

体を動かそうとすると先ほどまでとは打って変わり、動かす事が出来た。自分達を直接操作していた束が倒れたからか？ だが今はそれはどうでもいい。とにかく急いで白式を束の方へと向け、そして少し後悔した。

「おい、しつかりしろ束!?! 束!?!」

千冬が束の体を抱き寄せ必死に叫んでいる。その束の様子は酷い物だ。口や頭部からは血が溢れ、太ももはまるで抉られたかのようにその中身をさらけ出している。そして何よりもその腹に空いた穴と、そこから溢れる血の量が、それが致命的な傷であることを実感させ

た。

「ちー……ちゃん……」

「束!?!」

閉じられていた束の眼がゆっくりと開く。そしてゆっくりと、血に濡れたその手で千冬の頬を撫でた。

「おか、しい……なあ……。こんな……はず、じゃ……」

「いい、いいから喋るな束! 今すぐ傷の治療を……っ!」

「だいい、じょうぶだ……よっ……。わた、しは……ナノ……マシンで、かい、ふくを……」

確かにあれ程の傷を受けて未だに意識がある事はおかしい。きつと束は己に何らかの医療措置を施しているのだろう。だがそれを差し引いてもその傷は重症であり、その治療がたいして意味が無い事は素人の一夏ですら分かった。むしろ下手に意識を繋げてしまう分、苦しみが続いてしまうと言う事も。

「かい……ふくした、ら……き……と、すてきな、せか……いが……」
「どうして、どうしてお前はそうなんだ! 私は、私や一夏はそんな事は!」

「だっ……て、ない……てる姿は……みたく……な、いもん。わたしと、ちー……ちゃん、二人いれば……さいきよ……いえい」
「っ!?!」

その言葉に遂に千冬は涙を流し、一夏も口を押えた。

束の動機。それはどこまでも自分勝手ではあるが、その奥底にあったのは自分や千冬。そして箒の為と言う想い。だがその想いのくみ取り方が間違っていただけなのだ。

「ねえ……さん……」

一夏の背後に箒が降りてきた。やはり箒達も操作不能の状態から逃れられたらしい。束の前に降り立った箒は、呆然とした顔で死にゆく姉の姿を見ていた。

「ほうきちゃ……ん……。まっ……て、ね? もう……すぐ」

血にまみれた束が笑い手を伸ばす。その手を見て箒は静かに、歯を食いしばりながら首を振った。

「姉さん……あなたは馬鹿だ……」

「え……う？」

それは明確な拒絶の言葉。それに束の顔が凍る。

「姉さんの力に頼り……甘言に惑わされかけた私が言うべき事じやないのかもしれない。だがそれでも、それでも私はこんな状況は望んでいなかった！」

そう叫ぶ筈の眼からは涙が溢れていた。それを見て束が首をかしげる。

「おか、しい……な？ ……そんな、かおが……見たかったわけ、じゃ、な……いのに」

「それはお前が間違っていたからだ、束。誰も、誰もこんな状況は望んでいなかったんだ！ 私だってそうだ！ お前がどんなに暴れても、天災と呼ばれても、それでも私はお前には生きていて欲しかった！ ……かけがえのない友である事は変わらないのだから……！」

遂には千冬の眼からも涙が溢れ、それが束の頬を濡らす。その姿を見て、束の眼からも遂には涙が溢れだした。

「おかしい、なあ……こんなはずじゃ……こんなはず、じゃ……くやし
いよ……くやし
いよちーちゃん……」

自分が望んでいた世界を創ろうとしたのに、それが真逆の結果を見せているという事態をようやく理解したのか。束の眼からとめどなく涙が溢れ始めた。

そして、その光景を静司は黙って見ていた。

与えたダメージは致命傷である事は確実。もはやあの女が生きながらえることは無い事は確信している。だからこそ静司の胸にあるのは——空疎な喜びだった

「は、ははは……やった……やったよ、姉さん……これで……」
これで？

一体何が変わるのだろうか。それはもはや分からない。だが長年の目標であり川村静司という人物を支えていた柱の一つが消えた事

で、静司の心は何処までも寂しく空虚な物となっていた。

そんな静司の横にシャルロットとラウラが降り立った。どうやらこちらにも制御は取り返したらしい。見れば一夏の近くには箒の外に鈴とセシリアが。真耶の近くには楯無と簪が降りていた。

「静……司」

「静司、お前は……」

シャルロットとラウラがどこか声をかけ辛そうにしている。だが今はそれに反応することなく、静司は虚ろな視線で束の姿を見ている。

「束さま！ ああああああああああ！？」

そこに突然新しい声が響く。そして空から黒い影落ちてきたかと思ふとそこから飛び出した少女の姿にラウラが怪訝な顔をした。

「あれは……」

それはラウラに少し似た銀髪の少女だ。彼女は杖を突きながらも束の元へと駆け寄ると泣きながらその体に抱き着いた。突然の事に千冬も一夏も箒反応しきれず驚く中、金の瞳を持つ少女は必死に束に叫んでいた。

「束さま！ 束さまっ！ どうして、どうして！ これでは私は！」

「くーちゃん……ん、おかしい、よね、こんなの……ぜったい……」

くーちゃん。そう呼ばれた少女はただひたすらに首を振り涙を流している。その光景に、姉を失った時の自分の姿を一瞬重ねてしまい、静司は歯を噛みしめた。そして激痛の走る左腕をゆっくりと持ち上げその切っ先を束と少女へと向けた。その行動にシャルロットとラウラが驚く。

「静司!? これ以上はもう！」

「お前も重症の筈だ！ これ以上は命に関わる！」

二人が叫ぶがそれを無視して動こうとする。だがそれより早く、

「おか、しい……こん、な、の……おか……しい、から……だか……ら……」

それは唐突だった。篠ノ之束の眼がゆっくりと閉じられ、そして腕が力を失い血に落ちた。その瞬間、千冬が声を上げて泣き、少女も束

そしてそこに追い打ちをかける様に接近したオータムの手には奇妙な装置が握られていた。

「それじゃあこいつは頂くぜ！」

オータムが握っていた装置を一夏へと押し付ける。途端に一夏の全身に衝撃と痛みが走る。そして何かが抜けていくような感覚。それが何なのかも分からずまま。一夏は地面に叩きつけられた。

「がはっ!？」

背中に走る激痛。その痛みで一夏は違和感に気づく。そう、ISが消えているのだ。驚き見上げた先ではオータムが手のひらに白く光る菱形のクリスタルの様な物を持っていた。

「はっ、中々綺麗なものだなあおい」

「おい、まさかそれは!？」

「その通り、お前のISのコアだよ！ お前に使ったのはな、剥離剤って言ってISを強制解除できる代物さあ！」

にやり、と笑うオータム。それを見た一夏の顔が強張った。

「て、テメエ！ 返しやがれ！」

「んなわけねーだろ馬鹿が！ お前はもう死にな！」

オータムが脚の先にある砲門を全て向けた。生身では対処の術も無く、一夏の顔が絶望に染まる。

「させないわよ！」

だがオータムが砲撃するより早く、飛び出した鈴が一夏の体を攫って行く。間一髪の所で死を免れた一夏だがその顔に安堵は無い。

「鈴！ 白式が！」

「わかってる！ けど今は——」

「きゃあああああ!？」

響いた悲鳴。驚きそちらを向くと同じようにISを奪われ倒れた筈の姿があった。その正面に居るのは丸みを帯びたISを操るシェーリであり、その手には紅く光るコアが握られていた。

「そんな!？ 筈まで……きゃあああ!？」

注意が逸れた一瞬の間。そこに空から降り注いだレーザーの雨が鈴の甲龍を打ち抜いた。鈴は咄嗟に一夏を庇いつつ地面へと不時着

していく。それはラウラやセシリアも同じだったようで、突然の奇襲に全員がISを打ち抜かれ行動不能に陥っていた。

「一体……一体何なんだよ!？」

「あら? この状況を見れば一目瞭然だと思っけど?」

一夏の叫びに答えたのは空から降りてきた金髪の女性だった。その姿に一夏の眼が見開かれる。

「お前は!？」

それは金の糸を周囲に漂わせつつ宙に浮かぶスコールの姿だった。そしてその隣にはサイレント・ゼフィルスに搭乗するマドカと静かに滞空するレギオンの姿。そこにオータムとシェーリも合流していく。

「ここまで思い通りに事が進むと怖い位ね」

「いいじゃねえかスコール。これで目的は半分達成だろ」

「そうですね。少々物足りない気もしますが。それに……エム、貴方も機嫌を直してください。私だって我慢したのでですから」

「……」

スコール、オータム、シェーリ、そしてエム。それぞれが顔を合わせる。スコールは悠然と、オータムは楽しそうに。シェーリは静司の姿を見てため息。そしてエムは顔の半分がバイザーに隠されていてその表情は見えないが、どこか不機嫌そうな雰囲気があった。

「まあエムは川村静司の相手をするって主張していたものね。ごめんなさいねエム。だけどこの好機を逃す訳にはいかなかったのよ。篠ノ之束と川村静司がぶつかり、そして両者が力尽きる今の状況を」

「……………わかってる」

まるで諭すかのようなスコールと不機嫌そうに答えるエム。だが一夏にはそれよりも気になる事があった。

「好機だって……? まさかお前らは」

「ええそうよ。ズーと見ていたわ。貴方達の茶番を」

「茶番……だとっ!？」

束の亡骸を抱いていた千冬が涙に濡れた眼でスコールを睨む。しかしスコールは気にした風も無く微笑んだ。

「私達にとっては邪魔な二人が好き勝手言い合って勝手に倒れてくれ

るのだから良い見世物だったわ」

「貴様……！」

「はっ、世界最強の女とやらもこうなると唯の生意気なだけの雑魚だなあ？ それともIS無しで相手してくれんのか？ ああ!？」

「IS……そうです！ 何故貴方達はISを使えるのですか!？」

真耶が叫ぶ。確かにそうだ。亡国機業はずっとこの付近で先程までの様子を見ていたに違いない。だがそうならば、彼女達のISとて今世界中で起きているISの暴走に巻き込まれている筈なのだ。

そんな疑問に答えたのはどこか誇らしげなシェーリだった。

「篠ノ之束と敵対するのです。ならばそれに対する対策をするのは当然でしょう？ 我々のISは全て篠ノ之束の呪縛から解放されています。他でもない、我が主と彼女の協力によって、ね」

そう言いつつシェーリがレギオンの装甲表面を撫でるとレギオンはくすぐったそうに機体を揺らした。

「因みに世界中で起きている暴走はまだ止まってないわよ。貴方達の機体は博士が直接動かしていた様だけど、それ以外は違う様ね。……まあその少女が関係していそうだけど」

スコールがちらりと見たのは未だ泣き叫んでいる銀髪の少女だ。だが直ぐに視線を戻すと『さて、』と呟く。

「おしゃべりはこれ位にしましょう。オータム、そのコアを持って先に帰って頂戴。エムとレギオンは残りの彼女達のISも奪ってくれると助かるわ」

「……剥離剤は？」

「生憎と三つしか用意できなかったの。だから残りの一つはあの銀髪の少女に。後は実力行使でお願いね？ 中身には用が無いから殺しても構わないわ」

『りょうかい』

「……ふん」

レギオンとエムが戦闘態勢を取る。その様子に鈴達も身構えるが状況は悪い。一夏と筈はISを奪われ、他の面々は先の奇襲で機体ダメージが大きいのだ。

「それとシェーリは博士の遺体を回収して頂戴。あれは使い道が有りそうだから」

「了解しました」

「なっ!？」

スコールの何気ない言葉に一夏はぎよつ、とした。そして死人に鞭を打つような事を示唆させるスコールの言葉に怒りが込み上げてくる。

「ふざけんなっ! これ以上好き勝手に」

「させない!? けど貴方はもう力も何もない唯の子供なの。諦めましょうね?」

口調こそ柔らかながらも冷徹なスコールの言葉に絶句してしまう。そう、確かに今の一夏にはどうする事も出来ない。護る事は愚か、戦う事すらも出来ずに舞台から引きずり落とされたのだから。

「さあ、では全てを終わらせましょう」

スコールの合図と同時に、シェーリ達がゆっくりと武器を構える。その光景を一夏はただ見ている事しか出来なかった。

「やめろ……やめろおおおおお!？」

シェーリがライフルを構え、エムがビットを展開する。レギオンがその機体各所の砲塔を起動する。それをただ絶望的な心境で見ている事しか出来ない。やめろという言葉も、怒声も懇願も聞き入れられずシェーリ達はその牙を鈴達に向ける。鈴は咄嗟に一夏を遠ざけるべく突き飛ばしたが、それは一夏にとって絶望以外の何物でも無かった。

「鈴!? 逃げろ、逃げてくれ!」

「そうしたいのも山々だけど、そうもいかないでしょ……っ!」

答える鈴の顔に浮かぶのは絶望的な戦いを前にした諦観の表情。それはセシリアもラウラも同じだった。そんな彼女の姿に一夏の瞳に涙が溜まる。

そんな一夏の近くで黒い影が小さく身動きした。

(ああ……………)

そんなやり取りを、虚ろな意識の中で静司は聞いていた。腹に空いた穴は何の因果か、自分が篠ノ之束を貫いた場所と同じ。それは間違いないく致命傷であり、今も血と一緒に命と言う物が流れ出している感覚がある。そんな自分の腹を本音とシャルロットが泣きながら押さえ、そして必死に自分の名を叫んでいる。一夏は突きつけられた絶望に涙し、鈴達は死地へと向かおうとしている。

なんなんだ、この状況は。

この状況を作り出したのは間違いなく自分と篠ノ之束。その事実静司は思わず笑ってしまった。何が護衛だ。何が任務だ。感情を優先した結果がこれだ。結局、自分が最も一夏に達にとって危険な存在だったじゃないか。

だが、これで終わらせていいはずがない。やった事の責任は取らなければならぬ。ブーメラン、という言葉が良く似合う。自分が引き起こした事のツケは自分が払わなければならぬ。篠ノ之束はツケを払った。ならば次は――

「くく……………よ……………く」

愛機の名を呼ぶと弱々しいながらも機体が応える。良かった、まだ見捨てられてはいなかった。ならばこれは最後の仕事だ。

ハイパーセンサーで目標を探す。それは直ぐに見つかった。苛つく笑みを浮かべてこちらを見下ろす女の姿。それを頭に叩き込み機体を確認する。生きているスラストはわずか。エネルギーも同様。だが奇跡的にほんの少しだけ飛ぶ力は残っていた。十分だ。

「せーじー!」

「静司!」

ぐぐぐ、と顔を上げる。涙でぬれた二人の姿。だが今はそれを見ない様に務めた。それを見てしまったら、心が揺らぎそうだったから。奴はまだ気づいていない。そして油断しきっている。なら今だ。今意外にこのチャンスは無い。

それは通常ではありえない事なのかもしれない。黒翼の状態は間違いないくボロボロであり、エネルギーもわずか。そして搭乗者である

静司はそれを超える重症。それで動けること自体が異常ともいえる。その異常を可能にしているのは一重に静司の最後の意地に過ぎなかった。

「一夏……」

「!？」

枯れる様な声でも何とか届いた。驚き振り向いた一夏へ告げる。

「必ず……受け取れ……」

「な、何を——」

返事は待たない。静司は残された全てを用いて黒翼を立ち上げらせると弾かれる様にして空へと飛んだ。

「何!？」

「あの傷ですか!？」

エムもシェーリもこちらが完全に沈黙したと思っていたが故に反応が遅れた。だが静司は二人に目もくれず目標へと一直線に、ロケットの様に飛んでいく。

「っ!?! 何だと!？」

その目標はオータム。突然の事に反応しきれなかったオータムのアラクネへ体当たりすると、静司はそのまま左腕を振るった。

「あああああああ!」

意味の無い叫び。それに乗せて振るわれた左腕はコアを握っていたオータムの腕を裂いた。

「あああああああ!?! テメエええええええええええ!」

その痛みにオータムが悲鳴を上げる。その眼は混乱と憤怒に染まり、背中の八本の脚を一斉に起動した。だがそれすら構わず、静司はオータムの腕から離れ宙に浮いたコアの一つに手を伸ばし——

——弾いた。

「一夏あああああああああああああ!」

突然の状況に皆が啞然とする中、一夏だけが飛び出した。走り、こちらへ飛んでくるコアへと手を伸ばす。だがそれより早く、それを掴

もうとしている者が居た。スコールだ。

「くっそおおおおおおお！」

どう考えても距離的にはスコールが有利。それでも一夏は手を伸ばす。理屈も何も関係ない。友の決死の行動、それを無駄にする訳にはいかない。だから！

「戻って来い白式い！ 何も知らない俺でも、馬鹿な俺でも、それでもまだお前が必要なんだ！ だから！」

強く、強く願う。例え、今この場で自分がISを手に入れても何も変わらないかもしれない。だが敵に渡す事だけは避けなければならぬ。そして何より、これ以上敵の好き勝手を許したくない。そんな強い願いに、果たして白式は応えた。

「何ですって!?!」

驚く声はスコールのもの。白式のコアが輝いたかと思うと、それはまるで元からそこにあつたかのように一夏の右腕に召喚されたのだ。

「遠隔コール!? こんな子供が……!?!」

「うおおおおお！」

白式を取り戻した一夏がその勢いのまま天へ駆ける。《雪片式型》最大出力。《零落白夜》起動。大きなエネルギー刃を展開した白式を構えスコールへと突撃する。

「くっ！」

咄嗟にスコールは周囲に漂っていた金色の糸を編み込み込み繭の様にして己が身を包んだ。だがそれが失敗だと言う事に直ぐに気づく事になる。

「そんなもの！」

「しまっ——」

エネルギー無効化。篠ノ之束のシールドすら破ったその力が金の繭を切り裂き、そしてその中にいるスコールへと一撃を加えた。

「くっ……私としたことが油断したわね……」

「スコール！」

追撃を加えようとした一夏だが、下方から戻っていたシェーリのライフルがそれを妨げる。咄嗟に白式を背後に飛ばして回避すると、ス

コールを支えるようにしてシェーリが隣だった。見ればエムとレギオンも上昇してきている。

「無様だな」

「言い返す言葉も無いわ、エム」

エムが小馬鹿にした様に笑い、スコールも苦笑して答えている。あの様子では致命打には至らなかつたと言う事か。その事に焦燥を覚えつつも、この機会を作り出してくれた友の姿に視線を移し、そして一夏は絶句した。

「ガキがつ！ ガキがつ！ クソガキがあああつあ！ 死にやがれ！」

そこに居たのは片腕から血を流しつつ激昂するオータム。

そしてそのオータムのISであるアラクネの8本の装甲脚が全身に突き刺さり、ピクリとも動かない黒翼の姿だった。

「お、おい……静司……？」

嘘だ。と言いつきだつて致命傷だったのに動いたのだ。きつとまた今度もという思い呼びかける。だが反応は無い。今度こそ、本当の終わりかの様川村静司はまったく反応無く、自らを突き刺したオータムの蹴りを受け入れていた。

「死に晒せクソガキイイイイ！」

やがて蹴るだけでは足らなくなつたオータムが黒翼ごと静司を宙に放り、そしてその8本の装甲脚の先端を砲身へと変え、撃ちこんだ。その衝撃で黒翼は吹き飛ばされていき、その姿は学園の敷地外、つまりは海上まで飛ばされると、水面を数回撥ねた後に沈んでいった。

「あ、ああああ……」

震える。いくらなんでもあの状態で海に沈んでしまつては助かる命も助からない。早く、早く救出しなければ。だがそんな一夏の想いを踏みにじるかのようにスコールの声が響く。

「もう油断はしないわ。それに彼も救わせない。下にいる彼女達諸共死になさい」

それは文字通りの死刑宣告に他ならない。折角得た好機も動揺により無駄にしてしまった。一夏の顔が絶望に染まり、エムたちが再び

動き出す。そんな時だった。

「……さい……」

小さな、可細い声。だがその声は戦場にいる全員に聞こえた。

「うる……さい……。いら……ない……。束さまの居ない……。なんて……いや……」

それは今までずっと束の亡骸の傍で泣いていた少女の声。少女はゆらり、とまるで幽鬼の様に立ち上がるとその金と黒の瞳の焦点を合さぬまままるで壊れた機械の様に眩いている。その光景を地上にいる千冬も訳が分からず、涙に濡れた眼で見続けている。

そして、

「みんな……きえてなくなれ……」

かつ、と少女が黒の光に包まれた。そしてその姿が変化していく。その光は紛れもないISの展開光だ。だがその規模が大きすぎる。

「これは!?!」

「何なの!?!」

誰もが目を見開き驚く中、やがて光が収まりそこにISが現れる。だがその形状は何処までも異常だった。

全身装甲に包まれた巨大なその体。そこには人の形らしい形は無く、まるで鋼鉄の猛獣を思わせる様な多脚式。背中には多種多様の砲台が有り、その形状は一夏の《雪羅》やセシリアの《ストライク・ガンナー》、ラウラのレールガンに簪の荷電粒子砲と酷似している。その他にも多種多様の砲台がまるで針鼠の様に備わるその姿は異様の一言に尽きた。

「まさか……「コピ」している……のか?」

そうとしか考えられない。それほどまでに少女が変化した姿は自分達の良く知る武器と酷似している。だが本当にそうだとすればあのISはどれ程の力を秘めていると言うのか?

その答えは直ぐに知れることとなる。その巨大ISは背中の砲門を一齐に光らせ、更には機体の各所からビットらしきものを一齐に展開し始めたのだ。そのビットの姿もセシリアの《ブルーティアーズ》は勿論の事、エムの《サイレント・ゼファイルス》と同じ形状のものま

である。その意味する所に気づいた時には遅かった。

『キエテ……シマエ』

「みんな、逃げ——」

刹那、巨大ISから放たれた嵐のような砲撃がIS学園全体に撒き散らされた。

それからどれくらいの間が経ったのか。

「うっ……」

一夏は朦朧としつつも意識を取り戻した。

どうやら瓦礫に埋もれていたらしい。幸い白式は展開したままだったので押しつぶされることは免れた。

「そ、そうだ！ みんなは!?!」

こうなる前の事を思い出し慌てて起きあがる。そして見た光景に一夏は声を無くした。

「嘘……だろ……」

目に写るのは見るも無残な学園の姿。アリーナは完全に崩れ落ち、被害は校舎や他の施設にまで響いている。あちこちで火と煙があがるその光景は地獄の様だった。

空を見上げると黒煙が立ち上り、そして先ほどまで居た亡国機業の姿は無い。恐らく撤退したのだろう。

「うっ……」

「っ!?! 鈴!」

近くの瓦礫が崩れ、そこから鈴が這い出してきた。彼女が無事な事に安堵した一夏が叫ぶと鈴もこちらを見て微笑んだ。

「一夏も、無事だったみたいね……」

「ああ、だけど他のみんなは……」

「——大丈夫だ」

聞こえてきたのはラウラの声。それも空からだ。見上げてみるとラウラがゆつくりと降りてきた所だった。

「ラウラ！ 無事だったのか!」

「ああ、他の皆も無事だ。機体はセーフモードで起動しているから長くは持たないがな」

話を聞くとどうやら一足先に目覚めた彼女は同じように瓦礫に埋もれた仲間を救出していたらしく、自分と鈴以外にも全員無事らしい。ISを持つていなかった千冬や山田、それに箒と本音に関しては楯無と簪が庇った様である。

「だがその際に教官が負傷された。命に別状はないが……」

「そんな……千冬姉が!？」

「慌てるな、私は無事だ」

慌てて駆けだそうとした一夏だが、その頭を掴まれた。振り返れば肩から血を流しつつもしっかりと一人で立っている千冬の姿があり安堵する。その背後には箒やセシリア達の姿もあつたが全員確かに無事の様だった。だが、

「シャルロット、本音……」

鈴の呟いた言葉にはつとずる。その二人は助かってはいはいしたものも、その顔は昏く涙に濡れている。その光景を見て一夏はここに欠けている最後の一人の事を思い出した。

「静司は!?! あいつ、あいつ海に落とされたんだ! だから早く探さないとい!」

必死に訴えかける一夏だが、それに帰ってきたのは千冬やラウラ。それに楯無の鎮痛な顔だった。その顔を見て一夏中の焦燥が増していく。

「私達が目覚めたのもついさつきなの。それから勿論彼を探しに行つたわ。だけど時間が経ち過ぎていて……」

「見つけることが出来なかった……」

その言葉を聞いた途端、一夏の目の前が真っ暗になった。

その後、救援に来たIS委員会や日本の自衛隊などにより一夏達は救助される事となる。その際、詳しい事情は伏せ海に落とされた生徒が居るといふ事だけを伝えた事でその一斉捜索が行われた。

だが川村静司は見つかる事は無かった。

小話：もうしようもないひとたち

□悪夢、再来

「わたくし、感動しましたの」

昼の食堂。何時もの面子が集まる中、唐突にセシリアが切り出した。

「何よいきなり。何に感動したの？」

鈴がラーメンを啜りながら対して興味無さそうに訊く。他の者達も不思議そうにセシリアを見ていた。

「先日本音さんに日本の漫画を借りたのですが、その中のシーンがとても素晴らしくて。スポーツ漫画だったのですが、自暴自棄になった選手に向けて監督が『諦めたら、そこで人生終了ですよ』と。その言葉に選手は今までの自分を反省し、そして新たな道に進むのですわ」

「ああ、あれか。あの漫画面白いもんな」

一夏が腕を組んで頷く。他にも本音を始め、静司、癒子、ナギの日本組もしきりに頷いていた。全員本音に借りたのだ。ちなみに箒は漫画をあまり読まないらしく借りていない。

「そうですね。だから私も諦めずにもう一度やってみようと思いますの」

「ふむ。挑戦する事は良い事だ。で、何をやるというのだ？」

興味を持ったラウラが問うと、セシリアは満面の笑みを浮かべ宣言した。

「もう一度、料理を」

からーん、と突如静まり返った食堂に何かが落ちる音が響いた。そして食事をしていた者、談笑していた者、何を食べるかメニューの前で悩んでいた者、そしてその料理を作っていた者までも全てが一斉に凍りつく。窓ガラスにヒビが入りテレビに突然ノイズが走りどこかで黒猫がにゃあ、と鳴いた。

そんな食堂の中、静司はまるで壊れたロボットの様にギギギギと首を動かしてセシリアを見た。

「せ、セシリア……？　今、なんと……？」

「ですから、私は料理をします。今日、この後に」
「……………」

カタツ、と音がした。その音は次第にあちこちで響き渡りやがては手元からも。そして静司は気づく。この音は自分が震えて皿と箸がぶつかる音だと。

そのまま十数秒の沈黙が流れた後、セシリアが席を立つ。自信満々な笑みを浮かべ、

「では下(ご)しらえに行つてきますわ」

そう言うが否や、まるで逃げ出すかのように素早く去っていくセシリア。そして数秒遅れて食堂の各所から耳を劈く悲鳴が上がった。

「いやああああああああああああああああああああああああ!!」

「誰か、誰かオルコットさんを止めてえええつ!」

「し、しっかりして!! 急にこの子が倒れたわ!! 誰か先生を!」

まさに阿鼻叫喚の地獄絵図と言った喧噪の中、静司や一夏達もようやくシヨックから立ち直る。そして直ぐに事の重大さに気づいた。

「しまった……セシリアに逃げられた!」

「くそお! 直ぐに追撃するぞ! ラウラ! 追撃班の編成を——」

「駄目だよ静司! ラウラが前回のトラウマ発症して群れから逸れた小鹿の様な眼で震えてる! ちよつと可愛い!」

「何!!!」

シャルロットの叫びに慌てて振り返った静司が見たものは、虚ろかつどこか潤んだ視界を虚空に飛ばしながら椅子の上で震えているラウラの姿だった。

「ふふ、ふふふふふ。駄目です教官……部下たちが見ている……ふふふふふ」

「……………くそつ、とにかく追撃しなければ——」

「お前達、何を騒いでいる!」

突如食堂に声が響き渡った。その声の主は騒ぎを聞き付けてやって来た千冬と真耶だ。千冬は鋭い眼光で騒ぐ生徒達を制しつつ声を張り上げる。

「ここは食事をする場で馬鹿騒ぎをする場所では無い! 一体何を

やっている!」

「そ、それが織斑先生……」

「大体お前達は落ち着きが無さすぎだ! 淑女となれとまでは言わんがもう少し大人に——」

「セシリアが、料理を……っ」

「——班を分ける! 凰と織斑が率いるαが追撃! デュノアと篠ノ之率いるβは別ルートから家庭科室へ急げ! 他の者はあらゆる機器を利用して情報を収集、追撃チームに逐一報告しろ! 何をちんたらしている!?! 急げ! GO! GO! GO! GO!」

『イエス、ママ!!』

おせらかいいさいきよううがななまになつた!

「うふふ。今度こそ成功させて皆さんを驚かせてやりますわ」

セシリアは顔に笑みを浮かべさせてながら調理室を目指していた。既に食材は手配済み。今頃調理室へ届いている筈だ。後はこの自分が辿り着き腕を振るってやればいい。前回は少々失敗してしまったが今回は大丈夫。うん、根拠は無いけど自信はある。自信を持つことは何よりも力だ。

「待っていてください一夏さん。私は見事料理を完成させて貴方の心をノックアウトして差上げますわ」

前回、一夏の心の臓の方をノックアウト寸前まで追いやった事は都合よく忘れたセシリアは不敵な笑みを浮かべつつ廊下を走る。だがその前方に3人の生徒が立ちはだかった。

「そこまでよオルコットさん!」

「これ以上は進ませないわ!」

「私たちが相手よ!」

「くっ、小癩な! ですが止まれるものですか!」

進路を塞ぐ生徒達。しかしセシリアは速度を緩めずそこへ突っ込んでいく。

「止まらない!?! 皆、捕まえるよ!」

「甘くてよー！」

セシリア一人に対し相手は三人。人数で言えばセシリアが不利だ。だがセシリアは恐れる事無く突っ込んでいくと、まず一人目の腕を掴み引き寄せ足をかけた。バランスを崩して倒れた生徒を後ろへ押し出す様にして前進。二人目に肉薄すると体を回転させつつ、流れる様な動作で首筋へ手刀を送り叩き伏せた。そんな一瞬の出来事に驚き思わず動きを止めた三人目には掌打を浴びせ道を切り開く。

「ぐ……流石は代表候補生……っ」

「油断……した……。だけど……！」

「第二、第三の私たちがきつと貴方を止め……あふっ」

三人の生徒は意識を失う。それを尻目にセシリアはふっ、と笑った。知り合いでも何でもない、ただ同じ学園に通うと言うだけの相手だったが、やはり同じ制服の相手を倒す事には痛みを感じる。罪悪感もある。だが！

「申し訳ありませんが、これだけは引くわけにはいかないのです」

その痛みを乗り越え、悲壮な覚悟でセシリアは進む。

誰も望んでいないのに！

『織斑先生！　γ4分隊がやられました！　当初の目的である時間稼ぎもあまり……』

「……いや、たとえ数秒でもそれは貴重な時間だ。Σ4分隊は負傷者を救出して離脱しろ。続いてγ2、γ3分隊を展開。数で圧倒などと考えな。あくまで物量を見せつけ侵攻を鈍らせるんだ。可能ならポイント3へ誘導しろ！　その隙にβ2達がそちらへ向かう！」

『了解っ！』

「これは……誘導されていますね」

相変わらず廊下を走るセシリア。しかしその顔には先ほどまでの笑いは無い。何故なら進むたびに教室から、廊下の角から、トイレか

ら、ロッカーから生徒達が飛び出してきては妨害してくるのだ。初めは相手をしていたが、キリが無いと判断するとセシリアは極力戦闘を避ける方向にシフトしていた。しかしそれ故に思う様に進めず歯噛みする。

「この統率された動き……誰かが指揮をしていますわね」

「その通りだ!」

響き渡る凜とした声。そして現れたのは竹刀を片手にした箒と静司。そして真耶が居た。何気に珍しい組み合わせである。

「ふ、まさか別ルートで来た私たちの方が早いとはな……」

「そうだな……。だがこれ以上は進ませない!」

「オルコットさん! 大人しくしてください!」

鋭い眼光で竹刀を構える箒と、腰を低くし構える静司。そして涙目で訴える真耶。生徒二人共代表候補生では無いが、他の生徒よりは腕が立つ方だ。特に箒の剣術は侮れないと判断するとセシリアも緊張した赴きで構えを取る。

「何故……何故そこまで邪魔をしますの? 私は料理がしたいだけですのに!」

「その目的が問題なのだ! 『戦乙女の陥落事件』《ヴァルキリーフォー》を忘れた訳ではあるまい!」

因みにそれは前回千冬がセシリアの料理を前に沈んだ事件の事である。

「確かにあの時は失敗しました。ですが今回は大丈夫です! 様々な資料を参考に高級食材を集めましたし料理の勉強もしました! 私のやる気も十分ですわ!」

「……因みに実践はしたのか?」

「やはり一番最初は一夏さんに食べて頂きたく」

「まずそこを学べええええええええええええ」

渾身のツツコミと共に箒がセシリアに踊りかかる。いくらセシリアが代表候補生と言ええど、接近戦では圧倒的に不利だ。しかし彼女は慌てる事無く懐に手を伸ばし、そして取り出した物を宙へ放った。

「目くらましか? だがそんなもの——っ!」

邪魔だと言わんばかりにそれを叩き斬ろうとした筈だが、その並外れた動体視力が投げられたものの正体を見極めその眼が大きく見開かれた。そんな筈の前でセシリアは笑い頷く。

「ふ……それは先日出来た超有名テーマパークの抽選でしか手に入らないカップル特別優待券ですわ！ 応募倍率はおよそ1000倍ッ！しかし手に入れば一日中最上級のアトラクションと料理を堪能でき、そして宿泊すら出来る超プレミアチケット！」

「あ——」

筈の眼がそのチケットに吸い寄せられる。もしアレを手に入れたら。そして一夏を誘えたら……。きつと素敵なデートになって夜なんかはそりやもうつまりアレがコレで——

「隙ありですわ」

「ぐふう!？」

筈がそのチケットに気を取られた隙に接近したセシリアの掌底が決まり、筈は倒れ伏した。倒れた筈の隣、セシリアは憐憫に満ちた表情で筈を見下ろしふっ、と笑った。

「それは手向けとして差し上げますわ。良い夢を見て下さい」

「……いいのか？ セシリアだって一夏と行こうとしていたんじゃない」

「これ、確かにカップル優待券ですけど『同姓限定』ですよ」

「うわあ……」

昏い笑みを浮かべて語るセシリアに思わず静司は引いた。といふかなんだ同姓限定って。百合か、百合なのか!? という疑問を浮かべつつも構える。

「だが例えそれが男女ペア券でも俺にはそれは通じない。それに山田先生にもだ！ 何故なら先生には誘う相手が居ないっ！」

「ぐぬぬっ！」

「……川村君、後で話し合いますよ？」

額に青筋を浮かべた真耶が静かに静司の肩に手を置くが静司は決して振り返らなかった。

一方セシリアは己の不利を悟ったのか少し悩んだ様子をした挙句、何故か静かに首を振った。

「山田先生……わたくしは悲しいですわ」

「な、何がですか」

「教師とは本来生徒を導くもの。そして時には無謀や無茶であっても、生徒が足踏みしていたのなら優しく背を押してくれるもの。筈ですわ」

「……………っ!!」

「というかお前今自分で無謀って——」

「そう！ 例え過去に失敗したとしてもそれを乗り越えようとする生徒が居るのなら！ 教師である貴方がわたくしを応援してくれるべきなのですわ！」

「そ、それはっ……………！ 私……………っ!!」

静司のツツコミを無視したセシリアによつて突如突きつけられた教師としての有り方。その言葉に真耶の眼が揺らぐ。自分がやっている事は正しいのか？ ここはセシリアを応援する事が教師としてやるべきことなので無いか？ 現実と理想の間で葛藤する真耶にセシリアはまるで聖母の様な笑みで笑いかけた。

「大丈夫ですわ。山田先生はまだ間に合います。ほんの少し、わたくしの背を押してくれるだけで貴方は最高の教師となるのです」

「お、オルコットさん……………。私は……………私は——」

真耶の瞳から涙が溢れ、そしてゆっくりとセシリアに手を伸ばす。セシリアも慈愛の笑みを浮かべてその手を握ろうとして、

「騙されるな山田先生！」

「えっ?」

「ちいっ!?!」

背後から真耶を羽交い絞めにした静司が無理やり真耶をセシリアから引きはがした。

「は、離してください川村君！ 私は教師としての責任を！」

「騙されちゃいけない！ 確かにセシリアの言う事は一理あるかもしれない。だけど、だけど貴方が押そうとしているのは生徒を成長させるのではなく世界を奈落に突き落す破滅へのスイッチだ！」

「ちよつと酷すぎませんかそれ!?!」

「黙れセシリア！ 世の中には押さない方がいいボタンだつてあるんだ！」

「わたくしの料理は核か何かですか!？」

流石に抗議の言葉を発するセシリアを静司はきつ、と睨んだ。

「分かってないなセシリア！ お前のは本当の料理じゃない！」

「何ですって!？」

「勢いに任せて手に入れたであろう超高級食材。けどセシリアはその食材に腕が追いついていないんだよ！」

「そんな事っ！」

セシリアが接近して掌打を繰り返す。静司は戦意を喪失してしまった真耶を放り捨てそれを迎え撃ちつつ叫ぶ。

「闇鍋みたいに、突っ込んでいるだけだ！」

「くっ!？」

「だから味覚も壊れる。食材と調理の腕の融合……それこそが料理の有るべき姿だ！」

叫び、そして静司は懐かそれを取り出す。銀色に輝く、彼に取つての秘密兵器。その銀色が反射する光にセシリアは思わず目を覆った。

「その輝きは!？」

そしてセシリアは見た。静司が手にするその正体を。

それは大きさにしては文庫本程。少し膨らみがありその表面にはデカデカと文字が印刷されていた。それを見た真耶が目を見開いて叫んだ。

「ボ○カレーー!！」

「ということこれで妥協を——」

「馬鹿にしていますのっ!？」

怒りに満ちたセシリアの拳が静司の鳩尾にめり込んだ。

シャルロットが現場にたどり着いた時、既に勝負はついていた。

「せ、静司!？ それに山田先生についてに箒!？ これは一体……」

地に付した静司。体育座りで教師の責任やら理想やらをブツブツ

眩いている真耶。そして意識を失いながらもチケットを握りしめて涎を垂らしながら笑う筈。一体何が起きたと言うのか。

「しゃ、シャルロット……」

「静司、しつかりして!」

駆け寄りその体を起すと静司は薄く目を開いた。

「俺は……ク○カレーの方が……げふ」

「静司!? 言っちゃ悪いとは思うけど意味不明過ぎてちよつと正気を疑ってるよ僕!」

シャルロットの腕の中、静司はよろよろと腕を伸ばしふつ、と笑った。

「後は任せ……た……」

「静司!? ここに来て丸投げしたね!」

『β1より報告! 先行したβ2分隊は全滅したとの事です! β1はそのまま対象の追撃に移った模様!』

「山田先生がやられたか……β1にはそのまま追撃させろ。α1達にも連絡。最短ルートを示せ!」

通信で指令を下しつつ千冬は走る。それは勿論セシリアを止める為だ。彼女は携帯端末で各部隊の展開を確認しつつ静かに頷いた。

「私がそろそろ追いつく! 持ちこたえさせろ!」

『イエス・ユアハインズ!』

「遂に出てきましたわね」

後少しで調理室。そんな廊下でセシリアは緊張に冷や汗を流しつつ正面に立ちふさがる己が敵を見つめていた。

「もう諦めろオルコット。ここで終わりだ」

そう。そこに立ちふさがるのは世界最強の女、織斑千冬。通常ではそもそも楯突こうとも思えないチートキャラ。だが今日のセシリアは一味違った。

「織斑先生……今日ばかりは引けません。なので私は……行きます！」

「ふっ、その心意気は勝ってやろう。ハンデだ。武器を展開すると良い。一応教師なのでな。ステゴロと言う訳にはいかん」

「……わかりました」

セシリアは頷きそしてその手に光が灯り武器を握った。この狭い中でライフルは危険。ならば自分が今持っている最強の近接兵器を使うほかない。

「来い」

「行きますー！」

おお、と遠巻きに見ていたギャラリーが沸く中、二人の姿が交差する。鎮まり返る廊下。そして数秒の沈黙の後、

「馬鹿……な……」

千冬が、倒れた。そのありえない光景にギャラリーたちが啞然とする中、セシリアがゆっくりと面を上げた。

「ふ……やはりこれを使って正解でした」

そう笑いながら自らの武器を掲げるセシリア。それを見たギャラリーが驚きの声を上げる。

「《インターセプター》じゃ……無い?」

セシリアの近接武器と言えば皆が思い浮かべるのはナイフ状のそれだった。しかしよく見るとセシリアが持っているのは違う。

それは銀色の食器。なだらかな曲線と、小さいながらも複雑な模様が刻まれたスプーンだった。だが何故だろう? そのスプーンの、料理をすくう部分がピンク色に変色しているのは。そして何やら禍々しいオーラを放っているのは。その答えはセシリアの口から発せられた。

「ふ……かつて織斑先生を沈めたスプーンです。戒めの為に持っていました。こんな所で役に立つとは。織斑先生もこれを間近で見た途端動揺してしまいましたわ」

その言葉にギャラリーは戦慄した。つまりあれはかつての惨劇でブリュンヒルデを沈めた神器に等しき武器。いや、この場合呪われた

アイテムな気がしたが。そしてそれを見て動揺した千冬の口元にそのスプーンを突っ込みセシリアは勝利したと言うのか。

「織斑先生と一撃で仕留めるなんて……なんて恐ろしい武器……っ！」

「もはやあれは《インターセプター》じゃないわ。《人生セプター》よ!?!」

恐怖に駆られたギャラリー達。そんな彼女らにセシリアがスプーン改め《人生セプター》を向けるとモーゼの十戒が如くギャラリーが割れていく。その間をセシリアは悠然と歩き、ついに調理室の直ぐ傍へとたどり着いた。そしてその美しい唇を上品に釣り上げる。

「やはり……最後には来ると思っていましたわ」

そう笑うセシリアの前方。調理室の扉を護る様に待ち構えていたのは三人の戦士。一夏、鈴、シャルロットである。

「過ちは、繰り返させない!」

荷電粒子砲を構える一夏。そして最後の戦いが始まった。

「どうして、どうしてこんな残酷な事が平然とできる!?!」

「例えなんと言われようと、引けない事情があるのです!」

「セシリア、アンタは（味覚が）歪んでいるわ!」

「そうさせたのは貴方です! 一夏さんという存在です!」

「それは責任転嫁だよ! もう辞めようセシリア! このままではみんな倒れちゃうよ!?!」

「それだけの業、重ねてきたのは誰か!?!」

『お前だあああああああ!?!』

結局。

長きにわたる死闘の末、シャルロットの高速切替によって出来た一瞬の際に一夏と鈴の合体攻撃《日中閉和勇攻乗殺》にっちゅうへいわゆうこうじようぎつが決まりセシリアはようやく地に沈んだ。

そしてそれ以降、調理室には嚴重なセキュリティが敷かれ、学園側

の許可が無ければ入れないと言う最高レベルのロックがされたとか。
「……………で、本音ちゃんはこの騒動に参加しなかったの？」

生徒会室。先の騒ぎの報告書を読んでいた楯無は正面でケーキを食べている本音に聞いた。

「知らぬがのほとけ」

「……………貴方やっぱ大物ね」

一人知らない振りして騒動を避けた少女に対し、楯無は一筋の汗を流したとか。

□一夏と静司のカンケイ

きつかけはあちこちにあつた。

「静司、早く更衣室行こうぜ」

「ああ」

二人仲良く歩いていく姿を箒とセシリアは微妙な視線で見つめていた。

「一夏、それ美味そうだな」

「おう、少し食うか？ 代わりに静司もそれくれよ」

「OK」

昼の食堂。お互いのランチの一部を交換して食べる二人。その姿を鈴とシャルロットは頬を引き曇らせて見つめていた。

「静司！ 今日は俺達が大浴場使える日だぜ！ 早く行こうぜ！」

「あー先行つてくれ。これが終わったらいく」

「そうか？ じゃあどうせだし待ってるとするか」

「いいの？」

「おう！ やっぱ一緒に入った方が楽しいししな」

夜の談話室。そんな会話をしている二人をラウラと本音は怪訝そ

うに見ていた。

「納得がいかないわ!」

「突然何なんだ」

風呂から出てきて自室に帰ろうとした矢先、静司と一夏は鈴達によって拉致された。意味も分からず談話室へと連れてこられた二人は首を傾げている。そしてその二人を囲むように何時もの面子が勢ぞろいしていた。

そして静司の疑問に答えたのは少し顔を赤くしたセシリアだ。

「簡潔に言いますわ。お二人共……その、妙な関係にはなっていますわよね?」

「はあ!」

当然ながら二人は素っ頓狂な声を上げる。だが鈴を始め箒やセシリア達の眼がマジだった。更には今回は楯無や簪も参加しているが、その二人もどこか視線が白々しい。

「ちよつと待ってくれ。そもそもどうしてそんな発想になったんだ」

「あくまでシラを切るのね静司……。なら言うわ。アンタ達、一緒に居すぎなのよ!」

どん! と幻聴が聞こえるじゃないかと言う位の勢いで鈴が指さしてくるが静司も一夏も首を傾げる他無い。

「いやだって……なあ?」

「男二人しかいないし自然とそうなるもんじゃないのか……?」

「限度があるのよ限度が! だっておかしいじゃない!? いろんな子がアプローチしてもスルーしてみせるその力! ここまで来ると女性に興味ない様にしか思えないわよ! それに静司も静司よ! 何よ、おはようからお休みまで一緒って事!?! 何それ羨ましい!」

「本音が漏れてるぞ」

「とにかく! アンタ達に変な関係になってないか調べる必要があるの!」

強引に鈴が押切り、周囲もうんうんと頷いていた。何とも心外な話

である。

「ということ、まずは一夏。アンタからよ」

「な、なんよ鈴。俺は何もしてないぞ?」

秀囲気に気圧され気味の一夏が顔を強張らせる。鈴はそんな一夏の顔をじつと見つめるとおもむろに携帯を取り出した。

「電話……?」

「ええそうよ。待つてないさい………ああ、弾? 私よ」

『鈴か? どうしたんだよいきなり電話なんて珍しい』

「弾?」

鈴がスピーカーカーに変えたので声が聞こえてくる。それは紛れもない一夏の友人の五反田弾のものだった。

「ちよつと聞きたいことがあるの。一夏の事なんだけど」

『一夏? そういや元気なのか? 最近電話くれないんだよ』

「元気よ。元気すぎる位に。それよりも質問だけど、アンタ一夏と仲良かったわよね? しよつちゆう一緒に居たし」

『あ、ああそうだけど……』

「その時何か違和感を感じた事は?」

『は? どういう意味だ』

「そのままよ。一夏の視線とか行動とかに何かを感じた事は無いの?」

真剣な顔で質問する鈴とそれを聞く箒達だが当の一夏は呆れていた。

「おいおい、いくらなんでもそんな事は——」

『ああ、そういやよくあつたな』

『だああああああん!』

状況を知らない親友の言葉に一夏が悲鳴を上げた。

『あいつのスキンシップは独特だからな。よく『体格がいいな』とかちよつと触らせてくれ』とか言われたなそーいや』

「一夏……お前……」

「一夏さん……?」

「ご、誤解だ! 確かその頃千冬姉に腕相撲で秒殺されて悔しくて

色々と筋トレを——」

『そーいやそーいいう行動のせいで誤解したのか男に告白された事もあつたな』

「だあああああん!? それは、それだけはやめろおおおおおとおお!!」

「ちよ、どういう事!? そこんどこ詳しく!」

『いや詳しくも何も。女子にも人気の良い奴で俺達もよく遊んでたんだけどさ、なんか次第に一夏に変な気持ちを抱いた様で勢いのままに』

「け、結果は!？」

『いやそれが告白した本人が『ごめん、やっぱり聞きたくない!』って乙女チックに逃げちゃってさ。いやーあの時ばかりは流石に俺も焦ったわ』

「……………情報提供感謝するわ弾。じゃあまた」

『え? もう終わり? というか結局何だったん——』

鈴が携帯を切り静かにしまう。そう、静かすぎる程に。そんな中でだらだらと脂汗を流す一夏を一瞥すると鈴は顔を上げる。

「判決は?」

『ギルティ』

箒とセシリアがハモった。その判決に一夏が頭を抱えたのは無理も無い。まあ自業自得な部分もあるのだが。

「さて、一夏さんの判決は出ましたがそうなる」と

「川村の問題が出てくるな」

「ちよ、ちよつと待て! 俺は何とも無いぞ!」

「けどあんな一夏を受け入れてるって事はつまり……」

かかる疑いの視線に静司は必死に反論する。助けを求めて視線を巡らせると楯無と簪と目が合った。

「た、助けてくれ!」

藁をも掴む思いで投げかけた言葉。しかし簪は難しい顔で首を振

ると楯無に問う。

「おねえちゃん、さつきからずっと思ってたんだけどこの話の時系列って何時なの？ 私が登場してからこのテンションの話を挟む隙なんて無かった筈じゃ……」

「おーーーーー！つとメタなツツコミは駄目よかんちゃん!? 世界の法則が崩れるわ!」

「け、けど時系列が、整合性がっ」

「それ以上は駄目よかんちゃん！ 日本一有名な海産物一家も、関西人の何割かに喧嘩売った江戸前子供探偵も毎年何食わぬ顔で夏が来てるでしょ!?! そういう理屈よ!」

「け、けど!」

「それ以上言ってしまうと私たちの出番が減るの！ ほら、かんちゃん、あっちでお姉ちゃんとお話しましょう?」

「じ、時系列が！ 整合性があ!」

「ずるずると楯無が簪を引きずってどこかへと去っていく。駄目だ、役に立たない!」

「静司……何か弁明はあるの？ 私達を納得させるような!」
「くっ……」

「一体どうすればいいのか？ 勿論自分はホモでも何でも無い。だがホモでは無い証明などと、どうすればいいと言うのか。難しすぎるその問いに静司の額に脂汗が浮かんでいく。そんな時だ。」

「安心して川村君!」

「私達に任せなさい!」

「お、おお! 谷本さん! 鏡さん!」

「現れたのは本音と仲の良い二人組、谷本癒子と鏡ナギだ。二人は絶対の自信の笑みで静司の隣に立った。」

「鳳さん! 心配する気持ちは分かるわ。だけど安心して。少なくとも川村君はそっちの気は無いから公園でツナギをきて待ち構えるなんて真似はしないわ!」

「しよ、証拠は? 証拠はあるの!?!」

鈴の問いにナギがふっ、と笑う。

一夏が必死に叫ぶがそれを証明する手段が無い。それ故に一夏が焦っていく。

そんな一夏の肩を静司が叩いた。

「静司!? 復活したのか!」

「あ、ああ……。一夏、俺はお前の疑いを晴らす方法を思いついた」

「何だって!」

それは願っても無い言葉だ。一夏は継る想いで静司に懇願した。

「だがこの方法には犠牲が伴う……。その覚悟がお前にあるか……?」

「何だつていい! ホモ扱いされるよりは遥かにましだ!」

「……わかった」

ゆらりと静司が立ち上がり鈴達の前に立ちふさがる。その様子に

鈴や箒達が一步後ずさった。

「な、何川村? アンタの疑いは晴れたわよ?」

「ああそうだ。だが一夏もホモでは無い。バリバリの思春期ボーイ

だ」

「川村さん? 頭のネジがどこか……?」

酷い謂れであるが今更気にしない。

「嵐、お前だつて本当は知っているんじゃないか?」

「な、何をよ……!」

何やら怪しげな雰囲気纏う静司の様子に鈴が後ずさる。対して

静司が静かに首をふった。

「確かに一夏は様々なアプローチを華麗にスルーしてきた。それはI

Sスーツを着た時だつて同じだ。妙に色っぽくて思春期には中々健

康に悪いあのスーツの時も、一夏は直ぐに視線を胸元から逸らす。そ

うだな?」

「え、ええそうよ。そうよね?」

「確かに一夏さんは見ようともしませんわ」

「折角成長したのに……」

セシリアと箒も頷いている。

「違うんだよ三人とも。一夏が見たいのはそんな物じゃないんだ」

「え……?」

「おい静司?」

まるで先程の静司の様に、嫌な予感に狩られた一夏が声を上げるが無視。

「教えてあげよう。一夏が見ていたのは胸じゃなくて——太ももだ!」

『な、なんだって!?!』

「静司iiiiiiiiiiii!?!」

ダツシユ。捕獲。肩シエイク。凄まじい速度で静司を捕獲した一夏が肩をガクガクと震わせるが静司は構わず続ける。

「それだけじゃない! 俺は知っているぞ一夏! 学園祭で嵐がチャイナドレスを着ていた時の事だ!」

「っ!?!」

「わ、私?!」

突然名前を出された鈴が素っ頓狂な声を上げる。そんな彼女に頷き静司は続けた。

「あの時お前は彼女の脇と太ももを見ていた! その時ばかりは目つきが鋭くなったのを俺は知っている! つまり、つまり一夏は——」

すうつ、と息を吸いそして吐きだす。渾身の一言を。

「腋&太ももフェチだ!」

「静司iiiiiiiiiiiiiiiii!?!」

「ハハハハ一夏、俺だけ変態扱いされて溜まるか。共に地獄に落ちようぞ」

「お、お前俺を巻き込む気だったな!?!」

「ちゃんと疑いを晴らしたぞ! 見ろ! 彼女達の顔を」

二人が視線を移した先では顔を赤くした鈴が『え? え?』と何やら悶えていた。そしてその鈴に忍び寄る箒とセシリアとラウラ。

「そういえば鈴はいつも腋を見せる制服を着ていたな。なんであんな奇怪な改造をと思っていたがまさか……」

「最初から知っていたのではないですか?」

「なあ、フェチとはなんだ?」

「ちよ、知らない！ 知らないわよ私は!？」

疑いの目をかける箒とセシリア。それに若干一名無垢な子供が混じったカオスの様な空間と化しており、先ほどまでのホモ疑惑は既に消え去っていた。

「これで解決だ。はははははははは……はははははは……!？」

「新たな問題生んだだけだろこれ!？ どうしてくれるんだよ静司いい!？」

完全にカオスと化した談話室。そんな光景をギャラリ―達は生暖かい眼で見物していた。

因みに後日。静司の元に本音とシャルロットがやってきた。

「せーじ、どれがいい?」

「ど、どうかな?」

二人が持ってきたのは奇妙な物体。それは俗にケモミミだったが、種類は多種に渡っていた。一体彼女達が何を考えてそれを持ってきたのか。静司は腕を組んで目を閉じしばし考え、そして結論をだした。

「あ、自分犬耳派なのでそれで。あと尻尾もあると最近いい感じで」

「もうヤケクソだね静司……」

「じゃあ犬っぽいこの狼耳で行こうくホロホロホロく」

試練を一つ乗り越えた少年は、新たな楽しみを知ったとか。

77. 炎は消えない

空を飛んでゆく自衛隊のへり。遠くから聞こえる工事の音。そして落ち着きのない人々の喧噪。それらを聞きながら千冬はぼうつ、と空を眺めていた。その顔には普段の凜々しさは無く、心ここに非ずと言った様子だ。そしてその隣ではそんな千冬を気遣いつつも報告を行う真耶の姿があった。

「学園の修繕の方は予想より早く終わりそうです。アリーナは流石に無理ですが、一週間後には通常授業には差し支えありません。……尤も、その授業がいつになるかはわかりませんが……」

「そう、だな……」

真耶の報告に答える言葉にもどこか力が無い。そんな千冬の姿に隣の真耶は顔を暗くした。

あの事件から三日が経った。そしてこの三日間は文字通り目まぐるしく過ぎて行った。

世界中で起きたISの暴走。これにより多くの施設が破壊され、そしてありとあらゆる組織、機関がハッキングされた。暴走そのものは数時間で終わったものの、そのもたらした被害は大きく今も世界は混乱している。

まず第一にありとあらゆる機関が行ったのはISの使用停止だ。騒動の原因でもあり中心だったIS。機動中だったそれらの全てを停止し、コアを抜き取り厳重に隔離、事実上の封印を行った。それはIS学園として例外でなく、学園の訓練機30機も全て使用停止となり学園は現在休校状態だ。

だがこれは苦渋の決断だっただろう。ISと言う存在とその力は戦力の要であり抑止力でもあったのだから。もし、他国が構わずISを使用して攻めて来たら？ そう考えた者は少なくない。おそらく表向きは封印していても、有事の時は構わず使う可能性は高くその為の準備もしている事だろう。

だがそれでも今まで通り使えない事は事実。そしてこの機に乗じISを持たない組織、勢力の動きが活発になり、世界各地で小競り合

いが多発している。更には男性を中心とした反IS団体と女性至上主義を掲げる団体の争いもだ。

「これがアイツの残したのか……」

「織斑先生……」

この騒動の原因を作った張本人の事を思う。もし束が死なずに状況をコントロールしていればこんな混乱は起きなかつたのだろうか？ 答えは否だ。確かに混乱が起きても束が簡単に鎮圧するかもしれない。だがそれによって抑圧された人々の感情はいずれ一気に噴き出す事だろう。その時束はどうするつもりだったのか。それはもはや分らない。

「……生徒達は？」

「はい。幾人かの生徒から休学届や退学届けが出ています。それと代表候補生たちは本国から待機命令が出ていると」

「まあ、そうだろうな……」

IS学園の生徒には候補生や企業に所属する人間などが多数いる。だが同時にISに憧れ入学した一般家庭の生徒も居るのだ。そう言った生徒達から見れば連続して起きる学園周辺での事件に恐怖を覚えそこから去りたくなるのも分かる。それに今回の事件ではそのISそのものが暴走したのだ。それが止めとなったのだろうか。

そして候補生たちもそうだ。専用機を持つ彼女達のISもそれぞれ使用禁止令が出ている様だが、それを自国に戻さないのは何故か？

答えは単純、どの国も未だ危険性のあるISを戻す事を躊躇っているのだ。何せ候補生たちの持つISは試験機的な意味合いも強く特殊な機体が多い。もしそれが自国で暴走を始めたら目も当てられない。唯でさえ自国内部ですら大変なのにこれ以上騒動の種を増やしたくないのだろう。暴走するなら日本、それもIS学園でなら被害は少ないとでも考えているに違いない。

故に候補生たちや専用機持ちはIS学園で待機。代わりに本国からそれぞれ研究チームが派遣されるらしい。

「織斑先生、やはり少し休まれた方が」

「いや、いい」

千冬の様子を心配した真耶の気遣いに首を振る。だがその姿にはやはり覇気が無かった。そんな千冬の様子に益々顔を曇らせる真耶だが、不意に手元の端末が鳴った。

「はい、山田です。……ええ、ここに居ますが……。え？」

どこか驚いた様子で声を上げた真耶に千冬が振り向く。

「どうしました？」

「え、ええ。その……」

端末から顔を離れた真耶は戸惑った顔を浮かべていた。

「K・アドヴァンスの社長——草薙由香里さんが話をしたい、と」

その報告に千冬の眉がぴくり、と跳ねた。

「ごめんなさね。忙しい中時間を取ってもらって」

「いえ、こちらでも聞きたいことがありましたので。……しかし大丈夫なのですか？」

「ああコレ？ 平気よ平気。ちよーと腕がポツキリ逝っただけなのに重症扱いされたのよ」

そう笑うスーツ姿の女性、草薙由香里は右腕を吊っており、頭には包帯が巻かれている。その原因は先日起きたK・アドヴァンス社への亡国機業の襲撃が原因である。公式発表では死傷者数名、そして社長の由香里も重症とされていたが、当の本人である由香里は意外とピンピンとしていた。

「さて、それじゃあお互い時間もあまりない事だし進めましょう。——彼女達も気になっている様だしね」

そう言いつつ由香里が視線を向けた先には一夏や楯無達の姿があった。これは由香里が千冬に頼みこの話し合いに参加させてもらったのだ。

「と、言ってもこれから話す事は貴方達が一度聞いたであろう事だけどね」

「それは……」

由香里の言葉に一夏が反応する。そんな一夏に由香里は頷いた。

「そう、静司と私達について」

それから由香里の口から語られた内容はあの地下での静司と束の罵り合いを補足する様な物だった。川村静司とK・アドバンス社の関係。EXISTという存在。そして静司の目的とそれに伴う黒翼というISの特異性。それらを一通り話し終わると、真つ先に千冬が反応した。

「Vプロジェクトは本当に存在したんですね……？」

「間違いないわ。そしてその跡地から私たちは静司を発見した」

「他にその計画が行われている可能性は？」

「無い、とは言い切れないけど少なくとも私達が知る限りでは無いわ。それに篠ノ之束も探して潰していったはず。可能性は低いと見て良いわ」

「そうですか……」

気まずい沈黙。千冬はどこか苦悩する様に拳を握りしめ、真耶や鈴達もその顔は暗い。そんな中、声を発したのはシャルロットだ。

「静司は、静司の行方はわからないんですか？」

それは継る様な声だった。その拳はきつく握りしめられ震えている。その隣では本音も不安げに瞳を揺らしていた。

川村静司の搜索。それは勿論行われた。あの事件の際、静司はその正体を晒したがそれが一部の人間に過ぎない。更には途中から始まったISの暴走により学園を監視していた組織や勢力達もそれ所で無くなり、途中からの展開は全く把握出来ていなかったのだ。何せISの暴走だけでなく、ありとあらゆる場所へのハッキングも同時に行われていたのだから。

その影響もあり黒翼Ⅱ川村静司という事実を知るのは意外に少ない。篠ノ之束の起こした騒動により、川村静司の正体が広まらなかったとは何とも皮肉な話である。

結果、海中の搜索はあくまで『川村静司の搜索』となっていたが遂には見つかる事は無かった。本来ならこういう時こそISによる搜索が適していたがそのISが使用できない状態だった事も大きい。

だからこそシャルロットは継つたのだろう。K・アドヴァンス社の

特異性、EXISTたる組織が彼を回収しているのではないかと。だがそんな彼女に帰ってきたのは期待したものでは無かった。

「ごめんなさい……私達にも分からないの」

「そんな……だって……」

「社への襲撃以降、EXISTは私達から離れ独自に行動しているわ。亡国機業の力が分からない以上、下手に連絡を取るの危険なの。だから今は何をしているかも、無事であるかも分からない。だけど――」

言い辛そうに由香里が顔を曇らせる。

「彼らにはもうISは無いわ。それに本社襲撃時に脱出していたとしても、体制をそう簡単に整えられるとは思えないの。事実、何人かは遺体で発見されているから。だから……」

望みは薄い。言外に告げられたその言葉にシャルロットが顔を覆い、本音もまた肩を震わせた。そんな二人をラウラと虚が抱きしめ優しく背中をさすっている。その姿は何処までも痛ましく、鈴や箒達の顔も一層暗くなった。

「静司は」

そんな中、一夏が口を開く。彼の顔もまた暗く何かを食いしばっている様であった。

「自ら望んでEXISTに入ったんですか？」

「ええ。私達への恩返しもあったのでしようけど、根本にあったのは篠ノ之束に対する感情よ」

「その為に、腕を磨いた？」

「強くなろうとしていたのは事実よ。そして私達もそれを止めなかった。EXISTはね、大なり小なり問題を抱えた面子が揃っていたのよ。元犯罪者だって居たわ。そんな連中が集まって、支え合い、そしてそれぞれの目的の手助けをする。その目的が復讐なら、その為の力を与えたわ。私たちは正義の味方でも何でも無い。K・アドヴァンス社としては新装備やシステムのテストを兼ねて、時には傭兵紛いの事をしつつ利益を求めた。EXISTはその仕事を果たす代わりに自分達の目的を達成する道具としてK・アドヴァンスを利用した。会社

の一部門と言つても根本にあるのはそこなの」

「どうして……そこまでしてっ」

「逆よ。そこまでしてでも果たしたい事があつた。だからこそよ」

「そんなの……」

がくつ、と力を失い椅子に沈んだ一夏を鈴達が気遣わしげに見る。

それは言つた本人でもある由香里も同様だ。だが彼女は直ぐに毅然とした顔に戻ると立ち上がった。

「私が今日ここに來たのは説明する義務があると思つたから。それともう一つ、お礼を言いたかつたの」

「お礼……っ？」

「ええ。例えどんな形であれ、あの子が貴方達との日々を大切に想つていたのは事実よ。それを与えてくれた貴方達へ、感謝を」

そう言つて由香里が頭を下げる。その姿に一夏は少し驚き、そして小さく震えた。

「そんな事、今更言われても……っ！ もっと、もっと早く知つていれば……！」

ぽたり、と一夏の瞳から涙が溢れる。そしてそれを皮切りに一夏は嗚咽を漏らした。

そんな一夏に、誰も声をかけることは出来なかつた。

「くっそおおー！」

ガンツ、とオータムが怒声と共に蹴り飛ばした椅子が壁に当たり砕けた。だがそれでは飽きたらずにオータムは地団駄を踏むように床を何度も蹴りつけている。その様子に同じ室内に居たカテーナは苦笑した。

「落ち着きなさいよねえ。傷に響くわよお」

「うるせえー！」

カテーナの注意も効果は無くオータムは相変わらず周囲にあたっている。そんな様子に肩を竦めるとカテーナは手元で紅色に光るコアに視線を移した。

「うふふ」

「随分とご機嫌ね、カテーナ」

「あらスコール。そちらの怪我はどう？」

「おかげさまで。まあしばらくは安静にしておくわ」

そう答えたのは金の長髪を揺らすスコールだ。彼女はその足で立たず車椅子にその身を預け、病衣を纏っている。そんなスコールの姿にオータムが反応した。

「スコール!? まだ動いては！」

「大丈夫よオータム。そういうあなたもあまり暴れては傷が開くわ。だから落ち着いて、ね？」

「う、うん……」

そう微笑みながらオータムを引き寄せその頭を優しく撫でると、オータムは先ほどまでの剣幕が嘘のように大人しくなった。そんなオータムの様子にスコールは笑みを深くする。

「それでカテーナ、あなたがご機嫌なのはそれが理由？」

「勿論よお、織斑一夏の白式は失敗したけどこちらは手に入ったのだから」

そう笑うカテーナの手元で光るコアは篠ノ之箒から奪った紅椿。

一夏の白式は川村静司によって取り返されてしまったが、こちらは確保できたのだ。

「これからこれを調べつくして色々やるわよお。それに貴方達のI Sの強化もしてあげる。……とは言ってもオータムとスコールはしばらくは安静ねえ」

「わかってるわ。まさかここまでやられるとは予想外だったけどね」

そう苦笑するスコールが自身の体に見やる。

あの時、スコールは一夏の斬撃を受けた。それだけなら致命傷には至らなかったが傷は傷である。そしてその後が始まった、あの銀髪の少女による巨大I Sの一斉砲撃。負傷していたスコールとオータムは反応が遅れ、その砲撃の直撃を受けたのだ。結果、二人は更に傷を負い、亡国機業は撤退するに至った。エムやシェーリが残る事も考え

られたが、そうなるかと撤退する二人の護衛に不安が残る為に却下されたのである。

「まあ色々予想外の事はあったけど、目的の半分は達成できたし、世界は今やIS恐怖症よ。この機を逃す訳にはいかないわ」

「けどよスコール。何で川村静司のISを無視したんだ?」

スコールに撫でられ落ち着いたオータムが疑問の声を上げる。確かにあの時、スコールはISの奪取を命じたが川村静司については触れていなかった。その事だろう。

「その答えは私が応えてあげるわあ」

カテーナが立ち上がり手のひらの紅椿のコアを掲げた。

「確かに川村静司のISも興味があったわあ。けどね、私達が欲しいのはあくまで私達に協力的なISなのよねえ。言い換えれば説得可能なIS。まだ幼い子供の様なIS。意識があつても自我が薄いIS。だけど川村静司のISは違った。あそこまで明確に創造主に反抗しているのに止まる気配も、支配されている様な気配も無かった。つまりあのコアには明確な自我があつたということねえ。だけど、「そんなコアを手に入れた所でこちらの言う事を聞くとは限らない。むしろあそこまで強い意識を持ったコアだとこちらに反旗を翻しかねない。だから除外したのよ」

カテーナの言葉にスコールが続く。篠ノ之束亡き今、コアの意識がどのように変化するかは不明だ。だが未だISを暴走に導いたときされる銀髪の少女は残っている。不安要素は出来る限り避けたいのだ。「まあ紅椿も手に入れた事だし欲張り過ぎてもって事よ。無論、白式も手に入れたいけどね。この二つに限ってはコアの意志や自我に係なく重要よ。何せ博士自らが手がけた第四世代の紅椿とそれに近い白式。その秘密が性能だけとは限ら無いもの」

「実際少し調べただけで色々出て来たわよお。どうもあのIS暴走時にハッキングされたデータの一部は紅椿と白式に集められていた様ねえ」

「と言う事は、その二つを手に入れば怖い物無しって事か。随分と都合のいい話だな」

「あの銀髪の少女の事もあるから油断は出来ないけど概ねそうよ。だからこそ私たちは白式を手に入れるわ。尤も、今すぐは難しそうだけどね」

スコールが視線で合図するとカテーナは頷き投影型スクリーンにIS学園の様子を映した。その映像内では様々な勢力がそこに集まっている事が見て取れる。

「事件の中心とも呼べる場所なものね。恐らく本気で仕掛けたら彼らもISを使わざるをえない。そうになると全面对決になるけど戦力的には不利ね。私もオータムも今はまともに動けないもの」

「スコール！ 私は一！」

「無茶は駄目よオータム。今は我慢。そしてその間にシエーリとエム。それにレギオンが戦力を集めてくれるから。そうよね、カテーナ？」

「そうよお。既にシエーリがインドの基地を襲撃してアグニ型を奪取しているわ。やはりどこもISを使う事に躊躇いがあるからスムーズに済んだそうよお？ それと……あら、丁度エムから連絡が入った所ね」

カテーナの言葉と同時に、投影型スクリーンに新たなウィンドウが開き、エムの顔が映し出された。

『目的は達成した。次の標的は？』

「ご苦労様エム。今データを送るから休憩とエネルギーの回復が済んだら次お願いねえ。次はちよつと骨のある所だから苦戦するかもよお？」

『関係ない。……データを受信した。終わったら連絡する』

余計な会話はする気も無いと言った様子で通信を切ったエムにカテーナは苦笑した。

「まだ根に持つてるようねえ、川村静司をあなたが撃った事を」

「そうね。けど仕事はちゃんとしている様だし文句は無いわ……あら？」

スコールも笑って答えつつスクリーンに目を向け、そして唇を小さく釣り上げた。それはエムの次の標的を見たからだ。その様子に気

づいたカテーナも同じく笑う。

「さて、織斑千冬仕込みのドイツ軍とやらはどれだけ反抗できるかしらねえ」

そう笑うカテーナの視線の先に映し出されたウィンドウには、エムの次の目的地であるドイツが映し出されていた。

炎が上がる基地。黒煙が立ち上り警報がけたたましく鳴り響いている。そんな中、ドイツIS配備特殊部隊、シュヴァルツェ・ハーゼ副隊長であるクラリツサ・ハルフォーフは血に塗れた状態で横たわっていた。その肩は大きく上下し、息は荒い。そして血が流れる腹を押しさえつつ見上げる空では一機のISが悠然とこちらを見下ろしていた。

「き……やま……」

「こちらの襲撃に気づくが否や構わずISを起動したか。だが、それでも少し遅かったな」

ゆつくりと降りてくるIS。深い青色のその機体はイギリスで強奪されたサイレント・ゼフィルスだ。それを忌々しげに睨みつつクラリツサは声を上げた。

「亡国、機業……」

「そうだ。あの人が鍛えた部隊と聞いていたがやはりこの状況では話になら無かったな。だが、」

サイレント・ゼフィルスの搭乗者が遠くの空へと視線を向けた。黒煙が上がる夜空には煙と火の粉以外は何も見えない。しかし女は小さく口元を吊り上げた。

「自らを囿に他のISは逃がしたか。暴走の危険を承知の上でのその行動は褒めてやる」

そう、クラリツサは襲撃に気づくが否や独断で部下達にISを持たせ基地から逃がしたのだ。そして自分だけは足止めの為に残ったのである。しかし対応が一步遅く、碌に反抗出来ぬまま敗北してしまった。

サイレント・ゼフィルスが再び宙に上がった。その腕にはクラリツサから力づくではぎ取ったIS、シュヴァルツエア・ツヴァイクが主無き状態で捕まれている。

「ドイツの第三世代IS。こいつは頂いていく。貴様はそこで己の無力さを嘆きながら死ね」

そう言い捨てるサイレント・ゼフィルスは一気に高度を上げ夜空の彼方へと消えて行った。その姿をただ見ている事しか出来なかったクラリツサは歯を食いしばる。

「申し訳ありません、隊長……」

基地を襲われ、ISを奪われ、そして自分は今ここで惨めに死のうとしている。そんな情けなさに絶望するクラリツサの周囲では炎が勢いを増していく。いよいよこれで終わりかと、後悔と悔しさにクラリツサの瞳に涙が浮かんだ。

そしてゆっくりとクラリツサの意識が落ちていく。段々と力を失い急速に視界が暗闇に覆われていく中、直ぐ近くで音が聞こえた。それは人が歩く音によく似ていたが、もはやそちらに顔を向ける事すら叶わない。そうしてうちに足音は近づき、やがてはすぐ隣で会話が聞こえてくる。

「一足遅かったか……。いや、ギリギリだな」

「そうですね。とりあえず急ぎましょう」

話し合う声。そしてクラリツサの体がゆっくりと持ち上げられた。

「基地がこの様子だしな。ヘリまで連れて治療した方がいいだろう」

「ええ。しつつかし、本社があんな状況になって帰る場所無くなったと思っただけですよ。ISも無いしどうすればいいんだか」

「仕方ないだろ。いや、むしろタイミングが良かったとも思える。こっちでの仕事が終わってISを本社に送った直後にあの事件だからな。……しかしあのロリコン先輩に下っ端後輩。拳句にや親バカ上司も行方不明とはな。とりあえず俺達は今できることをやって置いて後で金をせびるとしよう」

「金に汚いその姿が素敵です。けどそんなだからずっと海外に飛ばされてるんですよ?」

「お前も同じだろ。それに海外は嫌いじゃないから良いんだよ。向こうもそれを承知でやってるんだし。とにかく急ぐぞ——B3」
「今はIS無いのでそのコードネームもどうかと思いますけどね。早く合流できればいいけど……」

そんな言葉を交わしつつ、クラリツサを抱えた男と女は炎の中に消えていった。

『ご覧下さいませー右手に見えるのが太平洋、太平洋でございませう。そして左手に見えるのが、これまた太平洋でございませう。では正面は？ 残念ー！ 太平洋でしたー』
「さつきから何やってるの？」

振動する小さな室内。そこに座っていた女性は先程から通信機を通して聞こえてくる同僚の声に首を傾げていた。

『あーそれはあれだ。バス添乗員ごっこって奴だ。日本に来たら一度生で見えてみたかったんだけどなあ』

「何それ……。まあ仕事をちゃんとしてくれるのなら良いのだけど」
『酷つでえな。ちゃんと仕事しているから快適な空の旅を楽しめるんだろ？ シヤドウ2』

「快適さを強調したいならもう少しわかり易いネタで楽しませて頂戴。シヤドウ1」

通信越しに話す相手は壁を隔てた搭乗席におり、現在自分が乗っているこのヘリの操縦をしている。そんな彼女——シヤドウ1は不満げに機体を揺らした。

『しかしなあ、ストレスだつて溜まるもんだぜ。今頃噂のテロリスト共が好き勝手暴れてるんだろ？ とつとと殲滅してやりてえ』

「随分と軽く言うけどそこには同感よ。けど今は無理ね。その理由は分かっているんでしょう？」

『当たり前だろ。ISがあんな状態なんだ。使いたくても使えねえ。私も取り上げられちったし。折角張り込んでたのに結局意味が無いときたもんだ』

「司令部としてはまた暴走して暴れられたら困るのよ。だからコアだけの状態にして嚴重に隔離されてしまった。けど——」

『何故か暴走とは無縁のテロリスト共は好き勝手に暴れられるか。なんだよそれチートじゃねえか。メーカーに訴えんぞ』

「そのメーカーはつい先日倒産したけどね。けど危険性がまだある以上不用意にISは使えない。しかし敵が使つて来る以上、その状態も長くは続かないわ。最終的には使わずにはいられない状態になる。敵が通常兵器ならまだしも、ISを使用しているんですもの。IS無しで対抗するのは荷が重いわ」

『そうだな。だがそれを打開する為に私たちが動いている。だろ？』

その為のお前とお前の相棒だ。本来の目的は達成できなかったが別の収穫もあつたもんだしな』

「ええそうよ。だから今は急いで戻りましょう。彼の容態が心配だわ」

そう言つて目の前に鎮座するカプセルに目を移す。そのカプセルには様々な機器が取り付けられ、表面には状態を表すモニターと中を見る為のガラスがはめ込まれていた。その中は液で満たされ良く見えないが、そこに人が入っているのはうっすらとガラス越しに見える。そのガラスを労わる様に撫でつつ、呟く。

「絶対死なせないわ」

『そうだなー。じゃあ急ぐとするかシャドウ2！ ……所でこのシャドウってコードネームはどうも慣れねえな』

「今の私達を表すにはピツタリのコードネームじゃない。けど……そうね、私としても別のコードネームが良かったわね。黒は好きだけどシャドウ、影は少し違うし」

『へえ？。じゃあお前なら何てつけるんだ？』

どこか面白そうに問うてくる声に、彼女は薄く笑い答えた。

「シルバー2、なんてどうかしら？」

78. きょうだい

暗く電子的な光が満ちた部屋で少女の声が響く。

「束さま……束さま……」

少女の名はクロエ・クロニクル。彼女はその金の瞳をギラつかせながら目の前の機械に縋りついていた。

その機械はまるで棺桶の様であり、中には液体が満ちている。そしてその中には彼女の最愛にて敬愛する女性が浮かんでいた。

「駄目です……束さまが居なくては……だめなのです……。その為なら、その為なら……!」

縋りつくクロエの手元にあるディスプレイには中身の人物の心電図が映し出されている。しかしそれはとうの昔にピクリとも動かなくなつた。だがクロエはそのの意味するところを理解しようとしな。理解できない、したくないのだ。

「束さま……っ!」

もはや狂つたかのように言葉を吐きだすクロエだが、その脳裏では黒鍵を用いて必死にある情報を集めていた。生前の最愛の人が残した資料、そして探すデータに類似した資料。ありとあらゆるものを集め分析している。

Valkyrie project. Valkyrie Trace System. インストール。ソフト。ハード。ISによる洗脳。コアネットワークについての解釈。人間の記憶について。脳の構造、その他ありとあらゆるものについて。

「束さま……っ!!」

狂い始めた少女の声は何時までも部屋に響き渡っていた。

空をISが飛んでいく。あれはラファールの索敵仕様だろう。何故直ぐに分かつたかと言えばここ最近毎日の様に見ていたからだ。

「IS……」

意味も無く呟く。その存在。その影響。そして自分とそれが今後

どうしていくべきなのかを。それは一夏がここ最近ずっと考えていた事だ。

「俺は……」

親友は消えた。幼馴染の姉は死んだ。そして自分の姉は気丈に振る舞いながらも時折抜け殻のように空を見上げている。友人達もそうだ。セシリアやラウラも顔色は沈み、本音やシャルロットに至っては目も当てられない。そして箒もどこか思いつめたような顔をずっとしてている。

そんな中、自分はずっと考えていた。何も知らなかった自分。隠していた親友。幼馴染の姉の暴走とその目的。そして亡国機業。

正直に言えば未だ静司の事を理解は出来ていない。確かに家族を殺されたのなら恨むだろう。自分だってもし姉である千冬がそうになったら相手を恨む。だがそれはあくまで『もしも』の話。実際にそれに直面していないが故に、あそこまで激しい憎悪を持つと言う事が理屈では分かってても、感情が理解しきれしていないのだ。

束にしてもそうだ。あそこまでして千冬と箒。そして自分の事を想っていた束の事を一夏は恨むことが出来ない。同時に何故そこまで、という思いもある。姉と束が深い友好関係を築いていたのは知っていた。だが自分が知っていたのは表面上のものだけであり、その内にどんな想いがあつたのかまでは知らなかった。

そう、自分は何も知らなかった。何も知らずに自分の想いだけを吐きだしてきた。

だが、それは本当に悪い事なのだろうか？ 知らない事は罪なのか。なら何故言ってくれなかったのか。言ってくれなければ何も分からないではないか。知ろうとしなかった事が間違いか？ むしろ知らないままの方が良かったのか？ 少なくとも束はそうしようとしていた。しかしそれは静司によつて崩され、そして潰えた。

一体自分はどうすれば良かったのか。ここずっと悩み続けていたそれに未だ答えは無い。だが当初よりは大分冷静になってきたお蔭で、今の自分がすべきことの一つははつきりしている。それは――

「ここにいたのね」

不意に声がした。一夏は仰向けに寝ていた状態から顔をそちらにずらすと、自分の良く知る少女がここ、IS学園屋上に来たところだった。

「怒られるわよ？ アンタは重要人物なんだから」

「鈴」

ぷりぷりと怒りながら現れたのは幼馴染である鈴。彼女は腰に手を当て呆れた顔をしながらこちらにやってきた。

「一夏、ここ最近ずっとそうやって空見てるわよね」

「そうだな……」

鈴の言う通り、一夏はここ数日間暇さえあればこうやって空を見上げていた。これは危険な行為だ。再び亡国機業が攻め入ってきた時、真っ先に狙われるからだ。だが、

「ここなら直ぐ見つかるかと思ってき」

「……え？」

小さく呟いた声は突然吹いた風により鈴に伝わらなかつたらしい。鈴が不思議そうな顔をするが一夏は小さく首を振りつつ起きあがる。

「それより鈴、何か用があったんじゃないのか？」

「何よ、用がなきゃ来ちゃいけないわけ？」

「いや、そうじゃないけど」

眼を吊り上げた鈴の様子に一夏は慌てて首を振った。そんな一夏の様子に鈴は『はあ』とため息をつく。

「さっき通達があったわ。私はこのまま学園にて待機だって。多分セシリア達も同じような通達があるんじゃないかしら」

「待機？ それって」

「ええ。早い話ここで戦力となれと言う事よ。亡国機業はアンタの白式を狙ってはずれ必ず来るわ。だからそれに対する戦力と言う事ね。それに学園には30機のISもある。更には複数の専用機と今では学園の防衛戦力として自衛隊や各国のISまでね。一夏、なんでここにそんなに戦力が集まるかわかる？」

「亡国機業……その襲撃が確実だからここで戦う？」

「正解よ。あの連中は現在、神出鬼没に色々な場所を襲ってはISを

奪ってるわ。流石にそれがこれだけ続くと各国も自衛為にISを使わざるを得ない。けどそれでも戦力を一気に増強している亡国機業の奇襲に対して対応できるか考えると不利だわ」

「だから確実に襲ってくるここで仕留める、か？　だけどそんなことしてたらどンドンISが奪われていくぞ」

「わかってる。だけどどこにある戦力を亡国追撃に分散させても捕まえられなければ意味が無いわ。むしろ逆効果で各個撃破の可能性もある。だから確実に来るであろうその時に為に私たちは備える必要がある。なんでまだここが襲われないかは不明だけどね。どこの国もね、もう自分達だけじゃどうにもなら無いって分かっているのよ。だから必ず来ると分かっているここに賭けるしかない」

「なら、俺も……」

「……正直に言えば一夏は外される可能性が高いわ。奴らの第一優先目標は間違いなく白式なんだから」

言いにくそうに事実を述べる鈴の言葉に一夏は歯噛みした。言いたいことは分かる。狙いが自分の白式ならば戦うべきでないのは確かだ。敵は既に紅椿を手に入れている。そこに白式まで奪われれば目も当てられない。だが、

「それでも、それでも俺は自分だけ逃げ隠れするなんて出来ない」

顔を上げはつきりと告げると鈴は小さく苦笑した。

「一夏ならそう言うでしょうね。けどそれを決めるのは私達じゃないわ。だから言いたいことがあるなら作戦を決める連中に言う事ね」

作戦の決定者。それは流石に分からないが、その人物に影響を与えられる人物なら知っている。他でも無い、姉である千冬だ。一教員ながらも世界最強の称号を持つ姉の言なら考慮される可能性は高い。だがその為にはまず千冬と話さなければなら無い。

「千冬姉……」

姉の事を考えて一夏の顔が歪む。自分と同じく、いや、自分以上に思い悩んでいる姉の姿は一夏の不安の一つだからだ。

「だけど、これもそのままじゃいられないよな」

静司の事も束の事も知るには遅すぎた。だがまだ姉は居るのだ。

だから今度こそ、自分は間違えてはいけない。そして思い悩む姉の力になりたい。

決意を新たにすると鈴がにやり、と笑った。

「行くのね。なら仕方ないわねー。私も行ってあげる」

「いいのか?」

驚いた様な一夏に鈴は「ふふん」と笑った。

「前にも言ったじゃない。何かある時は一緒に行つてあげるつて。あの時は結局千冬さんには聞けず終いだつたけど今度こそ、ね?」

そう言つて笑う幼馴染の姿に一夏も顔を綻ばせた。そうだ、まだ失っていない物はここにもある。それを護る為にもいつまでも立ち止まつてはいられない。

「よし、行くこうぜ鈴」

「OK!」

快活な鈴の返事に心が少し軽くなったのを感じつつ、歩き出す。だが最後にもう一度、振り返つて空を見上げた。

「今度こそ必ず護る……静司、お前の分もだ」

その呟きは誰にも聞かれる事は無く、風に流れて行つた。

IS学園。その中にある道場で箒は一人瞑想していた。剣道着こそ着ていないがその傍らには竹刀が置いてある。彼女の姿はピクリとも動かず、ただ静かにその正座を崩さない。

「答えは出ましたの?」

不意に良く知つた声が耳に入り箒は目を開いた。いつの間にか近づいたのか。すぐ目の前にセシリアが立っていた。それもその手に竹刀を手にして。

「まだのようなら、よろしければお手合わせして下さいませんか?」

「こう籠つてばかりでは窮屈でして」

「セシリアが……?」

突然何を、と思う。それに今はそんな気分になれない。だから断ろうとしたのだが、

「行きますわよ！」

「なっ!？」

こちらの用意も待たずにいきなりセシリアが斬りかかってきた。箒は慌てて竹刀を手にとると片膝の状態でその一撃を受け止めた。

「な、何をする!？」

「まだまだですわ！」

こちらの話などまったく聞かない様子で斬りかかってくるセシリアに箒も眉尻が上がる。素早く立ち上がると冷静かつ、鋭く竹刀を振るい、型も何もなっていないセシリアの一撃を弾き返した。

「くっ!？」

「その程度で私に接近戦など！」

だんっ、と強く踏み込む。竹刀が唸りを上げ風を切りながら振り上げられた。そして目を見開くセシリア目掛けて――落とす！

「はあっ！」

「きやああ!？」

咄嗟にセシリアは竹刀を横にしてそれを受け止めたが威力までは消せなかった。余りにも強力な一撃に尻餅を付き竹刀が床に転がっていく。そして痺れる手を涙目で見ていたセシリアに箒は竹刀を突きつけた。

「まだやるか?」

「……降参ですわ」

セシリアが両手を上げると箒のため息をついた。手を差し伸ばしセシリアが立ちあがるのを助けてやる。

「まったくとんでもない馬鹿力ですこと」

「それを言うなら突然襲いかかってきたお前はなんなんだ」

箒の不満は尤もである。だがセシリアは特に気にした様子も無く、

「そうですわね、気分転換でしようか?」

「お前……!」

「怒らないでくださいな。私も、そしてあなたにも必要かと思いましたが、一瞬で終わってしまいましたでしたがやはりお強いですね」

「っ」

箒の肩が震える。だがセシリアはそれを気にした風も無く汗をタオルで拭いながらその場に改めて座った。

「気分転換は本当ですわ。先ほど一夏さんと鈴さんの姿を見ましたが……正直に言っても距離が近く思えました。今日だけではありませんけど。それでこのもやもやを解消したかったものでして」
「それは……」

それは気づいていた。何時からなのかは分からない。だが確実に一夏と鈴の距離は自分達の知らない所で縮まっている。そしてその事実が自分に焦燥を与えていたのだから。

自分のこれまでの事を思い出し暗く沈む箒だが、その顔を見てセシリアははあ、とため息をついた。

「お姉さま……篠ノ之博士について、箒さんの考えは纏まりましたか？」

「……………」

「まだの様ですわね。私の意見としましては……ご家族を前にして言うのも酷かもしれませんが一つです。許せない、と」

ビクツ、と箒が震える。

「私は篠ノ之博士の普段を知りませんし親しくもありませんが科学者としては尊敬していました。ですがあれだけの事をしでかし、そして今もその影響が響いている。その存在を許す事は出来ません」

それに、とセシリアは続ける。

「川村さんも川村さんです。事情があったのは分かりました。ですがだからと言って学園で暴れて良い理由にもなりません。なりません……もう、文句も何も言えなくなっていました」

その理由は言わなくても分かる。川村静司という存在はもう居なくなってしまうからだ。そして篠ノ之束も。

「さて、私は言いました。それでは箒さんはどうですか？」

再びの問い。対し箒は小さく首を振るしかできなかった。

「分からない、分からないんだ。確かに姉さんは酷い事をした。世界を混乱させた。それは昔からそうでそんな姉さんを私は疎ましく思っていた……思っていた筈なんだ」

なのに、その姉が居なくなつたことで感じたのは果てしない空しさだった。言葉に表せない寂しさがそこにあった。

姉のせいで一夏と引き離された。姉のせいで生活はがらりと変わった。姉のせいで世界は混乱した。

だけど、そんな姉が最新鋭の I S をくれた。ずっと気にかけていてくれた。そして自分達の為に世界すら変えようとしていた。

「私は姉さんが居なくなつて嬉しいのか、悲しいのか。それすら分からないんだ」

そう、それこそが箒の苦悩。家族が死んだと言う事実に対し自分が感じているあやふやな感情。それが箒を悩ませている。

「なあセシリア、私は一体どうすればいい?」

それは縋る様な問いだ。そんな助けを求める子羊の様な箒に対しセシリアは柔らかに微笑み、

「知りませんわ」

ぶつた切つた。

あまりにも清々しいほどのそれに箒は唾然とするが直ぐに喰つてかかった。

「お、お前! 普通こういうときは何か色々アドバイスするものではないのか!?!」

「何を期待しているのですか。私は気分転換に来ただけですわよ? それと発破でしようか?」

「は、発破……?」

ええ、とセシリアは頷く。

「先ほども言いましたが一夏さんと鈴さんが良い感じでピンチですわ。ここは一度休戦して遅れを挽回するために作戦を練りますわよ」
「こんな時に何を言っているんだお前は!?!」

激昂した箒が目吊り上げ叫ぶがセシリアはどこ吹く風だ。逆に冷静に箒に問う。

「では、一人で悶々と悩み続けているのが正解と?」

「それは……っ! だが!」

「ええ、少々酷い物言いでした。箒さんはご家族も絡んでいるのです

からね。ですがもう状況は待ってくれませんわ。先ほど通達がありました。私はIS学園の防衛戦力……と、言うより対亡国機業の戦力として出撃する事になりました。他の皆さんも同じですわ」

「戦力……？　だがそれなら私は……」

紅椿は奪われた。ならば今の自分出来ることは無い。

だがセシリアは首を振る。

「何を言っているんですか？　貴方は篠ノ之博士からもう一つ貰っているものがありますでしょう？　適性Sという世界でも有数の力が「っ!？」」

「驚いていますか？　流石に分かりますわよ。いきなり適性がCからSに変わるだなんておかしいですもの。ええ、これには確かに色々思う所がありますわ。ズルいとかセコイとか私たちの努力って何？　とか色々」と

「う……」

それは箒自身も何となく思っていた。思っていたからこそ適性については基本黙っていたのだがいつのまにかバレていたらしい。罰が悪く恐縮してしまう。

「別に責めたいわけじゃありませんわよ？　確かにそう思った事もあるのは事実ですけどコネだって力です。社会に出ればそれは嫌でも分かります。必要なのはそのコネだけに頼るか、そこから努力するんです。紅椿は奪われても学園にはまだISは有りますわ。さて、箒さんはどうします？」

「私にも、戦えと……？」

「決めるのは自分ですわ。ですが博士に、お姉さまに頂いたその力を今度こそ正しい事へと使うべきではと、私は思います」

それに、と一拍置いてセシリアは笑った。

「恋敵兼仲間はやはり心身強い方が倒し甲斐がありますもの」

うふ、と笑うとセシリアは立ち上がった。

「それでは私はこれで。作戦会議の方はまた今度にしましょう」

そう言って去っていくセシリア。その背中はこんな状況でも凛々しく見えて箒にはそれが眩しく見えた。

「姉さんがくれた、力……………」

手のひらを天井へかざす。その手に宿った力。与えられたその力は紛れも無く姉がくれたもの。その力を今度こそ正しい方向へ？

「出来るのか……………私に」

わからない。だけど、もしそれが出来た時、自分が姉に対して感じている感情が何なのか分かるかもしれない。だから、

「やるしか、ない……………」

そう呟き、箒はかざした手を握りしめた。

暗い、昏い夜の丘の上にその女性は居た。闇に溶け込む様に黒いナイトドレス。腰まで伸ばした漆黒の髪。大きく開いた胸元には翼をあしらったペンダントがかけられている。両腕は肘まで伸びる黒の手袋で覆われ、黒い帽子を被りそこから垂れた薄布によりその表情はうつすらとしか見えない。

空からはいつかのように激しい雨が降り続き騒音を撒き散らしている。それでもその女性の姿だけははつきりと認識できた。

「馬鹿が」

女性にしては少し低めのアルトの声。その言葉が胸に突き刺さる。

「お前は何もわかっていない」

こちらを心底見下すような声。そして女性は手をゆつくりと振るった。その瞬間、その女性の背後に全く別の光景が写る。それは全ての始まりの場所。某国にある研究施設の光景。そしてそこには楽しげに話す五人の女性と一人の少年の姿があった。

「やめろ……………」

それを見て声を漏らす。何故なら黒衣の女性は何を見せようとしているのか理解しているからだ。だが女性は構うことなく再び腕を振るう。すると再び場面が変わり炎に焼ける研究施設の姿が写った。そしてそこには横たわる五人の——

「やめろ」

声に反応したかのように変化が起きる。変化した光景中では、五人の女性が何かと戦っていた。そしてその背後には守られる様にして倒れる少年の姿。そして彼女らの遙か上空からは無骨な色のミサイルが迫ってきている。ここから何が起きるのか。それが分かっているからこそ力の限り叫んだ。

「やめろおおおおお!」

見たく無い、あんな光景は二度と。目を瞑り耳を閉じて蹲る。そんなこちらに黒衣の女性はゆつくりと近づいてきた。そして目の前まで来ると首を掴み、持ち上げた。

「がはっ!」

苦しい、息が出来ない。苦痛にあえぐ正面、薄布越しに見える女性の顔に浮かんでいた感情は怒りか、失望か。

「――」

囁く様に、言い聞かせるように何かを呟く。その言葉の意味もわからぬまま、意識は闇に落ちて行った。

「う……」

ゆつくりと体が浮き上がっていくような感覚。それに後押しされる様に視界が白く染まっていく。それらを刺激として覚醒を始める肉体に引かれる様に、目を開いた。

「ん、ん……は……?」

まず見えたのは簡素ながらも清潔な天井だ。そして白いカーテンと何かの機械。辺りには消毒液の匂いが満ちており少し離れた所からは誰かの話声が聞こえる。

「あ……」

声が上手くでない。一言しゃべるたびに異様に痛いのだ。それに全身にも痛みが響く。その痛みにも身悶える様に体を動かしてある事に気づく。

視界がおかしい。遠近感がうまくつかめない。その原因は直ぐに分かった。視界の右半分、つまり右目部分に包帯が巻かれているから

だ。だがその包帯の下の目も開こうとしても開けなかった。

ここはいつたい、どこだ？

それが分からない。それに自分の状態もだ。起きあがろうにも体は言う事を聞かず、ただ身を揺する事しかできない。それ以前に意識が朦朧としていて思考がいまいち定まらない。視界も微妙にぼやけている。

そんな時だ。物音に気付いたのだろう。カーテンの向こうから足音が近づき、そしてゆっくりとそれが開かれた。

現れたのは金髪の女性。どこか柔らかい雰囲気を持ち優しく微笑するその姿に、夢の中で見た別の何かを重ねてしまう。

「ツ、ヴァ……イ、ね、え……さ……ん」

「目覚めたようね。川村静司君」

女性——ナターシャ・ファイルスは優しく微笑み川村静司の頬を撫でるのであった。

79. 姉というもの

あれから直ぐに医者らしき者が駆け付け検査が始まった。静司はまともに体が動かせない為に結局は成すがままに調べられ、その間もナターシャ・ファイルスはずっとこちらを見守っていた。そしてそれが終わる頃には、静司も大分意識が回復してきた。

「気分はどう？」

「最悪ですよ……」

半身を起こしつつ首を振る。その度に連動する筋肉が悲鳴を上げ声が漏れそうになってしまふ。それを必死に堪えつつ、静司は周囲を見渡した。

「……は？」

病室なのは確かだ。だが静司が聞きたいのはそこでは無い。この病室がある施設の事だ。だがナターシャは小さく首を振るだけだった。

「ごめんなさいね。それは言えないの。アメリカ軍の基地とだけ言うておくわ」

「……そうですか」

それに対しては特になんか事はない。少なくとも彼女達からすれば自分は敵か味方かまだはつきりしていないのだ。余計な情報は渡さないと言う事だろう。

そんな風に静司が納得しているとふわり、とナターシャが静司の右目、正確にはそこを覆う包帯に触れた。

「肉体の怪我も重症だけど、ここも酷かったらしいわ。もう使い物にならないかもしれないって」

「どう、りて」

力がまったく入らない訳だ。開けようにもそもそもその感覚が無いのはそういう事だったらしい。

「落ち着いているわね？ 怖くないの？」

「どうでしょうね……もしかしたら納得しているのかもしれない」

長年の復讐の相手。それを倒した代償と言う事なのなら安い物だ。

そう、安い――

『せーじ』

「っ」

「どうしたの？」

不意に、脳裏に浮かんだ少女の姿に顔を歪めた。あれだけ心配してくれていたのに。結局同じことを繰り返し、一生ものの傷まで増えた。ああ、本当に不甲斐ない。

「大丈夫？ どこか痛むのかしら？」

「いえ、大丈夫です」

こちらを心配そうに伺うナターシャに首を振る。もう終わった事だ。もう自分はその場所に戻れないのだから。

「それよりも、どうやって、何故俺を？」

助けたのか？ それが疑問だった。

自分が海に落とされた時、世界中でI Sが暴走していたはずだ。そんな状況になればどこの国も軍も学園の監視どころでは無かっただろう。それに付近には亡国機業だつて居た筈だ。それなのにどうやって気づかれずに、自分を回収したのか。それが気になった。

「ふふ、それは貴方のおかげよ？」

「え？」

どこか意味深に笑うナターシャは自分の耳を指さした。ナターシャの右耳には銀色の翼をモチーフにしたイヤリングをはめられている。そしてそれが一瞬、キラリと光った。まさか……。

「ええそうよ。これは銀の福音。かつて篠ノ之束によって自我を奪われ、そして貴方達に落とされた機体。そしてその経緯でより強固な自我が目覚めた私の子よ」

「自我……？」

「そう。一度は篠ノ之束によって暴走させられたわ。けどね、その時この子は篠ノ之束の命令を振り切ってまで私を必死に助けようとしてくれた。残念だけどその頃のこの子の意識は完全に消えてしまっただけで、生まれ変わった意識にもそれは根付いていたの」

そしてそれ故に先日の暴走から逃れられた？ つまりここにある

銀の福音は黒翼と同じく、篠ノ之束に抗うだけの自我を得たISと言う事だろうか。

「そんな事が……」

「あるのよ、実際に。それは貴方のISだって同じでしょう？ それに亡国機業も。そんな特性があったからこそ、私はある命令を受けて学園近くに居たの。篠ノ之束の捕縛、もしくは抹殺という命令を。だけどそれは貴方が果たしてくれた。そして世界中が混乱している中、墜落した貴女をこの子を使って回収したのよ。まさかあのISの正体が貴方だった事には驚いたけどね」

びつくりしたのよ？ とナターシャは笑う。

「これは貴方達のおかげでもあるのよ。必死に暴走するあの子を止めてくれたからこそ今の私とこの子がある。だからあなたには特に言いたかったの。『私とこの子を救ってくれてありがとう』って。それに私達の敵でもある篠ノ之束を倒しにくれた事も」

そう言ってこちらの右手を包むように手を添え微笑むナターシャ。だが静司は静かに首を振った。

「俺は……」

そんな大層な事はしていない。あの時も、今回も。特に今回に関しては完全に自分の感情故だ。他の事なんて考えて居なかった。自分の行動によつて何が変わり、そして誰が傷つつかも考えていなかったのだから。

そんなこちらの複雑な心情に気づいたのだろうか。ナターシャは手を離すと立ち上がる。

「今はまだ疲れているでしょう？ ゆっくり休むと良いわ」

そう微笑むと、去っていく。その背中を静司はただ見ている事しかできなかった。

医務室を出て廊下を歩いていくと、前方に見知った顔が居た。

「イーリ」

「よお」

気さくに手を上げて返事をしたのはイーリス・コーリング。仲間であり友人でもある女性だ。彼女は腕を組み壁に背中を預けていた。「あまり刺激するのも不味いと思ってお前だけに行かせたが正解だったみたいだな。なんだ、アイツ。本当にあのレイヴンの中身か？ 抜け殻みたいに覇気がなかったぞ」

「見たたのね。けど仕方ないわ。彼にも色々あったのだから」「そりやそうだけどよお」

どこか不満げなイーリスの様子にナターシャは苦笑する。レイヴン——川村静司を助けた当初はイーリスも興奮していた。それはその正体が彼だった事もあるが、自分とその部下の追撃を、仲間の助けがあったとはいえ逃げ切ったISの搭乗者に対して彼女が興味をもっていたからだ。だからこそ、先程の彼の様子には不満らしい。

「とにかく今は休ませてあげましょう。詳しい話はこれからよ」

「それはちよつと困るのだがな」

「ん？ アンタは……？」

突然二人の会話に参加してきたのはスーツを着た男だ。その隣には軍服の兵士を数人引き連れている。

「アレックス委員？」

その男にナターシャは見覚えがある。IS委員会の一人だ。だが何故こんな所に？ いやそれよりも、

「どういう事ですか？ 困るとは」

「君たちが今話していた彼の事だよ。彼には是が非でも協力してもらわなければ困る」

『彼』その言葉にナターシャは眉を顰め、イーリスも壁から背を離し警戒した。だがアレックスは動じることなく小さく笑う。

「彼を、川村静司を手に入れた事は良くやった。彼とは前々から是非話をしたかったのな」

「前々から……？ それは男性操縦者としてですか？」

「いや、あの黒いISの搭乗者としてだ」

今度こそ、ナターシャは眼を見開いた。アレックスの言い方では以前からその正体を知っていた様に聞こえたのだ。そしてそれは事実

だった。アレックスが懐から数枚の写真取り出し二人に見せつける。「これは以前学園で撮られた写真だ。画質は荒いが、彼が件のISを展開している最中のものだな」

「なっ!? こんなものが……」

「おいおいおい」

二人が驚くのも無理は無い。アレックスの言う通りその写真には光に包まれつつ漆黒の装甲装備している最中の川村静司の顔がしっかりと写っていたからだ。

「IS学園に無人機が現れた際に取られた写真だ。生徒の一人がこちらに送ってきた。ああ、当然その生徒は既に本国に帰還させているから情報は洩れていない。本当ならすぐにでも彼にコンタクトを取りたかったのだがずっと連絡が取れないと思ったら先日的事件だったのでね。しかし結果的には良い方向に動いた様だ」

アレックスは満足そうに笑うと歩き出す。その先にあるのは川村静司の病室だ。

「待つてください。今の彼からは」

「何を言っている？ 世界中でISが暴走し、そしてどこも対処法が見つかっていない。その際にテロリスト共が好き勝手暴れているんだぞ？ 一刻も早く対処法を見つけ出しテロにも対応しなければなら無いんだ。その為にも君の銀の福音や、彼のISについて詳しく調べる必要がある。それ位わかるだろう？」

「だからこそです。第一、暴走を逃れる方法に関してはISの自我に左右される事は私の福音を調べて判明しています。勿論データは多い方が良いのは分かりますし、対処法が見つかった訳でもありません。しかしだからこそ、彼がもつと万全な状態で聞くべきです」

「随分と肩を持つな。だが所詮一兵士の戯言だ。もう時間は残されていないのだぞ？ おそらく亡国機業は近いうちにIS学園を襲う。あそこには最新鋭の機体が揃っているからな。それすらも奪われたら本当に終わるぞ」

「しかし今の彼から話を聞いても碌に答えはでそうにありません。もう少し落ち着いてからにするべきです」

両者、睨み合う。お互いに視線をそらさず睨み合うその光景に、アレックスが引き攣れていた兵士達の方が焦っている様だった。

「あーもしもそお二人さん」

そんな空気を呑気な声を上げて遮ったのはイーリスだった。彼女は面倒くさそうに手をひらひらさせつつ間に割り込んでいく。

「喧嘩すんなよ。ナタル、お前はちよつと熱くなりすぎ」

「……………そうね」

いつの間にか身を乗り出して口論していた事に気づきナターシャは一歩下がった。

「それとアンタだアンタ。アレックス委員だっけか？ ナタルの言う通り今のあいつに聞いてもまともに答えが返ってくるとは思えねえよ。ちよつと位時間くれたっていいだろ」

「だからその時間が無いと言っている」

「じゃあどうすんだ？ 拷問でもして無理やり聞き出すか？ 一度あいつと戦った事ある身から言わせてもらうが、敵にまわすとやっかいだぞアイツ。変な仲間もいるようだしな」

「それを何とかするのがお前達だろう」

「へえ？ じゃあIS返してくれよ。それともナタルにやらせるか？ けどそんな事したらナタルもアイツの味方して収集つかなくなるぜ？ それよりも落ち着いた後、ナタルに話させて懐柔した方がいいんじゃないか？ 何せあいつはナタルのすっぽんぽんを拝んでるんだ。後はちよつと色仕掛けすりゃきつとオチるぜ。不確定だが巨乳好きって話もあるしな！ いかん、ムラムラしてきた」

「イーリ!? 何を言ってるのよ!?!」

ナターシャは慌ててイーリスを押しさえ付けた。何を言っているんだこの友は！

だがイーリスは悪びれた様子も無く、ニヤリと笑う。

「まあそう言う訳だからよ、あと少しだけ待ってくれよ。それで全てが上手く行くなら万々歳だろ?」

「……………いいだろう」

そのイーリスの笑顔に何を感じたのかは分からない。本当に色仕

掛けの方が有効かと思ったのかもしれない。だが一応は納得したらしくアレックスは踵を返した。

「明日だ。明日まで待つ。それ以降は流石に待てない」

「了解つと。感謝するぜ、委員さんよ」

ふん、と鼻をならしアレックスは去っていった。その背中を見送りながらイーリスは『ふむ』と頷く。

「そういう事だナタル。次あいつに会いに行くときはエロい格好で行こうぜ！」

「頭が痛いわ……………」

楽し気で緊張感の無いイーリスの言葉にナタルは肩を落とすのだった。

今日もまた、千冬はぼんやりと空を眺めていた。

周囲からは傷ついた校舎の復旧作業や、人々のざわめきが聞こえる。時折近くを通る人々が不思議そうにこちらを見ているが、それすらどうでも良かった。

空。それは今は亡き親友が新たな可能性を見出す存在——ISの舞台として選んだ場所。初めてそれに触れ、空を自由に飛び回った時の衝撃は今も忘れない。

だがその裏にあった親友の狂おしい程の感情に自分は気づいていなかった。ただ、与えられた目の前の課題を片付けていたに過ぎない。そのツケをここ数日で一気に払わされた感覚だった。

川村静司についても考える。

草薙由香里の話から知る川村静司は千冬の知るそれとは大きく違っていた。そして何よりも彼女にとって大きいのは、川村静司が自分のコピー計画の生き残りだったと言う事だ。何故気づかなかったのか。そもそも何故そんな実験が行われてしまったのか。もはや考えても意味は無い。ただ、事実だけが千冬を苦しめる。

親友と生徒。その二人が抱えていた闇にもっとも近く、しかし気づかずに時を過ごしていた自分。その存在が酷く世界にとって害悪に

思えてしまい、そう思えば思う程何もしない方がいいのではないかと
思ってしまった。自分が何かをすると連動する様に悪意が蠢く。そ
んな見えない糸に絡め取られたかの様に、千冬は氣力を失っていた。
(もう、疲れた……)

両親が失踪し、一夏を必死に育て、I S 搭乗者となり世界に名を響
かせ、そして教員として生きて来た。その生き方に苦労はあっても不
満は無かった筈だ。だが今は何故か、何もかもが徒労にの様に感じ
しまう。

(もういつそ……)

全てを捨ててしまおうか。そんな危険な思考に陥りかけた時だっ
た。

「千冬姉」

「っ、一夏？ それに凰も」

いつの間にか近づいたのか。二人が直ぐ傍まで来ていた。だが二
人の顔は硬い。いや、一夏に至ってはどこか怒っている様にも見え
る。そしてその一夏が声を荒く、一言告げた。

「千冬姉、勝負だ」

「何……？」

あまりにも突拍子もない一夏の言葉に眉をひそめる。鈴も驚いて
いる事からするに彼女も知らなかったのだろう。

千冬ははあ、とため息をつくと首を振った。

「馬鹿な事を言うな。今はそんなことやってる場合では——」

「じゃあ何してんだよ、千冬姉は」

「っ」

驚き再度一夏の顔を見て千冬は気づいた。

怒っている。一夏が自分に対して明確に怒りを感じている事が理
解できたのだ。

「さっきから何もしないでずっとボーっとしてて。それで何をしてた
んだよ」

「それは……」

何も言い返せない。その事に千冬は愕然とする。自分は言った何

をやっているのか？　そしてそんな千冬の態度に一夏の眉尻が上
がった。

「何もしてなかったんだよな？　じゃあ行こうぜ」

そういつて踵を返して歩いていく一夏とどこか戸惑ったかのよう
な鈴。そんな一夏に抗う言葉は、今の千冬には浮かばなかった。

色々と外が騒がしいI S学園だが、それは学園内に作られた道場も
同じだった。僅かな余暇を訓練に充てている自衛隊の兵士や各組織
の兵士達など。彼女らが使用していたのである。だが今はそんな
彼らの視線がある一点に集まっていた。

道場の中央で互いに竹刀を構える一夏と千冬である。

「一夏、本気か？」

「当たり前だ。千冬姉も本気で来いよ。真剣勝負だ」

竹刀を構えながらも千冬の困惑は大きい。ここまで来ても未だに
一夏の真意が読めずに居たのだ。さらには防具をつける時間も惜し
い、と一夏の強固な主張により二人とも防具は身に着けていない。そ
の事がさらに千冬を悩ませる。

そしてそんな千冬の葛藤など知らぬギャラリ―達はブリュンヒル
デとその弟の対峙を何かの訓練と見たらしく呑気なものである。そ
して鈴はというと審判役で二人の間に立っている。そして一夏と千
冬の様子を確認すると静かに頷いた。

「準備は良いわね？　それでは、始め！」

「行くぜ！」

「っ」

開始と同時に、一夏が一気に飛び出してきた。だがそれは千冬の眼か
らすれば稚拙な動きだ。容易にその動きを見切り、一夏が振り下ろし
た竹刀を打ち払った。

「くっ!？」

バランスを崩された一夏がよろける。そんな姿に千冬はため息を
つきつつ、一夏の頭をこんっ、と軽く竹刀で叩いた。

「これで終わり——」

「何を、言っただよ……っ」

「……？」

「真剣勝負だつて、言っただろ！」

「何——」

次の瞬間、千冬は一夏に斬り飛ばされた。

(がっ!? な、に——を!?)

仰天し、崩れた態勢を立て直しつつ視線を一夏に向けると、一夏が竹刀を振り抜いている姿が見えた。更には審判であつた鈴までもが竹刀片手に走り出している。

「まさか、本気か!？」

斬り飛ばされたと言つても所詮は竹刀だ。だが痛い物は痛い。それでも長年の勘で体勢を立て直すと両足で踏ん張る。だがそこに鈴の追撃が加わつた。

「千冬さん、覚悟おお！」

「くっ!？」

鈴の一撃。それをギリギリで躲すが、凄まじい勢いのそれは千冬の前髪を数本持つて行つた。

「お前ら正気か!? それに凰は審判だろうが!？」

「そうですよ! けど最初の二人の一撃を見て気が変わりました!」

「なんだそれは!？」

「一夏が言いたいことがわかつたんですよ!」

あまりにも意味不明な言動に叫ぶ千冬。周囲のギャラリ―達も啞然としていた。

「油断するなよ千冬姉!」

「くっ!？」

再度切りかかつてきた一夏に慌てて応戦する。突進の勢いを乗せたその一撃は、突然の事に混乱した千冬には支えきれず思わず後ずさる。

「どうした千冬姉! そんなもんかよ!」

「何を——!？」

「そんなもんかつて聞いてんだよ!」

一夏が横なぎに竹刀を振るう。咄嗟に身を屈めて避けるが、今度はそこに鈴が跳びこんで来た。

「まったくね！ この程度だとは思って無かったわ！ いつもはゴリラみたいに人を投げ飛ばす癖にね！」

「貴様ら二人がかりで襲いかかっている自覚はあるのか!?!」

そんな事は知らんとばかりに鈴が竹刀を突きこんで来た。千冬は咄嗟に体をずらし紙一重でそれを回避しつつ横へと飛ぶ。だが、そこには既に一夏が待ち構えていた。

「隙だらけだぜ、千冬姉ええええええ！」

「しまっ!?!」

こちらの動きを読んでいた一夏の三度目の突進。咄嗟の事に避けることも出来ず、千冬は一夏の一撃の直撃を受けてしまった。

「かはっ!?!」

衝撃で肺から息が漏れる。斬り飛ばされた千冬は道場を転がりギャラリーが居る壁へと叩き付けられた。ギャラリー達から悲鳴があがり、慌ててその周囲がから逃げていく。

「かはっ!?! つ、ごほっ、ほっ」

痛い。当然だ。竹刀で思いつきり切られて痛くない人間など居ない。千冬は荒い息を何とか整えつつ、ふらつきながらも前を見た。

「どうしたんだよ、この程度じゃないだろ千冬姉!」

「い、一夏……?」

混乱する千冬の目の前に、竹刀が突きつけられた。

「なんだよ！ いつも余裕かまして笑ってるくせにその面は!?! 世界最強なんだろ!?! 織斑千冬なんだろ!?! 俺の姉さん何だろ!?! だつたらそんな顔いつまでもしてるんじゃないやねえよ!」

「そんなもの……」

唯の押しつけだ。自分はそんなに大層な人間じゃない。

だが一夏は首を振った。

「最初のあれはなんだよ！ いつもなら遠慮なくぶっ叩いてくる癖に！ それに俺たちが二人がかりで戦ったて本当なら千冬姉に勝てる訳……無いだろ！ どんだけ腑抜けてるんだよ!?!」

じゃあどうしろと言うのか。言い返そうとするが、一夏の顔を見て千冬は息を止めた。

泣いている。一夏が自分を見て泣いているのだ。

「別に年中強がれなんて言わねえよ。家族の、俺の前で位怠けてくれていいよ。酒だつて飲んで良いし、片づけもゴミの分別も出来なくたっていい。それ位で俺は千冬姉を見捨てねえよ。だけど今の千冬姉は駄目だ。覇気も気力も無くて人形みたいな千冬姉なんて俺は見たくねえ。そんなの……嫌いだ」

「嫌い……」

何故だろうか。その言葉は深く胸に突き刺さった。一夏に嫌われると言う事に凄まじいほどの恐怖を感じてしまう。何せ名実ともに自分が育ててきた大切な弟なのだ。そんな弟に嫌われると言う事が何よりも恐ろしい。

「大変なのは分かっている。皆それはわかってるんだ。けどこんな時だからこそ、千冬姉には真っ直ぐ立っていてほしいんだ。皆の織斑千冬でいて欲しいんだよ。助けて欲しいなら俺達が助ける。護って欲しいなら俺達が助ける。俺が、俺だけじゃ無力なのは十分に思い知ったけど、俺にはまだ仲間が居るんだ。鈴もセシリアも、ラウラも箒もシャルロットも楯無さん達だっている。皆で出来る事はやっていく！」

「だけど、と一夏は続ける。

「それでもさ、皆千冬姉に期待してるんだよ。世界最強で格好いい俺の姉さんに憧れてるんだよ。だからさ、そんな顔はもうやめてくれよ……。何でもかんでも自分のせいだつて背負い込まないでくれよ……」

「あ……」

一夏の竹刀が震えている。それは一夏が肩を震わせて泣いているからだ。他でも無い。自分の事を想って。それが何よりも申し訳なく、そして嬉しい。

「わたしは……」

何をやってたのだろうか。まだ何も終わっていないのに終わっ

た気になっていた。篠ノ之束という友、自分を構成する一つの要素が消えた事で捨て鉢になっていた。そして全て背負った気になって、全て捨てようとして考えていた。何て、なんて愚かなのか。自分の事をこれほど想ってくれている弟がまだ居たと言うのに。それに気づいた途端、千冬の眼から涙が流れる。

「一人じゃ何もできない。それを俺はもう身に染みて分かった。だからさ、俺と俺の仲間達に支えさせてくれよ。千冬姉が真っ直ぐ立っていてくれれば俺達はそれを目印にどこにだって行けるんだからさ」

だから、と一夏は竹刀とは別の手を差し出した。それは千冬を起きあがらせる為の手。墜ちた戦乙女をもう一度舞台上上げる、救いの手だ。

「ふ……ふはははははは、はははははははははは！」

「千冬姉……」

おかしい。これが笑わずにいられるか。子供だ子供だと思っていた弟にここまでやられて笑わずに居られない。

「ふふふ……。大きくなったな、一夏」

「ああ、千冬姉に育てて貰ったからな」

「そうか……。それはいい仕事をした」

そしてふっ、とお互い笑い合う。そして一夏は千冬に差し出した手を更に伸ばすが、千冬は首を振った。

「だがまだ甘い」

「え？」

「随分と好き勝手にやってくれたな？」

千冬は一夏の手では無く、竹刀を掴んだ。

「ち、千冬姉？」

「お返しだ」

次の瞬間、一夏が宙を舞った。

「嘘だろおおおおおおおおおおおおおおおお!!？」

悲鳴を上げながら一夏は飛んでいき、そして鈴の直ぐ隣に音を立てて落ちていく。その光景を見て鈴の顔が引き攣った。

「ああ、なんだろうな。憑き物が落ちた気分だ。ふ、私は良い弟を持つ

たよ」

「ち、千冬さん……？」

ゆっくりろ千冬が立ち上がる。そして竹刀を拾い上げると、まるで具合を確かめるように数回振って頷いた。

「だが一回は一回だ。鈴、お前もそう思うだろう？」

「あ、私の名前……ってそうじゃなくて!? 千冬さん、私は一撃も当て無いし! というか本当は別の事を言いに来たんですけど」

「誰がゴリラだって？」

「あ………」

鈴の顔が蒼白になっていく。ようやく起きあがってきた一夏も、千冬の顔を見て顔を盛大に引き攣らせた。

「言いたい事、それは後で聞くとしよう。だがまずは――

――オシオキだ」

にこり、とそれこそ女神の様に微笑む千冬。だが二人には悪魔の微笑にしか見え無かった。

そしてそれから数時間、IS学園の道場では笑顔で教え子にスパルタ教育を施す世界最強の女の高笑いが響きギャラリ―達を恐怖のどん底に落とし入れたという。

80. 望み

山田真耶は疲労の極みにあった。

ここ最近に起きた様々な事件。そしてこれから起こるであろう事への対処。それらの処理に追われ続けていたのだ。それは他の教員たちも同じであったが、真耶の苦労はその数倍はあった。

「私が、しっかりとしませんと!」

それは彼女の決意だ。先輩であり憧れでもあった千冬が今、苦しみ動けないのならその分自分が頑張ろう。そして彼女が戻ってきたときはいつもの様にコーヒーを入れつつお疲れ様ですと言おう。そう自分に言い聞かせひたすらに動き回った。

全ては生徒の為。そして千冬の為。人一倍仕事をし出したそんな彼女の様子は目を追うことに余裕が無くなっていき、普段はとろんとした目は徐々に吊り上り、きちんと整えられていた服には皺が目立ち始め、肌も少し荒れてきていた。だがそれでも彼女はただひたすらに動き続けた。

そんな彼女の元に同僚の教師が慌てて走りよりこう告げたのだ。

「ど、道場で織斑先生が……壊れてます!」

「は……?」

彼女の困惑も無理は無かった。

「何をやっているんですか貴方たちは!」

今、IS学園の道場では非常に珍しい光景が繰り広げられていた。

普段は温厚で学園の平和の象徴ともいえる真耶が今まで見たことも無いような形相で二人の生徒と、一人の教師を叱っているのだ。

「それは……」

「本当に……」

「すまなかった……」

他でもない。一夏、鈴。そしてなんと千冬である。三人は道場の真ん中で正座し、正面に立つ真耶の説教を受けていた。

こんな状況になったのにも原因がある。真耶が道場に駆け付けた時見たのが、なんだか良い笑顔で一夏と鈴をしごいている千冬だったからである。

「織斑君！ 鳳さん！」

『は、はい！』

いつもの温厚さを脱ぎ捨てた真耶の形相に二人は背筋を伸ばして返事をする。

「いったい何を考えているんですか!? 二人がかりで襲い掛かるなんて！ それに聞けば鳳さんは最初審判の筈だったらしいじゃないですか！」

「い、いやそれは……」

「なんです!?!」

「ひっ」

鈴が顔をこわばらせつつ肩を震わせる。今の真耶にはそれだけの迫力があつた。

「そうだぞ二人共。私だったから良かったが他の相手にやったらあれは問題で——」

「織斑先生もです！ 二人がかりで襲い掛かれてピンピンしてるって相変わらずおかしいんじゃないか!? やっぱり改造人間なんですか!?!」

「ぬう……!?!」

思わぬ反撃に千冬の額に汗が流れる。その横で一夏と鈴がこそこそと話していた。

「山田先生も前にISで鈴とセシリア相手に圧勝してたよな？」

「あれはISだからノーカンってことかしら？」

「何かいいましたか!?!」

『いえ、何も！』

ぎろり、と真耶の視線にさらされて二人は再度背筋を伸ばした。

「大体ですね織斑先生！ 皆心配していたんですよ？ それでもそれぞれの仕事を果たすために寝る間も惜しんで働いて働いて！

睡眠不足になって髪や肌が荒れてきて体重も増えたり減りすぎた

りで大変だったんです！　なのに何ですか!?　一人で道場でハッスルしてるなんて!？」

「そ、それは本当にすまなかった……」

ストレスがたまり過ぎた故に普段のキャラを脱ぎ捨てた真耶の様子に千冬は冷や汗を流しつつ謝るしかなかった。実際、思い返せば悪いと思っっているのだ。

そんな四人の様子を最初はギャラリ―達も遠巻きに面白がって見ていたが真耶がきつ、と睨みつけると皆すごすごと去って行った。

「……………はあ、それで結局なんでこんなバカげた事になったんですか」

ようやく落ち着いてきた真耶がため息交じりに一夏たちに問う。

一夏と鈴は顔を見合わせて頷いた。

「最初は別に千冬姉をどうしようというつもりはなかったんです。ただ、」

「いずれくる亡国機業の襲撃。その時に一夏も戦いたいって話をしに来ただけだったんですけど……」

「それがなんでこうなったんですか」

「それが、千冬姉の顔を見たらそんな事は一気に飛んで……まずなんとかしないとって」

「私もそれがわかったので一緒に……」

「お前ら……」

二人の言葉に千冬は目を丸くしていた。それは真耶も同じだが、客観的に今までの千冬を見ていた分、多少なりと理解できたらしい。

『成程』と小さく頷きつつ苦笑した。

「お二人の言いたかったことは分かります。ですがそれでも他に方法はありませんか？　今回は織斑君達も感情的になり過ぎたと思います」

「それは……っ。そう、ですね……確かに」

一夏達も自覚はあったのだろう。小さく頷くのを確認すると真耶は今度は千冬へと視線を向けた。

「それで織斑先生、どうしますか？　あ、もちろん戦う云々の話じゃな

「いですよ？」

「……わかつているさ」

千冬もまた自覚があつたのだろう。頷くと立ち上がり三人に向かい頭を下げた。

「済まなかつた。私はどうやら色々な人に迷惑や心配をかけていたよ
うだ」

「もう大丈夫なのか、千冬姉？」

「正直、わからん……。だが、ずっと呆けていても意味が無いという事はわかる。山田先生達がこんなにも頑張っているのに私だけ楽をしてはいけないだろう」

「織斑先生……」

「束や川村の事。すべてを割り切ることも飲み込むこともまだ出来ない。だが今は先にやるべき事がある。そういうことだろ一夏？」

「あ、ああ！ だから千冬ね——」

「だがお前が前に出ることは許さん」

ぴしやり、とそこだけははつきりと言い切つた千冬という言葉に一夏の顔が硬直した。

「考えてみる。篠ノ之の紅椿が奪われた今、おそらく亡国機業の最大のターゲットは白式だ。それが何故だかわかるか？ 鈴」

「それは、篠ノ之博士の手が加えられたISだから、ですか？」

「そうだ。もう一つ、例の銀髪の少女のISもあるが白式は束の手が加えられ更には先日 of 暴走事件の際には不審な挙動を見せた。そんな白式の事は亡国機業としても注目の的だろう。そして懸念でもある」

「懸念？」

「何をしでかすかわからない、という意味だ。例え束が——死んだとしてもその影響力は未だ健在という事だ」

例え篠ノ之束という存在がこの世から消えても。その残したISは何をしでかすか不明であり未だに恐れの対象となりうるのだ。

「だけどっ！」

「だけでも何も無い。いいか？ 次の戦いで必ず奴らはお前を狙つて

くる。そんなお前を最前線に送れる訳がないだろう」

全くの正論に一夏が唇をかみしめる。だが千冬はそんな一夏の様子に苦笑した。

「そう急くな。全く戦わせないとは言っていない」

「え？」

「織斑先生!」

その言葉に一夏や鈴、そして真耶が目丸くした。

「下手に遠くに隔離してもそこを嗅ぎ付けられればそれで終わりだ。戦力を整えつつある亡国機業相手に少数で立ち向かえるとは思っていない。それに白式の《零落白夜》は切札でもある。それを全く使わない手は無い。私たちはな、もう追いつめられているんだ。ならばなりふり構っては居られない。ここで負ければどうせいずれすべて奪われるのだから」

だから、と千冬は一夏の眼を見据える。

「お前は前には出るな。だがいつでも戦える準備だけはしておけ。それがギリギリのラインだ。お前が出ないに越したことは無いが状況は難しいだろう。だからその時は……鈴」

「わ、私!」

いきなり名前を呼ばれた鈴が肩を跳ねさせる。そんな姿に苦笑しつつ千冬は鈴に告げる。

「一夏を、私の弟を頼むぞ」

「……………っ、はい!」

その言葉に鈴が大きく頷いた。

悪夢を見た。

それは大切な仲間が。友人が。学園が炎に包まれていく夢。そしてその中心で血だらけになった『彼』が力なく崩れ落ち、そして自分は絶叫する。そんな悪夢だった。

「最悪だね……」

その内容と、ぐっしよりとかいた寝汗に不快感を隠しもせずシャル

ロットはよろよろと起き上った。時計を見ればもうすぐ夕方といった所か。そんな時間までベッドの中に潜り込んでいた自分に自己嫌悪してしまう。

「ひどい顔」

手鏡を取り自分の顔を見て自嘲する。その顔色は青ざめ目元は赤く腫れている。ここ最近、彼女の様子はずっとそんな感じだ。そしてその原因は考えるまでもない。その事を思い出し、再び目元が潤んでくる。だがそこに声がかかった。

「起きたか、シャルロット」

「ラウラ」

それはルームメイトであり大切な友人であるラウラだ。彼女はシャルロットが起きたことを確認するとキッチンから湯呑を二つ、持ってきた。

「飲むといい。軽くなら食べ物もあるぞ?」

「ごめん、ありがとう……」

ラウラが気を使ってくれているのがわかる。シャルロットはそれに素直に甘える事にした。だがすぐに彼女の現状の事を思い出して顔を暗くする。

「ごめんね。ラウラだって今大変なのに……」

「気にするな。確かに大変ではあるが私の部下だ。きつと無事だ」

そういうがラウラの顔は少し硬い。その原因は先日の亡国機業のドイツ軍襲撃だ。結果としてはISは一機奪われ、基地は半壊滅。さらにはラウラの部下も行方不明のままなのだ。そんな状況なのに彼女に甘えてる自分にシャルロットは後悔するが、ラウラは首を振る。「教官に鍛えられた私の部下だ。やたらしぶといから無事に決まっている。それに奪われたのなら取り返せばいい」

「ラウラは、強いね」

凄いい、と思う。いつもは少し世間外れの少女なのにこういう時はとても強く、大きく見える。それが何よりも羨ましい。

「僕は駄目だな……。そうやって強くなれない……。なれないよ……」

どんなに強くあろうとしても、思い出すたびに挫けてしまう。そ

う、川村静司が○んだなんて事は――

「っ……………」

不意にこみあげる嗚咽。だがすぐにラウラが近づき背中を優しく撫でてくれた事で何とか抑えることができた。

「無理に強がる必要はない。私もそれで失敗した身だからな。だが、ずっと籠っているのも良くないだろう。少し外の空気を浴びてはどうだ？」

ラウラが優しく語りかけてくれる。確かにそうかもしれない。自分はずっと塞ぎ込んで殆ど外に出ていない。それで何かが変わるかはわからないが、引き籠って友人に心配かけ続けるよりはマシだろう。だからシャルロットは頷いた。

「大丈夫か？ 私と一緒に行くぞ？」

「うん、大丈夫だよ。少し……一人で歩いてくる」

「……………そうか」

それでも『何かあったらすぐに呼ぶといい』と言ってくれるラウラに感謝しつつ、シャルロットは自室から出る。

「静か、だな……………」

外の方は騒がしいが打って変わって寮の廊下は静かだった。いつもなら同世代の少女たちが姦しく賑やかなその場所は、来るべき時に向けて異様な静まりを見せている。実際、結構な数の生徒が一時的な避難や休学扱いとして今は学園外に出ていると聞く。

そんな廊下を一人歩くがやはり気は晴れない。これなら多少人に今の顔を見られても、騒がしいほうがよかったかもしれない。そんな事を考えつつ、足は自然とある部屋へと向かう。

「……………っ」

そして目的の部屋に辿り着くがその扉をノックする事に躊躇う。なぜならそこは一夏と静司の部屋だからだ。

わかっている、わかっているのだ。その扉を叩いて中に居る人を呼んでも、そこには居たとしても一人の少年しか居ないという事は。だがもしかしてと、そんなありえない希望に縋ってしまうほど、今の彼女は弱っていた。

(……やめよう)

しばし考えて、やはりやめる事にする。その扉が開いてしまったら現実を見せつけられる様で。そしてそれに耐えられなくて。だからシャルロットは踵を返し立ち去ろうとするが、不意に部屋の中から音が聞こえた。

「え？」

普通に考えればそれは一夏の出した音だろう。だが何故か扉に意識が向かう。ありえない希望を居るかどうかも分からない神様が叶えてくれたんじゃないかと。いや、いつそもう幻聴でも幻覚でも良かった。ただ、元気な『彼』の姿見たくてシャルロットは扉に手をかけ、そして開けた。

だがそこに彼は居なかった。

それは当然の結果だ。もし本当にいるのなら学園内はもつと騒々しくなっていた筈なのだから。だがシャルロットは、部屋の中の光景に目を見開く。

「本音？」

そこに彼女は居た。

「あ、しゃるるん」

「何を、しているの？」

一夏と静司の部屋に居た本音がいつもの平和そうな笑顔を向けて手を振ってくる。だがその顔はやはり何処か疲れている様にも見えて、目元はシャルロットと同じく腫れている。そしてそんな本音の手元には何故かハタキがあつた。

「えつとね、お掃除〜」

「う、うん。それは見てわかる……………けど？」

わかる、と言い切れなかったのは果たしてそれが本当に掃除なのか判断がつかなかったからだ。確かに部屋に散らばっていたであろう本などは纏められている。だがそれは本当に纏められているだけで積み重なって部屋の隅に置かれているだけに過ぎない。本音が手に握り振るうハタキもえいやえいやと無造作にあちこちをはたいている為に効果があるのか少々疑わしかった。だがまあ確かに掃除では

あるだろう、一応。問題はなぜそんな事をしているかだ。

「どうして……？」

「えっとね、いつ戻ってきてても良い様に」

その言葉に、シャルロットの身が震えた。それはあり得ない。だつて『彼』は。川村静司はもう――

「帰って、くるよ」

そんなこちらの思いを読んだかのように、本音は強く言い放つ。

「ぜつたい、帰ってくる。約束、したから」

「けど静司は……っ！」

震えるシャルロットの言葉。だが本音は首を振る。

「せーじはね、いつも無茶してるし、痛いのが好きなんじゃないかな？ とか思うくらいにいつも怪我してるけど、いつも戻ってきてくれたもん」

「それは！」

希望的観測だ。事実彼は瀕死の状態で海に墜落して、そして――

「……え？」

そして、どうなった？ 見つかっていない。死体も、ISも、何も。ただ『死んだ』という認識だけが事実として受け入れられている。その証拠は何も無いのに。

だがそれも無理は無い。常識的に考えてあの状態で海に落ちて助かる見込みなどないのだ。それにあの時世界中のISは暴走状態にあり、K・アドヴァンスとEXISTも壊滅状態であり助ける余裕があった者など居ないと思われた。事実彼の上司である草薙由香里ですらも生きているとは言わなかった。だけど、

「死んだ、とも……言っていない……？」

由香里は言った。『行方はわからない』と。それは事実だろう。だが一度たりとも『死んだ』とは言っていない。つまり彼女はまだ生存を信じていたという事か？ そして本音も。

「前にね、言ったんだよ。『おかえりなさい』って言わせてって。せー

じも領いてくれた。だから待つんだよ。いつでも帰ってきてても良い様に」

本音も、由香里も。それが希望であることは変わりない。本当は不安で仕方がないに違いない。事実、本音の眼は揺れているし目元が腫れているのが証拠だ。だがそれでも諦めていない。

それに比べて自分はどうか？ 死んだと決めつけ、塞ぎ込み、友人に迷惑をかけていた。ああ、それはなんて、なんて……
「馬鹿だなあ……」

目頭が熱くなる。まだ不安は拭えないが、まだ希望は残っていた。そしてそれを教えてくれた友人の姿にシャルロットは小さく微笑む。
「ずるいや、本音」

「ん〜？」
見れば彼女も泣いていた。やはり不安は拭えないのだろう。だがそれでも。それでもと思うのなら。

「手伝うよ、本音。静司が帰ってきたときに埃まみれじゃ困るしね」
「……うんー」

今は、今だけは信じてみよう。強い友人と優しい友人。それらに囲まれていつまでも塞ぎ込んで絶望していても何も変わらないのだから。シャルロットは小さく領くと、自らも部屋の掃除に乗り出していった。

「なるほど、ね」

静司が目覚めてから数時間後。消毒液の香りがするその部屋に再びやってきたナターシャは今までの事を語り終えた静司に領いた。その隣ではイーリスも興味深げに領いている。

「織斑一夏の護衛にその姉、織斑千冬のコピー計画。加えて博士に逆らうIISと……。どれもこれも驚きね」

「ナタル、IISに関しては福音もそうじゃねえか」

「まあそうだけね」

「しっかし、まあ。いつの時代もエゲツねえ事考える奴は居るもんだ

なあ」

イーリスが呆れた様に漏らした言葉にナターシャも頷く。

「けどこれで確定ね。篠ノ之束の影響力から逃れる為にはやはりISの意思の強さが鍵よ」

「その博士はもう死んじまったけどな。だが……」

「はい。篠ノ之束の仲間らしきあの銀髪の少女のISが残っている」

静司の言葉にイーリスは難しい顔で頷いた。あのISの正確なスペックは不明だが、ろくでもない事は予想がつくし、実際に見た。

「だがそのISの意思？ だったか。それを鍛えるにはどうすりゃ良いんだよ。乗り回しながら死にかけろってか？」

「それは極論よイーリ。だけど実際その方法が無いのが問題よね……。今までそういったアプローチでISの強化を行ったことが無いか、調べる必要があるわ」

何せISの強化と言えば基本は装備やスペックの向上。そして革新的な装備だったのだ。それが突然の精神論となってしまうのは困惑するのも無理は無い。

「しかしまさか貴方が織斑一夏の護衛とはね。なんともまあ思い切ったことをするわ。けどそれを話しても良かったの？ それに今聞いた話も極秘だったんじゃない？」

「……ええ。けどもう意味のない事ですから」

そう答える覇気の無い静司の様子にナターシャは顔を曇らせ、イーリスは眉をしかめた。

「おい、なんだよその言い草は。この世の終わりみたいな面しやがって」

「イーリ」

「黙ってるナタル。おい、いいかカワムラセイジとか言ったか？ 手前がああブリュンヒルデのコピーだとかクサレ兔との因縁だとかは知らねえよ。悲劇なんてどこにでも転がってるし、それにいちいち『ああ、可哀想な子』だとか考えてやるほど私はお人良しじゃねえ。私が今知りたいのはだな、お前はこれからどうするんだって事だ」

「それは……」

何も思い浮かばなかった。

因縁の相手は死んだ。学園に居られる為の張りぼての経歴は崩れ去った。仲間たちすら安否が不明で、ここまで来たら任務も何も無い。自分の行き場を失ってしまったかのような虚無感。そして、いや、自分が何を望んでいるかもわからない。

そんな静司の様子にイーリスは『ちっ』と舌を打つと静司の胸倉をつかみあげた。

「イーリッ！」

「オイこらテメエ。復讐とやらを果たしたら抜け殻気取りか？ ああ、んっ!? そんなナリでよく今まで生活できていたな？ イジイジとウザッてえ！ 結局なんだ、テメエの中には復讐しかなくてそれ以外はどうでも良かったって事か？ はっ、とんだ間抜けだな。これなら似たような馬鹿でもまだハキハキしてた織斑一夏の方がスツキリするぜ」

「俺は……」

何も言い返せなかった。事実、今の自分の行くべき場所が見えないのだから。長年の復讐が終わった事で、今まで心を占めていた大きな『何か』がすっぽりと抜け落ちてしまったのだ。

「ナタル、こりや駄目だ。今のこいつには何も期待できねえよ」

「イーリ。言いたいことはわかるわ。だけど……」

「あまり甘やかすなよ。悪い癖だぞナタル」

「わかっているわ。ねえ、静司君？ 本当に他には何もないの？ 貴方は学園で何かを得て、けど居場所を失ってしまった。だから自暴自棄になっているだけじゃないの？」

「……」

二人の言っている事は正しい。正しい筈なのに、自分の心は動こうとしない。それは肉体が弱っている事もあるだろう。だがそれとは別に形容しがたい無気力が静司の心を曇らせている。

それでもそんな静司にナターシャが何かを言おうとした時だ。不意に新たな声が現れた。

「どうやら待っただけ無意味な様だな」

「アレックス委員!？」

声の主はスーツを着た初老の男だった。男は静司をちらりと見るとふん、と鼻を鳴らす。

「途中からだ話が聞いていた。だがこれは待つだけ無意味にしか思えんな」

「そんな事……」

「先ほども言ったが私たちには時間が無い。ISの意思とやらを鍛える時間もな。ならば現在有効に使えるIS、君の銀の福音とこの男のIS。それを利用するに越した事はない」

だから、とアレックスと呼ばれた男が静司を冷たい目で見降ろした。そしてその手には黒い翼のペンダント——待機状態の黒翼があった。

「このISはパーソナライズをされているせいかピクリとも反応しない。貴様が動く気が無いのなら我々が有効的に使わせて貰う。だからまずはこのISにかけられているロックを外せ」

「っ……」

その黒翼の姿を見て思わず呻く。それは、それこそが今の自分に残された最後の力なのに。それを失ったら本当に何も出来なくなってしまう。だがそれに手を伸ばしたとして、一体何に使う？ 自分はどうしたい？ 何を求めている？ そんな自問自答が静司を苛む。だがアレックスは言葉通り待つ気は無いようだった。

「子供の我儘に付き合っている時間は無い」

「アレックス委員!？」

「っ!」

ちやきり、という金属音。そして静司に向けられたのは銃口だった。そのグリップを握るアレックスにナターシャが非難の声を上げ、イーリスは、

「……………君はこちら側だと思ったのだが?」

「勝手に味方認定してんじゃねえよタコ。決めるのはコイツ自身だ。自分の意思で決めさせる。それを脅迫とは大人気無さすぎだぜ」

咄嗟に抜いた拳銃をアレックスに向けていた。

「大人気ないのはどちらだ？ 期待できない希望などするものではない」

「それを期待できないかどうかを判断するのは個人の勝手だって事だよ。立ち上がるかどうかもな」

「不毛だ」

「夢のねえ大人だな」

数十秒にわたる硬直。だが最初に動いたのはやはりアレックスだった。

「私はこの行動で事態が改善するのなら、例えどのようになっても構わん」

「てめっ——!?!」

静司に向けた拳銃の引き金。それに力が入る。イーリスも目を細め動こうとし、

突然、アレックスの手にあつた黒翼が光った。

「何っ!?!」

アレックスは驚き思わず黒翼から手を放す。そしてその黒翼はとくと光の粒子となって静司の左腕に装着され、そして翼を広げた。

「きゃあっ!?!」

「うおお!?!」

狭い病室だ。そこでいきなりISが翼など広げれば当然物は倒れるし、壁にも当たる。だがそれでもお構いなしに広がった翼はまるで静司を包み込むかのように丸まっていく。

「あ……」

その事に驚いたのはナターシャ達だけじゃなかった。静司もまた、突然の黒翼の動きに目を丸くする。そしてそんな静司の視界にウィンドウが浮かび上がる。そしてそこには『sound only』の文字。

『音声データを再生』

それは、いつの日か姉たちの最後の言葉を聞いた時と同じ表示。同じ言葉だった。

『頼む……。お前が少しでも私たちの事を仲間と認めてくれるなら、

02を助けてやってくれ』

『もう時間が無い。お前が篠ノ之束を憎んでいるのは知っている。そして私たちに期待していい事も。それでもお前は動いてくれた。お前も間違いなく、私たちの……家族だ』

『最後の選択は、02に任せる。だが今だけは、今だけは助けてやってくれ。私は……私たちは、たとえどんな形であれ、02が生きている事を望んでいる。できるなら幸福であってもらいたい。だから——』

そこで音声は途切れる。それは紛れもない。姉の最後の言葉。

だが再生はそこで終わらない。

『音声データを再生』

『ほーら静司。パパがお好み焼きを作ってやったぞ。外野は昔だの生ごみだの言うがお前は食べてくれるよな?』

それはEXIST拾われてから初めて課長が料理をした時の言葉で。

『大丈夫静司? あの馬鹿は射撃場的にしておいたから母特製の胃薬を飲みなさい。全く、せつかくできた息子を殺す気かしらね』

その料理の後に生死を彷徨いかけてやっぱり拾われたのは失敗だったんじゃないかと思つた矢先の由香里の言葉。

『お前も戦うつて? まああの親バカ二人が止めないなら俺は反対しないけどな。じゃあまず手始めにC5と戦ってこい。試験? ああ、じゃあこれが試験で』

『C1!? C5に挑んだあの新入りが瀕死に! これ見られたら課長に殺されるつすよ!』

『激しくぶつかって来たから思わずやりすぎちゃったわ』

『おい課長が来るぞ!? 隠せ早く!』

頭おかしい仲間達の声で。

『おい、静司! 特訓だ! んでもってそのあとは風呂行こうぜ!』
それは初めてできた同世代の友人とも呼べる少年の声で。

その後にも様々な声が再生されていく。こんなものを自分は録音した記憶は無い。という事はこれはつまり黒翼の記録……? そしてその内容は他でもない。実験体であったEX02が『川村静司』と

いう存在になり、そして——得てきたことの記録。

「……っ！」

それに気付いた途端、自然と手が前に伸び自分を守る様に覆っている翼に触れる。その瞬間、その声が聞こえた。

『かわむー』『静司？』『わくお』『何やってるの？』『せーじ、次はこれ』『あ、僕も』

「あ、ああ……俺、は……っ」

不意に今まで無かった感情がこみ上げてくる。息が出来なくなり震え、体中が痛む中、最後に新たな声が入り込む。

『馬鹿が』

その声を聞いた瞬間、静司は意識を手放した。

暗い、昏い夜の丘の上。相変わらず雨が降り注ぎ闇に覆われたそこに静司は立っていた。

「俺は……」

ぼんやりと空を見上げる。空から降る雨が目に染みるが、それでもぼんやりと空を見上げ続けていると、不意に背後に気配を感じた。顔を下し振り向く。するとそこにはいつもの女性が立っていた。闇に溶け込む様に黒いナイトドレス。腰まで伸ばした漆黒の髪。大きく開いた胸元には翼をあしらったペンダントがかけられている。両腕は肘まで伸びる黒の手袋で覆われ、黒い帽子を被りそこから垂れた薄布によりその表情はうつすらとしか見えない。本当に、いつも通りの姿。

「黒翼……」

「……」

女性は答えない。だが返事をせずとも、その旨にかけられたペンダントが何よりの証拠だった。だから静司は続ける。

「とつくに、見捨てられたと思ってた」

自分と黒翼の契約。篠ノ之束への復讐は既に終わった。ならばその関係も終わってしまったのではと。勝手にそう思っていた。だが、

「違った、のか」

意識を失う前に聞かされた音声データ。そこには今まで全く気付かなかった、いや、考えてもいなかったメツセージがあった。

「ようやく気づいたか。だから馬鹿だと言ったのだ」

黒翼が口を開く。その言葉には呆れと嘲笑が込められていたが、静司にはそれを否定できない。そんな静司を嘲笑うかのように黒翼は続ける。

「確かに私は『お前』と契約した。だがその前にも契約……いや、約束していたんだよ。だというのにお前はその事を完全に忘れていたな？ 馬鹿め」

「……」

ああ、本当に。自分でもそう思う。そしてそれに気付かせるために黒翼はあの音声を流したのだろう。

『私はお前の姉達の望みを果たした。お前に合わせて初期移行まで行ってやったが、これはまだ仮契約だ。お前の答えを聞いていない』これが以前お前に告げた言葉だ。だが私は全ての望みを果たしたとは言っていない」

「……性格悪くないか？」

「知るか。気づかずに勝手にイジけていた貴様が悪い」

酷い。だがそういわれても仕方のない気がする。

「あの時、お前を助けるといふ望みは果たした。だがな、お前の姉達は何と言っていた？ お前に何を望み、私にどんな希望を託した？」

目を瞑り思いだす。今まで全く気付いていなかったその言葉。復讐だけに捕らわれて見逃していた。ヒントはどこにもであったのに。父も、母も、仲間も、大切な人たちまでもが言ってくれていたのに気づこうとしなかった事。

「幸福で……あれと……っ」

「そうだ」

自然と涙が流れてきた。それは今まで気づかなかった自分への憤りと、死の間際まで自分の生だけでなく幸福を祈ってくれた姉達の想いにやっと気づけたからだ。そしてそれを気づかせてくれたのは黒

翼と、新たな家族。仲間や友人。そして……大切に思う彼女達だ。

「私は不器用ながらも心地よいお前の姉達を気に入っていた。だからこそお前を助けるといふ望みを果たしたし……もう一つの望みも捨てる気は無い」

「はは……」

なんだそれは。まるで自分の保護者の様だ。いや、実際そうなのだろう。他の誰よりも自分の事を見てきたのは黒翼なのだから。

「私は手段は選ばない。お前との契約は終わっても、姉との約束はまだ終わっていない。だからこそいつまでもお前がイジけているのは耐えられん」

酷い言い草だ。だが最初からそうだった。一番最初に助けてくれた時から黒翼はとても厳しく、そして優しい。そうでもなければこんなろくでなしを何度も助け、そして今もまたこうしてヒントをくれたりしないだろう。今思えば、初めて助けてくれた時に自分に選びさせたのも、自分に生きる意志を強く持たせる為だったかのように思えてくる。そして実際そうなのだと、今は信じられる。

「だからこそ言うぞ。……ここまで気づき、知って、お前は どうする？ まだイジけるのなら私にも考えがある」

いつの間にか雨は上がっていた。雨雲も霧散していき徐々に月明かりが丘の上に差し込んでくる。

そしてその中で静司は涙をぬぐって黒翼を見返した。

「行くさ。行くに決まっている。それが姉さんたちの望みでもあるし

——

ぐっ、と拳を握り、笑う。

「俺自身も、そうありたい。やっと気づけた。俺には……復讐以外にも欲しいものがあつたんだ」

「よろしい」

雲が完全に晴れ、月明かりが丘の上の二人を照らす。そして薄らと見えるうす布越し黒翼が笑い、そして手を伸ばしてくる。それに応じるように静司も手を伸ばす。

「ありがとう。いつも見守ってくれて。……六人目の姉さん」

「ふん」

二人の手が触れ合い、そして握られる。

復讐という目的は終わったけれど、またもう一つ目標が出来た。そしてその目標は何よりも大きく、困難で、しかし必ず辿り着きたい願。だからこそ。

「果たすぞ。俺と、姉さん達の望みを」

再び目を開くと目の前にナターシャの顔があった。

「何、やってんですか？」

思わず聞いてしまう。だがその言葉にナターシャの眼が吊り上った。

「何？　じゃないでしょう！　いきなりIISを起動したと思ったら今度はいきなり倒れて！　あの後大変だったのよ？」

ああ、成程と思い出す。見ればイーリスも臨戦態勢でこちらを見つめていた。つまり自分が暴れるのではと危惧していたのだろう。

「大丈夫です。ちよつと色々あったけど、おかげで色々解決したから」
「……静司君？」

先ほどまでと違う静司の様子にナターシャが首を傾げる。それはイーリスも同じだった。

だが静司はそんな事は気にせず、体を動かし、そして来る痛みに眉を顰めた。やはり体はまだボロボロだ。右目も相変わらず見えない。だが左腕には頼もしい感覚がある。

「さっきのアレックスさんとやらは？」

「今は退出してるわ。本当に大変だったのよ？　あの後本当に貴方を殺そうとするのを何とか止めたんだから」

「それは、ありがとうございます。ついでで申し訳ないですがもう一度呼んで貰えますか？」

その言葉に二人がぎよつとする。イーリスも訝しげに問う。

「お前、本当に大丈夫か？　何かずいぶんスッキリした顔してるがまさか私の見てない所でナタルと――」

「何もしてないわよ!? とうか貴方もずっと見てたでしょう!」

「ああそれは残念ですね。好みのタイプなのに」

「ちよつと!」

「……へえ?」

明らかにおかしい静司の様子にナタルはいよいよ混乱し、しかしイーリスは逆に興味深げに笑った。

「随分と顔色も良くなったじゃねえか。そっちの方がよっぽど良いぜ。本当に何が起きたか気になるがその前に質問だ。さっきのオヤジを呼んでどうする気だ?」

それは何かを期待するような笑みだ。そして静司もまたそれに笑みを浮かべて返す。

「取引、しませんか?」

迷いはもうない。

81. 亡霊たち

亡国機業による襲撃とI Sの強奪。それは被害を受けた組織や軍がいくら隠そうとしても隠しきれるものでは無かった。誰かが漏らしたのか。それとも勘の良いものが状況をみて気づいたのか。原因は定かではないが、重要なのは『I Sがテロリストに奪われた』という事実だった。

強力な兵器となり得、そして数の限られているI S。それが奪われるという事はその脅威のバランスが崩れる事に他ならない。各国の報道機関は奪われた機関、軍を徹底的にバッシングするのも無理は無かった。無責任な憶測を事実の様に流し、要らぬ情報まで嗅ぎまわり、そしてそれを見た人々が恐怖する。情報を統制しようとしてもはや流れ出した水は止まらない。徐々に、なおかつ確実にそれは人々の間に浸透していく。さらには先日の上I S暴走事件がそれに拍車をかけていた。

最初に行動に移したのは男性権利団体だった。I Sの登場により男性の地位が蔑にされると『信じている』彼らはここぞとばかりにI Sの危険性。それをたやすく奪われた女性の愚かさを唱えた。そしてそれに対抗するように女性主義の団体がその男性権利団体こそ愚かだと。お前らを守ってやっているのは女性なのだと唱え、元々良くなかった両者の関係には徹底的な亀裂が入った。

そしてそれに呼応するように様々な組織が活発になっていく。それはどれもI Sを元々持たぬ組織。彼らはここぞとばかりに攻勢を仕掛け、世界各地での小競り合いが徐々に激しくなっていく。

「くだらないわね」

「スコール！」

ホテルの一室でそんな事を垂れ流しているTVを見ていたオータムは、新たにやってきたスコールの姿に顔を綻ばせた。

「会議は終わったのか？」

「ええ。待たせたわね」

まるで恋する乙女のように走り寄ってきたオータムの頭を撫でつつ、

スコールは微笑む。そしてTVに視線を移し、小さく笑った。

「誰もかれも好き勝手騒いでいること。中には私たちに協力を申し出てくる奴らまでいるそうよ?」

「はっ! そんな連中要らねえよ。私とスコールが居れば十分だ」

「私も忘れないでほしいけどねえ」

そう言いつつ笑ったのはカテーナだ。彼女は同じ部屋のソファの上でだらしなく寝そべっており、その隣にはシェーリも控えている。

「そうですよサンマ女。カテーナ様やレギオン無くして今の状況はありえません。何ですか? 秋が過ぎて冬になってきたらあなたの脳も凍りついてそんな事もわからなくなるのです?」

「……うるせえよオタク野郎。殺すぞ」

「同じ言葉を返しましょう。後悔しなさい——」

「はいはいやめなさい貴方たち」

ぱんぱん、とスコールが手を叩くと今にも身を乗り出しそうだった二人が動きを止める。

「オータム。シェーリの言うとおり仲間他にも居るのだから無下にしちやだめよ?」

「シェーリ? あなたもねえ、すぐそうやって喧嘩腰になるのは悪い癖ねえ」

スコールがオータムを諫め、カテーナがシェーリを叱る。言われた二人はしゅん、となつて素直に引き下がった。その事にため息をつきつつスコールにカテーナが問う。

「それでえ、お偉いさんたちは何て言ってるのかしらあ?」

「予想通りよ。いい加減学園を叩けと」

「あらあらあ」

コロコロとカテーナは笑い、そして手を軽く振る。すると全員に見える位置に投影型のスクリーンが浮かび上がった。

「確かにねえ、いい感じに世界も混乱してきてISもそれなりに集まってきたわあ。ならば不安材料である白式、それに織斑千冬を叩くというのはおかしくないかもねえ?」

笑いながらカテーナが手元の投影型コンソールを叩くと、スクリーンにIS学園の戦力図が浮かび上がる。

「しかし改めて見て異常よねえ。貴重なISが訓練用とはいえ30機。更には学生の専用機や委員会の子飼い。自衛隊に各国各組織のISまで集まって総勢何機かしら？ これだけのISが一か所に集まったら世界征服できそうよお？」

「だからこそ狙うのよ。こちらもようやく戦力が整ってきたし、私たちの傷も癒えてたからね」

スコールが笑いながらその手を軽く振る。以前の襲撃の際に付けられた傷は既に完治している。

「ところでカテーナ、先日奪った篠ノ之箒のISについては？」

「あれは駄目ねえ。他のどの子よりも身持ちが硬くていう事を聞かないわあ」

お手上げ、とカテーナが両手を上げる。その姿にスコールは意外そうに首を傾げた。

「どういう事なの？」

「そのまま意味よお。流石は篠ノ之博士が妹の為だけに作ったISといった所かしら。他の子たちの様に簡単には心を開いてくれないのよ」

「なんだそりゃ、じゃあ奪っただけ無意味じゃねえか」

オータムの疑問ももつともだ。だがカテーナは首を振る。

「確かに頑固者だけど、博士が死んだことには動揺してる様よ？ 身持ちが硬くて頑固という事はそれだけ自意識が強いという事だけど、それ故に博士の死に対する衝撃も他の子に比べて強いようねえ？ 少しずつ見せた隙から色々と情報は抜き取っているわあ。例えば、」

カテーナが指を鳴らすとスクリーンにある武装が浮かび上がった。それを見たシェーリヤやオータムが目を見開き、スコールが小さく笑う。その様子に満足げに頷きつつカテーナも笑みを深く浮かべた。

「ね？ 素敵でしょう？ 次の戦いにはこれを使ってみたいと思うのよお」

それはとても無邪気で、そして邪悪な笑みだった。

亡国機業の各国各組織への襲撃が止んだ。だが一夏達にそれを喜ぶことは出来なかった。なぜならそれは戦力を整えた奴らの攻撃は間近に迫っているという事だからだ。

それ故にIS学園内も以前に比べ緊張感が増してきており、張り詰めた雰囲気か漂っていた。

「けど本当に奴らはくるのか？」

「今更何言ってるのよ」

どれだけ警戒態勢でも人は休みなしには戦えない。故に休息は必要だ。ましてや一夏に至っては前線に出ることは禁じられている。つまりありていに言ってしまうえば、暇を持て余していた。

そんな一夏がIS学園の食堂でチャーハンをつつきつつ漏らした言葉に鈴は呆れた様のため息をついた。因みにこのチャーハンは鈴が作ったものである。

現在食堂にはちらほらと人がおりそれぞれ食事や休息を取っていた。そしてその中に混じる形で一夏達も食事をしている。同じ席には箒、鈴、セシリア、ラウラ、シャルロットがそろっており全員が今は休息を命じられていた。これは偶然でなく、少しでも気が休まる様にとの真耶や千冬の配慮である。

「ふむ……一夏、なぜそう思った？」

同じようにチャーハンを食べていたラウラの問いに一夏は少し悩み、

「いやだつてさ、鈴たち専用機持ちに各国や委員会に参集されたIS。挙句には学園の訓練機30機全てを実戦仕様に換装してそれに乗るのもエース級達なんだろう？ こんな所に襲撃しかけるのは馬鹿げてる気がする」

「確かに一理ありますわ。ですが」

「言ってしまうばそもそも各国の基地、組織が襲撃されてまんまとISが奪われていたこと自体が予想外だったのだ。用心に越した事はない」

「それにIS暴走の件も解決してないからね。どんな予想外の状況にも対処できるだけの人員と手段が必要なんだよ。IS以外の兵器もいっぱいあるでしょ?」

「うーん……」

セシリア、ラウラ、シャルロットの順にさも当然の様に言われて一夏は思わず唖る。確かに外を見ればIS以外にもヘリや歩兵らしき人々まで様々な人間が居るのだ。

「けどさ、IS暴走の危険性があるならなおさらこんなにも集まるのは危ないんじゃないか? 今更だけど」

「確かにそうだがもうそうでもしないと亡国機業に対抗できないのが現実よ。もうなりふり構っていられないって話は前もしたじゃない」「うん、そう、だったよな」

鈴の言葉に一夏も今一度頷く。そうだ、もうなりふり構っていられないのだ。そしてそんな亡国機業を倒す為にも餌として自分がここに居て、奴らを迎え撃とうとしているのだという事を改めて思い出す。

「大丈夫、だよな」

「何よ一夏。この期に及んで不安なの? あんたらしくもない」

「いやそうだけどさ。俺は後ろの方だけど皆は前に出るんだろ? 心配位させてくれよ」

そう、今でこそ休息で学園内に居るがラウラやセシリア。それにシャルロットは代表候補生。つまりはこういった有事の際は前に出される戦力なのだ。

「嬉しい事を言つて下さいますわね。ですがご安心を。私たちとて簡単にやられるつもりはありませんわ」

「そうだ。それに私たちは前線と言つても最前線と言う訳ではない。悔しいが私たち以上の実力者は居るからな」

「そうだよ。だから一夏は奥で控えててね。けどもしもの時は、鈴。よろしくね」

「任せなさい。だけどアンタ達がだらしない戦いしてたら私が殴り込みに行くわよ」

鈴のおどけたような言葉に全員が小さく笑う。それにつられる様にして一夏も表情を緩めた。そしてちらりとシャルロットを見る。彼女の両目の下はまだ腫れたままであるが、ここにいる面子はあえてその事には触れ無い。その理由を知っているからだ。だが彼女の様子は少しずつ変わってきている。以前はそれこそ死人の様な顔をしていたが、だんだんと顔色が良くなってきているのだ。シャルロットの様子は皆の心配事でもあったので、理由は分からないが彼女が少しでも元気になっていいる事に一夏も安堵していた。

「へえ、頼もしいな若者たちは」

「私達にもこんな時代あったのよねー」

そこに現れた新たな声。全員が振り向けばISスーツを着た二人の女性が笑顔で手を振っていた。

「えーと……」

「ああ知らないのも仕方ないか。私はケイト。ケイト・マイラスよ」

「私はペギー。ペギー姉さんと呼びなさい」

「は、はあ」

差し出された手に握手を返しつつ一夏が呆けた様に頷く。

「私たちも今回の防衛線には参加するの。中々大変そう戦いだけど頑張りましょうね」

「オキナワから呼び出されたと思っいたらいきなり防衛しろって話でたまげたけどねー。ま、私に任せておきなさい。クソツタレなテロリストなんて速攻で潰してあげるから」

「あ、あはははは」

口調こそ軽いが彼女たちの言葉には自信が込められていた。確証はないが、彼女たちが相当な実力者であるとその場に居た全員がそれとなく気づく。

「まあ少年の疑問ももつともだけどねー。こんだけ嚴重に防衛線張っているのに仕掛けてる馬鹿なんてほんといろのかね」

「どちらにしろ私たちは守るだけよ。敵がなんであろうと関係ないわ」

実力者を思わせる二人の言葉に一夏も小さく頷き、食堂の窓から外

を見る。IS学園は学園そのものが一つの島であるが、それを守るためにこの視線の先、彼方の空ではISやヘリが飛び、海岸線には戦車まである。海上には船が浮かび全方位に警戒線を張っている。

地上も同じでもっとも近い陸地も厳戒態勢だ。これだけの防御、そして仲間が居る。ならばきつと乗り越えられる。

「ああ、その筈だ」

一人では無理でも力を合わせれば――

その時だ。一夏が見つめていた外の景色。そこに赤い光が射した。その光は天から射し込んで海に突き刺さり、まるでなぞるかのよう
に真っ直ぐとこちらに向かってきた。

「え?」

何が起きているのか。それを理解する前に、光が通った道筋が一斉に爆発を起こし、一夏の目の前が炎に包まれた。

一夏がその光を見る数十秒前。空を哨戒していたISの一機が奇妙な物を捉えていた。

「あれは……?」

その奇妙なものは空ではなく海にあった。レーダーにもハイパーセンサーにも反応が無いのに、確かに巨大な何かが徐々に海中から浮き上がってきているのだ。彼女はそれに気づくや否や直ぐに本部に連絡を取り、そして注意深くそれを観察する。だがそれ故に反応が遅れた。空に現れたその光に。

「つ……!?! 高エネルギー反応!?!」

気づいた時は遅かった。そこから突然降ってきたその光が彼女のすぐそばを通り抜け海面へと突き刺さり、そして学園に向かってなぞる様に一文字を描く。そしてその直後、光が射し込んだ海面が大爆発を起こした。

「なん……だっ……!?!」

真下からの凄まじい衝撃と海水に彼女のISが翻弄される。それでもすぐに冷静さを取り戻した彼女は姿勢を制御しすぐに周囲に気

を配った。

「視界最悪。レーダーは……使い物にならないか！　だがハイパーセンサーなら——こつちもだと!？」

明らかなジャミング。つまりこれは敵の襲撃だ。蒸発した海水による水蒸気と、天高く吹き飛ばされた海水のシャワーを浴びながら彼女は直ぐに武装を構えると本部へと通信を開く。

「本部！　奴ら……が……はっ……!？」

胸に衝撃。そして燃えるような熱さと痛み。震えながらも顔を下に向けた彼女が見たものは、己の胸から生えている血塗られた銃剣だった。

「この、ぶうぎつ、は……!？」

背後に感じる圧倒的な死の気配。凄まじい胸の激痛。それらに体と心を震わせながらも肩越しに振りむいた彼女が見たのは深い青色のISに搭乗し、深くバイザーを被った少女の姿。その姿に彼女は見覚えがあった。他でもない。出撃の前に渡された資料に乗っていたものと同じ姿だからだ。

「ざいえイレントつ・ゼえフィルウス……!？」

「死ね」

カチン、と無機質な音が響く。途端に胸に感じていた熱さと痛みが膨れ上がっていく。

自分は死ぬ。それを理解しながらも彼女は叫んだ。まだ繋がっている通信に、この事実を知らせるために。

「亡国つ、機業!？」

刹那、彼女の身体は炎に包まれ爆散した。

今しがた搭乗者を殺害し墜落していくISの破片を眺めつつ、エムはIS学園の方角へと視線を移し目を細めた。

「レギオン。どういうことだ」

『ごめん、はずした』

応えたのは無機質ながらもどこか幼さを感じる機械音声だ。そし

て空からゆっくりとその声の主が降りてくる。亡国機業のISであり一員でもある無人IS、レギオンだ。

「馬鹿が。お前の一撃で学園を叩く筈だった」

『だけども、このぶぎ、つかいにくい』

そう言つて不満そうにレギオンがその巨体を揺らす。

レギオンの今の姿形は以前に増して巨大になっていた。通常のISの10倍とも言えるその姿は相変わらずの戦艦型だが、今はその下部に巨大な砲台が装備されている。その砲台はどこか奇妙な形をしており、砲身を支えるように左右に翼を広げており、巨大なクロスボウの様でもある。

「そんな事は知らん。とつとと二射目を撃て」

そういいながらエムが再びIS学園の方角へと視線を向ける。距離はまだあるが、先ほどの光——レギオンの砲撃が通った場所は波が大きくうねり天高く水蒸気が上がっている。そして学園にまで届いたその光の砲撃はその道筋にあった建物や兵器。そしてISやその搭乗者などを一斉に焼き払っていた。学園そのものは炎と黒煙を上げ、校舎の一部は完全に崩れ落ちているが、微妙に砲撃がそれた為か壊滅までは行っていない。当初の予定では最初の一撃ですべてを焼き払う予定だったのだ。

『にしゃめ、じかん、かかる。だから、えむ、がんば』

「……ちっ」

「そうですよエム。それにこれも想定内です」

レギオンに呼応するように空から降りてきたのはシェーリだ。彼女もまた己のIS、ブラッディ・ブラッディに搭乗している。

そして更に彼女たちの遥か下、海中からもゆっくりと浮かび上がってきたのは戦艦だった。それもただの戦艦ではない。レギオンと同じく、ISが核となる亡国機業の仲間である。そしてその戦艦のハッチが開くと次々とISが飛び上がっていく。それらは全て、これまで亡国機業が奪ってきた物だ。そしてそれに乗るのも亡国機業の実働部隊達。全員がエムと同じく素顔を隠すバイザーを深く被っている。

ギリギリまでステルスによる接近を敢行し、その後レギオンの超

高威力の砲撃による奇襲。その作戦はまだ続いている。最初の一撃で相手がまだ健在ならば、今度はISで直接叩くだけだ。そしてレギオンの準備が整ったら止めを刺せばいい。ひどく単純で、そして簡単な作戦だ。それを思い返しシエーリは満足したように笑う。

「さあいきますよエム。レギオンが二発目を撃つまで、私たちが時間を稼ぐとしましょう。オータムたちも反対側から攻め始める頃ですしね」

まあ尤も、と炎と黒煙を上げる学園を見据えシエーリは小さく笑い、

「IS学園にまだ反抗する気力はあるかは謎ですけどね」

その言葉を皮切りに、亡国機業の本格的な攻撃が開始された。

82. 天を裂く光

いったい何が起きたのか。

「く……そ……」

衝撃で床に叩き付けられた体をふら付きながら起こしつつ、一夏は呻きをあげた。

「なんだ……これ……」

ふら付く体を両の手で支えつつ見回した周囲。そこは最早見慣れた食堂では無かった。埃と煙が舞い上がり、テーブルや椅子はなぎ倒されている。窓ガラスは全て割れ、どこかから非常ベルの音がする。そんな光景に顔を青くしつつ、一夏は仲間たちの事を思い出した。

「そうだ、鈴……みんなは!？」

「ここだ」

「ラウラか!」

背後からの声。それに振り向くとISを展開したラウラの姿とその足元で頭を押さえつつふらふらと起き上る鈴達の姿が見えた。良かった無事だ。どうやらラウラが守ってくれたらしい。

「すまん一夏。お前まで庇いきれなかった。本来ならお前が最優先だった……」

「いや、いいよ。それよりみんなを守ってくれた方が助かる」

光が落ちたあの一瞬。その瞬間にラウラは異常を悟り鈴たちの保護に回ったようだった。その辺りの機転は流石は軍人だ。周囲をもう一度見回せば同じように何人かはISを展開していた。最初に気づかないとは我ながら動転していたらしい。

「痛たたた……なんなのよもう!」

鈴が埃を払いつつ怒りを露わに立ち上がる。その姿は埃まみれではあるが怪我はなく一夏は少し安心した。

「このタイミングでこれだ。おそらくは亡国機業だろう」

「ですわね……」

「あーもう! わかってる。わかってるけどさー!」

ラウラとセシリアの言葉に鈴は苛立ち気に首を振る。シャルロット

トもその顔は硬い。そう、ついに亡国機業の攻撃が始まったのだ。その事実にも身を震わせる一夏だが、ふと箒の様子がおかしい事に気づく。「そんな……馬鹿な……」

「……箒？」

箒もまたふら付きながら起き上ったのだがその顔は蒼白だ。そして何か信じられないものを見た様な顔で震えている。

「箒？ どうしたの？」

シャルロットも気づいた様だ。鈴達も何事かと振り返った先で、箒は真つ青な表情で呆然と呟いた。

「《穿千》だ……」

「え？」

「さっきの光は《穿千》だ！ 間違いない……」

《穿千》その武器の名は知っている。他でもない、紅椿の武装の一つで、かつて暴走状態の際に鈴を狙い超高威力の砲撃を放った武装である。

「私にはわかる……間違いない……」

「そんな……」

自らの機体だからこそわかる直感とも言うべきか。無論、箒の勘違いである可能性もあるが樂觀視はできない。かつてあの砲撃は鈴の甲龍の装甲を掠っただけで簡単に焼切ったのだから。

「つまり、敵に紅椿が居るって事!？」

「いや、わからないよ。紅椿のワンオフは《絢爛舞踏》で、《穿千》はあくまで武装だからもしかしたらコピーされたのかもしれない」

「どちらにしろ油断はできませんわ」

皆の顔も暗い。かつて見たあの威力の凄まじさを忘れる訳がない。

「IS隊は急いで持ち場に戻れっ！ それ以外は負傷者の救出だ！

急げー！」

呆然と立ち尽くしていた一夏達だが、誰かの叫びではつとなる。同時に、遠くから爆発音が響く。それは紛れもなく戦闘の音であり、亡国機業が攻めてきた証拠でもあった。

「あとな達も急ぎなさいー！」

「ボサツとしない！」

先ほど話していた二人、ケイトとペギーも一夏達に呼びかけるとすぐに走りだす。それは他のIS操縦者達も同じで、割れた窓から次々に空へと飛んでいく。そうだ、ここでのんびりしている場合じゃない。

「私達も行くぞ！」

最初に動いたはやはりラウラだ。彼女もすぐに窓から飛びだっていく。そしてそれにセシリア、シャルロットも続く。

「みなさん、ご武運を」

「また後でね！ 鈴と箒は一夏をよろしく！」

そうして飛びだっていく彼女たちを見て、一夏は歯を食いしばる。

本当なら自分も出ていきたい。だがそれは許されない。今度ばかりは、我儘を言ってる場合ではないという事は何度も言われたし自分だつてわかる。わかるが……！

「一夏、抑えろ。気持ちは私も同じだ」

「そうよ。アンタと白式だけは守りきらないといけないの」

箒が悔しそうに、鈴も飛びだっていくラウラ達の背中に目を細めつつも一夏を窘めた。箒はISが無いために後方支援の役だ。本来なら学生の彼女も避難させるべきなのだが、相手側に紅椿があり、もしその奪還が出来た時の為に学園に待機することになっていたので。そして鈴は一夏の護衛役である。勿論護衛は鈴一人ではない。これから合流しなければならぬ。

「ああ……わかつてる」

一夏は小さく頷くと、友人たちが飛びだつていった空を悔しそうに眺めるのだった。

「やってくれる……っ！」

砲撃があった時、千冬は丁度学園海岸線の付近を飛行していた。

彼女の機体は打鉄。元は訓練用だったそれを、実戦仕様に変更し、加えて千冬専用にかなりの強化とカスタマイズがされている。特徴

的だった両肩に浮遊する二枚一対の物理シールドをオミットし、変わりに浮いているのは何本もの大型物理ブレード。背部スラスタは強化型で通常のそれに比べてもかなり大きい。そして腰のマウントには銃火器を複数備えている。

そんな彼女と打鉄実戦仕様強化型とも呼べる機体は未だ水蒸気を上げて荒れ狂う海面と、砲撃によって焼かれたIS学園の一部を見て歯を噛みしめた。幸い敵の砲撃は微妙に逸れており、より多くの人々が居た校舎は無事だった。だが余波だけでも凄まじく、窓ガラスがすべて割れているのが見える。

そして肝心の砲撃を直接受けた地域は見るも無残な状態だ。あそこに居た人々がどうなったかは火を見るより明らか。待機中だったISも数機やられている。

あまりにも規格外の敵の攻撃。そしてその結果に、無事だった者たちも呆然とその惨状を見ていた。だが今はそんな事をしている場合ではない。

「全機！ 気を引き締めろ！ 奴らが来るぞ！」

オープンチャンネルで大声を張り上げる。呆然としていた者たちもその声で我に返り、慌てて動き出した。だが自分含めて呆けていた時間が長すぎた。敵が既に近くまで来ている。

敵の構成はごちゃごちゃだ。世界各国、各組織のISから構成されており、更にはその周囲には例のレギオンと呼ばれる戦艦型が数機とそれから切り離された無人機動兵器——レギオンビット達で構成されていた。そしてその一番奥には先ほどの砲撃を行った機体がある。

己の不甲斐なさに苛立ちつつも千冬も前に出ようとする。だがそこに通信が入った。

『任せて下さい！』

「山田君か！」

声の主は真耶だ。今回の防衛戦。訓練用のISは全て実戦仕様に変更されているがその搭乗者は様々だ。学園の教師より自衛隊や各組織の搭乗者の方が腕が上の場合こそちらが使用している。だが真耶はその腕から機体を任されていた。そしてその機体とは、

『行きますよー!』

刹那、IS学園の海岸線から一斉に火線が上がった。それらは先行して接近してきていた亡国機業のISに叩き込まれ亡国機業の進行が鈍る。更にはレギオンから射出されたレギオンビットに至っては撃ち落とされていく。それらの戦果を上げたのは言うまでも無く真耶だ。そしてその機体は砲戦パツケージ、クアッド・フランクスへと換装したラファール・リヴァイヴである。そしてそれは一機でなく、海岸線を守る様に4機の同機体が砲火を上げていた。

機体の前面に突き出すように装備された4門の超大型ガトリングが特徴的なそれは、字重量と反動制御による移動不能という欠点を持ちつつも、全て正確に叩き込めればISの絶対防御も崩せるとされている。だが肝心のISはそもそも空を縦横無尽に飛び回る為にそれを相手に全て叩き込むなど不可能である。もしそんな事が出来るのならそもそもISの優位性など無いに等しい。

だがこのパツケージの本領は『いつでもすぐに設置できる砲台』だ。動力もISから賄え、量子化により持ち運びも簡単にでき、すぐに設置できる。更には、

『これだけ敵が多ければ邪魔位は出来ます! それにやはりあの小型兵器の方はシールドは無いようですね!』

全弾叩き込めずとも当たれば多少なりとシールドエネルギーは減る。それにレギオンビッドにはシールドが無い。故に今回に関しては大いに役立っていた。

「ちい! 的にしかならない分際で!」

続けざまに放たれる砲線に苛立ったのだろう。亡国機業のISがその銃口を地上の真耶に向ける。だがそれを許す千冬ではない。

「人の事を言えるのか?」

「織斑、千冬っ!」

打鉄のスラスターを最大出力で噴射。一気に距離を詰めると敵ISの搭乗者の顔が歪む。

「お前の時代は終わったっ!」

「そもそも時代など来ていない」

咄嗟に向けられた銃口から放たれた弾丸はその弾道を見切り、機体を軽く捻らせるだけの最小限の動きで躲す。大型物理ブレードを握り、速度を緩めぬまま振りぬく。

「っが!？」

手に伝わる確かな感触。そして金属の潰れる音と敵のうめき声。たたの一撃で叩ききられた敵 I S は海へと落下していった。

「回収班頼む。死んではいけないはずだ。それにそいつの I S も元はどこかの所有物だ。どこかにネコババされない内にな」

『了解』

返事を聞きつつ千冬は前を見据える。たかが一機倒しただけで敵はまだ大量に居る。そしてその奥にはあの砲撃を放つ機体もだ。

「舐めるなよ。教師として、そして姉として、これ以上無様を晒す訳にはいかないからな」

まずはあの砲撃を行った機体。それを潰す。それは敵の真ただ中に突っ込むことを意味しているが、誰かがやらねば次が来てしまう。ならばやるしかない

「砲撃機体を潰す！ 援護を頼む！」

集まってくる仲間たちと、各所で燃え上がる戦火。その戦場の中心とも呼べるそこで千冬は覚悟を決めて前に出た。

『織斑千冬が砲撃機体を潰しに行きました！』

『敵一部がセカンドラインを突破！ 迎撃急げ！』

飛び交う通信を正確に把握しつつ、セシリアは目の前のレギオンビットを撃ち抜いた。そして周囲を確認して小さく舌打ちする。

「いくらなんでも多すぎですわ！」

敵の I S 自体はそれほど多くは無い。数だけで見ればこちらの方が上だ。

だがそれを埋めるかの様に大量に居るのが件のレギオンビット。しかも以前より強化されているのか動きが素早く、巧妙だ。逆三角形の頭部から生える両腕は銃口を備えたガンブレードと変わっており、

両肩にも砲台を乗っけている。だが逆に肩には何も乗せず、近接特化なのか、ブレードと大型スラストアームだけを付けたものや、シールドを持つ者までいる。そしてセシリアを苛立たせる原因はもう一つあった。

「これ全部が本当にビットなんですの!?!」

ビットの扱いの難しさは自分も良く知っている。そのビットを、それも人型という複雑なそれをここまで扱う敵にセシリアの苛立ちが増す。更にはそのレギオンビット自身までもがビット兵器を使うのだ。セシリアの苛立ちは更に増していく。

「セシリア、上だ!」

「なっ!?!」

ラウラからの通信。咄嗟に顔を上げるとこちらに墜落するように降下してくるレギオンビットの姿。その両腕のブレードは赤く光っている。

「ごっのー!」

咄嗟にセシリアは《インターセプター》を展開。それを掲げ防御した。激突の衝撃に一瞬後退。それに歯噛みしつつも押し切ろうとするが、その前にそのレギオンビットが光に貫かれ爆散した。

「大丈夫か、セシリア」

「ええ、ありがとうございます。けどなぜここに? ラウラさんは別の地区担当じゃ」

助けに入ったのはラウラだ。だがその事にセシリアは首を傾げる。量産機も実戦仕様になつているとはいえ、戦力的には専用機の方が上だ。故に専用機持ち達はそれぞれ別々の場所の防衛班に入っている筈なのだ。

「ごっまで押し込まれた。やはり最初の奇襲が痛いな」

悔しそうに歯噛みするラウラ。元々はセシリアの居た場所よりも前線を担当していたが、その前線もろとも最初の奇襲で一気に押し込まれたらしい。確かに周りを見ても確かに味方ISの数が増えている。

「一番最初に突っ込んできた連中は落として多少は押し返したがまた

このざまだ。敵の方が勢いがある」

「不味いですわね……けど文句ばかり言っていられせんわ」

「当然……っ!？」

ラウラの目が細まり、ある一点を見つめる。セシリアも釣られる様にして振り返り眉をひそめた。

「あれは……」

それはラウラの機体に良く似ていた。漆黒の機体。両腕のプラズマ手刀。両肩はレールカノンの変わりにガトリングガンが装備されているが、それ以外の造形はラウラのシュヴァルツェア・レーゲンと酷似したその機体。

「シュヴァルツェア・ツヴァイク！」

ラウラの声に怒気が籠る。その機体の名はセシリアも依然聞いていた。襲われたドイツ軍とラウラの部隊。そしてそこから奪われたISの名前。

それに今搭乗しているのは亡国機業だ。顔の上半分を隠すバイザーをかけておりその表情は見えないが、その下の口元が吊り上る。「スコール様より頂いた機体だ。是非お前と戦ってみたかった」

それは知らない声だ。当然だ。そもそも亡国機業の構成員などほとんど知らないのだから。それに知る必要もない。所詮、これは敵なのだから。

「ああ、そうか……。私もそう思っていた……」

静かに、静かにラウラが両腕にプラズマ手刀を展開する。その眼は燃えたぎる様に揺れ、噛みしめた唇からは血が流れだしていた。

「一つ聞く。その持ち主……私の部下はどうした？」

「知らないな。大層火が上がっていた様だし跡形も無く燃え尽きたのではないか？ まあいいではないか。たかが兎一匹。この世から消えた所で」

刹那、瞬時加速を発動したラウラのプラズマ手刀が、敵のプラズマ手刀と激突した。

「怒ったか？ ずいぶん人間らしい反応だな？ ドイツの改造人間風情が」

「黙れ………貴様らが亡^{ゲンユベンス} 霊を名乗るなら、お望み通り殺してやる……っ！」

「ラウラさん！」

不味い、ラウラは明らかに怒りで動揺している。咄嗟にセシリアは加勢に入ろうとするが、それを青い光が遮った。

「これは……サイレント・ゼフィルス！」

咄嗟に振り返った先。そこにはこちらを悠然と見下ろす宿敵の姿があった。

「邪魔だ。消えろ」

サイレント・ゼフィルスから一斉にビットが放たれる。縦横無尽に動き回るそれは明らかに自分より上だ。

だが、

「今更そんな事で動揺するものですか！」

相手が自分より上だという事などすでに知っている。だからと言ってやられるつもりは、無い！

「お行きなさい！」

セシリアもビットを射出。そして大型レーザーライフル《スターライトmkⅢ》を構え一斉にレーザーを放った。

「ふん」

だがサイレント・ゼフィルスは動じない。上へ下へ。右へ左へ。その名の通り蝶の様な不規則な動きでレーザーの掻い潜ると自らもビットからレーザーを発射した。

セシリアの放ったレーザーとサイレント・ゼフィルスの放ったレーザー。それがまるで光の檻の様に空中で交叉する。だが上を行ったのはやはりサイレント・ゼフィルス。

「くあっ！」

セシリアのブルー・ティアーズ。その腰部スカート型装甲にサイレント・ゼフィルスのレーザーが掠り火を上げた。セシリアは崩れたバランスを咄嗟に取るが、そこに銃剣が向けられる。

「雑魚が」

向けられた銃剣。その切っ先が光る。だがセシリアは笑った。

「行った筈ですわ。動じませんと」

「何——」

サイレントゼフィルスの搭乗者が何かを言いかけるが、咄嗟にその場を離れた。そしてそのすぐ横を銃弾が通り過ぎていく。

「イギリスの代表候補生か。加勢する」

「件の注意機体ね……それにうちの国のISを我がもの顔で使ってくる事」

「……助かりますわ」

そこに現れたのは2機のIS。大きな鈍色のスラスタを背部に2対4基備えた、流線的なフォルムのIS——アメリカのストライク・イーグルⅢ。そして薄い紫の装甲と、異様に肥大した肩が特徴的なイギリスのメイルシュトロームだ。

「いつぞやの連中か。また墜とされにきたか」

「行ってくるな。だがあの時と状況は違う」

「ええ、今度は本気でやってあげるわ」

にらみ合う三機。それに合流するようにセシリアもメイルシュトロームに並ぶ。

「私一人で勝てない事は分かっています。なので数で圧倒させて頂きますわ」

そう。この戦場にはセシリア一人ではない。そして少ないながらも判明している亡国機業のISの中でもサイレント・ゼフィルスは特に警戒されていた。故にもし接敵した際は複数で当たる様にと事前に打ち合わされているのだ。

「……………やってみろ」

サイレントゼフィルスの不遜な返答。それを皮切りに三対一の戦いが始まった。

IS学園は人口の島で出来ている。本土からは近くにできたそれは大きな道路とモノレールで繋がれており、その他の交通手段としては船かへりを使用する。そして最初の砲撃は海側からであったが、そ

れと同時に本土側からも亡国機業は侵攻していた。

「好き勝手やってるね」

渋い顔でつぶやきつつ、シャルロットは目の前のレギオンビットをシヨットガンで撃ちぬいた。

「……うん。だけど負けない」

そんな返答と共にミサイルの嵐を放ちレギオンビットを複数一気に火球へと変えた簪がシャルロットの隣に並ぶ。彼女たちもまた、当初の予定よりも押し込まれていた。

シャルロットと簪は知り合ってまだ間もない。本音のご主人様だという事だが、つい最近まで接点すらなかったのだ。それが変わってきたのはタッグマッチの頃からか。その事から本音とよくいる事が増え、必然的にシャルロットも知り合っていた。それにタッグマッチでは戦った仲でもある。

だがそのタッグマッチでシャルロットがやった事——簪を巨大なドリルでぶち抜いた——という過去から微妙に恐れられているのがシャルロットの悩みでもあるのだが。

「そうだね。会長も前線で耐えてくれるし僕たちも頑張ろう」

シャルロット達の遙か先。本土と学園を繋ぐ一本の橋の更に先である本土側の市街地を見てシャルロットは気を引き締めた。その市街地からは火と煙が上がっているのが見える。最初の奇襲でそこに敷かれていた防衛線はいともたやすく壊滅させられた。現在の主な戦場は橋の中間付近であり、その最前線では水色の機体が縦横無尽に飛び回り敵機を撃墜している姿が見えた。

「……お姉ちゃんにも、負けない」

「うん、その意気だね」

二人頷きあい前に出る。敵部隊は戦艦型を中心にISが展開し、それを守る様に戦艦型から排出された無人機動兵器レギオンビットが前に出てきている。性質が悪いのは、そのレギオンビットそのものもビット兵器を所有している事だ。戦場のあちこちに展開されている敵のその武装と物量にIS学園側は防戦一方なのである。

「簪、残弾は？」

「まだ行ける。シャルロットは？」

「僕もだ、よっ！」

突っ込んできたレギオンビット。それを近接ブレードで切り裂きつつシャルロットは答えた。その背後からさらに突っ込んできた複数のレギオンビットは簪が背中の連射型荷電粒子砲《春雷》で撃ちぬき焼き尽くしていく。

そのまま前に出ようとした二人だがそこに焦ったような通信が入った。

『不味い、ISが2機抜けた！』

『なんてこと！』

シャルロットは咄嗟に戦況マップを確認。仲間が補足したその2機の位置を確認する。近い！

「こつちに来る！ 簪」

「……っ！」

咄嗟に二人は構える。そしてシャルロットはこちらにやってきた機体を見て目を見開いた。

「あれは……!?!」

「おや？ 貴方はいつかの学生ですね」

「ああん？」

シャルロットの前に現れた機体。その名前はデータにより知っている。

亡国機業のオータムと名乗る、ISアラクネを操る女、オータム。

そしてかつて自分を攫った張本人。ISブラッディブラッディを操る女、シェーリだ。

シェーリはシャルロットを見ると面白そうに笑った。

「頑張るものですね。それとももう忘れましたか？」

「な、なんの事——」

「川村静司」

「っ！」

その名前を聞いた途端、シャルロットは硬直した。

「彼が死んでさぞかし悲しみに明け暮れている事かと思いましたがそ

うでも無いみたいです。まあ所詮はその程度という事ですか」

「ああ？　そういうことかよ。ハッ、ザマあねえよなあ。野郎もよお？　まあお蔭でこちらは大層やりやすくなったもんだから感謝位はしてやるかあ？　ま、死んじまったからどうでもいいけどよおー」

「黙れ……まだ死んだと決まっていけない」

煽られているのは分かっている。分かっているがそれでも震えは止まらない。

「なんだあ？　もしかしてまだ生きてるかも!?　とか本気で思っているのかあ？　ダツセええなオイ。ダサすぎて笑えもしねえ」

「全くですね。本気で生きてると思うのならなぜここに居ないのでか？　それが何よりの証拠でしょう？　それとも現実を直視したくなくて――」

ダンツ、と音が響いた。それはショットガンが放たれた音。狙われたシェーリはシールドでそれを受け止めていたが少し驚いた様な顔をしていた。

そしてそれを撃ち放ったシャルロットはゆっくりと顔を上げ、そして無表情で告げる。

「少し黙ってくれないかな？　喧嘩売ってるんだよね？　イイよ、買ってあげる」

「じゃ、シャルロット……?」

隣の簪が怯えたように見つめてくるが気にしない。気にしている余裕もない。

「簪。周辺の仲間と連絡。僕たちで時間を稼ぐからその間に割ける人員を割いてこつちに寄越してもらおう。僕達二人だけで相手する必要はないよ」

「う、うん」

簪が頷き通信を開く。

「なんだあ？　情けねえ話だな。ガキらしいと言えばガキらしいが――」

再度の銃声。今度はオータムを狙った銃弾だがそれはギリギリで躲された。その結果にため息を吐きつつシャルロットは暗い笑顔を

浮かべて対峙する。

「当然だよ……。僕はあなたたちを許すつもりは無いから。それに希望だって捨ててはいないよ？ 大切な友達にも教えられたしね。だから今は全力で、仲間の力を頼ってでも——フクロ口にしてあげる」

「上等だあつー！」

それを合図に両者は激突した。

各地で起きている戦闘とその様子。落とされた味方機と敵機。

それらの情報を見つつ一夏は歯噛みしていた。

「落ち着きなさい、一夏」

「……ああ」

鈴の言葉に頷くものも、到底落ち着きそうにない。当然だ。今も外では激しい戦いが繰り広げられているのだから。

（俺一人が行った所で何も変わらないのは分かってる……分かってるけど！）

何もできない自分。その存在がたまらなくもどかしい。しかも今回の戦いは白式がターゲットにされていると見ていい。つまりはこのISを守る為に皆が戦っている。その現実が一夏をさらに苦しめる。

今、一夏達はIS学園の司令室にいる。すぐ横には鈴と護衛としてつけられたIS操縦者が3人。この戦況の中でこれだけのISを護衛に付ける事は破格と言っているが、逆に言えばそれほど重要視されているという事だ。

「千冬姉……」

一夏が最も注目するのはやはり姉の戦況だ。今千冬は敵陣の真つただ中へと仲間と共に突っ込んでいき、件の砲撃型レギオンの破壊に向かっている。だがそれは容易な事ではない。事実、千冬に追従した機体の内数機は既に撃墜されていた。

姉の強さは知っている。もう一度あの砲撃が直撃すれば今度こそ

こちらが終わりなのも理解している。それでも姉が最も危険な任を負っている事に一夏は不安を隠しきれなかった。

「大丈夫よ、一夏。千冬さんは強いわ」

「……ああ、そう、だよな」

鈴の気遣いにもどこか空返事だ。鈴もそんな一夏の事は分かっている。それでそれ以上は何も言わない。ただ千冬の無事を祈るだけだ。だが二人のそんな思いとは裏腹に悲鳴のような叫び声が司令室に響いた。

「駄目です！ ケイト機、ペギー機共に撃墜！ もうブリュンヒルデしか……！」

「っ！」

遂に千冬以外の機体がすべて撃墜された。そして悪い知らせは続く。

「敵砲撃型機体に高エネルギー反応!? 第二射、来ます!」

その報告に、その場に居た全員の顔が青ざめる中、一夏もまた覚悟を決めた。

「ちいっ！」

消えていく味方機の反応。それを鋼の精神で無視して千冬は一直線に砲撃型レギオンへと向かっていった。

目の前にはレギオンビットと、それから射出されたビット兵器が大量に蠢き、更にはISが2機居る。機動性に優れた日本のIS【霹靂^{へきれき}】。ラファールの技術の盗用と言われながらも、汎用性と拡張性に優れた中国のIS【宝玉^{パオユー}】。どちらも強奪された第二次世代の機体だ。霹靂は打鉄とは逆に射撃に向けた機体構成であり、両肩と腰部にそれぞれ砲門を兼ね備えている。対して宝玉は近接特化らしく、両手に青竜刀型の物理ブレードを装備している。おそらくあれは鈴の甲龍武装である《双天牙月》の劣化コピーだろう。

「邪魔だ」

千冬は速度を緩めぬまま両手に大型ブレードを握り一気にそこへ

と突っ込んでいく。レギオンビットを切り裂き、それが爆散する前に別の敵機へと蹴りつける。その結果を確認せぬまま機体をひねり、まるで竜巻の様に回転しながら敵陣へと切り込む。レギオンビットがレーザーを放つてるが、それを別のレギオンビットを足蹴にして無理やり方向転換して躲す。そこにできた隙に霹靂が両肩の砲門から砲撃を浴びせるが、それをブレードの腹で受け止めた。

鈍い衝撃と轟音。ブレードが粉々に砕け散る。だがそれすら構わず、その爆炎の中を突っ切りながら腰部にマウントしていたアサルトライフルを引き抜くと一斉射撃。霹靂は慌てて回避行動に移った。同時に千冬も弾切れを起こした。

「ちっ」

不要になったライフルを近づいてきたレギオンビットへ叩き付け、千冬は機体の状況を確認した。

(外付けライフルは今ので最後。残りで何としても辿り着く！)

量子変換ができるISで何故わざわざ外付け武装などを付けていたのか。その理由は単純だ。手数を増やす為である。千冬の打鉄の拡張領域にはこれでもかと言わんばかりの武装が詰め込まれており、それにオーバーした分をマウントしていたのだ。だがそれらもここに来るまで大分消耗した。外付けライフルは今ので最後なので、残りは拡張領域の武装に頼るしかない。

「それでもっ！」

砕けたブレードの代わりに両肩に浮いていた大型物理ブレードを手に取りつつ千冬は鋭い目で敵機を睨む。

「死ねええ織斑千冬！」

叫びと共に宝玉が両手の青竜刀を振り下ろしてきた。

「私に接近戦を挑むには遅すぎるな」

千冬も両手のブレードでそれを受け止める。両者は一瞬拮抗したが、すぐに千冬が勝る。

「っ、っのおおおー！」

「邪魔だと言っている！」

相手の青竜刀を押し返し、弾く。そしてそのまま、両手が上がり強

張った敵の胴体へ二本のブレードを振り下ろした。

「がはあっ!？」

衝撃に敵がバランスを崩す。それを踏み台にして千冬はさらに飛ぶ。いつまでもこの連中に付き合う義理は無い。それよりも例の砲撃型レギオンだ。

視界の先では機体下部に、まるで弓の様な形の奇妙な砲台を装備した砲撃型レギオンの姿が見えた。機体そのものは複数いる戦艦型とほぼ同一だが、その砲台が周囲に異様な雰囲気醸し出している。

「潰させてもらおう!」

目標との距離はあと少しだ。己の目標を見定め、更に加速しようとして、その目前にレギオンビットが大量に割り込んできた。

「鬱陶しい!」

斬り、叩き潰し、踏み台にしてさらに上に上がり、グレネードを放つて一気に砕く。そんな先を行く千冬に、下方から霹靂がレギオンビットごとこちらを葬り去ろうと砲撃を放つが、それをレギオンビットを蹴り飛ばして進路を変えつつ、千冬はさらに飛んでいく。そして漸くレギオンビットの群れを――抜けた。だが、

「しまった!」

時間がかかり過ぎた。視線の先、砲撃型レギオン下部の砲台周辺に高エネルギー反応を確認。既に発射体制だ。

「間に合ええええ!」

あれは、あれだけはやらせる訳にはいかない。あれを放たれば自分たちは負ける。そしてそうなれば同僚も、生徒たちも、そして何よりも大切な弟の身に取り返しをつかない事が起こる。その恐ろしい予感に千冬は焦り、更に速度を上げるが……遅い。

「やめろおおおおおおおおお!」

千冬の叫びも空しく、砲撃型レギオンはその砲台を輝かせ、そして破滅への砲撃をIS学園へ向けて発射した。

「あ……ああああ!」

その光を、千冬は呆然と見る事しかできなかった。終わってしまった、何もかも。あんなものを今度こそ正確に撃ちこまれたら学園も、

遂に射程に入った。攻撃は一層激しくなるが、それすら厭わず千冬は砲撃型レギオンへとたどり着いた。

「ふっー！」

腕を振りかぶり、そして振るう。ブレードが砲撃型レギオンへと突き刺さる。更に肩部に浮いていたブレードを握り突き刺す。拡張領域に格納していたブレードも展開しさらに突き刺す。そして、

「砕けるー！」

止めとばかりに展開したのは大量のグレネード。それらを砲撃型レギオンへと放り、自らは離脱。

「木端微塵」

刹那、放られたグレネードが一斉に起爆し、砲撃型レギオンは文字通り砕け散った。

「やったか……」

凄まじい爆発と共に砕け散っていった砲撃型レギオンそれを見て千冬は一息ついた。そして地上の一夏へと振り返ろうとして、だが凄まじい悪寒に機体を翻し、そして目を大きく見開いた。

「なっ……!?!」

その視線の先、何もない空が不意に歪む。まるで周囲の風景が徐々に塗りつぶされていくかのようにして現れたのは先ほどと同じ砲撃型のレギオン。それが……2機。

「^{フルステルス}完全なる消失……」

それはかつて、束の無人機が有していた技術。無人機を確保しつつも、その再現は不可能とされていたそれが、今日の前にあった。

『あらあら、いい顔ねえ織斑千冬』

空に声が響く。聞き覚えのない声だ。その声の主はどこか楽しげに言葉を紡ぐ。

『色々頑張ってくれたみたいだけど、別に1機とは限らないわよねえ？ けど趣向を凝らした甲斐があったわあ、貴女のそんな顔が見られたのだからねえ。よく言うでしょう？ 奥の手は隠しておくものだって』

2機の砲撃型レギオンの砲台が光を集めていく。エネルギー反応

が急激に上がっていく。それを見て千冬は即座に飛び出した。だが間に合わない。

『さっきと違って出力は30%位だけど、まずはあなたからねえ』
刹那、千冬は赤い光に飲み込まれた。

「え……う？」

その声は地上に居た本音達にも響いていた。数機居るレギオンが中継していたのだ。

一夏の捨て身の防御。そのお蔭で敵の砲撃は防ぐことができた。その一夏は衝撃と余波の熱波でボロボロの状態で膝をつき、その周囲では鈴や護衛の者たちが彼の様子を気遣っている。

今、自分たちが助かったのは紛れも無く一夏のお蔭だ。他にあの砲撃を防ぐ手段など無かった。それを理解していた一夏が静止を振りきって前に出て、防いでくれたお蔭だ。

だが、その砲撃が今度は二つ。何の前触れも無く放たれた。

「逃げろおおおおおおおおおおおおお！」

それが誰の声かはわからなかった。だがその言葉の意味は問わずとも知れた。そしてそれがもう遅い事も。

「本音っ！」

誰もが慌て、混乱する中で姉の虚が自分を抱きかかえ押し倒した。その衝撃に声を漏らす間もなく、凄まじい光と衝撃が二人を襲った。

「きああああ!？」

「逃げ——」

「あああああっ!？」

轟音。光。熱波。そして衝撃。全てがめちやくちやになった世界で、本音は抗う事も出来ず、ただ目を閉じて身を縮こませることしかできなかった。

「あ………う………」

やがて衝撃が止み、周囲は異様に静かになった。恐る恐る目を開き、そして本音は思わず叫んだ。

「おねーちゃん!？」

自分を抱きかかえるようにして倒れている姉。その体の各所からは血を流し、ボロボロだ。他でもない、自分を守っていたせいだ。

「本……音は、無事……?？」

「うん、うんそうだけどおねーちゃんが!？」

すぐにでも治療しなければならぬ。溢れる涙を拭いてもせず、本音は起き上り周囲を見渡して、絶望した。

先ほどまで室内だったそこは天井が砕け空を映し出している。あちこちが崩れ落ち、焼けているその司令室内部には同じように倒れている人々の姿。そして砕けた壁の向こうに見える外の様子も同様だった。

「っ、……どう、やら……威力は低かった……よう、ね」

「おねーちゃん駄目! 動かないで!」

呻きを漏らしながらも言葉を漏らす虚に本音は泣きながら首を振る。誰か、誰か助けてと。周囲を見回すがそれは叶わない。

『あらあらあ、中途半端に残ったわねえ。………流石はブリュンヒルでといった所かしら』

声が響く。その声は対して残念そうではなくどうでも良さげな雰囲気混じっていた。

『まあ、織斑千冬は墜とした事だし良いでしょうねえ。それに——』

2機いた砲撃型レギオン。その其々に物理ブレードが突き刺さっている。それは紛れも無く、砲撃に飲み込まれる前に千冬が投擲したものだろう。そしてその衝撃でまたしても狙いが逸れたのだ。そして一機は当たり所が悪かったのか、火花を散らし揺れているがもう一機は大したダメージは無かったようで、第二射の準備に入っていた。

『これで終わりなのよねえ』

とても、とても楽しそうなのその声に戦場に居た全員が戦慄した。

『止める! 奴をなんとしてでも止めるんだ!』

『急げ! 他の連中には構うな!』

IS隊達が一斉に動き出す。だが亡国機業の機体もそれを邪魔するべく立ちはだかる。そもそも、距離があり過ぎて次の発射まで間に

合うとは到底思えなかった。現に砲撃型レギオンは既に発射体制なのだから。

『もう遅いわねえ。はい、これでおしまい』

「やめてっ!?!」

本音の叫びも空しく、声の主の号令と共に空の砲撃型レギオンが光る。あの光がここまで届けば今度こそ終わる。終わってしまう。そんなの嫌だ。絶対に嫌だ。まだ、まだ死にたくない。失いたくない。だって、ここが無くなってしまえば本当に『彼が』戻ってくる場所が無くなってしまいうから。

だが現実には残酷だ。どれだけ強がってきても、それは叶わなかった。そして今、全てが終わろうとしている。その現実には、その光景に本音は泣きながらも叫んだ。やめて、もうやめてと。だがそれは聞き入られること無く、無情な言葉が響く。

『さようなら』

「だめええええええええ!?!」

刹那、空に巨大な光が走った。

「え?」

砲撃型レギオンの光ではない。その眩い光は空を一直線に切り裂き、そして今まさに破滅の光を放とうとしていた砲撃型レギオンを2機丸ごと焼き払った。

『なんですって!?!』

声の主はもちろん、誰もかれもが呆然としていた。それは本音も同じだ。何が起きたかわからず、ゆっくりとその光が来た方向へと目を向け、そして目を見開いた。

「……………」

見上げた先の空。そこにあったのは小型輸送機だ。

そしてその輸送機の機首。その上に誰かが立っている。

「ああ……………、ああ……………」

この距離だ。顔など良くは見えない。だがそれでも本音にはそれが誰だかわかった。

だって、その人影からは片翼だけながらも、大きく黒い翼が生えていたのだから。

『そんな……!?!』

声の主も気づいたのだろう。信じられないと言ったような声を漏らしている。だがそんなもの最早どうでも良かった。何よりも、誰よりも待ち望んでいたものがきたのだから。

「せ……っじ……」

次第に近づいてくるにつれ、その姿がよりはつきりと見えてくる。低空を飛んでいたという事もあるが、それ以上にどれだけ離れていても本音にはわかった。理屈じゃない。それ以上の『何か』がそれを教えてくれている。

体が震える、涙が溢れてくる。この涙は先ほどまでの絶望の涙ではない。これは歓喜の涙だ。

望んでいた。希望を信じた。絶望に押しつぶされそうにもなったけど、それをたつたの一撃で打ち払ってくれた。だから呟く。何よりも、誰よりも待ちわびた人の名を。

「せーじ……」

『ああ』

これだけ離れているのに、確かに彼がそう言ったと信じられた。

そしてその人影は機首から空へと身を躍らせる。その体が光に包まれ、そして変わっていく。左右に広がる黒く大きな翼へと。鉤爪を装備した荒々しい両手両足へと。全身を黒く多い、その中でまるで鼓動の様に紅く光るラインが走る全身装甲へと。

その姿を。そのISを知っている。だからもう一度叫ぶ。涙でぐしゃぐしゃになった顔で、その全力でその名を。

「せーじ!!」

K・アドヴァンス社技術開発部門試験2部。またの名をEXISTのIS部隊。

codename blade nine。川村静司。
「今行く」

参戦。

83. 進化の叫び

「川村静司?」

その報告はスコールにとっても予想外のものだった。当然だ。とつくに死んだものだと思っていたからだ。

亡国機業とて馬鹿ではない。川村静司と篠ノ之束。二人が死んだとされた日以降、二人の存在には気を払っていた。何故なら二人とも、その死体は消え去っていたからだ。

篠ノ之束についてはある程度検討はついている。あの銀髪の少女が持ち帰ったのだろう。そこから蘇生などされれば堪らないが、あの時の篠ノ之束の傷は間違いなく致命傷で手遅れだった。流石にアレを回復させる手段は無いと思いたい。

そして川村静司。こちらは最後は海に落ちていた。ならば何者かが回収した可能性も確かにあった。だが当時は世界中でISが暴走状態だった筈。そんな混乱の中、こちらに気づかれずに海中から彼を引き上げるなど不可能に近い。船が近くになればこちらとて流石に気づく。墜落した場所も人が簡単に潜れるような深さではない。それこそISなら上記の条件を満たせるかもしれないがそのISが暴走しているのだから不可能だ。加えて最後に銀髪の少女が振りまいた砲撃の嵐。あれは当然海面にも落ちており、周囲は凄まじく荒れた。だから川村静司の死体が上がらないことも一応の納得はできた。だが、それが現れた。これはいったいどういう事か。

「……関係ないわね」

生きていたのは誤算だがたかがIS1機だ。今の戦力なら問題あるまい。

「エム」

『……なんだ』

戦況を見て交戦中のエムを呼び出すと直ぐに返事が返ってきた。

「状況は把握しているわね? 川村静司の迎撃に出て頂戴。貴女が一

番近いわ」

『お前が行かないのか?』

「私は今回の作戦の司令だから、今のところ戦闘に出るつもりは無いわ。勿論、必要とあらば出るけどね」

『了解した。今相手にしている連中はどうする?』

「別の者を宛がうわ。ではよろしくね」

『――』

返事は無く回線が切られたがまあ大丈夫だろう。実際、眼前に投影された戦況モニターではエムのサイレント・ゼファイルスがビットを展開しブルー・ティアーズとメールシュトローム。そしてストライク・イーグルⅢを牽制すると、即座に離脱していくのが分かった。残された3機もそれを追おうとするが、そちらへは別の機体を2機送り込み妨害する。

「さて、次は」

スコールはその結果に満足すると別の通信を開いた。

「カテーナ」

『……驚きよねえ、まさか彼が生きていたなんて』

「そうね。それでそちらの様子はどうなの?」

その質問にカテーナが通信越しに笑う気配を感じた。

『3機落とされたけど大丈夫よお。最後の1機はまだ隠したまま。ただチャージを始めると探知されてステルスシステムも意味を為さなくなってしまうわねえ。さっきの砲撃だつてもつと早めにチャージしてればもつと威力があったのだけどねえ』

「織斑千冬を墜とせただけでも万々歳ね。タイミングはこちらで指示するからいつでも発射態勢に移れるようにして頂戴」

『了解よお』

通信を終えるとスコールはその妖艶な唇を吊り上げ、小さく笑いなから頷いた。

「今更彼が出てきたところで、結果は変わらないわ」

言葉の自信とは裏腹に、それはどこか願望めいた響きが混じっていたことに彼女は気づいていなかった。

戦況は大分不利の様だった。

ここに来るまでも見えたあの赤い砲撃。あれのせいでIS学園側の防衛体制は崩れ、そこにあの物量での奇襲だ。無理もないのかもしれない。だが純粹なISの数だけで言えば学園側も劣っていない。敵の数が多く見えるのはあのレギオンビットのせいだろう。

ならばまずはあのレギオンビット。その中心となる戦艦型無人ISであるレギオンを叩く。

「行くぞ、黒翼」

自らが搭乗する機体に告げると、確かな反応があった。黒翼の出力が上がっていき、まるで獣の様な唸りを発する。

黒翼の姿は以前とは変わっていた。最も特徴的なのはその機体名の由来とも言える黒い翼。それは以前より刺々しく、獰猛な形状へと変化している。そしてその巨大な両翼の下には新たに一回り小さな翼が生まれていた。つまり黒翼は2対4枚の翼となっているのである。両腕両足の鉤爪も同様に以前とは違う。同じように刺々しさと、まるで鱗のような装甲。更には左腕の鉤爪に至っては以前より一回り大きい。背中には背ビレの様な装甲が追加され、更には尻尾は三本と増えている。そして頭部には背後に流すように伸びた角と深紅の眼。もはや人型と呼んでいいのかも不確かな程に獣じみていた。

「R/Lブラスト。ツインレールガン」

それを合図として、以前より刺々しく進化した黒翼の巨大な両翼が光を蓄え始める。そしてその下の翼は縦に折りたたまれ、前に突き出す筒の様な形状に変形すると紫電をまき散らし始めた。

「発射」

それを合図として戦場に6つの光線と2つの光弾が放たれた。

戦場を走るその光はレギオンビット達を飲み込み、貫き、ガラクタと変えていく。一瞬にして静司の目の前は炎の華が咲き乱れた。そして静司は動き出す。

スラスター全開。急激な加速により視界が一瞬ブレるがそれをISのセンサーが補助しクリアにしていく。

「な、なんだこいつは!？」

真つ先に狙ったのは一番近くにいた亡国機業のISだ。機体はメイルシュトロームII型。イギリスから奪われたメイルシュトロームの発展機。BT兵器を用いたブルー・ティアーズやサイレント・ゼフィルスとは別に、既存の機体の強化計画の中で開発中だったものを奪われたのだろう。

メイルシュトロームII型は慌てた様にアサルトライフル放つが狙いは正確だ。慌てながらもこちらを確実に捕えている事からも、亡国機業の練度は高い。

静司は機体を微妙に逸らし、ギリギリのところまでそれを回避する。目と鼻の先を銃弾が通り過ぎていくが恐怖は無い。今はそれ以上に清々しい気分だった。

一瞬で肉薄すると、メイルシュトロームII型も近接ブレードを展開し応戦してくるが、遅い。

「っおおおらあー！」

静司は接近の勢いはそのままに左腕を振りかぶり、薙ぐ。攻撃に全てを置いた黒翼のその一撃でメイルシュトロームII型を駒の様に弾き飛ばした。だがそれで終わる気は無い。

更に加速し、弾き飛ばされたメイルシュトロームII型へと追いつき、それを掴みあげる。顔半分をバイザーで隠してはいるが搭乗者が恐怖の表情を浮かべたのは理解できた。だが容赦はしない。その場でくるりと回転を加え、まるで砲丸投げの様にメイルシュトロームII型を戦艦型IS——レギオンへと投げつけた。

『!?!』

レギオンもその行動は予想外だったのだろう。いくつかのレギオンビットを巻き込みながら勢いよく飛来してきたメイルシュトロームII型を避けきれず、音を立ててそれを受け止める羽目になった。衝撃で部品が砕けて舞い散り、レギオンの体制が揺らぐ。

そしてその隙に静司は再び加速。一気にそのレギオンへ肉薄すると、両腕の鉤爪を槍の様に前方に突出し、そのままレギオンへと突き刺した。

「ぶち撒けろ」

プラズマクロー最大出力。突き刺した両腕の鉤爪から光が伸び、その光がレギオンを内部から貫く。更に静司は決る様に手首を回転し力任せに左右に引き裂く。

まるで断末魔のような音は金属が強引に引き裂かれる音だ。強引に引き割かれたレギオンは2つに割れて墜落していく。それと同時に戦場に居た複数のレギオンビット達が墜落して行った。今倒したレギオンが操作していたのだろう。

——敵機接近。

「そうだろうな！」

未だ健在のレギオンビット達が一斉に群がってきた。囲むようにして浴びせられる銃撃を静司は上へ下へ、左へ右へと強引な加速をかけてそれらを躲し、逆にレギオンビットへ接近すると両腕両足の鉤爪を使い切り裂いていく。気分は狩りをする猛獣だ。目についた獲物へ喰らいつき、切り裂き、叩き潰し焼き尽くす。敵の真ただ中に飛び込むことに恐怖は無かった。今は信じられないほど体が軽く、そして黒翼も今まで以上に応えてくれている。

「この化け物が！」

レギオンビットの間を縫って接近してくるラファール・リヴァイヴ。これも鹵獲された機体だろう。そしてその背後には別のレギオンも居る。

「亡霊に言われる筋合いは、無い！」

振り下ろしてきた近接ブレードを受け止める。そのまま弾き飛ばそうとするが、ラファール・リヴァイヴは直ぐに引くと、もう片手に持ったショットガンの銃口を向けてきた。彼我の出力差を理解して、押し合いは不利だと悟ったのだろう。

ショットガンが火を噴く。咄嗟に回避するが、散弾のそれは微妙に黒翼を掠った。だがダメージは低い。問題ない。

「馬鹿め！ それだけ派手に動いてエネルギーが持つわけがない！」
「っ！」

ラファールの搭乗者が罵ると同時に悪寒を感じ、咄嗟に静司は上に飛んだ。一瞬遅れて先ほどもまで居た場所を光が通り過ぎる。レギオ

ンの攻撃だ。

更に回避した先にはレギオンビットが待ち構えていた。その両腕にブレードを装備した機体が3機。一斉に襲い掛かってきた。

「アサルトテイルッ！」

黒翼の背。その下方に装備された三本の尻尾がまるで生き物のように撓り、そして伸びる。まるで槍の様に突き出されたそれはレギオンビット3機を串刺しにしてその動きを止めた。

「まだだっ」

R／Lブラスト。両翼の砲台を下方に居るラファールへ向ける。更には、

「クエイク・アンカー起動。フィン直結」

——第二DFEP。動力を左腕に直結。

機体が応え、左腕の鉤爪が合わさり巨大な槍の様な形状へ変化していく。そして静司はそれを躊躇いも無く発射した。同時に両翼のR／Lブラストも発射する。

「馬鹿な!？」

ラファール・リヴァイヴの搭乗者も回避行動を取ろうとしたが、黒翼の翼から放たれた左右6本の光はまるで格子の様にそれを囲み、そしてその幅を狭めた。回避し損ねたラファールはまるで挟まれる様にして砲撃を受け、爆発を上げて墜落していく。

更に放たれたクエイク・アンカーはレギオンへと突き刺さり、そして破壊の衝撃を走らせる。その衝撃の震源地となったレギオンは文字通り粉々に分解され炎を上げていき、更にはその周囲にいたレギオンビット達も衝撃に巻き込まれ炎を上げていく。時を同じくしてアサルトテイルで突き刺したレギオンビット達も爆散していった。

「よし……っ」

静司は左腕を戻しつつ、その結果に頷く。だが未だ完治していない傷が痛み眉をひそめた。それでも静司は目の前に広がる未だ健在の敵に向かおうとしたが、それを遮る様にして戦場に光の羽が降り注いだ。

光の羽は無数に居るレギオンビット達を捉え物言わぬガラクタへ

と変えていく。更にはそれを逃れたレギオンビット達へと今度は黄色と黒のストライプ柄の影が高速で飛びかかり切り裂いていった。

「これは」

その正体は知っている。そして言葉を発する前にその破壊を繰り広げた主たちがすぐ横に降り立った。

「おいコラ、セイジ！ 私の獲物まで取るんじゃないやねえ」

「そうよ。それに無茶しすぎては駄目よ？」

「イーリスさん、ナターシャさん」

降りてきたのはフアング・クエイクに搭乗したイーリスと銀の福音に登場したナターシャだ。二人はどこか呆れた様子である。

「貴方はまだ完治していないのだから無茶しすぎないの」

「そうだぜ。それにお前の目的はこのクサレテロリスト共を潰す事だけじゃねえんだろ？ だったらとつと用事を済ませちまえ」

確かにそうだ。だが任せてしまっても良い物か？

そんなこちらを見透かしたように二人は笑った。

「貴方なりの答えを出したんでしよう？ なら今は気にせず行きなさい。それに忘れたかしら？ 私とこの子、銀の福音は元々広域殲滅型の機体よ？ この状況は得意分野ね」

「そういうことだ。ガキは細かい事は気にしないでいいんだよ」

「……ありがとうございます」

ありがたい。そう、本当にありがたい事だ。ここまで言ってくれるのなら自分は自分の為すべきこと——いや、やりたいことをやらせてもらうべきだろう。

「後でお礼はします。ご無事で」

「ええ、楽しみにしているわ」

「折角だから日本酒希望な」

優しい言葉と明るい言葉。それに背を押されるように、静司は飛翔していった。

復讐から、新たな目的を見つけ一歩進んだ自分。そしてそれに呼応する様にして進化した黒翼と共に。

「な、何アレ……」

二度目の砲撃の後、なんとか無事だった鈴は己の見た光景に思わず呻いた。その呻きはおそらく戦場に居た殆どの人間が感じた事だろう。

「か、怪獣……？」

ボロボロの状態で空を見上げていた一夏も同じく、目を見開いて空を見上げていた。

ISは基本人型だ。人が搭乗するのだから当然とも言える。多少なりと変わった形——例えばクアッド・フランクスの様なものもあるが、あれだつて一応人型でもある。

だが黒翼は違った。今までも大分獣じみた雰囲気はあったが、今はもう完全に獣のそれだ。巨大な鉤爪の両腕両足は更に凶悪な形状に変わり、尻尾は三本に増えて拳句に背ビレまでついている。極め付けが角である。あれを人型と言うのは少々無理がある気がした。

だが一夏には黒翼の形状それ以上に驚くことがあった。

「生きて、た……」

思わず一夏が呟く。そう、生きていたのだ。ずっと自分たちに秘密を隠し、そして死んでしまったと思われていた友人。言いたいことも聞きたいことも一杯あり、それはもう不可能だと知った時は絶望した。だから彼の分も戦おうと思った。彼が守っていたものを、今度は自分が少しでも引き継げればと、そう思った。自分も守られる側であつたけれども、それでも少しでも力になればと。

「あいつ……」

だがその静司が生きていた。それも黒翼を援護するようにして現れた2機のIS——銀の福音とフアング・クエイクを連れて。かつては敵対した事もあるあの2機が何故一緒に居るのは分からない。だが静司が生きていた事だけは事実である。彼に対して思う事は色々あれども、その事実に自分は確かに喜んでる。

「負傷者の救出急げ！ 体制を立て直すんだ！」

「っ、そうだ！ 千冬姉は!？」

周囲を飛びかう怒号。その言葉に一夏は気を取りなおした。友人の帰還は嬉しい。だがその寸前に姉である千冬がああ砲撃を受けているのだ。最悪の可能性を思い浮かべ一夏の顔から血の気が引いていく。

「千冬姉、千冬姉はどうなったんでっ、痛っ……!?!」

「一夏! 無理して動いちゃ駄目よ!」

慌てて鈴がふら付いた一夏を支えるが、一夏はそれどころではない。

改めて周囲を見渡せば砲撃の影響で周囲は散々たる様子だ。千冬の最後の一撃により直撃こそ逸れた様だが、それでも被害は計り知れない。そしてその直撃を受けた千冬がどうなったか。それを考える一夏は居てもたつても居られなかった。そんな一夏の下に通信が入る。

『安心してください! 私織斑先生を救出します!』

「山田先生!」

そう、その声は山田真耶だ。慌てて白式の戦況モニターを見ると真耶のクアッド・フランクスが装備をパージして海に飛び出すのが理解できた。

『どのみち私の装備は残弾がもうありません。他の皆さんが手一杯な以上、私が行きます』

「無茶ですよ!?!」

誰かが悲鳴を上げた。千冬が墜落したのは敵の真ただ中だ。そして真耶のISはクアッド・フランクスをパージした今、最低限の装備しか持っていない筈だ。その状態で敵の中に突っ込むなど無謀と言える。

『私だって先生ですから。生徒の不安を取り除くのがお仕事です』

「山田先生!?!」

一夏も思わず叫ぶ。確かに救出はして欲しい。だがその為に真耶が危険に晒される。その事実に一夏は何と言っているのかわからない。そんな一夏の気持ちを読んだように通信越しに真耶が笑った。

『大丈夫ですよ。先生は本当は強いんです』

「だけど——」

「……え？」

突如、そこに別の声が割り込んだ。突然のそれに思わず一夏は呆けた声を出してしまう。

『と、いう事でいいわよね？ 良いのよね？ いい加減コソコソするの疲れたし良いわよね!?!』

『あー駄目つすねコレ。ストレスのせいで三割増しでイカれ始めるっす』

『まあ俺はいたいけな子供たちの学び舎を守るためなら何でもやるが』

『おお、これが『ロリコン』というものか。恥ずかしげも無く言い放つとはやはり日本の文化は凄まじい』

「な、なんなんだお前ら!?!」

突然割り込んできたと思ったたら何やら意味不明な事を言い始めた通信に一夏が苛立ち気に叫ぶと、うって変わって低い中年男性の声が応えてきた。

『ああすまん。こちとら姿隠してあっちこち放浪した拳句に戦いに遅れたのでな。部下達が早くヒヤーハーしたいとうるさいんだよ』

『あ、あのー、それで貴方たちは一体……?』

真耶も状況が分からないのだろう。困惑気味に問うと、通信の越しに男は『ふむ』と、一拍置き、

『空で暴れてる子の保護者だ。保護者面談は妻が行ったようだし、三者面談はパパの出番だろう？ さあ、先生。我々が援護するので遠慮なく行ってくれ。ISは無いが、まあそれなりに敵に嫌がらせは出来る』

『ISが無いってそれじゃ——え?』

真耶が途中で言葉を失う。その理由は単純だ。真耶の進行方向のレギオンビット。それがどこからともなく飛来した弾丸で貫かれたからだ。その様子は一夏の白式からも確認できた。

『対ISライフル。まあ結局、IS相手じゃあまり実用的ではないが、

あのガラクタ相手には有効の様だ。それに最近優秀なガンナーを拾ってなあ』

『教官のピンチとなれば協力は惜しみません。どうぞ、進んでください』

『は、はあ』

いまいち釈然としないようだが、これ以上考える時間が惜しいと判断したのか、真耶が千冬の救出に向かう。

「それで、結局アンタたちは……」

残された一夏が発した疑問。それに対する答えは簡潔かつ、意味不明のものだった。

『ただのパパだ』

銀の福音とフアング・クエイク。その2機の援護と共に戦場に突入した黒翼の動きは迅速だった。迫るレギオンビットを切り裂き、碎き、貫く。妨害するISやレギオンに対しては砲撃を叩き込み一直線に学園へと迫る。そのまま一気に突破するかと思われたが、その前に1機のISが立ちはだかった。

「お前は……」

「……」

無言で目の前に現れたのはサイレント・ゼフィルスに搭乗したエムだ。セシリア達と交戦していた筈だが、自分の参戦でこちらに回ってきたらしい。

しばし睨みあう。相手は油断ならない敵だという事は承知している。何せかつて自分が完膚なきまでやられた相手だ。一瞬たりとも油断はできない。

「生きていたか」

「ああ」

エムはどこか面白そうに口元を歪めると銃剣《スターブレイカー》を構え、

「ならば今度は私の手で確実に殺してやる」

合図も無しに飛び出した。

「遠慮するー！」

静司もまた飛び出す。エムが振るった銃剣を鉤爪で受け止め、弾くと、エムは即座に後退しビットを射出した。数は6基。

——警告

「知っているー！」

黒翼が自動でそのビットを追い、視界にビットの位置が映し出された。上下に2基ずつ。そして正面からくる1基と、背後に回り込もうとする1基だ。

——回避推奨

「言われなくてもー！」

両翼の角度を変更。右翼は上に。左翼は左にへと。そして両翼のスラスターの角度も修正。そして一気にそれを噴かしつつ機体を大きく捻らせた。

それはその異形の姿からは想像もつかないような動き。推力に従い空中で複雑に回転した黒翼はビットから一斉に放たれたレーザーを紙一重で回避した。

「お返しだー！」

回避行動を終えるが否や直ぐに体制を立て直し、そして第二翼を變形。レールガンに変えるとそれをエム目掛けて放つ。

「ふん」

紫電をまき散らし放たれた超高速の光弾だが、エムもそれを容易く回避した。今はそれでいい。一瞬、エムがレールガンに気を取られビットの動きが鈍ったその隙にビットの囲いから静司は離脱すると右腕をビットへと向けた。右腕部装甲がスライドし、そこから二門のガトリングガンの砲門が姿を現す。

「墜ちろー！」

躊躇いなく発射。ビット達が即座に回避行動を取るが1基を捕える事に成功した。サイレント・ゼフィルスと同じ深い青色のビットが蜂の巣となり火を上げ爆発する。だがその爆発を切り裂いて再度エムが猛スピードで迫ってくる。その手の銃剣には光が溢れ、銃口がこ

ちらを向いていた。

「死ね」

「上等だ」

静司も即座にR／Lブラストを展開。砲門を全てエムへと合わせる。そして両者同時に光を放った。

「っ!!」

エムが放った極太の光が静司の顔のすぐ横を通り過ぎていき、黒翼の装甲が余波で融解していく。

「ちっ——!」

静司が放った6本の光はエムを掠めるが、必要最低限の動きで直撃を避けたエムがそのまま突っ込んでくる。そして両者は再度激突した。

「今更戻ってきて、何をする気だ」

「何……?」

叩き付けられた銃剣。そしてそれを左腕の鉤爪で受け止めた静司。二人は至近距離で顔を突き合わせつつ、スラスターを全力で噴射し押し合う。

「今更お前に何ができる? いや、そもそも何をする? お前の目的であった篠ノ之束はもう居ない。ならお前が戦う理由なんて、実はもう残っていないのだろう? それともまた織斑一夏やその周りを守りに来た? そうやって作られた理由が無いと何もできないのか」

「今日はよくしゃべるな……っ」

「目的を終えて抜け殻になったお前がわざわざこうやって戻ってきた。もう今まで通りな生活など不可能なのに。それは過去に居た場所を大切にしたいという淡い感情故か? 下らない。そもそもお前は日の当たる場所に居るべきではない」

「勝手なことを……! ならお前は何だっというんだ」

「それを言う必要はない」

「それが勝手だっというんだよ!」

プラズマクロー展開。右腕をエム目掛けて突き出すが、エムもまた片手にプラズマナイフを展開するとそれを受け止めた。

「お前の出番はもう終わった。後はどこまでも落ちていくだけだ。いい加減気づいたらどうだ？ お前に普通の生活など有り得ないと。お前にできるのはただ戦う事だけ。お前に刻まれたのはそのため知識と力。余計な事を考えず、ただ戦うだけの人形、そうだろうEx 02？ そしてそんなお前を私が殺してやる。だからもう、消えろ！」

奇妙な感覚だった。何故エムがここまで自分を殺害する事に拘っているのかはわからない。エムの言葉には殺意が込められているが、だが同時に何か別の感情が見え隠れしている様に感じた。それが何なのかはまだわからない。分からないが——だからと言って聞いてやるつもりも無い！

「何の為に——」

「何？」

「何の為に戻ってきたかと、お前は聞いたな。だったら教えてやる」

ぐっ、と一瞬力を込める。反射的に押し返してきたエムの力を利用して、静司は一端距離を取った。

「お前は好き勝手言ってくれたが、俺はちゃんと目的をもってここに来た」

「ふん。織斑一夏を守る、か？ 今更それをしてお前に何の得が——」

「それが間違っているんだ」

エムの言葉を遮り、静司は笑った。

「確かに俺は助けに一夏達を『助けに』来た。だが俺の組織はそもそもお前らのせいで壊滅状態だ。今更任務も何も無い。だから、『守る』とかそういう事に関してはもう俺にとってそれはついでなんだよ」

「何だと……？」

訝しげなエム。その様子が面白く、静司は装甲の下の唇を歪めた。

「俺は、俺の為にここに来た。それが姉さんたちの望みであり、黒翼の望みであり、そして何より俺の望みだったからだ」

いいだろう、教えてやる。自分がここに居る理由。何よりも大切であり、新たな自分の目標を。やっと気づけた俺たちの願い。それを達成するための第一歩を。

「うんっ！」

その本音の顔を見て、静司は静かに息を吐いた。

流石に緊張した。ここまで来て拒否られたらどうしようかと密かにビビっていた。もしそんな事になったらクエイク・アンカーとプラズマブラストで穴掘ってそのまま埋まっていたかもしれない。

けどそうはならなかった。想いは通じた。それは彼女の顔を見ればわかる。だから静司はよし、と小さくガッツポーズをするとエムに向き直る。

「な、何を……」

当のエムは状況についていけなかったのか、大変珍しい事にあんぐりと口を開けていた。そんな敵の間抜け面に気をよくしつつ、静司は笑う。

「——そういう訳だ。復讐編、クサレテロリスト殲滅編が終わったらボーナストラックOVAファンディスクでのイチャイチャ編だ。姉さんたちの願い。そして俺の幸せの為にとっと潰すぞ亡国機業」
「……………お前本当に川村静司か？」

あまりにも……………あまりにも以前と違う静司に対して、思わずエムが言葉を漏らす。

そんなエム目掛け、復讐を終え、一步先に進んで新たな目標を見つけた静司と、それに呼応するように進化した黒翼は再度飛びかかっていった。

84. 馬鹿

その叫びは当然ながら戦場に居た者達にも届いていた。

「ハ————ハッハハ！ オイオイマジでやりやがったぜアイツ！」

「え、ええ。あそこまで断言されると聞いてて恥ずかしいわね」

それはイーリスとナターシャにも同じだった。イーリスは自らのISであるフアング・クエイクを駆り、レギオンビットの一機を蹴り飛ばしながら大声で笑い声をあげていた。そして彼女から少し離れた所では銀の福音を操るナターシャが同じくレギオンビットの群れへと容赦ない弾丸の嵐を叩き込んでいる。

「いいじゃねえか、ウジウジしてるよりよっほど好きだぜ？ 私は」

「そこは否定しないわね。……けど彼も思い切ったことをするわ」

二人は静司の目的を知っていた。当然だ。なぜなら二人とその所属する組織——つまりはイレイズドが静司をここまで連れてきたのだから。

当初、目覚めた当時の静司はまさに抜け殻の様だった。だというのに少し席を離れていた間に何があったのか、次に目覚めた時の川村静司は憑き物が落ちたかのような別人ぶりだったのだ。そしてその静司とナターシャ達はある契約を交わした。

「しかし彼……本気なのかしらね」

ナターシャが心配げに呟く。それは別に先ほどの告白の事を言っている訳ではない。そしてイーリスもそれには気づいていた。

「だろうな。だからこそあしたんだろ？ これで————これでもうあいつの正体は知れ渡った。ならば選択肢は狭まるのも当然なんだ。だがそれでも選んだのなら後は自分の責任だ」

「あら、厳しいのね」

「当たり前だっ……と！」

特攻してきたレギオンビットをナイフで切り伏せながらイーリスは笑う。

「欲しい物を得るためにはそれなりの代償が必要なもんだぜ？ だが

まあ、あれだ。仲間やダチの頼みならちよつとは協力してやらんこともない」

「……そうね」

ナターシャも頷く。そう、そうだからこそ自分達もここに居るのだ。勿論打算はある。命令もある。だがそこには確かに情もあるのだ。だからこそ、今この場では自分達と彼は仲間。ならばやることは一つだ。

「邪魔はさせないわ」

「おうよー」

その宣言と同時に、2機の獰猛なISがレギオンビットに襲い掛かった。

突然現れた川村静司。そしてその発した叫びのせい、戦場は奇妙な空気に包まれていた。

その叫びは戦場のあちこちに届いていた。当然、地上の一夏にもだ。そしてそれを聞いた一夏の反応は至極全うな物だった。

「……………なんだそりゃ」

散々心配させて。散々混乱させて。それでやっと出てきたかと思えばいきなりとんでもないことを叫びだしたのだ。これ以外にどう反応すれば言いというのか。

自分の顔が引きつっているのが分かる。そんな一夏はゆっくりと鈴へと視線を向ける。

「……………」

同じだった。鈴も顔を引き攣らせ、口元をピクピクと震わせながら空の静司を見上げていた。

「……………一夏」

そんな鈴がゆっくりと視線をこちらに向ける。

「私さ、前々から実は川村つて馬鹿なんじゃないかと思ってたんだ。けど違ったみたい」

そうして鈴はもう一度空を見上げ、何かを確信したようにうん、と頷くと再びこちらへ視線を移し、告げた。

「あれは大馬鹿よ」

そう言う鈴の額にはこれまで振り回された事を思い出したのか、青筋が浮かんでいる。恐らくそれは自分も同じだろうな、と一夏は思った。というかそうでなければやってられない位呆れてしまっているのもある。

顔を引き攣らせ青筋を浮かばせ怒っているような鈴。だがその顔は笑っていた。先ほどまで絶望しかなかったこの戦場で鈴は確かに笑っていた。そしてきつと、自分自身もそんな顔で笑っているに違いないと、一夏は確信していた。

「な、なんともまあ……」

セシリアもまたその叫びをしつかりと聞いていた。聞いていたからこそ、驚きと困惑。そして呆れの混じった声を漏らすしかなかった。

一夏程仲が良かった訳でも無かったが、だからと言って悪かった訳でもない。友人かと聞かれれば悩むことなく頷く相手だ。生きていて当然嬉しい。

だが今はその嬉しさよりも、突然現れてとんでもない事を叫んだ事への呆れが大きかった。あんなものを堂々と聞かされてこちらはどんな反応をすればいいというのか。それともあれが今のメジャーなのか。自分は流行から遅れているのか等と、関係ない事まで考えてしまう。

なんとなく、周囲に視線を向ける。味方のISも、亡国機業達すらも状況が読み込めず啞然としていた。それを見てセシリアは確信する。うん、やっぱり自分は正常だ。おかしいのはあそこの馬鹿だと。「つくくくく……ハハハハハハハッ！」

そんなセシリアの耳に良く知った人物の笑い声が聞こえた。驚きそちらへ視線を向けると、少し離れた空中でシュヴァルツエア・ツヴァイクと戦闘を繰り返していたラウラが大声を上げて笑っていた。「ら、ラウラさん……？」

思わず声を賭けるが、ラウラは顔に手をやって必死に堪える様に、

しかし堪えきれずに笑い続けている。

「くっ、ふふははは！ 何だ、何だそれは！ いきなりそれか、それなのか!? いくら私でも分かるぞ！ アレは馬鹿だ、大馬鹿だ！ それに……真面目にやってた私達も馬鹿みたいではないか！」

「それは否定しませんが……ラウラさん!?!」

思わず同意しかけたセシリアだが、その眼にラウラに迫るシユヴァルツェア・ツヴァイクの姿が映り思わず叫ぶ。

「なら馬鹿のまま死ね！」

シユヴァルツェア・ツヴァイクがプラズマ手刀を展開して一直線にラウラへと斬りかかる。セシリアは慌ててそちらに銃口を向けるが、ツヴァイクのプラズマ手刀は同じ色をした刃によって受け止められた。

「……まだ死ねないな。あいつには言いたいことが沢山あるのだ。今までの事や、堂々とあんなこと叫んだこれからの事。それにシャルロットの事もな。だから！」

同じくプラズマ手刀を展開したラウラのシユヴァルツェア・レーゲンが唸りを上げる。受け止めていたツヴァイクのプラズマ手刀を紫電をまき散らしながら押し返していく。

「貴様などに後れを取るわけにはいかない。おかげさまで頭も冷えた事だしな！」

「ほざけ！」

叫ぶと同時にラウラがワイヤーブレードを射出した。ツヴァイクも同じようにワイヤーブレードを射出する。互いのワイヤーが絡み合い、捻じれていく中、ラウラが脚を振り上げツヴァイクを蹴り飛ばす。

「がっ!?!」

「まだだ！」

更にラウラは肩のレールカノンを起動すると、即座にそれを発射した。放たれた砲弾は、ワイヤーが絡み合って居た為に蹴り飛ばされても距離をそれほど離すことが無かったツヴァイクに掠り、右腕部装甲を抉る。

「がああ!？」

ツヴァイクの搭乗者が痛みに喘ぎながら憎悪の籠った目でラウラを睨むが、ラウラはそんな視線など気にせず不敵に笑った。

「色々アイツには言いたいことはあるが生きていた事はやはり喜ばしいことだ。知ってるぞ、日本では嬉しいときにセキハンと言うものを炊かねばならないという事をな。だから貴様程度にいつまでも構っている訳にはいかん」

その様子を見ていたセシリアは安堵したように、そしてラウラと同じような笑みを浮かべて改めて敵と対峙した。

ああそうだ。聞きたいことが、言いたいことが沢山あるのだ。だからいつまでもこんな連中に苦戦している訳にはいかない。だから今は全力で目の前の敵を叩くべきだろう。

見れば自分の相対していた敵ISも気を取り直したのかこちらに注意を向けている。だがそれがどうした。まだ終わってない。負けてない。だったら——勝てばいい。

「ふふ、そういう事ですわね。……ラウラさん、そのセキハンと言うものを作るときは私も協力しますわ!」

「いやそれはいい」

ラウラの返答は聞かなかった事にしてセシリアは敵に目掛けて引き金を引いた。

「……………」

どうしよう。

それが簪の正直な感想だった。

川村静司。彼が生きていたことは喜ばしい事だろう。そして自分の従者である本音に告白し、本音もそれを受けた。それはとても喜ばしい事だろう。その気持ちに偽りはない。だけど今ここには彼女も居るのだ。

「……………」

ちらり、と隣を見る。そこに居るのは橙色のISに搭乗した金髪の

少女。そう、シャルロットだ。彼女は先ほどから顔を俯かせておりその表情は見えない。それが簪の不安を更に加速させる。

川村静司が生きていたことは彼女にとっても喜ばしい事だろう。だがその後が問題なのだ。何せ彼女は――

「フラれちまったなあ？ ガキ」

「っ！」

二人の正面。そこに滞空する2機のIS。その片方に登場する女――オータムが愉快そうに笑った。

「あの野郎が生きていたのは驚きだったが……お前にとつては現れなかった方が良かったかもなあ？ だってそうすればフラれずに済んだからよ。なあ？」

不味い。相手はシャルロットを揺さぶる気だ。簪は慌てて反論しようとするが、それを遮る様にもう一人の敵であるシェーリが同意した。

「全くですね。彼も酷いことをしますね。貴方の事などどうでもよかったですかね？」

「へえそうなのか。どうよ、ガキ。相手にされなくなった気分は？」

「っ！」

駄目だ。もう聞いていられない。簪は明確な怒りを持ってオータムとシェーリを睨みつけると、荷電粒子砲の砲口を向けた。だがそんな簪の耳に奇妙な声が届く。

「……………ふふ」

「え？」

「ふふ、ふふふつふふふふふ」

笑い声だ。だが誰の？ まさかと思ってもう一度隣を見ると、顔を俯かせてたままのシャルロットが――笑っていた。

「ふふふふふふふふふ、やってくれるなあ、全く」

そう言っつて顔を上げたシャルロット。その顔には紛れも無く笑顔が浮かんでいた。その事に簪は愚か、亡国機業の2人も訳が分からず混乱してしまう。

「まあ、ね。なんとなく分かってたけどさ。やっぱり静司にとつての

一番は本音かな……って。それでも、と思ってたけど、うくん中々大変だなあ。けど本音なら仕方ないのかな」

「じゃ、シャルロット？」

おかしい。いくらなんでもこの反応は。

訳が分からず混乱する簪だが、シャルロットは相変わらず笑ったままだ。

「けどね……分かっていたからこそ、そう簡単にはいそうですか、って気にもならないんだよね。それにずっと昔から気になっていたんだ。どうしてお母さんはお父さんには相手が居たのに僕を生んだんだろうって。けどその理由がなんとなく分かっちゃったかな」

ぞわり、と何故か簪の背に鳥肌が走った。そしてそれはオータムも同じだったのか、少し戸惑ったようにシャルロットを見つめる。

「はっ、未練がましい奴だな」

「……そうかもしれないね。けどさ、とても大事な事があるんだ」

そういうとシャルロットは静かに、ゆっくりと手を腹部に当てた。そこは以前、暴走した静司によって傷を付けられた場所だ。それは簪にもわかった。しかし何故だろうか、シャルロットの手は、若干その傷よりも下腹部寄りに当たっている様に見えるのは。

そしてシャルロットはそこを優しく愛おしむ様に撫でながら、
「静司にはキズモノにされちゃったしその責任は取って貰わないからね」

ぶほっ、と簪が咽せ、戦場が再び凍りついた。

そして咽ながら簪は確かに見た。視界の端、離れた所に居たはずの黒翼が空でバランスを崩したのを。

「……………は？」

時間にしておよそ十秒。オータムが啞然として動きを止める。そしてゆっくりとシャルロットを、そして彼女がまるで何かを愛おしむ様に撫でている腹を見て、離れた所に居る黒翼を見て、再度シャルロットに視線を移し彼女の顔が慈愛に満ちているのを見て、そして何かを確信したのか、その顔がミルミルと吊り上っていき、憎悪に満ちた眼で睨みつけた。

静司を。

「川村静司イ！ テメエクソだクソだと思つてたがとんだクズ野郎だなああ!？」

『ちよつと待てええええええええええええええええええええええ!』

思わず叫び返した静司の声を聞いて簪は気づく。

「あ、やっぱり聞こえていたんだ」

この戦場の中でわざわざ反応したという事は、やはり静司もシャルロットの事は気にしていたのだろう。

「黙れこのクズ野郎が！」

『だからちよつと待てお前は何か勘違いをしている!? ってかなんで敵にこんな事言わなきゃならんのだ!』

「そんな静司……。これの事、もうどうでもいいって事?」

『い、いやそういう訳では……』

「やっぱりクズじゃねえか！」

なんだろう、この空気。

少し前までは絶望感や悲壮感に溢れていた筈なのに、今のこれはまるで喜劇だ。なんとなく、力が入りすぎていた体から適度にそれが抜けてく。

「もういい黙つてろ！ 今すぐ殺してや——」

「それは困るかな」

オータムが目の前の簪たちを無視して静司の方へ向かおうとするが、その前にシャルロットが立ちはだかった。

「言つたでしょ? 静司には責任とって貰うって。だから殺されちゃ困るんだ。僕だつて文句とか色々言いたいこともあるしね」

右腕はショットガン。左腕にはアサルトライフルを構える

「それに静司がさつきあなた達が言つたように簡単に割り切れるほど器用だったら、ここまで苦労しなかつたと思うんだよ」

だから、と引き金に指をかけてシャルロットは笑った。

「目の前であれだけ盛大に言ってくれたんだ。ちよつと位仕返しもしなくなるよね? これまでの事と、これからの事。色々言いたいことがあるからとつとと墜ちてね?」

そう昏い笑みを浮かべながら告げるシャルロットの顔を見て簪は小さく震えた。

「怖い……」

「ふざけるな！」

唐突に膨れ上がる殺意。静司が気づいた時、それを発した張本人であるエムが黒翼へと襲い掛かった。

繰り出されたのは銃剣の上段からの振り下ろし。対して静司もまた、黒翼の鉤爪を振り上げそれを受け止めた。金属音と火花が散り、衝撃に体を震わせながら二人は対峙する。

「そんなふざけた話など、意味が無い！」

「黙れ。こちらら大真面目だよっ！」

こちらを囲むように展開されていくビットを視界に捕えると、静司は左腕を一瞬強く押し込む。そして反射的にエムが押し返したタイミングで弾かれたように背後に飛ぶ。同時にアサルトテイルを起動し、まるで鞭の様に撓らせこちらを狙うビットを叩き落とした。

「幸福だと？ 貴様がそれを望むことなど無意味だ！」

「勝手に押し付けるんじゃないやねえ！」

再度激突。静司は左腕の鉤爪を。エムは銃剣を押し付けあいながら睨みあう。

「グダグダするのはもうやめだ！ それを部外者にごちやごちや言われる筋合いは無い！ 俺は、俺と姉さん達の為にも幸せになる！ 本音といちやついてそして揉む！」

叫び、左脚を振り上げる。以前に増して刺々しく荒々しくなった足先の猛獣の様な爪がエムを襲うがエムは咄嗟に距離を取ると反撃とばかりにビットからレーザーを放つ。

「ふつぎけるなああああああああああああああああ！」

咄嗟に静司も後退。回避行動を取るが正確無比なビットの攻撃を避けきれず、黒翼の装甲を撫でる様に掠った。火花が散り金属が焼ける嫌な匂いが立ち込める。だが致命傷では無い。まだやれる。

「そうだろ、黒翼」

返事とばかりに視界に《全兵装良好》の文字が浮かんだ。そのそっけなくも戦う意志だけははっきりとした黒翼の意思に静司は笑う。そしてエムを視界に捕えると大きな翼と、その下にある小さな翼。2対4枚を展開した。R/Lブラスト。そして新たに追加された装備、小型の翼を変形させることで生まれるツインレールガンを向ける。

「発射ッ」
ファイア

6本の光の柱と2発の光弾がエムを狙う。だがそれをエムはその砲撃を掻い潜る様に避けると、そのままこちらに銃剣を向けた。同時にビットが再び静司を取り囲むように展開されていく。

「また——」

先ほどの様にアサルトテイルで撃ち落とそうとするが、その瞬間静司の背中に悪寒が走る。

「弾けろ」

エムのその言葉を合図として静司を取り囲んでいたビットが一斉に自爆した。上下左右から叩き付けられる爆風と衝撃に、静司は咄嗟に身を縮ませ耐える事しか出来ない。装甲の一部が吹き飛び、まだ治りきっていない傷口が痛みを訴える。

「があああつ、くそっ！」

やはり強い。こちらの動きを読まれ、的確に削ってくる。この黒翼が二次移行を果たしているのにも関わらず、エムはこちらの上を行く。

だがそれがどうした。今更そんな事で引くわけにはいかないのだ。それに切札はある。出来れば使いたくなかったが、そんな事を言うてる場合ではないのだ。今はそれに賭けるしかない。

静司は覚悟を決めると小さく呟いた。

「VTSⅡ。起動」

エムは爆炎に包まれる黒翼——川村静司の姿に苛立っていた。

何が幸福だ。馬鹿馬鹿しい。そんなくだらないことを言うために戻ってきたというのか。

軽い失望と、憎悪。それが入り混じった瞳でエムは爆炎を見つめる。もういい。もうあれに期待することはやめよう。そもそもあの機体はここに来てからエネルギーを使い過ぎた。それこそ今まで動いていた事が不思議なくらいに。今の攻撃はその駄目押しだ。もうあの機体はまともに動くだけのエネルギーは無い。だからこれで終わり。

判断するとエムは銃剣を構えたまま爆炎へと一直線に突っ込んでいく。トドメを直接刺す為だ。近づくにつれ爆炎の中の黒翼の姿が目に見え始める。装甲の一部が砕け、左の小さな補助翼の様な物は融解していた。そしてその左腕は完全に吹き飛ばされたのか跡形も無い。

こちらの接近に気付いたのか、黒翼が硬直を解き残された右腕を構えた。だが遅い。

「死ね」

瞬時加速を発動。その凄まじい速度と勢いで肉薄すると、その銃剣の先で黒翼を貫いた。

ビクンツ、と黒翼が跳ね、そしてその機体から力が抜けていく。それを無表情で、若干の空しさも感じつつエムは見つめていた。

終わった。本当にこれで終わり。結局コイツもただの出来損ないに過ぎなかったという事か。そんな事を考えながら、もうどうでもいいとばかりに貫いた黒翼を撃ち捨てようとして、違和感に気づいた。

「……………っ!？」

胸の中心を貫いた筈だ。どう考えても致命傷だ。

それなのに血が一滴も流れていない……………!!?

「まさかっ!？」

「遅せえー!」

もしエムがいつも通り冷静であったなら。川村静司の言動に激情していなかったらもっと早く気づいたかもしれない。ハイパーセンサーで周囲を調べるくらいはしていたかもしれない。だが彼女はそれを怠った。そればかりか黒翼を倒したと思っただ事で油断してし

まった。だからそれに気付けなかった。

いつのまにか、己の上方から迫っていた川村静司に。

「くっ………何!？」

咄嗟にそれを迎え撃とうと動こうとするが、その瞬間、今まで力なく機能停止したと思われた黒翼が突然動きだし、腹に突き刺さった銃剣を握りしめた。

「自律機動だ?!？」

その事にエムは気を取られ、そしてそれが仇となる。

「馬鹿な……」

「墜ちろおおおおおー!」

愕然とするエム。その背中に左腕だけを展開し、巨大な鉤爪を装備した静司がその腕を振り下ろした。

静司が行ったのは酷く単純な事で、それでいて通常ならあり得ない事だった。

エムのビツトが爆発した直後、黒翼を残したままISから降りたのだ。そして自らの身体を黒翼に投げさせたのである。そしてエムは抜け殻の黒翼を貫いた事で静司を殺したと勘違いした。これは全身装甲だからこそ出来る一度限りの騙し討ちだ。それも黒翼が自ら動かなければならない。今まではそんな事はやらなかった。いや、出来なかったのだ。

だが今は違う。静司と黒翼。お互いが本当に同じ目的——姉達の願いを叶える為にと言う想いの下深く結び合った今だからこそ。多少離れていても、二人は繋がっている。無機質な無人機とは違う。想いと感情があるからこそ、お互いを信頼しているからこそできる連携。

「くっあああああつあああ!？」

「おおおおおおおおおお!」

全身が痛い。無理をし過ぎた体が悲鳴を上げているのが分かる。分かっていながらも静司は構わず動く。

振り下ろした鉤爪はエムのサイレント・ゼフィルスの背部スラスターを砕き、左腕部装甲を抉り、切り裂いた。サイレント・ゼフィルスの砕けた装甲。そしてその下のエムの血が飛び散る。だがこれで終わりでは無い。そんな生易しい相手では無いことは承知の上だ。

「黒翼ー！」

叫んだのは相棒の名前。それに反応するように黒翼が握りしめていた銃剣を握り潰し、エムに襲い掛かる。同時に膝のワイヤーブレードを静司の方へと射出した。

「まだだっー！」

黒翼の右腕がエムを掴みあげる寸前。エムが血を吐きながら叫びプラズマナイフを抜刀。黒翼の腕を受け止める。

「クソっー！」

静司は黒翼から放たれたワイヤーブレードのワイヤー部分を掴むと、巻き上げる力で再度飛び上がりエムに左腕を振り下ろす。生身の身体での無茶に、全身が引き裂かれるような痛みと、そして頭痛が走る。

「ああああああー！」

エムが絶叫を上げながら腕を振る。残ったビットが振り下ろした静司の左腕とぶつかり砕け小爆発を起こした。その衝撃で静司は身を仰け反らせる。

「がはっ!？」

「この程度でっー！」

更にエムは脚を振り上げ黒翼を蹴りつけた。バランスを崩した黒翼が距離を離れたところでレーザーガトリングを斉射。黒翼を牽制しつつ更に距離とる。。

「……………っ、黒翼ー！」

黒翼はガトリングを避けつつ大きく迂回しながら伸ばしたワイヤーブレードを巻き取っていく。それを掴んだ静司も黒翼の下に向かいお互いが激突する寸前、黒翼が一瞬量子化し次に現れた時は左腕があり、静司が搭乗した元の黒翼の姿に戻っていた。

「くぅ……………ッー！」

割れる様に頭が痛い。そして全身もだ。普通の人間では無茶すぎる動きをし過ぎているからだ。そしてその原因こそがVTSⅡにある。

VTSⅡ。正式名称はValkyrie Trace System。その名の通り、かつての禁じられた実験から生まれた禁断のシステム。そしてエムによって強制インストールされた代物であるVTシステムを黒翼が二次移行の際に改変したのだ。但し、その内容は以前とは少し違う。

以前のそれは過去のモンド・グロッソの戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・実行するシステムであったが、改変されたVTSⅡは搭乗者の意識を強制的に奪い強引に実現するのではなく、同意の下での思考と行動を補助し再現させるものへと変わっていた。

黒翼との連携。2対1となるのは有利に思えるが、実際は搭乗者である静司は生身になるのだ。そんな生身の人間が空中で戦闘など出来る訳がない。更にはセンサー類の補助は生きていても、リソースは同じなのだ。つまり黒翼と静司。両者を同時に補助するとなれば当然その性能は落ちる。そしてその落ちた性能では静司は尚更まともに空中戦など出来やしない。だからこそそのVTSⅡ。以前の様に暴走状態にならぬ様に制御しつつ、少ない情報から最適の行動を思考し、そして蓄積されたデータと照らし合わせて搭乗者に実現させる。当然、そんな事をすれば肉体にも思考にも負担がかかる。だからこそ多様は出来ない諸刃の剣。だが相手が相手なのだ。出し惜しみなど出来ない。

尤も、だからと言って生身での空中戦のデータまであるのは静司としても予想外であった。つくづく、ヴァルキュリーと呼ばれる人間たちと出鱈目さを認識させられた。お蔭でこちらはボロボロだ。

「つ……仕留めるぞー」

——第三DFEP接続。

黒翼の背鰭。その一部が光り、そして尽きかけていたエネルギーが上がっていく。それを見たエムのバイザーで隠された顔の下半分が歪んだ。

「何!？」

「終わりだああああ!」

プラズマクロード起動。更には瞬時加速を発動。そして復活したエネルギーを両腕に回し、エムへと振り下ろす。

「川村つ、静司イイ!」

「墜ちろおおおおおおおおおおおお!」

エムはプラズマナイフでその一撃を受け止めようとするが、勢いが違い過ぎた。振り下ろされた静司の左腕はサイレント・ゼフィルスの装甲を今度は前面から大きく切り裂き、更に返す右腕でも切り裂く。それには飽き足らずエムを掴むと一直線に海面へと落ちていき、そして海へと叩き付けた。

衝撃。高く水しぶきが上がり轟音がまき散らされる。だがそれでも足りない。衝撃で角度を変えた両者は海面を斬る様に凄まじい速度で陸へと向かっていく。

「ツアアアアアアツ……!」

最後の抵抗とばかりにエムがプラズマナイフを突き刺してきた。だがそれすら厭わず静司は速度を緩めない。

「これっで!」

そしてついに陸に辿り着くと、静司は再度轟音と衝撃をまき散らしながら全力でエムを岩盤に叩き付けた。

視界が暗い。その暗い視界の中、パチパチと光が舞っている。それを鬱陶しく感じながらも振り払う力は無い。与えられた傷から血が流れ、もはや力が残っていないのだ。

がしやり、と音がした。ゆっくりりと、それこそ亀の歩みの様な速度でそちらに視線を向けると血らだけの川村静司がそこに立っていた。その男が乗る黒いISはあちこちが壊れ、血に染まっている。そしてそのISから何かが落ちた。

「……………」

それは背鰭だ。最初見た時は何の意味があるのかと思っていた

パーツ。だがようやく分かった。そして謎も解けた。

黒翼の異常なまでのエネルギー。最初は紅椿の様にエネルギーを生み出していたのかと思った。だが違ったのだ。もっと、もっと単純な事だったのだ。エネルギーの生成でも、倍増でも無い。それはつまり、

「予備……電源か」

「……DorsalFinEnergyPack」

川村静司の言葉に思わずエムは呆れた。DorsalFin、つまりは背鰭。何て安易な名前だ。つまりこの男は単純に次々と予備電源を消費して戦っていたの過ぎないという事だ。それが異常なまでのエネルギーの正体。だが今更だ。今更気づいた所でもう遅い。

そして静司はそんなエムへと左腕を向け、静かに告げた。

「俺の、勝ちだ」

85. 理由はそこにある

悪夢とはこのことを言うのだろうか。

スコールはその美しい顔を歪め、怒りに震えていた。

たかが一機。いや、米軍の機体を入れれば三機の増援。そんなもの些細な問題の筈だった。生きていた川村静司。凍結されたと思われるていた銀の福音。そして米軍の最新鋭の機体たるフアング・クエイク。これらの参戦は予想外でも、こちらの有利は揺るがない。そう判断していた。

だがそれは間違いだった。

『こ、こいつら急に……!?!』

『Dエリア、押し返されています!?!』

『そんな!?! ゼファイルスが!?!』

次々と入ってくる報告はこちらが押されているという内容だ。

「こんな……っ」

戦力だけで言うならば劣っている訳ではない。レギオンはまだ多数存在し、そのレギオンの武装たるレギオン・ビットも数はある。ISも何機か墜とされてはいるが、総合的に見れば劣っている訳ではないのだ。だが問題なのは士気にあつた。

亡国機業の有利。それはレギオンの砲撃故が大きかった。奇襲と、超高威力の砲撃による一撃は敵の士気と勢いを下げ、逆にこちらの勢いを増させた。

だがその有利は、全く同じ方法で返された。川村静司の黒翼。その異常な威力の砲撃によって、砲撃型レギオンは墜とされ敵の士気が上がってしまった。それに米軍の二機の存在も予想外に大きい。特に銀の福音は広域殲滅型のISだ。あくまでレギオンの装備でしかなく、シールドの無いレギオン・ビットとの相性は最悪だ。現にレギオン・ビットは次々と墜とされている。

そして川村静司の対応に向かわせたエムですら、奇襲染みた攻撃により敗北した。これがスコールにとっての最大の誤算。

「……………私の、ミスね」

菌を食いしぱりつつ認める。川村静司が参戦した時真つ先に全力で潰すべきだった。自らも前に出ても勢いを取り返すべきだった。だが最早、今更が自分が出て行った所でこの勢いは止まらない。戦況は五分五分でも士気が、勢いが負けている今、これ以上の損害は今後の作戦にも関わる。

「……カテーナ」

『はいはい、どうするのかしらねえ?』

カテーナへと通信を繋ぐ。彼女は雰囲気はいつも通りだが、状況は把握しているのだろう。彼女の質問の意図は単純、まだ進むか、いったん引くかだ。

「最後の砲撃型レギオンのチャージを開始して頂戴」

『いいのかしら? チャージを開始すればエネルギーで探知されて偽装もばれるわよ?』

「構わないわ。光学迷彩に回している分も全て砲撃に注いで。……その際に撤退よ」

『なるほど、囷にするのね。けどそれではレギオンをまた一機失うかもしれないわよ?』

「それでも、このまま続けても戦力は減る一方。これでは今後の作戦に支障が出るわ。ならばここで一機犠牲にしても次に備えるわ」

『次、ね……』

「何?」

どこか考えるようなカテーナの声にスコールをは眉を潜めた。

『忘れたのかしら? そもそもこちらのレギオン……つまり無人機のコアたる『彼女達』は篠ノ之束の『強制』的な命令から解放し、『説得』することで仲間にした者達よ? それを囷として犠牲にすることで、今後の『彼女達』にも意識の変化がおきるかもしれないわよ?』

亡国機業のISが篠ノ之束の干渉を受けないのも、そして無人機としてレギオンが活動できるのも、そもそもそれが理由だ。その意思を利用するという事は、今後に影響する可能性は高い。

「わかっているわ。けどだからと言ってここでこれ以上戦力を減らす訳にはいかないの」

ここで戦闘を続けるか、それともいったん退却して戦力を整えなおすか。スコールは後者を選んだ。

『わかったわあ。なら、その様に』

カテーナもこちらの考えなど分かっているのだろう。簡潔に了承を告げると通信は途切れた。

「そうよ……ここで終わらせる訳にはいかないの」

スコールは小さく呟くと自らも命令を下すべく、新たに通信を繋ぐのだった。

声が聞こえる。

「織斑先生！　しつかりして下さい織斑先生！」

「……っ……あ……山田……先生……？」

「よかった！　今助けてあげますからね！」

千冬がゆつくりと目を開くと、そこに映ったのは涙目でこちらの無事を喜ぶ同僚であり後輩、山田麻耶の姿だった。

「私は……」

「敵の攻撃から皆を守った後に墜とされたんですよ……。けど無事でよかったです……」

肩を震わせながらもこちらを引き上げようとする真耶。そこで漸く千冬は自身が海に沈みかけていたことを思い出した。試しに体を動かそうとすると全身に激痛が走り、思わず顔を歪めてしまった。

「動かないで下さい。直ぐに安全圏まで連れて行きます！」

「安全圏……っ、山田君、どうやってここまで!？」

仰向けに倒れる自分を支えようとする真耶。その背後の空では光が、銃弾が、そしてISが舞い今も激戦を繰り広げている。当然だ、自分が墜落したのは敵の真つただ中なのだから。

そして真耶の機体は追加パッケージであるクアッド・フアランクスをパージしたままの状態のラファール。つまり最低限の武装しか所持していない。そんな武装でこんな所まで彼女が来ている事に千冬は驚いた。

だが当の真耶は困ったように笑いつつ首を振った。

「その……正体は良くわからないんですけど妙な人たちが手伝ってくれまして……」

「妙……？ 山田君!？」

真耶の言葉に疑問を感じる千冬だが、その真耶の後方から迫ってくるレギオン・ビットの姿を捕え思わず叫ぶ。だが、

「えーと、多分大丈夫みたいです」

相変わらず困ったような声の真耶。それとほぼ同時にそのレギオン・ビットは突然その同大を貫かれ爆散していった。

訳もわからぬまま唾然とする千冬に、真耶は『通信、繋がりますね』と言うと千冬の打鉄に予想外の声が入る。

『ご無事ですか、教官』

「お前は……!？」

その声には聞き覚えがあった。だがその人物がここに居る事が理解できない。目をぱちくりとして唾然とする千冬に更なる声がかかる。

『無事で何よりだ織斑先生。ここまで来て死なれては我々としても立つ瀬が無い』

「一体、あなたたちは……?」

『自己紹介は後にしよう。そこは危険だからまずは離脱したまえ。なに、援護はしてやれる』

『そういうことつす。なので早くいくつすよー』

『ねえ、今思っただけど撃墜されたISから亡国引つpegがしてバクツてもバレないかしら?』

『いや駄目だろ。各国から追われる事になるぞ』

『けどうちから奪われたものもあるし一機位、いいと思うのよねー』
なんなんだこいつらは。

真面目かと思えばとんでもないことを口走っている。だがその間も通信越しに何か轟音が響いており、その度に真耶に迫るレギオン・ビットが落とされている事からも、これは彼らの仕業なのだろう。

「な、何なんだ一体……」

『話は後だ。それより離脱を——む?』

「織斑先生、敵が……」

通信越しの声、それに遅れて真耶も何かに気づき空を見上げた。千冬も同じように空を見上げ目を細める。

「敵の動きが変わった……退いている?」

徐々にはあるが、敵が攻め込む形から守勢に回り始めている。バラバラだった機体たちが集まっていき、そして退却を開始していた。

「はあああああ!」

目前に迫りくるシヴアルツエア・ツヴァイク。そのプラズマ手刀を同じくプラズマ手刀で受け止めたラウラが雄叫びを上げた。脚を振り上げ、ツヴァイクへとその膝を叩き付ける。

「このガキがあ!」

「テロリスト風情が!」

激高したツヴァイクの搭乗者が貫き手を放つ。狙われたのは顔面。鋼鉄で覆われたそれは十分な殺傷能力を秘めている。いかにシールドがあるうとも、今のエネルギーでは貫かれる可能性も十分にあった。

「……っ!」

だがラウラは避けない。真っ直ぐとその敵の貫き手を見つめ、目を逸らさない。

「死ねええ!」

「っ」

ツヴァイクの搭乗者が叫び、そしてその貫き手が眼前に迫る。そしてレーゲンのシールドと干渉し、一瞬だけその速度が緩む。その瞬間、ラウラのオッドアイのその金色の左目が光る。

「とったぞ」

「なっ……にっ!?!」

慣性停止結果A I C発動。多分な集中力を必要とするシステムだ

が、その能力は相手の動きを一時的に停止させるといふもの。

ツヴァイクはラウラに貫き手を向けたままその動きを止めてしまふ。そしてそれはこの戦いにおいて致命的であった。身動きを取れなくなった敵を前に、ラウラは両手のプラズマ手刀を掲げる。

「墮ちろ、亡霊」

「くそおおおおおおおおお!!」

躊躇なく、容赦も無く振り落とされたプラズマ手刀によりツヴァイクは切り裂かれ、そして墜落していった。

「くっ……」

漸く撃墜したが、ラウラもまた無傷ではない。それに機体もはやエネルギーは乏しい。だがそれは敵も同じだろう。ならばここが執念場か。

『ラウラさん！ ご無事で!』

「ああ、大丈夫だ。セシリアはどうだ」

『私は——っ、これで1機!』

視界の端で青い光が走る。その光は敵ISを貫き、そして墜としていくところだった。

その姿にラウラは頷く。そうだ、まだ誰も欠けてはいない。以前とは違う。今度こそ勝つのだ。

新たに気合を入れ直し、敵を見据える。だがそこで敵の動きに変化が起きた。今まで攻め込んできた機体たちが突然その勢いを無くし、逆に退きはじめたのだ。

「なんだ……? 撤退か?」

油断せずに周囲を見渡す。

『やった……やりましたわラウラさん! 敵が!』

セシリアが歓喜の声を上げる。しかしラウラは油断なく周囲を見渡し、敵を見据え、そしてそれに気付いた。

「いや、まだだ……くそ、最悪だ」

『え?』

セシリアもラウラの様子に気づき、そしてその視線を追い、その存在に気づいた。通信越しに彼女が息を飲むのを感じつつ、ラウラは

忌々しげに呻く。

「まだ1機、残っていたのか……っ」

二人が見つけたのもの。それは遙か上空に姿を現した、あの砲撃型レギオンの姿だった。

『オータム、シエーリ撤退よ』

「何い!？」

突然入った通信に、シエーリとオータムは動きを止めた。

「なんでだスコール! まだ私達は!」

『これは命令よ。……これからレギオンの砲撃を囮として一気に後退するわ。シエーリ、エムの回収をお願い。オータム、準備しなさい』
「けど!」

『いいからいう事を聞いて。ね?』

スコールの言葉にオータムは悔しげに歯を食いしばる。その様子を横目で見ていたシエーリは視線を正面、自分と相對するシャルロットと簪に移した。

「どうやらここまでの様ですね」

「撤退するのかな? けど逃がすと思う?」

シャルロットがアサルトカノン《ガルム》と連装ショットガン《レイン・オブ・サタデー》を構える。その隣の簪も、油断なくこちらを見据えていた。だがシエーリは小さく笑う。

「強がりはやめなさい。貴方たちにそこまで余力があるとは思えません」

「それはやってみなければわからないよ!」

叫び、シャルロットが飛び出す。そしてその両手の銃口をこちらに向け、発砲。

対しシエーリも動く。回避は最小限。ブラッディ・ブラッディの丸みを帯びた両腕の装甲は盾代わりにもなる。それを正面に構え銃弾を防ぐ。

「まだまだ!」

腕に走る衝撃。その痺れを心地よく感じる中、接近してきたシャルロットがアサルトカノンを棄て、その手に近接ブレードを展開するのが見えた。対抗してこちらも右腕装甲からニードルを展開。それを受け止める。だがシャルロットはそこで止まらない。近接ブレードから手を離すと再度アサルトカノンを展開。そして左腕のショットガンと共に銃口を向けその引き金を引く。

(面白い……！)

シェーリはそれを上に跳ぶ事で回避するが、それをシャルロットが追撃する。アサルトカノンを再び手放しその手に新たに現れたのは重機関銃だ。だがシェーリも負けてはいない。その引き金が引かれるより早く、追撃してくるシャルロットの進路に機雷を撒く。

「っ!？」

シャルロットは急制動をかけ機雷から逃れようとするが、それより早くシェーリはそれを起爆。シャルロットの至近距離で爆発が起き、ラファールは吹き飛ばされた。

「その歳でそれほどの高速展開と切替。賞賛に値しますね」

「くっ……！」

吹き飛ばされたシャルロットだが直ぐに態勢を直しこちらを睨みつけてきた。それが実に面白い。本音を言えばこのまま相手をしたいが、命令は命令だ。これ以上はいけない。

「どう、して……」

「？」

悔しそうに、それでいて本気でわからないといった目でシャルロットがこちらを見据える。

「どうしてそれほどの力があるのに、こんな事をするの?」

「――」

意表を突かれた。

まさかこの期に及んでそんな質問が来るとは思っていなかった。

「……」

別に答える必要はない。だが別に答えて何かが変わる訳でも無い。だからだろうか。シェーリは小さく笑うとシャルロットを見返す。

「私にも、大切な物があるのですよ」

「それは——」

「これ以上は言う必要はありません。それでは」

「待っ——」

制止するシャルロットを無視して、シエーリは更に機雷をばら撒くとその隙に一気に離脱していった。

IS 学園沿岸部。大きく荒れ果てたその一角で静司とエムは対峙していた。

二人の姿は互いに酷い有様だ。お互いに機体の各所から火花を散らし、そして血を流している。それでも両者には差があつた。

それは、大きな岩に寄りかかる様にして座り込んでいるエムと、息を荒くして、ふら付きながらも立ち、それを見下ろす静司という差。それはこの戦いの勝者と敗者の姿でもあつた。

「痛むか」

「……当然だ」

エムはふん、と鼻を鳴らして答える。だが静司も『そうか』と頷くと改めてエムに左腕を向けた。

「さあ、答えてもらう。……お前は何者だ」

「今更、だな……。お前だつて薄々気づいているのだろ」

静司の問いにエムは小馬鹿にする様に吐き捨てる。その様子に静司は小さく頷いた。

「ならばお前も……あそこに居たんだな」

「……そういうことだ、Ex02」

Ex02。かつての自分の呼び名に静司は眉を潜めた。だが続いたエムの言葉はそれ以上の驚きを静司に与えた。

「そして私がEx03……お前の後であり最後のExナンバーだ」
「何!?!」

自分以外のExナンバー。それは確かに存在しただろう。だがそ

これはE x O 1でしかないと考えていた。自分以降にまだ成功例が居た事は知らない。

「驚いているな……当然だ。何せ私はVプロジェクトが篠ノ之束によって潰された後に出来上がったのだからな」

「……どういふ、事だ」

カラカラになった喉から声を絞り出す。エムはそんなこちらの様子に満身創痍のまま笑う。

「貴様がCBシリーズと戯れていた間にも研究は進んでいた……。当然クローン計画もな。尤も、資金は限界に来ていたようだがな」

それは、それは確かにありえた。自分や姉たちの様な順調な実験体が居たとはいえ、それだけで満足するとは思えない。

「そして生まれたのが私だ……。CBシリーズの成功例を踏まえて、極めて純然に、そして完璧に、織斑千冬という存在をコピーする為にだけに生み出された……いや、生み出される筈だった」

「どういふ、意味だ」

「単純だ。私の完成の前に、あの研究所は破壊されたからだ」

どくん、と静司の肩が跳ねる。研究所の破壊。それはつまり篠ノ之束の手によってすべてが、姉達が消えた日の事だ。だが何故だ？ 生み出される前に研究が崩壊したのなら、そもそもエムと言う存在は居ない筈なのではないか？

「不思議そうだな……。簡単な事だ。あの襲撃の際、あれだけの破壊を受けながらも地下深くにあった私の培養カプセルは奇跡的に無事だった。そして生き延びた私は――」

そこで、エムが静司を見つめ、そして深く笑った。

「持ちうる限りの全てのデータを奪い逃げたのさ……。無論、元のデータは破壊してだ」

「なっ!? 何故そんな事を……!?」

「何故? 今更何を言う。私達とは何だ? 人か? 兵器か? いや違う、私達は最強でなければならぬ。そうでなければ意味が無い。そしてその最強に最も近いのは誰だ?」

「まさか、お前……!?」

「ああそうだ！ 逃げた私は亡国機業に拾われ！ そしてその技術と奪ったデータを元に完成された！ 織斑千冬のコピーとして、最強たる存在に！」

「このっ……！」

静司は怒りに震え、左腕を振り下ろす。振り下ろされた左腕はエムが寄りかかる岩を切り裂き、そしてエムの首を—— 刎ねる寸前で止まった。

「何を、何を考えている!? そんな事をして何になる!？」

「ならば聞こう！ 他に何があった!? あの場で生まれ、そして潰えていた者達の中に他に何があった!? ないだろう？ それ以外に無かっただろう!? 貴様とてそうだ！ 与えられた抛り所に縋り、そして良い様に使われていた！ それが無ければ貴様とて同じだった筈だ！」

「一緒にするんじゃないやねえ！」

「いいや同じだ。それが何だ？ 幸福？ 幸せ？ そんな漠然としたものを求めて何がある？ その力は何の為だ？ どうして与えられたか忘れたか？」

「与えられた理由なんか知らない！ もうそんなものは関係ない！ だが、だがな、もしお前がそんな理由でこっちに喧嘩を売るって言うのならこちらだって徹底的にやってやる！」

エムの首元に添えられた黒翼の鉤爪。それが紫電をまき散らしていく。だがエムはそれを恐れる事も無く笑った。

「そうだ！ やれ！ それが本質だろう？ 私達の存在意義だろう!? ならば殺れ！」

「勝手に決めつけんな！ だがな、俺は決めた。もう決めたんだよ！」

こんな俺を支えてくれる人たちが居るのなら、その人たちとの幸福を掴む為なら何でもやるってな！」

静司が左腕に力を籠めた、その時だった。

「やせませんよー！」

不意に聞こえた声。それと同時に感じた悪寒に、静司は咄嗟にエムから距離を取った。半瞬遅れて、エムと静司の間に鋼鉄のニードルが

突き刺さる。

「こいつはー!」

見上げた先、高速で落下してきたのはシェーリのブラッディ・ブラッディだ。その両腕にニードルを、そして背後には4基の《主無き棺桶》を展開している。そしてその両腕のニードルをこちら目掛けて振り下ろす。

「シェーリー!」

「お久しぶりですね!」

静司も黒翼の両腕の鉤爪を掲げ応戦。鉤爪とニードルがぶつかり合い、衝撃と轟音が撒き散らされる。

「オータム! 今のうちにエムを!」

「ちっ!」

もう一機、落ちてきたのはオータムのアラクネだ。オータムはエムを抱え上げると即座に飛び上がり離脱していく。

「させるかよお!」

「こちらの台詞です!」

シェーリを打ち払い静司は追撃しようとするが、それより早くシェーリが眼前に立ちはだかる。

「邪魔だ!」

「お互い様です!」

再度、激突。限界に近い体が悲鳴を上げる。だがそれでも黒翼は違う。まだ行けると。まだ戦えとばかりに出力を上げていき、徐々にシェーリを押ししていく。

「この力……っ!?!」

「どけえええええええええ!」

黒翼の両翼が広がり、その翼に光が収束していく。

「速い!?!」

シェーリは咄嗟に背後に跳ぶが一足遅かった。放たれた六本の光はブラッディ・ブラッディの肩を貫き、各所の装甲を焼いていく。

更に静司は一瞬、腰を溜めると一気に飛び出した。そして独楽のように回転しながら、その鉤爪を振るう。

「出鱈目すぎるッ!？」

「ありがとよお！」

「褒めてませんよ！」

「知ってるよ！」

辛うじてシエーリは腕の装甲で防ごうとするが、黒翼の鉤爪はそれを容易く切り裂いた。部品と火花。そしてシエーリの血が舞い散っていく。

「こんな……！」

「邪魔だと言っている！」

ブラッディ・ブラッディの右腕装甲を破壊した黒翼は《アサルトテイル》を展開。黒翼の背後から槍の様に放たれたそれがブラッディ・ブラッディの腹部と脚を貫く。その痛みに喘ぐ間に、今度は一気に目前まで接近した静司が膝蹴りを叩き込んだ。

肉を抉り、骨を砕く感触。その不快感に眉を潜める事も無く静司はシエーリを蹴り飛ばす。《アサルトテイル》が抜け、そこから血をまき散らしながらシエーリが地面を転がっていく。

「くっ……いいのですか！　こんな所で油を売っていて！」

「何を！」

血を吐き、体中からも流しながらもシエーリが飛び上がり、静司もそれを追う。途中、まき散らされた機雷は両翼のR/Lブラストで撃ち落とし、一歩も下がることなく前へ。

「レギオンが学園を狙っています！　今度こそ貴方の大切な物を破壊するため！」

「何だ!?？」

そこで漸く静司も気づいた。撤退していく亡国機業と、その少し離れた場所でこちらを狙うあの砲撃型レギオンの姿を。

「時間は稼がせてもらいました！　今のあなたとこれ以上戦うつもりはありませんよ！」

そしてそのレギオンの姿に気を取られた隙に、シエーリは高速で離脱していった。

「くそ！」

敵を逃した事に悪態を付く。だがまだ終わってない。そう終わっていかないのだ。

『聞こえる、静司君』

「ナターシヤさん」

不意に入った通信はここまで連れて来てくれたナターシヤのものだ。

『あの砲撃型の事は確認してるわね？ あれを墜とすわ。貴方は行ける……？』

ナターシヤの言葉にもう一度空を見上げる。どうやらあの砲撃型のレギオンは困役という事なのだろう。捨て置くわけにはいかないあの機体を犠牲にした撤退戦。だがそれでもあの砲撃型の付近には多数のレギオン・ビットが控えている。容易に突破できるものではない。

「なら、全て焼き尽くす」

『え……？』

「ナターシヤさん。そちらは残存敵戦力の殲滅を。あの砲撃型は俺がやります」

『そんな……。だけどエネルギーは……』

「まだ、行けます」

ガコンつ、と背部で音が鳴りそして視界にウインドウが浮かぶ。

——DFEP、セット。

浮かび上がったその文字に思わず苦笑する。黒翼はやる気満々だ。そんなこちらの様子に気づいたのか、ナターシヤは呆れた様に呟いた。

『ほんと、出鱈目ね……。大丈夫なのね？』

「ええ。なのでお願いします」

『わかったわ。……気を付けて』

通信を切ると静司は小さく深呼吸をし、そして覚悟を決めた。

「プラズマブラスト、SET」

その言葉に黒翼が反応する。両翼が外れそれは左腕へと。そして

切り離された両翼が合体し、鋼鉄の翼が形を変える。羽を折り畳むように変形していき、やがては長身の砲台と変わる。そこから7本の羽が飛び出し黒翼の前に展開。互いを光で繋ぎ光のリングとなった。それは黒翼の切札である砲台。そしてその砲台は以前に増して巨大化しており、禍々しさを増していた。

——砲身形成完了。収束機展開完了。チャージ開始。

「くっ……」

砲身にエネルギーが集まっていく。今まで以上の力に砲身が揺れ、そしてそれを押さえる全身に激痛が走る。それでも歯を食いしばり、静かにそのチャージの完了を待つ。徐々に振動が強くなっていき、それに呼応するように周囲の大気が胎動していく。視界の先では件の砲撃型レギオンの砲身に光が収束していくのが見えた。

「っ……っ……」

痛い、苦しい。折角戻ってきたても、結局こんな目に合っている自分に思わず苦笑してしまう。黒翼だって進化したのにないつもの様にロボロだ。

「だけど……っ……」

脳裏に描くのは優しく、そして自分が求めた彼女の姿。ああそうだ。それさえあれば耐えられる。それさえあれば——怖くない。だから、

「くたばれ^{発射}」

——チャージ完了。

その知らせと同時に静司は砲身のエネルギーを全て解放した。轟音と共に放たれた眩い光は以前の数倍の太さと威力を携え、一直線に砲撃型レギオンへと向かっていく。その途中にあるレギオン・ビット達を一瞬で溶かしつくしたその砲撃は今まさに砲撃を放とうとしていた砲撃型レギオンを飲み込んでいく。

「くっおおおお……っ……」

発射の衝撃に顔を歪めつつ、決して砲身は逸らさずに前を見続ける静司の眼には、残骸すらまともに残さずに消滅していくレギオンの姿がしっかりと映っていた。

出鱈目。それは先ほど自分が言った言葉だ。だがそれは間違いだった。先ほどのなんて序の口で、本当の出鱈目がそこにあった。

「レギオン、消滅」

シェーリは呆然と呟く。まだ亡国機業の撤退は完了していない。その為の罠であった砲撃型レギオン。だがそれすら落とされてしまった。あの馬鹿げた砲撃で。

「……………」

これはミスだ。あそこで逃げずに、そのまま川村静司を止めていれば、別の結果があったかもしれない。

「いえ……………」

それは違うだろう。川村静司に対して自分は全く歯が立たなかった。きつとあそこであれ以上戦っていても、自分は敗北していた。稼げたとしてもほんの僅かな時間だけだっただろう。

そしてこのままでは亡国機業は更なる戦力を失う。現にIS学園防衛部隊の一部はこちらの追撃を開始している。そしてその中心に居るのは銀の福音とフアング・クエイクだ。

「……………レギオン」

『しえーり、たいへん。みんな、きえた。このまま、まずい』

「ええ、そうですね」

通信を繋いだのはレギオンの一つ。最も最初に亡国機業の仲間となり付き合っても長くなってきたレギオンIだ。

「あなたのお友達は私達を助ける為に罠になってくれました。それはとても感謝しています」

『しえーり?』

「なので今度は私がその役目を果たしましょう。なので一つだけお願いがあります。それは——」

レギオンに対しての『お願い』を言い終わるとシェーリは静かに前を見た。そこに見えるのはこちらに迫る銀の福音とフアング・クエイク。そして数機のIS達。

「カテーナ様の邪魔を、これ以上させません」

川村静司につけられた傷からは今も血が溢れている。意識ももはや危うい。それでも迫りくるIS目掛けて一直線に飛び込んでいった。

「はっ！ お出ましかあー！」

「墜ちなさいー！」

真っ先に接敵したのは銀の福音とフアング・クエイク。フアング・クエイクが繰り出したナイフを《ヴァカント・コフィン》を展開し、盾の様にして防ぐ。だがその隙に上に回った銀の福音が光りの雨を降らす。一撃一撃の威力は致命傷では無いが、数がかなり多い。もちろんにも《ヴァカント・コフィン》を展開し防ぐ。

「亡国機業め！」

「墜ちろー！」

そこに突っ込んできたのは2機に追従する形で来ていたラファール・リヴァイヴと打鉄だ。動きを止めたこちらに両機は一気に銃弾を浴びせにかかる。ブラッディ・ブラッディのシールドが瞬く間に減っていく。

「邪魔、ですよー！」

光学迷彩機雷《ゴースト》を全方位に射出。銀の福音とフアング・クエイクは気づいたのか即座に下がったが、ラファールと打鉄は違った。

「碎けなさいー！」

自らも巻き込みかねない至近距離でそれを起爆。大爆発を引き起こした。

「なっ!？」

「無茶するぜ!？」

その行動にナターシャとスコールが目を見張る中、爆炎が飛び上がる様にしてシェーリは2機に迫る。その機体の各所から火花を散らしながら、だ。

「はあああああああああー！」

全てはカテーナの為。その為だけに今を捧げる。

別に大層な出会いだった訳ではない。よくある紛争。その中で潰えかけた命。それを偶々そこを訪れていたカテーナが拾い、新たな生を受けた。そんな、よくある話だ。

「だが！ それでも私にとってはそれが全て！」
ニードル展開。《ヴァカント・コフィン》からも砲身を展開し連射する。

「知るかよお！」

フアング・クエイクがその銃撃を掻い潜って迫り、ナイフを振るう。シエーリも左腕のニードルで受け止める。

「どんな理由があろうとも、敵は敵だ！ そうだろ、ああん!？」

「ええそうですよ……！　そしてカテーナ様の邪魔をするあなた方が私の敵です！」

お互いに武器を打ち払い距離を取る。その隙に銀の福音から放たれた光弾がブラッディ・ブラッディの装甲を削っていく。それでも強引に回避行動を取りつつ《ゴースト》を射出していく。撃墜が目的ではない。不可視の機雷は既に知られている。ならば牽制に使い、少しでも時間を稼ぐ。

「ぐふっ……」

だが時間稼ぎもそう長くはもたない。川村静司につけられた傷は深く、最早自分が長くない事も理解していた。

「それでもっ」

機雷を光弾が貫き、爆発を引き起こしながら銀の福音が迫る。

「それでも！」

《ヴァカント・コフィン》で応戦するが、それが光弾の集中連射によって碎かれていく。

「それでも——」

「うるせえ」

そして、銀の福音の放つ光弾の嵐の中を連続瞬時加速で接近してきたフアング・クエイクの刃が目前で刃を振るう。

「私はお役に立てたでしょうか——」

その言葉を最後に、シエーリの胸にナイフが突き刺さる。

そしてそれを合図として、残り全ての射出された《ゴースト》が一斉に起爆し、空は爆炎に包まれた。

空で広がる爆炎。その衝撃は地上まで響き、轟音は体を震わせる。「くっ、そ……誰だよ……」

ふらふらと体を揺らしながら歩く静司にとって、その衝撃と轟音は迷惑極まりないものだった。元々、重症だったところを無理やり出撃し、エムと戦い、シエーリと戦い、そして最後のプラズマブラストがトドメだった。もはや体は限界寸前であり、気を抜けば今すぐにでも倒れてしまう。だが、まだ静司にはやらなければならないことがあった。だからこうして歩いている。

黒翼のエネルギーも流石に尽きた。DFEPも打ち止めだ。故に空を飛ぶことすら敵わず、荒れ果てたIS学園のある人工島をゆっくりと歩いていく。

戦闘はもう終わりだろう。亡国機業は退却を開始し、残っていた戦力もあの爆発に紛れて撤退していった。大してこちらは追撃できるメンバーがそれほど残っていない。だからひとまずは終了だ。

「くっ……」
右目は前回の戦いで既に見えず、そして左目も今は霞んでいる。血を流しすぎた体はフラフラであり酷使した肉体が休ませろと悲鳴を上げる。それでもひたすら歩く。

「どれだけ歩いただろうか？ やがて目的の場所を見つけると、静司は小さく笑い最後の力を振り絞る。早く、今すぐにでもあそこに行かなければならないのだ。そして――」

「せーじー」
その目的の場所。そこに居た少女の叫びが耳に届いた。そして彼女が――本音が走り寄ってくる。

「ああ」
やっと、やっとたどり着いた。もう何か月も会ってなかった様な気がする。とても、とても長い間失っていた気がする。色々と遠回りを

して、様々な人に迷惑をかけた気がする。だがそれでも、それでも辿り着けた。

「せーじ……!」

「やあ……」

正面、手を伸ばせば届く位置に本音が居た。いつもは平和そうに笑顔を浮かべている顔に涙を浮かべて。そんな顔を指せた事の罪悪感と、その姿すら愛おしく思ってしまう愚かさ。そんなものが入り混じって静司は苦笑する。

「っ! その眼……」

「ん、ああこれか。まあ色々あったって事で」

開かない右目を見て本音が顔を青ざめる。だがこれ以上悲しい顔はさせたくない。だから静司は笑う。

「なんだか……久しぶりだなあ……」

「……うん。そうだよ、久しぶりなんだよ?」

「本音は、少し痩せたか……? 駄目だな、ちゃんと食わなきゃ……」

「い、いつもいつも、傷だらけなのはせーじだよ?」

「ああ、そうか……いつも通りか……」

これには耳が痛かった。確かに自分が毎回こんな形だ。

「うん……いつも通りのせーじだよ。いつも通り無茶するし、いつもボロボロだし、えっちなのも変わってないし」

「……」

たたり、と痛みによる脂汗とは別の冷や汗が流れた。というかいつも通りって……。

「だけどね、いつもみたいに帰って来てくれた……っ。だから、だからね……!」

涙をぽろぽろと流しながらも、本音はくしゃくしゃな顔で笑いそして両腕を広げた。

「おかえり、せーじ」

「」

ああ、これだ。これがきつと自分が求めていたものだ。

あれだけの事があったのに。それでもいつもと同じように、いつか

躲した約束を果たそうとしてくれている。そしてそれを知れただけでも、自分は苦勞した甲斐があつた。戻つてきた甲斐があつた。そして、これからも進んでいこうという気にもなれる。

だから静司はゆっくりと歩み寄り、そして両手を広げる本音に寄りかかる様に倒れ込みながらこう返すのだ。

「ああ……………ただいま」

86. 狂気再来

暗い昏い闇の中をそれは進む。

文字通り闇に閉ざされたそこは目の前ですら何があるのかわからない程、黒く塗りつぶされている。だが彼女はそこを躊躇なく進んで行く。

周囲に感じるのは小さな生き物たちの気配。中には危険な生物も居るが、それは彼女には適用されない。故に彼女はそれらを気にせず目的の物を探した。

あまり時間は無い。今も遙か上——上空では敵がこちらを探している筈だ。それに見つかることなく、目的を果たす。それが彼女の使命だった。

やがて彼女のレーダーがそれを感知した。すぐさまそちらに進路を向け、しばらく進みそして遂に彼女はそれを見つけた。

それは棺桶だ。いや、正確には棺桶の形に似せた武器。その名を《ヴァカント・コライン主無き棺桶》。

彼女はそれを收容すると直ぐに中を確かめる。だが期待していた反応は無く、あったのはある意味予想していたもの。

『……………しえーりのしぼう、かくにん』

その武器の主、自分達を逃がす為囷となった仲間。その遺体と彼女が使用していたIS、ブラッディ・ブラッディのコア。それだけが入った棺桶は收容されると役目を終えたとばかりに量子化し消えていく。

それを静かに見つめていると、同じ光景を見ていた仲間から通信が入った。

『馬鹿ね……………《主無き棺桶》と言う名なのに、貴方が棺桶の主になっては本末転倒じゃない』

『かてーな』

『あの子の願いは受け取ったわ。戻りなさい、レギオン01』

『りようかい』

シエーリの最後の願い——自らが撃墜された後のコアの回収。そ

の願いを果たしたレギオン01は静かに海中を進んで行くのだった。

黒煙が上がる空をヘリや無事だったISが飛翔していく。日は傾きはじめ、長かった一日が漸く終わり始めていた。

「けど、俺の場合はここからなんだよなあ」

「せーじょ？」

流石に疲れたので座り込んでしまった静司の隣では同じように地面に座り込んだ本音の姿がある。今はぴとり、と寄りかかる——と言うより倒れ掛かる勢いで寄り添っている。本来なら立場が逆な気もしたが今はその暖かさが心地よい。心地よいのだが、

「このまま本音とイチヤコラしたまま終われたらなあという話だよ」
「？」

きよとん、と首を傾げる本音に苦笑していると近づいてくる足音が耳に入る。そちらに目を向け、静司は小さく手を上げた。

「……久しぶり」

「静司……」

それは鈴に肩を貸された一夏の姿だった。その後ろには箒にセシリアやラウラ。シャルロットや簪。それに他にもいくつか見知った顔が居る。

「生きて……たんだな」

「なんとか、な」

言葉を交わし、しかし二人の間に沈黙が降りる。

一夏の顔には喜びと、そして同時にある感情が見え隠れしている。そして静司にはその感情に思い当たるものがあった。

一夏がこちらの生存を、そして帰還を喜んでいない筈が無い。織斑一夏という男はそういう男だ。だが同時に、織斑一夏と言う男だからこそ、捨てきれない思いもあるのだろう。

それは川村静司が篠ノ之束を殺害したという事実。言い訳もする気は無いししようも無い。何せ一夏達の目の前でそれを行ったのだから。だからこそ一夏は戸惑っているのだろう。友人として帰還を

喜ぶ感情と、幼馴染の姉を殺した事に対する複雑な感情。なまじこちらとあちらの事情を知っているだけに、一夏の困惑は深い。

「一夏、お前が何を考えてるかは何となくわかるけどさ、きつとお前は正しいよ」

「何だつて……？」

喜びと怒りと困惑。それらすべてが一夏の良さだという事は静司だつてよく知っている。それに殺人と言う行為が常識的に考えて推奨される様な事では無いという事も。

「俺は俺のやった事に対して後悔は無い。間違っているとも思わない。この考えは変わらない。だけど、一夏の考えも正しいという事は分かってる。世間一般的な感情としてはそれが正しいという事も」

「そう、だな」

一夏としても思うところはあつたのだろう。目を瞑り天を仰ぎ、そして数秒。肩を貸していた鈴が心配そうに見つめる中、顔を下した一夏の眼には確かな意思が宿っていた。

「そうだな。理由があつたのは分かってる。それが静司にとつてとても大切な事で、もし同じ立場になったら俺だつてどう考えるかわからねえ。だけどやっぱり、静司、俺はきつと、束さんを殺した事を許せないと思う」

「だけど、と続ける。」

「お前が生きてて嬉しい、という気持ちだつて本物なんだぜ？　だからさ、お帰り、静司」

そう言つて笑い、手を差し伸べてきた。その返答に静司は一瞬ほかんと口を開け、しかし直ぐに気を取り直すとふら付きながらも立ち上がりその手を握った。

「イケメンだよなあ……」

「おいしいきなり何だよ」

「いや、お前は良い奴だなと言う話」

「なんだそれ」

お互い視線を交わし、そして思わず笑ってしまった。

「しっかし、静司。アンタ今までどこに居たのよー」

「そうですね！ 心配したんですのよ？」

「生きていたのなら連絡をするべきだろう！」

「その眼……見えんのか？」

鈴、セシリア、箒、ラウラ。一夏と静司の間の空気が柔らかくなつた事で、今まで成り行きを見守っていた彼女達も会話が立て続けに静司に詰め寄る。しかもその質問は尤もであるので、静司としてもなんと答えるべきか悩むところだ。正直に全てを話していたら相当時間がかかるからだ。

そして、

「静司」

「っ」

鈴達の背後からのその声にびくつ、と静司の肩が震える。鈴達も振り返り、一様に肩を震わせ道を開けた。そしてその間を歩いてきたのはシャルロットだ。その後ろでは簪が涙目で付いてきている。そしてそのシャルロットはと言うと

「ふふ」

笑っていた。笑っているのに何故だろうか？ 背筋が凍る様な感

覚に静司は肩を震わせる。

「や、やあシャルロット……」

静司としてもこれは避けて通れない道だと理解している。してはいるが理解と覚悟はまた別物だ。特に本人を前にした時では。

「しゃ、シャルロット。それで、だな……俺は」

「……」

ニコニコと笑うシャルロットに対し、ダラダラと脂汗を流す静司。

鈴達も顔を青くして一歩引いて見つめる中、

「……つぶ、あははははははははー」

「……へ？」

突然シャルロットが声を上げて笑いだし、思わず静司は間抜けな声を出してしまった。だがそんな事を気にも留めずシャルロットはお腹を抱えて笑っていた。

「あははは、せ、静司、あんなに格好つけてたのに、震えて、つぶ、駄

目、面白すぎ、あはははははははははは

「お、おおう」

突然の奇行に誰もが呆然とする中、ひとしきり笑い終えたのかシャルロットは目元の笑い涙を拭う。

「言いたいことは一杯あったけど、静司の変な顔見てたらどうでもよくなつちやつたよ」

「変な顔で……」

釈然としない気持ちで思わず己の頬を撫でる静司の姿にシャルロットは再び笑う。

「うん、だから今はこれだけ言っておこうと思うよ。……おかえり、静司」

「あ、ああ。ただいま？」

先ほどの一夏と同じように手を差し出され、静司も反射的に手を伸ばす。だが手が触れた途端、突然引つ張られシャルロットに引き寄せられた。

「うおっ!」

ばすんつ、と柔らかい音を立てて二人がぶつかる。身長は静司の方が上なので引つ張られた静司の胸にシャルロットが抱きつく様な形になった。突然のその行動に静司は抗議しようとするが、

「ほんつ、とうに……心配、したん、だよ……う？」

「……そっか」

抱きつかれているので顔は見えない。見えないが、震える声と肩を見れば彼女が泣いているのが分かる。だから静司もそれ以上は何も言わず、ただそれを受け止めた。

「しゃるるん、しゃるるん」

そしてそんな二人に本音はいつもの平和そうな笑みを浮かべ、

「信じて、良かったでしょ」

「うん、……うんっ」

本音の言葉にシャルロットは泣きながら頷き、そんな姿を一夏や鈴達も笑みを浮かべて見つめるのだった。

「けどせーじ、浮気は駄目だよ？」

「……………」

「川村静司だな」

一夏と静司たちが話している中、不意に声がかかる。そして同時に、静司達の周りを数機のISが囲んだ。

「なんだよアンタらー!」

突然の事に一夏は顔を強張らせるが、彼女達はそれを無視して一夏達を——正確にはその中心に居た静司を取り囲んだ。

「生きていたとはな……。だが」

ちやきり、とそれぞれが己の武器を構え静司に向けた。その行為に一夏達が息を飲む。

「なぜこうするか、わからないとは言わせないぞ……レイヴン」
「……………」

レイヴン。それは正体不明の黒い翼のIS——つまり黒翼につけられた名前。無人機と同じく、本来のあるべきISコアの数、467個の枠外から外れたイレギュラーの呼称。

「救援には感謝しよう。だがそれ以上に貴様の存在は異端であることを理解しているな? 貴様を拘束する」

有無を言わさぬ口調でそう言い切ると静司を囲んだ者達が一斉に距離を詰める。一夏が抗議しようとそれを遮ろうとするが、それより早く別の声がかかった。

「おいおい、私達を差し置いて何勝手に話進めてんだよ」
「全くね」

その声と同時に、新たに2機のISが静司の頭上に現れた。ファング・クエイクと銀の福音だ。2機は静司の左右に降り立つと、静司を囲む者達と相対する。

「私達アメリカを差し置いて、何やってくれたんだあおい?」

「……黙れ。これは国の問題ではない。IS委員会よりレイヴンの捕獲命令が出ているのは貴様らとて知っているだろう」

「ええ、知ってるわ。けどなら尚更何故なのかしらね、彼を拘束にする

のに私達アメリカを蔑にするのは？」

そう、静司を囲んでいたのは確かにIS委員会によって学園に召集された者達だったが、そこにアメリカの機体の姿は無かったのだ。

「ならばこちらからも言わせて貰おう。お前たちはこの男と一緒に現れたな？ 一体どういう関係だ？ もしアメリカがこの事実を知っていて今まで黙っていたというなら問題だぞ」

「想像で勝手に問題にしてんじゃねえよ。私達だって知ったのはつい最近だ。ま、大方私達がコイツの情報を得ているから自分達も、と、いった所か？ コイツの存在は色々特殊だからな。だがだからこそ勝手は許されねえぜ？」

「何だと……？」

訝しげな彼女達に向けイリスは笑い、

「こいつの処遇を決めるのは私達でもお前達でも無い。会議室に居るお偉いさん方だって事だ」

「そういう事よ。この件については我が国の委員から報告がある。その結果が出るまでは誰にも連れて行くことは出来ないわ」

ナターシャはそう言うと、心配そうに見つめていた本音やシャルロット、それに一夏達に向け小さくウインクをし、

「ま、尤も監視と拘束位はするけどね」

どこかいたずらっぽく微笑むのだった。

IS委員会。国家のIS保有数や動きなどを監視する委員会であるそれは、IS条約に基づいて設置された国際機関である。委員は各国に存在し、その中でも各国は代議員として代表を立てている。通常時はその代議員が話し合うが、有事の際は通常の委員もそれに参加する。そう、例えば今の桐生やアレックスの様に。

『漸く亡国機業を撃退したというのにまた問題か……』

『この問題はある意味亡国機業以上だな。一体どうするつもりだ』
『それを含めて聞いてみようではないか。アレックス委員の話とやらを』

うす暗い部屋に浮かぶスクリーン。そこに映る者達の顔は苦虫を噛み潰した様である。まあ無理も無いなあ、と桐生は能天気な感想を保持していた。何せ、亡国機業の撃退の報が入ったのも束の間、その立役者の一人が死んだと思われていた男性操縦者であり、その男性操縦者があのレイヴンだったのだ。彼らの混乱も仕方のない事だろう。実際、桐生とて驚いた。尤も、その驚きは静司が生きていた事の喜びと、彼が堂々と姿を晒した事に対する驚きだが。そして彼の存在について、アメリカのアレックス委員から話があると、つい先ほど連絡があったのだ。

ちらり、と画面越しにアレックスの顔を見るが彼は無表情でありその感情は読めない。静司はアメリカ軍の機体と一緒に現れたと聞いているので、彼が何かを知っているようだが……。

そのアレックスが漸く口を開いた。

『ではお話ししましょう。とは言っても概要は先ほどデータでお送りしましたが』

『ああ読んだよ。随分と突拍子も無い内容だったがね。川村静司は織斑一夏を護衛する為に派遣されたエージェントであり、そしてあの黒いISの搭乗者でもあったと。ジョークにしても笑えんな』

『残念ながら事実です。因みにあのISは黒翼と呼ぶようです』

『そんな事はどうでもいい。しかしこの内容からするに……桐生委員もこの事実を知っていたのだな』

「まあ、送り込んだのは僕ですからねえ」

これは言い逃れできないと悟ると霧生も素直にそれを認めた。

『つまりK・アドヴァンスもグルか。そこまでして何故隠した？』

『簡単です。亡国機業対策です』

え？　と思わず桐生もアレックスの顔を見てしまう。少なくとも桐生とK・アドヴァンスの間でそんな話をした事は無い。

『……説明してもらおう』

『今回の件を見て分かる通り、亡国機業の力は侮れません。いくらISを奪ったとは言え、その資金、資材、人員はどこから来るのか未だ不明です。ここまでの事をする組織。どこに根を張っているか

分かった物ではありません』

どこかで聞いた話だなあと桐生は苦笑してしまった。それはかつて、自分がこの場で静司について説明を求められたときにした言い訳と似た内容だからだ。

『確かに、以前もこの場で桐生委員により一人が裁かれた。だがまだそういった者が居ると言いたいのかね？』

『可能性は否定できませんでしょう？』

『……』

前例があるために誰も強くは言えない。それこそがアレックスの狙いなのだろう。しかしよくもああここまで大胆に嘘をつくものと桐生も呆れてしまう。

『だが、だからと言ってだ、コアを一個人が……それも468個目のコアを所有している事を許す理由にはならん。それを許してしまえば何かと理由を付けて同様の事が起きるだろう』

『そうだ！あのコアは川村静司より徴収し、適正な審査の元、何れかの国に付与されるべきだろう！』

尤もな話である。コアを個人や一企業が所有しているなどは本来あってはならないのだ。通常、企業が使用するコアは厳密にはその企業のある国の物なのだから。

『無論、我々としてそれは考えました。ですがそれは不可能だったので。我々が彼を保護した経緯は読んでいただけましたか？』

その言葉に桐生はふむ、と考えつつ先ほどアレックスから送られてきたデータを見る。そこには『IS学園での戦闘後、海に墜落した川村静司を銀の福音によって回収した』と書かれている。しかし静司が墜落した当初、世界はISの暴走という未曾有の大混乱の最中にあつた筈だ。つまりこれの意味するところは、

『確かに読んだ。この時の銀の福音についても聞きたいことがある。何せあのISは凍結されたと聞いていたからな。だが今は別だ。この話が何の関係がある』

『むしろそこが重要なのです。はつきりと申し上げますと、彼とあのISを切り離すことは出来ません。ISが拒否するのです』

『拒否だと？ それはパーソナライズされているという事ではないのかね？』

『違います。 IS の意思が彼との離別を拒否しているのです。 もし出鱈目だと思うのであれば、現在学園で拘束中の川村静司で試してみると良いでしょう』

スクリーン越しに出席者たちが押し黙る。 IS が離別を拒否する。 そんな話等聞いたことが無いからだ。 だが IS に意思があるという事は以前から言われている事であり、また、 IS が突然妙な動きをする事はつい最近経験済みだ。

『話を戻します。 まず、川村静司からあの IS を切り離す事は出来ません。 これを前提に話しますが、そうになると私達に残された手段は二つです。 一つは彼に協力を仰ぎ、戦力とするか。 そしてもう一つは――殺してでも奪うか』

『……………それはいくらなんでも極端過ぎないかね？』

『しかし我らには時間がありません。 亡国機業は撤退しました。 手傷も負わせました。 だがそれはこちらと同じ。 あの戦闘で IS は複数が消滅。 搭乗者も殆どが負傷。 機体もボロボロ。 つまりお互い弱っているのであり、好機であるのと同じ、危機でもあるのです。 そして奴らにはこちらの想像の埒外の機体を所有している。 先にまた攻められれば今度こそ敗北します……………このままでは』

『その為に、川村静司に協力を仰ぐと？』

『この件に関しては既に彼の了承を得ています。 彼を殺して無理して奪った所で、その IS が依然いう事を聞かなければ無駄に終わりますので。 そして同時に彼から情報提供があり、こちらでもその情報に信憑性を得ています』

新たなデータがアレックスより送られてきた。 その内容は、

『IS の暴走。 これは篠ノ之束によって IS の意思に干渉がなされた為です。 そしてそれに抗ったのは亡国機業の IS。 そして黒翼と、銀の福音。 亡国機業については詳細不明ですが、黒翼と銀の福音についてはその理由は判明しています。 銀の福音は以前も一度暴走しており、その際、最終的にはコアの意思で搭乗者を守り抜きました。 つま

り一度は篠ノ之博士の呪縛より逃れた。そして黒翼についてはコアの意思がコア・ネットワークへの接続を拒否している。その為に暴走を免れた。つまりその両方にコアの意思が関連しています』

そこまで話したのか、と桐生は少々驚いた。そしてそれは他の者達も同じ。

『ネットワークに繋がっていないだ?! そんな事が……』

『コアの意思だ? だがあれはまだ研究が……。しかしそうなる? 福音は一度抗ったために意思が強くなったという事か……?』

『言いたいことはあるでしょうが時間が惜しいので単刀直入に言います。確かに篠ノ之束は死亡しました。しかし博士と一緒に居た謎のISは未だ所在不明であり、ISの暴走が再び起こる可能性は捨てきれません。また、手負いの亡国機業を一刻も早く叩かなければやられるのはこちらです。故に提案致します。川村静司を戦力として迎えるのはこちらです。そして彼の協力の下、他のコアの暴走を防ぐ手段を探し、そして全てが終わった際、改めて彼の処遇を決定するべきです』

何ともまあ……

「時間稼ぎだねえ。だけどここまでしてアメリカが静司君に肩入れするという事は……」

桐生は一人思索する。アレックスの提案は単純だ。面倒な事は一端後にして目の前の共通の問題を片付けようと言う、言わば結論の先送りだ。それはこちらにとってはありがたいが、そこまでしてアメリカが肩入れする理由はきつと何かある。

おそらくだがこの提案は飲まれるだろう。どの国も川村静司の持つコアは欲しい。そしてその戦力も。だから実際に静司からコアを奪えるか試し、それが不可能だと判断されたらこの提案を飲むしかないのだ。何せこれなら少なくともどこか一国が一方的に得することは無いのだから。そして川村静司自身については、彼の会社や周りの物を利用すれば何とかなる。きつとそう判断するに違いない。

全ての結論は先送り。今は最大の敵である亡国機業を叩く為の一つになる。そう言えば良い言葉に思えるが、結局それは各国がコアを、そして川村静司を手に入れるための策を張り巡らせるための準備

期間にもなる。アメリカが一步先を行っているが為に、各国は躍起になるはずだ。そしてだからこそアメリカのこの余裕の裏に何かがあると、誰もが気づいている。気づいているが、それ以上の提案は無く、この提案が最もベターと判断されるだろう。

「しかし静司君、君はアメリカに何を言ったんだか……ん？」

思案する桐生の元に一通のメールが届いた。その差出人はアレックス委員。

「……」

若干の予感をしつつそのメールを開き、桐生はまず目を見開き、唾然とし、

「なんともまあ、凄いなあ」

そして笑い転げた。

まずい。

まずいまずいまずいまずいまずい！

『川村静司の処遇は保留の様だな』

『ええ。そして世界は我々の殲滅に全力になる』

『これは失態だなスコール』

『そうよね。確かに成功続きだったからこそ、あれほど作戦を。そして指揮を任せたといいのに、まさか負けちゃうなんてね』

『この罪は重いぞ。折角手に入れたI Sも失いおって』

『虎の子のエムを預けたと言うのに、期待外れもいところだ』

頭の中で響くのはつい先ほどまで話していた相手——亡国機業の幹部たちの言葉。その全ては今回の作戦を失敗したスコールを糾弾するものだった。

(まずい……このままではっ)

無人機の回収。そして掌握。紅椿の奪取に加えて川村静司の殺害。そして世界中からのコアの奪取。今までは上手くいっていた。いていたからこそ、一部隊の指揮官でしかなかった自分があれ程の大部隊の指揮を任されたのだ。

だが失敗した。そう、他でもない、死んだと思われた川村静司のせいで。

「くっ……………！」

普段は余裕しか見せないその美しい顔をスコールは歪める。このままでは自分は完全に信用を失う。そうなればこの部隊は解散。別の部隊に吸収され、自分もただの一構成員に成り下がるだろう。いや、そうなるだけマシだ。下手をすれば……………消される。

「どうにか……………どうにかしなければ……………」

爪を噛みつつ移動するスコール目的地はリビング。そこに今の自分のチームのメンバーがいる。尤も、一人は重傷。また一人は死亡してしまっただが。

通路を抜け扉を開くと同時、良く知った声が聞こえた。

「くそおおおおおおお！」

そう叫びソファを蹴るのはオータムだ。彼女はシェーリの死亡の報を聞いてからずっとこの調子だ。二人は仲が悪いように見えていたが、オータムの怒りは本物だ。そしてその眼に微かに浮かぶ涙も。

「あの野郎、あの野郎さえ居なければ！」

「……………」

それを静かに見つめるのがエム。彼女は体のあちこちに包帯を巻いており、腕には点滴も刺されている。そしてその隣ではカテーナが静かにモニターを眺めていた。

「落ち着きなさい、オータム」

「っ、スコール！　けど、けどよ!？」

「シェーリを失ったことは私も悲しいわ。けど嘆いている暇はないの。このままでは私達の存続すら危ういわ。直ぐに再攻撃の準備をしないと」

「けど、戦力はどうするのかしら？　幹部からこってり絞られたんでしよう？」

そう問うのはカテーナだ。スコールは小さく頷く。

「ええ。けどこのまま何もしていないわけにはいかないわ。それはあちらもわかっている筈。敵だって痛手を負っている。この機を

逃す訳には行かないの。エム、調子は？」

「……………問題ない」

そう答えるエムだがその声に力は無い。彼女も戻ってからずっとこの調子だ。だが焦っているスコールはその様子を一瞥しただけだった。

（今の状態で戦力を整えて再攻撃にどれくらいかかる？ その間に敵はどれだけ回復する？ デッドラインは何時？）

一体どうすれば——スコールが必死に考えを巡らせている時だった。

『あははは——はは——はは、見——つけた！』

「え？」

突如聞こえたのは聞きなれない声。そして轟音と衝撃が走る。

「きゃあああ!」

「何だ!」

スコールが悲鳴を上げ、オータムが焦る。その衝撃の正体は、壁をぶち破って現れた存在だった。高級マンシヨンの最上階であるそこに、何かが突っ込んできたのだ。

「ははははは！ ミつけたね幽霊たち！ わた——様、にかかればこんな事、朝飯前って奴だね！ もう昼ご、はん——食、たけど！」

「な、何なの…………」

それは異様な光景だった。そして異常な言葉であった。スコールはこの喋り方に覚えがある。だが覚えがあるからこそそれは異常なのだ。だってその声の主は死んだ筈なのだから。

「流石——様。う——ん、くー、やんも中々、ね！ だ、から——私は——最高!」

そう、壊れたラジオの様に声を発する存在。それは銀髪の少女だった。そう、かつて篠ノ之束と一緒に居た少女。そしてその少女は、まるで篠ノ之束の様に、不思議の国のアリスの登場人物の様な服装——かつての篠ノ之束と同じ服装をしている。そして白目と黒目が逆転した相貌に狂気の光を放ち、狂ったように笑いながらゆっくりと歩き出す。その度に彼女の身体に繋がれたコードと、装甲がしやりと揺れ

る。

「ふふ、驚い、て——ねっ！ けど当然の——つだね。だって私——は、——様は、十全なん——だから！」

何が起きているのか。いや、この少女に何が起きたのかスコールにはわからない。分からないが一つだけ理解したことがある。

「あはっ♪ 終わら、無い。まだ、ね？ ちー。やん、ほう、きちちゃん、いっ——ん。それに——

川
村静司」

ギンツ、とその名前を出した途端、狂った瞳が細まり笑顔が消える。その様子を見てスコールは確信した。

「そう、川村、静司っ！ 束様を殺っ——私を殺っ、けどまだ終わって——無い。だって——束さんはまだここに居るんだからね！」

篠ノ之束が。天災と呼ばれた女が目の前に居ると。